

日本美術年鑑

昭和十三年版

美術研究所

序

日本美術年鑑の編纂は、美術研究所が計畫し又は従事しつゝある、美術に關する諸般の調査研究事業の一部を成すもので、昭和十一年より其の發行を開始し、本卷を以て第三年版とする。

我が國は目下、國を擧げて支那事變に従事してゐる。東亞の平和と文化建設とを理想とする國家の大使命貫徹の爲に、あらゆる分野に互つて國策に協力し、國史に一段の耀きを加ふべき劃時代的壯舉に参加しつゝある。戰時下に在つて仍、常と變らぬ美術上の活動が許される今日の、我が國力に感銘すると共に、建設の時代を前にして、文化的使命の愈々重きを加へつゝあることを認めないでは居られない。

斷る迄もなく美術年鑑は、美術界一年の歩みを誤なく反映し、有るが儘に記録するを以て其の使命とする。吾人が此の年鑑に於て企圖する所は、今日机上に事務的檢索の便を供せんが爲のみではなく、光輝ある聖代の藝術活動の姿を永く史上に留むると共に、明日以後の我が美術が愈々健全なる進展を遂げんが爲に、信賴すべき參考資料を供するに在る。

編纂に際しては、固より擔當者の取捨判斷を要する部分が多いが、努めて世論に聽き獨斷を避けて、妥當公平ならしめんことを期した。擔當者としては所員和田新及び助手倉田平吉を之に充て、囑託山田智三郎に建築に關する部分を、竝に助手中川千咲及び囑託白畑よしに古美術關係文獻目錄を夫々分擔せしめた。

本年鑑の編纂に就き、文部省宗教局は、國寶修理其他古美術保存に關する同局所管事項の、詳細なる報道、學術上貴重なる寫真等を寄せて、懇篤なる協力を與へられた。其の他、諸官廳、帝室博物館、諸博物館及美術館、學校、研究機關等の公私諸施設、團體、雜誌社、美術俱樂部、美術商、畫廊、竝に個人としては普く美術家、學者諸家の様々な援助を辱くし、資料の提供、寫眞の寄贈等多くの便益を與へられたことは擧げて數へ難い。茲に記して甚深なる感謝の意を表するものである。

尙本書中の不備、誤謬等に就いては江湖の示教を惜まれざらんことを切に希望し、次年度以下に一層の改善を期する次第である。

昭和十三年十月

美術研究所長 矢代 幸雄

凡 例

一、本年鑑は其の内容を「本欄」、「挿圖」及び「便覧」の三部に大別する。本欄は我が國美術界の全般に就き、昭和十二年度、即ち同年一月から十二月に至る一年間に現はれた主なる出来事、製作又は發表された注意すべき作品、發表された文獻等を記録し、挿圖は右に添ふ作品の寫眞を主として掲げ、便覧は同年末調に依る美術關係の諸事項を、分類輯録して檢索の便を計つた。記事中「本年」とあるは昭和十二年を指すもの、月日のみを擧げて年を記さぬ場合亦同様である。

一、美術として本年鑑が取扱ふ範圍は、從來一般に行はれる狹義の解釋に従ひ、繪畫、彫刻、工藝及び建築に限ることとした。繪畫の中で「日本畫」及び「洋畫」の區別は、嚴密には困難な場合もあり、又其の稱呼も字義として好ましいものとは言へないが、便宜の爲姑く一般の慣習に倣ふこととした。建築は用途に従つて種類も多く、殊に近年の傾向に在つては之を美術として取扱ふことに問題も多いが、茲では吾人の見地から注意を牽くものの範圍に止めた。

一、人名を記す場合に敬稱は一切之を省いた。

一、本欄、現代美術の中美術展覽會の項には、明治、大正以後活動した作家の遺作展觀、回顧的展覽會、及び外國美術展覽會等に關しても、便宜上此に合めて取扱ふこととした。

一、同、展覽會以外の作品に就いては、其の範圍を擴げるならば際限無き爲、茲には多少とも公共的性質を有するもの、或は記念碑的意義を有するものに限ることとし、主なる作品少數のみを選んだ。

一、同、美術教育の欄に於ては、之に關する彙報的な記事若干を輯録するに止まつた。普通教育に於ける圖畫教育は、美術とは關係が深く、屢々美術教育とも呼ばれて混同されてゐるが、本年鑑では特殊な場合の外は之を取扱はず、専門の美術教育の範圍に止めることとした。

一、挿圖として掲載した作品の寫眞は、年度内に製作、若くは新作として發表されたものに限つた。其の選擇は、大體各分野に於ける製作活動を代表せしむるを旨とし、必しも傑作のみを選出した譯ではない。古美術に關しては、年度内に於ける修理、新發見の資料等に限り、其の注意すべきものを輯めた。

一、便覧は、昭和十二年十二月末日現在の記録たることを原則とするが、使用の便を圖り、十三年に入つての消息をも例外的に記載、若くは之に依つて訂正した部分もある。

一、便覧中、美術研究施設と美術研究團體との區別、美術研究團體と美術家團體又は文化團體との區別等は嚴格にはなし難いものも多く、凡て便宜的な分類に依つたものに過ぎない。

一、同、御所、離宮、御苑及び正倉院は固より觀覽施設ではないが、拜觀者の便を圖つて、其の拜觀規定を美術觀覽施設の項に掲載した。又社寺に關しては、それ等の寶物館を掲げた外、一般に堂塔寶物類の拜觀を許して一種美術館的意義をも有する主なるものに就き、之を同じ項に掲載した。

一、同、京都市、名古屋、臺灣及朝鮮各美術展覽會は美術獎勵施設の項に入れたが、其の他地方に於ける公私の獎勵的團體又は展覽會の類は美術家團體の中に含めた。

一、本欄中、美術文獻目録、並に便覧中、美術家及美術關係者名簿に就いては、夫々その項の初に凡例を記した。

目次

序	一
凡例	二
目次	三
挿圖目次	六

本欄

昭和十二年度美術界概観	一〇
美術展覽會(月日順)	一一

一月	一一
----	----

エコルド東京展—NOVA展—小山教三個展—白朝會—小杉放庵個展—バリ萬國博出品展示會—新制作派小品展—六潮會—白日會—春臺展—等

二月	二三
----	----

野間仁根個展—小川幸鑑小品展—童寶展—三越洋畫小品展—光風會—太平洋畫會—伊勢正義個展—上野山清實個展—等

三月	二六
----	----

島村三七雄個展—長谷川昇個展—青山義雄個展—國際素描コンクール—新美術家協會—東光會—滿谷國四郎遺作展—木下雅子遺作展—全日本商業美術展—倉田白羊個展—革丙會—佐伯祐三遺作展—獨立展—兒島虎次郎遺作展—春紅會—京都美術館春季展—新造型展—京都工藝院—東陶會—內田巖個展—旺玄社—高木背水個展—獨立小品展—戊辰會—等

四月	三七
----	----

高間惣七個展—津田青楓個展—汎太平洋平和博美術展—春の青龍社—宇田萩郵個展—農島社—立陣社—林重義個展—日本畫會—全關西洋畫展—國畫院同人展—國畫會—春陽會—獨立展—院友展—日本木彫會—主線美術小品展—日

目次

本美術協會—春季二科展—日本漆繪協會—商工省工藝展—東京會—越佐工藝展—紅日會—明治大正昭和名作展—九阜會—七彩會—春靜堂展—ドイツ國寶素描展—等

五月	五四
----	----

日本壁畫會—橋本關雪個展—伊東深水個展—朱葉會—日本工藝美術會—表號展—構造社—松島畫舫展—讀畫會—中川紀元個展—春芳堂展—日本漆藝院—第一美術協會—土田夢僊遺作素描展—日本美術協會—三春會—上杜會—田能村直人遺墨展—實在工藝展—朝鮮美術展—東邦彫塑院小品展—日本水彩畫會—搭熊弦一郎個展—日本彫刻家協會—新日本畫研究會—焔土社—畫林社—海洋美術展—工人社—富田溪仙遺作展—日本美術院—京都市美術展—等

六月	六九
----	----

川端龍子個展—兒玉希望藝展—清光會—東臺邦畫會—東陶會—大阪産業工藝博—明則試作展—京都昭和工藝協會—海外超現實主義作品展—新彫塑協會—造型版畫協會—南畫聯盟—瑠爽畫社—多聞洞展—菊池容齋遺作展—造型彫刻家協會—生爽會—高島屋五人展—藤田嗣治個展—墨人會—ワグマン遺作展—等

七月	七五
----	----

東北北海道巡回工藝展—赤城泰舒南支寫生展—燦木社—珊々會—一水會同人展—自由美術家協會—日本山岳畫協會—九州沖縄各縣聯合工藝展—新制作派小品展—三輪晃勢個展

八月	七九
----	----

現代日本畫名作展—國防獻金洋畫展—三越洋畫彫刻展—獻畫報國日本畫展—等

九月	八〇
----	----

第三部會—青龍社—日本美術院—二科會—明則展—富岡鐵齋遺墨展—木下孝則個展—朝倉龜展—白日莊展—自由畫壇—等

十月	八八
----	----

目次

京都工藝院——日本美術協會——商工省輸出工藝展——獨立秋季展——文部省美術展——京都美術館秋季展——三昧堂洋畫展——八木岡春山個展——東郷青兒個展——立碑社——等

十一月 九八

北川民次個展——山川秀峰個展——白聖會——日本版畫協會——井南居展——松林桂月小品展——實在工藝同人展——七絃會——助峯畫塾展——大阪新美術家同盟——近藤浩一路個展——海老原喜之助個展——川端龍子個展——大潮會——東京會——小川芋鐵個展——新構造社——一水會——滿谷國四郎遺作畫稿展——三越日本畫展——等

十二月 一〇五

松島畫舫展——新燈社——春陽會日本畫展——三昧堂日本畫展——向井潤吉從軍スケッチ展——岡田謙三個展——新興美術家協會——尙美堂日本畫展——新制作派展——高島屋新作畫展——青山義雄近作展——和光會——工藝濟々會——等

展覽會以外的作品 一〇九

日本畫——洋畫——挿繪——彫刻——建築

美術界彙報（月日順） 一六

物故作家及美術關係者 一六

美術行政 一三一

美術教育 一三四

美術講演 一三七

古美術展覽會・展觀（月日順） 一四一

古美術關係彙報（月日順） 一六二

古美術保存 一六二

昭和十二年度國寶指定 附同所有者變更 同解除及燒失 一七六

同 國寶修理 一八二

同 重要美術品認定 附同解除 一八三

同 史蹟指定 二〇八

昭和十二年度朝鮮寶物及古蹟指定 二二二

美術市場 二二三

昭和十二年度美術文獻目錄

凡例・目次 二二二

現代美術關係文獻 二二四

古美術關係文獻 二五六

挿圖

日本畫 一

洋畫 二八

版畫 六三

彫刻 六四

工藝 七六

建築 八四

古美術資料 九二

物故作家及美術關係者 九七

便覽

美術關係法規一覽

國寶保存 一

重要美術品等保存 四

史蹟名勝天然紀念物保存 六

朝鮮寶物古蹟名勝天然紀念物保存 八

著作權保護 一〇

美術獎勵施設一覽

帝室技藝員	一九
帝國藝術院	一九
文部省美術展覽會	二〇
商工省工藝展覽會	二四
商工省輸出工藝展覽會	二六
京都市、名古屋、朝鮮、臺灣各美術展覽會	二八
美術獎勵資金	三二

美術研究施設・團體一覽

美術研究施設	三二
美術研究團體	三二

美術教育施設一覽

美術學校及研究所	三七
東京	三七
京都	四四
大阪	四六
其他地方	四六
工藝及建築教育施設	四七
大學——專門學校——甲種及乙種實業學校	五一
各大學美術美術史講座	五一

工藝指導施設一覽

美術觀覽施設一覽

御所、離宮及御苑拜觀規定	五六
博物館、美術館、社寺寶物館等	五六

關東地方

東京——地方

東北地方	六一
中部地方	六二
近畿地方	六三

京都——大阪——奈良——地方

中國地方	六八
四國地方	六九
九州地方	六九

臺灣、朝鮮、關東州

美術家團體一覽(五十音順)

文化團體一覽

展覽會場一覽

東京——大阪——京都——名古屋——其他

定期刊行物一覽

現代美術關係——古美術關係

美術商一覽

美術家及美術關係者名簿

美術指導施設一覽

美術觀覽施設一覽

御所、離宮及御苑拜觀規定	五六
博物館、美術館、社寺寶物館等	五六

挿圖目次

日本畫

個展 (二) 潮騒 (川端龍子)	一
革内會展 (二) 隱岐の島遷幸 (小山泉達)	一
個展 (三) 春秋屏風 (秋) (小杉放庵)	一
六潮會展 (四) 雪暮 (山口蓬春)	一
春虹會展 (五、八、一〇)	二
江頭微雨 (川村曼舟) 遅日 (菊池契月) 猿猴 (西村五雲) 春雪 (上村松園)	二
戸田親美堂展 (六、七)	二
金盃白鷺 (杉山寧) けし (吉岡堅二)	三
如月會 (二) 樹光 (三輪晃勢)	三
戊辰會展 (二、一五)	三
山の春 (山下巖) 嶋の春 (川合玉堂) 鳥鷺 (其一鳥) (兒玉希望) 春水 (磯部草丘)	四
個展 (一六) 山高水長畫卷ノ内 (津田青楓)	四
春の青龍社展 (一七、一九、二一、二五)	四
薪二題其ノ一 (坂口一草) 鈴 (小島鼎子) 冬日 (加納三樂) 青峰 (木村鹿之介) 餌時 (佐藤木草) 十國時仰觀 (川端龍子) 十國時俯觀 (川端龍子) 寂光 (濱出榮一)	四
國畫院展 (二〇、二六、二九)	四
激盪 (穴山勝堂) 矢表 (松岡映丘) 朝動 (吉村忠夫) 聖僧日蓮 (岩田正巳) 影向 (小村雪岱)	七
春陽會展 (三〇、三一)	七
常田獅子師之圖 (石井鶴三) 椿 (小杉放庵)	七
東京會展 (三一、三四)	七
立葵 (廣島晃市) はつ夏 (中村大三郎) 椿 (荒木十畝)	八
九阜會展 (三五、三六)	八
新樹 (山口華楊) 潮のあと (森白甫)	八
個展 (三七) 花火 (伊東深水)	八

個展 (三八) 猶 (橋本關雪)	八
讀畫會展 (三九、四〇)	八
四季花鳥之内、春 (荒木十畝) 濱やき (中嶋晃華) 個展 (四一) 鷗鷗 (森村宜稻)	九
大日美術院展 (四二、四六)	九
溪間 (藤森青雲) 萌芽 (常岡文龜) 芭蕉 (菅澤幸司) 清澗 (結城素明) 焚火 (青木大乗)	九
京都市美術展 (四七、四九)	一〇
ボーズ (池田遙邨) 春 (上村松篁) 四月の高原 (澤宏毅)	一〇
清光會展 (五〇、五一)	一〇
目白 (安田親彦) 若鮎 (小林古徑) 林間遲日 (横山大觀)	一一
兒玉畫塾展 (五三) 婦踏場の一隅 (奥田巖三) 明朗試作展 (五四、五八)	一一
雪餘 (故落合朗風) 彩濱 (故落合朗風) 薰春 (川口春波) 暖冬 (川口春波) 喧嘩 (藤田銅治)	一一
個展 (五九) 翠澗 (川端龍子)	一二
南畫聯盟展 (六〇) 換畫 (小室翠雲)	一二
瑠爽畫社展 (六一、六二)	一二
馬 (其一) (杉山寧) 雜木林 (山本丘人)	一二
生爽會展 (六三、六四)	一二
桃 (西山翠巖) 初夏 (小島氣郎)	一二
五作家展 (六五) 枇杷 (奥村土牛)	一三
瑞々會展 (六六、六七)	一三
冒雪 (松岡映丘) 朝爽 (菊池契月)	一三
青龍社展 (六八、七七)	一三
魚槽 (市野亨) 港の女「白首船」 (加納三樂) 睡蓮 (川端龍子) 朝陽來 (川端龍子) 春野「憂切」 (鳴き)「揚げ」 (時田直善) 高原に展く (谷口富美枝) 琉球「首里」 (坂口一草) 同「那覇」 (同上) 同「糸満」 (同上) 賛立 (三好光志)	一五

個展 (九六) 樞島 (八木岡春山)	一八
明朗展 (九七) 香實郷 (川口春波)	一八
第一回文展 (九八、一二九)	一九
風ぐも (穴山勝堂) 桐蔭賦 (石山太柏) 草紙洗小町 (上村松園) 富士の聖僧日蓮 (岩田正巳) 蠅爽 (池上秀敏) 母子の羊 (上村松篁) 國防の覺め (太田天洋) 茶室 (勝田哲) 雙曲 (梶原辨佐子) 清明節の虎郎 (河合健二) 蟬 (鐵木清方) 麥粒 (菊池契月) 若き家鴨 (竹内福風) 春夢 (小早川清) 秋意 (杉山寧) 朝 (田之口青兒) 觀世音 (室本印象) 麥秋 (西村五雲) 砂濱 (中村岳陵) 一休禪師 (野田九浦) 赴征 (橋本關雪) 淨心 (橋本明治) 將棋觀戰 (不二木阿古) 紅 (東山魁夷) 樹氷 (福田豊四郎) 雪合戦 (三宅鳳白) 下賀茂秋曉 (水田竹園) 暮色 (矢野橋村) 洋犬圖 (山口華楊) 雲翔る (橋山大觀) 麻須良乎 (吉村忠夫) 馬 (吉岡堅二)	一九
個展 (一三〇) 十勝スキー宿三題ノ内 (近藤浩一路)	二四
個展 (一三一) 滿洲所見 (松林桂月)	二四
個展 (一三二) 雛鶴三番雙鳥飛び (山川秀峰)	二四
個展 (一三三) 紅臺 (川端龍子)	二五
七枝會展 (一三四、一三八)	二五
清正 (前田青邨) 双鳩 (小林古徑) 迦樓羅 (菊池契月) 雪紛々 (鐵木清方) 方丈閑日 (安田親彦)	二五
古稀記念新作展 (一三九) 新雪之慈雲 (小川幸錢)	二五
三越日本畫展 (一四〇、一四二)	二六
鷹 (荒木十畝) 目白 (橋原紫峰) 返照 (川合玉堂)	二六

現代名家新作畫展(一四三) 秋の一日(竹内栖鳳)	二六
三味堂日本畫展(一四四、一四五)	二六
湖畔の雪(川合玉堂) 七つのたから(太田隠雨)	二六
松島畫舫展(一四六) かし鳥(根上富治)	二六
關荷美堂展(一四七、一四八)	二七
樂翁(一、二) (前田青郎) 春(山口蓬春)	二七
新興美術家協會展(一四九) A一家の表情(玉村方久斗)	二七
展覽會以外の作品(一五〇、一五一)	二七
高野山根本大塔壁畫(堂本印象) 名古屋朝日ビル地階壁畫(福田學光)	二七

洋 畫

白朝會展(一五二、一五三)	二八
南總風景(柚木久太) 讀書(田邊至)	二八
六湖會展(一五四、一五五)	二八
水郷(一)(中川紀元) 千石原の小雨(牧野虎雄)	二八
白日會展(一五六、一六〇)	二八
盛夏(小堀進) 休憩(池部鈞) 鴛鴦(富田温一郎)	二八
漁村(相田直彦) 濤(能勢龜太郎)	二九
春臺展(一六一、一六二)	二九
海邊(和田清) 裸婦(矢島堅土)	二九
三越洋畫小品展(一六三、一六四、一六六)	二九
椅子に凭る女(寺内萬治郎) 雪ふる海(山本勝) 裸婦(宮本三郎)	二九
光風會展(一六五、一六七、一七三)	三〇
山湖雨霽(太田三郎) 秋景色(三宅克己) こなしの花上高地(川合修二) 習作(白瀧幾之助) 山莊(南薫造) 讀書(鬼頭鍋三郎) 畫室(金仁承) 新粧(川端實)	三〇
太平洋畫會展(一七四、一七六)	三一
室津港(石川寅治) 土用波(奥瀬英三) 蒙古人の家族(安田豊)	三一
個展(一七七) 冬山(伊勢正義)	三二
個展(一七八) ルクサンプール公園にて(島村三七雄)	三二

新美術家協會展(一七九、一八三)	三二
山と女(中村善策) 艦隊入港(田邊三重松) 畫室の裸婦(清水刀根) 裸婦B(伊藤鑑郎) 椅子による女(新海覺雄)	三二
東光會展(一八四、一九二)	三三
魚市場(佐藤一章) 雪の朝日(野口謙藏) 草上裸婦(熊岡美彦) K子像(齋藤典里) 静物(五) (渡邊浩三) 上京記念(岩下三四) レストラン(江藤哲) 海邊小景(田代順七) 火口(正田二郎)	三三
個展(一九三) 海邊(眞垣武勝)	三四
獨立展(一九四、二二二)	三五

島にて(鈴木保徳) 激流(小島善太郎) 二人(中村節也) 秋山(小林和作) 書齋(須田國太郎) 二重像(福澤一郎) 秋(林重義) 溪流(兒島善三郎) 生簀(伊藤慶) 馬(海老原喜之助) 雪日(妹尾正彦) エスキースA(川口軌外) 海幸(高島達四郎) 結髪(田中行) 草上畫作(鈴木亞夫) ギリシャの追想(中山鶴) 女(里見勝藏) 椰子と貝(松島一郎) 繪畫(井上長三郎)	三八
個展(二二三) 鶏(内田巖)	三八
旺玄社展(二四一、二四六)	三八
ワカサギ釣(橋作治郎) 朝顔(牧野虎雄) 北國早春(田澤八甲)	三八
個展(二二七) 歸り山鶴(高間惣七)	三九
國畫會展(二二八、二三三)	三九
霧島(梅原龍三郎) 初秋(土田文雄) アマリ、ス(青山義雄) 赤富士(椿貞雄) 鹿鳴館時代娘(河野通勢)	三九
春陽會展(二三三、二三〇)	四〇
濱(國盛義篤) 椿(小穴隆一) 盛綱陣屋(一)(木村莊八) 春の新高南山(足立源一郎) 冬野(倉田白羊) 印度洞窟三部作エレファンタ・プラマ(左側)(水谷清) 窓邊の子供(小林徳三郎) 春陽會構圖(倉田三郎)	四〇
日本水彩畫會展(二三一、二三二)	四一
稽古(望月省三) 熱河古北口(春日部たすく)	四一

個展(二三三) 蓮色の帽子(猪熊弦一郎)	四一
第一美術協會展(二三四) 坂(御厨純一)	四一
京都市美術展(二三五、二三六)	四二
花の庭(錦義一郎) 新緑の村(一)(太田喜二郎)	四二
清光會展(二三七、二三九)	四二
仔馬(坂本繁二郎) 少女像(安井曾太郎) 朝霞(梅原龍三郎)	四二
個展(二四〇) 風景(藤田嗣治)	四二
立陣社展(二四二) 埠頭風景(石川謙彦)	四三
個展(二四二) 法雨寺大雄殿前庭(善陀山)(赤城泰舒)	四三
一水會同人展(二四三、二四五)	四三
麗人(石井柏亭) 荒川上流(裕伊之助) 夏至(山下新太郎)	四三
個展(二四六) 櫻花盛り(吉田博)	四三
自由美術家協會展(二四七、二五〇)	四四
DRAIN(No. 1) (村井正誠) カクタスのリズム(吉見庄助) 蝶の軌迹(長谷川三郎) 廢墟(矢橋六郎)	四四
個展(二五一) ベニス(林武)	四四
新制作派結成記念展(二五二、二五四)	四五
窓邊(小磯良平) 眠る裸婦(猪熊弦一郎) 人物(内田巖)	四五

二科美術展(二五五、二七六)	四五
驟雨(田村孝之介) 牛牽く女(宮本三郎) 夏の淡水魚(野間仁根) 千人針(藤田嗣治) 伐採の人々(向井潤吉) 娘と子供達(田口省吾) 松林(國枝金三) 妙高の春(栗原信) 紫陽花(鈴木信太郎) 白壁(林鶴雄) 水より上る馬(坂本繁二郎) 川邊(島崎鶴二) 島(福島金一郎) 梅雨時の東郷湖(鍋井克己) 牡丹(正宗得三郎) 華果静物(黒田重太郎) 蒼天(浪江勲次郎) 貿易港(大澤昌助) メキシコ・タスコの祭日(北川民次) 青い手袋(東郷青児) つどひ(岡田謙三) 氣象(吉原治良)	四五
第一回文展(二七七、二八三)	四九
水邊初夏(島野重之) 小供達(大貫松三) 聽音(森田元子) 梵木はこび(岩崎勝平) 中庭の窓(山下大七)	四九

五郎) 藁積ム頃(高光一也) 嶺(倉員辰雄) 車上(南 政善) まとのへや(水船三洋) 水郷の午後(高宮一 榮) 盲目の老骨長(上山山清實) 斜陽平日(吉村吉 松) 海邊秋景(齋藤與里) 春(橋本八百二) 海邊小 丘(林優衛) 初秋(清水良雄) 志賀高原の秋(辻 永) 清流(鈴木千久馬) 女ふたり(阿以田治修) 朝 (中村研一) ひとき(中野和高) 鵜の鷗(中澤弘 光) 銀屏(熊岡美彦) 太陽と鶴(高間惣七) 遊鯉(楠 藤種男) 繡綵(小林萬吾) 輝娟(小絲源太郎) 鋪道 (大久保作次郎) ダリア(佐竹徳次郎) 若き女(長 谷川昇) 團長の像(山本鼎) 洞爺湖畔(南薫造) マ ンドリニスト(田邊至) 深井英五氏の肖像(伊原宇 三郎) Y氏の家庭(片岡銀藏) 戸隠高原(石川欽一 郎) 明訓奉天城外(平澤大賦)	獨立秋季展(三一四) 擬態(福澤一郎)
個展(三一五) 貝殼(松本弘二)	三五
三味堂洋畫展(三一六、三一七)	三五
溪流(川島躍一郎) 棘(長谷川昇)	五五
個展(三一八) 黒いショール(東郷青兒)	五六
個展(三一九) 黒白(海老原喜之助)	五六
一水會展(三二〇—三三二)	五六
ヴォーグ(木下孝則) 櫛たはる裸婦(木下義謙) 小 憩(給伊之助) デッキパツセンジャ(高橋庸男) 承 徳の喇嘛廟(安井曾太郎) 村娘(石井柏亭) 驟雨金 子博信) 肖像(安井曾太郎) 姉妹(山下新太朗) け むり(中村善範) 鏡の前(新海覺雄) 化粧(有島生 馬)	
土曜會展(三三二) 眞鶴風景(荻野康兒)	五八
大阪新美術家同盟展(三三三、三三四)	五八
母子(玉澤潤二) 出帆(別車博資)	五九
個展(三三五) 軍鶏(山下繁雄)	五九
新制作派展(三三六—三五〇)	五九
葡萄(内田巖) 人物(中西利雄) ルボー(伊勢正義) 人々(小磯良平) 晝(猪熊弦一郎) 深(脇田和) 夜 (猪熊弦一郎) ムーヴイングマン(野田英夫) 海邊 (坂井範一) 黄昏(猪熊弦一郎) 三人(鈴木誠) 水	

の姿勢(佐藤敬) 仕事(今村使夫) 高原(三田康)	六二
北國の春(藤島武二)	六二
展覽會以外の作品(三五一—三五五)	六二
楊柳(岡田三郎助) 旭日照六合(藤島武二) 海峽協 同作戰(三國久) 威臨丸の太平洋奮闘(小林萬吾)	六二
突撃の圖(瀬野覺藏)	六二
版 畫	六二
國畫會展(三五六) 内金剛山(平塚運一)	六三
第一回文展(三五七—三六〇)	六三
野遊び(前川千帆) 造花(勝平得之) 横笛(織田一 磨) Panton 三部作(旭泰宏)	六三
日本版畫協會展(三六一) 晚秋(山口進)	六三
彫 刻	六三
國畫會展(三六二—三六四)	六四
「牧歌」詩都に寄せて(本郷新) 五輪旗を贈す(清 水多嘉示) 光(都市札幌の象徴部分)(山内壯夫)	六四
日本木彫會展(三六五—三六九)	六四
おどり(大島駒藏) 蕨風(澤田晴廣) 報土(中野桂 樹) 寫(橋本高昇) 水(山脇敏男)	六四
主線美術協會展(三七〇) 試作(堀江尙)	六五
構造社展(三七二—三七八)	六五
電氣通信學會賞牌(齋藤素勝) 春(後藤清一) アラ ベスク連作の一(安永良徳) 風(荻島安一) 動力(濱 田三郎) Sの像(森本清水) 猶B(宮地寅彦) 習作 一(佐藤仁宗)	六五
日本彫刻家協會展(三七九—三八二)	六六
尾崎氏像(早川鏡一郎) 少女スケッチ(加藤顯清)	六六
裸婦(中村七十) 習作(黒田嘉治)	六七
第三部會展(三八三—三八九)	六七
シエパード(岩男是命) 第一線(日名子實三) 婦人 像(早乙女龍次) 水邊(吉田久繼) 月光(石川確治)	六七
豐後時代(日名子實三) 牧場門裝(池田勇八)	六七
日本美術院展(三九〇—三九九)	六八

八

田德次郎)	七〇
女(木内克) 國土を護る「部分」海(渡邊義知) 闘牛(山本力吉) 怪鳥と小兒(笠置季男) 顔(松村外次郎) 膝をつく女のトルソー(渡邊小五郎) 髪(土田實)	七〇
第二回文展(四〇七—四三〇)	七一
みりの(北村正信) 平沼先生像(朝倉文夫) 立像(安藤照) 裸(國方林三) 相倚(西田明史) 避難者(齋藤素嚴) 野田中將像(内藤伸) 若い男(建昌大夢) 影(荒居徳亮) 粧(富永朝堂) のぼるもの(長谷川榮作) 梳髪(藤井浩樹) 小金井良精先生像(堀進二) 試作(堀江尅) 豊太閤(山崎朝雲) 若い男(分部順治) 働きの後(吉開伊喜藏) 光(安一) とかげ(古川順三) 弓(吉田叙示) 春苑(佐々木大樹) 樂園(佐伯留守夫) 能樂羽衣(牧俊高)	七一
展覽會以外の作品(四三一、四三二)	七五
正木直彦壽像(沼田一雅) 西郷隆盛銅像(安藤照)	七五
工 藝	
巴里萬國博覽會出品展示會々場(四三三)	七六
京都工藝院展(四三四—四三六)	七六
オットセイ置場(涌波蘇隆) 鷺と鳥衛立(奥村靄城)	七六
乾漆師魚置物(奥村究果)	七六
國畫會展(四三七) 色繪角鉢三枚(富本憲吉)	七六
日本漆繪協會展(四三八、四三九)	七七
飾り馬之圖衛立(松岡正雄) 陶漆卵殼モザイク(三木義榮)	七七
商工省工藝展(四四〇—四四四)	七七
豐穰圖手鏡錦灰帯(山鹿清華) 蔬菜文手箱(難波仁次郎) 黃銅花器(宮坂房衛) 青銅鱗蛉文花盛器(會田富康) ブドウ文花瓶(中村恒)	七七

日本漆藝院展(四四五) モデルルームと室配置 七八
實在工藝展(四四六—四四九) 七八

箱梨花文(磯矢阿伎良) 絨氈(圖案)(廣川松五郎)
廣口花瓶(高村豐周) 風呂先屏風(木村和一)

第九回工人社展(四五〇—四五三) 七九

吹込ガラス釣花挿(佐藤潤四郎) 芽生文金彩花瓶北
原千庵) 象嵌角花瓶(大須賀喬) 硝子衝立(各務嶺
三)

東陶會展(四五四、四五五) 七九

六角象嵌花瓶(伊東翠堂) 彩磁飾り瓶(板谷波山)
第一回文展(四五六—四七七) 八〇

彈阮成鑄銅置物(佐々木象堂) 風翔蒸爐(津田信夫)
鑄銅耳付花瓶(香取正彦) フライチョオチヨオウ
才銀置物(加藤宗慶) 銀製水瓶(清水龜藏) 青銅魚
花瓶(林萬壽人) 十角形銅文樣盛器(中山正人)
彫漆野草文文庫(佐藤陽雲) 漆器視箱(本間壽華)
漆刀畫水引草簞(前大峰) 漆大刀豆ノ棚(吉田源十
郎) 漆器棚(多畑宗哉) 金欄手雲機機八角捺水指
(河村喜太郎) 紫翠渤花盛(清水正太郎) 陶器南瓜機
機花瓶(河合葵之助) 吹き硝子花瓶(岩田藤七) 菱
紋手箱(バート・ド・ヴェール) (小川雄平) 手織錦
熱河圖壁掛(山鹿清華) 釣花瓶(飯塚珉珩齋) 果樹
林萬福屏風(鹿島英二) 砂丘に遊ぶ子供(御所人形)
(野口光彦)

工藝濟々會展(四七七) 青銅花瓶瓶懸(香取秀真) 八三

建築

取手競馬場(堀口捨巳設計)(四七八、四七九) 八四

投票所正面、觀覽席側面

大阪市電氣科學館(大阪市經理部營繕課設計)(四八〇) 八四

外觀夜景

三菱銀行(三菱合資會社地所課設計)(四八一、四八二) 八四

側面、中庭柱廊

渡邊翁記念會館(村野建築事務所設計)(四八三—四八七) 八五

外觀、會堂正面、會堂內部、二階ホール、一階平面圖

日產館(中央土木株式會社設計)(四八八、四八九) 八六

全景、二、三、四階平面圖

名古屋驛(鐵道省工務局建築課設計)(四九〇、四九二) 八六

正面中央、正面庭と入口

國際劇場(成松建築事務所設計) 觀客席(四九二) 八六

鐵道省新廳舍(鐵道省工務局建築課設計)

外觀、玄關內部 八七

名古屋朝日ビル(石川純一郎設計)(四九五、四九六) 八七

正面外觀、貸室內部

東京美術俱樂部(清水組設計)(四九七、四九八) 八七

全景、中庭

慶應義塾寄宿舎(谷口吉郎設計)(四九九—五〇二) 八八

外觀、室內、浴室

東京通信病院(逓信省經理局營繕課設計)

北東上空ヨリ、本階五階廊下、第二病棟 八八

帝室博物館(宮内省臨時帝室博物館營造課設計)

全景、背面外觀、主陳列室 八九

K氏住宅(谷口吉郎設計)(五〇八—五一〇) 九〇

南側外觀、居間、一階二階平面圖

杵屋別邸(吉田五十八設計)(五一—五一三) 九〇

外觀、居間、二階寢室

小林邸(山口敬象設計)(五一四—五一六) 九一

庭面、サロンより庭を見る、平面圖

內藤邸(堀口捨巳設計) 北側外觀(五一七) 九一

K博士邸(藤岡通夫設計) 門(五一八) 九一

古美術資料

修理竣功國寶建造物(五一九—五三六) 九二

朝光寺本堂、勝鬘院塔婆、首里城守禮門、護國院鐘
樓、淨瑠璃寺本堂、同上塔婆、法隆寺地藏堂、古熊
神社本殿、松生院本堂、南明寺本堂、染羽天石勝神
社本殿、八幡宮本殿、春日神社本殿、都久夫須麻神
社本殿、阿彌陀堂、松山城乾門、同上箇井門、興隆
寺本堂

修理續行中國寶建造物(五三七—五四五) 九四

姫路城化粧櫓東西ノ外觀、同上西ノ九、觀心寺書院

石津寺本堂、法隆寺大講堂組立中、法隆寺夢殿懸體

中、法隆寺東院同廊解體中、大傳法院多寶塔上層解

體中、興福寺東金堂修理中狀態

興福寺東金堂修理中發見佛手(五四六) 九五

同佛頭出土狀態(五四七) 九五

同佛頭(五四八) 九五

唐古遺蹟發掘狀態(五四九) 九六

同上發掘彩色土器文樣(五五〇) 九六

同上住居跡ニ於ケル木製品出土狀態(五五一) 九六

朝鮮扶餘出土蓮座彫形文樣(五五二) 九六

滿洲國遼代古墳壁畫(五五三) 九六

滿洲國輯安第十二號墳北室壁畫(五五四) 九六

同上出土金銅飾具其他(五五五) 九六

物故美術家及美術關係者 九七

佐々木岩次郎、島崎柳鳩、久保田潔明、福井江亭、落

合朗風、塚本靖、伊東陶山、磯矢完山、奥村龍城、加

賀月華、曾瀾遠藏、高橋義雄

昭和十二年度美術界概観

總記

世に「松田改組」とよばれる帝國美術院の改組が行はれ、官展問題を中心に美術界が空前の混亂に陥つてから、三年目を迎へた。

昨年は、その收拾策として試みられた平生文相による「再改組」――展覽會試案の提出――から、帝國美術院會員十餘名の辭表提出となり、帝展に代る臨時の文展が開かれたが、問題はつひに解決に到達せず、美術界の紛争、對立の情勢は膠着狀態に陥つたまま、本年にもちこされたのであつた。

帝國美術院と官展と、兩者切離すことの困難な問題が適當な解決を見ぬかぎり、美術界が正常に復して明らかな歩みを續けることは、まづ不可能な事情にあつた。二年に互る紛擾には、作家も疲れ世間もあきた。その弊は種々指摘されるが、殊に將來を擔ぶ青年作家等をして方向に惑はしむるなど、何人にも憂慮された所で、かかる狀態の速かなる終熄が切實に望まれたことはいふ迄もない。

この行詰りを打開するために、或は美術獎勵の理想論として、帝國美術院の解消と官展の一時的又は永久的廢止を説くものも多く見られた。一方では又、さきに辭表を提出した帝國美術院會員らが中心となつて、「藝術至上主義」を旗幟とする有力な野團體が結成されるであらうといふ報道などもしきりに行はれた。

しかし、本年六月帝國藝術院の創設と、これに伴ふ帝國美術院の廢止、竝に文部省美術展覽會の新制度が確立されるに至つて、懸案はひとまつ落着をつけ、更に七月日支事變の勃發により、美術界も當然、主として精神的にその影響をうけ、三年に互る紛糾もほゞ終末を見るに至つた。

これらの經過を略敘するに先ち、本年特記さるべき盛事として文化勳章の制定を述べなければならぬ。文化勳章はもとより美術とはかぎらず、科學、藝術等一般に「文化の發達に關し勳績卓絶なる者に」賜ふ榮典として、初めて我が國に制定され、紀元の佳節を期してその勅令が公布された。

四月最初の授與が行はれ、選ばれた九名の科學者及び藝術家が同勳章拜受の榮に浴したが、その中に竹内栖鳳、横山大觀、岡田三郎助及び藤島武二の四名の畫家があげられたことは、美術御獎勵の畏き思召が拜蒙されて、美術界のひとしく感銘を禁じ得ぬところであつた。

帝國藝術院の設置については、既に古く考へられたことであり、近年も或は有力な新聞の論說に現はれ、當局の間にも考究されてゐた所で、安井文相談にも見える通り、從來國家の施設として帝國美術院のみが置かれたことは、片手落を免れなかつたのであるから、これを藝術一般に及ぼすこととした新制度は、わが文化向上のために適切な施設として、一般に賛意をもつて迎へられた。

新設された帝國藝術院は、院長の外會員八十名を定員として組織され「藝術の發達を圖り文化の向上に資するを以て目的」とする。その機能として「藝術に關する重要な事項を審議」し、又「藝術の發達に資する爲必要な事業を行ふことを得」るなど規定され、院長及び會員の待遇その他に關しても、大體帝國美術院官制の例に倣つたものである。この設置に伴つて帝國美術院は廢止され、別に辭令を用ひずして同院長が帝國藝術院長に、同會員が帝國藝術院會員に、それぞれ任命されることとなつた。

この推移に關し、さきに辭表を提出してゐた帝國美術院會員等の中には、疑問を抱いて、そのまゝ會員の任命をうけることに辭意を表した者もあり、帝國藝術院成立に際して多少の支障を生じたが、文部當局はその立場を明かにし、從來の紛糾を遺憾として今後一切の行掛りをすてて努力する方針である旨を聲明した爲、それらの人々も釋然として過去の經緯を拂拭し、一名を餘す外すべて新組織に参加することとなつた。かくて帝國藝術院官制は六月二十四日公布され、同時に諸部門から新に銓衡された文藝十六名、音樂四名、能樂二名、建築二名及び書道二名に、舊帝國美術院會員四十六名を加へ、都合七十二名の藝術家が會員を仰付けられた。

官展の問題については、これが紛争の中心をなした主題であつただけに、文部當局は慎重に考究する所があつたが、帝國藝術院を創設する一方、これとは無關係なものととして、文部省主催の展覽

會を開催する原案を決定し、同院成立後直ちにその開催準備に着手した。展覽會の問題を初め美術行政に關して意見をきくため當局は新に顧問を内部に設け、清水帝國藝術院長のほか細川護立侯、

松浦鎮次郎、岡部長景子及び正木直彦の四名に、「美術に關する審議を委嘱」した。顧問會は取敢へず文展機構制定の爲に開かれ、その審議の結果に基いて展覽會開催要項を決定、新なる文部省美術展覽會規則が制定されたのであつた。想起する迄もないが、官展の沿革は明治四十年制定の美術審査委員會官制による「文展」に始まり、開催十二回の後、大正八年帝國美術院設置、その事業の「帝展」となり、繼續されること十五回、ついで昭和十年帝院改組の後、新帝展一回、昭和十一年文展一回の變遷をへたもので、今次の新文展は更めて第一回文展として誕生し、官展の歴史に一時期を畫することとなつたものである。

新文展が舊弊を一掃し、更生の實をあげる爲にいかなる形態と實質をとるかは、美術界の齊しく注意した所であつたが、成立の結果は、一方では「松田改組」の趣旨を生かすべく、門戸を舊帝展系以外の在野にも開かんと努め、他方「平生再改組」によつて著しく範圍の擴大された無鑑査をそのまゝ收容し、自然新進作家に對しては嚴選を以て臨むこととなつた。而して從來の官展と異なるものとして注意される所は、審査を委嘱することの外は、展覽會機構の制定、審査員の人選、無鑑査の選定等のすべてに互り、作家の關與を廢したことである。帝國藝術院會員の中からも審査員は委

嘱されたが、それは一個の作家としてであつて、展覽會を全く帝國藝術院と切離したことは、累を同院に及ぼす憂をさけた用意と解される。

第一回文展開催の結果は、實質的に遺憾ながら十分の成績と見ることができなかつた。從來の有力なる在野團體は殆どこれに参加せず、たゞ日本美術院が再び官展に協力する態度に出でたが、これも形式的な程度に止つた。不出品の原因は種々あるにせよ、第一部では京都畫壇が出品に力めたのに比し、東京の主要作家の多くが出品しなかつたことも寂しかつた。他の部については、第三部が構造社、院展その他の作家を集めて幾分綜合の實を擧げたほか、大體舊帝展の延長と見られ、かつ一般に無鑑査作品の振はぬことが目だつた。

ともあれ文展は一つの軌道にのつたが、過渡時代として、未だ改善さるべき幾つかの問題を残してゐる。特に藝術上一貫した指導方針を確立することが急務である——とは一般に考へられた所であつた。文部當局は、展覽會の問題のみに限らず美術行政の全般につき、時代に即した刷新の必要を認め、前記「顧問」の外にも識者を集めて、これらを審議する「美術調査會」設置の意向である旨、一般に報道されて世の關心をひいた。

帝國美術院と官展の問題は以上の如く落着を見たが、それは前記の如く本年なかばのことであつて、年度の前半は未だ混沌時代を脱せず、後半は戦時に入つて社會情勢に大きな變化を來したため一見、美術にとつては惠まれぬ還境の如くに思はれたが、事實に於てはそれ程の影響は現はれず、

美術界全體としては例年と大差のない活發な動きを示した。そのみならず、種々の刺戟が作家に眞面目な發奮の機會を與へ、或は革新的な運動の端緒を開かしむるなど、藝術的に望ましい効果を生じたと思ふべき徴候も數へられる。

主なる美術團體はいづれもそれその立場にあつて、常の如き活動を示した。「松田改組」は美術界を根柢から沸騰させた觀があるが、昨年に引續き本年に至つて、歸るべきものは歸り、離れるべきものは離れた。舊帝展作家達によつて、改組以來俄かに組織された幾多の團體も、或は解消し或は活動を停止した。それらの中、新に在野の立場をとつて活動を續けるものに、洋畫家の新制作派協會と彫刻家の第三部會とがある。又反官展ではないが、結成後初めて展覽會を開いて注意をひいたものに國畫院がある。工藝には、明瞭な藝術主張の下に興味ある運動を續ける實在工藝美術會がある。

從來在野團體として存する日本美術院、青龍社二科會、春陽會、國畫會、獨立美術協會、構造社などの團體も、自らの展覽會を開くことによつて各々特色ある存在と活動とを示した。この中日本美術院と構造社とが文展に参加したことは、前述の通りである。舊二科會員によつて昨年結成された一水會が、本年最初の同人展と公募展とを開き、その藝術的主張を作品に示したことも特記すべき出來事であつた。

本年新に結成された美術團體も幾つかをあげる事ができる。その中展覽會を開いて運動を開始

した主なるものは、日本畫の大日美術院、洋畫の前進運動を代表する自由美術家協會、工藝では、京都の工藝家を綜合する京都工藝院等であつた。

日支事變と美術との關係は、最も重要視される所であるが、國家としてのおちつきと餘裕とは當初の危惧を見事に裏ぎつて、わが國が軍事行動に全力を注ぎながら、文化的方面の活動には殆ど何等の支障を來さざるのみか、むしろ國民的精神の昂揚と共に、實に於て一層高邁なる藝術活動をうながす如き氣運を醸した。尤も戦局の擴大につれて物資の統制その他により材料の上に或る程度の制限を加へられることはやむを得ず、特に建築に於ては最もその影響が甚しく見られるが、美術一般については、本年中は殆どこれに影響されなかつたといつてよい。むしろそれよりは精神上の影響として、全國民が非常時の意識に緊張し、歡呼の聲が街に湧く時に、とかく有閑的とも見られがちな美術の製作に、作家の氣が進まず、仕事の鈍つた傾向がないとはいへぬ。

しかしそれも部分的であり、而も事變當初のみの現象であつて、漸く時局の認識が深まると共に、非常時と雖も文化的活動は、許される限り一日も疎にすべきではなく、美術家はその立場に於て重大な職分をもつことも理解されてきた。同時に國家的一大飛躍が遂行されつゝある時代に、時代を反映すべき藝術にも當然、大いなる發展と革新とが要望され、これに對する心構へが現はれ初めたことは、極めて注意すべき現象であつた。本年製作の上にこれが熟する暇のないことは當然で、秋

季展覽會の中には早くも時局的取材の作品が幾つか現はれたが、多くは内容の伴はぬ挿繪程度のものにすぎなかつた。

遺作展、回顧展、その他特殊な展覽會として、本年記憶される主なるものに、滿谷國四郎遺作展覽會、佐伯祐三遺作展覽會、富田溪仙遺作展覽會、土田麥僊遺作素描展覽會、明治大正昭和三聖代名作美術展覽會、現代日本畫名作展覽會、ドイツ國寶名作素描展覽會等が數へられる。いづれもそれそれに重要な意義を認めさせるものであつた。

本年長逝した人々に、日本畫家野澤如洋、島崎柳塙、福井江亭、佐竹永陵、久保田滿明、西井敬岳、高木長葉、中村春楊、太田義一、松島白虹、落合朗風、洋畫家八條彌吉、坂口右左視、岩倉具方、陶工家伊東陶山、加賀月華、漆工家磯矢完山、奥村霞城、バリで活動してゐた菅原精造、竹工家田邊竹雲齋など多くの作家があり、建築家には曾彌達藏、長野宇平治、學者として美術界に極めて縁の深かつた塚本靖、茶道を通じて道具・工藝研究に開えた筈庵高橋義雄等の諸家があつたことは、痛惜にたへぬ次第である。

日本畫

とかく安住の境に籠りがちで、進歩性に乏しいと見なされてゐる日本畫壇にも、急速な進展をとげつゝある時代の潮流と文化とに關心を深め、新時代の藝術創造に向つて進取的な活動を示すものの急速に顯著となつてきたことが認められる。それらの新しい努力と試みとは、もとより單に洋畫

の模倣といふ如く簡單に片づけられるものではなく、その感化も多分に見られるとはいへ、一面日本畫の特質を働かしつゝ、或は構想に或は技法に、幾通りもの新鮮な道を開拓しつゝあるを見ることは、頗る興味が深く、前途を樂しませるものがある。それらの例は後述の如く、大小各種の展覽會に看取されるが、たゞそのすべてが望ましい萌芽のみとはいへず、中には健實な技術の基礎なくして徒らに時流に投ぜんとするもの、若くは新鮮なる内容なくして形式のみ新奇を追ふものなども混在し、日本畫の墮落が憂へられもするが、ともあれ藝術の發展には革新的氣運こそ常に必要とされるのであるから、その意味でこの傾向が喜ばれ、その中のよきものを發展させる努力が費さるべきである。

官展問題は落着したが、本年は一種の過渡時代として、畫壇には幾つかの團體的な動き、新な運動等が現はれた。年度の前半に於て、川合玉堂門下の組織する戊辰會が畫壇の情勢に鑑みてその組織を擴大し、更生の氣にみちた展覽會を開いたこともその一つである。玉堂の「島の春」「春立つ御藻」等の收穫があり、兒玉希望亦「鳥鷺」の力作を得るなど、この種の會には珍しい充實を示した。

興味と期待とをもたれたものに、國畫院の第一回同人展覽會があつた。一昨年結成以來の沈黙を破つて、盟主松岡映丘以下同人舉つて力作を世にとつたもので、古典の教養に基いていかなる時代的發展を示すかに注意がひかれたが、多くの技術的努力にも拘らず、内容に新鮮さを見せることが

少かつた。生動に缺ける憾はあつたが、病をおして完成した映丘の「矢表」は、記念すべき本年の一收穫である。

結城素明、川崎小虎及び青木大乗の三名によつて組織された大日美術院の旗上げは、新運動の一つとして記憶されるものである。これは同人の作品發表のためといふよりは、新進養成のための展覽會機關と見るべきもので、その第一回展の成績は豫想された如く、傳統的な技法を一擲して、或は洋畫的寫實に、或は幻想的な裝飾化に傾くもの多く、新日本畫中の、所謂塗りに繪に屬する一潮流を示すものであつた。

その他の動きとしては、前半に於ては墨人會俱樂部の結成、院友俱樂部の結成、京都青年畫家による生爽會の結成、東京美術學校出身者による東曉會の結成、昨年組織された南畫聯盟の第一回展覽會等が數へられ、後半に於ては日本美術院友十二名の脱退並に新興美術院結成、明朗美術聯盟同人等の脱退並に新國畫協會結成等が記録される。いづれも藝術的精進を目的とするところに變りはなく、又官展、在野といふ如き舊來の標識を掲げぬことも興味がある。これらの中には展覽會を開いたものもあり、本年は未だ活動を示さぬものもあつた。多くはそこから今後に育つべきものを期待する程度である。

畫壇の主流を眺める爲には當然、秋季に相次いで開かれた院展と文展とを概観しなければならぬ。院展は沈滯氣味であつた。世間ではその原因を或は在野精神の喪失に歸し、或は事變の影響と

も見た。同院の中心をなす同人等に不出品が多かつたことも見のがせぬ。院展の作家達が古典的精神と氣品とを尊ぶことはよいが、内容及び技術の上に、潑刺たる若さと現實的な生氣に缺けて見えるのは、同時に開かれる青龍展との極端な對比をなすもので、本年特にその觀を深くした。多くの新進の間に、靱彦、古徑などの描線に感化を受けるものが流行してゐるが、屢々無感覺と生硬さに終つてゐるのは、形式が先つたための弊であるといはねばならぬ。

横山大觀の「東海の濱」「夜深し」、安田靱彦の「花づと」など相變らず一般の好評を博した。本年堅山南風の「朔風」は力作として記憶される。

新人として期待されてゐる人々に、中村岳陵、奥村土牛、太田聽雨、中村貞以、溝上遊龜などがあげられるが、毀譽相半するといへ岳陵の新畫境開拓の努力は認めらるべく、土牛が本年見せた大膽な意氣も、煩悶を示すだけに將來を樂しませるものがあつた。貞以の進境も目だつ所であつた。

文展では京都側作家の努力が著しく、好收穫に數ふべき作品の大部分はその占める所となつた。竹内栖鳳の「若き家鴨」、西村五雲の「麥秋」、上村松園の「草紙洗小町」、菊池契月の「麥摺」の如きいづれも完成された技術と境地とを示し、各作家の代表作中に遺されてよい出来ばえであつた。

横山大觀の「雲翔ける」も佳品であつたが、これが栖鳳の作と一室に並べられたことは、殊に觀衆の人氣を集めた。今日この兩作家が東西の雙壁として常に對比の位置におかれ、殆ど作品の出來

に關りなく、多くの嘆稱者を有することは興味ある事實である。

一般の作品の中で、徒らな洋畫模倣の風潮は餘り見られなかつたが、洋畫に近い技巧を用ひながら、單なる寫生を離れて新な日本畫を創造せんとする努力には、興味ある幾つかの作例を見出した。中でも福田豐四郎の「樹氷」と、吉岡堅二の「馬」とは、いづれも無鑑査の寸法制限を敢へて超過した大作で、共にそれぞれの傾向に於て優れた作品であつた。中村岳陵の「砂濱」もこの類の佳作としてあげられる。これらに共通する特色は、多分に裝飾的要素をもつことで、中でも「樹氷」は超現實派の手法を巧に採入れて近代的な一傾向を代表し、新しい建築の壁面への適合をも思はせるものであつた。

青龍社展は九回の歴史を重ね、その新運動は既に確固たる位置を占めてゐる。川端龍子が作家として示す創造性と活動力とは、今日の畫壇における異數である。「太平洋連作」を終つた彼は、本年「大陸策」の第一「朝陽來」の大畫面を完成した。あたかも事變開始の直後であり、事變を契機として特に取材の上に一變化が期待される畫壇に、いち早く先端をきつた記念作として、又本年度に時局を反映した作品の随一として記憶されるものであらう。

洋畫に比べては少いであらうが、それでも各種團體の催す公募展、同人展、畫塾展、畫商、百貨店等の催す大家新作展、或は作家を限つて會員とする展覽會乃至個展など、常と變りなく盛に行は

れた。畫商等の催す諸大家展は藝術的に屢々無意味なものが多いが、特定の會員を作つて催す會には注意すべきものが幾つかある。七絃會、瑠々會、春虹會、九阜會、高島屋五人展、洋畫家を加へたものとして清光會、六潮會などがその主なるものであつた。新人による運動としては、既述の外明朗展、新日本畫研究會、瑠瑠畫社、紅日會などを數へる。

展覽會以外、壁畫、障屏畫の類としては、堂本印象が復興された高野山根本大塔内に眞言八祖像を完成し、木村武山が成田山に襖繪を描き、福田翠光が多古屋朝日會館地下食堂に板壁の裝飾畫を描いたものなどが記録される。後者は畫法の上に目新しいものはないが、日本風に裝飾された新建築内の壁畫として、適當な調和と効果を收めた興味深き一例である。その他東京府が建設した小國民道場の國史繪畫館に、幾つかの歴史畫が完成されたことも記しておく。

洋 畫

本年洋畫壇に現はれた最も顯著なる運動としては、七月最初の同人展を開き、十一月第一回公募展を開いた一水會の活動をあげなければならぬ。昨年末に結成された同會の動きは、「松田改組」以後に發生した藝術運動の中の、最も主要なる一つとして、期待されてゐた所であつた。四人の帝國藝術院會員を中心とする同會が「輕佻なる時流を排し、高雅なる藝術を創造、獎勵」しようとすることは當然で、その方向は自ら穩健中庸の道を行

くこととなり、新興の活氣には乏しいが、洋畫壇の現状では寧ろ甚だ缺けたる部分を補ふこととなり、その主張に於て今日最も必要なるものを説いてゐるからである。これは在野團體の常とは異り、官展の行くべき方向と背馳せざるのみか、却つて官展に於てこそ唱へらるべきであるのも一奇である。ともあれ會員等が、本年の新文展成立に當つてもそれへの参加を拒否して、藝術團體としての活動に専念したことは同會の爲には幸ひであつた。旗上展だけにその成績は注目された所で、一般の作品に就ての水準はさまで高くはなかつたが會員等の努力は十分認められた。同人展に於ける山下新太郎の「夏至」、公募展に於ける安井曾太郎の「肖像」「熱河風景」、石井柏亭の「葛飾」「村娘」等の力作が數へられる。

他の會員等が客觀的自然描寫を殆ど出でない中に、獨り純粹なる繪畫性を追求する安井の作品は、同會の異彩であるばかりではなく、又わが洋畫壇の一頂點として現在多數の追隨者をもつものである。

新文展には舊帝展作家の大體が集められた。官展の一特質でもあるが、又新たな機構の然らしむる點もあつて、中心となる指導的作品を見出すことが不可能であつた。第一部とは異つて、ここでは帝國藝術院會員も、審査員も、その他の出品者もすべて一様に思ひ思ひの仕事を示すに止まつて、極めてデモクラティックな觀がある。大家と新進とは、老練若くは陳腐であるか、生々しく活氣に富むかの別はあるが、技術上に格段の差をつけ難

く、むしろ先輩の多くよりも新進作家の方に内容技術共に優れた作品を見出すことは、頗る興味深い。時代と共に急速なる發展をとげた洋畫壇の現状を示してゐるからである。

同時に省みらるべきは、技術の達者さから大作も樂に仕上げられて、一應の纏りと、面白さと、効果とを示してはゐるが、作品が軽く一時的で、永く鑑賞にたへ、若くは愈々光輝をますが如き、記念碑的作品が殆ど見られなくなつたことである。

霸氣と野心とにみちた點で、近代趣味の一面を捉へてゐる點で、かつ技術の優れた少壯作家を揃へてゐる點で、新制作派協會の運動は、昨年以来洋畫壇に一つの活氣をそへてゐる。「反アカデミックの藝術精神から官展に關與せず」本年は第二回の公募展を開いて、益々旺な意氣を示した。陳列された作品には過渡期の煩悶や、病的な昂奮を示すもの多く、方向についての混亂も見出されるが、創作力の旺盛さと技巧の揃つてゐる點で頗る目覺しいものがある。この會では猪熊弦一郎の豊富な才と小磯良平の健實な技術とが對蹠的に目だつて存在してゐる。猪熊の三部作「晝」「黄昏」「夜」は本年の展覽會を代表するものであらう。小磯の技術的に殆ど完成に近いアカデミックな作風がこの會に存することも奇とされる所、むしろ官展に尊重さるべき性質のもので、その行き方の技術では今日の畫壇に類を見出し難いものがある。二科會は一昨年の變動以來新人を會員に加へ、量の上では頗る賑かで、變化にも富む活動振りで

あるが、聊か世俗に媚びる風が見え、雜然たる觀があるのは藝術的に惜まれる。ここでも先輩會員の多くが振はず、新進の働きが目だつて見えた。先輩の中では藤田嗣治が獨り多能な製作活動を示すに止まるといつてよい。「千人針」は畫材と獨自の觀察とで目だつ作品であつた。新人の中では宮本三郎、島崎雞二、岡田謙三、田村孝之介等がそれそれ力作を出して注意された。島崎と岡田とは世界は狭いが、藝術的に特異な氣質をもつて將來を期待させるものがある。北川民次がメキシコの土俗的畫風を齎したことは同會に新たな變化を加へた。彼がこの畫風に基いて日本における製作をいかに發展させるかは未知に屬する。

獨立美術協會では、從來同會の中心にあつた六名の會員が、相次いで退會した。同會が洋畫壇における最も前進的な運動を目途としてゐたことからこの異動は當然解し得る筈である。「前衛派」の作品が次第にその勢を増してきたことは、今春同會展覽會に認められるところであつた。

春陽會と國畫會については、各々特色ある色彩を以て常の如く活動を示した外に、特記すべき變化もなかつた。前者に於て小杉放庵は日本畫家になりきつたことを示した。國展には相變らず梅原龍三郎に追隨するものが多い。梅原の作品「霧島」の二點は一見平凡であるが、淡々たる描寫に日本的な感覺と滋味を含む點で注意をひくものがあった。青山義雄が同會に異彩を加へたことも記しておく必要があらう。

「前衛派」の運動が幾多の小團體によつて行はれ

たことも注意されたが、本年は新に長谷川三郎等によつて自由美術家協會が創立され、その第一回展覽會が開かれたことは新運動の最も顯著なるものとして記録される。この會は主として抽象主義に従ふもので、オブジェ、コラージュ、フォトグラムなど、繪畫の範圍外のものをも含んでゐる。

洋畫壇の活動は頗る活發で、開催された展覽會の数は夥しい。極く主なるものとして、既述のほかに白日會、春臺展、光風會、大平洋畫會、旺玄社、東光會、日本水彩畫會などの公募展があり、新美術家協會、上杜會、その他同人展は枚舉に遑なき迄である。又近年小展覽會に便利な畫廊が諸所に設けられたのを利用して、個展を開く作家は頗る多くなつた。

事變と共に早速從軍を志願する者も、洋畫家中に現はれ、九月以後幾人かの畫家が戦線に赴いた。そのスケッチ展も開かれた。近代の戦争が繪になるか否かは別として、事變開始以來、國民の一般的關心と共に、作家の藝術上の關心も當然新な世界にむけられ、目前の非常的事象に心をひかれる。そしてその現實に對する意識は、進取的活動性と共に洋畫壇に最も著しく見られるのである。

今春開館された海軍館に、十餘名の知名な作家による海戰畫が掲げられた。又前記國史繪畫館には日本畫の西洋畫による歴史畫が一部分完成して陳列された。遺憾ながらそれらの作品の多くは繪畫として賞讃し難く、現代の美術の隆盛に鑑みてその理由を解するに苦しむばかりである。説明的

繪畫はとかく藝術的努力に値せずと考へられ易いが、この種の公共的記念物にこそ、作家が自らの藝術を永久に遺し、又時代の美術を代表する責を感じて、全力を傾倒しなければならぬ筈である。

彫刻

新文展が成立して、第三部會を除くほか舊帝展系作家はすべてこれに参加出品し、構造社及び院展も参加、又「松田改組」以後新に結成された新彫塑協會、日本彫刻家協會等の作家達も出品したため、文展第三部については、かなり廣く諸分野を包含したことになる。從來の帝展に比し多少變化のある色彩を示したことは興味があつた。

しかし今日の我が彫刻界には、諸會派によつて藝術的主張若くは傾向の上に、さして著しい特色を示す程のものがない。各々の展覽會に於ては、一群の作品によつて多少づつ、その會の色彩が發揮されるのを見るが、この場合の如く一堂に並べて見ても、各派の主張がそれぞれ示されて、異る藝術的色彩を競ふといふ觀は全くなかつた。それは現在の文展の機構からいつて各派綜合展として代表作品を集めた譯でないことにもよるであらうが一面それに堪へ得る作品が稀にしか見られず、多くの作品が技術的に漸く或る水準を上下する程度にとゞまつてゐることによるのである。

文展彫刻の主流が常識的な寫實主義であることには別段の變化を見せなかつた。過去の官展に多く見られた空疎な感傷的作品、安價な文學的興味の作品、或は現實感を回避した理想的作品の類は

かなり少くはなつたが、審査員、無鑑査などの製作に未だその名残をとめたものが幾つか見られる。多くの作品は寫實的表現に一通りの技術を具へてゐるものの、習作としてのほか、藝術的表現の意圖を解し難く、又彫刻としての追求を殆ど認め難い類に屬してゐることは遺憾である。特選された作品には偶々男性の筋骨美を寫さんとしたものが數點擧げられたが、これらは現在の文展の主な傾向を示すものと認めてよいであらう。

新人の中には古代彫刻の單純な表現を學んで、古拙味に近づいたものが幾つか試みられた。わざとらしい古代彫刻の形式のみを摸することは稱讃し難いが、近代の造型意識に一致するその精神は、もつと多く學ばれてよい筈で、この傾向は興味をもつて見得る所であつた。特選された西田明史の「相倚」はその一例を示すものである。

齋藤素嚴の「避難者」、藤井浩祐の「梳髮」等がやはり技術的に會場の重要作品をなしてゐた。

彫刻團體の活動としては、構造社が最も興味ある成績を示してゐる。齋藤素嚴の作風は寫實的な緻密さと手堅さをもつて、アカデミツクな穩健さを示すものであるが、會員の中には安永良徳の如き才氣にとむ作家もゐて、大膽な表現に變化ある活動をなしてゐる。安永は文展出品では一人異端者の如き存在に見えたが、この會ではほしいまな製作に本年最も異色ある活動を示した。

第三部會は、舊帝展から出でて、在野團體として存在を示してゐる。この會は藝術的追求よりは、實用的色彩を明瞭にしてゐて、通俗味が多いが、

その意味からも日名子實三の努力が本年目だつて見えた。浮彫の大作「豐後時代」のほか時局を反映した戦争を取扱ひ、兵士の群像その他を作つて頗る達者な手腕を示してゐる。

二科會及び國畫會の彫塑部は、作家は少いが、各々特色を見せて興味ある活動を續けた。記念碑的製作がしきりに試みられてゐることも注意される。二科では渡邊義知を中心として、多く意力的な作品の創造に苦慮を拂つてゐることが見えた。

未だ過渡的の時代を多く出でないが、成長を期待させるものがある。國展の彫刻には一種の様式があつて、その方向における發展は望まれてよい新鮮さはあるが、現在の作品は多く萎縮して内在的の力にかけてゐる。

院展の彫塑部は彫刻界に一つの主要な存在となつてゐることは變らず、その主とする木彫のほか塑造作家にも個性的な特質をもつ新人が追々現れることが注意されるが、本年は特記する程の活動も示さなかつた。

本年第一回展を開いた日本彫刻家協會は、昨年結成された新團體で、相當の技術的水準を示し、將來を期待させるものがある。その他新進作家による小團體の活動も幾つかを數へた。木彫家の團體として日本木彫會の存在は記憶されねばならぬが、藝術的に發展と變化を見せぬことは物足らぬ觀がある。

彫刻の社會的需要として、やはり最も多く行はれるものは肖像と、諸種の記念像としての「銅像」であらう。近時建築裝飾としての浮彫、記念碑等

の製作も次第に要求されつゝあつて、作家の研究もこれに伴ひつゝあることは喜ばしい。たゞ浮彫については我が彫刻界は未だ甚しく幼稚な程度に止まり、少數の作家を除いては殆どその表現の特質さへ辨へられてゐない状態である。特に記念碑的な製作等に關し浮彫の利用さるべき範圍の増大が豫想されるだけに、作家のこれに對する理解と、技術の専門的な修練が切實に要求される。

肖像若くは記念碑的銅像は本年も相變らず、諸方に製作された。朝倉文夫の「谷干城像」、安藤照の「西郷隆盛像」その他多數を數へる。一般に肖像的製作が振はぬことは、繪畫の場合でも同様であるが、殊に彫刻は、材料の永久性と共に多く公共的な意義を持つだけに、從來多數の作品に見られる遺憾を繰返さぬことが希望されるのである。銅像の主は知られてもその作家が殆ど世人に忘れられてゐることは残念であるが、その責は藝術的な特性と永久性とを、この種の製作に殆ど示さぬ作家に歸さなければならぬ。

技法的に特殊な作品として沼田一雅の陶製「正木直彦壽像」がある。等身以上の全身像を一度に焼いた例として我が國に殆ど最初のものであり、結果も相當の成功を收めた。この技法の完成は作者の苦心が正木直彦の宿志を實現したもので、材料の上に新生面を拓くものとして注意される。

工 藝

工藝界には本年新たな活動を示した主な團體として、本年結成された京都工藝院と、東京における

日本漆藝院とがある。京都工藝院は、京都における各種工藝作家を網羅する綜合團體として、從來各部門により組織されてゐた八個の研究團體を解消した上に結成されたもので、本年初頭その華々しい門出をなし、春季に第一回の展覽會を開いた。もとよりこの種の綜合的機關であるから、藝術的主張に立つ運動と見るべきではない。

日本漆藝院は昨年、東京の主要なる漆藝家を集め代表的漆藝團體として誕生したが、本年作品を公募して最初の展覽會を開き、相當に充實した内容を示した。その技術的方面については殆ど現代の粹を竭してゐるが、佳品として見られるものはいまだ傳統的な作風のもので、新時代を目ざして工夫されたものには、未だ意匠の不消化、技法の不適合等が見える。洋風の「モデル・ルーム」はそれであつた。

實在工藝美術會は昨年引續き、本年第二回の公募展を開いてその主張を示した。この運動は工藝界に最も注目される所で、藝術的創作を産業工藝に結びつけようとする趣旨は、現代の理論的要求に即したものと見て、十分の意義が認められる。工藝指導機關からの贊助出品もあり、會員の指導的立場も判然として、興味の深い活動を示した。器具としての工藝に常に創意ある佳作を生み出すことは甚だ困難で、この會も個々の作品については尙多くの進歩が必要とされるものがある。本年五月パリに開催された巴里萬國博覽會は、フランス政府及びパリの主催で「近代生活に於ける藝術及技術」を主題とし、各國共自國文化宣

傳の爲大いに力を注ぎ、わが國もこれに参加出品したが、開催の結果はわが出品の規模餘りに小さく効果が擧げられなかつたことは遺憾であつた。今回は最初の試みとして、出品物發送に先ち國內でその展示會を開いた。科學部は別として、家庭生活部は各種モデル・ルーム、商店部は各種の工藝品でいづれも指定出品であつたが、多くは今回の博覽會の趣旨を理解せず、わが國の文化を代表するに適當でないとの意味で概して評判が悪かつた。相變らず「輸出向」を狙つて日本固有の高雅さを失ひ、彼の用途を目ざして彼に用ひられず、わが特技を示さんとして日本に受け入れられぬといふ如き傾向のものが見られる。この種の出品物創作の困難さは十分同情し得るが、作家の研究がこの方面に一層加へられたいものである。

同様のことは商工省輸出工藝展覽會についてもいひ得る所である。昨年度の同展出品物の中から選定された各種の作品が、今春シカゴの陳列會に並べられたが、先方における批評は、用途に對する理解がたらず、實用品としては脆弱にすぎ、意匠の點で低劣なものが多いなど、好ましくないものが多かつた模様である。

文展と商工展とは、恒例の二大展覽會で、全國の代表的な作品はほぼ兩者によつて見ることが出来る。本年の文展で、文部大臣賞がたゞ一點第四部の出品、本間蘊華の「漆器硯箱」に擬せられたことは頗る注目され、その作品が近代的傾向或は實用性から遠い技術本位の、いはゆる有閑工藝に屬するものであつたことと共に興味がひかれた。

これがために文展の獎勵方針に關する議論なども行はれたが、その出来ばえは會場効果や新流行に没頭する幾多の凡作をぬいて、著しく優れた品位をもつものであつた。

文展では相變らず漆器、金工が盛であるが、陶磁の不振なること、木竹工の殆ど現れぬこと、硝子工藝が興るべく期待されながら未だ振はぬことなどが指摘される。たゞ新材料として小川雄平によるバート・ド・ヴェールの「手箱」が注意をひいた。その技法は將來に希望をもち得るものである。人形は昨年以來の出品で、最近俄に盛になつたが、本年は著しい進歩を見せて、藝術的價値の認められるものを出すに至り、野口光彦の「砂丘に遊ぶ子供」が特選されたことは注目されるところであつた。

商工展は文展とは異り産業としての工藝獎勵を目的とするもので、ここに集る作家が目新しい意匠を凝し、新時代の生活に適應せしむべく「近代感覺」を狙ふものが多いことは、むしろ當然である。しかしこの種のものは多く、優れた感覺と趣味性に缺け、獨創に出づるものが稀であるために輕薄な流行的類型を生んでゐる弊が見える。

工藝指導所はその組織を擴充し、本所を東京に移し、仙臺のものを支所とするほか新に關西に支所を設置して、積極的にその事業を進めることとなつた。同所では從來から研究試作品を商工展その他の展覽會に出品してゐたが、本年は新たな活動に出で東北及び北海道の各地に巡回展を開いた。工藝の團體は又頗る多く、百貨店その他に於て

各種の工藝展、團體の同人展、個展などの開かれたことも盛であつた。たゞ工藝はその實用性の上から藝術的製作と一般商品との境の不明瞭な場合も多く、多くは後者に屬することも自然である。しかし新人の間には眞面目な研究的態度を見せたものも少くなかつた。

建築

本年の建築界にとつて、最も大きな事件が支那事變であるのはいふ迄もないが、七月事變勃發の當時は、年内に竣工した大建築は、多く既に工事のなかばを過ぎてゐた上に、物資使用制限も初めは極く緩かであつた所から、(十月に至つて初めて鐵網工作物業造許可規則(商工省令第二十二號)が公布され、鐵材五十噸以上を使用する建築は地方長官の許可を要することとなつた。)ここに概観する本年度竣工建築物には、未だその影響は殆ど見られないといへる。のみならず、事變勃發後の建築にもかなり金屬を使用したものが見られ、鋼鐵家具なども相當に行はれる實狀であつた。

建築學會の研究とその建言により、六月二十一日に内務省令第二十五號として、市街地建築物法施行規則中強度計算の規定が改正され、鐵材、木材の使用が軽減され得るに至つたのは喜ばしいことであつた。これは建築の合理主義を徹底せしめる上にも一段と役だつてあらう。

合理主義の普及は本年益々顯著であつたが、プラン、材料及構造の合理性こそその眼目であるにも拘らず、中には單に直線の使用と無裝飾のみを

主とするかの如き建築もかなり見うけられた。又相當な建築家の設計による大建築には見ないが、一般の小建築の間には、合理主義のはき違ひからか、「間に合せ主義」ともいふべき、建築美を閑却したものの行はれてゐるのは、わが國の建築、ひいてはわが文化向上の上から反省されなければならぬ。

合理主義建築の美は、施工の完全を以て初めて發揮せられるものであるに、反つて新傾向の建築ではその點が蔑にされる傾があるのは、建築家、施行者の罪ばかりではなく、目にたつ部分にのみ見えをはる理解のない建築主の責任でもあるといへる。その點日産館の如きは、純粹に實用本位とし、プランの如きも全く敷地と建築規則から限定されるまゝに、最大有効面積を得ようとして作られた、米國風の、何等特別の作意なき建築であるにも拘らず、所を得た材料の使用と施工の完全から、理想主義的見地からは姑く措き、事務所建築としては、まづ非難すべき點のない美しい建築となつてゐる。

純粹の合理主義の建築の中、諸雜誌にも紹介されて特に目だつた優秀なるものとしては、東京麴町の逕信病院、東京市の牛込、永田町、藏前等の小學校建築、大阪市の諸小學校、鐵道省廳舎、名古屋驛等をあげ得る。その他、京都市の京都電燈本社屋は、柱と梁との基盤目の交錯をそのまゝ、外部に示して、構成の美を出す事に成功してゐる。

慶應義塾の日吉臺寄宿舎は、今迄とかく閑却された寄宿舎の諸設備を向上し、個人の人格を重じな

がら團體生活を規律正しく、明るく元氣になさしむるやう細心の注意を拂つて設計されてをり、わが國寄宿舎建築史に一紀元を畫するものである。

以上は、街はぬ合理主義といふ點で、日本建築の精神を現代に生かしてゐるには違ひないが、更に一步進んで、日本人の美感に積極的に訴へようとして成功してゐるものに、取手の競馬場觀客席がある。

合理主義とはいひきれぬが、新材料の美を生かし、新聞社の廣告的目的をも満足せしむべく、派手な意匠を凝した朝日新聞社名古屋支局も興味ある仕事である。同社門司支局も巧みなプランと獨創的な構想を賞すべきものである。

合理主義的といふよりは、特にコルビュジエ風に日本趣味を加味したものといふべき巴里萬國博覽會の日本館は、外國建築家の間では頗る好評で、その設計者坂倉準三が博覽會當局より特別賞を授與されたのは我が建築界の爲に喜ばしいことであつた。

今年も相變らず、昔ながらの日本の傳統的題材或は手法を、現代的な技術、構造に用ひて、古來の日本の建築の美を再現しようとするものも多かつたが、これらは自然への忠實さ、つまり材料、構造における合理主義に背反してゐる點で、かへつて、一番大切な眞の日本建築の精神に反する結果を招いてゐるものが多い。その中で比較的成功してゐるのは東京美術俱樂部で、鐵筋コンクリート構造の特質を生かして、架構式の開放的な日本建築に調和せしめてゐる。但し日本建築の美しさ

は大半失せてゐる。内部に日本間を作りこむ爲構造體ならざる木の柱を用ひたり、瓦葺きの勾配屋根を用ひてゐることは建物の性質上問題とすべきでなからう。同じく日本建築の外観を採つた瓦葺鐵骨鐵筋コンクリート造の帝室博物館も、建物の性質上瓦葺きの勾配屋根は當然のことといへようが、ここでも古來の日本建築の美は達成せられてゐない。その内部に於ては、日本獨特の陳列室を造らうとしながら、宏壯な陳列室、廣大な吹き抜きのホールなど、なほ歐洲美術の爲に作られた歐米美術館の構想、プランに影響せられてゐる所が多い。日本美術の觀賞さるべき環境と、博物館の公共性との調和の問題はここでも未解決のまゝ、將來に残された形である。

古典様式の建築にも相當の佳作は多いが、中にもクラシック建築の本道を行つた堂々たる三菱銀行本店増築部分、小さく美しく纏つた手形交換所は、建築美と建築の本體とをよく把んでゐる作品として推賞さるべきものである。帝室林野局は、所謂ルネッサンス様式をよく現代的諸要求に合致せしめてゐる端麗な作品である。

我國には珍しいミニメント建築として最後に特記すべきものに、宇部市公會堂としての渡邊記念館がある。あまりにドイツ的であるとの非難もあり得るが、プランも意匠も巧みであり、その重厚壯大な構想はよく建物の目的を達してゐる。

住宅建築では座禮の日本建築が大多數を占めてゐるのは勿論であるが、諸建築雑誌に紹介される住宅は洋風建築がなれば以上を占めてをり、その

大部分は、昨年の傾向をそのまゝに、合理主義の上に立ち、わが國氣候風土の特殊性を考慮して、勾配瓦葺屋根の使用、板羽目大壁造りの優勢が目だつた。それらは實際建築せられてゐる數の何百分の一にも及ばず、數多の優れた建築が外にもあることであらうが、紹介せられたものの中で特に注目すべきものをあげると、簡明なプランと簡素な意匠にも拘らず豊かな感じを與へる内藤邸（堀口捨巳設計）、二重張りの障子の使用、寢臺を藏ひこんで、寢室と居間を連續して大きなサロンに變化せしむる工夫に――外國には先例はあるが――新機軸を出した小林邸（山口敬象設計）、レイモンドが好んで使用する杉丸太の柱を用ひて構成美を出してゐるK氏住宅（谷口吉郎設計）、日本建築の無理のない立禮化であるK博士邸（藤岡通夫設計）、内部に巧みに立禮の洋室を日本風に作りこんではあるが、純日本風の、しかも現代生活の要求する課題をよく解決してゐる杵家別邸（吉田五十八設計）等がある。

その他

美術が象牙の塔を出て社會に接觸し、その中に入り、美術の効用性が社會の種々の目的に利用されるといふことは、今日當然のこととなつてきてゐる。又事變開始以來一時美術界は沈滞の狀を示し、非常時局と共に美術の衰滅をさへ憂ふる悲觀的の見方も行はれたが、事實は決してさうでなく、非常時には一層美術の活動すべき範圍も擴げられ一段の飛躍を遂ぐべき事情にあることが、漸く證明されつゝある。本年種々の問題に關聯して、美

術の社會的活動が觀察されたのは興味深い現象であつた。

昨年組織された美術批評家協會は、本年の初頭に二三の活動を示した。紀元二千六百年を目ざす帝國ホテルの増築案に對し、同ホテルの建築家ライトに對する著作權侵害であり、藝術破壊の暴舉であるとして、反對運動を起したことがその一、前述の巴里萬國博覽會出品物を批判し「日本文化の眞相を誤解せしむるもの」として當局の反省を促したことがその二、藤田嗣治の製作した日本紹介映畫に加へられた非難を不當とし、これを公開試寫して輿論の判斷に訴へたことがその三に數へられる。

懸案の現代美術館建設問題は、昨年平生文相によつて計畫された政府案が中絶の形となつたため東叡會が主唱となつて促進運動を起し、第一案として、紀元二千六百年の萬國博覽會に建設さるべき美術館を永久建築としてこれにあてゐることを計畫すべく、運動する所があつたが、これも實現は不可能と見られてゐる。一方貴族院の豫算委員會で、委員關屋貞三郎と政府委員河原文次官との間に、現代美術館問題についての質問應答が行はれたことも注意をひいた。

「紀元二千六百年記念日本萬國博覽會」については、主催者たる日本萬國博覽會協會が主體となつて、着々諸般の準備を進め、會場計畫委員會の設置、宣傳用ポスター圖案の懸賞募集、同博覽會場の中心となるべき肇國記念館設計圖案の懸賞募集などを行つた。

来るべき東京オリンピック大會についても、當局の間に準備が進められ、最も困難とされた大會場の問題も、明治神宮外苑競技場擴張の案が遂に決定した。藝術競技に關しては、從來の體育藝術協會が組織を擴大して全藝術界の贊助協力を求め、次いで同大會組織委員會の中に藝術委員會が統合設置されることとなり、その委員も決定された。又宣傳用ポスター及び大會マークの圖案の懸賞募集なども行はれた。

紀元二千六百年の國家的祝典を前にして、種々計畫されてゐる準備の中、都市美の問題が熱心に考究されたことも著しい。都市美協會が中心となつて全國都市美協議會が催され、或は風景協會、全日本商業美術聯盟などによつて、市街、鐵道沿線等の醜惡な看板撤去が考究されるなど、關係諸官廳當局の努力に協力する活動が盛であつた。

ポスターその他の圖案は、美術の最も通俗的な街頭活動であると共に、社會的作用も著しいが、以上の如く諸種のポスター圖案の募集が行はれたほか、國民精神總動員の運動に際して文部省が幾種かのポスターを製作頒布した中に、横山大觀と竹内栖鳳とが各々原畫を描いたことは、これらの畫家が國策的運動に助力した點で評判を博したものであつた。逓信省が郵便切手圖案審査會を設けたことも、社會的意味をもつこの種の圖案に對し、漸次細心な注意と選擇とが行はれつゝ、ある一傾向と見られて愉快である。

事變開始以來從軍畫家の活動が始められたことは前述の如くである。たゞ從軍畫家の報道的任務

については、寫眞及び映畫の極度に發達利用される今日、往時とは全く事情を異にして、繪畫は既にその役目をこれらに譲つた。從軍スケッチ展も年内に一二開かれたが、殆ど風景寫生にとゞまつて、戰爭の報道として興味を繋ぎ得なかつたのは當然であらう。今日の畫家の任務はむしろその外に多くあるべきで、從軍志望畫家の數は次第に増加する傾きがあり、軍當局も亦これを奨勵せんとする模様である。

國民としての熱誠は美術家の間では、飛行機獻納の爲の空チューブ募集となり、或は國防獻金の爲の獻畫運動となつた。作品の賣上を獻金する爲の展覽會などが開かれたが、これとは別に、傷病兵慰問の爲の獻畫運動が行はれたことは注目される。病舎に繪を贈つて、科學的治療以外の貢獻を美術に托さうとするのである。

古美術關係の報道として、本年は帝室博物館の復興建築が竣功し、その落成式があげられた。内部の整頓を終つて陳列が公開されるのは翌年となる筈である。昨年開館された大阪市立美術館は、現代美術その他の展覽會場をもちかねてゐるが、一方古美術の爲の美術館として、機能を働かし、特別展觀を催し、美術講演會を開くなど、若々しい活動を示した。

京城の李王家博物館は現在近代美術館とされてゐる徳壽宮石造殿に隣接して、新な建築を造營されることとなり、既に着工、建築中である。來春完成の豫定で、その曉には李王家御所藏の古美術品を収める美術館として、石造殿の近代美術館と

相竝んで、完璧を示すこととなるであらう。

本年開催された古美術展覽會若くは特別展觀等の主なるものとしては、奈良帝室博物館の藤原時代美術展覽會、恩賜京都博物館の天台宗名寶展覽會、長澤蘆雪展覽會、大阪市立美術館の高野山龍光院名寶展覽會、同館第二回名寶展覽會、白鶴美術館の本邦近世名作品陳列展觀、日本美術協會第百三回展の雪村作品參考陳列などがあつた。

ドイツ政府は、明後年ベルリンに於て大規模な日本古美術展覽會開催を計畫し、そのための出品依頼及び打合せの用務を以て、同國立博物館總長キュンメル博士が來朝した。古美術品の搬出については種々困難が伴ふが、外務、文部當局及び日獨文化協會等の盡力によつて、その實現に努めることとなり、委員會を設けて準備に着手した。

最後に最も欣快なる報道として、大陸に兵を進めつゝある皇軍の手により、貴重なる支那古代文化及び藝術の遺跡が、戦火の荒廢から嚴重に保護されてゐる旨を記しておく。

美術展覽會

一月

新自然派協會第二回展(洋畫)

一月三日—七日 銀座・松坂屋

小城基を主宰とし、其の門下生を同人とする同會の第二回展。小城は「自然四態」と題する風景四點を出品した。陳列點數五十點。

須田國太郎洋畫個展

一月三日—十日 京都・三角堂

池田永一治クレパス展

一月四日—十二日 大阪・阪急百貨店

下瀬貞和洋畫個展

一月五日—八日 奈良・みやこや洋裝店

二町欽次郎個展(洋畫)

一月五日—十日 鹿兒島・山形屋百貨店

中谷武雄洋畫個展

一月六日—十二日 大阪・京阪デパート

西日本けてもの展

一月十日—十三日 名古屋・松坂屋

宇都木照子、中野淑子二人展(洋畫)

一月十日—十四日 大阪・三角堂

早川成治小品展(洋畫)

一月十一日—十三日 銀座・日動畫廊

佛蘭西民衆版畫展

一月十一日—十五日 大阪・三越

現代諸大家ガツシュ展

一月十一日—十六日 銀座・紀伊國屋

エコール・ド・東京美術協會第一回展(洋畫)

一月十一日—二十日 東京府美術館

會

主として東美校出身の新人三十名を以て組織する團體の第一回展で、超現實主義の作品百餘點を發表した。血みどろの腸やうのものを描いたもの、狂人の幻覺を寫したやうなもの等の主題の怪奇さに於て、安孫子眞人「作品」内田愼藏「樹齡」等注目されたが繪畫としては説明的描寫の低調さを免れなかつた。

坪丘社第一回展(洋畫)

一月十二日—十四日 大阪・十合

諸作家洋畫羽子板展

一月十二日—十六日 大阪・美術新論社畫廊

横江嘉純彫刻小品展

一月十二日—十七日 日本橋・三越

昨年歐洲再遊の途次、南洋及地中海沿岸各地の風俗に接して即興的に製作した塑造小品三十餘點と其の餘技に成るスケッチ約二十點を展覽した。

高山長一郎みづゑ個展

一月十二日—十七日 鶴岡・浪漫茶房

宮本三郎洋畫個展

一月十二日—十八日 京都・三角堂

第七回NOVA美術協會展(洋畫)

一月十二日—二十一日 東京府美術館

陳列總數百七點。公募展であるが入選は僅かに三名七點を算ふるに過ぎず、他は會員六名の出品で習作程度のもが多い。裸婦素描は殆んど全部が當局の忌諱に觸れ胡粉、貼紙等で修整したが、尙七點が撤回された。

二科帝展花形油繪展

一月十二日—三十日 新宿・喫茶店エルテル

湊弘夫北滿スケッチ展

一月十三日—十七日 神戸・三越

永瀬義郎歸朝第一回小品展(洋畫)

一月十三日—二十一日 大阪・阪急百貨店

林重義作品複製展

一月十四日—十六日 神戸畫廊

小山敬三個展(洋畫)

一月十四日—十七日 大阪・朝日會館

『海濱祭日』『志摩の海女』等の大作をはじめ約八十點、初期の作品から極く最近のものまでを集め、同畫伯の繪畫半生史を語る興味深い展覽會であつた。小山畫伯作品保有會の主催による。(大朝一・一四に依る)

白朝會第三回展(洋畫)

一月十四日—十九日 日本橋・高島屋

田邊至、大久保作次郎、柚木久太等七名の同人展で、田邊は「讀書」「湖畔」等に熟達した筆技を示し、大久保の「蟹」「水郷」も無難な小品であつた。其他柚木久太、安宅安五郎の作品が注目された。

長谷川利行油繪、ガラス繪百點入札展

一月十五日—十六日 新宿・天城畫廊

春日部たすく水繪個展

一月十五日—十九日 銀座・日動畫廊

水繪を専門とする作者の近作二十六點を陳列。

東西大家日本畫小品展 長谷川利行ガラス繪展

一月十五日—三十日 京橋・リンデン

交流人社洋畫展

一月十七日—十九日 銀座・紀伊國屋

寺田政明個展(洋畫)

一月十七日—二十日 新宿・天城畫廊

根本從之介洋畫個展

一月十七日—二十日 神戸畫廊

菊池契月鑒「花」畫展覽會

一月十七日—二十一日 大阪・三越

偶人社第二同人形作品展

一月十七日—二十四日 上野・松坂屋

BBCボスター展

一月十八日—二十日 銀座・伊東屋

相田直彦水彩個展

一月十八日—二十二日 大阪・美術新論社畫廊

第二回水彩畫作品展

一月十九日—二十二日 大阪・三角堂

小杉放庵第五回個展（日本畫）

一月十九日—二十三日 日本橋・三越

「春秋二曲屏風」一雙の外はすべて横物、稀に豎物を交へた小品で陳列數十五點、殆ど鳥に花或は岩石等を配したものである。作者独自の手法は線がない爲か生氣骨格を失ふ憾みがあるが、此の手法は寧ろ裝飾的な效果と筆致賦彩より來る味とを求むるもので、濃淡墨に、朱、代赭、白綠等の暖色を用ひ、澁さと落着きを見せてゐる。

三越水彩畫展

一月十九日—二十三日 日本橋・三越

三越主催。日本水彩畫會の幹部二十九名の新作品五十八點を陳列した。

關西畫壇大家紙本畫展（日本畫）

一月十九日—二十三日 名古屋・松坂屋

鑑山一月試作展（洋畫）

一月十九日—二十三日 神戸・プチギヤラリー

平安陶佳會新作展

一月十九日—二十四日 大阪・阪急百貨店

跡見泰近作油繪展

一月二十日—二十四日 銀座・日動畫廊

主として十號大の油繪による風景三十點を陳列した。

石川清油繪個展

一月二十日—二十五日 日本橋・白木屋

板谷達飾繪小品展（洋畫）

一月二十日—二十五日 日本橋・白木屋

一月二十日—二十七日 新宿・喫茶店ドーベル
宮城三喜子洋畫個人展
一月二十一日—二十五日 新宿・天城畫廊

濤友會第一回展（洋畫）

一月二十一日—二十五日 銀座・伊東屋

藤田嗣治、野間仁根に師事する二科出品者八名が組織する研究會の第一回展。油繪五十八點を陳列した。

六獎會洋畫展

一月二十一日—二十五日 大阪心齋橋・丹平ハウス

巴里萬國博覽會日本館出品物展示會

一月二十一日—二十七日 日本橋・高島屋

別項（一二〇頁）の如く本年五月開催される巴里萬國博覽會の本邦参加出品に關しては、商工省監督の下に巴里萬國博覽會協會が主體となり一定の陳列方針に基いて出品者及び出品物を厳選、製作、出品を指定又は委嘱したもので、總計約千四百點、之を發送するに先ち同協會の主催で國內展示會を開いた。

「近代生活に於ける藝術と技術」の主題に基き、陳列を家庭生活部、商店部、科學部、文化宣傳部の四に分ち家庭生活部は百貨店出品の喫茶室、婦人室及應接室のモデル・ルーム、商店部は各種工藝に依る調度、服飾、家具、玩具、食器、照明器具、其の他で各組合、商店、會社、個人作家等の出品に成るもの。科學部は我が國最近の發明になる機械裝置の類で鐵道省、大學、研究所等より出品、文化宣傳部は美術工藝の製作過程、日本婦人服飾、住宅庭園模型其の他で、國際文化振興會と國際觀光局の出品であつた。

出品のモデル・ルーム其の他一般の工藝作品に就ては製作者に知名の商店、作家等を含み、技術の精緻を示すものが多かつたが、今回の博覽會の趣旨を理解せず、現代の文化を認識せず、若くは外國の嗜好に阿るかの如き相變らず有閑的な或は「輸出向」商品見本を示す如き意

義不明の作品が多く、我が工藝を世界に代表させるには遺憾なものが少くなかつた。國內展示の結果は多くの反響を起し一般に不評であつたことは當事者に取つて將來の參考となるものであらう。

圖案家協會染織美術圖案展

一月二十二日 大禮記念京都美術館

新制作派會員小品展（洋畫）

一月二十二日—二十六日 銀座・三昧堂

各會員が小品二點宛を出陳した。

西洋骨董品展

一月二十二日—二十六日 神戸畫廊

橋本畫塾研究習作展（洋畫）

一月二十二日—二十六日 世田谷區代田・橋本畫塾

第十一回春秋會洋畫展

一月二十二日—三十一日 大阪・阪急百貨店

手島實近作洋畫個展

一月二十三日—二十四日 直方・商工會議所

表現第四回同人展（洋畫）

一月二十三日—二十五日 銀座・紀伊國屋

辻本大葉日本畫個展

一月二十三日—二十五日 大阪・美術新論社畫廊

阿佐見登日本畫展

一月二十三日—二十五日 名古屋・縣商工館

志賀、岡見、黒田、深澤油繪四人展

一月二十三日—二十七日 銀座・青樹社

羽田見日本畫個展

一月二十三日—二十八日 神戸・大丸

六潮會第六回展覽會（日、洋）

一月二十四日—二十九日 日本橋・三越

友交的な又多分に趣味的な色彩を有する此の會は、觀者にも親しみと或る樂しさを以て見られる獨特な存在である。洋畫家も日本畫を描き或は日本畫風に描く。今年

は中村岳陵の出品無く福田平八郎間に合はず、日本畫家は山口蓬春一人のみなのは寂しかった。蓬春の「雪暮」紙本双幅は雪中の杉を描き、技巧上の工夫を見るが、此の作者として十分な成功とは云ひ難いであらう。雪三題は軽い趣を見せた。中川紀元は油繪「水郷」二點の外紙本墨畫の小品八點を出品してゐるが草筆含著に乏しい。牧野虎雄の油繪六點はさすがに落着いて詩情に富み、「仙石原小雨」、「庭口」等の佳作を得た。木村莊八は獨自の畫趣に凝つて絹本紙本等試みてゐるが、日本畫風のものもよくこなし、芝居を描く油繪小品數點も面白い味の仕事であつた。外に同人等の創作版畫六題の内「風」六點を陳列した。

やよひ會人形作品發表展

一月二十四日—二十九日 銀座・松屋

塚本茂洋畫個展

一月二十五日—二十九日 日本橋・三越

出品點數、油繪五十五點。

赤松俊洋畫個展

一月二十五日—三十一日 新宿・喫茶店エルテル

西洋骨畫品展

一月二十六日—三十日 日本橋・高島屋

小絲源太郎油繪展

一月二十六日—三十日 大阪・美術新論社畫廊

金煥基、山本直武二人展（洋畫）

一月二十六日—三十一日 新宿・天城畫廊

山田秋畝美人畫展

一月二十六日—三十一日 大阪・阪急百貨店

各派彫塑展

一月二十七日—三十一日 神戸畫廊

第十四回白日會展（洋、彫）

一月二十七日—二月七日 東京府美術館

洋畫彫刻の公募展で、陳列總數四百三十七點、其の中

美術展覽會（二月）

彫塑は二十七點、他は油繪、水彩である。中澤弘光、香田勝太、富田温一郎等の出品は格別の進境無く、獨り池部鈞の水彩「休憩」ほか四點が異彩を放つて居た。田中繁吉、笹岡了一、野口良一呂等若手會員は多く不振、寧ろ會友獎勵賞の灰野文一郎、白日賞の川村精一郎が力作を示した。彫塑では、永原廣の浮彫は深味に乏しく、其他吉田三郎、木村莊二等の出品も沈滞氣味であつた。

第十二回春臺美術展（洋、工）

一月二十七日—二月十四日 東京府美術館

本郷繪畫研究所の藝展で、一般からは公募しない。會長岡田三郎助は「琵琶湖畔」を出し、伊原宇三郎、辻永矢島堅土、有馬さとえ等の先輩が一點宛出品してゐる。新人では山崎坤象、石川滋彦、生野久美子、岩本鈴子、和田清等の諸作が注目された。工藝部は岩田藤七が多數の硝子作品を出陳し、他に陶器、金工、染色の小品が陳列された。

陳列點數 繪畫二百七十三點、工藝六十五點

本年度鑑査員 伊原宇三郎、中村研一、權藤種男、江藤純平、有馬さとえ、有岡一郎、關口隆嗣（工藝）岩田藤七

授賞（春臺特賞）和田清、岩崎勝平、寺尾作次郎（春臺賞）石川滋彦、景山榮次、橋原益太、服部邦行、三木義榮、矢島甲子太郎

美術懇話會展觀

一月三十日 美術研究所

美術懇話會例會として山元家所藏の故山元春舉の遺墨を展觀した。陳列品は山の寫生卷を主とし、東京美術學

校藏鹽原圖卷及橋本長二郎藏絕筆春秋山水双幅等。なほ川合玉堂の「春舉君の憶出」と題する談話を行つた。

日本人形社主催人形展

一月三十日—二月五日 銀座・松屋

會員會友の作品展である。陳列數は五十七點で、御所人形、寫生人形、木彫人形、木目込み人形等が出品された。常套的な所謂人形趣味の域を出ない作品が多いが、平田郷陽の「兒戲六題」は好ましい味を見せ、好評であつた。

二月

林鶴雄洋畫陳列會

二月一日—五日 丸之内・日本工業俱樂部

作者は二科の新人、獨立展其の他に出陳の大作數點、近作小品等二十三點を展觀した。

武者小路實篤渡歐小品展

二月一日—五日 麹町・室内社畫堂

油繪、素描、色紙等三十餘點を出品した。

柚木久太洋畫個展

二月一日—五日 大阪・美術新論社畫廊

川西英創作版畫カレンダー展

二月一日—五日 神戸畫廊

野間仁根洋畫個展

二月一日—六日 銀座・日動畫廊

約十年前から最近迄の油繪百三十餘點、乍ら日本畫、グワッシュ等を陳列し、作者の全貌を示す個展であつた。初期の「娘と人形」は寫實的な作品であるが以後の制作には一種童畫的な自然觀照が其の特徵をなして居る。昭和九年以後の作品では「二匹の狐」「日曜日の釣客」「花園の友人」等が佳作として挙げられる。

小川幸錢新作紙本小品畫展

二月一日—六日 日本橋・高島屋

紙本に略筆で描かれた俳畫二十五點を展覧した。作者の境地が元來俳句的であり、是等の作品が楽しんで描かれただけに、渾然として觀者を牽き入れる。繪にはいづれも芭蕉、一茶の俳句又は七言の類を添へた。

長谷川利行カラス繪展

二月一日—六日 早稲田・ゼンセンパーラー

第七回童寶美術院展

二月一日—七日 日本橋・三越

「童心を表現し、童心を啓發し得るやうな藝術作品の向上普及」を趣旨として開催する人形、繪畫、彫刻、工藝の公募展で、入選作品の外に同人、賛助員等の出品がある。人形の中では子供に如何かと思はれるものがあり又佳作に入るものは徳川以來の常套的な人形趣味の模倣を出でず、現代風俗を扱つて成功してゐるものは皆無と云つてよい。陳列數人形二百七點、日本畫七十一點、洋畫九十九點、彫刻玩具等五十二點。

第四回大東京女學生制作者人形展

二月一日—七日 日本橋・三越

文部省、東京府、東京市後援。

長谷川利行油繪即賣展

二月一日—七日 新宿・天城畫廊

三越洋畫小品展

二月一日—七日 日本橋・三越

三越の主催で各派知名の洋畫家五十四名の小品八十二點を陳列した。金山平三「花」和田英作「松島」山本鼎「雪降る海」矢島堅土「裸婦」等の外石井柏亭、林俊衛梅原龍三郎、藤田嗣治等の出品があつた。

齋藤豐壽陶製花器展

二月一日—七日 日本橋・三越

西田數雄油繪「蘭花」小品展

二月一日—十日 大阪・阪急百貨店

翠紅會第十二回日本畫展

二月三日—七日 新宿・伊勢丹

女流日本畫家の會で出品者十八名、陳列點數三十一點。

長谷川利行デッサン展

二月三日—十日 新宿・喫茶店エルテル

染織美術展

二月四日(勸奨展) 京都ホテル(入選展) 京都美術俱樂部

高橋虎之助第一回望郷展(洋畫)

二月四日—八日 銀座・青樹社

改井德寛洋畫個展

二月五日—七日 富山・宮市大丸

新作陶藝品展

二月五日—十日 神戸・大丸

新穎會第一回展(日本畫)

二月六日—七日 京都・梅軒畫廊

主催者佐藤梅軒畫廊、京都の各畫塾で例月開催される研究會での優作を蒐めて展覧した。菊池契月、西山翠嶂、西村五雲、堂本印象、中村大三郎、石崎光瑤、水田竹圃、猪飼晴谷等の各畫塾の他に早苗會、舊竹杖會員が参加した。陳列數六十三點。

讃岐美術協會主催第八回繪畫展(日・洋)

二月六日—八日 高松・三越

巴人社第四回展

二月六日—十一日 銀座・紀伊國屋

北島淺一洋畫展

二月七日—十一日 大阪・美術新論社畫廊

新水彩派會第一回公募展

二月八日—十一日 静岡・田中百貨店

石川欽一郎水彩小品展

二月八日—十二日 京都・三角堂

現代一流大家小品展

二月八日—十九日 新宿・天城畫廊

京都漆藝會美術工藝展

二月九日—十二日 大阪・阪急百貨店

大國栢庭鑄金展

二月九日—十三日 日本橋・高島屋

大阪の釜師故大國栢庭の後繼。茶釜、鐵瓶、香爐、本立、置物等百餘點を展覧した。

小熊秀雄洋畫小品個展

二月九日—十五日 池袋・喫茶店コテイ

堀忠義洋畫個展

二月十日—十四日 銀座・青樹社

澤佛作、新作と併せて油繪四十六點を陳列した。

光風會第二十四回展(洋・工)

二月十日—二十八日 東京府美術館

光風會は昨年改めて新文展支持の立場を探り、それと共に猪熊弦一郎、小磯良平、外四名の有力な新進を失つた。本年の陳列點は洋畫、工藝を併せて五百點の多數に上つた。前年同様會友級は揃つて大作を出品し、先輩會員の畫風に追隨せず潑刺たる氣風を示したが、所謂モダニズムの浮薄調を免れず、光風特賞の川端實の「新粧」、須田剋太の「假面假裝」、其の他石川滋彦、南政善、井手坊也等の出品には、大畫面を一通り纏める才腕を認めるが内容の深さを持つものに乏しい。先輩會員の仕事では南薰造の「山莊」、太田三郎の「山湖南霽」、寺内萬治郎の「裸婦」が夫々新味を示して注目された。

工藝圖案の部ではポスター、刺繍、染織の類が陳べられ、山形胸太郎の染織を除いては見る可きものはなかつた。

搬入總數 三八二四點

入選數 三二四點

陳列數 洋畫四二一點、圖案三三點

新會員 石橋武助、和田清、安達眞太郎、朝井閑右衛門

門、鮫島利久、南政善、鈴木榮二郎

新會友 土佐林豊夫、反町博彦、大河内信敬、山口猛彦、田村一男、藤岡俊一郎、岩崎勝平、水上信雄、須田勉太

授賞（光風特賞）石川滋彦、川端實（光風賞）須田

剋太（F氏賞）高橋道雄、中谷ミユキ（K夫人賞）藤

井芳子、小田忠（I氏賞）森田元子、山中清一郎（三

星賞）三輪孝、本儀信（キング賞）西山眞一、日高大

三（フロレンス賞）伊藤四郎（船岡賞）田中義夫

高橋暉山南畫個展

二月十一日—十二日 上野・韻松亭

武藏野畫會第八回展（坂口右左衛門遺作陳列）

二月十一日—十二日 埼玉縣・所澤小學校

趣味の美術刺繍工藝品展

二月十一日—十五日 大阪・阪急百貨店

石井彌一郎滯歐洋畫展

二月十一日—十九日 大阪・阪急百貨店

バル創案園圃ボスター展

二月十二日—十四日 銀座・紀伊國屋

柚木久太洋畫展

二月十二日—十六日 神戸畫廊

愛市ボスター展

二月十二日—二十一日 丸之内・丸ビル

創作服飾藝術圖案展

二月十三日 大禮記念京都美術館

原田直康洋畫個展

二月十三日—十七日 大阪・美術新論社畫廊

天城畫廊油繪展

二月十四日—十九日 新宿・天城畫廊

野間仁根洋畫個展

二月十五日—二十日 銀座・ラテン畫廊

過日開いた個展の作品とは別に小品を主とした近作四

十四點、外に東朝連載の「風の中の子供」挿繪三十枚を陳列した。又贊助出品として藤田嗣治油繪二點と、SPA同人數名の出品があつた。

諸大家洋畫展

二月十五日—二十日 京都・三角堂

アルベール・コルフ細密畫展

二月十六日、十七日 麹町・白耳義國大使館

最近來朝したベルギー畫家コルフ（Albert Coles）がその作品十數點を展觀した。象牙板に水繪具で描いたミニアチュールの肖像畫である。

日本大學美術科展

二月十六日—十九日 銀座・伊東屋

人形大供會展

二月十六日—二十一日 新宿・伊勢丹

樂久山霏清水樂山作陶展

二月十六日—二十二日 大阪・阪急百貨店

中川義長染更紗繪展

二月十七日—二十一日 銀座・鐘紡

太平洋畫會第三十三回展（洋、彫）

二月十八日—三月一日 東京府美術館

太平洋美術學校を擁する同會の公募展で種目は油繪、水彩、素描、版畫及彫塑等。中村不折は裸婦を配した「銅器と新人」を出品、高村眞夫、石川寅治、奥瀬英三等は變らぬ温健な作風を示し、新進作家の出品には舉ぐべきものを殆ど見ない。彫塑部も佳作乏しく、澤田晴廣、中野桂樹等も不振であつた。尙第七室に遺作室を設け、故會友宮地志行、近藤七郎、及故會員河合新藏の水彩畫、滿谷國四郎の油繪を陳列した。

繪畫 搬入數二二六八點 入選數一八三點

彫刻 搬入數五六點 入選數一五點

授賞（太平洋畫會賞）玉井力三（葵賞）海洲正太郎（相馬賞）本郷惇（昭和賞）石橋堅三（フロレンス賞）

木原二郎

故河合新藏遺作陳列目錄

孟宗竹 德川義恕藏 水草 大鹿清治藏

惠庭岳 六鹿清治藏 竹林（一） 同

竹林（二） 同 京の風景 同

山 同 柳 同

雄北山東 同 橋 同

故滿谷國四郎遺作陳列目錄

金剛山 相馬愛藏藏 榕樹の下（下圖）上口作次郎藏

初夏（支那） 小池厚之助藏 裸婦（一） 多々羅義雄藏

赤 湖 宇野澤辰次藏 山中湖 石川寅治藏

秋の湖 土屋康二藏 戰の話 加納百里藏

裸婦（二） 齋藤俊雄藏 水車 渡邊節治藏

蘇州 土屋康二藏 松木氏母堂肖像松木家藏

雪景 上口作次郎藏 風景 長尾一平藏

中央美術協會洋畫小品展 新宿・伊勢丹

二月十九日—二十四日

岩佐古香能畫展（日本畫） 大阪・三越

伊勢正義油繪個展

二月二十日—二十三日 銀座・日動畫廊

油繪の外に數點の素描を加へて三十二點陳列。一體に黒つぱく沈んだ色彩で、筆觸に特殊な味と感覺がある。

波止場、オリブ畑、冬の山等の小品スケッチに佳作があつた。

茨城縣工藝展

二月二十日—二十三日 茨城會館、縣工藝指導所

春秋會第十二回洋畫展

二月二十日—二十七日 大阪・阪急百貨店

内田武夫、竹内和男洋畫小品展

二月二十日—三月一日 四谷・喫茶店ブラザル

川端龍子作「潮騒ノ圖」展觀

二月二十一日、日本橋・高島屋

川端龍子が高島屋社長の依頼で製作した「潮騒の圖」

四曲屏風一及び完成したので京都へ發送に先立つて展覧された。巖に碎ける波濤を描いて雄渾な筆致によく自然を捉へた佳作である。

佐藤美代子洋畫個展

二月二十一日—二十四日 新宿・喫茶店エルテル

美術「都人形六十姿」展

二月二十三日—二十六日 大阪・南海高島屋

高橋樂齋信樂焼作陶展

二月二十三日—二十六日 大阪・三越

園部香峰歸朝第一回展

二月二十三日—二十六日 福岡・岩田屋

赤松雲嶺墨雲社日本畫展

二月二十三日—二十七日 大阪・阪急百貨店

宮永東山、中村善齋陶器と指物の會

二月二十三日—二十七日 大阪・阪急百貨店

高間惣七洋畫展

二月二十三日—二十七日 大阪・美術新論社畫廊

現代美術品綜合展觀即賣

二月二十三日—二十八日 大阪・南海高島屋

上海・西晴雲新作畫展

二月二十三日—二十八日 大阪・大丸

かすみ會同人力作人形展

二月二十三日—三月二日 日本橋・白木屋

染工會第一回展 (染色、刺繍、皮革)

二月二十四日—二十七日 銀座・鐘紡

上野山清眞新撰會心作展

二月二十四日—二十八日 銀座・日動畫廊

油繪三十四點、日本畫二十餘點を陳列した。魚、牛、

椿、釧路風景、鶴等を描く。色感寒く、筆癖の強さが目

立つ。「初秋の摩周湖」「大雪山の晩秋」等が注意される

ものであつた。

第二回大斗會 (洋畫)

二月二十四日—二十八日 銀座・ラテン畫廊

東西大家新作日本畫展

二月二十四日—二十八日 京都・大丸

東都日本畫大家中堅新作畫展

二月二十四日—二十八日 京城・三越

第六回古代染織紋様研究圖案展

二月二十五日 大禮記念京都美術館

日本美術學校生徒習作展 (洋畫)

二月二十五日—二十八日 銀座・伊東屋

武藏高工建築科作品展

二月二十五日—二十八日 神田・東京堂

長谷川利行油繪ガラス繪素描入札展

二月二十五日—二十八日 新宿・天城畫廊

金宗燦洋畫個展

二月二十五日—二十八日 京城日報社來青閣

如春會第一回日本畫展

二月二十五日—三月一日 茨城記念館

第一回女性人形同人展

二月二十五日—三月二日 銀座・松坂屋

パリ萬國博出品日本觀光寫眞壁畫展觀

二月二十五日—三月二日 銀座・松坂屋

来る五月開催の巴里萬國博覽會日本館を飾る爲國際觀

光局から出品の寫眞壁畫が完成したので發送に先ち展觀

された。製作は國際報道寫眞協會で一流の寫眞技術家の

手に成り、高さ二・三五米幅二米のもの十枚を連續、主

として日本各地の名勝に取材し、風光、建築、現代文明

風俗等を織り込んで、モンタージュに依る新鮮な効果を

示してゐた。

辻利平油繪個展

二月二十六日—二十八日 大阪・南海高島屋

帝塚山學院洋畫展

二月二十六日—二十八日 大阪・南海高島屋

新進中堅作家油繪新作展
十大家油繪色紙展

二月二十六日—三月二日 銀座・青樹社

青樹社主催。

堀忠義油繪個展

二月二十六日—三月二日 横濱・有隣堂

南風原朝光油繪個展

二月二十六日—三月二日 新宿・エルテル

ノエル・ヌエツト作版畫デッサン展

二月二十七日 關西日佛學館

角道馨バステル展

二月二十七日—三十一日 東京・地下グレル

獨立美術協會員小品展

二月二十八日—三月一日 銀座・日動畫廊

三月

高山泰子第一回洋畫個展

三月一日—三日 銀座・紀伊國屋

新人であるが、異常な熱情的表現に鋭い才能を示して

注意を率くものであつた。

市之瀬廣太小品傑作個展

三月一日—三日 岐阜縣瑞浪町・勇美俱樂部

山下鐵之輔洋畫展

三月一日—三日 京城・三越

山元櫻月 (春汀) 日本畫個展

三月一日—四日 銀座・伊東屋

島村三七雄滯佛作品展 (洋畫)

三月一日—四日 日本橋・三越

滯佛八年、シモン、ギョノン及ベルナルに師事し、
サロン・デ・ザルチスト・フランセに於て、マンシヨン
オノラブル賞を得た作家で、「白いローブ」「パリスの寄

判」を初めとして滯佛中の大作小品等併せて六十餘點を展觀した。新流行を追はず個性的な鋭さも見出し難い、穩健な作風と確實な技術を示してゐる。

長谷川昇作品鑑賞會（洋畫）

三月一日—四日 銀座・三味堂

昭和三年より同八年迄の舊作十一點を陳列、滯歐作が多く、「コーズリー」に於ける桃色の肌、「子供」の着物の紫、其他衣服の赤など凡て甘美な明色で、深味には乏しいが確かな筆致と感覺の美しさが見られた。

各派綜合一流大家彫刻小品展

三月一日—五日 新宿・天城畫廊

山本鼎洋畫展

三月一日—五日 神戸畫廊

風景靜物等近作の油繪二十點を出品した。

田邊至バステル展

三月一日—五日 大阪・三角堂

現代工藝美術展

三月一日—十日 名古屋・松坂屋

松坂屋美術部が主催し、香取秀眞、六角紫水、津田信夫、板谷波山、清水六兵衛、堆朱楊成、飯塚琅玕齋、高村豐周、梅澤隆眞、松田權六、山鹿清華、龍村平藏等百數十名の新作品二百數十點を展觀した。

黒燭會小品展（日本畫）

三月一日—十日 京都・三角堂

第十三回春秋會洋畫展

三月一日—十日 大阪・阪急百貨店

關西の二科系作家二十名の小品展、鍋井克之は小品「南紀風景」を出品した。

京都洛趣會展

三月一日—十一日 日本橋・三越

第二十三回大阪美術展（日本畫）

三月二日—五日 大阪・三越

美術展覽會（三月）

大阪三越主催。

油谷達近作小品展（洋畫）

三月二日—六日 大阪・美術新論社畫廊

林倭衛、鬼頭壺二郎近作洋畫展

三月二日—七日 名古屋・丸善

マネキン藝術展

三月三日—五日 神田美土代町・島津製作所

ヒンター水彩畫個展

三月三日—七日 日本橋・白木屋

島根縣工藝品競技展

三月三日—七日 島根縣、産業獎勵館

第二回神戶兒社美術展（日本畫）

三月四日—六日 京都・大丸

西山英雄、曲子光男等京都繪專の卒業生、在校生十三名の組織する研究會の第二回展である。

東西大家日本畫展

三月四日—七日 日本橋・白木屋

第五回フォルム春季展（洋畫）

三月四日—七日 銀座・紀伊國屋

吉見庄助、難波田龍起等六名の同人展、繪畫の純粹化を求める趣旨は了解されるが技巧は安易である。

白日荘日本畫展

三月四日—七日 新宿・三越

白日莊主催、東京作家の作品を主として約三十點を展觀した。

青山義雄滯佛作品展（洋畫）

三月四日—八日 銀座・青樹社

大正十年より昭和十年に至る滯佛作品、油繪三十三點を展觀した。風景が多く、靜物之に次ぐ。色彩はボナーに似て濃く美しく、筆致も老練であるが、既にマンネリズムであり、新鮮な迫力に乏しいのが憾まれる。

砂子切金應用現代大家新作日本畫展

三月四日—九日 上野・松坂屋

東京作家の小品約四十點、砂子師岡勝三郎が畫の周圍に砂子切箔等をちらして表装したものである。

國際素描コンクール日本豫選展示會

三月四日—九日 上野・松坂屋

本欄一三四頁参照

原正治郎洋畫個展

三月四日—十日 新宿・喫茶店エルテル

第九回新美術家協會展（洋畫）

三月四日—十三日 東京府美術館

二科の會友及受賞級の作家を以て組織する同人展で、會員は何れも相當の技術を備へ、眞面目な研究態度を示して、春の主要な展覽會の一つに擧げられる。本年は宮本三郎、栗原信の二名が引退し、新たに服部正一郎、伊藤久三郎、柏原覺太郎が加入した。出品者は二十三名、陳列數百三十二點。高橋庸男は「甲板船客」其他滯歐作の風景小品を出陳した。垢抜けのした感覺は認められるが、表現の急卒さを免れない。中村善策の諸作は色調が感傷的で、「韃靼海峽」は効果的であつたが、「山と女」は觀照の鋭さが見られず筆調も鈍い。近藤光紀は坦々たる寫實に手堅さが認められ、金子博信の松を描いた諸作は稍筆技の末に陥つて居た。田邊三重松の「有珠の秋」「夏の港町」等には着實な個性はあるが、描寫が説明的な工夫に傾いた。大澤昌助は構圖の單純化とトーンによる表現を試みて注目される。「室内人物」「姉妹」等は畫面がやゝ堅くなつた。其の他松本弘二の「花束」「雪山」は色調に雅味があり、新海覺雄の「椅子に倚る女」其の他は明快な描寫が認められた。伊藤繼郎の「裸婦」はマチエールの特異な効果が認められるが繪畫的な破綻が多く田村孝之介の諸作は畫品に缺けて居た。

眞垣武勝油繪水彩個展

三月五日、六日 銀座・ラテン畫廊

伊豆東海岸に取材した淡彩素描二十餘點、油繪數點を陳列した。

高野眞美、金井敬陽洋畫日本畫小品展

三月五日—七日 四日市・市立圖書館

第四回はねづ會染織工藝展

三月五日—八日 銀座・鐘紡

兼重暗香日本畫個展

三月五日—九日 日本橋・三越

花鳥畫二十餘點を陳列した。

神谷吉廣洋畫個展

三月五日—九日 上野池ノ端・かんべや

梅原龍三郎、安井曾太郎、藤田嗣治三人展

三月五日—十五日 大阪・松坂屋

春風會日本畫展

三月五日—十七日 大阪・松坂屋

大阪松坂屋美術部主催。竹内栖鳳、菊池契月等京都作家の新作を展覧した。

東光會第五回展（洋畫）

三月五日—二十一日 東京府美術館

昨春會員橋本八百二、堀田清治、高間惣七等が脱退したが、會としては別段の變化なく例年の通り公募展を開催した。本年は大作の出陳が殊に多く目についた。この會の特色として大畫面、大まかな筆技、明快な色調などが見られるが多くは表現の不徹底を免れない。熊岡美彦は臺灣風景八點、「草上裸婦」一點を出品して格別の變化を見せず、野口謙藏の「雪の朝日」「雜草」「冬日」三點は技巧に洗練を缺くが素朴な詩情が認められる。その他渡邊浩三の静物數點、佐藤一章の一種の戲畫的な様式化による「魚市場」、岩下三四、平通武男、西原正夫、田代順七、江藤哲の諸作等を挙げる。

陳列總數 三百十四點

（新會員）平通武男、岩下三四（新會友）森田茂、井上

脩、石本秀雄、山下大五郎（無鑑査）三田村榮、岸田淑子、家永麒三郎、長進

（東光賞）江藤哲、田代順七（M氏獎勵賞）倉馬藏、八

藤登木男、土橋芳次（K氏獎勵賞）山本清、熊岡正夫、

西川高次、廣本森雄、松岡正（Y氏獎勵賞）河原修平、

竹内孝、安達良雄、松本富太郎（S氏獎勵賞）松居均、

河井達海、山本貞子、坪田道夫（フロレンス賞）武井清

志、栗林綾子（クサカベ賞）小貫綾子、森八千代

長井雲坪遺墨展（日本畫）

三月六日、七日 長野・城山館

第一回大伴藝苑日本畫小品展

三月六日—八日 銀座・三味堂

近代色紙小品展

三月六日—九日 神戸・更彩閣美術部

第二回二科會十二人展

三月六日—十日 新宿・天城畫廊

吉田嘉藏第二回バステル畫展

三月六日—十日 大阪南海・高島屋

日本民藝館第三回特別展

三月六日—四月三十日 目黒區駒場・同館

「日本民藝館の特別展で、四十九ヶ所の民謡の代表的な陶器三百餘點を見ると、柳、河井、濱田氏の全國行脚のゆき届いてゐること、中部に乏しく山陰、北九州に豊かなこと、北方のは暗く寒く、南方のは暖かいといふことなどが感ぜられる。殊に薩摩の苗代川の窯は古くから半島人によるものだけに、全く別な型と色をもつてをり、模様ものは盆子だけしか残つてゐない。英國にはもはや民窯は一所も残つてゐないのに、現代の日本ではまだこれだけの作品が傳統をついでゐることは有難いことである」（東日三・七に依る）

川路柳虹賛詩東西名家小品畫展

三月七日—十二日 日本橋・高島屋

川路柳虹が東西二十三名の日本畫家の小品に附した賛詩を別幅に仕立て、繪に添へて陳列した。

滿谷國四郎遺作展覽會（洋畫）

三月七日—十四日 上野・日本美術協會

昨年七月物故した滿谷國四郎の知友、門下等有志の盡力に依つて、彼の畫家としての全生涯を概観すべき大規模な遺作展が開かれた。出品は明治二十八年（二十二歲）の「裸婦」から昭和十一年（六十三歲）の「結筆「バラ」」に至る迄の四十年間に互に總計百八十八點で、同時代の大家の中畫風の上に最も勇敢なる飛躍と煩悶とを示した作家であるだけに、其の變遷發展の跡を辿る意味でも頗る意義深く、此の畫人を知る爲には見逃すべからざる展覧であつた。

第一室は再渡歐前の作品十七點で、「車夫の家族」「かぐや姫」「二階」の文展出品作の外それ等の習作及びバステル「眠れる少女」等の佳品が陳列され、此の時期に於ける寫實的作風の殆ど完成に近い技術を見せてゐる。第二室は大正元、二年の滯歐作品十六點で、風景スケッチ裸婦習作等を主とし、過去の作風を一擲せんとする努力と煩悶とが見られる。第三室以後には大正三年歸朝後引續き晩年に互る二十二年間の主なる作品が、帝展出品の諸作を初めとして殆ど網羅された。其の前半期に於ては後期印象派の感化を多分に受けた新様式が未だ熟せず、形式的にも色彩上にも不満を藏するものが多く見られる。併し當時不評にも屈せず其の途を進めて行つた辛苦は晩年の渾然たる熟成に依つて酬いられたと云ふべく、大正十二年支那旅行頃より後、次第に彼自身の様式が完成され、詩情に富む豊かな色彩感が物象の單純化と相俟つて、裝飾味の多い美しい畫面を形成した。支那旅行の所産「後庭」「海棠樹」等を経て「早春」「女ふたり」等を生み、第九回帝展出品の「小憩」あたりは其の最高を示すものと見られる。第十三回帝展出品の「緋毛氈」亦彼

の代表的傑作たるに背かず、其の下繪が種々陳列されたのも興味が深かつた。たゞこれだけの規模の遺作展としては初期の作品が少く、「林大尉の戦死」「樂しき黄昏」「戦争の話」「購夢」「魚市場」其の他幾つかの完成作が洩れたことは遺憾であつた。

陳列目録

自畫像

裸婦 瀧谷珠一藏

田園風景

樂しき黄昏(エチユード)

野邊の流 芝川又四郎藏

かぐや姫(エチユード)

かぐや姫(エチユード)

かぐや姫(エチユード)

眠れる少女

少女

少女と犬

二階

戦争の話(エチユード)

車夫の家族 東京美術學校藏

歸漁 松尾哲太郎藏

風

ブルターニュ

裸婦

休息

運河

橋はる裸婦

宿の庭

畫室内小景

立てる裸婦

ジブシーの村

讀書

オリブの畑

ブルトンの少女

畫室(女)

柳樹の下

裸婦

グレイ風景

樟樹の下(琉球)

素焼(エチユード)

素焼

魚市場(網の津)

富士山

三人水浴

網の津の島

桃の下

富士

砂丘の家

風景

手鏡

島

雪景

髪

杏下

裸婦

鹽原

坐せる裸婦

源泉(下繪)

猫

岩陰

河口湖

畫の月

木々の秋

秋色

大原孫三郎藏

裸婦

尚 百子藏

尚 百子藏

富民協會藏

大原 章藏

三人水浴

網の津の島

桃の下

富士

砂丘の家

風景

手鏡

島

雪景

髪

杏下

裸婦

鹽原

坐せる裸婦

源泉(下繪)

猫

岩陰

河口湖

畫の月

木々の秋

秋色

春の海

津輕照子藏

裸婦

島(御手洗島)

柿の木

林檎を持てる

裸婦

雅木林

長崎の人

高原秋

風の日(野尻湖)

秋の山

海の少女等

庭の隅

裸女

コスチューム

雅木林

島(大島)

野尻の雨後

K夫人像

葡萄

武蔵野の秋

裸婦

冬

杏掛の秋色

蟬捕る子供等

冬の妙高

裸婦

庭の萩

野尻湖畔

裸婦小憩

大原孫三郎藏

木村茂雄藏

尚 百子藏

尚 百子藏

富民協會藏

大原 章藏

三人水浴

網の津の島

桃の下

富士

砂丘の家

風景

手鏡

島

雪景

髪

杏下

裸婦

鹽原

坐せる裸婦

源泉(下繪)

猫

岩陰

河口湖

畫の月

木々の秋

秋色

春の海

津輕照子藏

裸婦

梅日和

柳樹の下

青色のバック

鎮江

柳樹の村

後庭

舊公使館の庭

門外細雨

盤門

運河(蘇州)

四月(蘇州)

運河

石橋

五柳橋畔の肉屋

甘露寺の一隅

探果(裸婦)

甘露寺

湖畔

海棠樹

水牛

手鏡

藍の湖の春

蘇州の運河

裸婦

白壁

長江々畔

小憩

蘇州の橋

右近權左衛門藏

梅日和

柳樹の下

青色のバック

鎮江

柳樹の村

後庭

舊公使館の庭

門外細雨

盤門

運河(蘇州)

四月(蘇州)

運河

石橋

五柳橋畔の肉屋

甘露寺の一隅

探果(裸婦)

甘露寺

湖畔

海棠樹

水牛

手鏡

藍の湖の春

蘇州の運河

裸婦

白壁

長江々畔

小憩

蘇州の橋

柳蔭繫舟

尚 百子藏

薄田晴彦藏

放鶴亭

洞爺湖

裸婦

俊ちゃん

裸婦

早春の庭

臥裸婦

樹蔭

自畫像

早春

藤椅子

梅日和

脱衣

朝顔

藤名雨景

裸婦

雲の湧く高原

殘雪

熱海

朝の身じまひ

土

路傍の秋色

ベランダ

青葡萄

切り通し

木下雅子遺作展(洋畫)

三月八日—十日 銀座・資生堂

昨年病歿した木下雅子の滯歐作品及歸朝後の二科出品

作等、油繪三十八點、素描二點、外に服飾デザイン數點

を展覧した。穏和な寫實的作風で女性に稀な確かな技術

を有し、色彩は落着き、少し弱いがよい素質であつた。

中島康蔵姫路附近風景洋畫個展

三月八日—十日 姫路・商工會議所

小手毬

緋毛氈(下繪)

緋毛氈

山口吉郎兵衛藏

毛氈上の裸婦

平井直次郎藏

緋毛氈(下圖)

藤名

白樺の森

コンボジション

白桃の圖

下津井六口島

春霞

更紗模様

雪の庭

奈良

野尻湖

窓ぎわ

雪

松尾氏像

洗濯(朝鮮)一

朝鮮の家

松尾哲太郎藏

漢江

洗濯(朝鮮)二

棒

バラ

粟粟

七面鳥

粟粟

芍薬

玉電源一郎藏

平井直次郎藏

福原信三藏

大原孫三郎藏

島津源吉藏

拾山錦光藏

松尾哲太郎藏

漢江

洗濯(朝鮮)二

棒

バラ

粟粟

七面鳥

粟粟

芍薬

玉電源一郎藏

平井直次郎藏

福原信三藏

大原孫三郎藏

島津源吉藏

拾山錦光藏

松尾哲太郎藏

漢江

洗濯(朝鮮)二

棒

バラ

粟粟

七面鳥

粟粟

芍薬

玉電源一郎藏

津田正周洋畫個展

三月八日—十二日 大阪・美術新論社畫廊

郷土風景畫展 (洋畫)

三月八日—十二日 名古屋・丸善

汎太平洋平和博覽會に際して、愛知縣出身及び在住の各派洋畫家十六名は縣下の名勝風景畫一點づゝを製作して名古屋市役所に納入したが、納入に先だつて一般に公開した。

第一回全日本商業美術展

三月八日—十七日 東京府美術館

主催日本商業美術協會、後援文部省、商工省、東京府、東京市、日本商工會議所、協賛都市美術協會、日本能率聯合會、全國商業美術教育協會、日本圖案家聯盟、日本廣告聯盟。

公募に依る展覽會で各地方の商業美術團體並に作家が多數應募した。種目はポスター、新聞廣告、包裝圖案、表紙圖案、廣告圖案、マネキン彫刻等である。技巧的に精緻でも多くは趣味低俗で、獨創を甚しく缺いて居る。無鑑査の出品では里見宗治、田野邨温、吉田達登、萩島安二、吉田鎌吉等が指導的な作品を示して居た。

池上秀畝日本畫個展

三月九日—十一日 大阪長堀・高島屋

倉田白半個展 (洋畫)

三月九日—十三日 大阪・美交社

美交社主催。大方昨年四月以後の制作に係る油繪風景畫二十七點を陳列した。何れも病軀を推しての精進の作で、四十號の「初冬果園」、十五號の「村の店」等作者の親しむ山村の風物を主題として造型的に深い追究を示して居た。

現代大家日本畫展

三月十日—十二日 神戸・三越

上野山清實個展 (洋畫)

三月十日—十三日 大阪・三角堂
革内會第十六回日本畫展
三月十日—十四日 日本橋・三越

安田靉彦は出品無く、會員二十三名が略一點づゝを出品した。陳列數二十六點。舊型墨守の作品多く、見るべきものに乏しかった。

鳥羽宗雄、小林三郎近作洋畫展

三月十日—十四日 銀座・鐘紡

第三回二科西人社展 (洋彫)

三月十日—十四日 福岡日日新聞社

福岡出身の二科展出品者を以て組織する同人展で、坂本繁二郎、正宗得三郎、東郷青兒、渡邊義知、黒田重太郎等二科會員の贊助出品があつた。

第三回東海四縣輸出工藝試作品展

三月十日—十六日 三重縣・商工獎勵館

「三重縣工藝協會主催、商工省後援。同展覽會は愛知、静岡、岐阜、三重の東海四縣工業協會聯合會が設立されて以來東海工藝品の輸出振興をはかる爲毎年開催するもので、出品數は、愛知百點(陶磁器、漆器、染織品、七寶其他)、岐阜百點(陶磁器、金屬、紙製品、木竹製品)、静岡百五十點(漆器、木竹製品、染織品)、三重三百點(陶磁器、漆器、其他)であつた」(汎工藝十五年四號に依る)

寺田竹雄水彩素描百枚展

三月十一日—十五日 新宿・天城畫廊

滯米十三年、昭和十年に歸朝した二科の新人である。水彩五十八點、素描百點を出品した。

白蠻會第四回展 (洋畫)

三月十一日—十五日 銀座・紀伊國屋

金煥基ほか三名の組織する抽象繪畫の同人展。

著尾清利續小品展

三月十一日—十六日 上野・松坂屋

かすみ會趣味工藝品展

三月十一日—十七日 上野・松坂屋

田中寅三「船と海」油繪展

三月十一日—二十日 大阪・阪急百貨店

本多貞翠日本畫個展

三月十二日—十五日 福岡・岩田屋

水田硯山南畫展

三月十二日—十六日 名古屋・松坂屋

近作二十六點を陳列。

帝國美術學校卒業制作展

三月十三日、十四日 吉祥寺・同校

風樂社第三回展 (日本畫)

三月十三日、十四日 神戸・朝日會堂

竹内滿佐子洋畫展

三月十三日—十七日 京都・丸物

秋田仁也洋畫個展

三月十三日—十七日 横濱・有隣堂

佐伯祐三遺作展覽會 (洋畫)

三月十三日—二十一日 東京府美術館

十年前三十一歳でパリに客死した佐伯祐三の遺作多數が山本發次郎の熱意に依つて蒐集され、其の畫集の出版を見ることになつたが、之を機會に右蒐集品一〇八點が陳列公開された。作品は第一次巴里時代三五點、目白時代一點、第二次巴里時代六二點で晩年のものが多く、彼の特殊な藝術の全貌を示すに十分であつた。エトリヨ及びヴラマンクに學ぶ所多く、黄土色と褐色を基調とした沈鬱な色彩と、焦燥的な筆觸、歪形等に獨自の情熱を示し、俗氣を離れた純粹の藝術境を深く掘り下げんとした天才的苦悶が認められると共に、斯る傾向の作家の常として其の表現の領域は狭く、主題に就ても殆ど街頭風景に限られて一様な主觀の色に染められてゐる。其の人を牽く力は總ての作品が作者の熱情を露出して、神經の

苦痛を訴へ、一種嚴肅な氣持を誘ふ點にあるであらう。

第七回獨立美術展覽會(洋畫)

三月十三日—四月四日 東京府美術館

洋畫壇の急進的な傾向を代表する同會は既に第七回展を迎へ、官展問題を繞る美術界紛争にも煩はされることなく、純粹な野團體としての立場を守りよくその活動を續けて本年度の展覽會を開いた。同會創立の會員等は各自の技巧に洗練を加へ、一應、其の畫境を完成せしめて居る。フオーヴ的精神は同會發祥以來の建前であつたが近時行はれた日本主義的主張も期待された程の結果を示すに至らず、他方所謂前衛派の諸傾向が會員の一部及一般出品者の間に其の勢力を擡頭して來たことが著しく目立つた。是等「前衛派」の實際に見る作品の大多數は才能と技術とが伴はずして理論倒れとなり、若くは創造性を缺いて盲目的模倣追隨を事とし、低調な怪奇趣味若くは空疎な抽象に陥つて、健全な藝術の軌道を失つてゐる。

概して同會の壁面は洗練を缺いた粗笨なる畫面の横溢で鑑賞は甚しく困難であつた。會員福澤一郎を始め少數の作家は同會の前衛派を指導する觀があり、ジャーナリズムに於ても活動を示しつゝあるが、里見勝藏其他、創立會員の數名は、新傾向と相容れざるものの如く、今次の展覽會終了後別項の如く林重義、會宮一念、伊藤廉、里見勝藏等は相繼いで退會するに至つた。以下多數の出品中から重なる作品を數へれば、自然會員の作を主として記録することとなる。

第一室、中山鐵の「ギリシャ追想」は濃緑の地にバルテノン彫刻を描いたが、畫面が散漫で効果はあがらなかつた。松島一郎は達筆であるが感覺的に鈍く、菊地精二の抽象的な大作ははらわたの如き色彩を用ひて居る。

第二室、高島達四郎の「海女」「海幸」は主題を夢幻的に扱ひ、裝飾的な表現に都會人的な神經を窺はしめる。

「海女」は佳作であらう。林重義の「秋」は題材及び手法

に日本畫に近接した趣向を示し、力作であるが、多く技術的な興味に陥つてゐて、感銘が薄い。外に池田金之助森有材の作品を擧げ得る。

第三室、小島善太郎の「南國の小春日」及「激流」は靜謐な觀照に依つて寫實が明快に整理され、穩かな作風を示してゐた。

第四室、野口彌太郎は「夜のレストラン」其の他に瀟洒な感覺と達筆を示して變らず、妹尾正彦の「雪日」は空想的な表現に未だ深みを缺く。

第五室、鈴木亜夫は「草上畫作」に教養の深さを示し表現も緊密である。虚無的な落莫たる感覺が作品に一種の厚味と深さを與へるが同時に其の藝術的な領域を狭めて居る。田中行一の肉太の輪廓による作品は畫品を缺く。

第六室、海老原喜之助の作品は畫因が多分に工藝的であり、繪畫として本格なものとは見做し難い。川口軌外の色彩構成は模様として見れば美しい。

第七室、兒島善三郎の「溪流」は様式化が裝飾的に傾いて深さを缺いた。停滯氣味である。田中佐一郎の文學的感傷は退屈さを免れず、其他中間冊夫、佐藤英男が注目される。

第八室、第九室、中村節也の二作は色の分置を企て、居るが、低調である。鈴木保徳の「鳥にて」其他は形式、マチエールの美しさを認めしむるが、感動に乏しく、圖案になる恐れがある。

第十室、林武の「野外裸婦」はキュビツクな表現を巧みに用ひ、「フロレンス」其他も筆致の教養を示すが、獨自のものに乏しい。小林和作は「秋山」に於て雅味のある色調とマチエールに依り、油繪の南畫を描いて變らない。

第十一室、清水登之の「踊る水母」のアラベスクな色彩構成は圖案的單調さを出ない。須田國太郎の「書齋」は相變らず代緒を基調としての趣味的作品である。

第十二室、福澤一郎は同會前衛派の代表的な作家であり、畫境に革新の空氣を齎した一人である。超現實的なものに取材し乍ら常識的な均衡を失はず健全であるが、追求に深さを缺く。「二重像」は畫因が不明瞭で感動を誘はれない。同室に故飯田操朗の遺作七點が陳列された。

第十三、十四室、里見勝藏は朱と黄の強烈な色彩を用ひて「少女」「佛像」「富士」等を描き、獨自の境地を示してゐる。然し顏料の生ま生ましが失はれず、額面としての狭苦しさを感ぜしめる點は追求の餘地を残すものであらう。伊藤廉の「生蕃」は輕いマチエールの旨さを味はしめた。他に中尾彰の仕事を擧げる。

撤入總數 三五二一點 入選數 三四三點

陳列總數 四三八點

新會友 水野佳一、森芳雄

協會賞 樋口加六、池田金之助、森有材、中尾彰、佐藤英男、寺田政明、富樫寅平

出品目録(○會員△會友)

狩人	門脇耕	花	△菊地精二
女囚	樁地康行	人	同
母性愛	同	平原	同
廢工場	杉本博	赤坂風景	金晚樹
舟	村本桑二	作品	板坂勇
臨海觀測所	片桐英郎	學校	永井宏
彫像	赤星孝	肉	鹽光
風景	同	ライオン	同
風景	浮島弘行	椰子と貝	○松島一郎
ギリシアの追想	中山鐵	山手の木	同
美しい室内	同	小港風景	同
風景	△三岸節子	月とまどべ	中川光延
室内	同	秋景	照井幹男
人物	同	海	三橋健
海岸	廣谷次郎	岩濱	鎌田知治
室内靜物	吉田宗一	桑上げ	矢崎重信

美術展覽會 (三月)

展望	水原房二郎	静物	鈴木 昌枝	少女と無花果	妹尾 正彦	廢墟	川路ミサコ	巖	村田 東作	少年の日	大野 五郎
トンネル鑿岩	熊木 匡勝	映の誕生	池島勲治郎	幻想	堀之内一誠	庭	内尾 雅惠	丘	佐藤 英男	伊ノ澤の雪	服部 木爾
山百合など	志村 計介	女の	緒方 妙子	雪景	藤崎 眞	砂丘	小原 雄二	廢墟	同	裸婦	齋藤 求
井の頭風景	井上 孟	南國の小春日	○小島善太郎	舟	赤堀 佐兵	作品	葛目 榮	エチユード(静物)	西村健次郎	風景	須永 静策
風景	高橋賢一郎	激流	同	家	同	友情	森 芳雄	慾望の物理	小川原 脩	庭前	横山 精一
雪の樹木	同	芋畑	田中安太郎	風景	狭間 二朗	漂泊	同	牧場	限りなき牲の貢	有海富貴男	字根元 警
沼邊風景	國松のぼる	瀬戸内海風景	内藤 秀頼	養る漁村	石田 英吉	くらげ	同	旅	吉田 一夫	肉屋飾窓	吉田 二郎
化粧	池田金之助	尾道風景	笠井 隆吉	果實など	高畑 正明	洋館	松島 鷹子	門	同	街	木村 孝三
草	同	木	櫻本 友子	騎大風景	神子 義一	雪山	同	雪山	和田傳太郎	貝塚	柿手 春三
海女	○高島達四郎	無花果と落葉	岩月 清	庭	樋口 加六	エスキースB	○川口 軌外	街	黄土A	同	同
海幸	同	海濱	荒井不可志	舟	同	偶感B	同	偶感A	同	同	同
雪景	青木 挺美	春の郊外	中島英砂緒	草上畫作	同	偶感A	同	偶感A	同	同	同
躍動	森 有材	瀧秋景	加納 辰夫	競馬	同	エスキースA	同	風景	同	同	同
ボール	同	植木棚	植木棚	機夫	同	同	同	影	同	同	同
あんこ	藤田 悟	鐵屑	多賀 延夫	人物	辻尾豊三郎	風景	杉尾 利通	母子像	本多 一衛	枯蓮	同
雜木林	鈴木 清	街景	江淵 善江	マスコと心臓等	濱田 重雄	作品	安孫子眞人	椰樹	山下 武夫	花	同
置場	橋山 清治	夜のレストラン	○野口彌太郎	石膏と鯉と野菜	染谷 葵一	花雪	角江 重一	南に現れたる影	酒井 正	窓邊静物	同
榕樹	奈知安太郎	同	同	風景	宮崎 精一	桃咲く頃	關口 誠	人	小石原 勉	溫泉	同
人形芝居より(部屋)	山田千秋	同	同	村	辻 潔	川邊	實本 仙	海	白木 正一	二女	同
漁船	櫻井 政雄	I 肖像像	織田 彩子	ルフトリエ	○田中 行一	海の賞	松崎 眞一	海邊	池野 清	冬枯れの島	同
空場	植田 俊夫	池の中	同	結髪	同	海邊静物	野村 眞一	裸婦	久保 吉文	梁 萬里	同
池の風景	根岸 英二	風景	同	材木と男	橋本 春光	城	野村 眞一	朝霧	三水 公平	同	同
秋	○林 重義	家	新見拱一郎	立樹	同	小坪の濱	高見 寛	老梅	同	同	同
雪の三瓶	石飛 榮	港	高橋 弘二	雜木紅葉	同	男女三人	△中間 册夫	たこつば	同	同	同
青いリボン	小出 三郎	湖の見える風景	森竹 五郎	砂地	佐川 敏子	裸の女	同	小さい港	同	同	同
風景	宮城 四郎	馬のある風景	富原 寅平	女達	同	男二人	同	二人	同	同	同
鳥	安田 謙	西の市	同	美しい季節	寺田 政明	溪流A	同	二人	同	同	同
作業服のある静物	健一	だんだら畑	佐野 健治	街の憂鬱と花束	同	溪流B	同	女と衣裳	同	同	同
市街	守安 一郎	荻の蝶	山田房之介	稲葉	猪俣 太郎	残雪	同	海鳥	同	同	同
東京萬華鏡	諏訪 邦一	花と裸婦	山田 榮二	網	同	松	同	窓	同	同	同
春緑	班目 秀雄	大谷風景	同	家族	松島 正一	フランダーズ古城管野	主介	海濱と網	同	同	同
山上枯木	兒玉 貞平	鳥籠、花、建物	吉村 勇	たそがれの街	森 堯之	ノルマンディー	同	風景	同	同	同
井ノ頭森	山本 衛	○妹尾 正彦	同	練馬	○海老原喜之助	パリの隅(一隅B)	李 龍河	風景	同	同	同
八ヶ岳風景	明石 友次	青空と卓上	同	市	同	國分寺風景	山村 猛猪	風景	同	同	同
畑の風景	齋藤 紅一	雪日	同	馬	同	作品	大町 一三	鹿	同	同	同
荷積み	島田 正次	雀の町	同	同	同	同	同	同	同	同	同

只設(標本室の
一隅)

原田 成大
永井東三郎
○井上長三郎

森の
道化の脚の記念歌幸

山本 祐明
詩

小サナ池
榮榮

板持 龍介
磯部 章示

悔恨
海邊の挿話

加藤 文生
荒木 剛

豹
山岸興三治

卓上電話
山崎 隆夫

風景
繪畫

追想
市村 力
挿花圖

砂取り
ラブリテイ

今井 憲一
石井 國義

海を見た
遠望

紙
坂本 善三

鳥
宮本 三覺

風景
沼 富次郎

太田 亘
沼 富次郎

深野岩太郎
坪内節太郎

街
ドルメン

藤井倉太郎
長尾 照子
一隅

樹間を走る馬
村落

高橋 勉
神田 美一

枯木
カンナ

同
多田 一義

雪
同

同
同

同
同

同
同

雪景
秋の空

明樂光三郎
田邊 富治
生島 覺

水の中
鳥

武智 英一
蘇津 政男

庭
窓

同
中尾 彰

同
同

同
同

同
同

同
同

雪景
雪後

田邊 富治
生島 覺
岡村 芳男

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

船
翔鳥

萬城 信郎
小山田二郎
岩岡 貞美

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

人間形象
山景

牧野 静夫
井澤 元一
水沼 清

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

朝顔と夕顔
貝殼

三崎 六郎
清水 清
都會

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

月夜
夜韻(南洋の印象)

同
同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

風景
殘雪

石原 眞一
古川 盛雄
直村のぼ子

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

花束
壺

古川 陽子
妹尾 正雄
穴居

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

見道水道
同 風景

同
同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

フロレンス
野外探婦

同
同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

婦人像
ヴェニス

同
同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

花
アマリ、ス

同
同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

くた物
豊稔咲く頃

同
同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

森の街
鳩

同
同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

秋山
同

同
同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同

同
同
同

同
同

同
同

同
同

中野安治郎洋畫個展

三月十五日—二十日 名古屋・丸善

春虹會第三回展（日本畫）

三月十五日—二十二日 日本橋・三越

三越主催で京都畫壇の主要作家を描へ毎春東京と大阪とで開催する。出品十三點。全體に手慣れた技術に依る仕上げの綺麗さが見られ、色彩淡く上品らしさを保つてゐるが堂々と迫る物に乏しい。上村松園の「春雪」は力作で雪の描寫もよく、西村五雲の「猿猴」も好評であつた。宇田萩郎の「春蘭」は白描風の洒落たものであるが面白味に缺け、小野竹喬は爽やかな色彩の愛すべき作。竹内栖鳳は會期に遅れ大阪展に「堅魚」を出品した。

出品目録

春光	石崎 光瑤	春雪	上村 松園
猿猴	西村 五雲	春蘭	宇田 萩郎
牡丹	徳岡 神泉	鴛鴦	山口 華楊
竹溪新霽圖	小野 竹喬	ながれ	案本 一洋
江頭微雨	川村 曼舟	池畔春風	榊原 紫峰
春の雨	金島 桂華	遅日	菊池 契月
春宵	中村 大三郎		

京都美術館所蔵品春季展觀

三月十五日—二十五日 大禮記念京都美術館

同館所蔵の繪畫、彫塑、美術工藝品等九十餘點を陳列した。

戸田觀美堂東西大家新作畫展（日本畫）

三月十六日、十七日 東京美術俱樂部

新古典派第二回展（洋、彫）

三月十六日—十八日 銀座・資生堂

金子九平次ほか數名の油繪、彫刻を陳列した。

長谷川利行洋畫作品即賣展

三月十六日—二十日 新宿・天城畫廊

澤田泉山作陶展

三月十六日—二十一日 神戸・大丸

第五回新造型展

三月十六日—二十五日 東京府美術館

昭和九年に元獨立展出品の作家數名により結成された超現實主義繪畫を標榜する同人展である。繪畫の解釋を擴大して、ペン畫、フォトモンタージュ、オブジェ、コラージュ等の手法が多く試みられ、油繪は少數である。何れも獨創に乏しいが、今井滋、瀧口修造合作のデカルコマニ「白の上の千一夜」、瀧口綾子の「フォトデッサン」、島津純一のペン畫等が注意されるものとして挙げられる。他にエルンスト、ダリ、タンギー等の作品の寫眞を陳列した。

瀬戸陶藝協會試作展示會

三月十七日 瀬戸・同業組合階上

矢野橋村日本畫個展

三月十七日、十八日 鳥取・民政黨支部跡

巴里展（洋畫）

三月十七日—十九日 大阪・三角堂

京都繪畫專門學校同美術工藝學校生徒作品展

三月十七日—十九日 大禮記念京都美術館

香田勝太洋畫個展

三月十七日—二十日 銀座・日動畫廊

風景、靜物等油繪二十七點を陳列した。

京都工藝院第一回展

三月十七日—二十一日 大禮記念京都美術館

本年一月京都在住の工藝家が「進歩の名に於て」大同團結して結成した同院の第一回展である。陶器、染織、漆器、金工、木竹等各部會員、準會員二百餘名の出品計三百餘點に上つたが、鑑査の上百九十七點を陳列した。主なる作品として清水六兵衛「誰が袖覗箱」、清水正太郎「紫翠湧盛花器」、伊東翠壺「彩瑣菱花文花瓶」、米澤蘇峯「彩捻文花瓶」、奥村霞城「鸞と鳥衛立」、堂本五三良「草虫隅屏風」、黒井光瑠「極樂鳥紋二枚折」、番浦省吾「草

花圖手箱」、小合友之助「花と貝殻衛立」、皆川月華「描染繡溫室之花社交服」、山鹿清華「手織錦草萌壁掛」等が挙げられる。

授賞（京都府知事賞）「手織錦たちあふひ二曲屏風」中村鵬生（京都市長賞）「オットセイ置物」涌波蘇盛（京都工藝院賞）「乾漆圓魚置物」奥村究果（京都工藝院獎勵賞）「流釉花瓶」長谷川白峰、「玉椿手宮」板倉不朽、「鐵ト銀噴水文飾宮」砂長伸、「手織つれ錦額、丘」前田良三

第十回昭和美術展（洋畫）

三月十七日—二十二日 上野・松坂屋

平井武雄、小林茂、巖康三等の同人展。水彩、油繪等四十餘點陳列。

等廻會洋畫小品展

三月十七日—二十二日 上野・松坂屋

小城基別府風景洋畫個展

三月十八日—三十日 新宿・伊勢丹

京都市立染織試驗場二十周年記念染織展

三月十九日—二十一日 同場

創立二十周年記念の展觀で、同所の製作品を初め本邦各地及外國工藝品の見本、手織と機械織の比較及流行の經過等を説明する參考資料等を展觀した。

木村敏一創作人形及彫塑展

三月十九日—二十一日 神戸・三越

如月會第四回日本畫展

三月十九日—二十一日 京都・大丸

堂本印象の畫塾東丘社の展覽會で出品者十五名、陳列數三十二點、顧問の印象は「京洛十二趣」を出品した。

白御會第二回展（日本畫）

三月十九日—二十一日 大阪・南海高島屋

關西在住の院展系作家の同人展。

山村耕花繪畫展覽會（日本畫）

三月十九日—二十二日 大阪・三越
絹本二曲屏風半双の「深山春」ほか十三點を陳列した。
杉浦非水、翌子繪と歌の合作展

三月十九日—二十三日 日本橋・高島屋
杉浦非水夫妻の日本畫と歌との合作展で、二枚折小屏風の「秋草」を始め絹本横物及半切等三十點、色紙數十點を出品した。

東京高等工藝學校木材工藝別科創作展

三月十九日—二十三日 銀座・三越

鹿島英二蘭繪畫展

三月十九日—二十三日 名古屋・松坂屋

現代五十大家「花」と「裸婦」百題洋畫展

三月十九日—二十五日 大阪長堀・高島屋

第一回偶人社人形展

三月十九日—二十七日 大阪・十合

現代諸作家油畫展

三月十九日—三十日 大阪・松坂屋

第一回鳥取縣工藝展

三月二十日—二十二日 米子・商品陳列所

西洋美術骨董品展

三月二十日—二十三日 神戸畫廊

高藝彫刻會第二回立體圖案展

三月二十日—二十四日 銀座・資生堂

東京高等工藝學校の工藝彫刻部學生の研究展。工藝圖案を土又は石膏を用ひて立體の形に表はした「工藝彫刻品」五十餘點を陳列した。

白濁社第一回洋畫展

三月二十日—二十四日 銀座・青樹社

安藤信哉、玉井力三、星山駿ほか三名の同人展、油繪

二十五點を陳列した。

劉啓祥滯歐作品洋畫展

三月二十日—二十四日 銀座・三昧堂

二科會の新人、滯佛作品十五點を出品。
宇野三吾洋畫展

三月二十日—二十四日 大阪・美術新論社畫廊

四國美術展(日、洋)

三月二十日—四月二日 高知・農業會館、縣公會堂

土陽美術會高知支部主催。

荻青社第一回日本畫展

三月二十一日—二十三日 大阪戎橋・三笠屋

昭和九年竹内栖鳳門下の有志が竹杖會の解散後結成した同會の第一回展である。陳列數約三十點。

東陶會第九回展

三月二十一日—二十五日 日本橋・三越

陳列點數百六十點。顧問板谷波山の花瓶、香爐等六點は卓越した技術を示して美しく、同宮川香山の十點は雅致に乏しい憾がある。其の他十八名の會員が出品した。

白牛社日本畫展

三月二十一日—二十五日 福岡日日講堂

名作花器新作品展觀

三月二十一日—三十日 上野・松坂屋

現代日本華道展開催に際し、陶磁金工の花器が陳列された。富本憲吉の「白磁大壺」、井上良斎の「黄釉花瓶」、津田信夫の「黄銅丸型水盤」其の他香取正彦、高村豊周、豊田勝秋等の出品があつた。

内田武夫、合田小三郎油繪小品展

三月二十一日—三十一日 新宿・喫茶店エルテル

黒田重太郎近作油繪小品展

三月二十一日—三十一日 大阪・阪急百貨店

長坂春雄近作洋畫小品展

三月二十二日—二十六日 名古屋・丸善

福岡縣第三回工藝展

三月二十二日—二十六日 縣産業獎勵館

漫畫突擊隊展

三月二十二日—二十六日 縣産業獎勵館

三月二十三日—二十五日 銀座・日本サロン

藤田嗣治日本畫洋畫展

三月二十三日—二十七日 名古屋・松坂屋

紙本半折及小品五十七點と洋畫十數點を陳列した。

三宅克己水彩畫展

三月二十三日—二十七日 大阪・三角堂

鐵道省美術部洋畫展

三月二十三日—二十八日 萬世橋・鐵道博物館

春季二科美術展

三月二十三日—二十八日 大阪・南海高島屋

東京美術學校卒業製作展

三月二十四日—二十五日 同校

石田久雄遺作展(洋畫)

三月二十四日—二十六日 東京美術學校

野口道方布摺版畫型染作品展

三月二十四日—二十六日 神戸畫廊

三木翠山第一回個展

三月二十四日—二十六日 大阪・學士俱樂部

内田巖油繪個展

三月二十四日—二十七日 銀座・日動畫廊

近作二十數點を陳列、黒と灰色とを基調色とし、靜寂な味を出して居る。「子供の裸群」「母」等佳作であつた。

冬柏院追憶繪と歌の會

三月二十四日—二十七日 日本橋・高島屋

冬柏院故與謝野寬追憶のため、津田青楓、正宗得三郎、石井柏亭、藤島武二等が日本畫を描き、品子夫人が賛をして出品した。

日本アンデパンダン春季展

三月二十四日—三十日 神戸元生絲檢査所

物故十二畫家遺作回顧展

三月二十四日—四月五日 新宿・天城畫廊

天城畫廊主催。森田恆友、青山熊治、村山槐多、三岸好太郎、萬鐵五郎、關根正二、古賀春江等十二名の油繪小品、水彩、素描等約三十點を陳列。

丸山曉霞日本畫個展

三月二十五日—二十七日 日本橋・商工俱樂部

第十五回黑色洋畫展

三月二十五日—二十九日 銀座・ラテン畫廊

水清公子洋畫展

三月二十五日—二十九日 大阪・三越

松田修坪風景畫小品展

三月二十五日—二十九日 大阪・十合

瀬戸新人近作陶器展

三月二十五日—二十九日 名古屋・松坂屋

松坂屋主催。出品者は加藤青山、矢野陶々ほか八名。

旺玄社第五回洋畫展

三月二十五日—四月五日 東京府美術館

牧野虎雄を指導者とする同會の第五回公募展。穩和な習作的作品が多い。顧問牧野虎雄は「仙石原」「秋」「朝顔」の三點を出品した。會員の出品では、青柳喜兵衛の「花々の雰圍氣」及「天翅ける神々」、岩井彌一郎「海」、橋作治郎「わかさぎ釣り」、田澤八甲「北國早春」、馬越耕太郎「雪景」、塚本茂「白馬と少女」等が挙げられる。

總出品數一九八三點(七〇四人)

入選數一〇九點(八五人)

授賞(社友特待)三好俊一(旺玄賞) 梅澤照司(中央賞) 森由太郎(フロレンス賞) 新居廣治(T賞) 嵯原康道、遠藤昇、佐藤末太郎

新樹社展(日本畫)

三月二十六日 京都岡崎・公會堂

大森繪畫自由研究所作品展(洋畫)

三月二十六日—二十八日 同所

六陽會水彩畫展

三月二十六日—二十八日 銀座・日本サロン
西田靜子、市田彌榮子新作油繪展

三月二十六日—二十八日 京都・朝日會館

瀧王樹社第三回洋畫展

三月二十六日—二十九日 神田・東京堂

高木青水還曆記念回顧展(洋畫)

三月二十六日—三十日 銀座・青樹社

明治三十五年より昭和十二年に至る迄の制作、油繪五十三點を展覧した。

能勢龜太郎個展(洋畫)

三月二十六日—三十日 銀座・三味堂

圀工藝第二回展

三月二十六日—三十日 銀座・資生堂

鈴木千久馬洋畫展

三月二十六日—三十日 大阪・美術新論社畫廊

田邊竹雲齋父子花籃展

三月二十六日—三十一日 日本橋・三越

關西の竹工田邊竹雲齋並に小竹雲齋の近作約百點を展覧した。

古野圓次郎追悼展

三月二十七日—二十九日 福岡日日新聞社

西洋骨畫展

三月二十七日—三十日 日本橋・高島屋

新挿繪第一回展

三月二十七日—三十一日 銀座・紀伊國屋

坪内節太郎、三芳悌吉ほか二名の挿繪研究展、三芳悌吉の森鷗外作「舞姫」、徳田秋聲「勳章」の挿繪が面白く見られた。

河合卯之助近作陶器展

三月二十七日—三十一日 京城・三越

曉晷佛畫展

三月二十八日 京都・佛教兒童博物館

小島勇遺作洋畫展

三月二十八日—二十九日 岐阜市公會堂

獨立美術協會會員小品展

三月二十八日—四月一日 銀座・日動畫廊

會員二十四名が四號以下の小品を出品。林重義「秋景」「柘榴」、清水登之「南滿洲」「凌源南門」、小島善太郎「多摩川風景」、野口彌太郎「グレコの家」、鈴木亞夫「裸婦」等、即興的な小品ながら技巧の練達を見せて興味を牽かれた。總數六十二點。

南洋兒童圖畫展(びゆるて主催)

三月二十九日—三十一日 銀座・日本サロン

多摩帝國美術學校圖案科會及本年度卒業生制作品展

三月二十九日—三十一日 日本橋・白木屋

二葉堂第六回現代大家新作畫茶掛展

三月二十九日—三十一日 日本橋區茅場町・清水ビル

戊辰會第八回展(日本畫)

三月二十九日—四月二日 日本橋・三越

川合玉堂門下の戊辰會は、美術界の情勢に鑑み、自主獨往の畫道邁進の爲本年一月其の組織を擴大したが、更生第一回とも云ふべき此の展覽會ではよく其の活動と内容の充實を示し、三十點の出品何れも二曲屏風或は之に相當程度の畫面に努力した作品で、日本畫展に稀に見る活氣に充ちた成績であつた。知名の作家を多く有する此の會の傾向は、傳統的な技術に立つて健全な寫實を基調とするもので、極端な新畫風も見られぬと共に概して中庸を得た清新さを持つて居る。

顧問川合玉堂の二作は何れも努力を示した佳品で、此の會を重からしむると共に今春の收穫に數へらるべきものであつた。「鳥の春」は作者の明快な自然觀と作畫の用意を示すもの、「春立つ御藻」はお漆の一隅を俯瞰して悠揚迫らぬ畫品を成した。之を別としては兒玉希望の

「烏鷺」がさすがに會の中心たるに恥ぢぬ健筆を示した。二曲一双に、片双は雪中の黒鷺を、他は緑の青草地に群る鷺の白さを描いて對照せしめたものである。磯部草丘の「春水」は有りふれた畫材ではあるが巧に裝飾化して色彩感も優れた作であり、松本委水の「雪晴れ」は遠筆の技を示す。山下巖の「山春」は點描風に描いて爽かな感覺の快いものがあつた。人物を描いたものに菊池華秋の「春」、石渡風古の「友を呼ぶ」等があつたが物足らなかつた。別に會員等の合作で京都三十二景が陳列された。

瀬戸陶藝協會展

三月二十九日—四月三日 日本橋・白木屋

第二回綜合人形藝術展

三月二十九日—四月四日 日本橋・白木屋

京都市工業研究所新築記念工研試作展

三月三十日—四月二日 同所

京都市東山五條にあつた同所窯業部を今度同所構内に移轉した記念に同所の試作工藝品、陶磁、金工、漆器等約三百點を展覧した。

第五回東光會大阪展

三月三十日—四月五日 大阪市美術館

四月 月

喜多川玲明作畫展（日本畫）

四月一日、二日 大阪中之島・慶明莊

粉河寺主催諸名家作品展觀

四月一日—三日 大阪・三越

粉河寺御池坊保存會主催。一昨秋風水害を蒙つた粉河寺御池書院の復興を圖るため作家より寄贈を受けた日本畫三十六點、洋畫一點、工藝品十點を展覧した。

山田新一洋畫個展

四月一日—三日 京城・三越
山村耕花繪畫展（日本畫）
四月一日—四日 名古屋・松坂屋

風景花鳥等二十八點を陳列。

龍村平藏還曆記念錦帶展

四月一日—四日 大阪長堀・高島屋

美光會洋畫展

四月一日—五日 神田・東京堂

高間惣七第二回洋畫個展

四月一日—五日 銀座・資生堂

油繪二十一點、圖案的な要素の多い裝飾的作品で、色彩も白を生かした垢抜けのした感覺を示してゐる。「田鵲」は水邊の鳥を描いて色彩華麗、其の他「黃鳥」「眞鴨と海」「中杓鵲」など白の背景を大きくした洒落れたものであつた。

津田青楓蔬菜風景畫卷畫冊展

四月一日—五日 日本橋・高島屋

第四回の日本畫展觀で「山高水長卷」「蔬菜畫冊」「京洛春秋畫冊」等畫卷畫冊六點、小品十餘點を出品。水墨あり、淡彩あり、畫中には自作の詩歌を附してゐる。

塚本茂洋畫個展

四月一日—五日 大阪・美術新論社畫廊

林明善洋畫個展

四月一日—六日 名古屋・丸善

第一美術伸光會第一回洋畫展

四月一日—七日 大森・日本茶苑

龍村平藏新作帶地展

四月一日—七日 日本橋・高島屋

靜澄會作家茶席展

四月一日—七日 日本橋・高島屋

中村大三郎畫藝試作展（日本畫）

四月一日—七日 大阪・松坂屋

中村大三郎は洋裝婦人を描いた「春」を出陳、塾生の出品も力作が多く好評であつた。

美術「都人形」展

四月一日—八日 大阪長堀・高島屋

第十四回春秋會洋畫展

四月一日—十日 大阪・阪急百貨店

關西在住の春陽會系作家十餘名の小品を陳列した。

汎太平洋和博美術展（綜合）

四月一日—三十日 名古屋・縣商工館

名古屋市では恆例の名古屋市美術展を本年は休止し、其の代り汎太平洋和博覽會に於て美術館を開設し、公募に依り、日本畫、洋畫、彫刻、工藝の四部綜合展を開催した。陳列點數、授賞並に審査員氏名は左の通りである。

陳列總數 日本畫一五四點、洋畫一七一點、彫刻九三點、工藝一三七點
一般應募點數 日本畫八九六點、洋畫二三〇〇點、彫刻三九〇點、工藝六七九點
特別出品數 日本畫四三點、洋畫六一點、彫刻四五點、工藝五三點

授賞者 日本畫一五名、洋畫六名、彫刻六名、工藝二名
審査長 正木直彦 第一部審査員 川合玉堂、西山翠

嶂、前田青邨 第二部審査員 藤島武二、安井曾太郎
第三部審査員 建昌大夢、内藤伸 第四部審査員 板谷波山、香取秀真、六角紫水

綠包社第四回洋畫展

四月二日—四日 銀座・紀伊國屋

福田新生油繪近作展

四月二日—五日 銀座・日動畫廊

木村百木日本畫個展

四月二日—六日 日本橋・白木屋

綜合服飾展

四月二日—九日 日本橋・三越

春の青龍社展覽會（日本畫）

四月三日—七日 日本橋・三越

春の青龍社展は同社秋季展入選者を出品資格者とし、其の中から鑑別するもので入選作品二十六點に社人の作八點を加へ、合計三十四點を陳列、全體として充實した努力を見せて一般に好評であつた。演出榮一の「寂光」は百濟觀音を描いて表面的な印象描寫に終り、木村鹿之介の「青眸」は豹皮に白猫を配したもので頗る機智の勝つた作である。佐藤本草の「餌時」は群鳥の動勢に面白い觀察を見せた。川端龍子の「十國峠仰觀」及び「十國峠俯觀」は自然の大きな表現に稍不足を覺える。坂口一草の「薪二題」、加納三樂の「冬日」、小島鼎子の「鯨」、谷口富美枝の「鏡」、山崎豐の「錦鯉」、時田直善の「野飼」、柴田安子の「わかれ」等種々の意味で興味を牽く作品であつた。

青雲賞「寂光」演出榮一、「青眸」木村鹿之介、「餌時」佐藤本草

石井彌一郎滯歐洋畫小品展

四月三日—七日 銀座・森永

東都木彫刻小品展

四月三日—七日 大阪・三越

春虹會第三回展（日本畫）

四月三日—七日 大阪・三越

九名會第二十六回展（日本畫）

四月四日 祇園・八坂俱樂部

魯山人額皿の會

四月四日—六日 日本橋・商工會館

須摩總吉洋畫個展

四月四日—七日 神戸畫廊

宇田萩邨日本畫個展

四月五日、六日 大阪美術俱樂部

土井撰美堂、伏原春芳堂の主催。作品十八點、花鳥畫が主であつた。

西村五雲畫藝展鳥社繪畫展（日本畫）

四月五日—七日 名古屋・松坂屋

山口華楊、前田萩邨、田之口青見等を初め塾員六十餘名の小品を陳列した。

齊白石近作畫展

四月五日—八日 銀座・鳩居堂

唯型第一回展（洋畫）

四月五日—九日 銀座・紀伊國屋

山岑會展（日本畫）

四月六日—九日 大阪・南海高島屋

矢野橋村、北野恆富、菅橋彦の三名が出品した。

鑑山四月試作展（洋畫）

四月六日—十日 神戸・プチギヤラリー

銀光會洋畫展

四月六日—十二日 熊本勸業館

長谷川利行研究作品展

四月六日—二十日 新宿・天城畫廊

新制作派新人四人展

四月六日—二十日 新宿・南海畫廊

立陣社第三回近作洋畫展

四月七日—十一日 銀座・青樹社

會員十三名が各一點づ、出品、流行風に禍されて安易な製作態度の見えることは、前途ある青年作家達として反省されねばならぬ。

島村あき子洋畫個展

四月七日—十一日 大阪・美術新論社畫廊

歐亞古美術展

四月七日—十三日 日本橋・白木屋

神戸の某氏蒐集に依るエヂプト、アッシリア、ギリシ

ア、ローマの彫刻、繪畫、陶器其の他計二百點が陳列された。

美術往來社東西名家新作畫展（日本畫）

四月八日—十一日 新宿・伊勢丹

青山義雄滯佛作品展（洋畫）

四月八日—十二日 大阪・美交社

滯佛作品三十點を陳列。

朝見香城日本畫個展

四月九日—十一日 名古屋・丸善

小品二十餘點を展觀した。

坂内宏觀現代東海道五十三次風景展

四月九日—十二日 銀座・伊東屋

林重義近作洋畫個展

四月九日—十三日 銀座・養生堂

神戸大塚畫廊主催、石原求龍堂後援で油繪十數點を展觀した。つゆ描法に依り平たく描いてゐるが手慣れて美しい。「牡丹」は日本畫風の味があり、裝飾的效果を見せた。

牧野虎雄小品展（洋畫）

四月九日—十三日 銀座・三味堂

兜屋西川武郎主催。五寸四方大の油繪小品十七點を陳列。餘り小品で物足りなさはあるが作者の持味は見られる。

川北露峰日本畫展

四月九日—十三日 名古屋・松坂屋

光と音に因める美術工藝品展

四月九日—十三日 大阪・十合

府、市及商工會議所後援で、大阪府工藝協會青年部員が各種工藝品三百三十餘點を出品した。

西日本朝鮮けてもの展

四月九日—十五日 上野・松坂屋

第十五回春陽會展覽會（洋畫）

四月九日—二十七日 東京府美術館

春陽會は昨年、帝院改組後の畫境に於て在野團體として獨自の立場を守るべく、緊張した態度を以て展覽會を開催し、未曾有の嚴選を斷行して再生の意氣を示したが、本年も同様の方針に依つて良質の作品だけを擇んで陳列した。其の結果所謂餘技的な出品が一掃され、同會の藝術的特質がより明確になつたと共に、會場は一種纏つた單調さに陥り、包容性に乏しい觀があつたのは餘儀ない處であらう。全體に小品主義に傾き、類型化された致養、趣味が著しいのは團體としての老熟を語るものであり、新しい藝術の發展を期し難いが、蓄積された技術致養に基く今後の成長に注目させられる。

第一室、新沼杏一は色彩を平面的に布置して模様風な構成を行ひ、土屋實の諸作は色合の美しさにも拘らず表現の適確を缺き印象が弱い。二見利節の「作業」は茶褐色を基調とし、感覺に特異なものを示して注目された。

第二室、中谷泰の象徴的な畫面は一種の致養を感じしめる。倉田白羊の山村の農夫を主題とした大作「冬野」及び「朝鮮牛」は作者の圓熟した畫境を示す力作で「冬景色」は自然の強い氣魄を傳へて居た。今關啓司は觀照に日本畫的な試みを示して居るが、筆が落着かず、足立源一郎は「春の新高南山」を初め多數の山岳畫を出品、洗練された感覺により通俗さを免れて居る。

第三室、木村莊八は輕い味に得意な作家である。舞臺の小畫「盛綱陣屋」或は「陶靈せり出し」等、對象を掴む呼吸にも、要領のよいマチエールにも、一流の才氣を窺はせる。小林徳三郎の「窓」「窓邊の子供」等は穩かな觀照に依る形式化が行はれてゐる。中川一政の「荒津」は作者の描く日本畫の筆法を油繪に移さんとしたもので畫因が末梢的に傾く危險がないとは云へぬ。小穴隆一の「婦人像」「椿」等は色彩の深みに乏しいが、表現が適確である。

第四室、春陽會賞の木下公男の諸作は、一種内發的な表現意欲を内に藏する點に於て、又色調、マチエールの趣味に於て、中谷泰、遠藤典太、土屋實、福井謙三等の作家と共通するものと言へよう。「道化」「マリオネツト」等觀照と技法の類型化を免れて居らぬが、感覺に異彩がある。此の一群の作家は同會の新進中で積極的な役割を擔ふものとして注目を惹く。伊藤慶之助は觀照が平俗に流れてゐる。水谷清は三部作「印度教洞窟」を出品した。全畫面熱褐色の大作で、色調は甚しく重いが、勞作であり注意されるものであつた。外に「印度童女」が佳作として挙げられる。

第五室、會友に推された原精一は鳥海青兒に似た作風を示してゐるが、未だ明確な個性を缺いてゐる。倉田三郎の「春陽會構圖」其の他は達筆で、技巧的に無難であつた。

第六室、加山四郎は主に靜物を描いて造型的な精進を示して居る。鳥海青兒の風景、人物等の九點、常の如く暗線を基調とし、強い盛上を用ひて居る。其の描寫は一種情熱的な單純化を想はせるが、寧ろ主眼はマチエールに對する感覺的な享樂に傾いたものであらう。國盛義篤田中善之助は不振である。外に福井謙三の「讀書」を挙げる。

第七室は中川一政、石井鶴三、小杉放庵等の日本畫を主として陳列した。石井鶴三の紙本六曲半双の「常田獅子舞之圖」は踊る群像の動勢を巧みに捉へ、筆致、傳彩に獨自の枯淡な味を示した。洋畫とも日本畫とも異なる作者獨特の毛筆技巧である。小杉放庵の「椿」は二曲半双の紙本屏風で、椿の下に猫を配し、色暖く、裝飾的な構圖、描線に洋畫的感覚を窺はせる。外に油彩に依る畫稿「二荒古譚」を出した。其の他、中川一政の二曲半双の彩畫「一茶小屏風」が出陳された。

第八室、小栗哲郎は「田園夕暮」等に質朴な觀照を示

して變らず、森田勝の滯歐作品は感覺が明快である。

第九、十室、遠藤典太の「雨後」「池畔」等自然の寂寞な詩情を捉へ、色調、マチエールに味がある。たゞ繪畫的な野心を持つた追求が足らぬ。若山爲三は發展を示さない。横堀角次郎の諸作は色彩の美しさにも拘らず畫面の調子を失つてゐた。

擴入總數 一八六〇點

入選數 一一一點

春陽會賞 木下公男、柴田恕夫
會友推薦 原精一、新沼杏一

出品目錄 (○會員△會友)

讀書	高木 勇次	茶房	角南 松生
切斷倉庫街所見	同	土しづか	三邇不士男
トイレット	同	窓ながめ	同
外景	田川 勳次	アトリエにて	中谷 泰
内廊	同	裸婦	同
雨氣	同	月夜	同
讀書	新沼 杏一	むすめ	同
緋ダリヤ	同	森の川	豐泉 惠三
聽樂	同	相模の川	同
冬の夜	同	婦人像	同
南瓜	同	朝鮮牛	○倉田 白羊
雪景	同	冬野	同
靜物	野村 千春	冬景色	同
鏡	同	かけ稻	同
バスケットボー	同	少女	久原 重雄
土屋 實	同	伊豆の春	○今關 啓司
海濱	同	晩秋薄日	同
踊り	同	春山	同
花	同	海景	同
淡水港	同	露巻とヤボラ	○足立源一郎
八百友商店	同	春の新高南山	同
椿	二見 利節	苔菜主連峰	同
作業(S)	同	臺北の娘	同
作業(F)	同	新高山主峰	同
戰	角南 松生		

美術展覽會 (四月)

南湖大山の朝	○足立源一郎	早春の山間寺院	石黒平三郎	女ふたり	吉川 清	常田獅子舞之圖	○石井 鶴三	鑿器持つA子	兼平 英示	海岸の村	魚津 良吉
大鵜尖山	同	むつとさば	伊川 慶治	女の顔	同	(毛筆傳彩六曲)〇半双	同	巴里クルニの	石井彌一郎	少女讀書	○若山 爲三
新高山	同	コ、ナツビーチ	木下 公男	静物花	柴田 恕夫	椿(水墨)	〇小杉 放庵	母子	松本 茂	少年讀書	同
次高山の北端	同	遠望	同	静物野菜	同	二荒古譚(稿)(油)同	同	母子	同	コンクルード	同
T六人の像	山田 岑吉	〇君像	同	椅子に寄る女	同	新緑雨後(水墨)〇今關 啓司	同	母子	同	廊内	〇橋坂角次郎
T畫伯の像	同	K氏像	同	静物果物	同	静物	前田藤四郎	母子	同	カヌー	同
顯靈せり出し	同	道化	同	柘榴と栗	同	蝶	同	牛と斷崖	同	同	同
淺草元旦	〇木村 莊八	バナ、林	同	枯花	吉田 達磨	島の娘	同	裸婦	佐藤 昌胤	同	同
盛綱陣屋(1)	同	マリブネット	同	南瓜と柿籠	同	菜魚	藤森 静雄	ヨシコちゃん	山川 清	小笠原風景A	同
盛綱陣屋(2)	同	貝殼と海	田邊 謙輔	海	同	夏の花壇	琴塚 英一	裸婦	松永浩二郎	小笠原風景B	同
夜の宿	同	白布と果實	△伊藤慶之助	面のある静物	△岩田榮之助	溫室	田中壽太郎	標婦	佐藤 篤郎	ベチニヤ	同
窓邊の子供	同	花と女	同	ナチュールモル	△加山 四郎	踊り子	同	ト	岩下富美子	海邊	堀内 唯生
風景	〇小林徳三郎	黒衣婦人	同	松林	同	道化の眼	南屋 晋彦	ますみさん	同	早川 芳彦	佐甲 久芳
庭の隅	同	露臺に立つ男	同	静物	同	ブリエテ	△和田 歳一	椅子に倚る女	同	高橋貞一郎	大久保 泰
窓	同	蓮池	本莊 赴	讀書	同	水門	同	童子像	同	藤野 龍	洪瑞 麟
静物	同	葱坊主	同	老嬢	同	松野村	△小栗 哲郎	常久風景	同	藤野 龍	秋口 保波
鷺津	〇中川 一政	作(右側エレフ	同	ボンネット	同	田園夕暮	同	夕暮れ(上海)	△上野 春香	校庭	大森 滋
平井風景	中田 政夫	シバ・ダンス)	〇水谷 清	南國早春	〇田中善之助	久野	同	窓の外	同	森田 博	△鬼塚 金華
風景	〇小穴 隆一	印度教洞窟三部	同	朝顔	同	樹上姉弟圖	宮脇 晴	太れるアンフロ	同	山田 義夫	長田 三郎
婦人像	同	作(中央エロフ	同	厦門港	同	瀧に遊ぶ	同	魚籠師の像	同	室内裸婦	山田睦三郎
椿	同	サ部分)	同	鳥	同	朝の海を見る	同	静物	同	水吞場	北野 萬平
鯨	同	印度教洞窟三部	同	裸體	佐藤 春夫	少女	同	雨後	同	横尾 安太	△大澤鉦一郎
静物	同	作(左側エレフ	同	石橋のある風景	〇鳥海 青兒	少女立像	三木朋太郎	池畔	同	橋尾 安太	帽子
鰯船	同	マ)	同	南蔵山川港	同	マカオにて	手塚 雄敏	山ふところ	同	同	椅子に倚る
陶土の山	△川端彌之助	ベナレス・ガン	同	裸女	同	セントラル寺院	△楊 佐三郎	朝の陽ざし	同	同	小豆島早春
店頭	同	ジス	同	海の見える風景	同	スベイン婦人	△森田 勝	地階のレストラン	同	同	△土屋 義郎
動物園	同	印度童女	同	セリスト(A)	同	立てる裸婦	同	日本畫會昭和十二年展 四月九日—三十日 東京府美術館 同人、會友、顧問の外一般入選者の作品を併せて百四十三點を陳列した。入選作の中には思ひ切つて洋畫に近いものが見え、殊にそれ等に授賞されてゐることが注意を牽いた。丸橋進吾の「閑日」はわざとらしきがあるが効果的な新技巧を見せ、井波良則の「建設譜」は鐵			
汽車	同	シユミーズの女	同	風景	同	踊子	同				
夏祭即興(2)	△齋藤清二郎	帽子の裸婦	同	夏の風景	同	花東	同				
夏祭即興(1)	同	野外二人	同	セリスト(B)	同	秋の小路	同				
人形	石川 武彦	釜無川	〇倉田 三郎	桃	〇國盛 義篤	裸婦	同				
臺灣の家	同	静物	同	海	同	花東	同				
切通	△眞田 久吉	相模川	同	演	同	秋の小路	同				
娘	大久保圭子	天草	同	網	同	ヴァニユ・バリ	同				
憩ふ女	同	春陽會構圖	同	花	同	エグリーズ	同				
ハンモックに寝る子供	原田 武男	風景	同	(水雲二曲)〇中川 一政	同	兼平 英示	同				

骨の建築場を描いて洋畫的であるが部分に捉はれて説明圖となつた。藤田隆治の「工場風景」は洋畫の悪い影響が見える。小出最明の「鯉」は色調よく落着いた作。顧問荒木十畝の「溪間」は紙本に瀧と石楠花に岩角の鳥を配しさすがによく纏められてゐた。

(中橋賞) 「工場風景」 藤田隆治

(日本畫會賞) 「店魚」 濱倉清光、「閑日」 丸橋進吾、「建設譜」 井波良則

(佳作) 岡世紀、杉浦千秋、養父清直、長谷川勇作

新世紀美術家同盟第一回展(洋畫)

四月十日—十四日 銀座・紀伊國屋

戊辰會展(日本畫)

四月十日—十四日 大阪・三越

彩聖會バステル畫展

四月十日—十四日 大阪・ガスビル

高木古泉鯉畫個人展(日本畫)

四月十日—十七日 上野・松坂屋

名匠作人形展

四月十日—十七日 上野・松坂屋

第十一回全關西洋畫展

四月十日—十八日 大阪市立美術館

大阪朝日新聞社後援。關西の二科系作家が組織する公募展。應募作品二千二百三十六點、入選二百二十六點、會員作品三十五點、無鑑査出品二十九點、合計二百九十九點を陳列した。

宇田萩都個展

四月十一日 京都美術俱樂部

甲斐虎山日本畫作品展

四月十一日 京都・兒童博物館

武内鶴之助バステル近作展

四月十一日—十四日 銀座・日動畫廊

秋田美術第九回展(綜合)

四月十一日—十五日 神田・東京堂
秋田縣出身の美術家に依つて組織される。福田豐四郎、田口省吾、渡邊浩三等が出品した。日本畫三十四點、洋畫四十二點、彫刻六點、工藝十點。

國畫院同人作品展覽會(日本畫)

四月十一日—十六日 麹町區大手町・永樂俱樂部

昭和十年秋松岡映丘を盟主として結成した國畫院が第一回展を開き、同人十一名の作品を發表した。何れも力量に應じた努力を示し六曲一雙の大作も數點あつて、其の意味では充實した展覧であつた。傳統的な技法を守つて現代の藝術を作ることは難しく、古典的教養を重んずる此の會は敢て之に面して居るだけに、努力に比例して成功の酬いられ難いのも已むを得ぬであらう。

松岡映丘の「矢表」は屋島の戦に於ける繼信を主題とし、六曲一雙濃彩の力作で畫面の十分な用意と技術とを示したが、生氣の躍動を缺いたことは物足らぬ。「後鳥羽院と神崎の遊女達」は作者の特質を示した好小品であつた。穴山勝堂の「激湍」は奔流を線描で描いたが描線繁縷過ぎて水の質の表現不足し、服部有恆の「叡山に於ける護良親王」は樹木と人物との不調和に難が見られた。吉村忠夫の「朝勤」は細緻な技巧を盡した美しさを見せた。花卉を描いた吉田秋光の「淺春新秋」は無難な作、高木保之助の金地六曲の「燎爛の四季」は品位に乏しい。長谷川路可の「トレド」に於ける映丘先生像」は現代畫として此の會に於ける異色ある作品であつた。

出品目録

矢表 六曲一雙	松岡 映丘	冬の日子 二曲半雙	狩野 光雅
後鳥羽院と神崎の遊女達	同 人	淺春新秋 二曲一雙	吉田 秋光
聖僧日蓮(繪巻物一部)	岩田 正巳	朝顔	同 人
叡山に於ける護良親王 二曲半雙	服部 有恆	朝勤	吉村 忠夫
トレドに於ける映丘先生像	長谷川路可	燎爛の四季 六曲一雙	高木保之助

影向 小村 雪俗 雨後 遠藤 敦三
おせん三題挿畫 同 人 激湍六曲一雙 穴山 勝堂
江戸役者三題同 同 人

第十二回表裝美術展

四月十一日—二十日 東京府美術館

同人會主催、東西諸家の作品百三十點を陳列、出品者は同人、會友三十七名。

授賞(佳作賞) 松林良夫、加瀬清松(獎勵賞) 鈴木崔之、齋藤藤太郎、立岡清次郎、新井國吉、島田龜四郎、小野崎元治、善利良太郎

宮本三郎近作油繪小品展

四月十一日—二十日 大阪・阪急百貨店

國畫會第十二回展覽會(洋、版、彫、工)

四月十一日—二十七日 東京府美術館

新時代を創り出さうとする潑刺たる意氣込や、新人の野心的大作などは全く見られず、良い意味では時代の流行には無關心で洗練された藝術境を樂しまうと云ふ、此の會の特色が現はれてゐるとも云へるが、それにしては質の上で優れた作品が少く、概して無氣力な趣味的製作が多數を占めることは、主要美術團體の一として生彩の乏しい寂寥さを感じさせる。製作意欲と創造力の貧困さは、田園情趣的な風景寫生の類が大多數を占めてゐることによつても見られる所である。

繪畫部第一室では土田文雄の諸作が優れ、淡々として滯滞なき描寫に棄て難き滋味を示した。「初秋」「秋山」等何れも自然に親しんでゐる。授賞された中村茂好はヴァン・ゴッグの筆致を模してゐるが感覺は平凡である。福井敬一は濃厚な色彩で平板化した描寫に裝飾的效果を見せ、「午後」は女を描いて面白い作であつた。

第二室、宮田重雄の風景諸作には安井曾太郎の感化が見え、其の點を難する譯ではないが、闊達明快であると共に藝術的な潤ひが缺けることを遺憾とする。此の室で青山義雄の諸作が異彩を放つた。何れも小品であるが色

彩家として特異な質と習練の技を示し、「櫻島」の大きな點描の空も美しく、「夕陽を浴びた櫻島」の思ひ切つた濃藍の海も効果がある。仰木茂の二作は力作であるが色が汚れて清澄な雪の質感を失つた。庫田爰は特色ある澄んだ自然觀照を示し、「松小品」は佳い。

第三室、柏木俊一、山村誠など共通な作風に安住し、椿貞雄は異常な執拗さで「黄富士」「赤富士」の大作に特殊な表現を試みたが、通常の感覺には受け入れられぬものである。河野通勢の趣味の勝つた作は色彩明るく、裝飾的に扱はれてゐるが、「風景」は成功せず、「鹿鳴館時代娘」の方が面白い。第四室に清水多嘉示、宮坂勝、別府貫一郎等の諸作があるが概ね振はず、大森啓助が特色ある手慣れた描法を示すが低調を免れない。

第六室、梅原龍三郎は「霧島」の同じ場所を朝夕に描き分けた。自然の美しさを素直に受け入れた静寂な畫境を示し、詩情にも富む。「噴煙」は極端なつゆ描きの面白さを見せたものであつた。佐藤哲三はセピア調に或は素描に特殊な人物表現を試みてゐるが深さに缺ける。辻愛造の風景諸作は梅原の感化を示し、落着いた美しい畫面である。藤田太郎の諸作は圖案的効果の面白さを見せた。

版畫は工藝と共に此の會の大きな特色となつてゐるが、夫々に個性的な味を持つ作品が並べられて、鑑賞を樂しませる。橋本興家の「城」は大きな調子ですつきりした表現を見せ、佐々木孔の「夏の花」は朝顔を黒白調で現はす。平塚運一の大作「内金剛山」等の三點いづれも黒白調を試みて、版畫の特質をよく生かした頗る効果のよいものであつた。授賞された畦地梅太郎の風景諸作は色彩穩かで美しい。棟方志功の「曼陀羅譚・そらうみのたへ版畫冊」は大作で拓本に依り、特異の表現を示すが疎大の觀を免れない。川西英は單純な美しい色と黒とを巧に用ひ、「室内の静物」は赤と黒といふし金の陪調

を見せて面白く、ブノワの石版も個性的な仕事を示して注意を率いた。

工藝には陶磁、染織が多く、金工、漆器もあるが取り立てて擧げる作品に乏しい。概して服飾、装身具、日用小器具の類で、理論に走るものや技巧誇示のものが見えぬことは親しみ易い點であらう。富本憲吉は白磁、染附、色繪など種々の作品を出してよく努力を見せた。九谷研究はよい成果を生んでゐる。奥村博史の指環の仕事も特色を持つものである。

彫刻では山内壯夫の「都市札幌の象徴」は面白い試みを示し、明田川孝の「雪崩遺難碑」は地方色を出すと共に彫刻的な組立もよい。本郷新の「牧歌」にも發展の期待されるものがある。概して此の會の彫刻には形式上一種の生硬さが見えて、それが内容を暗示するよりも萎縮させる傾に在ることは省みられてよいであらう。

尙同會では今回規則を改めて會員會友の制を廢し、一様に同人とすることとなつた。

繪畫 版畫 彫刻 工藝 計

搬入數	一五八三	二二五	二八〇	二七〇	二三五八					
入選數	一〇七	四四	三三	九五	二七九					
陳列數	二〇〇	五三	四七一	一一七	四一七					
特別陳列	一〇	一	一		一二					
同人推薦(繪畫部)	庫田爰、大淵武雄、藤田太郎(版畫部)	ブノワ(彫刻部)	明田川孝、柳原義造	授賞 國畫獎學賞(繪畫部)	中村茂好、杉本健吉(版畫部)	畦地梅太郎(彫刻部)	佐藤忠良(工藝部)	北出塔次郎、褒狀(繪畫部)	福井敬一、内堀勉、小林邦報(彫刻部)	瀧一夫、船越保武

出品目録(○會員、△會友)

繪畫	ヴァキナスの誕生	△長谷川春子	淺間風景	和田 正一
	椅子による女	根岸 文雄	踊りのコスチュム	橋山豊次郎
靜物	△中村 博	友人	濱ノ山ノ手	中村 茂好

半月橋	△立石 鐵臣	椿咲く村(一)	山下 品藏
來青閣	同	山家	同
廻廊(林本源庭園)	同	園庭	岩崎 藍治
海の見える靜物	三浦 文男	ボナベ島風景	太田 壽
縫ひもの	△益田 義信	キャンピング	杉本 健吉
靜物	同	雪溪	同
窓ぎわ	同	パチャマの子供	同
庭	同	アマリス、ス	○青山 義雄
午後	福井 敬一	櫻島	同
卓上	同	鹿兒嶋風景(一)	同
佐渡尖角灣	遠藤 君雄	夕陽を浴びた櫻島	同
靜物	土田 文雄	鹿兒嶋風景(二)	同
初秋	同	池邊の秋	今井 仁之
腰かけた女	同	帽子をかぶる男	小林 邦報
秋山	同	靜物	同
枯遠	宮地 一路	朝顔	黒田 繁成
秋晴の町	宮本敬之助	婦人像	○眞垣 武勝
鹿子木夫人	ブノワ	春の窓	同
セニョーラの部屋	三雲祥之助	婦人像	同
母子像	同	銀座裏の殘雪	元田 龍起
モレーにて	大淵 武夫	積雪	同
通りの朝(巴里)	同	赤倉	同
畫室の一隅	同	松	同
ヴァーンプの道	同	松小品	庫田 爰
靴屋	同	朝顔	同
赤い魚	大森 茂樹	南豆の春	大久保 泰
桐の木	東 政雄	灣口初秋	△山村 誠
座像習作	藤田 助光	湖畔の丘	同
花	辻 文雄	黒猫	同
少女	宮田 重雄	菜の花	小泉 清保
日蓮崎	同	アンナビーチ風景	伊藤 房子
堂ヶ島の朝	同	マネキン	同
裸女	大貫 悌二	朝	同
山手の朝	關田 政雄	サボテンの靜物	小田島十郎
平野	黒川 健夫	初夏の朝	○柏木 俊一
八丈島海岸	○山下 品藏	一碧湖群	同
椿咲く村(二)	同	安良里の朝	同

赤富士	柏木 俊一	南苑	△久保 守	窓邊靜物(C)	金井康次郎	歸漁	辻 愛造	乾魚	泉波 千鳴	白鶴すだて花籃	飯塚 薫石
小さな部落	井出 重好	婦人像	同	窓邊靜物(B)	同	孔雀の見える窓	藤田 太郎	小泊	下澤水鉢郎	隅切	平沼 淳
臨南寺	富田 民治	風景	同	齒科治療室	前谷 忠二	鳥賊とぼうぼう	同	天主堂のある風景	松崎 卯一	燕紋大皿	森 一正
煙突のある風景	黄憲 永	樹間早春	白壁 康	赤い椅子と机	依岡 恒喜	金魚鉢	同	五岳雪景	同	染附布子大皿	○富本 憲吉
黄富士	棒 貞雄	棒	林 美榮子	アイスクリーム	同	野方の春	納富 進	新緑	同	染付華文鉢	加藤 鏡一
赤富士	同	公園の秋	△池邊 貞喜	雪の郊外	竹田 信夫	落日	加藤 作三	室内の静物	同	同	同
風景	渡邊 武	連山閣	同	梅林	弘田 尙光	ナノ花	村岡 平藏	浴衣	同	同	同
人物	村上多彌子	高麗山雪	同	庭	同	版 畫	齊藤 清	神社裏	神衣	同	同
酒樽のある風景	菅藤 霞仙	クロツケ	△大森 啓助	溪流新緑	同	郷の人	同	黒眼鏡の女	子を抱いてゐる	同	同
ボーイ	瀧澤 淳	本屋	同	開門	同	子供座像	同	橋本 興家	同	同	同
海邊の一群	松本 滿史	休息	同	平壤牡丹臺	○平塚 運一	城	同	佐々木 孔	同	同	同
風景	○河野 通勢	少女	同	内金剛山長安寺	同	夏の花	同	關野進一郎	同	同	同
鹿鳴館時代娘	同	草花	同	松林より湖を望む林	濱田 直記	船	霧島山早春	黒木 貞雄	石原 壽市	花	黄昏
六甲山麓夏景	早見 晴夫	静日	同	風景	同	青年	霧島山早春	黒木 貞雄	石原 壽市	花	黄昏
家族圖	高瀬 捷三	噴水	同	風景	同	子供	青年	黒木 貞雄	石原 壽市	花	黄昏
嚴冬帝大	鈴木 正二	保土ヶ谷風景	同	△武者小路實篤	同	子供	青年	黒木 貞雄	石原 壽市	花	黄昏
初夏帝大	同	裸婦	同	街外れ	岩島 勉	奉迎	同	同	同	同	同
花とかひがら草	佐久間淑子	婦人像	同	噴煙	同	鹽焼く家	同	同	同	同	同
バラ	藤代 聰勝	自像	同	霧嶋(一)	同	鹽焼く家	同	同	同	同	同
山	○清水多嘉示	水仙	鈴木 清	霧嶋(二)	同	内金剛山	同	同	同	同	同
溪流	同	日本橋風景	佐々木照子	新緑	同	南大門	同	同	同	同	同
花	△佐藤 豊吾	神田明神	野村 睦雄	△仰木ゲルト	信	日蓮岬	同	同	同	同	同
常枯れの池隅	川口 精六	水糟	佐々 美邦	冬富士	同	八幡濱港	同	同	同	同	同
生簀	徳田 信保	土佐ホテル	旭 五良	ボトリー	同	山	同	同	同	同	同
杉木立	△山田 正	城址	西山 闇二	バラとカーネー	同	電車の中	同	同	同	同	同
森の朝	同	裸體デッサンA	南部 一信	運根	石井 照	習作室	同	同	同	同	同
風景	同	裸體デッサンB	東 克巳	梅雨雲	△大谷 房吉	花	同	同	同	同	同
熱河風景(一)	同	夏の踏切り(デ	同	初夏の池邊	同	塔影	同	同	同	同	同
熱河風景(二)	同	ツサン	同	早春水邊	同	人浴	同	同	同	同	同
裸體	同	白い壁	同	晩秋の甲山	同	埋立地風景	同	同	同	同	同
熱河風景(三)	同	杏花の里	吉田 勇	松林	同	曼陀羅譜・そら	同	同	同	同	同
木曾川	同	桑畑	太田 芳朗	農婦	同	曼陀羅譜・そら	同	同	同	同	同
伊吹山の春雪(一)	○別府貫一郎	浅間山	△村上 巖	母子	同	曼陀羅譜・そら	同	同	同	同	同
伊吹山の春雪(二)	同	夏の河原	同	農婦の顔	同	風景	同	同	同	同	同
伊吹山の春雪(三)	同	庭の一隅	同	家島	同	風景	同	同	同	同	同
犬山	同	庭の一隅	同	家島	同	風景	同	同	同	同	同
葵蝶	同	庭の一隅	同	家島	同	風景	同	同	同	同	同
松林	同	庭の一隅	同	家島	同	風景	同	同	同	同	同

美術展覽會 (四月)

染附飾箱	○富本 憲吉	重ね溜塗ボンボ	石村 春莊	染附香爐二個	富本 憲吉
梅模様八角中皿	森 一正	乾漆布目鉢	山永 光市	色繪香爐	同
色繪飾箱	○富本 憲吉	硯箱	細谷辰一郎	蕨果文角鉢	北出塔次郎
蚊模様小皿五客	中川 泰藏	箱	増田 三男	筆硯用具 (四點一組)	並木十四郎
白磁大皿	○富本 憲吉	美籠塗菓子器	増田 三男	彫 刻	
笹模様香盒	中川 泰藏	硯茶具	増田 三男	女 首	武内 收太
色繪蘭五彩箱	○富本 憲吉	美籠塗菓子器	平沼 澤	老	尾崎 貞二
型染小卓布	野口 道方	エマイユ帶止A	平沼 澤	或る性格の女	眞鍋 忠行
指環A B C D E	野口 道方	エマイユ帶止A	日根野作三	やせた女性	同
F	○奥村 博史	エマイユ煙草箱	同	女 首	水船 六洲
帶留A B C	同	エマイユ煙草箱	同	倚りかゝれる女	宮島 久七
佐賀錦ハンドバ	吉井 徳子	(漆)	同	首習作	武 次郎
ツク	同	あぢさゐ指輪	織田 實一	提琴家千葉氏像△本郷	新
ハンドバツグ	△仰木ゲルト	夕顔の花帶留	古山 英司	翁像	同
綴織ハンドバツ	鈴木 周子	銀製腕環(B)	河野 健美	座像(1)	杉本幸一郎
綴織ハンドバツ	同	銀製腕環(A)	同	座像(2)	同
綴織ハンドバツ	同	銀製腕環(C)	同	女 首	瀧 一夫
綴織ハンドバツ	同	十二ヶ月	秋山 正	五輪旗を繋ぐ	○清水多嘉示
綴織ハンドバツ	同	茶碗(九號)	又木 享三	聖火	同
綴織ハンドバツ	同	茶碗(一號)	同	婦人胸像	池上 礎
綴織ハンドバツ	同	茶碗(二號)	同	裸習作	佐藤 忠良
綴織ハンドバツ	同	茶碗(七號)	同	首(R)	同
綴織ハンドバツ	同	茶碗(八號)	同	首(S)	同
漆畫百日草ペン皿	夜潮	水指	同	習作	舟越 保武
銀打出帶止(A)	内藤 四郎	給刷毛目水滴	鹿島吉十郎	立女	須賀 東三
銀打出帶止(C)	同	茶碗(四號)	又木 享三	自刻像	芥川 永
銀打出帶止	同	黒釉鐵鏽花水滴	鹿島吉十郎	△子の首	同
煙草具漆盆付	並木十四郎	白瓷筆筒	福田力三郎	ベイトーヴエン	木元 斌
書器構成	△恩地孝四郎	銀繪茶碗	鹿島吉十郎	首	山本 常市
赤繪蓋物	久松 昌子	粉引茶碗	中川 泰藏	少女の首	能美八重夫
琥珀袖蓋物	同	刷毛目茶碗(A)	喜多村作太郎	少女の首	清水 要
金欄手蓋物	同	水邊模様深向付	森 一正	少女の首	松野 亨
金欄手蓋物	同	家型筆架	齋藤 三郎	女の首	徳力牧之助
金欄手蓋物(一)	同	家型水滴	同	試作	川口 信彦
同(二)	同	家型六角水滴	同	習作裸婦	同
盆	細谷辰一郎	土鍋刷毛目菓	○富本 憲吉	習作裸婦	同
朱塗小箱	石村 春莊	子器	○富本 憲吉	習作裸婦	同

津川清平近作油繪展	四月十二日—十六日	神戸・ブチギヤラリ
第一回日本挿畫美術展	四月十三日—十五日	銀座・伊東屋
東京學藝通信社主催。挿繪畫家として知名な人々の畫稿、小品等二百餘點を陳列した。		
北陸三縣出身作家日本畫展	四月十三日—十五日	金澤・宮市大丸
昭和工藝美術第四回展	四月十三日—十七日	日本橋・高島屋
高島屋が毎春開く金工、漆、陶器の展覽會で、香取正彦、山本自燭、宮之原謙等文展工藝部の中堅十五名が出品した。		
御厨純一洋畫個展	四月十三日—十七日	大阪・美交社
滯佛作品三十餘點を展觀した。		
近藤光紀洋畫展	四月十三日—十七日	大阪・三角堂
現代大家新作展(日本畫)	四月十三日—十八日	神戸・大丸
杉田三郎遺作展(洋畫)	四月十四日—十六日	銀座・日本サロン
第七回獨立美術展	四月十四日—十八日	大禮記念京都美術館
諸作家洋畫展	四月十四日—十九日	大阪・美術新論社畫廊
第六回美工圖案院研究作品發表會	四月十五日	京都美術館
染織工藝圖案競技展	四月十五日、十六日	大禮記念京都美術館
石川竹邨日本畫個展	四月十五日、十六日	新愛知新聞社講堂

第五回各人社美術展(綜合)

四月十五日—十八日 大禮記念京都美術館
京都市社會教育課後援。會員十一名、日本畫、洋畫、工藝、彫塑の綜合展で、陳列數六十點。昭和十一年に逝去せる彫塑家中村三郎の遺作五點を陳列した。

第三回びゆるて洋畫展

四月十五日—十九日 銀座・三味堂

六色會工藝展

四月十五日—十九日 銀座・資生堂

板谷梅樹、各務鑽三、香取正彦、田村泰二、吉田醇一郎、海野建夫、宮之原謙等が組織する會の小品展。

第二回日本美術院々友展(日本畫)

四月十五日—二十日 銀座・松坂屋

日本美術院々友のみの會で、出品者五十三名、院友俱樂部結成後の展覽會である爲一般の注意を惹いたが、會場の空氣は不活潑で佳作に乏しく不評であつた。

篝火工房第二回彫刻工藝小品展

四月十五日—二十一日 銀座・ラスキン文庫

第三回九元社彫刻展

四月十六日—十八日 銀座・伊東屋

岡山洋畫研究會第十三回洋畫展

四月十六日—十八日 岡山・商工獎勵館

岩井尊人畫展

四月十六日—二十日 日本橋・高島屋

木村敏一造型人形及彫塑小品展

四月十六日—二十日 銀座・ブリュッケ

光樹會第一回展(日本畫)

四月十六日—二十日 横濱・有隣堂

仲田菊代洋畫展

四月十六日—二十一日 大阪・中村屋

日本彫會第五回展

四月十六日—二十五日 東京府美術館

本彫を専門とする唯一の團體として其の活動は興味を持たれるが、今次の展覽會は陳列四十八點の總てが小ぢんまりした小品のみで、趣味的乃至裝飾的置物の範圍に止まるものが多く、新時代に對する創作的活動としては物足らぬ觀が深かつた。

内藤伸の「辨財天」、佐々木大樹の「梅妃」、中野桂樹の「春庭」、及び三藏法師を刻んだ「報土」等或は繪畫的或は工藝的要素が多く勝ち、三木宗策の「白牡丹」「紅牡丹」には傳統的な刀技の冴えを見るが、内容を伴はぬ。山脇敏男の「水」は動勢を捉へて面白く、橋本高昇の「いぬ」は力の表現に成功し、大島陶藏の「おどり」は味を主とした作であつた。その他阿井瑞岑の「釋迦」、澤田晴廣の「薰風」、井口喜夫の「逆風」「空」、山口四郎の「清粧」、西田明史の「蹴たはされたケハヤ」、水島弘一の「丘」等種々の意味で注意を牽いた。

藤田剛治個展

四月十七日、十八日 京城・三中井

京谷金介新作日本畫展

四月十七日、十八日 有樂町・日本閣

主線美術協會小品展(洋、彫)

四月十七日—二十一日 銀座・青樹社

繪畫部會員二十一名、及び彫刻部會員十四名が、各自小品一、二點づつを出陳した。

合同ポスター展

四月十七日—二十一日 銀座・日本サロン

構圖社、中央圖案家集團、東京印刷美術家集團の出品。

比叡山開創記念法會根本中堂御寶前獻畫色紙展觀

四月十七日—二十九日 京都・大丸

日本美術協會第百一同美術展(彫、工)

四月十八日—五月二日 上野・日本美術協會

協會展第百一同として彫刻、建築、圖案、玉、石、木、竹、牙、介甲彫品、金工、陶磁、七寶、漆器、染織、寫

眞等に互る公藝作品の陳列を行つた。一般搬入數三百九十五點、陳列點數二百六十二點。他に參考品として古茶器を展觀した。(一四七頁參照)

授賞(二等賞)「蝶追ふ」(彫刻)矢野秀徳、「鋪道の謔」(彫刻)三木貞夫、「彫金花瓶」三井義夫、「白磁草花彫文花瓶」加賀月華、「硝子花瓶」各務鑽三、「豐穰文庫」村田義忠、「赤城風景」(寫眞)吉川富三(參等賞)「春を踊る」(彫刻)紺谷英儀、「綠衣の少女」(彫刻)須賀東三、「神筵」(彫刻)相良流水、「かはら」(彫刻)宮本朝壽、「早春」(彫刻)先崎榮伸、「子供」(彫刻)竹内延吉、「春のおどり」(彫刻)門傳正衛、「湯上り美人」菊地互道、「桑繪具景、田筆」山田文治、「牙彫羞耻」注連野道博、「一位木八足卓」須田桑月、「富貴花籃」石川照雲、「カリン彫刻机」加藤南山、「荔枝」長嶋正親、「銀打出し梅文花瓶」寺田龍雄、「金彩花瓶」宮坂房衛、「沙魚文釜」伊藤錦一、「青銅盤」林萬壽人「晴竹文筒釜」加藤忠三郎、「鑄銅葉文花瓶」小林知泉、「白銅蝶彫文花瓶」山口壽雄、「鑄銅龜甲文花瓶」池田逸堂、「黃釉日葵文水盤」土肥刀泉、「陶製孔雀置物」長谷川怒、「洋花用花挿」安原喜明、「パート・ド・ヴェール鉢」小柴外一、「乾漆花瓶」室瀬春二、「乾漆盛器」村山久、「蒔繪文臺硯箱」藤岡保子、「綴織クッションボタン」和田秋野、「刺繍掛額」竹内庄之助、「紹刺風呂呂先屏風」中村陳次、「山里の人」(寫眞)近藤白鹿、「敏子」(寫眞)澤村美峰

第十二回染織美術標準圖案展

四月十九日、二十日 大禮記念京都美術館

獨立美術會員小品展(洋畫)

四月十九日—二十一日 京都・朝日會館

全會員が小品を數點づつ出品、陳列點數四十四點。

堀田清治洋畫個展

四月十九日—二十二日 銀座・日動畫廊

第二回春季二科美術展(洋、彫)

四月十九日—二十三日 日本橋・高島屋

會員の小品、繪畫二十一點、彫塑二點を陳列、何れも軽く描いたもので各人各様の特色を示して居た。宮本三郎の「金魚鉢と裸婦」は達筆を注目せしめ、高岡徳太郎の「つゆ描きに依る花の静物は才筆であるが感興は浅い。向井潤吉の「雪景」は力強い描寫で、マチエールの効果宜しく、外に正宗得三郎の「杏の花」、鍋井克之の「奇絶峽」等が挙げられ、笠置季男の彫刻「婦人と子供」は小品ながら正直な力の入つたものであつた。

八木岡春山第二回繪畫展（日本畫）

四月十九日—二十三日 大阪・三越

大阪に於ける二回目の個展、山水畫二十點を出品した。

山本敬輔近作洋畫展

四月十九日—二十三日 大阪・三角堂

抽象主義の繪畫二十餘點を陳列。

高木背水還曆記念洋畫展

四月十九日—二十四日 大阪・美交社

第六回青柿社日本畫展

四月十九日—二十五日 日本橋・白木屋

日本漆繪協會第一回展

四月二十日—二十四日 上野・松坂屋

昭和十一年十月結成された同會の第一回展、色漆に依り油繪、日本畫に劣らざる本格な繪畫を作らんとするのが其の主眼である。松岡正雄の衝立「飾馬圖」は華麗な裝飾畫、力作であつた。横井弘三の繪は濃い工藝的な味がある。太齊春夫は「漆モザイクク壁面裝飾（上野正之輔案）」を出品した。其の他陶漆を始め、種々の漆應用用品が陳列された。

河合卯之助陶器展

四月二十日—二十四日 日本橋・三越

染付、赤繪、青磁、黄瀬戸、伊羅保などの技法による香爐、皿鉢、花瓶等三百餘點を展覧した。

香田勝太洋畫及半切日本畫展

四月二十日—二十四日 神戸畫廊
長谷川白峰個展（工藝）
四月二十日—二十五日 京都・大丸

傳教大師御傳畫、開創記念法會獻畫展觀

四月二十日—二十五日 比叡山・滋賀院

大正十年、延暦寺の宗祖大師御遠忌に際し、吉川靈華小堀朝香、下村觀山等八名は大師御傳畫を奉納したが、本年菊池契月は「叡山草創」を、堂本印象は「宇佐神託」を描き、之を補充した。展覧には上記御傳畫十點の外に日本畫家二十五名の獻畫を陳列した。

福田翠光新作畫幅展（日本畫）

四月二十一日—二十四日 大阪長堀・高島屋

花鳥畫二十點を陳列。鷹を描いたものが多い。

倉真、福原、安達、水船油繪展

四月二十一日—二十五日 銀座・三味堂

倉員辰雄、福原達朗、水船三洋、安達眞太郎の四名が各自油繪四點を出品した。

風間まち子染織工藝新作展

四月二十一日—二十五日 銀座・資生堂

中井平三郎エツチング展

四月二十一日—二十五日 大阪・美術新論社畫廊

田川勤次豆油繪展

四月二十一日—二十五日 大阪・錦水堂畫廊

第二十四回商工省工藝展覽會

四月二十一日—三十日 丸之内・府立商工獎勵館

數多い出品の中には相變らずと思ふものも多いが、全體としては漸次進歩と洗練を加へて來たことが見える。近代生活の用途に即した合理的な工藝が求められて居り、それを目指した新材料の利用や虚飾を避けた實用品の意匠などに、僅かながらも眞面目な努力を示したものが現れることは欣ばしい。併し多くの作家によつて近代感覺と考へられるものが、流行的に形式化されてゐる

現狀は更に打開を必要とすべく、日本的な又地方的な良い傳統を愛護し、成長せしめることに一層努力されてよいであらう。

出品受付數二六二三點、合格數八三一點、外に審査員無鑑査等出品一二點。入賞は二等賞六、三等賞四五、課題賞（暖房具、履物類、浮出し模様）二、褒狀一一一點であつた。出品及び入賞の内譯は左の通りである。

出品

出品人員	出品點數	合格人員	合格點數
圖案	九二	一一五	三三
金工	一六〇	三四〇	一〇三
陶器硝子	一七二	四二〇	一〇八
染織	八八	二一一	四六
木竹	二三五	四五〇	一〇九
漆器	二八九	六二八	一二三
その他	一一七	二七五	五〇
課題	一〇一	一八四	三七
計	一、二五四	二、六二三	六〇九

入賞

一等	二等	三等	褒狀	課題	計
圖案	—	—	三	六	九
金工	二	一四	二二	三九	—
陶器硝子	—	一六	一五	二二	—
染織	一	三	六	一〇	—
木竹	一	七	二七	三五	—
漆器	一	八	一九	二八	—
その他	—	四	一五	一九	—
課題	—	—	—	二	—
計	六	四五	一一一	二一六	—

授賞（商工大臣賞並二等賞）「豊稷圖手鏡廣帯」山鹿清華（二等賞）「青銅蜻蛉文花盛器」會田富康、「黄銅花器」宮坂房衛、「ブドウ文花瓶」中村恆、「箆笥」桑原

主計(案作出)渡邊賢路(案)矢島茂(作)桑原金作(作)「蔬菜文手箱」難波仁次郎、(三等賞)「鑄銅花瓶」山本自燼、

「鑲染二枚折屏風」を焼く家「寺尾次郎、」ボスター「圖案」若松卯吉、「帽子ボスター」山野内孝夫、「室内裝飾圖案」山内泉、「鐵花盛」大西甚平、「棒金具」山下春興、梅花模様宮「長谷川昇、」堅果文金具「宮本猛、」銀象嵌花瓶「和泉湧清、」置時計「中野三郎、」黒味花瓶「松原春男、」青銅花生「丸谷端堂、」彫金盆「明石直次、」竹雀文面取盆「加藤忠三郎、」雪花菓子器「伊藤琢郎、」超芽紋花瓶「細川吉三郎、」花瓶「進藤鐵治、」黒釉壺「宮之原謙、」ストロブ前立「大森光彦、」花形壺「加藤華仙、」草花文皿「戸出雅夫、」日廻草文大皿「勝尾青龍洞、」白磁草花文花瓶「加賀月華、」

「絹綬通」國武特殊綵合名會社、「草花果實野菜文六枚折屏風」大橋豊久、「鮭皮應用委具」老健一(案出)老正由(作)「三段片開戸付飾欄」内藤勝(案作)、「整理筆筒」井出幸男、「飾欄兼書欄」市川棟雄、「紅花林丸盆」中野平一、「飾欄兼レコード入」山田太市、「木象嵌衝立」篁光磨(案)中島李堂(作出)、「秋の意壺」續木睦二、「野菜文様小吸用丸盆」鳥取漆器製作所、「銘々菓子入」小池寅衛、「レコードアルバム」小口正二(作)小口植一(案出)、「レース應用トランク」永野秀五郎、大森孝、川俣力雄、熊本市商工研究所、「連線模様アルマイト盆」橋本舟圭、「千段塗分銘々盆」近藤將照(案)小西順吉、「銀華文飾欄」野崎余詩子呂(案)安藤其峯、「將棋」上條龍男、「飾鉤」門村武右衛門、「帶止」勝木徳晴、「帶止」堀卷三(課題賞)「丸形面取り火鉢」鳥谷成雄、「蒔繪浪文婦人帶地」高尾菊次郎(案作) 尙同展覽會は東京開催後左の通り各地に開かれた。

京都五月十六日—二十二日、福岡六月四日—十日、名古屋六月二十四日—三十日、金澤七月十三日—十七日

久本弘一油繪小品展

四月二十一日—三十日 大阪・阪急百貨店

第一回又色洋畫展

美術展覽會(四月)

四月二十二日、二十三日 銀座・紀伊國屋

東京會春季展(日本畫)

四月二十二日—二十四日 日本橋・東美俱樂部

株式會社東京會の主催。東西の作家四十餘名の新作を蒐めた。川合玉堂「長閑」、橋本關雪「林徑夏夕」、川端龍子「玄土」、小室翠雲「一碧」、結城素明「水光」、楠木清方「櫻草」、川村曼舟「薰風」、堂本印象「古都青々」、兒玉希望「霜柯」、徳岡神泉「池畔」、杉山寧「歸鳴」等が挙げられる。

九品庵第二回東西大家新作畫展(日本畫)

四月二十二日—二十四日 銀座・交詢社

畫室社主催日本畫展

今古名版畫展

四月二十二日—二十六日 神奈川縣商工獎勵館

商工獎勵館主催。

越佐工藝美術展

四月二十二日—三十日 東京府美術館

新潟縣出身の工藝家により組織される會で、金屬、漆器、陶磁の類を含み、會員作品の外に縣下應募作品を陳列した。

越佐賞 庄司正夫

泥佛堂無茶法師作陶展

四月二十三日—二十五日 赤坂山王下・山の茶屋

創作人形同好會展

四月二十三日—二十五日 京城日報社來青閣

中野秀人洋畫個展

四月二十三日—二十七日 銀座・日動畫廊

平野長彦第一回個展

四月二十三日—二十七日 大阪・十合

表現小品展(洋畫)

四月二十三日—五月二日 新宿・南海畫廊

第四回岸田劉生遺作回顧展

四月二十三日—五月七日 新宿・天城畫廊

天城畫廊主催。油繪二點、素描、畫稿、表紙圖案等三十八點、日本畫十五點を陳列した。

動向同人第二回東京報告展(洋畫)

四月二十四日—二十六日 銀座・紀伊國屋

超現實主義の會で、報告展とは「各人の異なつた特異の知覺による東京の事物の報告」の意味である。

太田壽南洋作品展(洋畫)

四月二十四日—二十六日 銀座・ラテン畫廊

巴里會大阪大會記念展

四月二十四日—二十六日 大阪・三角堂

高島屋第五回創作洋家具展

四月二十四日—二十七日 日本橋・高島屋

紅日會第二回新作邦畫展

四月二十四日—二十九日 日本橋・高島屋

國畫院系作家の團體で會員七名、服部有恆を顧問とする。林雲鳳の大和繪は個性に缺け、橋本明治は目新しさに苦心して居るが藝術的に訴へるものが乏しい。

家庭向陶器展

四月二十四日—二十九日 京都陶磁器陳列館

七草會洋畫展

四月二十四日—三十日 日本橋・白木屋

獨立美術大阪展(洋畫)

四月二十四日—五月二日 大阪・朝日會館

第十二回南紀美術會展(日、洋、彫)

四月二十五日—二十九日 大阪・阪急百貨店

瀬戸三匠作陶展

四月二十五日—二十九日 名古屋・松坂屋

瀬戸の陶工加藤唐三郎、加藤作助、加藤春二の作品を展覧した。

堂本印象及門下生藝臺原畫展

四月二十五日—五月一日 京都・三角堂

明治、大正、昭和三聖代名作美術展覽會(綜合)

四月二十五日—五月二十五日 大阪市立美術館

大阪朝日新聞二萬號發行記念として同社主催大阪府助の下に開催された。嘗て昭和二年東京朝日新聞社主催で明治大正名作展覽會が東京に開かれたことは未だ記憶に新しいが、爾來既に十年を経過し、今次は大阪に於て而も前回に見られなかつた昭和時代を加へ、又前回に缺けた美術工藝品をも含み、日本畫一九八、西洋畫二二〇、彫刻八〇、工藝一〇〇、總計五九八點の作品が蒐集展覧されたことは、稀なる好機として頗る有意義であつた。既に名聲の定まつた作品のみを、横斷的には同時代に於ける異系統の作品に付、縦にしては年代を追うて綜合的に比較鑑賞し得る機會は、他には得られぬからである。特に近代美術館を有せぬ今日に於て其の感を深くする。明治初年より今日に至るあらゆる分野の作品六百點を一室に蒐めた此の一時の大美術館の、個々の作品に記述を及ぼすことは茲に許されぬが、概觀して日本畫、洋畫の隆盛に比し、彫刻、工藝に優品乏しく、總體的に進歩の遅々たるを感じさせた。又作家及び作品の選出に就ては、明治大正時代は當事者も經驗済であり、史的價值批判も比較的容易であるが、現代である昭和時代の名作を選定することは至難であり、多くの用意を必要とする。此の點昭和の名作として示された當事者の判斷に就ては首を傾げざるを得ぬものもあつた。

出品目録

名 稱	作 者	製作年代	所 藏 者
御物 孔雀圖	荒木寛政	明二三	龍虎園(同)
御物 青緑山水圖	山岡米華	大三	龍虎園(同)
遠洲優境群僊祝壽(雙幅)	富岡鐵齋	明三二	龍虎園(同)
老松蒼鷹(六曲一雙)	川合玉堂	昭四	龍虎園(同)
御室の櫻(同)	富田深仙	昭八	龍虎園(同)

細雨空濛	川村曼舟	明元	東京松本修三	足柄山新羅三郎吹笙圖	原在泉	明三〇頃	京都原在泉
爲朝	菊池容齋	明三	山口菊屋孫輔	海邊千鳥圖(六曲一雙)	望月玉泉	同	東京梅原長兵衛
足柄山圖	森寛齋	明三	山口菊屋孫輔	荷花水禽圖	川端玉章	同	東京東京美術學校
花鳥圖	河鍋曉齋	明一〇代	東京帝室博物館	中十六羅漢左紅葉白狐	岸竹堂	明三一	京都十合徳太郎
大津唐崎(八曲一雙)	岸竹堂	明九	京都西村總左衛門	井筒女之助	富岡永洗	同	東京大橋佐太郎
雲高氣靜	安田老山	明一〇	東京朝倉文夫	名花十二客	田能村直入	明三三	大阪芝川又四郎
竹下の猫	橋本雅邦	明一五	帝室博物館	春宵怨	梶田半古	明三四	横濱村田徳治
瀑布圖(六曲一雙)	柴田是眞	明一六	同男岩崎小彌太	宇治川合戦之圖(六曲一雙)	鈴木松年	同	京都吉居佐助
牧童	狩野芳崖	明一七	東京美術學校	秋の花	寺崎廣業	明三五	東京西川大六
帝釋三獸圖	幸野桃嶺	明一八	京都幸野西湖	横笛瀧口入道(六曲一雙)	同	同	大阪男住友吉左衛門
魯秋潔婦	同	同	竹内楓風	梅月	荒木寛政	明三八	京都飯田新七
京人形	森寛齋	明一七	山口玄洞	ロッキン山の雪	山元春舉	同	京都飯田新七
悲母觀音畫稿(卷物)	狩野芳崖	明一七	東京東京美術學校	しぐれ(六曲一雙)	木島櫻谷	明四〇	文部省
觀馬圖(六曲一雙)	鈴木百年	八頃	京都神社事務所	辻設法	野田九浦	同	同
悲母觀音下圖	狩野芳崖	明二〇	東京東京美術學校	白熊	町田曲江	同	東京増田義一
不動明王	同	同	同	佛陀之光(雙幅)	野村文舉	同	長野町田清治
悲母觀音	同	明二一	同	月下溪流圖	下村楓山	明四一	東京子杉七郎
南北朝合戰圖	川邊御樞	明二〇代	帝室博物館	大原御幸(繪卷)	池田蕉園	同	東京鈴木紋次郎
養老の圖	山名貫義	明二〇頃	東京東京美術學校	夢影	上村松園	同	同侯細川護立
白雲紅葉	橋本雅邦	明二三	同	馬上的宴(六曲一雙)	高橋廣湖	同	横濱小島周次郎
春溪仙隱圖	瀧和亭	明二二	千葉茂木佐平治	守屋大連	安田親彦	同	東京侯細川護立
深山急雨圖	菅原白龍	明二三	東京本間久雄	落葉(六曲一雙)	菱田春華	明四二	同
松間瀑布	森寛齋	同	京都飯田新七	油斷(同)	尾竹國觀	同	文部省
西王母	野口小嶺	同	滋賀野口忠藏	おとづれ(同)	尾竹竹坡	明四三	同
木曾真山水	橋本雅邦	明二六	大阪伊藤忠兵衛	伊達政宗	今村紫紅	同	横濱原富太郎
源氏物語圖(雙幅)	守住貫魚	明二〇代	兵庫村山長舉	孔雀(六曲一雙)	菊池芳文	同	京都宮川久治郎
群鷄	渡邊春亭	明二六	東京帝室博物館	奧澤九品佛來迎圖	尾形月耕	同	東京東京美術學校
小早川隆景破明軍圖	村田丹陵	明二七	同男小早川四郎	熊(大衛立)	竹内楓風	同	京都市村慶三
富岳の圖	田崎草雲	同	同男小早川四郎	玉堂富貴	兒玉果亭	明四五	神戸生島五郎兵衛
半陽拾身	久保田米僊	同	東京東京美術學校	四季繪卷	菱田春華	明四三	東京侯細川護立
櫻花鶏圖	川端玉章	明二七頃	東京東京美術學校	黒き猫	同	同	同
菊鶏圖(六曲一雙)	野口爾谷	明二八	同男岩崎小彌太	朝露り	下村楓山	明四四	横濱原富太郎
龍虎園(同)	橋本雅邦	同	同	赤壁	奥原晴湖	同	東京橋河民輔
維盛哀別	小堀綱音	明三〇	同公九條道秀	羅浮仙人	谷口香蟻	同	京都路河崎谷
木曾八景(八幅)	川端玉章	明二九	同侯大久保利武	松間の月	都路華香	同	同飯田新七
花鳥(雙幅)	西郷孤月	明三〇	同帝室博物館	獅子(六曲一雙)	今村紫紅	明四五	兵庫男住友吉左衛門
武士	小堀綱音	同	東京美術學校				

御殿女中	水野年方	明四五	東京	鍋木 清方	山路空翠圖	山田介堂	大一一	福井 須賀原市太郎	乍晴乍陰	西山翠嶺	昭和四	東京男大倉喜七郎
櫻花雙扇圖(二曲一雙)	今尾景年	同	大阪	山口吉郎兵衛	生々流轉(繪卷)	橫山大觀	大一二	東京松川 護立	みみづく	小林古徑	同	同
釣日和(同)	小村大雲	大元	同	某	弘法大師在唐遊歷圖	富岡鐵齋	大二三	兵庫 清荒神百練會	南蠻琴(四曲半雙)	福田平八郎	同	大連 首藤 定
宗右衛門町の夕(六曲半雙)	島 成國	同	東京	大橋新太郎	立女	菊池契月	同	京都 作 者	鯉魚	速水御舟	同	東京男大倉喜七郎
竹溪雨後	池田桂仙	大二	京都	谷野 英三	春暖	小室翠雲	同	群馬中村 家祥	野塘秋意	松林桂月	同	同
雨蓬(十曲一雙)	小坂芝田	同	千葉	小坂 永夫	秋晴(六曲一雙)	矢澤弦月	同	橫濱 廣瀬 保藏	堅田の休	平福百穂	同	同
小雨ふる吉野(六曲一雙)	菊池芳文	大三	東京男大倉喜七郎	同	舞妓林泉	土田麥僊	同	東京 近 熊治郎	風神雷神(二曲一雙)	安田親彦	同	同
高山清秋(同)	寺崎廣業	同	同	橋本辰二郎	印度更紗	川端龍子	大一一	同 作 者	夜櫻(六曲一雙)	橫山大觀	同	同
宇治川繪卷	富田溪仙	大四	富山	荒野櫻四郎	廣雲宮	小室翠雲	同	長野 小山重右衛門	長門映	松林桂月	同	同
大原女(四曲一雙)	土田麥僊	同	京都	吉田 忠	秋溪	松林桂月	同	東京公毛利 元照	洞窟の頼朝	前田青樹	同	同
桃源	今村紫紅	大五	兵庫	井上徳兵衛	日食	安田親彦	同	鈴木 新吉	鱗光閃々	堅山南風	昭五	同
室がみ(六曲一雙)	松岡映丘	同	東京	侯細川 護立	伊香保の沼	宇田親彦	同	東京美術學校	から白	川合玉堂	同	同
歌神	結城素明	同	廣島	藤井與市右衛門	淀の水車	勝田蕉琴	同	福島 伊藤 善彌	三遊亭圓朝	兒玉希望	同	同
竹取物語(繪卷)	小林古徑	同	廣島	西郷 春子	無塵地	吉川靈華	同	東京 鈴木 新吉	草炎(六曲一雙)	齋木清方	同	同
義家射三甲之圖	松本楓湖	同	東京	松本 修三	荒磯(雙幅)	平福百穂	同	別府哲二郎	魚紋(二曲一雙)	川端龍子	同	山形 多勢龜五郎
豫讓	平福百穂	同	同	侯細川 護立	深山雙鹿	神原紫峰	同	京都 小川重次郎	雪(二曲半雙)	堂本印象	同	名古屋河田俊治郎
菜園(四曲一雙)	小茂田青樹	大七	同	山下英一郎	野趣二題(雙幅)	石井林響	昭二	東京 唐澤 俊樹	鐵騎刀槍	菅 播彦	同	鳥取 桑田 安常
ほのぼ	上村松園	同	兵庫	藤田彦三郎	老子	小川幸鏡	同	兵庫 西山 亮三	騰龍圖	飛田周山	同	東京 森 漢三郎
古都の春	川村曼舟	同	京都	吉田 榮造	母子鳥籠圖	鄉倉千和	同	東京 小澤 誠平	雲々出島	竹内福風	同	同
落梅(二曲一雙)	西山翠嶺	同	京都	朝日忠次郎	築地明石町	福田平八郎	同	大分 福田馬太郎	觀瀾山水	富田溪仙	同	同
雪の驛路(四曲一雙)	池上秀畝	大八	岐阜	朝日忠次郎	點	前田青樹	同	東京 早稻田大學	うんすん歌留多(二曲一雙)	山元春舉	同	同
繪師多賀朝湖流さる	池田輝方	同	東京	細川 力藏	羅馬使節	同	同	同 作 者	大原談義	山村耕花	同	同
天龍四季(四幅)	山内多門	同	神戶	小寺 謙吉	西遊記(繪卷)	同	同	同	埃及風俗圖卷	堂本印象	昭六	京都 知 恩院
黃昏	荒木十歌	同	東京	野間 清治	拾得拾遺	同	同	滋賀 山元 清秀	日照雨	速水御舟	同	東京 鈴木 新吉
赤松(六曲一雙)	神原紫峰	同	京都	飯田 新七	多日帖	小野竹喬	昭三	東京 福原 平一	市場	山口蓬春	昭七	同
東坡先生(同)	下村觀山	同	東京	安田 一	春律	石崎光緒	同	京都 上河源右衛門	右大臣實朝	松岡映丘	同	同
傳説中將姫(六曲半雙)	川崎小虎	大九	大阪	同 者	鶴	荒木十歌	同	京都 大禮記念	出山釋迦	島田豐仙	昭八	東京 小西 幸寛
淀君	北野恆富	同	京都	土橋嘉兵衛	翠苔綠芝	速水御舟	昭三	東京 速水 彌生	深秋	川合玉堂	同	同
村煙春閑	田近竹郎	同	神戶	鈴木岩治郎	七面鳥と鶴	小林古徑	同	大阪 岸田龜次郎	八仙花	中村大三郎	同	同
霜の大原(六曲一雙)	結城素明	同	廣島	藤井與市右衛門	暮色蒼々	矢野橋村	同	京都 土井 久吉	蟲の音(六曲一雙)	橫山大觀	同	名古屋 河田俊治郎
秋	西山翠嶺	同	神戶	上山 興作	おぼろ月	竹内福風	同	東京 玉置源一郎	玄猿	橋本關雪	同	東京 某
夕ぐれの春	廣島晃市	同	東京	小坂 順造	秋晴れ(二曲半雙)	伊東深水	昭四	東京 大智勝彌	雨後の月	同	同	同
木蘭詩(繪卷)	橋本關雪	同	同	同 者	梅雨あけ	大智勝彌	同	同 同	菊池契月	同	同	同
雨月物語(同)	齋木清方	大一一	同	利光 鶴松	秋山懸瀑	川合玉堂	同	同 同	同	同	同	同
海峽觀潮	小室翠雲	大一一	同	同 者	同	同	同	同	同	同	同	同
飼鷹	根上富治	同	山形	齋藤武一郎	同	同	同	同	同	同	同	同

砂丘（六曲半變）	中村岳陵	昭九	横濱 中村房次郎	和洋合奏之圖	彰城貞德	明三〇	東京男三井 高精	無花果畑	辻 永	大元	東京 今村 繁三
白鷺（二曲一變）	竹内新風	同	名古屋 河田悦治郎	稽古	白瀧幾之助	同	東京美術學校	しほり	永 地秀太	大二	東京 同 作 者
山	村上華岳	同	神戸 作 者	日本名園圖譜（水彩）	本多錦吉郎	明三〇頃	同 本多 明	晚春	長原孝太郎	同	東京 帝室博物館
燕子花	土田麥僊	同	文 部 省	遺兒	北 運藏	明三二	同 長尾 一平	志摩の端	廣瀬勝平	同	大阪 野村 徳七
冬暖	西村五雲	同	東京 平尾 贊平	俊寛	渡部馨也	明三〇	同 作 者	うつつ	藤島武二	同	東京 杏 一貫
炭竈	結城素明	同	文 部 省	漁夫晚歸	湯淺一郎	明三一	同 東京美術學校	草刈	矢崎千代二	同	大阪 銀行集會所
觀世音寺炎上	木村武山	同	福岡 田中九重藏	湖畔	黒田清輝	同	同 美術研究所	杏花の村	中川八郎	大三	東京 文 部 省
御水取八題	近藤浩一路	昭一〇	東京 作 者	門づけ	小林萬香	明三三	同 帝室博物館	網を千せる朝	加藤静児	大二	東京 作 者
西洋畫	和田英作	昭三	高松宮家	夜汽車	赤松麟作	明三四	同 東京美術學校	早春	丸山晚暎	大三	同 作 者
靜物	川島運一郎	昭九	李王家德壽宮	グレ秋景	淺井 忠	明二三、	千葉 淺井 經一	孔雀と女	安井曾太郎	同	同 西村總太郎
巨木	アంతニオ・	明初	東京 東京美術學校	肖像	床次正精	四頃	東京 長尾 健吉	鏡の前	森脇 忠	同	京都 帝大醫學部
牧牛	アంతネージ	同	東京 東京美術學校	縫ひもの	淺井 忠	明三五	同 反町 茂作	三月の日	大久保作次郎	同	東京 作 者
自畫像	チャールズ・	同	同	讀書	岡田三郎助	明三四	兵庫男住友吉左衛門	豚と豚の仔	新井 完	同	兵庫 岩田 希芳
同	ワークマン	同	同	こだま	和田英作	明三五	同 同	高原に働く人	大野隆徳	同	神戶 岡崎 忠雄
同	國澤新九郎	明七、	同	海の幸	青木 繁	明三七	同 同	少女お梅の像	山本 鼎	同	同 津田勝五郎
畫室	川村清雄	明一〇	同 侯西郷 從徳	草上の小憩	石井柏亭	同	東京 作 者	夏草	小出椿重	同	大阪 足立 正
鮭	高橋由一	明一〇頃	東京美術學校	巴里セーヌ河の（水彩）	三宅克己	明三四	同 山下吉三郎	花下竹人	高間惣七	同	同 作 者
辻譯釋	曾山幸彦	明一〇代	同 大野 竹二	セーヌ河畔	河合新藏	明三七	同 小島 鳥水	白蓮樹	片多徳郎	同	同 足立 正
鳴の靜物（水彩）	岩橋敦章	明八	同 男三井 高精	戦語り	瀧谷國四郎	明三九	同 加納 百里	信仰の悲しみ	安宅安五郎	同	大阪 中林孫次郎
ブルガリアの少女	百武兼行	明一二	同 東京美術學校	ローランス畫伯の肖像	鹿谷國四郎	同	同 兵庫男住友吉左衛門	デユエツト（持てる男）	關根正二	同	東京 村上 實吉
牧童（水彩）	小山正太郎	明一二、	同 小山すみ子	總高山の麓（水彩）	大下藤次郎	明四〇	東京 大下 正男	水郷の夕	楠木久太	同	同 堀越 三郎
孟母斷機圖（水彩）	五姓田芳柳	明一五	新潟 西脇新次郎	黄樂僧	高村真夫	同	長岡 渡邊清次郎	美しき五月マリアの日	小柴錦侍	同	同 堀越 三郎
西洋婦人像	山本芳翠	同	東京 東京美術學校	ヨット	橋本邦助	同	東京 作 者	エロシエンコの像	中村 彝	同	同 今村 繁三
鶏の圖（版畫）	小林清親	明一三	同 帝國圖書館	讀書	藤島武二	同	同 東京美術學校	暖蘭亭圖	中村 不折	同	同 作 者
靴屋のおやぢ	松岡 壽	明一五頃	同 東京美術學校	南風	兒島虎次郎	同	同 大原美術館	眼を装ふ女	足立源一郎	同	同 作 者
袋田の瀧	原田直次郎	明一九	同	曲浦	和田三造	同	同 文 部 省	自畫像	岸田劉生	同	同 作 者
山内一豊の妻	五百城文哉	明二〇代	同 小杉 放庵	峽谷	山本森之助	明四一	同	上總の海	川上源花	同	同 作 者
弓手（蠟筆畫）	岡 精一	明二三	同 東京美術學校	停車場の朝	吉田 博	同	東京男古河虎之助	梅檀の木の家	國枝金三	同	同 作 者
清水寺	中丸精十郎	明二〇代	同	美人讀詩	山脇信徳	明四二	同 東京美術學校	ピアノの朝	都島英喜	同	同 作 者
收獲	佐久間文吾	明二〇頃	同 桐淵 梅尾	蠟燭	石橋和訓	同	同 男三井 高精	樂（なりはひ）	富田温一郎	同	同 作 者
讀書	淺井 忠	明二三	同 東京美術學校	おもひで	熊谷守一	同	同 湯澤三千男	兄の肖像	木下義謙	同	同 作 者
朝歌	黒田清輝	明二五	同 伯樺山 愛輔	水郷	中澤弘光	同	同 文 部 省	靜物	藤田嗣治	同	同 作 者
八坂塔	同	明二六	兵庫男住友吉左衛門	コック場の一隅	小杉放庵	明四四	同	麗子像	岸田劉生	同	同 作 者
晚歸（版畫）	久米桂一郎	同	東京 伯樺山 愛輔	凭れかゝる人	平岡權八郎	明四三	東京 作 者	下諏訪のリンク	金山平三	同	同 作 者
夏の夕	合田 清	明一九	同 長尾 健吉	赤い日傘	萬鐵五郎	明四五	大阪 八木 正治	港の女（舊レスカール）	黒田重太郎	同	同 作 者
舞妓	久米桂一郎	明二七	同 東京美術學校		土岐芳助	明四五頃	東京 櫻井 成夫		清水良雄	同	同 作 者
	黒田清輝	明二七頃	同 大橋佐太郎		太田喜二郎	大元	同 黒川新次郎				

猫を持つ女	閑見富雄	大一一	東京作	者	黄布の静物	松村 異	昭三	千葉 中村勝五郎	笛吹き	中山 鏡	昭六	岡山 大原孫三郎
静物	棒 貞雄	同	千葉作	者	護羊犬	三上知治	同	東京男三井 高精	驚けるデイアナ	福澤一郎	同	同 河本太三治
讀書	遠山五郎	同	東京男三井 高精	者	裸女	前田寛治	同	鳥取 前田 愛子	早春の庭	瀧谷國四郎	同	同 大原孫三郎
グエトイユの寺	跡見 泰	大一二	埼玉作	者	座像	猪熊弦一郎	昭四	兵庫 岩田 希芳	大王岬に打つける激浪	藤島武二	同	東京松川 護立
モレエ風景	正宗得三郎	同	兵庫 小河清太郎	者	伊豆の海	奥瀬英三	同	東京 波多野春房	湖の見える室	前川千帆	昭七	同 作
帽子持てる女	坂本繁二郎	大一二	福岡作	者	海	古賀春江	同	福岡 小野寺直助	少女立像	山下新太郎	昭六	大阪 伊藤忠兵衛
冬の林檎林	倉田白羊	大一二	長野 半田 孝海	者	著薇咲くカブリ島	小林和作	同	岡山 作	幼女浴後(版畫)	恩地孝四郎	昭七	東京 北原 鐵雄
早春の丘	濱田菰光	大一二	奈良作	者	絵る秋	齋藤與里	同	兵庫 岩田 希芳	老婦念佛	石井鶴三	同	東京 須藤 忠藏
葡萄と女	鈴木亞夫	大一二	東京作	者	南風風景	小山敬三	同	神奈川 作	裁縫女	小磯良平	同	東京 東京美術學校
庭	橋井禮市	大一二	名古屋作	者	三番叟(八王子車人形踊)	鈴木信太郎	同	東京 作	へちまの窓	小林徳三郎	同	同 作
緑衣	熊岡美彦	大一二	東京三井 高光	者	踊	和田三造	同	神戸 跡部 操	陶土の丘	清水登之	同	同 作
瓦斯燈と廣告	佐伯祐三	同	兵庫 山本發次郎	者	蘇州の春	池部 鈞	昭五	東京 作	新聞を讀むコンシエ	田口省吾	同	同 作
大住嘘風君肖像	和田英作	大一二	横濱 大住 秀夫	者	楊上の二裸婦	石川寅治	同	大阪 岸本兼太郎	村の娘達	牧野虎雄	同	兵庫 岩田 希芳
家政婦	坂本繁二郎	大一二	東京 牧野 司郎	者	金時山	伊原宇三郎	同	東京 侯伊達 宗彰	緋毛氈	滿谷國四郎	同	同 山口吉郎兵衛
寝椅子の裸婦	鈴木千久馬	同	同 鈴木繪畫研究所	者	歌鼓支度	岡田三郎助	同	同 作	尾瀬沼	森田恒友	同	同 同
裸婦	寺内萬治郎	同	同 高橋 研三	者	煉瓦焼場	木村莊八	同	同 作	軍鶏	山下繁雄	同	大阪 油谷 美枝
舞踏會の前	藤田嗣治	同	某	者	五人の女	佐伯祐三	昭四	兵庫 山本發次郎	ヒヤニストジェルマ	青山義雄	昭八	神奈川 福島繁太郎
朝	青山熊治	大一二	大阪 櫻原 敏雄	者	弟妹集ふ	兒島善三郎	昭五	東京 作	虎	伊藤 康	同	名古屋 新聞支社
花壺	有馬さとし	同	東京 佐藤 義亮	者	暮春閑情	中村研一	同	大阪 住友俱樂部	モデルたち	太田三郎	同	東京 作
蒙古襲來の圖	河野通勢	同	同 作	者	奈良の月	鍋井克之	同	兵庫 男住友吉左衛門	四月の妙高山	栗原 信	同	大阪 岸本兼太郎
裸體	田邊 至	同	大阪 岸本兼太郎	者	レクチュール	小糸源太郎	同	東京 伯東伏見邦英	二人女	里見勝藏	同	仙臺 大川松之進
海水着少女	津田青楓	同	京都 上河源右衛門	者	鶴渡る	長谷川昇	同	同 堀越 健六	山川呼應	三田 康	昭九	東京 波多野春房
C嬢	前田寛治	同	鳥取 桑田 安常	者	裸女	南 薫造	同	同 侯廣幡 忠隆	室より	中川一政	昭九	同 作
四人の子等	草光信成	昭二	東京 作	者	室内	小出裕重	同	大阪 右近權左衛門	裸婦	碓伊之助	昭八	同 鈴木 由郎
林中小春日	小島善太郎	大一二	大阪 野村 徳七	者	婦人像	矢島堅土	同	同 小林 太吉	初秋の窓	林 武	同	和歌山 明樂佐一郎
アヤメの着物	岡田三郎助	昭二	東京 中村 英吉	者	帝大構内	安井曾太郎	同	京都 上河源右衛門	半僧池	正宗得三郎	昭九	東京 作
夫人人像	木下孝則	同	同 作	者	貧しきカツエの一隅	橋堀角次郎	同	東京 金子 孚水	ある日の廣田外相	阿以田治修	同	同 作
老人	高島達四郎	同	同 作	者	マリオネット	佐分 眞	同	同 三岸せつ子	少女と貝殻	上野山清實	同	同 廣田 弘毅
婦人座像	中野和高	同	同 作	者	裂傷	橋本八百二	同	同 作	馬	川口軌外	同	同 永富 花子
著薇圖	梅原龍三郎	昭三	奈良 志賀 直哉	者	熊谷守一像	有島生馬	昭六	同 作	立てる子供	鈴木保徳	同	同 作
子虚賦	中村不折	昭二	東京 作	者	古器	石井柏亭	同	大阪 八木 正治	アラビヤ風の家と海	佐竹徳次郎	同	同 作
S氏像	江藤純平	昭三	同 作	者	けし畑	曾宮一念	同	大阪 八木 正治	五月風景	島海青兒	同	同 作
南歐のある日	小寺健吉	同	同 作	者	青衣の婦人	内田 巖	同	東京 作	港のキャツフェー(下)	野口謙藏	同	滋賀 作
夏庭	中川紀元	同	同 作	者	I氏立像	高岡徳太郎	同	大阪 飯田 慶三	舞妓	野口彌太郎	同	東京 作
羅摩物語	小杉放庵	同	兵庫 山口吉郎兵衛	者	裸婦圖	梅原龍三郎	同	東京 作	家族席	林 重義	同	兵庫 池田仁左衛門
夜の床	野間仁根	同	東京 作	者	手術室	東郷青兒	昭五	同 作		宮本三郎	同	東京 作
クキイの橋	林 俊衛	同	静岡 柏木 俊一	者								

アネモネ	水谷 清	昭九	東京作	蜜(石膏)	小倉右一郎	大五一	東京作	女の顔(ブロンズ)	松村外次郎	昭八	東京作
海棠	山下新太郎	同	同	裸男女群像(ブロンズ)	保田龍門	同	和歌山島村安次郎	黒風(木彫)	三國慶一	同	同
水浴	須田國太郎	昭二〇	京都作	光明皇后(木彫)	内藤 伸	昭二	東京作	少女(石膏)	村田勝四郎	同	同
争へる鹿	向井潤吉	昭九	兵庫 武田 深藏	女の胸像(大理石)	北村四海	同	大阪 山口吉郎兵衛	蹴球(木彫)	森野圓象	同	同
舞妓	田中善之助	昭一〇	東京 堀口 熊二	短夜(木彫)	矢野誠一	昭二	同 白川 朋吉	小楠公の像(石膏)	黒岩淡波	同	大阪作
百濟舊都(版畫)	平塚連一	同	同	飯龍登天(ブロンズ)	渡邊長男	同	東京作	出羽ヶ嶽等身像(木彫)	新海竹藏	昭八	東京作
ばら	眞野紀太郎	同	同	髪(石膏)	中牟田三治郎	同	同	蘇峰先生(ブロンズ)	長谷川榮作	昭九	同
大同江畔	宮坂 勝	同	京城 有賀 光豊	坐像(石膏)	加藤顯清	昭三	同	作品第十五(石膏)	小笠原貞弘	同	同
彫刻	清原玉女像(石膏)	ツイン・チエン	明一頃	紫津久(木彫)	佐々木大樹	同	同	鷗鷗(木彫)	吉田白嶺	同	同
猫(木彫)	高村光雲	明二八	同	新緑(大理石)	北村正信	同	大阪 岸本兼太郎	惜しみなく春を歡喜せよ(石膏)	大國貞藏	同	同
白衣觀音(木彫)	石川光明	明二六	同	姉妹(大理石)	濱田三郎	同	同	羅馬少年使節(木彫)	三木宗策	同	東京 東京美術學校
平治物語行列(木彫)	山田鬼斎	同	同	藤波の花咲くころ(木彫)	石本曉海	同	京都 京馬 銀行	阿曇(一對)(石膏)	山本豊市	同	同
内裏鑑(木彫)	竹内久一	明三〇	京都 渡邊 初男	北齋(木彫)	佐藤朝山	同	東京 青田 幸吉	むすめ(石膏)	松田尚之	同	同
武者人形(木彫)	島村俊明	同	東京 吉田 芳明	髪(石膏)	吉田久鑑	同	同	藤澤氏胸像(ブロンズ)	牧 雅雄	同	神奈川 牧 テル子
老人の頭(ブロンズ)	長沼守敏	明三一頃	同	龍(ブロンズ)	藤田文藏	同	同	トルソー(石膏)	安藤 照	昭一〇	東京作
北條虎吉の像(ブロンズ)	萩原守衛	明四二	同	太田道灌像(ブロンズ)	白井雨山	同	東京美術學校	木彫及牙彫	美術工藝		
天樂(木彫)	米原雲海	明四四	同	裸婦(石膏)	渡邊義知	昭四	同	牧堂(象牙薄肉彫)	石川光明	同	東京 東京美術學校
坂路(ブロンズ)	池田勇八	大 四	同	アLEGRO(ブロンズ)	田村審火	同	同	燭形置物(象牙彫)	旭 玉山	同	同
H老人の肖像(ブロンズ)	堀 進二	大 五	大阪 堀 良秀	翁(木彫)	松尾朝春	昭五	同	燭形置物(象牙彫)	淺井寛哉	同	同
辨天島の御輿(木彫)	吉田芳明	同	東京 津谷宇之助	Kの像(ブロンズ)	萩島安二	同	同	ヴィリナス(萬寶貝の置物)(彫刻)	森川杜園	同	同
老坑夫(石膏)	吉田三郎	大 八	同	前垂を結る婦人(木彫)	木村五郎	同	同	能人形置物(木彫)	金 工	同	同
Hの像(ブロンズ)	中原悌次郎	大 八	同	タイス(石膏)	齋藤素藏	同	同	金 工	石田英一	昭九	新潟 羽賀虎三郎
源泉(ブロンズ)	北村西望	大 九	同	彌音大士(木彫)	山崎朝雲	同	同	鼈香爐	海野勝珉	同	東京 根津嘉一郎
轉生(木彫)	平橋田中	同	同	釋迦三尊(ブロンズ)	喜多武四郎	同	同	地獄極樂銅大鐺	海野美盛	大 八	同
虛無(ブロンズ)	戸張孤雁	同	同	瑞應(木彫)	中野桂樹	同	同	關羽	海野雪聲	同	同
牛(木彫)	川上邦世	大 一〇	同	女性(大理石)	日名子實三	昭六	同	色金製深林圓額	岡部覺彌	同	同
フクレ	後藤 良	同	同	榻によりて(ブロンズ)	山根八春	同	同	辨財天像額	岡崎雪聲	同	同
密妃(木彫)	關野聖雲	大 一	同	悉地(木彫)	橋本朝秀	同	同	青金赤銅花器	海野 清	昭八	同
菩薩摩(木彫)	天國均一	大 二	大阪 天國 秀明	腰かけたる裸婦(石膏)	笠置季男	同	同	手取形鍍金	大國栢齋	同	同
蛙(ブロンズ)	石井鶴三	大 三	東京 作	三つの眼(石膏)	馬 成二	同	同	圓額獅子圖	大島如雲	同	同
婦人像(ブロンズ)	雨宮治郎	同	同	福原鐘二先生(ブロンズ)	建昌大夢	同	同	花置物	北原千鹿	昭二	新潟 桂 恕 佑
慈母(ブロンズ)	藤井浩祐	大 三	文 部 省	華炎(木彫)	澤田晴廣	昭七	東京 帝國美術院	四分一花瓶八景圖(一對)	香取秀真	昭三	東京 鈴木 寅彦
トロを待つ坑夫(ブロンズ)	石川確治	大 三	東京 伯柳澤 保承	ミスター・ボス(ブロンズ)	藤川勇造	同	同	鑄銅八角飾箱	佐々木象堂	昭九	新潟 田卷堅太郎
探案(光明皇后)(木彫)	朝倉文夫	大 四	同	坐せる女(ブロンズ)	國方林三	同	同	鑄銅飛天置物	桂 光春	大 四	東京 高尾祐治郎
緑の影(石膏)	橋本平八	同	三重 堀口 秀男	黒田清輝先生像(ブロンズ)	堀江尚志	昭八	同	楠公(鑄銀置物)	加納夏雄	明三一	同
少女立像(木彫)	新海竹太郎	大 五	東京 新海 覺雄	鯉(ブロンズ)	大内青圃	同	同	雪中雁の圖額	正阿彌勝義	同	同
老子(ブロンズ)				クリシュナの扉(石膏)				鑄銀額			

蕨形置物

獅子文香燭

卷葉箱(全圖及蓋内面)

鑄銅雨唐草透模樣蓋

鑄銅透文花瓶

針交文花瓶

引阮長鳴(ペンギン置物)

龍之圖花瓶

茶の湯蓋

布目象嵌額牡丹圖

流金文果物盛

大盃銀器

古紋瓦上楊置物

陶磁七寶ガラス等

九谷赤繪菓子鉢

錦彩鳳凰置物

錦彩耳付一輪生

龍花瓶

彩磁孔雀拓榴文大花瓶

紫陽花香燭

吹き込み硝子鉢

赤繪金襴鉢

草文硝子花瓶

陶壽紅日の出に松彫刻

香盒及香燭

角扁壺辰砂染附

額面陶器

大鉢(海の幸山の幸)

草花圖飾皿

青華百日紅圖花瓶

赤繪鳳龍花瓶

紋手茶入

白雲盆花瓶

青瓷紅魚花入

染付玉堂富貴圖花瓶三代清風興平

辰砂手花瓶

染付繪替皿(十枚の内)

色繪紗綾文雪輪花實花瓶沈壽官

鈴木長吉

清水秀藏

塚田秀鏡

本間琢齋

杉田末堂

高村豊周

津田信夫

鈴木美彦

先代宮崎寒雄

宮智一男

山本安藝

山川茂孝

山田長三郎

淺井一庵

伊東陶山

先代伊東陶山

初代石野龍山

板谷波山

井上良齋

岩田慶七

永樂和全

各務鎮三

加藤友太郎

河井寛次郎

河原徳立

河村鱗山

四代清水六兵衛

清水六兵衛

三代清水六兵衛

白井半七

澤田宗山

初代謙訪蘇山

京都 正木 直彦

京都 清風 興平

京都 帝室博物館

同 侯細川 護立

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

東京 帝室博物館

菊花繪花瓶

七寶燒青藍色鳳凰

寶玉嵌青華石榴子

玉堂富貴花瓶

青磁浮牡丹花瓶

布袋

薩摩燒牡丹花瓶

漆工

藤繪竹林文臺觀

陶製驚嵌人額

陶物藤繪重箱

彫漆波箱

藤繪則詠親箱

藤牡丹藤繪手箱

棕櫚藤繪軸盤

杉藤の親箱

蘭奈待香桶

金地浮線綾藤繪香合

悉研出山水畫親箱

蓮池鴨詩繪額

天狐之圖彫漆香盆

書繪箱

聲と雅草沈金丸盆

卓

禽獸詩繪手宮

雄齒桑文機棚

トマトの圖棚

鳴天吼號之圖漆器手宮

染織

加良錦百花紋様

反物

天鷲絨縹緞壁掛(大鳥小)

都錦壁掛(原泉)

漢の羅の壁掛

蝶模樣壁掛(鉾見送)

手織袖友禪染壁掛

染色壁掛瀉流を測る

先代中村秋雄

並河靖之

初代三浦竹泉

松本佐平

先代宮川香山

加藤春俗

荻 明山

赤塚自得

三浦乾也

池田泰真

磯井如真

植松包美

川之邊一朗

大垣昌訓

迎田秋俊

白山松哉

小川松民

澤田宗澤

柴田是真

推朱楊成

杉林古香

前 大峰

鶴田和三郎

松田權六

森川紫山

吉田源十郎

六角紫水

二代川島甚兵衛

佐々木清七

龍村平藏

伊達彌助

廣川松五郎

山形助太郎

石川 縣

京郡 並河 茂樹

大阪 帶谷吉次郎

金澤 松本佐太郎

東京 帝室博物館

瀬戸 清水重太郎

大阪 荻 恒夫

長崎 山口 健造

東京 帝室博物館

同 鋼木 清方

同 伯松平 頼壽

同 飯島 正一

同 帝室博物館

金澤 作 者

大阪 岸本吉左衛門

東京 正木 直彦

同 帝室博物館

石川 縣

東京 帝室博物館

同 作 者

京都 中澤 岩太

石川 廣瀬 嘉助

東京 東京美術學校

同 鹿島 登善

大阪 白川 朋吉

東京 作 者

京都 川島甚兵衛

大阪 中村 祐次

京都 恩賜京都博物館

大阪 作 者

京都 飯田 新七

東京 平塚常次郎

同 作 者

手織錦屏春圖壁掛

竹工木工其他

飯塚現珥齋

加納鐵敬

明三〇

東京男大倉喜七郎

木内平吉

明四三

同 西川 平藏

同 東京美術學校

同 帝室博物館

同 東京美術學校

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

山鹿清華

昭 四

京都 作 者

昭 七

靜岡 佐藤 銀

大阪 林 成一

明三〇

東京男大倉喜七郎

木内平吉

明四三

同 西川 平藏

同 東京美術學校

同 帝室博物館

同 東京美術學校

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

四月二十七日—二十九日 銀座・紀伊國屋
木村天紅「乾漆蓋原」第一同發表展

四月二十七日—二十九日 銀座・資生堂
志長由喜會第一同人形と人形繪展

四月二十七日—二十九日 銀座・伊東屋
佛生寺虛明作啄木歌題畫展

四月二十七日—五月二日 大阪・大丸
新虹會第一同美術展（日、洋、彫）

四月二十七日—五月二日 福岡・岩田屋
山内春靜堂東西邦畫新畫展

四月二十九日—五月一日 日本橋・東美俱樂部
東西の作家四十餘名の作品を陳列した。橋本關雪「煙

雨杜鵑」、小川芋錢「朝霧の中」、錦木清方「螢」、酒井三
良「漁人閑談」、菊池英月「小鷹狩」等輕いものであるが

夫々の持味を見せてゐた。

千葉縣綜合美術第三同展

四月二十九日—五月二日 千葉・縣立圖書館

奈良美術家聯盟春季小品展（洋畫）

四月二十九日—五月三日 大阪・關西畫廊

倉敷洋畫會展

四月二十九日—五月三日 倉敷・天満屋

臺灣美術協會第三同展（洋畫）

四月二十九日—五月三日 臺北・教育會館

獨立美術會員小品展（洋畫）

四月三十日—五月四日 大阪・三角堂

獨逸國寶名作素描展覽會

四月三十日—五月十四日 東京府美術館

日獨文化協會創立十周年記念として同協會及び朝日新
聞社の共同主催、ドイツ政府、外務省及び文部省後援でド
イツ名畫家の素描作品九十六點が將來展觀された。之は
ドイツ政府並に同國立博物館の熱心なる盡力に依るもの
で、作品は總てベルリン銅版畫蒐集館（Kupferstich-

Kabinett）を初め同國各地所在國立博物館收藏品の中か
ら選擇貸出され、アルブレヒト・デュラー（一二點）、
ハンス・ホルバイン初代（三點）、同二代（四點）、マチ
アス・グリユネワルト（一點）、ハンス・バルドゥンダ
・グリーン（四點）等ドイツが世界の美術史に誇る文藝復
興期諸家から十九世紀の名家アドルフ・メンツェル（八
點）に至る迄の作家を含む系統的蒐集で、其の展觀は我
が國に於て空前の機會を提供したものであつた。

之を携へて同國立博物館銅版畫部副部長ハンス・メー
博士（Dr. Hans Mehl）が來朝、初日の開會式は
高松宮、同妃兩殿下、朝香宮殿下の台臨の下に、フォン・
デイルクセン獨逸大使其の他來賓關係者多數列席、盛大
に行はれた。又之を機會に五月六日東朝社講堂で講演會
を開き、會場では日時を定めて一定の希望者に陳列品解
説を行つた。

尙此等の作品は東京に於ける展覽會閉會後、更に京都
で展觀し、梅雨季に先つて返還されること、なつた。

五 月

春艸會小品畫展（日本畫）

五月一日 京都室町・東閣畫堂

工畫會圖案展

五月一日 京都美術館

梅原榮二路主催。

華鏡社展

五月一日、二日 神田・如水會館

松村異日本畫「靜物」展覽會

五月一日—三日 大阪・美交社

高島正勝洋畫個展

五月一日—三日 高松・池田屋

第二回塑土會彫刻會

五月一日—四日 銀座・ラテン畫廊
未知會第五同展（洋畫）

五月一日—四日 銀座・紀伊國屋
新興美術家協會春季展

五月一日—四日 銀座・伊東屋
大塚稔巧藝畫新古今畫幅展

五月一日—四日 名古屋・松坂屋
近藤啓二個展

五月一日—五日 銀座・鐘紡
根本霞外日本畫個展

五月一日—五日 銀座・三味堂
橋本關雪日本畫個展

五月一日—五日 日本橋・三越
近作十二點を出品。「飼馬」「双猿」、ベルシャ猫を描い

た「清畫」、水牛を描いた「柳陰牧笛」其の他孔雀、鷹、水
墨山水など手慣れた畫材に愈々圓熟した技を示した。新
な發展を見出し難いが、猿を描いた作の如きさすがに尋
常ならぬ畫境である。

伊東深水第二同個展（日本畫）

五月一日—五日 日本橋・高島屋

美人畫の外に花鳥、風景、浴女の群を描く「野風呂」
など近作十九點を陳列した。出来上つた美人畫の境から
脱せんとする努力が見えぬではないが、未だ今後の進展
を期さねばならぬ。

日高昌克日本畫個展

五月一日—五日 銀座・資生堂

三宅克己水彩畫展

五月一日—五日 銀座・日動畫廊

風景畫約五十點を出陳した。

日本壁畫會第二同展

五月一日—五日 銀座・青樹社

油彩に依る壁畫の研究團體で鶴田吾郎、大内青坡、大

内青間、布施信太郎、安藤信哉等の會員が數點づゝ出品した。壁畫の下圖が壁畫の構想に依る額畫が不明なるものが多く、下圖としてならば壁畫の用途に對する考慮が一層望ましく見られた。

致々會第二回展(日本畫)

五月一日—五日 銀座・日本サロン

愛染會手藝品展

五月一日—五日 日本橋・三越

青山義雄瀟灑作品展(洋畫)

五月一日—五日 神戸畫廊

愛知縣出身各派入選者ミニアチュル油繪展

五月一日—五日 名古屋・丸善

第十九回朱葉會女子洋畫展

五月一日—七日 日本橋・白木屋

女子洋畫團體の公募展で會員作品七十九點、入選作品百五點を陳列、一般に技術の低さは已むを得ずとして、會員の作に少しも進歩の見られぬことは残念である。

松井虹橋日本畫個展

五月一日—七日 京都・丸物

大中翌月七寶漆陶裝身具展

五月一日—七日 名古屋・松坂屋

日本工藝美術會展

五月一日—七日 大阪・松坂屋

暫らく其の活動を停止して居た日本工藝美術會主催の大規模な關西展である。種目は金工、漆工、竹工、染色、陶器、硝子、革細工等會員作品の外に全國より約七十名の出品を招待し、陳列總數三百八十六點に上つた。會員の出品では津田信夫「愛憐覆育白鳥置物」、高村豊周「廣口花瓶」、内藤春治「蟬文花瓶」、清水正太郎「瑠璃釉鉢」、川口虛舟「漆器平卓」、杉田禾堂「青銅魚置物」、中島豊次「鍍銅花瓶」、山鹿清華「透明手織鸚鵡壁掛」等が挙げられる。別に參考品として一九三六年伯林オリンピック藝

術競技展に出陳の繪畫彫塑數點を展觀した。

金澤工匠會美術工藝展

五月一日—七日 大阪・阪急百貨店

本田隆軒近作南畫展

五月一日—八日 大阪市立美術館

故富岡鐵齋の門下文學博士本田成之の文人畫四十一點書十點が望月信成、高松靜男等の發企で展觀された。

第四回香川縣工藝美術綜合展(日、洋、工)

五月一日—九日 高松・三越

第十五回春秋會洋畫展

五月一日—十日 大阪・阪急百貨店

關西在住の國畫會系作家辻愛造、川西英、大橋孝吉、大谷房吉等四名の小品を陳列した。

第二十三回廣島縣美術協會展(綜合)

五月一日—十日 縣產業獎勵館

廣島縣下の公募展で、日本畫四十點、洋畫百十點、彫刻工藝十八點を陳列した。

第十五回表裝展

五月一日—十二日 東京府美術館

東京表裝師組合の第十五回展で陳列總數三百六十六點。授賞(表展賞)鈴木原司(銀賞)藤卷正志、天野清次郎、清水善次(銅賞)松本包吉外十四名(褒狀)岡島將矩外三十九名。

構造社第十回展(彫刻)

五月一日—二十日 東京府美術館

彫刻團體として最も主要な位置を占める構造社は、昨年より文展に参加することとなり、昨年は自らの展覧會も開かなかつた爲、從來在野團體としての意氣の喪失が懸念されないでもなかつたが、茲に第十回展を開催して前回に劣らぬ内容の充實を示し潑刺たる活動を示したことは欣ばしかつた。

會員は何れもよく努めて出品し、一般出品も四九〇點

の中三八點を採ると云ふ嚴選で、總計九六點を陳列、其の他に昭和十年三十八歳で他界した陽成二の遺作總計一五五點を陳列した。此の會の作風は各人各様の傾向を示して必しも一定せず、中には趣味的に墮するもの、方向の上で健全さの危ぶまれるものも無いとは云へぬが、概して新鮮な研究的態度を示すことは、成功と否とに拘らず將來の發展に希望を持たせるものがある。

會員の中で最も注意すべき多面な活動を示したのは安永良徳であつた。立體派的表現を以て異色を示す作家であるが、今回は「アラベスク連作の一」の如き大膽で意力的な構成を示す大作から、裝飾的な「建築裝飾のためのレリーフ」、小品「メダル原型」等浮彫にも自由な手腕を示し、「サロメ」「圓錐狀のコムポジション」等多方面な才氣を見せてゐる。齊藤素蔵の古典に學んだ「布の習作」は眞摯なる自然研究の態度を示し、「電氣通信學界賞牌」は斯種の佳品である。後藤清一の一諸作は感覺的な美しさが主となつてゐる。會友に推薦された宮地寅彦は動物彫刻に研究の種々を示して鋭い觀察と質の優れた技術を見せた。特別陳列の陽成二遺作は、「降誕の釋迦」「サロメ」等の代表的作品を初め殆ど全生涯に亘り、多數のメダル、繪畫、其の他餘技南京豆細工等をも蒐め、故人の優れた天分と特質を遺憾なく示す好展觀であつた。

構造賞「猶(B)」宮地寅彦

研究賞「綠地」星野健一、「習作」佐藤仁宗、「Sの像」森本清水

會友推薦 進藤武松、柚月芳、宮地寅彦

グロツス版畫展示會

五月二日—五日 銀座・ブリュッケ

福田憲一日本畫個展

五月二日—六日 京城日報社來青閣

第二回小石川植物園洋畫小品展

五月二日—六日 大阪・美術新論社畫廊

中上大至良日本畫個展

五月二日—六日 富山・海電ビル

松島畫舫春季日本畫展

五月三日—五日 東京美術俱樂部

東西の作家三十餘名の新作を蒐めた。荒木十畝「秋」、川端龍子「春汀遊禽」、橋本關雪「夕顔」、小杉放庵「若葉の江」、田中咄哉州「薰風」、太田聽雨「笛」、杉山寧「鯉」、畠山錦成「林檎」、小林古徑「菊」等が出陳された。

讀畫會第三十回展 (日本畫)

五月三日—十六日 東京府美術館

陳列總數七十二點。會長荒木十畝の紙本橫物「四季花鳥」四點は筆格の正しさを推すべきもの、其の他池上秀畝の「春寒」、永田春水「春日」、湯原柳畝「春宵」等先輩作家の出品は常套を出でず、新人中にも矚目すべき制作を見出し難い。

授賞 (讀畫賞) 龜割隆志 (獎勵賞) 中島晃華、梅岡玉菴 (佳作) 新山草羊、杉山笛美

皆川月華個展 (染色)

五月四日—十二日 大阪・大丸

第三回レ・リテ展 (洋畫)

五月五日—七日 銀座・紀伊國屋

現代畫壇代表大家傑作畫展觀

五月五日—七日 名古屋・松坂屋

神保盤三郎洋畫小品展

五月五日—八日 大阪・美交社

第十回大美展 (日・洋)

五月五日—九日 大阪・朝日會館

大阪美術學校同窓會主催

第五回東北美術展 (日・洋)

五月五日—十四日 仙臺・縣中央圖書館

宮城縣並河北新報社主催。日本畫、洋畫の公募展で鑑査には前田青邨、安井曾太郎の兩名が當つた。日本畫三

十點、洋畫七十八點。

米倉壽仁、阿部芳文二人展 (洋畫)

五月六日、七日 銀座・日本サロン

萬珠堂新作陶器展

五月六日、七日 京橋・萬珠堂

レクラメ・クンスト銀座集團第一回ボスター展

五月六日—八日 銀座・ブリュッテ

黑曜會第二回日本畫展

五月六日—八日 京都・大毎會館

大毎京都支局後援。會員は林正廣、小川立夫、武藤章等九名。作品數二十四點。

第八回京都工藝美術展

五月六日—十一日 大禮記念京都美術館

京都府商工課内の京都工藝美術協會主催に依る公募展で、陶器、染織、漆器、竹工、木工、圖案等計四百十三點を陳列した。

授賞 (協會賞) 米澤蘇峰、今大路長光 (特賞) 加茂靈峰、細田永輔、塚本正造、伊東翠壺 (選匠賞) 野村蝶二

井上悦之助、井上傳七、平山樂水、長谷川白峯、中村鵬生

中川紀元日本畫展

五月六日—十一日 日本橋・三越

『水郷風趣』の(一)は誠に心持の好い佳作で、これこそ一政も恆友も、放庵も莊八も持つてゐない畫境の放縱さがあり、紀元の得意さが躍如としてゐる。佛像の數點はちよつと理解し難い點もあるが『吉祥天女』は微笑を禁じ得ぬもの、また『南船北馬』の大作になると、いよいよ紀元の日本畫として銘を打つて出る意氣込は見えた。(報知五・八に依る)

福與悅夫日本畫個展

五月六日—十一日 大阪・三越

矢野陶々作陶展

五月六日—十二日 日本橋・三越

近作の花入、香爐、茶入等を展觀した。

伏原春芳堂新作畫展 (日本畫)

五月七日—九日 東京美術俱樂部

京都の表具師伏原春芳堂主催の日本畫展、陳列數三十六點。竹内栖鳳の鯉を描いた四尺橫物の「國瑞」を初め川合玉堂「瀧壺」、菊池契月「最澄」、小林古徑「菖蒲」、前田青邨「齡百有六」、荒木十畝「春」、西山翠嶂「新緑東山」、堂本印象「兎」、金島桂華「ベルシャ猫」、兒玉希望「夏木立」等何れも力作で好評であつた。

永井宏油繪、ガラス繪展

五月七日—九日 神戸畫廊

中尾達洋畫個展

五月七日—十日 宮崎・商工會議所

黑瀬宗世鐵鎚起名品展

五月七日—十二日 日本橋・高島屋

川瀬竹春仿明古陶磁展

五月七日—十二日 日本橋・高島屋

JAN第六回展 (洋畫)

五月八日—十日 銀座・紀伊國屋

千葉縣綜合美術第三回展

五月八日—十日 銚子・公正會館

二科研究所展 (洋畫)

五月八日—十二日 新宿・天城畫廊

陽洋會第二回洋畫展

五月八日—十二日 銀座・日本サロン

齊々會第二回彫刻展

五月八日—十二日 銀座・資生堂

近藤光紀洋畫個展

五月八日—十二日 大阪・美術新論社畫廊

澤田宗山作陶個展

五月八日—十三日 京城・三越

橋本太久磨洋畫個展

五月八日—二十日 新宿・喫茶店エルテル
西丸小園門下彩桂社習作展（日本畫）

五月九日—十二日 日本橋・白木屋
太田三郎日本畫及洋畫個展

五月九日—十二日 名古屋・松坂屋

日本漆藝院展

五月九日—十五日 日本橋・三越

昨年五月東京に於ける代表的漆藝團體として結成された日本漆藝院が、同人作品約六十點、公募入選作品二十三點を陳列して第一回展を開いた。舊套を墨守せず徒に新奇の効を急がずと云ふ主張でそれぞれの努力を見せたが、矢張り佳作は古典的な美を捉へた物に多く、モデルルーム連作和室及洋室の近代めいた家具等整せぬ嫌があった。

授賞（日本漆藝院賞）本間舜花、辻喜一郎、山永光市

大村素峰、船本汀

大倉陶園新作展

五月九日—十五日 日本橋・三越

大阪アンデパンダン小品展

五月九日—十五日 大阪市立美術館

井上永悠日本畫作品展

五月九日—十五日 大阪・阪急百貨店

工華社第四回工藝作品展

五月九日—十七日 銀座・松屋

内藤四郎、深瀬嘉臣外七名が組織する金工、陶工、漆工の同人展。

第一美術協會第九回展（洋、彫）

五月九日—二十四日 東京府美術館

洋畫三百三十七點、彫刻三十六點を陳列した。

「會員自身」の會を現代洋畫壇の第一線に活躍するものとしてをらぬのだらう。さういふ傾向は公募作品の審査にも現はれ、無くもがなの作品が壁間を塞いでゐるの

も一層この展覽會の活氣を失はせてゐる。比較的目立つ仕事としては松見吉彦の『もの想ふ頃』、林明善『春畫』、御厨純一『菊庭』、河邊梅村『C像』、石川重信『二探婦』、長谷川富三郎『裏大山』等を擧げることが出来る（都に依る）

授賞 繪畫部（第一美術賞、副賞船岡賞）山樹寅二郎、

三上恭三郎（果原奨勵賞）谷井喜三郎（フローレンス賞）

長谷川富三郎 彫刻部（第一美術賞）松本庄志

京都圖案會春季圖案競技展

五月十日 京都美術館

基督教美術第三回展

五月十日—二十日 神田・YMCA

泰西名家版畫展

五月十日—二十日 神戸畫廊、大阪美交社

最近フランスより將來された十七八世紀より現代に及ぶ名家の銅版、石版、木版等約百點を陳列した。

第十一回下鴨在住畫家作品展

五月十一日—十三日 京都・大丸

薄田芳彦洋畫展

五月十一日—十五日 大阪・三角堂

「浮名三味線」挿畫展

五月十一日—十七日 京都・大丸

日本木彫會展

五月十一日—十八日 大阪・朝日會館

大阪朝日新聞社後援。陳列數七十五點。

赤松麟作近作油繪展

五月十一日—二十一日 大阪・阪急百貨店

日本民藝館春季特別展

五月十一日—六月十三日 目黒・日本民藝館

土田麥儒遺作素描展覽會

五月十二日—十六日 日本橋・三越

土田麥儒逝いて早くも一年を経たが、同家に遺された

故人の絶えざる研鑽の跡を物語る、夥しき習作素描の中より約二百點を選出、同好者に頒つ爲此の展覧が催された。芍藥、燕子花、蓮、朝顔、罌粟等の克明な寫生から多くの舞妓習作、最後に未完成に終つた朝鮮風俗の人物習作迄、何れも麥儒の畫道に於ける足跡を記念するもので、其の寫生の態度と製作に對する用意とを窺ふに好き参考を供したものであつた。花卉等の寫生には鋭く硬い鉛筆の線描に成るもの多く、舞妓等には毛筆で朱の細線を用ひたものが多く見られ、寫形と線條に嚴格な彼の作風は素描にも十分に其の特色を示したものであつた。日本畫家の習作素描が斯くの如く展覧されたことは殆ど初めてであり、日本畫の素描と洋畫の素描との比較といふ點にも興味ある問題を提出するものであつた。

第五回境藝會彫刻展

五月十二日—十六日 名古屋・丸善

アルペール・コルフ ミニアチュール肖像畫展

五月十二日—十七日 日本橋・三越

東西大家新作繪畫展

五月十二日—十七日 大阪・三越

但馬出石焼、永山、永信父子作陶展

五月十二日—十七日 大阪・三越

岡墨光堂東西中京諸大家作品展

五月十三日—十四日 大阪美術俱樂部

第三十八回同志社洋畫展

五月十三日—十五日 京都・丸物

青丹會第七回洋畫展

五月十三日—十七日 銀座・三味堂

三木辰夫エツチング個展

五月十三日—十七日 銀座・青樹社

デ・ザミ第一回展（洋畫）

五月十三日—十七日 銀座・紀伊國屋

井南居士催水墨畫展

五月十三日—十七日 銀座・紀伊國屋

五月十三日—十七日 日本橋・高島屋
井南居の主催で東西作家の水墨畫三十餘幀を陳列した。
日本人形社第二回展

五月十三日—十七日 大阪・三越
第百二回日本美術協會展（書、篆刻）

五月十三日—十九日 上野・日本美術協會
第二回物故十二畫家遺作同願展（洋畫）

五月十三日—二十六日 新宿・天城畫廊
淺井忠の油繪小品「巴里郊外」「グレーの雪」二點を初め、滿谷國四郎の「榕樹の下」、佐伯祐三「ガラージ」其の他東條鉦太郎の油繪一點、岸田劉生、森田恆友の素描等合計三十五點を展覧した。

富岡鐵齋遺作展

五月十四日、十五日 日本橋・白木屋
近藤光紀洋畫個展

五月十四日、十五日 大阪・清交社
曾我英吉油繪展

五月十四日—十六日 銀座・日動畫廊
東丘社春風會第一回作品展（日本畫）

五月十四日—十六日 京都・大丸
堂本塾東丘社内に於ける新進を以て組織する會の第一回展。構圖色彩等に裝飾的様式化を行つた作品が多い。三輪晃勢「山」、曲子光男「春風」、戸島光雄「流れ」等が目された。

大橋廉堂山水畫幅展

五月十四日—十六日 京都・宮崎平安堂
第四回青樹社美術展（日本畫）

五月十四日—十六日 名古屋・伊藤銀行樓上
横山龍生、安藤美雲、鳥谷自然等六名の同人と九名の研究會員の作品を出陳した。

武田新太郎渡歐後援展（日、洋、版）

五月十四日—十六日 京都・大丸

備前燒名工作品展

五月十四日—十七日 名古屋・松坂屋
東西大家新作畫展（日本畫）

五月十四日—十七日 大阪・三越
九泉會大阪展

五月十四日—十七日 大阪・十合
第三回京大北大合同美術展（洋畫）

五月十四日—十七日 大禮記念京都美術館
京都帝大學友會美術部主催。

草芽會工藝展

五月十四日—十八日 銀座・資生堂
七彩洋畫小品展

五月十四日—十八日 大阪・美術新論社畫廊
出品者は吉村芳松、小磯良平、柚木久太ほか五名。
網島靜寛個展（日本畫）

五月十四日—二十日 日本橋・白木屋
美術懇話會展觀

五月十五日 美術研究所
美術懇話會の例會として、過般公開展覧されたドイツ名作素描畫中より主なるもの二十四點を選んで展覧し、ハンス・メーレ博士の講演を行つた。

塚本茂渡佛記念展（洋畫）

五月十五日—十七日 前橋市商工會議所
第五回東臺美術展（綜合）

五月十五日—十七日 奈良會館
名古屋高工學生制作作品展

五月十五日—十七日 同校
長井雲坪遺墨展觀

五月十五日—十七日 新潟・不動院
一曜會展

五月十五日—十八日 神田・東京堂
富田溪仙遺作展覽會（日本畫）

五月十五日—二十二日 大禮記念京都美術館

昨年七月逝いた富田溪仙の業績を追懷する爲、其の代表的作品を蒐めた遺作展が、京都と東京の兩都で前後して開かれることとなつた。京都展は大禮記念京都美術館の主催であつたが、作品の選擇から陳列に至る迄東京展に關聯して日本美術院同人等の盡力に依つたものであり又經費の多くを富田家が負擔した。出陳點數一二四點、故人遺作の主なるものが蒐められた。（六五頁參照）

三春會第四回展（洋畫）

五月十五日—二十三日 東京府美術館
昭和三年東美校卒業生の會で大澤昌助、福島順之助、三木辰夫、鈴木重成、加藤久幹等穩健な畫風を示して居る。

上社會第十回展（洋畫）

五・一五—二三 東京府美術館

昭和二年東美校卒業生の同級會で、此の種の會では最も興味が多い。

「帝展、春陽、獨立等で活躍して居る中堅所が集つてゐて日本洋畫壇の縮圖の様な觀がある。……高橋弘二氏の氣の利いたタツチと色彩で描いた風景は佳作。中西利雄氏の水彩は技巧はうまいが深味がない。森寅雄氏の風景は末梢的だ。猪熊弦一郎氏の「トリオ」殆んど赤一色の線の種々な交錯で以てリズムカルなものを奏でてゐる。だが一寸人を食つた感じ。岡田謙三氏の「花を持てる女」は餘りに病的な美しさだ。加山四郎氏では「アコリデイオン」がよい。色彩形態共に苦心研究されてゐる。慾をいへば固い感じがどうにかならぬものか……小磯良平氏の三點、氏のアカデミズムには詩的なものが匂つてゐる」（中商）

田能村直入遺作展覽會

五月十五日—三十一日 恩賜京都博物館

田能村直入歿後三十周年を機とし、遺作並に關係資料

等百四十餘點が展覧された。其の主なるものに、御物「梅
花書屋圖」(明治十七年作)、久通宮家御貸下の「寒雞紅
梅・秋兔黃菊圖」(明治三十二年作)を初め、明治十八
年皇居御造營の爲に描き奉つた杉障下繪なる「雞頭花白
鶴・翠柳白鷺圖」(二曲屏一雙、畫神堂藏)があり、又舊
主豊後藩主中川修理太夫久賢へ献上の爲、數年の歲月を
費して描いた「十八賢士登瀛圖」(明石町米澤吉次郎藏)、
山陰に遊んで寫生した「嶺上看雲圖」(明治九年作、島根
縣田邊長右衛門藏)、「内谷眞景圖」(明治十一年作、島根
縣櫻井三郎右衛門藏)なる淡彩の山水、又濃彩の花弁圖
を代表すべき「四季花卉圖卷」(明治二十四年作、倉敷
市大原孫三郎藏)等の作品があつた。その他、寫生帖を
初め、竹田の作品縮圖なる「疎月帖」、「南畫津梁稿本」、
「京都畫學校設立建議案」等の稿本、版木及び遺印等も
併せ陳列された。九十四歳の高齡を保ち而も多作であつ
た直入の全貌を知悉せんとすれば猶足らざる憾がないと
は云へぬが、初期より晩年に至るまでの作品を偏る所な
く集め之を年代的に陳列したことは、彼の作品の系統と
發展を知る上に好個の展覧であつた。

出 陳 目 録

御物 梅花書屋圖	絹本着色	一幅	兵庫縣 小島元三郎藏
久通宮殿下御貸下 寒雞紅梅・秋兔黃菊圖	同	雙幅	京都市 石田吉左衛門藏
久通宮殿下御貸下 雞頭花白鶴・翠柳白鷺圖	同	二曲屏	京都市 平野利兵衛藏
久通宮殿下御貸下 十八賢士登瀛圖	絹本着色	一幅	大阪府 美濃部丹水藏
久通宮殿下御貸下 嶺上看雲圖	絹本着色	一幅	明石市 米澤吉次郎藏
久通宮殿下御貸下 内谷眞景圖	絹本着色	一幅	大阪府 高濱彌兵衛藏
久通宮殿下御貸下 四季花卉圖卷	絹本着色	一幅	堺市 古家太郎兵衛藏
久通宮殿下御貸下 疎月帖	絹本着色	一幅	大阪府 古家太郎兵衛藏
久通宮殿下御貸下 南畫津梁稿本	絹本着色	一幅	堺市 古家太郎兵衛藏
久通宮殿下御貸下 京都畫學校設立建議案	絹本着色	一幅	堺市 古家太郎兵衛藏
久通宮殿下御貸下 版木及び遺印等	絹本着色	一幅	堺市 古家太郎兵衛藏
久通宮殿下御貸下 直入の全貌	絹本着色	一幅	堺市 古家太郎兵衛藏
久通宮殿下御貸下 集め之を年代的に陳列したことは	絹本着色	一幅	堺市 古家太郎兵衛藏
久通宮殿下御貸下 發展を知る上に好個の展覧であつた	絹本着色	一幅	堺市 古家太郎兵衛藏
久通宮殿下御貸下 群芳爭妍圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 花卉山水人物果菜圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 玉堂富貴圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 高士觀瀑圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 百老圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 關羽圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 茅海八景圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 孔子像	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 清溪仙隱圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 十八賢士登瀛圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 猿兒戲猿圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 清溪高士圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 秋景山水圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 群芳々畫像	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 紙維圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 風竹圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 加賀千代俳畫	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 三味線箱(秋草月圖)	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 鯉圖 小猷	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 畫帖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 西園雅集圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 山水圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 十六羅漢像	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 臨竹田居士畫及國詞帖紙本淡彩二帖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 黃茶翁圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 四節句圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 桐陰高士圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 繪手本	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 東山三十六峰圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 如意輪寺遠望圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 青澗茶會圖記	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 楠木正行公像	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 對山臨水圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 神功皇后圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 高砂翁繼圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 讚畫二州寫景帖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 淡州寫景帖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 白紙の文圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 郭家壽陽圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 華甲雅宴圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 柳陰山水圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 嶺上看雲圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 金殿山紀行書畫	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 內谷眞景圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 古志八勝圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 鬼舌靈寶畫帖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 風月三昇、玉堂富貴圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 梅仙圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 旭日雲波圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 關溪漁老圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 山水圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 臨竹田居士	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 白雲一帶圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 臨王建草畫	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 松溪練丹圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 十八羅漢圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 鳴鶴真景圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 撫古帖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 田能村直人翁自畫	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 讀小影	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 櫻花圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 商山誌志圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 雞頭花白鶴・翠柳白鷺圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 鷺鷥圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 命圖明治十八年御用紙本著色	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 御用命杉障畫稿	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 晴朝賞楓圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 雲中觀音圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 竹田居士像	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 三姓實壽圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 妙々庵三字	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏
久通宮殿下御貸下 耶馬溪圖	絹本着色	一幅	大阪府 田中宗一藏

美術展覽會（五月）

高砂翁蠟像	松溪錄丹竹樓看月	富貴長年圖	梅天壽勝圖	劉伯倫酒頰	玉川茶歌圖	四季花卉圖	竹葉觀世音像	十州煙霞圖	雲中壽老圖	都名所圖	寒江獨釣圖	山邨風味圖	十八羅漢圖	梅花老屋圖	幽翠隱泉圖	夏溪飛瀑圖	白衣大士像	雙樹連峰圖	豐公像	山水圖	秋莊養真圖	溪樓賞秋圖	傲雲林真蹟圖	老子出關玉榮圖	五老同榜圖	溪山訪友圖	米法山水圖	紙鑑圖	積善修行裕子孫七字	梅溪寄老圖	四老圖	山水圖	十八阿羅漢圖	柳陰漁艇圖	布袋圖				
紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色				
雙幅	三幅	一幅	一幅	六曲屏	一雙	一卷	一幅	一卷	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	六曲屏	一幅	一幅	一卷	三幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅				
岡山縣	久我於菟一郎藏	野崎丹斐太郎藏	神戶市	大阪府	倉敷市	同	京都市	京都市	京都市	京都市	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同					
久我於菟一郎藏	野崎丹斐太郎藏	若井源左衛門藏	白井英太郎藏	大原孫三郎藏	同	平尾竹霞藏	米澤吉次郎藏	長谷川安兵衛藏	赤尾白雲藏	芝田正太郎藏	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同					
衛岳層巒圖	松松茂林圖	直人翁添筆自	畫像孫備雄作	伏見人形圖	壽山福壽圖	松圖	畫神堂梅園圖	めてたくし一行	辭世詩	寫生帖	耶馬溪真景圖	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同					
臨王鑑	紙本淡彩	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色	紙本著色					
一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅	一幅					
岐阜縣	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同					
原	信	道	中	時	夫	藏	石	田	其	四	郎	藏	八	田	兵	次	郎	藏	西	村	彌	兵	衛	藏	井	箇	專	介	藏	田	能	村	直	雙	藏				
田	中	時	夫	藏	石	田	其	四	郎	藏	八	田	兵	次	郎	藏	西	村	彌	兵	衛	藏	井	箇	專	介	藏	田	能	村	直	雙	藏	田	能	村	直	雙	藏
田	中	時	夫	藏	石	田	其	四	郎	藏	八	田	兵	次	郎	藏	西	村	彌	兵	衛	藏	井	箇	專	介	藏	田	能	村	直	雙	藏	田	能	村	直	雙	藏
田	中	時	夫	藏	石	田	其	四	郎	藏	八	田	兵	次	郎	藏	西	村	彌	兵	衛	藏	井	箇	專	介	藏	田	能	村	直	雙	藏	田	能	村	直	雙	藏
田	中	時	夫	藏	石	田	其	四	郎	藏	八	田	兵	次	郎	藏	西	村	彌	兵	衛	藏	井	箇	專	介	藏	田	能	村	直	雙	藏	田	能	村	直	雙	藏
田	中	時	夫	藏	石	田	其	四	郎	藏	八	田	兵	次	郎	藏	西	村	彌	兵	衛	藏	井	箇	專	介	藏	田	能	村	直	雙	藏	田	能	村	直	雙	藏
田	中	時	夫	藏	石	田	其	四	郎	藏	八	田	兵	次	郎	藏	西	村	彌	兵	衛	藏	井	箇	專	介	藏	田	能	村	直	雙	藏	田	能	村	直	雙	藏
田	中	時	夫	藏	石	田	其	四	郎	藏	八	田	兵	次	郎	藏	西	村	彌	兵	衛	藏	井	箇	專	介	藏	田	能	村	直	雙	藏	田	能	村	直	雙	藏
田	中	時	夫	藏	石	田	其	四	郎	藏	八	田	兵	次	郎	藏	西	村	彌	兵	衛	藏	井	箇	專	介	藏	田	能	村	直	雙	藏	田	能	村	直	雙	藏
田	中	時	夫	藏	石	田	其	四	郎	藏	八	田	兵	次	郎	藏	西	村	彌	兵	衛	藏	井	箇	專	介	藏	田	能	村	直	雙	藏	田	能	村	直	雙	藏
田	中	時	夫	藏	石	田	其	四	郎	藏	八	田	兵	次	郎	藏	西	村	彌	兵	衛	藏	井	箇	專	介	藏	田	能	村	直	雙	藏	田	能	村	直	雙	藏
田	中	時	夫	藏	石	田	其	四	郎	藏	八	田	兵	次	郎	藏	西	村	彌	兵	衛	藏	井	箇	專	介	藏	田	能	村	直	雙	藏	田	能	村	直	雙	藏
田	中	時	夫	藏	石	田	其	四	郎	藏	八	田	兵	次	郎	藏	西	村	彌	兵	衛	藏	井	箇	專	介	藏	田	能	村	直	雙	藏	田	能	村	直	雙	藏
田	中	時	夫	藏	石	田	其	四	郎	藏	八	田	兵	次	郎	藏	西	村	彌	兵	衛	藏	井	箇	專	介	藏	田	能	村	直	雙	藏	田	能	村	直	雙	藏
田	中	時	夫	藏	石	田	其	四	郎	藏	八	田	兵	次	郎	藏	西	村	彌	兵	衛	藏	井	箇	專	介	藏	田	能	村	直	雙	藏	田	能	村	直	雙	藏
田	中	時	夫	藏	石	田	其	四	郎	藏	八	田	兵	次	郎	藏	西	村	彌	兵	衛	藏	井	箇	專	介	藏	田	能	村	直	雙	藏	田	能	村	直	雙	藏
田	中	時	夫	藏	石	田	其	四	郎	藏	八	田	兵	次	郎	藏	西	村	彌	兵	衛	藏	井	箇	專	介	藏	田	能	村	直	雙	藏	田	能	村	直	雙	藏
田	中	時	夫	藏	石	田	其	四	郎	藏	八	田	兵	次	郎	藏	西	村	彌	兵	衛	藏	井	箇	專	介	藏	田	能	村	直	雙	藏	田	能	村	直	雙	藏
田	中	時	夫	藏	石	田	其	四	郎	藏	八	田	兵	次	郎	藏	西	村	彌	兵	衛	藏	井	箇	專	介	藏	田	能	村	直	雙	藏	田	能	村	直	雙	藏
田	中	時	夫	藏	石	田	其	四	郎	藏	八	田	兵	次	郎	藏	西	村	彌	兵	衛	藏	井	箇	專	介	藏	田	能	村	直	雙	藏	田	能	村	直	雙	藏
田	中	時	夫	藏	石	田	其	四	郎	藏	八	田	兵	次	郎	藏	西	村	彌	兵	衛	藏	井	箇	專	介	藏	田	能	村	直	雙	藏	田	能	村	直	雙	藏
田	中	時	夫	藏	石	田	其	四	郎	藏	八	田	兵	次	郎	藏	西	村	彌	兵	衛	藏	井	箇	專	介	藏	田	能	村	直	雙	藏	田	能	村	直	雙	藏
田	中	時	夫	藏	石	田	其	四	郎	藏	八	田	兵	次	郎	藏	西	村	彌	兵	衛	藏	井	箇	專	介	藏	田	能	村	直	雙	藏	田	能	村	直	雙	藏
田	中	時	夫	藏	石	田	其	四	郎	藏	八	田	兵	次	郎	藏	西	村	彌	兵	衛	藏	井	箇	專	介	藏	田	能	村	直	雙	藏	田	能	村	直	雙	藏
田	中	時	夫	藏	石	田	其	四	郎	藏	八	田	兵	次	郎	藏	西	村	彌	兵	衛	藏	井	箇	專	介	藏	田	能	村	直	雙	藏	田	能	村	直	雙	藏
田	中	時	夫	藏	石	田	其	四	郎	藏	八	田	兵	次	郎	藏	西	村	彌	兵	衛	藏	井	箇	專	介	藏	田	能	村	直	雙	藏	田	能	村	直	雙	藏
田	中	時	夫	藏	石	田	其	四	郎	藏	八	田	兵	次	郎	藏	西	村	彌	兵	衛	藏	井	箇	專	介	藏	田	能	村	直	雙	藏	田	能	村	直	雙	藏
田	中	時	夫	藏	石	田	其	四	郎	藏	八	田	兵	次	郎	藏	西	村	彌	兵	衛	藏	井	箇	專	介	藏	田	能	村	直	雙	藏	田	能	村	直	雙	藏
田	中	時	夫	藏	石	田	其	四	郎	藏	八	田	兵	次	郎	藏	西	村	彌	兵	衛	藏	井	箇	專	介	藏	田	能	村	直	雙	藏	田	能	村	直	雙	藏
田	中	時	夫	藏	石	田	其	四	郎	藏	八	田	兵	次	郎	藏	西	村	彌	兵	衛	藏	井	箇	專	介	藏	田	能	村	直	雙	藏	田	能	村	直	雙	藏
田	中	時	夫	藏	石	田	其	四	郎	藏	八	田	兵	次	郎	藏	西	村	彌	兵	衛	藏	井	箇	專	介	藏	田	能	村	直	雙	藏	田	能	村	直	雙	藏
田	中	時	夫	藏	石	田	其	四	郎	藏	八	田	兵	次	郎	藏	西	村	彌	兵	衛	藏	井	箇	專	介	藏	田	能	村	直	雙	藏	田	能	村	直	雙	藏
田	中	時	夫	藏	石	田	其	四	郎	藏	八	田	兵	次	郎	藏	西	村	彌	兵	衛	藏	井	箇	專	介	藏	田	能	村	直	雙	藏	田	能	村	直	雙	藏
田	中	時	夫	藏	石	田	其	四	郎	藏	八	田	兵	次	郎	藏	西	村	彌	兵	衛	藏	井	箇	專	介	藏	田	能	村	直	雙	藏	田	能	村	直	雙	藏
田	中	時	夫	藏	石	田	其	四	郎	藏	八	田	兵	次	郎	藏	西	村	彌	兵	衛	藏	井	箇	專	介	藏	田	能	村	直	雙	藏	田	能	村	直	雙	藏
田	中	時	夫	藏	石	田	其	四	郎	藏	八	田	兵	次	郎	藏	西	村	彌	兵	衛	藏	井	箇	專	介	藏	田	能	村	直	雙	藏	田	能	村	直	雙	藏
田	中	時	夫	藏	石	田	其	四	郎	藏	八	田	兵	次	郎	藏	西	村	彌	兵	衛	藏	井	箇	專	介	藏	田	能	村	直	雙	藏	田	能	村	直	雙	藏
田	中	時	夫	藏	石	田	其	四	郎	藏	八	田	兵	次	郎	藏	西	村	彌	兵	衛	藏	井	箇	專	介	藏	田	能	村	直	雙	藏	田	能	村	直	雙	藏
田	中	時	夫	藏	石	田	其	四	郎	藏	八	田	兵	次	郎	藏	西	村	彌	兵	衛	藏	井	箇	專	介	藏	田	能	村	直	雙	藏	田	能	村	直	雙	藏
田	中	時	夫	藏	石	田	其	四	郎	藏	八	田	兵	次	郎	藏	西	村	彌	兵	衛	藏	井	箇	專	介	藏	田	能	村	直	雙	藏	田	能	村	直	雙	藏
田	中	時	夫	藏	石	田	其	四	郎																														

が、中には奇に過ぎて用途に適せぬものや、「實在型」を
狙ふものが見られたのは、尙考慮さるべきであらう。
工藝指導所、陶磁器試験所其の他の指導施設が多く賛
助出品してゐることは此等の機關が工藝團體との協力を
示すもので、相互の爲頗る有意義な事を喜びたい。

應募出品數九八三、入選數一七五、陳列數三一六點、
實在工藝賞「梨花文箱」磯矢阿伎良
實在工藝獎勵賞「葉」(敷物) 大野玉枝

出品目録 (○會員△無鑑査)

蔓手花瓶	△西村 敏彦	毛糸入れ	安倍 郁二	天鰲絨繡	山岸 堅二	鑄銅水盤山椒魚△森 耀一郎	陶管構成上繪	アツブリケ壁掛	高畑 侃子
鐵鉢	長谷川 昇	ルリ釉菊形花瓶	岡本 爲治	タツシヨシ	華紋タツシヨシ△武蔵貞波留	花瓶	多畑 宗設	鐵黃銅花瓶	野崎南海雄
花瓶染付	○河村喜太郎	鑄銅花挿	山本 達次	華紋タツシヨシ	○廣川松五郎	新製西洋食器染	京都陶磁器	人形、日暮れ方	久保 金平
燭臺B	田中 芳郎	ビーヤ・マツグ	西川 友武	黄磁「カタツ	眞鍋 知道	品製地紋(贊助	試驗所	茶いつ	古代 幸三
廣口花瓶	○高村 豊周	ビーヤ・マツグ	同	鐵香爐	竹内元之助	ダイナセット	同	箱	野口 恒喜
草模模花瓶	國領 素夫	ビーヤ・マツグ	同	燭臺	芳武 茂介	サービス皿	肉皿	繪馬風裝飾額	大坂府工業
彫漆燭煙具	○佐藤 陽雲	都心の印象	田澤 清美	燭臺	△大坪 重周	スーパ皿	萬子皿	郷土鹿蹄染色壁掛磯部	方盆(贊助出品)
額面(染)	○廣川松五郎	紅茶碗色繪	○河村喜太郎	鑄銅花生B	豊田 勝秋	萬子皿	萬子皿	照明具	同 橋圓盆(同)
鐵花器	山口 寅尾	寶石箱	田中 顯雄	青銅花瓶	廣瀬英五郎	萬子皿	萬子皿	成小棚	同 同
チーズ盆	西川 友武	鑄銅花生A	○豊田 勝秋	鑄銅花瓶	△とよ子	萬子皿	萬子皿	拔蠟吳須繪茶酒	○新井 謹也
花器	○豊田 勝秋	鐵砂八角鉢	中村 幸節	鑄銅花瓶	八井 孝二	萬子皿	萬子皿	眞鍮魚型外裝掛鏡長谷川	界
御所人形「鈴を	運田 修次	シヤボテン燭臺△深瀬 嘉臣	山田 豊	鑄銅花瓶	△河村喜太郎	萬子皿	萬子皿	着色磁器レモネードセット	一組
持つわらべ	野口 光彦	屈脚文小宮	山田 豊	鑄銅花瓶	△武蔵貞波留	萬子皿	萬子皿	均窯手茶碗	青磁アイスクリーム碗一組
蔓人	稻場 勝邦	灰落	○丸山 不忘	鑄銅花瓶	秋葉小屏風	萬子皿	萬子皿	青磁アイスクリーム碗一組	龜邊灰皿
寶石箱	武内 信弘	花人	中川 哲哉	鑄銅花瓶	染色小鳥籠壁掛	萬子皿	萬子皿	他材料品トノ結合	レモンカツプ二個
置物グレイハンド	北村 一郎	張拔紙裝人形少女山本	壽	鑄銅花瓶	共蓋吳須繪水指	萬子皿	萬子皿	洋酒カツプ(陶辰)	一組
手箱	○吉田源十郎	机	○吉田源十郎	鑄銅花瓶	風爐	萬子皿	萬子皿	彫刻工藝化ボンチャイナ照	明具
刺繡壁掛	夏井 清	鑄鐵花挿	小泉 清一	鑄銅花瓶	女片側帶B	萬子皿	萬子皿	花模樣卓子セン	山脇 敏子
印櫃	増田 三男	色紙かけ	長濱市之助	鑄銅花瓶	花盛	萬子皿	萬子皿	花模樣卓子セン	山脇 敏子
菓子盛器	高橋 節郎	談話室セツト	白木屋家具	鑄銅花瓶	一位菓子鉢	萬子皿	萬子皿	花模樣卓子セン	山脇 敏子
耳付展砂點描	○新井 謹也	喫煙具	藍原 義也	鑄銅花瓶	染色テーブル	萬子皿	萬子皿	花模樣卓子セン	山脇 敏子
花瓶	萩原 富雄	糸巻スタンド	安部 郁二	鑄銅花瓶	セーター	萬子皿	萬子皿	花模樣卓子セン	山脇 敏子
燭臺A	田中 芳郎	煙草人	金田 諒三	鑄銅花瓶	花瓶	萬子皿	萬子皿	花模樣卓子セン	山脇 敏子
魚小宮	越村 計三	即興小品A(銀)	○高村 豊周	鑄銅花瓶	象(張子)	萬子皿	萬子皿	花模樣卓子セン	山脇 敏子
染色小屏風	般若富久造	花鳥更紗文果物盛北出塔次郎	豐周	鑄銅花瓶	盛器	萬子皿	萬子皿	花模樣卓子セン	山脇 敏子

コンバクト	山口 春哉	線彫花瓶	○新井 謹也	筆	吉田 竹堂	八方形切子文花瓶總領	政吉
ハンドバツクE	長濱重太郎	壁面鏡(出工藝 綜合作)	村山 幸久	水盤四方形	○河村喜太郎	蟬のある花瓶	内藤 春治
日向葵ハンドバツク	河合 研二	婦人用ヘヤー・ブ ワッシュ・セツト	古澤 忠	銅製十二支	△森 耀一郎	大皿筒指	木村二瓶子
皮草履	熊谷重太郎	萬子器	井上 周平	水果皿	○新井 謹也	小棚	○吉田源十郎
葡萄帶止	高木 進	寒暖計	内藤 四郎	雑器人	竹澤 金平	○新井 謹也	○新井 謹也
花瓶第一	○丸山 不忘	人形・雀こい	佐伯 義雄	手付パン籠	島田 正夫	鹿置物	八井 孝二
吳須給花瓶	○新井 謹也	明色一輪挿	岡 二郎	無地萬子鉢	竹澤金九郎	銅製花插	○内藤 春治
燭臺	加藤 正之	玉兎	秋山 光喬	エツグ・ホウル ダー	喜多村作太郎	乾漆四方盆	山永 光甫
張技紙装人形置山本	壽	夏期飾盆	○豊田 勝秋	○吉田源十郎	大原 彰	皮染風呂先屏風	廣川松五郎
松のれん	○木村 和一	吳須給四方口花 瓶	和田 義三	うるし彫卓 ○佐藤 陽雲	小箱	彫漆視箱	○佐藤 陽雲
花瓶金綱手	○河村喜太郎	花盛器	運田 修次	○吉田源十郎	人形C	小箱	小原 覺三
花瓶瑠璃	同	刺繡掛	平野利太郎	壁面照明器	大町 存	花瓶	○高村 豊周
水盤	畑 正夫	人形A	五味 文郎	花器B	○丸山 不忘	白銅大皿	○高村 豊周
卓掛	○木村 和一	刺繡掛	五味 文郎	汲出し茶碗色給	○河村喜太郎	金線入菓子鉢	金田 諒三
鐵製盤花盛器	石井 嘉之	刺繡掛	五味 文郎	盛器	芳武 茂介	漆器果實盛	高見 九藏
羊齒文様花瓶	黒瀬 英雄	松の葉宮	天津ゆたか	黄銅花生	○豊田 勝秋	寸筒花瓶	○高村 豊周
黄ト赤	太田 通	隅棚と一輪ざし	○佐藤 陽雲	黄銅花生	○豊田 勝秋	芽生香爐	小林 佑光
書齋調度の一部	上田 蘭	彫漆帶止	芳武 茂介	永字透香爐	○新井 謹也	梨花文箱	△磯矢阿伎良
茶卓皮センター△大坪	重周	彫漆帶止A	○佐藤 陽雲	貼り交ぜ小屏風	渡邊 春男	塗分フルーツセ ット	熊谷 幸七
花と鏤の喫煙具△深瀬	嘉臣	彫漆帶止B	同	ビス益大	竹澤 金平	即興小品B	○高村 豊周
龜(張子)	△小畑 雅吉	ネクタイ入宮	大坪 重周	熊の形による	○高村 豊周	花器	○佐藤 陽雲
服飾金銅一輪	△深瀬 嘉臣	松竹梅帶止金具△深瀬	嘉臣	線模様花瓶	吉田 光雄	彫漆香盒	河合 研二
ざし	△深瀬 嘉臣	銅製帶止	△中村 董一	経ぐるみ、象	森 省三	銅頭及衝立	伊藤 宣宏
テーブル掛	川見ストシ	噴水塔	同	桐の實模様卓布	伊藤 宣宏	花瓶	金井 武男
ネクタイD	杉岡 辰雄	バツクル	大町 存	花瓶	雲出 雪枝	銅製花瓶	○豊田 勝秋
綴織ハンドバツク小村	常子	バツクル	大町 存	螺旋一輪挿シ	下 暢	灰皿 三(同)	同
刺繡ハンド	圓城寺てい子	バツクル	大町 存	○新井 謹也	同	小箱(同)	同
船魚模様ハン ドバツク	小松山 勇	バツクル	大町 存	桐の實模様卓布	雲出 雪枝	シガレット(同)	同
刺繡ハンドバ ツク	八幡 義正	バツクル	大町 存	花瓶	雲出 雪枝	ボックス(同)	同
手織錦帶締	八田 泰造	バツクル	大町 存	螺旋一輪挿シ	下 暢	新聞雜誌人(同)	同
綴織ハンドバツク和田	秋野	バツクル	大町 存	○新井 謹也	同		
皮織ハンドバツク二口志保子	高橋 山昌	ナフキンリング	織田 眞一	山 中 勇	加藤 陶香		
花瓶	○木村 和一	帶止	増田 三男	銅製水盤	加藤 陶香		
「花と虫」丸帯	○木村 和一	重ネ喫煙具	平野 泰三	銅製鉢	加藤 陶香		
果物盛器試作	鈴木 泰	堆漆帶止	矢部 豊平	衝立	△清水 五郎		

果物盛(贊助出品)	商工省工藝 指導所	紅茶摘茶地はぎ	商工省陶磁 器試験所
鑄鐵アルミニウ ム落シ入水盤	岩手縣工業 試験場	合せ(同)	戸試験場
(同)	同	ビール吞(同)	同
砂鐵灰皿(同)	同	萬子皿(同)	同

第十六回朝鮮美術展覽會(綜合)	五月十六日—六月五日	京城・景福宮内
本年四月朝鮮美術展覽會の規程が一部改正せられ、同展の鑑査は從來の如く中央の大家に囑託すると共に、新たに在鮮美術家を「參與」として之に與らしめることとなつた。本年の査査員は大野政務總監を長として、東洋畫に荒木十畝、洋畫に田邊至、彫塑及工藝に津田信夫が囑託せられ、例年よりや、嚴選の方針を採り、實質的に進歩が認められた。		
鑑査の成績は左の通りであつた。		
出品數	入選數	
第一部東洋畫	一三九	四二
第二部西洋畫	九〇八	一四〇
第三部彫塑工藝	一六四	八九
合計	一二一一	二七一
而して陳列總數は推薦、無鑑査出品等を合し、東洋畫五二、西洋畫一五三、彫塑二二、工藝七二であつた。		
授賞		
昌德宮賜賞(第一部) 金基昶(第二部) 金仁承(第三部) 山田勝二		
朝鮮總督賞(第一部) 田中文字(第二部) 沈享求(第三部) 戸張幸男		
特選(第一部) 田中文字、安保道子、朴元壽、宇野佐太郎、江口敬四郎、金基昶(第二部) 金仁承、沈享求、猪川克己、星野二彦、安武芳男、大塚與志、田中紀弘、金重鉉(第三部) 權雲龍、金現彬、趙基俊、杉光武右衛門、鎌田範子、岩佐久代、淺川牧榮、美昌園、李萬升、山田勝二、金復鎮、戸張幸男		

パリ會第一回展(洋畫)

五月十七日—二十日 銀座・日動畫廊

嘗てパリに留學したことのある洋畫家の親睦團體で、流派を問はず、會員六十餘名が出品した。

上野山清實洋畫個展

五月十七日—二十三日 神田・文房堂

ドイツ國實名作家素描展

五月十七日—二十三日 大禮記念京都美術館

東京に於ける展覽會終了後、日獨文化協會、獨逸文化研究會及び京都市の共同主催、後援に大阪朝日新聞社が加はつて京都展を開いた。尙之を機會として五月十八日ドイツ文化研究所で記念講演會が開かれた。

第七回素顔社展(洋畫)

五月十八日—二十一日 銀座・紀伊國屋

現代大家新作畫展

五月十八日—二十一日 大阪長堀・高島屋

飯田操朗遺作展(洋畫)

五月十八日—二十二日 銀座・青樹社

「昨秋若くして逝いた飯田君のため、福澤一郎氏等の肝煎で開かれた。寫實から出た數點を除いては、全部超現實主義に立脚しての作品である……故人は獨立展で二回までも受賞し、會友まで推されただけあつて、現實に對しての考も確で、その現實から繪畫の純粹性をのみ見出し、畫面を締め上げんとした眞摯なる努力が充分に認められる」(東朝)

明治、大正、昭和諸大家遺作油繪展

五月十八日—二十三日 大阪長堀・高島屋

大阪長堀高島屋では、明治、大正、昭和の間に物故した四十餘作家の遺作品約百五十點を諸方より蒐めて展覧し、概ね賣却に附した。目錄に依れば淺井忠、五百城文哉、川村清雄、山本芳翠、黒田清輝、五姓田義松、原田直次郎、中村葵、青木繁、青山熊治、岸田劉生、萬鐵五郎

大下藤次郎等の名が擧げられ、其の他キヨッネ、ビゴー、フオンタネージ等の小品も出陳された。中で中村葵の「自畫像」「目白の初冬」、大下藤次郎の水彩五點等は佳品であつた。外に滿谷家の出品に係る故滿谷國四郎の遺作二十四點が特別展覧された。

現代諸大家名作彫刻展

五月十八日—二十三日 大阪長堀・高島屋

文展及び院展の彫刻家三十名の小品並に餘技工藝品を陳列した。

日本民藝館撰日本新民藝品展

五月十八日—二十三日 大阪長堀・高島屋

日本民藝館が贊助して新時代民藝品の指標を示す意味で、芹澤銈介、外村吉之助、船木道忠等の作品を展覧した。

筆耕會服飾圖案展

五月十九日 京都商工會議所

寸松會錄倉彫り作品展

五月十九日—二十二日 銀座・松屋

和田英作洋畫鑑賞會

五月十九日—二十二日 大阪・三角堂

東西大家綜合繪畫展(日本畫)

五月十九日—二十二日 名古屋・松坂屋

尾張の御國燒展

五月十九日—二十二日 名古屋・松坂屋

海外美術工藝品展

五月十九日—二十三日 日本橋・三越

創建社壁畫展

五月十九日—二十三日 銀座・日本サロン

東邦彫塑院小品展

五月十九日—二十三日 日本橋・高島屋

會員三十名が各々小品一、二點を出品した。
第一美術伸光會小品展(洋畫)

五月十九日—二十三日 蒲田・田園

伊藤慶之助近作洋畫展

五月十九日—二十三日 大阪・美術新論社畫廊

紅鼎會第二回油繪展

五月十九日—二十四日 銀座・三味堂

竹器と指物陳列會

五月十九日—二十五日 日本橋・三越

四行會第四回展(洋畫)

五月二十日—二十四日 銀座・資生堂

川口軌外洋畫展

五月二十日—二十四日 大阪・松坂屋

西洋美術工藝品展

五月二十日—三十一日 銀座・ラスキ

日本水彩畫會第二十四回展

五月二十日—六月六日 東京府美術館

水彩畫三百七十六點を陳列した。丸山晚霞、眞野紀太郎、石川欣一郎、南薰造、白瀧幾之助、石井柏亭等先輩會員は各自の境地を守つて變らず、後進の中では中西利雄、脇田和、渡邊菊二、荻野康児等の出品が比較的特徴を示して注目されたが、内容は乏しい。全體に技術的な進歩は認め得ても、各作品は個性に乏しく、藝術的には甚だ空虚に近い。特別陳列として旅行畫作品である赤城泰舒の南支風景寫生十六點及び春日部たすくの朝鮮滿洲風景十三點があつた。尙六歳になる一兒童の水繪數點が多く、示唆を與へるものとして參考陳列された。

新會員 名柄正之、中田早、岡崎祇容、鈴木榮二郎
授賞(日本水彩畫會賞) 坂江重雄(第一賞) 原達三
(キング賞) 長澤昇(みづる賞) 草野米子(ベエルネ賞)
竹林順一(ホルバイン賞) 古川弘(王様旅行賞) 富田溫一郎

高橋虎之助洋畫展

五月二十一日、二十二日 大阪ホテル

宮脇公實第一回油繪個展

五月二十一日—二十三日 銀座・ラテン畫廊

日本南畫松聲會展

五月二十一日—二十三日 神戸・大丸

三木弘染色美術個展

五月二十一日—二十三日 京城・鐘紡

岡墨光堂藝名展（日本畫）

五月二十一日—二十三日 京都美術俱樂部

猪熊弦一郎第二回作品發表會（洋畫）

五月二十一日—二十五日 銀座・日動畫廊

油繪二十餘點、人物小品が多い。美の阜近な側面を享樂して居り、感覺は純粹である。色彩、線、形の構成は優れ、作者の非凡な稟性を示す。唯缺けて居るものは思想であり、畢竟は浮世繪の耽美主義以上に出不い。「緑の女」「裸女立像」「椅子による女」「董色の帽子」等は佳作である。

瀧澤淳個展（洋畫）

五月二十一日—二十七日 新宿・喫茶店エルテル

茨城美術第七回展

五月二十一日—三十日 水戸・茨城會館

東京諸大家洋畫展

五月二十一日—三十一日 大阪・阪急百貨店

青木柄古日本畫個展

五月二十二日、二十三日 名古屋美術俱樂部

飯田實洋畫個展

五月二十二日、二十三日 臺北・朝日寮

造型圖案作家陣第一回展

五月二十二日—二十四日 銀座・伊東屋

梶井一夫第二回洋畫展

五月二十二日—二十四日 神戸畫廊

雲道人金鼎個展（書畫、篆刻、木額）

五月二十二日—二十五日 大阪・中村屋

彩々會第二回洋畫展

五月二十二日—二十六日 銀座・紀伊國屋

安部治郎吉油繪展

五月二十二日—二十六日 銀座・交詢社ビル

第四回時事彫刻研究會展

五月二十二日—二十七日 日本橋・白木屋

第四回楚人社洋畫展

五月二十二日—三十日 札幌・中島公園農業館

日本彫刻家協會第一回展

五月二十二日—六月六日 東京府美術館

昨春、武井直也、雨田光平、早川巍一郎等が創立した同會の第一回公募展である。陳列數八十二點、制作態度は概して思索的であるが本格なデッサンに乏しい作品が多く、ために表情的ではあるが弱々しく又卒直でない。武井直也の「女立像」、黒田嘉治の「習作」、林是の「腰掛けた女」等表情的な甘さが氣になり、又菅沼五郎、中村七十の作品は觀念的に趣味的要素が多い。其の他早川巍一郎の「尾崎氏像」、加藤顯清の「少女スケッチ」等が注目された。佐土哲二、雨田光平の作品は安易に傾いた觀があつた。

加藤溪泉日本畫展

五月二十三日—下谷鶯谷・倚樂

高村光雲遺作木彫展

五月二十三日 長岡・常盤樓

律動第一回展（洋畫）

五月二十三日—二十七日 銀座・青樹社

平安名人會美術工藝品第二回展

五月二十三日—二十七日 京都・十合

獨佛エツチング作品展觀

五月二十三日—二十九日 日本橋・白木屋

最近獨佛より將來されたアルツール・ヘンネ、ハンス・ルートマン及ロード・ピサロ三名のエツチング各々約十

點を陳列した。

仙田雲山紙本作品展

五月二十四日 名古屋・長母寺養虫庵

早川國彦水彩畫展

五月二十四日—二十七日 名古屋・松坂屋

鎮山五月試作展

五月二十四日—二十八日 神戸・プチギヤラリー

新日本畫研究會第三回展

五月二十四日—二十九日 銀座・松坂屋

吉岡堅二、福田豐四郎其の他新進二十名に依つて組織される。福田豐四郎の「華永」「月と小魚」、吉岡堅二の「馬」等は感覺、形式の新しさの故に世評の的となつた。柴田安子の「馬市歸路」も明快な作品であつた。概して思ひつきに依る裝飾的構想の作品であるが、新日本畫創作への一過程として注目される。

白閃社第一回日本畫展

五月二十四日—二十九日 銀座・松坂屋

小室翠雲の門人十二名が組織する南畫の團體。小室翠雲は「南喧」を賛助出品した。

煌土社第三回展（日本畫）

五月二十四日—三十日 日本橋・白木屋

野田九浦塾の展覽會。野田九浦は「相撲」を出品、其の他吉岡堅二、鈴木朱雀、上田春芳、石山太柏等三十餘名の門人が出品した。

第五回童林社展（洋、彫）

五月二十四日—六月三日 東京府美術館

昭和六年に東美校油繪科及び彫刻科に入學した同期生を以て組織する。在佛中の廣瀬正雄の油繪七點、故澤柳善人の遺作彫刻五點等が注目された。

パル創案團第八回展

五月二十五日、二十六日 銀座・伊東屋

現代大家新作綜合展

五月二十五日、二十六日 名古屋美術俱樂部
谷道霞嶺南畫展

五月二十五日、二十六日 神戸・明海ビル
荒木十畝紙本畫幅展

五月二十五日、二十六日 新潟新聞社
木芽會第八回展（彫刻）

五月二十五日、二十七日 銀座・交詢ビル
里見公起第二回日本畫個展

五月二十五日、二十七日 神戸畫廊
森村宣裕日本畫個展

五月二十五日、三十日 日本橋・三越
近作二十九點を陳列、土佐派を學び、枯淡にして雅致
があり、茶室掛けに適する。

第一回海洋美術展（洋畫）

五月二十五日、三十日 日本橋・三越
海軍協會主催、海軍省後援。海洋を主題とした各派洋
畫家の新作百五十點を展覧した。國民の海事思想を鼓吹
するを目的とする。

第二回セブン彫刻小品展

五月二十五日、三十日 上野・松坂屋

工人社第九回工藝品展覽會

五月二十五日、三十日 日本橋・高島屋

進歩的な金工作家等に依つて組織されてゐる會で、斯
種展覧中最も注意される一つである。十五名の會員が各
々數點宛を出品、其の他に本年からは紹介出品として同
人以外の作家十餘名の作品を併せて陳列した。概して装
飾的要素を主とした作品が多いが、何れも材料の使用、
技法、意匠等に新たな工夫を見せて近代的な趣致の表現に
努めてゐる。板金の巧みな使用を見せたものが多く、又
金屬と硝子の組合せに面白い効果を擧げてゐるものが注
意された。大須賀喬の「象嵌角花瓶」、岡部達男の「ファ
イヤ・スクリーン」、鴨幸太郎の「喫煙具」、各務鏡

三の「衝立」、田村泰二の「魚の置物」「勝利者」（額）、
村越道守の「魚槽」、信田洋の「翼」、安井喜一の「トロ
フィー」、佐藤潤四郎の「吹込硝子釣花瓶」、北原千鹿の
「芽生文金彩花瓶」、紹介出品で増田三男の「茶箱」青
木滋芳の「蕨繖片側帶」等種々の意味で興味あるものと
して擧げる。

主線美術協會小品展（洋、彫）

五月二十五日、三十日 大阪・松坂屋

藤田嗣治日本畫個展

五月二十五日、三十日 大阪・松坂屋

野間仁根洋畫個展

五月二十五日、三十日 大阪・美術新論社畫廊

讀畫會關西展

五月二十五日、三十日 大阪・大丸

寄々苑創作品發表會

五月二十五日、三十日 京都・大丸

西村千太郎小品畫展

五月二十五日、三十一日 名古屋市中區矢場町・喫
茶二科

創作觀光ボスター展

五月二十五日、三十一日 名古屋市中區廣小路・電氣普
及館

第七回留加會展（洋畫）

五月二十五日、六月三日 東京府美術館

文化學院美術部出身者の團體で、出品者は三十餘名、
陳列數百二十餘點。

第十二回國畫會大阪展

五月二十五日、六月三日 大阪・朝日會館

名取春仙歌舞音曲畫題小品展

五月二十六日、二十七日 銀座・ラテン畫廊

大原實學書具美術品展

五月二十六日、二十七日 大阪美術俱樂部

五月二十六日、二十七日 大阪美術俱樂部

中橋悦子趣味の手藝作品展

五月二十六日、二十七日 大阪・阪急百貨店

第一回日本風景畫小品展（日、洋）

五月二十六日、三十日 銀座・資生堂

風景協會主催。知名の日本畫家、洋畫家の作品四十四
點を陳列した。

加治屋隆二第二回油繪個展

五月二十六日、三十日 銀座・三味堂

アイヌ手工藝品展

五月二十六日、三十日 札幌・丸井デパート

道廳及社會事業協會主催。

七華會染色陳列會

五月二十六日、三十日 大阪・三越

庭山耕園社中第九回展（日本畫）

五月二十六日、三十日 大阪・三越

我妻碧宇個展（日本畫）

五月二十六日、三十日 名古屋・丸善

麗人社第一回展（洋畫）

五月二十七、三十日 銀座・紀伊國屋

閃人社第一回日本畫展

五月二十七、三十一日 銀座・日本サロン

伊東深水塾の新進が組織する研究團體の第一回展。

灰野文一郎油繪個展

五月二十七、三十一日 新宿・天城畫廊

第二回伏虎美術協會展（洋畫）

五月二十七、六月二日 和歌山縣商品陳列所

和歌山縣出身の洋畫家を以て組織する縣下の公募展で
裕伊之助、濱地清松、川口軌外、木下孝則、木下義謙、
村井正誠等が會員として出品した。

富田溪仙遺作展覽會（日本畫）

五月二十七、六月四日 上野・日本美術協會

富田溪仙の代表的遺作を蒐めた展覽會が前記京都展に

引續き、日本美術院の主催に依つて東京に開催された。陳列数は京都の場合より二十餘點を増して百四十八點。而も昭和五年第十七回院展出品の「雲々烟の鹿」の如き畢生の力作の出品を見なかつたが、其の他は東西ともほぼ同様の展観であつた。

兩者を通じて年代の最も早いものは明治三十三年京都美術協會新古典美術品展出品の「隠者」で、二十二歳の作として既に侮るべからざる技量を示す。同三十九年同じく新古典美術品展出品の「伎藝天」の大作では技意圖に及ばぬものあるは當然であらう。大正元年第六回文展出品の「鶴船」は從來の四條派畫風を一洗し独自の新畫風を樹立した記念的作品であり、恐らく彼一代の代表作の一として考へられて不當でない。院展參加後のものは同展出品作の殆ど總ての外にも作品甚だ多く、何れも其の強烈な自我表現に於て興味深きものがあつた。由來溪仙は一個の作品の完成よりは不斷の進歩を意圖した作家として、其の作品の多くは常に未完成の儘に置かれた感があるが、一見奔放なる畫風の中にも周到なる用意を藏し、而も其の總てに稟賦の輝しさを見る、現代に類例を絶つた作家であつたことは此の生涯の作品を一堂に蒐めて明かに認め得る所であつた。大正十年第八回院展出品の「八瀬の春」「小原の秋」、昭和五年「雲々烟の鹿」、昭和八年第二十回院展出品の朝香宮御所藏「御室の櫻」等は蓋し不朽の名に値するものであらう。

陳列目錄

隱者	絹本着色	一幅	福岡市	河原田平助藏
稻荷山	同	一幅		小島元三郎藏
如意輪觀音像	同	一幅	東京市	齋田元二郎藏
淀	絹本裏箔 著色	六曲 一双	高岡市	室崎佐太郎藏
大正六年第四回院展出品				
獅子猛進	絹本着色	一幅	京都市	富田 裕子藏
紙本墨畫一幅	同		内貴清兵衛藏	
大正元年第六回文展出品別作				

雙龍帖	畫冊	京都市	内貴清兵衛藏
伎藝天	同	清水 寺藏	
果實	絹本着色	一面	石井一之助藏
仙人遊鶴	絹本淡彩	一幅	兵庫縣 麻野 惠三藏
西行櫻	絹本著色	一幅	東京市 松下 健一藏
大正七年試作展出品			
鴨渚の月	絹本着色	一幅	西宮市 橋本 信一藏
大正十五年個展出品			
十六羅漢	絹本着色	一幅	同 井上德兵衛藏
祇園夜櫻	同	一幅	東京市 橋本 秀磨藏
大正十年アメリカ展出品			
蟬	絹本着色	一幅	神戸市 佐藤 榮作藏
大正十四年第十一回院展出品			
暮春合奏	金地彩色	一幅	横濱市 新居金三郎藏
清水の夕晴	絹本着色	一幅	大阪市 島田誠三郎藏
大正十年個展出品			
獅子佛性	絹本淡彩	一幅	京都市 富田 裕子藏
神泉苑雨罷	絹本着色	一幅	神戸市 松岡 貞吉藏
大正十五年個展出品			
山國隊凱陣	絹本着色	一幅	京都市 藤野外次郎藏
春日野	金地彩色	對幅	西宮市 井上德兵衛藏
大正十二年第十回院展出品			
廣澤彩霞	絹本着色	一幅	大阪府 永井 專三藏
大正十五年個展出品			
大羊に乗る兒	絹本淡彩	一幅	京都市 土井 久彌藏
風神雷神	絹本着色	四曲 一双	同 飯田 新七藏
大正六年第四回院展出品			
愛宕山夕照	絹本着色	一幅	兵庫縣 持田 卓二藏
高津青嵐	同	一幅	神戸市 藤村豊太郎藏
大正十五年個展出品			
山海經	絹本淡彩	畫帖	京都市 内貴清兵衛藏
大正元年第十三回新古典美術展出品			
支那山海經	絹本淡彩	二帖	同
大正元年第六回文展出品別作			
瀧	絹本著色	一幅	京都市 出崎 鶴吉藏
大正元年第六回文展出品別作			
多佳良船	絹本着色	一幅	大阪府 貴志 米吉藏
昭和三年個展出品			
大原の秋	絹本着色	二曲 一双	京都市 内貴清兵衛藏
八瀬の春	同		
大正十年第八回院展出品			
赤不動	絹本着色	一幅	大阪府 川合 純一藏
蘭亭流觴	絹本着色	一幅	京都市 出崎 鶴吉藏
昭和三年個展出品			
伊勢(同)	絹本着色	額	同 富田 裕子藏
三上山と悠紀齋田	絹本着色	額	同
(近江)	絹本着色	額	同
續大日本六十餘州の内	同		
波上吟詠	絹本着色	一幅	兵庫縣 中江 龍二藏
昭和三年個展出品			
養老孝子	絹本淡彩	一幅	京都市 森 秀之助藏
昭和三年個展出品			
落葉山	絹本着色	一幅	京都市 佐藤 梅吉藏
祇園の櫻	絹本着色	二曲 片双	静岡縣 鹽坂淺次郎藏
聖母マリア	絹本着色	額	京都市 増田德兵衛藏
牡丹	絹本着色	一幅	神戸市 山田 清定藏
昭和三年個展出品			
老松の鷹	絹本着色	一幅	京都市 山田 和吉藏
芍藥	同	一幅	東京市 平橋 京子藏
孔雀明王	同	一幅	神奈川 伊東秀之介藏
孔の森	絹本着色	一幅	高松市 細溪宗次郎藏
昭和五年第二回奉讃展出品			
浦島	絹本着色	双幅	京都市 土井 久彌藏

(臺灣漫畫紀行畫冊)

瀧取盧島 絹本着色 一幅 京都市 出崎 鶴吉藏
昭和三年個展出品

優曇鉢鉢羅	昭和七年第十九回院展出品	畫帖一帖	西宮市	武智正次郎藏	宇治川の巻	絹本着色	橫物	京都府	荒野權四郎藏	嵯峨八景	大正八年第六回院展出品	六曲	大阪市	川端德三郎藏
梅林踏鶴	絹本着色	一幅	東京市	齋藤吉十郎藏	享保立權	絹本着色	橫物	京都府	富田 裕子藏	廣澤落雁、小倉秋月	大正八年第六回院展出品	六曲	京都府	富田 裕子藏
陽春三花	絹本着色	一幅	東京市	近藤 茂吉藏	コブ牛	絹本墨畫	橫物	東京市	川勝 堅一藏	同	同	六曲	京都府	富田 裕子藏
露中の紅葉	同	一幅	同	伯曾松平 賴壽藏	幻化	著色	六曲	京都府	同	同	同	六曲	京都府	富田 裕子藏
同人展出品	同	一幅	同	伯曾松平 賴壽藏	大正十一年第九回院展出品	著色	六曲	京都府	同	同	同	六曲	京都府	富田 裕子藏
三條大橋	絹本着色	一幅	京都市	出崎 鶴吉藏	中之島	絹本着色	橫物	東京市	川勝 堅一藏	放鶴	絹本着色	一幅	京都市	内貴清三郎藏
萬葉の花	同	一幅	川崎市	川島 廣吉藏	吉野春風	同	一幅	同	平尾 贊平藏	廣々峯	同	一幅	兵庫縣	野村元五郎藏
踏青會第二回展出品	同	一幅	同	同	春虹會第二回展出品	同	一幅	同	同	大正十年個展出品	同	一幅	京都市	富田 裕子藏
聖地の華	絹本着色 一幅	東京市男爵大倉喜七郎藏	紙漉	絹本着色	二曲	臺北市	梅本安之助藏	嵐峽の春	絹本着色	一幅	京都市	同	同	同
昭和五年イタリイ展出品	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
日本八景	絹本着色 一冊	兵庫縣	山田多計治藏	夏の嵐	絹本着色	一幅	京都市	出崎 鶴吉藏	嵐峽の秋	絹本着色	一幅	京都市	同	同
朝香宮御所藏御室の櫻	絹本着色 二曲	同	同	朝陽八重山櫻	同	一幅	西宮市	武智正次郎藏	絶筆	絹本着色	一幅	京都市	同	同
昭和八年第二十回院展出品	同	同	同	英道布磨圖	同	一幅	東京市	大森吉五郎藏	同	同	同	同	同	同
淀城	絹本着色 一幅	東京市	齋藤 隆三藏	紫陽花	同	一幅	西宮市	武智正次郎藏	辯才天(小)	絹本着色	一幅	同	同	同
昭和五年チエツコスロバキア展出品	同	同	同	傳書鳥	同	二曲	京都市	大禮記念京都美術館藏	桃栢榴	絹本着色	一幅	川口市大熊武右衛門藏	同	同
糺の杜	絹本着色 一幅	大熊武右衛門藏	春暖	同	絹本着色	一幅	東京市	齋藤吉十郎藏	同	同	同	同	同	同
那智の瀧	同	同	深井 英五藏	洛東華頂山	同	一幅	同	能坂 彌造藏	菊慈童	絹本着色	一幅	東京市	遠藤 兵作藏	同
昭和十年五葉會展出品	同	同	同	浪漫詩畫集	同	一冊	大阪府	川合 純一藏	圓山暮雪	絹本着色	一幅	同	荒木 芳男藏	同
河鹿鳴く鈴	絹本着色 一幅	同	本田啓次郎藏	「觀ジユネヴィエーヴ」クロ	詩集	一冊	東京市	山内 義雄藏	天降	同	一幅	京都市	土井 久彌藏	同
踏青會第一回出品	同	同	同	「觀ジユネヴィエーヴ」クロ	裝畫	一冊	東京市	富田 裕子藏	歸去來	絹本淡彩	一幅	同	佐藤 梅吉藏	同
菊	絹本着色 一幅	香川縣	中條 孝行藏	四風帖 クローデル合作	畫帖	一冊	京都市	同	迅瀨の鵲	絹本	二曲	同	某 藏	同
修學院離宮春雪	同	西宮市	武智正次郎藏	長谷寺(四風帖の内)	一葉	一冊	東京市	吉江 喬松藏	花籠	絹本着色	一面	東京市	野中 春子藏	同
大日本六十餘州四季之内	同	京都市	富田 裕子藏	京洛四季	紙本卷物	二卷	兵庫縣	林 作太郎藏	亂舞	同	一面	大阪市	石川 さく藏	同
大正十五年第十四回院展出品	同	同	同	昭和三年個展出品	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
紅花絲柳帖	絹本 畫帖	大阪府	中村孫次郎藏	武者	絹本着色	一幅	京都市	西村源次郎藏	同	同	同	同	同	同
大正十五年個展出品	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
雪中鹿	絹本淡彩 一幅	同	岸本吉左衛門藏	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
秋草	絹本着色 一幅	京都市	河合忠次郎藏	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
涅槃	絹本淡彩 一幅	同	藤野外次郎藏	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

美術展覽會 (五月)

歲寒三雅	絹本着色 一幅	東京市	寺内新太郎藏
鯉魚	絹本着色 雙幅	京都市	白崎榮次郎藏
糸瓜栗鼠	同	同	富田 裕子藏
樹下誕生	同	同	同
あぢさゐ	同	同	同
洛西野宮	同	同	同
太極殿	絹本着色 一幅	東京市	小川 敏夫藏
梅尾晚秋	二幅	京都市	谷利 茂助藏
列仙	二幅	東京市	荒木 芳男藏
大正九年第七回院展出品、王延、嬰夫人、朱孺子、羅真人、孫登、蕭史、張九哥、鑾甥、葛去	絹本着色 二幅	西宮市	井上德兵衛藏
櫻	一幅	東京市	司城 之義藏
神庫草稿	一幅	同	同
櫻 寫生	一幅	京都市	富田 裕子藏
南泉新稿	一幅	同	同
狗子佛性	二幅	同	山田 和吉藏
波上辯才天	二幅	同	富田 裕子藏
歡喜天草稿	一幅	同	同
鹿 寫生	一幅	同	同
雪達磨	一幅	同	同
波上萌鶴	一幅	同	同
太秦牛祭	一幅	同	同
飲中八仙	一幅	同	同
華頂山の夜櫻	一幅	同	同
享保雜	一幅	同	同
拾桶の花	一幅	同	同
曲水遊鶴	一幅	同	同

大原女 某 藏
蘭亭曲水 東京市 遠山 芳三藏

大日美術院第一回展 (日本畫)

五月二十七日—六月五日 東京府美術館

本年二月結城素明、川崎小虎、青木大乗の三名に依つて創立された大日美術院が作品を公募して第一回展を開いた。同人の發表機關と云ふよりは新進奨励の爲の會と見られる。同會が發表した趣旨からも、同人等の頼頼からも、其の奨励の方向は洋畫風を多く取り入れた新日本畫風を促すものであらうと推察されたが、陳列された作品は愈々其の傾向を明確にしたものであつた。一般出品は搬入一六三點中から六四點を探り、其の他に上記三名の審査員作並に招待出品として常岡文龜、加藤榮三の作品を加へて總計六九點を陳列した。出品者は東京美術學校出身又は在學中の若い人々が多數を占め、此の會の傾向は又同校日本畫科の主なる畫風を示すものとも見られる。

既成の凡有る流派から離れて藝術を興さんとする意氣はよいが、多くの作品を通じて早くも一つの型が出来つつある如く見えるのは反省を要する點であらう。或る評者が「青白いフアンタジー」と評した如く、胡粉を厚く塗抹して白づく乾いた畫面が多く、健康な感覺の退嬰を思はせる幻想好みの作が多い。中では藤森青芸の「溪間」が優れた出来であつた。常岡文龜の「萌芽」は上述の如き傾向の代表をなす力作で、獨自の様式化と色調に壁面裝飾的効果を見せてゐる。青木大乗の焚火は構圖の苦心にも拘らず寫形に不足があり、全體は弱いものとなつた。

大日美術院賞「芭蕉」菅澤幸司

協賛會賞「溪間」藤森青芸

大毎東日賞「斷崖」山田申吾

高野眞美洋畫個展

五月二十八日—三十日 大阪・美交社
高島正勝洋畫個展

五月二十八日—三十一日 神戸畫廊
新圖案家集團第三回展

五月二十八日—三十一日 銀座・伊東屋
現代諸大家版畫展

五月二十八日—六月一日 銀座・ブリュッテ
十人社野尻湖風景展

五月二十九日、三十日 野尻湖ホテル
宮脇公實洋畫個展

五月二十九日—三十一日 新宿・南海畫廊
第四回くぬぎ會美術展

五月二十九日—三十一日 静岡縣大仁高女
蒼玄社第一回南畫展

五月二十九日—六月二日 大阪・松坂屋
第二回京都市美術展 (綜合)

五月二十九日—六月十七日 大禮記念京都美術館
昭和十年、京都市が美術奨励を目的として創設せる綜

合展で、同年第一回展を開催したが、昨年は春秋二回に

渉る官展開催の爲特に休會され、本年其の第二回展を開

いた。同展は市展なる故に各流派の作家を綜合網羅し、

特に新人の奨励に意を用ひて居る。本年度の審査員及び

鑑査の成績は左記の通りであつた。

審査員 (日本畫) 石崎光瑤、橋本關雪、西村五雲、西山

翠嶂、堂本印象、登内微笑、小野竹喬、川村葉舟、金

島桂華、竹内栖鳳、中村大三郎、宇田萩郎、山口華楊

案本一洋、福田平八郎、福田惠一、榎原紫峰、菊池契

月、水田竹圃 (洋畫) 大橋孝吉、太田喜二郎、鹿子木

孟郎、田中善之助、黒田重太郎、須田國太郎 (彫塑)

沼田一雅、松田尙之、國安稻香 (美術工藝) 沼田一雅

大西淨長、奥村霞城、神坂雪佳、山鹿清華、清水正太

郎、皆川月華、三木表悦

搬入数 入選数

日本畫 五六〇 四三二

洋畫 三七五 一八二

彫塑 五〇 二三

美術工藝 二四九 一一六

合計 一二三四 七五三

別に同展委員の無鑑査出品は日本畫二六、洋畫二八、彫塑三、美術工藝三一、合計八八點を算へた。

受賞者

日本畫一八名

岩本周照、戸島光雄、加藤美代三、高木富三、堤利彦、濱田觀、渡瀬凌雲、川島浩、竹村白鳳、案本武雄、古川政司、會津勝己、澤宏毅、廣田多津、近藤禎成、麻田辨次、榊原始更、樋口富磨

洋畫一二名

飯田清毅、服部喜三、小栗美二、成瀬十郎、松村綾子、三水公平、岩崎又二郎、錦義一郎、高木四郎、山田ふじ子、正木順子

彫刻三名

蘆田政一、柴田和彦、吉田韻示

美術工藝七名

伊東翠壺、田中貞造、長谷川白峰、黒井光琨、天野六郎坊、東端新作、佐野多景夫
尙大禮記念京都美術館に於ては審査委員作品中より左記洋畫二點を買上げた。

黒田重太郎筆「芽出し頃の蘆の湖」

須田國太郎筆「村」

山田兵一油繪展

五月三十一日—六月五日 大阪・三越

六月

美術展覽會（六月）

第一回郷友畫會展（日本畫）

六月一日、二日 名古屋市中區・地藏院

第二回中尾白伸個展（日本畫）

六月一日—三日 神田・東京堂

臨港繪畫展（日、洋）

六月一日—三日 開港記念横濱會館

横濱美術協會々員が、横濱市の臨港地帯風景を描いた洋畫及日本畫五十一點を出品した。

兒玉希望畫塾第一回展（日本畫）

六月一日—四日 日本橋・三越

門下生二十一名が略一點づつを出品、兒玉希望は「首夏」を贊助出品した。

（塾賞）奥田嚴三、福田元子

深澤省三洋畫個展

六月一日—四日 新宿・天城畫廊

第二回新算會同人展（日本畫）

六月一日—四日 京都・大丸

橋本關雪の門下繪崎鐵香、樺崎朱雀等十八名に依り組織される會。橋本關雪は尺八横物の「喜晴」「雨意」の二點を出品した。

第四回清光會展（日、洋）

六月一日—五日 銀座・資生堂

後藤眞太郎の主催に依り一流の作家數名を會員として催す展覧で、昨年を休み本年第四回を開いた。彫刻の出品は無く、又會員の中土田夢僊を失つたが今回は横山大觀の贊助出品を得た。日本畫と洋畫と合せて十點、現代に於ける高度の標準を示す作家達だけに夫々研ぎのか、つた境地を見せ、雑多な展覧會の氾濫する間に在つて稀なる落着きと鑑賞の樂しみを味はせる。安井曾太郎の「少女像」は明快な色彩と要約された筆致に對象の心持をよく捉へ、頗る垢抜けのした畫面に竝々ならぬ苦心を見せた。「ばら」は習作の一と見るべきであらう。梅

原龍三郎はつゆ描きの櫻島「噴煙」と、青を基調とした「朝霧」を出した。後者には執拗な迄の感覚が訴へられてゐる。坂本繁二郎の「仔馬」は獨自の畫材と表現を守り、小林古徑の「若鮎」は品のよい爽かきを見せたが興趣に乏しく、「三寶柑」は試みの一つとして苦心を買ふと共に結果は成功と評し難いものであつた。安田靉彦の「目白」は裝飾的な構圖、横山大觀の「林間遲日」は水墨の松林に楓とつ、じを配し僅に金泥を刷くもの、手に入つた美しい畫面であつた。

出品目録

朝霞、噴煙 梅原龍三郎 若鮎、三寶柑 小林 古徑
仔馬、仔馬 坂本繁二郎 少女像、ばら 安井曾太郎
目白 安田 靉彦 林間遲日（贊助） 横山 大觀

黒色洋畫第十五回展

六月一日—五日 銀座・日本サロン

第四回川端龍子新作畫展（日本畫）

六月一日—五日 大阪長堀・高島屋

作者の大阪に於ける新作展第四回は「熊野路」と題して、其の郷土紀伊に取材した風景草木等十五點を陳列した。從來餘り手を着けなかつたと自ら云ふ風景畫は作者の長所である洋畫的素養が手傳つて新境地を示すものがある。「秋棧圖」「翠澗」「游峽沂行」「鯨洋」「那智」等を主なものとする。外に「潮騒」二曲一双を陳列した。

第三回正洋社洋畫展

六月一日—五日 大阪・錦水堂畫廊

東臺邦畫會第十二回展

六月一日—六日 日本橋・白木屋

在京の東美校日本畫科出身者に依り組織される會で小品が多く不振であつた。

北海道工業試驗場第二回試作陶器展

六月一日—六日 日本橋・高島屋

木下孝則洋畫個人展

六月一日—六日 大阪長堀・高島屋

「一九二九年より一九三七年迄の作品六十點を陳列した。再渡歐數年間の收穫を主とした展覽會で、地味ではあるが好みのよい色調による堅實な作風には本格的な畫品がそなはつてゐる。なかでも『ブロンド・エ・ブリュン』『ミレイユ』『ヴオーエル街のアトリエにて』『コルサージ・フルー』『グローム』『ブリー・バール風景』など優れてゐる」（大朝）

岩井華入創作畫展

六月一日—六日 大阪・南海高島屋

デンマーク版畫展

六月一日—七日 銀座・三越

デンマーク公使の主催で現代同國知名畫家の木版、銅版及び石版畫等約百點を展觀した。

日本畫小品展

六月一日—七日 銀座・三味堂

飯塚薰石近作花籠會

六月一日—七日 日本橋・高島屋

橋本八百二夫妻洋畫展

六月一日—七日 大阪・美術新論社畫廊

立光會第二回洋畫展

六月一日—七日 大阪市立美術館

新興手藝日本風俗人形藝術展

六月一日—八日 銀座・伊東屋

伊東屋主催。

小磯良平近作油繪個展

六月一日—十日 大阪・阪急百貨店

人物を主とする近作二十點を陳列。

三好秀玉作東人形新作發表會

六月一日—十日 京都・大丸

各派特選洋畫小作品展

六月一日—十五日 新宿・喫茶店エルテル

美友會第十一回工藝品展

六月二日—五日 大阪・三越

四元莊第一回展（洋畫）

六月二日—六日 銀座・日動畫廊

鈴木千久馬繪畫研究所の作品展。

關口隆嗣洋畫展

六月二日—六日 京城・三越

青桃會洋畫展

六月三日—六日 大阪市立美術館

桑重新作日本畫展

六月三日—六日 神戸畫廊

エコール・ド・東京展

六月三日—十二日 新宿・南海畫廊

三眞會第一回展（陶、寫、洋）

六月四日—六日 日本商工俱樂部

豐藤勇洋畫個展

六月四日—六日 大阪・三角堂

加藤靜兒近作洋畫日本畫個展

六月四日—六日 岡崎市立圖書館

九大美術展（洋畫）

六月四日—六日 福岡日日講堂

小室孝雄洋畫個展

六月四日—六日 京城・鐘紡

商工省工藝展

六月四日—十日 福岡・産業獎勵館

東陶會第一回日本陶藝展

六月四日—十四日 東京府美術館

今回は同人及一般應募の作品の外に、新しい計畫として全國各地方の陶藝家の出品を招待し、九州、島根、石川、京都、岐阜、愛知、關東等の如く地方別に作品を陳列した。招待出品數は百五十三點、會員の出品六十二點、一般應募數は二百四十一點、其内入選は三十五點で、計

二百五十點を陳列した。

東陶賞 柄本曉舟、伊東翠壺、眞鍋知道、加賀月華

東陶會獎勵賞 長谷川翠光、鈴木則司、堀井赤峰

出光賞 井上良齋、小川雄平、長谷川怒

H賞 安原喜明、土肥乃泉

桑名雲城作畫展（日本畫）

六月五日 京都・南禪寺無隣庵

堀飛火野日本畫個展

六月五日、六日 岐阜・商工會議所

松島一夫作陶展

六月五日—七日 銀座・ブリュッケ

石原壽市、山口實尾、杉原正巳版畫浮彫三人展

六月五日—七日 新宿・天城畫廊

陶試會作品展示會

六月五日—八日 京都・陶磁器試驗所

坂井範一洋畫作品展

六月五日—八日 岐阜・舊圖書館

昭和みつゑ會第一回展

六月五日—九日 神田・東京堂

福田眉仙日本畫個展

六月五日—十日 日本橋・三越

金地屏風六曲一及の「富士五湖」ほか水墨、淡彩等約四十五點を陳列、南畫風の筆致で支那風物を描いたものが多い。

第十五回春陽會大阪展

六月五日—十三日 大阪・朝日會館

大阪産業工藝博覽會

六月五日—十八日 大阪市立美術館、大阪府工業獎勵館

大阪産業工藝博覽會は「工業品の工藝化、雜貨品の美化向上、輸出貿易振興」等を趣旨として本年も商工省後援、大阪府、大阪市、大阪商工會議所、堺市、大阪府工

業懇話會及大阪府工藝協會聯合主催の下に開催された。
陳列種目は、第一部美術工藝品、第二部圖案及包裝意匠
第三部産業工藝品等、第三部は装身具、室内調度品、
家政用具等多種目の實用品類を包括した。鑑査の方針
は第一部は藝術的價值高く、且つ産業的工藝の軌範とな
るもの、其他の部は産業工藝としての諸條件に優れたも
のを標準として、選擇が行はれ、審査には國井喜太郎を
總長とし、第一部、部長杉田精二外十七名、第二部、部
長谷内治橋外十五名、第三部、部長高橋清外三十五名が
其の任に當つた。

鑑査の成績は左の通りである

	出品數	入選數
第一部	四一二	一四二
第二部	八三四	三三八
第三部	六三一二	三七三一
計	七五五八	四二一一

別に無鑑査に依る出品は第一部十三名二十一點、第二
部二名十一點、第三部四名二十一點であつた。

授賞 大阪府知事賞 高見九藏(京都)、大阪市長賞
大阪ミシン製作所(大阪)、大阪商工會議所會頭賞
十時惟臣(大阪) 以下略

岡本壽太郎(彫)鈴木清節(日)二人展

六月六日、七日 名古屋・千代田ビル

表現第五回展

六月六日、八日 銀座・紀伊國屋

野口謙次郎日本畫個展

六月六日、九日 京城・三越

加賀工藝陶人社作陶展

六月六日、十日 名古屋・松坂屋

樋口景堂繪畫展(日本畫)

六月六日、十一日 大阪・三越

太田嘉兵衛洋畫個展

六月七日、八日 京城日報社來青閣
第四回大阪女流畫家第四回展(日本畫)

六月七日、十一日 大阪・三越

生田花朝、木谷千種等を會員とする女流作家の公募展
鑑査には矢野橋村、北野恆富、菅橋彦の三名が當つた。

赤廣煥松正柏遺作陶展

六月七日、十一日 大阪・三越

幽興會第二回日本畫展

六月七日、十三日 上野・松坂屋

古川北華の發企に依る會で、橋本關雪、錢瘦鉄、牧野
虎雄、中川紀元、正宗得三郎、近藤浩一路が會員として
文人畫風な輕い小品を數點宛出品した。

落合朗風追慕朗美術試作展(日本畫)

六月七日、十三日 上野・松坂屋

同會の春季試作展は圖らずも盟首落合朗風の逝去によ
り、追慕展として開かれるに至つた。朗風の遺作は春夏
秋冬の連作「春夢」「彩霞」「秋垣」「雪餘」の四幅對及び
「新秋」「白椿」の二點で、獨自の裝飾的様式化を示し、
色彩は甘美である。何れも今度の試作展出品を目的とし
て描かれたもので、「白椿」は絶筆である。同人の出品は
合計三十一點、中では川口春波の「薰春」「暖冬」ほか二
點が注目された、他の同人は未だ感覺の洗練を缺く。外
に藤田嗣治が支援として「喧嘩」「角力」の二點を出品し
た。前者は六曲一双紙本墨畫で、向つて右に犬、左に猫
の狂亂する態を寫した力作であつた。時節柄、同圖を畫
壇への諷刺と解した評もあつた。

青樹社工藝美術部開設記念展

六月七日、十三日 銀座・青樹社

山村耕花個展

六月八日、十日 函館・丸井デパート

支那新古美術品展

六月八日、十二日 大阪長堀・高島屋

池田治三郎油繪展

六月八日、十二日 大阪・三角堂

石井柏亭近作小品展(洋畫)

六月八日、十二日 大阪・美交社

近作の油繪風景十二點、水彩二十五點を陳列した。

全國農村工藝展

六月八日、十三日 大阪・南海高島屋

京都昭和三十七年回展

六月九日、十一日 丸之内・東京府商工獎勵館

京都の各部門の工藝家を以て組織する。種目は金工、
漆藝、陶磁器、染織等で概して一般商品向である。陳列
數四百三十二點。

兵庫縣美術協會第二十七回展(綜合)

六月九日、十一日 神戸・三越

神戸新聞社後援。陳列數日本畫六十九點、洋畫五十八
點、彫刻及工藝十八點。

河井寛次郎新作陶器展

六月九日、十二日 京都・高島屋

川端龍子の「潮騒の圖」展觀

六月九日、十二日 京都・高島屋

浩然社第五回日本畫展

六月九日、十三日 新宿・三越

喜多武四郎彫刻個展

六月九日、十三日 銀座・三味堂

塑造に依る肖像小品を主として出品した。

二葉會記念展(日本畫)

六月九日、十三日 大阪・松坂屋

古家新洋畫個展

六月九日、十三日 大阪・美術新論社畫廊

辻永邦風油彩畫花卉小品展

六月九日、十四日 日本橋・高島屋

絹、紙等に油繪具を用ひて日本畫風に揮毫した花卉小

品五十餘點を陳列した。

岩田藤七第三回新興硝子器展

六月九日—十四日 日本橋・高島屋

花瓶、果物器、水注等多數を出品した。吹硝子の技法に依り、形態、着彩に自在な工夫が試みられてゐる。

成蹊美術會第一回展（日・洋）

六月九日—十四日 日本橋・白木屋

海外超現實主義作品展

六月九日—十四日 銀座・日本サロン

春島會主催。山中散生、瀧口修造等の協力により海外の現實主義作家の作品寫眞、資料等三百五十點及若干の素描、版畫等が展覧された。主なる作品はハンス・ベルメール、ヴィクトル・ブローネル、アンドレ・ブルトン、ジョルジュ・ド・キリコ、サルヴァドル・ダリ、マックス・エルンスト、ジョアン・ミロ、パブロ・ピカソ、マン・レイ、イウ・タンギイ等で、同展は引續き京都、大阪、名古屋等に開催された。陳列内容は「みづゑ」誌三百八十八號に掲載のものである。

ギヤマン展並參考品陳列

六月九日—十五日 上野・松坂屋

森田恒友遺作素描展

六月九日—十七日 新宿・天城畫廊

天城俊彦主催。鉛筆畫、墨繪其の他二十餘點を陳列。

新彫塑協會第二回展

六月九日—二十日 東京府美術館

故藤川勇造の門下、舊二科系の作家を以て組織する同會の公募に依る第二回展。陳列總數は二十二點で、會員外の出品者は二名である。概して習作的な穩健な作風が見受けられ、中で太田三郎の「女」、岩田滿平の裸女の「習作」、飯島三四二の「レリーフの試作」等は嫌味の無い無難な作品として擧げられる。然し他の作家は多く、藝術的な追究足らず、生氣を失つて居るのが憾まれる。

造型版畫協會第一回展

六月十日—十三日 銀座・紀伊國屋

「新版畫集團」を本年三月組織を變へて改稱した版畫研究の新進團體である。今回は第一回展として同人七名の作品及び猪熊弦一郎の贊助出品二點を陳列した。

第三回萌青會日本畫展

六月十日—十四日 上野・神戸屋

獨立美術名作展

六月十日—十四日 和歌山・商品陳列所

姉崎嶺洋畫展

六月十日—十五日 京都・三角堂

麥陽會第二回展（洋畫）

六月十日—十六日 神田・東京堂

南畫聯盟第一回南畫展

六月十日—二十一日 上野・日本美術協會

昨秋日本南畫院の解散後、岡田晴峰、福田浩湖、白倉二峰、人見少華等が幹事となり、小室翠雲を顧問に仰いで創立した南畫の團體。公募展で、陳列數八十四點。岡田晴峰の出品は會期に間に合はず、福田浩湖の「牧場薰風」、白倉二峰の「雪」等も振はず、又一般會員の技術の水準低く不評であつた。小室翠雲の故事を描いた「換書」一點が優れた技巧を示す佳品であつた。

授賞（獎勵賞） 岩永竹涯、濱崎左斐子、奥本青雲、河村李軒、横内大明、鷹野稔亭、高島祥光、傳川白道子、草刈樵谷、矢野光成、矢田百溪、小山居泉、佐々木喜堂、宮原柳憐、峰村北山、正田竹夢、須藤岡村

奈良洋畫會第十回展

六月十一日—十三日 奈良會館

大阪朝日新聞社奈良通信局後援。奈良縣在住洋畫家の組織する公募展。鑑査には飯田衛、笠松春彦、武若武作、曾根靖雄、若山爲三等の會員が當つた。

丸山曉霞水彩畫展

六月十一日—十三日 名古屋・松坂屋

洋畫大家日本畫小品展

六月十一日—十五日 銀座・松坂屋

國民藝術研究所主催、石井柏亭、兒島善三郎、藤田嗣治等二十二名の日本畫を蒐めた。餘技の域を出でぬものもあるが、小林和作の「五月晴」、銅井克之の「東郷湖」等洋畫的觀照に基く寫意を示して異色があつた。

黒田繁成洋畫個人展

六月十一日—二十日 大阪・阪急百貨店

土井撰美堂東西大家新作日本畫展

六月十二日、十三日 京都美術俱樂部

竹内無憂樹日本畫個展

六月十二日、十三日 大阪中之島・中央公會堂

島雄健洋畫個展

六月十二日—十五日 神戸畫廊

瑠璃畫社第二回展（日本畫）

六月十二日—十六日 日本橋・高島屋

松岡映丘門の新人七名に依り組織される。杉山寧は馬の諸作に達者な技巧を示してゐるが、藝術的には稀薄である。山本丘人の「島の追憶」「雜木林」は繊細であり氣取りがあるが、感覺手法に獨自の洗練を示した。他の會員には洋畫風な日本畫を描くものが多く、表現の不徹底を免れない。

第八回京都工藝美術展

六月十二日—十七日 日本橋・三越

京都工藝美術協會主催、公募による工藝の綜合展で、陳列總數四百十八點。

日本畫小品展

六月十二日—十七日 日本橋・三越

飛彈春慶塗陳列會

六月十二日—十七日 大阪・三越

坂本直行山岳畫展

六月十三日—十五日 日本橋・日本商工會館
東西大家新作畫展(日本畫)

六月十三日—十五日 名古屋・十一屋
第二十四回商工省工藝展

六月十三日—十七日 金澤商品陳列所
新造型名古屋展

六月十三日—十七日 名古屋・松坂屋
松村隆衛洋畫個展

六月十三日—二十二日 京橋・朱緑社畫廊
五月會第六回洋畫個展

六月十四日—十七日 銀座・紀伊國屋
長野草風日本畫展

六月十四日—十七日 名古屋・松坂屋
二曲半双の屏風「暮雪」を始め、近作三十點を陳列し

た。
鈴木千久馬油繪個展

六月十四日—十八日 大阪・三角堂
木村翠溪、小村立堂新作畫展(日本畫)

六月十五日 新愛知新聞社講堂
小林徳三郎洋畫個展

六月十五日—十七日 銀座・三昧堂
「一九二六年の『鉢の鯛』から三六年度の『新緑の世田谷』迄約十年間の作品二十五點を陳べた。素朴で、眞摯で、

淡々として平明な中に氏一流の鋭利な觀察眼を藏した風格に依つて一貫され、ためまぬ歩みを續けてゐる」(都に依る)

春泥會第三回日本畫展

六月十五日—十七日 神戸・十合
兵庫縣美術家聯盟第十三回展(日、洋)

六月十五日—十七日 神戸・大丸
同會の春季同人展、日本畫十九點、洋畫七十六點を陳列した。

美術展覽會(六月)

第二回多治見陶磁器上繪意匠展

六月十五日—十七日 多治見加工組合樓上
沈蘭留第七回展(彫塑)

六月十五日—十九日 銀座・日本サロン
須田國太郎洋畫個展

六月十五日—十九日 大阪・美術新論社畫廊
「黒と赤を基調とした須田氏獨特の技法はますます圓熟して『漁村田後』『鶯』『夕月』等以前のやうな重くる

しさがなくなつた。更に『鹿谷』『初夏草花』『龍門山』等に綠色の研究がはじめられてゐる」(大朝に依る)

松島正一洋畫個展
六月十五日—二十日 新宿・伊勢丹

白鷺會展(洋畫)
六月十六日—十九日 銀座・資生堂

石井鶴三、木村莊八作品展
六月十六日—二十日 銀座・日動畫廊

鑑起研究會第四回作品展
六月十六日—二十日 銀座・伊東屋

東美校銀金部出身者有志の研究團體で、専ら鑑起の技法に依る同人の作品を陳列。

大日美術院展(日本畫)
六月十六日—二十五日 大阪市立美術館

橋本多聞洞春季日本畫新作展
六月十七日—十九日 東京美術俱樂部

東西の作家三十一名の新作を蒐めた。
第一回五彩會美術展

六月十七日—十九日 新橋・藏前工業會館
各派大家水彩畫展

六月十七日—十九日 神戸畫廊
鈴木千久馬油繪展

六月十七日—二十二日 大阪・三角堂
萱島榮新作繪畫展

六月十八日—二十日 大阪・南海高島屋

堀飛火野日本畫個展
六月十八日—二十日 一宮・商工會議所

菊池容齋遺作展(日本畫)
六月十八日—二十一日 東京美術學校陳列館

菊池容齋の六十年祭が六月十六日菊池祥郎、結城素明等の發企により舉行されたが、之に附隨する催しとして故人の遺墨六十點を諸方より借り集めて展覧した。中で同院院藏の「十六聖者來降圖」「本師三尊眞圖」「十大弟子」正木直彦藏「西洋婦人像」、岩崎家藏「馮昭儀當逸熊圖」「項羽燬阿房宮の圖」及び淺草寺藏「堀河夜討」等は容齋の代表的な作品に屬するものであつた。

造型彫刻家協會第三回展
六月十八日—二十二日 銀座・紀伊國屋

小品十五點を出陳。彫刻を「科學的に造型性の上に把握」せんとする主張に依るが作品は繊細で末梢的なを免れてゐない。

塚本茂渡佛記念個展(洋畫)
六月十九日、二十日 鎌倉・本覺寺

美濃社第五回美術展(日本畫)
六月十九日、二十日 岐阜・柳ヶ瀬百貨店

東西兩都大家新作畫展
六月十九日、二十日 京城俱樂部

日本美術院々友展
六月十九日—二十一日 名古屋・松坂屋

青彩會洋畫展
六月十九日—二十一日 岐阜・柳ヶ瀬百貨店

清光會大阪展
六月十九日—二十一日 大阪・朝日會館

神津港人洋畫個展
六月十九日—二十二日 京城・三越

瀧川太郎近作洋畫展

六月十九日—二十二日 松本盲學校講堂
生爽會第一回繪畫展（日本畫）

六月十九日—二十三日 日本橋・三越

京都の西山翠嶂、西村五雲、堂本印象、中村大三郎、菊池契月等の賛助の下に、各塾の新人、井上和雄、西村卓三、西山英雄、曲子光雄、伊藤美代三ほか二十餘名が新に組織した會の第一回展である。出品畫は概ね習作の程度を出ないものであつた。賛助出品の中で西山翠嶂の「桃」は色彩美しく、中村大三郎の洋装婦人を扱つた「羅衣」も描法の巧緻さに於て注目された。

高島屋五人展（日本畫）

六月十九日—二十三日 日本橋・高島屋

高島屋主催。徳岡神泉、太田聰雨、奥村土牛、山口華楊、溝上遊龜の新作數點宛を集めて陳列した。

吉田白嶺新作本彫展

六月十九日—二十三日 大阪長堀・高島屋

小杉放庵新作畫幅展（日本畫）

六月十九日—二十三日 大阪長堀・高島屋

明朗美術關西展

六月十九日—二十三日 大阪・松坂屋

晨島社第四回展（日本畫）

六月十九日—二十三日 大阪・三越

井口東白子俳畫展

六月十九日—二十三日 大阪・三越

第三回物故十二畫家遺作回顧展（洋畫）

六月十九日—三十日 新宿・天城畫廊

第一回金澤四秀會工藝品展

六月二十日—二十三日 大阪・三越

日本バステル畫會展

六月二十日—二十四日 銀座・日本サロン

山喜多二郎太油繪個展

六月二十日—二十四日 大阪・美術新論社畫廊

武者小路實篤色紙展

六月二十日—二十六日 銀座・吾八

夏向本染手織の會

六月二十一日—二十四日 銀座・資生堂

小出繪重遺作素描展

六月二十一日—三十日 大阪・阪急百貨店

第三回新興獨立美術展

六月二十一日—七月五日 東京府美術館

アンデパンダンの組織による公募展、日本畫、洋畫、彫刻、工藝の各部を含むが専門家の仕事は見られない。

日本畫無名鑑査展

六月二十二日—二十四日 大禮記念京都美術館

京華日報社主催。

藤田嗣治第四回近作展（洋畫）

六月二十二日—二十六日 銀座・日動畫廊

近作の油繪二十六點を陳列した。十二號「佐渡小木港の雨」、十號「夏の漁村房州太海」、六號「紅花」「甲州の富士」等概して色調濃く、洗練された技術は觀者を樂しませた。

蛭子屋男日本畫小品展

六月二十二日—二十七日 大阪・關西畫廊

諸大家夏掛畫展

六月二十二日—二十七日 大阪・大丸

日本民藝館展

六月二十二日—八月十五日 目黒・同館

土井撰美堂新作畫展（日本畫）

六月二十三日 大阪美術俱樂部

夏期洋畫即賣展

六月二十三日—二十五日 銀座・三味堂

立陣社近作洋畫小品展

六月二十三日—二十七日 銀座・青樹社

鈴木三郎油繪個展

六月二十三日—二十七日 大阪・美交社

川口軌外洋畫個人展

六月二十四日—二十六日 和歌山・商工會議所

木芽會日本畫展

六月二十四日—二十七日 大阪・十合

日本陶器趣味の展觀

六月二十四日—二十七日 大阪・阪急百貨店

辻蒼石南洋風物畫展

六月二十四日—二十八日 大阪・松坂屋

第五回綠明莊美術工藝品展

六月二十四日—二十九日 日本橋・高島屋

岩城硝子作品展

六月二十四日—二十九日 日本橋・三越

海外超現實主義作品展

六月二十四日—二十九日 京都・朝日會館

第二十四回商工省工藝展

六月二十四日—三十日 名古屋商工會議所

菅生耕村日本畫個展

六月二十四日—三十日 大阪・阪急百貨店

奥村博史作品展（指環、帶留、油繪小品）

六月二十五日—二十七日 大阪・中村屋ギャラリー

岐阜美術研究會第一回展（日本畫）

六月二十五日—二十七日 岐阜・柳ヶ瀬百貨店

繪更紗畫林作品展

六月二十五日—二十九日 大阪・阪急百貨店

清光會展

六月二十五日—二十九日 大阪・美術新論社畫廊

墨人會小品展（日本畫）

六月二十五日—二十九日 大阪・三越

赤城泰舒洋畫個展

六月二十五日—三十日 麴町・室内社畫堂

（七六頁參照）

中澤弘光洋畫展

六月二十五日—三十日 大阪・松坂屋

川端日本畫試作展

六月二十六日—二十八日 小石川・川端畫學校

東丘社三樹會第一回展(日本畫)

六月二十六日—二十八日 大禮記念京都美術館

堂本印象塾東丘社内の七曜會、黒美會、三名會等の會員二十一名が結成した會の第一回展。塾の先輩三輪晃勢は永學秀の兩名が賛助員として參加した。

池邊光倫、内山杜南日本畫新文人畫展

六月二十六日—二十八日 佐世保・商銀ホール

藤友會第一回展(工)

六月二十六日—二十九日 銀座・資生堂

北上聖牛日本畫個展

六月二十六日—二十九日 和歌山・丸正デパート

沼田一郎小さな油繪展

六月二十六日—三十日 銀座・ブリュッテ

某家所藏洋畫入札展

六月二十六日—三十日 神戸畫廊

無聲會南畫展

六月二十六日—七月一日 日本橋・白木屋

池澤青峰作品展(日本畫)

六月二十七日 大分縣立四日市高等女學校

堅山坦日本畫個展

六月二十七日—二十九日 京城・三越

奥瀨英三新作油繪展

六月二十七日—三十日 銀座・日動畫廊

油繪約三十點を出品した。

墨人會第一回展(日本畫)

六月二十七日—七月五日 大阪・朝日會館

本年二月、小川芋錢、渡邊大虛、小杉放庵、中川一政、菅橋彦、矢野橋村、津田青楓等十二名が各人の個性を自

由に生かすことを眼目とし、謂はゞ共同の個人展覽會たらしむべく創立した日本畫の發表機關である。第一回は同人展として開催された。陳列總數三十四點。菅橋彦の「一休乗興」は華やかで畫品が高い。矢野橋村は六曲一双の力作「乍雨乍霽」を出品、津田青楓、中川一政はともに洒脫な日本畫を示し、又渡邊大虛の南畫が清新な情趣があり注目された。尙小杉放庵は出品が間に合はなかつた。

各派花形出品油繪展

六月二十七日—七月十五日 新宿・喫茶店エルテル

池野春芳木彫展

六月二十八日—七月二日 大阪・美交社

長谷川春子洋畫個展

六月二十九日—七月二日 大阪・清交社

春泥社第一回作品展(日本畫)

六月二十九日—七月三日 京都・丸物

奈良名物工藝品展

六月二十九日—七月四日 日本橋・高島屋

京都工藝院夏季小品作陶展

六月二十九日—七月四日 京都・大丸

ワグマン遺作展覽會

六月二十九日—七月五日 銀座・青樹社

明治初期の洋畫に貢獻する所少くなかつた英人チャールス・ワグマンの遺作百七十八點が、土岐薫の盡力に依つて蒐集展觀された。多年横濱に居住した英人バーナーDの蒐集したもの主となつて居り、油繪、水繪、鉛筆畫の各種に亘り、人物及び風俗スケッチの外信州、越後伊豆等各地の旅行に得た風景寫生多數を含んで資料的にも甚だ貴重なものとして興味深く、有名な「東禪寺浪士亂入の圖」が出品されたことも幸とされる所であつた。

東北・北海道巡回工藝展

七月一日 仙臺・工藝指導所

工藝指導所が其の指導事業の新しい試みとして、東北北海道工藝協會並道廳共催の下に、七月一日より約一箇月に亘り開催した工藝見本の巡回展である。出陳物は同所の試作品、木工、金工、漆工、編組等百餘點、之に工程見本、圖案等を添へ、更に商工省蒐集の海外工藝參考品百點、合計三百餘點を展覧した。開催地は仙臺、若松山形、秋田、弘前、盛岡、函館、札幌の各市であつた。

富田溪仙遺作掛軸展覽會

七月一日—三日 日本橋・東美俱樂部

京都佐藤梅軒の主催で富田溪仙の遺作絹紙掛軸、扇面色紙等主として晩年の作品五十餘點を展覧した。

神保和幸洋畫個展

七月一日—三日 神戸畫廊

現代大家新作日本畫小品展

七月一日—四日 京都・大丸

眞野紀太郎「ばら」百花水彩展

七月一日—五日 日本橋・高島屋

田中墨外佛畫展

七月一日—五日 日本橋・三越

小磯良平洋畫個展

七月一日—五日 銀座・三味堂

石原求龍堂主催。人物畫十點を展覧した。

木村莊八、石井鶴三小品洋畫展

七月一日—五日 銀座・日動畫廊

石井鶴三は油繪外十數點、木村莊八は水彩デッサン等三十點を出陳した。

「木村君の芝居スケッチ『暫』や『堀川』等を見ては、さすがにこの方面にあつて第一人者だけにその軽い筆にも氣持が十分現れてをり、『牛肉屋』の下繪や『さかり場』のボシャーードなど興趣を感じる。石井君の油には、

『紫陽花』の如きプラスチックな表現があり、量のもり方と、色の駆使に眞摯な研究が見える……」（東日による）

海外超現實主義作品展

七月一日—五日 大阪・三角堂

海外美術工藝品展

七月一日—五日 大阪・三越

勝田哲繪畫展（日本畫）

七月一日—五日 大阪・三越

美人畫十六點、花鳥畫數點を展觀した。

淺見隆三近作陶器展

七月一日—五日 大阪美術新論社畫廊

西村眞琴南畫展

七月一日—五日 大阪・十合

林重義洋畫展

七月一日—六日 大阪・松坂屋

近作十餘點を展觀した。

南畫聯盟第一回展（日本畫）

七月一日—六日 大禮記念京都美術館

東西大家日本畫展

七月一日—七日 日本橋・白木屋

長谷川利行研究作發表展（洋畫）

七月一日—七日 新宿・天城畫廊

山澤松篁、我孫子古齋陶器と籠の會

七月一日—七日 大阪・阪急百貨店

充美會主催色繪陶器と水指の展觀

七月一日—七日 大阪・阪急百貨店

駿川竹蔭齋有馬籠陳列

七月一日—十日 大阪・阪急百貨店

田中安太郎洋畫個展

七月一日—十日 大阪・阪急百貨店

祥雲會第一同洋畫展

七月一日—十日 大阪・阪急百貨店

七月二日—四日 銀座・ブリュッケ
赤城泰舒南支寫生展（洋畫）

七月二日—五日 銀座・資生堂

室内社畫堂主催。昨夏南支各地方に旅して得た水彩畫四十一點を展觀した。

村尾榮洋畫個展

七月二日—六日 岡山縣立圖書館

白山卓吉洋畫個展

七月三日—五日 大森繪畫研究所

燦木社第十二回日本畫展

七月三日—七日 日本橋・白木屋

平林清輝佛畫個展

七月三日—七日 日本橋・白木屋

ギヤマン展

七月三日—七日 大阪長堀・高島屋

世界民衆工藝品展

七月五日—九日 銀座・日本サロン

片野元彦服飾展

七月五日—九日 名古屋・丸善

小竹堂名作展觀（日本畫）

七月五日—九日 神戸・林小竹堂

珊々會第三回展（日本畫）

七月五日—十日 日本橋・高島屋

高島屋美術部の主催で、毎年錦木清方、菊池契月、西村五雲、西山翠嶂、松岡映丘、結城素明の新作を蒐めて展觀するのを例とする。本年は上村松園を新たに加へた。「珊々會」は今年から上村松園を加へ陣容を固めてゐる。矢張り京都派の四人は爽麗な美しさを、東京派の三人は素朴な美をねらつてゐる。契月の寛政時代風俗を取扱つた『朝爽』は場中殊に傑出し、薄衣を通す肌の色を巧みに浮き出させてゐた。松園の享保時代風俗畫『朝ぞら』は浮世繪趣味を窺はせ乍ら、巧に線によつて立體を

掴んでゐる。翠嶂の『青梅』はや、技巧に走り、素明の風景は荒いタツチが幾分近景の調和を壊してゐるが、映丘の『眉墨』は緋袴を印象的に取上げて妖婉さを盛り、清方の『花菖蒲』も松と女と菖蒲の對象から新らしい清爽美を描いてゐる。（都による）

歐米各國工藝品展示會

七月六日—八日 都城商工會議所

F・レンハート近作肖像畫展

七月六日—九日 銀座・日動畫廊

藤田嗣治新作日本畫展

七月六日—十一日 神戸・大丸

一水會同人展（洋畫）

七月六日—十二日 日本橋・高島屋

昭和十一年舊二科會員八名により結成された同會は秋の公募展を控へ、同人展として最初の展覽會を開いた。陳列數油繪二十二點。山下新太郎の諸作は賦彩華麗、特に『夏至』は佳作として擧ぐべく、石井柏亭は風景二點及肖像『麗人』に熟練した描技を見せ、木下孝則の『トランプの少女』外二點も描寫の屈強なものであつた。安井曾太郎の『柿』は裝飾的效果をねらつたもの、碓伊之助の『荒川上流』はスケッチ的な感興が認められ、其の他木下義謙の人物數點、外遊中の有島生馬の『シシリー島アグリダエント』、小山敬三の『春の海』等が出陳された。

東北・北海道巡回工藝展

七月七日 若松市公會堂

富岡鐵齋遺作展内見

七月七日—九日 日本橋・白木屋

松島一郎洋畫展

七月七日—十一日 大阪・美交社

六世吉向松月近作陶器展

七月七日—十一日 大阪・三越

宇野三吾陶藝展

七月七日—十一日 大阪・美術新論社畫廊

坊一雄洋畫個展

七月七日—十二日 大阪・三越

竹立會第一回繪畫展(日本畫)

七月七日—十二日 大阪・三越

竹内栖鳳門下竹枝會々員中の新進作家に依り、徳岡神泉を中心として組織せられた會の第一回展、同人の作品二十餘點を發表した。

神保俊子花と海の繪個展(洋畫)

七月八日—十二日 銀座・資生堂

宮部進洋畫個展

七月九日—十一日 銀座・三味堂

國際ボスター展

七月九日—十一日 名古屋商工會議所

關東府縣聯合工藝品展示會

七月九日—十一日 浦和市・埼玉會館

越塚友邦遺作展

七月九日—十一日 大阪・阪急百貨店

中尾達洋畫小品展

七月十日、十一日 宮崎・大朝販賣店

加賀孝一郎洋畫個展

七月十日、十一日 名古屋市公會堂

神庭白梨日本畫個展

七月十日—十二日 銀座・伊東屋

超現實主義作品展

七月十日—十二日 名古屋・丸善

新愛知新聞社主催

吉田博油繪山と水の展覽會

七月十日—十四日 銀座・日動畫廊

玉村方久斗個展(日本畫)

七月十日—十六日 日本橋・白木屋

花鳥畫六十餘點を陳列、洗練に乏しい憾みがある。

自由美術家協會第一回展

七月十日—十九日 上野・日本美術協會

「新時代洋畫展」の同人長谷川三郎、山口薫、矢橋六郎、村井正誠等が本年二月結成した前衛繪畫團體で「フォルム」「黒色」等の同人を會友とし、外に顧問として批評家數名を推してゐる。公募展で、種目は油繪、水彩(和、洋)、版畫、カラージュ、フォトグラム等に互り、概して抽象主義の形式に據る作品が多く、材料手法等從來の繪畫から離脱する試みも種々見られた。たゞ出品の多くが外國前衛繪畫の亞流、ディレクタンチズムの域を出ないのは遺憾である。

長谷川三郎の油繪「蝶の軌跡」は構圖と色彩を自由に驅使しての抽象主義的思索を示すが、繪畫的に内から湧くものに缺け、新聞カラージュ、毛織や布の作品、デッサン等は作者の造型的教養を示したものである。村井正誠の油繪「URBAIN」八點は色彩の設計圖的構成を行ひ一種官能的なものをリリカルに表現した。矢橋六郎の油繪「廢墟」外六點、山口薫の油繪「鏡」「黒耀石」等は象徴的雰囲気を表はし、洒落れた感覺を見せた。其の他瑛九、馬場頼三等の寫眞による作品も注意を惹いた。一般の應募出品は相當の嚴選を経たものであるが、概して獨創に缺け低調であつた。

(搬入總數)六七五點(入選數)四九點(陳列總數)一六一點

(新會友) 平岡潤、富岡宏資、山田光春、植木茂(協會賞) 平岡潤、山田光春(フォト・プラスチック賞) 馬場頼三(獎勵賞) 植木茂

德力富吉郎版畫京洛三十題並新進作家工藝品展

七月十日—二十日 京都祇園・八坂俱樂部

東北・北海道巡回工藝展

七月十一日 山形縣工業試驗場

二葉會日本畫展

七月十一日—十五日 大阪・松坂屋

夏向陶磁器展

七月十一日—十五日 京都五條・京都陶磁器工業組合共同販賣所

京都陶磁器工業組合主催

石川欽一郎水彩畫展

七月十一日—二十日 大阪・阪急百貨店

奏弘夫蘭綢染個展

七月十二日—十四日 神戸畫廊

酒井亮友日本畫展

七月十二日—十七日 名古屋・松坂屋

春臺美術第二回大阪展

七月十二日—十八日 大阪・三角堂

島田忠夫日本畫個人展

七月十三日、十四日 銀座・日本サロン

日本山岳畫協會第二回展(日、洋)

七月十三日—十七日 日本橋・高島屋

「山岳を崇敬愛好する畫家」を以て組織する。出品者九名。中で足立源一郎の六點は詩情に乏しいが描寫力に優れて見えた。

緒方亮平洋畫個展

七月十三日—十七日 大阪・美術新論社畫廊

第二十四回商工省工藝展

七月十三日—十七日 金澤・商品陳列所、圖書館

林武瀨歐油繪展

七月十三日—十七日 大阪・松坂屋

中央美術協會洋畫小品展

七月十三日—十八日 新宿・伊勢丹

森田恆友遺作展(洋畫)

七月十三日—二十五日 新宿・天城畫廊

内田正男瀟支臺灣作品洋畫展

七月十四日—十六日 銀座・資生堂
東北、北海道巡同工藝展

七月十五日 秋田市商工會議所
若山爲三後援畫展（洋畫）

七月十五日 名古屋市公會堂
振衣社第一回日本畫展

七月十五日—十七日 京都・朝日會館
團部晉生個展（洋畫）

七月十五日—十七日 大阪・美友社
山澤松篁作陶展

七月十五日—十七日 高岡・水波佛教會館
矢崎千代ニバステル個展

七月十五日—十七日 臺北・鐵道ホテル
瑠々會第三回展（日本畫）

七月十五日—十八日 大阪長堀・高島屋
鈴木三郎洋畫個展

七月十五日—十八日 神戶畫廊
大給近清繪ミニオン展

七月十五日—二十日 銀座・日動畫廊
作者の最初の個展で、明治三十九年より最近に至る豆繪數十點を陳列した。

洋々社第八回洋畫展
七月十六日—十八日 敦賀・商工會議所

青樹社主催洋畫綜合展觀（ワグマン遺作展、油繪新作展、壁畫會展）
七月十六日—二十日 大阪・朝日會館

森田光達畫展
七月十七日—十九日 銀座・三味堂

池上秀敏新作花鳥廿題紙本小品畫展觀
七月十七日—二十一日 大阪・南海高島屋

中村不折新作畫幅展（日本畫）
七月十七日—二十一日 大阪・南海高島屋

谷内俊夫洋畫個展
七月十八日—二十一日 大阪・美友社

東北、北海道巡同工藝展
七月十九日 弘前市公會堂

白陽會有志小品展（洋畫）
七月十九日—二十一日 神戶畫廊

佐藤哲三郎洋畫展
七月十九日—二十三日 大阪・美術新論社畫廊

幽興會名古屋展（日本畫）
七月十九日—二十五日 名古屋・松坂屋

伊藤世以爾日本畫個展
七月二十日—二十一日 多治見・信用組合樓上

舊義會水墨畫展
七月二十日—二十三日 京都・丸物

第四回九州沖繩各縣聯合工藝試作品展
七月二十日—二十六日 別府・縣殖産館

每年長崎、福岡、佐賀、熊本、鹿兒島、宮崎、沖繩、大分の各縣聯合で開催される工藝展。種目は布帛、陶磁器、木竹、漆器、金工等に互り、合計八百四十餘點を陳列した。

堀口仁洋畫個展
七月二十一日—二十三日 銀座・ブリュッケ

吉村與四郎第三回作陶展
七月二十一日—二十五日 京都・都美術館

石河光哉洋畫個展
七月二十一日—三十日 大阪・阪急百貨店

新制作派協會油繪小品展
七月二十二日—二十六日 銀座・三味堂

創立一週年記念の小品展。會員九名が一點宛出品した。猪熊弦一郎の「眠る裸婦」、佐藤敬の「裸婦」等品は良くないが近代的神經を見せ、小磯良平、内田巖は穩かな小品を出した。

東北、北海道巡同工藝展
七月二十三日 盛岡市公會堂

竹立會第一回日本畫展
七月二十三日、二十四日 京都・朝日會館

三輪界勢日本畫個展
七月二十三日、二十四日 京都・佐藤梅軒畫廊

作者の最初の個展で、花鳥畫十三點を展覧した。

第五回民藝品展
七月二十三日—二十五日 京都・大丸

京都民藝品同好會主催。

東方美術協會展（日本畫）
七月二十三日—二十五日 京城日報社來青閣

光風會系作家小品展（洋畫）
七月二十三日—二十八日 大阪・美友社

明治初期洋畫展
七月二十三日—三十日 名古屋・國際畫廊

關口隆嗣個展（洋畫）
七月二十四日—二十九日 日本橋・三越

朝鮮風物を主題とした近作四十餘點を發表した。

三木翠山近作展（日本畫）
七月二十四日—三十一日 大阪・阪急百貨店

現代畫壇代表大家傑作展（日本畫）
七月二十五日—三十日 銀座・松坂屋

松坂屋主催。出品者八名、概ね二尺五寸巾の横物で、川合玉堂「笑ふ深山」、菊池契月「藤原公任卿」、鍋木清方「ゆかりの花」、前田青邨「二見文臺」等各々の持味を發揮した佳作であつた。

目錄

杜鵬	橋本 關雪	絹本二尺巾	横物淡彩
富士	西山 翠嶺	絹本二尺五寸巾	横物彩色
笑ふ深山	川合 玉堂	同	同
ゆかりの花	鍋木 清方	同	同
二見文臺	前田 青邨	同	横物淡彩

静物 小林 古徑 絹本二八巾 植物彩色
 ほろほろ鳥 小杉 放庵 紙本二八三寸巾 植物淡彩
 同 同 同
 藤原公任卿 菊池 契月 紙本二八八寸巾 同

げても展

七月二十五日—三十日 銀座・ブリュッケ

高間惣七洋畫個展

七月二十六日—三十日 大阪・美術新論社畫廊

高取榮枝油繪個展

七月二十六日—三十一日 新宿・天城畫廊

各國蒐集印刷關係參考材料並製品展

七月二十六日—三十一日 銀座・資生堂

共同印刷主催

東北・北海道巡回工藝展

七月二十八日 函館・共愛會館

第二回東北振興物産見本市

七月二十八日—三十日 丸之内・丸ビル

趣味の美術展

七月三十一日—八月四日 大阪市立美術館

八月

東北・北海道巡回工藝展

八月一日 札幌市公會堂

本内省古、五郎近作展(彫、工)

八月一日—五日 本郷區駒込林町・小林常子邸

淺弘夫藤瀬染作品展

八月一日—五日 大阪・美術新論社畫廊

世界教育會議記念印刷と出版文化展

八月一日—十一日 日本橋・三越

現代一流大家近作小品展(洋畫)

八月一日—二十五日 新宿・天城畫廊

現代日本畫名作展覽會

美術展覽會(八月)

八月二日—十一日 東京府美術館

第七回世界教育會議が東京に開催され各國から多數の教育關係者が來朝するのを機會に、我が文化を理解させる一助とする趣旨から、帝國教育會を中心とする同會議日本事務局の主催で、最近約五十年間の日本畫名作を蒐集展覧した。陳列品は特別御貸下品として、

御物 鯉魚圖 額 面 福田平八郎
 皇太后宮職御所藏 丹鶴青瀾 六曲一雙 平福 百穂
 高松 宮御所藏 百駿圖 六曲一雙 近藤浩一路
 久通 宮御所藏 瀛洲偃蹇 雙 輻 富岡 鐵齋
 朝香 宮御所藏 御室の櫻 二曲二雙 富田 溪仙
 の五點の外芳崖、玉章、春草、廣業等明治時代の巨匠を初め現代に活動する少壯の作家の最近作に至る迄、各派に互る日本畫作品總計一三〇點を陳列した。文部省買上品其の他諸展覽會に出品された代表的な大作が多く、見應へのある展覧であつた。尙其の他に日本創作版畫協會會員の作になる現代版畫三十七點其の他の參考品を併せ陳列した。

加藤溪山青磁展

八月五日—八日 大阪長堀・高島屋

第二回田中咄哉刺畫幅展

八月五日—八日 大阪長堀・高島屋

藤田總兵衛雲の山岳油繪展

八月七日—十一日 大阪・美術新論社畫廊

第二回洛秀園新作陶器展

八月九日—十五日 大阪・阪急百貨店

國防獻金洋畫展

八月十日—十四日 上野・松坂屋

全美術家報國運動本部主催、讀賣新聞社の後援で各派の洋畫家約百五十名が各々作品一點を寄贈出品した。陳列數百五十二點。賣約は百五點で賣上額八千六百六十五圓に上り、雜費を除き八千六百六十九圓を讀賣社を通じて

陸軍省に獻納、作品三十八點を衛戍病院に寄贈した。

海老原省象、長谷川利行洋畫小品展

八月十日—二十五日 銀座・交詢ビル

神原浩、福井市郎エツチング展

八月十一日—二十日 大阪・阪急百貨店

辻愛造個展(洋畫)

八月十三日—十八日 大阪・美術新論社畫廊

南紀美術展(日、洋、彫)

八月十三日—十九日 輕井澤・法政大學村同俱樂部

皇軍慰問洋畫奉公展

八月十三日—三十一日 大阪・美交社

三越洋畫彫刻展覽會

八月十四日—二十九日 日本橋・三越

三越主催で各派の知名作家洋畫四十一名、彫刻三十三名を集め、主として小品洋畫七十五點、彫刻三十二點を陳列した。従つて會としての色彩はなく、特記する程の作品も見られなかつた。

新膏社繪畫展

八月十八日—二十二日 福岡・岩田屋

複製泰西名畫展

八月十九日—二十七日 大阪・三越

海外工藝品見本展示會

八月二十日、二十一日 石川縣工藝指導所

第四回パステル日繪畫會展

八月二十日—二十四日 大阪・美術新論社畫廊

獻畫報國日本畫展

八月二十一日—三十日 銀座・松屋

日本畫會主催、讀賣新聞社後援。同會の會員、顧問五十五名が各々尺八横物一點宛を出品した。陳列數計五十點。全部賣約となり、賣上額六千七百四十圓に達した。其の中より諸雜費を除き六千二百四十圓八十八錢を讀賣新聞社を通じて「裝甲車戰車」資金として獻納した。尙同會

では同展出品作品を収載した圖録を刊行した。

大野隆徳洋畫小品展

八月二十一日—三十一日 大阪・阪急百貨店

熊岡美彦洋畫個展

八月二十三日—二十五日 豊原市商工會議所

恤兵獻金油繪展

八月二十三日—三十一日 新宿・天城畫廊

二階堂榮洋畫展

八月二十五日—二十八日 銀座・日動畫廊

四行會第四回展（洋畫）

八月二十六日—三十日 銀座・養生堂

京都女流洋畫小品展

八月二十六日—三十日 大阪・美術新論社畫廊

江崎孝坪第一回日本畫個展

八月二十七日、二十八日 神田・如水會館

彩管報國日本畫展

八月二十七日—二十九日 京都・大丸

東美校加賀郷友會美術展（綜合）

八月三十日—九月五日 金澤市商品館

九月

長谷川利行研究作發表第三回展（洋畫）

九月一日—五日 新宿・天城畫廊

第四回魁春社美術展（日本畫）

九月一日—五日 名古屋・十一屋

秋香會第五回展（日本畫）

九月一日—六日 上野・松坂屋

白朝會小品展（洋畫）

九月一日—七日 大阪・美術新論社畫廊

小出三郎洋畫小品展

九月一日—十日 大阪・阪急百貨店

第三部會第三回展覽會（彫塑）

九月一日—十八日 東京府美術館

舊帝展系作家に依る唯一の在野彫塑團體として、第三部會も三回を數ふるに至り、殊に本年は文展審査員を受諾した小倉右一郎と袂別して官展不参加の立場を愈々明確にした。斯くの如く在野の旗幟を立てて獨立した存在を示すことは、團體としても之に屬する作家としても世の注意を牽く點で甚だ幸であるが、それだけに作品を公募する藝術團體として、世の批判に訴ふべく十分な藝術的活動をなす責を自ら負ふ譯である。會として藝術的主張を作品の上に示すべく、會員等が單に「個展の集合形式」に甘んずることなく、特に官展には見られぬ領域に於て潑刺たる創作活動を示す事が必要であらう。此等の意味で今次の展覽會も未だ満足すべき成績を示したとは云へぬことを遺憾とする。

會員の中で取材に於ても製作に於ても最も注目すべき活動を示したのは日名子實三であつた。西洋文明渡來を記念する浮彫大作「豊後時代」の外戦争を主題とする「第一線」、「警備兵」其の他の作を出品、技術の練達に於て他を引離す出来榮えを見せてゐた。戦争彫刻は時節柄注目すべき「第一線」は群像の取扱ひに、「警備兵」は静止の姿に力を含んで夫々優れてゐたが、表現は通俗的な寫生を出でない。尤も徒らに高踏的な態度を狙はず、社會性と實用性を目途することが此の會の立場とも見られ、通俗性と云ふ事も會員等に共通する特色でもある。

池田勇八は例に依り特技とする馬を取扱つた作品の外肖像なども出したが、本年の力作としては一對の乳牛を寫した「牧場門装」を擧ぐべきであらう。吉田久繼に裸婦を取扱つた「水邊」等三點があり、畑正吉には七點の中の「警備」、「土囊」等事變に關聯した作品もあつたが其の他の會員と共に餘り振はない。會員外では鈴木賢二の「醫博渡邊齋氏像」、川城良の「軍雞」、大野信藏の「仔

山羊」、早乙女龜次「婦人像」、野口安友「首」等が擧げられる。外に實用彫塑として帶止灰皿等の小工藝品を陳列した。

搬入數 三一六、入選 一〇五、陳列數 彫塑一四〇
實用彫塑三七點

會友推薦 大野信義、向山峽路

特選「婦人像」早乙女龜次、「シェパード」岩男是命、

「渡邊齋博士像」鈴木賢二

青龍社第九回展覽會（日本畫）

九月一日—二十八日 東京府美術館

畫材の上で必しも事變を反映してゐる譯ではないが、元氣に充ちた此の會場は何となく非常時らしい空氣を感じさせる。川端龍子が「大陸策」の連作を始め其の第一作「朝陽來」を完成、之が全會場を壓してゐる故でもあり、何時もながら彼の氣風が徹してゐるからであらう。搬入數は昨年より増加したが入選數は却つて幾分減少したと云ふ。特に際立つた優品も見難いが全體に努力を示して氣持の上にも張りのある展覽會であつた。

「朝陽來」は豎九尺横十七尺餘の畫面一杯に山岳の重疊を墨で描き、赭色の長城が連る彼方から金沙子に輝く朝陽が上る狀で、構圖にも描法にも特色を發揮した獨自の畫面である。力強さが強調されて幾分不安の伴ふことは否み難いが、豪快暢達の技に作者の意力を見る。同じ作者の「睡蓮」は靜穩の境地、霸氣を收めて渾熟の技を見せ色彩にも落着のある快い作であつた。坂口一草はよく努めて「琉球」の三部作を出した。特色ある風土の色彩、空氣、風俗をよく捉へた佳作で、此の展覽會收穫の隨一に擧げ得るであらう。「那覇」の市場の雜沓も相當の成功を収めてゐるが稍構圖にゆとりなく、三圖の中では赭色の瓦屋根を主題とした「絲滿」が面白い出来であつた。たゞ石垣の描寫に多少の不足が見える。加納三樂の「港の女」二部作も着想と構圖に凡ならぬ才能を示し

た。たゞ藝術的深味を缺くことは此の種の畫材を取扱ふ上に特に戒心を要するであらう。Y氏賞を受けた市野亭の「魚窓」は強烈な色彩を驅使し、光を描き、日本畫としては思ひ切つた表現に成るが、茲では面白い成功を見せ青と緑の色彩効果は美しかった。谷口富美枝の「高原に展く」は暢やかな技術の進歩を見せてゐるが藝術的な香氣に乏しく、又左半双特に背景の山は失敗であらう。山崎豐の「牛祭」は畫面粗大に過ぎて感興を逸し「大谷寺」の石佛も肝心のものを捉へ得なかつた。木村鹿之介の群鴉を描いた「噪鳥」、時田直善の「春野」、双谷又樹の「田毎」、三好好志の「簀立」、濱倉清光の「朝市」等何れも夫々の長所を見せた。

搬入數一三六點(一五名)、入選數四三點(四一名)、授賞(Y氏賞)市野亭、(獎勵賞)佐藤本草、時田直善(獎勵次賞)結城正雄

出品目録

小憩	村山三千男	垂紫	結城正雄
工場街	上條靜光	牛祭	山崎豐
峽壁	丸木位里	枇杷	奥田正一
港の女(白首)	加納三樂	噪鳥	木村鹿之介
船女(白首)	小島鼎子	藤	野原茂生
青鱗	佐藤本草	睡蓮	川端龍子
青鱗	松宮左京	春野(疊切り、鳴き、揚げ)	時田直善
閑爐	渡邊龍三	大谷寺	山崎豐
新緑	岡本成薰	休翼	大塚榮治
ゆみえ	根本進	寶立	三好光志
薔薇	岩崎巴生	琉球(首里、那覇、糸満)	坂口一草
花王圖	内池良男	銀孔雀	演出榮一
城址	河野正長	甲冑	龜井藤兵衛
白光舞	久間光一	霸王樹	佐藤博
田毎	利谷双樹	花簪	笹川喜久子
廣目天	岡部建一郎	牡丹	薗田幾久
夾竹桃	加納三樂	朝陽來(大陸策、四部作ノ一)	川端龍子
高原に展く	谷口富美枝		

美術展覽會(九月)

編馬 松村五郎 黃葉樹 矢野義曼
花を盛る 鈴木茂子 無題 遠藤燦可
魚窓 市野亭 山櫻 坂 篠一
東門 里見公起 網干 直江義春
山百合 鹿戸林藏 淺間の春 安西啓明
聖門 鍛冶貫一 能雲 渡邊綱雄
朝市 濱倉清光 慈手佛 演出榮一

日本民藝館特別展觀

九月一日—十月三十一日 目黒・同館

河井寛次郎製作の陶磁器の外に本染大布圍地、紺屋型等を特別陳列した。

東京みづゑ會第九回展

九月二日—七日 新宿・三越

日本美術院再興第二十四回展覽會(日彫)

九月二日—十月三日 東京府美術館

昭和十年帝國美術院改組當時積極的に之に参加し第一回同展には同人等舉つて出品の熱意を示した日本美術院は、昨年の所謂再改組を非とし帝國美術院及び臨時の文展と絶縁して再び在野の立場に歸つたが、本年帝國美術院が設置され且つ新文展の組織を見るに及んで復政府事業に参加協力する態度に出で、同人中より文展審査員をも出すこととなつた。併し斯の如き經過の後では官展に参加するとしても當然最初の如き熱意と結束とは見られず、且つ開催時期の關係からも院展文展の兩者に努力することは不可能であり、在野としての華々しい功績を過去に有するだけに此の徹底せぬ態度は、内外共に同院の將來に對し一抹の不安を抱かせたことは否定し難いものがあつた。同人も出品者も固より此の院展を本舞臺として努力した筈であつたが、七月初め北支事變の勃發から時局は愈々重大性を加へ、製作の時期に常の如く落着きを保ち得なかつたことも主要なる一原因をなしたものでか全體として不振の氣を免れず、前田青邨、小林古徑、木村武山、大智勝觀、長野草風等同人の出品もなく、優作

乃至問題とすべき力作を多く數へ難いことは寂しさを禁じ得なかつた。

横山大觀は「東海の濱」と「夜深し」の二作を出品して彩色と水墨の兩面を示した。前者は緑の松に白砂を對照させて清爽なる畫面を成し、後者は月夜の森に梟を添へて朗らかな表現に成るもの、兩者とも此の作者の特に出色の作とは云へぬが、やはり場中では獨自の畫趣を示して一般にも好評であつた。安田靫彦の「花づと」は現代風俗を取扱つて品のよい娘を描いてゐるが、寫生以外に積極的な表現の意圖が示されず、線描に依る寫形の不足と共に力の弱いものとなつた。堅山南風の「朔風」は吹雪の水上を渡る鴨群を描き、波の描寫などに難があるとは云へ、爽快潑刺たる表現は主題をよく生かして頗る好評であり、作者近年の佳作であると共に場中の最も目星しい作に數へられた。小川芋錢の「湖上迷樹」は悠揚迫らざる畫境、紙本裏箔の効果もよく愛惜に堪へるものであらう。郷倉千靫の「麓の雪」は畫面面白く相當の成功を見せてゐるが、作者の癖として色を見過ぎてゐるものが此の場合には缺點になつた。

中村岳陵の「雨五題」は賛否半ばするとは云へ、新境地開拓の功を認むべく、觀察の鋭さと清新なる感覺とは異色を示し、色彩計畫の苦心亦報いられる所があつた。奥村土牛の「仔馬」は従来の技法に安住せず敢て大膽な試みをするものとして注目を牽いたが結果は成功と見られぬ。中村貞以の「ゆふべ」は特異な畫境を示す佳作であり女兒は好く描けてゐた。太田聰雨は「瀧櫻」に一家の工夫を見せ、荒井寛方の「紅葉繪卷」は中々力作で面白く、山村耕花の「蝦夷人」は題材の興味に惹かれ素材が生ので終つたのが惜しまれる。其の他同人の作では酒井三良の水墨を主とした連作、北野恆富の風俗畫などあるが特記する程でない。

同人以外では、小島一谿の「嚴島」は織物圖案の如く

工藝的に向ひつゝあるのが見える。中島清の「古畫」は博物館内に古畫と現代の娘を對比させてゐるが内容を缺いて居り、岡茂以の「弓技」はすつきりした出来であつた。茨木杉風の風景畫三圖は日本畫の新風景畫と云ふべく、地方色も現はれて或る面白さを見せた。

彫塑では石井鶴三の「職工」個性的表現に優れ、保田龍門の「牧田環先生像」は堂々たる厚味を見せた。同人の「學園風禍」は殉職訓導を記念する四面の浮彫で、特に出色の作とは云へぬが、彫刻的な浮彫としての効果を見せた。新海竹藏の木彫大作の「婦人像」は三味線を持たせ、日本の女の特徴をよく促へて頗る生氣に富む作で、場中最も興味を牽かれる一つであつた。山本豊市の「海女」は乾漆等身の像で女の肉體をよく捉へた健實な作。松原松造の「裸婦」「村田氏像」の二點は傑作とは云へぬとしても作者の優れた造形的能力を示すもので、彫刻の要點に觸れてゐる。宮本重良の木彫「神農氏」は小品ながら力の籠つた作で、怪奇なる様式化が主題と適應し、彩色亦効果を収めた。平楠田中は彩色の肖像小品「慶典讀書奉仕」に寫實的精技を見せた。同人以外では辻汎吉の諸作を挙げる。

搬入數 繪畫四八九點、彫塑一六七點
入選數 繪畫 五七點、彫塑 五三點
同人出品繪畫 二五點、彫塑 二一點
授賞（繪畫三名、彫塑無し）
第二院賞「古畫」中島清、「弓技」岡茂以、「飽春」佐野光穂

出品目録（○印同人）

繪畫
秋野 里内 三郎 蠶の家
後庭 山本 大慈 嚴島
佛懷 鬼原 素俊 暮色
花を展く 津田 時子 安息
柿 三石 紅樹 怒濤

霧流る	○酒井 三良	大原御幸	○橋本 永邦	姉の顔	矢崎 虎夫	慶典讀書奉仕	○平橋 田中
祭	同	春樹	中島 万木	並木氏の首	同	少年	○喜多武四郎
鶴	田中 嘉三	桐ノ花	鈴木 主子	やぎ	橋田 七郎	事代主神	松村秀太郎
河原の夏	小島 丹澤	愛宕雪麿	○眞道 黎明	戀へる少女	村田徳次郎	少女坐像	同
村女歸路	花岡 朝生	鸛	同	蠅の像	同	結を持つ少年	柏木 康兵
麗春	青柳 五柳	藤壺	郷倉 和子	座女	同	少女像	同
陶窯	久保田善太郎	葛西風景	○富取 風堂	老翁客	寺瀬 默山	圖畫	大橋 敏男
せらぎ	○小林 柯白	朔風	○堅山 南風	護	大野 隆一	鹿	村上 丙
ダリヤ	川手 青郷	花づと	○安田 靉彦	貝殼	加藤 泰三	老人	大和 作内
蝦夷人	○山村 耕花	仔馬	○奥村 土牛	施無畏者	○大内 青圃	W老人半身像	松澤 作治
叢	佐々志計子	ブランコ	久保 清子	クリシュナの扉	同	同	宮本理三郎
幻燈	小林 三季	日吉三橋	中島 菜刀	阿修羅鬼王面	同	同	同
三河路所見（苗田）	鶴飼 節夫	冬	酒井 亞人	クリシュナの扉	同	同	同
鷺ノ圖	半田 泰至	六月の日	藤井 白映	部分（夕の二）	同	同	同
弓技	岡 茂以	夜櫻	○小山 大月	クロド	同	同	同
假植	安孫子萩聲	靜坐	隱出 英雄	女習作	河野 正造	牧田環先生像	○保田 龍門
龍の雪	鈴木 成欣	高雄女	石本光太郎	顔	門脇 淑子	學園風禍（風禍）	同
お茶室へ	○郷倉 千靉	淡路都志村	茨木 杉風	腰かけた女	同	水鏡（殉職A、B）	同
湖上迷樹	○北野 恒富	奥州古閑木驛	同	同	同	同	同
東海の濱	○小川 芋鏡	外房風景	同	同	同	同	同
夜深し	○樺山 大觀	樹木圖	同	同	同	同	同
古畫	同	向日葵	堤内 哲	我妻 碧宇	同	同	同
晴日	○海上 遊龜	紅葉繪卷	石丸 大衆	荒井 寛方	同	同	同
夏季果実圖	荒木 天立	山葡萄	加藤 陶敏	あそびにん	同	同	同
鰯池	鈴木 三朝	蓮の花開く	小谷津任牛	裸體習作	同	同	同
晩秋	山田 廣吉	瀧櫻	○太田 聰雨	○氏坐像	同	同	同
ゆふへ	○中村 貞以	水韻	内田 青薫	少女頭像	同	同	同
萬蒲	松坂 冬佐	犬	恩田 耕作	老人	同	同	同
雨五題（銀簪、流）	○中村 岳陵	母子圖	半田 鶴一	獅子	同	同	同
行旅（瀧、流）	佐野 光穂	庭上白鶴	伊藤 行馬	冬山	同	同	同
飽春	冬木 大丙	初夏	中川 博汀	神農氏	同	同	同
射手	岡田 壺中	花賞	高橋 萬年	しげ子像	同	同	同
演の松	長井 亮	晩秋	木下 春	御裳須會	同	同	同
蘭蕙譜	中庭 燦華	彫塑	森 英之進	畫室の○氏	同	同	同
もくれんの花	吉田 善彦	老妻	同	同	同	同	同

少年像

小倉 清吉 習作

○喜多武四郎

第二十四回二科美術展覽會(洋、彫)

九月二日—十月四日 東京府美術館

二科會は一昨年、帝院改組の影響を受けて先輩會員五名と訣別したが、昨年十月には更に裕伊之助、小山敬三、木下孝則、木下義謙等四名の會員が退會し、同時に若干の有爲な常連出品者を失つた。昨年會友七名を會員に推舉したが、概して中堅作家の業績が舉らず、一方先輩會員も活氣に乏しく、全體として沈滞に陥つて居たことは否めず、一般にも不評であつた。陳列總數は五百點の多きに上り、外見は必ずしも寂寥でないが、寛選の爲め低調な作品が夥しく混入し、鑑賞を妨げたことは前年と變りはなかつた。

尙本展覽會は偶々日支事變に際會し、同會は國防獻金を目的として、一室を設けて會員會友の小品を即賣し、右賣上金額二千三百五十一圓を陸海軍省へ獻納した。

第一室 宮本三郎の「牛牽く女」は明るい色調と輕快な筆致により裝飾的に大畫面を纏めて新境地を示し、「蚊帳」は挿繪的描寫の故に畫品を失つたが、共に技術的な精進を見せ、同會有數の作品に數へ得た。田村孝之介の「驟雨」は手際の良さを認められるが、色調が生々しく、大澤昌助は單純化した構圖及びトーンに依る表現に新鮮な手法を示した。第二室の栗原信の筧を使用した「北京」は色調の感覺的な美しさを多く出ない。横井禮市の諸作は内容に乏しく、古家新、松本弘二も不振であつた。

第三室 中川紀元の「月夜の山」「猫靜物」等は筆勢があり、要領よく纏められて居るが觀照の深さに缺けた。野間仁根は水と魚を巧みに模様風に描いた「夏の淡水魚」を出した。熊谷守一の小品には意味を見出し難い。

第四室 高岡徳太郎の「海」「山」は所期の効果舉らず失敗であり、黒田重太郎の「壁畫」其他は既にマンネリ

ズムで、藝術的氣韻乏しく、田口省吾の「娘と子供達」はや、俗調を免れぬが、克明な描寫を見せて居た。

第五室 正宗得三郎の「牡丹」は色彩華麗で、堂々たる筆致を示し、稀に見る佳品である。「磯馴松」も感興を示して居た。藤田嗣治の事變風景を描いた「千人針」は場中の傑作で、構圖はスケッチ的な動勢を捉へて描寫は適確であり、技術的に洗練されてゐる。「千九百年」はフランス風俗を描き、一種繪双紙趣味の洒落れたものであつた。濱田稔光は鹿を描いて變らない。

第七室 向井潤吉の「伐採の人々」は念入りの細密描寫の試みであるが、や、時代錯誤に近い。國枝金三は發展性に乏しく、田邊三重松の「海邊春日」は無難な力作である。外に田中忠夫の「コワイヤー」を舉げる。

第九室は例年に同じく、抽象主義、超現實主義等、前衛派の作品を一纏めにして陳列した。名井萬龜、吉原治良、浪江勘次郎、山口長男等が舉げられるが、何れも低徊的な感覺主義を出す、注目すべき作品を見ない。

第十室 福島金一郎はボナールの作風を學んでゐるらしいが、稀薄である。東郷青児は相變らず、少女を幻想的に様式化して描き、巧緻なマチエールを示した。坂本繁二郎も倦むところ無く、臆臆たる色調を以て馬を描き續けて居る。鍋井克之の「梅雨時の東郷湖」「二筋の川のある村」等は謂はゞ油繪の南畫であり、技術的には看過し難い独自の教養を示して居るが、感覺的な充實を伴はぬ。

第十一室 伊藤繼郎は例により、茶褐色を基調として晦澁なマチエールに依る特殊な効果を企圖して居る。鈴木信太郎は同一様式の反覆で不振である。

第十二室 昨年メキシコから歸朝し、今回一躍會員に推舉された北川民次が「メキシコ、タスコの祭日」「メキシコ、銀鑛の内部」等メキシコ風俗を扱つた大作を出品した。色調は暗く、メキシコ土人の畫風を汲んで、特殊

な歪形が行はれ、マチエールは洗練を示して勞作であり、異國的な感覺が強い。外に吉井淳二の「室内人物」が舉げられる。

第十三、十四室 岡田謙三の「つどひ」は力作であるが、感覺が女性的で色彩も甘さを免れない。島崎鶴二の「川邊」も個性的に特殊な領域を示す作品として注意され、清爽な感覺を認めるが、少女的感傷に浸り切つてゐる。安宅虎雄は感覺が平俗である、他に林鶴雄の「白壁」が舉げられる。

二科會の彫刻部は、近時、寫實的な作品に乏しく、概してブルデルの作風に近い、所謂ミニメンタルな構成が流行して居る。併しそれも裝飾的な様式趣味に陥つて居て、內的に力のある創作を見出し難い。陳列は第六室を彫刻室とし、其他各室に分けて並べた。

渡邊義知は連作「國土を護る」の部分「海」を出品した。魚を脊にした男の大作で、劇的な表現は感覺的な美しさがあるが内容に乏しい。笠置季夫の「小兒と怪鳥」は無難に近く、松村外次郎の石彫「顔」はヒチット彫刻の表現に近い趣味的作品。其他、土田實、水野欣三郎、河合芳男、八柳泰次等、概ね似通つたミニメンタルな作風に依つて居る。川崎榮一の大作「家族」は空疎に近く、木内克は感覺が平俗である。外に山本力吉の「闘牛」を舉げる。

一般應募點數(繪畫)	四一一二點 (彫刻)	二一五點
入選數	(同)	三四五點 (同)
陳列數	(同)	四五〇點 (同)
新會員	北川民次、岡田謙三、島崎鶴二、田村孝之介	五〇點
新會友	伊藤繼郎、古家新、福島金一郎、服部正一郎	
推薦	柏原覺太郎、榎倉省吾、浪江勘次郎(以上繪畫)	
	土田實、川崎榮一、木内 克(以上彫刻)	

特待 竹谷富士雄、吉原治良、田中忠夫、阪宗一
橋本徹郎、松村綾子（以上繪畫） 水野欣三郎、河
合芳夫（以上彫塑）

出品目録（○會員、△會友）

繪畫	馬を洗ふ	柏原覺太郎	貿易港	大澤 昌助	湖群の堰	古家 新	山讃歌	新井みみ子	上越風景	股部正一郎	窓	川有智良三
盛夏緑蔭	同	浴後	米良 道博	夏庭の一角	宮川 仁	海岸	○高岡徳太郎	山本 秀臣	一九〇〇年	○藤田 嗣治	丘にて	萩野 正雄
婦人像	同	夏日小憩	夏目 好一	夏庭の一角	大野 捷吉	海	同	千人針	同	同	雪解けの街	今井 退蔵
人形の夢	同	夏日小憩	宮城三喜子	夏庭の一角	堀澤 好一	山	同	田甫道	同	同	公園の池	平川 要
裸婦	有岡 善郎	夏日小憩	田舎の教會	夏庭の一角	堀澤 好一	山	同	田甫道	同	同	公園の池	平川 要
サカス	高橋 進	夏日小憩	田舎の教會	夏庭の一角	堀澤 好一	山	同	田甫道	同	同	公園の池	平川 要
時間と空間の征服寺田	我部 政達	夏日小憩	田舎の教會	夏庭の一角	堀澤 好一	山	同	田甫道	同	同	公園の池	平川 要
レール	同	夏日小憩	田舎の教會	夏庭の一角	堀澤 好一	山	同	田甫道	同	同	公園の池	平川 要
青い窓	同	夏日小憩	田舎の教會	夏庭の一角	堀澤 好一	山	同	田甫道	同	同	公園の池	平川 要
牛を牽く女	同	夏日小憩	田舎の教會	夏庭の一角	堀澤 好一	山	同	田甫道	同	同	公園の池	平川 要
蚊帳	同	夏日小憩	田舎の教會	夏庭の一角	堀澤 好一	山	同	田甫道	同	同	公園の池	平川 要
裸婦	同	夏日小憩	田舎の教會	夏庭の一角	堀澤 好一	山	同	田甫道	同	同	公園の池	平川 要
裸婦は鳴く	同	夏日小憩	田舎の教會	夏庭の一角	堀澤 好一	山	同	田甫道	同	同	公園の池	平川 要
午後の日曜日	同	夏日小憩	田舎の教會	夏庭の一角	堀澤 好一	山	同	田甫道	同	同	公園の池	平川 要
酒樽のある風景	同	夏日小憩	田舎の教會	夏庭の一角	堀澤 好一	山	同	田甫道	同	同	公園の池	平川 要
高原	同	夏日小憩	田舎の教會	夏庭の一角	堀澤 好一	山	同	田甫道	同	同	公園の池	平川 要
牛と子供	同	夏日小憩	田舎の教會	夏庭の一角	堀澤 好一	山	同	田甫道	同	同	公園の池	平川 要
芝罘の追想	同	夏日小憩	田舎の教會	夏庭の一角	堀澤 好一	山	同	田甫道	同	同	公園の池	平川 要
驟雨	同	夏日小憩	田舎の教會	夏庭の一角	堀澤 好一	山	同	田甫道	同	同	公園の池	平川 要
部屋	同	夏日小憩	田舎の教會	夏庭の一角	堀澤 好一	山	同	田甫道	同	同	公園の池	平川 要
洋装店の少女	同	夏日小憩	田舎の教會	夏庭の一角	堀澤 好一	山	同	田甫道	同	同	公園の池	平川 要
茸と月	同	夏日小憩	田舎の教會	夏庭の一角	堀澤 好一	山	同	田甫道	同	同	公園の池	平川 要
戰場ヶ原	同	夏日小憩	田舎の教會	夏庭の一角	堀澤 好一	山	同	田甫道	同	同	公園の池	平川 要
晝室	同	夏日小憩	田舎の教會	夏庭の一角	堀澤 好一	山	同	田甫道	同	同	公園の池	平川 要
水汲みの女	同	夏日小憩	田舎の教會	夏庭の一角	堀澤 好一	山	同	田甫道	同	同	公園の池	平川 要
假粧	同	夏日小憩	田舎の教會	夏庭の一角	堀澤 好一	山	同	田甫道	同	同	公園の池	平川 要
銀座の窓	同	夏日小憩	田舎の教會	夏庭の一角	堀澤 好一	山	同	田甫道	同	同	公園の池	平川 要
露店	同	夏日小憩	田舎の教會	夏庭の一角	堀澤 好一	山	同	田甫道	同	同	公園の池	平川 要
グロダと女	同	夏日小憩	田舎の教會	夏庭の一角	堀澤 好一	山	同	田甫道	同	同	公園の池	平川 要
室内	同	夏日小憩	田舎の教會	夏庭の一角	堀澤 好一	山	同	田甫道	同	同	公園の池	平川 要

ワルツ	船越三枝子	巴拉咲く鴉舎	居相	常夫	叔母の家族像	小田	正春	歸船	△伊庭傳治郎	荒磯	△山本	直治	樂浪の後継者	金宗	繁
名殘	青木 壽	運	池上	丁一	山羊	神保	俊子	三段峽風景A	同	田舎役者	同	同	アトリエ	佐野繁次郎	
表象	青木 義容	故郷ノ山路	兒玉	勝次	射的塚	榎倉	省吾	三段峽風景B	同	鳥籠と花束	横地	朝子	静物	同	
滲透せる大氣	小林 孝行	二筋の川のある	○銅井	克之	ダム	同	同	同	清水 茂郎	泰山木の花	渡邊	澄子	飯ノ浦	早川	守
夜・卵・雨	吉原 治良	梅雨時の東郷湖	同	同	桃ヶ丘風景	細谷	重雄	少秋	山中 春雄	縁側にて	伊川	寛	飯ノ浦	三木	弘
圖説	同	牡丹	同	同	フライ・ルフト・	竹内	健	少女	芝野 武男	逆光線の丘	瀬尾	暁	シャボテン	山本不二夫	
隔世	同	バールの女像	渡邊	繁	コムボジション△	伊谷	賢藏	冬	中野安治郎	木蓮	小田島	義	夏	坂江 重雄	
氣象	同	鴉を配した裸婦	伊藤	繼郎	朝	同	同	熱帯植物を配せる坂本	益夫	マドモアゼルA	山	同	白壁	十龜廣太郎	
窓	同	紅ついた景	一	同	臥す裸體	岩崎	重雄	姉妹	同	赤ん坊	同	同	エルムの樹蔭	同	
作品	二宮榮一郎	二人の娘	同	同	眞畫	富樫	夏江	信濃町風景	柳田 純好	雄子のある静物	高岡	義次	地球岬燈臺	同	
抒情	高井 貞二	家庭の集ひ	同	同	襟の森	間瀬	謹平	そてつ	小西 光雄	川邊	同	同	夕涼み	生田 正雄	
一九三六年の支那難波架空像	齊藤 義重	草園	松村	綾子	室内人物	同	同	夏の子	長谷川利行	野道	同	同	静物	中村徳次郎	
假設	山口 長男	少女・金魚鉢	同	同	裁縫	田川	寛一	ハルレキン	船橋 治彦	馬車と子供	戸島	孚雄	水蓮	渡邊千代樹	
三人	同	赤目ニナイ瀧	藤田勝太郎	良平	ジャ踊り	木寺	轍	風景	山口 南草	勤仕事	小野岩太郎	朝	同	同	
群	同	阿久根風景	木原 經子	同	島	山内	靖己	菊と蝶	長谷川三千春	ラヂオ體操へ行	旭 亮弘	月	同	同	
杜	同	子供二人	○鈴木信太郎	同	自畫像	北村	勇	松	山路 商	裸婦	玉澤 潤一	秋	同	同	
振子	伊藤久三郎	紫陽花	同	同	メキシコ、タス	北川	民次	室外	熊野 俊市	衣服の女	同	同	同	同	
雨或ひは感傷	同	江ノ浦早春	同	同	メキシコ、銀鏡	同	同	睡蓮	河合 敏雄	能間 弘	米倉 允	嵐の漁村	同	同	
アマツクス	同	越後の海	同	同	メキシコ、悲し	同	同	犬の散歩	中村三樹男	晩秋静物	井上 正子	牛尾山溪流	同	同	
砂	同	柘榴	同	同	メキシコ、三人娘	同	同	樹蔭	塚口 正一	セメントの雲	東本 春水	中野風景	同	同	
山小屋	廣幡 憲	芍薬	同	同	日向葵	同	同	夕風	小島 大輔	古池	阿部 廣司	野火	同	同	
子供の肖像	李 仲生	双鏡	同	同	瀨戸の工場	同	同	つとひ	△岡田 謙三	池畔	渡邊 多平	野火	同	同	
島	福島金一郎	黄昏の白鷺城	佐藤 良樹	同	向日葵	同	同	海邊	同	水郷	渡邊 多平	野火	同	同	
緑の風景	同	ルバシカを着た男高須	操	同	閑庭	島 あふひ	同	裸婦	同	同	同	同	同	同	
山の家	同	港の風景	同	同	波切風景	上山 哲夫	同	冬の漁村	同	同	同	同	同	同	
山手風景	宮島 康二	立葵と童女	奥村 隼人	同	あふむけの裸婦	石川 重信	同	海邊の男達	同	同	同	同	同	同	
水蓮	後藤 繁喜	逸題	下瀬 貞和	同	焼芋屋	松原 雪夫	同	緑蔭	飯田 清毅	砂丘	大淵 晴雄	同	同	同	
子供の居る風景	和田とみを	雪の山	山口 操助	同	工場風景	和佐 良顯	同	南天の有る庭	同	同	同	同	同	同	
微風	○東郷 青兒	二人	磯田 長教	同	秋庭	伴 敏子	同	山越へ道	同	同	同	同	同	同	
プロフィール	同	閨秀畫家	西村千太郎	同	途上	△酒井 亮吉	同	或る山門	同	同	同	同	同	同	
青い手袋	同	飾り海老	△樺塚猪知雄	同	窓	同	同	沼	同	同	同	同	同	同	
月の花粉	濱田 濱雄	同	同	同	踊り子	同	同	花畑	同	同	同	同	同	同	
郊外	松本 俊介	同	同	同	光ちやん	同	同	夕涼	同	同	同	同	同	同	
つりかごの花	黒田壽美子	同	同	同	砂山のある風景	同	同	早川 貞明	同	同	同	同	同	同	
肖像畫一	○オーグ・ヘン	同	同	同	山頂の水邊	同	同	同	同	同	同	同	同	同	
肖像畫二	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	
水より上る馬	○坂本繁二郎	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	

嘯く園	井 關 昇	男	△長谷川八十
野鶴	日高 健泰	日和	△上田 曉
紙すく村	尾崎悌之助	黒潮に呼ぶ	水野欣三郎
二人	小林 武夫	藤をつく女のと	渡邊小五郎
赤い服	柴田 惠	作品三十七	織田久馬一
黒衣坐像	佐藤 眞一	兎	唐木 政一
△嬢	豊岡 孝子	髪	土田 實
肉店	劉 啓 祥	二女	八柳 恭次
夏	△安宅 虎雄	女胸像	中堀 正孝
海邊	同	習作	同
伊豆熱川	同	女立像	諫訪 展夫
源氏の瀧	君家 三郎	少年道化	中村 暉
鏡	佐々木宗一郎	女立像	堀野 秀雄
山の幸	高橋 卯八	女人像	河合 芳男
ヒューの展望	杉本 謙	踊り	木村 敏一
やつで	田岡 正人	少年	淀井 敏夫
山に入る道	松本 長次	首習作	大西金次郎
スターの居る風景伊東市太郎	黒川 健二	男胸像	堀内 正和
黒い扇	岩下 資治	『粗い氣流の中	加賀山敬之
二人裸女	習作	苦澁の果實	繪皮 清光
彫 塑	堀野 秀雄	婦人首	妹尾健太郎
男（臥像）	日高 政法	妹の首	伊本 淳
戯れ	橋本 文吉	父の首	安江 敏
二人	嶺 晴雄	首	鷺 泰次郎
少女首	加藤 隆	首	大橋 浩吉
母と子	竹下 慶一	アルカン（テ	山本 博一
Tの顔	河野 清治	ジャポネーズ	セラ・グエル
少女像	有松 保	家族	同
牛	木内 克	習作	川崎 榮一
女	同	男ノ習作	村田 虎次
鬼の首	同	Y子	後藤 一彦
闘牛	山本 力吉	寝き門	渡邊 政夫
國土を護る「部	○渡邊 義知	トルソ	井手 則雄
分「海	○笠置 季男	習作	柳田 昌
小兒と怪鳥	○松村外次郎		長野 隆業
顔			
モニエマン弱空同			

南畫鑑賞會第四回習畫展

九月五日—八日 上野・日本美術協會
矢野陶々作陶展

九月五日—九日 大阪・三越

六獎會第一回繪畫展（日、洋）

九月五日—九日 大阪・三越

第四回北信輸出工藝展

九月八日—十七日 福井縣商品陳列所

北信工藝協會主催。出品は福井、石川、富山、長野、新潟の五縣。漆器、陶器、金屬、木竹、織物、雜工等計五百六十點を陳列した。

石川秀太郎第三回洋畫個人展

九月九日—十三日 大阪・美術新論社畫廊

第十三回北海道美術協會展（綜合）

九月十日—二十九日 札幌中島公園・農業館

第四回明朗美術展（日本畫）

九月十日—二十九日 東京府美術館

今春、落合朗風を喪つた明朗美術聯盟の公募に依る第四回の展覽會である。各自制作に精通して、盟主亡き後の同會の緊張振りを窺はしめたが、會期半ばにして四名の同人は川口春波一人を残し、他の盟友盟員數名と共に結束して同會を離脱し、別に團體を組織するに至つた。

朗風の裝飾的な浪漫主義は依然として會の作風を支配して居るが、又各人漸く自分の道に進まんとする氣運を示すかに見えた。只全體に技術的水準の低いことが憾まれる。川口春波の六曲一双「香實郷」は蜜柑の木を裝飾的に構圖して力作であるが、筆癖が強く、賦彩に品が乏しかつた。荒井草雨の「綠苑泉石」は寺院の夏庭を描いて色彩の様式的な布置を試み、丹阿彌岩吉の六曲一双「蓮」は生彩に缺け、井上陵華の馬を寫した六曲一双「遅日」は無難に纏められて居た。藤井霞郷の六曲半双「樹海の秋」は低調を免れぬ。其他、具志堅古雅の「月

下香」、谷良治の「穴居の跡」、楠奉白光の「繪馬堂」、授賞された重松謙吉の「男」等が挙げられ、又伊久留朗兒の「カンナ之圖」、東條光高の「春豪」は純粹な感覺と獨創的な手法を示して今後に期待を持たしめた。

搬入 數 一二七點

入選 數 二五點

陳列總數 三一一點

盟友推舉 田代寛哉、村川彌五郎、古淵啞草、具志堅古雅

推賞 平野賞 重松謙吉

エコル・ド・東京秋季展（洋畫）

九月十一日—十三日 銀座・日本サロン

超現實的繪畫を主とした同人の油繪六十二點を陳列。

近藤晴彦油彩個展

九月十一日—十五日 銀座・三味堂

小宮宗太郎油繪個人展

九月十一日—二十日 大阪・阪急百貨店

貌島會美術展（日本畫）

九月十三日—十七日 大阪・松坂屋

堀田清治洋畫展

九月十四日—十八日 大阪・美術新論社畫廊

幸松春浦新作畫展

九月十四日—十九日 日本橋・高島屋

新作二十五點を陳列。

綠包社洋畫小品展

九月十四日—十九日 新宿・伊勢丹

第四回中國四國九縣聯合工藝展

九月十四日—二十日 廣島縣產業獎勵館

廣島縣主催。

セクシヨンドール第四回展（洋畫）

九月十五日—十九日 大阪市美術館

近畿聯合工藝展

九月十五日—十九日 大阪市美術館

九月十五日—十九日 大禮記念京都美術館
京都市主催。

英國繪畫展示會（非公開）

九月十五日—二十六日 銀座・青樹社

勤王畫家鐵齋遺墨展覽會（日本畫）

九月十五日—二十六日 上野・日本美術協會列品館

昨年十一月大阪に於て清荒神山主蒐集二十年記念として催した富岡鐵齋遺作展は、當時東京に於ても引續き展覧の豫定であつた所、都合に依り延引して今回開催されたものである。主催は寶塚清荒神百練會で、作品四百六十餘點が陳列された。

長谷川利行洋畫小品展

九月十五日—三十日 新宿・南海畫廊

小川芋錢個人展

九月十六日—二十二日 大阪・阪急百貨店

河童を主題にした近作三十餘點を陳列。

關西學院校會洋畫展

九月十七日—十九日 大阪市立美術館

第八回東北・北海道工藝品展

九月十七日—二十三日 宮城縣商工獎勵館、齊藤報恩會館

宮城縣並東北北海道工藝協會主催。

木下孝則歸朝第十回展（洋畫）

九月二十日—二十三日 銀座・日動畫廊

第二回渡佛中の作品を主とする油繪六十點を陳べた。「朱色婦人像」「座せる裸婦」「河の風景」等暢達の技術を示してゐた。

中村鐵洋畫個展

九月二十日—二十四日 大阪・美術新論社畫廊

第十六回石川縣美術工藝展

九月二十日—二十四日 金澤・商品陳列所

朝倉塾第十回記念彫塑展

九月二十日—二十九日 東京府美術館
陳列總數百七十七點。朝倉文夫は「新渡戸博士像」ほか六點を出品した。

新日本洋畫協會第三回展

九月二十一日—二十三日 大禮記念京都美術館

高山超陽北支風景畫展

九月二十一日—二十六日 神戸・大丸

柚木久太油繪展

九月二十一日—三十日 大阪・阪急百貨店

登内徹笑第一回日本畫個展

九月二十二日—二十七日 日本橋・白木屋

島巡遊繪畫展（日本畫）

九月二十二日—二十七日 日本橋・白木屋

大島觀光協會主催。

白日莊現代大家新作畫展（日本畫）

九月二十二日—二十九日 日本橋・三越

東西諸作家の小品約三十五點を蒐めた。上村松園の「新緑」、鏑木清方の「たまづさ」、前田青邨「香魚」、川合玉堂「秋景山水」、菊池契月「草紙洗小町」、吉岡堅二「秋果靜物」等が舉げられる。

第四回大衆向工藝品競技展

九月二十三日—二十七日 大禮記念京都美術館
京都市主催。

名匠に因める帶地作品展

九月二十三日—二十九日 日本橋・三越

靜岡縣美術協會恤兵展（綜合）

九月二十三日—三十日 靜岡・商工獎勵館

第六回フォルム秋季展（洋畫）

九月二十四日—二十七日 銀座・紀伊國屋

澤田宗山作陶展

九月二十四日—二十七日 名古屋・松坂屋

趣味の照明器と木工品展

九月二十四日—二十九日 上野・松坂屋
八木一紳近作陶器展
九月二十四日—三十日 大阪・阪急百貨店

美術懇話會展觀

九月二十五日 美術研究所

美術懇話會はその例會として、下村家所藏の下村觀山下繪類を展觀した。「弱法師」「木の間の秋」「春雨」等の名作の下繪、或は「天心先生像」、絶筆「筍圖」などの尤品を陳列し、併せて下村英時の父親山の思出話を行つた。

小早川秋聲軍事スケッチ展（日本畫）

九月二十五日、二十六日 下關・商工會議所

出征軍人慰問繪畫展（日本畫）

九月二十五日—二十七日 名古屋・松坂屋

松本弘二第一回洋畫個展

九月二十五日—二十九日 銀座・資生堂

風景靜物等油繪十八點を出品、色彩、筆觸に情趣がある。

岡本一平色紙展

九月二十五日—三十日 銀座・吾八

魯山人近作並富本憲吉清水六兵衛新美術風雅作陶展

九月二十五日—三十日 日本橋・黒田東苑

諸作家油繪展

九月二十五日—三十日 大阪・美術新論社畫廊

加藤靜兒風景畫展（洋畫）

九月二十六日—三十日 日本橋・高島屋

長谷川利行油繪小品即賣展

九月二十六日—三十日 新宿・天城畫廊

軍用機獻納資金募集密繪繪畫工藝品展（日、洋、工）

九月二十七日、二十八日 大阪朝日新聞社

京都市主催第一回圖案展

九月二十七日—十月一日 大禮記念京都美術館

阿部芳文、米倉壽仁二人展 (洋畫)

九月二十八日—三十日 銀座・日本サロン

第一同N・B・G洋畫展

九月二十八日—三十日 銀座・紀伊國屋

西洋骨畫展

九月二十九日—十月十日 丸之内・丸ビル美術館

松本市主催木工藝術競技會作品陳列會

九月二十九日—十月四日 銀座・松屋

自由畫壇第十六回展 (日本畫)

九月三十日—十月四日 名古屋・縣商工館

同會第十六回の公募展である。應募作品數六十八點、

陳列點數三十二點。

受賞者 永田紳自露、野村松韵

十月

小川原脩第一回近作個展 (洋畫)

十月一日、二日 銀座・資生堂

京都大丸六人會展 (日本畫)

十月一日—三日 京都・大丸

大丸美術部主催、出品者は池田遙邨、徳岡神泉、勝田

哲、金島桂華、案本一洋、三宅風白の六名である。

女婢會作品發表展 (洋畫)

十月一日—五日 銀座・日本サロン

萩野咲彦洋畫個展 (洋畫)

十月一日—五日 日本橋・高島屋

岸浪百坪居第一回個展 (日本畫)

十月一日—六日 日本橋・三越

近代の花鳥畫二十點を出品した。

京都工藝院第一回展

十月一日—六日 上野・松坂屋

今春京都に於て第一回展を開催した同院の東京進出展

で、陶藝、染織、漆藝、金工、木竹工等數百點の多きを陳列した。

國風家具展並紫江會指物展

十月一日—六日 大阪・松坂屋

吉井勇、食滿南北歌と繪の協作展

十月一日—七日 日本橋・白木屋

山崎省三洋畫展

十月一日—七日 大阪・美術新論社書廊

伊藤繩郎、近藤光紀油繪、淡彩展

十月一日—十日 大阪・阪急百貨店

青龍社第九回展大阪展

十月二日—十三日 大阪・朝日會館

矢野橋村紙本山水畫展

十月三日—七日 大阪・三越

近作二十餘點を陳列。

奈良市主催奈良美術工藝品展

十月三日—七日 大阪・三越

日本美術協會第百三回展 (日本畫)

十月三日—十七日 上野・日本美術協會

協會展第百三回は日本畫の公募展として開催された。

撤入總數二百五十五點、陳列總數百十三點で、其の中無

鑑査は二十一點 (十八名) であつた。尙参考品として雪

村の名作を陳列した。(一五五頁参照)

授賞 (貳等賞) 「夏冬二趣」 佐々木永秀、(參等賞)

「興趣」 石川美峰、「鵲」 鹽崎逸陵、「シヤモ」 吉田華章、

「鶴」 森梅溪、「山湖の朝」 稻川光風、「立葵」 吉田徳山、

「退下する義朝」 兒玉輝彦、「静境動あり」 松岡三慶 (褒

狀) 十八名

宇野三吾陶器帶留展

十月五日—十五日 大阪心齋橋筋・オーサカヤ

上野山清貢個展 (洋畫)

十月六日—八日 北大學生ホール

飾畫展 (洋畫)

十月六日—十日 銀座・日本サロン

阿部芳文、米倉壽仁、齋藤長三等八名を會員とする超

現實派繪畫の同人展、陳列數約三十點。繪畫がテーマの

説明に終り、低調な耽美主義を出でない。

第十六回石川縣工藝美術展

十月六日—十一日 日本橋・高島屋

石川縣工藝獎勵會主催。陶器、漆器、金屬、染織、木

竹等二百餘點を出陳、陶器では古九谷の再生を試みるも

のが種々見られた。縣工藝指導所出品の陶器、漆器は意

匠の點で改善の餘地甚だ多い。

三岸節子室内近作發表展 (洋畫)

十月七日—九日 銀座・日動書廊

主に室内を描いた油繪、グワツシュ等二十點を陳列。

澤田宗山作陶展

十月七日—十二日 日本橋・三越

茶器、香爐、花器、食器、飾皿等多數の近作陶器を陳

列した。

滿洲工藝展

十月七日—十二日 大連・三越

大連商工會議所内滿洲工藝協會主催。

皇軍慰問作品展

十月九日—十一日 臺北・教育會館

三木朋太郎近作展 (洋畫)

十月九日—十三日 大阪・美術新論社書廊

第二回京都綜合工藝研究會展

十月九日—十五日 大阪・阪急百貨店

昭和十二年度商工省輸出工藝展覽會

十月九日—十六日 東京府商工獎勵館

五回を重ねた本年度の商工省輸出工藝展は、非常時局

の下に在つて一層の關心を持たれつ、恆例の如く開催さ

れた。別表の如く總撤入數三、七六七點 (出品人數七八

○名)の中、總數一、五五七點が合格陳列され、尙其の他に工藝指導所出品六二點及び陶磁器試驗所出品二五點が併せ陳列された。無鑑査出品の中には地方指導所、試験場等指導機關の出品が多い。陳列品中からシカゴ展覽會出品の爲總計六九七點が選定された。東京展開催後は名古屋(十一月一日—七日)及大阪(十一月二十日—二十六日)で引續き開催された。本年度審査委員の分擔は左の通りである。(和田三造病氣缺席)

(陶磁器) 平野耕輔、日野厚、飯野逸平、瀧藤治三郎、(漆器) 國井喜太郎、山崎覺太郎、松田權六(金屬品) 國井喜太郎、紅藤嘉吉、高村豐周(染織品) 永井得一、丹波恆夫(木竹品) 岡田友次、宮下孝雄、片山彌六(綜合品) 岡田友次、宮下孝雄、片山彌六

出品

出品	一般出品		無鑑査	
	輸入數	合格數	輸入數	合格數
陶磁硝子等	四七四	一七三	三三三	一四四
漆器	六五九	三三三	四三六	二四〇
染織製品	三七四	一九五	九四	六八
金屬製品	二九八	六六	九三	七〇
木竹製品	三五七	一一	二六三	一三五
綜合品其他	四四九	一九	四九	三三
合計	二六一	八七	二五六	六八〇

授賞

受賞	受賞數	人員	進歩賞	有功賞	褒狀	計
陶磁硝子等	一七三	六	二	二	八	二三
漆器	三三三	一三	二	二	三	三七
染織製品	一九五	五	一	一	一	三
金屬製品	六六	三〇	一	一	一	三
木竹製品	一一	六	一	一	一	三
綜合品其他	一九	四	一	一	一	三
合計	八七	三八〇	八	九	七五	九三

進歩賞 (陶磁)「デイナー・セット」名古屋白川製陶株式會社、「唐草紋紅茶摘」東京市大倉陶園、「漆器」盛

美術展覽會 (十月)

器」若松市大橋榮吉、「盛器」静岡市高田元好、(染織)「雙人絹裏朱子紋縮緬」福井市福井精練加工株式會社、(金屬)「灰皿」名古屋市權田廣助、(木竹)「菓子鉢」石川縣向出二郎(綜合)「苺セット」東京市細谷政弘有功賞(陶磁)「デイナー・セット」金澤市日本硬質陶器株式會社、「食器大揃」名古屋市名古屋製陶株式會社(漆器)「二口毛絲ホルダー」秋田縣川連漆器工藝組合、「果物鉢」沖繩縣沖繩漆工藝組合、(染織)「ベルベツト」神戸市鐘淵紡績株式會社、(金屬)「果物盛」名古屋市安藤七寶店、「オリブデキシユ」大阪市中村半兵衛、(木竹)「釣竿」東京市石井仲藏、(綜合)「新聞雜誌入」彦根市伊部文之助

求龍堂及兜屋主催。青山義雄、林重義、野口彌太郎、會宮一念等八名の小品を陳列した。
第四回全國商業美術展
十月十三日—十七日 日本橋・白木屋
獨立美術秋季小品展(洋畫)
十月十三日—十九日 銀座・三味堂
各會員一點宛計十六點を陳列、福澤一郎の「擬態」は裝飾的な色彩の効果美しく、小林和作の「紀州の海」は表現が潑刺として日本畫に通つた呼吸が認められる。其の他川口軌外「蝸牛」、松島一郎「ザボン」等が挙げられる。
表現第六回展(洋畫)
十月十四日—十六日 銀座・紀伊國屋
矢崎千代二軍用機獻納資金醴集バステル展
十月十四日—十六日 大阪朝日新聞社
中村眞繪畫發表展(洋畫)
十月十四日—十七日 銀座・日本サロン
上田清一洋畫展
十月十五日—十七日 神戸畫廊
國防費獻納自由畫壇展(日本畫)
十月十五日—十七日 大禮記念京都美術會
同人の小品七十餘點を陳列。其の賣上金壹千五百圓を國防費に獻納した。
二階堂顯藏個展(洋畫)
十月十五日—十九日 大阪・美術新論社畫廊
第三回錦木美術展(日、染)
十月十六日—十七日 大禮記念京都美術會
千葉縣美術協會綜合美術展(日、洋、寫眞)
十月十六日—十七日 千葉・縣立圖書館
第二回各派選拔新人展(洋畫)
十月十六日—二十一日 新宿・天城畫廊
第一回文部省美術展覽會(綜合)

十月十六日—十一月二十日 東京府美術館

帝國藝術院の設置に伴ふ帝國美術院の廢止と共に、文部省では新に同省主催の美術展覽會を開催することに決し、帝院改組以來の美術界紛擾を一掃して更新の實を舉ぐべく、別項の如く慎重に案を練つた上將來に互つて繼續さるべき新文展の機構を制定、第一回文展として開催した。

昨年臨時の形で開かれた昭和十一年文展では鑑査展、招待展の二回に分つ新制度を試みたが、今次の所謂更新文展では舊來の制に復して四部綜合とし、無鑑査は舊帝展無鑑査以外昨年範圍を擴大した總計六六九名の被招待者全部を認め、他方壁面の綫和を計る爲す法の制限を新にして一般無鑑査作品は第一部縦十尺横七尺、第二部八十號以内と定め、之を超過するものは審査員が陳列の可否を決定する等の方法を取つた。併し無鑑査の氾濫は自然一般出品の入選數に制限を加ふる結果となり、或る部の如きは無鑑査作品の方が入選作よりも遙かに多數を占める現象を呈する等、各部を通じて鑑別には嚴選が行はれた。

従つて一般に入選作は略質の揃つたものとなつたが、無鑑査作品には技術内容共に低劣なものが甚だ多く、舊帝展時代の弊が持ち越されたことを遺憾とし、作家の反省を求めると共に無鑑査問題の解決を望む世評が多く行はれた。

官展問題を繞る紛争は文展の開催と共に略落着く所へ落着いた。即ち新制度に依る文展は機構上帝國藝術院とは全く關係を絶ち、同院會員も一個の作家として審査員の委嘱を受け或は任意に出品する形で、文展は一派に偏することなく全美術界を包含せんと努めたが、出品の結果は大體舊帝展作家に依つて充されることとなつた。從來の所謂在野團體で參加したのは日本美術院と構造社位で、日本美術院からは同人の出品總計五點と云ふ形式的

なものに過ぎず、第三部では其の他に舊二科系の出品者等も加はつて多少色彩を増した程度であつた。他方新制作派協會、第三部會の如く舊帝展より出でて純粹在野運動を續けて新文展に戻らぬものもある。事變の影響と見られるものは主題の上に若干の戰時的街頭風景其の他が見出される程度で、大多數の制作には例年と格別の變化無く、消極的な意味では相當な有力作家の間に製作に氣乗りせぬ爲の不出品などもある如く見受けられたが、之も時局の影響のみとは思はれなかつた。

第一部では、院展からの出品は横山大觀、中村岳陵の兩名のみで、舊帝展作家中帝國藝術院會員では京都側が殆ど全部出品したのに比し東京では鏑木清方一名のみで同會員以外でも概して東京側有力作家の出品甚だ少く、其の意味で寂寥を免れなかつた。竹内栖鳳と横山大觀の作品が一室に陳列されたことは種々の意味で評判が喧しかつたが兩者共比較的輕い氣持の作品ながら夫々の特質を示して、やはり場中注意されるものであつた。栖鳳の「若き家鴨」二曲一又は家鴨の群の全體としての動勢と個々の姿態とを巧に捉へ、其の特質と生動の趣を寫して間然する所なく、作者一流の技巧の極致を示した。地を埋めた荒い金沙子が強過ぎて主題を弱めてゐると一般に評されたが、其の裝飾手法と寫生的繪畫とを調和させることに作意があつたものと見られ、それだけ工藝的要素の勝つた作品になつてゐる。大觀の「雲翔」は獨特の水墨山雲圖であるが、珍らしく動的な構想に成り、雲煙の湧起流動の狀を寫してよく雄大なる自然の趣を得た。

質に於て洗練された佳作はやはり老巧の大家の中に見出される。菊池契月、西村五雲、鏑木清方、橋本關雪、上村松園等の諸作夫々に注目されて好評であつた。契月の「麥掬」は健全な寫實的作品で眞摯の氣に充ち、内容的に農民の生活を捉へたと云ひ難く寧ろ理想化に傾いたが、作者の情意と手腕を十分に發揮した力作。五雲の

「麥秋」亦素直な愛情と忠實な自然觀とを示した快い作であるが、技法の上で例へば線條の驅使等に幾分の反省を望みたいものが見える。清方の「鰯」は會場效果を求めぬ小品で、作者の長ずる市井情景の挿繪的畫趣を成し神經と愛情の行き渡つた點で頗る澄明な作であつた。

松園の「草紙洗小町」は愈々旺なる創作力と技術的完成を示し、一種古典的な大さを有する點で場内異數である。關雪は白描態の「赴征」を描き簡樸の表現に好個の纏りを見せた。之も時局との聯關を思はせる作であつたが、川村曼舟の「秋空」は更に現實的な現代兵器の一種を描いた。併し藝術的觀照を缺いた此の作は單に大膽な試みとして終つたと云ふ外はない。堂本印象の「觀音」は現代の宗教畫として注意すべき作たるを失はず、多年の習練に成る技術の驅使と創造性の豊富さを示したが、畫面に緊密な統合力を缺く憾があつた。

新人の活動は相當目醒しく注目を惹くものがある。第一室には主として此等新傾向を示す秀作が蒐められてゐたが、中でも福田豊四郎の「樹水」と吉岡堅二の「馬」とが特に目立つた。何れも無鑑査の寸法制限を超えた大作で、「樹水」は超現實派的感覺と手法とを巧に採り入れて氷雪の月夜に群鹿の跳躍を描いたもの、意圖卓拔、畫面爽快で裝飾的效果もあり、異彩を放つ出来であつた。

「馬」も裝飾的に扱はれた作で畫面一杯に描いた群馬の様式化は新鮮な效果を収めてゐる。其の他上村松篁の「母子の羊」、三谷十糸子の「朝」、橋本明治の「淨心」等を擧げる。「淨心」は近頃屢々行はれる古佛像に現代人物を配したもので、すつきりとした技術と智的才能を示して居る。併し此の作の成果よりも更に今後を期待すべきであらう。

第二室、不二木阿古の朝鮮風俗を描いた「將棋親舊」、竹内無愛樹の「寂日」等佳作に擧ぐべく、第三室では既述作品の外山口華楊の「洋犬圖」が優れた技術に貴族的

な美しさを示した。第四室、中村岳陵の「砂濱」は院展出品作と同様世評は區々であつたが、簡約された構圖に裝飾的賦彩効果を求めたもので、詩情もあり、新しい行き方として一つの成功を見せてゐる。吉村忠夫の「麻須良乎」は上古の武士を描いて簡潔な美しさあり、其の他木谷千種の「義太夫藝妓」、水田竹圃の「下賀茂秋曉」等を擧げる。山本丘人の「丘」は素直な自然觀照を示すが細部に捉はれて全體を引緊める力を缺く。奥村厚一の「落葉の秋」は洋畫の因襲的表現に倣ふことから脱する必要がある。

第五室の岩田正巳の「富士の聖僧日蓮」は構想の苦心を見る力作ながら統合的な力強さが足らず、前原豊三郎の「花ヲ造ル」は主題に興味を惹かれる。第六室では野田九浦の「一休禪師」、矢野橋村の「暮色」、杉山寧の「秋意」等が注意された。「暮色」の忠實な描寫は一步を進めて藝術的に深められて欲しい。「秋意」は十分な才能を示しながら弱い畫面となつた。第八室、小早川清の「春琴」、第九室、小堀安雄の「源義經」、勝田哲の「茶室」等夫々技術的に優れ、東山魁夷の「虹」は洋畫に近づいた白っぽい畫面であるが清爽な情趣を見せた。第十室では森村宜稻の「颶風」、三宅風白の「雪合戦」、寺島紫明の「朝」等夫々の特色を示した。「朝」の作者は悔り難いが、藝術的觀照が一段と深められることを必要とする。

第十一室以下では既述の外、宇田萩郎の「田植」、案本一洋の「葵上」、西岡聖鴻の「渦」、池上秀畝の「颶風」等が數へられた。

無鑑査の不振は第一部でも目立つたが、第二部でも同様と云ふよりは一層甚しく、殊に無鑑査が入選作と略同数と云ふ多數であり、それ等の多くが過去を物語るに止まつて研究と進歩の跡を示さず、又野心的な大作は少壯作家に限られて、圓熟の技に依る大家の力作を殆ど見出せなかつたことは遺憾であつた。寧ろ入選作の中に相當

の技術と創作力を示したものが多く見られた。

第一室に新進の力作が陳列され、夫々に自由な技術を示して興味があつた。大貫松三の「小供達」は多少作りのもの観があるが、巧な構圖と様式化に纏められ、色感も優れてゐる。岩崎勝平の「焚木はこび」は昨年の連作と見られる殆ど同巧の作で、穩かな寫實的作風のもの。倉員辰雄の「嶺」には即興的な粗雑さが見えるが、繪具の自由な驅使は落着いた色彩と相俟つて力強い畫面を成した。此等と共に特選された森田元子の「聴音」は平明な描寫と云ふに止まる。水船三洋の「まどの部屋」は獨特の色模様化した手法によく纏められ、有岡一郎の「薄暮」は才筆を示し技巧も確かであるが一種氣取りが目立つ。川村精一郎の「丘の子供達」は成功した作と稱し難いが、勝れた技術と特異な感覺を示した。

第三室は無鑑査のみが陳列された。山本鼎の「園長の像」は圓熟の技に日本人らしい氣持を見せた肖像畫で、歐洲畫の正統を目指した伊原宇三郎の「深井英五氏の肖像」と面白い對比をなす。田邊至の「マンドリニスト」は健實な勞作と云ふべく、小林萬吾の「繡線」は支那服の女を描いて好評であつた。上野山清實のアイヌを描いた「盲目の老酋長」は略筆の寫生であるが、眞實さを持つた佳作、齋藤與里の「海邊秋景」は清新な感覺的表現を見せ、林俊衛の「海邊小丘」と共に異色を示した。

第四室では吉村芳松の「斜陽平日」が目立つて優れ、特異な面白い畫面を見せた。島野重之の「水邊初夏」は樂に構圖して筆致も暢びてゐるが印象される所薄く、野口良一呂の「バルコン」は違者ではあるが粗雑さを免れない。中村研一の「朝」は此の作者として成功と云ひ難いであらう。第五室、長谷川昇の「若き女」は甘美な技術的完成を示すが内容に乏しい憾がある。阿以田治修の「女ふたり」、中野和高の「ひととき」、鈴木千久馬の「清流」いづれも垢抜けのした色感と輕快巧妙な筆致に於て

似通つたものを持ち、都會人的神經を主調としてゐる。高宮一榮の「水郷の午後」には東洋的な面白味があつた其の他中澤弘光の「嶋の嶋」、小絲源太郎の「嬢娟」等が數へられる。川島理一郎の「瀑布」は水の流動が捉へられてゐない。

第六室で高間惣七の「太陽と鶴」は珍しく寫生的な作であつたが作者の長所が全く失はれ、第十室では權藤種男の「遊鯉」、平岡權八郎の「老給仕たち」が目立つた。第十一室に特選された山下大五郎の「中庭の窓」と高光一也の「葦積む頃」がありいづれも相當の技を示すが、後者は生活と遊離したものとなつてゐる。朝井閑右衛門の「通州の救援」は畫面の尅大さと刺戟的な描寫で著しく目立つたが、構圖混亂し徒に怪奇な表現が不快を與ふるに止まつた。野口謙藏の「應召風景」亦時局に取材したが佳作と稱し難い。其の他岡本貞四郎の「O先生」が注意された。第十二室以下では石川滋彦の「鋪道」、南政善の「車上」、渡邊浩三の「草上」、橋本八百二の「春」等を擧げる。

油繪の外に水彩畫一點、版畫一點、バステル一點があつた。版畫では勝平得之の「造花」が構想技法共に出色の出來で、織田一磨の「横笛」は手法に特殊の効果を示してゐた。

第三部では舊帝展作家以外、構造社、院展、舊二科系作家などは加はつたが全體として格段の變化を來すこともなく、常套的な作品が多く陳べられ、概して低調と云ふ外なく略平均した水準を示した。此の部では入選作よりも無鑑査の方が遙かに多いことも注意を惹く。

木彫が多く行はれてゐて、それ等の中には傳統的作風以外、材料の取扱ひに種々の工夫を示すものを見出すことは興味深い、材料と表現に不可分の必然性を見出すものは少い。澤田晴廣の「火星島身三部作の三」は力作であるが、幻想的 주제に作風が伴はず、興趣の乏しいも

のとなつてゐる。佐々木大樹の「春苑」、長谷川榮作の「のぼるもの」等甘美な情趣以外に藝術的滋味を持たぬは遺憾である。山崎朝雲の「豊太閤」、三木宗策の「國威發揚」など仕上げの技巧の完璧を見るが、力に缺けて弱いものとなつた。木彫家に多い造型性の稀薄さからである。此等に比して傳統的作品ながら阿井瑞岑の「釋迦說法」は、現代に珍しい楨像を刻んで上古に劣らぬ見事な出来栄を見せてゐる。

特選された西田明史の群像「相倚」はアルカイスムの精神を學んだ特色ある作風で、靜的な表現に成功してゐる。富永朝堂の「粧」も同じく、之は東洋的な古態を學んで、様式化にも無理がなく異色を示す出来である。森大造の「雄略賦」亦茲に擧ぐべきであらう。佐伯留守夫の「樂園」頗る興趣に富んで注目すべき才能を示し、古川順三の「とかげ」は平明な寫生でよく纏められた。

塑造では藤井浩祐の「梳髮」、安藤照の「立像」、國方林三の「裸」、後藤泰彦の「清景」、三坂歌一郎の「若い女」、後藤素弘の按摩を寫した「斜陽」など、夫々に行き方は違ふが、注意される作品として擧げられる。堀江越の「試作」、後藤清一の「顔」等研究的態度を示すものであつた。安永良徳の「三七七年の制作第七」は文展に迎へらるべきものではあるまい。

特選された荒居徳亮の「影」は人體の温みを感じさせる素直な出来で、同じく特選の諸作、吉開伊喜藏の「働きの後」、吉田淑示の「弓」、分部順治の「若い男」は何れも男性の筋骨を寫して夫々に水準に達した技術を示してゐるが、秀才型で創造性の稀薄な憾みがあり、此處に止まつて新時代の飛躍を缺かぬ様に希望したい。所謂「特選型」の出来ることを憂ふからである。

肖像彫刻が數點あつたが平凡と云ふ外なきもの多く、獨り院展から參加した喜多寒泉の「椎尾博士像」が異色を示した。浮彫には齋藤素巖の大作「避難者」があり殆

ど丸彫を併用した高肉で、古典的な美しさと練達の技を示してゐるが、現代を取扱つたものとして現代の空氣が稀薄である。一色五郎の「陸軍（歩兵）」は前年來の連作でやはり佳作の一に數へられる。

第四部出品數は別表に示す通り入選一〇九、無鑑査五七點で、兩者を通じ金屬工藝最も多く、漆器之に次ぎ、陶磁及硝子、染織以下の順序になる。用途から見て作品の種類は依然として限られ有閑的な技法を凝したものが多く、意匠にも舊套を脱せぬもの乃至誇示的な惡趣味のものが無いとは云へぬが、一面清新な個性的感覺を働かせ、或は謙讓な工藝美を目的として努力したものの漸次増加の傾向を示し、大體水準も揃つて快く見られた。

金工には進歩的な作家が多く、花瓶、壺等の外、スクリーン、置物、柱掛等に種々の試みを示し、殊に板金の利用に新鮮な効果が多く見られた。高村豐周の「黃銅花器」は近代建築に聯關を持ち而も日本らしさの工夫が見えるが未だ研究作と見るべく、香取正彦の「鑄銅耳付花瓶」、は力作であるが象嵌の文様に再考を加へたかつた。長野埜志の「青銅鳩耳花瓶」、林萬壽人の「青銅魚文花瓶」、北原三佳の「青銅鳳紐千鳥透香爐」等擧ぐべく、佐々木泉堂の「彈阮成鐫銅置物」は擬古作として感じのよい出来であつた。板金に依る置物で、大須賀喬の「眞鍮龍置物」は試みを多く出でず、加藤宗巖の「フーライチヨオチヨオウオ銀置物」は創意の面白さを見せる。

漆器は質の上で最も充實を示し、各部を通じて本年唯一の文部大臣賞、本間舜華の「漆器視箱」の佳品をも得た。此の視箱は傳統的な意匠と技術を竭した精品で、貴族的な點で實用工藝の主張からは遠く、意匠感覺の上で新時代を開拓するものとは云へぬが、會場効果を意識せず、裝飾に凝つて浮華に流れず、作家の愛着と良心の籠つた仕事として、且つ趣味と氣品の高貴さに於て、寔に近年稀有の作と云ふべく敢て賞讃を惜むものではない。

其の他佐藤陽雲の「彫漆野草文文庫」、高野松山の「漆蝙蝠飾箱」、前大峰の「漆刀畫水引草簾」、吉田源十郎の「漆大刀豆の棚」、張開禧一の「漆器花薊化粧箱」、中山正人の「十角形蠟螂文様盛器」等夫々に優れ、山永光甫の「乾漆盤」は簡素に美しく、内藤四郎の「竹模様金銀平脱小箱」は華麗で大膽な意匠に面白い効果を見せた。堆朱楊成の「彫漆鶉文平卓」は精技を示すが技巧過重に傾き、文展開會と共に他界した奥村霞城の絶作「漆器鹿ノ圖パネル」は、新たな試みの努力を示してゐるが、研究途上の作として十分の成功に至らなかつたことが惜まれる。

陶磁で特選された河村喜太郎の「金襴手雲模樣八角盆水指」は、華麗な中に新鮮な味と落着きを見せた作で、其の他清水正太郎、宮之原謙、福田力三郎等の諸作が注意されたが、概して陶磁の振はぬことは遺憾である。中で沼田一雅が駱駝を置物とした「胡砂の旅」を出品したが寫實に長ずる此の作者が、適度の様式化を行つて面白い成功を見せた。硝子は甚だ出品少く寂しかつたが、岩田藤七、各務鐵三、小川雄平の三點が何れも夫々に異なる特技を揮つた。小川雄平の「菱紋手箱」は新材料パルト・ド・ヴェールの効果を巧みに用ひてゐた。

染織には複雑な絢爛趣味のものが多く、繪畫を摸して意匠のつたないものなどが見られるのは再考を希望する所以である。山鹿清華の「手織錦熱河圖壁掛」、中村鵬生の「琵琶湖まつり手織錦壁掛」等は主題の興味を巧に表現してゐた。其の他木村和一、喜多村榮太郎等の諸作を擧げる。

木竹には飯塚瑠璃齋の「釣花籃」を見るのみで淋しく一方人形は著しい進歩を示した。特選された野口光彦の「砂丘に遊ぶ子供御所人形」、野呂天潤の「祭御所人形」ともに優れ、二點入選した堀柳女も個性の勝つた、精緻の技を見せた。皮革は未だしの觀がある。廣川松五郎の

「革染三曲衝立」はよい出来であるが、外装は讃辭を呈し難いものであつた。

出品数

搬入数	入選数	無鑑査	陳列数
第一部	一四八五	一一八	七八
第二部	二四二八	一三一	一九六
第三部	三八二	六三	二六〇
第四部	八一九	一〇九	一五七
計	五一四	四二一	七九

第四部出品内訳

金工	漆器	陶磁	硝子	染織	人形	木竹	雜
入選	四二	三〇	一七	一四	五	〇	一
無鑑査	二二	一四	一〇	七	〇	一	三
計	六四	四四	二七	二一	五	一	四

文部大臣賞(第四部)「漆器硯箱」本間壽華
特選(第一部)「淨心」橋本明治、「將棋親舊」不二木阿古(第二部)「焚木はこび」岩崎勝平、「小供達」大貫松三、「榮積む頃」高光一也、「水郷の午後」高宮一榮、「嶺」倉員辰雄、「中庭の窓」山下大五郎、「水邊初夏」島野重之、「聽音」森田元子(第三部)「相倚」西田明史、「若い男」分都順治、「働きの後」吉開伊喜藏、「弓」吉田淑示、「影」荒居徳亮(第四部)「金襴手雲模様八角捻水指」河村喜太郎、「砂丘」遊ア子供御所人形」野口光彦

政府買上(第一部)「洋大圖」山口華楊、「草紙洗小町」上村松園(第二部)「マンドリニスト」田邊至「斜陽平日」吉村芳松、「嬋娟」小絲源太郎(第三部)「吉祥果」佐崎霞村、「梳髮」藤井浩祐(第四部)「胡砂の旅」沼田一雅、「手織錦熱河圖壁掛」山鹿清華、「歎き硝子花瓶」岩田藤七

李玉職御買上(第一部)「一休禪師」野田九浦、「鯛」鋪木清方(第二部)「繡線」小林萬吾、「嶋の嶋」中澤弘光、「横笛」版畫)織田一磨(第四部)「果樹林

蔚繡屏風」鹿島英二、「菱紋手箱」小川雄平
大禮記念京都美術館買上(第一部)「朝」三谷十糸子「淨心」橋本明治(第二部)「猫と老木」伊藤四郎「子供達」大貫松三、「志賀高原の秋」辻永(第三部)「働きの後」吉開伊喜藏(第四部)「漆器鹿の圖パネル」奥村霞城、「漆器桐引欄」鈴木貞路

出品目録

審査員
帝國藝術院會員
無鑑査

第一部				審査員				無鑑査			
内海風景	西山 英雄	暮春	宿雪	古屋 正壽	奧村 紅稀	春	富士の聖僧日蓮	岩田 正巳	前原豊三郎	戸田 北達	山田 三郎
おしろい	廣田 多津	燒岳	洋犬	鈴木 大華	阪口龍太郎	雨餘	花ヲ造ル	戸田 北達	戸田 北達	戸田 北達	戸田 北達
初夏の花	濱田 觀	渡頭	秋光	山口 玲照	和 高 節二	南紀ノ濱	三原 清宏	井上 通世	雪橋	新枝	西垣 尊一
母子の羊	上村 松篁	橋本 明治	大日三世子	三谷十糸子	白岩光三郎	福田豊四郎	藤本 昌樹	澤 宏 毅	野島 清一	松尾 冬青	岡田 昇
淨心	朝	漁村閑景	樹水	排鋤	海濱圖説	馬	吉岡 堅二	野島 清一	松尾 冬青	岡田 昇	矢野 香蘭
十月の頃	〇三谷十糸子	〇白岩光三郎	〇福田豊四郎	〇藤本 昌樹	〇澤 宏 毅	〇野島 清一	〇松尾 冬青	〇岡田 昇	〇矢野 香蘭	〇三輪 昆勢	〇森村 稻門
朝	〇三谷十糸子	〇白岩光三郎	〇福田豊四郎	〇藤本 昌樹	〇澤 宏 毅	〇野島 清一	〇松尾 冬青	〇岡田 昇	〇矢野 香蘭	〇三輪 昆勢	〇森村 稻門
漁村閑景	〇三谷十糸子	〇白岩光三郎	〇福田豊四郎	〇藤本 昌樹	〇澤 宏 毅	〇野島 清一	〇松尾 冬青	〇岡田 昇	〇矢野 香蘭	〇三輪 昆勢	〇森村 稻門
樹水	〇三谷十糸子	〇白岩光三郎	〇福田豊四郎	〇藤本 昌樹	〇澤 宏 毅	〇野島 清一	〇松尾 冬青	〇岡田 昇	〇矢野 香蘭	〇三輪 昆勢	〇森村 稻門
排鋤	〇三谷十糸子	〇白岩光三郎	〇福田豊四郎	〇藤本 昌樹	〇澤 宏 毅	〇野島 清一	〇松尾 冬青	〇岡田 昇	〇矢野 香蘭	〇三輪 昆勢	〇森村 稻門
海濱圖説	〇三谷十糸子	〇白岩光三郎	〇福田豊四郎	〇藤本 昌樹	〇澤 宏 毅	〇野島 清一	〇松尾 冬青	〇岡田 昇	〇矢野 香蘭	〇三輪 昆勢	〇森村 稻門
馬	〇三谷十糸子	〇白岩光三郎	〇福田豊四郎	〇藤本 昌樹	〇澤 宏 毅	〇野島 清一	〇松尾 冬青	〇岡田 昇	〇矢野 香蘭	〇三輪 昆勢	〇森村 稻門
吉岡 堅二	〇三谷十糸子	〇白岩光三郎	〇福田豊四郎	〇藤本 昌樹	〇澤 宏 毅	〇野島 清一	〇松尾 冬青	〇岡田 昇	〇矢野 香蘭	〇三輪 昆勢	〇森村 稻門
野島 清一	〇三谷十糸子	〇白岩光三郎	〇福田豊四郎	〇藤本 昌樹	〇澤 宏 毅	〇野島 清一	〇松尾 冬青	〇岡田 昇	〇矢野 香蘭	〇三輪 昆勢	〇森村 稻門
松尾 冬青	〇三谷十糸子	〇白岩光三郎	〇福田豊四郎	〇藤本 昌樹	〇澤 宏 毅	〇野島 清一	〇松尾 冬青	〇岡田 昇	〇矢野 香蘭	〇三輪 昆勢	〇森村 稻門
岡田 昇	〇三谷十糸子	〇白岩光三郎	〇福田豊四郎	〇藤本 昌樹	〇澤 宏 毅	〇野島 清一	〇松尾 冬青	〇岡田 昇	〇矢野 香蘭	〇三輪 昆勢	〇森村 稻門
矢野 香蘭	〇三谷十糸子	〇白岩光三郎	〇福田豊四郎	〇藤本 昌樹	〇澤 宏 毅	〇野島 清一	〇松尾 冬青	〇岡田 昇	〇矢野 香蘭	〇三輪 昆勢	〇森村 稻門
三輪 昆勢	〇三谷十糸子	〇白岩光三郎	〇福田豊四郎	〇藤本 昌樹	〇澤 宏 毅	〇野島 清一	〇松尾 冬青	〇岡田 昇	〇矢野 香蘭	〇三輪 昆勢	〇森村 稻門
森村 稻門	〇三谷十糸子	〇白岩光三郎	〇福田豊四郎	〇藤本 昌樹	〇澤 宏 毅	〇野島 清一	〇松尾 冬青	〇岡田 昇	〇矢野 香蘭	〇三輪 昆勢	〇森村 稻門
新樹	〇三谷十糸子	〇白岩光三郎	〇福田豊四郎	〇藤本 昌樹	〇澤 宏 毅	〇野島 清一	〇松尾 冬青	〇岡田 昇	〇矢野 香蘭	〇三輪 昆勢	〇森村 稻門
熊谷の次郎直實	〇三谷十糸子	〇白岩光三郎	〇福田豊四郎	〇藤本 昌樹	〇澤 宏 毅	〇野島 清一	〇松尾 冬青	〇岡田 昇	〇矢野 香蘭	〇三輪 昆勢	〇森村 稻門
蕭える若葉	〇三谷十糸子	〇白岩光三郎	〇福田豊四郎	〇藤本 昌樹	〇澤 宏 毅	〇野島 清一	〇松尾 冬青	〇岡田 昇	〇矢野 香蘭	〇三輪 昆勢	〇森村 稻門
藤井浩祐	〇三谷十糸子	〇白岩光三郎	〇福田豊四郎	〇藤本 昌樹	〇澤 宏 毅	〇野島 清一	〇松尾 冬青	〇岡田 昇	〇矢野 香蘭	〇三輪 昆勢	〇森村 稻門
寂日	〇三谷十糸子	〇白岩光三郎	〇福田豊四郎	〇藤本 昌樹	〇澤 宏 毅	〇野島 清一	〇松尾 冬青	〇岡田 昇	〇矢野 香蘭	〇三輪 昆勢	〇森村 稻門
萌る丘	〇三谷十糸子	〇白岩光三郎	〇福田豊四郎	〇藤本 昌樹	〇澤 宏 毅	〇野島 清一	〇松尾 冬青	〇岡田 昇	〇矢野 香蘭	〇三輪 昆勢	〇森村 稻門
追はるる山鹿	〇三谷十糸子	〇白岩光三郎	〇福田豊四郎	〇藤本 昌樹	〇澤 宏 毅	〇野島 清一	〇松尾 冬青	〇岡田 昇	〇矢野 香蘭	〇三輪 昆勢	〇森村 稻門
白日有閑	〇三谷十糸子	〇白岩光三郎	〇福田豊四郎	〇藤本 昌樹	〇澤 宏 毅	〇野島 清一	〇松尾 冬青	〇岡田 昇	〇矢野 香蘭	〇三輪 昆勢	〇森村 稻門
仔馬	〇三谷十糸子	〇白岩光三郎	〇福田豊四郎	〇藤本 昌樹	〇澤 宏 毅	〇野島 清一	〇松尾 冬青	〇岡田 昇	〇矢野 香蘭	〇三輪 昆勢	〇森村 稻門

土手	歸去來	上原 寅彦	湯 瀧	西岡 聖鶴	晚夏	一木萬壽三	或る日	河井 清一	水郷の午後	高宮 一榮	いこふ女	池田治三郎
眞心を結ぶ	○機本千花俊	寂秋	○池上 秀敏	嶺	倉員 辰雄	海邊秋景	○河井 清一	水郷	高宮 一榮	いこふ女	池田治三郎	久夫
淀川堤	林 梯三	暮る海	小林 柏陽	山のブル	黒田 頼綱	志賀高原の秋	○河井 清一	秋晴	高宮 一榮	いこふ女	池田治三郎	久夫
爽(さわやか)	海老名正夫	立秋	奈良 裕功	猫と老木	伊藤 四郎	志賀高原の秋	○河井 清一	秋晴	高宮 一榮	いこふ女	池田治三郎	久夫
漢青葉	○川船 水梓	ゆく秋	松本 大宇	海邊秋色	伊藤 四郎	志賀高原の秋	○河井 清一	秋晴	高宮 一榮	いこふ女	池田治三郎	久夫
雪合戦	○三宅 鳳白	山静	横内 大明	薄暮	高木春太郎	初秋	○河井 清一	秋晴	高宮 一榮	いこふ女	池田治三郎	久夫
秋霖	○赤松 雲嶺	パーマメント	堤 利彦	庭	○有岡 一郎	久本 弘一	○河井 清一	秋晴	高宮 一榮	いこふ女	池田治三郎	久夫
漁村	○野添 平米	海望む南郷の峯	金子 恵治	丘の子供達	川村精一郎	室内	○河井 清一	秋晴	高宮 一榮	いこふ女	池田治三郎	久夫
川沿ひの家	磯田又一郎	國防の覺め	○太田 天洋	山中湖畔	内田 一郎	婦人像	○河井 清一	秋晴	高宮 一榮	いこふ女	池田治三郎	久夫
山は粧ふ	平岩 三郎	鷺島	○太田 天洋	波太風景	土橋 芳次	巴ルコン	○河井 清一	秋晴	高宮 一榮	いこふ女	池田治三郎	久夫
志摩の女	○板倉 星光	忍ひ	石島 良則	美ヶ森	河原 修平	窓際の静物	○河井 清一	秋晴	高宮 一榮	いこふ女	池田治三郎	久夫
烟雨	八木園春山	春日	○土肥 蒼樹	田園町の初秋	刑部 人	室内二女	○河井 清一	秋晴	高宮 一榮	いこふ女	池田治三郎	久夫
朝雲	○櫻井 孝一	雙曲	○土肥 蒼樹	放牧雙牛	白石久三郎	朝	○河井 清一	秋晴	高宮 一榮	いこふ女	池田治三郎	久夫
清明節の虎郎	河合 健二	閑隱寮の秋	○保間 素堂	秋園	田村 一男	緑蔭	○河井 清一	秋晴	高宮 一榮	いこふ女	池田治三郎	久夫
古事記圖卷	藤田 安正	冬暖	○安田 平圃	アトリエ	鈴木 敏	湖群	○河井 清一	秋晴	高宮 一榮	いこふ女	池田治三郎	久夫
雨奇晴好	○山下 竹齋	展傘圖	中川 正次	花を賣る男	石渡清三郎	水邊初夏	○河井 清一	秋晴	高宮 一榮	いこふ女	池田治三郎	久夫
秋晴	○堀井 香坡	土佐ノ磯	大島 祥丘	双妍圖	遠田 運雄	裸婦	○河井 清一	秋晴	高宮 一榮	いこふ女	池田治三郎	久夫
初夏	○長山はく子	洋犬之圖	戸島 光雄	二人	○青柳嘉兵衛	北村 綱義	○河井 清一	秋晴	高宮 一榮	いこふ女	池田治三郎	久夫
南總宮谷の秋二題田園	○谷角日登春	湖風	兒島 華風	庭	伊佐治勝太郎	川口 雄男	○河井 清一	秋晴	高宮 一榮	いこふ女	池田治三郎	久夫
一日一話	○山本 紅雲	丘ノ小松	中田 草春	午睡	松本 光治	夏	○河井 清一	秋晴	高宮 一榮	いこふ女	池田治三郎	久夫
水尾ノ秋	○中川 亨	行く春	○太田 秋民	みなと祭の朝	黒田 實	山湖	○河井 清一	秋晴	高宮 一榮	いこふ女	池田治三郎	久夫
湖畔	○密宇田 萩都	軍國の秋	○小早川秋聲	母と子	林 正子	女ふたり	○河井 清一	秋晴	高宮 一榮	いこふ女	池田治三郎	久夫
田植	○密宇田 五雲	花塙夕陽	○八田 高容	坐像	○矢島 堅土	畫の月	○河井 清一	秋晴	高宮 一榮	いこふ女	池田治三郎	久夫
麥秋	○吉村 三郎	花塙夕陽	○八田 高容	化粧	○山本 鼎	鵲の鷗	○河井 清一	秋晴	高宮 一榮	いこふ女	池田治三郎	久夫
霧雨	○會、密宇田 清方	月	○三木 翠山	園長の像	○石川 寅治	清流	○河井 清一	秋晴	高宮 一榮	いこふ女	池田治三郎	久夫
朝	○加藤 晴彬	ショウウィンドウ武藤	嘉門	魚目のお曾長	○上野山清實	會、密宇田 弘光	○河井 清一	秋晴	高宮 一榮	いこふ女	池田治三郎	久夫
和春	○森 壽華	花をもつ少女	櫻井 悦	魚目のお曾長	○上野山清實	會、密宇田 弘光	○河井 清一	秋晴	高宮 一榮	いこふ女	池田治三郎	久夫
麥秋	○案本 一洋	まどへのや	芝生	新緑	○白瀧幾之助	會、密宇田 弘光	○河井 清一	秋晴	高宮 一榮	いこふ女	池田治三郎	久夫
大根島	○案本 一洋	まどへのや	芝生	新緑	○白瀧幾之助	會、密宇田 弘光	○河井 清一	秋晴	高宮 一榮	いこふ女	池田治三郎	久夫
葵上	○案本 一洋	まどへのや	芝生	新緑	○白瀧幾之助	會、密宇田 弘光	○河井 清一	秋晴	高宮 一榮	いこふ女	池田治三郎	久夫
鳩舎	○案本 一洋	まどへのや	芝生	新緑	○白瀧幾之助	會、密宇田 弘光	○河井 清一	秋晴	高宮 一榮	いこふ女	池田治三郎	久夫
待機	○猪飼 晴谷	小供達	大貫 松三	森田 元子	岩崎 勝平	ダリア	○河井 清一	秋晴	高宮 一榮	いこふ女	池田治三郎	久夫
秋の溪流	○猪飼 晴谷	小供達	大貫 松三	森田 元子	岩崎 勝平	ダリア	○河井 清一	秋晴	高宮 一榮	いこふ女	池田治三郎	久夫
山路	○猪飼 晴谷	小供達	大貫 松三	森田 元子	岩崎 勝平	ダリア	○河井 清一	秋晴	高宮 一榮	いこふ女	池田治三郎	久夫

風景	中條 茂	青紫の服	水上 信雄	和歌江の浦	○井上 よし	丘の上	○上條 俊介	ひととき	宮本 光庸
海岸風景	清原 武則	葛積む頃	高光 一也	春	○橋本八百二	考	泉谷喜一郎	うら町の少女	秦 浩三郎
二少女	窪田 照三	○先生	岡本貞四郎	森の中	○川合政次郎	希望	綿引 司郎	黙示ニ臨ク	諏訪興里於
杜	岡城寺 昇	室内	明山 正次	二人	山崎 哲	製作第七	○安永 良徳	凝視	新免 弘男
鮮果	○小野田元興	老母像	安達真太郎	黄と赤	○片岡 省三	岡の首	柴田 佳石	T博士肖像	飯島三四二
琵琶湖畔	藤井 光	猫物する女	中谷ミユキ	○氏の家庭	○山崎 銀蔵	浴後	小野田高節	若イ女	久原 淳子
樟端	吉田 苞	庭召風景	野口 謙蔵	海水帽	○梶原 貫五	陸軍(歩兵)	北村 治壽	小間	萩山 三敬
秋晴	飛田 昭彦	漁場の作業場	森田 久	○農家の娘達	菅谷元三郎	裸婦	清田 清也	圓牛	岩田 千虎
千人針	家永麒三郎	婦人座像	藤井 芳子	カナリヤ	○桑重 儀一	樹蔭	多田 瑞穂	いつくしみ	山畑阿利一
静物	○武藤 辰平	野菜を賣る	安武 芳男	歌劇マダム・	○赤松 麟作	踊子静立	○松原 岳南	横臥少女	○村田勝四郎
軍鶏と小屋	○山下 繁雄	國士の偉	○安田 稔	南越風景	○八條 彌吉	裸婦	吉田 敏示	釋迦說法	○阿井 瑞岑
老母	○關口 隆嗣	夏	多々羅義雄	赤陽	○富田温一郎	司	○林 謙三	能樂羽衣	○牧 俊高
リイシリ姫沼	○吉田 博	水邊	沈 亨求	巴里の冬	○眞山 孝治	愛兒	○山根 八春	相撲ノ印象	○長谷川義起
静物と少女	○高村 眞夫	室内	○牧野 司郎	農園	大竹 一臣	女性	○夏目 貞良	春苑	○佐々木大樹
果物	○橋本 邦助	さわやかな丘	田中 孝夫	秋	岩下 三四	少女	○大塚 辰夫	男ノ首	加藤 顯清
秋の日	○加藤 静児	伊豆の海	○細井 繁誠	高原初秋	○山田 隆憲	倒立	○安 一	技藝天	○堀 進二
鏡	○寺松國太郎	錦道	石川 滋彦	丘	○山田 榮次	光	○大須賀 力	小金井良精先	○橋本 朝秀
上高地秋景	○大野 隆徳	石を出す山	戸谷 賀一	寫生	總永富士子	裸婦	木場 春彦	立像	○審安 照
模名湖	○鈴木 淳	秋の庭園	栗田 口聰	畫室の窓	○服部 亮英	芳寂	小川 孝義	火星鳥身	○審澤田 晴廣
遊鯉	○橋本 種男	草上	○渡邊 浩三	ある静物	○油谷 達	水馬	○照田 稔	三部作ノ三	○荒居 徳亮
老給仕たち	○平岡權八郎	杏花の村	○菅 一郎	湖群	○黒田 新	相	倉持 芳	形	○中野 桂樹
雪	○小寺 健吉	モニョリッダ	○佐鹿 彰	北群の夏	○佐々貴義雄	裸婦立像	中島 浩	水邊	○中野 五一
菊	○松部 翼	アトリエ	遠山 清	花刈	星 弘	英發	○河村 清司	レスリング	○森野 圓象
ギリシヤの浮彫	○永地 秀太	秋果光透圖	○五味 清吉	こども達	○櫻井 知足	語る乙女等	○新田藤太郎	聖き翼	○中野 桂樹
田舎	○相馬 其一	女	松岡 正	少年と静物	○金子 保	女	大獄 茂樹	踊る	○長沼 孝三
白薔薇	○鹿子木孟郎	車上	南 政善	江の嶋	○小田 忠	青年達	○田村 清	のぼるもの	○審長谷川榮作
ピアノ	○和田 香苗	警官	阿部 清定	シネマ	○江藤 純平	大歡喜	○行田 泰英	裸	○井口 喜夫
後園菜果圖	○佐藤哲三郎	海邊	和田 清	外房風景	○山喜多二郎太	觀縁	○中野 昇	審小倉右一郎	○大島 駒藏
麥丘	田中 義夫	草上	星野 正三	庭にて	○長屋 勇	觀子	○熊谷幸太郎	試作平和	○藤澤 古實
中庭の窓	山下大五郎	砂濱	大寄丹治郎	浴後	大槻 達二	ながれ	三坂秋一郎	粧	○富永 朝堂
子供とピアノ	森 桂一	蒙古の女	○鶴田 吾郎	椅子による	○山口 亮一	若い女	三好 直	相倚	○西田 明史
庭にて	瀬戸千代三	溪流	○跡見 泰	初夏	○長屋 勇	光	星野 健一	精進	○雨宮 治郎
池畔	○浅井 眞	窓	房野 徳夫	著薇	○山口 亮一	髪	片山 義郎	國威發揚	○三木 宗策
通州の教授	朝井閣右衛門	レストランの午後	○森島 忠	第三部	審橋江 嘉純	或ル女	福井 三幸	女(習作)	○早川鶴一郎
玩具集成	濱邊 萬吉	骨牌	松居 治	断	矢野 秀徳	トルン	○早川鶴一郎	習作	○岡本金一郎
出漁	○池田永一治	巡查と時計	○堀田 清治	秋路	○矢野 秀徳	トルン	○早川鶴一郎	習作	○岡本金一郎
雲暮れ	○清原重以知	讀書	○堀田 清治	漁夫	○矢野 秀徳	トルン	○早川鶴一郎	習作	○岡本金一郎

郷愁	伊藤 芳雄	豊太閣	會山崎 朝雲	爪先で字	○倉澤 興世	金工花瓶	原 三郎	竹模様金銀平脱小箱	内藤 四郎
空のふかみ	木下 繁	平沼先生像	會、審、齋、文夫	施正成	○西村 雅之	漆器棚	高井 白陽	眞鍮虫葉文象嵌花瓶	小川 英風
樵尾博士像	○喜多 寒泉	梳髮	會、審、齋、仲	腰かけた男	○太田 三郎	青銅盤子	鈴木 泰	眞鍮花瓶	松原 春男
脱衣	長田 平次	野田中將像	會、審、内藤 伸	優勝	○藤野 舜正	刺繍水洋二曲屏風	箸 尾 清	御神火刺繍壁掛	○岸 本景春
黎明	篠田 弘	水	○山脇 敏男	雄心	○橋本 高昇	漆器華圓洋犬飾棚	堂本五三良	磁器海老置物	○宮 川香山
習作	清水禮四郎	働きの後	吉開伊喜藏	双葉	○柴田 正重	陶製銀欄手花器	岡本 爲治	漆書棚	○吉田 醇一郎
みのり	富田 武雄	犬	會、審、北村 西望	雄略賦	○森 大造	試作陶製花瓶	内田 邦夫	沖繩の印象染屏風	楠田 撫泉
日本武尊	○森田 朝光	老母の像	○三澤 寛	準	宮本理三郎	陶製コンドル置物	石田 來之助	青銅魚文花瓶	林 万壽人
はぐくみ	○津上 昌平	神に捧ぐ	○中島 東洋	顔	○後藤 清一	漆器瑞仰棚	勝田 静璋	白雲山露木水盤	井上 憲吾
童子	○白井 保春	惜春	○長谷 秀雄	臺	橋田 七郎	磁器白地花模様花瓶	中島 清	白銅鳥置物	○磯崎 美亞
流星	平澤 信男	男試作	○安達 貫一	○後藤 良	小松山 忠	織鐵盤置物	品田 實一	青銅鳳鈕千鳥透香爐	○北原 三佳
花を持つ女	○渡邊 弘行	立花供養	○後藤 良	○保田 龍門	龍門	鷲風呂先屏風	橋山 茨明	黄銅獅子置時計	○根 箭忠緑
あやとり	長澤 幸夫	山	○後藤 良	○保田 龍門	龍門	金器製花文ファイヤスク	橋川 元起	漆刀畫水引草宮	○前 大峰
試作	堀江 趕	若い男	○後藤 良	○保田 龍門	龍門	草染三曲衝立	廣川 松五郎	陶器水倉花瓶	○澤田 宗山
吉祥果	○關野 聖雲	母子	○後藤 良	○保田 龍門	龍門	彫製文匣	○信田 洋	銀杏紋様乾漆花瓶	○田村 泰二
			○木村 威夫	○花里 金央		漆大刀豆ノ棚	審吉田源十郎	絳工染額	○小合友之助
						花小屏風	金綱 和子	ベギン鳥描染二曲	○皆川 友華
第四部						金彩草獸文銀大鉢	德力孫三郎	赤錆鈴形銀花瓶	○四谷 正美
果樹林蕨屏風	○鹿 島 英二	漆仙人掌文色紙箱	十角形蕨文様盛器	藤文蹴形花瓶	漆編蝠飾箱	金工香爐	鉦起黃銅花生	手織錦熱河圖壁掛	草花文黃銅花盛
蟹青銅花器	會田 富康	漆編蝠飾箱	彈阮成鐸銅置物	金工香爐	鉦起黃銅花生	手織錦熱河圖壁掛	草花文黃銅花盛	花模様手編壁掛	彫金象嵌水盤
漆器花面化粧箱	張間 祿一	漆編蝠飾箱	金工香爐	鉦起黃銅花生	手織錦熱河圖壁掛	草花文黃銅花盛	花模様手編壁掛	彫金象嵌水盤	鑄銅花瓶
胡砂の旅	審沼 田一雅	漆編蝠飾箱	金工香爐	鉦起黃銅花生	手織錦熱河圖壁掛	草花文黃銅花盛	花模様手編壁掛	彫金象嵌水盤	鑄銅花瓶
黄銅器文飾箱	龜倉 宇吉	漆編蝠飾箱	金工香爐	鉦起黃銅花生	手織錦熱河圖壁掛	草花文黃銅花盛	花模様手編壁掛	彫金象嵌水盤	鑄銅花瓶
鑄銅鏡文鉢	小林 知象	漆編蝠飾箱	金工香爐	鉦起黃銅花生	手織錦熱河圖壁掛	草花文黃銅花盛	花模様手編壁掛	彫金象嵌水盤	鑄銅花瓶
貝ノ圖菓物セット	福田 力三郎	漆編蝠飾箱	金工香爐	鉦起黃銅花生	手織錦熱河圖壁掛	草花文黃銅花盛	花模様手編壁掛	彫金象嵌水盤	鑄銅花瓶
藤の綻漆器飾手宮	竹園 自耕	漆編蝠飾箱	金工香爐	鉦起黃銅花生	手織錦熱河圖壁掛	草花文黃銅花盛	花模様手編壁掛	彫金象嵌水盤	鑄銅花瓶
琥珀釉釣花器	宮下 善明	漆編蝠飾箱	金工香爐	鉦起黃銅花生	手織錦熱河圖壁掛	草花文黃銅花盛	花模様手編壁掛	彫金象嵌水盤	鑄銅花瓶
鑄銅盤形花瓶	齋藤 鏡明	漆編蝠飾箱	金工香爐	鉦起黃銅花生	手織錦熱河圖壁掛	草花文黃銅花盛	花模様手編壁掛	彫金象嵌水盤	鑄銅花瓶
鳳凰燬燬	會、審、津 田信夫	漆編蝠飾箱	金工香爐	鉦起黃銅花生	手織錦熱河圖壁掛	草花文黃銅花盛	花模様手編壁掛	彫金象嵌水盤	鑄銅花瓶
染色麻地友禪服飾	○木村 雨山	漆編蝠飾箱	金工香爐	鉦起黃銅花生	手織錦熱河圖壁掛	草花文黃銅花盛	花模様手編壁掛	彫金象嵌水盤	鑄銅花瓶
刺繍振袖	平野 利太郎	漆編蝠飾箱	金工香爐	鉦起黃銅花生	手織錦熱河圖壁掛	草花文黃銅花盛	花模様手編壁掛	彫金象嵌水盤	鑄銅花瓶
瑞花紋九帶	高久 空木	漆編蝠飾箱	金工香爐	鉦起黃銅花生	手織錦熱河圖壁掛	草花文黃銅花盛	花模様手編壁掛	彫金象嵌水盤	鑄銅花瓶
黄磁堆脂鹿花瓶	○楠部 彌式	漆編蝠飾箱	金工香爐	鉦起黃銅花生	手織錦熱河圖壁掛	草花文黃銅花盛	花模様手編壁掛	彫金象嵌水盤	鑄銅花瓶
四分一月二鷹象彫刻	○鈴木 美彦	漆編蝠飾箱	金工香爐	鉦起黃銅花生	手織錦熱河圖壁掛	草花文黃銅花盛	花模様手編壁掛	彫金象嵌水盤	鑄銅花瓶
蛇之目文九帶	○木村 和一	漆編蝠飾箱	金工香爐	鉦起黃銅花生	手織錦熱河圖壁掛	草花文黃銅花盛	花模様手編壁掛	彫金象嵌水盤	鑄銅花瓶
華ノ嵌人香爐	○宮之原 謙	漆編蝠飾箱	金工香爐	鉦起黃銅花生	手織錦熱河圖壁掛	草花文黃銅花盛	花模様手編壁掛	彫金象嵌水盤	鑄銅花瓶
唐銅菱形花人	山本 純民	漆編蝠飾箱	金工香爐	鉦起黃銅花生	手織錦熱河圖壁掛	草花文黃銅花盛	花模様手編壁掛	彫金象嵌水盤	鑄銅花瓶
漆器視箱	本間 舜華	漆編蝠飾箱	金工香爐	鉦起黃銅花生	手織錦熱河圖壁掛	草花文黃銅花盛	花模様手編壁掛	彫金象嵌水盤	鑄銅花瓶

夏の山草金彩壺
彫漆鴛文平卓
漆器海老文庫
明月玉露瓶
漆器魚貝手宮
銀器附打込花瓶
吹き硝子花瓶
海物成錦蒔繪手箱
漆銅果物盛器
銀製花瓶
紫翠動花盛
金工スクリン

○北原千鹿
○峯推朱楊成
長谷川白峰
福澤健一
雨宮靜軒
○越村計三
○小野島知文
○梅澤隆七
○北村一朗
會、齋清水龜藏
○清水正太郎
小原覺三

漆器鹿ノ圖パネル
漆器鴛鴦手宮
布目象嵌鐵花瓶
彫漆透入り果實盛器
染色絞皮手箱
漆器みのり飾棚
鑄銅鉢
和染くさ小屏風
眞鍮人物置物
彫漆野草文庫
金屬花器
藍置物
漆紅葉ノ圖棚

○奧村霞城
張間麻佐緒
鹿島一谷
高見九藏
○櫻井霞洞
岩村貞雄
山中勇
中村妙子
○岡部達男
○佐藤陽雲
○村越道守
山脇洋二
田中穎雄

青銅鴛耳花瓶
漆紅花文手宮
金襴手雲機八角捻水指
鑄銅廣口花瓶
菊花蒔繪香箱
くは鉢飾金具
きしやご金具
鍍金具
八角釜
太刀豆乾漆手宮
金屬遊鯉
鑄銅耳付花瓶
漆器深山ノ花衝立

○長野埜志
山田豐
河村喜太郎
○豐田勝秋
○三田村自芳
有田利章
大關勝盛
大木秀春
根來實三
都筑幸哉
○船越春珉
○香取正彦
河合秀甫

漆器棚引棚
白銅花壺
漆天授百緣紋四枚折屏風
庭ノ圖紙ト糸ノ屏風
鍍鐵花器
壺花瓶
フライイチヨオチオウ
オ銀置物
白銅花盛
四折リ金屬衝立
齋島盛掛
陶器秋之野圖花瓶
衝立

鈴木貞路
西村敏彦
中田滿雄
伏原春芳
芳武茂介
中島豐次
加藤宗巖
鹿取一男
服部好雅
○宮永東山
○熊谷重太郎

新挿繪第二回展

十月十七日—二十一日 銀座・紀伊國屋
第七回東洋洋畫展

十月十七日—二十四日 名古屋鶴舞公園美術館
東海美術協會洋畫部主催。洋畫約百四十點、其の他趣味工藝品を陳列した。

ヨーロッパ商業美術展

十月十九日—二十一日 銀座・養生堂
第十四回兵庫縣美術家聯盟展(洋畫)

十月十九日—二十一日 神戸・大丸
井上良齋作陶展

十月十九日—二十二日 日本橋・三越
近作の陶磁二百點を陳列。

甲戌會第五回藝術人形展

十月十九日—二十三日 日本橋・三越
鹿兒島萬藏、野口光彦、堀柳女、山川享造、渡邊堅一郎、岡二郎の新作人形を出陳した。

四行會展(洋畫)

十月十九日—二十三日 大阪・錦水堂畫廊
現代名家色紙展

十月十九日—二十四日 新宿・伊勢丹
東瀛苑同人展(漆工)

十月二十日—二十四日 上野・松坂屋
高島野十郎瀟歐油繪展

十月二十日—二十四日 日本橋・白木屋
酒井免支個展(洋畫)

十月二十日—二十六日 大阪・美術新論社畫廊
建築學會建築展

十月二十日—二十六日 日本橋・白木屋
京都美術館秋季展觀

十月二十日—十一月三日 大禮記念京都美術館
大禮記念京都美術館では秋季展觀として其の所藏に係る現代作家の日本畫、洋畫、彫塑、工藝品等、計約百點を陳列した。今回は繪畫の製作過程に於ける作家の苦心の跡を探り、鑑賞の資に供する爲め、日本畫及洋畫には各作品に添へて其の下圖、草稿類を展觀した。日本畫では前田青邨の「觀畫」、菊池契月の「散策」、川村曼舟の「霧氷」、橋本關雪の「長恨歌」、故富田溪仙の「傳書鳩」等が擧げられ、「長恨歌」の下繪十九點、「傳書鳩」の下繪對幅及二曲半双の試作、寫生帳二十三冊等の出陳が興

味を牽いた。洋畫では岡田三郎助の「滿洲記念」、藤島武二の「神戸港の朝陽」、和田三造の「按摩さん」等が主要なものであつた。

四樓會第一回展(洋畫)

十月二十一日—二十五日 銀座・三越
一會洋畫展

十月二十一日—二十五日 銀座・三越
三味堂第四回洋畫展

十月二十一日—二十五日 銀座・三味堂
岡田三郎助、石井柏亭、梅原龍三郎、山下新太郎等の小品十二點を陳列。

伊藤藤洋畫展
十月二十一日—二十五日 名古屋・丸善

臺灣旅行の作品を交へ、二十餘點を出品した。
田中佐一郎洋畫個展

十月二十一日—三十一日 大阪・阪急百貨店
松山文雄、須山計一滿洲作品展

十月二十二日—二十四日 銀座・紀伊國屋
第十二回赤舛社女子洋畫展

十月二十二日—二十四日 神戸・大丸

富山縣立工藝學校第三十二回尚美展(工藝)

十月二十三日、二十四日 高岡・同校

富山縣工業試驗場工藝品展

十月二十三日、二十四日 高岡・同場

東京鑄金會主催鑄金工藝展

十月二十三日—二十六日 日本橋・三越

佐々木象堂、山本安曇、北原三佳、山本自煥、山本純民等二十八名が各々數點宛出品した。

大分市工藝品展

十月二十三日—二十六日 大分・縣公會堂

新作實用品工藝展

十月二十三日—二十七日 銀座・鳩居堂

日本民藝館主催。

阪神彫塑家協會第一回展

十月二十三日—二十七日 大阪南海・高島屋

阪神地方の二科會彫塑部出品者十名が組織する會。會員の作品四十四點の外に渡邊義知、笠置季夫等の賛助出品を陳列した。

故今戸精司追憶遺作展(彫塑)

十月二十四日 大阪市天王寺區・福泉寺

遊友會彫刻小品展

十月二十四日、二十九日 日本橋・三越

大野信藏、中島浩、野村公雄、古賀忠雄、三井高義等五名の彫刻同人展。

八木岡春山第四回個人展(日本畫)

十月二十四日—三十日 日本橋・三越

山水、花鳥畫等着彩水墨を併せて十五點を陳列した。水墨は常套を出ないが、彩色畫には技巧の冴えを示したものがあつた。

久米、松下、小野澤、太田四人漫畫展

十月二十五日、二十六日 銀座・紀伊國屋

白朝會秋季展(洋畫)

十月二十五日—二十九日 銀座・資生堂

小品二十六點を陳列、多く風景スケッチであるが、田邊至の「裸婦」「讀書」は本格的の努力を示してゐた。諸作家洋畫展

十月二十五日—三十日 大阪・美術新論社畫廊

第十回十寸穗會作品展(服飾)

十月二十六日、二十七日 日本橋・東美俱樂部

巴拉島建築裝飾拓本展

十月二十六日—二十八日 東美校陳列館

佐藤芳齋補作時代火鉢展

十月二十六日—三十日 日本橋・高島屋

東郷青兒油繪小品展

十月二十六日—三十日 銀座・青樹社

十號以下四十餘點を出品、何れも少女を主題にした人物畫で、獨特の感覺と美しいマチエールの効果を見せて洒落たものである。

宮崎縣工藝協會工藝品展

十月二十六日—三十日 宮崎縣公會堂

竹工、木工、金工等六百餘點、家具類二百餘點を陳列。

高木背水個展(洋畫)

十月二十七日—二十九日 江戸橋・日本商工俱樂部

前田竹房齋花籠展

十月二十七日—三十一日 日本橋・三越

第二回瀧友會展(洋畫)

十月二十七日—三十一日 銀座・日本サロン

くろも展(洋畫)

十月二十七日—三十一日 銀座・紀伊國屋

田中鑑吉洋畫展

十月二十七日—三十一日 大阪・美交社

第四回立陣社同人展(洋畫)

十月二十八日—三十日 銀座・日動畫廊

同人作油繪二十一點を陳列した。

中村眞繪畫發表展(洋畫)

十月二十八日—三十日 大阪・三角堂

村田丹下洋畫個展

十月二十八日—十一月二日 札幌・丸善

第二十四回二科美術展(洋、彫)

十月二十八日—十一月十四日 大阪市立美術館

大阪市主催

同志社大學洋畫展

十月二十九日—三十一日 同志社大學學生會館

四行會展(洋畫)

十月二十九日—十一月三日 京都・朝日會館

第十六回岡崎美術展(日、洋)

十月二十九日—十一月四日 岡崎・市立圖書館

瀬野覺藏作國防館壁畫展觀

十月三十日、三十一日 靖國神社境內國防館

京大建築科展

十月三十日、三十一日 京大建築科教室

原田和周遺作展(洋畫)

十月三十日—十一月一日 神戸畫廊

昨午物故した春陽會々友原田和周の遺作を中心に諸家の賛助出品を併せ陳列した。

帝國美術學校作品展

十月三十日—十一月一日 吉祥寺・同校

新虹會第一回展(日本畫)

十月三十日—十一月三日 上野・神戸屋

第二回文人畫展

十月三十一日—十一月八日 上野・日本美術協會

十一月

明治大學洋畫研究會展

十一月一日、二日 銀座・紀伊國屋

光藝會洋畫展

十一月一日—三日 大阪・朝日ビル專門本店

第二同名古屋工藝品展

十一月一日—三日 名古屋商工會議所

名古屋産業部、名古屋商工會議所、名古屋工藝協會主催。

北川民次メキシコ作品展(洋畫)

十一月一日—四日 銀座・日動畫廊

アメリカ、メキシコ滯留二十二年、其の間十二年メキシコ土人の美術教育に携り、其の地の原始的美術に接した作家で、昨年歸朝、本年二科會員に推舉された。其の畫風はメキシコ繪畫を攝取し、一種暗い裝飾的な歪形を行ひ、出來上つた特種の様式の中に原始的な呼吸を表現して居る。「メキシコ悲しき日」「メキシコ三人娘」「メキシコの少女」等傑れてゐる。

六科會第一回展(圖案)

十一月一日—五日 銀座・資生堂

東西日本畫新作展

十一月一日—五日 日本橋・高島屋

東京毎日新聞社主催。東西作家の新作三十餘點を展覧した。

紀州漆器工藝品展

十一月一日—五日 大阪・三越

濱田庄司作陶展

十一月一日—五日 大阪・三越

島あふひ個展(洋畫)

十一月一日—五日 大阪・美術新論社畫廊

奈良美術工藝品展

十一月一日—六日 名古屋・松坂屋

商工省輸出工藝展

十一月一日—七日 愛知縣商工館

美工圖案院街頭展

十一月一日—七日 京都四條各商店
栗原信洋畫展・

十一月一日—十日 大阪・阪急百貨店

北支風景に取材したもの其の他約三十點を陳列。

香蘭社創作陶器展

十一月一日—十四日 銀座・松屋

第四回全國中等學校商業美術作品展

十一月二日、三日 名古屋高等商業學校

大橋廉堂畫展(日本畫)

十一月二日—七日 大阪・大丸

京都工藝院服飾美術展

十一月二日—七日 大阪・大丸

京都工藝院の染織美術部同人山鹿清華、皆川月華を初め三十餘名の製作に成る衣裳、帶地、室内裝飾品を陳列した。

文化學院記念繪畫展

十一月三日 神田・同校

立石鐵臣近作展(洋畫)

十一月三日—七日 新宿・天城畫廊

山梨美術協會第一回展(綜合)

十一月三日—七日 甲府・松林軒百貨店

東山魁夷滯歐スケッチ展(日本畫)

十一月三日—七日 神戸畫廊

横濱美術協會第六回展(日、洋)

十一月三日—九日 横濱・興産館

ジュノム展(洋畫)

十一月三日—十日 新宿・南海畫廊

國際日本染織物見本市

十一月五日 京都市勸業館

沈亭求個展(洋畫)

十一月五日—七日 神田・東京堂

奈良美術家聯盟第三回洋畫展

十一月五日—七日 奈良物産館
會員並贊助員の油繪併せて三十一點を出陳した。

安田半圃個展(日本畫)

十一月六日—十日 日本橋・高島屋

近作二十餘點を出品した。

船木道忠近作陶磁展

十一月六日—十日 銀座・たくみ工藝店

山川秀峰第二回個展(日本畫)

十一月六日—十一日 日本橋・三越

昨年の個展以來古典舞踊の取材を續け、今次は三番叟を主題に、雛鶴三番叟、志賀山三番叟等計十五點を陳列した。今後の精進に俟つべきものが多い。

里見勝藏洋畫個人展

十一月七日—十一日 大阪・美術新論社畫廊

第二回人形すがた會展

十一月七日—十二日 日本橋・三越

貌第一回油繪展

十一月八日—十一日 銀座・紀伊國屋

第一回八爽會洋畫展

十一月八日—十二日 神戸畫廊

福中又次郎蒐集海外骨畫品展

十一月八日—十二日 大阪・三角堂

樋口富麻呂小品畫展

十一月九日—十一日 大阪・三越

公木會木彫置物展

十一月九日—十二日 名古屋・松坂屋

大橋翠石力作展(日本畫)

十一月九日—十五日 大阪・阪急百貨店

第九回工美會主催美術工藝品展

十一月九日—十五日 大阪・阪急百貨店

鐵道省第七回洋畫展

十一月十日—十四日 萬世橋・鐵道博物館

第二同名古屋工藝品展

十一月十日—十五日 日本橋・白木屋

日獨文化展

十一月十日—十六日 早大演劇博物館

日獨文化協會主催

白聖會第十五回洋畫展

十一月十日—十六日 大禮記念京都美術館

關西美術院關係の有志により組織された會で、會員二十名の作品二百五十一點の外に黒田重太郎の油繪十八點を特別陳列した。伊谷賢藏、岩崎重雄、錦義一郎、伊庭傳治郎、藤田、世等の諸作が擧げられる。

(新會員) 義晴、井上賢三、永井朔夫、戸島孚雄、津田周平

山村耕花個展 (日本畫)

十一月十一日—十三日 京城・三越

草光信成近作展 (洋畫)

十一月十一日—十四日 銀座・日動畫廊

日本版畫協會第六回版畫展

十一月十一日—十八日 東京府美術館

日本版畫協會は昨年七月より本年四月に亘り歐米各地に日本現代版畫展を開催して大なる功績を収めたが、此の海外交驛の成果として今回の公募展には米國フィラデルフィヤ・プリントクラブの斡旋出品に依る米國版畫家四十四名の作品六十四點が特別展觀された。其の内容はエツチング二十五點、石版二十一點、木版十一點、色刷木版七點で、從來紹介されることの稀であつた同國の版畫を知る上に有意義な催しであつた。同會の陳列數は會員三十名の出品九十八點、一般應募者四十二名の出品七十八點、合計二百四十點で、別に會員の版畫工藝品二十四點が陳列された。一般應募數は昨年より稍減少したが、概して新人の作品に充實した内容が認められ好評であつた。平塚運一の「内金剛長安寺」其の他、前川千帆

の「野遊び」「赤いきものの女」、山口進の「晩秋」、藤森靜男の「山嶺」等が主要な作品として擧げられる。

日本版畫協會賞 石原壽市、根本霞外

第十七回春秋洋畫展

十一月十一日—二十日 大阪・阪急百貨店

日大建築科主催建築展

十一月十二日—十四日 銀座・伊東屋

井南居第三回東西大家新作畫展

十一月十二日—十四日 日本橋・東美俱樂部

井南居主催。上村松園の「天明頃の娘」、竹内栖鳳「早苗」、川合玉堂「白燈々」、安田靉彦「龍膽」、奥村土牛

「秋爽」外約四十點が出陳された。

名古屋市立工藝學校作品校外展

十一月十二日—十四日 名古屋・丸善

第十九回兵庫縣學生美術聯盟展

十一月十二日—十四日 神戸・朝日會堂

松林桂月小品展 (日本畫)

十一月十二日—十六日 日本橋・三越

紙本の水墨、淡彩等二十點を出品、風景では滿洲旅行の收穫「滿洲所見」「黃沙白草」「長城」等、花卉魚介の類では「木瓜」「菜根」「葡萄」等造勁な筆致と淡雅な賦彩に依り獨自の南畫的風格を保持してゐる。

池上秀敏繪畫展 (日本畫)

十一月十二日—十六日 大阪・三越

加藤靜兒風景畫展 (洋畫)

十一月十二日—十六日 大阪・三越

第六回京大美術展

十一月十三日—十五日 大禮記念京都美術館

フランス繪畫展

十一月十三日—十七日 銀座・資生堂

陶器、繪畫展

十一月十三日—十七日 京都・朝日會館

江川成笙美人畫個展

十一月十三日—十七日 大阪・阪急百貨店

第六回赤神社女子洋畫展

十一月十三日—十七日 大阪・美術新論社畫廊

忍景翠近作畫展 (日本畫)

十一月十三日—十九日 大阪・阪急百貨店

第五回小松益喜洋畫展

十一月十四日—十六日 神戸畫廊

第九回神戶會美術展 (洋畫)

十一月十四日—十八日 大阪・朝日會館

型成美術家集團創立記念展 (日、洋、彫)

十一月十四日—十八日 京城・三越

河井寛次郎新作陶器展

十一月十四日—十九日 日本橋・高島屋

獨立美術秋季展 (洋畫)

十一月十四日—十九日 大阪・美交社

第十一回陶業品競技會並生徒作品展

十一月十五日、十六日 愛知縣立常滑工業學校

愛知縣出身二科入選者展 (洋畫)

十一月十五日—十九日 名古屋・丸善

文展十氏展 (洋畫)

十一月十五日—二十日 大阪・三角堂

實在工藝美術會同人作品展

十一月十五日—二十五日 銀座・服部時計店

歸朝早々の山崎覺太郎を除き、同人十名が夫々の作風を示す作品五十點許りを陳列した。陳腐な感覺のものなしとせず、會の傾向として一色でもないが、概して進歩的な現代工藝の一主流として興味を率かれる。吉田源十郎の「手筈」其の他の小品は技巧と趣味の洗練さに於て一際優れて見えた。鑄金では高村豐周の「一輪生」、豊田勝秋の黃銅「花生」など好ましく、木村和一の「女帯」、廣川松五郎の「婦人片側帶」何れも實用さるべき服飾品

として好い味を持つてゐた。陶磁其の他には生活の器具として愛用さるべく一入の洗練を望みたいものがある。

第二十五回東西諸大家新作畫展

十一月十六日—二十一日 大阪・大丸

宇野三吾新作陶藝展

十一月十六日—二十一日 大阪・大丸

萩焼新作陶器展

十一月十六日—二十二日 大阪・阪急百貨店

草舎社展(日本畫)

十一月十七日—十九日 大阪戎橋・三笠屋

足立源一郎油繪個展

十一月十七日—十九日 福岡・千代田生命ビル

佐賀縣工藝協會第三回工藝展

十一月十七日—二十一日 縣商工獎勵館

七絃會第八回展覽會(日本畫)

十一月十七日—二十二日 日本橋・三越

七絃會は西村五雲を新に加へて會員六名となつたが、今回は五雲の出品は無く其の他各人一點宛を出品、陳列數五點と云ふ小展観である。併し此の會は現在斯種の日本畫展中最高のもので世人に期待されてゐるだけ、作家は何れも慎重な態度で夫々に力作を出品し、其の意味では充實したもの、殊に本年院展出品の無かつた前田青邨、小林古徑にとつて此の會が最も主要な發表であつた。

錦木清方の「雪紛々」は作者の特色の最も良く示された完美の作と見られ、安田靫彦の「方丈閑日」は努めて描寫を簡にしてよく情景を捉へ、背景の泉石亦工夫を示した。前田青邨の「清正」は十分の成功と云へず、小林古徑の「双鳩」は取り立て、稱する出来とは云へないが作者の眞摯な態度と特性をよく示してゐた。菊地契月の「迦樓羅」は謹格且つ暢達の線描を主とし品位も具はるが、此の主題に欲せられる幻想的感興に缺ける。

美術展覽會(十一月)

彩松會主催日本畫新作展

十一月十七日—二十二日 銀座・松坂屋

朗峯畫塾第七回展(日本畫)

十一月十七日—二十二日 銀座・松坂屋

伊東深水塾の展覽會。陳列數三十五點、伊東深水は「黒髮」を出品した。

第八回劇畫展

十一月十七日—二十二日 銀座・松坂屋

日本劇畫協會主催

日本木彫會國防獻金展

十一月十七日—二十二日 銀座・松坂屋

大阪新美術家同盟第四回展(洋、彫)

十一月十七日—二十三日 大阪市立美術館

關西に於ける各美術團體の合同展で、參加團體は毎回多少變化するが今回は洋畫のZIGZAG、ロボット洋畫協會、關西水彩畫協會、セクション・ダール、六月會及彫刻の大阪彫塑會であつた。出品者洋畫五十名、彫刻九名。各派綜合であるから作品の傾向も様々である。中で、松本銳次、田川寛一、玉澤潤一等の油繪、別車博資、青野馬左奈の水彩、彫刻では白石正義、日高政法、宮島久七等の諸作が挙げられる。

日本美術學校主催國防獻金即賣展

十一月十八日、十九日 早大圖書館ホール

「アトリエ現代洋畫大全集」作品展

十一月十八日—二十一日 銀座・日動畫廊

日動畫廊主催。アトリエ社發行の「現代洋畫大全集」に掲載の油繪、水彩の中から四十六點を蒐めて陳列した。

島田忠夫水墨小品展

十一月十九日—二十一日 新宿・天城畫廊

第二十八回兵庫縣美術協會展

十一月十九日—二十一日 神戸・三越

小杉放庵繪畫、吉田白嶺木彫展

十一月十九日—二十二日 名古屋・松坂屋

金澤四秀會新作作品展(工)

十一月十九日—二十二日 上野・松坂屋

宏心會現代大家新作日本畫表裝展

十一月十九日—二十二日 上野・松坂屋

東西の諸家三十五名の新作を蒐めた。

十備會茶道具展觀

十一月十九日—二十三日 日本橋・白木屋

渡邊明第三回家具試作展

十一月十九日—二十三日 銀座・資生堂

宮部進水彩畫個展

十一月十九日—二十三日 大阪・美術新論社畫廊

新設計室內裝飾展觀

十一月十九日—二十七日 日本橋・三越

軍用機獻納協賛鬼頭聖二郎油繪展

十一月二十日—二十二日 名古屋・丸善

大阪朝日新聞名古屋支社後援。朝日新聞社の軍用機獻納運動に協賛して、舊作を交へた三十餘點を以て個展を開いた。

第一回高島屋染織美術展

十一月二十日—二十三日 日本橋・高島屋

第二回土曜會展(水彩)

十一月二十日—二十三日 豊島區長崎町・春日部方

佐賀縣美術協會第二十一回展(日、洋、彫)

十一月二十日—二十三日 佐賀市公會堂

第三回近藤浩一路新作畫展(日本畫)

十一月二十日—二十四日 日本橋・高島屋

水墨畫を主とし若干彩畫を交へて二十五點を出品した。「十勝スキー宿三題」は水墨の味を生かしてスケッチ的な感興があつたが、概して觀照に深味を缺く憾みがあつた。

如水流心畫會第二回互選展(日本畫)

十一月二十日—二十四日 日本橋・白木屋
力作一品會展 (工)

十一月二十日—二十四日 福岡縣産業獎勵館
商工省輸出工藝展

十一月二十日—二十六日 大阪府立産業會館
美術乃日本第一回展 (日本畫)

十一月二十一日—二十四日 麹町・日本新聞社
斑社第一回展 (日本畫)

十一月二十一日—二十四日 神田・東京堂
古澤岩夫個展 (洋畫)

十一月二十一日—二十五日 新宿・天城畫廊
加藤溪山青磁展

十一月二十一日—二十五日 福岡日日新聞社
第十七回長崎美術展並報國美術展 (日、洋、版)

十一月二十一日—二十五日 長崎圖書館、長崎市商
工獎勵館
伊藤慶之助ガラス繪豆繪展

十一月二十一日—二十九日 大阪・阪急百貨店
海老原嘉之助第五回作品發表會 (洋畫)

十一月二十二日—二十六日 銀座・日動畫廊
馬や魚類を描いたものが多く、主題を一種童話的、幻
想的な詩情を以て扱つて居る。色彩は繪畫的と云ふより
も、寧ろ工藝的なマチュールの味によつて生かされて居
る。

全早稻田洋畫展
十一月二十三日—二十五日 銀座・紀伊國屋

君塚陽亮個展 (洋畫)
十一月二十三日—二十五日 大阪・美交社

第七回龍子個展「長城を征く」
十一月二十三日—二十七日 日本橋・三越

本年初夏滿洲に旅して得た熱河風物を主題とする作品
二十點を陳列、「長城を征く」と題して毎年の例とする東

京に於ける個展第七回を開いた。「牧童」「鶴亭圖」「驛
馬」「白日夢」「國境」等の絹本十點、「古北口」「角山寺」
「九門口」等の紙本草畫十點で、夫々の興趣を示し、殊
に淡彩の草畫に稀なる描線の驅使を見せた。

斑丘社第二回展 (工)

十一月二十三日—二十七日 上野・神戸屋
昭和五年東美校工藝科入學者の組織するクラス會で、
金工、漆工に眞面目な試作が見られる。

日本山岳畫協會展
十一月二十三日—二十八日 大阪・大丸

大潮會第二回展 (日、洋)

十一月二十三日—十二月三日 東京府美術館
文部省後援。全國中小學校圖畫教員を出品者とする展
覽會で、審査員は荒木十畝、中村岳陵、山口蓬春、吉村
忠夫、小林萬吾、小絲源太郎、辻永、山本鼎、安井曾太
郎、柚木久太の十名。種目は日本畫、油繪、水彩、パス
テル、版畫等で、一般應募數は一千三百六十點、入選數
四百四點、陳列數は日本畫二十三點、洋畫四百二十二點
無鑑査出品は島野重之外七名であつた。

(推薦) 天井陸三、石本秀雄 (大潮會賞) 山下忠平 (特
選) 山田翠雨、小林澄心、小林富藏、土屋博雄、牧田實
川邊外治、森桂一、伊藤清武

染織美術標準圖案展
十一月二十四日 大禮記念京都美術館

圖案人聯盟主催。
東京會日本畫新作展
十一月二十四日—二十六日 東京美術俱樂部

株式會社東京會主催。院展系を除く東西の諸家六十五
名の新作を陳列した。

吉田喜藏バスデル畫展
十一月二十四日—二十六日 大阪北濱・大阪俱樂部

黒色、新現實、白蠟同時展 (洋畫)

十一月二十四日—二十七日 銀座・日本サロン
田中秋邨虎の繪百幅會

十一月二十四日—二十七日 上野・松坂屋
名作茶道具展

十一月二十四日—二十七日 名古屋・松坂屋
三神社畫展 (日本畫)

十一月二十四日—二十七日 大阪・三越
アンドレ・メーレル繪畫展

十一月二十四日—二十七日 大阪・大丸
小川芋錢古稀記念新作展

十一月二十五日—二十七日 日本橋・東美俱樂部
小川芋錢の古稀を記念して草汁會の主催で近作の個展
が開かれた。總て紙本で横物、圓相、扇面、長色紙等六
十點許り、俳優に富んだ獨自の境地を示してゐた。

ウイリー・ザイレル油繪個展
十一月二十五日—二十七日 丸之内・日本工業俱樂部

今井憲一、北脇昇、高木四郎三人展 (洋畫)

十一月二十五日—二十七日 京都・朝日會館
第六回新興美術協會展 (洋畫)

十一月二十五日—二十九日 大阪市立美術館
關西に於ける春陽會系作家の組織する洋畫公募展。陳
列總數百八十七點。

牧野虎雄洋畫展
十一月二十五日—二十九日 大阪・美術新論社畫廊

桐竹門造指導文樂人形陳列會
十一月二十五日—三十日 日本橋・三越

新構造社昭和十二年度展 (綜合)

十一月二十五日—十二月六日 東京府美術館
舊構造社繪畫部が昨年十一月改組して結成した團體の
第二回公募展で、繪畫 (日本畫、洋畫) 百五十二點、彫
刻六十七點、工藝五十四點を陳列した。

(新會員) 葛西康(新會友) 田代一郎、水沼兼雄、中森
避、山本博

(研究賞) 大石七鳳、王之江、南部一信、村田鹿次郎、
渡邊他家雄、山本好信

關大、大阪商大美術部合同展

十一月二十六日—二十八日 大阪市立美術館

名古屋美術聯盟陸軍病院獻納作品展(日、洋、彫)

十一月二十六日—二十八日 名古屋・十一屋

田邊三重松個展(洋畫)

十一月二十六日—二十八日 函館・今井吳服店

泰西美術民藝品藏拂展

十一月二十六日—二十九日 銀座・資生堂

柿手春三個展(洋畫)

十一月二十六日—三十日 新宿・天城畫廊

デ・ザミ第二回展(洋畫)

十一月二十六日—三十日 銀座、紀伊國屋

川西英版畫展

十一月二十六日—三十日 神戸畫廊

田村一男洋畫個展

十一月二十六日—三十日 大阪・美交社

一水會第一回展(洋畫)

十一月二十六日—十二月十日 東京府美術館

昨年末舊二科會員八名に依つて組織された一水會は、
既に本年七月會員の作品展を開いたが、茲に公募に依る
第一回展覽會を開き、美術團體としての活動を世に示し
た。新團體ではあるが、他に見る新興運動とは異り、會
員等は既に十分の經歷を認められてゐる作家達で、其の
主旨とする所も正統的な技術の基礎に立ち、輕薄な流行
を排して高雅な藝術を尊重せんとするだけに、第一回か
ら既に十分な落着きと、技術的に相當な水準を示して、
總じて穩健な空氣が充ちてゐた。會員等は何れもよく努
力して記憶さるべき力作の幾點かを産んだが、一般出品

の方は少數を除いては概して期待されてゐた程振はず、
新奇に走る荒々しさ、騒がしさはなかつたが、一面活氣
に乏しく見られた。たゞ氣取りや誇張の少いことは觀者
に親しみを與へ、會場の空氣を落着いたものにした。

石井柏亭は四點の力作を出して健在を示した。見慣れ
た作風で奇は無いが、練達の技に依つて迷ひなく描かれ
た畫面は美しく、中では水郷を描いた「葛飾」、戸外人物
を描いた「村娘」が優れてゐた。安井曾太郎の二作は作
者の精進の跡を物語る出色の作品で、其の明るく美しい
色彩と要約された描寫とは場中の異彩たるのみならず本
年注意すべき收穫に數へられるであらう。「肖像」は文展
出品の伊原宇三郎作「深井英五氏像」と同じ人物を寫し、
意圖も描寫も對蹠的な表現を見ることが多い。木
下孝則の人物畫三點は健全な寫實的作風を示すが餘り平
明暢達で蔭翳に乏しく、冷たさを伴つてゐる。山下新太
郎は其の特色とする繊細甘美な描寫を以て「姉妹」を描
いたが、努力に比して成功を見ず、碇伊之助の「小憩」
も畫面の階調を缺き好結果とは云へなかつた。木下義謙
の「横はる裸婦」は穩和な寫生に止まつてゐる。有鳥生
馬は滯歐作小品二十二點を出品、風景スケッチの中には
情趣に富み、作者の長所を見せたものがあつた。小山敬
三の佛國風景は餘り振はぬ。

會員以外の出品では高橋庸男の「デッキバツセンジャ」
中村善策の「けむり」其の他の諸作、新海覺雄、金子博
信等の作が注意された。女流作家の中には西脇マジョリ
仲田菊代など各その特色を示してゐる。其の他從軍中歿
した岩倉具方の遺作が特別陳列された。

出品目録(〇印會員)

基幹稿の上のモ
デル
マスカンA
大石 俊彦
座せるモデル
久野 昌康

卓上靜物	高橋 庸男	秋	八木 岐羊
デッキバツセン ジャ	同	教會の庭	野村 總生
畫架上の靜物	同	紅い唐門	小山 周次
信州の秋(一)	渡邊 正一	風景	二宮 雪夫
〇氏像	〇木下 孝則	檜澤池	齋藤 大
ヴォーグ	同	靜物	小本曾 精
K嬢像	同	隱岐三郎岩	長田 健雄
山と溪流	中村 善策	岬	中田 恭一
ボブラの風景	同	無花果	川上 義雄
けむり	同	温室	山脇 楠英
秋の山	高田 誠	果物店	藍蔭 豊
湖畔の早春	同	岩採場風景	平島 武夫
農家の臺所	小原 育雄	五月の高原	小平 鼎
杉	丹羽長兵衛	アルプス遠望	同
海邊の女	名取 明徳	秋川溪谷の秋	渡邊 春宵
赤毛	岡田 行一	會員有鳥生馬滯歐作品	
少年の顔	鈴木 良三	少年の顔	
アンコールワツ ト(カンボヂヤ)	同	タオルミイナからのエトナ山	
路上(安南)	同	ナボリの宿	
夕暮れの淡水	陳 清 芬	甲板にて	
無花果と裸女	渡邊 宗一	テイヴオリの噴水	
双面	渡邊 鎮信	モンパルナスのモデル	
芥子風	同	扇の婦人	
山麓の暮	竹内梅治郎	タオルミイナの希臘劇場趾	
うすれ日	金澤 信夫	縫衣夫人	
店頭雨情	同	アグリジエントの春	
秋の水	平井 武雄	女學生	
白花	故新井忠四郎	アフリカノ帝宮趾	
準人風景	片山 芳樹	青年	
風景	同	エトナ山の曙	
四國路	同	青い帽子	
龍山寺(臺北)	岡崎 麗容	アグリジエントの夕暮	
霧の隅田川	山中仁太郎	ナボリ、パルノベ河岸	
時化模様	須摩 總吉	少女半身像	
植物園	同	化粧	
探繪習作	富田 通雄	ヴェスヴィオ遠望	
山の貯水池	關川富士郎	踊子	
	萩原 實		

ティウリの池(ティウオリ)	葛飾	○石井 柏亭	少女	大橋 文子	職場	近岡善次郎
モンマルトル	村娘	同	静物	古川 環	花	岩倉具方遺作陳列
ガアル・ド・モン	御嶽	同	プロワ小景	同	NOA NOA	文路より北四川路を望む
スリー	秋時	同	薔薇とゆり	同	花	機關銃
盤日(ノルマン)	乙女の像	末松 勇	神苑朝	○山下新太郎	大正池	旗艦出雲
コンムニセント	ロータリーのあ	納富 進	姉妹	同	庭と小女	一兵曹の像
オンフロウル港	N風致地区(其一)	同	秩父の溪谷	石川眞五郎	婦人像	出雲艦上にて
船川港	置物屋	永見 謙治	早春	同	アトリエ	菊池香三油繪個展
港風物B	瀧阪の溪流	小野藤一郎	柿	三浦 俊輔	吉奈温泉風景	十一月二十七日—二十九日 名古屋市公會堂
肖像(女)	男の肖像	高野三三男	男兒	島 あふひ	肩掛	三宅克己近作水彩畫展
仕事場	春日山の溪流	小野藤一郎	裸婦	同	體操	十一月二十七日—三十日 銀座・日動畫廊
小松と朝顔	機械工場	岩松 光子	金魚	河野 通紀	山草をもつ少女	近作略五十點を陳列した。
丘の小松	川沿の風景B	岸柳 興二	遠望	大津 鐘雄	手紙を書く女	第四回びゆるて展(洋畫)
早春風景	庭の一隅	木下壽々子	自畫像	伊藤 成一	ひととき	十一月二十七日—十二月一日 銀座・三味堂
砂丘	立石風景	山口 潔	柿と雲山	伊藤 幟	裸婦	産業美術振興運動第七回廣告美術展
小憩	Iの像	近藤 五郎	黄色のドレスを	新海 登雄	驟雨	十一月二十七日—十二月二日 大阪・松坂屋
鶴沼の想ひ出	森の道	南 良介	畫室の窓邊	同	レースのカーテ	大阪毎日新聞社では例年の通り各知名商店と提携して
和服	モデル	同	鏡の前	同	少女	實用を目的とした新聞廣告圖案の懸賞募集を施行し、其
獅子遊ひの女	森の中	同	櫛の樹立	高見歌太郎	あみもの	の入選作品を展覧した。
九州から	静物	同	裸婦	等々力巳吉	樹間	第一回文部省美術展覽會京都陳列會
私の部屋	人形静物	同	樟腦工場	八田 一路	窓邊	十一月二十七日—十二月十二日大禮記念京都美術館
花籠	黄いブラウス	同	スベインの女	瀧川 太郎	初雪	東京に於ける第一回文展閉會後恆例の如く、其の出品
母と子	溪流	山下鐵之輔	威の祭	同	少女坐像	の大部分を以て京都市主催の下に開催した。陳列點數は
二人の女	河畔	酒井 精一	村の祭	同	肖像	第一部一八九、第二部二六四、第三部六五、第四部一二
裸體	椅子とダリア	佐々木 昇	アコーデイオン	森 寅雄	ノートルダム	五、合計六二五點であつた。
朝顔	クロードカーニ	木下 了子	アトリエに於け	藤尾龍四郎	寺院	早川黎香南畫展
裸婦	ウ風景	○安井曾太郎	セラ・グエラ氏像	同	牛乳配達車	十一月二十八日 名古屋美術俱樂部
花	肖像	同	野の花	尾澤 勝則	風景ラスパアイ	足立源一郎洋畫、河合卯之助作陶展
裸婦	承德の喇嘛廟	同	窓際	狩野 壽一	廢墟	十一月二十八日—三十日 小倉・井筒屋
コスチュームの	梅雨	同	雪後	矢野 雄藏	櫻撃ノ跡	満谷國四郎遺作畫稿習作素描展觀
少女	屋敷あと	同	都會の雪	同	別れ	十一月二十九日 美術研究所
I嬢の肖像	さくら	本郷 惇	夏	北尾 修一	静物	美術懇話會では十一月二十七日その例會として昨年逝
横はる裸婦	柿	渡邊正太郎	日本間にて	同	出航	去した満谷國四郎の遺作、畫稿、習作、素描等約百點を
朝の輕井澤風景	準備室の一隅	土岐 浩藏	郊外裏通り	瀧田 一太	天津の婦人	
凭る女	人形とルビナス	大橋 文子	少女の像	大竹 一臣	鍋谷傳一郎	
早春	同	同	雪	松田 晃八	天津風景(佛租界)同	
椅子	室内	同				

座像 鍋谷傳一郎
岩倉具方遺作陳列
文路より北四川路を望む
機關銃
旗艦出雲
一兵曹の像
出雲艦上にて

我驅逐艦
デッサン(自畫像)
デッサン(A)
デッサン(B)
デッサン(C)
デッサン(D)

菊池香三油繪個展
十一月二十七日—二十九日 名古屋市公會堂

三宅克己近作水彩畫展
十一月二十七日—三十日 銀座・日動畫廊

近作略五十點を陳列した。
第四回びゆるて展(洋畫)
十一月二十七日—十二月一日 銀座・三味堂

産業美術振興運動第七回廣告美術展
十一月二十七日—十二月二日 大阪・松坂屋

大阪毎日新聞社では例年の通り各知名商店と提携して
實用を目的とした新聞廣告圖案の懸賞募集を施行し、其
の入選作品を展覧した。

第一回文部省美術展覽會京都陳列會
十一月二十七日—十二月十二日大禮記念京都美術館
東京に於ける第一回文展閉會後恆例の如く、其の出品
の大部分を以て京都市主催の下に開催した。陳列點數は
第一部一八九、第二部二六四、第三部六五、第四部一二
五、合計六二五點であつた。

早川黎香南畫展
十一月二十八日 名古屋美術俱樂部

足立源一郎洋畫、河合卯之助作陶展
十一月二十八日—三十日 小倉・井筒屋

満谷國四郎遺作畫稿習作素描展觀
十一月二十九日 美術研究所

美術懇話會では十一月二十七日その例會として昨年逝
去した満谷國四郎の遺作、畫稿、習作、素描等約百點を

陳列し、小杉放庵の「滿谷國四郎翁に就て」の講話を行つたが、其の陳列を二十九日公開展覧した。

第二十九回遊戯三昧會文墨作品展

十一月二十九日、三十日 上野・梅川亭

丹阿彌岩吉第二回個人展（日本畫）

十一月二十九日、十二月三日 日本橋・白木屋

第三回三越日本畫展覽會

十一月二十九日、十二月七日 日本橋・三越

前二回に比して出品は遙かに少く、八十餘點が陳列された。各作家一點宛で相當の力作もあり軽い作品もあつて區々である。川合玉堂の「返照」は場中で重きをなす一作であつた。其の他に單純な圖柄に力を盛つた荒木十畝の「鷹」、纖細な神經の籠る榊原紫峰の「目白」等優れ、伊東深水の「髮」、磯部草丘の「曉霧」、西山翠嶂の「橙」、川端龍子の「千里虎」、鍋木清方の「居蘇」、豎山南風の「寒汀」、中村岳陵の「初冬」、小杉放庵の「遊禽」、兒玉希望の「荒鷲」、近藤浩一路の「武藏野早春」、酒井三良の「仔猫」、杉山寧の「朝霧」等々々注意される作品であつた。

十二月

松島畫舫秋季展（日本畫）

十二月一日—三日 日本橋・東美俱樂部

松島勝之助主催、東西作家三十五名の新作を展覧した。

川合玉堂「友呼雁」、前田青邨「昌時能」、小杉放庵「竹裏春」、鍋木清方「鷺娘」等佳作であつた。

JAN第七回展（洋畫）

十二月一日—四日 銀座・紀伊國屋

山下繁雄油繪「軍雞」展

十二月一日—四日 銀座・日動畫廊

軍鶏を描いた油繪、其他約三十點を展覧した。

美術展覽會（十二月）

第十五回新燈社美術展（日、洋）

十二月一日—五日 大阪市立美術館

新燈社の主宰者青木大乗は本年三月大日美術院の結成に参加したが、同社は大阪に於て第十五回の公募展を開催した。陳列點數は日本畫、洋畫を併せて百三十點、日本畫では青木大乗、北村泰山、洋畫では山田皓齋、北村種三等の諸作が擧げられる。

授賞（新燈社賞）坂本正機、上田巳之助（推薦）豊田博江、小山修、仁田末次郎、高島登、佐藤靜光（獎勵賞）飯田始晃、木村浩世

眞野紀太郎近作水彩畫展

十二月一日—五日 大阪・美交社

堀染畫第一回發表東西大家新作畫展

十二月一日—五日 大阪南海・高島屋

現代名家「百畫題」新作展觀（日本畫）

十二月一日—五日 大阪・南海高島屋

新井完個展（洋畫）

十二月一日—五日 大阪・美術新論社畫廊

立人會作品發表會（洋畫）

十二月一日—五日 京城・三中井

第一回春陽會日本畫展

十二月一日—七日 銀座・三越

春陽會の會員で日本畫に各々獨技を有する小杉放庵、中川一政、木村莊八、石井鶴三四名が開いた日本畫展である。小杉放庵の「一閑人畫冊」（小品十點）は例の麻紙に渴筆の技法を用ひ、畫讀もよく調和して親しめる。石井鶴三の六曲半双「房山獅子舞屏風」は本年の春陽會に出品の「常田獅子舞屏風」と共に動的な表情を傳へて優れ、木村莊八は紙本小屏風半双「暫、助六」及小品「瀝東女」「西の市所見」等に小味な商切れのよい表現を見せた。中川一政の二曲一双「一茶屏風」「雪中梅」其の他は所謂味の藝に止るが豊富な教養を示してゐる。

河井寛次郎新作陶器展

十二月一日—七日 大阪長堀・高島屋

大塚稔國寶名畫現代大家新作巧藝畫展

十二月一日—七日 大阪・十合

堀染畫東西名家新畫幅展覽會

十二月一日—十二日 日本橋・高島屋

同店京都の專屬染色工場で在來の友仙技法より研究創製した質大、原色に做ふ複製畫を堀染畫と名け、之に依る現代日本畫家の作品複製數十點を展覧した。頗る精巧な出來である。

栗田九品庵東西大家新作鑑賞會

十二月二日—四日 銀座・交詢社

奥谷秋石日本畫展

十二月二日—七日 大阪・阪急百貨店

南洋水産工藝品展

十二月三日—五日 赤坂溜池・三會堂

南風原朝光個展（洋畫）

十二月三日—五日 新宿・天城畫廊

高橋一智第一回陶磁器展

十二月三日—五日 青森・菊屋百貨店

魯山人藝術展觀

十二月三日—七日 日本橋・白木屋

長村美術刺繍第一回作品展

十二月三日—七日 大阪・カスビル

銀座・三味堂第一回日本畫展

十二月三日—八日 銀座・三味堂

同店が初めて催した日本畫展で知名の作家十三名の小品各一點宛を陳列、すつきりした出來のものが多く楽しんで眺められる展覧であつた。川合玉堂の「湖畔の雪」は好個の小品として場中に光り、奥村土牛の「葭五位」、太田聰雨の「七つのたから（良寛）」、安田靫彦の「明恵上人」、山口蓬春の「冬暖」、小林古徑の「さくら」等見るべ

竹内栖鳳の「鶯の子」は輕妙を極めた。
長谷川利行「花と女の顔」小品展 (洋畫)

十二月三日—十日 新宿・ノバ

向井潤吉北支戰線從軍スケッチ展

十二月四日—八日 銀座・青樹社

十月初より十一月下旬に互り北支戰線戰線各地に従軍寫生を續けた收穫、油繪三十八點を陳列、作風と題材とが調和を得て此の種の作としては質の優れた仕事を見せた。

第十二回濱田庄司近作陶器展

十二月四日—八日 銀座・鳩居堂

久保田香藝小品畫展 (日本畫)

十二月五日—七日 大阪・三越

岡常次個展 (洋畫)

十二月五日—八日 銀座・紀伊國屋

蒼原會第十回展 (洋畫)

十二月五日—九日 神田・東京堂

第二回岡田謙三新作發表展 (洋畫)

十二月五日—九日 銀座・日動畫廊

油繪約六十點を出品。本年二科會員に推舉された作家である。多く少女を描くが、又風景を扱つても、一種幻想的な雰囲気をもととし、色彩、筆觸に特徴を示す。たゞ幾分纖弱さを免れぬ。

優田寛雨個展 (日、洋)

十二月五日—九日 大阪市立美術館

柳宗悅指導新作染織展

十二月五日—十一日 銀座・たくみ工藝店

新興美術家協會第三回展 (綜合)

十二月五日—二十日 東京府美術館

公募展で出品種目は膠彩畫 (日本畫)、油彩、版畫、彫塑、工藝等である。油彩最も振はず、日本畫では、玉村方久斗の二部作「A」家の表情、村上柁夫の「舞踊圖」、

石川勉の「女性四題」等があつたが概して挿繪的低調さを出ない。工藝部は實用的小品が多く、鴨政雄の金工、野口道方の染色等が意匠に新味を見せ、彫塑は清水多嘉示、大内青圃の出品を他に於て見るべきものはなかつた。尙戰時ポスター十五點の出陳があつた。

(陳列點數) 膠彩畫六十點、油彩百十二點、工藝八十七點、版畫彫塑等五十九點、戰時ポスター十五點

新會友 伊藤喜朝以下二十二名 (便覽九〇頁参照)

授賞 (協會賞) 村上柁夫 (膠彩)、小田正春 (油彩)、

境田繁 (油彩)、清水正博 (版畫)

關岡美堂二十周年記念東西大家新作畫展

十二月六日—八日 日本橋・東美俱樂部

東西の作家四十九名の新作を出品した。前田青邨の双幅「樂翁公」は昨年の院展出品のものと同じ題材を扱ひ練達した技巧を示して場中の尤作、其の他、入江波光の水墨淡彩「双金剛童子」、伊東深水の「新粧」、川合玉堂の「古池」、田中咄哉州の「雪朝」、荒木十畝の「雪汀鴛鴦」、溝上遊龜の「柿」、山口蓬春の「春」、吉岡堅二の「雪」等が擧げられる。

山本大慈近作展 (日本畫)

十二月六日—九日 神戸畫廊

吉井忠素描展 (洋畫)

十二月六日—十日 新宿・天城畫廊

新春掛繪畫展 (日本畫)

十二月六日—十一日 名古屋・松坂屋

横濱市主催陸海軍病院獻納繪畫展 (日本畫)

十二月七日、八日 開港記念横濱會館

深澤省三個展 (洋畫)

十二月七日—十一日 大阪・美術新論社畫廊

京都在住日本畫家第三回最高展

十二月七日—十二日 京都・大丸

大丸の主催で、出品者は竹内栖鳳、西村五雲、橋本關

雪、西山翠嶺、菊池契月、上村松園、堂本印象、福田平八郎等十八名であつた。

大阪女流畫家試作展 (日本畫)

十二月七日—十二日 大阪・大丸

新制作派第二回美術展 (洋畫)

十二月八日—二十五日 東京府美術館

舊帝展に於て未來を嚆望せられて居た新進作家九名が昨年第二部會を結束脱退し、「反アカデミック」を主張して結成した同會の第二回公募展である。藤島武二は昨年同様贊助出品をして激勵を與へ、會員各々精進の大作を出陳した。漸次舊帝展型の作畫態度及感覺が清算され、各人の自由な個性的研究が深まつて、其の内容は昨年より一段の充實を示した。全體に作家的觀照の深さを示す作品に乏しいが、何れも相當の作畫技巧と近代人的な教養を窺はしめ、既に新進の在野團體として畫壇に主要な地位を占めるに至つて居る。

佐藤敬の大作「水の姿勢」は水の流れと三人の裸婦を寓意的に構成して現はした。色感が冷く、描寫の形式化が圖案的となつた憾みがあるが、創意と努力を認める。

脇田和の三部作「澗」「溪」「森」は何れも大作で、裝飾的に器用な筆致で纏められ、一種垢抜けのした神經があり面白い。猪熊弦一郎は「晝」「黄昏」「夜」の三部作を出した。中央の大作「夜」は月明りの廢墟の街に、猛犬の群が一頭の馬を襲ふ圖で、他の二點は何れも丘に憩ふ裸婦群像を描き「晝」は綠を、「黄昏」は黃赭色を基調とした。藝術的には早近な耽美を出ないが、近代的な類廢的美を巧みに表現して、精彩を放つた。小磯良平の「人々」は古典的な技術に愈々冴えを示して注目された。鈴木誠の「習作」「三人」等は構圖その他に研究が認められたが感覺の粗笨を免れぬ。伊勢正義の「ルボー」は生氣に缺け、内田巖の大作「史性」は廢墟に蹲る群像に文學的寓意があるが効果上らず、寧ろ「港」「葡萄」等の方が佳

應募出品の中では、會員に推舉された野田英夫は米國に於て學んだ作家で、「ムーヴィングマン」其の他は技術的に手慣れてゐるが藝術的陰翳に乏しい。其の他創意に乏しいが坂井範一の「海邊」、今村俊夫の抽象繪畫「仕事」及び内田武夫、小松益喜の諸作が舉げられるであらう。藤島武二の特別出品「北國の春」外四點は何れも細部を要約し、大まかな筆觸で纏められたものであつた。

入選數	一〇二（六四名）
陳列總數	一二七

新制作派協會賞 今村俊夫、坂井範
新作家賞 内田武夫、小松益喜

門

風景

標本のま

白い花

力の三要素

奧利根屬

庭

土壤の像

露臺靜物

鏡

海邊

青い女

紀念會館

秋 三 月 上 旬

花と女

裸婦

人物

同	同	同	中西 利雄	工藤 正義	秋田 仁也	同	同	坂井 範一	丸山東美男	同	村尾 詢子	小關 利雄	同	佐藤 敬	倉本次太郎	鈴木 新夫	青峰 重倫	清水 幸雄	録
室内	月夜	セレナーデ	森	高原	砂見	街の子	薙苔	集金人	漣船	野	獨居	鏡の前	高	森	溪	瀨	建物	春	
同	秋岡 元一	和田 貞子	三田 忠	皆見 龍二	同	同	小野 忠吾	閩田 正一	椿堂芳三郎	同	小山 良修	高島 千代	富田 通輝	同	同	脇田 和	島田 潮	中西 利雄	

公園	中田 旱	ミキサーとその床
月	今村 俊夫	人々
仕事	同	裸婦
作品	松下 忠雄	作品の前で裏庭に立つ
花と貝殻	田村玄一郎	親・子供
二人	小田 晴子	踊子小憩
庭	同	サーカス
手品	矢津 鞆紀	牛乳ワゴン
畫	猪熊弦一郎	ムーヴイングマシーン
夜	同	氷上
黄昏	同	都會
釣る男	北原 榮一	海に近い町
習作	同	くだもの
風景Q	佐藤 長生	テابلによる
風景P	同	若き人々
獨逸領事館	小松 益喜	バルコンの女
神戸オール・セント・チャーチ	同	フベツク
赤い窓の家	同	南洋の思出(A)
山本通風景	同	同 (B)
植民地風景	同	風景
静物	稲田 光	花束
水邊	同	三人
湖邊	鳥羽 宗雄	習作
人物	若松光一郎	教會堂
オブジェ(A)	藤澤 典明	風景
オブジェ(B)	同	虛妄
文化的施設の一側面	田淵 巖	うみべ
鉄線と少女	手島森之輔	たそがれ
踏りのコスチュームにて	楢原 健三	ルボー
祭	里見 明正	ルユギー
森	中井惣之助	窓の少女たち
樹のあつた夢	井上 幸一	きものゝ女
集ひ	吉村 三郎	
姉弟と犬	同	
畫飯時	和田 裕介	

[illegible]

	新高山の日の出	藤島 武二	響律	小林 三郎			
(臺灣)	朝熊山の黎明	同	葡萄	同			
(伊勢)	雪窓の日の出	同	史性	同			
(藏王連山)	五剣山(讃岐)	同	港	同			
	琺瑯店	樹井 一夫	音樂家森氏及其家族	竹我 英吉			
	コスチューム	白石 達夫	子供	中村喜多雄			
	コート	灘波 秀二	機械	内田 武夫			
	立てる裸婦	石山 融	カメラ	同			
	巖	大河内莎朶	風の母子	同			
			子供	瀬島 好正			
渡邊亭遺作展 (洋畫)							
十二月九日、十日	銀座・紀伊國屋						
現代名家新作畫展 (日本畫)							
十二月九日—十三日	日本橋・高島屋						
東西の作家三十五名。主なる出品として竹内栖鳳の角鴉を描いた豎幅「秋の一日」、川合玉堂の「疏林鳥聲」、安田靱彦の淡彩描畫「倭媛」、松岡映丘の「刀尋段々壞」、前田青邨の「凱旋武將」、橋本關雪の「猿」、小杉放庵の「海錯」、中村岳陵の「冬朝」等が擧げられる。尙中村不折の「黃葉清溪」、「達磨安心」は書畫一致の味を示して佳品であつた。							
東西大家新作畫展 (日本畫)							
十二月九日—十三日	大阪・三越						
東都木金彫刻展							
十二月九日—十三日	大阪・三越						
橋本龍岳作陶展							
十二月九日—十三日	大阪・三越						
小早川、等々力從軍スケッチ展							
十二月十日—十二日	銀座・松屋						
小出卓二素描淡彩展							
十二月十日—十二日	神戸畫廊						
七彩會展 (洋畫)							
十二月十日—十三日	銀座・日動畫廊						

愛知縣出身文展入選者近作展

十二月十日—十四日 名古屋・丸善

ラスキンの思想を主題とする手工藝服飾品及雜貨展

十二月十日—三十一日 舊ラスキン参考館

土井撰美堂新作日本畫展

十二月十一日、十二日 京都美術俱樂部

森英個展 (洋畫)

十二月十一日—十三日 新宿・天城畫廊

原生社第一同洋畫展

十二月十一日—十三日 銀座・紀伊國屋

高橋亮上海從軍スケッチ展

十二月十一日—十五日 日本橋・白木屋

東郷青兒洋畫展

十二月十一日—二十日 大阪・阪急百貨店

日本アンデパンダン協會委員作洋畫小品展

十二月十二日—十四日 神戸・プチギヤラリー

第一同紙本小品三人展 (日本畫)

十二月十三日—十五日 神戸畫廊

出品者中堂長陽、藤村茂、高山完。

佐伯祐三遺作淡彩畫展 (洋畫)

十二月十三日—十五日 大阪・關西畫廊

青山義雄近作洋畫個展

十二月十三日—十七日 銀座・資生堂

求龍堂竝兜屋主催。二十五號の「港」、十二號「郊外早春」を初め近作十七點を出品した。色彩は滋味のある華やかさで、筆技も老巧、畫面に工藝的な味はひはあるが實體を逸してゐる觀があり、一種の空虚さを否定出來ない。

倉田白羊個展 (洋畫)

十二月十三日—十七日 大阪・美術新論社畫廊

後藤貞太郎主催。本年に於ける二回目の個展で「初夏」「庭」「柳の部落」等近作十三點を展觀した。

湯川松堂繪畫展 (日本畫)

十二月十四日—十七日 大阪・三越

關向美堂東西大家新作畫展 (日本畫)

十二月十四日—十七日 大阪・十合

向井潤吉北支戰線從軍スケッチ展

十二月十四日—十七日 大阪長堀・高島屋

藝苑社主催東西大家扇面畫展

十二月十四日—十九日 日本橋・高島屋

山田樂全・三木表悅漆藝作品展

十二月十七日—十九日 大阪長堀・高島屋

東都作家工藝品展

十二月十七日—二十二日 神戸畫廊

有吉正雄近作洋畫展

十二月十八日—二十二日 神戸・プチギヤラリー

某侯爵家所藏洋畫賣立

十二月十八日—二十二日 銀座・青樹社

大塚金吾第五回個展 (洋畫)

十二月十九日—二十一日 銀座・資生堂

資生堂美術部主催。

三春會小品展 (洋畫)

十二月十九日—二十三日 大阪・美術新論社畫廊

現代大家ミニチュア展

十二月十九日—二十三日 大阪・三越

新作畫展

十二月二十一日—二十三日 大阪中之島・江商ビル

西洋骨董品展

十二月二十一日—二十九日 日本橋・高島屋

綠包社第五回展 (洋畫)

十二月二十二日—二十六日 銀座・紀伊國屋

高橋亮上海戰線從軍スケッチ展

十二月二十二日—二十九日 大阪・美交社

主催美交社。支那事變海軍從軍畫家として戰線を視察した作者の油繪スケッチ十二點、デッサン、淡彩四十五點を出陳した。

楠瀬日龍溪硯展觀

十二月二十三日—二十九日 日本橋・三越

十八世紀佛蘭西巨匠素描畫水彩畫展

十二月二十四日—二十八日 銀座・三味堂

諸作家洋畫展

十二月二十五日—二十九日 大阪・美術新論社畫廊

十二月二十五日—三十日 日本橋・高島屋

り知名作家を集めただけに、夫々落着きを持った精緻の技を見せた。

レーモンド建築寫眞展

十二月二十七日—二十九日 銀座・養生堂

展覽會以外的作品

日本畫

本村武山筆襖繪 本村武山は一月、成田山新勝寺へ大襖繪二十枚を寄進した。天人奏樂及四季花鳥を主題とした華麗な紙本極彩色畫である。(都に依る)

堂本印象筆眞言八祖像

復興された高野山金剛峯寺

根本大塔内に壁画として堂本印象が眞言八祖像を描くこととなり、豫てより苦心製作中であつたが、龍猛、龍智、善無畏、一行の四祖は昨年中に完成、引續き金剛智、不空、惠果、弘法の四祖を製作、同塔落慶供養の法會を前に、本年三月描き上げた。畫面は各々方十三尺楡板で、一祖宛の坐像を描いた大作である。完成後特別な輸送貨車で高野に送られ大塔落慶法要を前にして同塔内に取付けられた。

上村松園筆雪月花三幅對

上村松園は大正五年皇太

后陛下が皇后陛下であらせられた頃、雪月花三幅對揮毫の御用命を拜したが、此の程右三幅を完成、六月皇太后陛下が京都皇宮に御駐泊中之を上納した。御用畫は二尺幅豎物、雪月花の三幅對極彩畫で、藤原時代の殿上風俗を描いたものである。

池上秀畝筆出雲大社櫺之間壁書

池上秀畝は七月、

官幣大社出雲大社の國寶櫛之間の金壁に、牡丹に雌雄の唐獅子を描いた豪華な裝飾畫を揮毫、奉納した。

福田翠光筆名古屋朝日ビル地階壁書

福田翠光は名

古屋市の大阪朝日新聞名古屋支社の地階ホールの四壁に大裝飾畫を執筆、九月中旬完成した。四壁の中一面は高さ十尺、長さ二十四尺、他の三面は高さ五尺、長さ計百四十尺、大杉板に描いたもので、大壁面は溪流に熊鷹、巨松等を配し、以下紅葉と松、松上に哺む大鷹、櫻花に飛隼、雪連峯に松上白鷹等を順次に配して構圖した。金砂子を撒き、隈どりにて遠近をつけ、桃山風の豪華をねらつた極彩畫で、新興建築の室内裝飾として快適な調和を得て居る。

東京府養正館の陳列畫

皇太子殿下御誕生の奉祝記

念事業として、東京府が青少年の修養機關たらしむべく麻布區盛岡町一番地に設立した養正館は、十二月一日開館された。館内には國史繪畫館が設けられ、國體明徴を目的とする歴史畫、日本畫四十五枚、洋畫三十二枚計七十七枚が各々知名の作家により執筆され、ほゞ陳列を完了したが、左に未納の作品若干をも含めて其の陳列目録を掲載する。

天照大神	伊藤	龍涯	神功皇后	佐々木尙文
天孫降臨	狩野	探道	仁德天皇	松岡
神武天皇御東征	野田	九浦	聖德太子	義
神武天皇御即位	町田	曲江	中大兄皇子と中 臣鎌足	吉田
鳥見山の郊祀	小泉	勝爾	平城京	小泉
皇大神宮奉祀	矢澤	弦月	舍人親王	勝爾
日本武尊	渡邊	審也	和氣清曆	佐藤
弟橘媛	伊藤	深水	平安京	矢澤
				弦月
				長谷川路可
				都鳥
				英克

菅原道真	吉田	秋光	竹内式部	坂内	青
醍醐天皇	荻生	天泉	本居宣長	望月	春江
紫式部	川崎	小虎	松平定信	榎本千花俊	
源義家	吉村	忠夫	黑船の來航	井上	啓次
平重盛	乾	南陽	孝明天皇	井上	錦成
那須與一	小堀	安雄	橋本左内と三條實萬	井上	白楊
源賴朝	五味	清吉	吉田松蔭	永地	秀太
明恵上人と北條時時	飛田	周山	大政奉還	松島	白虹
松下 禪尼と北條時頼	益田	玉城	江戸城明渡	伊原宇三郎	
元寇	根上	富治	五ヶ條御誓文	逸陵	精一
元寇	藤藤	種男	東京寛都	高村	眞夫
大塔宮	織田	彌潮	鐵道開通	和田	雪苗
名和長年	伊藤	紅雲	憲法發布	五味	清吉
新田義貞	鴨下	晃潮	教育勅語	寺内萬治郎	
後醍醐天皇京都御還幸	萩原	達義	日清戰爭	寺崎	武男
櫻井驛の訣別	服部	有恒	廣島の本営	永地	秀太
楠木正行の母	福田	久也	昭憲皇太后傷病	松岡	壽
北畠親房	白井	剛夫	日露戰爭	渡部	審也
楠木正行	磯田	長秋	乃木將軍とステツセル	北	運藏
菊池武光	岡	精一	奉天入城	永地	秀太
後奈良天皇	小山	榮達	日本海大海戰	北	精一
上杉謙信	川崎	小虎	韓國併合	永地	秀太
織田信長の勤王	高村	眞夫	明治天皇	北	運藏
山内一豊の妻	岩田	正巳	南洋出兵	和田	香苗
豊臣秀吉の勤王	山川	秀峰	遊政宮殿下御外	松岡	壽
名護屋城の秀吉	太田	天洋	慈	寺崎	武男
加藤清正	伊藤	紅雲	皇太后陛下御仁	寺内萬治郎	
藤	菊池	華秋	今上天皇陛下御即位式	寺内萬治郎	
日本人の海外發展	高村	眞夫	滿洲事變	渡部	審也
徳川家康	太田	義一	皇太子殿下御誕生奉祝	和田	香苗
徳川光圀	太田	秋民			
大石良雄	渡邊	審也			

和田三造作春帆樓壁畫

下關市の依頼に依る油繪壁

畫で、三月二十日、同市の日清講和談判記念館に納入された。畫題は「日清戦争講和談判彼我全權委員宿舎同願圖」。和田三造の構圖に基き門下の稗田研二、木下茂の二名が執筆した。大さ縦四尺八寸、横十一尺七寸。

伊原宇三郎筆廣田弘毅肖像畫 伊原宇三郎は前首相

廣田弘毅の肖像畫を執筆、四月に完成した。大さは三十三號で、モーニングを着し、胸に勳一等の略章をつけた座像である。

海軍館歴史畫 本年五月澁谷區原宿に開館された海

軍館の一室に我が海軍の歴史を描いた油繪十七枚が納められた。作者及畫題は左の通りである。

威臨丸ノ太平洋	小林 萬吾	蔚山沖海戰ノ敵	清水 良雄
橋斷		兵救助	
天保山沖軍艦御	中澤 弘光	日本海海戰敵前	永地 秀太
親閱		大同順	
宮古沖海戰	南 薰造	艦第六潜水艇	石井 柏亭
兩館海戰	中村 研一	地中海ニ於ケル	石川 寅治
赤城西京ノ奮戰	田邊 至	我海軍ノ活躍	
勇敢ナル水兵	北 運藏	皇太子殿下の御	山下新太郎
威衛ノ夜襲	長谷川 昇	渡敷	
陸戰隊ノ太活砲	權藤 種男	上海陸戰隊ノ奮	御厨 純一
臺占領	奧瀬 英三	蘇州空中戰	三上 知治
旅順口閉塞隊		海陸協同作戰	三國 久

潮野覺藏筆國防館壁畫 近代科學戰の攻撃圖が潮野覺藏により製作され、十月二十日、靖國神社境内の國防館に納入された。同圖は縦十五尺、横二十尺の油繪で、富國徴兵保險相互會社より同館に獻納されたものである。

藤島、岡田謹作皇太后陛下御用命畫 藤島武二、岡田三郎助の兩名は昭和三年聖上陛下が赤坂離宮より宮城へ遷御の御祝ひに皇太后陛下より御贈進遊ばされる油繪の御下命を拜したが、十二月二十六日、藤島武二は「旭日照六合」を、岡田三郎助は「楊柳」を大宮御所に奉納した。前者は内蒙古の沙漠の朝靄を破つて昇る太陽が曙

光を沙漠に投げた瞬間を描き、駱駝二頭を配した雄大なもので「楊柳」は岸邊に楊柳の茂る流に家鴨の浮遊する平和な滿洲風景を描いたもの、何れも大きさは四十號である。

彫 刻

本山白雲作「芳賀矢一博士像」 本山白雲作芳賀矢

一博士胸像が國學院大學構内に建設され、二月六日除幕式が舉げられた。ブロンズで高さ三尺。

佐々木素雲作「後醍醐天皇御木像」 佐々木素雲は

鶴見總持寺の依頼により後醍醐天皇御木像を謹作し、約一箇年を費して四月八日完成した。御像は翌日總持寺に奉安され、開眼式が行はれた。高さは御冠共三尺八寸、御椅座共四尺六寸五分で、極彩色、材料は本檜が使用された。

朝倉文夫作「新渡戸博士像」 朝倉文夫の製作によ

る新渡戸稻造博士の坐像が東京府下多摩墓地に建設され四月十四日除幕式が行はれた。ブロンズで高さは七尺。

依頼者新渡戸先生記念會。

野村公雄作「結城藏相銅像」 野村公雄作の結城藏

相銅像が山形縣東置賜郡赤湯町公民學校校庭に建てられ四月末日除幕式を行つた。ブロンズで高さ八尺。原型は第十回構造社展に出品された。

北村西望作「結城神社狛犬」 北村西望は三重縣の

伊藤傳七の依頼で別格官幣社結城神社の狛犬一對を製作した。銅鑄製で高さは向つて右が五尺五寸、左が五尺三寸である。五月一日に奉納された。

保田龍門作「吉岡訓導殉職像」 保田龍門の製作に

よる吉岡訓導殉職像が山口縣教育會の依頼で山口市山口縣立教育博物館の前庭に建設され、五月九日除幕式を舉行した。銅像の高さ七尺、臺座五尺である。

沼田勇次郎作「正木直彦銅像」 正木直彦の陶製壽

像が京都陶磁器試驗所に於て五月中旬完成された。同所囑託沼田勇次郎の原型になるもので、等身よりなほ大きく、陶像として稀に見る大きさのもので、全身を一度に燒くことに成功した點に一生涯を拓くものとされてゐる。同像は東京美術學校内正木記念館に安置されることとなつた。

安藤照作「西郷隆盛銅像」 安藤照は南洲翁五十年

祭奉賛會の委嘱に依り、南洲の銅像を製作し五月下旬完成した。高さは一丈九尺で鹿児島山下町公會堂前に建設された。

朝倉文夫作「谷干城像」 朝倉文夫は西南戦争六十

年會の依頼で谷干城の銅像を製作した。坐像で、高さは一丈、熊本市熊本城址に建設され、十月二十四日除幕式が舉行された。

緒方敏雄作「菊池武光公銅像」 緒方敏雄の製作に

係る菊池武光公の銅像が福岡縣三井郡太刀洗村太刀洗公園内に建設され、十一月二日除幕式が舉行された。銅像は武光が馬側に立ち拔身の刀を下げ手綱を握る構圖で、高さは人物八尺、馬頭十尺、臺座約一尺、石の臺が一丈一尺である。依頼者は太刀洗村の菊池武光公頌德會。

佐崎霞村作「叡山阿彌陀堂本尊」 佐崎霞村は京都

の故山口玄洞の寄進にかゝる比叡山延曆寺阿彌陀堂の本尊阿彌陀如來像を完成した。昨年五月門第四名と共に京都百萬遍知恩寺に於て製作に着手し、同年十二月木彫の仕上を完了、本年四月之を阿彌陀堂内の作場に移し、塗漆及金箔押に着手し、十二月九日完成したもので、着手前、構想に約三箇年を費した。材料は尾州檜を用ひ、高さは臺座及光背を合して二丈、御本體は頭上迄九尺五寸である。

挿 繪

挿繪専門畫家は固より、一般畫家で新聞其他に挿繪を執筆する者も少くないが、夫れ等の活動の概要を記録する爲、本年度主要新聞所載小説挿繪の一覽を左に掲げる。

(新聞名五十音順)

大阪朝日新聞

路傍の石 (山本有三)	朝刊	和田 三造	一・二・一・一
風速五十米 (武田麟太郎)	同	志村 立美	一・二・六・九
大陸の琴 (室生犀星)	同	宮本 三郎	一・二・〇・〇
炎の詩 (片岡鐵兵)	同	寺内萬治郎	一・二・二・一
宮本武藏 (吉川英治)	夕刊	矢野 橋村	一・九・九・二
達磨町七番地 (獅子文六)	同	高岡徳太郎	一・二・五・五
逢魔の辻 (大佛次郎)	同	岩田専太郎	一・二・五・二
鎌倉夫人 (深田久彌)	同	内田 巖	一・二・六・七

大阪毎日新聞

良人の貞操 (吉屋信子)	朝刊	小林 秀恆	一・二・四・一
美しき鷹 (菊池寛)	同	高木 清	一・二・四・一
半處女 (小島政二郎)	同	小林 秀恆	一・二・九・三
浮名三味線 (邦枝完二)	夕刊	岩田専太郎	一・二・二・二
旗本傳法 (土師清二)	同	小村 雪岱	一・二・一・三
迷彩列車 (吉川英治)	同	川端 龍子	一・二・九・二
雨降り峠 (村松梢風)	同	志村 立美	一・二・二・九

河北新報

女の唇 (中野實)	朝刊	小池 巖	一・二・一・二
牝豹 (岸田國士)	同	小林 秀恆	一・二・一・三

展覽會以外の作品

新しい歌 (藤澤桓夫) 朝刊 中西 利雄 一・二・七・三

愛情部隊 (富澤有爲男) 同 水谷 清 一・二・一・二

煩惱街道 (三上於菟吉) 夕刊 志村 立美 一・二・一・一

日本振天記 (山中峯太郎) 同 鈴木 御水 一・二・三・一

柳澤双情記 (白井喬二) 同 小村 雪岱 一・二・一・九

處女地帯 (正木不如丘) 同 宮田 重雄 一・二・三・五

日本振天記 (中篇) (山中峯太郎) 同 鈴木 御水 一・二・九・一

陽炎記 (片岡鐵兵) 同 山本 鼎 一・二・一・一

京城日報

花に濃淡あり (片岡鐵兵) 朝刊 一木 淳 一・一・〇・三

白き手の人々 (吉屋信子) 同 富永謙太郎 一・二・三・六

妻 (小島政二郎) 同 宮田 重雄 一・二・八・一

御守殿様 (邦枝完二) 夕刊 神保 朋世 一・一・八・二

曉星双紙 (田中寅太郎) 同 河野 通勢 一・二・三・二

國定忠次 (長谷川伸) 同 岩田専太郎 一・二・七・二

國民新聞

櫻狐 (清谷閑子) 朝刊 能勢龜太郎 一・二・一・一

貿易風 (富澤有爲男) 同 能勢龜太郎 一・二・七・三

浪人血笑記 (神道二) 同 桂木 奎輔 一・二・八・一

日本左衛門 (關戸武平) 夕刊 松田 青風 一・二・一・一

二人草三郎 (小堀雄作) 同 小川 倩霞 一・二・五・八

新 愛 知

女の唇 (中野實) 朝刊 小池 巖 一・二・一・二

安兵衛俠唄 (神通二) 同 木俣 茂彌 一・二・六・一

牝豹 (岸田國士) 同 小林 秀恆 一・二・三・〇

處女地帯 (正木不如丘) 朝刊 宮田 重雄 一・二・六・二〇

霧の行路 (諏訪宏司) 同 伊勢 良夫 一・二・七・三

腕づく半次 (柳香吉) 夕刊 西 正志 一・二・七・一

柳澤双情記 (白井喬二) 同 小村 雪岱 一・二・一・一

平手酒造 (並木一平) 同 桂木 奎輔 一・二・七・一

陽炎記 (片岡鐵兵) 同 山本 鼎 一・二・一・九

中外商業新報

愛すべき哉 (武田麟太郎) 朝刊 富永謙太郎 一・一・九・三

海鳥 (尾崎士郎) 同 梁川 剛一 一・二・五・一

天國地獄 (村山知義) 同 伊東 顯 一・二・二・一

地獄駕 (子母澤寛) 夕刊 齋藤五百枝 一・一・一・〇

續地獄駕 (子母澤寛) 同 志村 立美 一・二・七・二

明智光秀 (鷲尾雨工) 同 名取 春仙 一・二・一・二

東京朝日新聞

路傍の石 (山本有三) 朝刊 和田 三造 一・二・一・一

京濱人物秘話 (伊藤痴遊) 同 鈴木 朱雀 一・二・一・五

春帶記 (長谷川時雨) 同 荻谷 鷺行 一・二・三・二

風速五十米 (武田麟太郎) 同 志村 立美 一・二・六・九

綠蔭の漂流者 (三角寛) 同 松野 一夫 一・二・七・一

大陸の琴 (室生犀星) 同 宮本 三郎 一・二・一・〇

炎の詩 (片岡鐵兵) 同 寺内萬治郎 一・二・一・一

駕代二十兩 (子母澤寛) 同 吉田貫三郎 一・二・二・三

宮本武藏 (吉川英治) 夕刊 矢野 橋村 一・二・五・二

達磨町七番地 (獅子文六) 同 高岡徳太郎 一・二・一・五

瀧東綺談 (永井荷風)	夕刊	木村 莊八	一・二・四・一六 一・六・一五
逢魔の辻 (大佛次郎)	同	岩田 專太郎	一・二・五・二九 一・二・二・九
鎌倉婦人 (深田久彌)	同	内田 巖	一・二・六・一七 一・八・一一
東京日日新聞			
良人の貞操 (吉屋信子)	朝刊	小林 秀恆	一・二・〇・六 一・二・四・一五
美しき鷹 (菊池寛)	同	高木 清	一・二・四・一六 一・九・一二
半處女 (小島政二郎)	同	小林 秀恆	一・二・九・三一 一・三・二・二一
浮名三昧線 (那枝完二)	夕刊	岩田 專太郎	一・一・五・八一 一・二・一・二二
薄紅梅 (泉鏡花)	同	鍋本 清方	一・二・一・五 一・二・三・一
旗本傳法 (土師清二)	同	小村 雪岱	一・二・一・二三 一・九・一九
淺草の灯 (濱本浩)	同	長谷川 春子	一・四・一・二四 一・四・一・三
旅愁 (横光利一)	同	藤田 嗣治	一・二・四・一四 一・八・六・一
賭ける女 (三好十郎)	同	太田 三郎	一・二・八・八一 一・〇・二・八
迷彩列車 (吉川英治)	同	川端 龍子	一・二・九・二二 一・二・八・一
雨降り峠 (村松梢風)	同	志村 立美	一・二・一・二九 一・二・一・二九
福岡日日新聞			
女の唇 (中野實)	朝刊	小池 巖	一・一・八・二〇 一・二・一・二六
牝豹 (岸田國士)	同	小林 秀恆	一・二・一・二七 一・七・八・一
新らしい歌 (藤澤桓夫)	同	中西 利雄	一・二・七・九 一・二・三・〇
處女地帯 (正木不如丘)	同	宮田 重雄	一・二・六・一三 一・〇・一・六
樂園追放 (貴司山治)	夕刊	藤森 靜雄 (リノカウツ)	一・一・〇・一六 一・二・一・二六
柳澤及情記 (白井喬二)	同	小村 雪岱	一・二・三・五 一・〇・一・三
夫ある獨身夫 (細田源吉)	同	青柳 喜兵衛	一・二・二・二五 一・三・一・〇
人と彼等	同	甲斐 仁代	一・二・三・二 一・六・一・五
人間曲馬園 (濱本浩)	同		
痴人淨土 (張赫宙)	夕刊	坂 宗一	一・二・六・六一 一・一・〇・六
陽炎記 (片岡鐵兵)	同	山本 鼎	一・二・一・〇九 一・二・一・〇九
報知新聞			
女性開眼 (川端康成)	朝刊	宮本 三郎	一・二・七・二 三・一・一・一
暴風の旗 (海音寺潮五郎)	同	志村 立美	一・二・一・一 六・二・五
町人十萬石 (野村胡堂)	同	小林 秀恆	一・二・六・二六 一・二・三・一
新しき翅 (片岡鐵兵)	同	岩田 專太郎	一・二・七・二四 一・二・一・六
ロマンス特急 (宇野千代)	同	宮本 三郎	一・二・一・二七 一・二・一・二七
忠臣藏 (矢田捕雲)	夕刊	小村 雪岱	一・一・年度 一・三・年度
悦ちやん (獅子文六)	同	田中比左良	一・二・一・一 一・二・一・一
折蘆 (木々高太郎)	同	バルバ ブルノワ	一・二・一・一六 一・五・二・七
八州鬼双六 (子母澤寛)	同	富永謙太郎	一・二・五・二八 一・二・五・二八
都新聞			
江戸千兩首 (漆那三)	朝刊	井川 洗屋	一・二・二・一 一・二・二・一
眞實 (藤森成吉)	同	中村 研一	一・二・一・一 一・二・一・一
雌蕊雄蕊 (小島政二郎)	同	小早川 清	一・二・一・一六 一・七・八・一
薔薇合戦 (丹羽文雄)	同	小磯 良平	一・二・一・三〇 一・二・一・三
幸福の森 (岸田國士)	同	吉岡 堅二	一・二・七・九 一・二・一・五
愛情の蔭 (芥澤光治良)	同	田口 省吾	一・二・一・六 一・二・一・六
荒木又右衛門 (長谷川伸)	同	木村 莊八	一・二・六・二 〇・一・一・一
勤王浪人笛 (戸川貞雄)	同	矢野 橋村	一・二・六・二 一・二・六・二
讀賣新聞			
淨婚記 (細田民樹)	朝刊	岩田 專太郎	一・二・一・一 一・二・一・一
時代の霧 (竹田敏彦)	同	富永謙太郎	一・二・一・一 一・二・一・一

建築

本年度竣工建築物の詳細なる表は建築學會編建築年鑑に載せられて居る。さうした表を此處に載せる事は重複するのみならず、本年鑑の使命でもなく、建築年鑑だけの完璧も期し難いので、此處には美術年鑑としての立場から、注目すべしと思はれる建築のみを、調査し得た範圍内で、参考の爲に記した。採録すべくして洩れたものもあるべく、本年鑑使用者に單に参考に供するだけのものである。順序は竣工の月に依る。

一月

言問小學校	向島區洲崎町、東京市土木局建築課設計
鴻池組施工、鐵筋コンクリート造三階、總延面積一、六六七坪	
大阪市電氣科學館	大阪市西區西長堀北通一ノ五ノ一
大阪市經理部營繕課設計、清水組施工、鐵骨鐵筋コンクリート造地上八階、地下一階建築面積六四三・七八九平方、總延面積五、八〇九・三三三平方	
金蘭會高等女學校	大阪市西區川區浦江北、大林組設計施工、校舎鐵筋コンクリート造三階、講堂、體育館鐵骨鐵筋コンクリート造二階、建築面積三八九坪、總延面積一、〇六八坪
中本第二小學校	大阪市東區南中道、大阪市建設課

人妻眞珠 (戸川貞雄) 朝刊 岩田 專太郎 一・二・一・一八

清水次郎長 (小島政二郎) 夕刊 小林 秀恆 一・二・一・一五

朱門太平記 (田中實太郎) 同 河野 通勢 一・二・一・一五

女忠臣藏 (那枝完二) 同 神保 朋世 一・二・四・二〇

饑饉錢 (角田喜久雄) 同 志村 立美 一・二・一・一

設計、森下組施工、鐵筋コンクリート造三階、總延面積一、六八五平方厘米

市立木川小學校 大阪市東淀川區、大阪市建設課設計、有山組施工、鐵筋コンクリート造三階、總延面積一、〇八六坪

北恩加島小學校 大阪市大正區、大阪市建設課設計、山田組施工、鐵筋コンクリート造三階、總延面積一、四三九坪

難波新川小學校 大阪市浪速區新川、大阪市建設課設計、山田組施工、鐵筋コンクリート造三階、總延面積二、一八五平方厘米

難波櫻川小學校 大阪市浪速區櫻川、大阪市建設課設計、大阪橋本組施工、鐵筋コンクリート造三階、總延面積二、六〇〇平方厘米

九州帝大醫學部中央事務室 福岡市堅粕、九州帝大建築課設計、辻組施工、鐵骨鐵筋コンクリート造三階、總延面積四、四四五平方厘米

取手競馬場 茨城縣取手町、堀口拾巳設計、清水組施工、觀覽席鐵筋コンクリート造、屋蓋及小屋ノ軸組鐵骨觀覽席四、〇〇〇人、投票所一五〇坪

二月

藏前尋常小學校 淺草區藏前、東京市土木局建築課設計、石田充親施工、鐵筋コンクリート造三階、總延面積五、一三五平方厘米

三月

牛込尋常小學校 牛込區河田町、東京市土木局建築課設計、戸田組施工、鐵骨鐵筋コンクリート造三階、總延面積一、二九〇坪

中央國民體育館 神田區一ツ橋、大藏省營繕管財局設

計、鹿島組施工、運動場及水泳場鐵骨鐵筋コンクリート造、事務室其他木造、運動場床檜材(厚さ九分)、建築面積一、四一八・〇〇二平方厘米、總延面積一、六七七・四三七平方厘米

日本神學校 麴町區富士見町、長谷部竹腰建築事務所設計、大倉土木株式會社施工、鐵筋コンクリート造、一部鐵骨使用、地下一階地上塔屋共六階、建築面積七〇〇・四三二平方厘米、總延面積二、五一二・五一四平方厘米

櫻島高等小學校 大阪市此花區櫻島、大阪市建設課設計、大倉土木施工、鐵筋コンクリート造三階、總延面積一、五二四平方厘米

南百濟小學校 大阪市住吉區湯里、大阪市建設課設計、山本慶治郎施工、鐵筋コンクリート造三階、總延面積一、二二七坪

今宮第二小學校 大阪市西成區粉濱、大阪市建設課設計、廣島藤田組施工、鐵筋コンクリート造三階、總延面積二、四七三平方厘米

堺市立水族館 堺市大濱公園、長谷部竹腰建築事務所設計、藤本工務店施工、鐵筋コンクリート造、一部鐵骨使用、一階、一部二階、建築面積三一〇・一坪、總延面積三三三・九坪

四月

片倉館(増築) 京橋三丁目、大野功二設計、清水組施工、鐵骨造、地下二階地上九階、總延面積三、〇一一平方厘米

三菱合資會社 麴町區丸ノ内、三菱地所課設計、大林組施工、鐵骨鐵筋コンクリート造、地下一階地上九階、總延面積一、二四〇平方厘米

三菱銀行(増築) 麴町區丸ノ内、三菱地所課設計、大林組施工、鐵骨鐵筋コンクリート造、地下一階地上六

階、總延面積一三、七一五平方厘米

海軍館 澁谷區原宿三ノ二六六、池田事務所設計、旗手組施工、鐵骨鐵筋コンクリート造地下一階地上三階、建築面積一、九三三・三一〇平方厘米、總延面積四、七五九・五八四平方厘米

鷺洲第一小學校 大阪市西淀川區浦江北、大阪市建設課設計、戸田組施工、鐵骨鐵筋コンクリート造三階、總延面積四、三八六平方厘米

天王寺第四尋常小學校 大阪市天王寺區寺田、大阪市建設課設計、鹿島組施工、鐵筋コンクリート造三階、總延面積三、四四〇平方厘米

阪急西宮球場 西宮市津門、阿部美樹志建築事務所設計、竹中工務店施工、鐵骨鐵筋コンクリート造五階、收容人員約五五、〇〇〇人、總延面積六、八八〇坪

渡邊翁記念會館 宇都市、村野藤吾建築事務所設計、直營工事、鐵骨鐵筋コンクリート造地下一階地上三階、建築面積二、〇七二平方厘米、總延面積三、七九〇・五一平方厘米、收容人員二、四〇〇人

日本赤十字社三重支部山田病院 宇治山田市外御園村山田病院營繕係設計、野呂廣吉施工、鐵筋コンクリート造三階、總延面積二、二八二平方厘米

五月

小石川區役所 小石川區、東京市設計、戸田組施工、鐵骨鐵筋コンクリート造三階、總延面積一、一七二坪

ニュー・トーキョウ 麴町區有樂町、大倉土木株式會社設計施工、鐵筋コンクリート造地下一階地上五階、建築面積三二五・八七五平方厘米、總延面積一、六八五・六三七平方厘米

宇治電ビルディング 大阪市北區梅ヶ枝町、長谷部竹腰建築事務所設計、清水組施工、鐵骨鐵筋コンクリート

造地下一階地上九階、建築面積一、三九一平方米、總延面積三、七〇〇坪

積一、三八四・一五二平方米、總延面積三、〇七七・〇一五七平方

中本第三小學校

大阪市東成區白山、大阪市建設課設計、戸田組施工、鐵筋コンクリート造三階、總延面積一、五六六平方

設計、木村組施工、鐵筋コンクリート造三階、總延面積三、七七八平方

鶴橋第二小學校

大阪市東成區北ノ町、大阪市建設課設計、西本組施工、鐵筋コンクリート造三階、總延面積四、五八三平方

設計、戸田組施工、鐵筋コンクリート造一部木造、三階總延面積五、一七七平方

九條第一小學校

大阪市港區九條通、大阪市建設課設計、岡本吉藏施工、鐵筋コンクリート造三階、總延面積二、一二八平方

設計、錢高組施工、鐵骨鐵筋コンクリート造、地下一階地上八階、建築面積一、二六三平方、總延面積一、〇六一九平方

野村生命京都支店

京都市烏丸通七條、安井武雄設計竹中工務店施工、鐵筋コンクリート造地下一階地上六階建築面積二八八・五一〇平方、總延面積二、一三二・九四〇平方

設計、淺沼組施工、鐵骨鐵筋コンクリート造三階、總延面積一、〇〇三坪

大阪朝日新聞社小倉支局

小倉市、竹中工務店設計、竹中福岡支店施工、鐵筋コンクリート造五階、總延面積六、七四三平方

設計、清水組その他施工、本館鐵骨鐵筋コンクリート造、別館鐵筋コンクリート造、地下一階地上八階、總延面積四二、〇一二平方

鐵道省新廳舎

麴町區丸ノ内、鐵道省工務局建築課設計、清水組その他施工、本館鐵骨鐵筋コンクリート造、別館鐵筋コンクリート造、地下一階地上八階、總延面積四二、〇一二平方

設計、大倉土木株式會社施工、鐵筋コンクリート造、一部木造、地下一階地上五階、一部地下一階地上四階、建築面積二、九〇四・八五平方、總延面積一三、五四一・二九平方

東京藝術俱樂部

芝區新橋、清水組設計施工、鐵筋コンクリート造、地下一階地上四階、總延面積一、〇〇三坪

設計、高橋組施工、鐵筋コンクリート造三階、總延面積三、〇一四平方

天王寺師範學校

大阪市天王寺區、大阪府營繕課設計淺沼組施工、鐵骨鐵筋コンクリート造三階、總延面積一、五一六平方

設計、大坂朝日新聞社名古屋支局（増築）名古屋市中區廣小路、竹中工務店設計施工、鐵骨鐵筋コンクリート造、地下一階地上十階、總延面積五、四九九平方

大阪朝日新聞社小倉支局

小倉市、竹中工務店設計、竹中福岡支店施工、鐵筋コンクリート造五階、總延面積六、七四三平方

設計、鐵道省新廳舎 麴町區丸ノ内、鐵道省工務局建築課設計、清水組その他施工、本館鐵骨鐵筋コンクリート造、別館鐵筋コンクリート造、地下一階地上八階、總延面積四二、〇一二平方

東京遞信病院

麴町區富士見町、遞信省經理局營繕課設計、大倉土木株式會社施工、鐵筋コンクリート造、一部木造、地下一階地上五階、一部地下一階地上四階、建築面積二、九〇四・八五平方、總延面積一三、五四一・二九平方

鐵道省新廳舎

麴町區丸ノ内、鐵道省工務局建築課設計、清水組その他施工、本館鐵骨鐵筋コンクリート造、別館鐵筋コンクリート造、地下一階地上八階、總延面積四二、〇一二平方

設計、大倉土木株式會社施工、鐵筋コンクリート造、一部木造、地下一階地上五階、一部地下一階地上四階、建築面積二、九〇四・八五平方、總延面積一三、五四一・二九平方

鐵道省新廳舎

麴町區丸ノ内、鐵道省工務局建築課設計、清水組その他施工、本館鐵骨鐵筋コンクリート造、別館鐵筋コンクリート造、地下一階地上八階、總延面積四二、〇一二平方

設計、大倉土木株式會社施工、鐵筋コンクリート造、一部木造、地下一階地上五階、一部地下一階地上四階、建築面積二、九〇四・八五平方、總延面積一三、五四一・二九平方

鐵道省新廳舎

麴町區丸ノ内、鐵道省工務局建築課設計、清水組その他施工、本館鐵骨鐵筋コンクリート造、別館鐵筋コンクリート造、地下一階地上八階、總延面積四二、〇一二平方

設計、大倉土木株式會社施工、鐵筋コンクリート造、一部木造、地下一階地上五階、一部地下一階地上四階、建築面積二、九〇四・八五平方、總延面積一三、五四一・二九平方

鐵道省新廳舎

麴町區丸ノ内、鐵道省工務局建築課設計、清水組その他施工、本館鐵骨鐵筋コンクリート造、別館鐵筋コンクリート造、地下一階地上八階、總延面積四二、〇一二平方

設計、大倉土木株式會社施工、鐵筋コンクリート造、一部木造、地下一階地上五階、一部地下一階地上四階、建築面積二、九〇四・八五平方、總延面積一三、五四一・二九平方

鐵道省新廳舎

麴町區丸ノ内、鐵道省工務局建築課設計、清水組その他施工、本館鐵骨鐵筋コンクリート造、別館鐵筋コンクリート造、地下一階地上八階、總延面積四二、〇一二平方

設計、大倉土木株式會社施工、鐵筋コンクリート造、一部木造、地下一階地上五階、一部地下一階地上四階、建築面積二、九〇四・八五平方、總延面積一三、五四一・二九平方

鐵道省新廳舎

麴町區丸ノ内、鐵道省工務局建築課設計、清水組その他施工、本館鐵骨鐵筋コンクリート造、別館鐵筋コンクリート造、地下一階地上八階、總延面積四二、〇一二平方

設計、大倉土木株式會社施工、鐵筋コンクリート造、一部木造、地下一階地上五階、一部地下一階地上四階、建築面積二、九〇四・八五平方、總延面積一三、五四一・二九平方

慶應義塾寄宿舎 横濱市神奈川區日吉、谷口吉郎設計、島藤施工、鐵筋コンクリート造、地下一階地上三階、總延面積三、二一六平方分米

十二月

府立工業會館 大阪府江ノ子島、大阪府營繕課設計、大林組施工、鐵筋コンクリート造、地下一階地上五階、總延面積三、一〇七平方分米

日本橋クラブ 日本橋區濱町、久野事務所設計、鹿島組施工、鐵骨鐵筋コンクリート造、地下一階地上五階、總延面積四、八一九平方分米

津守第三小學校 大阪府西成區津守、大阪府建設課設計、古川春男施工、鐵筋コンクリート造三階、總延面積一、五六三平方分米

帝室林野局廳舎 麴町區丸ノ内、佐藤事務所設計、大倉土木施工、鐵骨鐵筋コンクリート造、地下一階地上五階、總延面積六、三二二平方分米

樺二森屋デパート 函館市高砂町、明石信道設計、鴻池組施工、鐵骨鐵筋コンクリート造、地下一階地上十階、總延面積四、五六三平方分米

梅田映畫劇場 大阪府北區角田町、竹中工務店設計施工、鐵骨鐵筋コンクリート造、地下二階地上四階、總延面積四、二八五坪、收容人員四、二〇〇人

希望博物館廳舎及本館 下谷區上野公園御料地内、臨時帝室博物館造營課設計、大林組施工、廳舎鐵筋コンクリート造地下一階地上二階建、本館鐵骨鐵筋コンクリート造地下二階地上四階建、總延面積二一、五六二・四七平方分米

三先小學校(増築) 大阪府港區三先町、大阪府建設課設計、池田組施工、鐵筋コンクリート造三階、總延面積一、三二九平方分米

十一月

大鐵百貨店 大阪府住吉區阿部野筋、久野事務所設計、大林組施工、鐵骨鐵筋コンクリート造地下二階地上七階、總延面積二五、〇六三平方分米

曾根崎高等小學校 大阪府北區小松原、大阪府建設課設計、小坂井組施工、鐵筋コンクリート造三階、總延面積二、一六六平方分米

平野小學校(改築) 大阪府住吉區平野宮、大阪府建設課設計、錢高組施工、鐵筋コンクリート造三階、總延面積四、〇三四平方分米

中大江東小學校 大阪府東區北新町、大阪府建設課設計、松村組施工、鐵骨鐵筋コンクリート造四階、總延面積三、一四七坪

市岡第二小學校 大阪府港區南市岡町、大阪府建設課設計、淺沼組施工、鐵筋コンクリート造三階、總延面積一、七八六平方分米

赤倉觀光ホテル 新潟縣中頸城郡、高橋貞太郎設計、大林組施工、鐵筋コンクリート造、一部木造、地下一階地上五階、總延面積三、二六七平方分米

赤倉觀光ホテル 新潟縣中頸城郡、高橋貞太郎設計、大林組施工、鐵筋コンクリート造、一部木造、地下一階地上五階、總延面積三、二六七平方分米

美術界彙報

一月

萬國博覽會場計畫委員會 紀元二千

六百年記念の日本萬國博覽會開催の準備は關係方面で着々進められてゐるが、此の博覽會の建築に關して使用材料、様式等に新生面を開くべく、萬國博覽會場計畫委員會が組織され、一月八日萬國博覽會協會から左の通り發表された。(東朝に據る)

委員 塚本靖、伊東忠太、佐野利器、武田五一、内田祥三、佐藤功一、大熊喜邦、東京市土木局長衣斐清香、日本萬國博覽會常務理事山崎春樹、商工省商務局長東榮二、幹事東京市産業局商工課長三村一、東京市公園課長井下清、東京市建築課長小野二郎

戊辰會擴大結成

川合玉堂門下の團

體戊辰會は其の組織を擴大し、新會員を加へて三十三名の外に二十五名の會友を設け、川合玉堂を顧問として研究本位の活動をなすべく、一月十日其の結成を兼ねた總會を開いた。

美術懇談會創立

美術批評家の有志

と美術に關心を持つ文壇の作家、批評家等十四名を會員として、美術懇談會が創立され一月十一日披露された。臨時懇談會を催し、知識、意見の交換等をなす由である。

帝國ホテル増築に抗議

東京オリ

ビック大會を控へ帝國ホテル株式會社で

は同ホテルの増築を計畫中の所、美術批評家協會は、右増築案は原作者の意圖に反する藝術破壊行為であり、著作権を侵害するものとして之に反對し、一月十九日當署者の反省を促す旨のコミュニケーションを發表、輿論に訴へて其の趣旨貫徹を圖ることとなつた。

財産税立案さる

政府は税制の全般

的改革を圖り其の細目に就き審議中であつたが、成案を得て税制改革關係法律案三十五件を一月十九日衆議院に提出した。此の中には財産税新設が含まれ、其の法案に依れば個人の財産三萬圓以上のものに對して課税するが、國寶及重要美術品、命令を以て定むる範圍の家寶等は除かれるものとしてゐる。右財産税の設定は美術の發達上に影響あるものとして注意され、之に關する正木直彦の意見等が發表された。

京都工藝院結成

京都に於ける各部

門の工藝作家の綜合團體として京都工藝院の結成は舊臘其の成立を見たが、一月二十四日京大樂友會館に於て創立總會を行ひ正式に創立された。尙右に伴ひ從來工藝各専門の研究團體として存在した五條會、陶藝協會、彩工會、仲更會、漆藝會、金工作家聯盟、若潤社、工友團の八團體は何れも新團體に含まれることとなつて解消された。

巴里萬國博出品物非難さる

本年五

月巴りに開催される巴里萬國博覽會日本館出品物展示會は一月二十二日から六日間日本橋高島屋に開催されたが、美術批評家協會では二十八日左のコミュニケーションを發表し右出品に對する同會の非難を明かにした。

「近代生活にとり入れたる藝術と技術を命題とする巴里萬國博覽會に對する日本側出品物は主催者佛國政府の趣旨を没却せるのみならず現代日本文化の實相を國際的に誤解せしむるものと信ずる。本協會は博覽會當事者の措置を遺憾とし深甚なる其反省を望むものなり」

二月

現代美術館建設促進運動

現代美術

館の建設は紀元二千六百年祝賀を機會として實現せしむべく昨年平生文相に依つて計畫されたが、其の後案の進捗を見ず且つ政變に依る同文相の辭職と共に一頓挫の形となつたので、東京府美術館借用各美術團體連絡機關の東京會では二月一日總會を開き、現代美術館建設を促進すべく十餘名の實行委員を選んで運動を始めることとなつた。

内閣更迭

廣田内閣總辭職の爲後繼

として林内閣が二月二日成立、文部大臣は平生夙三郎に代つて首相林銑十郎が兼任された。

京都工藝院創立祝賀會

一月結成さ

れた京都工藝院の創立祝賀會は二月十日都ホテルで同會員並に多數來賓出席盛大

一一六

に催された。

文化勳章令制定

科學、藝術其の他

文化の發達に關し功績卓絶した者を表彰する爲文化勳章令が制定され、紀元の佳節を卜し官報號外を以て公布された。(一三頁參照)

滿洲國訪日宣詔記念建造物設計當選者

發表 滿洲國宮内府内の訪日宣詔記

念事業實行委員會では、豫て宣詔記念建築物を計畫、昨年九月設計圖案の懸賞募集を發表し、十二月二十五日締切迄に集つた應募作品に就いて審査の結果當選者を決定、二月十一日左の如く發表した。

應募總數二七四通、其の内譯は日本(内地及關東州)二〇〇、滿洲より七四(日人六七、滿人七)であつた。

一等(三〇〇〇圓)

新東京 池田正巳

二等(二〇〇〇圓)

東京 大澤 浩

三等(各一〇〇〇圓)

新東京 福地憲弘

同 石塚彌雄

選外佳作(各二〇〇圓)

五名

日伊學會創立

日伊兩國の文化交流

聯絡の中心機關として日伊學會が創立され、二月十一日華族會館に於て發會式が行はれた。教授、藝術家、學生等の交換講演會、音樂會、展覽會等の開催、日伊文化に關する研究資料の蒐集展覽、兩國文化に關する諸事業の幹旋、研究の獎勵其の他の事業を行ふ。役員としては會長

男爵大倉喜七郎、副會長長姉崎正治、理事長和田英作、常務理事原忠道、田中耕太郎、男爵團伊能、矢代幸雄其の他理事十

名が就任した。

自由美術家協會結成

洋畫壇に於ける最も前進的な運動として、新時代洋畫展の長谷川三郎等を中心とする十名の作家が新團體自由美術家協會を結成し、其の發會式を二月十二日九之内マールで開いた。十四名の作家を會友とし、十數名の批評家等を顧問とする。年一回以上公募展を開催する豫定で、作品の種類は普通の繪畫技法に依るものの外、コラージュ、オブジェ、フォトグラム等を含んでゐる。

名が就任した。

日本工藝品シカゴ陳列會

昭和十一年度商工省輸出工藝展出品中選出された各種工藝品は、舊臘日枝丸で發送シカゴに送られ、同地に於て二月十五日から二週間陳列會が開かれた。出品物内容は左の通りである。(工藝ニュースに據る)

名が就任した。

陶磁器及硝子製品

九三

漆器

一三二

金屬製品

六〇

木竹製品

三七

染織製品

四六

其他の製品

三一

工藝指導所出品

二五

陶磁器試驗所出品

二一

合計

四四五

ベルリン・オリンピック優待作將來

大日本體育藝術協會會長森村市左衛門男は私費を投じて昨年ベルリンに開催されたオリンピック大會藝術競技入賞作品六點を購入、美術教育資料として東京美術學校に寄附することとなり、免稅の取扱を

受けて二月十六日横濱税關で検査の上東京に運ばれた。品目は左の通りである。

アイゼン・メスガール作ゴッホの走者 油繪
アルフレッド・ヒール作ポスター、アヴス自動車競走

グーデルベルグ作取駝 エッチング
ルビ・ヴィグノール作御者 彫刻
エミール・ストール作ハードル走者 浮彫
ルシアノ・メルカンテ作メダル //

田中松太郎を慰める會

我が國美術印刷の先覺者として美術界に縁故の深い半七製版所主田中松太郎の功績を感謝し晩年を慰める爲、岡田三郎助、和田英作、高島米峰、石井柏亭、岩波茂雄等數十名が發起となり、二月十八日夜日本橋通三丁目明治屋ビル中央亭で田中翁に感謝する會を催し、有志の醗金と記念品とを贈つた。

名が就任した。

墨人會俱樂部結成

小川芋錢、渡邊大虛、津田青楓、小杉放庵、關西の矢野橋村、菅橋彦等十二名の日本畫家に依り二月二十日新團體墨人會俱樂部が結成された。東洋藝術の確證と進展とを期するものの集とし、個性を尙ぶ爲に各人主義を採り、在野官展等畫壇の黨派問題に拘らぬ。六月第一回展を開く豫定で翌年第二回よりは作品公募をする由である。

寺崎廣業胸像除幕

寺崎廣業の青銅胸像が門下其の他有志の醗金に依つて東京美術學校々庭に建設され、故人の十九回忌に當る二月二十一日關係者參列の上除幕式を行つた。作者は内藤伸である。

體育藝術協會組織擴大

昭和十五年

開催豫定のオリンピック東京大會に關しては關係諸方面に準備が進められてゐるが、藝術競技參加の爲大日本體育藝術協會では其の組織を擴大して全藝術界を動員することとなり、副會長、顧問等の役員を増員する外、二月二十二日九之内工業俱樂部に日本畫、洋畫、彫塑、工藝、建築、音樂、寫眞、文藝に互り各部門の代表的作家等百九十餘名を招き懇談會を開催、其の人々を評議員に推し、其の中より理事を選出、大會の準備を進めることとなつた。

名が就任した。

名が就任した。

現代美術館建設促進聯盟結成

前記

東叡會に依つて起された現代美術館建設促進運動は、二月十日實行委員會で協議の結果に依り、同二十二日午後上野精養軒で諸美術館所屬の美術家二百餘名の會合を開催して現代美術館建設促進聯盟を結成、左の決議文を作成して實行委員會を挙げ、具體的運動を進めることとなつた。

名が就任した。

「建國二千六百年を期し美術國日本を世界に宣揚すべく現代美術館の建設を要望す」

落款請求の訴訟

竹内栖鳳に對し眞筆確認及び落款請求と云ふ訴訟が二月二十三日東京民事地方裁判所に提起された四十一年許りに製作の花鳥畫に所藏者毛塚頼貞が落款を求めたが作者が斷つた爲此の訴訟に及んだものである。

滿鐵歐洲にてポスター募集

滿鐵バ

リ事務所では、歐米人の滿洲國に對する認識を深める爲一等一萬フラン、二等三

千フラン、三等一千フランの賞金を懸けて、「來れ滿洲國に」と題するポスターを歐洲に於て募集したが、各國から四百五十點許りの作品が集り二月二十四日からバリで其の展覽會を開いた。尙其の四十點は大連本社に送附後滿洲及び内地で展覽することとなつた。

名が就任した。

名が就任した。

貴族院に於ける現代美術館問答

開

會中の帝國議會三月二十五日貴族院豫算委員會第三分科會に於て、委員關谷貞三郎は現代美術館建設の必要を説いて政府の努力を希望する意見を述べ之に對する政府の所見を質問した。之に對し政府委員河原文部次官は至極同感なる旨を述べ文部省が能ふ限り盡力する考であるとの意見を答辯した。

名が就任した。

在野洋畫五團體懇話會結成

在野洋

畫主要團體の間に聯絡機關の必要が認められ、二月二十八日夜二科會の東郷、鍋井、獨立美術協會の中山、伊藤、國畫會の宮田、益田、新制作派協會の猪熊、佐藤、三田、春陽會の木村、足立の各會員が夫々の團體を代表して銀座モナミに會合協議を重ねた結果、在野洋畫五團體懇話會を結成し左の聲明書を發表した。

名が就任した。

名が就任した。

名が就任した。

名が就任した。

名が就任した。

名が就任した。

名が就任した。

名が就任した。

名が就任した。

大日美術院創立

結城素明、川崎小虎、青木大乗の三名を同人として新日本

畫團體大日美術院が創立され、二月二十八日夕東京會館で其の披露を行つた。在來の流派や系統を超越して新しい藝術運動を起し、歪められた日本主義を排撃して眞の日本精神に活きた新しい日本繪畫の創作とその研究發表を趣旨とする。眞の日本精神とは明朗な現實主義であり大きな抱擁力を持つもので、これは西洋風だからいけぬ、あれは傳統を無視してゐるなどと云ふ偏狹な考へ方のもではないと云ふのである。年一回東京及び大阪で公募展を開く豫定である。

三月

ワルシャワ日本版畫展

日本版畫協

會主催伊藤述史公使後援の下に三月三日からワルシャワで日本新古版畫展覽會が開催され、出品約二千點で好評を博した。

院友俱樂部結成

日本美術院々友の

集團として院友俱樂部が結成され、三月七日結成式が舉られた。

日本萬國博覧会案募集

建國

二千六百年記念日本萬國博覧會宣傳の爲同博覧會協會ではポスター圖案の懸賞募集をすることとなり三月十日其の規定を發表した。審査員は和田三造、宮下孝雄、杉浦非水、佐々木芳達等七名、賞金は一等一千圓一名、二等五百圓二名、三等二百圓三名である。

郵便切手圖案審査委員會設置

現行

郵便切手の大部分の圖案は大正二年の制定で時世に即しない所から逡信省では豫て其の改正準備中であつたが、二月二十三日の閣議で郵便切手圖案審査委員會設置が決定したので、原案を練り委員會を開いて其の實現を急ぐこととなつた。尙同委員會規程及び委員等の任命は左の如く三月十五日附官報紙上を以て發表された。

郵便切手圖案審査委員會規程
第一條 郵便切手圖案審査委員會ハ逡信大臣ノ監督ニ屬シ其ノ諮問ニ應ジテ郵便切手ノ圖案ニ關スル事項ヲ調査審議ス

第二條 委員會ハ會長一人及委員若干人ヲ以テ之ヲ組織ス
第三條 會長ハ逡信次官ヲ以テ之ニ充ツ委員ハ關係各官廳高等官及學識經驗アル者ノ中ヨリ逡信大臣之ヲ命シ又ハ囑託ス

(第四條以下略)
委員は三月十一日左の十八名が囑託又は任命された。

内閣印刷局技師矢野道也、帝皇博物館長官瀧口順次郎、内務技師田村剛、東京美術學校教授岡田三郎助、同結城貞松、同和田三造、東京高等工藝學校教授鎌田彌壽治、正木直彦、塚本靖、瀧精一、關係之助、郵務局長伊勢谷次郎、電務局長平澤要、經理局長進藤誠一、貯金局長武田泰郎、簡易保險局長小松茂、逡信書記官出原祐助、同安田丈助

現代美術館建設促進懇談會

二月結

成された現代美術館建設促進聯盟では、昭和九年三月結成の近代美術館建設期成會に依つて依頼された委員正木直彦、香坂昌康、赤間信義其の他芝田東京美術學校長等の出席を乞ひ、聯盟より委員等出席、三月二十二日東京會館で懇談會を開いた。運動の具體化に就き意見交換の結果、現下に於ける先づ第一の方法として紀元二千六百年記念の萬國博覧會に建設せらるべき美術館を永久的記念建造物として都心に建設することを要望することとし、其の意を請願書として多數作家連名の土博覽會當局に提出することとなつた。

落款請求の訴訟

前記竹内栖鳳に對

する落款請求訴訟は其の後示談成立し取下げとなつたが、同訴訟に介在した寺崎滿治が同じ花鳥畫連作中の一部を入手し此の問題の法律的解決を圖らんとして三月二十二日新に眞筆確認及び落款請求の訴訟を東京民事地方裁判所に提起した。

映畫「現代の日本」檢討

國際映畫

協會が豫て海外に對する日本紹介の目的を以て製作した映畫「現代の日本」十卷の中、日本固有の風俗を主題とした「風俗日本」(ピクチュアレスク・ジャパン)は藤田嗣治の監督に依り完成されたものであるが、試寫の結果、日本に對する正しき認識を缺くものとして國辱的映畫であるとの批評を受け、同協會も之を顧慮して公開を停止し輸出も不可能と見られるに至つた。美術批評家協會では同映畫批判の會合を開き協議した結果、同映畫は藝術的價值高く、行き詰る對外日本文化紹介に一新紀元を劃するもの、又日本本なるものの檢討に好個の資料を提供するものと認める等の理由から、右の如

き批評を不當とし、その措置を遺憾とし同映畫の再檢討並に公開を期する旨、三月二十七日同協會のコミュニケとして發表した。

四月

日本漆繪協會設立

片山佳吉、横井弘三、松岡正雄等八名の作家に依つて四

月一日日本漆繪協會が設立された。漆工の舊殻を脱し繪畫工藝に於ける新生面を開拓せんとする趣旨である。

畫家儀禮便乘を許さる

英國皇帝

戴冠式、觀禮式に參列の爲四月三日横須賀出港の儀禮禮足柄に、洋畫家中村研一が特に乗組を許可された。便乘を許された者は其の他に通信記者、撮影技師、演藝家等都合五名である。

「國民美術」創刊

美術雜誌國民美術

が四月五日國民社から創刊された。

明治天皇記念館壁畫畫題及畫家決定

大阪市婦人聯合會の寄附に依る明治天

皇記念館壁畫に就き、四月六日壁畫委員會に於て左の通り畫題及び畫家を決定した。同壁畫は明治元年以來數次に互る明治天皇大阪行幸を記念し御聖德を奉頌せんが爲、同館陳列室に掲げられる豫定である。

日本畫

- 一、明治元年天保山海軍觀覽之圖 北野 以俛
- 二、明治五年遣俄參戰御之圖 川上 拙以
- 三、明治十年難波御堂に於ける學 小川 翠村
- 四、明治十年軍事病院臨御之圖 樋口富藏呂

五、明治二十三年皇后宮錦繡堂臨御之圖 生田 花朝

洋 畫

一、明治元年大阪行幸之圖 赤松 麟作
二、明治二十年偕行社行在所著御之圖 國枝 金三

三、明治三十一年陸軍特別大演習 鍋井 克之

四、明治三十六年第五回勸業博覽會御舉式之圖 新井 完

五、明治三十六年築港觀覽之圖 林 重義

林重義獨立美術協會脫退 獨立美術協會々員で其の創立者の一人林重義は、四月十三日同會を脱退した。

明治神宮奉贊會解散式 大正四年十月創立以來明治神宮外苑の諸造營完成に不朽の功を遂げた明治神宮奉贊會は、四月十九日午後二時半閑院總裁宮殿下の台臨を仰ぎ、憲法記念館に於て盛大な解散式を舉行した。

聖德記念繪畫館行幸啓 天皇皇后兩陛下には四月二十日午前九時宮城御出門明治神宮に行幸啓御參拜あらせられた後外苑の聖德記念繪畫館に御立寄り遊ばされ明治天皇の御休徳を偲ばせられた。兩陛下共繪畫館への行幸啓は今回が御初めてで、河原田内相、徳川家達公、阪谷芳郎男等舊奉贊會關係者、今井繪畫館長等の奉迎を受けさせられ、便殿に入御、御先着の舊奉贊會總裁閑院宮殿下に御對面あらせられ、更に諸員に賜謁の後、有馬明治神宮宮司の御案内で約一時間に互り陳列の繪畫を御巡覽遊ばされ、十一時二十五分諸員奉送裡に同館御發宮城へ還幸

啓あらせられた。

映畫「現代の日本」批判會 前記日本紹介映畫「現代の日本」輸出の是非を問題とした美術批評家協會では四月十四日文藝、美術、映畫等の關係者を招いて試寫會を開いたが、更に同二十三日午後築地小劇場で公開の試寫並に批判の會を催し、國辱か否かに關し來會者一般の意見を記名投票に求めた。其の結果は支持するもの七〇票に對し否とするもの三二票で、國辱に非ずとする意見が勝つた。

佐分賞授賞 昨年佐分賞を記念して制定された佐分賞の第一回授賞者は、四月十三日夜銓衡委員會で人選の結果、國畫會々員青山義雄と決定、同二十三日夜赤坂幸樂で關係者出席の下に授賞式を行ひ兼て佐分眞の追悼會を催した。

木、漆、金工關係技術官會議 商工省主催に依る木、漆、金工關係技術官會議は四月二十二日より四日間名古屋市日本陶磁器工業組合聯合會會館に於て開催され、參加者は商工省側西川工業課長外十一名、地方技術官七十八名であつた。

國畫會組織改正 國畫會では四月二十四日午後東京府美術館に總會を開き、從來會員、會友に分けてゐた區別を撤廢し一様に同人とすることに決定した。尙新同人推薦及び本年度展覽會授賞を決定發表した。

昭和洋畫獎勵實授賞式 財團法人昭和洋畫獎勵會本年度受賞者は、春陽會々友森田勝及び昨年文展出品「巖」で選奨

された會員辰雄の二名と決定、四月二十七日午後五時から東京會館で同賞創設者米山梅吉外委員等參列の下に授賞式が行はれた。

文化勳章授與 二月十一日制定された文化勳章最初の拜受者は別記九名と決定、四月二十六日賞勳局より發表され、同二十八日賞勳局總裁室で其の傳達式が行はれた。美術家として此の光榮に浴した者は竹内栖鳳、横山大觀、岡田三郎助、藤島武二の四名である。(一三二頁參照)

五 月

滿洲國美術展 滿洲國皇帝の御訪日記念事業として、滿日文化協會主催、滿洲國文教部後援で、訪日宣詔記念第一回美術展覽會が五月二日から同八日迄新京で開かれ、我が國からは松林桂月、藤島武二、安井曾太郎の三名が審査を依頼されて渡滿した。

オリンピック・ポスター及マーク懸賞募集 オリンピック總務委員會宣傳部では五月五日關係者出席會合を開き、東京大會海外宣傳用ポスター、徽章として用ふる五輪マークの意匠等に就き協議の結果一般から圖案を懸賞募集することになり、審査を體育藝術協會に委嘱、賞金等を左の如くすることに決定した。

ポスター一等一千圓一名、二等三百圓二名、三等二百圓三名、マーク一等三百圓一名、佳作五十圓三名、締切六月末日

「回顧七十年」出版記念會 正木直

彦は此の程著書「回顧七十年」を學校美術協會から出版したが、有志の發起に依り五月十日夜上野精養軒で其の出版記念會が催され、出席者約二百五十名で盛會であつた。

田能村直入三十周年追善會 田能村直入逝いて三十周年に當るので、五月十五、十六の兩日京都若王寺の畫神堂で追善會を修行、其の他追善の催あり、又恩賜京都博物館では十五日から三十一日迄遺作展覽會を開いた。

春泥社結成 關西に於ける女流日本畫家、梶原緋佐子、三谷十糸子、生田花朝、木谷千種等十名に依つて新に春泥社が結成された。

朝鮮畫寶藝術院創立 津田信夫、西澤笛歌、鮮銀重役大塚源二郎等を顧問とし、松田黎光、宇野光惠其他を役員として朝鮮畫寶藝術院が創立された。朝鮮に於ける人形の發達を圖り年一回展覽會開催の豫定。

名古屋汎太平洋平和博覽會 三月十五日から五月三十一日迄名古屋市主催の下に、同市臨港地帯十五萬坪に名古屋汎太平洋平和博覽會が開催された。出品物は産業、交通、教育、科學、歴史、國防、資材、電氣、機械、土木、建築、社會、衛生、體育、觀光、美術、工藝等に關する凡有る部門を含み、本邦領土、委任統治地、租借地、並に太平洋沿岸諸國、其の他同市と密接な關係ある諸國を出品區域とし、參加國は三十二に達した。直接

經費三百萬圓、陳列館二十六、外國特設館七、內國特設館二十二、附屬館四、特設物及び附帶施設十五等で、建築は特設館を除き同市建築課の設計監督になる。

（日本建築士）に據る。美術館に關しては（三七頁參照）

巴里萬國博覽會參加

フランス政府がパリ市と協力して主催する「近代生活に於ける藝術及技術に關する一九三七年巴里萬國博覽會」に關し、昭和九年末同國政府より我が政府に對し參加方勸誘あり、商工當局に於て考究の上政府は五十四萬圓の豫算を以て參加を決定し、同一年六月其の旨を先方に回答、爾來商工省内に於て其の事務を主宰し準備を進めた。一方民間側としては日本商工會議所日本産業協會、國際文化振興會の諸團體を中心として巴里萬國博覽會協會を設立政府援助の下に同博覽會本邦參加出品に關する事務の處理に當つた。

同博覽會はパリ市中セーヌ河畔約二十四萬坪を主會場とし、佛國政府支出金及パリ市分擔金十億五千萬法鎊に寄附金一億法の豫算を以て計畫され、參加國四十二箇國、世界の主要國を殆ど網羅し、各國は特設館を建設、自國文化と國力の宣傳に努めた。會期は四月より六箇月間の豫定であつたが、同國に於ける勞働運動等の爲遲延し、五月二十四日未完成的の儘開場式を行ひ、十一月二十五日閉場式を行つた。日本館の開館は六月十八日であつた。

今回の萬國博覽會は單なるお祭騒ぎ或は見本市の如きものとは全く趣旨を異にし、其の名稱に示す如く「近代生活に採り入れられた藝術と科學」或は「工藝と機械力、美と實用、進歩と傳統の調和」等を主題とし、模倣因襲を排して藝術的斬新性を有する出品を目的としたもので本邦參同方針も此の趣旨に基き、約三、五〇〇平方メートルの敷地に日本趣味を採り入れた現代様式二階建の日本館（有蓋建築面積延一、〇七六平方メートル、建築費約二十五萬圓、設計監督坂倉準三）を建設、出品は館内を左の四部に分けて陳列することにした。

一、家庭生活部（應接室、婦人室、喫茶室）

二、商店部（布帛類、食器類、工藝品類）

三、科學部（新發明、考案等、なるべく實演操作を示す）

四、文化宣傳部（文化宣傳と觀光宣傳を含み、産業、文化の狀況と風光の紹介に努む）

出品に就ては從來の如き一般勸誘を廢し、建物、出品物、陳列方法に一貫した綜合計畫を保つ爲、當局に於て指定製作又は指定出品の方法を取つた。出品者は三府二十縣に互り二百名、出品點數は約千四百點、其の大部分は二月十四日横濱出帆の榛名丸で發送した。又本邦參同事務處理の爲政府より商工書記官菅波稱事同技師池部宗薫の二名並に協會側より三

名の係員を派遣した。

尙發送に先だち新な試みとして、一月二十一日より同二十七日迄日本橋高島屋で出品物國內展示會を開いた。（二頁參照）

六月

内閣更迭 内閣總辭職の爲後繼近衛内閣が六月四日成立、安井英二が文部大臣に任ぜられた。

京都青年美術家クラブ組織 京都に於ける日本畫、洋畫、彫刻、工藝の諸部門を含む青年美術家に依り、親睦團體京都青年美術家クラブが組織され、六月五日夜京都ホテル北館電氣クラブで發會式を舉げた。

文部省人事異動 文部次官河原春作は六月五日辭職した爲後任として専門學務局長伊東延吉が次官に任ぜられ、同時に専門學務局長事務取扱を命ぜられた。生爽會組織 京都日本畫壇の青年作家二十七名が新團體生爽會を組織し、西山翠嶂、西村五雲、堂本印象、中村大三郎、菊池英月を賛助員として、六月十九日から東京三越で第一回展を開くこととなつた。

國民藝術研究所創立 川路柳虹を主事とし、田邊孝次及び齋藤佳三を理事として國民藝術研究所が創設された。美術を中心とし國民藝術一般の綜合的研究を目的とするもので、研究者として所員を置き、研究發表等に關し諸種の事業を行

ふ豫定である。

海洋美術會發會 去る五月二十七日海軍記念日を中心に日本橋三越で海洋美術展が開かれたが、同展覽會の世話人石井柏亭、小林萬吾等洋畫家六名と海軍省軍事普及部、海軍協會側の關係者が六月十一日夜雨月莊に會合の席上、海事思想普及を目的とし洋畫家を會員とする海洋美術會發會を決定した。

帝國藝術院設置報道さる 文部省では美術界紛争の禍根を絶つ爲展覽會を帝國美術院と切離して文部省主催とし、帝國美術院は一旦解消して、美術の外、文學、音樂、其の他の藝術全般に互る獎勵機關を設置すべく具體案作製中なる旨六月十五日の各新聞に報道された。

文展開催決定 文部省では昨年臨時的に文展を開いたが愈々之を永續的に實施することとなり、昨年の規定に改正を加へて今秋より第一回として開く方針で六月十五日其の大綱を決定した。

ベルリン大會場模型寄贈 ドイツの第十一回オリンピック組織委員會から日本的大會組織委員會宛に、縱五・五米、横二・五米に及ぶ精巧なるベルリン大會競技場模型が寄贈され、六月十七日帝國ホテルでデイルクセン獨逸大使、徳川組織委員會々長其の他關係者列席贈呈式が行はれた。

菊池容齋六十年祭 菊池容齋の六十年祭が菊池祥郎、結城素明其他の發企に依り六月十六日執行された。當日午前、

下谷區谷中の墓地に於て墓前祭を行ひ、午後更に九段能樂堂に於て靖國神社宮司加茂百樹を齋主として、美術界其他關係者等多數列席の下に嚴肅な祭典を舉行した。尙當夜は結城素明の容齋に關するラヂオ放送があり、十八日より四日間東京美術學校に於て遺墨物展が開催された。

帝國藝術院設置

文部省では帝國藝術院に代へて帝國藝術院の創設を企圖し豫て案を練りつゝあつたが、六月十七日成案を見るに至つたので同十八日の閣議に官制案を上程可決され、直ちに御裁可の手續が取られると共に、官制要綱並びに其の趣旨に關する安井文相談を發表した。(一三一頁參照)

帝國藝術院組織經過

帝國藝術院官

制の閣議決定と共に文部省では、豫定の人選に基き會員任命の内交渉を開始したが、美術部門に於ては新官制の制定と共に帝國藝術院は廢止され、其の院長及び會員は其の儘帝國藝術院長及び會員に任命されることとなる爲、昨年六月平生文相の態度に慚らず辭表を提出した儘現在に及んでる十數名の帝國藝術院會員の中には、今次の組織に疑問を抱いて辭退の意を表した者が多かつた。文部當局では伊東次官初め日本美術院側其の他の辭退會員等と懇談を重ね意を促す所あり、二十一日細川護立侯は横山大觀、和田英作、及び梅原龍三郎と會見した上文部當局との間に斡旋し、文部省では同夜

別記の如き聲明書を發表、一方辭意を表した會員等も過去の行掛りを棄てて参加することとなり、新組織の人選決定を見るに至つた。(一三二頁參照)

帝國藝術院官制及會員發令

帝國藝

術院官制及び會員の任命は六月二十四日官報を以て公布されたが、之に先だつて二十三日午前十一時文部省から發表された。新會員は文藝十六名、音樂四名、能樂二名、建築二名、書道二名、又官制附則に依つて帝國藝術院長は帝國藝術院長に、帝國美術院會員四十六名は帝國藝術院會員に各辭令を用ひずして任命された。會員數總計は七十二名である。(一三三頁參照)

東睦會結成

豫て東京美術學校出身

日本畫家同志の間で月次懇話會を催してゐるが、邦畫境進展に寄與する目的から新團體東睦會を結成した。會員は岩田正己、服部有恆等二十一名である。

美術行政顧問委囑

文部省では美術

行政に關して相談を掛ける爲顧問機關を設置することとなり、清水帝國藝術院長の外に、細川護立侯、松浦鎮次郎、岡部長景子、正木直彦の四名を六月二十五日附で委囑した。

大分縣美術協會創立

大分縣下美術

家及び愛好者を會員とし、同縣美術界の向上發展並に親睦を圖る目的を以て大分縣美術協會が結成され、六月二十五日其の創立發會式が舉げられた。會長に大分高等商業學校校長石丸優三を推し、毎年展

覽會開催の豫定である。

川端龍子帝國藝術院會員辭退

昨年

六月帝國美術院會員の辭表を提出した川端龍子は、滿洲國旅行中の處六月二十七日夜歸京、帝國藝術院會員の任命を受けぬ意志を表明し、已に發會後である爲早速辭表を提出した。

オリンピック藝術委員會設立

オリ

ンピック大會藝術競技参加に關しては從來大日本體育藝術協會が當つてゐるが、東京大會の準備に就ては當然組織委員會に統合する必要がある爲具體案考究の結果、競技部内の専門委員會として藝術委員會を設置することとなり、六月二十八日組織委員會總務委員會に於て決定した。委員の氏名は左の通りである。

委員長 男爵森村市左衛門、副委員長 澤澤雄 委員 吉村忠夫、中村岳陵、矢澤弦月、伊原宇三郎、伊藤康、碓伊之助、池田勇八、高村豐周、成澤金兵衛、土浦龜城、小林政一、小森宗太郎、澤崎定之、諸井三郎、中島健藏、深田久彌、宮本昌常

文展要項審議

帝國藝術院成立後文

部當局では之と切離して文部省美術展覽會開催の準備を進め、昨年度文展の缺陷を改め恒久的な制度を樹立すべく考究中であつたが、六月二十九日正午より文相

官舎に細川護立侯、岡部長景子、松浦鎮次郎、正木直彦、清水帝國藝術院長の五顧問を招き、文部省からは安井文相、伊東次官、菊池専門學務局長事務取扱代理、本田學藝課長、有光學務課長等出席、當局の原案を提示して各顧問の意見を求め

展覽會要項を審議決定して午後四時散會同時に決定事項を發表した。

七月

文展要綱第二回審議

文部當局では

六月二十九日の相談會に引續き、文展に關して殘された無鑑査の範圍、鑑査の方法、審査員選任等の問題を審議すべく七月二日午前十時より正午迄文相官舎に細川侯、岡部子、松浦、正木、清水帝國藝術院長の五顧問を招き、伊東次官、菊池局長事務取扱代理、本田、有光兩課長等出席協議を重ねた。

シアトルへ日本産數雜型寄贈

シア

トルのワシントン大學附屬博物館では各國住宅の原寸雜型を蒐集してゐるが、同地岡本總領事を通じ日本住宅雜型の寄贈を乞うて來たので、國際文化振興會の手に依つて床の間を中心として連棚、書院等附屬した雜型を作製し、七月上旬發送同館に寄贈した。

第一美術協會彫刻部解消

第一美術

協會彫刻部唯一の會員吉田久繼が退會を申出でた爲自然同會彫刻部は七月五日解消された。

オリンピック・ポスター及マーク審査

懸賞募集したオリ

ンピック東京大會宣傳用ポスター及びマークの圖案審査は七月五日大日本體育藝術協會及び組織委員會宣傳部の審査員に依つて滿鐵ビル内で行はれたが、ポスターは優秀作品がなかつたとの理由で九月二十日締切再募集

を行ふこととなり、マークは應募一萬二千餘點の中一、佳作三個の當選を決定、一等作品には組織委員會で修正を加へ他の三個と共に公式に使用することとし、それらの圖案を九日發表した。一等當選は大坂の廣本大治である。

帝國藝術院會員招待會

帝國藝術院成立後の初會合として、七月九日夜丸之内東京會館で文部大臣の招待に依る晚餐會が開かれ、清水院長以下五十五會員出席、主人側からは安井文相、内ヶ崎、伊東兩次官以下關係諸官出席、文相の挨拶に次で院長の謝辭があり、歡談を盡して午後九時散會した。

洋畫家報國運動

鈴木千久馬の主宰する四元莊では岡田三郎助賛同の下に同研究所内に全美術家報國運動本部を設け飛行機納納の目的で繪具の空チヌーブを集めること、寄附繪畫を以て展覽會を開き其の賣上を獻金することの運動を起すこととなり、七月十八日洋畫家一般に勸誘狀を發した。

オリンピック東京大會場決定

昭和十五年に開催さるべきオリンピック東京大會の主競技場建設に關しては、明治神宮外苑競技場改造、千駄ヶ谷擴張、郊外移行等の諸案が研究され、半歳に互つて決定を見るに至らず幾多の困難を重ねて來たが、組織委員會の希望する外苑改造に就ては、豫て反對意見を持してゐた内務當局も六月二十一日に至り條件を提示して容認する意向を示した。組織委員會

は同二十二日常務委員會を開き右條件を承認の上許可願を提出、内務省の諮問に應へて之を審議すべく七月七日外苑管理評議委員會が開かれたが、更に若干の追加條件を附して承認することとなり、東京大會主競技場の外苑建設は總ての手續を経て七月十九日正式に決定された。改造に關する條件は主要左の如くである。

一、外苑競技場擴張に要すべき一切の經費は明治神宮に奉納すること、物價騰貴等の爲豫算超過の場合には更に追加奉納すること、一、スタンド總坪は七千五百坪以内、假設スタンドを含み高さ七十尺以内、大會終了後は一部を取拂ふこと、一、工事の設計並に施工は外苑管理署若しくは内務省之を行ふこと、一、競技場の管理、使用に就ては絕對に條件を附せざること、一、東京大會延期若しくは中止の場合に於ては外苑競技場として適當と認むる工事は完了すること、一、神社境内に於て行ふを不適當と認むる行為並に設備は之をなさざること、其他

文部省人事異動

文部省専門學務局長は專任を缺いてゐた所、社會教育局長男爵山川健が七月二十一日附任命された。

日本畫會獻畫運動

日本畫會では七月二十三日幹事會を開き協議の結果、同會顧問會員等一點宛の出品を集め、展覽會等の方法に依り賣上を國防獻金とすることとした。

第二部會申入れ

文部當局では新文展に就き審査員選定等の問題を考究其の決定を急ぎつゝあるが、審査員に帝國藝術院會員を加へることも考へられてゐる

ので、前年來之に反對を主張して來た舊帝展系の第二部會では七月二十二日夕丸之内マールに委員會を開催し、協議の結果同會としては飽く迄藝術院會員の鑑査に反對することとし、翌二十三日午後小林萬吾、辻永の兩委員代表として文部省本田學藝課長に面會、其の意向を傳へ尙過日發表された要綱中無鑑査出品寸法制限にも反對の旨を述べて當局の善處を要望した。

日本美術院獻金

日本美術院では七月二十三日同院基本金中より金七千圓を立替支出して東朝社に託し、軍用機獻納資金中に寄附した。立替金は十月を期し同人一同から作品を提供之を填補することとした。

會宮一念獨立脫退

獨立美術協會會員會宮一念は七月二十四日同會を退會した。

文展審査員及無鑑査決定

文部省では今秋開催豫定の文展審査員の人選を了し、七月二十七日午後審査員五十六名（第一部十五名、第二部十五名、第三部十三名、第四部十三名）の氏名並に審査員長及び各部主任の氏名を發表、又無鑑査資格者は本年度に限り昭和十一年度文展に招待を受けた者並に同展に文部大臣賞を受けた者二名として之を發表した。（本欄一三二頁、便覽二〇頁参照）

美術調查會計畫さる

文部省では本年文展開催に關し細川侯爵等五名の顧問に意見を徴し之に基いて其の大綱を決定

したが、尙無鑑査制度等將來に残された問題もあり、美術行政に就ては今後益々整備を必要とするもの多き爲、各方面の權威者を集め美術に關する審議機關として美術調查會を新設すべく計畫中なる旨七月二十七日發表された。

南薰造審査員辭退

本年度文展審査員第二部主任に推された南薰造は七月二十九日書面を以て審査員辭退を申出た。

第二部會協議

第二部會では會員中文展審査員の諸否を決する爲七月二十九日夜マールで總會を催し參集者等協議を行つたが、出席者が全會員の半數に充たなかつた爲八月二日改めて總會を開くこととした。

安井會太郎審査員辭退

文展審査員に選ばれた安井會太郎は之に對する態度決定を保留してゐたが、七月三十日夜所屬一水會々員協議の結果に基き、審査員辭退を申出た。

伊藤藤獨立展脫退

獨立美術協會々員伊藤藤は七月三十日同會を脱會した。

八月

世界教育會議開催

世界聯合教育會主催第七回世界教育會議が八月二日より七日迄東京帝大安田講堂に於て開催され各國の教育關係代表者一千餘名、日本側代表者二千名出席、會議の外に我が國文化藝術等を認識させる爲種々の招待、參觀等が行はれた。

第二部會總會

第二部會總會は八月

二日夜丸之内マールで開催、協議の結果同會員中文展審査員の諸否は個人の自由とすることを決定した。従つて同會に屬する伊原宇三郎、小林萬吾、鈴木千久馬、田邊至、中野和高、辻永、中村研一の七名は審査員の任命を受けることとなつた。

里見勝藏獨立脫退

獨立美術協會會員里見勝藏は八月六日同會を脱退した。

第三部會小倉右一郎と絶縁

反官展を標榜する舊帝展系彫刻團體第三部會では八月十日同會々員小倉右一郎と今後絶縁する旨を聲明した。彼が本年度文展審査員に選ばれて之を受諾した爲である。

ラスキン資料蒐集家破産

ジョン・ラスキンの研究家として、且つラスキンに關する資料蒐集家として聞えた御木本隆三は、ラスキン文庫、喫茶店ラスキン等の事業經營から財政上破綻を來し、莫大な負債の爲終に八月十日破産の宣告を受け、一切の蒐集品は家財と共に管財人の手に移されることとなつた。

日本萬國博建國記念館設計懸賞募集

皇紀二千六百年を記念する日本萬國博覽會の會場計畫は同事務局工營部に於て着々進められてゐるが、其の會場中央に聳立すべき建國記念館の設計は、其の圖案を一般から懸賞募集することに八月十一日會場計畫委員會に於て決定し、其の募集規程を發表した。紀元二千六百年を記念すべき永久建造物とし、日本精神を象徵した壯嚴雄大なもの、建築費約百

五十萬圓、内部には便殿、貴賓室、集會ホール、食堂等の外繪畫陳列室を設ける豫定とする。賞金は一等一名三千圓、二等二名各千五百圓、三等四名各八百圓等で締切は本年十一月一日である。

工藝指導所擴充

商工省では工藝指導所を擴大、本所を仙臺より東京に移し

新に關西に支所を置き、全國に對し工藝品の試験研究、原材料の品質鑑定、製作技術の傳習講話、新製品の意匠圖案配布等に當ることとし、新に技師二名、技手二名を増員、新設事務の爲準備に着手することとなつた。而も從來其の仕事が木工、金工等に限られてゐたものを廣く工藝品一般に及ぼし、組織の擴充と相俟つて活潑な活動を起すこととなつた。右に依る工藝指導所官制改正の勅令は八月十三日官報を以て公布された。尙東京、關西共今年中に敷地を選定、來年度より新廳舍建設に着手の豫定である。

京都日本畫家獻畫運動

京都在住の日本畫家有志は石崎光瑤、登内徹笑、堂本印象、金島桂華、中村大三郎、宇田萩

郎、山口華楊、案本一洋、福田平八郎の九名を發起人として「國防義獻金京都日本畫家有志會」を組織、約八十名の作家から一點宛作品を集めて之を金一萬圓に換へ第十六師團を通じて陸軍に獻納した。

文展審査員決定

文部當局では曩に決定發表した本年度文展審査員の人選に

基き各人に受諾を交渉中であつたが、第二部では金山平三、牧野虎雄、南薰造、

安井曾太郎の四名が辭退した爲、改めて帝國藝術院會員中澤弘光を審査主任に推し八月十六日其の受諾を得、他の部には問題なく全審査員を決定した。

京都美術家クラブ創立

京都に於ける美術家の相互親睦の機關として京都美術家クラブが結成され、八月十九日夕朝

日ビル内アラスカで發會式が行はれた。各部内に於ける主要作家を網羅し、會員約八十名である。

二科會名譽會員辭退

石井柏亭、山下新太郎、安井曾太郎、有島生馬の四名は帝國美術院改組當時二科會名譽會員に

推されたが、此の程之を辭退した。

九月

獨立美術協會聲明

獨立美術協會では先頃から林重義、曾宮一念、伊藤廉、里見勝藏、妹尾正彦、田中行一の六會員が脫退し、其の動搖が危まれてゐたが九月二日左の聲明書を發表して會の態度を明かにした。

「今回本協會に於いて、數人の脫退者を生じたるは誠に遺憾とすれど吾等は飽くまで一致團結、創立當初の精神に基き總ゆる繪畫上の主義思潮の嚴正批判の上に、大觀的態度を持ち我國美術興隆の爲、獻身努力するに毫も變りたることなし。こゝに敢へて吾等の決意を聲明す。」

「美術時代」創刊

本年四月創刊の美術雜誌「國民美術」主幹石田幸太郎は六

月同誌と絶縁し、九月五日美術雜誌「美術時代」を創刊した。

海軍從軍畫家

支那事變擴大と共に從軍を志望する畫家が増し、洋畫家小早川篤四郎、吉原義、岩倉具方の三名は海軍に從軍を許されて九月上旬上海方面に出發した。

文展規則制定

文部省では新な機構になる文部省美術展覽會規則を制定し九月十一日官報を以て告示、併せて審査員委嘱を發表した。(一三三頁參照)

日本美術院々友十二名脫退

日本美術院々友茨木彬風、保尊良朝、吉田澄舟、田中案山子、内田青薫、小林三季、小林巢居、鬼原素俊、芝垣興生、森山夢笑、鈴木三朝、菊池公明の十二名は九月十七日左の聲明書及び宣言を發して、日本美術院を脫退すると共に新興美術院を結成した。春秋に公募展及び同人展を開く豫定である。

聲明書

吾等今日感ずるところあり日本美術院を去ることとなりました。その理由とするところは藝術上の批判を日本美術院の責任にかけず各自の責任となし精進努力以て畫徒としての完成をみたいからであります。吾等は日本美術院の院友として永らく切なる指導を賜はり其の恩恵の深きこと慈父の如く克く凡才非力の吾等を育み院の一員として今日まで鞭撻激勵を賜はりましたことはひとしく先輩諸先生に感謝するところでありませう。

宣言

茲に吾等結束を固め新興美術院を起し自由拘束なき新興清新なる藝術を擡達し以て美術界に臨む所以であります。

昭和十二年九月

新興美術院同人(十二名連名)

日本文化中央聯盟結成

皇紀二千六

百年を記念して肇國の理想に則り、我が國文化の綜合進展と其の中外宣揚等を目的とする官民合同の中央的機關を設置すべく、馬場鎮一、岡部長景子、小山松吉

松本學、香坂昌康等二十四名の發案に依り、種々具體案の研究を重ねられてゐたが、政府に於て補助金十五萬圓の支出も決定した爲、組織、事業等に關し文部省とも緊密に聯絡の上八月八日麹町區内幸町大阪ビルディングに設立發起人會を開催、寄附行爲、事業要綱、役員等を議決聯盟の設立を決定し、九月十七日財團法人の設立許可を得て正式に結成された。

會長島津忠重公、副會長櫻井鏡二、理事長小山松吉、常務理事伊東延吉、伊賀良一、井上庚二郎、松本學等の役員を置き日本文化の全般に亘り、研究、宣揚、獎勵等に關する頗る廣汎、大規模な事業が計畫されてゐる。

第二部會解散

昭和十年七月帝國美術院改組に反對し、舊帝展第二部無鑑査の作家に依つて結成された第二部會は、九月二十日丸之内マールに會員總會を開いて協議の結果、既に同會の使命を畢りたるものとし其の解散を決議した。

明朗美術聯盟分裂

落合朗風の歿後

明朗美術聯盟同人間に意見の相違を生じ荒井草雨、井上陵華等の同人盟友七名は九月二十二日左の聲明書を發して同聯盟を脱退した。

「聲明書」

現今の明朗美術聯盟内の情勢に於て吾等は自己の藝術主張に經營に付相容れざるものあり同人として其職責を遂行し能はず故落合朗風氏の盟約に對し自責の念に堪へず茲に脱退を聲明す。

オリンピック・ポスター審査

オリ

ンピック東京大會のポスターは豫て懸賞募集中であつたが、九月二十四日滿鐵ビル内で審査を行ひ應募約二千點の中一等等より三等迄の當選を左の如く決定した。一等京都黒田典夫、二等東京山名文夫、同赤羽喜一、三等京都加藤清澄、東京脇田和、大阪荒川寅一。

十月

新國畫協會創立

明朗美術聯盟を脱

退した十名の作家は十月一日新團體新國畫協會を結成、左の宣言を發表した。年一回公募展開催の豫定である。

「宣言」

吾等は新國畫協會を組織し日本精神の本義に基き新興日本繪畫の確立を期す。

從軍畫家戰死

從軍畫家岩倉具方は

十月十四日上海方面戰線に於て敵砲の爲戰死を遂げた。

パリ萬國博日本館設計者授賞

パリ

萬國博覽會日本館設計者坂倉準三に對し同博覽會當局は十月二十二日建築特別賞を授與した。

文部大臣更迭

安井文相辭職の爲、

侯爵木戸幸一が後任として十月二十二日文部大臣に親任された。

海軍從軍畫家

洋畫家古島松之助、

三國久、高橋亮、清水登之は何れも海軍に從軍を許され十月中旬或は下旬上海方面に向つた。

國民精神總動員ポスター製作

文部

省では國民精神總動員運動の一として數種のポスターを製作したが、其の圖案は竹内栖鳳、横山大觀も執筆寄贈し、其の他東京美術學校、東京高等工藝學校に依頼して作製、二十餘萬枚を印刷の上全國に配布した。

春の京都大博覽會延期

京都市では

市制五十年記念として、明年三月大規模な博覽會を開催すべく豫てより諸般の準備を進めてゐたが、時局に鑑みて一箇年延期する事に決し、十月三十日正式に發表した。

十一月

日本新興南畫院結成

京都及大阪の

南畫家二十餘名に依つて新團體日本新興南畫院が結成された。

東京美術俱樂部新築落成

豫て舊地

所に新築中であつた東京美術俱樂部が竣工し十一月三日落成祝賀の會を開いた。

ワグネル博士記念碑除幕

明治初年

來朝して我が國藝術界に偉大な功績を遺したワグネル博士(Dr. Gottfried Wagner)を記念する爲同博士記念事業會が組織され、東京工業大學庭内に記念碑建設中であつたが、十一月八日午後二時から多數來賓出席の下に盛大な除幕式が行はれた。尙同日午前青山墓地で墓前祭、

夜は丸之内電氣俱樂部で記念講演會が催された。

春陽會傷病兵慰問

春陽會々員及會

友等は作品三十七點を集め、陸軍病院に收容中の傷病兵慰問に寄贈した。

稻香畫塾の獻畫

名古屋森村宜稻の

稻香畫塾では同地陸軍病院に在る傷病兵慰問の爲、宜稻初め門下生一同が各々作品一點宛總數百十五點を同病院に寄贈、十一月十一日之を了した。

日本萬國博覽會記念館設計當選者發表

豫て設計圖案懸賞募集中であつたが

應募圖案一〇八通に就き十一月十一、十二兩日審査の結果左の通り當選者が發表された。

一等高梨勝重、二等一席同上、同二席清國宏彰、三等一席佐藤重夫、同二席片山節義、同三席永井孝直、同四席阿部庄吉、選外佳作六名

年賀電報紙圖案作製

逓信省では來

春の年賀慶祝電報用紙の圖案を左記三作家に依嘱作製した。杉浦非水のは富士に双鶴、石井柏亭のは瑞雲に燕と松竹月桂樹、松岡映丘のは蓬萊山に鶴と龜とを配したもので、之等は年賀のみならず一般慶祝にも用ひる。又別に年賀用として逓信博物館で勅題干支等に因むもの三種を作つた。

青甲社慰問畫寄贈

西山翠嶂畫塾青

甲社では翠嶂初め塾員七十三名の作品を取り揃へ陸軍傷病兵慰問の爲寄贈した。

奈良美術家聯盟獻畫

奈良美術家聯

盟では海軍戰傷兵慰問の爲十一月二十五

日會員作油繪七點を寄贈した。

海軍從軍畫家

洋畫家齋藤八十八、

中川紀元、住谷磐根、安東收一は海軍に従軍を許可され十一月中旬或は下旬、上海南京方面へ向つた。

陸軍從軍畫家

寺本忠雄、青山龍水

は陸軍從軍畫家として、十一月下旬北支又は中支へ派遣された。

十二月

小國民道場竣工

皇太子殿下御降誕

記念事業として東京府が麻布區盛岡町の高松宮御下賜の敷地に建設中であつた小國民道場は此の程竣工し、十二月一日開館式を舉行了。養正館本館と呼ばれる道場の階上は國史繪畫館とし、日本畫及び洋畫諸家の執筆になる國史畫七十七圖を掲げる。繪畫は未だ全部完成に至らなかつた。(一〇九頁參照)

空テューブ獻納

鈴木千久馬の主宰

する四元莊では美術家報國運動として繪具の空テューブを集めてゐたが、南京陷落を一段落として之を打ち切り、全國洋畫家百六十四名から集つた五十三貫餘の賣上總額五百五十餘圓を、十二月十一日陸軍省に獻納した。

黒田子爵記念美術獎勵委員會買上

同委員會では十一月十日委員等參集本年度買上作品として文展出品の清水良雄作「初秋」を選定し、其の手續を了した上十二月二十一日帝室博物館に寄贈した。

岡田三郎助、藤島武二御下命作品奉納

昭和三年聖上陛下が赤坂離宮より宮城へ遷御の御祝として皇太后陛下より御贈進遊ばさるる油繪の御下命を拜した岡田三郎助、藤島武二の兩作家は爾來苦心製作中であつたが漸く完成し、十二月二十六日大宮御所に奉納、同御所より直に宮城へ御贈進遊ばれた。(一一〇頁參照)

金使用規則發布

大藏省では金使用

規則を制定し、十二月二十八日省令第六十號を以て同日附官報で公布した。其の要點を記せば、金を用ひたる製品(金箔、金絲、金粉等を除く)で其の金の品位千分中三百七十六(九金)を超えるものは當分の内製造を禁ずる。但し工業用、醫療等必要已むを得ぬものは大藏大臣の許可を得て除外される。金又は金箔、金絲、金粉、金液は當分の内屏風、襖、額縁、其の他表裝用、天金、金文字等裝幀用、其の他廣告、印刷、標識等の用途に用ひることを禁ずる。但し之も大臣の許可に依り除外例が認められる。其の他金使用の製造業者に對する届け出等を規定したものである。

海軍從軍畫家

洋畫家小林喜代吉、

齋藤文人は海軍に従軍、夫々十二月上旬及び下旬上海南京方面或は北支方面へ向つた。

「物故作家及美術関係者」 ページ (126～130 ページ)

個人情報保護のため非公開

Pages of the Articles of the Deceased (pp.126-130)

Cut for protection of the personal information

美術行政

文化勳章令制定

政府は科學、藝術其の他文化の發達に關し功績顯著なる者を表彰すべく、文化勳章の制定に就き審議を進めつつあつたが、成案を得て御裁可を仰ぎ、二月十一日紀元の佳節を卜し勅令第九號を以て左の通り文化勳章令を公布した。

文化勳章令

文化勳章ハ文化ノ發達ニ關シ勳績卓絶ナル者ニ之ヲ賜フ

文化勳章製式

章 金橘花徑六・六種 花瓣白色盛上七寶、重廓間蕊金地濃藍色七寶、曲玉白色七寶、地赤色七寶
紐 金橘葉實 葉綠色七寶、實淡綠色七寶
環 金小形橢圓
綬 幅三・七種 織地淡紫色

文化勳章ハ綬ヲ以テ胸部中央ニ之ヲ佩ブ

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス
右に關し林首相ハ左の誼話を發表した。

「本日紀元の佳節にあたり新たに文化勳章制度の勅令が公布されました。文化勳章は科學、藝術など文化の發達に關しまして偉大なる貢獻をなしたものに賜りその勳績を實証せられかつまた文化の創造を御獎勵遊ばされる聖旨をもつて制定せられたる榮典でございます。有難い聖旨の程を拜察致し洵に恐懼に堪へない次第であります。文化の興隆は實に國運の消長にも大なる關係があるのであります。この方面の開發は一日も忽緒に付することが出来ません。

特に我が國には古來固有の精神歴史などにもとづく文化があるのであります。から時世の進歩に應じて一層その成果を發揚し内はもつて國運の伸張に資し外はもつて世界の文化に貢獻するところがなければならぬと思ひます。

世界各國における文化の實情から見ましても新勳章の設けられましたことは寔に時の宜に適ふものと察するのであります。我々は聖旨を奉體して文運の向上發展に努力を致しもつて聖恩の萬分の一にも應へ奉るやう心掛くべきであると存じます。

文化勳章授與

文化勳章最初の拜受者に關しては、關係各省からの内申に基き内閣賞勳局で慎重に銓衡中であつたが、四月二十六日人選を決定、御裁可を仰いだ上同日夕賞勳局より其の氏名を發表、同二十八日附を以て左の通り發令された。九名の中美術家として、岡田三郎助、藤島武二、竹内栖鳳、横山大觀の四名が此の光榮に浴したものである。

(各通)

正三位勳一等	長岡 半太郎
從三位勳二等	本多 光太郎
正三位勳二等	木村 榮
正四位勳二等	岡田 三郎助
從四位勳三等	藤島 武二
正五位勳四等	竹内 恆吉
正六位勳六等	佐々木 信綱
	幸田 成行
	横山 秀磨

授文化勳章

文化勳章傳達式は四月二十八日午前十一時から賞勳局總裁室で行はれ、渡満中の藤島武二を除く八名參列、文部省から河原次官、伊東専門學務局長、小笠原秘書課長參列し、下條賞勳局總裁の手に依つて順次勳章を頸に掛け續いて勳記が傳達され、前例のない特別な式に依つてなされた。

帝國藝術院創設

文部當局は、從來の帝國美術院が美術のみの機關であり、藝術の他の部門に關しては何等の施設が行はれてゐなかつた事實から、廣く藝術一般を含む帝國藝術院の設置を企圖し、豫てより其の具體案に就き考究を重ねてゐたが、六月十七日成案に到達、其の官制案は翌十八日の定例閣議に上程して可決され、即日大奏御裁可を仰ぐ手續が執られた。同時に文部省では其の官制全文を發表し又帝國藝術院新設の理由及其の使命等に就き、左の通り安井文相談を發表した。

「凡そ、一國藝術の發達は、その國文運の隆替と緊密なる關係を有し、國民の風尚と生活とに大なる影響を及ぼすものである。從來藝術の獎勵に關する政府の施設は、不充分であつて、唯帝國美術院の設置せらるゝあつて、久しく美術の發達に力を盡し貢獻する所大なるものがあつたのであるが、文藝・音樂其の他に就いては、未だ機關の設けらるるものなく、誠に遺憾なる状態にあつた。畏くも、皇室におかれられては、夙にわが國文運の向上に御意を留めさせられ、學術の獎勵、美術の發達等に關し有難き思召を拜し來つたのであるが、先般文化勳章を御制定あらせられ、汎く科學並に藝術に關し勳績卓絶せるものを顯彰せさせ給ふに至つたのであつて、宏大なる 敬慮の程まことに恐懼に堪へざる所である。茲に、政府は帝國藝術院の設置により、美術を始め藝術の諸分野に互つて識見閱歷卓越する者を會員に推し、その名譽を顯すと共に、藝術の發達に關する重要な事項の審議其の他の事に當らしめ、以て我が國藝術の發達に寄與する所あらんとする次第である。惟ふに、一國藝術の發達は、一面に於て廣く諸外國の藝術を輸入して、よく長を採り、豊富なる發展を圖るは最も必要とするところであるが而も他面に於てはよく獨自の精神と方法とを維持發展せしめ獨特の藝術の創造を圖ることは一日も怠るべからざる重要な點である。即ち模倣を戒め創造を昂むるの精神を以て朝野協力して我が國藝術の眞の發達の爲めに盡さんことを期する考へである。

新設帝國藝術院の官制は勅令第二百八十號として、六月二十四日官報を以て公布、同會員及び主事の任命は六

月二十四日附を以て發令された。(便覽一九頁參照)

官制の概要を記せば「帝國藝術院ハ文部大臣ノ管理ニ屬シ藝術ノ發達ヲ圖リ文化ノ向上ニ資スルヲ以テ目的トシ、其の事業として「藝術ニ關スル重要ノ事項ヲ審議」し、「藝術ノ發達ニ資スル爲必要ナル事業ヲ行フコトヲ得」るものとし、「藝術ニ關スル重要ノ事項ニ付文部大臣ニ建議スルコトヲ得」る旨を規定する。又「文部大臣ハ藝術ニ關スル重要ノ事項ニ付帝國藝術院ニ諮問スルコトヲ得」るのである。定員に關しては「院長一名及會員八十名以内」と定め、「院長及會員ハ藝術ニ關シ識見闊歷卓越スル者ノ中ヨリ」命ぜられる。其の他院長及び會員が「勅任官ノ待遇ヲ受ク」ることや主事及書記を置くこと等大體帝國藝術院官制に倣つたものである。

尙附則の規定に依り此の官制施行と同時に帝國藝術院官制は廢止され、現在の帝國藝術院長及び帝國藝術院會員は辭令を用ひずして夫々帝國藝術院長及び帝國藝術院會員を命ぜられることとなつた。

右に依り帝國藝術院長清水澄が院長を命ぜられ、同會員四十六名が會員を命ぜられた外、他の部門即ち文藝、詩歌、書道、建築、音樂、能樂等より二十六名の會員が銓衡の上奏請され、六月二十四日附を以て會員仰せ付けられ、都合院長一人及び會員七十二名を以て帝國藝術院の組織完了を見るに至つた。尙主事としては文部書記官本田弘人が任命された。便宜上各會員を其の専門別に依つて示せば左の通りである。

日本畫(十八人) 荒木十畝、鏑木清方、川合玉堂、川端龍子、川村曼舟、菊池英月、小村古徑、小室翠雲、竹内栖鳳、西村五雲、西山翠嶺、橋本關雪、前田青邨、松岡映丘、松林桂月、安田靉彦、結城素明、横山大觀

洋畫(十三人) 有島生馬、石井柏亭、梅原龍三郎、岡田三郎助、小杉放庵、中澤弘光、中村不折、藤島武

二、南薰造、安井曾太郎、山下新太郎、和田英作、和田三造

彫刻(九人) 朝倉文夫、北村西望、齋藤素巖、佐藤朝山、建昌大夢、内藤伸、平櫛田中、藤井浩祐、山崎朝雲

工藝(六人) 板谷波山、香取秀眞、清水六兵衛、清水編藏、津田信夫、富本憲吉

(以上舊帝國藝術院會員)

文藝(十六人) 幸田露伴、徳田秋聲、岡本綺堂、泉鏡

花、菊池寛、武者小路實篤、谷崎潤一郎、千葉胤明、井上通泰、佐々木信綱、齋藤茂吉、高濱虚子、河井

醉茗、國分青厓、三宅雪嶺、徳富蘇峰

音樂(四人) 幸田延子、橋本重、多忠龍、豐時義

能樂(二人) 梅若万三郎、寶生新

建築(二人) 伊東忠太、塚本靖

書道(二人) 比田井天來、尾上柴舟

尙從來帝國藝術院會員中には、昭和十年十二月辭表提出の小杉放庵の外、昨十一月十六名(内一名物故)の辭表提出者があり、今次の新官制に依り其の解決を見ずして其の儘帝國藝術院に参加する事に關しては種々疑問を抱き、辭退を表明した者もあつたが、内交渉を重ねた結果文部當局は六月二十一日夜左の聲明を發して當局の方針を明かにし、それ等の人々も過去の行き掛りを拂拭して任命を受けるに至つた。

「從來美術界が種々紛糾を重ねて來ましたことは文部當局としては誠に遺憾に存じてをります。今回の案は從來の度々の改組とは全く別個の考へを以て、全然新たな案として考案したものであつて、當局としては今後一切從來の行掛りを捨て、新しい心持を以て努力して行きたいと思ふ次第であります。」

たゞ當時旅行中であつた川端龍子は歸京後飽迄辭意を續さず、既に發令後であつた爲直ちに辭表を提出した。七月九日夜安井文相は東京會館に院長及び會員を招待

し帝國藝術院最初の會合を開いた

美術研究所官制改正

帝國藝術院の設置に伴ひ、從來帝國藝術院に附置されてゐた美術研究所の官制を改正し、文部大臣の直轄に屬する獨立機關とすると共に、所員及び助手の定員各一名の増員を行ひ、勅令第二百八十一號として六月二十四日附官報を以て公布した。

美術行政顧問委嘱

文部省では展覽會の問題其の他美術行政に關し意見を聽く爲、侯爵細川護立、松浦鎮次郎、子爵岡部長景、正木直彦の四名に六月二十五日附を以て美術に關する審議を委嘱した。

文部省美術展覽會設定

昨昭和十一年秋帝國藝術院展覽會が開催不能となつた爲、文部省は平生文相の試案に基き、臨時の形式で昭和十一年文部省美術展覽會規則を制定、招待展、鑑査展と區別した展覽會を開いたが、帝國藝術院の創設と共に帝國藝術院及び帝展の問題は自然消滅したので、新に政府主催展覽會の問題を確立する必要を生じた。世上官展を廢止、或は當分休止すべしとする意見も行はれてゐるが文部當局は展覽會の開催を必要と認め、帝國藝術院とは關係無く、文部省主催美術展覽會として開催し、毎年之を繼續すべく恆久的な機構を制定する方針を立て、其の具體案を決定する爲、六月二十九日、前記の通り委嘱した侯爵細川護立、松浦鎮次郎、子爵岡部長景、正木直彦の四名に帝國藝術院長清水澄を加へた五名を招き、安井文相、伊東次官以下關係官出席、當局の原案を示して隔意なき意見を求め審議を行ひ、審査員及び無鑑査等の問題を殘し、展覽會規定の要綱並に今秋開催すべき第一回

展覽會期日其の他を決定、直に發表した。

尙審査員に帝國藝術院會員を加ふべからずとする意見も行はれてゐるので、其の選任の範圍、本年度審査員の入選、無鑑査の範圍等に就き七月二日第二回の顧問會を開き審議の上、當局の案を練つたが、審査員は帝國藝術院會員中よりも銓衡すること、し、其の人選等總て決定の上七月二十七日本年度依賜すべき審査員五十六名（第一部十五名、第二部十五名、第三部十三名、第四部十三名）竝に、各部審査主任の氏名を發表、又無鑑査は昭和十一年文展に招待を受けた者（六六九名）全部と同展覽會に於て文部大臣賞を受けた者（二名、但し今年度に限る）とを認めること、として、之を發表した。

審査員に選ばれた者の中第二部南薫造、安井曾太郎、牧野虎雄、金山平三の四名は何れも審査員を辭退した爲別に中澤弘光を審査主任に推し、同部は十二名と決定、其の他の部と共に都合五十三名に九月十一日正式に審査員を依賜、同十四日の官報で發表した。（便覽二頁參照）尙前記展覽會要項は無鑑査資格等と共に九月二日官報に依り發表、此の要項に依る文部省美術展覽會規則は九月十一日文部省告示第三百十九號を以て正式に制定、同日附官報を以て公布した。（便覽二〇頁參照）

新に制定された文展機構の要點に附いて記せば左の如くである。

一、第一部より第四部迄の綜合展とし、鑑査作品と無鑑査作品とを同時に陳列する。

一、帝國藝術院會員、文展審査員、及び無鑑査と認められたる者の各専門技術に依る作品は無鑑査とする。

一、審査員長は文部次官を以て之に充て、審査員は文部大臣が依賜する。

一、受鑑査者の出品は一人二點以内、無鑑査者の出品は一點とする。

一、寸法の制限は、第一部、受鑑査者の作品縦十尺横十

三尺、帝國藝術院會員及文展審査員の作品縦十尺横二十五尺、無鑑査と認められた者の作品縦十尺横七尺以内とする。但し無鑑査と認められた者の作品で、此の制限を超え縦十尺横二十五尺以内のものに就ては、審査員が陳列すべきや否やを決定する。

第二部、受鑑査者の作品は隨意、帝國藝術院會員及文展審査員の作品は隨意、無鑑査と認められた者の作品は八十號以内とする。但し此の制限を超えものものに就ては審査員が陳列すべきや否やを決定する。

第三部は隨意とする。

第四部、立體は十尺平方以内の場所に陳列し得るもの、其の他十二尺平方以内とする。

第一回文部省美術展覽會

前項の通り文部省は新な文展の制度を立て、審査員依賜其の他の準備を了し、官展の更始一新を目途として豫定の通り第一回文部省美術展覽會を開いた。

十月五日の搬入締切を前にして同四日文相官邸で顧問會を開催、本年度文展では、受鑑査作品中優れたものに文部大臣賞或は特選を與へること、無鑑査作品中より政府賞上を行ふこと、陳列に就ては二段掛や陳列替を行はぬこと、從來の例であつた招待日夜の文相招待晩餐會は本年は廢することなどの方針を決定した。

展覽會に關する日程は左の通り行はれた。

出品搬入受付 十月一日—五日

鑑査打合せ 同六日

入選發表 同九日（第三部）、十日（第四部）、十一日（第一部、第二部）、十二日（第一部）

審査 同十五日

招待 同十六日

一般公開 同十七日—十一月二十日

出品及び陳列數は左の通りであつた。

	一般出品數	入選數	無鑑査出品數	陳列數
第一部	一四八五	一一八	七八	一九六
第二部	二四二八	一三一	一二九	二六〇
第三部	三八二	六三	九四	一五七
第四部	八一九	一〇九	五七	一六六
合計	五四七二	四二一	三五八	七七九

審査の結果、文部大臣賞は第四部一名、特選は第一部二名、第二部八名、第三部五名、第四部二名を決定發表した。又政府賞上品は無鑑査作品中より選定、第一部二點、第二部三點、第三部二點、第四部三點、合計十點を十一月七日決定した。（九三頁參照）

展覽會の内容及び出品目錄等は別に記す通りである。

（九〇頁參照）

尙京都市主催に依る京都陳列會は十一月二十八日より十二月十二日迄の日程を以て、大禮記念京都美術館に開催された。

美術教育

ベルリンに於ける日本學童圖畫手工展 ベルリン日本學會主催の日本學童圖畫手工展覽會が、二月一日ベルリン、シェーネベルグの美術學校で開催された。出品は國際文化振興會が日本學會からの依頼に依つて集めた日本に於ける小學校教育資料及び全國小學校から選んだ學童の圖畫、書方、手工、手藝等約三百點である。開會式には武者小路大使、孫田日本學會日本人理事長を初めドイツ官民多數出席した。

日本國際美術教育聯盟創立 正木直彦を會長とし、芝田徹心及山樹儀重を副會長として、日本國際美術教育聯盟が二月八日創立された。日本に於ける各種の美術・工藝、圖畫・手工教育に關係ある人々を以て組織し、東西に本部を置く國際美術教育聯盟と緊密な連絡を保つて我が國美術教育の進展と海外連絡とを圖らうとするものである。事業としては研究、出版、講演、講習等の外に日本に於ける美術教育資料の海外展覧、海外資料の日本に於ける展覧、國際美術教育會議に日本代表を銓衡及派遣する事などがある。

邦畫教育研究會創立 東京美術學校日本畫科並に圖畫師範科卒業生で圖畫教育に携はる在京者二十四名に依り、二月二十五日日本畫研究の立場から結城素明を會長とし、邦畫教育研究會が設立された。

國際素描コンクール参加 本年七月パリで開かれる第八回國際美術教育會議に際し、國際素描コンクールが催されるので、我が國でも文部省及び外務省後援の下に日本國際美術教育聯盟が主催して之に参加することとなり全國に作品を募集した。其の規定に依れば第一部小學兒童（七歳—十三歳）第二部中等學校生徒（十四歳—十八歳）第三部美術學校、工藝學校等の専門學校生徒（十

九歳—二十四歳）の三部に分ち、畫題は「市街風景」と「勞働する男女」の二種とする。二月末日募集を締切り、三月一日正木直彦以下二十八名の審査委員に依つて、應募作品第一部八百二十餘點、第二部三百十餘點、第三部百餘點の中から、第一部五十點、第二部二十四點、第三部五點の入選作を決定、内第一部及び第二部の四等迄の作品十四點をパリに發送した。右豫選に於て第一部一等は東京市横川小學校三年生杉浦一郎（十歳）の「石屋さん」、第二部は一等無く二等は東京文化學院四年生出開美千子（十七歳）の「増上寺通り」であつた。

尚パリ發送に先ち同コンクール日本豫選展示會を三月四日から九日迄上野松坂屋で開催し、四日同會場で豫選入選者の授賞式を行つた。

日比兒童作品交換展覧 岐阜縣佐々木高女教諭大平茂樹はマニラに渡つて日本より持参した兒童圖畫作品を同地小學校女學校等で展覧したが、歸朝に際しフイリツビン兒童の圖畫數百點を將來、三月初旬東京上野松坂屋で展覧した。

帝國美術學校卒業式 三月十三日午後二時より同校第四回卒業式を舉行、同日より二日間卒業製作を陳列公開した。

東京高等工藝學校卒業及入學者 同校では三月十五日卒業式を舉行、本年度の卒業生並に入學者數は左表の通りであつた。

	卒業生	入學志望者	入學者
工藝圖案科	二三	一五五	二三
工藝彫刻部	六	三二	五
金屬工藝科	一七	一二六	一六
精密機械科	二七	三〇九	二八
木材工藝科	二六	一四三	二六

印刷工藝科	二二	一〇九	二一
寫眞部	七	三八	六
木材工藝別科	一〇	二七	一五
合計	一三八	九三九	一四〇

京都高等工藝學校卒業及入學者 京都高等工藝學校では三月十五日卒業式を舉行した。同校本年度の卒業生並に入學者數は左表の通りである。

	卒業生	入學志望者	入學者
色染科	二九	一六八	三〇
機織科	二四	一三八	三一
圖案科	三四	一九八	三九
窯業科	二五	一二四	二七
計	一一二	六二八	一二七

京都市立繪畫專門學校卒業及入學者 京都市立繪畫專門學校では三月十八日卒業式を舉げた。本年度卒業生並に四月入學者の數は左の通りである。

	卒業生	入學志望者	入學者
本科			
豫科			
本科	三一	五七	二四
選科			
豫科			
本科	三一	一七	一三
豫科			
本科	七		
研究科	一七	二八	二五

（選科生ハ當分募集セズ）

日本美術學校卒業生及入學者 日本美術學校では三月二十二日午後二時より同校第十八回卒業式を舉行し、同日より二日間卒業製作並に通級生徒成績品を陳列公開した。本年度卒業生は三五名。又同校本年度入學志望者は一二三名で、内入學を許可された者は四七名であつた。

東京美術學校卒業生及入學者 東京美術學校では三月二十四日午前十時同校第四十六回卒業式を舉行し、各卒業生百十六名に卒業證書を授與した。尚同日より三日間同校内に於て卒業製作を陳列公開した。又同校本年

慶入學者は志望者七三四名の内一六四名であつた。卒業
者及入學者數各科内譯は左表の通りである。

	卒業者	入學志望者	入學者
日本畫科	一五	五八	二〇
油畫科	三二	一八五	三六
彫刻科	一二	三六	一六
塑造部	六	一七	八
木彫部	一三	一三五	一五
工藝科	四	八	五
圖案部	三	一二	四
彫金部	四	一五	七
鍍金部	五	一四	六
漆工部	六	一五八	一五
建築科	一四	二二	三
圖畫師範科	一	一六四	一
鍛金專科	一	一六	一
研究科	一	七三四	一
特別學生	一	一六	一
合計	一六	七三四	一六四

女子美術專門學校卒業生及入學者 同校では三月二
十六日午前十時より第四十一回卒業式を舉行、同日より
三日間卒業生成績品陳列を公開した。本年度師範科及高
等科の卒業生並に入學者數を表示すれば左の如くである。

	卒業生	入學志望者	入學者
師範科	一九	二五	二四
日本畫部	一七	三六	三三
西洋畫部	一二	一七	一四
刺繍部	〇	三	二
造花部	五	三	三
裁縫手藝部	二〇	三一	二六
裁縫部	四	六	五
日本畫部	三	一四	一三
西洋畫部	三	一四	一三

美術教育

全國手工教育大會

名古屋市手工教育研究會主催、
日本手工研究會及名古屋市後援の下に、全國手工教育大
會が、五月九、十の二日間同市公會堂に於て開催され、
全國各地より小學校教員及府縣視學等五百餘名の參會者
出席、文部省諮問案、會員提出問題審議等の議事を進め
併せて汎太平洋博覽學等の行事があり盛會であつた。

文部省教員檢定

本年度施行された文部省教員檢定
中國畫及手工科に關しては、圖畫科は五月七日より同十
一日に至る間に豫備試験を行ひ出願者二五四名中合格者
六六名、七月十三日より同二十四日に至る間に本試験を
行ひ、前年度豫備試験合格者をも加へて受験者九七名中
合格者二三名を決定した。手工科は五月六日豫備試験、
出願者一五八名中合格者三三名、七月七日より九日迄の
間に於て本試験施行、受験者三八名中合格者二〇名を決
定した。尙本年度圖畫及手工關係の檢定臨時委員は左の
通りであつた。

松田義之、鈴川信一、平井富夫、板倉贊治、阿部七五
三吉、伊藤信一郎、三吉正雄

第八回國際美術教育會議

七月三十日より八月五日
に至る一週間、パリに於て第八回國際美術教育會議が開催
され、我が國も之に参加、十二名の委員が出席した。本
年よりは新に創立された日本國際美術教育聯盟が本邦側
參加主催者となり、同聯盟の手に依つて出席希望者の募
集並に代表の選定推薦が行はれた。出席者氏名は左の通
りである。

東京美術學校教授	田邊孝次
神奈川縣湖南中學校教諭	塚本茂
滿洲國奉天第一中學校教諭	河南拓
岡山縣師範學校教諭	石原義武
東京府豊島師範學校教諭	新井喜惣治
東京府立第三高等女學校教諭	今井伴次郎
東京市永田町尋常小學校訓導	武井勝雄

東京高等師範學校教諭 三吉正雄

京都市第一工業學校教諭 武田新太郎

東京府青山師範學校教諭 石井明

奈良縣女子師範學校教諭 小西美良

圖畫教育獎勵會主事 杉山司七

同會議は四年目毎に開催されることになつて居り、今
回は前回のブルユクセル會議より三年目であるが偶々パ
リに萬國博覽會開催の機會を利用して開かれたものであ
る。會議は各國代表出席の上豫定の如く開かれ、左の題
目に依り協議が行はれた。

一、國民の美術的教養に就て

都市の生活、工業、手工、旅行、家庭及び個人

に於ける美の問題

二、美術と技術との關係に就て

三、兒童に於ける眼と手の習慣（傾向）に就て

1 自由畫、寫生に於て

2 生理學上より見たるもの、或は他の生活活動に

よるもの

3 その教育上の効果を一層確實にする爲の實際的

手段

四、裝飾的構成（圖案）の近代的概念に就て

五、各段階に於ける圖畫手工教室の組織的設備に就て

六、習字及裝飾文字の改革に就て

七、前回よりの懸案

1 美術教育者に公認されたる修養の必要

2 有資格教員に美術史講座の必要

世界教育會議

世界聯合教育會主催の第七回世界教
育會議が八月二日から同七日迄東京に開かれ、海外より
四十八箇國の教育者並に教育關係代表者約一千名に日本
教育代表者二千名が加はり、東京帝大の大講堂を總會議
場として教育界空前の盛事を示した。會議は總會と部會
とに分れ、部會は十八より成り其の一つ初等教育部の六

分科中圖畫手工裁縫が一分科を成した。我が國より其の委員として左の十三名が舉げられて出席し、主査委員小林澄兄が日本側委員を代表して「日本小學校に於ける Art and Handicraft Education」なる意見書を發表した。

慶應義塾小林澄兄、東京高師阿部七五三吉、東京高師板倉賛治、東京女高師山形寛、廣島高師大竹拙三、奈良女高師下瀬貞和、東京高師三苦正雄、慶應普通部横田仁郎、下谷高等小學下川兵次郎、東京女高師岡田千代、東京女高師成田順、東京女高師横内フサ、廣島高師藤吉敏子

東京美術學校設置記念式 東京美術學校では十月四日同校設置記念式を舉行し、併せて岡田三郎助、結城素明兩教授の在職三十五年祝賀式を行つた。尙同校師範科創立三十周年祝賀會並に恆例の運動會は中止された。

板倉賛治功績記念會 東京高等師範學校教授板倉賛治在職三十年功績記念會が友人門弟等の主催に依り、十一月十四日大塚若溪會館に於て開かれ來會者二百餘名の盛會であつた。

國際素描コンクール入選 前記の如くパリ開催の國際美術教育會議に際して國際素描コンクールが行はれ、我が國も之に参加して三月豫選を経た小學校及び中等學校生徒の作品を送つたが、國際審査の結果第一部杉浦一郎の「石屋さん」、第二部 出開美千子の「増上寺通り」は夫々二等に入選し賞金各一千フランの傳達式は十一月二十四日一つ橋教育會館に於て行はれた。

國際美術教育會議報告會 前記の如く七月三十日より八月五日までパリに於て開催された第八回國際美術教育會議出席代表等の同會議報告會が、國際美術教育聯盟の主催に依り十一月二十四日一つ橋教育會館に於て開催された。

京都繪專學校教授更迭

京都市立繪畫專門學校教授福

田平八郎は病氣の爲退職、後任として櫛原紫峰が教授に任ぜられ十二月二十四日發令された。

美術講演

一月

奈良皇室博物館列品講座 一月十六日

「刀剣の話」大宮武磨

ラヂオ 平城 一月十七日

樂浪史話(木柳墳より)小泉顯夫

大阪市立美術館第五回美術講演會 一月二十二日

「近世初期に於ける藝術の破壊と建設」藤懸靜也

浮世繪同好會講演會 一月二十七日

於日本橋經濟俱樂部

「近世初期の風俗と所謂南蠻風俗との關係に就いて」近藤市太郎

「風俗史上より見たるとちしびの變遷」主として江戸時代」和田千吉

二月

ラヂオ 東京 二月三日

國際放送「日本木版畫に就いて」山岸主計

奈良皇室博物館列品講座 二月六日

「塔婆の話 其の二」岸熊吉

大阪市立美術館第六回美術講演會 二月十三日

「塔」天沼俊一

大阪市立美術館主催第一回美術講習會 二月十六日—三月十九日毎週火、金曜、於同館講堂

科目及講師、日程

「初期肉筆浮世繪」泰山武松 二月十九日、二十日、三月五日

「鏡鑑の沿革」廣瀬都巽 二月十六日、二十三日、三月二日

「日本彫刻史」望月信成 二月十六日、三月十九日、計十回

「宋代の藝術鑑賞」小林太市郎 三月九日、十六日

「支那畫論の研究」堂谷憲男 三月十二日、十九日

科外講演

「紀州の陶器」小林市太郎 二月二十日

浮世繪同好會講演會 二月十七日 於日本橋經濟俱樂部

「人形藝術に就いて」藤懸靜也

「人形の話」西澤笛吹

奈良皇室博物館列品講座 二月二十日

「三月堂本章の寶冠に就いて」新納忠之介

日佛文化協會、關西日佛學館主催公開講演會 二月二十七日 於關西日佛學館

「版畫を通じて見たる東京の今昔」ノエル・ヌエツト

三月

奈良皇室博物館列品講座 三月六日

「傳神と骨氣」堂谷憲男

ラヂオ 名古屋第二 三月六日

「城廓の建築について」土屋純一

四月

浮世繪同好會講演會 三月十五日 於日本橋經濟俱樂部

「江戸番曲の變遷に就いて」大槻順教

「大和繪に於ける風俗畫に就いて」田中一松

奈良皇室博物館列品講座 三月二十日

「日本武器に就いて」末永雅雄

ラヂオ 東京 三月二十日

「畫家の眼に映じた春」三岸節子

大阪市立美術館第七回美術講演會 三月二十日

「日本古名畫の話」植田壽藏

ラヂオ 東京 三月二十一日

「建築に於ける日本的意匠と裝飾」岸田日出刀

ラヂオ 東京 三月二十四日

日本女性文化史(六)「日本美術と女性」丸尾彰三郎

考古學會講演 三月二十六日 於東京美術學校

「飛鳥から奈良時代に互る彫刻様式の一考察」小林剛

ラヂオ 大阪 三月三十一日

ラヂオ隨筆「陶器の土味」河村靖山

大阪市立美術館第八回美術講演會 四月十日 於同館講堂

「私の繪の見方」脇本樂之軒

奈良皇室博物館講演會 四月十八日

於奈良縣師範學校講堂

「藤原時代佛畫の年代に就いて」田中豐藏

「藤原彫刻の形式に就いて」明珍恆男

ラヂオ 東京 四月十九日

「木版應用の家庭向手工藝に就いて」山岸主計

帝國工藝會講演 四月二十一日 於新橋藏前工業會館

「我國貿易の前途に就いて」木村増太郎

「近代工藝所感」團伊能

浮世繪同好會講演會 四月二十二日

於日本橋經濟俱樂部

「友禪の浮世繪」笹川臨風

畫說第一回美術講演會 四月二十四日

於日本橋東洋經濟新報社

「支那赤繪陶器について」小山富士夫

「伎樂面から能面へ」野間清六

「陶工にして畫を能くした木米の話」脇本樂之軒

ラヂオ 東京 四月二十五日

芝居四題ノ内

「繪看板と番付」鳥居清忠

「劇畫より見た芝居」太田雅光

五月

考古學會講演 五月一日 於東京美術學校

「佛像に現はれたる民族性」藤懸靜也

奈良皇室博物館特別講座 五月一日

於同館

「藤原時代の漆藝に就いて」溝口三郎

ラヂオ 大阪 五月四日

「初夏の服飾について」龜高文子

獨逸國寶名作素描展講演會 五月六日

「獨逸國寶名作素描展講演會」五月六日

「獨逸國寶名作素描展講演會」五月六日

「獨逸國寶名作素描展講演會」五月六日

「獨逸國寶名作素描展講演會」五月六日

「獨逸國寶名作素描展講演會」五月六日

「獨逸國寶名作素描展講演會」五月六日

「獨逸國寶名作素描展講演會」五月六日

「獨逸國寶名作素描展講演會」五月六日

「獨逸國寶名作素描展講演會」五月六日

「獨逸國寶名作素描展講演會」五月六日

「獨逸國寶名作素描展講演會」五月六日

「獨逸國寶名作素描展講演會」五月六日

「獨逸國寶名作素描展講演會」五月六日

「獨逸國寶名作素描展講演會」五月六日

「獨逸國寶名作素描展講演會」五月六日

「獨逸國寶名作素描展講演會」五月六日

「獨逸國寶名作素描展講演會」五月六日

「獨逸國寶名作素描展講演會」五月六日

「獨逸國寶名作素描展講演會」五月六日

「獨逸國寶名作素描展講演會」五月六日

「獨逸國寶名作素描展講演會」五月六日

「獨逸國寶名作素描展講演會」五月六日

「獨逸國寶名作素描展講演會」五月六日

「獨逸國寶名作素描展講演會」五月六日

「獨逸國寶名作素描展講演會」五月六日

「獨逸國寶名作素描展講演會」五月六日

於東京朝日新聞社講堂、東京朝日新聞社
日獨文化協會協同主催

「デューラーよりメンツエルまで」ハン
ス・メーレ

「獨逸素描の特質」兒島喜久雄
染色談話會 五月八日 於京都市染織
試驗場

「スクリーン捺染に就て」吉岡重次
「染織工藝に就て」山鹿清華

ラチオ 東京 五月十日
「近世獨逸繪畫」ハンス・メーレ

ラチオ 東京第二 五月十一日
「手技の染織」山鹿清華

建築學會講演會 五月十七日 於名古屋
屋朝日會館

「日本の住宅」藤井厚二
「病的心理に映する建築」杉田直樹

「名古屋市の思ひ出」林井清忠
「防空と建築」小倉尙

ラチオ 富山 五月十八日
「越中に於ける古墳について」大村正之

浮世繪同好會講演會 五月十九日 於
日本橋經濟俱樂部

「土佐派の起源と其の系統」谷信一
「錦繪の發展と鈴木春信」藤懸靜也

大阪市立美術館第九回美術講演會 五
月二十二日

「明治以前の西洋畫（幻燈使用）」新村出

六 月

ラチオ 東京第二 六月一日
「漆と漆工藝に就て」六角紫水

ラチオ 東京第二 六月三日

天才藝術家と其の故郷「イタリーの大美
術家」兒島喜久雄

ラチオ 大阪第二 六月四日
「美術と我が國民性」新谷哉二

奈良帝國博物館列品講座 六月五日
「興福寺板彫十二神將の製作年代及びそ
の作者に就て」源豐宗

ラチオ 大阪 六月九日
中等學生の名畫物語「瓢鮎圖」と「僧正
通正落馬圖」望月信成

古美術保存研究會講演會 六月十二日
於東京帝國大學文學部第二號館第三十六
番教室

「光線による色彩の變色」指導者 中村清二
實施者 金澤壽吉

「表装用糊の研究」指導者 柴田桂太
實施者 大槻虎男

「蟲害に對する佛像保存」指導者 内田祥三
實施者 森 徹

大阪市立美術館第十回美術講演會 六
月十二日

「陶磁器の研究と鑑賞」奥田誠一

ラチオ 東京 六月十六日
「勤皇畫家菊池容齋先生の事蹟」結城素
明

ラチオ 大阪 六月十六日
中等學生の名畫物語「オルナンの埋葬」
と「古きバターシ橋」井島勉

第三回綜合文化講演會 六月十六日
於名古屋朝日會館、主催名古屋醫科大學
學生部會、大阪朝日新聞名古屋支社

「レントゲン生體トキーについて」河
石九二夫

「尾張宗春卿とその時代」尾張久彌
「我國陶磁器の多角觀」赤塚幹也

ラチオ 東京 六月十八日
「繪畫及圖畫教育について」和田英作

ラチオ 東京第二 六月二十一日
「國寶指定の趣旨並に沿革」丸尾彰三郎

ラチオ 東京第二（京都より）六月二
十二日
今日の知識「詩繪の盛衰と現代の漆藝」
番浦省吾

浮世繪同好會講演會 六月二十三日
於日本橋經濟俱樂部

「江戸の坂を語る」横關英一
「外遊雜感」原田治郎

考古學會講演會 六月二十六日 於東
京帝國博物館會議室

「最近支那に於て發見されたる古窯址」
小山富士夫

ラチオ 東京（札幌より）六月二十八
日
教師の時間「小學校高學年女兒と圖畫」
中川ひで

ラチオ 東京第二 六月三十日
青年講座、廣告宣傳の實際（三）「ポスタ
ー圖案製作技法の概要」杉浦非水

今日の知識「藝術國策について」松本學

ラチオ 東京第二 六月三十日
青年講座、廣告宣傳の實際（三）「ポスタ
ー圖案製作技法の概要」杉浦非水

今日の知識「藝術國策について」松本學

七 月

奈良帝國博物館列品講座 七月三日
「額安寺藏寺地圖について」大宮武磨

日本美術學校講演會 七月五日於同校

「日本畫の現在及將來」脇本樂之軒
「繪畫の近代性に就て」川路柳虹

ラチオ 東京 七月十一日
趣味講話「陶工の生活」板谷波山

ラチオ 大阪第二 七月十二日
趣味講座「古陶の市價と鑑賞」武居巧

奈良帝國博物館列品講座 七月十七日
「塔婆の語其の三」岸熊吉

ラチオ 名古屋 七月二十四日
「壁畫の話」伊藤清永

ラチオ 大阪第二 七月二十六日
「法隆寺夢殿の本尊に就て」内藤藤一郎

大阪市立美術館夏期美術講習會 七月
二十六日—三十一日 會場、同館講堂
演題並講師

「支那文人畫の源流」伊勢專一郎
「近世に於ける障壁畫の發達」土井次義

「鎌倉時代の彫刻」源豐宗
「日本上代の假名について」出雲路通次

郎
「琴棋書畫」小林太市郎
「飛鳥朝の美術（法隆寺見學の爲めに）」
望月信成

法隆寺見學

恩賜京都博物館夏季講演會 八月二日
六日 於恩賜京都博物館

「大和繪に就ての一考察」田中一松
「日本建築の裝飾」藤原義一

「柿右衛門と鍋島」大須賀眞藏

八 月

「近世における洋風文化」新村出

世界教育會議講演 八月三日 於東京

帝國大學安田講堂

「工藝の教育に就て」工藝部委員、高村豊周

第四回大和史蹟臨地講座 八月五日

十一日主催奈良縣

第一日午前 於奈良縣公會堂

午後 春日神社、博物館見學

「佛像彫刻の見方」明珍恆男

興福寺、東大寺、平城宮址

諸帝陵見學

西ノ京、法隆寺、敏達御陵

見學

第四日午前 於建國會館

「大和神廟の發展」牧健二

飛鳥地方、吉野山見學

吉野山、吉野川沿岸、宇陀

地方見學

宇陀地方、室生見學

第六日 大野寺、磯城地方見學

第七日 東京第二 八月十三日

「宮廷畫家の私生活」井川定慶

ラヂオ 東京 八月十六日、十七日、

十八日三回

婦人夏期講座「圖案と色彩」鹿島英二

ラヂオ 大阪 八月十七日

「工藝品としての鍔金の變遷」大國壽郎

ラヂオ 東京 八月十九日

「東西二大博覽會」ハーバート・ヒュース

トン

九月

奈良帝國博物館列品講座 九月四日

「奈良朝彫刻について」新納忠之介

ラヂオ 東京 九月十二日

「工藝と實生活」高村豊周

山崎覺太郎歸朝講演會 九月十三日

於九ノ内日清生命館内永樂俱樂部

「歐米工藝界近況」

尙工藝に關する實寫「パリ博」新興ドイ

ツ」等の映畫公開

ラヂオ 東京 九月十五日

講演「歐米各國の工藝事情と我國の輸出

工藝品に就て」山崎覺太郎

ラヂオ 東京 九月十六日

講演「防空と建築」佐竹保治郎

大阪市立美術館第十一回美術講演會

九月十八日

「日本畫の特質」福井利吉郎

奈良帝國博物館列品講座 九月十八日

「本邦上代の財寶に就て」山城草内村車

塚出土品を中心として「梅原末治

ラヂオ 大阪 九月二十二日

中學生女學生の時間 美術鑑賞 彫刻

「果樹園の神と勝利」保田龍門

ラヂオ 東京 九月二十四日

趣味講座「戰爭と美術」柳亮

ラヂオ 東京 十月一日

教師の時間「繪の見方に就て」石井柏亭

奈良帝國博物館列品講座 十月二日

「密教の佛具」石田茂作

ラヂオ 東京 十月四日

「東洋美術研究と日獨文化親善」オットー・キュンメル

ラヂオ 大阪 十月四日

「スケッチを致しませう」山本鼎

獨立美術館京都研究所講演會 十月九日

「藝術の大陸に響く共感の原始人」

内藤耕次郎

ラヂオ 東京第二、十月十三、十五日

國民講座「日本建築の話」神社建築、一

二 角南隆

東京美術學校々友會講演會 十月十六

日於同校

「藝術と現代」本多顯彰

ラヂオ 東京第二 十月十八、二十日

國民講座「日本建築の話」寺院建築、一、

二 足立康

ラヂオ 東京第二(大阪より) 十月十

九日

今日の知識「彫塑の新傾向について」大

國貞藏

浮世繪同好會講演會 十月十九日於日

本橋經濟俱樂部

「廣重の藝術」野口米次郎

「廣重八十回忌に際して」藤懸靜也

宮崎辰親講演會 十月二十日 於資生堂

「ヨーロッパに於ける商業美術界の現況」

東洋文庫秋季東洋學講座 十月二十日

二十一日 於東洋文庫

「樂浪遺跡の調査」梅原末治

ラヂオ 東京第二 十月二十二、二十

五日

國民講座「日本建築の話」寺院建築三、

四 田邊泰

國際文化振興會文化講座 十月二十三

日、於九ノ内明治生命館内國際文化振興

會

「ドラマに就て」阪倉篤太郎

建築學會「時局と防空建築の講演會」

十月二十三日於日本橋白木屋

考古學會講演會 十月二十三日 於帝

室博物館會議室

「漢代瓦甍の意匠に見えたる呪的意義」

胸井和愛

奈良帝國博物館列品講座 十月二十三

日

「能の女面に就て」野上豐一郎

ラヂオ 東京第二 十月二十六日

今日の知識「秋季諸美術展の印象」牧野

吉晴

ラヂオ 東京第二 十月二十七日

國民講座「日本建築の話」城郭建築・一」

土屋純一

ラヂオ 東京第二 十月二十九日

國民講座「日本建築の話」住宅建築・一」

岸田日出刀

大阪市立美術館第十二回美術講演會

十月三十日

「大安寺佛像の諸問題」足立康

ラヂオ 名古屋 十月三十一日

「本邦工藝品の輸出振興並輸出工藝展覽

會に就て」菅原省三

十一月

ラヂオ 東京第二 十一月一、五日
國民講座「日本建築の話」住宅建築二、三」岸田日出刀

國際文化振興會講演會 十一月六日
於京都獨逸文化研究所

「日本文學繪畫に表れた東海道」フリー
ドリツヒ・トラウツ

奈良帝室博物館列品講座 十一月六日
「長谷寺千佛多寶佛塔と頭塔石佛に就て」
足立康

ラヂオ 濱松 十一月八日
遠江文化史講座第二講「遠江の畫家」中
道朔爾

ラヂオ 東京第二 十一月九日
今日の知識「最近の裝飾美術」廣川松
五郎

ラヂオ 東京 十一月九日
「帝室博物館の復興に就て」荻野忠三郎
浮世繪同好會講演會 十一月十二日
於日本橋經濟俱樂部

「長喜研究中間報告」檜崎宗重
「寛政期の役者繪に就て」木村拾三
「房總に於ける師宣の遺跡」玉林晴朗

ラヂオ 東京 十一月十二日
趣味講座「支那建築とところ／＼」藤島亥
治郎

第六回東方文化講演ノ内第三回講演會
十一月十八日 於東京帝國大學法學部第
二十五番講堂

「支那佛教文化の消長とその遺物」常盤

大定

ラヂオ 大阪 十一月十九日
講演「輸出工藝振興に就て」岡田友次
奈良帝室博物館列品講座 十一月二十
日

「貞觀彫刻の一考察」明珍恆男
ラヂオ 大阪 十一月二十三日 於法
隆寺、臨地講演

「聖德太子と斑鳩宮」佐伯定胤
「法隆寺國寶保存工事について」武田五
一

「夢殿と東院の沿革」岸熊吉
「修理方針および寶藏建設について」大
瀧正雄

「夢殿の解體その他の工事狀況」淺野清
ラヂオ 松江 十一月二十七日
家庭講座「島根縣における木材工藝品に
ついて」藤田一三

大阪市立美術館第十三回美術講演會
十一月二十七日
「城廓建築」武田五一

十二月

ラヂオ 大阪 十二月一日
趣味講座「劍と畫宮本武藏」高橋長敏
ラヂオ 名古屋 十二月二日
趣味講演「戰爭版畫の變遷」小泉大羽

ラヂオ 大阪 十二月四日
趣味講座「我が國土と漆工藝」島野三秋
奈良帝室博物館列品講座 十二月四日
「手親音の畫像に就て」望月信成

ラヂオ 名古屋 十二月十一日

趣味講座「陶磁器の鑑賞に就て」永塚樂
治
日本人形研究會講演會 十二月十三日
「一九三七年巴里萬國博覽會について」
田邊孝次

ラヂオ 東京第二(大阪より)十二月
十四日
今日の知識「工藝の鑑賞」向井寛三郎
大阪市立美術館第十回美術講演會 十
二月十八日

「禪と日本文化」鈴木大拙
ラヂオ 東京(名古屋より)十二月十
九日

「戰時に於ける輸出工藝の振興に就て」
飯野逸平

ラヂオ 東京 十二月二十日
「日本の城と支那の城」大類仲
ラヂオ 東京第二 十二月二十三日
趣味講座「支那工藝圖案」渡邊素舟

ラヂオ 東京第二 十二月二十五日
特輯講座「大正年間に於ける日本の文化」
一、文學(東京)本間久雄、二、音樂(東
京)牛山充、三、科學(大阪)眞島利行
四、美術(大阪)中井宗太郎

十二月

ラヂオ 大阪 十二月一日

ラヂオ 名古屋 十二月二日

ラヂオ 大阪 十二月四日

ラヂオ 名古屋 十二月十一日

十二月

古美術展覽會・展觀

一月

充美會主催古硯古墨展觀

一月十一日—十七日 大阪・阪急百貨店

武藏と光悦展

一月十五日—二十七日 京都・高島屋

高島屋主催、大阪朝日新聞社京都支局後援。朝日新聞連載小説「宮本武藏」の挿繪原稿(石井鶴三筆)を初め武藏、光悦に關する書、畫其の他の參考品を陳列した。

武裝と名刀展

一月二十日—三十日 名古屋・十一屋

名城展

一月二十三日—三十一日 大阪・阪急百貨店

阪急百貨店主催。大阪朝日新聞社の「西日本城取競争」に協賛して名城の寫眞、摸型、圖繪、設計圖、遺瓦、遺品、城主の短冊等城に關する參考品を陳列した。

美術裂陳列

一月二十六日—三十一日 大阪・阪急百貨店

朝鮮支那古美術工藝展

一月二十七日—三十一日 大阪・阪急百貨店

浮世繪展

一月二十七日—三十一日 京都府綾部町・三ツ丸百貨店

琉球風俗品陳列

一月、二月中 東京帝室博物館

「東京帝室博物館では、一、二月の二ヶ月表慶館の第七室に琉球風俗品約百點を展覧した。即ち第一兩には家什のうち漆器、陶器を主として風俗畫、衣服、第二兩には衣服、装身具の各種、第三兩には船舶模型、樂器、宗教關係品、第四兩には衣服類に八重山群島其他の土俗品を主として陳列した。漆器は所謂琉球

古美術展覽會・展觀

東京帝室博物館繪畫陳列

一月中 同館

東京帝室博物館一月份陳列繪畫の品目は左の通りであつた。

太宰大貳重家像	紙本淡彩	鎌倉時代	一幅	本館藏
丹波守元眞像	同	同	一幅	同
北野天神緣起畫卷殘闕	紙本著色	同	一幅	同
狹衣物語畫卷殘闕	同	同	一幅	同
驗狹衣物語畫卷殘闕	同	同	一幅	同
駿牛圖	紙本淡彩	同	一幅	同
山王靈驗記畫卷殘闕	紙本著色	室町時代	一幅	同
打毬圖	同	同	一幅	同
堅田圖	同	同	一幅	同
おいのさか圖	同	同	一幅	同
竹生島祭圖	同	同	一幅	同
商山四皓圖屏風(國寶)	紙本著色六曲	桃山時代	一雙	妙心寺藏
黃石公張良、虎溪三笑圖屏風	紙本金地著色六曲野村	同	一雙	本館藏
鳥獸人物戲畫卷(國寶)	紙本墨畫	鎌倉時代	四卷	高山寺藏
長谷雄草紙畫卷(摸本)	紙本著色	鎌倉時代	一卷	本館藏
扇面屏風	紙本著色	江戶時代	一雙	同
扇面屏風(國寶)	紙本著色	江戶時代	一雙	醍醐寺藏
牛圖屏風	紙本銀地著色六曲野村	同	一雙	本館藏

玉川喫茶、武陵桃源圖
屏風
紙本金地著色六曲富岡
明治時代 一雙 布施卷太
近世職人畫卷
紙本淡彩 江戶時代 三卷 本館藏

奈良帝室博物館繪畫陳列

一月中 同館

奈良帝室博物館一月份陳列繪畫は左の通りであつた。

山水圖(國寶) 狩野元信筆	紙本墨畫	室町 京都市	靈雲院藏
瀟湘八景圖(國寶) 倭狩野元信筆	紙本墨畫	同 同	東海庵藏
嚴子陵虎溪三笑圖(國寶) 金地著色	同	桃山 同	妙心寺藏
四季娛樂符藏圖	紙本著色	江戶 奈良市	興福院藏
七賢人四皓圖	同	同 奈良市	長谷寺藏
山水圖 狩野山卜筆	紙本著色	同 同	西大寺藏
源氏物語末摘花卷(國寶) 土佐光起筆	紙本著色	同 滋賀縣	石山寺藏
都鄙繪卷 住吉具慶筆	紙本著色	同 奈良市	興福院藏
布袋圖	紙本淡彩	同 奈良縣	能滿院藏
蓮華圖	紙本墨畫	同 東京市	男爵水谷川忠藏藏
洗馬圖	同	支那 本	館藏
柿本人麿像	紙本著色	室町 奈良縣	龍上寺藏

二月

紀州陶窯特別陳列

二月一日—二十八日 大阪市立美術館

同館の特別陳列として、甚兵衛窯、善明寺窯、端芝窯、借樂園窯、西の丸窯、高松窯、男山窯、三樂園窯、和歌山窯等紀州諸窯の製品百二十餘點を諸收藏家より借用展覧した。尙之に因んで同館では二月二十日「紀州の陶器」に就き小林太市郎の講演を行つた。

書畫骨董展觀

古美術展覽會・展覧

二月八日、九日 築地・八百善
清眞堂中島庸介主催
時代浮世繪版畫展併ハツパー遺愛品展覧

二月九日―十三日 上野・松坂屋

浮世繪商並に蒐集家の共同出陳にかゝる浮世繪版畫千餘點が展覧賣却された。春信、清長、歌麿、英泉、國芳、廣重、清親等の尤品が見られた。昨年末逝去した米人蒐集家ハツパーの遺愛品は比較的少數であつた。

和漢畫展

二月十日、十一日 岐阜・大雲寺

日本古代民藝品展

二月十一日―十四日 大阪・阪急百貨店

大塚珍巧藝畫古名畫幅展

二月十四日―二十日 日本橋・高島屋

朝鮮出土雅陶鑑賞會

二月十五日、十六日 上野・松坂屋

某好事家の蒐藏にかゝる朝鮮の陶磁約百五十點を展覧した。

立正大學考古學會主催古瓦展覽會

二月十六日 同校

支那古代文化遺品展

二月十六日―十八日 大阪・朝日ビル

小澤溪苔堂主催

二月十六日―十八日 大阪・朝日ビル

古畫畫展觀

二月十九日―二十一日 神田・開華樓

東京帝室博物館繪畫陳列

二月中 同館

東京帝室博物館二月陳列替の繪畫の品目は左の通りであつた。

御物佛畫貼交屏風

宮島之圖屏風

紙本著色 鎌倉時代 三双
紙本金砂子 室町時代 一雙 本館藏
著色六面 松本山雪紙

龍虎圖屏風

松ヶ崎天神緣起繪卷 (國寶)

四季草花圖屏風

草花圖屏風

雪中小禽圖

雪中群雞圖

藍邊遊鴨圖

燕語春風圖

保津川湍瀾遊鱗圖

雉子圖

雙鶴圖

田家之烟圖

八幡太郎繪詞

奈良帝室博物館繪畫陳列

二月中 同館

奈良帝室博物館二月陳列替繪畫の品目は左の通りであつた。

多聞天像 (國寶) 十二天像ノ内

星曼奈羅圖 (國寶)

聖德太子御像 (國寶)

佛涅槃圖 (國寶)

持鉢釋迦如來像 (國寶)

五弁像 (國寶)

水天像 (國寶)

廣目天像 四天王像ノ内

增長天像

小野篁像

紙本繪畫六曲 桃山時代 ノ内 本館藏

紙本著色 鎌倉時代 (二卷ノ内) 松ヶ崎神社藏

紙本著色 六 江戶時代 一雙 本館藏

金地著色多 川相說筆 江戶時代 (一雙ノ内) 同

西郷孤月筆 明治時代 (二幅ノ内) 同

紙本著色 渡邊春筆 同 一幅 同

紙本著色 荒木寛政筆 同 一幅 同

紙本著色 渡邊小華筆 同 一幅 同

紙本著色 望月玉泉筆 同 一幅 同

紙本著色 村瀬玉田筆 同 一幅 同

紙本著色 平福自德筆 同 一幅 同

紙本著色 菱田春草筆 明治時代 一幅 同

紙本著色 渡邊始興筆 江戶時代 (三卷ノ内) 同

東征繪傳 (國寶)

融通念佛緣起繪卷 (國寶)

佛涅槃圖 (國寶)

阿彌陀如來廿五菩薩來迎圖

不動明王圖

阿彌陀如來地蔵十王圖

弘法大師行狀繪卷 (國寶)

文殊菩薩像

二河白道曼奈羅圖

一行阿闍梨像

命蓮上人像

紙本著色一 鎌倉 奈良縣 唐招提寺藏

紙本著色一 鎌倉 奈良縣 清涼寺藏

紙本著色一 鎌倉 奈良縣 宗新寺藏

紙本著色一 鎌倉 奈良縣 大藏寺藏

紙本著色一 鎌倉 奈良縣 法隆寺藏

紙本著色一 鎌倉 奈良縣 大師堂藏

紙本著色一 鎌倉 奈良縣 敦王護國寺藏

紙本著色一 鎌倉 奈良縣 能滿院藏

紙本著色一 鎌倉 奈良縣 藥師寺藏

紙本著色一 鎌倉 奈良縣 靈山寺藏

紙本著色一 鎌倉 奈良縣 朝護孫子寺藏

三月

大和土鈴展

三月一日、二日 津・觀音境内本願院

南蠻古陶器展

三月一日―五日 日本橋・高島屋

南蠻陶器約百點を陳列。

國寶「釋迦堂緣起」特別展觀

三月一日―三十一日 恩賜京都博物館

國寶新指定品一部展觀

三月二日 文部省

去る二月二十七日國寶保存會に依つて新に建造物十、繪畫三十、彫刻十四、文書典籍書蹟七十七、刀劍二十二、工藝十三件の新國寶指定が決議せられたが、右のうち數十點を文部省大會議室に陳列し研究者の觀覽に供した。

能樂人形と立雛展

三月七日、八日 京都・風俗博物館假陳列場

知恩院展

三月九日—十四日 京都・大丸
趣味の古美術工藝品展
三月十日—十五日 大阪・十合

高野山中院御坊龍光院名寶展

三月十三日—二十八日 大阪市立美術館

大阪市立美術館では今春の高野山根本大塔の再建供養
並に龍光院瑜祇塔供養の六法要嚴修を記念して本展覽會
を催した。龍光院の寶物に就ては二三の國寶類を除いて
は殆ど一般に知られてゐなかつたのであるが、美術館當
局の多大の盡力に依り百數點に上る秘寶が公開された。
主要なるものとして國寶經卷數種の外に、船中涌現觀音
像、兩界曼荼羅、狩場明神像、枕本尊、栢香爐等の國寶
を始めとして羅漢像及び傳元信筆鶴圖等が擧げられたが
左に列品中繪畫、彫刻、佛具に關するものの目錄を掲載
する。

出品目錄

弘法大師像	絹本着色	一幅
珍祇大師像	同	一幅
弘法大師像(ウ一山大師像)	同	一幅
弘法大師像 傳增牛筆	同	一幅
眞然上人像	同	一幅
持經上人像	同	一幅
明算上人像	同	一幅
眞言八祖像	同	八幅
狩場明神像(國寶)	同	一幅
丹生明神像	同	一幅
影向大明神像	同	一幅
兩界曼荼羅(國寶)	同	二幅
金剛薩埵五秘密像	同	一幅
理趣曼荼羅	同	一幅
般若十六善神像	同	一幅
釋迦如來十六羅漢像	同	三幅
涅槃像	同	一幅
船中涌現觀音像(國寶)	同	一幅
紅顏梨阿彌陀像	紙本着色	一幅

古美術展覽會・展觀

普賢延命像	絹本着色	一幅
三十三觀音像 雲舟等揭ノ印アリ	同	三幅
不動尊像	同	一幅
降三世明王像	同	一幅
愛染明王像	絹本着色	一幅
善女龍王像	絹本着色	一幅
華嚴海會善知識圖	同	一幅
秘藏寶輪論十住心宗圖	絹本墨畫	二幅
眞言十信心品十喻圖	同	二幅
達磨像并五祖六祖像 款撰圖畫	絹本墨畫	三幅
羅漢像 傳李嗣昭筆	絹本着色	一幅
羅漢像 傳陳信忠筆	同	一幅
布袋圖	絹本淡彩	一幅
鶴圖	絹本墨畫	一幅
猿圖 狩野周信筆	絹本墨畫	一幅
都名所屏風	絹本着色	六曲屏一雙
承久記	同	六卷
草庵三顯圖 柳里恭筆	絹本着色	雙幅
苦行釋迦像	絹本著色版畫	一幅
林和靖圖 張平山筆	絹本淡彩	一幅
花鳥圖	絹本着色	雙幅
墨梅圖	紙本墨畫	雙幅
枕本尊(國寶)	木造	六面
大金剛盤	銅製	一基
大塔用佛供碗	同	二個
大塔用大花臺	同	二枚
三具足	同	三個
御影堂佛供飾	同	一個
金銅磬	同	一個
風鐺舌	同	一個
瓶	同	一個
都五鈴杵	銅製鍍金	一個
華籠	銅製鍍金	五枚
栢香爐(國寶)	銅製	一振
臺大土器	同	二枚
堆朱香盒	同	二個
大師所用祝箱并祝	同	一具
古今黒焼大香爐	同	一個

雛人形の種類と飾藝變遷展

三月十四日、十五日 京都・風俗博物館假陳列所
汎太平洋平和博覧會特別展觀
三月十五日—三十一日 徳川美術館

徳川美術館では汎太平洋平和博覧會に協賛して特別展
觀を催した。陳列品は同館所有の蒔繪、陶磁器、刀劍、
甲冑、裝束類、繪畫等約四十五點、及び社寺、個人等よ
り借用の繪畫約十五點で、俣野伊達宗彰所藏の國寶豐臣
秀吉畫像、伊藤次郎左衛門所藏南蠻畫屏風一雙、長福寺
所藏の國寶經櫃等が注目を惹いた。

古作茶の湯釜の會

三月十九日—二十三日 銀座・松屋

東京美術學校春季特別展觀

三月二十四日—二十六日 東京美術學校陳列館

同校卒業製作陳列會開催を機として同校收藏の和漢畫
の特別展を催した。陳列點數三十五、目錄は左の通りで
ある。

出品目錄

竹林美人	歐川豊春筆	一幅
夏娃美人	葛飾北斎筆	一幅
竹林七婦	勝川春章筆	一幅
傾城	同	一幅
藝妓と花魁	同	一幅
高雄山觀楓 鞍馬山奉下し	英一 鍊筆	雙幅
桐に鳳凰 柏に鶯	狩野探幽筆	雙幅
山櫻に尾長鳥 紅葉に四十雀	水溜米室筆	雙幅
竹に双鶏	圓山應舉筆	一幅
虫狩	冷泉爲恭筆	一幅
鷺	狩野安信筆	一幅
墨田川	谷文晁筆	一幅
山水	山本梅逸筆	一幅
彌勒來迎	同	一幅
孔雀明王像	同	一幅
十一面觀音像	同	一幅
羅漢像(國寶)	同	一幅

文殊像	山田道安筆	幅
臨濟裁松	雪舟筆	幅
文殊	周耕筆	幅
鐘磬	遮莫筆	幅
臨濟一喝	小島亮仙筆	幅
林和靖	繼仙筆	幅
山水	竹我紹仙筆	幅
山水	文孫筆	幅
山水	祖榮筆	幅
山水	土佐一得筆	幅
山水	狩野元信筆	幅
過去現在因果經(國寶)		卷
金光明經殘缺		卷
梵文陀羅尼經殘缺		卷
漁夫歸浦圖	陳星筆	幅
十六羅漢圖	曹能始筆	幅
小野雪見御幸繪詞(國寶)		卷

文殊花鳥圖	紙本着色 等禪筆	室町時代	三幅	本館藏
東北院藏入歌合	紙本淡彩	鎌倉時代	一卷	同
雪舟筆山水長卷圖(摹本)	紙本淡彩 狩野古信筆	室町時代	一卷	同
日月四季圖屏風	紙本六曲 著色六曲	室町時代	一雙	同
櫻山吹圖屏風	紙本着色 六曲傳宗遠筆	江戸時代	一雙	同
錢塘觀潮圖屏風	紙本淡彩 六曲池大雅筆		一雙	同
蘭亭曲水圖屏風	紙本着色 六曲與謝藤村筆		一雙	同
洛中洛外圖	紙本着色 住吉具慶筆		一卷	同
花鳥雜畫帖	紙本着色 土佐光則筆		二帖	同

奈良帝室博物館繪畫陳列

三月中 同館

奈良帝室博物館三月陳列繪畫の品目は左の通りであつた。

四月

夢窓國師像(國寶)	無筆周位筆	絹本着色	鎌倉	京都市	妙智院藏
關經曼荼羅圖		同	同	奈良縣	多田來迎寺藏
佛涅槃圖(國寶)		同	同	滋賀縣	石山寺藏
愛染明王像(國寶)		同	同	奈良縣	寶山寺藏
不動明王二童子像(國寶)		同	同	滋賀縣	石山寺藏
十王圖(國寶)	(開元王、平筆、都市王、五道轉輪王)	絹本着色	同	京都市	二尊院藏
弘法大師行狀繪卷(國寶)		紙本着色 六卷ノ内	同	同	教王護國寺藏
日天像(國寶)	(十二天)	絹本着色	同	滋賀縣	西明寺藏
觀世音菩薩像		絹本着色	同	支那	明
地藏菩薩像		同	同	奈良縣	南法華寺藏

大和土鈴展觀

四月一日—五日 京都・本妙寺

大塚巧藝畫新古今畫幅展

四月一日—八日 大阪長堀・高島屋

汎太平洋平和博協議各時代浮世繪版畫展

四月一日—十七日 名古屋・十一屋

勤王の美術と郷土文化展

四月一日—三十日 津山・天守閣

津山商工會議所主催。

三河武士遺品文書展

四月一日—三十日 岡崎市立圖書館

甲冑武具展覽會

四月八日—十八日 新宿・伊勢丹

東西古美術展

四月十日—十四日 名古屋・松坂屋

道成寺展覽會

四月十日—二十日 日本橋・高島屋

都新聞社主催。道成寺より國寶繪畫彫刻其の他數々の寺寶を出陳し、安珍清姫關係の像遺物等から謠曲、長唄

三月二十五日—四月十日 大阪市立美術館
大阪市立美術館主催。京都市の佐藤章太郎、小山源治、松本善右衛門、大阪市の八木正治及兵庫縣の山本發次郎の蒐藏にかゝる浮世繪版畫計六十餘枚を借用展觀した。

東京帝室博物館繪畫陳列

三月中 同館

東京帝室博物館三月陳列繪畫の品目は左の通りであつた。

御物繪殿障子繪屏風	絹本着色 二曲	平安時代	五隻	本館藏
夏冬山水圖	紙本墨畫 雪舟筆	室町時代	二幅	同
徑山寺真景圖	紙本着色 雪舟筆	同	一幅	同
破墨山水圖	紙本墨畫 雪舟筆	同	一幅	同
墨梅圖	同	同	一幅	同
叭々鳥鵲圖	紙本墨畫 宗淵筆	同	二幅	同

演劇、舞踊等の道成寺に關する錦繪、衣裳、人形、番付
稽古本等數々の品物を陳列、展觀した。彫刻では、國寶
十一面觀音像、國寶毘沙門天立像、丈六釋迦如來像佛頭
義淵僧正坐像、夜叉燈台、繪畫では、國寶道成寺緣起二
卷、其の他古瓦九點、銅鐸、佛像破片等があつた。

藤原時代美術展覽會

四月十日—五月十日 奈良帝室博物館

同館春季特別展として開催、藤原時代の彫刻三十一點
工藝三十一點、繪十五點計七十七點を蒐集展觀した。殆
んど全部が御物及國寶によつて占められ内容の充實せる
展觀であつた。只列品の多くは同館及恩賜京都博物館に
寄託或は出陳中のもので、蒐集が寓目の機會多い個人所
藏の名品には殆んど及ばなかつたが、かく同時代各種目
の作品を一堂に集めることにより新鮮なる比較検討の機
を與へたことは甚だ有益な催であつた。尙彫刻の陳列に
於ては列品に依つて藤原彫刻の體系を示さんとし、又目
録に法量を記入し、末尾に簡單なる年表を附した當事者
の努力を多としたい。

出品目録

彫刻

普賢菩薩坐像(國寶)	木造彩色	一軀	京都府	岩船寺藏
不動明王及二童子立像(國寶)	同	三軀	同	峯定寺藏
多聞天立像(國寶)	同	一軀	京都市	橋本關一藏
愛染明王坐像(國寶)	同	一軀	京都府	神重寺藏
雲中供養佛(國寶)	同	二軀	同	平等院藏
藥師如來坐像(國寶)	木造素地	一軀	滋賀縣	石部神社藏
彌勒菩薩坐像(國寶)	切箔押	一軀	大阪府	觀心寺藏
藥師如來坐像(國寶)	木造漆箔	一軀	奈良市	興福寺藏
藥師如來坐像(國寶)	木造彩色	一軀	奈良縣	南明寺藏
阿彌陀如來坐像(國寶)	木造漆箔	一軀	奈良市	東大寺藏
大日如來坐像(國寶)	同	一軀	岩手縣	瑠璃光院藏
觀音菩薩坐像(國寶)	同	二軀	京都市	法安寺藏
勢至菩薩坐像(國寶)	同	二軀	京都市	法安寺藏
(二十五菩薩像)内				

工藝品

十一面觀世音菩薩立像(國寶)	木造彩色	一軀	奈良市	新藥師寺藏
千手觀世音菩薩立像	同	一軀	大阪府	金剛寺藏
地藏菩薩立像(國寶)	同	一軀	京都府	淨瑠璃寺藏
毘沙門天立像(國寶)	同	一軀	京都市	棲霞寺藏
大威德明王騎像(國寶)	木造(彩色刻落)	一軀	奈良縣	唐招提寺藏
增長天立像(國寶)	木造彩色	一軀	京都府	法明寺藏
金剛夜叉明王立像(國寶)	同	一軀	奈良市	不退寺藏
不動明王立像(國寶)	同	一軀	京都府	神童寺藏
多聞天立像(國寶)	同	一軀	京都市	淨瑠璃寺藏
十二神將像(國寶)	浮彫彩色十二面	奈良市	興福寺藏	
龍猛菩薩立像(國寶)	木造(彩色刻落)	一軀	和歌山縣	泰雲院藏
聖觀世音菩薩立像(國寶)	木造彩色	一軀	大阪府	觀心寺藏
十一面觀世音菩薩立像(國寶)	同	一軀	和歌山縣	道成寺藏
毘沙門天立像(國寶)	同	一軀	同	同
吉祥天立像(國寶)	同	一軀	奈良縣	當麻寺藏
聖觀世音菩薩立像(國寶)	同	一軀	大阪府	孝恩寺藏
跋陀龍王立像(國寶)	同	一軀	同	同
釋迦如來立像	銅造鍍金	一軀	大阪府	田万清臣藏
聖觀世音菩薩立像	同	一軀	同	帝室博物館藏
毘陀羅末髮婆(國寶)	髹漆造時繪一合	京都市	教王護國寺藏	
俱利伽羅龍給錫杖(國寶)	同	一合	奈良縣	當麻寺藏
蓮花給經(國寶)	同	一合	京都市	勤修寺藏
蓮華草給經(國寶)	同	一合	福井縣	神宮寺藏
深千鳥給小唐櫃(國寶)	同	一合	和歌山縣	金剛峯寺藏
松喰鶴給小唐櫃(國寶)	同	一合	廣島縣	嚴島神社藏
禮盤(國寶)	同	一合	京都市	觀智院藏
蓮華給經(國寶)	同	一合	京都市	七寺藏
華鬘(國寶)	銅造鍍金	一面	岩手縣	中尊寺藏
幡頭(國寶)	同	一面	愛知縣	萬德寺藏
寶相華透彫經(國寶)	同	一口	大阪府	四天王寺藏
唐草文透彫光背(國寶)	同	一口	帝室博物館藏	
水滴	銅造鍍金	一口	三重縣	金剛證寺藏
雙鳳鑑(國寶)	白銅鑄造	一面	鳥取縣	三佛寺藏
寶相華鑑(國寶)	同	一面	同	同

藏王權現像(國寶)	銅造陰刻	一面	東京市	總持寺藏
彩繪天蓋(國寶)	木造彩色	一面	京都市	教王護國寺藏
天蓋(國寶)	木造漆箔	一面	岩手縣	中尊寺藏
光背	同(但シ)	二面	和歌山縣	道成寺藏
光背及臺座	木造漆箔	各一基	岩手縣	中尊寺藏
光背(不動明王像附屬)(國寶)	木造彩色	一基	奈良縣	玄賢庵藏
光背(釋迦如來像附屬)(國寶)	同	一基	同	南明寺藏
釋迦如來說法圖(國寶)	彩朱刺繡	一鋪	京都市	勤修寺藏
經筒(國寶)	銅造鍍金	一口	奈良縣	金峯神社藏
螺鈿如意(國寶)	螺鈿嵌人	一柄	京都市	三寶院藏
五鈴鈴(國寶)	銅造鍍金	一口	同	同
金剛盤(國寶)	同	一口	同	同
華鬘(國寶)	牛皮彩色	二面	同	同
銀裝石帶(國寶)	銅造鍍銀	一條	大阪府	土師神社藏
牙櫛(國寶)	牙造玳瑁嵌一口	同	同	同
彩繪給扇(國寶)	木造彩色	一柄	廣島縣	嚴島神社藏
御物 繪殿障子給屏風	絹本著色	一隻	京都市	教王護國寺藏
山水屏風(國寶)	同	一隻	同	同
五大尊像(國寶)	同	五幅	同	同
五重塔板繪	木板著色	二枚	同	同
毘沙門天像(國寶)	絹本著色	一面	米澤市	上杉神社藏
聖觀音像(國寶)	同	一幅	鳥根縣	普光寺藏
普賢菩薩像(國寶)	同	一面	鳥取縣	豐乘寺藏
十二天像(國寶)	同	十二幅	京都市	教王護國寺藏
羅勝王經十界寶塔曼荼羅(國寶)	紺紙金銀	一面	岩手縣	大長壽院藏
普賢延命像(國寶)	絹本著色	一幅	京都府	松尾寺藏
孔雀明王像(國寶)	絹本著色	一幅	京都市	醍醐寺藏
藥師十二神將像(國寶)	絹本著色	一幅	京都市	櫻池院藏
孔雀明王像(國寶)	同	一幅	京都市	安樂壽院藏
法華經卷第八(國寶)	紙本著色	一卷	大阪府	金剛寺藏
法華經卷第八(國寶)	同	一卷	京都市	熱田神宮藏
法華經補出品(國寶)	同	一卷	廣島縣	嚴島神社藏
摸本平家納經	同	同	同	同

木村英一コレクション展、清親名畫展觀

五月

本邦近世名工作品陳列展觀

五月一日—二十日 白鶴美術館

同館例年の春季展觀として標記の題名の下に近世名工の手に成る陶磁器、繪畫、彫金、漆器類等白鶴山莊の藏品中より出陳せられたるもの計五十一點を展觀した。

陳列目錄

陶磁器類

仁清寫蟹意色繪抹茶壺 永樂保全作 一箇

同 銅紙色繪抹茶壺 同 一箇

ト、ヤ寫抹茶壺 同 一箇

金欄手鶴龜繪茶壺 同 一箇

交趾錦花鳥寫香合 同 一箇

金欄手花菱繪共蓋水指 同 一箇

赤繪寫蓮花繪耳付六角杓立 同 一箇

染附雲堂寫建水 同 一箇

交趾黃釉三唐子寫蓋置 同 一箇

紫釉鳳凰浮彫風爐 同 一箇

雲華燒土瓶 同 一箇

祥瑞華頭寫共蓋水指 同 一箇

交趾寫法花三ツ重鉢 同 一箇

大、黃釉雲龍寶蓋模樣 同 一箇

中、青釉牡丹鳳凰模樣 同 一箇

小、紫釉牡丹鳳凰模樣 同 一箇

兎水禽繪法花金箔押對鉢 同 二箇

吳洲赤繪玉取獅子寫鉢 同 一箇

祥瑞寫九紋湯桶 同 一箇

同 湯の子杓子 同 一箇

同 金欄手外唐子遊色繪鉢 同 一箇

赤繪金欄手唐形大香爐 同 一箇

萬曆赤繪寫八角大鉢 同 一箇

忠孝圖 絹本極彩 岡田爲恭筆 雙幅

日月三鬼圖 絹本極彩 森祖仙筆 雙幅

奈良帝室博物館繪畫陳列

四月 同館

奈良帝室博物館四月陳列替繪畫の品目は左の通りであつた。

琴棋書畫圖	絹本著色 元時代	四幅	本館藏
雪景山水圖	絹本淡彩 明時代	一幅	同
山水圖屏風	紙本墨畫 室町時代	一雙	同
泉、狐圖屏風	紙本墨畫 同	一雙	同
地獄草紙(國寶)	紙本著色 鎌倉時代	一卷	安住院藏
餓鬼草紙(國寶)	同 同	一卷	曹源寺藏
佛畫稿本	紙本墨畫 同	一卷	本館藏
藤花圖屏風	紙本著色 江戸時代	一雙	同
官女琴圖屏風	紙本著色 同	一隻	同
龍圖	紙本墨畫 同	一幅	同
伊勢物語圖	紙本墨畫 同	一幅	同
李黃射石圖	紙本著色 同	一幅	同
藤、牡丹、楓圖	紙本著色 同	三幅	同
黃祝平圖	紙本淡彩 同	一幅	同
牡丹、蝶圖	紙本著色 同	一幅	同
握々舞圖	紙本著色 同	一幅	同
烏瓜葛圖	紙本著色 同	一幅	同
四季草花圖	紙本著色 同	一幅	同
梅、稚松圖	紙本著色 同	一幅	同
風俗繪卷	紙本著色 同	一卷	同
扇面雜畫	紙本著色 同	六十枚	同

帝釋天像(國寶)(十二天像)	絹本著色 一幅	貞觀	奈良縣	西大寺藏
兩界曼荼羅圖(國寶)	絹本著色 二幅	藥原	京都市	教王護國寺藏
阿彌陀如來像(國寶)(阿彌陀三尊ノ内)	絹本著色 一幅	同	奈良市	法華寺藏
慧思禪師像(國寶)(天台高僧像八幅ノ内)	同	同	兵庫縣	一乘寺藏
增長天像(國寶)	同	同	奈良市	興福寺藏
信貴山緣起繪卷(國寶)(延喜加持卷)	紙本著色 一卷(三卷ノ内)	同	奈良縣	朝護孫子寺藏
扇面法華經(國寶)	紙本著色 一幅	同	同	法隆寺藏
尊勝曼荼羅圖(國寶)	絹本著色 一幅	鎌倉	大津市	園城寺藏
十界圖(國寶)(兼合地獄)	絹本著色 一幅(一面ノ出)	同	滋賀縣	來迎寺藏
十六羅漢圖(國寶)(第五尊者)	絹本著色 六幅(十幅ノ内)	同	滋賀縣	寶嚴寺藏
東征繪傳(國寶)	紙本著色 一卷(五卷ノ出)	同	奈良縣	唐招提寺藏
佛涅槃圖(國寶)	絹本著色 一幅	同	京都府	正暦寺藏
十六善神像(國寶)	同	同	兵庫縣	温泉寺藏
不空羂索觀音像	同	同	同	一乘寺藏
鑑真和尚像	同	同	奈良市	東大寺藏
興正菩薩像	同	同	奈良縣	西大寺藏
聖德太子繪傳(國寶)	絹本著色 二幅(八幅ノ内)	同	橘	寺藏
十六羅漢圖(國寶)	絹本著色 三幅(八幅ノ内)	支那	京都市	高臺寺藏
厨子繪廊 日天、月天	黑漆板繪 二幅	鎌倉	奈良縣	唐招提寺藏
慈恩大師像	絹本著色 一幅	室町	同	藥師寺藏
太元明王像	同	同	同	長谷寺藏
弘法大師行狀繪卷(國寶)	紙本著色 一卷(六卷ノ出)	同	京都市	教王護國寺藏

古美術展覽會・展観

阿彌陀如來	藤原時代	地蔵院藏
阿彌陀如來	藤原時代	金剛峯寺藏
持國天王	傳快慶作	同
阿彌陀如來	藤原時代	同
大日如來	同	同
釋迦如來	同	同
毘沙門天王	傳快慶作	同
毘沙門天王	弘仁時代	同
持國天王	同	同
增長天王	同	同
廣目天王	同	同
廣目天王	傳快慶作	同
地藏菩薩	鎌倉時代	成運院藏
其ノ他		

銅鐘	承元四年十一月鑄造	金剛三昧院藏
銅鐘	弘安三年正月廿五日鑄造	金剛峯寺藏
銅鐘	永正元年卯月八日鑄造	同

東京帝室博物館石器時代土偶及土版展観
五月十六日より約二ヶ月間 同館

「東京帝室博物館では東京帝國大學人類學教室を始め各大學及び私人の蒐集家に求め、石器時代土偶、土版、岩版、土面及び土版の類二百五十點を陳列した。陳列期間は五月十六日より約二ヶ月に亘り、途中で陳列替を行つた。」(考古學雜誌二七ノ六號報による)

公爵毛利家秘藏時代衣裳展観
五月十二日―十七日 日本橋・白木屋

公爵毛利家所藏の能衣裳、時代小袖等を借用、展観に供した。

鮮満巡回日本刀展

五月二十四日 福岡市記念館

筑前王塚古墳壁畫展観

五月二十四日、二十五日 東京美術學校陳列館

昭和九年の秋に發見された福岡縣嘉穂郡桂川村大字壽命字坂元の王塚古墳の原色壁畫摸寫を展観した。

支那古代美術展

五月二十四日―二十六日 銀座・日本サロン

地圖屏風 紙本金地 江戸時代一雙 本館藏

五月二十五日 上野・津梁院

山水書畫冊 紙本著色 明時代一帖 同

「藝苑巡禮」の會十週年記念の鑑賞會として、丹後國分寺舊藏の推古時代金銅如意輪觀世音菩薩像を始め各寺社所藏の佛具、繪畫等約二十點を展観した。

奈良帝室博物館繪畫陳列
五月 同館

五月二十五日―二十七日 大阪・阪急百貨店

地天像(國寶)(十二天像ノ内) 絹本著色 貞觀 奈良縣 西大寺藏

東京帝室博物館繪畫陳列
五月 同館

阿彌陀來迎圖(國寶) 同 藤原 同 長谷寺藏

東京帝室博物館五月陳列替繪畫の品目は左の通りであつた。

諸神像(國寶) 法眼院藏 墨本著色 奈良縣 藥師寺藏

寶樓閣曼荼羅圖(國寶) 絹本著色 平安時代 寶善提院藏

勢至菩薩像(國寶) 絹本著色 同 滋賀縣 長命寺藏

五大虚空藏像(國寶) 同 同 一幅 大覺寺藏

常觀曼荼羅圖(國寶) 同 同 一幅 同 富山縣 曼荼羅寺藏

佛涅槃圖(國寶) 同 同 一幅 達磨寺藏

扇面法華經(國寶) 絹本著色 二面(出陳十二面) 藤原 大阪市 四天王寺藏

阿彌陀來迎圖(國寶) 同 同 一幅 興福院藏

醫王曼荼羅圖 絹本著色 同 同 藥師寺藏

常觀曼荼羅圖(國寶) 同 同 一幅 淨運寺藏

普賢菩薩騎象像 絹本著色 同 同 法起寺藏

犬追物圖屏風 紙本金地 桃山時代 一雙 本館藏

十六羅漢圖(國寶) 絹本著色 同 同 寶嚴寺藏

牧馬圖屏風 紙本金砂子 地著色六曲 一雙 同

普勝曼荼羅圖 絹本著色 同 同 寶山寺藏

春日權現靈驗記(摹本) 原本高階 鎌倉時代 一卷 同

佛涅槃圖 絹本著色 同 同 正曆寺藏

土蜘蛛草紙畫卷 紙本著色 室町時代 一卷 同

常麻寺緣起繪卷土佐光茂筆 絹本著色 同 同 當麻寺藏

鷗鷺草草紙不合降庭圖 紙本淡彩 江戸時代 一幅 同

不動明王像 絹本著色 同 同 談山神社藏

月見布袋圖 紙本墨畫 同 一幅 同

釋迦三尊像 同 同 同 同 千光寺藏

果實圖 紙本淡彩 同 三幅 同

地蔵菩薩來迎像 同 同 同 同 能滿院藏

富士、三保清見寺圖 紙本淡彩 同 三幅 同

佛鑑、百丈臨濟像 絹本著色 同 同 島根縣 靈雲寺藏

運思遠圖 同 同 一幅 同

十六羅漢像(國寶) 絹本著色 同 同 兵庫縣 太山寺藏

中、出山釋迦左右、龍圖 同 同 三幅 同

佛涅槃圖 絹本著色 同 同 奈良縣 幸田彌太郎藏

淺間山圖屏風 紙本著色 同 一隻 同

佛涅槃圖 絹本著色 同 同 達磨寺藏

堂田善筆 同 同 一隻 同

十六善神像 同 同 同 同 同

虚空藏菩薩像
一 絹本着色 室町 奈良縣 南法華寺藏
圓月觀音菩薩像
一 絹本着色 同 同 談山神社藏
極樂院緣起繪卷古銅紙
一 紙本着色 卷二 江戶 奈良市 極樂院藏
卷一(二)

六月

瀬戸系古陶器展

六月一日—五日 名古屋・松坂屋

國寶名畫、現代大家新作巧藝畫展

六月一日—七日 大阪・十合

古陶磁民藝展

六月十二日—十六日 京都河原町・書好俱樂部

建部寒葉齋遺墨並に關係資料展

六月十三日、十四日 上野・美術研究所

美術懇話會は、六月十二日その例會として、主として青森縣地方所在の建部寒葉齋の遺墨三十餘點並に著書其他參考品を展觀し、西村南岳の講話を行つた。尙引續き翌兩日之を公開展觀した。

國寶佛像寫真展

六月二十七日—二十九日 銀座・三味堂

東京帝室博物館繪畫陳列

六月中 同館

東京帝室博物館六月陳列替繪畫の品目は左の通りであつた。

維摩像 絹本着色 鎌倉時代 一幅 本館藏
稚兒文殊像 同 同 一幅 同
赤童子像 同 同 一幅 同
不動圖 同 同 一幅 同
阿彌陀如來像 同 同 一幅 同
三寶荒神圖 同 同 一幅 同

古美術展覽會・展觀

聖觀音像 絹本着色 鎌倉時代 一幅 本館藏
小島荒神像 同 同 一幅 同
十一面觀音像 同 同 一幅 同
普賢菩薩圖 同 同 一幅 同
松鷹圖 同 同 一幅 同
暮雪歸帆圖 同 同 一幅 同
猪頭蝦子圖 同 同 一幅 同
花鳥圖 同 同 一幅 同
靈照女圖 同 同 一幅 同
鐘馗圖 同 同 一幅 同
地藏緣起 同 同 一幅 同
花鳥人物畫帖 同 同 一幅 同
花鳥圖屏風 同 同 一幅 同
網千鳥圖屏風 同 同 一幅 同
御物日本武尊圖 同 同 一幅 同
御物神武天皇高倉下奉劍圖 同 同 一幅 同
御物菊池武時圖 同 同 一幅 同
和氣清曆圖 同 同 一幅 同
林和靖圖 同 同 一幅 同
清少納言圖 同 同 一幅 同
兒島高德圖 同 同 一幅 同
仲國訪小督圖 同 同 一幅 同
牛若圖 同 同 一幅 同
岩清水圖 同 同 一幅 同
明和南畫帖 同 同 一幅 同

奈良帝室博物館繪畫陳列

六月中 同館

奈良帝室博物館六月陳列替繪畫の品目は左の通りであつた。

日天像(國寶)(十三天) 絹本着色 貞觀 奈良縣 西大寺藏
善無畏三藏像(國寶)(天台高僧像八幅ノ内) 同 同 一幅 同
聖德太子勝經御講讀圖 絹本着色 同 奈良縣 法隆寺藏
釋迦三尊像(國寶) 絹本着色 同 同 同
聖德太子迎圖(國寶) 同 同 一幅 同
釋迦大師像 同 同 一幅 同
法然上人行狀繪卷(國寶) 一 卷 同 奈良縣 當麻寺藏
聖德太子二王子隨侍像(國寶) 絹本着色 同 滋賀縣 觀音寺藏
十曜曼荼羅圖 同 同 一幅 同
如意輪觀音菩薩像 絹本着色 同 奈良縣 寶山寺藏
來迎阿彌陀如來像 絹本着色 同 滋賀縣 寶嚴寺藏
淨土曼荼羅圖 同 同 一幅 同
法華曼荼羅圖 同 同 一幅 同
十二天圖屏風 絹本着色 同 同 長谷寺藏
聖德太子繪傳 絹本着色 同 同 大藏寺藏
十六羅漢像 絹本着色 同 同 唐招提寺藏
(第八、第九、第十、第十一、卷者) 四 幅 同 同 同
長谷寺緣起繪卷 上佐光 卷一(六) 同 同 長谷寺藏
藤原鎌足像 絹本着色 同 同 談山神社藏
不動明王像 同 同 一幅 同 寶山寺藏
彌勒菩薩像 同 同 一幅 同 松尾寺藏
十二天像(國寶) 火天 同 同 同 滋賀縣 西明寺藏
融通念佛緣起繪卷 絹本着色 卷一(二) 同 同 京都府 知恩院藏
卷一(上)

七 月

考古資料展覽會並講演會

七月五日 城東・淺間高等小學校

主催者、私立阿武隈考古館長首藤岩泉、先史遺物約六千點を展觀した。

東京帝室博物館繪畫陳列

七月中 同館

東京帝室博物館七月陳列替繪畫の品目は左の通りであつた。

御物舍利殿障子繪	絹本着色 室町時代	六隻	本館藏
百花鳥圖	絹本着色 明時代	六幅	森安三郎藏
風竹圖	絹本着色 元時代	一幅	本館藏
墨竹圖	絹本着色 明時代	同	同
墨竹圖	絹本着色 明時代	同	同
月梅圖	絹本着色 同	一幅	同
墨葉圖	絹本着色 同	一幅	同
白菊圖	絹本着色 明時代	一幅	同
葡萄葉圖	絹本着色 元時代	一幅	同
曼荼羅圖	絹本着色 平安時代	一幅	同
扇面古寫經	同	一幅	同
時代不同歌合	絹本着色 鎌倉時代	一帖	同
墨竹圖卷	絹本着色 元時代	一卷	同
花鳥圖屏風	絹本着色 江戶時代	一雙	同
針杉群鴉圖屏風	絹本着色 同	一雙	同
雪中老松圖	絹本着色 同	一幅	同
雨竹風竹圖	絹本着色 同	二幅	笹間清藏

夏冬山水圖屏風
紙本金砂子
地墨六曲
江戶時代
一雙
本館藏

奈良帝室博物館繪畫陳列

七月中 同館

奈良帝室博物館七月陳列替繪畫の品目は左の通りであつた。

羅刹天像(國寶)	十二天 像ノ内	絹本着色 一幅	貞觀	奈良縣	西大寺藏
不動明王八大童子像(國寶)	同	同	藤原	大津市	園城寺藏
慈恩大師像(國寶)	同	同	鎌倉	奈良市	興福寺藏
淨土曼荼羅圖(國寶)	同	同	同	奈良縣	長谷寺藏
軍荼利明王像(國寶)	四六二 尊ノ内	絹本着色 一幅	同	滋賀縣	觀音寺藏
降三世明王像(國寶)	同	同	同	和歌山縣	總持寺藏
阿彌陀三尊像(國寶)	同	同	同	大阪府	四天王寺藏
阿彌陀三尊像(國寶)	同	同	同	奈良縣	金剛寺藏
不動明王像(國寶)	同	同	同	大津市	園城寺藏
閻魔天曼荼羅圖	同	同	同	奈良縣	法隆寺藏
繪屏	同	同	同	同	靈山寺藏
阿彌陀如來像	同	同	同	同	極樂寺藏
普賢菩薩像	同	同	同	兵庫縣	一乘寺藏
釋迦三尊像(國寶)	同	同	同	滋賀縣	長命寺藏
十六羅漢像	同	同	同	奈良縣	法隆寺藏
(我園諸佛多顯、茂博通鑑、半託運尊者)	同	同	同	同	同
兩界曼荼羅圖	同	同	同	同	同
五百羅漢像(林庭珪筆、國寶)	同	同	同	同	同
長谷寺緣起繪卷土佐光茂筆	同	同	同	同	同
融通念佛緣起繪卷	同	同	同	同	同
融通念佛緣起繪卷	同	同	同	同	同
楊柳觀音像	同	同	同	同	同

十王圖(國寶) 宗帝王
一絹本着色
室町
京都市 二尊院藏

時代風俗展

八月一日―十五日

第七回世界教育會議が東京で開催されるのを機とし、同會に出席の各國教育關係者に本邦風俗の正しい紹介を行ふを目的として、白木屋主催、文部省、帝國教育會、國際觀光局、國際文化振興會後援の下に時代風俗展を開催した。陳列の指導には佐川臨風、吉川觀方、大隅爲三の三名が當り、上古より江戸末期に至る各時代風俗をバノラマ應用で展觀し、又公家、武家及町家の男女風俗資料等の外、根津嘉一郎藏の能衣裳二十九點、能面十五點が陳列された。

阪東觀音三十三ヶ所靈場寶物展
八月十四日―二十二日 日本橋・白木屋
高野山靈寶館特別展
八月十五日―二十一日 同館
高野山靈寶館では例年の如く特別展觀を催し、優れた靈寶を陳列した。

陳列目錄(國寶のみ抄録)
佛畫の部
二十五菩薩來迎圖 惠心僧都筆
清盛血曼荼羅 二幅
八字文殊曼荼羅 金剛峯寺藏
丹生明神 正智院藏
狩場明神 金剛峯寺藏
愛染明王 同
釋迦如來涅槃圖 應徳三年奉寫ノ銘アリ 同
五大虚空藏菩薩 同
藥師十二神將 傳惠心僧都筆 同
池院藏

十六羅漢圖

絹本着色 鎌倉 岡山縣 賴久寺藏

千手觀世音曼荼羅圖

絹本着色 同 奈良縣 千光寺藏

藤原鎌足像

同 同 談山神社藏

十六羅漢圖

絹本着色 同 北室院藏

地藏曼荼羅圖

麻布著色 同 朝鮮名古屋市 七寺藏

花鳥圖

絹本着色 同 支那 奈良縣 能滿院藏

執金剛神緣起繪卷

紙本着色二卷 (三卷ノ内上) 室町 奈良市 東大寺藏

善財童子像

絹本着色 同 同 同

十六羅漢像

絹本着色一幅 (十六幅ノ内) 同 兵庫縣 太山寺藏

地藏菩薩像

絹本着色 同 奈良縣 金剛寺藏

文殊菩薩像

同 同 法華院藏

九月

寧樂文化拓本展

九月一日—六日 日本橋・高島屋

南都七大寺の大瓦、東大寺の大佛燈籠天人透彫を始め奈良時代の石佛、碑文等の拓本約七十種を掛額、屏風等に仕立てて陳列、頒布した。

南洋陶器特別陳列

九月十八日—十月二十五日 大阪市美術館

山本發次郎、野田鑛五郎、中川伊作其他の所蔵に係るシヤム及ジャバ、ボルネオ、スマトラ、パリー諸島出土の陶器、琉球出土南蠻器等百數十點を展観した。

和漢古寫經展並現代大家新作佛畫展觀

九月二十日—二十七日 上野・松坂屋

松坂屋主催で諸名家所蔵の古寫經計九十九點を展観した。國寶では、根津嘉一郎所蔵の楞伽阿跋陀羅寶經卷第七、剛男爵の白描下繪金光明經卷第二第四の斷簡が出品

され、其他、東京美術學校の過去現在因果經卷第四の斷簡又中村不折所蔵の北魏以後唐末に至る寫經七十餘點の出品があつた。

大塚稔巧藝畫古名畫幅展

九月二十日—二十四日 日本橋・高島屋

東京帝室博物館日本刀陳列

九月中 同館

同館に於ては九月を前後二期に分ち、其の所蔵にかゝる古刀及新刀を夫々陳列した。品目は左の通りであつた。(考古學雜誌二七ノ一〇彙報による)

目録

一、古刀

太刀 銘 大和國住人□□作

太刀 銘 國後(二字、山城國)

短刀 朱銘 來國次(裏、本阿彌花押)

短刀 銘 村忠(村正を改錐す、伊勢國)

太刀 銘 義助(初代、駿河國)

太刀 銘 相州住元廣、康正三年二月日

短刀 銘 兼定(正定、美濃國)

短刀 銘 藤島友重(加賀國)

短刀 銘 同 同 同

太刀 銘 同 同 同

太刀 銘 同 同 同

太刀 銘 同 同 同

太刀 銘 同 同 同

太刀 銘 同 同 同

太刀 銘 於河州簡井越中守人道紀充享保十一年二月吉日

刀 銘 和泉守國貞(章書銘、大阪)

刀 銘 越後守包貞(大阪)

刀 銘 津田近江守助直(大阪)

刀 銘 元祿三歲二月日

刀 銘 於南紀重國造之

刀 銘 阿部住人國綱作

太刀 銘 肥前國住近江大掾藤原忠廣

刀 銘 藤原鹿兒府住藤原正清

刀 銘 (菱紋) 主馬首一平安時代(鹿兒島)

刀 銘 (菱紋) 以兩重藏於武州江戸

刀 銘 (菱紋) 慈前廣藏三佛(彫刻)

短刀 銘 繁慶(江戸)

短刀 銘 長曾爾興里

短刀 銘 延寶五年二月吉日(江戸)

短刀 銘 水心子正秀(駿河天印)

太刀 銘 文政元年八月日(江戸)

太刀 銘 奥州國分若林住山城大掾藤原國包花押

太刀 銘 寛永八年二月吉日

太刀 銘 同 同 同

太刀 銘 同 同 同

東京帝室博物館九月陳列繪畫は左の通りであつた。

九月中 同館

佛涅槃圖(國寶) 絹本着色 鎌倉時代 一幅 圓覺寺藏

淨土曼荼羅圖 同 同 一幅 本館藏

觀音三十三應身圖 同 同 一幅 同

諸神集會圖 同 同 一幅 同

菊花圖屏風 紙本金地著色六曲傳土 室町時代 一雙 同

車爭圖屏風 紙本金地著色四曲傳土 桃山時代 一隻 公辨九條道秀藏

扇面古寫經(摹本) 紙本平安時代 廿三面 本館藏

人物花鳥畫冊 紙本著色傳 室町時代 一冊 同

京名所圖屏風 紙本金地著色六曲 江戸時代 一雙 同

宮島祭禮圖屏風 同 同 一雙 同

花鳥圖 絹本着色 同 一幅 同

古美術展覽會・展覧

楚蓮香圖	絹本着色	一幅	大津市	村田 虎次郎藏
釋迦、老子圖	絹本着色	雙幅	同	同
月兔圖	絹本水墨	一幅	京都市	高濱 平兵衛藏
牡丹雀圖	絹本着色	一幅和歌山縣	無量寺藏	
薔薇鷄圖	絹本水墨	一幅	同	同
白衣觀音大士像	絹本水墨	一幅	同	同
牽牛花圖	絹本水墨	一幅	同	同
盛行著明上座圖	同	一幅	同	同
寒山拾得圖	同	一幅	同	同
巖上老猿圖	絹本淡彩	一幅	同	同
中仙人左右鸚鵡猿圖	同	三幅	同	同
中童子左右猿雀圖	同	三幅	同	同
月竹童子圖	絹本水墨	二幅	同	同
鸚鵡圖	絹本着色	一幅	同	同
牡丹鷄圖	絹本着色	一幅	同	同
惠比須圖	絹本淡彩	一幅	同	同
大黒天圖	絹本水墨	一幅	同	同
鍾馗、蝦蟆圖	同	二幅	同	同
蛸圖	同	一幅	同	同
櫻籬月圖	同	一幅	同	同
唐人入圖	絹本淡彩	一幅	同	同
那智瀑布、藤降時圖	絹本水墨	一幅	同	同
李白看煙車圖	絹本水墨	一幅	同	同
雙鷄圖	絹本着色	一幅	同	同
春草遊獵圖	同	一幅	同	同
松虎圖	同	一幅	同	同
松鶴圖	著色	一幅	同	同
水禽圖	絹本淡彩	二幅	同	同
月下狗兒圖	同	一幅	同	同
月兔圖	絹本水墨	一幅	同	同
嚴島八景圖	絹本水墨	一幅	同	同
花鳥遊魚圖(同)	絹本着色	一幅	同	同
蓬萊圖(重要美術品)	同	一卷	同	同
踏虎圖	絹本淡彩	一幅	同	同
牽牛花雀圖	絹本着色	一幅	同	同

宮嶋聖崎奇岩圖	絹本淡彩	一幅	廣島市	永田 惣兵衛藏
東方朔圖	絹本着色	一幅	同	同
蝦蟆、鐵拐兩仙圖	絹本水墨	一幅	同	同
四膝圖	絹本淡彩	一幅	同	同
黑白圖	同	一幅	同	同
白象遊童圖	絹本着色	一幅	同	同
扇面貼交	絹本水墨	二幅	同	同
楓鹿圖	絹本着色	一幅	同	同
唐獅子圖	絹本水墨	一幅	同	同
赤壁圖	同	一幅	同	同
群鶴圖	絹本着色	一幅	同	同
山姥圖(重要美術品)	絹本水墨	一幅	同	同
蝦蟆仙人圖	同	一幅	同	同
竹石圖	同	一幅	同	同
雁來紅四十雀圖	絹本着色	一幅	同	同
若竹四十雀圖	同	一幅	同	同
蝦蟆仙圖	同	一幅	同	同
龍、虎圖	絹本水墨	一幅	同	同
白猿圖	絹本着色	一幅	同	同
芭蕉翁圖	絹本淡彩	一幅	同	同
跳蝦圖	絹本淡彩	一幅	同	同
巖上白鷹	絹本水墨	一幅	同	同
達磨圖	絹本水墨	一幅	同	同
藍雪遺印	同	一幅	同	同
長澤家印譜	同	一幅	同	同

第二回名寶展覽會

十月十日—二十五日 大阪市立美術館
同館は昨秋開館に際し、開館記念名寶展を開催したが
本年は第二回名寶展として諸家蒐集の足利時代以降の繪

畫を蒐めて展覧した。

陳列目錄

馬鳴菩薩曼荼羅圖卷	絹本墨畫	一卷	京都市	高橋 泰郎藏
長谷寺緣起繪卷(重要美術品)	本紙著色	三卷	奈良縣	林 平造藏
十二類繪卷(附標書集)	同	三卷	京都市	堂本 印象藏
弘法大師行狀記(慶阿重)	同	十卷	滋賀縣	延 曆寺藏
北野緣起尊意渡海圖(重要美術品)	同	六曲屏	某	藏
王右軍書扇圖	絹本墨畫	一幅	京都市	守屋 孝藏藏
枯木鵲翠圖	絹本墨畫	一幅	大阪市	男爵 鴻池善右衛門藏
放牛圖(國寶)	絹本著色	一幅	岡山縣	大原孫三郎藏
山水圖(重要美術品)	絹本墨畫	一幅	大阪市	野村 徳七藏
山水圖	絹本墨畫	一幅	京都市	守屋 孝藏藏
面壁達磨圖	絹本墨畫	一幅	同	廣瀬 都巽藏
岸波圖	絹本墨畫	一幅	大阪市	男爵 鴻池善右衛門藏
哦松圖	絹本著色	一幅	京都市	守屋 孝藏藏
水月觀音魚舟騰泉圖(重要美術品)	絹本淡彩	三幅	西宮市	八馬 兼介藏
山水圖	絹本墨畫	一幅	京都市	慈 照院藏
拾地圖	絹本著色	一幅	兵庫縣	山本發次郎藏
山水圖(重要美術品)	絹本墨畫	一幅	大阪市	佐々木昌興藏
松下歸遊圖	絹本著色	一幅	福井縣	大 寶寺藏
寢殿遊樂圖	同	一幅	兵庫縣	山本發次郎藏
山王祭圖	同	一幅	京都市	金 地院藏
犬追物流鏢馬圖	同	一幅	大阪市	尼崎伊三郎藏
南蠻人渡來圖	同	一幅	同	同

山岳秋草圖 紙本着色 六曲屏 京都市 堀部功太郎藏

中陶淵明左右蘭菊圖 絹本着色 三幅 大津市 某藏

秋野三月月圖 絹本着色 一幅 兵庫縣 岡田利兵衛藏

人物花鳥圖卷 英一蝶筆 一卷 大津市 村田虎次郎藏

薛馬圖 土佐光起筆 六曲屏 兵庫縣 岡田利兵衛藏

雪景山水圖 紙本墨畫 六曲中 男爵住友吉左衛門藏

山水圖 金地墨畫 屏一雙 大津市 某藏

月秋草圖 絹本着色 六曲屏 京都市 宮田兵三藏

青稻蟹圖 森一鳳筆 一幅 大阪府 水落庄兵衛藏

羅漢渡海圖 紙本墨畫 一幅 同 同

蔬菜圖卷 紙本墨畫 一卷 神戶市 杉原祥雲藏

雪中楓圖 吳春筆 一卷 兵庫縣 兵衛住友吉左衛門藏

左義長圖 長谷川玉葉筆 一幅 大津市 吉住岩藏

孤鶴臥冬花園 絹本着色 一幅 同 同

紅梅猿圖 絹本着色 一幅 大阪府 水落庄兵衛藏

天台山西湖圖 紙本墨畫 一幅 京都市 宮田兵三藏

寒山拾得圖 紙本墨畫 一幅 京都市 某藏

蘭亭曲水圖 紙本墨畫 二曲屏 大津市 某藏

醉李白圖(重要美術品) 紙本墨畫 二曲屏 京都市 宮田兵三藏

赤壁圖(同) 紙本墨畫 二曲屏 京都市 宮田兵三藏

疏松曲水圖(同) 紙本墨畫 六曲屏 大津市 某藏

兔道朝歌圖(同) 紙本墨畫 一幅 同 同

山水畫帖 紙本墨畫 一幅 同 同

山水圖 絹本着色 一幅 神戶市 杉原祥雲藏

古美術展覽會・展觀

布袋圖 得中筆 一幅 京都市 渡邊政之助藏

龍虎圖 素約筆 六曲屏 大津市 上野新介藏

蘭亭曲水圖 來章筆 一幅 同 同

尾張代々藩主の服飾と付屬品展

十月十五日—十一月三十日 徳川美術館

「徳川家康を始め尾張代々藩主の服飾並に付屬品を陳列した。」

主なる品目を挙げれば、一、徳川家康着用額縁染織入小袖類他數

點一、徳川家光着用薄柿莢紋付羽織一、徳川光友(尾張藩主第

二代)着用縮緬根柢雪輪小紋給その他數點一、徳川綱誠(尾張

藩主第三代)着用長上下他數點一、徳川吉通(尾張藩主第四代)

着用熨斗目その他數點一、徳川宗春(尾張藩主第七代)着用夏

下襲他數點一、徳川慶勝(尾張藩主第十四代)着用夏下襲及襪

その他一、徳川慶勝夫人着用中色縮緬縫取給及び緞入等で別に

印籠紙入等數を陳列した。(新要知による)

古活字本展

十月二十一日—二十五日 日本橋・高島屋

廣瀬臺山遺墨展

十月二十三日—二十五日 上野・美術研究所

美術懇話會例會は十月二十三日津山の藩士廣瀬臺山の

歿後百二十五周年を記念し、津山市を始め各地所在の臺

山遺墨約百點を蒐めて展覧し、遺孫廣瀬哲士の「廣瀬臺

山に就て」の講話を行ひ、尙翌兩日之を公開展覧した。

國寶名畫展覽會

十月二十八日—十一月十四日 大阪市立美術館

本月開催した第二回名寶展の續として、足利時代以前

の國寶名畫計四十三點を蒐めて陳列した。

陳列目錄

彌勒菩薩像 絹本着色 一幅 奈良縣 寶山寺藏

釋迦金棺出現圖 同 一幅 京都府 長法寺藏

十二天像 同 十二幅 京都市 教王護國寺藏

大毘盧菩薩像 同 一幅 大阪府 觀心寺藏

紅琉璃阿彌陀像 同 一幅 京都市 知恩院藏

兜率天曼荼羅 同 一幅 大阪府 延命寺藏

不動明王二童子像 同 一幅 京都市 青蓮院藏

五大尊像 同 五幅ノ内 同 教王護國寺藏

日本漆器特別陳列

十月二十八日 十一月三十日 大阪市立美術館

諸家所藏の蒔繪約五十點を蒐めた。藤原、鎌倉、足利、桃山のものは少數で大部分徳川時代の作品であつた。國寶物の出陳は七寺藏「大般若經辛權蓋及組子」、淨嚴院藏「鹿地散花蒔繪厨子」、南禪寺藏「鎌倉彫牡丹香合」、安福寺藏「菩提樹蒔繪香宮」、「牡丹蒔繪硯箱」、「山水蒔繪硯箱」の六點であつた。

東京帝室博物館日本刀外裝陳列

十月中 同館

同館では九月中新刀と古刀の刀身を陳列したが十月に入り外裝を展觀した。品目は左の通りである

目錄

飾太刀	一口(伯耆橋本實要出品)
飾太刀	一口(公爵九條道秀出品)
時給太刀	一口(同)
螺鈿太刀	一口(同)
毛拔形太刀(模造)	一口(原品伊勢徵古館藏傳藤原秀郷太刀)
兵庫鎖太刀(模造)	一口(原品畿島神社藏)
絲卷太刀	一口(本館藏)
革卷太刀	一口(同)
半太刀	一口(同)
打刀	一口(傳明智光秀所用)
大小	二腰(本館藏)
巴造腰刀(模造)	一口(原品伊勢津藩士佐伯某舊藏)
赤木柄腰刀(模造)	一口(原品相模箱根神社藏傳曾我時致所用)
牡丹造腰刀(模造)	一口(原品阿蘇神社藏傳懷良親王御料)
藤丸腰刀(模造)	一口(原品傳足利義昭所用)
尾長巴紋散蒔繪腰刀一口(本館藏)	

東京帝室博物館繪畫陳列

十月中 同館

東京帝室博物館十月陳列繪畫は左の通りであつた。

普賢延命像(國寶)	絹本着色	平安時代	一幅	松尾寺藏
孔雀明王像(國寶)	同	同	一幅	同
阿彌陀如來像	絹本金彩	鎌倉時代	一幅	本館藏
愛染明王像(國寶)	絹本着色	同	一幅	寶菩提院藏

般若菩薩像(國寶)	絹本着色	鎌倉時代	一幅	護國寺藏
地藏菩薩像	同	同	一幅	本館藏
虚空藏菩薩像	同	同	一幅	同
文殊菩薩像	同	同	一幅	同
清水寺緣起繪卷	紙本着色	室町時代	三卷	同
源氏繪畫帖	紙本金地著色	同	一帖	室清次郎藏
日月山水圖屏風	紙本金地著色	同	一雙	本館藏
高麗觀楓圖(國寶)	紙本着色	桃山時代	一隻	子爵福岡孝紹藏
月日武藏野圖屏風	紙本金地著色	江戸時代	一雙	本館藏
金銀泥繪懷紙屏風	紙本墨書	同	一雙	同
銅版繪	亞歐堂田善	同	十八面	同
宮參り圖	紙本着色	同	一幅	同
婦女圖	紙本着色	同	一幅	同
石橋踊圖	紙本着色	同	一幅	同
風俗圖	同	同	三幅	同
男舞圖	同	同	一幅	同
酒宴圖	同	同	一幅	同
人形遣圖	絹本着色	同	一幅	同
婦女圖	紙本金地著色	同	一幅	同
小倉山莊圖	紙本着色	同	一幅	同
享保風俗圖	同	同	一幅	同
婦女舟遊圖	絹本着色	同	一幅	同

奈良帝室博物館繪畫陳列

十月中 同館

奈良帝室博物館十月陳列繪畫は左の通りであつた。

吉祥天像(國寶)	麻布著色	奈良	藥師寺藏
月天像(國寶)	絹本着色	貞觀	同
俱舍曼荼羅圖(國寶)	絹本着色	藤原	奈良市東大寺藏
天台高僧像(國寶)	絹本着色	同	兵庫縣一乘寺藏

愛染曼荼羅	絹本着色	一幅	滋賀縣總持寺藏
黃不動尊像	同	一幅	京都市曼殊院藏
地藏菩薩像	同	一幅	同
涅槃像	同	一幅	同山縣自性院藏
華嚴緣起	紙本着色	六卷ノ内	京都市高山寺藏
東征繪傳	同	二卷	奈良縣唐招提寺藏
一逼上人繪卷	絹本着色	十二卷ノ内	京都市歡喜光寺藏
華嚴五十五所繪卷	紙本着色	一卷	奈良市東大寺藏
不動利益緣起繪卷	同	同	岡山市大原孫三郎藏
五秘曼荼羅	絹本着色	一卷	大阪府金剛寺藏
星曼荼羅圖	額装一面	奈良縣	法隆寺藏
孔雀明王像	同	京都市	安樂壽院藏
毘沙門天像	同	同	知恩院藏
愛染曼荼羅	同	兵庫縣	太山寺藏
阿彌陀如來迎圖	同	滋賀縣	安樂律院藏
兩界曼荼羅	紫綾金泥	二幅	山形縣上杉神社藏
多聞天像	絹本着色	一幅	大津市園城寺藏
迅雲阿彌陀如來迎圖	同	一幅	滋賀縣西教寺藏
十二天像	同	十二幅ノ内	三重縣大寶院藏
文殊菩薩像	同	一幅	兵庫縣山本發次郎藏
千手觀音菩薩像	同	一幅	同
文殊菩薩像	同	一幅	清澄寺藏
聖德太子像	同	一幅	京都市上品蓮臺寺藏
扇面古寫經	紙本着色	二面	大阪府四天王寺藏
二十五菩薩來迎圖屏繪	六枚	京都市	同
達磨像 群賢筆	紙本墨畫	一幅	同
山水圖 傳明兆筆	同	一幅	同
山水圖 狩野元信筆	同	一幅	同
瀟湘八景圖 狩野元信筆	同	四幅	同
風神雷神像 傳倭屋宗達筆	金地著色	二曲屏	同
山王親現像	絹本着色	一幅	滋賀縣淨嚴院藏
熊野曼荼羅圖	同	一幅	兵庫縣湯泉神社藏
足利滿詮像	同	一幅	京都市養徳院藏
歌仙像	紙本淡彩	三幅	三重縣專修寺藏
圖像類	紙本墨畫	二卷	京都市隱園寺藏

聖觀音像(國寶)

絹本著色
幅

蘇原 島根縣 普光寺藏

孔雀明王像(國寶)

同

奈良縣 法隆寺藏

信貴山終起繪卷(國寶)

紙本著色
卷(三)

同 朝議孫子寺藏

一字金輪曼荼羅圖(國寶)

絹本著色
幅

同 南法華寺藏

十界圖(國寶)

絹本著色
一面(五面ノ内)

滋賀縣 來迎寺藏

來迎阿彌陀如來像(國寶)

絹本著色
幅

同 寶嚴寺藏

聖衆來迎圖(國寶)

同

奈良縣 阿日寺藏

扇面法華經(國寶)

紙本著色
四面

同 藤原 四天王寺藏

法師功德品、神力品、本事品、觀音賢經ノ二

絹本著色
幅

同 大津市 園城寺藏

八大佛頂曼荼羅圖(國寶)

絹本著色
幅

同 奈良市 東大寺藏

聖德太子繪傳(國寶)

絹本著色
幅(八幅ノ内第六)

同 奈良縣 橘寺藏

施餓鬼圖(國寶)

麻布著色
幅

同 神戶市 藥仙寺藏

胎藏界曼荼羅圖(國寶)

紫綾金銀泥
幅

同 奈良縣 子島寺藏

十六羅漢像(國寶)

絹本著色
幅

同 京都市 高臺寺藏

釋迦八大菩薩像(國寶)

絹本著色
幅

同 奈良縣 松尾寺藏

東征繪傳(國寶)

紙本著色
卷(五卷ノ内第四)

同 鎌倉 唐招提寺藏

地藏菩薩十王曼荼羅圖(國寶)

絹本著色
幅

同 室町 能滿院藏

聖德太子御像(國寶)

同

滋賀縣 成菩提院藏

十王圖(國寶)

絹本著色
幅

同 京都市 二尊院藏

高野山靈寶館特別展

十一月一日—七日 同館

例年の通り秋季特別展として、同山の最も優れた什寶を陳列した。

古美術展覧會・展觀

出陳目錄(國寶のみ抄録)

五大力菩薩 弘法大師筆 三幅
清盛血曼荼羅 傳淨明筆 二幅
普賢延命菩薩 毘沙門天王 儀惠心僧都筆

阿彌陀如來三尊 紅玻璃色阿彌陀 花鳥屏風 直庵筆 一雙

文殊菩薩 傳珍筆 當麻寺創立圖 高野山古圖

後白河法皇御手印狀 後醍醐天皇御手印狀 織田信長朱印狀 豐後指點

町石建立供養願文 獨鈷 弘法大師請來 三鈷 同 二個

三鈷 同 一個

五鈷 同 一個

三鈷 同 一個

文殊菩薩及使者像 阿彌陀三尊金銅像 釋迦如來及使者像 柿木九尊佛 阿闍如來 螺鈿唐繪三衣函 金銅佛飾鉢

佛像の部は五月陳列に同じ

新刀名作展

十一月一日—七日 上野・松坂屋

日本刀顯彰會主催、文部省後援。全國の藏刀家より慶長以降に於ける名作刀を借り蒐めて展觀した。國寶一點重要美術品八點の出陳があつた。

白鶴美術館第八回秋季展覽會

十一月一日—二十日 兵庫縣・同館

本年度秋季展觀として同館蒐藏品の一部である支那古

度量器、酒器、茶器(天目類)、其他近世の文人畫等計四十四點を陳列した。尙今季開催中の収入は擧げて事變恤兵金として獻納した。

陳列目錄

量器、酒器其他

唐銅尺 唐鳳花紋嵌金曲尺(河南省洛陽出土)

唐鑲金雕花紋尺 鑲金刻花紋尺

漢銅尺 漢牙尺(洛陽出土)

車馬人物繪彩畫尺 白牙目盛尺

黃牙目盛尺 唐花鳥寶相華影象牙尺

周銅素紋錐斗 周犧首饗餐紋柄銅勺

漢銅鳳文量斗 唐鑲金盃

唐鑲金薩珊式花卉禽獸紋銀洗 唐鑲薩珊式八花菱形銀盃

唐鑲金花并鳥獸紋菊座疊付銀盃 唐鑲金六花式臺付銀盃

周銅饗餐陽地紋簋 周銅饗餐陰地紋簋

唐砂張銅香木壺 唐鍍金塔形銅盒子

唐鍍金箭筒透形火舍香爐 唐銅鍍金弦紋奩

類 純本水墨山水圖 絹本墨畫山間月出圖

絹本青綠雪中山水圖 絹本淡彩雪景山水圖

絹本淡彩松林山水圖 絹本淡彩秋景山水圖

絹本淡彩松供壽圖

類 山陽筆

田能村竹田筆

其名梅屋筆

其名梅屋筆

紙本淡彩
渡邊華山筆

一卷 大橋新太郎藏

奈良帝室博物館繪畫陳列

十一月 同館

奈良帝室博物館十一月陳列替繪畫は左の通りであつた

水天像(國寶) 十二天像ノ内

絹本著色 一幅

真觀 奈良縣 西大寺藏

慈恩大師像(國寶)

絹本著色 一幅

藤原 同 藥師寺藏

大威德明王像(國寶)

絹本著色 一幅

同 同 唐招提寺藏

天台高僧像(國寶)

絹本著色 二幅(出陣八幅ノ内)

同 兵庫縣 一乘寺藏

安鎮曼荼羅圖(國寶)

絹本著色 一幅

鎌倉 下關市 國分寺藏

不動明王二童子像(國寶)

同 同

兵庫縣 瑞瑠寺藏

扇面法華經(國寶)

紙本著色 二幅

藤原 大阪府 四天王寺藏

地藏菩薩像(國寶)

絹本著色 一幅

鎌倉 滋賀縣 淨信寺藏

十界圖(國寶)

絹本著色 一幅

同 同 來迎寺藏

大威德明王像(國寶)

絹本著色 一幅

同 奈良縣 談山神社藏

天台大師像(國寶)

同 同

大津市 園城寺藏

東征繪傳(國寶)

紙本著色(卷ノ内五面)

同 奈良縣 唐招提寺藏

五大力吼像(國寶)

絹本著色 一幅

同 兵庫縣 一乘寺藏

地藏菩薩繪緣起

絹本著色 一幅

同 奈良縣 金剛山寺藏

華嚴海會菩薩圖

絹本著色 一幅

同 奈良市 東大寺藏

眞言八祖像(國寶)

三幅

同 兵庫縣 淨土寺藏

金剛界曼荼羅圖(國寶)

紫綾金銀泥繪 一幅

同 奈良縣 子島寺藏

十二天像(國寶)

絹本著色 一幅

同 滋賀縣 西明寺藏

十六羅漢圖(國寶)

絹本著色 一面(十面ノ内)

同 奈良縣 唐招提寺藏

十一面觀世音菩薩像

絹本著色 一幅

同 同 松尾寺藏

十王圖(國寶)

絹本著色 一幅

室町 京都市 二尊院藏

(初江王國)

紙本著色 一卷(二卷ノ下)

同 同 清涼寺藏

融通念佛緣起(國寶)

同 同

同 同 清涼寺藏

十二月

上田恭輔蒐集東洋古陶磁展

十二月一日—七日 大阪・松坂屋

支那古陶磁展

十二月三日—七日 大阪・松坂屋

大藏會展觀

十二月五日 小石川・細川侯爵邸

大藏會の第二十三回例會として聖德太子奉讃會後援の下に細川侯爵家所藏の支那、印度の石佛數十軀及び法隆寺所藏經卷の一部を借用展觀に供した。

色繪銅島展

十二月九日—十九日 大阪長堀・高島屋

大塚松巧藝畫古名畫幅展

十二月十四日—二十日 日本橋・高島屋

充美會主催畫、茶器、古美術特別大展覽

十二月十六日—二十一日 大阪・阪急百貨店

東京帝室博物館繪畫陳列

十二月 同館

東京帝室博物館十二月陳列替繪畫は左の通りであつた

聖德太子繪傳(御物)

絹本著色 一幅

同 鎌倉時代 四幅

十王圖

同 同

同 十幅 本館藏

繪圖屏風

紙本金地著色 八曲

同 桃山時代 一隻 同

商山四皓圖屏風(國寶)

紙本金地著色 六曲

同 友松 一雙 妙心寺藏

黃石公張良圖屏風

紙本金地著色 六曲

同 山樂筆 一雙 本館藏

保元平治合戰繪卷(模本)

二卷 本館藏

源平合戰圖屏風

紙本金地著色 六曲

同 江戶時代 一雙 同

宇治川合戰圖屏風

紙本著色 六曲

同 同 一雙 同

鬼基打圖

絹本淡彩 一幅

同 明治時代 一幅 同

菊花圖

絹本著色 一幅

同 同 一幅 同

群鹿圖

紙本著色 一幅

同 同 一幅 同

瀟湘八景圖

紙本墨畫 二幅

同 同 二幅 同

江戸山王祭禮圖

絹本著色 一幅

同 同 一幅 同

溪山清趣圖

野口小瀨筆 一幅

同 同 一幅 同

近世職人畫繪卷

紙本淡彩 三卷

同 同 三卷 同

奈良帝室博物館繪畫陳列

十二月 同館

奈良帝室博物館十二月陳列替繪畫は左の通りであつた

毘沙門天像(國寶)

絹本著色 一幅

同 藤原 奈良市 海龍王寺藏

千手千眼觀世音菩薩像(國寶)

同 同

同 鎌倉 奈良縣 金峯山寺藏

寶冠阿彌陀如來像(國寶)

同 同

同 滋賀縣 長命寺藏

不動明王二童子像(國寶)

同 同

同 大津市 園城寺藏

阿彌陀如來十六尊像

同 同

同 奈良縣 松尾寺藏

華嚴五十五箇所繪卷(國寶)

紙本著色 一卷

同 同 同 奈良市 東大寺藏

東征繪傳(國寶)

紙本著色(卷ノ内三)

同 鎌倉 奈良縣 唐招提寺藏

如意輪觀世音像(國寶)

絹本著色 一幅

同 滋賀縣 寶嚴寺藏

十六羅漢像(國寶)

絹本著色 二幅

同 同 同 同

(第十一尊者)

絹本著色 一幅

同 同 同 同

淨土曼荼羅圖

絹本著色 一幅

同 奈良市 極樂院藏

古美術關係彙報

一月

國寶名古屋城金鱗盜難

一月六日午前十一時五十五分、名古屋市國寶名古屋城大天守櫓尾（北側雄のみ）の金鱗六十一枚（内二枚殘存）が毀損盜難に罹れるのを同城實測中の掛員が発見した。直ちに地方廳及文部省に報告すると共に手配をした處、同月下旬、犯人佐々木賢一を逮捕した。其の自白に依れば一月四日大阪より來名し、拜觀に藉口して城内に侵入、小天守閣に潜伏、同夜窺取の上翌日未明城外に逃走、五日未明歸阪の上事情を知る同市貴金屬細工業根本靜及印刷ブローカー水樋芳曉の助力を得て加工變形の上單獨或ひは共謀の上賣却處分し、一部は右兩名に於て寄藏して居たものであつた。三月十二日名古屋區裁判所に於て佐々木を窃盜罪及國寶保存法違反として懲役十年、其他の二名も贓物牙保寄藏の罪として判決言渡があり、服罪した。毀損せる鱗は名古屋市に於て文部省の指示を受け原狀の通り修復した。

道府縣社寺兵事課長協議會開催

一月二十二日文部省に於て道府縣社寺兵事課長協議會が開催され、宗教局所管事項に付協議したが、保存課に關するものは一、史蹟名勝天然紀念物保存管理狀況

視察方の件一、神社寺院公共團體の所有に屬する國寶の管理に關し注意方の件一、神社寺院公共團體の所有に屬する國寶の破損又は損傷狀況調査方の件等、其の他、國寶管理の取締に關する種々の件案に付協議を重ねた。

重要美術品等調査委員會開催

一月二十五日文部省に於て重要美術品等調査委員會を開催、名古屋市井上藤太郎所有「冷泉爲恭筆嵐山圖一幅」の重要美術品認定の件を審議した。

二月

乙寶寺國寶燒失

二月六日午後七時三十分頃新潟縣北蒲原郡乙村大字乙所在乙寶寺境内大日堂より出火し、該堂一棟を全燒した。堂内安置の國寶木造胎藏界六日如來、阿彌陀如來、藥師如來坐像三軀は孰れも燒失し、直ちに地方廳及文部省に報告された。出火原因は大曼荼羅會執行準備中の火氣の不始末に由るものである。

白山神社國寶盜難

被害日時是不詳であるが、二月十二、三日頃京都府久世郡宇治町村社白山神社本殿内陣脇の間に安置の國寶木造十一面觀音立像一軀が盜難に罹つて居るのが同月十八日社掌により發見された。附近捜査の結果本殿床下

に同觀音の光背が三つに割れて捨ててあるのが拾得された。犯人は未だ逮捕に到らない。

國寶保存會開催

國寶保存會は二月二十六、二十七日の兩日に互り文部省に於て會議を開催し、建造物京都市妙法院所有「蓮華王院太閤塀」外九件及寶物類東京市男爵郷誠之助所有「紙本墨畫寒山圖一幅」外百五十七件の國寶指定を審議した。其の他、寶物類法隆寺所藏の「國寶」外二件及建造物京都市「仁和寺二王門」外四件、京都府「相國寺本堂附玄關廊」外三件の維持修理費補助の件を附議し、又富山縣「瑞龍寺法堂」外五件の現狀變更許可の件を審議した。

三月

蓬萊園の消失

松浦伯爵家の所有に係る淺草區向柳原町の蓬萊園は此度同家より鴻ノ池信託の手を経て大森の松尾由次郎に買却され、更に東京市に委譲されることに決した。市では園内の潮入りの池を埋立て忍ヶ岡高女の校舎を建てる筈で、江戸時代の名園が失はれることになつた。尙三月二日、庭園愛好家が參集し同園を觀賞して名残を惜んだ。

東大寺國寶盜難

被害の日時は詳かでないが二月中旬より三月上旬に至る間に東大寺三月堂本尊國寶不空絹索觀音立像の一部が盜難に罹り、三月七日堂守の

發見するところとなり、地方廳及文部省に報告された。直ちに手配の上犯人を捜査中であるが未だ逮捕に到らない。

滿洲國遺代壁畫古墳發見

黒田源次博士は三月十三日遼陽の東三十支里石岫子屯内、石硯山の東南斜面の畑中に昨冬發見された壁畫古墳を調査した。右古墳は直徑約二・四〇—二・六〇米の圓形の一室で下部は切石又は磚にて積上げ、高さは約一・一—一米、上部は穹窿狀で磚を以て築き、持送り式の積み方による。壁畫は石壁の上に土及び漆喰を塗り、その上に毛筆を以て強く太い墨線を以て描き、間々淡彩を加へたもので（唇、襟、裝飾に朱を用ひ又衣服に薄き空色を用ひたる處あり、風景の空は空色を用ふ）室の正面に四面の風景畫を存し何れも朱色の縁をとり緞帳を示すもの、如く、右側には祭器若しくは樂器の如きものを持つ男女の立姿次に五人の樂手の樂を奏せる狀を圖し、左側も略々右と同様の構圖で、毀落は甚しいが色彩は鮮明である。年代は墓の形式、圖中の人物の服裝及近代特有の磚等より推して近代の古墳なること疑ひ無く、ワリーマンハと共に學術上重要な發見であることが判明した。（圖版九六頁參照）

鳥居龍藏博士渡伯

鳥居龍藏博士はブラジルへの文化使節として外務省文化事業部から派遣されることになり、三月十三日神戸出帆のりお・で・ぢやねいろ丸で渡伯した。

國寶姫路城西の丸損壊

三月十九日

午後四時頃姫路市國寶姫路城「ろ」の門附近に於て「大阪夏の陣」ロケーション中の松竹下加茂撮影所の一行は、大阪落城の場面撮影を目的に、火氣嚴禁の城内に於て火藥を使用し、「ろ」の門及其東方土塀を破壊、且つ重輕傷者數名を出した。當時西の丸に於て直營工事施工中の文部省掛員より直ちに本省に急報あり、本省に於て調査を進めると共に姫路検事局に於ては事件の責任者松竹側助監督日夏英太郎事許泳、同楠田清、火藥裝置を請負つた千葉富之助等に付取調の上國寶保存法、史蹟名勝天然紀念物保存法違反等を以て起訴した。而して昭和十三年一月二十七日神戸地方裁判所姫路支部に於て言渡した判決に對し、檢事に於て承服し難き點ありとして控訴をなし、大阪控訴院に於て審理した。

奈良帝室博物館出陳佛像畫供養會

奈良帝室博物館では三月二十一日本館内第一室に於て華嚴宗大本山東大寺一山衆僧に依り、春季佛像畫供養會を執行した。

根津嘉一郎古美術品を寄贈

根津嘉一郎

一郎は此程國際親善に資する爲め其の所藏する支那天龍山石窟の石佛の首四十二個の中三十個を英、獨、佛、伊、和、瑞典等六箇國の國立博物館へ各々五個づつ、東京大公使館を通じて贈呈した。又東京帝室博物館へも三月二十六日四個を寄贈、尙七月六日には白耳義の國立博物

館宛に同じく四個を、能衣裳能面等と共に寄贈した。(東朝三、二七による)

誕生釋迦佛像發見

明珍恒男外十數名

名は三月二十八日奈良縣宇陀郡内牧村の悟眞寺を調査した處精巧な誕生釋迦佛像一軀を發見した。之は身長四寸六分弱臺座から手先きまで七寸二分強、重量二百廿匁の銅製立像で、形式手法の勝れた奈良朝前期の作品と見られる。(大毎三、二九)

重要美術品等調査委員會開催

文部省

省に於ては三月三十日重要美術品等調査委員會を開催、繪畫東京市加藤正治所有「默庵筆紙本墨畫布袋圖」外二十四件、彫刻十七件、文書、典籍、書蹟八十四件、刀劍四十三件、工藝品及考古學資料五十七件、建造物九件、合計二百三十五件の重要美術品認定の件を審議した。

關口芭蕉庵燒失

東京府史蹟に假指定されて居た小石川區關口臺町の關口芭蕉庵が三月三十一日午後燒失した。同庵は往昔龍穩庵と稱し、松尾芭蕉が小石川水道改修の節に此所に於て工事を監督した。後芭蕉庵と稱せられ、江戸俳諧文學濫觴の地となつたものである。

四月

滿洲國間島省內古蹟調査

藤田亮策

鳥山喜一の兩名は滿洲國文教部の委嘱により、四月四日より約三週間滿洲國間島省內の古蹟を調査した。範圍は同省延吉、琿春の二縣で石器時代の遺物、高句麗式

土城、山城の分布、古墳、渤海土城址等を尋ねて踏査を行った。(考古學雜誌二七ノ八彙報による)

朝鮮扶餘に於ける文様磚の發掘

三

月初旬朝鮮忠清南道扶餘郡窺岩面外里の一丘陵に於て珍奇な文様の方形磚十數枚が發見され、總督府に報告された。依つて朝鮮古蹟研究會は右の調査の急を要するを認め、十一年度事業の一つとして有光教一、米田美代治の兩名を派遣、四月中旬以降凡そ二週間に亘り同附近遺蹟の調査を施行した處、更に多數の文様磚、瓦當、土器、陶器、鐵器等を發掘した。

其内文様磚は破片共に凡そ百五十個を算へ、孰も同形、完形品は正方形で、一邊の長さ約二十九釐、厚さ約四釐平均で、文様の種類は蓮華文を始め、渦雲、鳳凰、蟠龍、蓮座鬼形、岩座鬼形、人物山景、鳳凰山景等八種に及び、其の年代は百濟時代、扶餘遷都以後の遺物と推定される。同地方は百濟の都址であり乍ら其の遺蹟遺物に乏しいだけに、今回の發掘は昨秋の扶餘面軍守里に於ける寺址の發掘調査と共に百濟時代の研究に貴重な資料を提供したものである。(考古學雜誌二七ノ一一に依る)(圖版九六頁參照)

高野山根本大塔落慶法要

弘法大師

千百年御遠忌大法會記念事業の一つとして、五ヶ年の日子を費して建立された高野山根本大塔の落慶法會が、四月二十日から二十一日間一山を擧げて盛大に嚴修された。

史蹟名勝天然紀念物調査會

四月二

十一日文部省にて史蹟名勝天然紀念物調査會が開催され、史蹟明治天皇本願寺舊大教校御小休所外四十六件の指定の件、史蹟及名勝小石川後樂園の一部解除及地域追加の件、其他名勝及天然紀念物の指定に關する事項が審議された。

五月

川崎市加瀬の古墳發掘

昨年舊神奈

川縣橋樹郡日吉村加瀬に於て前方後圓墳(軸長約九十米、後圓部の高さ十米)及其陪冢と見られる圓墳が發見されたが、慶應義塾大學文學部内三田史學會は五月六日より約三週間柴田常惠指揮の下に大規模な發掘を行つた。その結果木炭藪の完全な遺構を發掘し得、更に粘土槨と木炭槨が同一遺跡に水準を異にして構築されてゐることが判明する等、色々な意味で學界に興味を投げた。

ハツパー記念碑除幕

昨年末逝去した米國人ジョン・スチュアート・ハツパーは生前浮世繪研究家として知られ、ヒロシゲ・ハツパーの異名さへとつたが故人の遺志に依つて、淺草區北松山町東岳寺境内、廣重の墓の隣にその墓碑が建立され、五月三十日除幕式が舉行された。

式場にはハツパー夫人を始め、米國總領事、藤懸靜也、野口米次郎等故人の知友五十餘名が列席した。

建築史研究會創立

足立康、大岡實

福山敏男等七名は伊東忠太を顧問に推して「建築史研究會」を組織した。建築史、古關係學科の研究を目的とし、單行本、定期刊行物出版等の事業を計劃して居る。(便覽三四頁參照)

「春日權現驗記」撰寫完成 東京帝室博物館では御物「春日權現驗記」全二十卷の撰寫を五月に完成した。執筆者は前田氏實、永井幾麻の兩名で、大正十四年八月に着手したものである。

六月

皇太后陛下奈長帝室博物館に行啓

皇太后陛下には六月二十七日午後四時三十分奈長帝室博物館に行啓遊ばされ、山口館長御先導、杉總長御説明申上げ、館内陳列の彫刻繪畫歴史工藝の古美術品を御鑑賞遊ばされ午後五時五十分還御あらせられた。

國際古美術複製協會發會

以來子爵大河内正敏を準備委員總代として設立計畫中だつた國際古美術複製協會は子爵大河内正敏、杉榮三郎等を理事とし、侯爵細川護立、伊東忠太等を顧問として、六月二十八日神田一ツ橋學士會館に於て其の發會式を舉げた。其の主なる目的事業は、我國の古美術を模寫複製に依り海外に宣揚すると共に、海外各國の優秀な古美術品の模寫、模型を招来して、相互美術の鑑賞發達、國際間の理解親善に寄與せんとするにある。(便覽三五

頁參照)

國寶保存會開催

國寶保存會は六月二十九日文部省に於て開催、建造物大阪府吉村要治郎所有「住宅」外六件及寶物類東京市公爵三條公輝所有「紙本墨書五臣注文選一卷」外十八件の國寶指定を審議した。其他、京都市「仁和寺仁王門」外二十件、京都市「建仁寺方丈」外三件、及法隆寺等の建造物並京都市妙法院所有「木造千手觀音立像八十軀」外五件の維持修理費補助の件、神奈川縣原富太郎所有「月華殿」外十件の現状變更許可の件等の諸事項を審議した。

濱田耕作教授京大總長就任

京都帝國大學教授文學博士濱田耕作は五月下旬行はれた京都帝國大學總長の選舉に當選し、六月三十日附を以て任官された。

七月

重要美術品等調査委員會開催

重要美術品等調査委員會が七月十三日文部省に於て開催され、東京市岸條一所有「紙本著色狹衣物語斷簡」外三十四件、彫刻六件、文書、典籍、書蹟百十一件、刀劍三十八件、工藝品及考古學資料七十件、建造物十一件、合計二百七十件の重要美術品認定の件が審議された。

蒙古元上都址の調査

七月中旬東亞考古學會は、外務省對支文化事業部の後援で、原田淑人指導の下に蒙古ドロンノ

ールの西北九邦里許にある元上都址を中心として調査を行つた。此の遺址は灤河上流の閃電河北畔に東西五町弱、南北五町強の塹築の内城と約十三町四方の石築の外城とを存して居り、更に外城の北邊と西側とはマルコ・ポーロが「狩場」と記してある區域があり、外城東壁の北端から北に延びた土壁と、同じく南壁西端から西に向つてあるものとが、これを周つて築かれてゐる。壁は西、北ともに二十町許りで、内城のうちには宮殿その他の建築址が最も多く殘存する。一行は附近一帶の遺蹟の調査及種々の考古學的遺物の採集を行つたが、今回は下調査であり、次年度に於て更に精査を行ふ豫定である。尙一行は同調査の前後に、熱河の承德、深平ならびに赤峰附近の踏査をも行つた。(考古學雜誌二七ノ九號報による)

藥師寺伽藍の調査

日本古文化研究所では昭和九年、十一年及十二年度の事業として、同所委員工學博士足立康に委嘱して、南都藥師寺の占地及び伽藍配置の復原的研究を中心とする實測その他の基礎調査を行つた。右調査の報告は日本古文化研究所報告第五として七月公刊された。

八月

唐古遺跡の調査

唐古遺蹟は奈良縣磯城郡川東村大字唐古部落の東方、唐古池を中心とする平坦部で、今回は唐古池

を主としての調査が行はれた。同遺跡の性質は我彌生式時代を主流とし、極めて僅かに祝部土器の時代に移つてゐることを示してゐる。即ち、石器と金屬器を併用した時代、即金石併用期に相當し我上代文化を考察する上には是非必要な位置に在る。

右調査は昭和十一年の冬から十二年夏へかけて行はれたのであるが、唐古池底全面に亘り、點々として所謂堅穴住居の跡が檢出された。先づ住居の狀態としては堅穴を淺く掘つて、その上に植物性の屋蓋を設けたことが知り得られ、又小副室とも言ふべき若しくは倉庫の用をなしたらしい、小さな堅穴が住居に附帶して設けられてあつて、何れにも、使用した土器、或は貯藏用と覺しき土器の埋藏せるを見た。

他の遺物として木器・漆器・果子の種核等も多く出土し、又獸骨類と共に骨・牙製品も尠くなく、當時の生活狀態がまざまざと吾人の眼前に展開された。而も之を補けるものに原始繪畫を有する土器があつて、その描く所舟を操る人物あり、猪あり鹿ありて、出土の遺物と兩々相俟つて堅實な考古學的寄與をなす場合も多い。

右の如く唐古遺跡は、我彌生式時代の代表的な現示を成してゐるのであるが、他の一方、地域的にも大和平野の中央部に位置し、いろいろの視野から檢討さるべき遺跡である上に、從來我考古學的發

堀として、數千坪の面積を一掃して行ふ様なことも非常に少なかったから、あらゆる意味で唐古遺跡の調査は重要な意義を持ち一つの劃期に價するものである。

本調査の結果は京都帝國大學文學部考古學研究報告第十六冊として出版すべく目下同考古學教室員に依つてその調査を進めてゐる。(圖版九六頁参照)

九月

雲崗石佛の保護 今次事變の戦火により貴重な支那文化遺跡が毀損されるのを防止する爲め、皇軍各部隊は萬全の手段を講じつゝ、あるが、大同に入城した○

○部隊長は雲崗の石佛が戦鬨の混亂に乘じ、不逞の徒により搬出され漸次荒廢に歸しつゝ、ある現狀に鑑み、九月二十日佛像保存令を發布し盜竊者は嚴罰に處する旨を布告した。(東日九、二二に依る)

奈良帝室博物館出陳佛像供養會

奈良帝室博物館では九月二十三日本館内第二室に於て法相宗大本山興福寺一山衆僧に依り秋季佛像供養會を執行した。

高句麗古墳壁畫の撮影

京城帝國大學法文學部美學研究室では服部報公會の資金を得て、昭和十一年以來朝鮮にある高句麗古墳壁畫の撮影を行つて居たが、本年は其第二期事業として、九月二十七日から着手して約二十日間に平安南道龍岡附近に散在する星塚、龜神塚、狩獵塚

及び同道順川の天王地神塚の壁畫撮影を了つた。是等の古墳は概して規模小さくして實大撮影を行ふことを得ず、且つ剥落汚損甚しく、全圖様を得難いものも多から、四切、中板を以て適宜縮寫した。

獨逸へ古畫複製贈呈 原田積善會は

來朝中のドイツ國立博物館總長キュンメル博士を通じてヒトラー宰相に對して法隆寺金堂壁畫の複製を贈ることになり、九月二十七日、獨逸大使館に於て右贈呈式を舉行した。(東朝九・二八に依る)

十月

正倉院寶庫曝涼 正倉院寶庫の恒例

曝涼は十月二日より同月三十日まで定められ、その二日より二十一日迄を御物曝涼、調査及寫眞撮影、二十二日より二十七日迄を御物拜觀、二十八日、二十九日の兩日を寶器點查及庫内清掃に充てた。

而して開扉には侍從子爵牧野貞亮、閉扉には侍從小倉庫次が出張奉行了。尙曝涼中許可を得て拜觀を終つた人員は邦人四百六十九名、外人八十名であつた。

伯林日本古美術展開催計畫 ドイツ

國政府は日獨兩國の親善を趣旨として大規模の日本古美術展を伯林に於て明年冬開催することを計畫し、六月古美術品の借用方を駐日大使館を通じて外務省及文部省宛に懇請して來たが、其の正式交渉を行ふ爲伯林國立博物館長オットー・キュンメル博士が九月來朝した。仍つて廣田

外相及安井文相が肝煎となり、十月十四日外相官邸に各方面の識者を招待して茶會を催し、大久保利武侯を委員長とする「伯林日本古美術展覽會委員會」を創立、其の開催に努めるべく準備を進めることとなつた。尙キュンメル博士は十月十七日歸國した。

國寶保存會常務委員會開催 國寶保

存會常務委員會が十月三十日文部省に於て開催され、福井縣「氣比神宮本殿」外二件の現狀變更許可の件を審議した。

奈良帝室博物館列品收藏庫新築 奈

良帝室博物館の構内に同館列品收藏庫が宮内省內匠寮の設計並工事監督の下に新築せられ、十月三十一日に竣功した。鐵筋コンクリート造二階建てで、坪數は一八八坪餘、昨年九月に起工したものである。

滿洲國輯安十二號墳調查 六月黒

田源次博士により滿洲國通化省輯安に於て高句麗の一壁畫古墳が発見せられた。右古墳は外見上最も典型的な土塚で、特異な點は一つの封土の中に二つの獨立な墳室が左右に並んで存在して居ることである。壁畫は美道の兩壁及び側室の三壁

竝に玄室の四壁、天井等に存し、畫題は二人の下婢が穀物を白で搗き、傍に甌小屋と鞍を置く場所を描いたもの、穀倉や大瓶と二人の女性を描いたもの、虎狩、鹿狩の圖、對座する白、黒の犬、舞踊圖、從者を隨へた貴人の行列、貴人夫妻、戰鬨の圖等が其の主なるものである。

其他、副葬品として金銅の飾具、鐵刀、鐵鏃及土器類等、例の妙い貴重な資料が発見された。猶黒田博士監督の下に松永南樂は十月、約三十日間を要して右壁畫の寫眞を完成した。(圖版九六頁参照)

十一月

伊東忠太教授渡獨 東京帝大名譽教

授工學博士伊東忠太は今同外務省文化事業部より日獨文化交流教授として派遣されることに決し、十一月十四日渡歐した。伯林大學その他で日本建築に關する講義を行ふ筈である。

史蹟名勝天然紀念物調査會開催 文

部省に於て十一月九日史蹟名勝天然紀念物調査會が開催され、史蹟明治天皇御小休所舊神戸税關監視部趾及建物外十七件の指定の件其の他の事項が審議された。

ベルより考古學參考品寄贈 秘露

ツルヒーヨ在帝國名譽領事より十一月十日附をもつて東京帝國大學文學部考古學研究室宛に秘露出土の遺物二百數十點が寄贈された。之は Mochica, Chimú, T'alan を中心として出土した土器、石製品、貝製品、金屬器の類で、秘露古文化研究上貴重な資料である。(考古學雜誌二八ノ六報による)

復興東京帝室博物館竣工 復興東京

帝室博物館及事務館は財團法人帝室博物館復興興業會の委嘱に依り宮内省內匠寮臨時帝室博物館復興營造課に於て建築中

の處、六箇年に亙る大工事を竣へて、十一月十日、同會に於て落成式を舉行、次で十二月十七日、同會々長より御即位大典奉祝記念として献上せられた。

帝室博物館復興贊會は今上天皇御即位奉祝記念の事業として、民間の寄附に依り關東大震災に失はれた帝室博物館本館を一大東洋古美術博物館として復興し、之を皇室に獻上するを目的として、昭和三年九月、公傳徳川家達を會長として創立され、翌年六月財團法人に改められた。復興資金は總工費豫算を七百萬圓とし、其内參百五十萬圓は政府の補助に仰ぎ、民間の寄附金額は五百萬圓と豫定された。而して實際の寄附申込額は三百四十九萬九千四百餘圓を計上した。

以下工事經過の概略を誌すに、昭和四年九月、侯爵細川護立を會長とする東京帝室博物館建築設計調査委員會を同會内に特設して、設計に關する調査審議を遂げ、翌年十二月平面計畫の基礎案を決定したが、之を基準として設計の懸賞募集を施行し、六年四月應募を締切り、應募總數二百七十三案の中より五案を参考案として入選せしめ、渡邊仁が一等に當選した。六年十月、實施設計並工事施行を總工費七百萬圓を以て宮内省に委嘱、同省では内匠寮に臨時帝室博物館造營課を新設して造營工事一切の事務を掌らしめた。工事は五箇年の繼續事業として、昭和十一年十二月竣功の豫定を以て、直ちに實施設計に着手し、同年十一月地鎮祭

を舉行、七年十二月根伐工事に着手し、八年三月に至り實施設計の確定を見て、愈々本格的に工事を進め、十年四月上棟祭を舉行、翌十一年四月には事務館に着工し、十二年十一月六日諸工事一切を完了した。

尙總工費は事情に依り七百拾參萬圓に増額され、工事期間は約一箇年延長された。工事は一切株式會社大林組の請負ひである。本館の建築様式は東洋古美術博物館としての内容に調和せしむる目的で「日本趣味を基調とする東洋式」なる方針によつて決せられた。構造は鐵骨、鐵筋コンクリート造、地下二階、地上二階（一部中二階を設く）、總面積は六、五二二・六四四坪である。（圖版八九頁參照）

重要美術品等調査委員會 十一月十一日文部省にて重要美術品等調査委員會が開催され、東京市根津嘉一郎所有「紙本著色十二因緣繪卷」外三十一件、彫刻三件、文書、典籍、書蹟八十四件、刀劍三十六件、工藝品及考古學資料六十八件、建造物七件、合計二百四十八件の重要美術品認定の件が審議された。

伊國（法隆寺壁畫複製）贈呈 原田積善會では日、獨、伊三國防共協定成立記念として、法隆寺壁畫複製をイタリイに贈ることになり、十一月二十四日イタリイ大使館で贈呈式を舉行した。

怡土城址の調査 日本古文化研究所では昭和十一年度の事業として九州帝大の鏡山猛に委嘱して福岡縣糸島郡怡土村

に於ける怡土城の調査を行つたが、十一月右調査報告書が公刊された。怡土城は我國上代に於ける支那式城郭中最も著しきもので、天平勝寶八年より神護景雲二年に至る十二年を費して完成された本邦築城史に一紀元を劃するものである。今回の調査は城址全域の實測並城門趾、水門趾等の細部の實測を行ひ、必要によりては發掘をなし、建築遺趾を發見して實測圖を作り、又寫眞撮影等を行つた。

十二月

杉本哲郎印度古代壁畫摸寫 日本畫家杉本哲郎は印度アヂヤンター壁畫摸寫の爲め、外務省文化事業部及び日印協會の後援、京都市美術囑託として十月印度に渡り、以來アヂヤンター洞窟の所轄たるハイデラバード・デツカンニザム土人

州王國政府と再三折衝の結果、一畫面及小品二點の摸寫を許可せられ、十二月四日よりアヂヤンター四哩北方のフアルダプールに宿泊して、第一號洞窟奥正面「バドマバニー及び他一點」（推定年代六世紀）及び第十七號洞窟石柱「華を持てる男像」（推定年代五世紀末葉）の計三作を完成し、二月七日孟買に歸着した。

開基勝寶等發掘 十二月八日奈良縣生駒郡伏見村に於て土地開墾中、人夫により開基勝寶等の黄金錢が發見された。發掘遺物は金錢三十一枚、銀錢一枚、銀碗二箇、金板一枚、金塊二箇を數へた。

金錢は何れも開基勝寶の錢文を現はし、縁々にはヤスリ目の如きものあり、徑約八分、重さ約三匁五分を前後して居る。（考古學雜誌二八ノ三號報による）

帝室博物館特別資金令制定

十二月

十八日、皇室令第二號を以て帝室博物館特別資金令、同月二十日、宮内省令第四號を以て帝室博物館特別資金令施行規則が制定せられた。

帝室博物館特別資金令

- 第一條 帝室博物館特別資金ヲ置キ帝室博物館ノ陳列ノ目的ニ充ツル物品ノ購入又ハ整備ノ爲ニ必要ナル費途ニ之ヲ使用ス
- 第二條 前條ノ費途ニ充ツル目的ヲ以テスル獻納金ハ之ヲ本資金ニ受入ルヘシ
- 第三條 本資金ヲ使用セムトスル場合ニ於テハ帝室博物館特別資金委員會ノ議ヲ經ルコトヲ要ス
- 帝室博物館特別資金委員會ニ關スル規程ハ宮内大臣之ヲ定ム
- 第四條 皇室會計令第七條第二項第三項及第十條ノ規定ハ本資金ニ之ヲ準用ス
- 第五條 本資金ヨリ生スル收入ハ之ヲ資金ニ組入ルヘシ
- 第六條 本資金ニ付テハ毎年度末ニ於ケル計算書ヲ調製スヘシ
- 皇室會計令第四十五條乃至第四十七條ノ規定ハ本資金ノ計算ニ之ヲ準用ス
- 第七條 皇室會計令第二十三條及第二十八條ノ規定ハ本資金ニ之ヲ適用セス

附 則

本令ハ公布ノ日より之ヲ施行ス
財團帝室博物館復興贊會ノ獻納金ハ之ヲ本資金ニ受入ルヘシ
帝室博物館分課改正 十二月二十三日、宮内省分課規程中帝室博物館の項が

改正せられ、従来の歴史課、美術課が廢せられて列品課に改められ、別に學藝課が新設された。左に改正せられた規程を抄録する。

第十六章 帝室博物館

第五十一條 東京帝室博物館ニ經理課列品課及學藝課ヲ置キ奈良帝室博物館ニ經理課及列品課ヲ置ク

第五十二條 經理課ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一 會計ニ關スル事項

二 應用物品ノ保管出納ニ關スル事項

三 不用物品ノ處分ニ關スル事項

四 官印ノ保管ニ關スル事項

五 前各號ノ外他課ニ屬セサル事項

第五十三條 削除

第五十四條 列品課ニ於テハ列品ノ鑑査解説陳列及保管ニ關スル事務ヲ掌ル

第五十五條 學藝課ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一 事務用ニ屬セサル圖書ノ保管出納ニ關スル事項

二 列品及其ノ關係資料ノ攝影事務ニ關スル事項

三 列品關係資料ノ調査整備及保管ニ關スル事項

藤原京發掘經過

日本古文化研究所の繼續事業たる足立康博士を主査とする藤原京の本年度發掘は十一年十一月より十二年五月迄續行された。即ち前年に行つた大宮土壇南方西側の發掘を繼續せる處南端の堂の東側より前後に列び東西に横はる二棟の大殿堂趾（一六四尺に三九尺）が發見された。是に於て愈々十二堂趾に該當するもの、存在が確められたので大宮土壇の南北中心線を軸として對稱の位置を發掘したるに果して西側と同性

質のものが發見されるに至つた。而して今後東側一體からは大殿堂趾が相次いで發見される見込である。因みに今日迄發見された堂の數は通計十一棟を算するに至つた。

朝鮮古蹟研究會十二年古蹟調査

朝鮮古蹟研究會の昭和十二年度に於ける事業計畫は宮内省の御下賜金並に日本學術振興會の助成金に基いては、前年度の方針を繼承したが、高句麗遺蹟に就ては古墳の外に新たに寺址、殿址等の調査を行ひ、次に新羅の佛教遺蹟としての南山の徹底的調査を開始して其の報告書及び圖版の作製に着手し、又百濟の古墳發掘を實施（昭和十三年四月）する等、前年に引續く樂浪土城址、高句麗古墳の發掘と相俟つて、孰れも新發見を伴ひ、貴重な成果を收めた。

先づ調査の主對象をなせる高句麗遺蹟のうち、古墳の調査は、小場恆吉指揮の下に澤俊一、田窪眞吾兩名は平安南道大同郡林原面高山里所在の古墳群に就いて専ら壁畫の發見に力を注ぎ、九月十七日より十月二十日に互に、封土の比較的完存する大中墳四基と高山里第三號墳及び特殊の様式として疑問を残せる丘墳二基を發掘した。又大同郡大實面安靜里、西綺里に存する大小七基の古墳群中より主なるもの五基を選択し前者と並行して十月八日より十一月一日に互に調査を行つた。双方とも既掘の形迹があり、遺物の見るべきものは尠かつたが、高句麗古墳

の構造の特殊性を知り、封土と石槨との關係並に槨室の塞閉裝置に就き新に知見を加ふる處があつた。特に高山里の一古墳は側室に壁畫を残存し、他の一墳にては前室の兩側に特殊構造の小翼室を伴へるを確め、又同地並に西綺里にて各々大墳壟下に、二個の槨室並築の狀態を明にするを得た。此の他十月二十五日より十一月二日迄野守建指揮の下に江東郡晚達面勝湖里邑の北東、晚達山麓に於ける古墳群を調査し、十四基を發掘した處、高句麗古墳に於ける最初の確實なる裝身具とも稱すべき金製耳飾及び銅製腕輪等の類を發見した。其の形狀、性質は新羅、百濟の南方系のそれと同一で、高句麗文化の研究に重要な資料となるものである。別に完形に造い二個の土器が發見された。

高句麗の佛教遺蹟は從來殆ど未調査の儘であつたが、昭和十年の藤田研究員の實地調査に基き、小泉顯夫外三名は五月十二日以降十七日間を費して、平安南道平原郡元五里廢寺址の發掘を行つた。其の結果寺址中金堂址と思はれるものの砌の石列、並に礎石群を検出し、又多數の塼佛、瓦當等を發見して此の方面の研究に一轉機を生ぜしめた、又八月平壤府内萬壽臺に於て、高句麗の殿址と思はれる建築物基址が土木工事に依り偶然出現せるにより、八月二日以降十八間に互に、調査を施行し、其の礎石の列並に石垣、砌石等の狀態を知り得て、當代の建築を

推す上に新資料を加へた。

次に樂浪遺蹟の發掘は原田研究員主査となり、高橋、駒井、田窪の三名が參加して五月二十九日より六月二十六日迄平安南道大同郡大同江面土城里に遺存する土城址の調査を實施した。同遺跡は既に昭和九年及十年の兩度に互に調査を行つて居り、地域の廣大なる爲め未だ其の全貌を明にするに至らないが、調査區域のうちより建築基址と覺しきもの、外、新たに井戸址塼築の遺構址等が發見された。又四月上旬、平壤府外梧野里の採土場より偶然一古墳が發見され、田窪研究助手調査に當り、異色ある塼窰内に於て四個の遺骸を埋葬せし原形を明にし、副葬品を得て、當代墓制の研究に一の新資料を加へた。

慶尙北道慶州南山の調査は數年前より藤田、小場兩研究員、小泉顯夫其の他の人々により隨時行はれたが、南北二里に互る山麓、谿谷は悉く佛蹟靈場的觀があり、寺址、古墳、古城、石塔、磨崖等調査に従つて其數を増し、而かも斷崖絶壁の間に散在し、調査は困難を極めた。仍て同會は、今回徹底的な調査を實施して悉く之を配置圖に收め、また模寫と寫真とを以て記録し、報告書として圖録刊行の計畫を立てた。この作業は小場研究員が擔當し、其の調査に依り幾多の新發見を齎し、漸次完成に近づきつゝある。尙慶州に於ては別に今春偶然に發見された城東里並に狼山南麓の二個の特殊遺構址

に對し、齋藤研究助手が調査發掘を行ひその結果、兩遺蹟共新羅一統期に屬し、前者は極めて複雑なる建築物の一部なることが判明し、南山の佛蹟調査と併せて注目すべき成果を収めた。(朝鮮古蹟研究會、昭和十二年度古蹟調査報告による)

十二年度國寶建造物修理

十二年度修理竣工建造物 十二年度に於て修理竣工せる建造物は左の通りである。(竣工順)

名 稱	所在府縣	總工費
朝光寺本堂	兵庫	五、二〇、七三
勝覺院塔婆(多寶塔)	大阪	三、〇七、六六
知恩院小方丈	京都	三、六四、四〇
附步廊		
東福寺禪堂	同	六、四六、六六
首里城守禮門	沖繩	六、八三、一五
護國院鐘樓	和歌山	八、七三、〇〇
淨瑠璃寺本堂及塔婆	京都	一四、五四、四六
法隆寺地藏堂	奈良	八、七五、九六
古熊神社本殿	山口	九、七〇、六六
松生院本堂	和歌山	三、七〇、〇〇
南明寺本堂	奈良	三、〇六、五二
本願寺飛雲閣、能舞臺附橋掛及鐘樓	京都	一七、六六、四五
染羽天石勝神社本殿	島根	一〇、三〇、〇〇
金地院方丈	京都	四、六三、〇〇
八幡宮本殿	愛知	三、四七、七二
東福寺愛染堂	京都	二、三二、六六
春日神社本殿	和歌山	四、三三、四一
東大寺大湯屋及法華堂北門	奈良	四、三〇、三五
東福寺月下門	京都	二、七二、五五

都久夫須麻神社本殿 滋賀 二五、六三、二〇
阿彌陀堂 宮城 一、六六、〇〇
松山城乾門外七棟 愛媛 三、六六、六六
興隆寺本堂 同 三、一六、六六

前表の各建造物は昭和十年より同十二年にわたり修理に着手、同十二年十二月迄に竣工を見たものであつて、根本的或は部分的に維持修理が加へられたものである。各棟共修理に際しては慎重に調査し、建造物の保存に支障なき限り舊材料を再用すると共に、國寶たるの價値を減殺することなき様萬全の注意が拂はれた。

尙近世の改變にかゝる部分で、保存上己むを得ざる場合、或は建造物の構造意匠又は形式手法の復舊整備上必要なる場合は、慎重調査の上夫々適確な資料に據り復原又は復舊された。各棟に付き略説すれば左の通りである。

朝光寺本堂

兵庫縣加東郡米田村 朝光寺大正十二年三月二十八日指定、構造形式・桁行七間、梁間七間、單層、屋根四注造、本瓦葺

當寺は白雉二年法上上人の草創にかゝり、現本堂は永正六年赤松義材の再建にかゝると傳へるが、一部に現存する料拱、木鼻、棧唐戸、連子窓、巴瓦等には鎌倉時代末のものが混入してゐる。方七間、單層四注造の大建築で、木割雄大、宏壯の風を帯びてゐる。内陣後壁板の墨書によつて應永卅五年に屋根葺替が行はれ、又内陣の厨子佛壇は應永卅年の作であるこ

とが分つた。その後室町時代末より江戸時代に互つて幾回かの修造が加へられ、大いに原形を損じた。正面の向拜は文政十二年の造作で、手挾、墓股等に其の旨の墨書がある。今回努めて舊構を維持し、古材を再用して根本的修理が加へられた。(圖版九二頁参照)

勝覺院塔婆(多寶塔)

大阪府大阪市南區天王寺夕陽丘町 勝覺院、明治四十年五月二十七日指定、構造形式・三間二層塔婆、屋根本瓦葺

勝覺院は推古天皇元年聖德太子の創立にかゝると謂ふ。國寶多寶塔は修理に際し發見した擦の墨書により、元和六年片桐主膳正を奉行として再建したものにかゝることが判明した。塔の規模は比較的大きく、且つ全體の權衡も極めてよく、木割雄大、繪様彫刻亦剛健の風を帯び、桃山時代の特徴がよく現はれてゐる。尙屋根瓦に寛文十年の銘のあるものが相當に多く、その際修理を施されたことを物語つてゐる。當塔婆は從前から相當破損し且つ北に傾いてゐるが、偶々昭和九年秋の颱風のため一層北に傾斜し、各層屋根瓦が散亂し、上層の龜腹、相輪も破損したため、根本的修理が加へられたのである。(圖版九二頁参照)

東福寺禪堂(選佛場)

京都府京都市東山區本町通十五丁目 東福寺、明治三十一年十二月二十八日指定、構造形式・桁行九間、梁間六間、重層、上層屋根切妻造、本瓦葺

創立沿革不詳、現今の堂は寺傳に貞和二年の再建にかゝると謂ふ。然し建築の形式手法からは室町時代中期以後の營造にかゝると認められる。桁行九間、梁間六間、重層の壯大な大建築で、上層屋根切妻造、本瓦葺、全體唐様の手法になり、禪刹遺構中一種獨特の形式を示してゐる。點で重視すべきものである。近年内外に互り破損甚しく、保存上拾置き難き状態に立ち至つたため、昭和十年十月根本的修理に着手同十二年四月末竣工を見たものである。

知恩院小方丈 附步廊

京都府京都市東山區新橋通大和大路東入三丁目林下町 知恩院、明治四十三年八月二十九日指定、構造形式・小方丈桁行五間、梁間五間、單層、屋根人母屋造、檜皮葺、步廊 桁行七間、梁間一間、單層、屋根切妻造、檜皮葺

首里城守禮門

沖繩縣首里市、昭和八年一月二十三日指定、構造形式・三間坊樓、屋根人母屋造、本瓦葺 當守禮門はもと首里城正面大路の第二

號坊たりしもの、その構造形式及手法はよく琉球建築の特質を現はしてゐる、この坊門は初め尙清王の嘉靖年間（大永年間）に創建せられ、古名を待賢門又は首里門と稱した。尙永王の萬曆七年（天正七年）在來掲げし「首里」の榜字を「守禮之邦」と改め、冊使責臨の際に掲げ、平時は猶「首里」の扁額を用ひてをつたのを、康熙二年（寛文三年）以後「守禮之邦」の四字額を常掲するに至つた。即ち守禮門の稱呼は此の榜字に因つてゐるのである。創建後の修理に就ては其の年次を詳にしないが、屋蓋を初として軒廻、料拱其の他隨所に修補の痕が認められながら、總體としてはよく舊規を遺してゐる。修理前は基礎が不同沈下し、軸部料拱及軒廻等の各部蟻害による腐朽甚だしく、弛緩傾斜し支柱で倒壊を防ぐ状態であつた。屋根は上下層とも大破、殊に上層屋根は瓦の大部分を散失して、野地を露出し假覆を施してあつた。

（圖版九二頁参照）

護國院鐘樓

和歌山縣海草郡紀三井寺町 護國院、明治四十一年四月廿三日指定、構造形式・桁行三間、梁間二間、重層、袴腰、屋根入母屋造、本瓦葺

當院の草創は、鐘銘に「寶龜帝御極之日上人爲光所創建之梵宇而」云々とあるのに見ても古く奈良時代と考へられる。現鐘樓は今回發見の鬼瓦の刻銘によつて文祿四年の建立と推察される。形狀穩

雅。各部の手法に尙よく室町末の特徴を有してゐる。

從前各部の腐朽弛緩甚しく、支柱をたて、軒の垂下を防ぎ、素屋根を造り風雨に備へ、控柱や支柱で倒れるのを防ぐ状態のところへ、先年の風害を受け、一層破損の度を加へた、め根本的修理が加へられた。尙今回の修理に際して隅棟に振れを與へて妻勾配を緩かにし、今迄隠れてゐた大斗肘木、破風板尻等を現はし、原形に復された。（圖版九二頁参照）

淨瑠璃寺本堂（九體寺本堂）

同 三重塔（同三重塔）

京都府相樂郡雷尾村 淨瑠璃寺、明治三十年十二月二十八日指定、構造形式・本堂桁行十一間、梁間四間、一間向拜附、屋根四注造、本瓦葺

塔婆 三層塔婆、椴皮葺

當寺は寺傳天平十五年行基草創、現本堂は永承二年の再建にかゝるといふ。九體の彌陀が安置してあるので、俗に九體寺といふ。藤原時代の阿彌陀堂が多くは正方形であるのに對し、當堂は横に細長く、桁行十一間、梁間四間であり、此種形式の阿彌陀堂建築の遺構として重要なものである（正面中央の向拜は後補）。昭和十一年八月より十二年六月にかけて軒桁以上の解体修理及床板椽板の腐朽材の修理が行はれた。

塔婆は寺傳に洛中上品蓮臺寺に在つた塔を治承二年こゝに移建し、鎌倉時代に修補したといふ、塔婆輕妙にして優雅、

前時代の佛を偲ばしむるものがある。今回風害による椽皮葺等の破損が繕はれた。（圖版九二頁参照）

法隆寺地蔵堂

奈良縣生駒郡法隆寺村 法隆寺、明治四十一年四月二十三日指定、構造形式・桁行三間、梁間三間、單層、屋根入母屋造、本瓦葺

現在の建物は野棟木下端の墨書銘によつて應安五年の建立にかゝることが明かになつた。この堂はもと圓側井坊の本堂であつたことが古圖により窺はれる。當初は屋根が椽皮葺であつたが、永正十五年本瓦葺に變更し、後天正十三年修理を加へた等だが、堂の内部來迎壁裏面に記入されてゐるといふ。構造形式よく前記年次の特色をあらはし、墓股、拳鼻の彫刻は頗る精美である。

今回の修理に際しては地盤を一尺高めて保存上遺憾なからしめ、背面假設の龕を撤去した。又妻懸魚及向拜桁隠を缺いて居つたが、其の痕跡があつたので、懸魚は室生寺灌頂堂のものに、他は聖靈院大床廂桁隠に倣ひ何れも新造して取付けた。隅柱には椽の隅又首の仕口、板掛の缺きがあつたので今回廻縁を復し、正面に木階を新設し、又須彌壇勾欄の親柱には擬寶珠が補加された、尙間仕切装置は左の通り變更整備された。

一、正面兩端各一間及左側面後方一間の白壁を部戸に改む。

二、背面三間の開放であつたのを中央間は扉構に兩端各一間は白壁に夫々變更す

三、出入口及部戸の部分に明障子を復舊す。（圖版九二頁参照）

古熊神社本殿

山口縣山口市 古熊神社、大正六年八月十三日指定、構造形式・桁行三間、梁間三間、屋根入母屋造、銅板葺

應安六年大内弘世創立と傳へるが、現在の社殿は室町中期の形式に成る。棟札によると元和四年毛利秀就現地に移建、柱、幣軸、扉、料拱、懸魚等何れもよく室町中期の特徴を表はし、殊に正面料拱間にある三個の墓股彫刻は本殿建立年次の推定に最も有力なものである。内陣の厨子に「天文十六年四月大吉日造立之」の墨書あり。本殿の年代はほゞこれと一致する。建物は三間社流造、屋根はもと椽皮葺で、修理前は亜鉛鍍鐵板假葺を施してあつたが、今回銅板葺に變更された。尙正面三間は開放であつたが、部戸を入れて舊に復し體裁を整へた。

（圖版九二頁参照）

松生院本堂（不動堂）

和歌山縣和歌山市片岡町 松生院、明治三十七年八月二十九日指定、構造形式・桁行五間、梁間五間、單層、屋根入母屋造、本瓦葺

當寺は元讃州山田郡壇ノ浦洲崎にあつたのを乾元元年當國和歌浦蘆邊に移し蘆邊寺と稱したと謂ふ。當本堂は今次の修理中發見された墨書銘により、永仁六年の建立にかゝることが明かとなつた。又この堂はもと山東庄黒岩村寶光寺（今海草郡東山東村字黒岩）の堂であつたが、

慶長十八年淺野氏入國のとき現在の地に移建されたものであることが、棟木の墨書銘及鬼瓦銘によつて知られた。和様、唐様を混用した最古の遺構と云つて良く、繪様彫刻の雄健な手法等は時代の特質をよくあらはしてゐる。

既に昭和十一年修理に着手、今回次の現狀變更が行はれた。即ち敷地が道路改修により窪地となつたため、三尺盛土して地盤を高め、また修理前屋根は四注造一軒（地極のみ）であつたのを、小屋組解體中、飛檐檼・飛檐隅木、茅負、妻虹梁、同太板束、野隅木等が発見せられたので、この適確な資料に基き、入母屋造に復し二軒に改められた。尙外觀平面とも亂雑であつたが、夫々舊形が明かになつたので、舊に復された。その箇所は次の通りである。

- 一、兩側面並背面の附加物及正面椽勾欄を撤去し、廻椽を設く。
- 一、正面中央三間及兩側面前方三間並に背面中央一間を幣軸付扉構に改む。
- 一、正面兩端間各一間を櫺子窓に又背面兩端各二間及兩側面後方各二間を椽板張とす。
- 一、内陣正面兩端間の建具裝置を撤去し、正面三間兩側面各三間に格子戸を設け、背面兩脇各一間を椽板張りにし、上部の彫刻入欄間を取除き土壁に改む。（圖版九二頁參照）

南明寺本堂

奈良縣添上郡大柳生村 南明寺、明治三十九

年、四月十四日指定、構造形式、桁行五間、梁間四間、單層、屋根四注造、本瓦葺

創立沿革を知るべき何等の文獻もなく、唯現在の建築はその形式手法に依つて鎌倉中期に屬することを知り得るのみである。その後屋蓋の改造、背面北側の軸部修理、安政六年、明治廿六年の修理を経て現在に至る。堂は桁行五間、梁間四間、四注造、本瓦葺の建物で、外觀は稍々低平の感じはあるが簡素の裡によく時代の特徴をあらはしてゐる。近年部材の朽損、構造の弛緩荒廢その極に達し、隅は支柱を以て支へ、壁は剝落し、屋根は隨所亜鉛鍍鐵板を以て彌縫的修理を施し辛うじて雨露を凌ぐ狀態であつた。

建物は低地に位し床下部材の腐朽を早めるので今同約一尺盛土をして地盤を高めた。修理前の外觀は亂雑で統一を缺いて居つたが、今回解體の結果夫々確證が得られたので何れも復舊整備された。その場所は次の通りである。

- 一、右側面第一間眞壁同第二間眞壁片引戸左側面第一間板戸引違、背面中央一間の眞壁であつたのを何れも扉構に改む。
- 一、正面中央三間の扉の形式を古い形に改む。
- 一、左側面第二間連子窓片引戸、背面左端の間眞壁片引戸であつたのを何れも眞壁に改む。

一、正面右端一間及右側面前方二間の折曲椽を復舊。（圖版九三頁參照）

本願寺飛雲閣、（表）能舞臺附橋掛及鐘樓

京都府京都市下京區堀田通花屋町下本願寺門前町 本願寺、飛雲閣明治三十年十二月二十八日指定、能舞臺附橋掛及鐘樓明治四十三年八月廿九日指定、構造形式・飛雲閣、三層閣、書院造、屋根柿葺、能舞臺、單層、屋根切妻造、椽皮葺、橋掛、桁行四間、梁間一間、單層、屋根切妻造、椽皮葺、鐘樓、桁行梁間各一間、單層、屋根切妻造、本瓦葺

飛雲閣は初め豐臣秀吉が天正十三年より十五年の間に經營した聚樂第中に建てられ、元和元年當寺に移建したものと傳へられる。滴翠園中滄浪池に臨んで建つ輕快な別業風建築である。桃山時代樓閣風住宅遺構の白眉たるもの。昭和九年の風害に屋根及び建具の一部を損し、今回破損箇所のみ修理が加へられたのである。

能舞臺附橋掛は伏見城の遺構と傳へられ、解體して大谷祖廟に保管されてゐたものを明治三十年にこゝに再築したものと云ふ。屋根切妻造で古式であり、正面妻飾に雄麗な大菱股を置き、舞臺全體の構造意匠、豐潤にして格式を有し、能舞臺の熟成せんとする先驅をなせるもの、數渺い能舞臺遺構として注意すべきものである。これ亦昭和九年の風害に椽皮葺の屋根が破損し、橋掛軸部の被害甚しかつたため夫々部分的修理を加へた。

鐘樓は創立沿革共に未詳、飛雲閣の東北側に位置してゐる。奇抜な手法のうち豪華な片鱗を覗ひ得て、明かに桃山時代

のものと思はれる。昭和九年の暴風に際しては被害最も大で、軸部が弛緩傾斜し屋根も大破損したため、根本修理が施された。

染羽天石勝神社本廟

島根縣美濃郡益田町 染羽天石勝神社、昭和四年四月六日指定、構造形式・三間社流造、屋根椽皮葺

當社は縁起によると聖武天皇朝の創建と稱するが確實でない。本殿は棟札に天正十二年領主益田越中守元祥の再建とある。三間社流造で、葦股の輪廓は多少屏弱の嫌があるが、其の内部の透彫及手挾の繪様は頗る渾雅の趣がある。屋蓋は修理前椽瓦假葺であつたが、昭和十二年の修理に椽皮葺に復原され、外觀を一新した。（圖版九三頁參照）

金地院方丈

京都府京都市左京區南禪寺福地町 金地院、明治三十三年四月七日指定、構造形式・桁行十一間、梁間七間、單層、入母屋造柿葺

寺傳に方丈は慶長十六年伏見城から移築したものと云ふ。外觀豪壯、内部の襖は金地極彩色の豪華なもので、城郭の殿舎が禪宗寺院の方丈に改められ、桃山時代書院造の特色を多く保有してゐる好個の例である。大正十年に大修理を施されたが、昭和九年九月の風害に軸部少しく傾斜し屋根、建具等が破損し、今回再修理が加へられた。

八幡宮本殿

愛知縣額田郡福岡町 大正十五年四月十九日指定、構造形式・三間社流造、屋根椽皮葺

舊社殿は永祿七年三月三州一向宗騒亂の際兵燹に罹り、其の後元和五年九月代官畔柳壽學雅文奉行白井又左衛門によつて再興されたものが即ち現在の社殿である（棟札）。寛永十四年、萬治、延寶、元祿年間に修理を受けた。木刻小さく姿態優雅、その手法に室町末期の特質を帯びてゐる。大正三年迄葺屋の設けがあつたため各材は當初のまゝ能く遺存してゐる。しかし全體に亘り腐朽弛緩してゐたため、礎石をそのまゝとし、土臺以上解體し根本的に修理が加へられた。

（圖版九三頁参照）

東福寺愛染堂

京都府京都市東山区本町通十五丁目 東福寺
明治三十一年十二月二十八日指定、構造形式・八角圓堂、單層、屋根寶形造、柿葺

愛染堂は舊三聖寺の建物であつた。萬壽寺（もと五山の一で、天正年中三聖寺を合併す）境内の東北隅にあつたのを天保年間西北隅に移建し、更に明治十六年堂が西向であつたのを南向とし五間餘移動した。建物は八角の圓堂で寶形造、棧瓦葺であつた。昭和九年九月の暴風雨に倒壊し、その復舊工事の際、建物を東福寺に移管、現地に移建したものであつて、修理を機とし、調査の結果證據も明らかになつたので、後世の改變にかゝる部分を復舊整備した。即ち基壇を新に造り、廻縁を欠く圓堂の形式に正し、丸桁の下に痕跡に基き科棋に三ツ斗實肘木を加へ、飛檐檼を取付けて二軒とし、軒反り等も正して軒廻りを整へ、且つ屋根は

倒壊前棧瓦葺であつたが、古記録に基き柿葺に變更された。

春日神社本殿

和歌山縣海南郡加太町 春日神社、昭和六年十二月十四日指定、構造形式・一間社流造、千鳥破風と軒唐破風附、屋根檜皮葺

創立年代は不詳、今の本殿は「紀州海部郡加太浦春日明神正殿並鳥居等造進之事所加下知也 慶長元年丙申十一月三日桑山修理亮正榮」云々の棟札に見る如く桃山時代の造営にかゝる。本殿は一間社流造に千鳥破風と軒唐破風を有し、各種の繪様彫刻は特異、豪健で、桃山時代の特徴のよくあらはれた建物である。昭和九年秋の大暴風のため屋根の檜皮が飛散し、隨所に雨漏を生じたので、應急修理により彌縫して居たが、昭和十二年六月より修理に着手、屋根葺替を主とし、軸部をあげて礎石の不同を正し、小屋組を解體組直し、木部の破損を繕つた。

（圖版九三頁参照）

東大寺大湯屋及法華堂北門

奈良縣奈良市雜司町 東大寺、明治三十六年四月十五日指定、構造形式・大湯屋、桁行八間、梁間五間、屋根前面入母屋造、後面切妻造、本瓦葺、法華堂北門、四脚門、屋根切妻造、本瓦葺

大湯屋 寺傳に天平年間の創建と稱するが記録の徵すべきものなく詳かでない。「東大寺要錄」に依れば治暦三年の造替のことが見える。今の建物は從前唱へられてきた如く建久年中重源上人によつて再建せられたものでなく（その頃上

人は從前の建物に修理を加へ、鐵湯船を鑄造した）「東大寺續要錄」に延應元年三月十八日の新造とあるに徴し、また形式手法に鑑み、延應元年に建立されたものと認められる。棟札、額の墨書銘に依ると、その後應永十五年、寶永元年、寛政五年、嘉永二年の修補を経て今日に及んでゐる。建物は桁行八間、梁間五間、屋根西側入母屋、東側切妻造本瓦葺、大棟東寄りに檼出を附し、中の一室に風呂屋形を設け、重源の鐵湯船を据えてある、現存する浴室の中最大なるものに屬し、和様、唐様、天竺様、三様式の融合統一の點に於て觀るべきものがある。

建物は嘉永の修理に大分改變せられた。之れは棟札（後出）にも明かであり解體調査の結果もよく一致するので、今回夫々舊に復されたものである。變更箇所は次の通りである。

一、軒廻りを整備し背面破風の形を改む。

二、本屋及煙出の懸魚、桁隠の形を改む、

三、背面兩端間の繫虹梁の形を改む。

四、左側面の間斗束を双斗に又右側面後補の双斗を當初の形式に直す。

五、内部海老虹梁を手換にす。

嘉永二年棟札寫を掲げれば左の通りである。

表 南流屋根不殘仕替 化粧貫頭貫
床廻 不殘張替 兩便所一ヶ所建之 水
切石惣延テ但南側一鉢爲方ニ付空葺瓦座
ニテ留元桁出桁大舩但古木壹歩通相用内

外共壁不殘五拾四間伏之但四方ニテ柱大
小廿八本但根繼、頭貫上短ハタ肘木、床
下風透窓六ヶ所但北側ニテ蓮葉院塀 半
通白壁半通中塗 荒堀惣合 同南軒ニテ
五本但新木ニテ取替 タマ肘木繫虹梁但
今度明之 柴小屋壹ヶ所 凡百五拾坪但
四方ニテ未申角木取替但三間半、地垂木
化粧垂木、内間南ニテ入口今度明之但貳
間 貳間半新規建之 往來道筋置土竝地
奈らし 東妻破風兩流共取替 飛緣垂木
木負 辰巳角ニテ壹間入口今度明之 西
入口門繕 用水溜地壹ヶ所但辰巳角ニテ
但懸魚六ツ新規茅負切裏甲但三十六間
風呂屋形但是迄八尺四方 井戸壹ヶ所
便所之處ニテ路次今度建之 海老虹梁六
挺 瓦座但三十六間 今度貳間四方尤新
木ニテ仕替 但是迄無之處辰巳角池之西
ニテ五丈斗堀候處水無之ニ付埋束手ニテ
川ヨリ取水ニ致候古又但是迄無之爲方ニ
付今度新規入之、石南側不殘取替、竈二
ヶ所共仕替

裏 嘉永二己酉六月八日事始 同年十
二月五日皆造 伊東平輔謹書

北門 その創建法華堂と同年代と傳へ
るが詳かでない。今の建築は形式手法に
於てよく鎌倉中期の技法を現し、又室
町、江戸兩時代の修理の痕跡をとめて
ゐる。たゞし要部は當初の形態を失はす
大面取の角柱、木鼻、葦股等に時代的特
徴を十分に見ることが出来る。昭和十二
年大湯屋と同時に修理工事がすゝめられ
た。

今同修理中小屋組中から原の破風板が
 発見せられた。それに據つて木負は一寸
 四分外方に、又飛檐檼の仕口により木負
 茅負の距離は四分五厘延びて居た事が判
 つた。それで発見の破風板に倣つて新に
 破風を造り木負茅負も夫々舊の位置に治
 められたのである。又鯉羽は化粧棟木、
 丸桁が夫々切縮められて居る事が明かに
 なつたので、兩方一枝宛増し、控柱は柱
 根腐朽の爲め切縮められて礎石が上げら
 れて居たのを親柱筋の礎石の高さに下
 げ、礎石の形も面取りに改められた。

東福寺月下門（月華門）

京都府京都市東山区本町通十五丁目 東福寺
 明治三十五年七月三十一日指定、構造形式・
 四脚門、屋根切妻造、檜皮葺

門は寺傳に、文永年間 龜山天皇から
 御所の月華門を賜はつたものといふ。切
 妻造の四脚門で、美しい板葺股を有し、
 細部の手法雄健でよく鎌倉時代の特徴を
 あらはしてゐる。

修理前屋根は本瓦葺で腕木、軒桁でそ
 れを支へて居た。元來此の建物の構造は
 本瓦葺に適してゐなかつたが、解放の結
 果小屋組内から舊檜皮が発見されたので
 檜皮葺に復原の上、後補の腕木、軒桁を
 取外した。又冠木唐居敷には軸釣穴があ
 るに不拘屏を缺いて居たので、板屏を釣
 り込み蹴放しが取付けられた。

都久夫須麻神社本殿

滋賀縣東淺井郡竹生村 都久夫須麻神社、明
 治三十二年四月五日指定、構造形式・桁行五
 間、梁間四間、重層、屋根入母屋造、檜皮葺

創立年代不詳、本殿身舎方三間の部分
 は伏見城日暮御殿を慶長七年豊臣秀頼が
 片桐東市正且元を奉行としてこゝに移築
 したもので（別掲）棟札を存す、その際
 廂及向拜の部分は永祿十年再建にかゝる
 舊本殿を再用したものであることが、形
 式手法、墨書、銘等に依り判明した。本
 殿内外の装飾は豪華華麗、殊に柱、長押
 等の蒔繪は所謂高臺寺蒔繪の代表作と稱
 される桃山時代盛期の傑作である。山腹
 の斜面を開き、土留石垣を築いて敷地と
 してあり、その石垣が孕み崩壊に瀕し、
 そのため礎石は不同沈下し、木部亦軒の
 垂下、小屋組の弛緩を來し、屋根の檜皮
 葺が腐朽してゐた所へ、昭和九年の大風
 害を受けたのであつた。

今回の修理に際して小屋組中から原の
 向拜の手狭一個が発見せられたので、此
 を再用し、他の一個は之れに倣つて新に
 造られた。又平面は解放の結果、舊形式
 を知るべき資料が発見され、夫々復舊さ
 れた。それを表示すると次の通りであ
 る。

名	稱	舊	新
兩側面前より第二間	扉	板	嵌
身舎正面中央一間	部	戸	扉
同 背面中央一間	部	戸	扉
同 正面兩端間各一間	部	戸	彫刻付
同 前面兩側間各一間	部	戸	彫刻付
同 兩側面前端ノ間	部	戸	彫刻付
同 各一間	部	戸	彫刻付
内	陣	段	床

（圖版九三頁参照）

都久夫須麻神社本殿棟札

御辨才天建立	御奉行片桐市正	雨 森 長 介
御辨才天建立	御奉行片桐市正	大野木五左衛門
御辨才天建立	御奉行片桐市正	大野市左衛門
御辨才天建立	御奉行片桐市正	西村清右衛門
御辨才天建立	御奉行片桐市正	九月 六 日

阿彌陀堂

宮城縣伊具郡西根村 阿彌陀堂、明治四十
 一年四月二十三日指定、構造形式・方三間、單
 層、屋根四注造、茅葺

創立不詳、治承元年丁酉五月加修理の
 棟札があつたといふ。事實とすれば、治
 承に修理を加へたのであるから、治承以
 前の建築でなければならぬが、現存の建
 築は或はこの時代に屬するかと考へられ
 る。藤原時代に慣用せられた方三間阿彌
 陀堂の形式で、簡明にして堅實の觀があ
 り、東北地方に稀しい古く且つ美しい建
 築である。大正二年根本修理を施し、今
 回の修理は腐朽した茅葺の葺替のみであ
 った。（圖版九三頁参照）

松山城乾門外七棟

愛媛縣松山市、所在地同市堀ノ内町九ノ内一
 番地、昭和十年五月十三日指定、構造形式・
 乾門、脇戸付櫓門、屋根本瓦葺、乾門東續櫓
 單層櫓、屋根本瓦葺、筒井門東西續櫓 各單
 層櫓、屋根本瓦葺、隱門 單層櫓門、屋根
 本瓦葺、隱門續櫓、單層櫓、屋根本瓦葺、戸
 無門高麗門、屋根本瓦葺

松山城は加藤嘉明が慶長六年道後平野
 の中央勝山に地を卜し、同七年起工、八
 年此處に移り、寛永四年會津に封ぜらる
 るまで逐次城郭及城下町の經營に力を注
 ぎ、次いで蒲生忠知、松平定行等が相繼
 いで經營したものにかゝる。城山の周圍

再興に至る天守、櫓、城門及塀等三十五
 棟が遺存する。之等は山を本城とし、總
 曲輪を平地に入れた所謂平山城の代表
 的な繩張り相俟つて、よく往時の城郭
 建築の制を徴することが出来る。今回修
 理された建物は、乾門及東續櫓、筒井門
 及東、西續櫓、隱門及續櫓、戸無門の八
 棟で、乾門、筒井門は脇戸付櫓門、隱門
 は單層櫓門、續櫓は何れも單層櫓、戸無
 門は高麗門である。各建物とも従前部分
 的修理のみを受け來つたのみで、腐朽を
 加へ、全體弛緩傾斜し、危険を加へつ、
 あつたため、根本修理が行はれ、近年便
 宜に加へられた窓其他の姑息的な改變は
 夫々資料によつて整然と復舊せられた。

興隆寺本堂

愛媛縣周桑郡德田村 興隆寺、明治四十年五
 月二十七日指定、構造形式・桁行五間、梁間
 六間、單層、屋根四注造、銅板葺

本堂は寺傳に文治年間源賴朝の再興に
 かゝるとあるが、棟札及墨書銘により、
 文中四年の再建にかゝることが明かな
 った。堂の構造形式亦よくその年次と一
 致し、構造簡潔、禪宗風建築の手法より
 成り、殊に料棋の構架は巧妙で、内陣の
 厨子亦時代の特徴を示す頗る珍重すべき
 ものである。今回の修理により、再建以

來永正十三年、寛文十年、貞享元年、元文五年、寛政二年、文化十二年、元治元年、明治三十八年等に數次の大小修理が行はれたことが明かとなつた。屋根は元檜皮葺か又は楠葺であつたことが修理前その手法から想像できたが、前記寛文十年の修理に於て瓦葺に、貞享元年に現在の様に茅葺に葺き替へられたことが明かとなつた。今回の修理に際して保存上から銅板葺に改め勾配も緩かにされた。又飛檐檼の仕口及地隅木の木負仕口よりも通り飛檐檼を五寸五分出し、舊記及臺座跡等の痕跡から正面兩脇各一間及兩側面第一間の藩戸を唐戸構に改め、尙未完成のまゝであつた内陣入側及外陣には天井が設けられた。(圖版九四頁参照)

十二年度修理續行建造物

に於て修理續行中の建造物の目録は左の通りである。(着工順)

名	稱	所在附縣
ヲノ	檼	兵庫
ルノ	檼	兵庫
ヌノ	檼	兵庫
化粧	檼	兵庫
ツノ	檼	兵庫
レノ	渡檼	兵庫
タノ	渡檼	兵庫
ヨノ	渡檼	兵庫
カノ	渡檼	兵庫
石垣	ソノ他	兵庫
△瑞龍寺法堂、佛殿及總門		富山
五社神社社殿		静岡

聖神社本殿	大阪
△觀心寺書院	同
△石津寺本堂	滋賀
龍崎神社表門	同
△建仁寺方丈	京都
仁和寺二王門	同
妙成寺書院及鎮守堂	石川
△法隆寺大講堂	奈良
△法隆寺夢殿及東院廻廊	同
△大傳法院多寶塔(大塔)	和歌山
寶塔寺塔婆及四脚門	京都
△興福寺東金堂	奈良
平清水八幡宮本殿	山口
大聖寺不動堂	千葉
岡山城西ノ丸西手檼	岡山
唐招提寺禮堂	奈良
前表中△印を附したる建造物に關し、その解説及修理經過、現狀變更及發見等に關する報道を左に掲載する。	
姫路城西ノ丸	
兵庫縣姫路市本町、昭和六年十二月十四日指定、	
國有姫路城の西ノ丸一廓の保存工事は文部省直營で、昭和十年二月起工、四ヶ年の繼續事業として、此の間第二豫備金支出を含む、國費二十數萬圓を費し引續き施工中である。十二年度(會計年度)は恰も西ノ丸國寶保存工事の最終年度にあたり、年末工事は殆ど完了に近づいた。即ち前年大體の仕事を終つたヲノ檼、タノ渡檼、ルノ檼及ヨノ渡檼の造作及左官工事の仕上げを終り、又ヨノ渡檼の東	

方に連るヌノ檼、カノ渡檼、化粧檼及ヲノ檼の南方に連るレノ渡檼、ヲノ檼は前年全部解體した後を承け夫々修補の上軸部の組立をなし、屋根及左官工事等を進め十二月末には殆ど竣成を見るに至つた。

(圖版九四頁解説)圖は修理成つたヲノ檼、カノ渡檼及化粧檼を城内から眺めた外觀及び化粧檼東北の外觀である。修理前は何れも荒廢してゐたのであるが、解體の際舊規を究め修理復舊し、整然たる城郭建築一廓の形式と美しさを再現することとなつた。特に化粧檼内部の立派な書院造の形式や渡檼中に並ぶ居間の有様等、城郭建築としては珍しい形式手法がこゝに永く保存されることになつたのは悦ばしい。たゞ復舊に際し、化粧檼内部の模、障子及長押金具の現存せるものなく夫々時代を考慮に入れて新補し、また渡檼下部の下段石垣は、從來自然の岩盤の儘であつたが、星霜を経るまゝに自然に風化し、下段石垣根元の危険を來してゐたので止むを得ず今回之を石垣積に變更した。然し比較的しつかりしてゐた岩盤はその儘を保存した。

瑞龍寺佛殿、法堂及總門

富山縣高岡市下關、瑞龍寺、佛殿明治四十二年四月五日指定、法堂及總門昭和三年四月四日指定、構造形式・佛殿、桁行五間、梁間五間、重層、屋根入母屋造、鉛板葺、法堂、桁行十一間、梁間九間、單層、屋根入母屋造、檼瓦葺、向拜桁行二間、梁間一間、屋根向唐破風桶葺、總門、藥醫門、屋根檼瓦葺。瑞龍寺は前田利常が利長(瑞龍院殿)の菩提を弔はんため建立した曹洞宗の佛寺で、其の經營は正保二年に始り萬治二年に終つてゐる。時の棟梁は山上善右衛門善廣で、伽藍の規模は彼の祖先横山權

頭吉春が宋に渡り會得したと稱する禪宗伽藍建築の法により、當時禪宗第一の大伽藍であつた浙江省臨安府經山萬壽寺の形式を模したものと云ふ。

佛殿は桁行、梁間とも五間、重層、屋根入母屋造で、極めて整頓した唐様手法になり、當時工巧の精を極めしもの、その柱は中空で更に心柱を容れ、屋根に鉛板を葺いてゐる。

法堂は桁行十一間、梁間九間、單層、屋根入母屋造、規模壯大で曹洞宗法堂の代表的遺構として無二の標本である。正面中の間欄間及棧唐戸の花挾間並に左右端間の竹の節の手法は頗る特異なものである。

總門は藥醫門の形式になり、諸種の列形並に屏四葉座八双鐵物は甚だ雄健である。

三棟の中法堂は昭和十二年修理中に、向拜の屋根が柿葺であつたのを、保存上柿葺型の銅板葺に改め、又左側面より背面に折曲つて假設的に取付けてあつた落椽は撤去された。尙北面假設の外屋を除き側柱筋柱間裝置は左表の通り變更された。

變更箇所	修理前	修理後
背面右端ヨリ第一間	眞壁中右寄り出入口棧組換	板戸二枚明障子一枚建
同第四間	中敷居上下共眞壁外方ニ下見板張	中敷居上板戸二枚明障子一枚建腰眞壁外方板張
同第五及第六間	帶戸二枚建	第四間變更同様

同 眞壁 第四間變更同様 第九間

觀心寺書院

大阪府南河内郡川上村觀心寺、大正十二年三月二十八日指定、構造形式・桁行四間、梁間三間、單層、屋根入母屋造、銅板柿葺

觀心寺は縁起によると空海の弟子實華が、天長年間創建したものといふ。書院は寺傳に天正年中大阪築城の餘材を以て建てたといはれてゐたが、昭和十二年の修理に西南鴨居上吊鉤に發見された「當院棟上正保四年丁亥卯月十三日」云々の墨書銘により、江戸時代初期、住持性秀の代に建立されたことが明かとなつた。

その構造は簡素ながら、材質美しく、虹梁の袖の繪様及雲文の彫刻、特に欄間の意匠が一々趣を異にせる等興味ある書院遺構である。

屋根が原柿葺であつたことは、古老の言、名所圖會等によつて知られ、また木割の繊細なことから、屋根葺材に本瓦を用ひてなかつたことが知られる。今回柿葺の形式に改め、柿軒付にして、平葺は柿葺型銅板を用ひ葺上げられた。

(備考) 吊鉤墨書銘 當院棟上正保四年丁亥卯月十三日臺所三月七日棟梁紀州河根村德左衛門、住持攝州堺北庄所也法印權大僧都性秀年五十八歳作之、當院古坊心王院移三月廿三日棟上灌頂堂者寛永十九年作之 (圖版九四頁参照)

石津寺本堂

滋賀縣栗太郡老上村 石津寺、明治四十年八月二十八日指定、構造形式・桁行五間、梁間四間、單層、屋根四注造、本瓦葺

正暦七年僧最澄創建、現本堂は延文四年足利義隆の再建と稱する。桁行五間、梁間四間、單層、屋根四注造で、軸部、料拱、軒廻りはよく足利初期の手法を存してゐるが、屢々の修理に、周壁及建具に至つては殆ど後世の變更を受けてゐた。幾度となく彌縫的修理を繰返したのみであつたため、全體に亘り相當破損してゐるが、偶々昭和九年九月の颱風により、正面外周建具及腰板は殆ど破壊され、屋根瓦の飛散したのも多数に上つた。其の結果昭和十二年二月根本修理に着手、引續き修理中である。

建物取解の結果、小屋裏から舊の飛檐檼、木負、隅木、野隅木及野棟木等の古材が發見せられた。之等により調査を進め、棟高、棟長、飛檐勾配、軒出、同反り等舊の形が判つたので、地檼、飛檐檼の二重軒とし、舊の屋根の形に復舊された。又柱間装置も亂雑であつたが、夫々部材に残る痕跡その他の確證に據り次表の様に復舊變更することに決められた。

現狀變更箇所

修理前	修理後
正面中央一間	四枚原 二枚原
同兩脇間各一間	腰貫入部戸 扉 構
同兩端間各一間	腰貫入部戸 櫛子窓
右側面前端ノ間	眞壁 扉 構
左側面前端ノ間	眞壁 扉 構
右側西前ヨリ第三及第四ノ間	板戸 眞壁 扉 構
背面中央三間	開放 眞壁 扉 構
背面左端一間	開放 眞壁 扉 構
内陣正面三間	腰板嵌上部 格子戸及欄間

内陣兩側面 障子 格子戸
各二間 廻 椽 正面のみ椽 廻 椽
(圖版九四頁参照)

建仁寺方丈

京都府京都市東山区大和大路四條下ル四丁目小松町 建仁寺、明治三十二年四月五日指定、構造形式・單層、屋根入母屋造、銅板柿葺

當寺は建仁二年榮西禪師南宋より歸朝後建立せしもの、方丈は此種遺構中の最古のもので、東福寺の惠瓊が安藝の安國寺の方丈を當寺に寄附再建せしものが即ち現在の建物であるといふ。墨書銘及鬼瓦銘によりその後享保廿一年及元文元年に修理のあつたことが知られた。先年の颱風に全く倒壊し、小屋組まで破壊してつたため、古材を整理し、舊規を究め昭和十二年四月着工、いま修理を續行しつつ、ある。

修理に際し、前の背面軒先が後世切縮められ、其の納りが異形の縫破風によつて見切られ、棟筋も前方に出て居ることが判明した。よつて軒先を舊に復し、棟木も古い梁の束穴(兩流の中心にある)に戻し妻飾も改められた。棧瓦葺の軒付に柿積が残つてゐるので、柿軒付に復し平葺は柿葺型銅板葺に直された。又調査の結果、内部天井二重折上所用の龜尾、同龜尾受の格縁等を發見、之に據りもと二重折上小組格天井に復することに決定した。

法隆寺大講堂

奈良縣生駒郡法隆寺村 法隆寺、明治三十二年四月指定、構造形式・桁行九間、梁間四間、單層、屋根入母屋造、本瓦葺

前年に引續き工事續行中の大講堂は、昭和十二年一月礎石の据付を終り柱立を始め、二月九日立柱式並に納經式を挙げ、引きつゝ外陣及内陣の料拱瓦桁の組立天井、壁下地作成に取かり、五月以降十月頃まで軒、小屋組の造作をつゞけ、十月二日には上棟式を舉行、十二月には瓦葺に着手、須屋根を解體し、順調に工事を進めた。昭和十三年中には前後四ヶ年にわたる大講堂の大修理工事も竣成する豫定である。(圖版九五頁参照)

法隆寺夢殿及東院左右廻廊

夢殿 明治三十年十二月廿八日指定、東院左右廻廊 明治三十三年四月七日指定、構造形式・夢殿 八角圓堂、單層、屋根本瓦葺、東院左右廻廊 桁行延長四十二間、梁間一間、單層、屋根本瓦葺

夢殿は法隆寺東院の中心にあり、二重基壇上に立つ八角圓堂で、その姿も美しく此種建築中最も代表的なものである。天平十一年僧行信の建造にかゝり、貞觀年中僧道詮律師により大修理あり、その後治安三年修造、仁平二年屋根葺替、永萬元年修理、建久四年内陣天井新造、寛喜二年鴨居一重の加増等數次の補修を経て今日に至る。即ち堂は全體にわたり鎌倉時代の大修繕を経て居り、料拱、檼、軸部等には鎌倉時代のもの認められる部分が少くないが全體としてはよく古式を残してゐる。尙屋蓋頂上には金銅で造つた最も精巧な露盤寶珠が置かれてゐる。

東院左右廻廊は夢殿と同時に建立せられたものと思はれる。「資財帳」に檜皮葺廡廊壹廻と記載されたものと現在のものは寸尺が異なり、「古今目録抄」記載のものの寸尺が一致する。現在の建物は鎌倉時代の再建にかゝり、室町時代の大修理を経たものの如く、その後数次の修理を経て現在に至る。夢殿を中心として東西二棟から成り、南は禮堂に、北は繪殿及舍利殿に連つてゐる。

夢殿及東院左右廻廊は工費豫算約八萬圓、工期二十五ヶ月の豫定で同時に修理工事が行はれ、昭和十二年六月地藏堂竣工のあとを受けて工事に着手、七月一日本章の開眼供養を行ひ、二十日禮堂に遷座、越えて九月には須屋根建設、十月には夢殿の屋根解放に着手し、精密な實測及調査を進めつゝ、解体工事が進められた。夢殿の着工前の破損状態を概略すると、基壇の敷石羽目石等の風化が甚しく基礎は不揃ひな沈下を來し、柱根は風雨に曝されて腐朽し、そのため不陸傾斜を來してゐた。軒及小屋組は明治年間に應急修理を受けてはゐるが、その手法が姑息で軒廻りの部、小屋材に於ても、大部分松材を使用し、架構の方法が粗略であつたため、一層破損を加へてゐる状態であつた。また廻廊は基壇の漆喰叩きが風雨に洗はれ全部剝離してゐたのと、以前の修理に松材が多くつかつてあつたため、虫害を被り損傷が多かつた。殊に檼裏板等は脱落に類する部分もあり、茅負

及破風等も腐蝕し、歪曲弛緩甚しく、軒先は波狀を呈し、辛じて支柱で倒れるのを免れてゐた様次第であつた。

(圖版九五頁参照)

大傳法院多寶塔(大塔)

和歌山縣那賀郡西坂本村 大傳法院、明治三十二年四月五日指定、構造形式・二層塔、下層方五間、上層圓形、屋根本瓦葺

根來の大塔として甚だ著名なもので、大治四年の創建であるが、現在のものは永正十年相輪を上げ、同十二年落成したものである。塔の下層平面は十二本の圓柱からなる圓形内陣の外側に、方五間(四十九尺三寸八分)の裳層をつけ、初重屋根の上に饅頭形をつけて寶塔の肩の意を現はし、それ以上は寶塔の構架形式に成つてゐる。總高百十六尺九寸、現在の多寶塔中最大のものである上、その平面に於て高野山大塔の遺構を傳へた唯一の大塔で、重要な價值をもつものである。創建以來大修理が行はれた跡無く、屋蓋の荷重による軒先の垂下と、露盤と屋根瓦葺との取合せ箇所の不健全とによる朽損は年々増大し、前者は屋根瓦の崩落を後者は雨漏による小屋組の腐蝕を來しつゝ、あつた際、先年の近畿颱風に甚だしく破損し、昭和十二年八月根本的修理に着手、目下施工中である。工費七萬八千三百餘圓。

(圖版九五頁解説) 圖は多寶塔修理着手後數ヶ月、塔の屋根軒小屋組を解放した當時の模様で、圖の向つて左上に見えるのが心柱これを中軸とした圓筒狀のものが上層の塔身の一

部、宛かも蜘蛛の巣の様に見えるものが重疊に組まれた肘木と井桁で、圓筒形の塔身に軒の出の多い寶形本瓦葺の屋根を載せる構架の様子がよく窺はれる。

尙今回解体修理の結果、心柱に文明の墨書銘が発見された。其他明應、永正などの銘が隨所に發見された。當大塔は其の規模の頗る大なるためか、非常に長年月を要したものと如く、例へば初層の檼軸の如きも取付けられぬまゝに相當の年月を経たことが、その下の柱面が風化してゐることからも推定される。従つて上記の如く數種の年代の銘があるのは察するに其の造営に數十年を要した結果と看做してよいであらう。

興福寺東金堂

奈良縣奈良市登大路町 興福寺、明治三十年十二月二十八日指定、構造形式・七間四面板、單層、屋根人母屋造、本瓦葺

堂は神龜三年 元正太上天皇御不例にわたらせられたため、東宮に在せし聖武天皇が御惱平癒御祈願のため御建立あらせられしに創り、その竣工は神龜末年とされる。その後屢々回祿、現存の堂は應永十八年閏十月十五日春日二基の塔の雷火による舊堂類焼の後をうけ、應永廿二年九月再建されたものである。堂は桁行七間、梁間四間、單層、屋根四注造、本瓦葺で、構造形式に於て奈良時代の餘韻を存するが、細部の手法は明かに室町時代の特徵を現はしてゐる。再建後の沿革は詳かでない。萬延元年には大斗、枅形、棟木、桁、梁等の取替加修が行はれたことが棟札寫しにうかゞはれる。再建以來時日の經過は埒、柱礎、軒の破損を見、近畿の大風及昭和十一年二月の地震に全

體にわたり、一層の破損を加へたので、昭和十二年九月修理着手、いま工事中である。解體の進捗に伴ひ各部から數多墨書銘等が見出されたが、特記すべきことは、十二年十月三十日、金堂本章の臺座の内部に木箱の上に載せて納められてゐた銅造佛頭一個、木箱の中に納められた唐櫃の内部から銀造佛手一個が発見せられたことである。佛頭は須彌座の板内面にある墨書によると、應永十八年本堂炎上の折に焼殘つたものであるといふ。奈良朝前期の作なるべく、現本章の前身であつた丈六佛であつたものと認められる。佛手は同じく應永の炎上の際に火中した像の右手肘から先でこれまた焼損が甚しかつた。その手法や大さ等からすると像は少くとも平安朝製作にかゝる、等身大のものであつたらしく、その完かりし昔の偉觀が偲ばれる。(圖版九五頁参照)

昭和十二年度國寶指定

文部省告示第二百五十號
昭和十二年五月二十五日

繪畫之部
目 品

紙本墨畫寒山圖	「可翁」ノ印アリ	一幅	東京府東京市麹町區上二番町	男爵 鄉 誠之助
絹本着色洞庭赤壁圖	池大雅筆	一卷	同京橋區新川町一丁目	小 西 幸 寛
紙本着色濱松圖	六曲屏風	一雙	同芝區高輪南町	公爵 毛利元昭
紙本墨畫山水圖	藏丘筆	一幅	同麻布區永木町	岡 崎 正 也
絹本着色 徵宗筆 桃馬圖	大觀元年ノ年記アリ	一幅	同宮村町	侯爵 井上三郎
紙本墨畫葡萄圖	日親筆 辛卯ノ自贊アリ	一幅	同	人
絹本着色漁釣圖	徐祚筆	一幅	同	人
絹本着色阿彌陀三尊像		一幅	同	人
絹本着色孔雀明王像		一幅	同	人
絹本着色千手觀音像		一幅	同	人
絹本着色不動明王二童子像		一幅	同	人
絹本着色在原業平像		一幅	同	人
紙本淡彩	琴棋書畫圖 山水圖 山水圖 山水圖 山水圖 山水圖	裱貼付 八 同 四 同 四 同 四 同 二 同 二	同	人
紙本墨畫	蘆雁圖 蘆雁圖	裱貼付 四 同 二	同	人
紙本着色三十六歌仙切	(通昭) 佐竹家傳來	一幅	同赤坂區永川町	小 倉 乃 海
絹本着色十六羅漢圖	「大宋明州車橋西金大受筆」トアリ	十幅	同品川區北品川三丁目	原 邦 造
紙本淡彩納涼圖	久隔守景筆 二曲屏風	一隻	同澁谷區神山町	伯爵 牧野伸顯
紙本着色後三年合戰繪詞	附 紙本墨書序文 一卷	三卷	同原宿三丁目	侯爵 池田仲博
紙本着色因幡堂緣起		一卷	同櫻丘町	川 田 正 雄

紙本墨畫瀟湘臥遊圖 章深ノ跋ニ「範城李生作」トアリ	一卷	同瀧野川區田端町	菊池慧一郎
紙本著色寢覺物語繪詞	一卷	同	原善一郎
絹本著色愛染明王像	一幅	同	同
絹本著色清瀧權現像	一幅	同	同
紙本墨畫竹雀圖 「可翁」ノ印アリ	一幅	同	同
絹本墨畫山水圖 「破草鞋印」ノ印アリ 玄暉・周崇及性智ノ賛アリ	一幅	同	同
紙本墨畫寒山圖 雲彩筆	一幅	同	同
紙本墨畫山水圖 六曲屏風	一雙	同	同
紙本淡彩江山夕陽圖 性智等十二僧ノ賛アリ	一幅	同	同
紙本墨畫祖師圖 因陀羅筆 楚石ノ賛アリ	一幅	同	同人
紙本著色三十六歌仙切 佐竹家傳來 (細見)	一幅	愛知縣名古屋市西區和泉町一丁目	高橋正彦
彫刻之部			
銅造菩薩半跏像	一軀	東京府東京市麴町區上二番町	男爵郷誠之助
銅造十一面觀音立像	一軀	同芝區高輪南町	男爵森村市左衛門
木造兜跋毘沙門天立像	一軀	同麻布區宮村町	侯爵井上三郎
木造不動明王立像	一軀	同下合區茅町二丁目	横山秀麿
銅造菩薩立像	一軀	同	國 <small>(東京美術學校保管)</small>
銅造菩薩半跏像	一軀	東京府東京市品川區上大崎五丁目	公爵三條公輝
木造四天王立像	四軀	京都府綴喜郡宇治市原町	禪定寺
木造地藏菩薩半跏像	一軀	新潟縣中蒲原郡小須戸町	茂林寺
木造聖德太子立像 (太子堂安置) 像内ニ寛元五年正月廿三日大佛子法橋慶禪ノ銘アリ	一軀	埼玉縣北埼玉郡荒木村	天洲寺
銅造觀音菩薩立像	一軀	長野縣上水内郡若槻村大字吉	丸山正太郎 丸山吉太 丸山武雄 八田長治 八田弘
銅造阿彌陀如來坐像 (本堂安置)	一軀	石川縣金澤市野田寺町	伏見寺
木造千手觀音坐像 (觀音堂安置) 像内ニ正保八年卯月三日金剛位禪惠ノ佛師幸賀拉ニ賴眞等ノ銘アリ	一軀	富山縣高岡市關町	總持寺

銅造如來立像
銅造觀音菩薩立像
金銅大觀音菩薩立像
金銅薄肉實生如來坐像
金銅薄肉不空成就如來坐像
金銅薄肉金剛寶菩薩坐像
(那智山經塚出土) 面面面軀軀軀

文書典籍書蹟之部

紙本墨書聖德太子傳曆 上下各本末
下末ニ元德三年書寫ノ奥書アリ
紙本墨書香要抄 本末
各卷ニ保元元年書寫ノ奥書アリ
紙本墨書藥種抄 本末
各卷ニ保元元年書寫ノ奥書アリ
紙本墨書古文書手鑑
(正月廿五日北畠顯家消息以下六十通)
紙本墨書章意僧正傳 殘卷
紙本墨書源氏物語 早藏
紙本墨書名語記 自卷第二至第十
卷第十二建治元年六月廿五日北條實時ノ奥書アリ
紙本墨書後鳥羽天皇宸翰熊野懷紙(山路曉望) 慕里神樂
紙本墨書後鳥羽天皇宸翰熊野懷紙(行路水) 慕里神樂
紙本墨書增鏡 後景光院御筆
紙本墨書吾妻鏡(自壽永三年四月) 至元曆元年十二月
紙書ニ應永十三年書寫ノ山密往來アリ
仁和寺心遠院ノ朱印アリ
紙本墨書吾妻鏡 (抄録)
紙本墨書太田康有建治三年記 (金澤文庫本)
紙本墨書阿那律八念經
(天平神護二年十月八日吉備田利顯經)
紙本墨書(楠木合戰注文) 博多日記
紙書ニ嘉曆四年東福寺領彼村庄文書目錄アリ
紙本墨書歌合
卷第一 陽成院哥合 夏蟲戀
寛平御時哥合 菊合

八點 和歌山縣東牟婁郡 青岸渡寺
那智町

四帖 東京府東京市麹町 藤浪剛一
區内幸町一丁目
二卷 同 人
二卷 同 人
一帖 同小石川區雜司ヶ谷町 保阪潤治
一卷 同 人
一帖 同 人
九帖 同 人
一幅 同日墨區駒場町 侯爵前田利爲
一幅 同 人
二十帖 同 人
一卷 同 人
一冊 同 人
一卷 同 人
一卷 同 人
一卷 同 人
五卷 同 人

卷第二 內裏哥合 菊合 延喜十三年
亭子院哥合 女廊花 昌泰元年
宇多院哥合 延喜十三年

卷第三 內裏哥合 寛和元年八月十日
內裏哥合 寛和二年 加八月廿日養應哥
內裏哥合 天曆七年
內裏哥合 天曆九年
內裏哥合 天德四年
華山院哥合
內裏哥合 永承四年十一月九日
內裏哥合 永承六年五月五日
陽成院親王二人哥合 嵯覺戀
(卷次不詳)
民部卿行平卿家哥合
本院左大臣家哥合
太政大臣貞信公家哥合
坊城石大臣殿哥合 天曆十年八月十一日
左大臣家哥合 貞元二年八月十六日
卷第十 亭子院殿上人哥合
藏人所衆哥合 天曆十一年二月
前々坊帶刀 秋景色物 陳哥合
三條院帶刀 正曆四年 陳哥合
兵衛佐定文朝臣哥合
源順馬名哥合
論春秋哥合
河原院哥合
中務君哥合
雅材女哥合

紙本墨書賀陽院歌合 永承五年六月
紙本墨書源氏物語 花散里、柏木
紙本墨書中務集 附錄秋草文様埋物時繪箱 一合
紙本墨書兼好家集稿本
刊本拙藁千百 (高麗版)
至正十四年ノ開板記アリ
一冊 二帖 一帖 一卷
同 同 同 同
人 人 人 人

紙本墨書後深草天皇宸翰御消息 (五月廿五日御花押)	一幅	京都府京都市中京區大坂材木町	里見忠三郎	紙本墨書大乘堂珍論 卷上 寶龜三年正月廿五日書寫ノ奥書アリ 天曆九年三月廿四日親理已講ノ白書アリ	一卷	同	同
紙本墨書後光嚴院御消息	一幅	同	同	紙本墨書是法非法經 「塔院傳法」ノ朱印アリ	一卷	同	同
紙本墨書近衛兼經消息 (廿四日)	一幅	同	同	紙本墨書舍利弗阿毗曇論 卷第一 輔附端裏ニ校正ノ記アリ	一卷	同	同
紙本墨書九條道家願文 (承久三年三月九日慈円筆)	一卷	同	同	紙本墨書大般涅槃經集解 卷第十四第卅二殘卷	二卷	同	同
紙本墨書大般若經 卷第五百十四 天平二年三月書寫ノ奥書アリ	一卷	同東洞院通丸太町 南人	守屋孝藏	紙本墨書法華經 卷第六殘卷 奥ニ偽奏弘始七年三月十六日羅什翻譯云々ノ記アリ	一卷	同	同
紙本墨書最勝王經註釋卷第四斷簡 (飯室切)	一卷	同	同	紙本墨書三戒經 卷下	一卷	同	同
紙本墨書觀自在菩薩如意輪瑜伽法要 殘卷 永保二年移寫第廿二年受學ノ奥書アリ	一卷	同	同	紙本墨書華嚴略疏判定記 卷第八本殘卷 「信」ノ朱印アリ	一卷	同	同
紙本墨書華嚴十重唯識瑞鑑記 卷第四 正應五年五月三日撰述ノ奥書アリ 紙背ニ消息アリ	一卷	同	同	紙本墨書開元釋教錄 卷第十八殘卷	一卷	同	同
紙本墨書凝絶道冲墨蹟 (淳祐辛丑良月巳未)	一幅	同	同	紙本墨書五分律 卷第十五	一卷	同	同
紙本墨書蘭溪道隆墨蹟 (再留前堂首座上堂語) 附古田鐵部消息 一幅	一幅	同	同	紙本墨書發菩提心經論 卷上	一卷	同	同
紙本墨書橫川如瑛墨蹟	一幅	同	同	紙本墨書順正理論述文記 卷第十八 紙背ニ佛典ノ抄出アリ	一帖	同	同
蠟箋墨書無學祖元墨蹟 (弘安九年七月廿五日)	一幅	同	同	紙本墨書法華經 卷第二、第四 延長三年四年宗覺點ノ奥書アリ	二卷	同	同
紙本墨書元庵普寧墨蹟 (志無第二念云々)	一幅	同	同	紺紙銀字文殊師利問菩提經 (至元十三年高麗國王致願藏經)	一帖	同	同
紙本墨書石室祖瑛墨蹟 附大統義心墨蹟 一幅	一幅	同	同	紙本墨書菩薩瓔珞本業經 卷下殘卷 (大統十七年比丘惠慶藏經)	一卷	同	同
紙本墨書寂室元光筆大悲禪師法語	一幅	同	同	紙本墨書律序 卷第上殘卷 梁普通四年四月ノ奥書アリ	一卷	同	同
紙本墨書造寺料物注文斷簡	一通	同	同	紙本墨書成實論 卷第十二殘卷 奥ニ西京進寫トアリ	一卷	同	同
紙背ニ寫經料紙光帳アリ	同	同	同	紙本墨書飛部造立磨寫經試字 紙背ニ東大寺司食物下用帳アリ	一幅	同下鴨泉川町	岩井武俊
紙本墨書大般若經 卷第二、百卅二 (天平十一年七月十日石川年足願經) 龍興元年十月廿日ノ講場列位アリ	一帖	同左京區龜ヶ谷宮 前町	小川陸之輔	紙本墨書後陽成天皇宸翰玄上御琵琶寸法 慶長七年林鍾廿四日ノ御奥書アリ	一卷	同	同
紙本墨書根本說一切有部百一羯磨 卷第八 「東大寺印」ノ朱印アリ	一卷	同	同	紙本墨書延喜式 第十二、殘卷第十四、第十六 卷第十四ニ大治二年七月十二日移寫ノ奥書アリ	三卷	同大阪府南河内郡天 野村	金剛寺
紙本墨書十誦律第六 卷第卅八 (天平十二年五月一日光明皇后御願經)	一卷	同	同	紙本墨書大般涅槃經 卷第二、殘卷第四、第五、第六 各卷ニ天平十四年後村上天皇ノ御奥書アリ	十卷	同	同
紙本墨書央堀院經 卷第四 (天平十二年五月一日光明皇后御願經) 「東大寺印」ノ朱印アリ	一卷	同	同	紙本墨書大般涅槃經 卷第二、殘卷 (神護景雲二年五月十三日孝謙大皇勅願經)	一卷	同兵庫縣神戸市兵庫 區門口町	後藤宗弘
紙本墨書首楞嚴經 卷第一 「善光」ノ朱印アリ	一卷	同	同				
紙本墨書俱舍論 卷第廿一、殘卷 (神護景雲二年五月十三日孝謙大皇勅願經)	一卷	同	同				

文部省告示第三百四號 昭和十二年八月二十五日

品目

文書典籍書蹟之部

紙本墨書五臣注文選 卷第廿殘卷

紙背ニ弘法外典鈔卷第一ノ書寫アリ

紙本阿彌陀如來摺佛等

摺佛各紙背ニ供養諸尊ノ列名アリ
内紙ニ建久五年六月廿九日始之トアリ

六十八枚

東京府東京市品川區上大崎五丁目
京都市京都市上京區寺町廣小路上ル

公爵三條公輝
遺迎院

彫刻之部

木造文殊菩薩騎獅像

木造地藏菩薩半跏像

木造不動明王及八大童子像

附紙ニ墨書遺像題文一枚
文永九年十一月廿一日大佛師法眼康國繪佛師法橋重命トアリ

厨子入木造愛染明王坐像

厨子ニ焰鬘天曼荼羅等ノ繪アリ

木造(獅子象)一一

木造阿彌陀如來立像

木造阿彌陀如來坐像

木造觀音菩薩立像

木造觀音菩薩坐像

木造阿彌陀如來及兩脇侍像

像内腹部ニ平治元年十一月廿五日ノ銘アリ
中尊像内背部ニ建仁三年二月十日造立ノ銘アリ

木造十一面觀音立像

木造十一面觀音立像

木造千手觀音立像

木造觀音菩薩立像

木造地藏菩薩立像

木造(廣目天立像)一一

木造局額

額文「日本總鎮守大山積大明神」

昭和十二年度國寶所有者變更

文部省告示第二十六號 昭和十二年二月二日

昭和八年文部省告示第十五號中左記國寶ハ本年一月四日其ノ所有者變更セリ

品目

紙本墨書一神論卷第三殘卷

一卷

新所有者 兵庫縣武庫郡住吉村
京都市京都市土區養老町

舊所有者 富岡益太郎

文部省告示第二十七號 昭和十二年二月二日

昭和六年文部省告示第三百三十二號中左記國寶ハ本年一月十六日其ノ所有者變更セリ

太刀 銘助包

一口

新所有者 東京府東京市町區麹町一丁目加藤正治

舊所有者 東京府東京市京橋區一丁目根津嘉一郎

文部省告示第六十九號 昭和十二年二月二十七日

昭和六年文部省告示第三百三十二號中左記國寶ハ本年二月十四日其ノ所有者變更セリ

太刀 銘光忠

一口

新所有者 東京府東京市世田區深澤町四丁目長尾欣彌

舊所有者 東京府東京市京橋區一丁目吉田吉之助

文部省告示第六十二號 昭和十二年四月五日

昭和九年文部省告示第二十三號中左記國寶ハ本年三月十六日其ノ所有者變更セリ

太刀 勝久國

一口

新所有者 東京府東京市小石川區高田一丁目依藤細川護立

舊所有者 兵庫縣武庫郡本山村河瀬壽子

文部省告示第六十三號 昭和十二年四月五日

昭和十一年文部省告示第二百二十六號中左記國寶ハ本年二月十五日其ノ所有者變更セリ

紙本著色三十六歌仙切(忠親佐竹家傳來)

一幅

新所有者 石川縣金澤市十間町中島德太郎

舊所有者 京都市京都市中京區橋本町平井仁兵衛

文部省告示第二百一十一號 昭和十二年四月十七日

昭和十一年文部省告示第二百二十六號中左記國寶ハ本年一月九日其ノ所有者變更セリ

紙本著色三十六歌仙(順佐竹家傳來)

一幅

新所有者 京都市京都市上京區堀井町山口二郎

舊所有者 京都市京都市上京區堀井町山口玄洞

紙本著色三十六歌仙切 (中務) 一幅 同人

文部省告示第二百四十八號 昭和十二年五月二十二日
昭和六年文部省告示第九號中左記國寶ハ本年五月一日其ノ所有者變更セリ

太刀 銘基近造 一口 新所有者 東京府東京市目黒區駒場町 一丁目 松永安左衛門 舊所有者 東京府東京市目黒區駒場町 一丁目 松永安左衛門

文部省告示第二百四十九號 昭和十二年五月二十二日
昭和十一年文部省告示第二百二十六號中左記國寶ハ本年五月十二日其ノ所有者變更セリ

紙本著色法然上人繪傳 一卷 新所有者 東京府東京市澁谷區下落合 一丁目 松永安左衛門 舊所有者 東京府東京市小石川區林町 前川道平

文部省告示第二百五十六號 昭和十二年六月八日
昭和六年文部省告示第九號中左記國寶ハ本年一月十五日其ノ所有者變更セリ

太刀 銘正恒 一口 新所有者 東京府東京市牛込區若松町 伯爵戸田氏直 舊所有者 東京府東京市牛込區若松町 伯爵戸田氏共

文部省告示第二百八十三號 昭和十二年七月二十一日
昭和十年文部省告示第七十二號中左記國寶ハ本年七月一日其ノ所有者變更セリ

鐵製金欄手花鳥文様鉢 一口 新所有者 新潟縣中蒲原郡金津村 中野忠太郎 舊所有者 京都府與謝郡石川村 末次喬

文部省告示第二百九十二號 昭和十二年八月四日
昭和十年文部省告示第七十二號中左記國寶ハ本年六月十九日其ノ所有者變更セリ

紙本墨畫元久二年重源上人勸進狀 一卷 新所有者 奈良縣奈良市雜司町 奈良縣奈良市登大路町 中村正勝

文部省告示第四百十九號 昭和十二年十二月十日
大正四年文部省告示第五十六號中左記國寶ハ本年八月七日其ノ所有者變更セリ

木造十一面觀音立像 一軀 新所有者 三重縣度會郡東外城田村大字田宮寺 舊所有者 三重縣度會郡東外城田村大字田宮寺
木造十一面觀音立像 一軀 同 上 同 上

昭和十二年度國寶解除及燒失

文部省告示第二百六十八號 昭和十二年六月二十六日

京都府京都市左京區一乘寺竹ノ内町曼殊院所有ニ係ル左記國寶ハ昭和十一年十二月二十八日帝室博物館ノ所有トナレリ

指定告示 種類 品 目

明治三十九年內務省告示第三元號 繪畫 紙本墨畫夏冬山水圖(雪舟筆) 二幅
同上 紙本墨畫松ニ鷹圖(雪村筆) 二幅

明治四十一年內務省告示第四號 同上 絹本墨畫雪景山水圖(朱端筆) 一幅
大正六年文部省告示第七十二號 同上 紙本淡彩東北院歌合 一卷

大正三年文部省告示第八十六號 文書 紙本墨畫慈圓僧正願文(傳春日表白) 一卷
昭和十年文部省告示第百三號 同上 紙本墨畫慈圓僧正願文 一卷

大正五年文部省告示第八十四號 筆蹟 紙本墨畫光嚴天皇宸翰御消息 一幅
同上 紙本墨畫後花園天皇宸翰御消息 一幅

同上 紙本墨畫後陽成天皇宸翰御消息廿九通 一卷
文部省告示第三十六號 昭和十二年二月九日

左記國寶ハ昭和十一年十月七日火災ニ罹リ燒失セリ

指定告示 等級 種類 品 目 所有者
大正二年文部省告示 甲種四等 彫刻 木造聖觀音立像 一軀 香川縣三豐郡仁尾村 第百五十七號 不動護國寺

昭和十二年度國寶修理

國寶保存法第十四條ニ依リ災害地方被害國寶建造物並ニ寶物類ノ維持修理ノ爲昭和十二年度ニ於テ補助金交付ヲ決定セルモノ左ノ如シ
(尙十二年度ニ於ケル修理竣工ノ建造物目錄ニ關シテハ本欄一六八頁參照)

建造物之部

府縣 件 名 修理費豫算額 昭和十二年度補助額

京都 寶塔寺塔婆、四脚門 一五、三七九〇六 六、二六五〇九

同 東福寺月下門 二、八三四、四五 二、三三四、四五

同 御香宮神社表門 九、三五一、〇三 二、〇〇〇、〇〇

同 教王護國寺金堂 一三五、〇〇〇、〇〇 七、〇〇〇、〇〇

千葉	大聖寺不動堂	一四、四〇五、三八	六、九〇五、三八
奈良	東大寺大湯屋、法華堂北門	四三、七三〇、三五	一四、七二五、六三
同	興福寺東金堂	四八、四六二、八六	七、〇〇〇、〇〇
同	唐招提寺禮堂	六〇、三六四、六五	九、五〇〇、〇〇
愛知	定光寺佛殿	三五、二一七、八五	四、〇〇〇、〇〇
静岡	五社神社々殿	六三、七八三、五〇	八、三六八、六四
青森	弘前城二ノ丸辰巳櫓、同丑寅櫓、三ノ丸追手門	四三、〇二四、三五	一三、〇三五、〇三
滋賀	園城寺大門、新羅善、神堂	八、三八五、三六	四、一八五、三六
同	西明寺本堂、塔婆	二三、四七三、〇〇	七、〇〇〇、〇〇
同	石津寺本堂	二三、三〇八、八九	八、八一二、五四
宮城	阿彌陀堂	一、六〇六、〇〇	八〇三、〇〇
富山	瑞龍寺法堂、佛殿、總門	七九、七〇五、三九	一二、七〇五、三九
石川	妙成寺書院鎮守堂	三二、二〇〇、八二	九、五〇〇、〇〇
山口	平清水八幡宮本殿	一二、九七〇、〇〇	七、七七〇、〇〇
福岡	宮崎宮本殿	一七、二二三、五七	三、二二三、五七
高知	藥師堂	五、四三四、〇五	二、四三四、〇五
愛媛	松山城 乾門、同東續櫓、筒井門 同東、西續櫓、隱門、同續櫓	三〇、六六〇、二八	二、〇〇〇、二八
同	興隆寺本堂	三二、七八二、四五	六、七八二、四五
京都	仁和寺二王門	四六、四九七、二〇	一四、〇〇〇、〇〇
奈良	昭和十二年度法隆寺國寶保存工事	二〇〇、〇〇〇、〇〇	一九〇、〇〇〇、〇〇
京都	建仁寺方丈	六七、四三〇、三八	三五、五八九、五三
大阪	觀心寺書院	一九、四一八、〇〇	六八一、三七
同	聖神社本殿	一九、七六〇、八六	一、二六〇、八六
和歌山	大傳法院多寶塔	七八、三二一、二四	三五、三二一、二四
合 計		四二三、二〇三、八六	
府縣	件 名	修理費豫算額 円	昭和十二年度補助額 円
京都	妙法院 木造千手觀音立像 八十軀	二八、七四八、〇〇	一四、三七四、〇〇
同	禪定寺 木造四天王立像 四軀	一、七七二、九〇	一、五七二、九〇

古美術保存

紙本墨書延喜式神名帳 一卷	
紙本墨書延喜式 三卷	
第十二卷第十四十六	
大阪 金剛寺 紙本墨書大般涅槃經 一卷	九九〇、二〇
卷第七	
紙本墨書大般涅槃經 十卷	
無銘	
一口	

滋賀	西教寺 紙本墨書無量義經疏 三卷	五五九、四〇	四五八、八〇
山形	上杉神社 紫綾金泥兩界曼荼羅圖 三卷	九九二、五〇	七九二、五〇
奈良	長弓寺 木造十一面觀音立像 一軀	二、一八八、七〇	一、九三八、七〇
京都	養徳院 絹本著色足利滿詮像 一幅	三九〇、二〇	二九〇、二〇
同	禪定寺 木造文殊菩薩騎獅像 一軀	五四七、五五	四七七、五五
同	廣隆寺 木造文殊菩薩坐像 一軀	三七三、六五	二七三、六五
同	上品蓮 絹本著色文殊菩薩像 一幅	三五〇、四〇	二五〇、四〇
愛知	成就院 木造觀音菩薩立像 一軀	三九四、一五	三四〇、〇〇
同	平勝寺 木造觀音菩薩坐像 一軀	四、三六九、四〇	三、八〇〇、〇〇
埼玉	天洲寺 木造聖德太子立像 一軀	三七四、七〇	二九九、七六
山梨	大泉寺 絹本著色武田信虎像 一幅	三六六、六一	二九一、六一
静岡	御穂神社 太刀 一口	一三一、〇〇	一〇四、八〇
福井	長源寺 絹本著色大日如來像 一幀	三〇九、一五	二五九、一五
兵庫	太山寺 絹本著色法華曼荼羅圖 一幅	三九四、四〇	二七六、〇八
同	鶴林寺 絹本著色彌陀三尊像 一幅	四七四、四〇	三七九、五二
三重	慈恩寺 木造阿彌陀如來立像 一軀	五一、九五	三五八、三七
長野	眞光寺 木造阿彌陀如來及脇侍像 三軀	二、九九四、二〇	二、七四四、二〇
同	清水寺 木造廣目天立像 二軀	一、〇五四、七五	九〇四、七五
計		三、〇二七、一四	

昭和十二年度重要美術品認定

文部省告示第十六號 昭和十二年一月二十七日

繪畫之部

絹本着色嵐山圖 冷泉爲恭筆

一幅 愛知縣名古屋西關戸有彦

文部省告示第五十號 昭和十二年二月十六日

品目 繪畫之部

所有者

彫刻之部

紙本墨畫正觀音像 玄證ノ署名、花押及高山寺ノ印アリ

一幅 東京府東京市本郷區三組町 小倉武之助

木造男神坐像

一軀 東京府東京市芝區中門前二丁目 松田福一郎

紙本着色一遍上人繪傳斷簡

一幅 同 岸偉一

木造阿彌陀如來立像

一軀 同 小野賢一郎

紙本着色仲文像 (歌仙切)

一幅 同 公爵毛利元昭

木造能面翁(白色尉) 傳日光作

一面 同 梅若六郎

紙本墨畫富岳圖 延徳二年得之ノ題語アリ

一幅 同 岡崎正也

木造能面三番叟(黑色尉) 傳日光作

一面 同 同

紙本着色一休和尚像 墨齋筆ノ一休自贊語アリ

一幅 同 同 上

木造能面延命冠者

一面 同 同 上

紙本墨畫素性像 (歌仙切)

一幅 同 同 上

木造能面阿古父尉 傳熊大夫作

一面 同 同 上

紙本着色狹衣物語斷簡

一幅 同 同 上

木造能面阿古父尉 傳熊大夫作 裏ニ「エチセンノクニ熊大夫(花押) 文明十三辛丑五月日」トアリ

一面 同 同 上

紙本着色道成寺緣起

一卷 同 同 上

木造能面小飛出 傳夜叉作

一面 同 同 上

紙本着色中鳥居左右貫之社人圖 英一蝶筆

三幅 同 同 上

木造能面蛙(河津) 傳日光作

一面 同 同 上

紙本墨畫白衣觀音像 「玄證本」花押及高山寺ノ印アリ

一枚 同 同 上

木造能面平太 傳寶來作

一面 同 同 上

紙本墨畫梅花小禽圖 單庵筆

一幅 同 同 上

木造能面中將

一面 同 同 上

紙本墨畫山水圖 傳蛇足筆(印文不明)

一幅 同 同 上

木造能面小喝食 傳ダンマツマ作

一面 同 同 上

紙本着色祭禮草紙

一卷 同 同 上

木造能面童子 傳小牛作

一面 同 同 上

紙本着色馬圖 「賢江」詳啓ノ印アリ

二幅 同 同 上

木造能面童子 傳小牛作

一面 同 同 上

紙本着色寫生圖 圓山應舉筆

一卷 同 同 上

木造能面若女

一面 同 同 上

紙本着色寫生圖 圓山應舉筆

一卷 同 同 上

木造能面深井 傳德若作

一面 同 同 上

紙本着色十六羅漢像 「圖書」光宣ノ印アリ

十六幅 同 同 上

木造能面深井 傳德若作

一面 同 同 上

紙本着色山水圖 蕉雨瑞仙ノ賛アリ

一幅 同 同 上

木造能面泥眼 傳日光作

一面 同 同 上

燈臺鏡板著色繪 田中訥言筆

一面 同 同 上

木造能面真蛇 傳德若作

一面 同 同 上

附箱 消息 一幅

愛知縣名古屋市中區田代町 森川勘一郎

木造能面山姥 傳赤鶴作

一面 同 同 上

紙本着色十六羅漢像 「圖書」光宣ノ印アリ

十六幅 同 同 上

木造能面深井 傳德若作

一面 同 同 上

紙本着色山水圖 蕉雨瑞仙ノ賛アリ

一幅 同 同 上

木造能面泥眼 傳日光作

一面 同 同 上

燈臺鏡板著色繪 田中訥言筆

一面 同 同 上

木造能面真蛇 傳德若作

一面 同 同 上

附箱 消息 一幅

愛知縣名古屋市中區田代町 森川勘一郎

木造能面山姥 傳赤鶴作

一面 同 同 上

木造四天王立像
木造大黒天半跏像
木造千手觀音立像

文書典籍書蹟之部

彩牋墨書三寶齋斷簡 (京大寺切くみかうはしき)

紙本墨書雲葉和詩集卷第四殘卷

紙本墨書大般若經卷第二百廿五

紙本墨書明惠上人如來遺跡講式殘卷

宋刊大藏經(東福院版)

紙本墨書法界無差別論疏領要鈔 上

宋刊焚薪卷第一第二

紙本墨書勝鬘寶窟

紙本墨書名教抄(卷第一、第二、第三、第五、第六、
嘉祿二年二月廿九日真演ノ奥書アリ)

紙本墨書悉曇集記並加文

宋版華嚴五十要問答初卷

紙本墨書傳屍肝心抄等

紙本墨書書目次記 (應永九年、十三年、十四年)

紙本墨書口讀秘錄

紙本墨書紫式部集、赤染衛門集、小馬命婦集

紺紙金泥大般若經卷第四百六十

見返ニ説法圖アリ

一軀 大阪府大阪市住吉區阿倍野筋三丁目
一軀 神奈川縣鎌倉郡鎌倉町
一軀 長野縣埴科郡戸倉村
坂井直次郎

一幅 東京府東京市麴町區元園町一丁目
加藤正治

一卷 同
鈴木吉祐

一卷 同
上

三十九帖 同
松田福一郎

二帖 同
上

二帖 同
上

六帖 同
上

八帖 同
上

二帖 同
上

二帖 同
上

一帖 同
上

一卷 同
上

一卷 同
上

一卷 同
上

一帖 同
上

一卷 同
上

一卷 同
上

紙本墨書古今集序 (傳説違筆)

古註ヲ朱書片假名書トセリ

紙本墨書後撰集卷第二斷簡(鳥羽切)(ことはとて)

紙本墨書後拾遺集卷第六斷簡 (中隱切(旅宿の)

紙本墨書道濟集斷簡(紙燃切(あきまむく)

紙本墨書後撰集卷第七斷簡 (白河切(巻尾)

紙本墨書古今集卷第二斷簡(昭和切(つらゆき、やま

紙本墨書正親町公藤消息 (十月十一日)

彩牋墨書古今集卷第十三斷簡(長部切(兼平朝臣の)

紙本墨書建久二年三月三日若宮社歌合

康永二年十月十四日校合ノ奥書アリ

紙上墨書新院廳誦文(嘉元三年十月廿八日)

紙本墨書德川家康自筆日記念佛

中二慶長十七年子八月四日アリ

刊本金光明經

卷第一二正平辛丑奉ノ奥書アリ

紙本墨書貫之集下斷簡 (石山切)(このころは)

紙本墨書藤原俊成筆千載集卷第十一斷簡

(日野切(卷首)

紙本墨書左京大夫道雅家歌合斷簡 (卷首)

色紙墨書貫之集下斷簡 (石山切)(としけき)

彩牋墨書貫之集下斷簡 (石山切(あふことの)

紙本墨書伊勢集斷簡 (石山切(かへし、いつはらす)

紙本墨書後光嚴院宸翰御消息 (參事云々)

紙本墨書大般若經(卷第三十八、第八十七、第九十七、第

「藥師寺」ノ朱印「藥師寺金堂」ノ黒印アリ

紙本墨書法華經卷第四

經綏移部ノ奥書アリ

紙本墨書靈元天皇宸翰御懷紙 (洛にて)

紙本墨書文書 (八月十四日日野資名奉院宣以下十一通)

紙本墨書後奈良天皇宸筆家鶏圖並御贊(榮の戸の)

附懸麻紙王御筆御添狀 一幅

附懸麻紙王御筆御添狀 一幅

一卷 同杉並區方南町 清岡眞彦

一幅 京都府京都市中京區大阪材木町 里見忠三郎

一幅 同 同

一幅 同 同

一幅 同 同

一幅 同 同

一幅 同 同

一幅 同 同

一幅 同 同

一幅 同 同

一幅 同 同

一幅 同 同

一幅 同 同

一幅 同 同

一幅 同 同

一幅 同 同

一幅 同 同

一幅 同 同

一幅 同 同

一幅 同 同

一幅 同 同

一幅 同 同

一幅 同 同

一幅 同 同

一幅 同 同

一幅 同 同

一幅 同 同

一幅 同 同

一幅 同 同

一幅 同 同

一幅 同 同

一幅 同 同

一幅 同 同

一幅 同 同

一幅 同 同

一幅 同 同

彩箋墨書古今和歌集卷第十三斷簡 (民部切)の哥は	一幅	同河縣郡若松村	伊坂又右衛門	紙本墨書源家長筆懷紙(詠能游女和哥)	一葉	同
紙本墨書貫之集下斷簡 (石山切)秋たつ日	一幅	愛知縣名古屋市東區宮澤町一丁目	青木鎌太郎	紙本墨書文治五年九月四日消息	一幅	同
紙本墨書伊勢集斷簡 (石山切)よろこひけり	一幅	同	同	紙本墨書北條時宗書狀(六月十九日)	一幅	同
紙本墨書伊勢集斷簡 (石山切)よろこひけり	一幅	同	同	紙本墨書豐臣秀吉自筆書狀(定庵淺井氏宛)	一幅	同
紙本墨書藤原通親筆鹿野懷紙 (山河水鳥)	一幅	同	同	紙本墨書德川家康自筆日課念佛 中二慶長十七年五月十一日トアリ	一幅	同
紙本墨書曾根好忠集斷簡 (五月下)	一幅	同	同	紙本墨書德川家康自筆日課念佛 中二慶長十七年七月十一日トアリ	一幅	同
紙本墨書曾根好忠集斷簡 (夏下、六月上)	一幅	同	同	紙本墨書伊勢集斷簡 (石山切)ひさかたの	一幅	同
彩箋墨書貫之集下斷簡 (石山切)君により	一葉	同	伊藤喜兵衛	紙本墨書貫之集下斷簡 (石山切)京極の宰相	一幅	同
紙本墨書伊勢集斷簡 (石山切)にさへや	一葉	同	上	紙本墨書曾根好忠集斷簡 (四月上)	一幅	同
彩箋墨書伊勢集斷簡 (石山切)ありての	一幅	同	野崎森一	紙本墨書麗花集斷簡 (香紙切)くひわひて	一幅	同
紙本墨書古今集卷第一斷簡 (高野切)公子院の	一幅	同	中村貫之助	紙本墨書貫之集下斷簡 (石山切)おもひあまり	一幅	同
古筆手鑑 中三崇光院宸翰御消息(神人の、後土御門天皇宸翰御詠 草(神山や)針切(ふゆのはしめ)高野切)たちまの 元禄校木蘭集切(安加胡麻子)同切(み)ろし藍紙木蘭 集切久佐麻久良山名切(納涼)尹大納言京紙斷簡日 野切(藤原家隆)等アリ	二帖	同	上	紙本墨書後花園天皇宸翰御消息 (寶徳二年十二月六日)	一幅	同
紙本墨書大燈國師假名消息 (建武元年十一月十四日)	一幅	同	上	紙本墨書豐臣秀吉自筆書狀(三月廿日) (とも人宛)	一幅	同
紙本墨書道濟集斷簡 (紙擦切)よそなき	一幅	同	森川勘一郎	紙本墨書後水尾天皇宸翰御懷紙(辛亥元日) 御名アリ	一幅	同
紙本墨書古今集卷第十三斷簡 (筋切)おきもせず	一幅	同	上	彩箋墨書伊勢集斷簡 (石山切)屏風に	一幅	同
紙本墨書建安自如並覺恩斷江墨蹟 (奉元三年三月十五日)	一幅	同	上	紺紙金字五苦章句經 見返ニ説法圖アリ	一卷	同
彩箋墨書古今集卷第十三斷簡 (民部切)このたは	一幅	同	上	色紙墨書萬葉集卷第九斷簡 (藍紙本)春日歌一首	一幅	同
紙本墨書藤原俊成筆千載集卷第十八斷簡 (日野切)かくしだいのだ	一幅	同	森川 馨	紙本墨書貫之集下斷簡 (石山切)とはき人に	一幅	同
紙本墨書西園寺實兼筆懷紙 (九月十三日)臨住吉社壇	一幅	同	上	紙本墨書貫之集下斷簡 (石切返)返事に、ち	一幅	同
紙本墨書明惠上人假名消息 (井上尼の返事)	一幅	同	上	紙本墨書伊勢集斷簡 (石山切)とりより	一幅	同
紙本墨書伏見天皇宸翰御歌集殘卷 (廣澤切)野雨以下三十五首一卷	一卷	同	上	紙本墨書伊勢集斷簡 (石山切)おとほかは	一葉	同
紙本墨書最勝王經註釋卷第四斷簡 (飯室切)丁里反	一幅	同	横井新平	紙本墨書貫之集下斷簡 (高野切)ならへまかり	一幅	同
色紙墨書和漢朗詠集斷簡卷下 (法輪寺切)水閣漁父	一幅	同	高橋正彦	紙本墨書伊勢集斷簡 (石山切)くちちをち	一幅	同
紙本墨書深養父集斷簡 (傳貫之筆)秋部	一幅	同	上	彩箋墨書源信明集	一帖	同
紙本墨書藤原信綱筆懷紙 (遊女置陪仕云々)	一葉	同	關戸有彦			

紙本墨書後土御門天皇宸翰御詠草

燒室ノ加路アリ

一幅

同 上

太刀 銘助真

一口 同芝區高輪南町

俣壽 池田 宣政

紙本墨書後陽成天皇宸翰三首倭歌御懷紙(花間、花邊、花散)

一幅

同 上

太刀 銘口家傳吉家

一口 同

同 上

紙本墨書後陽成天皇宸翰御消息(八月四日、御花)

一幅

同 上

太刀 銘口家傳吉家

一口 同

同 上

紙本墨書古今集卷第三斷簡(高野切、ほと、きす)

一幅

同 上

太刀 銘康次

一口 同

同 上

紙本墨書孤山至遠墨蹟

一幅

同 上

太刀 銘康次

一口 同

同 上

紙本墨書姉小路基綱消息(九月十一日)

一幅

同 上

太刀 銘康次

一口 同

同 上

紙本墨書後西天皇宸翰御懷紙(なかしの日)

一幅

同 上

太刀 銘康次

一口 同

同 上

色紙墨書和漢朗詠集卷下斷簡(法輪寺切、同季陵)

一幅

同 上

太刀 銘康次

一口 同

同 上

紙本墨書蘇原俊成筆千載集卷第十六斷簡(日野切、法性寺人遺)

一幅

同 上

太刀 銘康次

一口 同

同 上

紙本墨書明惠上人消息(御わたりの)

一幅

同 上

太刀 銘康次

一口 同

同 上

紙本墨書後柏原天皇宸翰御懷紙(歲中立春、永正六年九月九日御寄到首ノ中)

一幅

同 上

太刀 銘康次

一口 同

同 上

紙本墨書古文孝經

一册

同 上

太刀 銘康次

一口 同

同 上

紙本墨書花園天皇宸翰御消息(八月廿九日)

一幅

同 上

太刀 銘康次

一口 同

同 上

紙本墨書明月記(貞永元年五月)

一卷

同 上

太刀 銘康次

一口 同

同 上

紙本墨書藤原定家筆熊野懷紙(詠深山紅葉和詩)

一幅

同 上

太刀 銘康次

一口 同

同 上

紙本墨書敏行集、宗干集

一卷

同 上

太刀 銘康次

一口 同

同 上

紙本墨書天神講式

一卷

同 上

太刀 銘康次

一口 同

同 上

紙本墨書馮子振墨蹟(泰定乙丑冬孟)

一幅

同 上

太刀 銘康次

一口 同

同 上

紙本墨書繼印戒牒(至治二年十月)

一幅

同 上

太刀 銘康次

一口 同

同 上

紙本墨書手鑑(筆林)

一帖

同 上

太刀 銘康次

一口 同

同 上

紙本墨書後陽成天皇宸翰御短冊(中二後柏原天皇宸翰御短冊六十枚、後奈良天皇宸翰御短冊十枚、中院切、うさのつかひ、足崎切、しらくもの等アリ)

一帖

同 上

太刀 銘康次

一口 同

同 上

刀 銘傳國俊

一口

同 上

太刀 銘康次

一口 同

同 上

刀 銘傳國俊

一口

同 上

太刀 銘康次

一口 同

同 上

刀 銘傳國俊

一口

同 上

太刀 銘康次

一口 同

同 上

刀 銘傳國俊

一口

同 上

太刀 銘康次

一口 同

同 上

刀 銘傳國俊

一口

同 上

太刀 銘康次

一口 同

同 上

刀 銘傳國俊

一口

同 上

太刀 銘康次

一口 同

同 上

刀 銘傳國俊

一口

同 上

太刀 銘康次

一口 同

同 上

太刀 銘備前國住守次

太刀 銘備前長船住長重作
建武二年八月日

太刀 銘助真

短刀 無銘傳正宗

刀 銘以南城藏於武州江戸越前康繼
慶長十九年八月吉日

刀 無銘傳吉岡一文字

工藝及考古學資料之部

陶製肩衝茶入 銘北野(附屬物共)

磁製色繪草花圖大皿 傳酒井田柿右衛門作

磁製色繪草花圖大皿 傳酒井田柿右衛門作

陶製茄子茶入 銘木葉猿(名利久物相)

青磁香爐

陶製肩衝茶入 銘松屋(附屬物共)

青白磁彫花牡丹文瓶

赤銅魚子地高彫色繪櫻楓圖丸形鐔二枚

赤銅魚子地高彫色繪櫻楓圖小柄斧二具

赤銅高彫色繪楓目貫

赤銅高彫色繪楓目貫

赤銅魚子地高彫色繪玉堂富貴圖長丸形鐔

鎔太刀

三重縣桑名郡 鎔製三神三獸鏡天玉日月ノ銘アリ
桑名町出土品 鎔製四神鏡天玉日月ノ銘アリ

陶製伊賀燒花生

蒔繪山水圖小硯宮 銘三室山

陶製茄子茶入 銘富士(附屬物共)

陶製肩衝茶入 銘新田(附屬物共)

一口 同 上

一口 同武庫部鳴尾村 木村巳之吉

一口 山形縣酒田市本町 本間光正

一口 富山縣高岡市旅籠 東京帝室博物館

一口 同東端波郡福野町 高島恭子

一口 同東端波郡福野町 小澤雅俊

一箇 東京府東京市日本橋區駿河町 三井合名會社

一枚 同芝區高輪南町 磯村豐太郎

一箇 同麻布區島居坂町 男爵岩崎小彌太

一箇 同 上

一箇 同赤坂區葵町 財團大倉集古館

一箇 同青山南町六丁目 根津嘉一郎

一合 同 上

一合 同 上

一箇 同牛込區戸山町 反町茂作

一箇 同矢來町 梅澤彦太郎

一組 同若宮町 古河虎之助

一枚 同東五軒町 長谷川起夫

一口 同小石川區水道町 三井高修

三面 同本郷區湯島三組 小倉武之助

一箇 同品川區上大崎四丁目 益田弘

一合 同日黑區駒場町 同 上

一箇 同日黑區駒場町 侯爵前田利爲

一箇 同澁谷區猿樂町 公爵德川閣順

陶製肩衝茶入 銘玉堂(附屬物共)

鬼瓦 奈良縣高市郡高市村楠寺出土

陶製茄子茶入 銘みをつくし(一名紹鴨)

飛青磁花生

蒔繪三笠山圖硯宮

金伸付打刀拵

鬼瓦 奈良縣奈良市東大寺講堂趾出土

陶製瀨戸茶碗

鬼瓦 愛知縣中島郡明治村國分寺趾出土

袈裟襪文銅鐸

袈裟襪文銅鐸

銅製鑄出三十三觀音懸佛 長祿四年三月十八日ノ銘アリ
附懸佛鏡板長祿四年三月十八日ノ墨書銘アリ 一面

文部省告示第七十八號 昭和十二年三月九日

品 目 繪 畫 之 部

所 有 者

一箇 同 上

一箇 同瀨野川區西ヶ原 關野克

一箇 同大阪府大阪市東區今橋二丁目 男爵鴻池善右衛門

一箇 同 上

一口 同 上

一箇 同 上

一箇 同 上

一箇 同 上

一箇 同 上

一箇 同 上

一箇 同 上

一箇 同 上

一箇 同 上

一箇 同 上

一箇 同 上

一箇 同 上

一箇 同 上

一箇 同 上

一箇 同 上

一箇 同 上

一箇 同 上

一箇 同 上

一箇 同 上

一箇 同 上

絹本着色親鸞上人繪傳
附紙本墨書寶德元年裏書銘 二幅
絹本着色春庸宗想像 大永丁亥ノ自賛アリ
紙本着色前田利家像
絹本着色前田利春夫人像
絹本着色長好連像

書 蹟 之 部

紙本墨書飛鳥井雅經筆熊野懷紙 (山河水鳥)

工 藝 品 及 考 古 學 資 料 之 部

陶製茄子茶入 銘紹陽(附屬物共)
陶製肩衝茶入 銘山の井(附屬物共)
陶製肩衝茶入 銘山の井(附屬物共)
陶製肩衝茶入 銘山の井(附屬物共)
陶製南蠻人圖曲卓
金銅製戒體 底裏ニ元應二年五月十二日金剛寺願主
銅製飛雁文鏡
銅製瑞花雙鸞文八稜鏡
螺鈿半月形三足卓
金銅製牡丹透文柄香爐
陶製綠釉黑花瓷章
金銅製瑞花文磬
埴佛殘片
三重縣一志郡中川村天花寺趾出土
土製百萬塔
岐阜縣不破郡青墓村國分寺出土
土製露盤覆鉢
岐阜縣不破郡青墓村國分寺出土
蓮華文鬼瓦
岡山縣吉備郡田村吉備寺出土
石製九輪殘片
附金銅鏡片一箇
和歌山縣西牟婁郡三柄村慶寺趾出土

古 美 術 保 存

四幅 同江沼郡大聖寺町
一幅 同羽咋郡一ノ宮村
一幅 同鹿島郡西湊村
一幅 同和倉村
悅 叟 寺

一幅 京都府京都市中京區東生洲町
阿 部 市 太 郎

一箇 東京府京都市芝區下高輪町
益 田 多 喜

一箇 同麻布區本村町
藤 田 政 輔

一箇 京都府京都市下京區五條通柳馬場西入鹽町
湯 淺 七 左 衛 門

一脚 同伏見區深草坊町
瑞 光 寺

一箇 大阪府河内郡天野村
金 剛 寺

一面 同
同 上

一面 同
同 上

一箇 兵庫縣川邊郡寶塚町
同 上

一箇 同
同 上

一箇 同
同 上

一面 三重縣安濃郡安東村
鈴 木 正 一

三箇 同
同 上

一基 岐阜縣不破郡青墓村
國 分 寺

一箇 同
同 上

一箇 同
同 上

一箇 岡山縣吉備郡田村
吉 備 寺

六箇 和歌山縣西牟婁郡三柄村
法 恩 寺

石製九輪殘片
和歌山縣西牟婁郡三柄村慶寺趾出土
石製九輪殘片
和歌山縣西牟婁郡三柄村慶寺趾出土
文部省告示第百九十三號
昭和十二年四月九日
那 須 晉 吉
一箇 細 尾 榮 一

名 稱

所 有 者

所 在 地

建 造 物 之 部

石製露盤 (傳文覺上人碑閣所用)
一具 京都府京都市右京區梅ヶ畑高雄町 神 護 寺 墓地

木造玄關 (傳桃山城遺構)
一棟 同久世郡宇治町 最勝院 境内

石造寶篋印塔 (俗稱和泉式部之墓)
一基 同吉津村 智 恩 寺 境内

石造寶篋印塔 (俗稱多田滿仲之墓)
一基 神奈川縣足柄下郡根村 神奈川縣足柄下郡根村

石造五輪塔 (俗稱虎御前之墓)
一基 同 上 同 上

石造五輪塔 (俗稱曾我兄弟之墓)
二基 同 上 同 上

木造厨子 (傳若澤寺舊藏)
一基 長野縣東筑摩郡波田村 長野縣東筑摩郡波田村

石造寶塔
一基 岩手縣西磐井郡平泉村 岩手縣西磐井郡平泉村

文部省告示第百九十四號
昭和十二年四月九日

品 目

所 有 者

書 蹟 之 部

紙本墨書是則集斷簡 (傳貴之筆(わかこひを))
一葉 東京府京都市東區元園町 加 藤 正 治

紙本墨書齋宮女御集斷簡 (小島切(はらに))
一葉 同 同 同 上

紙本墨書古今集卷第十四斷簡 (筋切(酒井人真))
一葉 同 同 同 上

紙本墨書麗華集斷簡 (香紙切(ちる花を))
一葉 同 同 同 上

紙本墨書藤原俊成筆千載集卷第十一斷簡 (日野切(中納言俊忠))
一葉 同 同 同 上

刀 劍 之 部

太刀 銘兼永
一口 新潟縣新潟市本町 風 間 要 吉

考古學資料之部

綠釉蓮華文鈐瓦殘闕

平城京出土

鴟尾殘片

大阪府中河内郡堅下村知識寺出土

一箇 奈良縣奈良市福智院町 岩井福男

一箇 同北葛城郡王寺町 保井芳太郎

文部省告示第二百五十二號 昭和十二年五月二十七日

建造物之部

名 稱

所 有 者

所 在 地

鬼瓦 各々二長祿四年庚辰ノ銘アリ

二個 京都府京都市上京區紫野大徳寺町 大仙院 京都府京都市上京區紫野大徳寺町 大仙院

石造寶篋印塔

一基 同右京區梅ヶ畑柳尾町 高山寺 同右京區梅ヶ畑柳尾町 高山寺

石水院石標

天福季中〇〇建立
元亨二年〇〇戌十二月一日以石造ノ刻銘アリ

一基 同 同 同

馬繫所

一基 同 同 同

石造無縫塔

一基 同 同 同

石造無縫塔

一基 同 同 同

船屋形

一棟 兵庫縣印南郡北濱村 川本直助 兵庫縣印南郡北濱村 川本直助

文部省告示第二百五十三號 昭和十二年五月二十七日

品 名

繪 畫 之 部

所 有 者

彫 刻 之 部

紙本墨畫布袋圖

默庵筆 南堂清欲ノ賛アリ

一幅 東京府京都市豐町區元園町一丁目 加藤正治

絹本着色傳若宮八幡像

小川敏管筆 款記二七十九歳トアリ

一幅 同 同 同

絹本着色地藏十王圖

久岡守景筆 六曲屏

一幅 同 同 同

紙本墨畫排作圖

尾形光琳筆 二曲屏貼付

一雙 同 同 同

繪子小袖墨畫白梅圖

立原杏所筆

一幅 同 同 同

絹本着色中雨月左右熊野鉢木圖 冷泉爲恭筆

絹本着色社頭春遊圖 宮川長春筆

絹本着色雪中美人圖 葛飾北齋筆

絹本着色地藏菩薩圖 額裝 蜀山人ノ賛アリ

紙本着色狹衣物語斷簡

紙本墨畫元輔像 (歌仙切)

紙本着色赤人像 (歌仙切)

紙本墨畫山水圖 詳啓筆 雪村筆 款記二七十一トアリ

紙本墨畫竹林七賢圖 六曲屏

紙本着色雅定像 (歌仙切)

紙本着色山水圖 永理等五僧ノ賛アリ

紙本墨畫布袋見聞鷄圖 宮本武藏筆

紙本墨畫松花堂昭乘像 昭乘筆 自賛アリ

紙本着色當麻寺緣起繪卷 附 時繪連花園宮一合 寛永六年三月十四日寄進ノ銘アリ

紙本着色古今著聞集圖 田中納言筆

紙本金地著色四季草花圖 田中納言筆

紙本着色十二ヶ月行事圖 田中納言筆

紙本着色山王靈驗繪卷

紙本著色山王靈驗繪卷

木造能面鐵尉 傳福來作

木造能面大飛出 傳赤鶴作

木造能面飛出 傳三光坊作

木造能面牙飛出 傳德若作

木造能面黑鬚 傳赤鶴作

木造能面筋男 傳德若作

木造能面蛙 傳日永作

木造能面俊寛 傳日永作

三幅 同 同 上

一幅 同 同 上

一面 同 同 上

一幅 同 同 上

一幅 同 同 上

二幅 同 同 上

一雙 同 同 上

一幅 同 同 上

一幅 同 同 上

一幅 同 同 上

同 同 上

三卷 同 同 上

一雙 同 同 上

一雙 同 同 上

一雙 同 同 上

一卷 同 同 上

同 同 上

同 同 上

同 同 上

同 同 上

同 同 上

同 同 上

同 同 上

同 同 上

同 同 上

同 同 上

同 同 上

木造能面賴政 傳德若作 一面 同 上

木造能面慈童 傳龍石衛門作 一面 同 上

木造能面今若 傳夜叉作 一面 同 上

木造能面近江女 傳越智作 一面 同 上

木造能面橋姫 傳夜叉作 一面 同 上

木造能面獅子口 傳赤鶴作 一面 同 上

銅造釋迦如來立像 一軀 同 上

木造藥師如來兩脇侍像 三軀 同 上

日光菩薩像內ニ日光菩薩像元徳四年二月二日始之、月光菩薩
正徳元年八月廿日始之、佛師善光寺住持妙海ノ銘アリ

木造(不動明王立像 二軀 同 上

毘沙門天立像

文書典籍書蹟之部

紙本墨書後水尾天皇宸翰御懷紙 (深山鹿) 一幅 東京府東京市麹町區元園町一丁目 加藤正治 同 上

紙本墨書後西天皇宸翰御懷紙 (詠瀬夏月和尚) 一幅 同 上

紙本墨書大般若經卷第二百五十九 (藥師寺) 朱印、藥師寺金堂ノ墨印アリ 一卷 同 上

紙本墨書深養父集斷簡 (升色紙(きんかへり)) 一幅 同 上

蠟箋墨書雪村友梅墨蹟 (雪隠清寒) 一幅 同 上

紙本墨書藤原定家消息 (一日) 一幅 同 上

色紙墨書古今集卷第二斷簡 (傳行成筆(たてはうつろふ)) 一幅 同 上

紙本墨書和漢朗詠集卷下斷簡 (戊辰切(將軍)) 一幅 同 上

皆川文書(文治三年十二月一日源賴朝) 七卷 同 上

紙本墨書刀繪圖 一卷 同 上

文祿三年六月十四日毛利宰相宛本阿彌光徳ノ奥書アリ

彩箋墨書伊勢集斷簡 (石山切(みてかきりなく)) 一幅 萩原長吉 同 上

紙本墨書正親町天皇繪旨 (天正十年十月三二) 一幅 同 上

紙本墨書後光明天皇宸翰 (旅懷) 一幅 同 上

紙本墨書光格天皇宸翰御懷紙 (詠霞添春色和歌) 一幅 同 上

紙本墨書孝明天皇宸翰御懷紙 (詠菊花盛久和歌) 一幅 同 上

紙本墨書無學祖元墨蹟 (弘安九年六月九日) 一幅 同 上

紙本墨書日野資名消息 (正申元年十二月十五日) 一幅 同 上

紙本墨書萬里小路宣房奉繪旨(大納言法印御房宛) 一幅 同 上

紙本墨書新古今集 殘卷 二帖 同 上

紙本墨書八雲抄 卷第二 一帖 同 上

紙本墨書諸本(源氏供養、龜各帖ニ慶長九年、十年、十一年本多上野介宛親世身愛ノ奥書アリ) 五帖 同 上

紙本墨書貫之集下斷簡 (石山切(三條のいし)) 一幅 同 上

紙本墨書藤原俊成筆古今集第二斷簡 一幅 同 上

紙本墨書和漢朗詠集卷上斷簡 (戊辰切(柳)) 一幅 同 上

紙本墨書後土御門天皇宸翰御懷紙(後、殘雪、祝) 一幅 同 上

紙本墨書者到御懷紙 (十二日夏草) 一幅 同 上

中ニ後柏原天皇、後奈良天皇ノ宸翰アリ

紙本墨書後柏原天皇宸翰御懷紙 (枕上時雨、瑞根寒草、寄傲馬樂戀) 一幅 同 上

紙本墨書後奈良天皇宸翰御懷紙 (冬日詠三首和歌、御名アリ) 一幅 同 上

紙本墨書後水尾天皇勅答一條兼退消息 一幅 同 上

紙本墨書後水尾天皇宸翰御色紙 (蒼鷹の) 一幅 同 上

箱蓋ニ寛文六丙午十一月 日トアリ

紙本墨書後西天皇宸翰御詠草 (青柳の糸) 一幅 同 上

餘白ニ狩野常信紙繪ノ書アリ

紙本墨書靈元天皇宸翰御懷紙 (詠野澤始迎春和歌) 一幅 同 上

紙本墨書光格天皇宸翰御懷紙 (紅霞) 一幅 同 上

文政十二年臘月廿七日鷹司政通拜領ノ包紙及ヒ同政通筆ノ上包アリ

附 琵琶(繪面秋之山月圖) 一面 一通 同 上

彩箋墨書古今集卷第十三斷簡 (久保切(なりひらの朝臣)) 一幅 同 上

紙本墨書藤原光能奉御教書 (五月八日) 一幅 同 上

紙本墨書藤原範光消息 (二月廿一日) 一幅 同 上

紙本墨書寂蓮消息 (八月廿二日) 一幅 同 上

紙本墨書後醍醐天皇繪旨 (正中二年十月九日) 一幅 同 上

紙本墨書定頼消息 (後十二月廿六日) 一幅 同 上

紙本墨書後柏原天皇宸翰御懷紙(詠花光聖萬年和歌) 一幅 同 上

紙本墨書後陽成天皇宸翰御懷紙 (詠春日祝言和詞、御名アリ) 一幅 同 上

紙本墨書後水尾天皇宸翰御小懷紙 (詠南枝暖待鳥和歌) 一幅 同 上

紙本墨書靈元天皇宸翰御懷紙 (ときはなる)	一幅	同	上	紙本墨書津守國冬消息 (正和元年七月廿九日 範兼信正宛)	一幅	同	上
色紙墨書和漢朗詠集卷下斷簡 (傳行成筆大字切) (觀雲淨信)	一幅	同	上	紙本墨書和漢朗詠集卷上斷簡 (戊辰切) (鹿)	一幅	愛知縣名古屋市東區桑町	三輪 爲吉
紙本墨書和漢朗詠集卷下斷簡 (傳行成筆大字切) (王郎八葉之孫)	一幅	同	上	紙本墨書和漢朗詠集卷上斷簡 (戊辰切) (秋興)	一幅	同朝日町二丁目	横井 清三郎
紙本墨書道濟集斷簡 (紙捻切) (ぬにつかはす)	一幅	同	上	紙本墨書空閑公朝消息 (十月三日) (紙面ニ摺傳アリ)	二枚一通	同田代町	森川 勘一郎
彩箋墨書古今集卷第四斷簡 (傳俊賴筆) (おく山七)	一幅	同	上	紙本墨書和漢朗詠集卷上斷簡 (戊辰切) (梅)	一幅	同西區鹽町二丁目	糟谷 徹三郎
彩箋墨書業平集斷簡 (尾形切) (やまゐりて)	一葉	同	上	紙本墨書和漢朗詠集卷上斷簡 (辰辰切) (煙火)	一幅	同中區南桑名町五丁目	加藤 勝太郎
紙本墨書後撰集卷第八斷簡 (鳥丸切) (かみな月)	一幅	同	上	紙本墨書和漢朗詠集卷下斷簡 (辰辰切) (風)	一幅	同蛸子町	岡谷 惣助
紙本墨書新撰朗詠集卷下斷簡 (山名切) (白首七句)	一幅	同	上	紙本墨書貫之集下斷簡 (石山切) (しきしまの)	一幅	同蛸子町	岡谷 惣助
紙本墨書深養父集斷簡 (升色紙) (あきりの)	一幅	同	上	紙本墨書貫之集下斷簡 (石山切) (うくひすの)	一幅	同蛸子町	岡谷 惣助
紙本墨書藤原定家筆兵範記斷簡 (仁安二年十一月廿七日ノ修)	一幅	同	上	紙本墨書伊勢集斷簡 (石山切) (卷首三葉)	一幅	同蛸子町	岡谷 惣助
紙本墨書明惠上人夢記 (四月廿二日)	一幅	同	上	紙本墨書藤原公經筆懷紙 (詠花有歎色和歌)	一幅	滋賀縣坂田郡長濱町	同
紺紙金銀字俱舍論卷第十八 (見返ニ説法圖アリ)	一卷	同	上	紙本墨書德川家康自筆日課念佛	一卷	滋賀縣坂田郡長濱町	同
紙本墨書永正六年十二月十五日著到御懷紙 (追海雲傳中ニ後相原天皇宸翰アリ)	一幅	同	上	紙本墨書後撰集卷第九斷簡 (白河切) (人をあひしりて)	一幅	岐阜縣武儀郡關町	同
紺紙金銀字賢助經 卷第七、第八	二卷	同	上	紙本墨書刀繪圖 (文祿四年五月十二日本阿彌光徳ノ奥書アリ)	一卷	石川縣金澤市上松原町	大友 佐一
紙本墨書東山天皇宸翰寶永六年御會始御懷紙 (詠花有歎色和歌)	一幅	同	上	刀 金葉嵌銘 國俊 本阿(花押)	一口	北海道札幌市北四條西十二丁目	持田 謹也
紙本墨書櫻町天皇宸翰御懷紙 (詠花有歎色和歌)	一幅	同	上	刀 無銘傳長光 附革卷柄蠟色打刀拵	一口	同	同
紙本墨書十一月廿五日行盛消息	一幅	同	上	刀 無銘傳光光 附革卷柄蠟色打刀拵、十二月廿四日徳川家康威狀一通	一口	同	同
紫紙金字金光明最勝王經卷第八	一卷	同	上	刀 銘 何光	一口	東京府東京市麹町區元園町一丁目	同
紙本墨書藤原俊成消息 (八月十三日花押) (左少將宛)	一幅	同	上	太刀 銘 吉平	一口	東京府東京市麹町區元園町一丁目	同
紙本墨書御歷代宸翰御短冊 (各葉ニ御名アリ)	十五葉	同	上	太刀 銘 無銘傳包水	一口	同芝區高輪南町	同
後土御門天皇(春風)	一	同	上	太刀 銘 俊氏	一口	同	同
後相原天皇 (立春) (初雪) (寄翠戀) (沙際落雁圖)	四	同	上	太刀 銘 備州長船燈光	一口	同三田四國町	同
後奈良天皇 (恭) (神祇) (不達戀) (故郷戀橘)	四	同	上	太刀 銘 上助吉	一口	同麻布區市兵衛町二丁目	同
正親町天皇 (都霞) (山霞) (七夕)	三	同	上	太刀 銘 銘 銘	一口	同	同
後陽成天皇 (冬曉)	一	同	上	太刀 銘 銘	一口	同	同
後西天皇 (雨中鶯) (霞湖山)	二	同	上	太刀 銘 銘	一口	同	同
紙本墨書後水尾天皇宸翰御懷紙 (我ひちを)	一幅	同	上	薙刀 銘 備州長船燈光 貞治元年十二月日	一口	同	同
色紙金字近衛家源筆法華經	一卷	同	上	太刀 銘 銘	一口	同	同
後水尾天皇御十七回忌ノタメ書寫セル奥書アリ	一卷	同	上	太刀 銘 銘	一口	同	同

短刀	銘	附金時繪突紋散合口指	一口	同福吉町	子爵 黒田長敬	太刀	銘	千手院	一口	福島縣石城郡平町	五十嵐小平
太刀	銘	友成作	一口	同青山北町一丁目	林田 等	太刀	銘	安家	一口	秋田縣山本郡能代町	安濃太郎
太刀	銘	利恒	一口	同四谷區仲町三丁目	子爵 齋藤 齊	太刀	銘	附中國住次直作 附奉急模腫色打刀、正月十七日徳川秀忠威狀一通	一口	同平鹿郡角間川町	荒川新太郎
太刀	銘	正恒	一口	同牛込區市谷藥王寺町	子爵 小出英延	劔	銘	吉光	一口	福岡縣山門郡城内村	伯爵 立花鑑徳
刀	無銘	(名物豊前江)	一口	同市谷河田町	伯爵 小笠原忠春	太刀	銘	眞長	一口	熊本縣能本市新町二丁目	長崎伊太郎
太刀	銘	長光	一口	同本所區豊川町三丁目	森 榮一	工藝品及考古學資料之部					
太刀	銘	長光	一口	同品川區五反田五丁目	齋藤茂一郎	陶製瀨戸釉菊唐草文壺	一箇	東京府東京市麴町區三番町	田邊 武次		
短刀	銘	光世作	一口	同日黒區鷹番町	同 上	青白磁雲文瓶子	一箇	同	同	上	
太刀	銘	景安	一口	同日黒區鷹番町	原田 耕三	陶製瀨戸瓶子	一箇	同豐島區雜司ヶ谷一丁目	濱口 巖根		
太刀	銘	三條太守家 壽福園満軍勝	一口	同日黒區鷹番町	同 上	御奈川縣鎌倉郡鎌倉町大字材木座字藏屋敷出土	一箇	同牛込區河田町	杉山壽榮男		
太刀	銘	長光	一口	同柿ノ木坂	男爵 堤 正治	人面把手附土器	一箇	長野縣上伊那郡宮田村宮田出土			
刀	無銘	傳助其	一口	同大森區入新井町四丁目	志賀 庸三	埴輪武裝男子像	一箇	群馬縣佐波郡赤堀村大字下觸出土			
太刀	銘	備州住正廣	一口	同澁谷區元廣尾町	松本卯三郎	金銅製冠金具	一箇	群馬縣高崎市大字乘附出土			
太刀	銘	利恒	一口	同代々木山谷町	侯爵 山内豊景	傳馬縣高崎市大字乘附出土	一箇	同			
太刀	銘	備長船住景光 延慶二年七月日	一口	同千駄ヶ谷五丁目	宮腰千葉太	銅製三神三獸鏡	一箇	同			
太刀	銘	利恒	一口	同淀橋區下落合一丁目	井手 徳一	傳馬縣多野郡殿町附近出土	一箇	同			
太刀	銘	一 細下ニ菊花文ノ切附アリ	一口	同二丁目	子爵 大島久忠	銅製鍍銀アイヌ鉄先	一箇	同			
刀	無銘	傳光忠	一口	同柏木三丁目	山岡 重厚	北海道後志國美蘭郡美蘭町大字小泊村出土	一箇	同小石川區高田老松町	侯爵 細川護立		
太刀	銘	備州長船住景光	一口	同杉並區阿佐ヶ谷六丁目	阿部修四郎	磁製金欄手仙臺瓶	一箇	同			
太刀	銘	定利	一口	同澁野川區中里町	谷 慶五	銅製車馬人物像	一箇	同日黒區駒場町	侯爵 前田利爲		
太刀	銘	正恒	一口	大坂府中河内郡大戸村	笠原 忠美	青磁劃花盤	一箇	同澁谷區代々木富ヶ谷町	植松 練磨		
太刀	銘	國時	一口	兵庫縣神戸市須磨區五位ノ池町三丁目	並田源三郎	胸裾白紅黒革威腹卷	一箇	同荒川區日暮里九丁目	大村 正夫		
短刀	銘	左 筑州住	一口	同武庫郡本山村	河瀬虎三郎	陶製丹波燒四耳壺	一箇	京都市京都市下京區立賣中之町	土橋 嘉兵衛		
短刀	銘	安吉	一口	同	同 上	磁製古九谷色繪人物圖菱花形臺鉢	一箇	兵庫縣武庫郡住吉村	男爵 住友吉左衛門		
太刀	銘	不明傳則房	一口	新潟縣新潟市本町通七番町	風間 要吉	銅製怪獸鳴鶴文匣	一箇	同			
太刀	銘	秀近	一口	群馬縣高崎市八島町	井上正三郎	銅製蟠螭文屬氏銅鐘	二三口	同			
太刀	銘	來國俊	一口	愛知縣名古屋市西區桑名町二丁目	岡島 太十	傳河南省洛陽金村古墓出土	一面	同			
						貼銀鍍金雙龍八花鏡					

銅製毛彫千手觀音像懸佛

弘長四年二月十三日ノ銘アリ

奈良縣磯城郡川東村唐古出土品

同書類文土器片
同唐文土器片
銅鐵

土瓶形土器

茨城縣稻敷郡高田村椎塚貝塚出土

鳥形土器

茨城縣稻敷郡大須賀村福田貝塚出土

鮑貝形土器

茨城縣稻敷郡高田村椎塚貝塚出土

銅製鍍銀柄香爐

金銅五鈎杵

青磁平水指

銅製經筒

元永二年三月ノ銘アリ

福岡縣鞍手郡笠松村大字上有木字平山出土

文部省告示第二百七十號

昭和十二年六月二十九日

品目

繪畫之部

所有者

絹本着色不動明王像

絹本着色聖德太子御像

刀劍之部

太刀 銘 國時

短刀 無銘 傳正宗

短刀 銘

日州住信濃守國廣作
天正十八年八月 日於野州足利學校打之

袈裟襪文銅鐸

陶製天目釉瓶

袈裟襪文銅鐸

傳和歌山縣日高郡出土

銅製鑲金彩畫歌環盒

傳洛陽出土

一面 群馬縣佐波郡殖連 井下辰雄

一箇 奈良縣磯城郡川東 飯田隆藏

一箇 奈良縣磯城郡川東 飯田隆藏

一箇 滋賀縣坂田郡長濱 財團 下郷共濟會

一箇 同 同 上

一箇 同 同 上

一箇 同 同 上

一箇 同 同 上

一箇 同 同 上

一箇 同 同 上

一箇 同 同 上

一箇 同 同 上

一箇 同 同 上

一箇 同 同 上

一箇 同 同 上

一箇 同 同 上

一箇 同 同 上

一箇 同 同 上

一箇 同 同 上

一箇 同 同 上

一箇 同 同 上

一箇 同 同 上

一箇 同 同 上

一箇 同 同 上

一箇 同 同 上

一箇 同 同 上

一箇 同 同 上

一箇 同 同 上

一箇 同 同 上

一箇 同 同 上

一箇 同 同 上

一箇 同 同 上

銅製白牙彈琴八花鏡

銅製海獸葡萄鏡

銅製畫文帶神獸鏡

傳三重縣多氣郡岩村大字宮内出土

銅製獸首鏡 魏ノ甘露廿五年二月四日ノ銘アリ

銅製重列神獸鏡 漢ノ建安十年五月六日ノ銘アリ

流水文銅鐸 人物及鹿ノ圖文アリ

銅製變龍象文小南 銘アリ

銅製螺鈿花鳥文八花鏡

銅製螺鈿雙禽文六花小鏡

靜岡縣磐田郡田原村明

有文銅劍
有文銅劍
有文銅劍

土製硯 靜岡縣田方郡三島町國分寺跡出土

銅製鐸口 文永五年三月十三日願主聖人慶西ノ銘アリ

銅鐘 觀應王辰孟冬淨覺願主朝房太工ノ銘アリ

錫杖 雙龍飛雲飾付

錫杖 三尊佛付

銅製懸佛 弘安九年十二月廿一日願主比丘尼妙法ノ銘アリ

銅製獸帶盤龍鏡

傳岡山縣都窪郡三須村大字法蓮出土

銅製四神四獸々帶鏡

岡山縣吉備郡秦村大字秦子上沼出土

銅製雙鸞鏡 鏡面ニ佛傳ノ刻ス

廣島縣沼津郡津之郷村大字坂部出土

蓮華唐草文塼 殘片

蓮華唐草文塼 殘片

蓮華唐草文塼 殘片

蓮華唐草文塼 殘片

蓮華唐草文塼 殘片

蓮華唐草文塼 殘片

蓮華唐草文塼 殘片

蓮華唐草文塼 殘片

蓮華唐草文塼 殘片

蓮華唐草文塼 殘片

蓮華唐草文塼 殘片

一面 同 上

一面 同 上

一面 同 上

一面 同 上

一面 同 上

一面 同 上

一面 同 上

一面 同 上

一面 同 上

一面 同 上

一面 同 上

一面 同 上

一面 同 上

一面 同 上

一面 同 上

一面 同 上

一面 同 上

一面 同 上

一面 同 上

一面 同 上

一面 同 上

一面 同 上

一面 同 上

一面 同 上

一面 同 上

一面 同 上

一面 同 上

一面 同 上

一面 同 上

一面 同 上

一面 同 上

一面 同 上

一面 同 上

一面 同 上

文部省告示第三百六號

昭和十二年八月二十八日

品 目 繪 畫 之 部

所 有 者

紙本著色長尾政長像

一幅 栃木縣足利市本城心通院

紙本著色狹衣物語斷簡

一幅 東京府東京市芝區伊皿子町

岸 偉 一

紙本著色長尾景長像
紙本著色長尾憲長像
紙本著色長尾政長像

三幅 同西宮町 長 林 寺

紙本著色葉平圖 岩佐又兵衛筆

一幅 同 男爵古河虎之助

紙本金地著色鹿馬圖 六曲屏

一幅 同伊勢町 秋 間 爲 八

紙本著色愛染明王像

一幅 同 京都府京都市右京區梅ヶ畑柳尾町

高 山 寺

紙本著色山水圖 長尾景長筆

一幅 同伊勢町 飯 田 眞 次

紙本著色明惠上人像

一幅 同 京都府京都市右京區梅ヶ畑柳尾町

森 川 勘 一 郎

紙本著色傳佛鬼軍繪卷斷簡

一幅 同 愛知縣名古屋市中區田代町

紙本下繪高僧像

一卷 同 同

同 上

紙本墨畫布袋圖 葛岡筆 天市昌園ノ賛アリ

一幅 同 同

紙本墨畫梵天火羅圖 文治五年玄證書寫ノ奥書アリ

一册 同 同

同 上

紙本著色十二ヶ月行事圖 田中訥言筆 六曲屏

一隻 同 同

紙本著色明惠上人樹上坐禪像

一幅 同 同

同 上

紙本著色柿下人磨像 三十六歌仙切 佐竹家傳來

一幅 同 同

紙本墨畫達磨宗六祖師像

一枚 同 同

同 上

紙本著色蓮鸞圖 同田中訥言筆

一幅 同 同

紙本金地著色群鷄圖 伊藤若冲筆 款記ニ七十五歳トアリ 横貼附

六面 大阪府豐能郡小倉根村

西 福 寺

彫 刻 之 部

紙本著色不動明王像

一幅 同 同

同 上

木造阿彌陀如來坐像

一軀 同 同

紙本著色過去現在因果經斷簡

一幅 同 同

同 上

木造地藏菩薩立像

一軀 同 同

紙本著色松間流水圖 山本梅邊筆 嘉永四年ノ年記アリ

一幅 同 同

同 上

紙本墨書後拾遺集卷第九斷簡 (中隔切(タヤコにて))

一幅 同 同

紙本著色北野天神緣起斷簡 (尊意參内)

一幅 同 同

同 上

紙本墨書新撰朗詠集卷下斷簡 (山名切(雲際日切))

一幅 同 同

紙本著色不動明王二童子像

一幅 同 同

同 上

紙本墨書後拾遺集卷第九斷簡 (中隔切(タヤコにて))

一幅 同 同

紙本著色松竹梅圖 吳春筆

三幅 同 同

同 上

紙本墨書家集斷簡 (針切(わすれしや))

一幅 同 同

紙本著色梅花書屋圖 田能村竹田筆 天保三年ノ年記アリ

一幅 同 同

同 上

紙本墨書齊宮女御集斷簡 (小鳥切(ひさしう))

一幅 同 同

紙本著色十六羅漢像 表裏面ニ文安二年ノ記アリ

十六幅 同 同

同 上

紙本墨書齊宮女御集斷簡 (小鳥切(ひさしう))

一幅 同 同

紙本著色柳塘吟月圖 田能村竹田筆 文政六年ノ年記アリ

一幅 同 同

同 上

紙本墨書藤原俊成筆古今集卷第二斷簡 (昭和切(やまきは))

一幅 同 同

紙本著色靈芝水仙圖 渡邊華山筆 天保二年ノ年記アリ

一幅 同 同

同 上

紙本墨書和漢朗詠集卷下斷簡 (戊辰切(水付漁父))

一幅 同 同

紙本著色倂桃圖 渡邊華山筆 天保九年ノ年記アリ

一幅 同 同

同 上

紙紙金銀字俱舍論卷第廿六 (中尊寺經)

一卷 同 同

紙本著色松間流水圖 山本梅邊筆 嘉永四年ノ年記アリ

一幅 同 同

同 上

紙本墨書後拾遺集卷第九斷簡 (中隔切(タヤコにて))

一幅 同 同

紙本著色松竹梅圖 吳春筆

三幅 同 同

同 上

紙本墨書家集斷簡 (針切(わすれしや))

一幅 同 同

紙本著色梅花書屋圖 田能村竹田筆 天保三年ノ年記アリ

一幅 同 同

同 上

紙本墨書齊宮女御集斷簡 (小鳥切(ひさしう))

一幅 同 同

紙本著色十六羅漢像 表裏面ニ文安二年ノ記アリ

十六幅 同 同

同 上

紙本墨書齊宮女御集斷簡 (小鳥切(ひさしう))

一幅 同 同

古美術保存

一九五

紙本墨書藤原定家筆明月記斷簡(安貞元年五月十日)	一帖	同小石川區攝司ケ谷町	同	上	稿本退私錄 庚午詩稿 丁酉以後詩稿	冊冊	同	同	同	上	稿本退私錄 庚午詩稿 丁酉以後詩稿	冊冊
紙本墨書古今集上卷	一帖	同	同	上	紙本墨書稱讚淨土佛攝受經	一帖	同	同	上	紙本墨書蘇悉地羯羅經(上中下)	三帖	同
紙本墨書狹衣 卷第二、第三、第四、殘卷	三帖	同	同	上	紙本墨書靈元天皇宸翰御懷紙(詠龜萬年友和歌)	一幅	同	同	上	紙本墨書後西天皇宸翰古歌御懷紙(きくやいかに)	一幅	同
紙本墨書藤原俊成筆古今集卷第二斷簡(昭和切)	一幅	同本縣區勢込西片町	同	上	紙本墨書大江廣元消息(元暦元年五月十日八日文覺上人宛)	一幅	同	同	上	紙本墨書楠原俊成筆千載集卷第十四斷簡(日野切(待賢門院のあき))	一幅	同
紙本墨書文選集注卷第一百十六斷簡	一卷	同大森區山王二丁目	同	上	紙本墨書世尊寺行經消息(正月廿四日)	一幅	同	同	上	紙本墨書建久元年五月十六日廳宣	一幅	同
刊本祝文正字(高麗版)	一冊	同	同	上	紙本墨書萬里小路時房消息(十二月廿三日)	一幅	同	同	上	紙本墨書甘露寺親長消息(文明十五年十二月十四日)	一幅	同
紙本墨書灌頂經卷第四	一卷	同	同	上	紙本墨書正親町天皇宸翰御懷紙(春日詠爲是萬春友和歌)	一幅	同	同	上	紙本墨書後西天皇宸翰御懷紙(詠陽春布德和哥)	一幅	同
紙本墨書法華文句卷第三	一帖	同	同	上	紙本墨書二條爲氏消息(十一月九日)	一幅	同	同	上	紙本墨書藤原俊成筆千載集卷第十三斷簡(日野切(はじめてあふこと))	一幅	同
紙本墨書蘇悉地羯羅經卷下	一卷	同	同	上	紙本墨書書貫之集下斷簡(石山切(みてたにも)杜撰二切續アリ)	一幅	同	同	上	紙本墨書後水尾天皇宸翰御懷紙(昔みし)	一幅	同
紙本墨書夫婦敬愛抄	一卷	同	同	上	紙本墨書蘇悉地羯羅經 上中下	三帖	同	同	上	紙本墨書四分律藏卷第三十二殘卷(天平十二年五月一日光明皇后御願經)	一卷	同
紙本墨書金剛頂經開題 覺智筆	一帖	同	同	上	紙本墨書四分律藏卷第四十一殘卷(天平十二年五月一日光明皇后御願經)	一卷	同	同	上	紙本墨書後光明天皇宸翰御消息(右大臣宛)	一幅	同
紙本墨書師資相承次第殘卷(第十九代祖書)(僧正ニ至ル)	一卷	同	同	上	紙本墨書蘇原俊成筆千載集卷第十六斷簡(日野切(月の哥))	一幅	同	同	上	紙本墨書新井白石遺稿類	六點	同
紙本墨書孟蘭盆經	一帖	同	同	上	紙本墨書書貫之集下斷簡(石山切(みてたにも)杜撰二切續アリ)	一幅	同	同	上	紙本墨書新井白石遺稿類	六點	同
紙本墨書占察善惡業報經卷下	一卷	同	同	上	紙本墨書書貫之集下斷簡(石山切(みてたにも)杜撰二切續アリ)	一幅	同	同	上	紙本墨書新井白石遺稿類	六點	同
紙本墨書占察善惡業報經卷下	一卷	同	同	上	紙本墨書書貫之集下斷簡(石山切(みてたにも)杜撰二切續アリ)	一幅	同	同	上	紙本墨書新井白石遺稿類	六點	同
紙本墨書金口說 春浦宗熙筆	二冊	同	同	上	紙本墨書書貫之集下斷簡(石山切(みてたにも)杜撰二切續アリ)	一幅	同	同	上	紙本墨書新井白石遺稿類	六點	同
紙本墨書沙石集	五冊	同	同	上	紙本墨書書貫之集下斷簡(石山切(みてたにも)杜撰二切續アリ)	一幅	同	同	上	紙本墨書新井白石遺稿類	六點	同
紙本墨書石間寺緣起	一卷	同	同	上	紙本墨書書貫之集下斷簡(石山切(みてたにも)杜撰二切續アリ)	一幅	同	同	上	紙本墨書新井白石遺稿類	六點	同
紙本墨書明恵上人臨終記	一冊	同	同	上	紙本墨書書貫之集下斷簡(石山切(みてたにも)杜撰二切續アリ)	一幅	同	同	上	紙本墨書新井白石遺稿類	六點	同
紙本墨書織田信長誓約書(永祿十三年正月廿三日)	一幅	同	同	上	紙本墨書書貫之集下斷簡(石山切(みてたにも)杜撰二切續アリ)	一幅	同	同	上	紙本墨書新井白石遺稿類	六點	同
紙本墨書後光明天皇宸翰御消息(右大臣宛)	一幅	同	同	上	紙本墨書書貫之集下斷簡(石山切(みてたにも)杜撰二切續アリ)	一幅	同	同	上	紙本墨書新井白石遺稿類	六點	同
紙本墨書新井白石遺稿類	六點	同	同	上	紙本墨書書貫之集下斷簡(石山切(みてたにも)杜撰二切續アリ)	一幅	同	同	上	紙本墨書新井白石遺稿類	六點	同

紙本墨書和漢朗詠集卷下斷簡 (戊辰切) (通)

紙本墨書古今集卷第十二斷簡 (通切) (わかこひを)

紙本墨書大般若經卷第二百九十二
〔藥師寺印〕ノ朱印アリ

紙本墨書華嚴經卷第十六
貞觀十九年三月一日儀違校合ノ奥書アリ

紺紙金字諸法最上王經
〔神護寺〕ノ朱印アリ

紺紙金銀字賢劫經卷第十一 (中尊寺經)

紺紙金銀字阿毗曇心論卷第二 (中尊寺經)

紙本墨書契沖自筆歌集殘卷 (六十三葉)

紙本墨書藤原俊成筆千載集卷第十六斷簡
(日野切) (藤原隆親)

紙本墨書華嚴經卷第十三
貞觀十九年三月廿九日儀違校合ノ奥書アリ

紙本墨書藤原佐理消息 (難波狀)
附近衛家經筆本 一幅

紺紙金銀字鳥桓瑟摩明王經卷上 (中尊寺經)

紙本墨書後撰集卷第八斷簡 (鳥丸切) (てまかりかよふ)

紙本墨書後撰集卷第九斷簡 (白河切) (おんなのもと)

紙本墨書最勝王經註釋卷第二斷簡
(飯室切) (人初文有)

紙本墨書和漢朗詠集卷上斷簡 (伊豫切) (雲)

紙本墨書伏見天皇院宣 (正和二年九月廿五日)

紙本墨書最勝王經註釋卷第二斷簡
(飯室切) (地前卅心仁王)

紙本墨書藤原俊成筆千載集卷第十三斷簡
(日野切) (たひのこひと)

紙本墨書猿丸集斷簡 (ほととぎす)

紙本墨書最勝王經註釋卷第六斷簡
(飯室切) (方界初中有四)

彩箋墨書伊勢集斷簡 (石山切) (うらちかく)
貴之集卷首白丁ノ綴足アリ

古美術保存

一幅 同伏見區上通掛町

一幅 同右京區觀安寺住

一卷 大坂府大坂市天王寺區上本町八丁目

一卷 同

一卷 同

一卷 同

一卷 同

一帖 同堺市中之町大通

一幅 兵庫縣西宮市久保町

一卷 同武庫郡本山村

一幅 新潟縣中蒲原郡金津村

一卷 三重縣四日市市高砂町

一幅 愛知縣名古屋市東區宮澤町一丁目

一幅 同

一幅 同

一幅 同

一幅 同

一幅 同

一幅 同

一幅 同

一幅 同

一幅 同

紙本墨書和漢朗詠集卷上斷簡 (伊豫切) (初冬、冬夜)

彩箋墨書貫之集下斷簡 (石山切) (なにはのたみのこ)

紙本墨書伊勢集斷簡 (石山切) (みしみにそては)

紙本墨書後撰集第九斷簡 (白河切) (こゝろをへて)

紙本墨書後撰集第一斷簡 (鳥丸切) (これかれまると)

紙本墨書最勝王經註釋卷第四斷簡
(飯室切) (法眼无不解)

紙本墨書和漢朗詠集卷上斷簡 (伊豫切) (敬)

紙本墨書貫之集下斷簡 (石山切) (人しれす)

彩箋墨書貫之集下斷簡 (石山切) (きみかゆく)

紙本墨書貫之集下斷簡 (石山切) (京極の中納言)

紙本墨書後拾遺集卷第八斷簡 (中院切) (るなかへ)

紙本墨書曾根好忠集斷簡 (八月下、九月上)

紙本墨書和漢朗詠集卷上斷 (戊辰切) (歲暮)

紙本墨書政所紙納帳 (自寶龜三年正月) (籤軸付)

紙本墨書根本說一切有部毗奈耶雜事攝頌
大唐景福四年ノ譯場列位アリ

紙本墨書根本說一切有部毗奈耶尼毗奈耶卷第一
(天平十二年五月一日光明皇后御願經)

紙本墨書根本說一切有部毗奈耶尼毗奈耶卷第十三
(天平十二年五月一日光明皇后御願經)

紙本墨書瑜伽師地論卷第四十三
〔東大寺印〕ノ朱印アリ

紙本墨書瑜伽師地論卷第四十三
〔内家私印〕ノ朱印アリ

紙本墨書月燈三昧經卷第六

紙本墨書阿毗曇毗婆沙論卷第一百二
〔六月致〕

紙本墨書藤原秀能筆懷紙 (山家風流)
端裏二建仁元年六月晦和詩アリ

紙本墨書清拙正澄墨蹟 (建武四年臘月旦)

紙本墨書伊勢集斷簡 (石山切) (やとる月さへ)

紙本墨書後土御門天皇宸翰懷紙 (家々七夕
寄秋風戀)

一幅 同

一幅 長谷川 竹次郎

一幅 同

一幅 同

一幅 同

一幅 同

一幅 同

一幅 同

一幅 同

一幅 同

一幅 同

一幅 同

一幅 同

一幅 同

一卷 同

一卷 同

一卷 同

一卷 同

一幅 同

一幅 同

一幅 同

一幅 同

一幅 同

一幅 同

一幅 同

紙本墨書麗花集卷第十斷簡 (香紙切)(卷首)

一幅 同 上

紙本墨書猿丸集斷簡 (口けといふは)

一幅 同 上

色紙墨書古今集卷第二十斷簡 (傳行成筆)(おほとものくろねし)

一幅 同 森 林 平

紙本墨書齋宮女御集斷簡 (小島切)(一品の宮より)

一幅 同 妙 興 寺

紺紙金字寶塔法華經卷第四

一卷 同 岡 本 太 右 衛 門

彩箋墨書古今集卷第十七斷簡 (民部切)(みたりのおき)

一幅 同 遠 藤 豐 三 郎

彩箋墨書業平集斷簡 (尾形切)(むかしふかくき)

一葉 同 美 保 神 社

紙本墨書佛本行集經卷第六十 (天平十二年五月一日光明皇后御願經)

一卷 同 山 田 新 松

刀 劍 之 部

短刀 銘 來國光

一口 同 筒 井 源 吉

短刀 銘 長谷部國重

一口 同 上

太刀 銘 國永

一口 同 上

太刀 銘 守家

一口 同 上

太刀 銘 爲長

一口 同 上

短刀 銘 左 筑州住

一口 同 上

大太刀 銘 末貞

一口 同 栗 原 彦 三 郎

太刀 銘 延房作

一口 同 公 爵 九 條 道 秀

太刀 銘 則高

一口 同 上

太刀 銘 薩州渡半平行安

一口 同 肥 後 八 次

太刀 銘 來國光

一口 同 伯 爵 松 平 直 亮

刀 金象嵌銘 正宗ヨリ上本阿(花押)

一口 同 上

太刀 銘 安則

一口 同 原 三 右 衛 門

刀 無銘 傳一文字

一口 同 原 田 耕 三

短刀 銘 堀州吉岡住助義

一口 同 上

脇指 銘 長谷部國重

一口 同 同 世 田 ヶ 谷 區 世 田 ヶ 谷 一 丁 目

刀 無銘 (名物武藏正宗)

一口 同 公 爵 岩 倉 具 榮

太刀 銘 景安

一口 同 同 代 々 木 初 盛 町

太刀 銘 長直

一口 同 青 葉 町 子 爵 稻 葉 正 凱

刀 無銘 古備前

一口 同 櫛 ヶ 谷 本 町 一 丁 目 榎 本 春 之 助

太刀 銘 大原貞守

一口 同 同 千 駄 ヶ 谷 一 丁 目 公 爵 德 川 家 達

刀 金象嵌銘 國俊

一口 同 上

太刀 銘 來國次

一口 同 上

太刀 銘 來國次

一口 同 上

太刀 銘 清綱

一口 同 上

太刀 銘 友成作

一口 同 同 從 橋 區 下 落 合 一 丁 目 子 爵 相 馬 惠 胤

短刀 銘 則重

一口 同 上

短刀 銘 助吉

一口 同 同 上

薙刀 銘 建武五年三月日

一口 同 同 上

太刀 銘 助吉

一口 同 同 上

太刀 銘 景依

一口 同 同 上

短刀 銘 相模國住人廣光

一口 同 同 上

太刀 銘 千手院康重

一口 同 同 上

太刀 銘 助綱

一口 同 同 上

太刀 銘 眞守

一口 同 同 上

太刀 銘 守家

一口 同 同 上

太刀 銘 豐後國行平作

一口 同 同 上

太刀 銘 應安二年十月日

一口 同 同 上

太刀 銘 備州長船元重

一口 同 同 上

太刀 銘 備州長船元重

一口 同 同 上

太刀 銘 備州長船元重

一口 同 同 上

太刀 銘 備州長船元重

一口 同 同 上

太刀 銘 備州長船元重

一口 同 同 上

太刀 銘 備州長船元重

一口 同 同 上

太刀 銘 備州長船元重

一口 同 同 上

太刀 銘 備州長船元重

一口 同 同 上

太刀 銘 備州長船元重

一口 同 同 上

太刀 銘 備州長船元重

一口 同 同 上

太刀 銘 備州長船元重

一口 同 同 上

太刀 銘 備州長船元重

一口 同 同 上

太刀 銘 備州長船元重

一口 同 同 上

太刀 銘 備州長船元重

一口 同 同 上

太刀 銘 備州長船元重

一口 同 同 上

工藝品及考古學資料之部

高彫色繪巢父圖葵形鐵鐔

銘山城國伏見住金家

一枚 同 上

高彫色繪木賊菊圖瓜形鐵鐔

銘山城國伏見住金家

一枚 同 上

陶製定窯劃花水禽文盤

一箇 同 上

陶製加彩魚蓮文皿

一枚 同 上

磁製法花三彩蓮華水禽文餅

一箇 同 上

樂燒赤茶碗

一箇 同 上

樂燒赤茶碗

一箇 同 上

樂燒赤茶碗

一箇 同 上

樂燒赤茶碗

一箇 同 上

陶製均窯盤 底裏ニ「九字」ノ刻銘アリ

土版 茨城縣稻敷郡大須賀村福田具塚出土

高麗青磁象嵌水注

高麗青磁白花木注 有蓋

土偶 埼玉縣南埼玉郡柏崎村真福寺出土

土面 茨城縣結城郡土山川村矢畑出土

高形色繪猛虎圖丸形鐵鐔 銘利壽(花押)

土面 青森縣西津輕郡館岡村龜ヶ岡出土

土製熊 青森縣西津輕郡館岡村龜ヶ岡出土

土製猪 青森縣西津輕郡館岡村龜ヶ岡出土

土製犬 岩手縣膽澤郡佐倉川村大字常盤出土

樂燒黑茶碗 銘寒月 空中作

陶製井戸茶碗 銘有樂

顔面把手附土器 東京府東京市杉並區井荻三丁目出土

土製熊 青森縣西津輕郡野村十腰内出土

土偶脚部 東京府南多摩郡川口村大字橋原出土

青白磁劃花水注 有蓋

陶製虫葉文木ノ葉天目茶碗

陶製瓶 康永三年ノ刻銘アリ

陶製色繪釘隠 扇面形 十七 傳野村仁清作

青磁六花形平水指 銘青海波

陶製青井戸茶碗 銘雲井

樂燒黑茶碗 銘青山(加賀ノンカウ七種ノ内)

岩版 群馬縣新田郡世良田村大字米岡出土

岩版 宮城縣牡鹿郡稻井村大字沼津出土

土製熊 宮城縣牡鹿郡稻井村大字沼津出土

土製獸 宮城縣牡鹿郡稻井村大字沼津出土

土製獸 宮城縣牡鹿郡稻井村大字沼津出土

土製獸 宮城縣牡鹿郡稻井村大字沼津出土

土製獸 宮城縣牡鹿郡稻井村大字沼津出土

土製獸 宮城縣牡鹿郡稻井村大字沼津出土

土製獸 宮城縣牡鹿郡稻井村大字沼津出土

古美術保存

岩版 宮城縣登米郡米山村中津山綱場出土

文部省告示第三百七號 昭和十二年八月二十八日

名 稱

所有者

所在地

石造燈籠 弘安八年乙酉十月五日ノ刻銘アリ

一基 京都府京都市伏見區醍醐町醍醐寺

同 京都府京都市伏見區醍醐町醍醐寺境内

石造十三重塔

一基 同相郡高麗村天神社

同 相模同郡高麗村天神社境内

石造燈籠 正平六年ノ刻銘アリ

一基 同相郡丹波村桂林寺

同 同郡丹波村桂林寺境内

石造寶篋印塔 正平六年ノ刻銘アリ

一基 同相郡丹波村桂林寺

同 同郡丹波村桂林寺境内

石造七重塔 永仁二年甲午六月十日ノ刻銘アリ

一基 大阪府北河内郡枚方町太田中

同 大阪府北河内郡枚方町大字伊賀九十九番

石造燈籠 弘安九年己戌四月二十日ノ刻銘アリ

一基 兵庫縣神戸市林田區長田町長田神社

同 兵庫縣神戸市林田區長田町長田神社境内

石造寶篋印塔 貞治三年ノ刻銘アリ

一基 廣島縣沼隈郡西村萬福寺

同 廣島縣沼隈郡西村萬福寺境内

文部省告示第三百四十五號 昭和十二年十月二十五日

品 目

所有者

絹本着色大友宗麟像 天正十五年拾雲景院ノ寶アリ

一軸 京都府京都市上京區紫野大徳寺町

瑞 峯 院

彫 刻 之 部

一軀 栃木縣上野原郡吉方村大字金井字今宿

藥 師 堂

鐵造阿彌陀如來坐像 背面ニ建治三年十二月十八日ノ銘アリ

一軀 東京府東京市麹町區麹町丁目

加 藤 正 治

紙本墨書寛平后宮歌合斷簡 (二條切)(夏)

一幅 京都府京都市下京區四條通麩屋町東

今 井 貞 次 郎

紙本墨書和漢朗詠集卷上斷簡 (伊豫切)(菊)

一幅 京都府京都市下京區四條通麩屋町東

今 井 貞 次 郎

工藝品及考古學資料之部

一軸 京都府京都市東山区大和大路通四條下ル小松町

大 統 院

陶製色繪十二支鏡文皿 奥田頼川作

一軸 京都府京都市東山区大和大路通四條下ル小松町

大 統 院

京都市綴喜郡井手町(銅製海獸葡萄鏡)

一軸 京都府京都市東山区大和大路通四條下ル小松町

大 統 院

井手寺趾出土品(銅鑄隆平水寶)

一軸 京都府京都市東山区大和大路通四條下ル小松町

大 統 院

井手寺趾出土品(銅鑄隆平水寶)

一軸 京都府京都市東山区大和大路通四條下ル小松町

大 統 院

井手寺趾出土品(銅鑄隆平水寶)

一軸 京都府京都市東山区大和大路通四條下ル小松町

大 統 院

井手寺趾出土品(銅鑄隆平水寶)

一軸 京都府京都市東山区大和大路通四條下ル小松町

大 統 院

井手寺趾出土品(銅鑄隆平水寶)

一軸 京都府京都市東山区大和大路通四條下ル小松町

大 統 院

井手寺趾出土品(銅鑄隆平水寶)

一軸 京都府京都市東山区大和大路通四條下ル小松町

大 統 院

井手寺趾出土品(銅鑄隆平水寶)

一軸 京都府京都市東山区大和大路通四條下ル小松町

大 統 院

樂燒赤茶碗 銘勾當
長次郎作

一箇 兵庫縣武庫郡清道 山口吉郎兵衛

陶製黑花龍文餅

一箇 同住吉村 嘉納治兵衛

陶製木ノ葉天目茶碗 (三枚ノ木ノ葉文アリ)

一箇 同 同上

陶製華文天目茶碗

一箇 同 同上

陶製折枝文天目茶碗

一箇 同 同上

樂燒赤茶碗 銘吉志水
傳長次郎作

一箇 同 同上

兵庫縣川邊郡小濱村安倉古墳出土品

銅製半圓方形帶神獸鏡 吳ノ赤鳥二ノ銘アリ
銅製內行花文鏡 一面 同川邊郡小濱村 塚本彌右衛門

鐵製古九谷色繪花鳥文德利

一箇 新海縣中蒲原郡金津村 中野忠太郎

銅製釣燈籠 天文十四年十二月ノ刻銘アリ

一箇 樹木縣安蘇郡大伏町大字高岡 觀音堂

岡山縣吉田郡鄉村大字下原觀音山古墳出土品

銅製四神四獸帶神獸鏡 銘アリ 天王日月ノ一面 岡山縣吉田郡鄉村 井上武志

銅製半圓方形帶神獸鏡 附鐵鏡及鐵器殘片

銅製半圓方形帶神獸鏡 一面 岡山縣吉田郡鄉村 井上武志

文部省告示第三百四十六號 昭和十二年十月二十五日

石碑 (安國山唐花木之記)

一基 沖繩縣首里市 沖繩縣首里市眞和志町一丁目一番地

石標 宣德二年歲次丁未八月既望ノ刻銘アリ

一基 東京府東京市澁谷區南平盛町 候爵 裕 三十二番地

文部省告示第三百五十九號 昭和十二年十一月十一日

品目 工藝品及考古學資料之部

銅製犧首饗養文方鼎 羊頭象形外二字ノ銘アリ

一箇 東京府東京市赤坂區青山南町六丁目 根津嘉一郎

銅製犧首饗養饗龍文尊 「子孫」ノ銘アリ

一箇 同 同上

銅製饗龍饗養文方尊 手ノ象形アリ

一箇 同 同上

銅製饗龍饗養文方尊 饗鳳ノ象形アリ

一箇 同 同上

傳河南省安陽出土

銅製饗龍饗養文方尊 饗鳳ノ象形アリ

銅製饗養饗鳳文彝 「饗子作寶尊彝」ノ銘アリ

一箇 同 同上

銅製蟠螭文獸環大洗

一箇 同 同上

銅製饗龍饗養文大洗

一箇 同 同上

銅製饗養饗龍文方形盃 「左」ノ銘アリ

一箇 同 同上

銅製饗養饗龍文方形盃 「中」ノ銘アリ

一箇 同 同上

銅製饗養饗龍文方形盃 「右」ノ銘アリ

一箇 同 同上

銅製饗養饗龍文方形盃 銘一字

一箇 同 同上

銅製饗養饗龍文方形盃 銘一字

一箇 同 同上

銅製饗養饗龍文方形盃 銘一字

一箇 同 同上

銅製饗養饗龍文方形盃 銘一字

一箇 同 同上

銅製饗養饗龍文方形盃 銘一字

一箇 同 同上

木製漆塗案 漢ノ永元十四年ノ銘アリ

一箇 同 同上

銅製饗養饗龍文方形盃 銘一字

一箇 同 同上

銅製饗養饗龍文方形盃 銘一字

一箇 同 同上

銅製饗養饗龍文方形盃 銘一字

一箇 同 同上

銅製饗養饗龍文方形盃 銘一字

一箇 同 同上

銅製饗養饗龍文方形盃 銘一字

一箇 同 同上

銅製饗養饗龍文方形盃 銘一字

一箇 同 同上

銅製饗養饗龍文方形盃 銘一字

一箇 同 同上

銅製饗養饗龍文方形盃 銘一字

一箇 同 同上

銅製饗養饗龍文方形盃 銘一字

一箇 同 同上

銅製饗養饗龍文方形盃 銘一字

一箇 同 同上

銅製饗養饗龍文方形盃 銘一字

一箇 同 同上

銅製饗養饗龍文方形盃 銘一字

一箇 同 同上

銅製饗養饗龍文方形盃 銘一字

一箇 同 同上

銅製饗養饗龍文方形盃 銘一字

一箇 同 同上

銅製饗養饗龍文方形盃 銘一字

一箇 同 同上

銅製饗養饗龍文方形盃 銘一字

一箇 同 同上

銅製饗養饗龍文方形盃 銘一字

一箇 同 同上

銅製饗養饗龍文方形盃 銘一字

一箇 同 同上

銅製饗養饗龍文方形盃 銘一字

一箇 同 同上

銅製饗養饗龍文方形盃 銘一字

一箇 同 同上

文部省告示第四百三十四號 昭和十二年十二月二十四日

品目 繪畫之部

綠釉唐草瓦 平安宮内裏所用

一箇 同 同上

碧玉製石製模造品

一箇 同 同上

平瓦殘片 表面ニ奈良朝風俗ノ鏡影アリ

一箇 同 同上

岐阜縣吉城郡國府村光壽庵藏寺趾出土

一箇 同 同上

木製彩色鎌倉彫笈

一箇 同 同上

文部省告示第四百三十四號 昭和十二年十二月二十四日

文部省告示第四百三十四號 昭和十二年十二月二十四日

文部省告示第四百三十四號 昭和十二年十二月二十四日

紙本著色聖德太子繪傳

一卷
同
上

一條兼香消息

池田綴政筆御短冊由緒書 一卷

紙本墨書櫻町天皇宸翰御懷紙 (詠三日三和寄)

紙本墨書時代不同歌合斷簡 (廿八番左、伊勢)

著色伊勢ノ像アリ

手鑑(世々の友)

中ニ後西天皇宸翰御色紙(なむれはせ、高野切(これまたの仁和寺切(安多摩庵能、傳俊忠筆歌合切(右いろよりも)傳忠家筆歌合切(番左、たれとかは)鳥丸切(はりのゆめに)傳顯開筆萬葉抄切(河上乃)アリ

紺紙金字大般若經卷第四百三十七(神護寺經)

紙本墨書明月記 (嘉祿二年七月)

紙本墨書伊勢物語

奥ニ應安四年三月二日ノ記アリ

紙本墨書麗花集斷簡 (香紙初(夏のひに)

紺紙銀字華嚴經斷簡 (二月堂燒經)

紙本墨書狹衣卷第四

紙本墨書後拾遺抄上 傳爲世筆

紙本墨書古今集上 傳爲世筆

紙本墨書伊勢物語 傳爲相筆

紙本墨書類聚證

紙本墨書大乗院文書

天治二年活券 (五通)

長久以後文書 (二通)

應長元年河口庄所宮米收納帳

正和四年十二月十四日條約條々 (前缺)

正和四年御講米等引付

正和六年長谷寺引付

嘉曆四年年始等御共引付

延元元年侍法眼轉任事評定記

正安元年院家評定條々記錄

終ニ法眼和尚位花押トアリ

建武二年河口庄地下職注文 (前缺)

文明十年尋尊ノ識語リ

奉行引付 (自建武)

延元元年寺社雜々風記

貞和三年歲末年始篇々下文

御教書引付 (自康永)

延文六年三屋問關引付

長谷寺日記 (自貞治四年)

文和四年文書 (二通)

應安三年寺領鮫江庄雜事

明德元年寺領三俣戸庄引付

明德年中長者宣拉請文

應永二年寺領御支配御教書引付

大乗院日記 (自應永六年正月)

大乗院日記 (自應永七年八月)

大乗院日記 (應永十年廢)

院要鈔 應永九年正月日

應永十七年長講會日記

應永十八年注置鈔

應永廿一年寺領安吉庄注文

應永卅二年禪定院殿下御所上棟日記

永正十八年受戒會所作記

長祿四年十月十四日實尊ノ奥書アリ

寬正五年春日社毎日不退一切經方條々

武家天下治世記(自保元)

一切經衆補任(自康正二年)

康正元年滿洲會櫻楓講出仕勸例條々

康正二年一切經衆補任

康正二年長谷寺舞臺供養並拜堂記

康正二年諸供物納所補任次第

弘安三年長谷寺建立秘記

維摩會之記

寺務記

興福寺僧綱任日次第(自永享)

文明十七年毎日講衆新供衆補任

印鑑渡方條々

雜法文 尊尊筆

大乗院舊記

文永之記

年號次第

兼日沙汰條々

年中行事 春部

内山之記

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

大藏院制
終二三月廿三日トアリ

當社御靈驗事
出雲庄浮免注文

中綱仕丁節供引付
大藏院門主相承次第

紙本墨書後水尾天皇宸翰古歌御小色紙
(久方の中なる河の)

同品川區大井山中
伯爵上杉憲章

紙本墨書靈元天皇宸翰古歌御懷紙(疊なくわけこも)

同

紙本墨書歌集 傳後伏見天皇宸翰

同

紙本墨書觀世音經
見返シニ天神及觀音ノ圖アリ

同

紺紙金字法華經 開結共
卷第八奥ニ久壽三年五月九日トアリ

同

刊本法華經
卷第八ニ弘安九年十二月六日ノ刊記アリ

同

刊本法華經 (卷第八缺)
各帖奥ニ房朝ノ朱印アリ

同

紙本墨書後撰集 傳阿佛筆

同

紙本墨書後土御門天皇宸翰御詠草(石間水以下十首)

同

紙本墨書後柏原天皇宸翰御詠草
御名アリ
端ニ文明十五年五月五日内御當座トアリ

同

紙本墨書後柏原天皇宸翰御詠草(澤畔晴以下六首)

同

紙本墨書後柏原天皇宸翰御詠草(通尋花以下八首)

同

紙本墨書後柏原天皇宸翰御詠草(春風來海上以下六首)

同

紙本墨書後柏原天皇宸翰御詠草(竹殘雪以下六首)

同

紙本墨書後柏原天皇宸翰御詠草(早春海以下八首)

同

紙本墨書後柏原天皇宸翰御詠草(初愛以下八首)

同

紙本墨書後奈良天皇宸翰御詠草(七夕臨宮池)

同

紙本墨書後奈良天皇宸翰御懷紙(詠月前疊和歌)
御名アリ
紙本墨書靈元天皇宸翰御會始御懷紙
(享保六年正月)(詠子日備興和歌)

一帖

同

中ニ廣瀨切二葉(廿七)(廿八)、尼崎切二葉
(海石細市)(人日多)、香紙切(けるを見て)、民部切
(ひととはよそにそ)、白河切(ぬはかりそ)アリ

一帖

同

紙本墨書弘法大師貳拾五條遺告
奥ニ安和二年七月五日書寫院ニ成賢傳領ノ記アリ

一帖

同

紙本墨書大燈國師置文案 (元徳三年三月十一日)
澤庵ノ紙中極アリ

一帖

同

紙本墨書古今集下(傳爲祖本)
傳爲祖本

二卷

同

紙本墨書和漢朗詠集上下
下卷ニ正嘉二年宮長成傳授ノ奥書アリ

一卷

同

紙本墨書金光明經流水長者子品第十六
(大統十六年二月廿五日比丘慧嚴經)

一卷

同

色紙墨書貫之集下斷簡 (石山切)
(承平五年十二月)

一卷

同

紙本墨書明正天皇宸翰古歌御懷紙 (春日山)

一卷

同

紙本墨書明正天皇宸翰古歌御懷紙 (三輪のやま)

一卷

同

色紙墨書櫻町天皇宸翰御懷紙 (あまつそら)
禮紙添フ

一卷

同

色紙墨書和漢朗詠集卷下斷簡
(傳行成筆大字切)(外物獨醒)

一卷

同

紙本墨書萬葉集卷第十八斷簡(蓋紙本)(爲向京之時)

一卷

同

紙本墨書麗花集斷簡 (香紙切)(八九)

一卷

同

彩箋墨書古今集卷第十二斷簡(民部切)(こひわひて)

一卷

同

紙本墨書藤原俊成筆千載集卷第十四斷簡
(日野切)(從三位よりまさ)

一卷

同

紙本墨書後深草天皇宸翰御消息斷簡

一卷

同

紙本墨書本朝文粹卷第十三殘卷
正安元年六月廿八日書寫ノ奥書アリ

一卷

同

金銀繪料紙墨書後奈良天皇宸翰御懷紙
(春日就追年花珍和歌)

一幅

同

紙本墨書着到和歌(五月一日落葉)
深十五日曉鹿)

二卷

同

紙本墨書契沖和歌稿本

一卷

同

紙本墨書後水尾天皇宸翰御懷紙(詠寄龜祝和歌)	一幅	愛知縣名古屋市中區矢場町一ノ切	山本權次郎	短刀	銘 相模國住人廣光 延文五年八月日	一口	同	上
紙本墨書著到懷紙 中ニ後柏原天皇宸翰アリ	一幅		同 上	短刀	銘 相模國住人廣光 小サ刀拵	一口	同	上
紙本墨書三光國師墨蹟	一幅		同 上	短刀	銘 相模國住人廣光 小サ刀拵	一口	同	上
紙本墨書後土御門天皇宸翰御懷紙(關路霞、梅蕨風名所河)	一幅	滋賀縣坂田郡長濱町	四居萬次郎	太刀	銘 打刀拵	一口	同	上
紙本墨書後柏原天皇宸翰御懷紙(目多遠情、海邊拂衣松葉不矢)	一幅		同 上	刀	無銘 傳一文字	一口	同	上
紙本墨書女房奉書三通 中ニ正親町天皇宸翰アリ	一卷		同 上	刀	無銘 傳一文字	一口	同	上
紙本墨書著到懷紙 (五月雨晴)	一幅		同 上	刀	無銘 傳助真	一口	同	上
紙本墨書著到懷紙 (五月雨晴)	一幅		同 上	刀	無銘 傳助吉拵附)	一口	同	上
紙本墨書後奈良天皇宸翰御詠草(初鶯一首)	一幅		同 上	太刀	銘 附 國宗	一口	同	上
紙本墨書後西天皇宸翰御懷紙 (さほ姫の)	一幅	山形縣酒田市今町	久村金藏	太刀	銘 附 國宗	一口	同	上
手鑑	一帖		同 上	太刀	無銘 傳國宗	一口	同	上
中ニ大聖武(孝能以身)後鳥羽天皇御記切(仗信成、後土御門天皇宸翰御詠草(狩場風)後奈良天皇宸翰御詠草(客月別)正親町天皇宸翰御詠草(夏草)陽光院御筆御詠草(秋風)後陽成天皇宸翰御詠草(寄類)後崇光院宸翰御詠草(さる處)今城切(ながめをかくて日野切(ひさしう)傳俊賴重今集切(たねしあれば)多賀切(暗天之體)アリ	一幅	島根縣松江市東茶町	桑原羊次郎	太刀	銘 附 長光 打刀拵	一口	同	上
紙本墨書著到懷紙 (廿日 鷹)	一幅		同 上	太刀	銘 附 長光 打刀拵	一口	同	上
中ニ後柏原天皇宸翰アリ	一幅		同 上	太刀	銘 附 長光 打刀拵	一口	同	上
刀 劔之部				太刀	銘 附 長光 打刀拵	一口	同	上
太刀 包平ノ銘アリ	一口	東京府東京市麴町區麴町一丁目	加藤正治	太刀	銘 備前國長船住人真光 元亨三年三月日	一口	同	上
太刀 銘 久次	一口	同 赤坂區永川町	栗原彦三郎	短刀	銘 備前國長船住人真光 元亨三年三月日	一口	同	上
太刀 銘 宗忠	一口	同 赤坂區永川町	藤田政輔	太刀	銘 備前國長船住人真光 元亨三年三月日	一口	同	上
刀 無銘 傳來國俊	一口	同 小石川區西江戸町	本阿彌舜	太刀	銘 備前國長船住人真光 建武五年八月日	一口	同	上
短刀 銘 吉光 附 腰刀拵柄ナシ)	一口	同 品川區大井山中町	伯爵上杉憲章	太刀	銘 備前國長船住人真光 延文二年八月日	一口	同	上
太刀 銘 弘 傳國行	一口		同 上	太刀	銘 備前國長船住人真光 延文二年八月日	一口	同	上
太刀 銘 國俊	一口		同 上	太刀	銘 備前國長船住人真光 延文二年八月日	一口	同	上
太刀 銘 來國俊 元亨元年 〇月日	一口		同 上	太刀	銘 備前國長船住人真光 延文二年八月日	一口	同	上
太刀 銘 建長五年鎌倉國潤ノ銘アリ 附 長卷拵	一口		同 上	刀	銘 備前國長船住人真光 延文二年八月日	一口	同	上
刀 無銘 傳貞宗	一口		同 上	刀	銘 備前國長船住人真光 延文二年八月日	一口	同	上

工藝品及考古學資料之部

薙刀	無銘	傳則房拵附)	一口	同	上	青磁多嘴餅	宋ノ元龜三年云々ノ彫銘アリ	一口	同本郷區湯島三組	小倉武之助
太刀	銘 守次	草湊太刀拵	一口	同	上	薙刀拵		一口	町品川區大井山中	伯爵上杉憲章
短刀	銘 備中國守次作	延文二年八月日	一口	同	上	腰刀拵		一口	同	上
太刀	銘 國資		一口	同	上	埴輪女子像	郡玉縣埼玉郡見玉村出土	一口	同中野區沼袋北二丁目	松原正業
太刀	銘 豐後國行平作		一口	同	上	埴輪武裝男子像	群馬縣新田郡九合村出土	一口	同	上
短刀	銘 行平作	腰刀拵	一口	同	上	埴輪武裝男子像	群馬縣新田郡強戸村成塚出土	一口	同	上
鏡	銘 城州堀忠作文藏二年十二月日(拵附、石突ナシ)		十本	同	上	埴輪鷹狩男子像	群馬縣佐波郡宋女村大字通名出土	一口	同	上
太刀	銘 長光		一口	同品川區上大崎五丁目	公尊 三條公輝	埴輪武裝男子像	群馬縣佐波郡志村大字上武士大神山出土	一口	同	上
刀	無銘 傳正宗		一口	同日黑島露番町	原田耕三	埴輪武裝男子像	群馬縣佐波郡志村大字上武士大神山出土	一口	同	上
太刀	折返銘 備前國長船住人左兵衛尉保弘造		一口	同豐島區長崎南町三丁目	本阿彌澄雄	埴輪犬	群馬縣佐波郡志村大字上武士大神山出土	一口	同	上
刀	無銘 傳直次		一口	同	上	埴輪猪	群馬縣佐波郡志村大字上武士大神山出土	一口	同	上
刀	無銘 傳片山依真		一口	大坂府大阪市天王子區南日東町	大友常太郎	埴輪猪	群馬縣佐波郡志村大字上武士大神山出土	一口	同	上
太刀	銘 備前國長船住右近庄監保弘造	德治二年十月日	一口	同北河内郡枚方町	田中太介	注口土器	青森縣上北郡四和村出土	一口	同豐島區池袋三丁目	同豐島區池袋三丁目
太刀	銘 延房作		一口	新潟縣新潟市本町通七番町	風間要吉	銅製雙鳳花枝八花鏡		一口	同豐島區池袋三丁目	高松孝治
太刀	銘 俊次		一口	愛知縣西春日井郡北里村	山田照吉	銅製雙鳳花枝八花鏡		一口	同豐島區池袋三丁目	高松孝治
太刀	銘 宗忠		一口	山形縣鶴岡市家中新町	菅國太郎	大理石製敦	傳河南省安陽出土	一口	同	上
刀	無銘 青江		一口	同	菅 實	傳京都府相樂郡上狛古墳出土品	銅製半圓方形帶神獸鏡 □年ノ銘アリ	一口	同	上
刀	金象嵌銘 青江次直 本阿(花押)		一口	富山縣高岡市横田町	廣瀬友次郎	傳京都府相樂郡上狛古墳出土品	銅製半圓方形帶神獸鏡 □年ノ銘アリ	一口	同	上
短刀	銘 信國	延文三年十二月日	一口	町山縣岡山市下ノ町	小林種次	傳京都府相樂郡上狛古墳出土品	銅製半圓方形帶神獸鏡 □年ノ銘アリ	一口	同	上
工藝品及考古學資料之部										
陶製瀬戸印花菊花玉覆輪文瓶子			一箇	東京府東京市芝區琴平町	井上恒一	銅製重列神獸鏡	吳ノ黃龜元年ノ銘アリ	一面	同	上
陶製瀬戸劃花菊紋瓶子	有蓋		一箇	同高輪南町	同	銅製歌首鏡	魏ノ甘露四年ノ銘アリ	一面	同	上
陶製三彩貼花鳳凰文鷄題壺			一箇	同麻布區飯倉三丁目	森村義行	銅製四神鏡	唐ノ永徽元年ノ銘アリ	一面	同	上
陶製綠釉彫花牡丹文餅			一箇	同同奈坂區青山南町六丁目	穗積重威	銅製半圓方形帶神獸文七鈴鏡	傳大和國出土	一面	同	上
青磁劃花餅	有蓋		一箇	同同小石川區大塚仲町	山田三次郎	銅製蟬蛸人物畫象鏡		一面	同	上
陶製黑花牡丹蝶文太白碗			一箇	同同小石川區大塚仲町	池田文次	銅製人物形飾具		一箇	同	上
						玻璃製豚		一箇	同	上
						支那出土		一箇	同	上

大理石製怪獸彫像斷片

傳河南省安陽出土

大理石製直紋紋

傳河南省安陽出土

文部省告示第四百三十八號

昭和十二年十二月二十九日

品目

工藝品及考古學資料之部

所有者

陶製肩衝茶入

銘勢高(大名物) 附屬物共

磁製錦手雙鳳七寶文皿

「元祿八乙亥桶ノ銘アリ」 酒井田邊右衛門作

銅製雙鳳文盤

銘十四字

銅製轡首雙鳳文盃

銘十四字

銅製轡首渦雲文方盤

(著内録垂下)

銅製轡首雙龍文盃

銘一字

銅製雙龍文盃

銘四字

銅製龍文盃

銘一字(提梁缺失)

銅製龍文盃

銘一字(提梁缺失)

支那河南省安陽出土品

骨製雙龍文筒形直筒片

陽古墓出土品

骨製雙龍文筒形直筒片

製裝櫛文銅鐸

傳近江國出土

銅製轡首雙龍直文筒形直筒片

銘五字

銅製龍文盃

銘九字

銅製雙龍文盃

銘九字

銅製雙龍文盃

銘九字

銅製雙龍文盃

銘九字

銅製雙龍文盃

銘九字

銅製雙龍文盃

銘九字

銅製雙龍文盃

銘九字

銅製雙龍文盃

銘九字

銅製雙龍文小盃

銘一字

銅製轡首雙龍文盃

銘一字

銅製雙龍文方盤

銘六字

銅製雙龍文大鼎

銘六字

銅製雙龍文盃

銘三字

銅製雙龍文盃

銘三字

銅製雙龍文盃

銘三字

銅製雙龍文盃

銘三字

銅製雙龍文盃

銘三字

銅製雙龍文盃

銘三字

銅製雙龍文盃

銘三字

銅製雙龍文盃

銘三字

銅製雙龍文盃

銘三字

昭和十二年重要美術品資格消滅

文部省告示第二百五十一號

昭和十二年五月二十六日

重要美術品等認定物件中左記ハ國寶保存法第一條ニ依リ本月二十五日國寶ニ指定セラレタルヲ以テ其ノ認定物件タル資格ハ消滅セリ

認定告示

品目

所有者

昭和八年文部省告示第二百七十四號

紙本著色夕顏圖

各隅守景筆

絹本著色洞

池大雅筆

庭赤壁圖

青木風庵ノ表題、細谷一巻

短刀

銘國廣鎌倉住人

太刀

銘國宗

太刀

銘正恒

太刀

銘備前國長船住兼光

太刀

銘山城國西陣住人堀忠明壽花押

一隻

東京府東京市芝區三田區町一丁目

伯辭牧野伸顯

一卷

同小石川區小日向水道町

小西幸寛

一口

同觀町區元園町一丁目

加藤正治

一口

同平河町六丁目二丁目

赤星鐵馬

一口

同日本橋區室町三丁目

三井合名會社

一口

同同橋區區下落合一丁目

子爵相馬惠胤

一口

同同橋區區下落合一丁目

子爵相馬惠胤

一口

同同橋區區下落合一丁目

子爵相馬惠胤

一口

同同橋區區下落合一丁目

子爵相馬惠胤

一口

同同橋區區下落合一丁目

子爵相馬惠胤

一口

同同橋區區下落合一丁目

子爵相馬惠胤

一口

同同橋區區下落合一丁目

子爵相馬惠胤

一口

同同橋區區下落合一丁目

子爵相馬惠胤

一口

同同橋區區下落合一丁目

子爵相馬惠胤

一口

同同橋區區下落合一丁目

子爵相馬惠胤

一口

同同橋區區下落合一丁目

子爵相馬惠胤

一口

同同橋區區下落合一丁目

子爵相馬惠胤

一口

同同橋區區下落合一丁目

子爵相馬惠胤

一口

同同橋區區下落合一丁目

子爵相馬惠胤

一口

同同橋區區下落合一丁目

子爵相馬惠胤

一口

同同橋區區下落合一丁目

子爵相馬惠胤

一口

同同橋區區下落合一丁目

子爵相馬惠胤

一口

同同橋區區下落合一丁目

子爵相馬惠胤

一口

同同橋區區下落合一丁目

子爵相馬惠胤

一口

同同橋區區下落合一丁目

子爵相馬惠胤

一口

同同橋區區下落合一丁目

子爵相馬惠胤

一口

同同橋區區下落合一丁目

子爵相馬惠胤

一口

同同橋區區下落合一丁目

子爵相馬惠胤

一口

同同橋區區下落合一丁目

子爵相馬惠胤

一口

同同橋區區下落合一丁目

子爵相馬惠胤

同 銅 銘長光 一口 福岡縣山門郡城内 伯爵 立花鑑徳 昭和十年文部省告示 第二十八十六號 告示 紙本墨書源氏物語早嶺卷 一帖 東京府東京市小石川區錦司ケ谷町 保阪潤治

同 銅 銘國行 一口 熊本縣熊本市大江町 男爵 元田武彦 昭和十年文部省告示 第四百二十一號 告示 紙本著色因幡堂藥師緣起繪卷 一卷 同滋谷區櫻丘町 川田正雄

同 銅 銅製金銀錯狩獵文鏡 一面 東京府東京市小石川區高田老松町 侯爵 細川護立 同 紙本著色寢覺物語繪卷 一卷 同 原善一郎

同 紙 紙本著色後三飛驒守惟久筆 三卷 同滋谷區原宿三丁目 侯爵 池田仲博 同 絹本著色愛染明王像 一幅 同 同

同 紙 年合戰繪詞 一口 同滋谷區下落谷一丁目 松永安左衛門 同 絹本著色清瀧權現像 一幅 同 同

同 太 銘信房作 一口 同滋谷區本町通六丁目 子爵 土屋正直 同 絹本墨畫山水圖 一幅 同 同

同 太 銘則重 一口 同滋谷區山手線曲 近郷重孝 同 紙本墨畫山水圖 一幅 同 同

同 銅 銅造十一面觀音立像 一軀 東京府東京市芝區高輪南町 男爵 森村市左衛門 同 紙本墨畫山水圖 一幅 同 同

同 太 景光景政ノ銘アリ 一口 同 伯爵 奥平昌恭 同 紙本墨畫祖師圖 一幅 同 同

同 太 無銘(名物九鬼正宗) 一口 同 子爵 松平頼和 同 紙本著色湖山夕 一幅 同 同

同 太 金象嵌銘義弘本阿花押(光徳) 一口 同 子爵 本多忠昭 同 陽圖 一幅 同 同

同 太 本多美濃守所持(名物桑名江) 一口 同 菊池慧一郎 同 絹本著色桃鳩圖 一幅 同 同

同 紙 紙本墨畫瀟湘雨後伯時爲雲 一卷 同滋谷區青葉町 菊池慧一郎 同 絹本著色孔雀明王圖 一幅 同 同

同 紙 湘臥遊圖 二卷 同滋谷區廣尾町 子爵 松平頼和 同 紙本著色阿彌陀三尊圖 一幅 同 同

同 紙 紙本著色濱松圖 六曲屏 同 岡崎正也 同 絹本著色漁釣圖 一幅 同 同

同 紙 紙本墨畫山水圖 障丘(岳翁)筆 一幅 同 岡崎正也 同 絹本著色孔雀明王圖 一幅 同 同

同 紙 紙本墨書後陽成天皇宸翰玄上 一卷 同 岩井武俊 同 絹本著色不動明王圖 一幅 同 同

同 短 短刀(名物庵丁正宗)無銘 一口 東京府東京市麴町區永田町二丁目 伯爵 伊藤治正 同 絹本著色在原業平像 一幅 同 同

同 太 太刀銘正恒 一口 同滋谷區田園調布四丁目 篠原三千郎 同 紙本著色山水蘆雁圖 一幅 同 同

同 京 京都府乙訓郡向日町 銅製規矩(鏡面周緣ニ一) 十二箇 大阪府大阪市天王寺區上本町七丁目 平泉久右衛門 同 太刀銘恒次 一口 同 同

同 京 京都府乙訓郡向日町 銅製規矩(鏡面周緣ニ一) 十二箇 大阪府大阪市天王寺區上本町七丁目 平泉久右衛門 同 太刀銘恒次 一口 同 同

同 京 京都府乙訓郡向日町 銅製規矩(鏡面周緣ニ一) 十二箇 大阪府大阪市天王寺區上本町七丁目 平泉久右衛門 同 太刀銘恒次 一口 同 同

同 京 京都府乙訓郡向日町 銅製規矩(鏡面周緣ニ一) 十二箇 大阪府大阪市天王寺區上本町七丁目 平泉久右衛門 同 太刀銘恒次 一口 同 同

同 京 京都府乙訓郡向日町 銅製規矩(鏡面周緣ニ一) 十二箇 大阪府大阪市天王寺區上本町七丁目 平泉久右衛門 同 太刀銘恒次 一口 同 同

同 京 京都府乙訓郡向日町 銅製規矩(鏡面周緣ニ一) 十二箇 大阪府大阪市天王寺區上本町七丁目 平泉久右衛門 同 太刀銘恒次 一口 同 同

同 京 京都府乙訓郡向日町 銅製規矩(鏡面周緣ニ一) 十二箇 大阪府大阪市天王寺區上本町七丁目 平泉久右衛門 同 太刀銘恒次 一口 同 同

同 京 京都府乙訓郡向日町 銅製規矩(鏡面周緣ニ一) 十二箇 大阪府大阪市天王寺區上本町七丁目 平泉久右衛門 同 太刀銘恒次 一口 同 同

同 京 京都府乙訓郡向日町 銅製規矩(鏡面周緣ニ一) 十二箇 大阪府大阪市天王寺區上本町七丁目 平泉久右衛門 同 太刀銘恒次 一口 同 同

古美術保存

同	紙本墨書造寺料物注文斷簡 紙背ニ寫經料紙充帳アリ	一葉	同本郷區森川町	井上喜太郎
同	短刀無銘(名物庵丁正宗)	一口	同麻布區宮村町	俵井上三郎
同	太刀銘國行	一口	同日黒區上目黒八丁目	子爵松平直顯

文部省告示第二百九十號 昭和十二年七月三十日

昭和十一年文部省告示第三百二十一號中重要美術品等認定物件「短刀銘繁慶一口」ハ本年六月十八日其ノ所有者「東京府北多摩郡武藏野町吉祥寺赤星鐵馬」ヨリ「帝室博物館」ニ譲渡セリ

文部省告示第三百九十三號 昭和十二年十一月二十四日

昭和十二年文部省告示第五十號中重要美術品等認定物件「短刀無銘傳正宗一口」ハ本年九月二十七日其ノ所有者「富山縣富山市總曲輪近郷重孝」ヨリ「東京帝室博物館」ニ譲渡セラレタリ

文部省告示第四百十七號 昭和十二年十二月九日

重要美術品等認定物件中左記ハ本年三月十七日其ノ所有者「東京府東京市芝區高輪南町横河民輔」ヨリ「東京帝室博物館」ニ譲渡セラレタリ

認定告示

昭和八年文部省告示第三百十二號	青磁鉢	一箇
昭和九年文部省告示第三百五號	磁製三彩牡丹文鉢	一箇
同	磁製粉彩花鳥圖皿	一箇
昭和十年文部省告示第四百二十二號	磁製色繪三果圖皿	一枚

昭和十二年度史蹟指定

文部省告示第百六十四號 昭和十二年四月五日

第一類 史蹟

明治天皇御嶽神社御小休所	東京府東京市澁谷區美三三番御嶽神社境内實測二百三十三坪一合八勺
--------------	---------------------------------

明治天皇田子御小休所 長野縣上水内郡若槻村大字田子字北村 二九三番八號、二四〇番〇號、二四一番一號内實測二百五十七坪、二四一番合併田子神社境内内實測三二七番合併田子神社境内内實測十六坪五合

明治天皇青森御乘船並御上陸棧橋跡 青森縣青森市大字新濱町 三一番ノ三三、三三番右地先道路敷實測二畝二十四歩五合二勺及埋立地實測五畝四歩四合七勺

文部省告示第二百二十二號 昭和十二年四月十七日

第一類 史蹟

名	稱	地名	地城
小谷城跡		滋賀縣東淺井郡小谷村大字伊部字小谷山	六四二番ノ一〇、自六四二番ノ四至六四二番ノ九六、六四四番ノ一、自六四四番ノ三至六四四番ノ一二、自六四四番ノ二至六四四番ノ三〇
		同大字郡上字小谷山	五七三番ノ三三、五七三番ノ八二
		同大字丁野字小谷山	五七八番内實測一段歩
		同大字上山田字小谷山	二三二番ノ四九、二三二番ノ一三三、二三二番ノ二、二三二番ノ三番ノ一二内實測三段三畝歩、三三二番ノ一六二
		同大字下山田字小谷山	一六〇六番ノ八三、一六〇六番ノ一〇七、一六〇六番ノ一〇九
		同湯田村大字尊勝寺字小谷山	七〇二番ノ一〇三
		同田根村大字須賀谷小谷山	八八四番、八八五番ノ二、自八八六番ノ一至八八六番ノ七五、八八七番、八八八番
盛岡城跡		岩手縣盛岡市第一地割字内丸	自八一番ノ二至八一番ノ四八 五七番ノ四、五七番ノ五櫻山神社境内、自五七番ノ一至五七番ノ三七

文部省告示第二百四十五號 昭和十二年五月十五日

甲號(解除)

小石川後樂園ノ一部	東京府東京市小石川區後樂園敷地内八坪
-----------	--------------------

乙號(追加指定)

小石川後樂園ノ一部

東京府東京市小石川區
小石川町

大藏省所管國有地内實測二千六百
十坪八合七勺

文部省告示第三百六十號 昭和十二年六月十五日

第一類 史蹟

名 稱

地 名

地 域

下府廢寺塔趾

島根縣那賀郡下府村字
上寺イボカハ

六三二番續ノ一

富岡吉利支丹供養碑

熊本縣天津郡富岡町字
首塚

三五九二番

王塚古墳

福岡縣嘉穂郡桂川村大
字壽命字坂元

三〇九番ノ一、自三一〇番至三一
四番

周防國衙趾

山口縣防府市大字東佐
波令字國廳

一九九九番第一、一九九九番ノ二、
自一九九七番至二〇〇五番、二〇
〇〇六番ノ一、自二〇〇六番ノ一、
自二〇〇八番ノ一、自二〇〇八番ノ二、
自二〇〇九番至二〇〇九番ノ一、
自一九八三番至一九八六番、一九
八四番第一、一九八五番第一、一
九八六番第一、自一九八七番至一
九八八番、一九八九番第一

同字大番

同字朱雀

同字木船

同字御德分

同字濱宮

同字船所

同字京慶

自二二二六番至二二二八番、二二
二九番ノ一、二二二九番ノ二、二
二三〇番、二二三一番

同字下リ

同字壹濱口

同字流田

同字堂前

同字大樋

同字公下

同字下大樋

佐波川關水

同佐波郡八坂村大字船
路

伊志見一里塚

島根縣八東郡突道町大
字伊志見字灘

出西一里塚

同篠川郡出西村大字出
西字星田

伊波野一里塚

同伊波野村大字富村字
土井

文部省告示第二百七十三號 昭和十二年七月三日

第一類 史蹟

名 稱

地 名

地 域

明治天皇御小休所本願
寺舊大教校

京都府京都市下京區大
宮通七條上ル御器屋町

三二番本願寺境内内實測百二坪七
勺、三三番内實測百六十三坪三合
三勺

明治天皇關川行在所趾
附御膳水

新潟縣中頸城郡名香山
村大字關川字上町

二六一番ノ甲、二四二番

明治天皇二俣御小休所
趾附御膳水

同大字二俣字西原

一二五二番

明治天皇二本木御小休
所

同中鄉村大字二本木

九八四番内實測三十一坪九合四勺

明治天皇石澤御小休所
趾

同和田村大字石澤字善
中

三八番内實測十六坪五合

一七五〇番ノ一、一七五〇番ノ二、
一七五一番、一七五四番

六六七番

九三一番、九三二番

三二七三番、三二七四番内實測十
步

三二八一番内實測十步、三二八二
番、三二八三番内實測十步

三二六五番

三二九〇番、三二九一番
右地域内ニ介在スル道路敷及水路
敷

佐波川〔右岸字坪七三六番地先ヨリ
下流字上久保三三六番地先
ヨリ下流字臺根六九九番ノ三地先〕
ニ至ル間ノ川敷

四四番

二八五九番ノ一、二八六〇番

一番、一番ノ一、二番、二番ノ一、
四番ノ三

明治天皇行野濱御小休 附御膳水	同湯町村大字行野濱字 北砂原	八五番内實測三十六坪六合九勾、 八六番内實測四十三坪四合七勾	明治天皇會地御小休所 同刈羽郡中通村大字會 地字北田	同字東	甲一七〇番甲内實測三坪 一六七二番内實測四十八坪二合二 勾
明治天皇柿崎行在所趾 附御膳水	同柿崎町大字柿崎字諏 訪町	六六五四番淨福寺境内内實測千五 百七十坪五合九勾、六六四八番内 實測一坪五合三勾	明治天皇岩戸海岸御野 立所	同中頸城郡春日村大字 虫生岩戸字跡濱	四七九番ノ一内實測十五坪二合五 勾
明治天皇上輪新田御小 休所附御膳水	同米山村大字上輪新田 新田字街道下	二三番内實測百五十四坪二合二勾	明治天皇長濱御小休所	同谷濱村大字長濱字中 ノ町	八九番、九〇番ノ一
明治天皇青海川行在所	同大字青海川字中野	九六番ノ二内實測二十四坪一合五 勾	明治天皇茶屋ヶ原御小 休所附御膳水	同大字茶屋ヶ原字上ノ 原	一番
明治天皇東ノ輪御野立 所	同刈羽郡鯉波村字砂田	八七七番ノ甲内實測百一坪六合六 勾	明治天皇名立行在所趾 附御膳水	同西頸城郡名立町大字 名立大町字寺山	二七〇番名立寺境内内實測四百七 十二坪
明治天皇出雲崎行在所 附御膳水	同三島郡出雲崎町大字 羽黒町字御藏ノ脇	乙一三四六番ノ二内實測六坪	明治天皇龜崎御小休所 附御膳水	同大字名立小泊字他屋 ノ上	四六八番正光寺境内内實測二坪二 合五勾
明治天皇寺泊行在所趾 及建物	同寺泊町大字寺泊字上 田町	六六〇番 六五〇番羽黒神社境内内實測三坪 六合六勾	明治天皇龜屋敷御小休 所附御膳水	同磯部村大字藤崎字梨 平	三二一五番ノ一
明治天皇薮御小休所	同寺泊町大字寺泊字上 田町	二八八八番ノ甲内實測四百五十坪	明治天皇糸魚川行在所 附御膳水	同浦本村大字鬼伏字下 崩崎	八八番ノ一内實測百二十四坪二合 一勾
明治天皇竹野町御小休 所	同字一里塚	三八八三番内實測十七坪五合	明治天皇堀屋敷御小休 所附御膳水	同大和川村大字堀屋敷 字小石倉	一三〇番ノ二内實測二十六坪二合 五勾
明治天皇赤塚行在所	同赤塚村大字赤塚字屋 敷添	一六九八番ノ一内實測百二十坪	明治天皇魚川行在所 附御膳水	同字藥師堂	一七七番内實測四合四勾
明治天皇荒川御小休所 附御膳水	同西蒲原郡彌彦村大字 薮字四石	二五八〇番内實測百八十五坪三合 七勾	明治天皇水ヶ窪御野立 所	同糸魚川町大字新田	四五番ノ一内實測十三坪五合五勾
明治天皇山崎御小休所	同北蒲原郡松浦村大字 荒川字寺下	四三八六番内實測百五十一坪六合 三勾	明治天皇城ヶ上御野立 所	同大字横町	三〇四番ノ一内實測三十四坪一勾 三〇四番ノ二内實測五坪二合二勾 右地域ニ介在スル溝渠實測一坪二 合一勾
明治天皇水原行在所	同笹岡村大字山崎字堅 田	五四二三番内實測百二十二坪五合 三勾	明治天皇市振御小休所 趾及建物	同青梅町大字青梅字板 ヶ峯	三五九一番内實測一畝二十四步八 勾、三五九四番内實測十五步五合 九八六番内實測三畝二十九步五合
明治天皇新津行在所趾	同水原町大字下條字元 町	一九番内實測五十三坪五合	明治天皇持光寺御小休 所附御膳水	同歌外波村大字歌字大 久保	八二二番ノ一内實測五十坪三合五 勾
明治天皇宮本行在所趾 附御膳水	同中蒲原郡新津町大字 新津	五八二番内實測六百五十一坪六合 三勾	明治天皇願海寺御小休 所	同市振村字青森	八九〇番ノ三内實測七十四坪三合 三勾
	同三島郡宮本村大字宮 本宮本字新保	二〇〇二番内實測千二百五十一坪 一合二勾、二九九九番内實測八十 五坪八合一勾、三〇五二番内實測 二十九坪五合二勾、三〇五三番内 實測百三十三坪三合、三〇五五番ノ 四内實測一坪二合六勾	明治天皇壬生行在所	富山縣下新川郡横山村 大字春日字寺ノ下	一二七番内實測十二坪、一三二番 内實測百四十九坪六合
		甲一〇四番ノ一、甲一〇五番ノ一、 甲一〇五番ノ二		同經田村大字持光寺字 宮ノ上	一二〇二番内實測六十六坪一合
				同射水郡老田村大字願 海寺字千保	甲一七二七番ノ三内實測四十五坪 五合
				栃木縣下都賀郡壬生町 大字壬生字城南	

同字城内
明治天皇番場御小休所 乙三二八二番内實測五十五坪
滋賀縣坂田郡息郷村大 六六七番内實測三十五坪八合三勺
明治天皇勝坂御小休所 六六八番内實測四十坪一合九勺
山口縣佐波郡右田村大 五一一番内實測七十三坪七合一勺
字下右田字勝坂
明治天皇鯖山峠御小休所 一番ノ三地、一番ノ四地
同字峠
明治天皇問屋口御小休所 一九七三番第二
同防府市大字新田村字 大土手村
明治天皇小鯖御小休所 三二二三番第一
同吉敷郡小鯖村大字下 小鯖字洞道口
明治天皇萩ノ尾御小休所 四一三番ノ二
同下關市大字掠野字萩ノ尾

文部省告示第三百號 昭和十二年八月十六日

第一類 史蹟

明治天皇柏崎行在所 新湯縣刈羽郡柏崎町字 西學校町 一六四四番内實測八十坪

文部省告示第四百二十四號 昭和十二年十二月十四日

(改稱) 明治天皇三田尻行在所招賢閣 明治天皇三田尻行在所

文部省告示第四百二十五號 昭和十二年十二月十五日

第一類 史蹟

明治天皇白井行在所 千葉縣印旛郡白井町大字白井字宿内 一五八番ノ一内實測四十六坪三勺
明治天皇枋木行在所 枋木縣枋木市入舟町字 二番ノ一七内實測四十八坪八合、二番ノ一八内實測三十五坪二合、二番ノ一七三番ノ二内實測五十坪九合六勺、一七三番ノ三藏院境内内實測百二坪四合五勺
明治天皇關行在所 三重縣鈴鹿郡關町大字 新所 六〇一一番本統寺境内内實測三百二十三坪一合八勺
明治天皇桑名行在所 同桑名市大字今一色寺 町

古美術保存

文部省告示第四百三十二號 昭和十二年十二月二十一日

第一類 史蹟

米山寺經塚 福島縣岩瀬郡西袋村大字西川字坂ノ上 二一番、二九番、三四番
宇和島城 愛媛縣宇和島市丸之内 一番ノ八、一番ノ一〇、自一番ノ一二至一番ノ一三、一番ノ一二ノ一、一番ノ一二ノ二、一番ノ一二ノ三、一番ノ一二ノ四、一番ノ一二ノ五、一番ノ一二ノ六、一番ノ一二ノ七、一番ノ一二ノ八、一番ノ一二ノ九、一番ノ一二ノ一〇、一番ノ一二ノ一一、一番ノ一二ノ一二、一番ノ一二ノ一三、一番ノ一二ノ一四、一番ノ一二ノ一五、一番ノ一二ノ一六、一番ノ一二ノ一七、一番ノ一二ノ一八、一番ノ一二ノ一九、一番ノ一二ノ二〇、一番ノ一二ノ二一、一番ノ一二ノ二二、一番ノ一二ノ二三、一番ノ一二ノ二四、一番ノ一二ノ二五、一番ノ一二ノ二六、一番ノ一二ノ二七、一番ノ一二ノ二八、一番ノ一二ノ二九、一番ノ一二ノ三〇、一番ノ一二ノ三一、一番ノ一二ノ三二、一番ノ一二ノ三三、一番ノ一二ノ三四、一番ノ一二ノ三五、一番ノ一二ノ三六、一番ノ一二ノ三七、一番ノ一二ノ三八、一番ノ一二ノ三九、一番ノ一二ノ四〇、一番ノ一二ノ四一、一番ノ一二ノ四二、一番ノ一二ノ四三、一番ノ一二ノ四四、一番ノ一二ノ四五、一番ノ一二ノ四六、一番ノ一二ノ四七、一番ノ一二ノ四八、一番ノ一二ノ四九、一番ノ一二ノ五〇、一番ノ一二ノ五一、一番ノ一二ノ五二、一番ノ一二ノ五三、一番ノ一二ノ五四、一番ノ一二ノ五五、一番ノ一二ノ五六、一番ノ一二ノ五七、一番ノ一二ノ五八、一番ノ一二ノ五九、一番ノ一二ノ六〇、一番ノ一二ノ六一、一番ノ一二ノ六二、一番ノ一二ノ六三、一番ノ一二ノ六四、一番ノ一二ノ六五、一番ノ一二ノ六六、一番ノ一二ノ六七、一番ノ一二ノ六八、一番ノ一二ノ六九、一番ノ一二ノ七〇、一番ノ一二ノ七一、一番ノ一二ノ七二、一番ノ一二ノ七三、一番ノ一二ノ七四、一番ノ一二ノ七五、一番ノ一二ノ七六、一番ノ一二ノ七七、一番ノ一二ノ七八、一番ノ一二ノ七九、一番ノ一二ノ八〇、一番ノ一二ノ八一、一番ノ一二ノ八二、一番ノ一二ノ八三、一番ノ一二ノ八四、一番ノ一二ノ八五、一番ノ一二ノ八六、一番ノ一二ノ八七、一番ノ一二ノ八八、一番ノ一二ノ八九、一番ノ一二ノ九〇、一番ノ一二ノ九一、一番ノ一二ノ九二、一番ノ一二ノ九三、一番ノ一二ノ九四、一番ノ一二ノ九五、一番ノ一二ノ九六、一番ノ一二ノ九七、一番ノ一二ノ九八、一番ノ一二ノ九九、一番ノ一二ノ一〇〇

基肆(椽)城趾

佐賀縣三養基郡基山村 大字小倉字丸林 同字大久保
同字車道
同字北帝
同字坊住

美術市場

美術市場に現はれた重要な新古美術品及び其の市價の記録として、我が國の四大美術市場たる東京、大阪、京都、名古屋の各美術俱樂部に於て昭和十二年中に行はれた主なる賣立に就き、二千圓以上の高値表を以下に記載する。

昭和十二年度新古美術品賣立高値表 (金二千圓以上)

東京美術俱樂部

某大家並片岡家賣立

二月二十二日

古徑着色犬	二、二八〇圓
蕪村蹄畫譜	一〇、一〇〇
百穂白雲歸樵	三、八一
華山豐千騎虎	七、六〇〇
竹田栗鶉	二、〇〇〇
玉堂松間飛瀑	二、六九八
古九谷四方角切花鳥皿二	二、八九〇
春草海邊	三、八九三
白駒脇差國廣	二、〇〇〇
春草歸路	四、一九〇
玉堂松溪遊鹿	五、〇〇〇
廣業中不二三幅對	五、六八九
寬畝不老榮華	二、八九〇
木米天台秋色	四、八九三
竹田疎梅老松	五、二二八
大雅堂秋景山水	二、二六〇

美術市場

巖山鄉躑	二、一一一
山陽過二重嶺詩	二、一一〇
爲恭如意輪觀音	五、五〇〇
竹田宜男草	五、六一一
雅邦竹溪夏雨雲烟紅樹双幅	五、八三〇
直入金地不二六曲一双	二、二八〇
玉堂溪村春晴	二、九〇〇

紅雲閣並某家賣立

三月十五日

廣業春雨渡橋白雲紅葉双幅	二、一八九
芳崖波上觀音	三、八三九
景年西王母	二、二三一
春草白衣觀音	二、三六八
梨子地蒔繪料紙硯箱	二、三八〇

設樂家並某家華邦堂賣立

三月二十二日

翠雲海魚	二、三九〇圓
景年青楓瀑布	二、二九〇
芳園洗馬	二、三〇〇
吳春朝陽蘆雪臘月双幅	二、一〇〇
刑部梨子地唐山水蒔繪料紙硯箱	三、八一九

大觀旭日富嶽	四、一三八
玉章櫻花雉子	二、八一〇
拈付刀來國俊	二、三五八
夏雄金一輪牡丹金物	二、三一〇
白鞘刀國行	二、〇五八
大觀靈峰富士旭日青松双幅	二、三九三

雅邦釋迦	五、二三〇
大觀春曙	二、五九八
深水五人女六曲半双	四、〇五〇
雅邦寒山拾得	六、三九八
大觀蓬萊	二、五三九
景年箕面瀑布	二、八九三
觀山高士	二、〇〇〇
玉堂山家積雪	二、〇六〇
大觀竹小禽	二、一〇〇
雅邦春秋大和山水	三、五八〇
翡翠香爐	四、五〇〇

百穂山雲來往	三、三八九
景年不老長春小禽	三、八九三
雅邦月夜山水	三、五〇〇
廣業白馬雪溪	二、二二五
雅邦柳蔭櫻花	二、一〇〇〇
雅邦雨竹叭々鳥	一、一五〇〇
雅邦中東方朔三幅對	三、七一〇
現代諸大家畫帖	三、五二八
景年新柳臘月	五、一〇〇
秋暉松竹梅=鶴双幅	二、一〇〇
春草鶯	三、六一九

伊藤伯爵家若佐家並某家賣立

四月十八日

國寶古備前基近太刀	一、六三九〇圓
直長拈付大小	三、八〇〇
古青江正恒拈付刀	六、三九〇
備前光守拈付脇差	三、五〇〇
信房拈付大小	二、六〇〇
雅邦中鑑爐三幅對	一、三五八〇
廣業美人對鏡	三、八九〇
景依太刀	五、八八〇

廣業深山の夏	二、五三九
雅邦三保松原	七、八八〇
靈華清香	三、三〇〇
雅邦石座觀音	八、九八〇
延壽國村拈付刀	二、六八〇
一文字重久拈付刀	二、五二一
觀山臨濟	二、〇〇〇
備前正恒拈付大小	六、一〇〇
文晁蝦夷風俗圖卷	三、八九〇
省亭江戸十二景十二幅對	四、〇〇〇

步齋庵賣立

四月二十六日

藤原時代孔雀明王	七、九八〇圓
鎌倉時代兜	二、七八〇
實朝中院切	九、六〇〇
光廣三十六歌仙幀	二、〇八〇
藤原時代五鈴鈴	八、七九〇
天平經	二、七〇〇
石山切貫之集	七、〇〇〇
古銅經筒花生	二、一〇〇
藤原時代地藏尊	二、三九三
實朝日課觀音	三、五九〇
行成針切	一、三八〇〇
一休墨蹟	三、八〇〇
志野花碗銘佳よし	二、六〇〇
志野四方火入	六、三〇〇
信西寶塔經	三、三五〇
一休墨蹟	九、七八〇
澤庵布袋自畫贊	一六、九〇〇
備前筒花生	五、八〇〇
西行神社歌五十首卷	三、〇〇〇
基俊山名切	二、一〇〇
鍍金白金象嵌入博山爐	二、二〇〇

戊辰切	三、〇〇〇	海屋花卉双幅	四、四三〇	栖鳳秋晴富嶽	三、四〇〇	景年青楓瀑布	二、八五九
光廣十牛卷	五、八九八	廣業富士	三、三六〇	玉堂春秋山水双幅	二、四六八	景年白糸瀑布真景	三、六八〇
吳洲赤繪玉取獅子鉢	二、二九八	拈付刀近江守助直	二、〇〇〇	某男爵家並某家賣立	六月二十九日	關雪玄猿	六、五九八
赤澤家並某家賣立	五月十七日	翡翠三足香爐	二、〇五〇	大觀松竹梅双幅	三、六五三	東西大家寄合册	七、〇〇〇
關雪郭巨三幅對	三、六九八	秋暉花鳥	二、八九〇	大觀旭日靜波	六、二一〇	竹田蓮池	二、八三〇
古徑雞頭	二、二一三	翡翠龍摘遊環共蓋香爐	三、〇五〇	翡翠琅玕獅子蓋遊環香爐	二、三三八	琅玕瓢虫彫帶留	二、一六八
青碧磁牡丹彫共蓋香爐	四、三三九	春草三保富士双幅	八、九一〇	研出紫式部詩繪文臺硯	二、一五〇	舊大名某家並邦枝完二賣立	
栖鳳荒園春色	二、八〇〇	夏雄金萬年草金物一提朋籠	二、六二〇	栖鳳朝陽	二、三三四	十一月十五日	
某家賣立	五月三十一日	青磁獅子摘遊環共蓋香爐	二、〇〇〇	白磁花鳥彫連環共蓋花生	二、三八〇	佛蘭西ジョセフ・フランソワ風景繪	三、一九三
毛益虎	三、一〇〇	御舟朝顔	五、三九〇	某大家並石川宗寂翁賣立	七月六日	古徑黃昏	三、〇三五
伊藤公滄浪閣七律	五、九三〇	琅玕豆提物	二、二三九	觀山浮月	二、七九三	廣重英泉木曾街道	三、二八〇
江漢月々瀬眞景	二、七〇〇	燕村雨中柳二鳥	三、〇五八	大雅堂柳江舟遊	三、二九五	古殿家白雲居並某家賣立	十二月六日
玉堂溪山春晴	三、三九八	秋暉孔雀	三、六九〇	竹田水西草堂	三、八五〇	大觀旭日靜波	二、九一〇
大觀竹林之朝	二、七九三	春草夏山	四、六九〇	春草竹林	二、二三九	近江八景詩繪書棚	二、六九八
雅邦雨中歸漁山村積雪双幅	三、三八九	平目地料紙硯箱	二、一〇〇	杏所柳蔭獨釣	七、五〇〇	紫檀青貝入椅子臺榻	二、〇三九
玉堂清涼馨香	二、五〇〇	春草紫陽花	五、六八〇	磁青磁内シノギ小平鉢	三、一九三	大觀曙色	三、六五〇
黑地瀧山水詩繪文臺硯箱	四、三九八	青磁三足香爐	三、〇〇〇	栖鳳春郊	二、八三九	備前花生	一〇、五五〇
大觀朝陽	三、六〇〇	松園美人	三、一八九	竹田大明竹栽培	三、〇九〇	古徑鶴頭	二、五九三
百穗丹鶴青潤	五、六〇〇	翡翠皮目鳥彫香爐	五、〇八九	翡翠獅子摘遊環共蓋三足香爐	三、六九八	和田英作富士油繪額	二、五九八
大觀山色新	三、一九〇	春草湖畔の雨	二、五〇〇	觀山馬郎婦觀音	二、二三〇	靈華羅浮仙	三、三八八
山陽題畫五絶七絶双幅	三、三三〇	大觀雨聲	三、一一〇	春草秋溪水禽	三、一〇〇	玉堂高砂三幅對	二、二五〇
山陽題詩豐彦鶴双幅	四、三九八	雅邦牡丹	五、五五〇	雅邦松下布袋	四、六二〇	寬齋童子高砂	四、三一〇
星巖紅蘭合作常盤雪行	二、一九〇	關雪老松荒鷹	二、八九五	黑地扇面散詩繪印籠掛	二、二六〇	大觀靈峰	二、〇八八
春舉雪松二枚折屏風一双	五、〇〇〇	南蠻水銀壺花生	七、八〇〇	山陽水墨山水	二、一九八	雅邦勿來關	五、三九〇
菰翁柳村歸牧詩	四、一〇〇	時代梨子地松竹梅詩繪料紙硯箱	二、五七八	春草綠蔭釋迦大觀無我釋迦	一〇、五八九	玉堂秋景山水	二、四三〇
春舉清流釣魚	三、六八〇	白磁獅子摘遊環共蓋三足香爐	二、〇六一	竹田枯木叭々鳥	四、六〇〇	御舟晚春庭裡	二、二五〇
玉堂晴耕	四、五〇〇	百穗柳蔭歸牧	三、一五一	松園春の粧	五、〇八二	梨子地葵紋詩繪太刀	二、〇〇〇
源平盛衰記十二卷	二、九〇〇	關雪雨後新月	三、六八八	靈華觀自在菩薩	二、一一八	雅邦李白觀瀑	四、〇〇〇
大觀月夜	二、七八〇	直入白衣大士	二、四一〇	翡翠獅子摘遊環共蓋香爐	八、一一〇	栖鳳月の松島	三、五五八
山陽修史七絶	四、三八〇	大觀紅葉瀑布	三、八二〇	雅邦秋景山水	九、六一〇	雅邦双鶴養子	四、三八〇
望月青松庵並鈴木家賣立	六月八日	古徑梅	二、四六三	靈華大宛善馬	二、二五九	龍子寒汀潛鱗	二、七九三
唐物青貝樓閣人物平卓	四、一九八						

古徑百舌 三、四三〇
景年春野大原女 五、一九〇
和亭林和清三幅對 二、九〇〇
玉堂溪山春晴 五、四八〇
雅邦翁鶴 六、一八〇
省亭中日ノ出三幅對 三、五五〇

青山莊、鍋倉家並太田家賣立

十二月二十六日

大阪美術俱樂部

香雲軒賣立 一月二十四日

勝現雪芹雁大小柄 三、〇〇〇
拵付大小正恒家助 二、〇五〇
時代拵刀眞守 二、三八〇
春舉裾野の秋 二、三五九
玉堂山村春色 二、〇〇〇
玉堂松上双鶴 九、〇八八
祥瑞染付四方猪口向付六人前 二、七四三
玉堂深山春色 三、〇五〇
玉堂溪村春色 二、七〇〇
百穗紅白双幅 二、三九〇
玉堂松間飛瀑 三、七〇〇
松園草紙洗 三、五九八
觀山一休禪師 二、一八九
春草夏の朝 三、五九〇
栖鳳藻刈舟 三、八九八
宗現作眠布袋小柄目貫 三、八九〇
直入白衣大士 三、六三九
雅邦中富嶽三幅對 二、八三〇
夏雄作金牡丹目貫 五、六一〇
勝現大森彦七圖鈔 三、〇五〇
御舟木苧 二、三九〇
春草鳩 五、三九八
栖鳳青楓飛瀑 三、三九〇
篤興銀雲龍總金具太刀 三、三九〇

御舟山櫻花 五、七九八
百穗竹二文鳥 五、六九八
玉堂秋山斜陽 三、二〇〇
玉堂蓬萊仙鳥 二、五九三
百穗早春 二、七九八
黑太刀忠光 二、二〇〇

啓書記雪山水 二、一〇〇
雪舟蘆蟹橫物 八、六〇〇
松花堂福祿壽 三、八九三
常信中老子左菊右芙蓉三幅對 四、五九〇
伊川院中賴信朝臣三幅對 五、三九八
伊川院中孔子三幅對 二、五一〇
晴川院中松二鷹三幅對 五、六〇〇
應舉夏嵐山水双幅 三、五〇〇
吳春月夜山水雪中山水双幅 二、三五〇
山陽吉野懷古咏史半載 三、三九九
山陽伊達政宗詠史半載 五、一九〇
山陽自著通議後詩 二、六一一
竹田秋江漁艇畫譜 二、七三三
竹田柳菊小禽畫譜 三、一一一
菰翁寒林訪友畫譜 一七、九〇〇
燕村桃園結義 三、四〇〇
燕村風雨老樹寫 二、九三九
梅逸水墨淺絳山水 五、一三〇
梅逸秋草半載 三、七〇〇
半江浪華橋納涼橫物諸先生卷添 三、六〇〇
介石水墨那智瀑布大幅 三、一〇〇
菰翁秋景山水畫譜 二、四五〇

文晁中翁左右千羽鶴三幅對 二、一八〇
直入中楊柳觀音三幅對 二、八〇〇
抱一雪中紅梅鸞 三、六九〇
抱一中壽老人三幅對 三、九一〇
抱一雪中蘆白鷺 三、二〇〇
其一高砂三幅對 四、五一九
清暉中雲中東方朔三幅對 二、二一〇
景年老松緋鸞哥 二、八〇〇
探陶學古畫圖帖 九、四〇〇
梅逸春秋草花中屏風一雙 二、一〇〇
吳春白梅屏風一雙 二、一六〇
一鳳金地富士松原屏風一雙 六、七〇〇
耕園老松若松屏風一雙 二、二六〇
耕園竹林若竹屏風一雙 二、〇七〇
耕園春秋草花溪流屏風一雙 二、〇七〇
古赤繪獅子摘蓋香爐 一三、九八〇
堆黑俱輪彰平草 五、三〇〇
時代鈐留山水詩繪文臺硯 六、五〇〇
唐物青貝福祿壽香合 二、八九〇
青齋麥穗式花餅 乾隆在銘 六、五三〇
均窰尊式花餅 三、三七〇
周銅夔龍紋尊式花餅 三、六一〇
海鼠面盆 萬明祥在銘 五、八九三
水晶玉 大小 純銀壽影添 四、七九五
鷄血印材 三果 三、八九八
唐物青貝樓閣山水人物圖座屏 二、一三〇
金欄手丸紋向附 二、九三〇
青磁鐵鉢水指 六、〇〇〇
祥瑞口紅見込白拔中皿 二十四、三〇〇
祥瑞八角瓢德利 詩人 六、一一九
祥瑞色繪平鉢 二、三八九
金欄手向附 花唐草紋 五 四、〇〇〇

祥瑞營宿梅繪中皿 十五 二、五五〇
橋屋柳櫻色繪會席家具皆具 二十 二、〇〇〇
青磁大平鉢 二、三〇〇
某家賣立 一月三十日 三、八〇〇
清嚴一行 三、八〇〇
唐物青貝松下樓閣圖基人物平卓 五、三九〇
梨子地王義之詩繪硯箱 二、一一〇
柿右衛門梅環珞繪薄端鬼面耳付花生 二、三一〇
古伊羅保内刷毛茶碗 銘三芳野 二、三一〇
德元菊頭象眼入火箸 在銘 二、一〇〇
保全瓢箪振出 二、四一〇
京都某家賣立 二月三日 二、一〇〇
應舉及鶴 七、八九〇
素絢花の旅美人 四、五〇〇
景文菊三幅對 二、九〇〇
抱一月芙蓉 三、八九〇
清暉高砂相生松大幅 六、三九〇
來章梅=兔 二、八九八
來章花菖蒲水鷄 三、三〇〇
清暉朝陽靜波橫物 七、六〇〇
時代金地桃山六枚折屏風一雙 二、二〇〇
唐物青貝山水人物模樣中央卓 五、三九三
釘彫伊羅保花盤 二、九〇〇
朝鮮唐津水指 五、三九三
淨林牛乘人物地紋貝銀附四方釜 四、一九〇
時代高臺寺詩繪爐檮 三、五九〇
長次郎素燒灰器 三、〇〇〇

平日梨子地山吹蒔繪硯箱	六、七二九	古赤繪金欄手寄セ向附	五	二、〇〇〇	行成懷紙	八、五〇〇	應舉中東方朔三幅對	六、三〇〇
吳州赤繪舟魚平鉢	二、一七〇	地黑梨子地浪千鳥蒔繪大書見臺 本願寺傳來			俊成千載集切	八、〇〇〇	蘆雪雪曉喜鴉	五、五〇〇
小林和作及某家賣立	二月二十一日				良經詠草	五、八〇〇	吳春櫻花双鯉	二、一〇〇
梅逸四條夕涼紙森双幅	七、四〇〇	黑柿人物彫冠卓	二、五〇〇	三月九日	定家夕顏歌入文	三、〇〇〇	狙仙白薔薇猿蜂	八、四一〇
梅逸青綠松林山水	二、二九〇	神戸直木家並某家賣立	二、五〇〇	三月九日	慈鎮小色紙	二、九八〇	豐彦紅蓮	三、六一〇
米山人幽溪高士	二、一〇〇	雅邦朝陽蓬萊橫物	三八、九八〇	圓	契沖詠草	二、五九〇	芳園若松躑躅雉子	八、九二〇
直入中郭子儀左右青綠山水三幅對	八、三五〇	清巖橫一行 松風和	一三、七〇〇		光廣竹契還年和歌懷紙	三、一九八	一風蘆=飛雁	一、二〇〇
吳春竹林庵居	四、一九〇	山陽水墨柳陰山水橫物 逸雲華師	七、三九〇		松花堂寶舟畫譜	六、八九九	一風中大阪城三幅對	七、八一〇
栖風蓮白鷺	三、〇〇〇	竹田高瀬川詩半切	二、三九〇		江雲白紙譜	三、二七〇	訥言中信善卿三幅對	二、一〇〇
松園虫ノ音	五、三九〇	來章中翁左嵐山春景右宇治秋色三幅對	二、八九〇		松花堂浮世繪	六、三九〇	廣行櫻井驛楠公訣別	二、五九八
祥瑞三ツ足香爐	二、四〇〇	松花堂人物 澤庵賛	二、八九〇		松花堂月 江月賛	九、四八〇	師宣讀書美人	三、八〇〇
青磁寶珠摘共蓋花生	五、八九〇	松花堂月 江月賛	二、八九〇		江月一行	四、一九三	容齋小式部詠大江山和歌意	二、八〇〇
寧黛靈芝耳花生 乾隆銘	二、三四〇	松花堂月 江月賛	二、八九〇		德川秀忠櫻歌	八、三九〇	榎嶺柳下小原女	三、一九一
乾山色繪草花透鉢	四、三〇〇	松花堂月 江月賛	二、八九〇		三齋寄松祝聚樂懷紙	三、一一〇	景年雨中山水白鷺	二、七九五
古九谷色繪花鳥平鉢	一、一〇〇	松花堂月 江月賛	二、八九〇		普齋鳴子雀畫譜	二、〇〇〇	景年瀑布翡翠	一、〇一〇
萌黃糸絨大袖鎧	二、八〇〇	松花堂月 江月賛	二、八九〇		芭蕉花曇句入文	五、一九八	景年芙蓉双鴨	二、五八九
故山中定次郎賣立	三月五日	松花堂月 江月賛	二、八九〇		元庵墨蹟	七、五〇〇	梅逸竹洞海僻竹田竹溪春琴他諸名家寄	九、三九〇
色繪鍋島牡丹唐草小皿 十枚	三、一九〇	松花堂月 江月賛	二、八九〇		北磬墨蹟	三、一九〇	合山水花鳥帖	二、三九九
古清水色繪牧童大置物	九、五〇〇	松花堂月 江月賛	二、八九〇		夢翁墨蹟	五、三九八	乾山水仙蕨土筆扇面二枚	三、三九〇
仁阿彌道八櫻透シ鉢	五、六五〇	松花堂月 江月賛	二、八九〇		夢窓國師三行墨跡	二、三八〇	光悅諸本	四、六〇〇
仁阿彌道八雲金秋山水茶盤	二、三九〇	松花堂月 江月賛	二、八九〇		舜舉花籠	一、〇〇〇	小野通女鼠草紙卷物	三、九〇〇
仁阿彌道八菊繪鉢	二、五〇〇	松花堂月 江月賛	二、八九〇		蘇東坡墨竹	一、一六〇	兆殿司鸞紅白蓮池屏風一双	一、四〇〇
保全友趾寫花唐草鉢	二、五三〇	松花堂月 江月賛	二、八九〇		宗丹江山小景 惠風師贊	二、一八〇	金地浮世繪兩面雛屏風一双	三、二〇〇
織部洲演形向附 五	二、九〇〇	松花堂月 江月賛	二、八九〇		雪村中觀音三幅對	三、六九〇	永德老松蘆鶯大衝立	二、一〇〇
萬曆赤繪龍筆皿	五、一九〇	松花堂月 江月賛	二、八九〇		山樂夏景山水双幅	二、二九八	大名物唐物勢高茶入	一、六一〇
萬曆赤繪花唐草蓋物	二、三九〇	松花堂月 江月賛	二、八九〇		興以春秋山水双幅	三、四一〇	名物正意岡邊茶入	四三、九〇〇
萬曆赤繪龍繪梅形手指	二、三九〇	松花堂月 江月賛	二、八九〇		探幽中老松三幅對	八、三〇〇	大津手松虫茶入	七、九〇〇
赤地金欄手牡丹九紋向附 五	四、〇九〇	松花堂月 江月賛	二、八九〇		宗達山歸來小禽	八、九〇〇	遠州藏帳青江手芋ノ子茶入	銘七夕
萬曆赤繪花籠大花生	五、六〇〇	松花堂月 江月賛	二、八九〇		燕村野老飼馬	一三五、〇〇〇	原薩摩長茶入	二、六九〇
宋青磁無地大花生	二、一〇〇	松花堂月 江月賛	二、八九〇		半江落花流水	八、五〇〇	備前緋襪肩衝茶入 歌銘茂山	六、一九〇
古赤繪金欄手寄セ向附 五	四、三九〇	松花堂月 江月賛	二、八九〇		王建章米法山水扇面	二、三八〇		

宗全手造茶入 銘ツルシ柿

秀次松寸切茶器

不昧公黑菊盃一双

名物灰被天目茶盤

名物有樂井戸茶盤

本手立鶴茶盤

彫三鳥茶盤

磯青磁シノ木茶盤

斗々屋平茶盤

安南絞手茶盤

堅平茶盤

眞熊川茶盤

志野茶盤

織部筒茶盤

隨流手造赤茶盤

交趾笠牛香合

名物丹橘香合

染付半開扇香合

交趾分銅龜香合

唐物青貝月下漁舟香合

仁清色繪瓢箪香合

乾山雪持松香合

唐津鹿香合

宗且共筒茶杓

原叟共筒茶杓

佐久間不干齋共筒茶杓

普齋共筒茶杓

不昧公共筒象牙桑二本茶杓

祥瑞共蓋蜜柑水指

志野平水指

吳州タンパン八仙人水指

三、一〇〇

四、三〇〇

三、九一〇

二、一〇〇

一四六、八〇〇

三三、一〇〇

五、三三〇

二四、一〇〇

二一、九〇五

八、一九〇

五、九一〇

三、五六九

三七、〇〇〇

四三、九〇〇

二、三〇〇

六、五九〇

二、〇〇〇

二、六一〇

六、〇〇〇

四、七四〇

四、三八〇

六、一〇〇

一五、四一〇

七、四一〇

二、五〇〇

四、九八〇

六、八〇〇

二、四一〇

二、三九八

六、九〇〇

二〇、一〇〇

古薩摩姥口肩組輪耳上底水指

古染付共蓋菱馬水指

萬曆赤繪花鳥繪角水指

古伊賀瓢箪果座水指

尹部耳付平水指

古高取刷毛目筒水指

長閑堂一重切竹花入

遠州藏帳遠州輪無二重切竹花入

唐物籠手付花入

古備前福耳花入

古備前瓶子笹耳花入

青磁輪花中燕花入

南疊切溜花生

寧寧柑子口花瓶

乾隆十錦透大花入

天藍窓六角大花入

宋均窯果座石昌鉢

道仁馬地紋天正釜

蘆屋舟漁夫蘆鷺梅鶯地紋難波津釜

唐物藤組底六角脛當炭斗

遠州藏帳唐金建水

南疊内盥龍拔建水

唐物獨樂盆

德乘作銀寶囊形釣香爐

青磁糸卷形獅子蓋香爐

唐物黑無地春日卓

水晶玉 二個

杜園高砂置物

五、九〇〇

九、五〇〇

五、八九〇

四、三九八

二、九八〇

六、七九三

八、一〇〇

八、九三〇

五、三九八

七、八九八

八、五一〇

五、五三九

四、五九八

五、二三〇

八、九三八

四、六〇〇

二、一九〇〇

一一、〇〇〇

三、八〇〇

四、三九〇

五、七〇〇

四、五〇〇

四、三八〇

三、一〇〇

七、〇〇〇

二、三九八

五、六八〇

七、八九八

利休好時代木地ナグリ燗椀

羽田五郎眞塗燗椀

光悅鹿硯箱

鎌倉時代黒地松蔭蒔硯箱

地黒吉野山蒔繪長硯箱

繪替草花蒔繪五重鼻紙臺

光悅橘紅葉蒔繪茶箱皆具

近衛家傳來白竹籠十種香箱

祥瑞本捻鉢

黃瀬戸見込梅水仙果鉢

青磁端反小鉢

繪高麗菓子鉢

黃瀬戸鉦鉢

染付鮑鉢

磁青磁浮牡丹振出し

仁清色繪撫子牡丹盃臺

古赤繪金欄手爵酒香

古今里錦唐子遊大平鉢

萬曆赤繪四方向付

織部船形向付

志野四方草花繪替向付

古染付蘭繪汲出茶碗

古九谷色繪花鳥菱皿

祥瑞輪花丸紋中皿

琅玕勾玉

大判小判取交

時代光悅色紙棚

菩提樹念珠

古代木地文觀木棚

三、一一〇

三、一九〇

二、三九〇

八、五八〇

五、九一〇

二、七〇〇

二、一一〇

二、八〇〇

二、七、一〇〇

二、〇〇〇

八、九〇〇

二、六、一〇〇

七、一〇〇

三、四一〇

五、八九三

一、六、九〇〇

三、六九八

四、一九〇

三、〇一〇

四、三二〇

二、一〇〇

六、四三〇

二、六、〇〇〇

二、八、一〇〇

七、六九〇

二、六二〇

三、一九三

黒地松竹梅蒔繪書見臺

梨子地松竹梅蒔繪基盤

光琳鈐滑頭印籠

同 牛人物印籠

梨子地葵紋蒔繪刀掛

後藤家三所物揃小柄等

後藤家十五代小柄揃物

梨子地牡丹唐草内梅紋蒔繪衛府大刀

明珍作紫絨具足

某家寶立

古土佐春日曼茶羅

華山鯉海老半切

山陽水墨山水半切

梅逸水墨細雨江山半切

直入青綠蓬萊山水

直入水墨春景嵐山

其一 中紅白蓮左右藤花紅葉三幅對

完瑛雨中鶯

應震嵐山宇治橋又幅

玉峰櫻花双鳩

清贍檜樓山水

株嶺古代遊女

光起薄ニ雉子横物

香崎櫻町中納言小督局又幅

春草灘

伊藤公臺灣歸途過廣島七律

鳳山狂言繪十二幅對

玉堂海邊春漁村秋又幅

古伊賀耳付花生

玳皮盡天目茶碗

二、一〇〇

三、〇〇〇

五、六九〇

二、一九〇

二、八九八

二、一一〇

三、六九〇

四、〇〇〇

二、五九三

三、六〇〇

七、三九〇

二、四三〇

四、三〇〇

二、六三〇

一、八、三九八

二、一一〇

二、一九八

二、一〇〇

三、四〇〇

二、六〇〇

二、五〇〇

五、七〇〇

八、六九〇

二、三九〇

二、三七〇

二、八八〇

一、一一〇

三、六〇〇

祥瑞詩入茶碗	七、二〇〇	來章金地極彩色養蠶屏風一雙	七、一〇〇	狹狹中郎橋五絕	三、〇〇〇	芳園雨中老松及鶯	二九、〇〇〇
本手斗々屋茶碗	三、四一一	クイン筆漁場の女	二、五〇〇	菰翁柳蔭漁艇	七、八九八	一風紅葉及鹿	一三、六七八
古備前耳付德利花生	三、七一〇	ゴールド筆牛	二、六〇〇	菰翁柳色春煙橫物	七、八九〇	寬齋秋景嵐山	一八、九三〇
吳洲青畫赤壁鉢	二、九〇〇	碯青磁袴腰香爐	一七、八九九	秋暉梅竹雉子松菊錦鷄鳥及幅	二〇、〇〇〇	寬齋藤房卿訪楠公	七、三八〇
染付仙人繪玉章鉢	四、三九八	祥瑞三ツ足香爐	三、九六〇	秋暉中月芒菊左櫻鷓鴣右牽牛花鶯三幅對	二〇、〇〇〇	寬齋春秋耕作及幅	二、一〇〇
船井家並某家寶立	四月二十八日	唐物青貝竹林七賢人平卓	二、七一〇	梅逸重疊瀧山水	七、〇〇〇	寬齋牡丹群雀橫物	六、九〇〇
山陽修史七絕	三、六九〇	古赤繪草花繪砂金袋平水指	三、七〇〇	梅逸松虫鈴虫	一三、六〇〇	寬齋備後三郎	二、三九〇
來章着色中月左春景嵐山右秋景通天三幅對	四、九八〇	螺鈿入梨子地蒔繪會席家具皆具	一七、三〇〇	梅逸山都歸牧細幅	五、九〇〇	模嶺燕子花白鶯	二、二三〇
寬齋着色兒島高德	二、六三〇	愛棲居寶立	五月二十三日	梅逸楊柳山水	五、六三〇	是眞觀樓	五、一〇〇
竹邨青綠松壁看雲	二、〇〇〇	燕村寒林孤鹿	五〇、〇〇〇	梅逸花鳥	三、〇一〇	雅邦紅葉閑居	八、三九〇
祥瑞杏形丸紋茶碗	二、一〇〇	燕村秋溪雨霽	二五、〇〇〇	梅逸中柘榴黃雀三幅對	五、〇〇〇	雅邦深山樵家	六、三九〇
繪唐津桐香合	二、〇〇〇	燕村案山子畫譜細幅	三、八九三	竹溪春景嵐山橫物	六、〇〇〇	雅邦月下漁笛橫物	八、三一〇
遠洲好茶箱皆具	三、七一〇	燕村寒山斜景橫物	三、五〇〇	竹溪青綠春景山水橫物	五、〇〇〇	玉章山櫻雉子	二、五〇〇
竹心共筒茶杓	三、一〇〇	燕村簪畫譜細幅	二、一〇〇	竹溪唐崎送別橫物	五、〇〇〇	百穗若千鳥	二、六九五
尾道小西家並某家寶立	五月六日	華山歲寒二友群雀	六〇、〇〇〇	對山十六羅漢渡海	三、〇六九	大觀寒山拾得及幅	六、三〇〇
雪舟龍	一、九〇〇	華山瘦馬橫物	二六、一〇〇	香山富士松橫物	二、一〇〇	香崎楠公訓兒及幅	六、五九〇
竹田花果	二、六〇〇	華山太神樂	六、一三〇	香山富士松橫物	二、三九〇	香崎船上山行幸	三、五〇〇
半江米法山水	二、七七三	山陽水墨山水	二九、〇〇〇	清巖一行	四、一〇〇	景年瀑布青楓	一三、八〇〇
梅逸春秋花卉虫及幅	四、七一〇	山陽修史七絕	六、四〇〇	應舉白梅雌雄壽帶鳥	一三、〇〇〇	栖鳳松島橫物	二、七九八
應舉雨前後及幅	三、三九〇	山陽水墨山水畫譜橫物	五、六九三	雪中芭蕉及鴨	二、八九〇	栖鳳鳴神	二、七三〇
吳春秋景松林山水	二、九一九	山陽通議七絕	四、一八〇	吳春最上川畫譜	三、九一〇	景年案山子細幅	二、三九〇
狙仙親子猿	二、〇五〇	竹田晚秋漁樂	六、〇〇〇	吳春御巫舞	三、〇〇〇	栖鳳禁城松翠橫物	二、〇〇〇
雅邦嵐山春色	四、六九八	竹田酒盃畫譜橫物	二、三〇〇	景文絲櫻及鳩	七、九九〇	松園櫻花三美人	二六、二〇〇
景年松楓木啄	四、一二九	竹田月桐一葉畫譜	二、三〇〇	景文蓬萊山	六、六一〇	松園櫻狩橫物	四、七三〇
景年月下絲櫻	三、一〇〇	大雅堂福祿壽細幅	二、二〇〇	景文柳月雨中狸及幅	七、一一〇	松園古代美人	三、二三〇
松園紅葉狩	四、七五〇	大雅堂秋景山水	二、二〇〇	景文八胡梅四十雀橫物	三、四三〇	玉溪筍	二、〇〇〇
春草朝光孤月月夜及幅	五、八五〇	大雅堂青綠壽老	二、五九八	素絢美人戲猫	二四、三一〇	鐵齋青綠醉翁亭	二、三八〇
栖鳳松魚	一、一五〇	米山人五生	二、三九〇	素絢炬燵美人	二、一九〇	鐵齋青綠東坡安蔬	二、八七〇
栖鳳朝陽橫物	二、四三九	半江墨牡丹	四、八九〇	微山杉下鹿	一一、九〇〇	竹邨觀劍誦詩	三、一五九
蘆雪極彩色岩牡丹孔雀二枚折	八、六三〇	半江米法樓閣山水	四、八〇〇	應震千代野	三、七〇〇	竹邨雨中圖樂	二、三〇〇
鈴留櫻花群禽蒔繪二枚折	四、一一一	木米秋溪渡橋	二、九一九			關雪嵐峽細雨	二、五〇〇
又兵衛遊樂圖中屏風半双	一〇、〇〇〇						

景文十二月花鳥短冊

四、一九八

山陽四字額

五、〇〇〇

木庵三字額

三、八一九

寬齋四季山水二枚折一双

一〇、六七八

傳又平山王祭加茂祭屏風一双

二、三、九三〇

山陽竹田蕪村半江梅逸玉堂其他諸先生

二、四、一〇〇

張交中屏風一双

一五、六〇〇

文麟金地雀乃御宿屏風一双

七、七三〇

秋暉花鳥張交屏風一双

二、八、一〇〇

古伊賀耳付花入

四、三九〇

青磁不遊環花入

三、三、六〇〇

古備前耳付花入

七、一〇〇

萬曆赤繪柑子口花入

四、一〇〇

周銅尊式花瓶

三、〇〇〇

周銅卣

一三、一九〇

茶葉磁三羊壺花瓶

二、九六〇

周銅尊式花瓶

八、七五〇

茶葉磁管耳六角花瓶

三、五〇〇

白磁遊環共蓋花瓶

九、〇〇〇

南壁切溜花入

三、一〇〇

古赤繪瓢形花入

四、六七〇

朝鮮唐津耳付花入

六三、五〇〇

祥瑞詩入橫瓜香合

二、三、〇〇〇

堆朱紅花綠葉菊蟠獅彫香合

八、九〇〇

祥瑞本手立瓜香合

七、五九〇

織部ハジキ香合

五、〇〇〇

吳州有馬筆香合

二、〇〇〇

ノンコウ茄子香合

二、九三〇

堆黑陶淵明香合

三、四〇〇

瀨戸不手茶入 歌銘山里

二、三〇〇

時代竹七寶彫茶器

一、二、六八〇

仁清黑釉手毬羽子板若雁繪茶盤

一八、〇〇〇

瀨戸正意新兵衛茶盤一双

一三、〇〇〇

青井戸茶盤 銘佳吉

三、一九〇

茂三内刷毛茶盤

七、五一〇

祥瑞地毬詩入茶盤

五、三〇〇

黃伊羅保茶盤 銘村雨

四、三一〇

黃瀬戸筒茶盤

三、六〇〇

古萩茶盤

二、七一九

古唐津石ハゼ茶盤

七、五九〇

祥瑞六角裂模樣詩入口紅茶盤

三、四六〇

祥瑞蝶繪筒茶盤

二、六〇〇

了入黑筒茶盤 銘霜柱

二、〇九八

祥瑞一閑人水指

一〇、一〇〇

御本立鶴水指

三、八五〇

普齋共筒茶杓 銘晚鐘

二、八九〇

唐物獨樂菓子盆

七、九三九

五郎左衛門飯口梅竹地紋釜

二、六九〇

古片屋瓢形釜

二、六〇〇

唐物藤組匣當炭斗

三、五〇〇

時代竹組炭斗

二、〇〇〇

瑠璃祥瑞口紅在銘蓋置

四、六九〇

磁青磁袴腰香爐

二、九〇〇

黃瀬戸竹筒香爐

二、三九八

古刷毛目累座香爐 銘初潮

四、〇〇〇

祥瑞竹ハジキ紐共蓋香爐

二、六八〇

祥瑞シノギ詩入共蓋香爐

二、二五〇

黑地清見瀉詩繪硯箱

八、七一〇

梨子地松竹梅鶴繪山水詩繪手匣

三、七〇〇

吳州冠手火入 一對

一、二、六八〇

南京赤繪山水人物繪口紅火入

二、〇三〇

吳州赤繪魁鉢

五、〇〇〇

古雲鶴杉形鉢

三、七〇〇

藍吳州赤壁鉢

二、〇〇〇

備前火羅平鉢

二、三九〇

吳州赤繪見込端反龍平鉢

二、三〇〇

染付雲堂口紅酒吞

三、六九〇

古備前德利

三、〇〇〇

染付拾酒吞 十客

二、五〇〇

志野撫角向付 六客

八、〇〇〇

唐津刺山椒向付五客 且人寫

四、五〇〇

織部未廣形細向付 五客

二、八九〇

唐津一葉向皿 五客

三、五九〇

染付六拾酒吞 五客

二、八九〇

某家寶立 五月三十日

一、二、九一〇

景年老松孔雀大幅

四、七〇〇

春草釋尊

三、六九〇

景年瀑布

五、一六二

景年不老長春

四、一六〇

景年寒林群雀

七、一八〇

景年老松=紅葉

二、六〇〇

廣業羅浮仙大幅

三、八七九

古徑羅浮仙

六、一九八

對岳莊寶立 六月四日

四、八九〇

松花堂俊成卿像畫譜

五、二〇〇

清巖通貫十方一行

二、八一〇

松花堂布袋橫物

二、〇〇〇

鎌倉時代文珠之像

二、四六〇

蕭白旭日老松

二、〇〇〇

澤庵萬波云云一行

二、〇〇〇

澤庵月=巖自畫譜橫物

二、一〇〇

探幽葛家橫物

二、一〇〇

探幽武藏野畫譜

二、五〇〇

松園吉野太夫

二、八九〇

膳所光悅茶盤 銘那古ノ浦

六、九一〇

井戸小貫入茶碗 歌銘櫻

三、〇一〇

斗々屋茶盤 歌銘いなり山

三、一九〇

無地志野茶碗 銘八千代

四、〇〇〇

唐物獨樂盆 銘松島

八、九九〇

石州共筒茶杓 銘松島

八、〇〇〇

竹心共筒茶杓 銘山里

六、三九八

千家名物仙叟ヘラ筒花入

三、五〇〇

與次郎霞梅樓地紋釜

二、四九〇

時代高臺寺詩繪爐檮

二、三九〇

宗品雲華燒灰器

三、〇〇〇

古金銀取交一口

一〇、五〇〇

古赤繪金欄手向付 五客

二、三〇〇

祥瑞鹿人物德利

三、二〇〇

七石翁寶立 六月十五日

二、〇〇〇

竹田松溪山水

二、五〇〇

山陽泊天草洋詩

二、五〇〇

文晁連山一望松

三、三九〇

華山水墨一葉竹

二、四二〇

半江水墨長松山水

三、六六〇

山陽佐々木四郎詠史

九、三〇〇

春琴栢葉亭小集圖 添幅 山陽三條 旗亭詩

七、八五〇

山陽松翁合作水墨山水

四、一九〇

草坪益壽平安

二、一〇〇

海屋秋景山水

八、六〇〇

米山人秋山蕭寺

一、一〇〇

山陽墨牡丹詩春琴墨牡丹畫譜及幅

五、八九八

梅逸中陶淵明左五柳右孤松三幅對

二、一〇〇

山陽待母浪華七絶	一〇、〇〇〇	賴家一族扇子	四、二〇〇	國寶信實歌仙切	五一、〇〇〇	菰翁疎竹遠山	三、八九〇
竹田蓮=翡翠	四、六六八	蕪村水墨蛙畫譜扇子	三、〇〇〇	佐理卿通切	一二、〇〇〇	直入梅溪幽居	三、四三〇
梅逸蓬萊山水	八、一九三	周銅鑾簪紋尊式花瓶	三、四〇〇	倭成卿千載集切	七、一〇〇	直入霜林幽居	七、〇〇〇
山陽修史七絶	七、六三九	白砥鼎式香爐	四、三〇〇	後京極良經卿倭漢朗詠集歌切	三、五〇〇	竹邨松澗對泉	二、〇八〇
山陽猷日野公梅花二種詩	二、三九三	天藍窯六稜式花瓶	六、五九〇	慈鎮園山切	二、九一〇	西鄉南洲書三行	二、二四〇
竹田抱琴聽松	四、一三五	萬曆染付輪花水盤	五、〇〇〇	家長龍田切	二、八九〇	景年春山臘月	三、四三〇
山陽櫻花七絶	二、二五九	寧窯蕉紋羊耳花瓶	二、八九〇	清嚴橫一行	七、二三九	景年海中群魚大橫物	五、六〇〇
梅逸水墨高士觀瀑	二、六〇〇	梨皮泥具輪珠茶鉢	九、〇〇〇	清嚴一行	七、〇〇〇	景年朝陽映浪	三、八三〇
菰翁養老瀑布詩畫双幅	三、三三〇	古染付蘆雁煎茶碗	五、〇〇〇	光廣卿和歌懷紙	四、〇〇〇	景年月下柳狸	七、二三〇
梅逸水墨夏景山水	二、一九三	宋均窯六稜式橫手水注	八、一九〇	歲仁親王和歌懷紙	二、〇九〇	景年春秋花鳥双幅	六、四三〇
竹洞水墨瀑布	四、三〇〇	木米作瓢茶匙、竹筒茶壺	六、〇〇〇	應舉香山尙齒會大橫物	二八、一〇〇	景年白蓮	六、七三〇
梅逸江都春色	二、一〇〇	古染付寶華紋茶碗	二、一九八	燕村田老秣馬	六七、九一〇	景年梅林牧童紅楓遊鹿双幅	三、一〇〇
杏坪水墨岩=菊	四、九〇〇	唐白泥三峰爐	九、四三〇	應舉中庵壽老左右松鶴三幅對	八、六〇〇	景年紅楓小禽	四、八〇〇
梅逸秋郊牧童山水	三、九〇〇	古染付飛馬煎茶碗	三、二〇〇	應舉流水南天鵲鶴	七、一九八	栖鳳秋溪遊鹿山水大橫	三、六〇〇
梅逸柳=蟬	七、五九〇	古錫圓式托子	二、二〇〇	應舉梅月雪中松双幅	六、三九〇	松園上萌	四、九一〇
梅逸水墨網渡リ	七、四〇〇	古雲鶴菓子鉢	五、四三〇	吳春新綠山水大橫物	五一、一〇〇	松園雪吹美人	五、六〇〇
梅逸倪法松潤孤亭	二、七九〇	木米造雲鶴菓子鉢	六、一〇〇	蘆雪中南天鶴	七、一〇〇	松園楚蓮香	五、三九〇
竹溪蓮池山水	五、一〇〇	仁阿彌道八雲錦木瓜形鉢	一〇、五〇〇	吳春雨中郭公山水	五、三九〇	吳春金地人物景文若松双鶴兩面大衛立	三、〇六〇
山陽修史七絶	二、六九三	保全刷毛目四方鉢	三、三〇〇	景文蓬萊山	四、八三〇	時代金地桃山柳橋屏風一雙	二四、三一〇
梅逸金箋水墨山水双幅	二、四八五	道八乾山笠ノ繪鉢	二、六〇〇	吞舟幽缺玉蟾	二、六〇〇	應舉梅狗子老松白鶴屏風一雙	八、〇〇〇
對山醉墨柳陰牧童	三、〇五〇	三田窯染付四方鉢	二、二六〇	景文芙蓉四十雀	四、三〇〇	吳春柳陰漁夫中屏風一雙	六、九三〇
竹田蟋蟀畫譜畢山俳諧自讀双幅	二、一八九	永樂金欄手玉取獅子鉢	二、五〇〇	景文中月夜垂櫻左右清障雨中清水寺雪	一七、一〇〇	吳春蘭亭曲水屏風一雙	九、五〇〇
畢山鐘馗嫁妹圖	二一、八〇〇	祥瑞豆象摘香合	二、九〇〇	中渡月橋三幅對	四、一〇〇	景年白桃群鷄紅楓子母鷄屏風一雙	二六、五一〇
木米崇禎喬松圖	五、九八二	保全金欄手巾筒	三、〇〇〇	景文朝顏橫物	四、一九八	時代金地並松屏風一雙	二、二一〇
燕村竹石	六、一九〇	織部耳付振出シ	二、〇〇〇	清暉三光三幅對	三、六二〇	寬齋雪中老松鷹二枚折	二、二一〇
大雅堂四時煙景四幅對	二、一三〇	琥珀獅子紐小判形大印材	二、一〇〇	清暉南極星	三、一五〇	景年櫻双鷄二枚折一雙	一八、四〇〇
大雅堂水墨楓橋夜泊	一五、〇〇〇	翡翠獅子紐大角印材	三、一〇〇	玉峰紅葉小禽南天水仙雪中老松三幅對	二、六九〇	景年四季花鳥襖	二、七三〇
雲華水墨岩=蘭	二、八九〇	鷄血長方山形大印材	二、七三〇	寬齋雪中松林山水	二、一六〇	古伊賀耳付花生	三二、五〇〇
梅逸水墨養老畫譜橫物	三、三九〇	京都美術俱樂部		寬齋蓬萊山水大橫物	六、三九八	青磁竹節耳付花生	二〇、八〇〇
梅逸設色山水畫帖	一一、六〇〇	平井家寶立 二月十五日		寬齋雪中樓閣高士彈琴山水大橫			

古伊賀掛花生 二、〇九〇

中興名物元伯竹二重切花入 銘銘李宗盛 二、〇〇〇

茶屋宗古竹一重切花入 銘松里 二、二三〇

井戸茶盤 銘九重 八、〇〇〇

長次郎黑茶盤 銘杜若 六、〇〇〇

古雲鶴茶盤 銘幾下鳥 七、一〇〇

古萩筆洗割高臺茶盤 六、三〇〇

祥瑞口紅見込鶴繪香茶盤 四、一〇〇

斗々屋茶盤 銘水月 四、三一〇

祥瑞詩入筒茶盤 二、六一〇

一入黑茶盤 銘夕照 三、〇〇〇

了全織部寫香茶盤 四、三〇〇

祥瑞共蓋唐子遊模樣茶器 五、六〇〇

春正鈴溜住吉詩繪平棗 七、〇〇〇

利休在判共筒茶杓 四、六九〇

仙叟共筒茶杓 銘山吹 三、〇三〇

普齋共筒二本入茶杓 銘 六、五九〇

不味候共筒茶杓 銘紅葉 二、六〇〇

碌々齋共筒茶杓 七本 二、五九〇

祥瑞ヒタ扇香合 六、四一〇

仁清燕繪廣口水指 四、七〇〇

古備前手桶水指 七、五九〇

朝鮮唐津一垂口水指 三、八九〇

古伊賀口四方耳付水指 二、五五〇

青磁地紋鐵鉢水指 四、三〇〇

保全黃交趾色繪牡丹平水指 二、〇六〇

堆朱牡丹彫丸盆 張成在銘 二、二八〇

蘆屋探幽下繪猿猴地紋筒釜 二、二三九

了全古銅寫杓立 三、六〇〇

砂張火箸 二、三八〇

木米祥瑞寫丸紋竹節蓋置 二、一一〇

南疊砂張灰匙 二、〇〇〇

時代大内蒔繪阿古陀形大手焙 二、六〇〇

古染朱買臣繪火入 三、八〇〇

碓青磁口輪花袴腰香爐 五、〇〇〇

唐物螺鈿春日卓 一、〇〇〇

仁阿彌色繪袖女置物 八、四三〇

時代梨子地松竹梅蒔繪文臺硯 六、九五〇

祥瑞口紅胴紐舟山水丸紋鉦鉢 三、四〇〇

青磁端反鉢 三、一〇〇

保全染付開扇向付 十人前 三、四一〇

保全備前寫德利 三、八〇〇

某家賣立 五月十日 二、三〇〇

清暉旭日若松及鶴及幅 二、三〇〇

芳文溪流櫻雄子溪流紅葉鴛鴦屏風一雙 二、三〇〇

梨子地山吹山水蒔繪料紙文庫 二、一五〇

景年松樹杜鵑 三、一九三

名古屋美術俱樂部

某家賣立 一月二十六日

爲恭奉景嵐山 八、〇〇〇

定家烏丸切 五、五〇〇

戊申切 三、五〇〇

訥言春之景及幅 二、五〇〇

清雨中柳二鶯 二、二〇〇

石山切 五、〇〇〇

染付隅田川香合 三、〇〇〇

唐物篋入炭斗 二、五〇〇

南疊內瀝灰器 二、〇〇〇

斗々屋平茶碗 二、〇〇〇

獨樂中次 五、〇〇〇

澁谷松風軒、梅田喜樂莊並某家賣立 二、〇〇〇

二月八日 二、〇〇〇

玉堂中壽老三幅對 二、〇〇〇

春秋庵賣立 三月二十八日 二、〇〇〇

竹堂着色朝吹鶴雪松鴛鴦雙幅 二、二〇〇

黃伊羅保茶碗 六、〇〇〇

志野茶碗 二、五〇〇

祥瑞豆男香合 二、〇〇〇

祥瑞丸紋德利 三、五〇〇

某舊家並石川聽雨堂並某家賣立 四月六日 五、〇〇〇

梅逸前後赤壁 三、〇〇〇

梅逸蘭亭曲水 二、五〇〇

文麟月夜四條納涼 二、〇〇〇

梅逸水樓觀月 三、〇〇〇

梅逸翠柳紅桃及燕 二、三〇〇

黃瀬戸半筒茶碗 二、五〇〇

染付雁木煎茶碗 二、五〇〇

下郷壽吾園、小出稻雲樹並某家賣立 四月二十五日 三、〇〇〇

竹洞南天晴雪 二、二〇〇

時代粉溜錫椽香合 二、〇〇〇

高橋蓬庵賣立 六月六日 二、一〇〇

熊野懷紙 一、七〇〇

伊豫切 四、三八〇

小大君香紙切 五、〇〇〇

定頼卿烏丸切 二、六〇〇

俊忠卿二條切 四、三九〇

戊辰切 三、三九三

夢窓國師墨蹟 二、三、六〇〇

一休禪師歌詩 二、三、六〇〇

家光公嘯鳥 二、八〇〇

光悅和歌 四、三七〇

訥言中養老勅使春秋山水三幅對 一、八、六〇〇

宗中侯雪月花和歌三幅對 二、三〇〇

梅逸瀑布 六、〇〇〇

梅逸蓬海舟中 二、一八〇

梅逸金泥柳桃紙雛 三、七〇〇

光悅始色紙短冊張込小六枚折 四、一八〇

青磁木瓜鶴香合 三、二〇〇

吳州周茂叔香合 四、六〇〇

青貝內朱唐子遊香合 七、一一〇

黃瀬戸根太香合 三、五七〇

染付張甲牛香合 二、五八〇

堆黑地紅布袋香合 二、六三九

瀬戸玉川手芋子茶入 七、九〇〇

藤重一及入中次 九、九九〇

廣澤茶入 七、〇〇〇

朱根來金林寺茶器 五、七九三

薩摩茶入 三、九五〇

釘形伊羅保茶碗 二、〇〇〇

古刷毛目茶碗 八、九八〇

一入黑茶碗 二、七八〇

古萩茶碗 三、〇〇〇

權十郎侯共筒茶抄 八、九〇〇

氏卿共筒茶抄 一、六九〇

遠州侯共筒茶抄 三、〇〇〇

普齋共筒茶抄 三、三八〇

古備前種壺水指 一、五〇〇

宗和公竹尺八花入 一、〇〇〇

唐物藤組置花籠 二、五九〇

古備前累座花入 九、五〇〇

(以下二五頁)

昭和十二年度美術文獻目錄

凡例

一、此處に採録する美術文獻は我が國に於て昭和十二年中に發行された單行本、定期刊行物及諸新聞掲載のものに限つた。

二、東洋古美術文獻採録の範圍は原則として美術關係のものに限つたが、考古學、歴史地理其の他のものに就ても美術に關係あるものは適宜採録した。

三、現代美術文獻目錄は東洋古美術關係を除き、明治大正以後の現代美術及び美術一般に關するものを輯めた。

四、西洋美術に關する文獻は便宜上現代美術文獻目錄中に西洋現代美術及其の他外國美術の二項を設けて採録した。

五、建築に關しては、本書本文の凡例に記した範圍に限定した。竣工建築物報道の記事は工事概要のみを記したるもの、或は寫眞のみを載せたるものは省略し、紹介批評の記事あるもののみを採録した。

六、物語作家及美術關係者の項は本年度中に歿した人々の記事に限つた。

七、現代美術文獻目錄に於て各項目内の配列は單行本にあつては書名による五十音順、定期刊行物所載文獻にあつては所載雜誌名による五十音順とした。同一雜誌の配列はその發行順である。但し展覽會批評及昭和十一年度物語作家評傳は雜誌別に據らずして題目別にまとめた。

八、本目錄に採録せる定期刊行物及新聞紙は左の通りである。

現代美術關係

アトリエ 浮世繪界 漆と工藝 畫說
改造 學校美術 現代美術 建築雜誌
建築世界 工藝ニュース 國華 國際建築
思想 新建築 茶わん 中央公論
圖畫と手工 帝國工藝 圖書館雜誌 塔影

南畫鑑賞 日本建築士 汎工藝 美術育
美術 美術街 美術研究 美術評論
美之國 文藝春秋 みづゑ

同新聞
大阪朝日 大阪毎日 京城日報 新愛知
中外商業 東京朝日 東京日日 福岡日日
報知 毎夕 都讀賣

古美術關係

アトリエ 以可留我 浮世繪界 漆と工藝
鳴台史報 瓜茄 畫說 建築雜誌
建築世界 工藝 考古學 考古學雜誌
考古學論叢 國華 古典研究 史苑
史淵 史蹟と古美術 史學研究 史學雜誌
史觀 史蹟と古美術 史蹟と美術 史蹟名勝天然紀念物
支那學 史林 宗教研究 書畫骨董雜誌
茶わん 神社協會雜誌 人類學雜誌 大日本窯業協會雜誌
東方學報 東洋學報 東洋史研究 東洋建築
東洋美術 南畫鑑賞 日本國寶全集 日本美術協會報告
俳句研究 汎工藝 美ビタカ 美之國
美術街 美術研究 滿蒙 燒もの趣味
寶雲 星岡 龍谷史境 林泉
夢殿 立正史學 歷史公論
歷史教育 歷史公論

目次

現代美術關係文獻 (定期刊行物所載)

論文及隨筆

總說 雜誌別五十音順 二二四

日本畫 雜誌別五十音順 二二四

洋畫 雜誌別五十音順 二二五

彫刻 雜誌別五十音順 二二五

工藝 雜誌別五十音順 二二五

建築 雜誌別五十音順 二二七

作家論 雜誌別五十音順 二二七

物故作家及美術關係者 人名別五十音順 二二二

時評 雜誌別五十音順 二二二

身邊雜記 雜誌別五十音順 二二三

明治大正以降美術 雜誌別五十音順 二三五

外國現代美術 雜誌別五十音順 二三六

繪畫 雜誌別五十音順 二二四

彫刻 雜誌別五十音順 二二五

工藝 雜誌別五十音順 二二五

建築 雜誌別五十音順 二二七

其他外國美術 雜誌別五十音順 二四〇

展覽會記事及批評

綜合展覽會 題目別五十音順 二四〇

昭和十二年度美術文獻目錄

日本畫展覽會 題目別五十音順 二四二

洋畫展覽會 雜誌別五十音順 二四六

彫刻展覽會 雜誌別五十音順 二四八

工藝展覽會 雜誌別五十音順 二四八

雜 雜誌別五十音順 二四九

行政及教育 雜誌別五十音順 二四九

藝術院及官展 雜誌別五十音順 二四九

行政 雜誌別五十音順 二五〇

教育 雜誌別五十音順 二五〇

現代美術關係單行圖書

總說 書名五十音順 二五三

日本畫 書名五十音順 二五三

洋畫 書名五十音順 二五三

彫刻 書名五十音順 二五三

建築 書名五十音順 二五四

工藝及圖案 書名五十音順 二五四

教育 書名五十音順 二五四

外國美術 書名五十音順 二五五

雜 書名五十音順 二五五

補遺 書名五十音順 二五五

古美術關係文獻 (定期刊行物所載)

總說・綜錄 二五六

繪畫 二五六

彫刻 二六〇

建築及庭園 二六二

工藝 二六四

書蹟文書 二六六

雜 二六七

其他 二六七

考古學・金石關係
宗教及歷史關係

古美術關係單行圖書

總說綜錄 二七〇

繪畫 二七〇

彫刻 二七一

建築及庭園 二七一

工藝 二七一

書蹟 二七二

雜 二七二

考古學歷史關係 二七二

現代美術關係文獻(定期刊行物所載)

論文及隨筆

總説

造型美術一新講座三—七 龍村 謙

アトリエ 一四〇—
三—五八

二つの造型 村田 良策

同 同 一四〇—
一四〇—

繪畫の描寫 關 賴三

同 同 同 一四〇—
一四〇—

現代畫壇に對する希望と豫想 運實 重康

同 同 同 一四〇—
一四〇—

生きることに描くこと 中井 正一

同 同 同 一四〇—
一四〇—

哲人に藝術なし 森田龜之助

同 同 同 一四〇—
一四〇—

豫言にならない豫言 山際 靖

同 同 同 一四〇—
一四〇—

傳統と進歩 中井 正一

同 同 同 一四〇—
一四〇—

傳統と形式 土方 定一

同 同 同 一四〇—
一四〇—

藝術の商品性について 荒城 季夫

同 同 同 一四〇—
一四〇—

繪畫と科學 植村鷹千代

同 同 同 一四〇—
一四〇—

純美術・商業美術・商業主義 田村宗太郎

同 同 同 一四〇—
一四〇—

「繪畫は何處へ行く」座談會 荒城 季夫

同 同 同 一四〇—
一四〇—

戰爭と美術 福澤 一郎

同 同 同 一四〇—
一四〇—

戰爭と美術 福澤 一郎

同 同 同 一四〇—
一四〇—

戰爭と美術 福澤 一郎

同 同 同 一四〇—
一四〇—

日本畫

繪畫の近代性と社會性

鈴木 武久 美之國 一三〇—

傳統と因習

中村 岳陵 同 同

批評の批評

落合 則風 同 同

態度

藤島 武二 同 同

國家的美術奨励の本道

森田龜之助 同 同

藝術としての「日本的なること」

小笠原秀實 同 同

キムルベの美學論から—

加藤 信也 同 同

靜思庵畫論の(一)

同 同 同

繪畫の貧困

横山 大觀 同 同

美術批評の貧困

柳 亮 同 同

日本精神と新興藝術

山崎 省三 同 同

新時代の繪畫と其將來

荒城 季夫 同 同

繪畫に於ける時代性と社會性

飛田周山等 同 同

批評の標準

摩壽意善郎 同 同

新造形哲學 上下

小笠原秀實 同 同

樣式と形式の問題

成田 重郎 同 同

柳 亮

同 同 同

藍調を聴く(一) 小林古徑

廣瀬 慈六 アトリエ 一四〇—

(二) 鍋木清方

山口 蓬春 同 同

(三) 小杉放庵

横川毅一郎 同 同

(四) 川端龍子

吉岡 堅二 同 同

日本畫の傳統と洋風傾向

下店 靜市 同 同

日本畫に表れた日本精神

赤津 隆助 同 同

行潦畫趣

金井 紫雲 現代美術 四〇三

「矢表」に描ける武具の考證

松岡 映丘 同 同

餘技畫の妙趣

正木 直彦 同 同

日本畫私觀

朝倉 文夫 同 同

ブルー・タウト氏の日本 岡田 俊一 塔影 一三〇—

畫觀 吉田 秋光 同 同

古典への探究—新人の考ふべき問題 金井 紫雲 同 同

藝術に現れた太陽 西村 五雲 同 同

寫生に就て 山口 蓬春 同 同

寫真と繪畫 森 白市 同 同

花鳥畫その他 福田豊四郎 同 同

新日本畫の動向に就て 杉山 寧 同 同

新しい繪の立場 松岡 映丘 同 同

日本畫に於ける戰爭畫 高木保之助 同 同

畫房斷感 内田清之助 同 同

畫材としての外濠の鳥 島本樂之軒 同 同

古南畫人と寫生 近藤浩一路 同 同

寫生、寫實、寫意その他 川崎 小虎 同 同

寫生法の知識 今泉 篤男 同 同

現代日本畫に於ける二つの病弊 牧野 虎雄 同 同

南畫一夕談 伊藤 一廉 同 同

南畫への關心に就て 米内山庸夫 同 同

支那畫と支那の自然 上下 中井宗太郎 同 同

日本畫の將來 須田國太郎 同 同

繪畫技術の衰退

今泉 篤男 同 同

日本畫の將來に就て一

水澤 澄夫 同 同

日本古典への關心

佐波 市 美術 一三〇—

日本畫の平面性

金原 省吾 同 同

白描の話

安田 靱彦 美術街 四〇三

水明會第一回座談會

荒木 十畝 同 同

勞團氣の藝術

伊東 深水 同 同

古徑の「果子圖」

藤森 順三 美術評論 六〇一

私の寫生

與村 土牛 同 同

「薄紅梅」

佐藤 一英 同 同

龍子の「潮騒」

同 同 同

九阜會座談會

同 同 同

曉眼に映ずる日本

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

亂理不忘治録―丙子傑作
力作集

神崎 憲一
美之國
一三ノ一

三輪 晃勢
同
一三ノ七

青木 大乗
同
同

山下新太郎氏藝談
野原 隆平
一四ノ六

松本 弘二
アトリエ
一四ノ六

小室 翠雲
同
同

超現實主義に對する斷評
佐竹 香
同

高間 徳七
塔影
一四ノ八

福田豊四郎
同
同

最近の制作と日本畫
高間 徳七
同

大隈畫を描いた時の話―
ギョル氏の事
島村三三雄
美術
一二ノ三

川端 龍子
東朝
一・二三―
二六

繪畫の保存に就いて
山下 登
同

石井 鶴三
南畫鑑賞
一二ノ五

川合玉堂談
讀賣
四・二〇―
二三

寫生に就いて
高村光太郎
同

美の民藝
柳宗悦
アトリエ
一四ノ三

橋本 關雪
大毎
七・二一―
八・二二

寫生と寫意の對格
海老原喜之助
同

民藝趣味の誘惑
谷口 吉郎
同

堂本 印象
同
一七

寫意の問題より
長谷川三郎
同

有閑日本工藝と迷路を出
る―巴里萬國博の出品を
觀る
柳 亮
同

洋 畫

繪畫の方向
相良 徳三
アトリエ
一四ノ一

抽象繪畫について
長谷川三郎
同

産業工藝の指導に就て
杉田 禾堂
同

前衛繪畫論
福澤 一郎
同

造型性に就て
福澤 一郎
同

産業工藝と工藝指導所
山脇 友武
同

超現實主義の現代的意義
瀧口 修造
同

制作態度
安井會太郎
同

新人に應ぐ明日の工藝
山脇 洋二
同

前衛繪畫批判―批評家の
立場から
同
同

前衛繪畫と群衆
安井會太郎
同

工藝の新しい方向を語る
森田 龍之助
同

アブストラクト・アート
植村鷹千代
同

超現實主義に及ぼす日本
の特殊性
須田國太郎
同

工藝材料としての金屬に
就て
内藤 春治
同

現實作家として
同
同

前衛美術と東洋の古典
長谷川三郎
同

展と國粹觀念
吉野 富雄
同

JANについて
荒木 剛
同

「表現」の立場
今井 滋
同

内外に於ける漆利用の發
展と國粹觀念
西村 要亮
同

心構へ(ANIMA)
有海 千尋
同

畫面の叛逆
小野 忠重
同

日本輸出工藝品市俄古陳
列會に於ける漆器に對す
る入場者の態度及批評
大熊 喜邦
同

〇(雕塑)
小林 孝行
同

水繪隨想
中西 利雄
同

新議事堂便殿を永久に飾
る漆工藝
和田 三造
同

走り書(飾畫)
齋藤 長三
同

評と超現實主義
福澤 一郎
同

我美術工藝品輸出の現狀
中島 牧太
同

前衛繪畫の一考察(エ
コールド・東京)
末永 胤生
同

洋畫寫眞の深書として
北脇 昇
同

服裝美術界の展望
中島 利彦
同

「動向」の「東京報告
繪畫展」に就て
矢崎 博信
同

百選會春の流行新主張
大田 廣光
同

工藝美術家の進路
高村 豊周
同

前衛繪畫に對する考へ
(新進型)
島津 純一
同

現在傳としての前
衛繪畫
米倉 壽仁
同

工藝美術家の進路
高村 豊周
同

花籠の話	飯塚垣拜齋	現代美術	四ノ二	新境目指す地方工藝界くらべ四―輸出漆器の巻・静岡と和歌山	工藝ニュース	六ノ四	照明器具制作工業―材料と企業形態	工藝ニュース	六ノ九
表装美術家の氣焔	萩原 康範	同	四ノ三	商工展審査偶感	同	六ノ五	工藝研究座談會記九―市販の卓上電氣スタンドを語る	同	同
服飾流行と美術と兩者の結託を望む	中島 牧太	同	同	本所研究の地方工業化―セルロイド試作品	同	同	工藝市場調査―卓上電氣スタンド	同	同
家具特報(附圖)	建築世界	三ノ一	同	本所研究編組品の「編法」に就て一、二	同	六ノ五、七	新境目指す地方工藝界くらべ―移出家具の巻・徳島と長野縣	同	同
白木屋家具展	三越新設計家具展	同	同	本國産商會	同	同	本所研究輸出工藝品の試作	同	六ノ一〇
三越新設計家具展	松屋新設計家具展	同	同	植物纖維編組製品業・日本國産商會	同	同	特輯輸出工藝品圖錄	同	同
松坂屋國風家具展	工藝の頁	同	同	地方技術官の使命	國井喜太郎	六ノ六	彩漆の顯色及耐光性試験	同	六ノ一一
新試作の解體式家具一、二	鈴木 道次	三ノ四―一二	同	商工省主催第三回木・漆・金工關係技術官會議記事	同	同	第二回全國圖案關係技術官會議	同	同
輸出向漆器案地の研究―反狂防止に關する考察一、二、三	工藝ニュース	六ノ一、二	同	工藝研究座談會記六、七―山崎氏將來の歐米雜貨工藝品を圖みて一、二	同	六ノ六、七	工藝市場調査・喫煙具セツト及灰皿	同	同
金屬着色法一―六	同	六ノ一―六	同	商工展出品本所試作品把手、摘み、引手に就て	同	六ノ六	マテリアルセクション、夜光塗料	同	同
工藝研究座談會記・佛蘭西商品金屬製帽子掛に就て	同	六ノ一	同	本所研究の地方工業化二―密木應用小木工藝品	同	同	地方工藝界くらべ―水晶と珊瑚細工の巻・山梨縣と高知縣	同	同
新商品に就いて聽く二三―小型ヴァニチー・ケース	同	同	同	箱子に代る透明性ガラス	同	同	新試作の解體式家具	同	六ノ一二
新境目指す地方工藝界くらべ(一)―筆筒・川越と加茂	同	同	同	新境目指す地方工藝界くらべ六―人造漆器標地の巻・若松と名古屋	同	同	山毛櫨材の着色及塗裝	同	同
内外工藝産業情報	同	六ノ一―三	同	本所研究の地方工業化三―牙應用新種工藝品、四―水晶、瑪瑙、其他貴重石工藝品	同	六ノ七	新境目指す地方工藝界くらべ―人形の巻・福岡縣と埼玉縣	同	同
日本輸出工藝聯合會ニュース	同	六ノ一―三	同	新境目指す地方工藝界くらべ七―和紙加工品の巻・高知と鳥取	同	同	型而工房第二回標準家具	同	同
米國に於ける日本の漆器	山崎覺太郎	六ノ二	同	シカゴ展外人批評に就て	國井喜太郎	六ノ八	昭和十二年に於ける工藝界の使命	宮下 孝雄	一三ノ四
工藝研究座談會記二―模造品を中心	同	同	同	日本輸出工藝品市俄古陳列會の反響及出品に對する批評	同	同	工藝時報	同	二ノ一―三
新商品に就いて聽く二四―電氣フツド・ミキサー	同	同	同	厨房に光る耐蝕性合金ステンレス鋼とモネルメタル	同	同	巴里博日本出品作品第一報	同	一一ノ二
新境目指す地方工藝界くらべ二―編組の巻・岡山と青森	同	同	同	工藝研究座談會記 八―調理用電器を圖みて	同	同	巴里博日本出品作品第二報	同	一一ノ三
パリ博の我が出陳物	國井喜太郎	六ノ三	同	工藝商品市場調査―調理用鍋及湯沸器	同	同	帝國工藝會座談會(十二年二月九日)	同	同
本所試作歐米向きの新編組工藝品	同	同	同	新境目指す地方工藝界くらべ八―新堆朱の巻・宮城縣と新潟縣	同	同	帝國工藝會座談會 第二報	同	一一ノ四
工藝研究座談會記三―引手金具類を中心に	同	同	同	漆器に於ける朱顏料の黒變に就て	同	六ノ九	流行の經濟	宮下 孝雄	同
巴里萬國博日本出品物圖譜	同	同	同	東北・北海道巡回工藝展覽會記	同	同	我國貿易の前途に就て	木村増太郎	一一ノ六
新境目指す地方工藝界くらべ三―木工土產品の巻箱根と宮島	同	同	同		同	同	飛彈のかぎづるに就て	久保太四郎	同
工藝研究座談會記四・五―工藝關係參考外國雜誌あれやこれや	同	六ノ四、五	同		同	同	近代工藝所感	團 伊能	一一ノ七
							裝飾に於ける硝子	中田 滿雄	同
							寫真技術應用の室内裝飾品		一一ノ八

大阪、紐育、倫敦	中山 克己	建築世界	三一〇二	ニュートキーヨ(大倉土木株式會社設計)		取手麗馬場(堀口捨已設計)	
大阪中央放送局々舎工事概要	同	同	同	前進座演劇映畫研究所及共同住宅(關師嘉彦設計)		東京市澁谷區役所(東京市土木局建築課設計)	
日本新建築(圖譜)	同	同	三一〇三	マスキン菓子店(川喜田煉七郎設計)		日本赤十字社病院(木子七郎設計)	
取手麗馬場(堀口捨已設計)	同	同	同	廣口邸(明石信造設計)		湘南の耳邸(山脇巖設計)	
大丸神戸店(村野建築事務所設計)	同	同	同	某氏邸(大竹工務店設計施工)		小住宅・村田邸(堀山喜久夫設計)	
澁谷區役所(東京市土木局建築課設計)	同	同	同	前進座側の建設意圖と實際 梅田行一	建築世界	岩垣氏の週末別荘(岩崎健生設計)	國際建築
柳橋藝妓屋組合事務所(前田利八設計)	同	同	同	新建築圖譜	三一〇九	麗馬場の建築	一三〇二
花田邸(女良工務店設計施工)	同	同	同	大連新驛舎(滿鐵地方部工事課設計)		板垣氏の「建築雜記一九三六年」を讀む	同
新建築圖譜	同	同	三一〇四	日産館(中央土木株式會社設計)		圖録	一三〇三
日本神學校(長谷部竹腰建築事務所設計)	同	同	同	國際劇場(成松建築事務所設計)		大阪中央放送局(渡邊仁建築事務所設計)	
グリル明月(土岐達人設計)	同	同	同	茶房オリムピア(山崎隆設計)		電磁工業研究所(中山克己設計)	
小國民道場(東京府總務部、繕課設計)	同	同	同	小林邸(山瀬敬象建築事務所設計)		勝本邸の増築(山脇巖建築事務所設計)	
某氏邸(石間桂治設計)	同	同	同	K博士邸(藤岡道夫設計)		大阪放送會館の建築	同
水の江瀧子邸(網戸武夫設計)	同	同	同	建築描法考五―佐々木岩 今井 兼次	同	最近の手記から	同
建築と工藝	野村 茂治	同	同	新建築圖譜		圖録	一三〇四
日本神學校建築工事概要	同	同	同	レストランニエワン(大林組設計)		K氏住宅(谷口吉郎設計)	
皇太子殿下誕生奉祝記念小國民道場工事概要	同	同	同	東京市瑞江雜儀所(東京市土木局建築課設計)		伊藤邸(佐藤武夫設計)	
新建築圖譜	同	同	三一〇五	富永邸(千太郎一設計)		グリル明月(土岐達人設計)	
牛込尋常小學校(東京市土木局建築課設計)	同	同	同	近藤邸(山口芳泰設計)		大丸神戸店(村野建築事務所設計)	
龜町消防署(警視廳營繕係設計)	同	同	同	東京市瑞江雜儀所設計に 秋元 惺明	同	水の江瀧子邸(網戸武夫設計)	
グリル川崎(宇野護治設計)	同	同	同	就て	三一〇六	G.H. Meirein で特に留 土岐 達人	同
大阪電氣局電氣科學館(大阪市經理部營繕課設計)	同	同	同	新建築圖譜		圖録	一三〇五
新建築圖譜	同	同	三一〇六	北海道登別温泉大浴場(營繕課一設計)		慶應義塾幼稚舎(谷口吉郎、曾福中條建築事務所設計)	
慶應義塾幼稚舎(谷口吉郎、曾福中條建築事務所設計)	同	同	同	永田町小學校(東京市土木局建築課設計)		角谷邸(土浦龜城設計)	
堺市立水族館(長谷部竹腰建築事務所設計)	同	同	同	東京瓦斯株式會社荒川營業所(佐藤功一建築事務所設計)		作品を捧げる	
日婦上人報恩記念講堂(松岡誠一設計)	同	同	同	鷺塚邸(營繕課一設計)		幼稚舎建築の特異性	同
内藤邸(堀口捨已設計)	同	同	同	松平邸(石間桂治設計)		幼稚舎新校舎について	同
杵屋別邸(吉田五十八設計)	同	同	同	登別温泉大浴場の構造	酒井 勉	映畫「日本の建築」	同
名古屋汎太平洋平和博覽會	同	同	同	衛星都市計畫試案	早大學生	圖録	同
新建築圖譜	同	同	三一〇七	新建築圖譜	同	内藤邸(堀口捨已設計)	一三〇六
宇部市民館(村野藤吾建築事務所設計)	同	同	同	東京通信病院(逓信省經理局營繕課設計)		M邸(前川國男設計)	
海軍館(池田忠治設計)	同	同	同	片山病院(渡邊靜設計)		加藤邸(菅原榮藏)	
藏前尋常小學校(東京市土木局建築課設計)	同	同	同	宮口邸(土浦龜城建築事務所設計)		S邸(山脇巖建築事務所設計)	
T男爵邸(竹田芳太郎設計)	同	同	同	某氏邸(大澤一郎建築事務所設計)		分譲地の一區劃を占めて	同
小松家(石間桂治設計)	同	同	同	總目次	同	都市計畫に關する同覽討	同
昭和十二年度各學校卒業計畫	同	同	同	東京オリムピック競技場 早大學生	國際建築	論	同
新建築圖譜	同	同	三一〇八	建築設計計畫試案	同	「國際建築家聯盟」に就て	同

圖録	渡邊翁記念會館（村野建築事務所設計）	國際建築	一三〇七	大阪中央放送局（渡邊仁設計）	新建築	一三〇一	慶應義塾幼稚舎	同	同
ニュートキョー（大倉土木株式會社設計）	同	同	同	日本赤十字社病院外來診療所（木子七郎設計）	同	同	名古屋驛	同	同
ビヤホール・ニュートキョー	清水 一	同	同	秋田氏邸（久米權九郎設計）	同	同	大阪市立明治幼稚園	同	同
圖録	前進座演劇映画研究所（國師嘉彦設計）	同	一三〇八	新建築詳細圖譜	同	同	宇部市民館（村野藤吾設計）	同	同
濱口別邸（明石信道設計）	同	同	同	秋田邸	同	同	國民體育館（大藏省營繕管財局設計）	同	同
前進座演劇映画研究所設	國師 嘉彦	同	同	名古屋欄光ホテル（山下壽郎設計）	同	一三〇二	S氏住宅（山脇巖設計）	同	同
計雜記	同	同	同	田宮氏邸（土浦龜城設計）	同	同	K邸（鈴木純設計）	同	同
助川の工場地帯	板垣 慶穂	同	同	日本建築の様式に關する座談會を敢す	同	同	新建築詳細圖譜	同	同
圖録	同	同	一三〇九	小田忠氏のアトリエ	同	同	S氏住宅	同	同
別荘「白柱居」（藏田周忠設計）	同	同	同	答へ（學會の座談會に對する訴へに對する）	同	同	ニュートキョー（大倉土木株式會社設計）	同	同
佐藤別邸（前川國男設計）	同	同	同	ルネッサンスの咀嚼	同	同	大浦氏邸（池田總一郎設計）	同	同
東京女子大學追分寮（石原憲治設計）	同	同	同	新建築詳細圖譜	同	同	前進座演劇映画研究所及共同住宅（國師嘉彦設計）	同	同
比叡山ホテル（村野藤吾設計）	同	同	同	大阪中央放送局	同	同	國際劇場（成松建築事務所設計）	同	同
小林邸（山口敎象設計）	同	同	同	小田氏アトリエ	同	同	新建築詳細圖譜	同	同
箱根仙石原白柱居	藏田 周忠	同	同	大丸神戸店（村野藤吾設計）	同	一三〇三	大浦邸	同	同
追分寮のことゝも	石原 憲治	同	同	某通信機製造工場計畫	同	同	大阪軍人會館（第四師團經理部工務科設計）	同	同
感想	山口 敎象	同	同	新名古屋驛（鐵道省工務局建築課設計）	同	同	金蘭會高等女學校（大林組設計）	同	同
圖録	同	同	一三〇二	水の江瀧子邸（綱戸武夫設計）	同	同	蘆屋N邸茶室（安井武夫設計）	同	同
白蘭莊アパートメント（鷺塚誠一設計）	同	同	同	新建築詳細圖譜	同	同	濱口氏別邸（明石信道設計）	同	同
最小限實驗住宅（鷺塚誠一設計）	同	同	同	水の江邸	同	同	小林氏邸（山口敎象設計）	同	同
平岡達郎（三浦元秀設計）	三浦 元秀	同	同	大阪市電氣科學館及グラネタリウム（大阪市經理部營繕課設計）	同	一三〇四	昭和製鋼所事務所本館（懸賞設計當選案（前川國男設計）	同	同
白蘭莊アパート	鷺塚 誠一	同	同	K氏の住宅（谷口吉郎設計）	同	同	新建築詳細圖譜	同	同
最小限實驗住宅	同	同	同	伊藤氏邸（佐藤武夫設計）	同	同	N邸茶室	同	同
東京逓信病院（圖録）（逓信省經理局營繕課設計）	同	同	一三〇二	今井猛夫氏のアトリエ（今井猛雄設計）	同	同	小林邸	同	同
一九三七年を顧みて	市浦 健	同	同	新建築圖譜	同	同	廣口邸	同	同
建國記念館競技設計に就ての所感	前川 國男	同	同	大阪電氣科學館	同	同	京都電燈株式會社（武田五一設計）	同	同
競技設計・建國記念館座落案と説明書	同	同	同	伊藤氏邸	同	一三〇五	宇治電ビルディング（長谷部竹腰建築事務所設計）	同	同
衛星都市計劃展覽會報告	早大學生	同	同	慶應義塾幼稚舎（谷口吉郎設計）	同	同	松竹劇場附屬食堂（白波瀬工務店設計）	同	同
國際建築第十三卷總目次	板垣 慶穂	同	同	大阪市立明治幼稚園（大阪市臨時校園建設所設計）	同	同	箱根仙石原「白柱居」（藏田周忠設計）	同	同
階段	同	同	同	彫刻家大嶽茂樹氏のアトリエ（安田清設計）	同	同	同	同	同
柱	思想	同	一八二	新建築詳細圖譜	同	同	同	同	同
窓と壁	同	同	一八四	同	同	同	同	同	同
屋根	同	同	一八六	同	同	同	同	同	同
同	同	同	一八七	同	同	同	同	同	同

昭和十二年度美術文獻目錄

久氏輕井澤山莊(村田政真設計)	新建築	一三〇/九	假議事堂時代 諸雜誌に現はれたる議院 建築に關する文獻	堀越 三郎	日本建築士	二〇/一	建築士に關する歐米の資 料 雜誌「日本建築士」に現は れたる建築士の職能に關 する文獻	堀越三郎編	日本建築士	二一/一
新建築詳細圖譜	同	同	三井銀行大阪支店(會福 中條建築事務所設計)	同	同	二〇/三	共同ビルダング株式會社 (會福中條建築事務所設計)	同	同	同
小林邸	同	同	旅泊餘滴七十一	關根要太郎	同	三〇/三、四、六	日本住宅と近代建築 Hasegawa 支樹京二譯	同	同	同
箱根「白柱所」	同	一三〇/一〇	建築制作小欄	同	同	二〇/三	建築制作小欄	同	同	同
日産館(中央土木株式會 社設計)	同	同	關西日佛學館(木子七郎設計)	同	同	二〇/四	秋田氏邸(久米權九郎設計)	同	同	同
野村生命京都支店(安井 武雄設計)	同	同	萬平ホテル(久米權九郎設計)	同	同	二〇/四	角谷氏邸(土浦龜城設計)	同	同	同
岡氏邸(レノモンド建築 事務所設計)	同	同	株式會社不動貯金銀行函 館支店(關根要太郎設計)	同	同	二〇/四	A氏邸(大野功二設計)	同	同	同
前田氏邸(池田總一郎設計)	同	同	建築制作小欄	同	同	二〇/五	慶應義塾幼稚舎(谷口吉郎、會福中條建築事務所設計)	同	同	二一/四
永田町小學校(東京市建 築課設計)	同	同	S氏邸(藏田周忠設計)	同	同	二〇/五	不動貯金銀行新宿支店 (關根要太郎設計)	同	同	同
新建築詳細圖譜	同	同	村尾武夫氏邸(渡邊靜設計)	同	同	二〇/五	野田神社能樂臺(小林福 太郎渡邊靜設計)	同	同	同
野村生命京都支店	同	同	三井銀行大阪支店(會福中條建築事務所設計)	同	同	二〇/五	宇治電ビルダング(長谷部竹腰建築事務所設計)	同	同	同
京都電燈株式會社	同	同	吉田時計店日野工場(菅原榮藏設計)	同	同	二〇/五	小林氏邸(山口象設計)	同	同	同
大阪軍人會館	同	同	M氏邸(藏田周忠設計)	同	同	二〇/五	府立第六中學校島田園寮(伊藤文四郎設計)	同	同	同
永田町小學校	同	同	新宿大東京(俣石政太郎設計)	同	同	二〇/五	同寮長宅	同	同	同
瑞江雄儀所(東京市建築 課設計)	同	一三〇/一	村尾良一氏邸(渡邊靜設計)	同	同	二〇/五	W氏邸(古橋柳太郎設計)	同	同	二一/五
岩出邸(土浦龜城設計)	同	同	磯村產業株式會社(吉武長一建築事務所設計)	同	同	二〇/五	星丘氏邸(今北乙吉設計)	同	同	同
京都西陣着尺織物工業組 合事務所(大林組設計)	同	同	名古屋觀光ホテル(山下壽郎設計)	同	同	二〇/五	G・C氏別邸(同)	同	同	同
明治製菓特別牛乳牧場 (志村太七設計)	同	同	田宮氏邸(土浦龜城設計)	同	同	二〇/五	滿洲國電信電話會社々宅 (伊藤文四郎設計)	同	同	同
牛乳搾取場と處理場	同	同	野田神社改築能樂臺(小林福太郎、渡邊靜設計)	同	同	二〇/五	慶松氏邸(木下唯親設計)	同	同	同
東洋牛乳株式會社(松村 組設計)	同	同	大丸神戸店(村野藤吾設計)	同	同	二〇/五	M氏邸(松本與作設計)	同	同	同
衛生都市計畫展覽會報告	早大學生	同	新井濱住友クラブ(長谷部竹腰建築事務所設計)	同	同	二〇/五	紫誠莊(守屋政雄設計)	同	同	同
新建築詳細圖譜	同	同	建築士法問題の反映	同	同	二〇/五	M氏アトリエ(岡田捷五郎設計)	同	同	同
瑞江雄儀所	同	同	建築制作小欄	同	同	二〇/五	I氏邸(西村好時設計)	同	同	同
新建築第十三卷總目次	同	一三〇/一二	日本赤十字社外來診療所(木子七郎設計)	同	同	二〇/五	R・H氏邸(アルヌルフ・ メツォールド設計)	同	同	同
大阪朝日新聞社名古屋支 社(石川純一郎設計)	同	同	三井俱樂部ハウス(久米權九郎設計)	同	同	二〇/五	R・H氏別邸(同)	同	同	同
某氏の住宅(芳田哲郎設計)	同	同	日本神戶學校(長谷部竹腰建築事務所設計)	同	同	二〇/五	村岡氏邸(大澤源之助設計)	同	同	同
S氏邸(山脇嚴設計)	同	同	堺市立水族館(長谷部竹腰建築事務所設計)	同	同	二〇/五	木村氏邸(佐々木孝之助 設計)	同	同	同
日本萬國博覽會建國記念 館設計競技懸賞選圖案	同	同	高千穂ビルダング(岡田捷五郎設計)	同	同	二〇/五	好井氏邸(同)	同	同	同
帝國議會議事堂(大藏省 營繕管財局設計)	同	同	F氏邸(渡邊仁設計)	同	同	二〇/五	某邸(志村太七設計)	同	同	同
建築時言	同	同	村尾良一氏邸(渡邊靜設計)	同	同	二〇/五	宗源策氏邸(渡邊虎一設計)	同	同	同
	日本建築士	二〇/一	伊藤邸(佐藤武夫設計)	同	同	二〇/五				
	同	三〇/一、四、五、 三〇/二、三、六	帝國議會に於ける建築士 法案の經過	黒崎幹男編	同	二〇/五				
	同	同	建築士法案の變遷	石原信之編	同	二〇/五				

今日の諸問題	佐波 市	アトリエ	一四ノ三	大日美術院出現の必然性	大田 廣光	美術街	四ノ二	本年の回顧と展望	佐波 市	みづゑ	三九四
在野洋畫五團體懇話會	木村 莊八	同	一四ノ四	藝術運動の方向	佐藤 一英	美術評論	六ノ五	○ 動搖する獨立美術協會	佐藤 健	報知	二九一二
自由美術家協會とは何か	植村廣千代	同	一四ノ八	美術界の最新動向	荒城 季夫	美之國	一三ノ一	ベルヌ條約と日本の立場	佐藤 健	東朝	三三二二
戰時態勢下に於ける美術	造型文化協會員	同	一四ノ一〇	本年美術界豫斷の一片	田澤 田軒	同	同	國際會議延期の理由	讀 賣	五・五一八	
文展と一水會	石井 柏亭	同	同	昭和十一年に活躍した人	吉副 頼三	同	同	解嘲の辭(藤田畫伯の國際畫について)	柳澤 健	讀 賣	五・五一八
帝院改組後の畫壇地圖	豊田 豊	現代美術	四ノ一、二	インド壁畫苦行五年	野生司香雪	同	同	國家と美術	伊原宇三郎	東日	七九・一〇
日本洋畫壇の現勢	佐波 市	同	三・五	暗轉期に進展の好機	石川 昂水	同	一三ノ二	私は何故獨立美術を脱退したか	里見 勝藏	大毎	八三・一四
工藝界の現狀	大田 廣光	同	六ノ一	美術界の明朗化	川路 柳虹	同	同	「獨立」分裂問題	同	報知	八三・一二
故寺崎廣業畫伯肖像建設	田澤 田軒	同	四ノ三	國寶の文化的意義	柳 亮	同	同	美術團體の分解作用	荒城 季夫	報知	八三・一二
日本工作文化聯盟の誕生	工藝ニュース	同	四ノ一	擴大展會について	兒玉 希望	同	同	戰争と文化擁護	一氏 義良	東朝	八三・二四
「日本工作文化聯盟」批判	河丸 莊助	國際建築	一三ノ五	文化勳章令公布と當局の責務	石川 昂水	同	一三ノ三	本年の美術界	同	同	〇・六六
「國際建築家聯盟」に就いて	小池 新二	同	一三ノ六	自然の歸趨に従へ	石川 幸三郎	同	一三ノ四	戰争と畫家	工藤直太郎	中外商業	三三・〇二
獨逸國寶展覽會に就て	ハンス・モーレ	同	同	獨立展受賞者	同	同	同		同	同	三三・一五
二つの抗議!帝國ホテル及巴里博出品	小池新二譯	新建築	一三ノ二	時事小言	石川 昂水	同	一三ノ五				
人形蒐集二十年	西澤 笛猷	塔 影	一三ノ三	美術饞舌	今井繁三郎	同	同				
美術家と文化勳章	黒田 鶴心	同	一三ノ五	美術とフアッシュヨ	林 達郎	同	一三ノ七	無題	太田 聰雨	アトリエ	一四ノ一
戊辰會振起の意味	神崎 憲一	同	同	國際主義と日本主義	摩壽意善郎	同	同	富士山	田口 省吾	同	同
東京帝室博物館の藤原時代風俗畫に就て	吉村 忠夫	同	一三ノ六	日本美術院に望む	廣瀬 蕪六	同	一三ノ八	お正月	林 重義	同	同
事變と美術雜誌	内ヶ崎作三郎談	同	一三ノ一二	果してシュール派の勝利か?—獨立展解體の危機	尾川 多計	同	一三ノ九	枯樹春草行	岡本 一平	同	一四ノ二
美術工藝家の獨立を望む	田澤 田軒	汎工藝	一五ノ一	新文展彫刻部審査員	大藏 雄夫	同	同	卓によつて思ふ	里見 勝藏	同	同
工藝團體の既往と現在	柴崎 風卿	同	一五ノ四、六、七	大藏畫伯に呈す—美術學校大改革を前に	廣瀬 蕪六	同	同	大阪の雰圍氣	伊藤 繼郎	同	一四ノ三
全日本工藝作家聯盟の結成を要望す	宮澤 均	同	一五ノ五	幾つかの問題	加藤 信也	同	同	オランダフランマンの古畫について	伊原宇三郎	同	一四ノ四
印度鹿野苑初轉法輪寺の壁畫制作に就いて	野生司香雪	美術	一五ノ三	獨立協會騒動	鍋木 清方	同	一三ノ一〇	ハルビン素描	佐藤 敬	同	一四ノ九
美術家の政治的行動	齋藤 與里	同	一五ノ五	戰時に開かれる新文展	石井 柏亭	同	同	神人境	野生司香雪	改造	一九ノ四
オリムピック藝術競技の改革	中島 健三	同	一五ノ七	美術季雜誌	笹川巴流夫	同	同	上海戰線スケッチ	清水 登之	同	一九ノ五
今後の美術	同	同	一五ノ九	青年日本畫家の横斷的聯結を提唱する	同	同	同	早春隨想	橋本 關雪	同	同
美術漫語	同	同	同	畫壇回顧一年	荒城 季夫	同	一三ノ一二	酒訓	堅山 南風	現代美術	四ノ三
偶感	朝倉 文夫	同	同	昭和十二年の美術界に就いて	田澤 田軒	同	同	牧野虎雄隨筆集	牧野 虎雄	同	同
將來の彫刻	藤島 武二	同	同	本年度の前衛畫壇	福澤 一郎	同	同	生活隨想	鍋木 清方	同	同
次の時代	雨田 光平	同	同	今年の彫刻ラインから	大藏 雄夫	同	同	れにんぐらあどの朝	今井 兼次	建築世界	三ノ五
美術に於ける今後の問題	中山 巍	同	同	今年の工藝美術界	大島 隆一	同	同	ヘルシキの午後六時二十分	同	同	三ノ六
入念なメチエを	荒城 季夫	同	同	第一回佐分賞について	宮田 重雄	同	同	セヴィラ旅記	同	同	三ノ八
	佐波 市	同	同	美術時評	荒城 季夫	同	三九一	首夏の京洛より	堂本 印象	中央公論	五二ノ七

身邊雜記

昭和十二年度美術文獻目錄

美はしの蓬萊島	中川 一政	中央公論	五二ノ九	山莊漫筆	島田 墨仙	塔影	一三ノ一〇	今井橋の富士	鍋木 清方	二三四
新江東園説	鍋木 清方	同	五二ノ一〇	釣を樂しむ	伊東 深水	同	同	ベルシャ猫	山口 蓬春	
餘技の日本畫	川崎 克	塔影	一三ノ一	支那斷片	小杉放庵談	同	一三ノ一	島の櫻	伊東 深水	美術評論 六ノ五
日本の樂しみ	北村 西望	同	同	好きなこと二三	川合玉堂談	同	同	スケッチに添へて		
私の日本畫	建島 大夢	同	同	飛彈の竹籠その他	長野 草風	同	同	橋本はん	上村 松園	
日本畫を描く	藤井 浩祐	同	同	本音を聞く	大智 勝彌	同	一三ノ一二	寫生寸感	堅山 南風	
日本畫のこと	富本 憲吉	同	同	若い人達の仕事	廣島 晃甫	同	同	プログラムは句ふ・其他	玉村善之助	美之國 一三ノ二
新春雜感	溝口貞次郎	同	同	断想	中山 巍	同	同	早春の花と藝術	金井 紫雲	同
餘技三昧録	齋藤 素嚴	同	一三ノ三	長尾時に拜旭の記	小室 翠雲	同	六ノ二	繪畫家生活	鍋木 清方	同
熱河行を前にして	川端 龍子	同	一三ノ四	戰橋	木村 莊八	同	六ノ八	飽後味を思ふ	津田 信夫	同
野に住みて	堅山 南風	同	同	北滿の旅にて	野長瀬晩花	同	同	割切れない數	渡邊 義知	一三ノ三
餘技漫語	柚木 久太	同	同	奥ひの追憶	猪熊弦一郎	同	同	ともだちの話	鍋木 清方	一三ノ五
畫房閑話	山村 耕花	同	一三ノ五	釣魚	野間 仁根	同	同	旅途漫話	長谷川春子	一三ノ六
日本畫を描くの辯	中川 紀元	同	一三ノ六	鰻栗つくり	曾宮 一念	同	同	光瑤君と私	黒田重太郎	一三ノ七
洋蘭を描く	川島退一郎	同	同	利根川	酒井 三良	同	同	藝苑佳會	鍋木 清方	一三ノ八
花の寫生	辻 永	同	一三ノ八	南國土産	水上 泰生	同	同	承德の宿	川端 龍子	同
熱河行	川端 龍子	同	同	青い空	内田 巖	同	同	浸法子から上那兒去へ	坂口 一草	一三ノ九
朝鮮と八瀬大原	西澤 富敏	同	同	袋田瀧	今關 啓司	同	同	旅の偶感	川口 春波	一三ノ一〇
家を建てる	榊原 紫峰	同	同	素材	島海 青兒	同	同	式根島の想ひ出	丹阿彌岩吉	同
内蒙の日の出	藤島 武二	同	一三ノ九	温泉とところどころ	小川 千葵	同	同	秋の旅・事變	加納 三樂	一三ノ一二
夏花雜感	荒木 十畝	同	同	猫	前川 千帆	同	同	海の女	藤島 武二	一五ノ二
北陸とところどころ	金島 桂華	同	同	南畫漫文	橋本 邦助	同	同	春らしい座談會	小杉放庵等	文藝春秋 一五ノ二
風景と花鳥	田中剛哉	同	同	少年時代の回顧	赤城 泰舒	同	六ノ九	雪の秋田	ブルーノ・タウト	一五ノ四
身邊雜記	奥村 土牛	同	同	北支那の思ひ出	石川欽一郎	同	一三ノ五	夏を樂しむ	西村 五雲	一五ノ八
郷土藝術などの事	酒井 三良	同	同	この頃の感想	林 武	美術	一三ノ九	美しくなり行く日本の女	藤田 嗣治	一五ノ一〇
舞踊畫の生れるまで	山川 秀峰	同	同	貧乏ばなし	熊岡 美彦	同	一三ノ一	身邊近事	鍋木 清方	一五ノ一二
青葉の東海道	池田 遙郎	同	同	美術學校入學前後	近藤浩一路	同	一三ノ五	曾遊支那	小杉放庵等	一五ノ一四
伊勢路の春	勝田 哲	同	同	好きな作品、好きな作家	諸 家	同	一三ノ七	南支旅行の思ひ出	赤城 泰舒	三九一
雜感	吉岡 堅二	同	同	美術學校時代追憶	池部 鈞	同	同	飛行機のこと	猪熊弦一郎	三九三
わが行く途	上村 松篁	同	同	偶感	猪熊弦一郎	同	同	エピソードイオビントレス	北川 民次	同
人物畫をめざして	三輪 晃勢	同	同	煙れる朝・沼地	野口 謙藏	同	一三ノ八	コ		同
この頃の感想	三谷十糸子	同	同	面白かつた美校時代	大久保作次郎	同	同			
山を歩く	村島 西一	同	同	けし畑	曾宮 一念	同	一三ノ九	富士と庭園	竹内 栖鳳	東朝 一〇一
雨を待った夏の想出	田之口青晃	同	同	鹽邊漫談	横山 大觀	美術評論 六ノ一	同	華嚴寺の大難	外務善心庵	中外商業 一〇七、一八
師匠の蔭に	加納 三樂	同	同	畫室の話	川合 玉堂	同	同	動物畫談	西村 五雲	東朝 一〇四、三五
私の旅	加藤 榮三	同	同	挿繪閑話	鍋水 清方	同	同	美しき武具	松岡 映丘	一〇四、二四
旅の修養	木本 大果	同	同	スケッチに添へて		同	六ノ三	古都へ旅して	山村 耕花	東日 四、二五、一七
北支那の石佛	荒井 寛方	同	一三ノ一〇							

[illegible]

昭和十二年度美術文獻目錄

鐵齋の歩み	棟方 志功	南畫鑑賞 六ノ二	ラグーザに就て	隈元謙次郎	美術研究 六八	ビカソの藝術	サルヴァドール・ダリ	アトリエ 一四ノ六
鐵齋の雜記	伊藤 康	同	富岡鐵齋詩文集	小高根太郎	同	印象派より抽象繪畫へ	江川和彦譯	同
鐵齋に心酔したバスキ	柳 亮	同	玉堂、清方閣談會	野田 九瀧	美術評論 六ノ二	フアンタスチック・アート・ダダ、シュール・レアリスム展	寺田竹雄譯	同
鐵齋の作品の印象	森口 多里	同	鐵齋先生十九回忌に際し北海道よりの旅信に添へて	同	美之國 一三ノ三	繪畫は何處へ行く？	野田 英夫	同
鐵齋翁想望	相良 三徳	同	憶ひ出すまゝ、(寺崎廣業 十九回忌)	岡部 公成	同	メキシコの畫家	瀧口修造譯	一四ノ九
山中信天翁について上下	古川 貞	同	性格(佐伯祐三)	佐伯 米子	同	ナチス藝術の全貌	北川 民次	同
假説事堂時代	堀越 三郎	日本建築士 二〇ノ一	佐伯祐三の藝術を論ず	外山卯三郎	同	マチス、ルオー、ドラン、ピカソ訪問記	植村庸千代譯	一四ノ一〇
諸雜誌に現はれたる議院建築に關する文獻	同	同	佐伯祐三遺作展	佐波 甫	同	ソヴエトの版畫	武者小路實篤	中央公論 五二ノ四
明治初期橫濱市内で焼成した煉瓦の標本	石井 研堂	同 二〇ノ五	追懷(佐伯祐三)	山口 長男	同	ピカソ近作論	小西 謙三	同 五二ノ八
赤塚自得君の追憶	津田 信夫	汎工藝 一五ノ三	新興大和繪會時代	穴山 勝堂	同	ピカソと友達	齋藤 英一	同 一二ノ七
赤塚自得先生の思ひ出	堆朱 楊成	同	小堀新吾先生	岸浪百壽居	同	ハーパー・リードのシニール・アラビズム論	江川和彦譯	同 一二ノ九
恩師赤塚先生作品の思ひ出	山鹿 清華	同	富田深仙を想ふ―東京遺作展を觀て	鈴木 武久	同	歐米繪行脚より歸朝した武者小路實篤氏に就く	梁 龍夢	同 一三ノ二
赤塚自得先生の思ひ出	三田村自芳	同	第一回帝展時代の回顧	佐波 甫	同	現代中華民國の美術界の動向	同	同 一三ノ三
赤塚自得翁の略歴	柴崎 風碑	同	獨立展發生前後の洋畫壇	田澤 田軒	同	米國畫壇の進展性	寺田 竹雄	同 一三ノ六
大平洋畫會を語る	高村 眞夫	美育 一三ノ一	日露戰爭當時の戰爭畫の話	外山卯三郎	同	巴里繪畫雜談	武者小路實篤	同 一五ノ一二
明治大正の圖畫教科書七―三	杉山 司七	同 一三ノ三	滿谷國四郎の藝術	飛田 周山	同	ピカソと友達	佐波 甫	同 三八四
勤王畫家菊池容齋先生の事蹟	結城 素明	同 一三ノ七	マゾオの想出	森口 多里	同	抽象藝術	我所篤二譯	同 三八五
故栗原忠二氏英國での足跡	河邊 梅村	美術 一二ノ一	女流美術家が名作を偲ぶ集ひ	岡田 龍夫	同	チエツコに於ける二人の畫家	福澤 一郎	同 三八五
父を語る―寺崎廣業	寺崎 廣載	同 一二ノ三	春帶記―亮間筆子	長谷川時雨	大朝 五・五・五・七	詩を書くピカソ	山中 散生	同
父を語る、亡き父滿谷國四郎の思ひ出	滿谷 俊吉	同 一二ノ四	明治以後の日本畫回顧	瀧 精一	大朝 五・二・二・〇	ルオーとの交渉	瀧口 修造	同
佐伯君餘談	渡邊 浩三	同	最近米國美術界の動向	野田 英夫	アトリエ 一四ノ一	マックス・エルンスト	福島繁太郎	同
佐伯祐三氏遺作蒐集に就て	山本發次郎	同	超現實主義の現實的批判	尾川 多計	同 一四ノ一〇	ジョアン・ミロ	伊藤 康	同
強い性格(佐伯祐三)	佐伯 米子	同	ピカソ以後	豊藤 勇	同 一四ノ一	ラウル・デュファイ	佐波 甫	同
初めての受賞	諸 氏	同 一二ノ五、六	スーチンの人と作品	荒城 季夫	同	ディエップ・キーのモロッコ風景	伊原宇三郎	同
故高橋由一氏の手文庫から―四	宮尾しげを	同 一二ノ六	超現實主義繪畫の史的意義	福澤 一郎	同 一四ノ二	超現實性の現實的可能及びその方法論	島津 純一	同
平福百穂―父を語る	平福 一郎	同 一二ノ六	須田國太郎	同	一四ノ六	ウオルター・グリフィンのこと	石井 柏亭	同
京都工藝院庶務會	美澄 政博	美術研究 六二						
幸野株嶺について	小高根太郎	同 六五						
富岡鐵齋「公私事歴録」(研究資料)	同							

幻想畫家略傳 (T Y みづゑ 三九〇)

ジョルジュ・ユニエの仕事について 同 同 三九二

海外美術家消息 同 同 三九三

腐った驢馬 同 同 三九四

パオオ島アバイ裝飾浮彫について 同 同 同

○ 同 同 同

アメリカで見た畫から 武者小路實篤 東日 一〇一・一・六

彫刻 荒城 季夫 美術 一二ノ三

立體派彫刻家リブシツツとロオランズ 森口 多里 同 一二ノ六

ギリシヤ彫刻の教訓 ジイデオ 同 一二ノ六

近代造形藝術上下 ウエルカ 同 九一〇・一三

シアコメツテイの彫刻 瀧口修造 同 九一

山中 散生 同 三九一

工藝 建築世界 三一ノ一

七作家の家具展覽會・ロンドン現代家具展覽會 工藝ニユ 六ノ一

英國に於ける工藝事情 パウル・スミス 同 六ノ二・五

工藝拾集記一四 松崎福三郎 同 六ノ三

米國に於ける工藝事情 山崎覺太郎 同 六ノ四

英國と漆器 同 同 同

英國に於ける工藝事情 同 同 同

フランスの食卓用セツト (圖録) 同 同 同

塊太利に於ける工藝事情 同 同 六ノ五

ハンガリーに於ける工藝事情 同 同 同

チエツコスロバキヤに於ける工藝事情 同 同 六ノ六

北歐に於ける工藝事情 同 同 同

ドイツ國に於ける工藝事情 同 同 六ノ七

新しいヴェニス硝子 (圖録) 同 同 同

イタリヤの安全ガラス應用コンクール (圖録) 同 同 同

プロイヤーの近作 (圖録) 工藝ニユ 六ノ七

佛蘭西に於ける工藝事情 山崎覺太郎 同 六ノ八

伊太利及瑞西に於ける工藝事情 同 同 六ノ九

工藝研究座談會記―山崎氏を圍み歐米事情を聞く 同 同 六ノ一〇

近代藝術家聯盟U・A・Mの素描 同 同 六ノ一二

巴里萬國博特設館案内 同 同 同

巴里博家具館、照明館、裝飾、美術館 同 同 同

佛蘭西の硝子美術 石井 柏亭 茶わん 七八

「ニズマ」の紹介 中田 滿雄 帝國工藝 一一ノ五

戴冠式と皇座工藝 宮下 孝雄 同 一一ノ六

山崎覺太郎氏歸朝海外土産話 同 同 一一ノ一〇

巴里萬國博覽會に於ける工藝的な壁面裝飾集 同 同 一一ノ一二

○ 同 同 同

日獨文化美術工藝の影響 岡村 千曳 東朝 一一・一九

建築 建築世界 三一ノ一

オリムピック大會と競技 岸田日出刀 改造 一九ノ三

伯林オリムピックに就て 同 建築雜誌 五ノ六・二二

一九三六年第十一回伯林オリムピック施設に就て 市浦 健 同 同

一九三六年伯林オリムピック大會建築施設 同 同 同

ツク大會建築施設 同 同 同

歐米旅行談 同 同 同

ナチス獨逸の建築一色化とは 岸田日出刀 同 五ノ六・二四

オリムピック藝術競技に就て 同 同 五ノ六・二五

巴里萬國博通信 池部 宗薫 同 五ノ六・二九

一九三七年巴里萬國博通信 同 同 五ノ六・三三

伯林オリムピック會場の印象(二) 吉島 保 建築世界 三一ノ一

建築描法考一四 同 同 三一ノ二、三、四、七

デユツセルドルフに開かれる一九三七年「創造國民」大博覽會工事進捗す 同 同 三一ノ三

交通機關の工業意匠 小池 新二 建築世界 三一ノ三

上海の支那民家 小野 邦雄 同 三一ノ四

巴里大博覽會ニユース 同 同 三一ノ四、五

ジャネットドレック邸(エドガー・ピサント、西本正夫設計) 同 同 三一ノ五

博覽會とその將來 小池 新二 同 同

百貨店の設計 菊池重郎 同 同

建築裝飾と超現實派―三 水谷 武彦 同 同

ニューヨーク博の中心建築 同 同 三一ノ七

グロビウスの言葉 同 同 同

最近の寢店(グラフ) 同 同 同

開眼の問題 同 同 同

ル・コルビジェ 同 同 三一ノ八

ル・コルビジェ 同 同 三一ノ八

ル・コルビジェ 同 同 三一ノ八

ル・コルビジェ 同 同 三一ノ八

ル・コルビジェ 同 同 三一ノ八

ル・コルビジェ 同 同 三一ノ八

ル・コルビジェ 同 同 三一ノ八

ル・コルビジェ 同 同 三一ノ八

ル・コルビジェ 同 同 三一ノ八

ル・コルビジェ 同 同 三一ノ八

ル・コルビジェ 同 同 三一ノ八

ル・コルビジェ 同 同 三一ノ八

ル・コルビジェ 同 同 三一ノ八

ル・コルビジェ 同 同 三一ノ八

ル・コルビジェ 同 同 三一ノ八

ル・コルビジェ 同 同 三一ノ八

ル・コルビジェ 同 同 三一ノ八

ル・コルビジェ 同 同 三一ノ八

ル・コルビジェ 同 同 三一ノ八

ル・コルビジェ 同 同 三一ノ八

ル・コルビジェ 同 同 三一ノ八

ル・コルビジェ 同 同 三一ノ八

ル・コルビジェ 同 同 三一ノ八

ル・コルビジェ 同 同 三一ノ八

ル・コルビジェ 同 同 三一ノ八

ル・コルビジェ 同 同 三一ノ八

ル・コルビジェ 同 同 三一ノ八

ル・コルビジェ 同 同 三一ノ八

ル・コルビジェ 同 同 三一ノ八

カムボパツサのアパート
メントハウス(ダヴィド・
バカノウズキ設計)
ブダペスト空港(ビーア
パウエル・クラリク設
計)
ゼノアにある食堂(マリ
オ・ラボ設計)
ローマにあるアパート
(マリオ・リドルフイ設
計)
山の家(エツトレ・ロッ
シ設計)
ハンザ・ロイド・ゴリア
ト工場(ルドフ・ロッ
デル設計)
スビツベルグのグライダ
ー格納庫(ハインツ・ロ
ーリツヒ設計)
ニューデヤシーのゼネ
ラル・モーターズ工場(ア
ルバート・カーン設計)
パリ博のスケッチ
材料研究所(パランテ
イ設計)
小兒の爲の病院(カツタ
オ設計)
パリ萬國博覽會
體育場(パウル・ボナ
ー、クルト・ドヌベル設
計)
貯炭所(シュツプ・クレ
エマー設計)
厩舎(パウル・バウム・ガ
ルテン設計)
住宅(ヘイス、シンブツ
ン、ハンシツカー設計)
カフェー(ウイリアム・ガ
ンスター設計)
ニユース パレスティン
一九三六年後期の歐米新
建築紹介
現代イギリス建築 四
新京だより
建築士法に關する歐米の
資料

一九三七年前期の歐米新
建築紹介

神坂 三郎
藏田周忠等

日本建築士 二二ノ三

其他外國美術

伯林オリンピック藝術展
技展を見る
オノレ・ドーミエ
黒人彫刻と近代美術
レオナルドと遠近法
の人生觀
ビエール・ブリューゲル
思ひ出
獨逸商業美術への同願
獨逸國展覽會に就て
墳空隨筆
アンシクロペジストとし
てのダ・ヴィンチ
ミケル・アンゼロ
版畫家としてのセザンヌ
テイントレット回顧展
モザイクに就て
手紙もやうに就いて
初期ルネッサンス
傳統と反動—近代美術の
發展
セザンヌとその交友
セザンヌの生涯
ドイツの名作家描展
獨逸浪漫派の二巨匠—カ
スパー・ダヴィット・フ
ルンゲに就いて
ナチス・ドイツの文化統
制

金九 重嶺
カロー・リ
ム山計一譯
荒城 季夫
徳永 郁介
須山 計一
ブルデル
成田重郎譯
京谷 涼二
ハンス・メ
小池新二譯
兒島喜久雄
徳水 郁介
武者小路實篤
ガツシエ
式場隆三郎
譯註
有島 生馬
中田 滿雄
山鹿 清華
福澤 一郎
フランク・
ルツター
成田 重郎
友枝 高彦
東山 魁

アトリエ 一四ノ一
同 一四ノ二
同 一四ノ三
同 一四ノ四
同 一四ノ五
同 一四ノ七
同 一四ノ八
同
國際建築 一三ノ六
思想 一八六
中央公論 五二ノ三
同 五二ノ六
同 五二ノ一〇
帝國工藝 一一ノ一
汎工藝 一一ノ五
美術 一二ノ六
同 一二ノ八
美之國 一三ノ四
同 一三ノ五
同 一三ノ七

展覽會記事及批評

綜合展覽會

大阪新美術家同盟第三回展(十一年十一月)
大阪新美術家同盟第三
回展覽會批評
大阪新美術家同盟展
大阪新美術家同盟展
京都市美術展
京都市美術第二展
第二回京都市美術展の工
藝
京都市展工藝評
第二回京都市美術展
京都市展三十分間印象
記
京都市展評
國畫會展
國展批評
國展の版畫
國展の彫刻
國展工藝評
獨立國畫、春陽會評
國展洋畫を見る
國展人選作を見て
國展彫刻と工藝

伊藤 繼郎
伊達 俊光
田邊信太郎
神崎 憲一
柴崎 風輝
古山 順一
樂壽山人
藤森 順三
吉副 綜三
妹尾 正彦
平塚 運一
中村 直人
渡邊 素舟
武者小路實篤
田中 忠雄
宮田 重雄
志立 深爾

アトリエ 一四ノ一
美術 一二ノ一
みづゑ 三八三
塔影 一三ノ七
汎工藝 一五ノ六
美術街 四ノ四
美術評論 六ノ四
美之國 一三ノ七
アトリエ 一四ノ五
同 同
同 同
同 同
改造 一九ノ五
美術 一二ノ五
同 同

北川 民次
荒城 季夫
富永 惣一
森口 多里
藤森 成吉
西村 貞
東朝 一三ノ四
東日 一四・一五
中外商業 四・六・八

美之國 一三ノ一〇
みづゑ 三八五
同 三八六
同 六月
同 同
同 同
同 同
同 同
同 同

國展の彫刻について	本郷 新	美術	一二ノ五	春臺展、白日會展評	倉田 三郎	アトリエ	一四ノ三	二科展評	春山 武松	大朝	九・八、九
春陽會展と國展	鈴木 武久	同	同	第十二回春臺展評	青柳喜兵衛	現代美術	四ノ三	二科院展三部會彫刻評	森口 多里	東朝	九・一〇
國展の油繪	山崎 省三	美之國	一三ノ五	春臺展評	五島 盛寛	美術	一二ノ三	二科を纏る	高木長太郎	東日	九・二、三
第十二回國展評	松本 弘二	同	同	白日・春臺・光風三展	今井繁三郎	美之國	一三ノ二	二科會展	里見 勝藏	新愛知	九・二一、二
梅原、青山、宮田、ル	荒城 季夫	みづゑ	三八七	清光會展	福吉 一郎	アトリエ	一四ノ七	二科展	福澤 一郎	福澤 一郎	九・二一、二
第十二回國展評	寺田 政明	同	同	第四回清光會	三輪 鄰	塔影	一三ノ八	二科會の彫刻	安藤 照	福澤 一郎	九・二一、二
國展、春陽會の版畫	小野 忠重	同	同	清光會展の日本畫	藤森 順三	美術評論	六ノ四	二科總評	兒島喜久雄	福澤 一郎	九・一七
○	伊藤 康	讀賣	四・四、五	大觀と古徑・叔彦	五島 盛寛	美術	一二ノ四	二科展評	田澤 田軒	東朝	九・六、七
國畫展評	福澤 一郎	報知	四・六、七	太平洋畫會展	佐波 市	美術	三六	二科展評	木村 莊八	アトリエ	一四ノ一〇
春陽會と國展	荒城 季夫	東朝	四・三、五	太平洋畫會展	岩佐 新	美術	一二ノ一	日本美術院展	加藤 泰	同	同
春陽會と國展	林 武	新愛知	四・六、三	大湖會第一回展	鳥居 一正	塔影	一四ノ一	第二十四回院展の繪畫	神崎 憲一	塔影	一三ノ一〇
春陽會と國展	碓 伊之助	都	四・〇、三	大湖會第二回展	中村 善策	みづゑ	三九五	昭和十二年院展	同	同	同
春陽會と國展	外狩素心庵	中外商業	四・三、三	大湖會第二回展の日本畫	江川 和彦	美術	一二ノ七	南風の「朝風」と土牛の「仔馬」	同	同	同
新與美術家協會展(十一年十一月)	佐波 市	美術	一二ノ一	大湖會展評	山田徳兵衛	現代美術	四ノ三	各新聞の院展、青龍展、明助展評	佐藤 敏	美術	一二ノ一〇
新與美術第二回展	加藤 信也	美之國	一三ノ一	第一美術第九回展短評	仙波勝次郎	美之國	一三ノ三	院展、青龍展漫歩	宮本三郎等	美術街	四ノ五
新與美術家協會春季展	三輪 鄰	塔影	一三ノ六	置實美術院展	伊藤 康	同	同	第廿四回院展を觀る	大山 廣光	美術街	四ノ五
新與美術家協會展(十二年十二月)	尾川 多計	アトリエ	一五ノ一	第七回置實美術院展	雨田 光平	同	同	院展の作品	藤森 順三	美術評論	六ノ五
新協展評	鳥居 一正	塔影	一四ノ二	二科會展	早川 龍一郎	同	同	院展の藝術性と現代性	加藤 信也	美之國	一三ノ一〇
新與美術家協會第二回展	今井繁三郎	美之國	一四ノ一	二科展所感	金井 紫雲	美術	一二ノ一〇	院展の花鳥畫	金井 紫雲	同	同
NAS「新協」展	鹿子木道雄	同	同	二科展の動植物畫	渡邊 治三	同	同	院展の三作品「丘陵、土牛、燦華」	石川 鳥水	同	同
新協展を打診す	鈴木 武久	美術	一三ノ一	二科評	山崎 省三	美之國	一三ノ一〇	院展と青龍社	古川 北華	同	同
新構造社展(十二年十一月)	大島 克衛	美之國	一四ノ一	二科會を見る	中山 龍	同	同	院展印象記	佐波 市	みづゑ	三九二
新構造社展素評	園部 香峯	同	同	二科畫觀	矢橋 六郎	同	同	日本美術院	藤田 嗣治	報知	九・七、九
新構造社展巡歩三人記	内田正男等	同	同	二科會雜觀	池田金之助	同	同	美術院と青龍社	石井 柏亭	新愛知	九・七、九
主線美術協會展(十一年十二月)	尾川 多計	アトリエ	一四ノ一	二科展評	佐藤英男等	同	同	二科・院展・三部會の彫刻	碓 伊之助	都	九・九、一三
主線美術協會第一回展	佐波 市	美術	一二ノ一	二科展の油繪評	中村 善策	同	同	二科・院展・三部會の彫刻	森口 多里	東朝	九・一〇
主線美術協會短評	尾川 多計	美之國	一三ノ一	二科會展合評	猪熊弦一郎	報知	九・四、五	院展の彫刻	春山 武松	大朝	九・八、九
主線美術と新構造の彫刻	大藏 雄夫	同	同	二科水彩評	相良 徳三	都	九・五、七	院展を觀る	安藤 照	福澤 一郎	九・二、三
主線美術協會第一回	外山卯三郎	みづゑ	三八三	○	同	同	同	院展を觀る	高木長太郎	東日	九・二、三
主線美術小品展	佐波 展	同	六月	二科展評	同	同	同	院展	田澤 田軒	東朝	九・六、七
春臺美術展	同	同	同	同	同	同	同	白日展	木下李太郎	東朝	九・六、七
								春臺展、白日會展評	倉田 三郎	アトリエ	一四ノ三

昭和十二年度美術文獻目錄

宴談・倉田三郎君の白 日展評に答ふ	笹岡 了一	アトリエ	一四〇/四	審査員の一人として 文展概観	西山 翠峰	美術評論	六〇七	更新文展評(日本畫)	春山 武松	大朝	二〇九、三〇
批評者としての言葉― 笹岡了一君に告ぐ	倉田 三郎	同	一四〇/五	私の報告	藤森 順三	同	同	文展日本畫評	中川 一政	都	二〇三、三〇
「批評者」 倉田三郎君 への再答	笹岡 了一	同	一四〇/六	出品者への希望	川島理一郎	同	同	文展洋畫評	高島達四郎	報知	二〇三、三〇
白日會新人作所感	野口良一	美術	一二〇/三	初めて見た官展鑑査 更正文展「書きのぞ記」	中村 岳陵	同	同	文展を見る(日本 畫)	久米 正雄	東日	二〇三、三〇
白日展の彫刻	大藏 雄夫	美之國	一三〇/三	更正文展「書きのぞ記」	宇野 浩二	同	同	文展評(日本畫、彫刻)	相良 徳三	中外商業	二〇三、三〇
白日、春臺、光風三展 日會展	今井繁三郎	同	同	更正文展「書きのぞ記」	川路 柳虹	同	同	文展の注目作	辰巳 吉次	新愛知	二〇三、三〇
光風會展、春臺展、白 日會展	佐波 市	みづゑ	三八五	文展第一部雅感	杉山 寧	同	同	文展日本畫評	仲田勝之助	報知	二〇三、三〇
汎太平洋美術展	杉浦 冷石	塔影	一三〇/五	文展第一部への苦言	加藤 信也	同	同	文展見録	田澤 田軒	東朝	二〇三、三〇
三越洋畫彫刻展	K・Y 生	美之國	一三〇/九	文展の日本繪	富澤有爲夫	同	同	文展瞥見記	青柳喜兵衛	福岡日日	一〇、二六
第一回文展の漆藝を見 て	福地 袋山	漆と工藝	四三九	文展雨の初日	廣瀬 熾六	同	同	更新文展評(彫刻)	春山 武松	大朝	一〇、二六
第一回文展の漆藝を見 て	渡邊 香涯	帝國工藝	一一〇/一	文展から拾ふ	筑紫春三郎	同	同	文展洋畫評	佐藤 春夫	都	二〇六、二七
更新文展の日本畫に寄 す	川崎 克	塔影	一三〇/一	日本畫批評	小林源太郎	同	同	更新文展評(工藝)	兒島喜久雄	東朝	二〇六、二七
各新聞の第一回文展評 集	鈴木 仁一	同	同	重大時局下に開かれた 更正文展第一回の方針 をたゞす	江川 和彦	同	同	新文展彫刻室	春山 武松	大朝	一〇、二七
技巧の勝利と知性の敗 北―更正文展の日本畫 を見る	柴崎 風岬	南畫鑑賞	六〇/一二	文展二部から受けた感 想	北川 民次	同	同	文展評(洋畫)	山本 豊市	中外商業	二〇六、二七
新文展第一回の工藝部 に就て	同	汎工藝	一五〇/八	文展の洋畫	成田 重郎	同	同	更新文展評(洋畫)	小島善太郎	報知	二〇六、二七
新文展第四部審査員の 地位	同	同	同	文展第二部の特選その他	鹿子木道夫	同	同	更新文展日本畫評	柳 亮	報知	二〇六、二七
第一回文展の工藝を見 る	同	同	一五〇/九	文展の洋畫	山口 薫	同	同	新文展(彫刻と工藝)	田中 一松	讀賣	二〇六、二七
自作を語る文展出品の 漆器視察	本間 葵華	同	一五〇/一〇	文展彫刻評	鈴木 武久	同	同	更正文展の洋畫を見る	森口 多里	東朝	二〇六、二七
文展の工藝	高村 豊周	同	同	彫刻ホール曼荼羅	山内 壯夫	同	同	文展を觀る	久米 正雄	福岡日日	一〇、二九
文展第一部	津田 信夫	美術	一二〇/一	青空に向ふもの(文展 三部評)	大藏 雄夫	同	同	文展工藝評	藤森 成吉	報知	二〇六、二七
第二部作品評	佐波 市	美術	一二〇/一	第四部工藝所感	鈴木 史郎	同	同	新文展洋畫評	藏田 周忠	讀賣	二〇六、二七
文展第二部合評	渡邊 浩三	同	同	第一回文展第一部人選 者系統一覽	廣川松五郎	同	同	新文展の工藝	大川 逸一	同	二〇六、二七
作者の言葉	荒城 季夫	同	同	文展第二部評	渡邊 素舟	同	同	演義美術協會第六回展 六潮會展	新井 勝利	美術評論	六〇七
文展の彫塑と工藝	熊岡美彦等	同	同	鑑賞二題、堂本印象氏 の觀世音について	本間 久雄	同	同	六潮會第六回展	神崎 憲一	塔影	一三〇/三
文展工藝部所感	大山 廣光	美術街	四〇/六	文展總評	荒城 季夫	同	同	阿々土社新作畫展	齊田 素州	塔影	一三〇/二
新文展日本畫を觀る	同	同	同	時局精神と文展―洋畫 評	柳 亮	同	同	青木大乗氏の新日本畫展	野津 春葉	現代美術	四〇/一
文學者の見た文展(座 談會)	武者小路實篤 宇野浩二等	美術評論	六〇七	文展第二部評	佐波 市	同	同	荒木十畝個展	大森 富平	塔影	一三〇/二
文展をひらいて	鍋木 清方	同	同	審査後小感	高島達四郎 伊原宇三郎	同	同				

日本畫展覽會

ア―オの部

更新文展評(日本畫)	春山 武松	大朝	二〇九、三〇
文展日本畫評	中川 一政	都	二〇三、三〇
文展洋畫評	高島達四郎	報知	二〇三、三〇
文展を見る(日本 畫)	久米 正雄	東日	二〇三、三〇
文展評(日本畫、彫刻)	相良 徳三	中外商業	二〇三、三〇
文展の注目作	辰巳 吉次	新愛知	二〇三、三〇
文展日本畫評	木村 莊八	報知	二〇三、三〇
新文展日本畫評	仲田勝之助	東朝	二〇三、三〇
文展瞥見録	田澤 田軒	每夕	二〇三、三〇
文展瞥見記	青柳喜兵衛	福岡日日	一〇、二六
更新文展評(彫刻)	春山 武松	大朝	一〇、二六
文展洋畫評	佐藤 春夫	都	二〇六、二七
更新文展評(工藝)	兒島喜久雄	東朝	二〇六、二七
新文展彫刻室	春山 武松	大朝	一〇、二七
文展評(洋畫)	山本 豊市	中外商業	二〇六、二七
更新文展評(洋畫)	小島善太郎	報知	二〇六、二七
更新文展日本畫評	柳 亮	報知	二〇六、二七
新文展(彫刻と工藝)	田中 一松	讀賣	二〇六、二七
更正文展の洋畫を見る	森口 多里	東朝	二〇六、二七
文展を觀る	久米 正雄	福岡日日	一〇、二九
文展工藝評	藤森 成吉	報知	二〇六、二七
新文展洋畫評	藏田 周忠	讀賣	二〇六、二七
新文展の工藝	大川 逸一	同	二〇六、二七
演義美術協會第六回展 六潮會展	新井 勝利	美術評論	六〇七
六潮會第六回展	神崎 憲一	塔影	一三〇/三
	今井繁三郎	美之國	一三〇/二

カ—コの部

井上永慈氏第一回個展	神崎 憲一	塔 影	一三ノ六	岸浪百舞居氏個展	美術街	四ノ六	國畫院展を觀る	石川 昂水	美之國	一三ノ五
伊東深水氏個展	三輪 鄰	同	同	九阜會展	金井 紫雲	塔 影	一三ノ六	國畫院展	今井繁三郎	同
深水の藝術の一断面	羽黑 泉	美之國	一三ノ六	九阜會展所感	大山 廣光	美術街	四ノ三	國畫院展	龍	東朝 四・一四
一哉堂展	大島 克衛	同	一四ノ一	九阜會の諸君 一、二	藤森 順三	美術評論	六ノ四、五	國畫院の動向	外狩素心庵	中外商業 四・一五
宇田萩郎氏第一回個展	神崎 憲一	塔 影	一三ノ六	京都大九新作畫展(十一月十二月)	神崎 憲一	塔 影	一三ノ二	近藤浩一路新作展(十一月十一月)	大口 琨夫	現代美術 四ノ一
江崎孝坪氏第一回新作畫展	三輪 鄰	同	一三ノ一	京都大九日本畫最高展(十一月十二月)	同	同	一四ノ二	近藤浩一路新作展感想	今井繁三郎	美之國 一三ノ一
小川孝鏡氏小品畫展	齋田 素州	同	一三ノ三	栗田九品庵新作畫展(十一月十二月)	齋田 素州	同	一三ノ二	近藤浩一路氏個展	同	一三ノ一二
小川孝鏡古稀記念展	同	同	一三ノ三	現代日本畫名作展	同	同	一三ノ二	サ—ソの部		
小川孝鏡古稀記念新	鳥居 一正	同	一四ノ一	繪畫の永遠性	添田 達嶺	同	一三ノ九	三聖代名作美術展(朝日新聞主催)	佐波 甫	美術 一二ノ六
作畫展	今井繁三郎	美之國	一四ノ一	現代日本畫名作展に擇	羽黑 泉	美之國	一三ノ九	明治大正昭和名作展	同	美術 一三ノ六
小川孝鏡古稀記念展	同	同	一三ノ一	小杉放庵氏花鳥畫個展	神崎 憲一	塔 影	一三ノ三	明治大正昭和名作展	同	美術 一三ノ六
故尾竹竹坡遺作展を觀て	同	同	一三ノ一	小杉放庵氏第五回個展	雄山 亘	美術街	四ノ二	作美術展一巡記	同	美術 一三ノ六
大阪女流作家第四回展	大森 富平	同	一三ノ九	小杉放庵氏個展	今井繁三郎	美之國	一三ノ二	三樹會第一回展	神崎 憲一	塔 影 一三ノ九
大橋慶堂個展	樂壽山人	美術街	四ノ三	兒玉畫藝第一回展	三輪 鄰	塔 影	一三ノ七	三樹會第一回展	樂壽山人	美術街 四ノ四
焔土社第三回展	三輪 鄰	塔 影	一三ノ七	兒玉畫藝第二回展	大山 廣光	美術街	四ノ四	三樹會第一回展	大北 淡齋	美術評論 六ノ五
第三回焔土社展	大山 廣光	美術街	四ノ四	兒玉畫藝第三回展	佐藤 一英	美術評論	六ノ四	三樹會第一回展	富樫 木人	塔 影 一四ノ二
革丙會第十六回展	三輪 鄰	塔 影	一三ノ四	兒玉畫藝第四回展	三輪 鄰	塔 影	一三ノ八	三樹會第一回展	神崎 憲一	塔 影 一三ノ九
革丙會第十六回展	同	同	一三ノ四	兒玉畫藝第五回展	三輪 鄰	塔 影	一三ノ八	三樹會第一回展	大山 廣光	美術街 四ノ四
藤田哲氏個展(大阪)	神崎 憲一	塔 影	一三ノ八	浩然社第五回展	三輪 鄰	塔 影	一三ノ八	三樹會第一回展	同	同
川路柳虹贊詩畫展	藤森 順三	美術評論	六ノ二	浩然社第五回展	三輪 鄰	塔 影	一三ノ八	三樹會第一回展	三輪 鄰	塔 影 一三ノ九
川端龍子氏新作展(大阪)	神崎 憲一	塔 影	一三ノ八	紅日會第二回展	同	同	一三ノ六	三樹會第一回展	同	同
川端龍子第七回展	同	同	一四ノ一	紅日會第二回展	大山 廣光	美術街	四ノ三	三樹會第一回展	杉浦 冷石	塔 影 一三ノ一二
川端龍子氏第七回展	同	同	一四ノ一	第二回紅日會展	同	同	一三ノ六	三樹會第一回展	同	同
七絃會と龍子氏個展	櫻村 紫白	美術街	一三ノ一	國畫院第一回展	長谷川路可	現代美術	四ノ五	三樹會第一回展	神崎 憲一	同 一四ノ一
龍子第七回個展	鈴木 武久	美之國	一三ノ一二	國畫院出品作に就て	岩田 正巳	同	同	三樹會第一回展	櫻村 紫白	美術 一三ノ一
木村百木個展	佐藤 一英	美術評論	六ノ三	國畫院出品作に就ての感想	同	同	一三ノ五	三樹會第一回展	廣瀬 熹六	美之國 一三ノ一二
菊池盤の作畫展	大森 富平	塔 影	一三ノ三	「矢表」を矢表に	神崎 憲一	塔 影	一三ノ五	三樹會第一回展	三輪 鄰	塔 影 一三ノ一〇
如月會第四回展	神崎 憲一	同	一三ノ五	國畫院同人第一回展	三輪 鄰	同	同	三樹會第一回展	豐田 豐	現代美術 四ノ五
如月會第四回展	同	同	一三ノ五	大和繪の現代化について	大口 琨夫	南畫鑑賞	六ノ五	三樹會第一回展	石井 柏亭	塔 影 二三ノ四
岸浪百舞居第一回個展	紅葉谷植一	美術評論	六ノ三	國畫院第一回展	大山 廣光	美術街	四ノ三	三樹會第一回展	神崎 憲一	同
岸浪百舞居氏第一回個展	神崎 憲一	塔 影	一三ノ一一	私の世界	小村 雪岱	同	同	三樹會第一回展	藤森 順三	美術評論 六ノ四
				國畫院合評	海老原喜之助、柳 充	美之國	一三ノ五	三樹會第一回展	神崎 憲一	塔 影 一三ノ一〇

春風會第一回展	神崎 憲一	塔 影	一三〇七	青柿社第六回展	三輪 鄭	塔 影	一三〇六	多聞洞新作畫展(十一年十二月)	齊田 素州	塔 影	一三〇一
同	北 之麿	美術評論	六〇四	春の青龍社(春季)	同	同	一三〇五	橋本多聞洞新作畫展	齊田 素州	美術評論	六〇一
春芳堂展	金井 紫雲	現代美術	四〇五	春の青龍社展	大山 廣光	美術街	四〇三	多聞洞展覽會	藤森 順三	同	六〇五
春芳堂展	樂海山人	美術街	四〇三	青龍社の人々	佐藤 一英	美術評論	六〇三	大日美術院第一回展	佐藤 一英	同	六〇五
春芳堂展覽會	藤森 順三	美術評論	六〇四	青龍社展雅威	廣瀬 蕪六	美之國	一三〇五	大日美術院オール出品評	豐田 豐	塔 影	一三〇七
春陽會日本畫第一回展	廣瀬 蕪六	アトリエ	一五〇一	青龍展の獨白性	江川 和彦	同	同	大日美術院第一回展	三輪 鄭	同	一三〇七
油繪から日本畫へ	今井繁三郎	美之國	一四〇一	青龍社展	龍	東朝	四〇六	大日美術院展評	佐藤 一英	美術評論	六〇四
第一回春陽會日本畫展	神崎 憲一	塔 影	一三〇二	春の青龍社展	外符素心庵	讀 賣	同	大日美術院第一回展	佐藤 一英	美術評論	六〇四
尙美堂新作畫展(十一年十二月)	佐藤 一英	美術評論	六〇一	青龍社の成長	金井 紫雲	中外商業	四〇八	大日美術院第一回展	佐藤 一英	美術評論	六〇四
尙美堂新作畫展	藤森 順三	同	六〇二	青龍社の諸作	本二郎等	アトリエ	一四〇一	高島屋新作畫展(十一年十一月)	齊田 素州	塔 影	一三〇一
尙美鑑賞會(十一年二月)	神崎 憲一	塔 影	一四〇二	青龍展の諸作	佐藤 一英	美術	一三〇一	高島屋新作畫展(十二年十二月)	三輪 鄭	同	一四〇二
尙美堂二十週年記念展	同	同	一三〇四	明期展評	佐藤 一英	美術評論	六〇五	高島屋五作家展	同	同	一三〇八
新頤會第一回展	樂海山人	美術街	四〇二	院展、青龍展漫歩	宇野 浩二	美之國	一三〇一	高島屋五作家展	佐藤 一英	美術評論	六〇五
同	神崎 憲一	塔 影	一三〇七	青龍社を觀る	江川 和彦	同	同	高島屋五作家展	藤森 順三	同	六〇二
新築會第二回展	野津 春華	美之國	一四〇一	青龍社にける期待	中川 一政	中外商業	九五二	玉村方久斗個展	三輪 鄭	塔 影	一三〇一
新築會大阪展	同	同	一三〇二	青龍社にける期待	中川 紀元	福園日々	九二〇	玉村方久斗個展	仙波勝次郎	美之國	一三〇八
新燈社展を觀る	三輪 鄭	塔 影	一三〇七	青龍社展評	藤田 嗣治	都	九二四	丹阿彌岩吉第二回個展	鳥居 一正	塔 影	一四〇一
新日本畫研究會第三回展	今井繁三郎	美術街	四〇四	青龍展と院展	木下李太郎	東朝	九二七	竹立會第一回展	神崎 憲一	同	一三〇一
第三回新日本畫研究會展	佐波 市	美之國	一三〇七	青龍社展	齋田 素州	塔 影	一三〇二	中外商業邦畫結集展(十一年十二月)	大森 富平	同	一三〇一
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	中川 紀元	福園日々	九二〇	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	藤田 嗣治	都	九二四	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	木下李太郎	東朝	九二七	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	齋田 素州	塔 影	一三〇二	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	中川 紀元	福園日々	九二〇	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	藤田 嗣治	都	九二四	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	木下李太郎	東朝	九二七	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	齋田 素州	塔 影	一三〇二	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	中川 紀元	福園日々	九二〇	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	藤田 嗣治	都	九二四	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	木下李太郎	東朝	九二七	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	齋田 素州	塔 影	一三〇二	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	中川 紀元	福園日々	九二〇	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	藤田 嗣治	都	九二四	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	木下李太郎	東朝	九二七	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	齋田 素州	塔 影	一三〇二	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	中川 紀元	福園日々	九二〇	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	藤田 嗣治	都	九二四	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	木下李太郎	東朝	九二七	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	齋田 素州	塔 影	一三〇二	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	中川 紀元	福園日々	九二〇	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	藤田 嗣治	都	九二四	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	木下李太郎	東朝	九二七	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	齋田 素州	塔 影	一三〇二	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	中川 紀元	福園日々	九二〇	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	藤田 嗣治	都	九二四	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	木下李太郎	東朝	九二七	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	齋田 素州	塔 影	一三〇二	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	中川 紀元	福園日々	九二〇	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	藤田 嗣治	都	九二四	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	木下李太郎	東朝	九二七	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	齋田 素州	塔 影	一三〇二	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	中川 紀元	福園日々	九二〇	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	藤田 嗣治	都	九二四	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	木下李太郎	東朝	九二七	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	齋田 素州	塔 影	一三〇二	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	中川 紀元	福園日々	九二〇	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	藤田 嗣治	都	九二四	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	木下李太郎	東朝	九二七	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	齋田 素州	塔 影	一三〇二	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	中川 紀元	福園日々	九二〇	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	藤田 嗣治	都	九二四	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	木下李太郎	東朝	九二七	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	齋田 素州	塔 影	一三〇二	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	中川 紀元	福園日々	九二〇	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	藤田 嗣治	都	九二四	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	木下李太郎	東朝	九二七	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	齋田 素州	塔 影	一三〇二	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	中川 紀元	福園日々	九二〇	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	藤田 嗣治	都	九二四	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	木下李太郎	東朝	九二七	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	齋田 素州	塔 影	一三〇二	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	中川 紀元	福園日々	九二〇	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	藤田 嗣治	都	九二四	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	木下李太郎	東朝	九二七	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	齋田 素州	塔 影	一三〇二	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	中川 紀元	福園日々	九二〇	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	藤田 嗣治	都	九二四	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	木下李太郎	東朝	九二七	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	齋田 素州	塔 影	一三〇二	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	中川 紀元	福園日々	九二〇	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	藤田 嗣治	都	九二四	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	木下李太郎	東朝	九二七	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	齋田 素州	塔 影	一三〇二	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	中川 紀元	福園日々	九二〇	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	藤田 嗣治	都	九二四	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	木下李太郎	東朝	九二七	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	齋田 素州	塔 影	一三〇二	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	中川 紀元	福園日々	九二〇	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	藤田 嗣治	都	九二四	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	木下李太郎	東朝	九二七	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	齋田 素州	塔 影	一三〇二	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	中川 紀元	福園日々	九二〇	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	藤田 嗣治	都	九二四	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	木下李太郎	東朝	九二七	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	齋田 素州	塔 影	一三〇二	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	中川 紀元	福園日々	九二〇	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	藤田 嗣治	都	九二四	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	木下李太郎	東朝	九二七	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	齋田 素州	塔 影	一三〇二	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	中川 紀元	福園日々	九二〇	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	藤田 嗣治	都	九二四	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	木下李太郎	東朝	九二七	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	齋田 素州	塔 影	一三〇二	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	中川 紀元	福園日々	九二〇	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	藤田 嗣治	都	九二四	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	木下李太郎	東朝	九二七	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	齋田 素州	塔 影	一三〇二	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	中川 紀元	福園日々	九二〇	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	藤田 嗣治	都	九二四	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	木下李太郎	東朝	九二七	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	齋田 素州	塔 影	一三〇二	中外商業邦畫結集展	齊田 素州	同	一三〇二
新日本畫研究會展	同	同	一三〇七	青龍展評	中川 紀元	福園日々					

登内微笑個展

佐藤 一英 美術評論 六ノ七

東京會展(十一年十二月)

神崎 憲一 塔影 一三ノ二

東京會展新作品展

藤森 順三 美術評論 六ノ一

東京會展覽會

羽黑 泉 美之國 一三ノ一

東京會展覽會

藤森 順三 美術評論 六ノ四

東京會展新作品展

鳥居 一正 塔影 一四ノ一

東京美術學校卒業製作展

神崎 憲一 同 一三ノ四

東京表装師組合第五回展

若秋樹一郎 同 一三ノ六

東臺邦畫會小品展

豊田 豊 同 一三ノ七

第十二回東臺邦畫展

佐藤 一英 美術評論 六ノ四

東京毎日新作畫展

荒村 生 塔影 一三ノ二

東京毎日社展覽會

藤森 順三 美術評論 六ノ七

堂本藝東丘社春風會第一回展

古山 順一 美術評論 四ノ三

讀畫會

讀畫會の諸作 金井 紫雲 アトリエ 一四ノ六

讀畫會展を見て

高澤 初風 塔影 一三ノ六

讀畫會展

大山 廣光 美術評論 四ノ三

讀畫會第三十同展評

本田 純一 美之國 一三ノ六

富岡鐵齋の藝術—遺墨展

添田 達嶺 塔影 一三ノ一

富田溪仙遺作展

如是觀溪仙 齋藤 隆三 同 一三ノ七

富田溪仙遺作展を觀て

神崎 憲一 同 同

富田溪仙遺作展

山川 草吉 南畫鑑賞 六ノ六

富田溪仙遺作展

岩佐 新 美術評論 一三ノ七

富田溪仙の想ふ

佐藤 一英 美之國 一三ノ七

富田溪仙遺作展を見て

佐藤 一英 文藝春秋 一五ノ八

富田溪仙遺作展

佐波 甫 同 七月

溪仙遺作掛軸展(梅軒畫廊主権)

神崎 憲一 塔影 一三ノ九

ナ—ホの部

名古屋松坂屋關西大家紙 杉浦 冷石 同 一三ノ三

本畫展

中川紀元日本畫個展 中川紀元氏日本畫展 三輪 鄰 塔影 一三ノ六

中川紀元日本畫個展

中川紀元氏日本畫展 中川紀元氏日本畫展 三輪 鄰 塔影 一三ノ六

中川紀元日本畫個展

中川紀元氏日本畫展 中川紀元氏日本畫展 三輪 鄰 塔影 一三ノ六

中川紀元日本畫個展

中川紀元氏日本畫展 中川紀元氏日本畫展 三輪 鄰 塔影 一三ノ六

中川紀元日本畫個展

中川紀元氏日本畫展 中川紀元氏日本畫展 三輪 鄰 塔影 一三ノ六

中川紀元日本畫個展

中川紀元氏日本畫展 中川紀元氏日本畫展 三輪 鄰 塔影 一三ノ六

中川紀元日本畫個展

中川紀元氏日本畫展 中川紀元氏日本畫展 三輪 鄰 塔影 一三ノ六

中川紀元日本畫個展

中川紀元氏日本畫展 中川紀元氏日本畫展 三輪 鄰 塔影 一三ノ六

中川紀元日本畫個展

中川紀元氏日本畫展 中川紀元氏日本畫展 三輪 鄰 塔影 一三ノ六

中川紀元日本畫個展

中川紀元氏日本畫展 中川紀元氏日本畫展 三輪 鄰 塔影 一三ノ六

中川紀元日本畫個展

中川紀元氏日本畫展 中川紀元氏日本畫展 三輪 鄰 塔影 一三ノ六

中川紀元日本畫個展

中川紀元氏日本畫展 中川紀元氏日本畫展 三輪 鄰 塔影 一三ノ六

中川紀元日本畫個展

中川紀元氏日本畫展 中川紀元氏日本畫展 三輪 鄰 塔影 一三ノ六

中川紀元日本畫個展

中川紀元氏日本畫展 中川紀元氏日本畫展 三輪 鄰 塔影 一三ノ六

中川紀元日本畫個展

中川紀元氏日本畫展 中川紀元氏日本畫展 三輪 鄰 塔影 一三ノ六

中川紀元日本畫個展

中川紀元氏日本畫展 中川紀元氏日本畫展 三輪 鄰 塔影 一三ノ六

中川紀元日本畫個展

中川紀元氏日本畫展 中川紀元氏日本畫展 三輪 鄰 塔影 一三ノ六

表裝同人會第十二回展

栗山弘三郎 塔影 一三ノ五

福田翠光個展

福田翠光個展 福田翠光個展 三輪 鄰 塔影 一三ノ五

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

表裝同人會第十二回展

栗山弘三郎 塔影 一三ノ五

福田翠光個展

福田翠光個展 福田翠光個展 三輪 鄰 塔影 一三ノ五

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

同

同 同 同 同

光風會展、春臺展、白日展 佐波 市 みづゑ 三八五
黒色、白蠟、新現實同時展 村井 正誠 アトリエ 一五〇一
時展 同 江川 和彦 美之國 一四〇一

サ リノ部

佐伯祐三遺作展

佐伯祐三遺作展覽會を 山川 草吉 南畫鑑賞 六ノ四
綴て 佐波 市 美之國 一三ノ四

三春會展

第四回三春會見物記 藤岡 一 美術 一二ノ七
第四回三春會 加山 四郎 美之國 一三ノ六

上杜會、三春會

佐波 市 みづゑ 六月
四行會第三回展評 中山 巍 同 三八四

四行會第四回展

江川 和彦 美術 一二ノ一
四行會第四回展 今井繁三郎 美之國 一三ノ九

自由美術家協會展

抽象主義の必然性と今 大澤 昌助 アトリエ 一四ノ八
後の問題 高橋 庸男 同 同

自由展雜評

第一回自由美術展評 江川 和彦 美術 一二ノ八
所謂前衛藝術への疑惑 摩壽意善郎 美之國 一三ノ八

自由美術家協會展への感想

内田 巖 同 同

自由美術家協會第一回展

瀧口修造 同 同

自由美術家展の印象

山崎 省三 同 同

諸「自由展評」への答

長谷川三郎 同 同

自由美術第一回展

佐波 市 みづゑ 三九〇

七彩會展

七彩會第二回展を觀る 大森 啓助 アトリエ 一四ノ六
七彩會を觀る 富田 重雄 美術 一二ノ六

七彩會展

福島繁太郎 みづゑ 六月

春陽會展と國展 鈴木 武久 美術 一二ノ五
春陽會作品評 中村 善策 同 同
第一回春陽會入選畫評 水谷 清 同 同
春陽會に就て 岡山 巖 美之國 一三ノ五
第一回春陽會展評 酒井 亮吉 同 同
春陽會合評 立陣社同人 同 同
春陽會會評 吉井 淳二 みづゑ 三八七
國展・春陽會の版畫 小野 忠重 同 同

〇

春陽會と國展 荒城 季夫 東朝 四・三一五
春陽會展評 猪熊弦一郎 報知 四・八一〇
春陽會と國展 林 武 新愛知 四・八一二
春陽會と國展 碓 伊之助 都 四・〇一二
女舞會展 外符素心庵 中外商業 四・三一二

女舞會第五回展 江川 和彦 美術 一二ノ一
女舞會展を見て 北川 民次 美之國 一三ノ三

上杜會展 中村 節也 アトリエ 一四ノ七
上杜會展評 大澤 昌助 美術 一二ノ七

上杜會短評 原 精一 美之國 一三ノ六
上杜會、三春會 佐波 市 みづゑ 六月

新挿繪を見る 木村 莊八 同 三九四
新時代展評(十一年十二月) 今井繁三郎 美之國 一三ノ一

新世紀美術家同盟第一回展 福吉一郎 アトリエ 一四ノ五

新制作派第二回展 今泉 篤男 アトリエ 一五ノ一
新制作派展を觀る 北川 民次 同 同

新制作派展感想 佐藤 敬 美術 一三ノ一

新制作派第二回展入選 荒城 季夫 同 同
新制作派展總評 荒城 季夫 美術 一四ノ一

新制作派展評 荒城 季夫 同 同

新制作派展寸評 荒城 季夫 同 同

新制作派第二回展 田中 忠雄 同 同

新制作第二回展の水繪 中西 利雄 同 同

新制作派展 荒城 季夫 東朝 二・三・四

新制作派協會展を見る 木下 孝則 報知 一二・一九
新制作派展を觀る 藤森 成吉 都 一二・一九
新造型展評 四宮 潤一 みづゑ 三八七
新美術家協會展 相良 德三 アトリエ 一四ノ四

新美術展に寄せて

新美術家協會展 佐波 市 美術 一二ノ四
新美術家協會展を見る 中村 節也 美之國 一三ノ四

新美術家協會展評 安井曾太郎 みづゑ 三八六
關口隆嗣君個展 加藤 謙 アトリエ 一四ノ九

荻原會展(十一年十二月) 相田 直彦 美之國 一三ノ一
荻原會展を見る 鈴木 誠 同 三八三

荻原會第十回展(十二年十二月) 中西 利雄 同 三八五

辻永邦風油彩畫展 三輪 鄰 塔影 一三ノ八

辻永邦風油彩畫展 小品展 大山 廣光 美術街 四ノ四

辻永邦風油彩畫展 棒貞雄氏個展評(十一年十二月) 今井繁三郎 美之國 一三ノ一

獨逸國寶名作素描展 獨逸國寶展覽會に就て ハンス・メ 國際建築 一三ノ六
二譯 小池新

ドイツの名作素描展 友枝 高彦 美之國 一三ノ五

獨逸國寶名作素描展 荒城 季夫 みづゑ 六月

東京派第一回展 エコール・ド東京展評 四宮 潤一 美術 一二ノ三

東京派展 「エコール・ド東京」第一回展に就て 瀧口 修造 美術 一三ノ二

東京派第二回展 瀧口 修造 美術 一三ノ二

東京派秋季展 江川 和彦 美術 一二ノ一

東京派第二回展 瀧口 修造 美術 一三ノ三

東京會展 加山 四郎 アトリエ 一四ノ四

東京會第五回展 鈴木 武久 美術 一二ノ四

東京會展評 渡邊 浩三 同 同

東京會展合評 野口 謙藏 同 同

東京會展評 佐波 市 みづゑ 三八六

動向展について 瀧口 修造 同 三八九

童林社展	佐波 市	みづゑ	七月
漆友會展寸評	宮本 三郎	同	三八五
獨立美術展	内田 巖	アトリエ	一四〇四
獨立美術作家論	宮本 三郎	同	同
獨立展を見る	長谷川三郎	同	同
批評	兒島善三郎	同	同
獨立、國畫、春陽會評	武者小路實篤	改造	一九〇五
獨立展評	佐波 市	美術	一二〇四
獨立展入選作評	井上長三郎	同	同
造型意識の問題	林 武等	同	同
第七回獨立展評	長谷川三郎	美之國	一三〇四
獨立展の新繪畫性とは	佐藤 敏	同	同
生彩なき獨立の抽象派	尾川 多計	同	同
獨立展雜感	吉岡 堅二	同	同
獨立展評	宮本 三郎	みづゑ	三八六
獨立展前衛繪畫について	瀧口 修造	同	同
獨立美術協會第七回合評	瀧口 修造	同	同
佐藤、阿部、米倉	伊勢 正義	同	同
○	長谷川三郎	同	同
獨立展評	嵯 伊之助	讀賣	三〇五・一七
獨立展評	柳 亮	報知	三〇六・一三七
獨立展	兒島喜久雄	東朝	三〇八・一二〇
今度の獨立展	外狩素心庵	中外商業	三〇三・二三
中村眞個展	江川 和彦	美術	一二〇・一一
中村眞個展	瀧口 修造	みづゑ	三九四
日本水彩畫會展	石井 柏亭	アトリエ	一四〇七
第二十四回日本水彩畫會展	春日部たすく	學校美術	一一〇七
六歳の子供の繪に就て	山中仁太郎	美術	一二〇七
第二十四回日本水彩畫評	中西 利雄	みづゑ	七月
廿四回日本水彩展評	今井繁三郎	美之國	一三〇三
野間仁根氏全作品發表展	黒田重太郎	みづゑ	三九五
白聖會第十五回展	渡邊 哲	現代美術	四〇二
白聖會第三回展を見る			

彫刻展覽會

英九、北尾淳一郎合同展	植村廉千代	みづゑ	六月
ビュルテ第三回展	佐波 市	同	同
表現第五回展	福澤 一郎	アトリエ	一四〇七
表現第六回展	瀧口 修造	みづゑ	七月
表現第六回展	江川 和彦	美術	一二〇・一一
「表現」第六回展	瀧口 修造	みづゑ	三九四
第六回フォルム展	江川 和彦	美術	一二〇・一一
三岸節子個展	江川 和彦	同	同
三岸節子個展	江川 和彦	同	同
三越洋畫小品展	今井繁三郎	美之國	一三〇三
未知會展	三岸 節子	みづゑ	六月
瀧谷國四郎遺作展	多田 信一	アトリエ	一四〇四
瀧谷國四郎氏の遺作	齋藤 興里	美術	一二〇四
瀧谷さんの遺作展を見て感じた事	木村 久太	同	同
瀧谷先生の遺作展を開くまで	阿以田治修	同	同
瀧谷國四郎遺作展の會場にて	小柴 錦侍	美之國	一三〇四
瀧谷國四郎遺作展	吉原 治良	みづゑ	六月
山本教輔氏個展	寺田 政明	同	三九四
吉井忠壽郎作品展	福澤 一郎	みづゑ	六月
米倉壽仁、阿部芳文二人展(十二年五月)	江川 和彦	美術	一二〇・一一
米倉壽仁、阿部芳文二人展	瀧口 修造	みづゑ	三九三
米倉壽仁、阿部芳文二人展(十二年九月)	園部 晋生	美術	一二〇・一一
立光會展評	中村 善策	アトリエ	一四〇八
立陣展	内田 巖	みづゑ	三九四
立陣展の感想			
立陣展			
朝倉盤展雜感	鈴木 史郎	美術	一二〇・一一
構造社展			

工藝展覽會

「彫刻」への反省	本郷 新	アトリエ	一四〇六
構造社其他一二の彫刻	大川 遼一	美術	一二〇六
第十回構造展を観る	大藏 雄夫	美之國	一三〇六
新構造社(十一年十二月)	大藏 雄夫	同	一三〇一
主観美術と新構造の彫刻	加藤 顯清	アトリエ	一四〇七
新彫塑協會第二回展	荒城 季夫	同	一四〇二
造型彫刻協會第二回展(十一年十二月)	清水多嘉示	美之國	一三〇二
造型彫刻協會第二回展評	豊田 勝秋	アトリエ	一四〇八
第三回造型彫刻協會展を観る	荒城 季夫	同	一四〇七
日本彫刻家協會展	大藏 雄夫	美之國	一三〇五
日本木彫會—東京展	同	同	一三〇二
横江嘉純君の彫刻展	柴崎 風碑	帝國工藝	一一〇九
印刷と出版文化展覽會について	同	同	一五〇四
大阪工協青年部の工藝	同	同	一五〇六
大阪産業工藝博の躍動	同	同	同
大原實學個展	同	同	同
青貝美術大原實學氏の個展	同	同	同
各務鎮三氏クリスタル硝子展	同	同	同
關東府縣聯合工藝品展示會(第四回)	同	同	同
京都市藝院第一回展	同	同	同
第一回京都市藝の展覽會を見る	同	同	同
京都市藝院第一回展	同	同	同
工人社展を観る	同	同	同
工人社第九回展覽會	同	同	同
工人社の新作展覽會	同	同	同
第九回工人社工藝展覽會	同	同	同
工藝齊々會新作展(十一年十二月)	同	同	同
實在工藝美術展	同	同	同

現代工藝文化の段階と
實在工藝展現的役割

第二回實在工藝美術展
出品物(圖録)

第二回實在工藝美術展
覽會(圖録)

第二回實在工藝美術展
を見る

第二回實在工藝美術展
の實

第二回實在工藝美術展
の實

第二回實在工藝美術展
の實

第二回實在工藝美術展
の實

第二回實在工藝美術展
の實

第二回實在工藝美術展
の實

第二回實在工藝美術展
の實

第二回實在工藝美術展
の實

第二回實在工藝美術展
の實

第二回實在工藝美術展
の實

第二回實在工藝美術展
の實

第二回實在工藝美術展
の實

第二回實在工藝美術展
の實

第二回實在工藝美術展
の實

第二回實在工藝美術展
の實

第二回實在工藝美術展
の實

第二回實在工藝美術展
の實

第二回實在工藝美術展
の實

日本輸出工藝品市俄古
陳列會の反響及出品に
對する批評

新人社第一回展(十二年十二月)

新人社第一回展(十二年十二月)

新人社第一回展(十二年十二月)

新人社第一回展(十二年十二月)

新人社第一回展(十二年十二月)

新人社第一回展(十二年十二月)

新人社第一回展(十二年十二月)

新人社第一回展(十二年十二月)

新人社第一回展(十二年十二月)

新人社第一回展(十二年十二月)

新人社第一回展(十二年十二月)

新人社第一回展(十二年十二月)

新人社第一回展(十二年十二月)

新人社第一回展(十二年十二月)

新人社第一回展(十二年十二月)

新人社第一回展(十二年十二月)

新人社第一回展(十二年十二月)

新人社第一回展(十二年十二月)

新人社第一回展(十二年十二月)

新人社第一回展(十二年十二月)

新人社第一回展(十二年十二月)

三越新設計室内裝飾展
觀(十一年十一月)

同(十二年十一月)

同(十二年十一月)

同(十二年十一月)

同(十二年十一月)

同(十二年十一月)

同(十二年十一月)

同(十二年十一月)

同(十二年十一月)

同(十二年十一月)

同(十二年十一月)

同(十二年十一月)

同(十二年十一月)

同(十二年十一月)

同(十二年十一月)

同(十二年十一月)

同(十二年十一月)

同(十二年十一月)

同(十二年十一月)

同(十二年十一月)

同(十二年十一月)

同(十二年十一月)

雜

二部、院展、三部會の彫
刻

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

行政及教育

藝術院及官展

帝國藝術院管見

帝國藝術院批判座談會

帝國藝術院論

帝國藝術院に與ふ

帝國藝術院の創設と新
文展

帝國藝術院の新設と展
覽會

帝國藝術院と展覽會問題	遠山 孝	汎工藝	一五〇七
藝術院、美術界漫語	岩佐 新	美術	一二〇八
文展	同	同	同
藝術院と文展問題(談)	鋼木 新	美術評論	六〇四
藝術院の成立と官展の進路	安田 靉彦等	美之國	一三〇七
帝國藝術院創設を斯う見る	石川 昂水	同	同
美術獎勵としての文展	田澤 田軒	同	同
第一回文展への期待	佐波 甫	同	一三〇八
〇	田澤 田軒	同	一三〇九

藝術院新設への期待(社説)	石井 柏亭	東朝	六〇一六
新文相への公開狀	杉山 平助	報知	六〇一七
「藝術院」を論ず	長谷川如是閑	東朝	六〇一八
藝術院とは	報知	讀賣	六〇一八
生れ出た帝國藝術院(社説)	報知	讀賣	六〇一九
藝術院の創設(社説)	讀賣	讀賣	六〇二〇
帝國藝術院人と制度批判	青野 季吉	東日	六〇二〇
帝國藝術院の問題	高木長太郎	大毎	六〇二〇
帝國藝術院の新設(社説)	菊池 寛等	中外商業	六〇二〇
藝術院の新設について(社説)	同	新愛知	六〇二〇
藝術院の意圖	戸坂 潤	都	六〇二〇
帝國藝術院に就いて	河上敬太郎	東朝	六〇二二
藝術院人選の不滿と難點(社説)	室伏 高信	中外商業	六〇二二
近衛内閣と藝術院	板垣 廣輝	讀賣	六〇二四
藝術院に於ける建築家選定の標準	同	東朝	六〇二四
革新が漸進か(社説)	小林 秀雄	同	六〇二六
帝國藝術院批判	高野 辰之	同	六〇二八
帝國藝術院批判―書道其他への感懷	同	同	同
藝術と官權(社説)	島崎 藤村	福岡日々	六〇二九
藝術院のこと―私の辭退したわけ	同	大朝	六〇二九
帝國藝術院批判―能樂愛好者の立場から	野上豊一郎	東朝	六〇三〇
帝國藝術院批判―詩壇の一人として	萩原朔太郎	同	七〇一二

行政

帝國藝術院批判―音樂評論家の立場から	鹽人 龜輔	東朝	七〇三
帝國藝術院批判―美術批評家として	兒島喜久雄	同	七〇四
藝術院私考	里見 淳	同	七〇九
〇	同	同	同
迎春感想	小室 翠雲	現代美術	四〇一
美術界安定のために	石井 柏亭	同	同
美術の明朗化	安井曾太郎	同	同
財政税の美術に及ぼす影響	正木 直彦	同	四〇二
同	同	同	同
美術圖書館に就て	矢代 幸雄	美術	一三〇二
大阪に國立工藝指導所設置に就て	同	美術	一三〇二
美術と官權	同	美術	一三〇二
美術行政問題と打診する	同	美術	一三〇二
〇	同	美術	一三〇二
美術と財産税	同	美術	一三〇二
國寶の保存について	同	美術	一三〇二
文化勳章の新制(社説)	同	美術	一三〇二
文化勳章に就て	同	美術	一三〇二
名城毀損と國寶管理(社説)	同	美術	一三〇二
白鷺城の爆破事件(社説)	同	美術	一三〇二
美術品の課税	同	美術	一三〇二
文化勳章の授與(社説)	同	美術	一三〇二
文化勳章の人々―畫壇の四人	同	美術	一三〇二
帝國博物館の竣工	同	美術	一三〇二

教育

圖畫手工教育に對する一般社會の要望	山崎 儀重	學校美術	一一〇一
學校教育の革新と圖畫手工(二)	小西 美良	同	同
いい繪々いい繪―兒童畫鑑別の問題	山崎 省三	同	同
構成教育への疑問	同	同	同
〇	同	同	同
美術と財産税	同	美術	一三〇二
國寶の保存について	同	美術	一三〇二
文化勳章の新制(社説)	同	美術	一三〇二
文化勳章に就て	同	美術	一三〇二
名城毀損と國寶管理(社説)	同	美術	一三〇二
白鷺城の爆破事件(社説)	同	美術	一三〇二
美術品の課税	同	美術	一三〇二
文化勳章の授與(社説)	同	美術	一三〇二
文化勳章の人々―畫壇の四人	同	美術	一三〇二
帝國博物館の竣工	同	美術	一三〇二

第三回四國圖畫手工大會	五島 五郎	學校美術	一一〇一
自由學園工藝教育展を見	武井 勝雄	同	同
文部省主催圖畫科講習會	淺野 秀一	同	一一〇二
子供漫畫の新研究―六	大田 耕士	同	一一〇六
昭和十一年回顧座談會	同	同	同
一月の教材研究	板倉 贊治	同	一一〇二
水彩畫と日本畫	二見 確	同	同
新工藝の美	高森 均	同	二〇二三
圖畫科の仕事として	矢崎 好幸	同	一一〇二
教育セメント工の躍進―全國セメント作品展審査	武井 勝雄	同	同
再び構成教育と日本精神について	同	同	同
西洋美術の知識と鑑賞七一	同	同	同
美術教育聯盟の結成・其他	同	同	同
圖畫手工の先生への希望	倉橋 惣三	同	同
構成教育をめぐる	同	同	同
櫛須賀中學校の構成教育による圖畫作業科を觀る	同	同	同
小學教育への思ひ出	同	同	同
學美十歳一、二	同	同	同
低學年圖案指導の革新	同	同	同
學制改革、手工教育座談會	同	同	同
速かに專任文相の就任を望む	同	同	同
現代美術への憧憬	同	同	同
農村圖畫教育の志向性	同	同	同
國際素描コンクール	同	同	同
マニラに於て	同	同	同
學校展覽會と其立案方法	同	同	同
尋常科二學年に於ける繪と綴方の同時的表現	同	同	同
構成教育を取入れたる技能科研究會	同	同	同

青年教育家の胸を打つもの	中西 良男	學校美術	一一ノ四	歌木だより一三	武井 勝雄	學校美術	二ノ九一二	圖畫教師の問題	淺野 秀一	圖畫と手工	二一ノ四
教育美術館を建設せよ	後藤福次郎	同	一一ノ五	想畫指導一問一答錄	中西 良男	同	二ノ九一二	作業科施設概況	志賀福太郎	同	同
科學と美術	正木 直彦	同	同	水彩指導一問一答錄一二	赤津 隆助	同	二ノ九一二	今樣編輯錄一四	原 貫之助	同	三ノ五、六、七〇
改正第一小學圖畫と想畫	中西 良男	同	同	巴里會議と博覽會	武井 勝雄	同	一一ノ一〇	兒童畫に於ける畫材考察	大友 一三	同	二一ノ五六
教育者の美術に就て	開道 清	同	同	戰火、專科教員の爆發	松田 操	同	同	昭和十二年美育の動向	宮本 幸恵	同	二一ノ六
比島の學童作品に就て	大平 茂樹	同	同	「小學圖畫」の意義	岡登 貞治	同	同	農村手工教育振興論上・下	戸田 忠吾	同	二一ノ六七
五月の教材研究	同	同	同	莫大の實を贏ち得た國際素描コンクール	岡登 貞治	同	同	小學校に於ける圖畫教育	淺野 秀一	同	二一ノ六
渡歐所感―第八回國際美術教育會議日本委員諸氏	同	同	一一ノ六	現代圖畫教育の革新―主知的圖畫教育の提唱―一、二	岡田 清	同	二ノ二、二	圖畫教育教師論	大友 一三	同	二一ノ六
渡歐日本委員十三氏略歴	同	同	同	國際美術教育會議より戻つて	田邊 孝次	同	一一ノ二一	板倉實治畫集と日本圖畫教育	宮本 幸恵	同	二一ノ七
現代世相と美術教育會議	同	同	同	建築より見た手工藝教育	山脇 巖	同	同	教育圖畫の一考察	長澤 菊慈	同	二一ノ八
教育圖畫の提唱及實踐	後藤福次郎	同	一一ノ六七	戰時と美育	開道 清	同	同	西日本學童スケッチ大會の組織	山下 一雄	同	同
構成教育に望む	林 清	同	一一ノ六	專科、男往して可なり―松田氏の説を駁す	宮崎 勳	同	同	圖畫研究會記錄	大阪美育協會中學部	同	同
全國手工教育大會概況	橋山 茂	同	同	肖像畫のできるまで	岸邊 福雄	同	同	第八回長野縣圖畫作業(工作)研究會記事	津金 元治	同	同
手工、工業訓導協議會略報	同	同	同	(山本勝筆)	同	同	同	世界教育會議に出席して	長澤 菊慈	同	一一ノ九
六月の教材研究	田邊 孝次	同	一一ノ七	圖畫手工教育への手榴彈	石谷 山人	同	一一ノ一二	日本小學に於けるArt and Handcraft Education	小林 澄兄	同	同
東西を相顧みて―渡歐に際し學美の會員諸君へ	同	同	同	回想の板倉氏	後藤福次郎	同	同	世界教育會議の印象	前田 多門	同	二一ノ九
安井新文相に呈す	岡田 清	同	同	第八回國際美術教育會議記錄	武井 勝雄	同	同	第八回國際美術教育會議大壁畫完成の使用を果して	田邊 孝次	同	同
圖畫時代への期待	宮本 孝	同	同	圖畫教育時評	江見 重吉	同	二一ノ一、三	平田先生の講演並に講習會	秋山 任	同	同
七月の教材研究	同	同	同	手工教育の反省と態度	光岡 始	同	同	愛知縣西尾中學校落成記念展	岩田 民也	同	同
兒童畫の發展性	武田新太郎	同	一一ノ八	東京府立第八高女落成記念展覽會を觀る	原 與志人	同	二一ノ一	用器畫の再檢討	本間 良助	同	二一ノ一〇
現代日本の手工教育	三吉 正雄	同	同	小島勇君を惜しむ	土屋 常義	同	同	手工科に於ける勞作理念の確立を説きて現行手工教育の方途を示す上、下	佐藤 十織	同	三ノ一〇、一一
世界教育會議と教育展覽會に就て	矢崎 好幸	同	同	圖畫教育の使命と構成教育	伊藤好太郎	同	二一ノ二	北海道人圖畫講習會後記(平田松堂先生北海道講習行脚の記)	谷 喜一	同	二一ノ二
兒童畫の本質に對する一考察	中西 良男	同	同	圖畫科の郷土化をめぐりて	岡田 清	同	同	東京美術學校圖畫師範科創設三十周年記念記事	宮下 孝雄	同	二一ノ二
モチーフと新圖案の研究	岩崎喜久雄	同	同	神奈川圖畫教育研究會例會	久保 一	同	同	第七回世界教育會議にのぞみて―一、二	石谷辰治郎	同	二一ノ二
世界教育會議圖畫手工裁縫教育部に對する二つの遺憾	岡登 貞治	同	一一ノ九	當原昌松君を悼む	佐藤 十織	同	同	圖畫手工教育の根本問題	土屋 常義	同	一三ノ一
日本小學校に於ける「Amateur by Right」の特別委員會	同	同	同	美術に於ける國際化と民族化	森口 多里	同	二一ノ三	日本圖畫教育の精神―教育家と藝術家とを區別せよ	田村 宗吉	同	同
「Amateur by Right」の特別委員會	同	同	同	手工作業教育界の觸感	小松澤正徳	同	同	圖案の指導法	同	同	同
世界教育會議の六日間	岡登 貞治	同	同	圖畫教育家の將來如何	淺野 秀一	同	同				
世界教育會議の六日間	同	同	同	東京美術學校卒業式當日に於ける學校長の告辭	芝田 徹心	同	二一ノ四				
世教・教育展に於ける粘土・石膏・セメント工	矢崎 好幸	同	同	手工教育革新の方途一、二	松井 清人	同	二一ノ四、五				

福岡縣圖畫教育大會記	山下 一雄	美術	一三〇一	日本に於ける美術史の教	杉山 司七	美術	一三〇八	(一六頁ヨリ)	千手觀音廿八部衆像	絹本着色	同	奈良縣	法起寺藏
茨城縣圖畫研究大會概況	原口幸治郎	同	同	鑑賞教育雜誌	多賀谷健吉	同	一三〇九	春日曼荼羅圖	同	同	同	奈良縣	興福寺藏
圖畫の客觀的指導法(中學生には如何に教ふべきか)一五	山下 金治	同	三〇二一六	商業美術の指導について	前坂順三郎	同	三〇九一〇	春日曼荼羅圖(國寶)	同	同	同	奈良縣	興福寺藏
第四回宮城縣圖畫習字教育研究會	志野 雅美	同	一三〇二	三重縣美術研究會第三回大會記	染川清一郎	同	一三〇九	春日淨土曼荼羅圖(國寶)	同	同	同	奈良縣	興福寺藏
第三回四國圖畫手工教育大會	坂本 義信	同	同	大阪美術協會中學部圖畫研究會	寛 敦良	同	同	春日宮曼荼羅圖	同	同	同	奈良縣	東大寺藏
協議研究會の概況	坂本 義信	同	同	圖畫教育二十五年の回顧	石谷辰治郎	同	三〇一〇三	春日神社寺曼荼羅圖	同	同	同	奈良縣	興福寺藏
手工科作品を顯る	平木 秀夫	同	同	世界教育會議を語る	眞先 香苗	同	一三〇一〇	春日曼荼羅圖	同	同	同	奈良縣	久度神社藏
第四回京都府美術研究會	倉田 德松	同	同	歐米の旅より一、二	杉山 司七	同	三〇一〇、二	春日曼荼羅圖	同	同	同	奈良縣	稻垣祐義藏
原田隆彌先生を繞る美術界の佳話	杉山 司七	同	同	圖畫教育の本當	本間 良助	同	一三〇一	二月堂曼荼羅圖	同	同	同	奈良縣	伊古馬都比古神社藏
明日への圖畫教育	松田 義之	同	一三〇三	美術家の見たる圖畫教育	乗本 吾一	同	同	生駒宮曼荼羅圖	同	同	同	奈良縣	長谷寺藏
圖畫教育思潮を打診して	森山 一虎	同	同	我が經驗するもの	谷 德藏	同	同	花鳥圖	絹本着色	同	同	奈良縣	東大寺藏
作業科の體驗を語る一	宮本 幸惠	同	三〇三三五	教育の藝術化について	山下 一雄	同	一三〇一二	執金剛神緣起	紙本着色	同	同	奈良縣	東大寺藏
明治大正の圖畫教科書	杉山 司七	同	一三〇三、七、九、一二	環境美化と行的圖畫	松田 操	同	同	慈恩大師像	絹本着色	同	同	奈良縣	毛利喜右衛門藏
圖畫科の用途	石川欽一郎	同	一三〇四	圖畫教育の方針(生活化の私見)	高橋 陽一	同	同	不動明王二童子像	絹本着色	同	同	奈良縣	辰巳外五家藏
圖畫教室と其の經營諸問	松田 操	同	同	第十一回靜岡縣圖畫教育研究會	三澤 佐助	同	同	阿彌陀如來像	絹本着色	同	同	奈良縣	土居通憲藏
フイリツピンの美術と生活	大平 茂樹	同	同	美術學校に對する希望	和田 英作	美術	一二〇二、五						
女學校美術教育寸言	田村 宗吉	同	同	繪畫及び圖畫教育について	和 田 英作	同	一二〇八						
圖畫教育を至めるもの	原 義人	同	一三〇五										
政治、教育、美術	伊藤好太郎	同	一三〇六										
壓迫下に喘ぐ中學校の圖畫科	山口 唯雄	同	同										
國際美術教育會議に往く人送る人	内藤 秀因	同	同										
世界教育會議に注目する我が國獨自の商業美術	改井 德憲	同	同										
鑑賞教育管見	山下 一雄	同	一三〇七										
東京府作業教育座談會	長谷川規矩進	同	同										
眼の教育	名取 堯	同	一三〇八										
芥子園畫傳と構成教育	岡田 秀雄	同	同										
愛知縣圖畫教育研究會第十回大會記	同	同	同										
第八回長野縣圖畫作業教育研究會	森 壽正	同	同										
正常水彩の主眼と快著板倉贊治畫集	細島 昇一	同	同										

(二二頁ヨリ)

古廬屋富士釜	三、〇〇〇	太郎庵中壽老三幅對	二、〇〇〇
唐物炭斗	三、〇〇〇	梅逸狸	二、三〇〇
德元在銘鐵捻火箸	二、三九八	織部瓢茶入	二、五〇〇
志野四方八角向附	三、五〇一	根來瓢箪薄茶器	二、〇〇〇
織部獅子撮香爐	二、五一〇	御本半使茶碗	三、五〇〇
存星樓閣人物軸盆	四、一五〇	宗也手造黑茶碗	二、五〇〇
南蠻鉦	三、〇〇〇	古天貓龜甲地紋尾垂釜	三、〇〇〇
無爲庵手造黑茶碗	四、八〇〇		

現代美術關係單行圖書

總說

書名

來城美術展覽會圖錄(第七回)

編者名 發行所
いはらき新聞 同社(水戸)

岩村透と近代美術

清見 陸郎 聖文閣

現代哲學全集 第二十卷 美術

外山卯三郎 建設社

現代日本の藝術

板垣 鷹雄 信正社

大禮記念京都美術館 昭和十年度

同館編 同館(京都)

朝鮮美術展覽會圖錄(第一六回)

同館編 同館(京城)

帝室博物館年報 昭和十一年度

同館編 同館

東京帝室博物館復興事業の概要

同館復興翼 同館

二科畫集(第二四回)——週刊朝日臨時增刊

朝日新聞社編 同社

二科展圖錄(第二四回)

同圖錄刊行會 同會

日本及西洋の美術

今井伴次郎 成武堂

日本美術院展覽會圖錄(第二四回)

三森連象共著 大塚巧藝社

日本美術年鑑 昭和十二年版

美術研究所編 同所

美術年鑑 昭和十二年版

美術年鑑社編 同社

美術の現實を語る

一氏 義良 綜合美術研究所

表現の問題

金原 省吾 古今書院

明治大 三聖代名作美術展目錄

朝日新聞社編 同社

明治和 三聖代名作美術展覽會圖錄

朝日新聞社編 同社

文部省美術展覽會原色畫帖

美術工藝會編 同會

日本畫

宇田萩郎作畫集
落合則風追慕

土井撰美堂 雲舞堂(京都)
同 聯盟

伏原春芳堂
明則美術聯盟共編

日本畫會展覽會圖錄
麥僊スケツチ集
花蘭萬舟丹心畫帖

勝田哲作品集

歌舞伎繪

土井久編編

雲舞堂(京都)

松岡映丘畫集

滿洲事變繪卷 一一五

墨人會俱樂部

同俱樂部

深山人遺作集

深山人遺作集

三宅鳳白畫

雲舞堂(京都)

松岡映丘畫集

滿洲事變繪卷 一一五

墨人會俱樂部

同俱樂部

深山人遺作集

深山人遺作集

三宅鳳白畫

雲舞堂(京都)

松岡映丘畫集

滿洲事變繪卷 一一五

墨人會俱樂部

同俱樂部

深山人遺作集

深山人遺作集

三宅鳳白畫

雲舞堂(京都)

松岡映丘畫集

滿洲事變繪卷 一一五

墨人會俱樂部

同俱樂部

深山人遺作集

深山人遺作集

三宅鳳白畫

雲舞堂(京都)

松岡映丘畫集

滿洲事變繪卷 一一五

墨人會俱樂部

同俱樂部

深山人遺作集

深山人遺作集

三宅鳳白畫

雲舞堂(京都)

松岡映丘畫集

滿洲事變繪卷 一一五

墨人會俱樂部

同俱樂部

深山人遺作集

深山人遺作集

三宅鳳白畫

雲舞堂(京都)

松岡映丘畫集

滿洲事變繪卷 一一五

墨人會俱樂部

同俱樂部

深山人遺作集

深山人遺作集

三宅鳳白畫

雲舞堂(京都)

松岡映丘畫集

滿洲事變繪卷 一一五

墨人會俱樂部

同俱樂部

深山人遺作集

深山人遺作集

三宅鳳白畫

雲舞堂(京都)

松岡映丘畫集

滿洲事變繪卷 一一五

墨人會俱樂部

同俱樂部

深山人遺作集

深山人遺作集

三宅鳳白畫

雲舞堂(京都)

松岡映丘畫集

滿洲事變繪卷 一一五

墨人會俱樂部

同俱樂部

深山人遺作集

深山人遺作集

三宅鳳白畫

雲舞堂(京都)

松岡映丘畫集

滿洲事變繪卷 一一五

墨人會俱樂部

同俱樂部

深山人遺作集

深山人遺作集

三宅鳳白畫

雲舞堂(京都)

松岡映丘畫集

滿洲事變繪卷 一一五

墨人會俱樂部

同俱樂部

深山人遺作集

深山人遺作集

三宅鳳白畫

雲舞堂(京都)

松岡映丘畫集

滿洲事變繪卷 一一五

墨人會俱樂部

同俱樂部

深山人遺作集

深山人遺作集

三宅鳳白畫

雲舞堂(京都)

松岡映丘畫集

滿洲事變繪卷 一一五

墨人會俱樂部

同俱樂部

深山人遺作集

深山人遺作集

三宅鳳白畫

雲舞堂(京都)

松岡映丘畫集

滿洲事變繪卷 一一五

墨人會俱樂部

同俱樂部

深山人遺作集

深山人遺作集

三宅鳳白畫

雲舞堂(京都)

松岡映丘畫集

滿洲事變繪卷 一一五

墨人會俱樂部

同俱樂部

深山人遺作集

深山人遺作集

三宅鳳白畫

雲舞堂(京都)

松岡映丘畫集

滿洲事變繪卷 一一五

墨人會俱樂部

同俱樂部

深山人遺作集

深山人遺作集

三宅鳳白畫

雲舞堂(京都)

松岡映丘畫集

滿洲事變繪卷 一一五

墨人會俱樂部

同俱樂部

深山人遺作集

深山人遺作集

三宅鳳白畫

雲舞堂(京都)

松岡映丘畫集

滿洲事變繪卷 一一五

墨人會俱樂部

同俱樂部

深山人遺作集

深山人遺作集

三宅鳳白畫

雲舞堂(京都)

松岡映丘畫集

滿洲事變繪卷 一一五

墨人會俱樂部

同俱樂部

深山人遺作集

深山人遺作集

三宅鳳白畫

雲舞堂(京都)

松岡映丘畫集

滿洲事變繪卷 一一五

墨人會俱樂部

同俱樂部

深山人遺作集

深山人遺作集

三宅鳳白畫

雲舞堂(京都)

松岡映丘畫集

滿洲事變繪卷 一一五

墨人會俱樂部

同俱樂部

深山人遺作集

深山人遺作集

三宅鳳白畫

雲舞堂(京都)

松岡映丘畫集

滿洲事變繪卷 一一五

墨人會俱樂部

同俱樂部

深山人遺作集

深山人遺作集

三宅鳳白畫

雲舞堂(京都)

松岡映丘畫集

滿洲事變繪卷 一一五

墨人會俱樂部

同俱樂部

深山人遺作集

深山人遺作集

三宅鳳白畫

雲舞堂(京都)

松岡映丘畫集

滿洲事變繪卷 一一五

墨人會俱樂部

同俱樂部

深山人遺作集

深山人遺作集

三宅鳳白畫

雲舞堂(京都)

松岡映丘畫集

滿洲事變繪卷 一一五

墨人會俱樂部

同俱樂部

深山人遺作集

深山人遺作集

三宅鳳白畫

雲舞堂(京都)

松岡映丘畫集

滿洲事變繪卷 一一五

墨人會俱樂部

同俱樂部

深山人遺作集

深山人遺作集

三宅鳳白畫

雲舞堂(京都)

松岡映丘畫集

滿洲事變繪卷 一一五

墨人會俱樂部

同俱樂部

深山人遺作集

深山人遺作集

三宅鳳白畫

雲舞堂(京都)

松岡映丘畫集

滿洲事變繪卷 一一五

墨人會俱樂部

同俱樂部

彫刻

木村五郎作品集
造祐の彫刻と繪
橋本平八作品集

日本美術院編 同 院
藤井 浩祐 昭和書房
日本美術院編 同 院

建築

秋田山形縣農村住宅素人設計
懸賞募集當選圖集

同潤會編 同 會
小林 乙彦 住宅改良會
城南書院編 城南書院

美しき民家を尋ねて

本間 乙彦 住宅改良會
城南書院編 城南書院

ヴォーリス建築事務所作品集
歐米新建築紹介號(一九三六年
後期)日本建築士二〇卷二號

日本建築士會 同 會
日本建築士會 同 會

歐米新建築紹介號(一九三七年
前期)日本建築士二一卷三號

日本建築士會 同 會
日本建築士會 同 會

オリムピック競技場

同潤會編 同 會
北尾 春道 洪洋社

錦華寮建築圖譜
警察署建築の研究
現代の都市美

同潤會編 同 會
岡本三良助 警察協會
都市美協會編 同 會

建築金物

山本 貞吉 城南書院
同潤會編 同 會

建築寫眞類聚 第九期

同潤會編 同 會
同潤會編 同 會

第二十二輯 商店建築外觀集

同潤會編 同 會
同潤會編 同 會

第二十三輯 近代數寄屋住宅

同潤會編 同 會
同潤會編 同 會

第二十四輯 和洋玄關集(一)

同潤會編 同 會
同潤會編 同 會

建築寫眞類聚 第十期

同潤會編 同 會
同潤會編 同 會

第一輯 名古屋汎太平洋平和博建築圖集

同潤會編 同 會
同潤會編 同 會

第二輯 床の間集(五)

同潤會編 同 會
同潤會編 同 會

第三輯 劇場と映畫館

同潤會編 同 會
同潤會編 同 會

最新建築製圖 上編

工業教育振興 同 會

最新日本建築構造

土居 清 鐵道圖書局

サンマーハウス

西村 久二 第一書房

寺院建築構造法

横山 好治 信友堂

住宅叢書

中村興實年 櫻文書院

第五輯 四、五十坪の住宅圖案集

住宅改良會編 同會(大阪)

趣味の住宅建築

報知新聞社編 鈴木書店

聚樂社叢書

石川憲治編 聚樂社

第二卷 日本農民建築(第八輯

福井、三重、滋賀縣) 同 會

新住宅の設計と施工

西村 久二 第一書房

圖解式店舖設計の實際

川喜田煉七郎 誠文堂新光社

圖住宅と設計の知識

小泉武夫、廣 輔仁社

數寄屋聚成

田榮三共著 同 會

第十二卷 近代數寄屋名席聚(書院式茶室)

洪洋社編 同 會

第二十卷 數寄屋建築構造聚(續室內構成)

岸田日出刀 丸善株式會社

第十一回オリムピック大會と競

技場 同 會

中條精一郎

國民美術協會 同 會

帝國議會議事堂竣工式典記錄

營繕管財局編 同 會

東京都市計畫概要

東京市監査局 同 會

あらた代の巻

京都婦衣研究 同 會

石川縣工藝指導所業務功報

告 昭和十一年度 同 會

應用大圖按畫と其創作描法

關田三郎助 同 會

カワト圖案

萬 富三 大明堂

家庭工藝圖案的構成指導

宮下 孝雄 太陽堂

協會檢討圖案展

高坂三之助編 同 會

京都工藝産業の一考察

京都商工會議 同 會

近代家具裝飾資料 九一五

桂友 第三九回 染織夏帶展集 同 會

桂友 第三九回 染織夏帶展集

桂友同機會編 同 會

桂友同機會編 第二二回、第二三回

桂友同機會編 同 會

原 圖案事典

學校美術協會 同 會

絢染會展觀作品集(第一七回)

編 同 會

五百選新作圖集 一一四

和田三造編 同 會

工藝の形態的基礎

高村 豐周 同 會

嶺新實物大手藝圖案集 第一輯

二宮 佐 同 會

色彩圖案大觀

內藤 良治 同 會

室內家具裝飾法

遠藤 武 同 會

秀華帖

飯沼秀郎編 同 會

聚麗紅梅帖

聚麗小町帖 同 會

京都婦衣研究 同 會

關田三郎助 同 會

萬 富三 大明堂

宮下 孝雄 太陽堂

高坂三之助編 同 會

京都商工會議 同 會

桂友 第三九回 染織夏帶展集 同 會

桂友同機會編 同 會

桂友同機會編 同 會

學校美術協會 同 會

編 同 會

和田三造編 同 會

高村 豐周 同 會

二宮 佐 同 會

內藤 良治 同 會

遠藤 武 同 會

飯沼秀郎編 同 會

聚麗紅梅帖 同 會

聚麗小町帖 同 會

京都婦衣研究 同 會

關田三郎助 同 會

萬 富三 大明堂

宮下 孝雄 太陽堂

高坂三之助編 同 會

京都商工會議 同 會

桂友 第三九回 染織夏帶展集 同 會

桂友同機會編 同 會

桂友同機會編 同 會

學校美術協會 同 會

編 同 會

和田三造編 同 會

高村 豐周 同 會

二宮 佐 同 會

內藤 良治 同 會

遠藤 武 同 會

飯沼秀郎編 同 會

聚麗紅梅帖 同 會

聚麗小町帖 同 會

京都婦衣研究 同 會

關田三郎助 同 會

萬 富三 大明堂

宮下 孝雄 太陽堂

高坂三之助編 同 會

京都商工會議 同 會

桂友 第三九回 染織夏帶展集 同 會

桂友同機會編 同 會

桂友同機會編 同 會

學校美術協會 同 會

編 同 會

和田三造編 同 會

高村 豐周 同 會

二宮 佐 同 會

內藤 良治 同 會

遠藤 武 同 會

飯沼秀郎編 同 會

聚麗紅梅帖 同 會

聚麗小町帖 同 會

續啓明帖

大圖着尺集 第一、二、三、一四

審の装

夏もやう嵯峨物語

羽子板

百選會圖錄 第五七、五九回

首圖考 小倉のにしき 五

冬小袖彩華倭文

振袖模様集

邦畫趣味衣裳

まつかけ

水百趣 上・下

木材工藝叢書

第二輯 書齋家具

第三輯 座間接の家具

第十四輯 簞笥と鏡臺

第十五輯 茶棚と飾棚

第二十七輯 椅子張

木材工藝法

六人の村圖錄 第一七回

割付百趣 上

六潮會圖錄

アタラシイ 略畫のおけいこ

簡 松田式竹細工

教育圖畫の實踐

教授 日本美術の概説

資料 現代教育學大系

九紅商店(京都)

支店考案部編

内田美術書肆

高島屋編

名匠會編

山田徳兵衛

百選會編

飯田 始見

名匠會編

中川華郎編

柏壽園編

市田商店編

河原崎是洞

鈴木 太郎

小林 登

榎本安五郎

小栗 吉隆

熊井 七郎

本間 一男

孝學友彰編

河原崎是洞

隨下又平編

千葉 榮

松田鐵太郎

長澤 菊燕

野島 好二

成 美 堂

國定教科書 黑板畫

國定標準 水彩畫指導の實際

第五、六 實用 手工教育體系

指導 趣味の手工新教材

趣味の手工新教材

小學教育大講座

第十卷 圖畫教育

第十一卷 手工教育

第六の手工教育

圖案の構成指導

圖畫學習指導原論

圖畫指導の學年的伸展

綜合的 新手工指導の實際

發展 略畫と圖案集

風論 實際 第六の手工教育

海外工藝の新傾向

海外現實主義作品集(みづ

ゑ臨時増刊 三八八號)

解説綜合美術史要

近代美術思潮講座

第一卷 レアリズム

第二卷 フォーヴィズム

第三卷 キュービズム

第四卷 シュールレアリスム

第五卷 フューチユリズム

第六卷 ダダイズム、エクス

スプレツシヨニズム

綜合美術研究

上 甲二郎

大竹 拙三

南雲ハツヨ

橋井 曹一

松原 郁二

三苗 正雄

山形 寛

宮下 孝雄

三苗 正雄

中村 武

三村 正一

日本美術會編

山形 寛

東洋圖書株式

厚生 閣

同治圖書株式

會社(山口)

山口縣師範學

校附屬小學校

圖畫教育研究

會社(山口)

太 陽 堂

賢文 館

三友 社

三友 社

非 凡 閣

原色 現代洋畫コレクション

版第一、四卷

支那と佛蘭西美術工藝

第十八世紀フランス繪畫の研究

續ロダンの言葉

ソヴェート藝術の二十年

ドオミエと彼の時代

式 世界美術全史

第一卷 埃及、其他

第二卷 希臘、古羅馬

ルネサンスの根本概念

一政隨筆

オール日本新進漫畫集 第一輯

同題七十年

戲畫漫文

彩管余録

財産税の美術に及ぼす影響

十三松堂閑話録

匠人談義

程春記

通俗色彩談話

配色大鑑

様時代の

妖精の距離

愛知縣工藝叢書 第十三編

櫻雲洞畫譜

大潮會展圖錄(第一回)

アトリエ社編

小林太市郎

坂崎 坦

高村光太郎

譯編

昇 曙夢

鈴木秀三郎

柳 亮譯註

岩月太刀夫

興文 社

中川一政

岸田日出刀

日本漫畫研究

會編

正木 直彦

長谷川春子

新井 紀一

正木 直彦

正木 直彦

藤島亥治郎

富田 輝夫

河島鐵造編

川島理一郎

瀧口修造詩

阿部芳夫畫

同縣工藝協會

同縣工藝協會

同 社

弘文 堂

岩波書店

叢文 閣

大東出版社

泰山 房

アトリエ社

同 會

同 會

同 會

同 會

同 會

同 會

同 會

同 會

同 會

同 會

同 會

同 會

同 會

同 會

同 會

同 會

同 會

同 會

同 會

同 會

古美術定期刊行物所載文獻

總説・綜録

東洋美術研究文獻目録

昭和十一年度

古美術品鑑識の光學的研究

國寶展談會記

建築、繪畫、工藝（奈良時

代）

美術（平安後期）

美術（安土桃山時代）

美術（江戸前期）

美術史一夕話（少壯學徒座談會記）

佛像佛畫の發達

佛像佛畫講話

鍬金の時代性に就て

日本美術に於ける郷土的性格

藤原美術展に就て

日本の四天王像に就て

傳教大師像の種々相

幼いものに對する愛（一、二

弘仁藝術の上から見た廣隆

寺

山栗抄

道歌山房雜記

十三松堂縱談

官國幣社寶物々語

深大寺と國分寺

千葉縣龍角寺

美術研究 六七

同 七二

畫 設二

日本文化史大系奈良文

化

同 平安後期文化

同 安土桃山文化

同 江戸前期文化

畫 設四

國 華 五五六

史迹と美術八〇、一五

國 華 六八、一〇

國 華 六八、一〇

國 華 六八、一〇

國 華 六八、一〇

國 華 六八、一〇

國 華 六八、一〇

國 華 六八、一〇

國 華 六八、一〇

國 華 六八、一〇

國 華 六八、一〇

國 華 六八、一〇

國 華 六八、一〇

國 華 六八、一〇

國 華 六八、一〇

國 華 六八、一〇

都返りの茶人と九龍屏風

寛政二 浪華郷友錄（公刊）

年版四 浪華郷友錄（公刊）

南都土門本名物集（校刊）

空中齋鈔鈔（校刊）

可無流知

高句麗の藝術をたづねて（一、二

長谷寺參詣

皇軍占據北支佛教藝術の實

庫

支那上代散佚畫書攷

印度の旅上、下

今村 龍一

小林 剛

國 華 五五四

畫 設四、五

國 華 五五四

國 華 五五四

國 華 五五四

國 華 五五四

國 華 五五四

國 華 五五四

國 華 五五四

國 華 五五四

國 華 五五四

國 華 五五四

野田 九浦

塔 影

一三〇、四

美術研究 六四

同 六三

同 六三

同 六三

同 六三

同 六三

同 六三

同 六三

同 六三

同 六三

同 六三

同 六三

同 六三

同 六三

同 六三

同 六三

同 六三

同 六三

同 六三

同 六三

同 六三

同 六三

同 六三

二十五菩薩來迎圖繪屏

京都禪林寺藏

五大力菩薩像

和歌山北室院藏

五大明王像

東京鎌倉芳太郎氏藏

大威德明王圖

奈良唐招提寺藏

（圖版解説）

大威德明王像

奈良唐招提寺藏

不動明王像

京都光臺院醍醐寺藏

善女龍王像

京都光臺院醍醐寺藏

仲安梵師筆不動二童子像に梅津 次郎

關して

愛染明王圖

滋賀總持寺藏（圖版解説）

孔雀明王像

東京侯爵井上三郎氏藏

十二天像

京都教王護國寺藏

十二天像

同

同

十二天像

滋賀來迎寺藏

十二天像

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

美之國 一三〇、一〇

日本國寶 七八

同 七四

美術研究 六九

宗教研究 一四〇、二

大和王寺史論

美術研究 七一

東洋建築 一〇、四

日本國寶 七八

史迹と美術八〇、三

美術研究 六四

日本國寶 七八

同 七四

同 七四

同 七四

同 七四

同 七四

同 七四

同 七四

同 七四

同 七四

同 七四

同 七四

同 七四

同 七四

同 七四

南都繪師の畫譜	龜田 攷	寶 雲	二〇	四天王寺廟面寫經の由緒に就て	田中 英市	東洋美術	二四	僧鑑閣と釋中庵	高 裕	變 畫	八	
稀蹟雜纂 一 (研究資料)	田中 喜作	美術研究	六三	就て	大 口 環夫	畫 說	五	明兆筆の大道真儀に就て	瀧 精一	國 畫	五四	
稀蹟雜纂 二 (同)	渡邊 一	同	六六	局面古寫經の一考察	大 口 環夫	國 畫	五五四	靜山印記ある水墨畫軸に就て	熊谷 宣夫	畫 說	二	
繪畫の思ひ出すもの二三	赤堀又次郎	書畫骨董	三五二	佐竹本歌仙小大君圖解	橋濱原富太郎氏藏			家山圖「可翁」ノ印アリ	東京男爵郷誠之助氏藏	日本國寶	七七	
繪卷物の話	日本傳統藝術 下店 靜市	俳句研究	四〇七	神護寺山水屏風の一考察	大 口 環夫	畫 說	一	可翁筆竹雀圖解	橋濱原善一郎氏藏	全集	五五六	
繪卷物の話	同	美術街	四〇四、五	山水圖	京都神護寺藏	日本國寶	七六	小補實山水圖解	橋濱原富太郎氏藏	同	五六〇	
第三居後素譚	久保田米所	協會報告	四三	寶松圖	東京公爵毛利元昭氏藏	日本國寶	七六	周文派山水圖解	同	同	五六三	
降能源氏を模寫して	縣 治朗	畫 說	一	土師神社の天神畫像に就て	栗野 秀穂	史蹟と古	一八〇三	日支繪畫交渉と雪舟の出現	森 克己	畫 說	九	
「降能源氏」にあらはれた日上村六郎	東洋美術	二四		入磨像の像容に就て	白 畑 よし	美術研究	六六	雪舟と明代の文人	田中倉根子	同	同	
本古語料	美術研究	六六		室町時代に於ける肖像畫の製作過程(上、下)	信 一	國 畫	五八、五九	日本の山水畫と禪僧雪舟	鷺尾 順敬	同	同	
信貴山緣起詞書の問題	同	同		出陣影の研究 上、下	同	美術研究	六七、六八	故大塚先生雪舟論の思ひ出	丸尾彰三郎	同	同	
信貴山緣起詞書(校刊)	美術研究	六六		醍醐の畫僧深賢に就て	佐和 隆研	畫 說	一〇	雲谷庵誌(校刊)	樂之軒	同	同	
俄鬼變紙 岡山曹源寺藏	全集	七八		聖徳太子像	兵庫村山長壽氏藏	全集	七八	雪舟山水畫の一特徵	熊谷 宣夫	同	同	
地獄草紙解 橋濱原富太郎氏藏	國 華	五六五		御宇多法皇像	京都大覺寺藏(圖版解説)	美術研究	六三	雪舟の筆致に關する研究	森田龜之助	美術研究	六三	
繪因果經樣式試論	下店 靜市	東洋美術	二四	京都天皇御像	花園天皇御像	日本國寶	七八	雪舟の肖像に就て	瀧 直己	同	同	
華嚴緣起雜考	同	史述と美術	八〇二	京都妙心寺藏	智證大師像 香川金倉寺藏	同	七六	雪舟の四季花鳥畫に就て	久保田武男	同	同	
隨身庭騎繪卷上	脇本十九郎	畫 說	一	法然上人足引御影考	道宣律師像	裏辻 憲道	七五	故大塚博士の雪舟山水長卷	宜夫	美術研究	六二	
北野天神緣起 京都北野神社藏	全集	七八		道宣律師像	東京男爵森村市左衛門氏藏	日本國寶	七五	雪舟の山水圖に就て	熊谷 宣夫	美術研究	六二	
天神緣起殘缺法性房牛車渡川圖解	國 華	五六〇		南院國師像 京都南禪寺藏	大明國師像 京都南禪寺藏	美術研究	六六	雪村のことゝも	今井 爽邦	書畫骨董	三四	
新舊新津恒吉氏藏	裏辻 憲道	畫 說	七八	源賴朝像 平重盛像	青 琅 玕	星 岡	七六	鑑真筆東岸居士圖解	京都守屋孝藏氏藏	日本國寶	七八	
當麻曼荼羅緣起攷	裏辻 憲道	日本國寶	七七	宗祇像 東京伯耆南部利英氏藏	北條早雲の畫像に就て	豐臣秀吉の畫像に就て	瀧 拙庵	花鳥圖 傳蛇足筆	京都眞珠庵藏	全集	七八	
石山寺緣起 滋賀石山寺藏	全集	七七		豐臣秀吉の畫像に就て	瀧 拙庵	國 華	五五六	古狩野筆伯牙彈琴圖解	橋濱原富太郎氏藏	同	同	
増上寺本法然上人繪傳考	裏辻 憲道	美術研究	六一	屏風畫の話 日本傳統藝術 秋山 光夫	俳句研究	四〇八	古狩野畫琴棋書圖解	東京野村茂久馬氏藏	同	同	同	
同 詞書 (繪卷詞書集第十五)	同	同		研究七	枯山水と水墨畫	中井宗太郎	美之國	一三〇一	京都御史の印ある畫に就て	拙 庵	同	
天狗草紙 愛媛伯爵久松定謨氏藏	日本國寶	七七		中ノ一項目	歌麿(東洋美術總目錄)	渡邊 一	美術研究	七〇	亮仙筆林和靖圖(圖版解説)	東京美術學校藏	美術研究	六一
平治物語繪卷について	田中 一松	古典研究	二〇八	歌麿(東洋美術總目錄)	相見 香雨	協會報告	四三	筑碁の壽星圖に就て	大串 純夫	國 華	五六五	
平治物語繪卷について	東京伯爵松平直亮氏藏	全集	七四	歌麿(東洋美術總目錄)	相見 香雨	協會報告	四三					
親鸞傳繪の成立と其意誌	藤原猶雪	歴史地理	六九〇五	歌麿(東洋美術總目錄)	相見 香雨	協會報告	四三					
親鸞傳繪の成立と其意誌	日本國寶	七六		歌麿(東洋美術總目錄)	相見 香雨	協會報告	四三					
因幡堂緣起畫卷に就て	藤懸 靜也	國 華	五六三	歌麿(東洋美術總目錄)	相見 香雨	協會報告	四三					
慕臨繪に就て	荻田嘉一郎	星 岡	八五	歌麿(東洋美術總目錄)	相見 香雨	協會報告	四三					
聖徳太子繪傳雜考	下店 靜市	以可留我	一〇五	歌麿(東洋美術總目錄)	相見 香雨	協會報告	四三					

戰國武人畫家山田道安一、脇本十九郎 二三	古畫山市圖解 京都守屋孝藏氏藏	國華	五五五	美術研究	六八	江月和尚筆探幽齋號記 探幽齋圖に就て	關 如來 添田 達嶺	塔影	一三〇/四	冷泉爲恭のこと	赤堀又次郎 雜誌	三四五						
遍照光院藏直庭筆南山四結 虎溪三笑圖(解説)	美術研究	六八	久岡守景筆納涼圖 東京伯耆牧野仲顯氏藏	日本國寶	七六	手紙を通して南畫人を覗く 祇園南海と村山半牧	高野 辰之 渡邊 刀水	南畫鑑賞	六〇/一〇	外務省心庵 アトリエ	一四〇/一〇							
二直庭筆鷹圖 東京萩野仲三郎氏藏 (圖版解説)	同	六六	久岡守景筆四季耕作圖 東京小坂順造氏藏	國華	五五四	建部涼袋のこと	伊藤 松平	塔影	一三〇/二	服部南郭の畫事	日本美術 協會報告	四四						
藤愛と宗栗 田中 一松 西湖圖 大分川瀬佐一氏藏(圖版解説)	美術研究	八一	狩野尚信筆春曉圖解 東京男爵團伊能氏藏	同	五六二	建部最光のこと	根岸 巖	雜誌骨董	三五一	偉人案業齊と遺墨に就て 名蹟過眼録	西村 南岳	塔影	一三〇/二					
雲龍圖 京都建仁寺藏	全集	七四	狩野永納と神農圖 光悅とその一派の人々	日本美術 協會報告	四三	大雅堂のこぼれ話	三村清三郎	國華	五六一	池大雅筆十便十宜圖 山口樹谷晴弘氏藏	日本美術 協會報告	四四	全集	七五				
海北派の畫家 下 相見 香雨	美術研究	四三	光悅筆櫻歌の巻解 東京男爵團伊能氏藏	同	五六二	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	
繪畫史上に於ける日本詩の問 題―等伯の松林圖屏風に就 て―	直巳 美之國	一三〇/三	昭乘筆葡萄圖 京都石清水八幡宮藏	美術研究	六三	池大雅筆十便十宜圖 山口樹谷晴弘氏藏	日本美術 協會報告	四四	全集	七五	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二
隣華院の山水圖模繪と長谷 川等伯	土居 次義	二五	三重長谷川治郎兵衛氏藏 (圖版解説)	美術研究	六三	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	
長谷川信春筆十二天像解 長谷川宗也に就て	土居 次義	五六四	光琳筆鳳凰圖 東京男爵團伊能氏藏(圖版解説)	美術研究	六六	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	
傳長谷川久藏筆紙圖會圖解 金澤山川庄太郎氏藏	國華	五五五	光琳畫張付手箱解 橫濱原善一郎氏藏	同	五五八	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	
東京美術學校藏松鷹圖屏風(解説)	美術研究	七二	酒井抱一筆傳松鷹圖法親王像解 東京桂五十郎氏藏	同	五五八	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	
櫻楓圖 京都智積院藏	同	六八	破笠と團十郎 圓山應舉筆牡丹菊花群禽圖解 長崎橋本辰二氏藏	國華	五五五	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	
長濱大通寺含山野の山水畫 に就て―狩野山樂の一遺作―	史述と美術	八〇/八	破笠と團十郎 圓山應舉筆牡丹菊花群禽圖解 長崎橋本辰二氏藏	國華	五五五	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	
花下遊樂圖の舞踊に就て	高野 辰之	一	破笠と團十郎 圓山應舉筆牡丹菊花群禽圖解 長崎橋本辰二氏藏	國華	五五五	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	
圓滿院藏風俗圖(解説)	美術研究	六八	破笠と團十郎 圓山應舉筆牡丹菊花群禽圖解 長崎橋本辰二氏藏	國華	五五五	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	
舞踊圖 東京梅原龍三郎氏藏(圖版解説)	同	六三	破笠と團十郎 圓山應舉筆牡丹菊花群禽圖解 長崎橋本辰二氏藏	國華	五五五	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	
寛永前後の風俗畫 佐藤 良	畫說	七、一二	破笠と團十郎 圓山應舉筆牡丹菊花群禽圖解 長崎橋本辰二氏藏	國華	五五五	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	
維圖屏風解 東京本居長隆氏藏	國華	五五六	破笠と團十郎 圓山應舉筆牡丹菊花群禽圖解 長崎橋本辰二氏藏	國華	五五五	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	
舟我物語圖解 東京三浦直介氏藏	同	五六一	破笠と團十郎 圓山應舉筆牡丹菊花群禽圖解 長崎橋本辰二氏藏	國華	五五五	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	
鑑師圖解 大阪北村大三郎氏藏	同	五六四	破笠と團十郎 圓山應舉筆牡丹菊花群禽圖解 長崎橋本辰二氏藏	國華	五五五	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	
宮本武藏の繪に就ての一考 添田 達嶺	塔影	一三〇/一	破笠と團十郎 圓山應舉筆牡丹菊花群禽圖解 長崎橋本辰二氏藏	國華	五五五	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	
宮本武藏筆鷗圖 東京侯爵細川護立氏藏	日本國寶	七五	破笠と團十郎 圓山應舉筆牡丹菊花群禽圖解 長崎橋本辰二氏藏	國華	五五五	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	
二天宮本武藏畫鷹圖に就て	連見 重康	星 閣	破笠と團十郎 圓山應舉筆牡丹菊花群禽圖解 長崎橋本辰二氏藏	國華	五五五	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	
鍛冶橋家初祖探幽に就て	狩野 探道	塔影	破笠と團十郎 圓山應舉筆牡丹菊花群禽圖解 長崎橋本辰二氏藏	國華	五五五	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	
探幽雜談 相見 香雨	同	同	破笠と團十郎 圓山應舉筆牡丹菊花群禽圖解 長崎橋本辰二氏藏	國華	五五五	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	
探幽の人間的偉さ 添田 達嶺	同	同	破笠と團十郎 圓山應舉筆牡丹菊花群禽圖解 長崎橋本辰二氏藏	國華	五五五	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	
大德寺方式の探幽畫に就て	土居 次義	史述と美術	破笠と團十郎 圓山應舉筆牡丹菊花群禽圖解 長崎橋本辰二氏藏	國華	五五五	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	蘇村と團山四條派上、下 南畫に於ける傳統と寫生 の問題	土方 定一	南畫鑑賞	六〇/二、二	

田能村竹田筆 稻川冬景圖解 大阪福田政之助氏藏	國華	五五八	廣見泉石像 崇山筆 東京廣見久太郎氏藏	日本國寶全集	七四	浮世繪同題錄 一 桑原 雙蛙 浮世繪界	二〇三
谷文晁傳の研究 一、二、四 森 銑三	日本美術協會報告	四三、四四	崇山筆于公高門圖氏藏 新島中野忠太郎氏藏(圖版解說)	美術研究	六四	浮世繪 樣式概念の成立に就て 橋崎宗重 同	二〇五、八
谷文晁補記 一、二 同	同	四五、四六	渡邊崇山筆 深間野雄圖解 東京小坂順造氏藏	國華	五五七	浮世繪 繁々草 木村 拾三 同	二〇九
文晁雜藏 原風庵主人	書畫骨董雜誌	三五〇	渡邊崇山筆 秋林煎茶圖解 靜岡森淑氏藏	同	五六四	史料としての浮世繪 古堀 榮 同	二〇八
寫山樓漫談 竹内 梅松	南畫鑑賞	六〇八	渡邊崇山筆 調諫圖卷について 人見 少華 同	南畫鑑賞	六〇一二	江戶末期の童兒描寫に就て 古堀 榮 同	二〇九
谷文晁と祖父本教及び父範 添田 達嶺	塔影	一三〇八	「つづれ錦」は果して渡邊崇山 の著か 森銑三氏の「つづれ錦」は果 して渡邊崇山の著かを讀 みて	同	六〇九	浮世繪屏風の珍品として 劇畫としての價值に就て 三馬の作中に現れる浮世繪 師	二〇三
川村露庵と谷文晁 谷文晁筆松林山水圖解 靜岡森淑氏藏	玉林 晴明 國華	七九 五六〇	崇山東海道駕籠日記(校刊) 椿山筆高久齋屋像 靜岡大谷喜太郎氏藏(圖版解說)	畫說	八	浮世繪 甲斐土產 繪師所傳 浮世繪 甲斐土產 繪師所傳 に關する研究	二〇一
中林竹洞に就て 河野 桐谷	書畫骨董雜誌	三五二	椿山筆中戸祐喜像 神奈川鈴木八重氏藏(圖版解說)	美術研究	六五	化政度を中心とした る神史小説挿繪畫家 葵川師宣の解剖 房總に於ける師宣の遺蹟 友禪の浮世繪 懷月堂流の美人畫に就て 川又常行、常正に就て	二〇九、二 二〇九、二 二〇九、二 二〇九、二 二〇九、二 二〇九、二
渡邊崇山文獻攷 上、下 井上 昇三	南畫鑑賞	六〇六、七	立原杏所筆宜男清輪圖解 雲室修禪餘墨	國華	六二	國芳の「ツツ家圖」について 豐信筆花下美人圖 三原繁吉氏藏(圖版解說)	二〇九
渡邊崇山文獻攷 上、下 井上 昇三	同	六〇一二	十市石谷に就いて 南嶺派の花鳥畫に就いて 沈南嶺筆海鶴蟠桃圖解 東京男爵鄉誠之助氏藏	美術研究	六二	國芳の「ツツ家圖」について 豐信筆花下美人圖 三原繁吉氏藏(圖版解說)	二〇九
崇山先生の藝術に就いて 舉山偶感	小室 翠雲 寺崎 武男	六〇六 六〇八	長崎の逸畫 江戸の浮世繪派以外の風俗 畫の遺品に就て 物外逸談	國華	五五八	國芳の「ツツ家圖」について 豐信筆花下美人圖 三原繁吉氏藏(圖版解說)	二〇九
渡邊崇山先生のこと 渡邊華山雜記 上、下	伊奈森太郎 森 銑三	六〇六 六〇六、七	佐久間象山と秋月古香 畫人江川太郎左衛門 新たる黄樂繪畫の檢討獨 瀧澤師と其畫蹟に就いて一 水戸の四畫人特に長羽と懇 奮に就て	美術研究	五六二	國芳の「ツツ家圖」について 豐信筆花下美人圖 三原繁吉氏藏(圖版解說)	二〇九
舉山と太白堂 相見 香雨	日本美術協會報告	四五	浮世繪 類考 浮世繪 類論 四	國華	五六二	國芳の「ツツ家圖」について 豐信筆花下美人圖 三原繁吉氏藏(圖版解說)	二〇九
全樂堂漫談 根岸 巖	書畫骨董雜誌	三五〇	浮世繪 類考 浮世繪 類論 四	美術研究	五六二	國芳の「ツツ家圖」について 豐信筆花下美人圖 三原繁吉氏藏(圖版解說)	二〇九
舉山の畫論 金原 省吾	南畫鑑賞	六〇六	浮世繪 類考 浮世繪 類論 四	美術研究	五六二	國芳の「ツツ家圖」について 豐信筆花下美人圖 三原繁吉氏藏(圖版解說)	二〇九
舉山の素描とその名蹟に就て 西村 南岳	同	六〇七	浮世繪 類考 浮世繪 類論 四	美術研究	五六二	國芳の「ツツ家圖」について 豐信筆花下美人圖 三原繁吉氏藏(圖版解說)	二〇九
全樂堂記傳とその著者松岡 森 銑三	同	六〇一二	浮世繪 類考 浮世繪 類論 四	美術研究	五六二	國芳の「ツツ家圖」について 豐信筆花下美人圖 三原繁吉氏藏(圖版解說)	二〇九
渡邊崇山主要作品要覽 二	同	六〇七	浮世繪 類考 浮世繪 類論 四	美術研究	五六二	國芳の「ツツ家圖」について 豐信筆花下美人圖 三原繁吉氏藏(圖版解說)	二〇九
舉山先生の畫風の檢討 一、 二	窪田 五雲 書畫骨董雜誌	三四三、三四四	浮世繪 類考 浮世繪 類論 四	美術研究	五六二	國芳の「ツツ家圖」について 豐信筆花下美人圖 三原繁吉氏藏(圖版解說)	二〇九
舉山先生と洋畫 竹内 梅松	同	三四六	浮世繪 類考 浮世繪 類論 四	美術研究	五六二	國芳の「ツツ家圖」について 豐信筆花下美人圖 三原繁吉氏藏(圖版解說)	二〇九
舉山の版畫のことなど 相見 香雨	南畫鑑賞	六〇七	浮世繪 類考 浮世繪 類論 四	美術研究	五六二	國芳の「ツツ家圖」について 豐信筆花下美人圖 三原繁吉氏藏(圖版解說)	二〇九
舉山の紀行畫 河野 桐谷	同	六〇八	浮世繪 類考 浮世繪 類論 四	美術研究	五六二	國芳の「ツツ家圖」について 豐信筆花下美人圖 三原繁吉氏藏(圖版解說)	二〇九
舉山を繞る人々 竹内 梅松	同	六〇八	浮世繪 類考 浮世繪 類論 四	美術研究	五六二	國芳の「ツツ家圖」について 豐信筆花下美人圖 三原繁吉氏藏(圖版解說)	二〇九
渡邊崇山と小關三英 同	書畫骨董雜誌	三五三	浮世繪 類考 浮世繪 類論 四	美術研究	五六二	國芳の「ツツ家圖」について 豐信筆花下美人圖 三原繁吉氏藏(圖版解說)	二〇九
舉山の肖像畫法に就て 菅沼 貞三	南畫鑑賞	六〇七	浮世繪 類考 浮世繪 類論 四	美術研究	五六二	國芳の「ツツ家圖」について 豐信筆花下美人圖 三原繁吉氏藏(圖版解說)	二〇九

廣重の戲畫	松本喜八郎	浮世繪界	二ノ一
歌舞伎圖屏風の筆者	藤懸 靜也	同	二ノ二
前川氏の歌舞伎屏風	河竹 繁俊	同	同
職人三十六歌仙に就て	橋崎 宗重	同	二ノ六
夕涼みの圖解説	同	同	同
頼蒙阿闍梨怪鼠傳の挿繪	中村 亮平	同	二ノ六、七
繪本舞づくし 二	和田 辰雄	同	二ノ二
繪本一ツ話 一、二	木村 拾三	同	二ノ三、六
寶曆明和安永期に於ける日本洋風畫に就て 秋田派の寫實的傾向	吉武 秀道	鳴台史報	五
江戸中期の洋畫と蘭畫	小懸 春男	茶わん	八二
觀瀾堂閑話	岡村 千曳	同	同
日本耶穌會板銅版聖母圖に就いて	西村 貞	美術研究	六九
川原慶賀筆プロムホフ家族圖に就て	守屋 謙二	同	六五
秋田藩の洋畫家小野田直武	石田直太郎	畫說	六
異版支倉六右衛門の肖像	吉浦 盛純	歴史教育	一一ノ六
泥繪雜記帖	水谷 良一	工 藝	七三
泥繪の話	吉田小五郎	同	同
琉球の歴代國王畫像に就て 中、下、下ノ二	比嘉 朝健	國 華	五五五、五五五九
朝鮮・支那・其他			
魏晉南北朝に於ける畫家の今村	龍一	國 華	五六一
師弟關係に就て	寶 雲	二〇	同
孝子傳石棺の刻畫に就て上	奥村伊九良	瓜 茄	四
孝子傳石棺の刻畫	同	同	同
六朝給畫の演變	支那花鳥畫の發生成立に就て下店 靜市	畫說	一一
支那の墨畫に現れた氣品と	後藤朝太郎	畫說	三四六
爾玄味	同	雜誌	同
唐朝に於ける畫院の源流	米澤 嘉園	國 華	五五四
唐代淨土變相の西漸	松本 榮一	同	五五五
古畫品錄考 附古畫品錄	堂谷 憲男	寶 雲	一九
周官考工記の設色之工に就て	米澤 嘉園	國 華	五六二
景教に關する畫像石	鳥居 龍藏	考古學雜誌	二七ノ二

題畫文學の發展	青木 正兒	支那學	九ノ一
遠瀨龍帆圖 傳牧溪筆	日本全集	瓜 茄	四
東京伯爵松平直亮氏藏	同	同	同
深山清遠圖に關連して	松本十九郎	畫說	二
畫葡萄の第一人者溫日觀	矢代 幸雄	美術研究	六四
馬寶百雁圖卷	同	國 華	五五四
松田筆竹木風圖解	同	同	五六四
兵庫武藤金太氏藏	同	同	五六四
宋畫胡麟居圖解	同	同	五六一
宋畫阿部房次郎氏藏	同	同	五六一
宋畫潘淑淑游圖卷解	同	同	五六一
宋畫杜子美騎驢圖解	同	同	五五七
宋畫杜子美騎驢圖解	同	同	五五七
京都守屋孝藏氏藏	同	同	五五八
宋畫道像解	同	同	七四
大阪男爵藤田平太郎氏藏	同	同	七四
六祖袈裟圖 梁楷筆	同	同	八三
岡山山原孫三郎氏藏	同	同	七六
桓野王圖	同	同	七六
漁釣圖 徐祥筆	同	同	五五六
東京侯爵井上三郎氏藏	同	同	五五六
王蒙山水畫卷解	同	同	五五五
兵庫阿部房次郎氏藏	同	同	五五五
管道昇筆蘭花圖解	同	同	五六三
大阪齋藤才三氏藏	同	同	五六三
元人畫蘭竹圖解	同	同	五六三
東京男爵岡田伊能氏藏	同	同	五六五
陶淵明圖解	同	同	五六五
東京男爵齋誠之助氏藏	同	同	五六三
唐伯虎	同	同	五六三
金毘以下六人合璧圖解	同	同	五六三
東京子爵岡部長景氏藏	同	同	五五七
朱明筆春山古寺圖解	同	同	五五九
東京今井初男氏藏	同	同	五五九
丁雲鵬筆倦居圖解	同	同	五五五
瀛洲國御府藏	同	同	五五五
支那畫夏冬山水圖解	同	同	五五五
橫濱原富太郎氏藏	同	同	五五五
陳星筆漁夫歸浦圖 (圖版解説)	同	同	五五五
東京美術學校藏	同	同	五五五
莫是龍の畫論に就て	同	同	五五五
石海和尚筆行舟圖解	同	同	五五五
東京林文子氏藏	同	同	五五五
清朝御物尙侯爵家の章龍筆	同	同	五五五
雪中花鳥畫	同	同	五五五

趙之謙の畫跡と畫風	原田 尾山書	道	六ノ一〇
熾燦畫の研究を讀む	逸見 梅榮國	華	五六二
彫 刻			
總記	源 豐宗	日本文化史大系奈良文	化
彫刻(奈良時代)	源 豐宗	同	同
日本	同	同	同
日本彫刻史上「模倣」のこ	九尾影三郎	畫說	六、七
推古佛の諸問題	佐藤 虎雄	夢殿 一七(推古美術の諸問題)	同
飛鳥彫刻の様式に就て	源 豐宗	同	同
一木造の限界 上	九尾影三郎	國 華	五六五
鉦形に就て	明珍 恒男	畫說	二
平安初期彫像の一問題	大口 珉夫	同	六
止利佛師の足跡	同	同	同
止利佛師に關する考察	野間 清六	夢殿 一七(推古美術の諸問題)	一一
佛師定慶について	金森 遼	東洋美術	二五
定朝法橋敘任の經緯	谷 信一	美術研究	六四
運慶派の造像組織に就て	米山 德馬	史迹と美術	八ノ一〇
藤原時朝とその造像	大口 珉夫	畫說	一〇
佛像と鍍金と	金森 遼	星 圖	七八
佛像に於ける刻出裝飾	大口 珉夫	畫說	八
東大寺法華堂塑造諸佛と戒壇四天王	內藤藤一郎	夢殿 一六(四天王の研究)	同
古刹法輪寺の佛像群	石崎 達二	以可留我 一ノ五	同
道明寺の佛像	同	史蹟と古 一ノ三	同
會津佛教美術―鎌倉時代佛像―	川口 只夫	美術 一二ノ二、	同
信濃埴科郡清水寺の諸佛	九尾影三郎	畫說	一
實古游心錄	同	同	同
一平勝寺と其目寺	同	同	同
同 二 山千寺と伏見寺の銅造佛	同	同	同
改古錄記	同	史蹟と美術	八ノ二

工房推記一	明珍	恒男	畫	說一	興福寺東金堂内發見の佛頭	足立	唐	畫	說一二	不動明王像	東京横山秀磨氏藏	日本國寶	七六				
尾道淨土寺の南無佛太子像	同	同	同	同	三	同	同	同	同	不動明王及兩童子像	奈良東大寺藏	同	七九				
勸修寺三興福寺北圓堂彌	同	同	同	同	四	同	同	同	同	愛染明王像	京都神護寺藏	同	七六				
佛	同	同	同	同	六	同	同	同	同	五大尊像	京都教王護國寺藏	同	七七				
紀州有田地方の佛像群	中野	楚溪	史迹と美術	八ノ四	興福寺東金堂佛頭佛手發見	黒田	昇義	東洋美術	二五	奈良時代の四天王像に就て	佐藤	虎雄	夢殿	一六(四天王の研究)	日本國寶	七八	
古書にあらはれた佛像の奇しき話	八橋徳次郎	漆と工藝	四三七	信濃國藤原尾觀音像說補遺	九尾彰三郎	美術研究	六一	同	同	四天王像	奈良唐招提寺藏	石崎	達二	夢殿	一六(四天王の研究)	日本國寶	七八
大安寺金堂本尊に就て	足立	康	國華	五六四	十一面觀音像	滋賀觀音堂藏	同	同	同	勝軍寺の四天王像	同	同	同	同	同	同	同
大日如來像	新瀉乙實寺藏	同	日本國寶	七四	十一面觀音像	東京男爵森村市左衛門氏藏	同	同	同	持國天像	多門天像	同	同	同	同	同	同
阿彌陀如來像	同	同	同	同	十一面觀音像	京都禪定寺藏	同	同	同	三尊神宮寺藏	同	同	同	同	同	同	同
藥師如來像	同	同	同	同	十一面觀音像	福島藥師堂藏	同	同	同	執金剛神像	京都金剛院藏	廣瀬	直彦	漆と工藝	四二九	日本國寶	七七
釋迦如來及兩脇侍像	長野牛伏寺藏	同	同	同	十一面觀音像	長野觀音寺藏	同	同	同	深沙大將軍像	同	同	同	同	同	同	同
達磨寺涅槃像及千手觀音像	保井芳太郎	大和王寺史論	夢殿	一七(推古美術の諸問題)	十一面觀音像	岐阜阪本實照氏藏	美術研究	六二	同	淨瑠璃寺吉祥天像に就て	金森	遼	同	同	同	同	同
法隆寺金堂藥師如來像に就て	望月	信亨	美術研究	六九	日本藝術精神史上に於ける	植田	壽藏	夢殿	一七(推古美術の諸問題)	長谷寺法華說相像の造立年次に就て	金森	遼	同	同	同	同	同
高山寺藥師三尊像(解説)	美術研究	六九	同	同	中宮寺本尊	奈良新藥師寺藏	日本國寶	七六	同	胎藏界八葉院曼荼羅刻出露	東京安田一氏藏	野間	清六	漆と工藝	四三〇	日本國寶	七五
藥師如來像	長野中禪寺藏	全集	七五	同	千手觀音像	同	同	同	同	應和三年在銘の檀造板佛に就て	下總萬壽寺仁王尊	八橋徳次郎	漆と工藝	四三〇	日本國寶	七六	
新藥師本堂の藥師如來像に就て	小林	剛	畫	說一	千手觀音像	長野大平藏	美術研究	六五	同	十六弟子像	神奈川極樂寺藏	廣瀬	直彦	以可留我	一ノ四	日本國寶	七八
阿彌陀如來像	同	同	同	同	彌勒菩薩像(圖版解説)	大阪野中寺藏	同	同	同	三形大黒天の話	建長在銘の石佛	川勝政太郎	史迹と美術	八ノ四	同	同	同
阿彌陀如來像	石川伏見寺藏	同	同	同	法隆寺藏彌勒菩薩像(圖版解説)	彌勒菩薩像	奈良唐招提寺藏	全集	七五	藤尾觀音堂の磨崖石佛	群馬縣宮田の在銘の石影不動尊	松本彦次郎	東洋美術	二四	同	同	同
阿彌陀如來像	三重慈恩寺藏	同	同	同	矢田地藏に就て	米山	徳馬	史迹と美術	八ノ三	箱根山の石佛	實古游心錄	九尾彰三郎	畫	說一一	同	同	同
阿彌陀如來及兩脇侍像	京都仁和寺藏	同	同	同	普賢延命像	奈良法隆寺藏	同	同	同	江戸の石佛	東大寺西大門勸額に就て	明珍	恒男	史迹と美術	八ノ五	日本國寶	七四
阿彌陀如來及兩脇侍像	奈良法隆寺藏	同	同	同	僧形文殊像	京都法金剛院藏	同	同	同	東大寺西大門勸額に就て	明珍	恒男	史迹と美術	八ノ五	日本國寶	七四	
奈良長岳寺藏	同	同	同	同	即成院廿五菩薩中の後補像	松雨	學人	史迹と美術	八八	天蓋	兵庫鶴林寺藏	同	同	同	同	同	同
那智發掘の大日像	香取	秀真	畫	說四	日光菩薩像	月光菩薩像	京都禪定寺藏	美術研究	六八	達磨寺聖鑑太子像考	若井	富藏	大和王寺史論	七九	同	同	同
大日如來像	大阪興善寺藏	日本國寶	七八	同	銅造菩薩立像一軀	矢代	幸雄	美術研究	六八	同	同	同	同	同	同	同	同
推古佛如來立像に就て	矢代	幸雄	夢殿	一七(推古美術の諸問題)	不動明王像	神奈川原富太郎氏藏	全集	七五	同	同	同	同	同	同	同	同	同
推古佛如來立像一軀	同	美術研究	六六	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

聖德太子像 埼玉天洲寺藏	日本國寶 七七	府縣別重要美術品指定建造物目録	木村 貞吉	東洋建築 一ノ一	朱雀院考	太田 静六	建築雜誌 六三二
達磨寺達磨像に就て	小島 貞三	大和王寺史論	太田 博太郎	建築雜誌 六二八	石水院の國寶建築とその傳來	木村 提三郎	史蹟と古美術 一八ノ五
三井寺智證大師像及び其の模刻上、下	富藏 史述と美術八ノ六、七	日本國寶 七八	太田 静六	考古學雜誌二七ノ六	飛鳥元興寺草創考	和島 芳男	史學雜誌 四八ノ一〇
大悲菩薩像 奈良唐招提寺藏	同	同	太田 博太郎	東洋建築 一ノ九	法隆寺堂塔に關する古今目録抄の一記事	足立 康	東洋美術 二四
慈興上人像 富山雄山神社藏	同	同	足立 康	考古學雜誌二七ノ七	法隆寺講堂の謎	喜田 貞吉	歴史地理 六九ノ六
北條時頼像 兵庫最勝寺藏	同	同	二本松考藏	東洋建築 一ノ八	唐招提寺御影堂の研究	安藤 更生	東洋建築 一ノ三
珍らしい天正袴をつけた人物木彫その他	進士 星 闕	日本國寶 七九	二本松考藏	同	本藥師寺所在の地に關する疑名建築解説	足立 康	史述と美術八ノ一〇
伎樂面 奈良東大寺藏	同	同	八戸成龜樓	史述と美術八ノ一一	東大寺三月堂前校倉	田邊 泰	東洋建築 一ノ七
舞樂面 奈良法隆寺藏	同	同	川勝政太郎	同	平城時代の大安寺に關して上、中、下	加藤 泰	國華 五七、五八、五九
伎樂面から能面へ	野間 清六	同	藤岡 通夫	畫 說 三	大安寺の位置と移轉年代	足立 康	東洋建築 一ノ六
能面製作の極致！女面について！	野上豊一郎	東洋美術 二五	藤岡 通夫	畫 說 三	拙文への質問としての足立康氏の「大安寺の位置と移轉年代」への自分の答	加藤 泰	同 一ノ九
獅子 新潟中野忠太郎氏藏	日本國寶 七八	同	藤岡 通夫	畫 說 三	不退寺本堂	關野 克	同 一ノ六
琉球の石彫刻	比嘉 朝健	影 一三ノ三	藤岡 通夫	畫 說 一	名建築解説	池田谷久吉	史蹟名勝天二ノ一〇 然紀念物
朝鮮・支那・其他	三品 彰英	夢殿 一六(四天王の研究)	黒田 昇義	東洋美術 二四	四天王寺講堂基壇の發見	川上 邦基	東洋建築 一ノ七
古代朝鮮の四天王像	中吉 功	考古學 八ノ九	同	同 二五	鶴林寺太子堂及常行堂	同	同 一ノ六
浮石寺釋迦如來像に對する考察	齊藤 忠	考古學雜誌二七ノ九	谷 重雄	東洋建築 一ノ七	三佛寺興院院人堂	大岡 實	同
慶州所在の「立樹双鳥文」彫石に就て	木村 莊八	星 闕 八四	谷 重雄	東洋建築 一ノ七	名建築解説	同	同 一ノ六
雲崗靈巖の美術	佐々木利三	龍谷史壇 二〇	足立 康	以可留我 一ノ五	瑠璃光寺塔婆	上總國眞里谷廢寺址	篠崎 四郎
石塔に於ける四方佛の配置に就て	川勝政太郎	考古學 八ノ一	杉山 信三	史述と美術八ノ一二	安房國分寺考	平野元三郎	史 一
石塔に於ける四佛に就て	田中 萬宗	日本美術 四六	同	同	白鳳時代寺址三題	石田 茂作	考古學雜誌二七ノ一〇
石壁山玄中寺の鐵佛群像	矢代 幸雄	美術研究 七一	田中 重久	同	安房國分寺考	平野元三郎	史 一
唐石彫不動明王像	同	同	足立 康	史述と美術八ノ四	白鳳時代寺址三題	石田 茂作	考古學雜誌二七ノ一〇
細川侯爵家藏白玉彌勒半跏像	同	同	足立 康	同	片岡王寺址並西安寺址の硯	堀井 三友	史述と美術八ノ七
印度の四天王像に就て	逸見 梅榮	夢殿 一六(四天王の研究)	太田 静六	考古學雜誌二七ノ三	丹波國分尼寺	角田 文衛	考古學研究會會報第一 (考古學論叢)

建築及庭園

日本

寛永寺建築論(建築學會大田邊 泰 建築雜誌 六二四 會論文梗概)

尾藩祖廟 澤島英太郎 東洋建築 一ノ五

再び九體阿彌陀堂の平面に就て 足立 康 同 二七ノ四

播磨に於ける第四類八種心礎に就て 上、下 島田 清 史述と美術八ノ三、四

九體堂と中古に於ける建築平面の記法 太田 静六 考古學雜誌二七ノ三

長門國大井村に於ける一廢山本寺址に就て 博 考古學雜誌二七ノ五

神祇と城郭 中、下 鳥羽 正雄 神社協會 雜誌 三六ノ四、五

城郭構築の社會經濟的一考 同 歴史教育 一二ノ八

初期天守閣の一考察 (建築學會大會論文梗概) 藤岡 通夫 建築雜誌 六二四

松本城天守閣 名建築解説 巖谷不二雄 東洋建築 一ノ二

尾張犬山城天守建築考 (建築學會大會論文梗概) 土屋 純一 建築雜誌 五二四

犬山城天守閣 名建築解説 城戸 久 東洋建築 一ノ四

名古屋天守閣と地震 齋田時太郎 同 一ノ六

美濃大垣城天守建築考 土屋 純一 建築雜誌 六二八

大垣城天守閣 名建築解説 城戸 久 東洋建築 一ノ八

越智氏以後の高取城 三 島本 正義 大和志 四ノ二

姫路城 名建築解説 服部 勝吉 東洋建築 一ノ三

高知城 名建築解説 澤島英太郎 同 一ノ一

恰土城樓の礎石に就て 笠 敬 史蹟名勝天 一二ノ五

太宰府の遺跡と條坊 一、二 鏡山 猛 史 一六、一七

東近江之石造美術概説上下 堀川辰之助 林 泉 三一、三二

石塔寺三重石塔と層塔の階 川勝政太郎 史迹と美術八ノ九

石造四層三層塔と塔前石造 榎本龜次郎 考古學 八ノ六

石塔に現れたる蓮華文様 川勝政太郎 林 泉 三六

箱根二子山麓の石塔 大岡 實 畫 説 一二

鎌倉の寶篋印塔 赤星 直忠 考古學 八ノ三

近江石塔寺の阿育王塔 坪井 良平 同 八ノ六

鏡山鳥影寶篋印塔 上、下 能勢 丑三 史迹と美術八ノ一、二

大和興山及び圓福寺の寶篋印塔 川勝政太郎 考古學雜誌二七ノ一二

攝津萬願寺の古石塔 同 史蹟名勝天 一二ノ六

無縫塔 同 史迹と美術八ノ七

越後南魚沼地方の供養塔要 篠崎 四郎 考古學雜誌二七ノ三

陸前名取郡の古碑 松本 源吉 考古學 八ノ二

會津冬木澤の古供養牌 松本 源吉 史蹟名勝天 一二ノ一二

古瓦新譚 七一一 大脇 正一 史迹と美術七、九、一二

私印を押捺した文字瓦 宮崎 紇 考古學研究會會報一 (考古學論叢) 二〇

東北地方發見の重瓣蓮花紋瓦に就ての一考察 上 内藤 政恒 寶 雲 二〇

王寺出土古瓦の研究 木村權三郎 大和王寺史論 考古學 八ノ四

肥前晴氣慶寺址と九州地方に於ける古瓦の一様式に就いて 七田 忠志 考古學 八ノ四

古事記に表れる建築に關し (神世の部) 加藤 泰 建築世界 三、四、六、七

上古時代の住宅 關野 克 歴史公論 六ノ一

古文書による奈良時代住宅建築の研究 (建築學會大會論文梗概) 同 建築雜誌 六二四

住宅建築より見たる萬葉集 同 東洋建築 一ノ三

在信樂藤原豐成板敷考 同 寶 雲 二〇

傳藤原宮址 足立 康 東洋建築 一ノ二

名建築解説 足立 康 東洋建築 一ノ二

冷泉院と里内裏 寢殿造の研究 二 太田 靜六 建築雜誌 六二八

里内裏の起原に就て 足立 康 東洋建築 一ノ九

信貴山緣起に現はれたる長者の住宅と校倉 太田 靜六 同 一ノ八

初期書院造 一、二、三 藤原 義一 史迹と美術六ノ六、七、三

曼殊院の書院及茶室に就て 中、下 澤島英太郎 同 八ノ一、二

國寶「大阪府南河内郡吉村邸」 藤島亥治郎 東洋建築 一ノ七

成興閣書院前廣橡 成興閣茶室清香軒 名建築解説 川上 邦基 同 一ノ九

江沼神社長流亭 國寶長流亭 澤島英太郎 同 一ノ五

名建築解説 服部 勝吉 同 一ノ六

壽月觀松夢亭 澤島英太郎 同 一ノ一

高臺寺茶亭 一、二 澤島英太郎 東洋建築 一ノ七、八

不昧公大崎茶屋の圖面 六 桑原 鑾蛙 茶わん 一二

泥繪と大名屋敷 一、二、三 大熊 喜邦 東洋建築 一ノ二、三

民家の巡禮 御殿構付民家 今 和次郎 同 一ノ三

民家の巡禮 花宿 竹内芳太郎 同 一ノ四

民家巡禮 八丈島民家記 藏田 周忠 同 一ノ五

民家巡禮 上總山崎の民家 竹内芳太郎 同 一ノ七

民家巡禮 孤島江ノ島の民家 小倉 強 同 一ノ八

江戸時代中期日本劇場畫證 須田 敦夫 同 一ノ六

江戸時代上期日本劇場論 同 同 一ノ二

猿若町の藝術街を語る 大熊 喜邦 同 一ノ六

日本庭園の研究法に就て 重森 三玲 同 二七

庭園文獻資料集成 一六 清水 同 二五

作庭記解説 九、十 重森 三玲 同 二五、二九

林泉百態 二 林 泉 同 一四ノ一〇

石組の築造と觀賞 九、十、十一 同 同 二五、三〇、三一

松竹梅挿花及庭園の史的考察と三疊形式 同 同 二五

日本庭園の濫 龍居松之助 東洋建築 一ノ二

僧行社舊三ノ丸庭園に就て 高木 貫一 林 泉 二八

靜岡縣の庭園 清水 卓夫 同 三四

名古屋二ノ丸三ノ丸庭園に就て 重森 三玲 同 二八

善法院庭園に就て 鍋島 雄男 同 三三

蓮華院庭園に就て 清水 卓夫 同 同

圓福院庭園 天德院庭園 普門院庭園 龍光院庭園 丹生院庭園 金剛峰寺庭園 金剛三昧院庭園 清淨心院 庭園 慶榮寺と鳥が池庭園 良正院の庭園に就て 大德寺孤蓬庵庭園 大德寺方丈及慈照院庭園 光淨院庭園に就て 重森 三玲 同 三三

修學院離宮の庭園に就て 一—三	外山 英策	國 華	五六三、五六四、五六五	遼の上京城址 金上京遺址追考	竹島 卓一	東洋建築	一ノ一	陶器の目利書に就て	藤田 幸之	やきもの 趣味	三ノ一一
銀閣寺の庭	同	畫 說	一	東京城出土の鳥尾に就て	村田 治郎	滿 蒙	一八ノ九	名物陶器の鑑定と其規準	高橋 梅園	書畫骨董 雜誌	三四三
龍安寺の庭	脇本十九郎	同	五	天寧寺八角十三層塔 名建築解説	田邊 泰	東洋建築	一ノ二	名物記其他の内容に就て	鈴木知足堂	やきもの 趣味	三ノ一二
高野山の三庭園	福井 典	林 泉	二六	清太祖福陵降恩殿 名建築解説	竹島 卓一	同	一ノ三	寫本國分名物記	西堀 一三	同	同
雪舟作と稱する庭園に就て	外山 英策	畫 說	九	紫禁城中和殿保和殿側庭 名建築解説	田邊 泰	同	一ノ四	梅尾山高山寺藏小柿茶人 名物辻堂香盒	蜷川 第一	茶わん	八一
石燈籠觀實の榮	八—一 川勝政太郎	林 泉	二五、三二、三五	妙應寺白塔 名建築解説	同	同	同	秀吉と千鳥の香爐	赤堀又次郎	書畫骨董 雜誌	三四八
石燈籠の標刻	同	同	二九	居庸關 名建築解説	同	同	同	古陶座談會	梅谷 藝藏	歷史公論	六ノ一〇
名古屋の石燈籠水鉢巡見記	同	同	二八	天壇祈年殿 名建築解説	同	同	一ノ七	陶器の名物三、四	高橋 龍雄	茶わん	七二、七三
土師神社の石燈籠	中野 楚溪	同	三二	曲阜文廟大成殿列柱 大唐平百濟塔の比例に就て	同	同	一ノ九	无 equal 抄	鹽田 力藏	書畫骨董 雜誌	三四七
切支丹燈籠の羅馬字に就て	川井銀之助	史述と美術	八ノ二	大金得勝陀頌碑の研究 上、下	杉山 信三	考古學	八ノ六	袖と上繪との區別、水飛の 漢語	宮島 榮	趣味	三ノ四
續織部燈籠の羅馬字に就て	同	同	八ノ九	修禪道場碑銘に就て	田村 實造	東洋史研究	二ノ五、六	日本陶器の考へ方	寺内 信一	茶わん	七四
織部燈籠前後詳	秋野 道人	同	同	半畝園	濱口 惠璋	龍谷史壇	一九	延年銘ある日本古陶磁	小野賢一郎	同	七五
涉成園の寶塔水鉢	川勝政太郎	林 泉	二七	印度の建築 一	小野 邦雄	建築世界	三ノ一〇	延喜式土器に就て	瀧岡 忠成	陶 磁	九ノ四
琉球紀行一、二	大岡 實	東洋建築	一ノ一、二	逸見 梅榮	東洋建築	一ノ四	王寺出土の陶器に就て	我國白磁の始め	吉備 外史	書畫骨董 雜誌	三五〇
琉球圓覺寺佛殿 名建築解説	巖谷不二雄	同	一ノ五	津輕十三港出土の陶片 有來新兵衛を語る	同	同	同	山栗抄一 くらはんか茶碗	角田 文衛	大和王寺史論	七三
臺南州北港朝天宮 名建築解説	藤島亥治郎	同	一ノ三	相原 知佐	茶わん	八二	瀨戸上代焼	河井寛次郎	中島 浩氣	茶わん	七三
朝鮮古建築	同	同	一ノ八	香取 秀眞	塔 影	一三ノ二	瀨戸古窯に關する二三の考	比中 宗悦	柳田 泉	工 藝	七二
佛國寺、石窟庵を觀る	外山卯三郎	美之國	一三ノ二	吉田 堯文	やきもの 趣味	三ノ一	國寶神酒壺と瀨戸の藤四郎 に就て(美濃長瀧寺)	津輕十三港出土の陶片	藤田 了一	陶 磁	九ノ三
朝鮮扶餘新出の文様博	有光 教一	考古學雜誌	二七ノ一	加藤唐九郎	同	同	七寶東漸記	有來新兵衛を語る	加藤唐九郎	茶わん	七七
朝鮮古建築信第三信	杉山 信三	史述と美術	八ノ五、七、九	松田富佐雄	汎工 藝	一五ノ二	「七寶燒(流)」語原考	瀨戸上代焼	赤塚 幹也	陶 磁	九ノ三
京城の石橋 上、中、下	同	同	同	西川一草亭	茶わん	七三	德川時代の七寶史	瀨戸古窯に關する二三の考	小山富士夫	同	同
熱河の遺蹟	伊東 忠太	建築雜誌	六二五	藤田 幸之	やきもの 趣味	三ノ一一	金澤の陶磁史	瀨戸古窯に關する二三の考	加藤唐九郎	星 岡	七七
熱河離宮「避暑山莊」につい	外山卯三郎	美之國	一三ノ九	同	同	同	小杉燒初代作品に就て	瀨戸古窯に關する二三の考	加藤唐九郎	茶わん	七四
熱河の喇嘛廟 名建築解説	竹島 卓一	東洋建築	一ノ五	同	同	同	小杉燒窓貫德利に就て	瀨戸古窯に關する二三の考	加藤唐九郎	茶わん	七四
錦州省北鎮縣の東嶽廟	村田 治郎	同	同	同	同	同	同	瀨戸古窯に關する二三の考	加藤唐九郎	茶わん	七四

栗田焼の一話 吉田 亮文 やきもの 八二

仁清の古史實に就て 嶋川 第一 同 三ノ一

傳仁清作色繪陶器掛船置 物解 男爵藤田平太郎氏藏 國 華 五五四

仁清の釘隠 樂之軒生 畫 説 八

習靜堂記に就て 田中 喜作 同 一〇

乾山のことども 竹内 梅松 書畫骨董 三五〇

樂茶碗、樂燒 高草 藍山 やきもの 三ノ四

安永時代の樂燒 福々 庵主 同 同

樂燒の目利書 宮本 謙吾 同 同

樂常慶考 知 足 堂 同 同

岡崎永樂に就て 小田庄三郎 同 三ノ一二

伊賀の古窯行脚 菊山當年男 同 七、七三

紀州陶窯の研究 小林太市郎 同 七八、八一

紀州陶窯の染付もの 石村賢次郎 同 七七

丹波古窯址を訪ねて二 四方義一郎 同 七一、七二

丹波の古窯に就て 杉本 挺雄 同 八〇、八一

丹波焼の發端 井上吉次郎 同 八〇

丹波古市燒私見 四方義一郎 同 八一

東山燒の染付など 瀧岡 忠成 同 七七

丹波燒概説 守田 種夫 同 九ノ一

丹波燒に就ての感想 大村 正夫 同 同

丹波篠山 田邊加多丸 同 同

或る丹波壺の銘 村島 渚 同 同

立杭 小山富士夫 同 同

伊部燒の鑑賞に就て 多田 利吉 同 三ノ六

伊部陶雅想 金重 陶陽 同 同

伊部燒邊筆 高草 藍山 同 同

備前島岡古窯開窯期と速水 同 同 三ノ五

宗達 同 同 同

保命酒の徳利 上、下 桑田 勝三 茶わん 七三、七四

但馬出石燒窯之古文書 一、 太田 陸郎 同 七三、七四、

二、三 八〇

伯耆法勝寺燒に就て 安藤 朋徳 やきもの 三ノ六

伊部陶工と窯元 桂 又三郎 同 同

伊部燒起原前後の考證 宗田 克巳 同 三ノ一二

伊部燒通史 桂 又三郎 やきもの 三ノ六

肥前の染付 金原 京一 茶わん 七七

刷毛目唐津に就て 正林 陶城 趣味 三ノ七

李參平の出身地とその磁器 馬渡八太郎 茶わん 七六

李祖説 色繪鍋島英華菊文様大皿 東京慶原又策氏藏(圖版解説) 美術研究 六二

龜山燒 特に龜山赤繪 龜山青磁等に就て 金子 光吉 茶わん 七二

繪畫工藝化即龜山青華 龜山茶碗物語 林 源吉 同 八〇

龜山茶碗物語 高橋 等庵 同 七七

現川燒我觀 佐羽總太郎 同 七五

現川燒は九州の京燒 現川に就て 倉橋藤治郎 同 同

現川に就て 藤武 英男 同 同

古今の名陶現川に就て 荻庭 主人 同 同

現川今昔感 内藤 堯賢 同 同

現川燒向附の形 湊江 二郎 同 同

現川窯に關する私記 林 源吉 同 同

現川窯發掘品 齋藤 徳男 同 同

續現川燒に就て 金子 光吉 同 同

現川燒文獻抄 梅野 滿雄 同 八二

弓野燒禮讚 淺野 陽吉 同 同

筑後星野燒 前田幾千代 茶わん 七四

運葉形白薩摩茶碗に就て 同 同 七二

慶長五畿島津弘銘茶碗 外人の觀た朝鮮陶磁器 ス・エ・カ・ド やきもの 三ノ五

年代の推定し得る朝鮮陶磁 松平 義明 陶 磁 九ノ四

朝鮮陶磁零話 加藤 澤豊 やきもの 三ノ二

朝鮮會寧地方の陶器に就て 鈴木 經緯 趣味 同

再び粉引と務安に就て 小田 三郎 同 同

務安の窯址 山田万吉郎 茶わん 七六

青磁象嵌の紋様 同 同 七四

繪高麗の模様 同 同 七二

平安南道の高麗窯址 八田 實 同 七九

康津窯址の陶片 山田万吉郎 同 七五

三島手の年代考察 野守 健 考古學 八ノ五

花三島の皿 山田万吉郎 茶わん 八一

李朝鐵砂の年代に就て 同 趣味 三ノ一二

李朝辰砂の斷想 笠井周一郎 茶わん 七六

朝鮮辰砂隨想 新保 喜三 同 同

平壤李朝辰砂に就て 加藤茂三郎 同 同

李朝觀瀾考 一、二 小杉 虎一 やきもの 三ノ二

窯址處女踏査 加藤茂三郎 茶わん 八〇

熱河錦州兩省發見陶器考 森 修 考古學雜誌二七ノ三

滿洲國出土の所謂雞冠壺に 島田 貞彦 考古學 八ノ一

就て 支那人の支那古陶磁器研究 小山富士夫 茶わん 八〇

支那陶磁と茶の關係に就て 中尾 万三 やきもの 三ノ八

(遺稿) 支那陶磁の裝飾的價值 立花 押尾 茶わん 八〇

年款ある支那の古陶磁 小山富士夫 陶 磁 九ノ四

八思巴文字ある支那古陶磁 同 同 七七

古染付寸觀 永末 笠庵 茶わん 同

染付私議 比木 喬 同 同

染付偶然 立花 押尾 同 同

支那の赤繪陶器に就て 小山富士夫 畫 説 五

最近に於る支那古窯址の發 見 同 同 同

支那出土陶磁漫談 聽鐘主人 陶 磁 九ノ二

朝鮮出土の支那陶磁器雜見 奧平 武彦 同 同

支那陶工傳 李放鑑纂 茶わん 七四

陶治圖説 二十則證解七九 太田 能壽 大日本窯業五三一、五三

唐白瓷盤 其他 藤岡 了一 茶わん 八〇

耶蘇會士ダントルコル師 景德鎮窯の研究(譯註) 小林太市郎 趣味 三ノ一〇

硯青磁の本體に就て 國原喜一郎 同 同 三ノ三

硯青磁と南宋官窯 赤塚 幹也 同 同

草戸の庄の宋青磁 光藤 珠夫 陶 磁 九ノ二

朝鮮古墳出土の宋元の陶磁 アル・オブ・ソ 同 同

元將祈陶記略 尾崎 洵盛 同 九ノ五

元上都址出土の陶片其他 小山富士夫 同 同

油滴天目茶碗 日本國寶 七五

東京伯耆酒井克忠氏藏 全集

蘭領東印度諸島の燈を採る	宮武 辰夫	茶わん	八二
セレス島出土古陶磁器	小山富士夫	同	八一
珠光青磁は安南青磁なり	永末 繁庭	同	八〇
宋胡録の「柿の香合とマン グスダイ」	外務省心庵	アトリエ	一四〇九
交趾窯私考	上田 恭輔	茶わん	八〇
過去の硝子藝術	朝倉 文夫	同	七八
日本硝子考	岡村 千曳	同	同
吹硝子への道	岩田 藤七	同	同
長崎のビイドロとギヤマン	林 源吉	同	同

金工

上古の金工	香取 秀真	歴史公論	六ノ一
金文に現れたる鑄師の本質	同	考古學雜誌	二七ノ一
懸佛に就て	同	美術研究	七〇
羽前立石寺の懸佛	篠崎 四郎	考古學雜誌	二七ノ八
上野園に於る懸佛	田島 宗二	日本國寶	二七ノ四
能作生塔 奈良長福寺藏	同	同	七七
經筒 東京松田福一郎氏藏	同	同	七七

華龍 滋賀神照寺藏	同	同	七六
梵鐘年代記	同	茶わん	七四
弘前長勝寺の梵鐘	山田 孝雄	考古學雜誌	二七ノ七
京都本圓寺の鐘銘	大島延次郎	同	二七ノ一
鐵紋轉出の明徳四年鐘に就 て	久保 常晴	同	八二
銅鐘 福岡觀世寺藏	篠崎 四郎	日本國寶	七九
錫杖 靜岡鐵舟寺藏	同	同	七八
正元元年の錫杖	篠崎 四郎	同	八〇
難讀の鐃口銘	同觀山房主	書 說	三
釣燈籠及び雪見燈籠考	前田 泰次	同	四
蓋屋釜の下畫と雪舟	香取 秀真	同	九
鐃の話	大熊 喜邦	同	八三
古鏡研究の概 二六—三二 (完)	佐藤 虎雄	史迹と美術	八ノ三、四六、 八九、一二三
古鏡雜話	守屋 孝藏	星 岡	七四
鏡に現れたる日本最古の文字	後藤 守一	歴史公論	六ノ一二
古鏡の化學成分に關する考 察	梅原 末治	東方學報	京都八

古鏡の化學的研究	小松 茂	東方學報	京都八
漢三國六朝紀年 鏡銘集錄	山内 淑人	同	同
增補 其五	梅原 末治	史 學	一六ノ二
漢三國六朝紀年 鏡銘集錄 增補 其六	同	同	一六ノ三
新出の鳥龍透文大鏡	同	星 岡	八三
新出檀伯達器考	小川 茂樹	東方學報	京都八
泰式幣と紋様の變化	山口松次郎	滿 蒙	一八ノ三
銅鏡の製作年代に就ての一 考察	原田 淑人	考古學雜誌	二七ノ二
我國發見の獸脚に就て	内藤 政恒	同	二七ノ一
紀州日高郡龜山より新出土 の銅鏡	森 彦太郎	考古學	八ノ九
紀伊新出土の銅鏡に就て —森氏に對する附記—	梅原 末治	同	八ノ九
錦官出土の二重環	澤 俊一	同	八ノ四
朝鮮古蹟調査瑣瑣一	同	同	八ノ七
南滿洲發見の漢代青銅器遺 物	森 同	同	八ノ七
滿洲熱河省新出の古銀銅 面	島田 貞彦	考古學雜誌	二七ノ一
許變氏舊藏筑前須玖發見の 銅鏡銅劍	梅原 末治	人類學雜誌	五二ノ一二
滿洲國錦州省錦州出土の劔 柄形銅器	島田 貞彦	考古學雜誌	二七ノ五
小形銅劔	榎本龜次郎	考古學	八ノ一
劔柄形銅器の新例	梅原 末治	考古學雜誌	二七ノ一二
東京安南出土の銅鏡に就て	小林 知生	人類學雜誌	五二ノ一
木漆工	同	同	同
百萬塔 奈良法隆寺藏	同	日本國寶	七四
蒔繪を觀る爲の時代觀	吉野 富雄	茶わん	七九
奈良朝の屏風裏斷片	同	漆と工藝	四三六
時代蒔繪の水紋	長野 草風	茶わん	七九
桃山時代の蒔繪	吉野 富雄	同	七七
北海道より將來の蒔繪手洗 に就て	同	漆と工藝	四四〇
アイヌの愛藏せる漆器に就 て	同	美術研究	六四
アイヌの漆器	杉山壽榮男	茶わん	七九
アイヌ族に保存されたる漆 器	山村 耕花	同	同

アイヌの漆器	山村 耕花	塔 影	一三ノ一〇
鼓腹の蒔繪に就て	岡田 讓	漆と工藝	四三二
蒔繪提筆符とその意匠	同	同	四三八
南蠻文様蒔繪品に就て四、五	吉野 富雄	同	四三一、 四三三
南蠻蒔繪曲象由來記	尾尼薩臺諒	同	四三二
浮線綾文手官 神奈川原安子氏藏	同	日本國寶	七七
清水九兵衛作和歌浦蒔繪見毫解	同	國 華	五六五
金澤山川庄太郎氏藏	同	同	四六
高麗螺鈿器に就て	岡田 讓	日本美術 協會報告	四六
畫角張とその工匠	奥平 武彦	茶わん	八二
傳長沙出土の漆畫鸞鸞雙蛇 に就て	梅原 末治	美術研究	七二
水野 清一	同	同	同
染織工	同	同	同
我觀天壽國縮帳史	明石 染入	夢殿 一七(推古美術 の諸問題)	同
新發見の連珠騎士符巖紋錦 藤井 孝昭	同	考古學雜誌	五
其 他	同	同	同
還太鼓 奈良春日神社藏	同	日本國寶	七九
源氏八領の鎧に就て	尾崎 元春	歴史公論	六ノ八
色々威胴丸 愛媛大山祇神社藏	同	日本國寶	七八
小櫻威甲冑 廣島嚴島神社藏	同	同	同
人形の話	西澤 富敏	浮世繪界	二ノ三
人形藝術に就て	藤懸 靜也	同	同
書蹟・文書	同	同	同
總 記	同	同	同
書道(平安後期)	尾上 八郎	日本文化史大系 平安後期文化	七八
工藝的なる文字—歴史的考 察を主として—	中村 直勝	工 藝	七九

古筆に就いて	田中 塊堂	書 道	六ノ九
古筆がたり	佐佐木信綱	茶わん	八一
古筆の筆者	植村 和堂	書 道	六ノ五
古筆の書誌學的資料價值	久曾神 昇	茶わん	八一
古寫經の研究(奈良朝時代)	兒島 妙圓	歴史公論	六ノ二
寫經の美術的な一面(平安朝時代)	岩淵啓之助	同	同
寫經考 三、四	赤堀又次郎	書畫骨董	三四三、三四四
草假名に就て	田中 親美	茶わん	八一
上代假名の性格に就て	相澤 春洋	同	同
本邦の古寫經五種	植村 和堂	書 道	六ノ二
實技上より見たる古寫經	相澤 春洋	日本國寶	七五
一字連疊法華經	神奈川原富太郎氏藏	全集	同
多度神宮寺伽藍緣起寶藏財	水谷悌二郎	畫 說	三
大聖武その他	神郡 晚秋	書 道	六ノ一
聖武天皇、光明皇后、聖德太子の御書	大澤 雅休	同	六ノ一、二
三筆、三蹟の書風に就て	相澤 春洋	歴史公論	六ノ二
白氏文集と十五夜詩卷に就て	松下 太虚	書 道	六ノ三
親王位記草案	植村 和堂	同	同
龍華樹院額	和田 山蘭	同	同
「敵國降伏」の宸翰に就て	植村 和堂	同	六ノ二
後水尾天皇宸翰遺耳集につ	辻 善之助	齋藤先生古稀祝賀記	六ノ二
賀歌に就て	相澤 春洋	書 道	六ノ一
小島切に残る思ひ出	内藤 亮資	茶わん	八一
高野切の書體に就て	尾上 柴舟	書 道	六ノ八
藤原行成卿傳	中村 春堂	同	六ノ三
權跡四種	相澤 春洋	日本國寶	同
傳藤原行成假名消息	里見 友松	全集	七五
京都熊谷直之氏藏	茶わん	八	八一
寂蓮法師の大坂切	里見 友松	茶わん	八一
藤原俊成假名消息	里見 友松	茶わん	八一
東京保城洞治氏藏	里見 友松	茶わん	八一
徳川前期の唐様	里見 友松	茶わん	八一
近世名書佚傳	里見 友松	茶わん	八一
日本近代名家小傳	里見 友松	茶わん	八一

古美術定期刊行物所載文獻

名家書翰蒐集の思ひ出	市島 春城	書 道	六ノ六
名翰餘韻	神郡 晚秋	同	同
探幽の書と弘法大師座右銘	田中 親美	影 一三〇、四	同
山陽の法帖に就て上、中、下伊東	卓治	日本美術	四三、四
山陽遺墨鑑賞餘談一—五	名草 山人	書畫骨董	四三三—三
北齊書翰雜考	吉野 建雄	浮世繪界	二ノ二
良寛傳	相澤 春洋	書 道	六ノ九
僧良寛の書に就て	中村 不折	書畫骨董	三四七
良寛の假名文字	津田 青風	書 道	六ノ九
良寛の書いた折帖	神郡 晚秋	同	同
良寛と仙居と	森 銑三	畫 說	二
書風、墨色、用語の研究	伊木 壽一	歴史公論	六ノ二
支那	青梧 桐生	書 道	六ノ五
高句麗好太王碑	中村 不折	茶わん	七七
漢の熹平石經	同	書 道	六ノ二
支那の寫經	宋徽宗文集序	日本國寶	七八
京師小川睦之助氏藏	同	全集	同
京師守屋孝藏氏藏	同	同	同
元庵書學墨蹟	同	同	同
京師守屋孝藏氏藏	同	同	同
梵琦楚石墨蹟	同	同	同
東京男爵園伊能氏藏	同	同	同
贖された鄭板橋	尾上 柴舟	書 道	六ノ九
鄭板橋集を讀んで	高田 竹山	同	同
鄭板橋に就て	八幡關太郎	同	同
包世臣一傳	徐子 康編	同	六ノ八
包世臣の書壇を論ず	大澤 雅休	同	六ノ四
「小倦遊園草書」その書	西川 寧	同	同
趙叔福小傳	徐子 康編	同	六ノ一〇
新井白石手録 (校刊)	藤田 經世	畫 說	一〇
神皇宗滿日記(坤ノ三—六)	茶わん	七、七三、八〇、八二	同
頼山陽の藝術趣味に就て	下村三四吉	齋藤先生古稀祝賀記	同
格狭間の變遷	川勝政太郎	史述と美術八ノ五	同

忍冬文様の考察	渡邊 素舟	影 一三ノ五	同
漢代の植物文様に就て	梅原 末治	東洋史研究三ノ二	同
漢代の仙界意匠に就て	水野 清一	考古學雜誌二七ノ八	同
藝文に就て	伊東 忠太	同	二七ノ二
北魏唐草文様の二三に就て	長廣 敏雄	東方學報	京都八
北京の寶物散逸に就て	小林 勝生	滿 蒙	一八ノ二
文房四寶發達史	長尾 雨山	書 道	六ノ三
古硯小智識	飯島 龍孫	歴史公論	六ノ二
古硯清談	後藤朝太郎	同	六ノ八
内外の硯石に就て	丘 襄二	滿 蒙	一八ノ二
石研と石工藝	小田 淳明	茶わん	七一
古研銘種々	佐藤 凜	書 道	六ノ六
墨の物理的研究	中谷宇吉郎	畫 說	一〇
紙の智識	田中 敬	歴史公論	六ノ二
紙墨問談	山下新太郎	南畫鑑賞	六ノ一〇
麻紙と紫紙	宮田 三郎	工 藝	七二
大和古印	拾原慈之介	星 圖	八一
印と印肉の話	同	歴史公論	六ノ二
武家使用の印章の撰定に就て	花見 朔巳	同	同
花押と時代及び人	下村三四吉	同	同
花押の公卿様武家様に就て	高橋 隆三	同	同
藝術に現れたる牛	金井 紫雲	塔 影	一三ノ一
申叔舟の海東諸國紀に見れ	東恩納寛惇	史 學	一六ノ三
たる琉球國圖について	野上豊一郎	思想	一七七
扶餘の遺蹟	同	同	同
其他	同	同	同
考古學・金石關係	同	同	同
考古學文獻總目錄 昭和一年度	柴田 常惠	考古學	八ノ二
趣味の考古學	同	歴史公論	六ノ八
原始神社の考古學的考察	大場 勢雄	同	六ノ一
歴史考古學第二講 墳墓	同	史述と美術八ノ二	同
古墳の起原	後藤 守一	歴史公論	六ノ一
古墳の種々相	同	同	同
前方後圓墳	小林 行雄	考古學	八ノ一

檜濱市矢上古墳調査概報	柴田 常惠	史 學	一六ノ二	王寺の金石文	高田 十郎	大和王寺史論	北野經王堂について	竹内 秀雄	史蹟と古	一九ノ一	
美濃太田町字藏ノ内古墳	林 魁一	考古學雜誌	二七ノ八	吉野山奥の金石文 下	同	大和志	四ノ二	日吉神社	栗野 秀穂	同	一九ノ五
達磨寺古墳群に就て	樋口 清之	大和王寺史論		朝鮮古蹟調査キミギ	高田 十郎	史迹と美術	八ノ三	吉野朝時代の攝津住吉神社	木村 武文	同	一八ノ四
稻村山古墳に就て	島本 一	考古學雜誌	二七ノ五	朝鮮古墳けんぶつ	野上豊一郎	畫 說	四	支那の藝術上に現れたる陰陽思想	白鳥 庫吉	考古學雜誌	二七ノ二
安藝豊田郡沼田東村兜山古墳	吉野 益見	同	二七ノ三	新羅の瓶形墳	齋藤 忠	考古學雜誌	二七ノ五	正定府城内の古蹟	田中 萬宗	畫 說	三五三
泉崎古墳の壁畫	水谷川忠磨	南畫鑑賞	六ノ二	新羅墳墓の封土表飾の諸型式に就いて	同	考古學論叢	五	唐代長安文化と契丹文化	神尾 式春	滿 蒙	一八ノ五
内行花文鏡を出せる箱式棺の新例	兒島 隆人	考古學	八ノ一	高句麗時代の古墳について	中村 清兄	同	四	正倉院文書の由緒に關する考察	松平 年一	歴史地理	七〇ノ一
古代文化の表徴としての土器	石野 瑛	歴史公論	六ノ八	近時所見の一二の樂浪遺物	梅原 末治	考古學	八ノ五	聖武天皇の藥師寺宮に就て	足立 康	史蹟名勝天	一二ノ八
大和唐古池出土の原始繪畫土器	末永 雅雄	考古學論叢	五	粘蟬碑考	水谷悌二郎	畫 說	六	藤原宮陸傳説地高殿の發掘	同	同	一二ノ一
備前門田具塚出土の彫刻ある骨角器に就いて	佐藤美津夫	考古學	八ノ六	滿洲考古學漫筆	八木英三郎	歴史公論	六ノ八	田村宮と楊梅宮	同	同	一二ノ一
植輪より見た上古時代の葬禮	後藤 守一	齊藤先生古稀祝賀記念論文集		滿洲考古學界の近況	島田 貞彦	同	滿	大和に於ける御歴代の聖蹟相模(大住・餘蔵)國府の研	高橋 城司	同	一二ノ一
新發見の植輪を語る	同	歴史公論	六ノ八	滿洲考古學界の趨勢	同	蒙	一八ノ八	賀茂氏久のこと	足立 康	史迹と美術	八ノ一
長門國大井村發見の植輪窯に就て	山本 博	考古學雜誌	二七ノ八	滿鮮の文化を語る	榎本龜次郎	考古學	八ノ二	宮城十二門の土牛	稻村 垣元	史蹟名勝天	一二ノ六
越後中期繩文文化馬高期に於ける土製裝飾具の發生に就て	近藤勲次郎	考古學	八ノ一〇	榎本・水野兩氏に物を聞く會	水野清一 小林行雄 七田良平	考古學	八ノ二	河村城址考究の斷案	木村捷三郎	史蹟と古	一九ノ四
上代ノ馬形遺物に就て	大場 磐雄	考古學雜誌	二七ノ四	安徽省蕪湖の墳墓と其の遺物	梅原 末治	考古學論叢	五	日本原始時代の服飾	宮本 勢助	歴史公論	六ノ一
尾張國瑞穂發見の動物形土器	吉田 富夫	考古學	八ノ九	長沙出土の木偶について	水野 清一	東方學報	京都八	武器武裝の發達とその歴史的考察	末永 雅雄	歴史教育	一二ノ八
大和地方發見の新資料	島本 一	考古學雜誌	二七ノ八	支那金石學概要 一、二(石刻)	馬衡著 水野清一譯註	東洋史研究	三ノ一、二	我國に於ける女裝の變遷	後藤 守一	同	一二ノ三
種の銅製尖頭器に就て	梅原 末治	考古學雜誌	二七ノ一〇	中央亞細亞和闐出土の陶製動物小像に就て	島田 貞彦	考古學雜誌	二七ノ八	藤原時代の服飾に於る色彩配合の觀念	宮本 勢助	歷史公論	六ノ八
銅鑄銅劍を出せる小豆島安田遺蹟	寺田 貞次	考古學	八ノ七	上代印度支那の考古學的研究に就て	松本 信廣	同	二七ノ一二	貫頭型衣服に就て	高橋 勇	同	同
紀伊岩倉山銅鑄出土地の再調査	藤井 誠一	同	八ノ九	宗教・歴史關係	同	同	同	琉球の服裝	喜田 貞吉	考古學雜誌	二七ノ二
尾張國西志賀發見の銅鑄形土製品	吉田 富夫	同	八ノ一一	南都春日神社「移殿」雜考	黒田 昇義	史迹と美術	八ノ八	佛教の初傳に就て	清原 貞雄	史學研究	八ノ三
美濃蛇持の木簡寫經に就いて	藤井治左衛門	同	八ノ八	南都春日神社永德二年の同祿とそれに關する問題	同	同	八ノ一一	佛教々理史上より見たる四天王の一考察	橋本 凝胤	夢 殿	一六
日向西都原出土の經筒	角田 文衛	考古學論叢	五	譽田八幡宮小攷	栗野 秀穂	史蹟と古	一八ノ三	四天王思想の起源と印度の四天王	小野 玄妙	同	同
古文書學と金石文	入田 整三	歴史公論	六ノ一二	松尾神社史付尊勝寺史	堀川辰之助	林 泉	二九	四天王寺と四天王	出口 常順	同	同
金石文の趣味	關山 泰四	同	六ノ八					血脈式より見たる天台宗と眞言宗	石田 茂作	齊藤先生古稀祝賀記念論文集	
房總金石志 一五―二三	篠崎 四郎	史蹟名勝天	一二ノ一一					上代王寺盆地の佛教文化	田中 重久	大和王寺史論	
石塔寺所見の古石文	藤澤 一夫	考古學	八ノ八								

關東地方の佛教文化	稻村 坦元	歴史公論	六ノ八
上古時代の葬禮	後藤 守一	鴨臺史報	五
肉身像及遺灰像の研究	小杉 一雄	東洋學報	二四ノ三
思溪版大藏經私考	小川 貫式	龍谷史壇	一九
大般若經の研究 一	清野 謙次	寶 雲	九
達磨塚説話の成立展開と達磨塚	樋口 清之	以可留我	一ノ六
達磨寺の研究	福山 敏男	大和王寺史論	
四天王寺の舍利、甲午年銘版と片岡王寺	同	以可留我	一ノ四
中世に於ける長谷寺の炎上とその復興上、下	森末 義彰	美術研究	六二、六三
中世長谷寺再建記録(研究資料)	同	同	六二
東北院	三森 定男	考古學研究會會報一(考古學論叢)	
金地院安國堂	栗野 秀穂	史蹟と古 美術	一八ノ一
徳川時代に於る王寺の領主と石高	田村 吉永	大和王寺史論	
内山永久寺記録	森末 義彰	美術研究	六九
尾道の淨土寺	川勝政太郎	史迹と美術	八ノ一
青州の佛教史跡	春日 禮智	龍谷史壇	一九
反本地垂迹説の發展と聖徳太子の信仰上、下	小倉 豊文	以可留我	一ノ五、六
聖徳太子と秦河勝	肥後 和男	史蹟と古 美術	一八ノ二
聖徳太子の精神信念	常盤 大定	夢 殿	一六
鎌倉時代の聖徳太子崇拜	栗野 秀穂	同	同
傳教大師と大黒天	故中川忠順	畫 說	六
藤原道長と金峯山の信仰	矢島 恭介	歴史公論	六ノ八
僧成尋と日宋交通 上、下	原田忠四郎	歴史地理	六九ノ四、六
重源上人と六字名號	藤田 寛雅	同	六九ノ三
明恵上人と其周囲の人々	栗野 秀穂	史蹟と古 美術	一八ノ五
承久役に關しての一考察	同	同	同
南化國師玄興	同	同	一九ノ三
一寧一山の來朝	同	同	一八ノ一
玉林院月夢	西堀 一三	同	一九ノ二

總說・綜錄

[illegible]

藍雪名畫選 恩賜京都博物館 京都 芸興堂

十竹齋畫譜 二書畫 下 アトリエ社 アトリエ社

九蘭譜 上 下 アトリエ社 アトリエ社

一〇同 下 下 アトリエ社 アトリエ社

一一竹譜 上 下 アトリエ社 アトリエ社

一二同 上 下 アトリエ社 アトリエ社

一三梅譜 上 下 アトリエ社 アトリエ社

一四同 上 下 アトリエ社 アトリエ社

支那南畫大成 續六 題跋集上 興文社 興文社

宋元花鳥畫撰 題烟江疊嶂圖詩 關崎義郎 京都 芸興堂

燉煌畫の研究 圖像篇 松本榮一 東京文化學院 東京研究所

半勲像の研究 上、下 山田準次郎 山田準次郎

日本彫刻精華 解説付 松岡光夢 昭創書院

古美術寫真集 八 東明寺藥師如來坐像 三集 大阪 香山氏

九 國分寺金銅聖觀音像 三集 野上豊一郎 岩波書店

能面 五—一〇 野上豊一郎 岩波書店

建築

日本文化講座 一四 日本建築及庭園 原田治郎 帝國教育會第七回世界教育會議

日本建築史講話 關野貞 岩波書店

伊東忠太建築文獻 文獻編輯會 龍吟社

一 日本建築の研究 四 東洋建築の研究 六 論義、隨想、漫筆 夢殿論議編輯 鵜故郷舎

法隆寺建築讀本 飛鳥編 所 足立康 究所

藥師寺伽藍の研究 (日本古文化研 究所報告五)

彫刻

雪野寺址發掘調査報告(同七) 柏倉亮吉 同

西成會社 一、古瓦文様 二、西福寺縁起 名威ものがたり

白丹村に於る寶篋印塔の研究 古瓦拓影集 一、二、五 古瓦集英 日本庭園史圖鑑

三上 室町時代 三下 同 桃山時代 江戶時代初期 二

一〇 同 江戶時代中期 二 一四 同 江戶時代末期 一

一七 慶長以前の石燈籠 熱河遺蹟の建築史的價值 啓明會第六九回講演集 藝文山石齋

天沼俊一 京都スバカケ出版部 伊東忠太 啓明會

東方文化學院 京都研究所 東方文化學院 京都研究所

工藝 總記 藝文百大圖鑑 遠州鐵板圖鑑 上、下 支那と佛蘭西美術工藝

陶磁工 一七—二二 陶器圖錄 西北陸、關東、奥羽篇 日本古陶銘款集 九州篇

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

昭和十二年度美術文獻目錄

新陶器辭典 尾張瀬戸常滑陶器誌 紀州陶器集成 東山燒 伊部燒通史 伊部燒年表 伊部燒陶印集 高取歷代記錄(陶器全集) 伊萬里染付大皿

茶道全集 一五 器物篇 四 高麗茶碗次第錄(複製) 彩雲會講演錄 三島に就て 支那古陶磁研究の手引 南海古陶磁

釜の研究 釜の研究 釜の研究 釜の研究

金工 木漆工 日本時繪大觀 一—三

染織工 名物錦類纂 一〇 萬葉延喜染裂鑑 一 能裝束名品集 續 四—九 名作能衣裳

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

加藤唐九郎 工業圖書株式會社

寺田信一 學藝書院

小林太市郎 京都山本湖舟寫真工藝部

瀧岡忠成 彰文會

鳥山信次 彰文會

桂又三郎 同

同 同

小野賢一郎 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

雄山閣 雄山閣 雄山閣 雄山閣

和漢書道諸話
赤城 和漢名蹟叢書
三 王羲之 集字聖教序 上
四 同 同 下
九 歐陽詢 皇市府君碑 上
一〇 同 同 下
一四 褚遂良 雁塔聖教序 上
一五 同 同 下
二五 王羲之 蘭亭二種(神龍半印本袖珍本)
二八 王羲之 尺牘集
三一 歐陽詢 化度寺碑殘簡
三二 同 行書帖(仲尼夢典帖外二)
三四 孫過庭 書譜 上
三九 傳弘法大師 請來目錄 上
四〇 同 同 下
四六 傳藤原行成 和漢則詠集 上(假名)
四九 傳藤原佐理 筋切
五〇 近衛豫樂院 新古今集序
日本名蹟全集 刊行會 武田墨彩堂

傳宗普親王筆 歌合卷研究
後醍醐天皇宸翰集
賴山陽先生遺芳帖
山陽遺墨選
俳人眞蹟全集 一 貞門時代
一茶眞蹟集
國書論集成
一 漢魏 六朝
一〇 清 二甲
一 清 三
支那 墨蹟大成 一、二、三、五、
那和 碑法帖大觀 七、八、一〇、
新選 道因法師碑 歐陽通書
二ノ九 黃庭、樂毅四種、王羲之書
二ノ一〇 懷素、千金帖、懷素、聖母帖
二ノ一一 懷素、千金帖、懷素、聖母帖
二ノ一二 雁塔聖教序並記 褚遂良書
三ノ一 皇市府君之碑 歐陽詢書
三ノ二 草書孝經 賀知章書
三ノ三 宋拓館本十七帖 王羲之書
展大古法帖 中根佐一郎 中央書道協會
眞草千字文 下
蘭亭序、爭座位帖
虞恭溫公碑殘字、化度寺殘字
第二輯(書譜)

考古學・歴史關係

雄山閣 雄山閣
後藤守一 四海書房
梅原末治 日本古文化研
田澤金吾 究所
後藤守一 足利 織姫神社
實田耕作 京都桑名文星堂
帝室博物館 志村 銅平
入田整三 雄山閣
山形 山形縣郷土會
群馬縣 群馬縣郷土會
鳥取縣女子師範學校 鳥取縣女子師
朝鮮總督府 朝鮮總督府

傳弘法大師筆 綜藝種智院式
弘法大師筆 風信帖、灌頂記
嵯峨天皇宸翰 唐李詩殘卷
小野道風筆 玉泉帖
藤原行成筆 白樂天詩卷
小野道風筆 屏風土代
歷代天皇御宸翰
かな名蹟全集 刊行會 武田墨彩堂
傳藤原行成書 文字和漢則詠集切
同 曼殊院古今和歌集 釋文付
同 伊豫切 下
傳藤原公任書 十五番歌合 全
同 元曆校本萬葉集 卷一釋文付
同 關戸本和漢則詠集 釋文付
同 本願寺三十六人集 伊勢集 釋文付
同 貫之集 下 釋文付
假名名蹟叢書
藤原行成筆 朗詠和歌抄 上 高野切第二種

趣味の考古學
日本歴史考古學
近畿地方古墳墓の調査(二)
上野國總社二子山古墳の調査
(日本古文化研究所報告四)
足利市織姫神社境内古墳發掘
調査報告
大和島庄石舞臺の巨石古墳
植輪 同解説付
日本金石文綱要
山形縣金石文集
上毛金石文年表
因伯碑文集
昭和七年度古墳調査報告 二
慶州忠孝里石室古墳調査報告
昭和九年度古墳調査報告 一
慶州皇南第一〇九號墳、皇香里第一四號墳調査報告
昭和十一年度古墳調査報告
昭和十一年度古墳調査報告
昭和十一年度古墳調査報告
滿洲國古墳古物調査報告書
一 錦州省之古蹟
洛陽金村古墓群英
支那古器圖攷
周秦漢三代之古紐研究(上、下)
東方文化學院京都研究所研究
報告一〇
指定史蹟名勝天然紀念物
山形縣史蹟名勝天然紀念物調
査報告
五 名勝島海山
栃木史蹟
大浦倉藏 栃木市役所
高田安平

雜

記字と巴の起源考 下
文房至寶
津田宗及茶湯日記 他會篇上下
松村米太郎評註
三吉 朋十
三吉 朋十
雄山閣
津田宗及茶湯日
記刊行後援會

雄山閣 雄山閣
後藤守一 四海書房
梅原末治 日本古文化研
田澤金吾 究所
後藤守一 足利 織姫神社
實田耕作 京都桑名文星堂
帝室博物館 志村 銅平
入田整三 雄山閣
山形 山形縣郷土會
群馬縣 群馬縣郷土會
鳥取縣女子師範學校 鳥取縣女子師
朝鮮總督府 朝鮮總督府

假名名蹟叢書
藤原行成筆 朗詠和歌抄 上 高野切第二種

傳弘法大師筆 綜藝種智院式
弘法大師筆 風信帖、灌頂記
嵯峨天皇宸翰 唐李詩殘卷
小野道風筆 玉泉帖
藤原行成筆 白樂天詩卷
小野道風筆 屏風土代
歷代天皇御宸翰
かな名蹟全集 刊行會 武田墨彩堂
傳藤原行成書 文字和漢則詠集切
同 曼殊院古今和歌集 釋文付
同 伊豫切 下
傳藤原公任書 十五番歌合 全
同 元曆校本萬葉集 卷一釋文付
同 關戸本和漢則詠集 釋文付
同 本願寺三十六人集 伊勢集 釋文付
同 貫之集 下 釋文付
假名名蹟叢書
藤原行成筆 朗詠和歌抄 上 高野切第二種

雄山閣 雄山閣
後藤守一 四海書房
梅原末治 日本古文化研
田澤金吾 究所
後藤守一 足利 織姫神社
實田耕作 京都桑名文星堂
帝室博物館 志村 銅平
入田整三 雄山閣
山形 山形縣郷土會
群馬縣 群馬縣郷土會
鳥取縣女子師範學校 鳥取縣女子師
朝鮮總督府 朝鮮總督府

愛知縣史蹟名勝天然紀念物調
査報告 一五

愛知縣愛知縣

蒙古高原橋斷記

京都府史蹟名勝天然紀念物調
査報告 一七

京都府京都府

新西域記 上、下

奈良市史

奈良市奈良市

和歌山縣史蹟名勝天然紀念物
調査報告 一六

和歌山縣和歌山縣

紀伊國名所圖會 中

貴志康親和歌山貴志康親

島根縣史蹟名勝天然紀念物調
査報告 九

島根縣島根縣

山口縣史蹟名勝天然紀念物の
概要

山口縣山口縣

香川縣史蹟名勝天然紀念物調
査報告 八

香川縣香川縣

熊本縣史蹟名勝天然紀念物の
概要 附國寶其他

熊本縣熊本縣

東洋歴史大辭典

平凡社平凡社

日本古代史論

清原貞雄雄山閣

日本文化史大系

誠文堂新光社誠文堂新光社

奈良文化

辻善之助大日本圖書株式會社

平安後期文化

淺賀辰次郎中 文 館

安土桃山文化

大屋 徳城 東方文獻刊行會

日本文化と佛教

花山 信勝 日本文化協會出版部

聖德太子傳古今目錄抄の基礎
的研究

荻野三七彦奈良 法隆寺

嵯峨天皇と平安朝文化

黑板 勝美 日獨文化協會

傳教、弘法と日本文化

金子 大榮 日本文化協會

智證大師

天台宗寺門派 御遠忌局 大津園城寺

大和王寺史論

保井芳太郎奈良 鵜谷郷舎

知恩院史 附知恩院史年表

知 恩 院 知 恩 院

諸大名の學術と文藝の研究

福井 久藏 厚生 閣

日本服飾史要

江 馬 務 京都 星野書店

遼の文化を探る

鳥居 龍藏 章 華 社

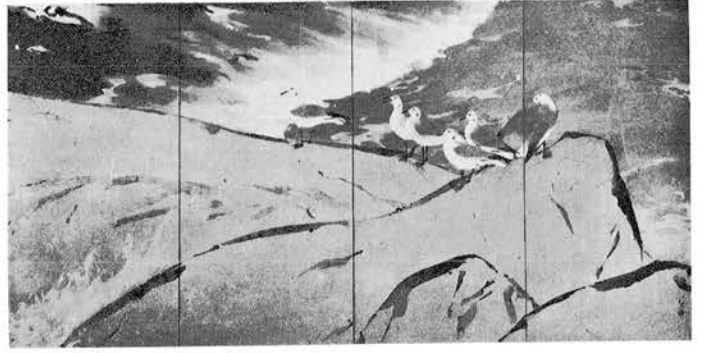
契丹佛教文化史考

神尾 式春 大 滿洲文化連協會

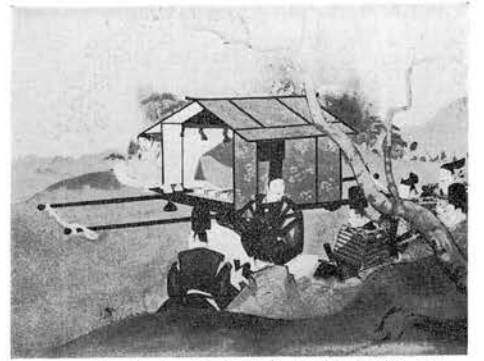
東亞考古學會 朝日新聞社
蒙古調査班
上原芳太郎 有 光 社

插

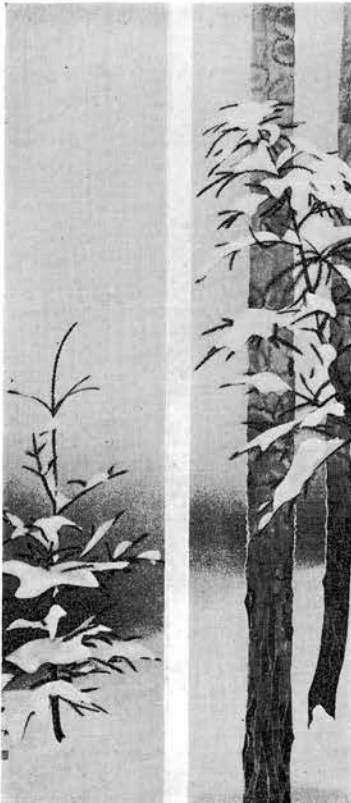
圖



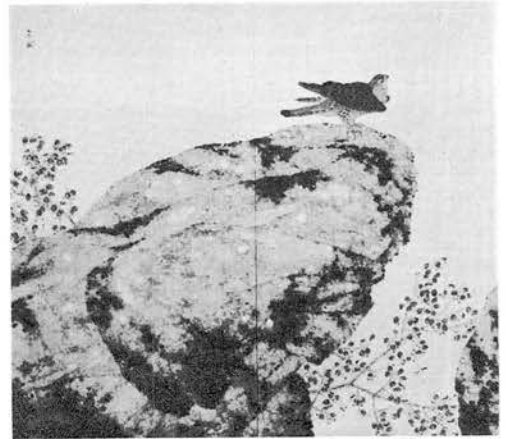
一 湖 騒 (個展) 川端 龍子



二 遠 萊 山 小 (展會丙革) 幸遷島の岐隠



四 雪 暮 (六湖會展) 山口 蓮春



三 春秋屏風(秋) (個展) 小杉 放庵

五 江頭微雨 (春虹會展) 川村曼舟



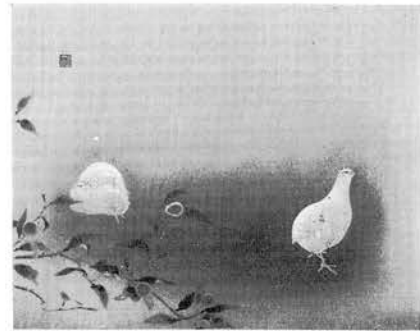
八 遅日 (春虹會展) 菊池契月



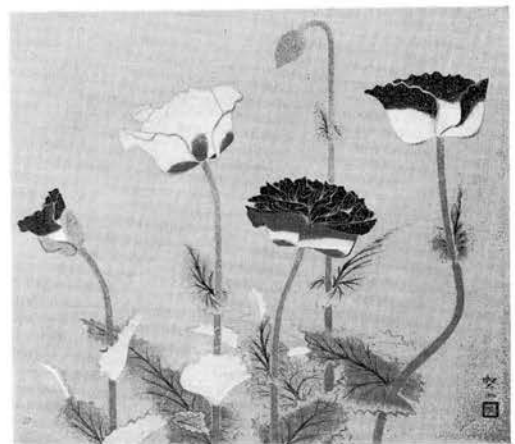
九 猿 (春虹會展) 西村五雲



六 金蛋白鷄 (戸田觀美堂展) 杉山寧



一〇 春雪 (春虹會展) 上村松園



二 堅岡吉 (展堂美觀戸田) しげ七



一二 山の春（戊辰會展）山下 巖



一一 樹 光（展會月如）三輪 晃



一三 山の春（戊辰會展）川合 玉堂



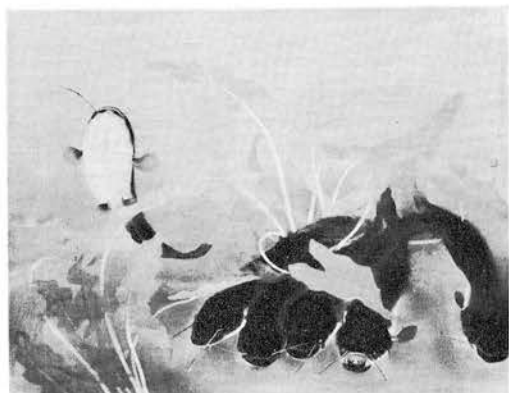
一五 春 水（戊辰會展）磯部 草丘



一四 鳥 鶯（其ノ一鳥）（戊辰會展）兒玉 希望



楓 青 田 津 (展個) 内ノ巻畫長水高山 六一



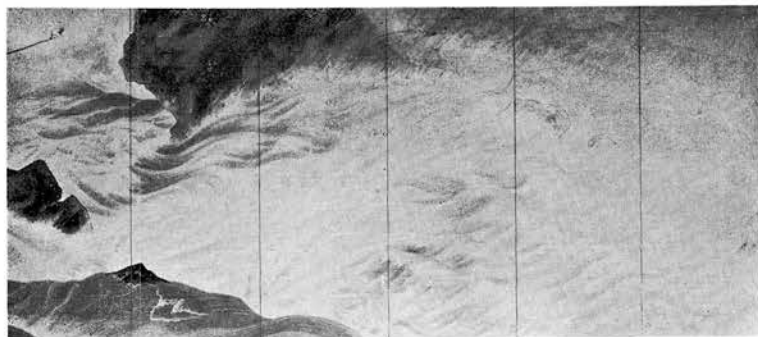
一八 鯉 (春の青龍社展) 小島朋子



一七 薔二題 其ノ一 (春の青龍社展) 坂口一草



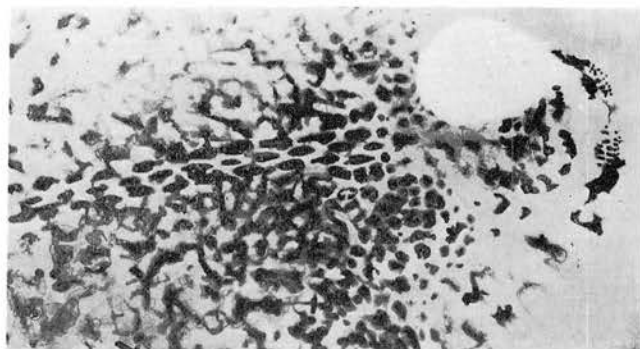
一九 冬日 (春の青龍社展) 加納三樂



堂 勝 山 穴 (展人同院畫國) 湍 激 ○二



二二 餌 時 (春の青龍社展) 佐藤 木 草



助之鹿村木 (展社龍青の春) 昨 青 一二



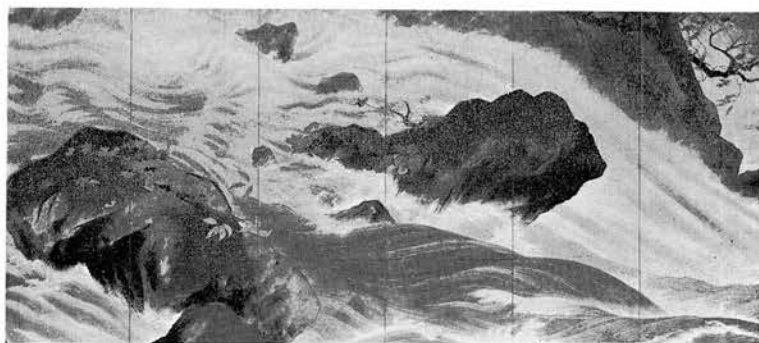
二四 十國峠俯瞰 (春の青龍社展) 川端 龍子



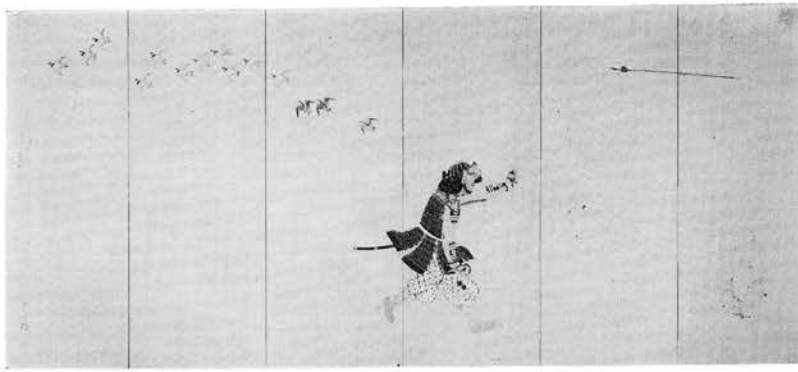
二三 十國峠仰観 (春の青龍社展) 川端 龍子



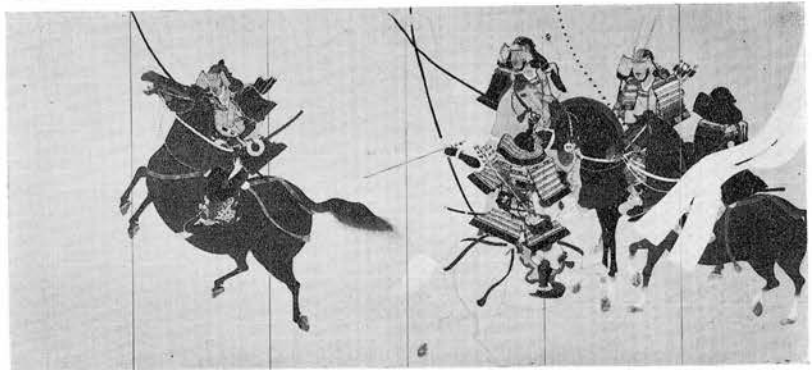
二五 寂 光 (春の青龍社展) 濱出 栄 一



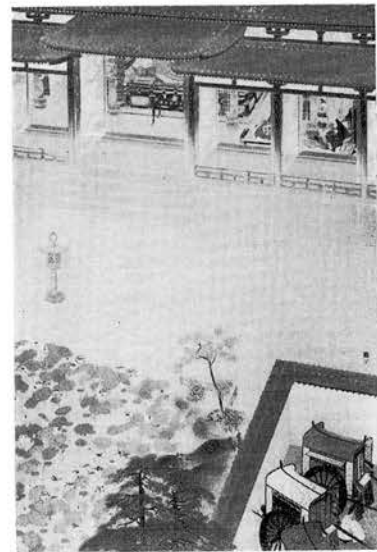
右 同



二六 矢表 (國畫院展) 松岡映丘



二八 聖僧日蓮 (國畫院展) 岩田正巳



二七 朝勤 (國畫院展) 吉村忠夫

二九 影向 (國畫院展) 小村雲岱





三 鶴井石 (展會陽春) (双半曲六) 圖之舞子獅田常 ○三



三二 立葵 (東京會展) 廣島見市



三一 椿 (春陽會展) 小杉放庵



三四 椿 (東京會展) 荒木十畝



三三 はつ夏 (東京會展) 中村大三郎



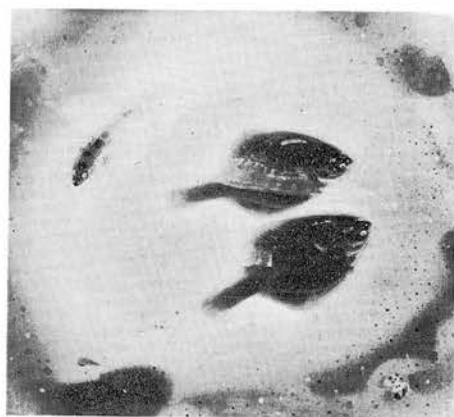
三八 清 晝 (個展) 橋本關雪



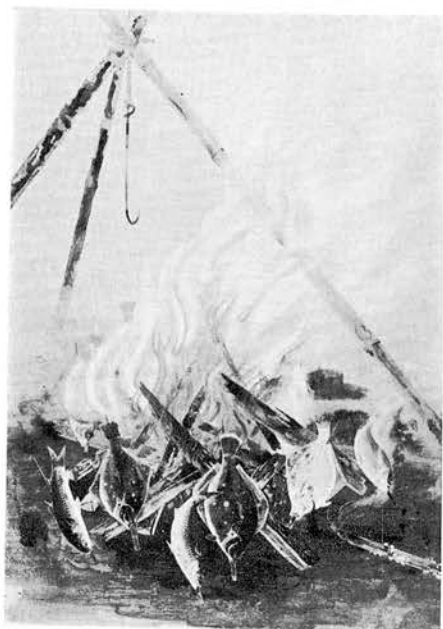
三五 新 樹 (九阜會展) 山口華楊



九三 四季花鳥之內 (讀畫會展) 荒木十畝



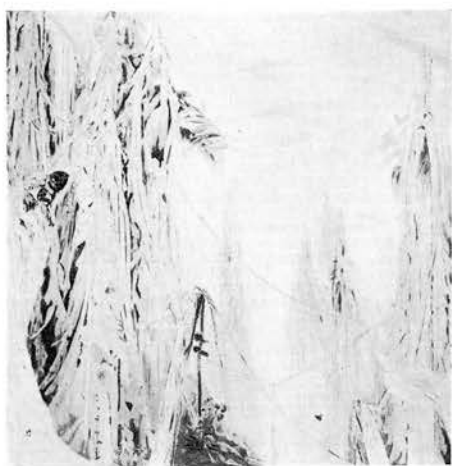
六三 潮のあと (九阜會展) 森白市



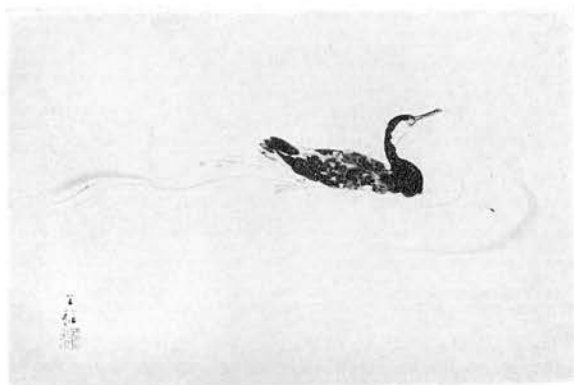
四〇 濱やき (讀畫會展) 中嶋晃華



三七 花 火 (個展) 伊東深水



司幸澤菅（展院術美日大）蕉芭四四



稻宜村森（展個）鶴一四



雲青森藤（展院術美日大）間溪二四



明素城結（展術美日大）湍清五四



龜文岡常（展院術美日大）芽崩三四

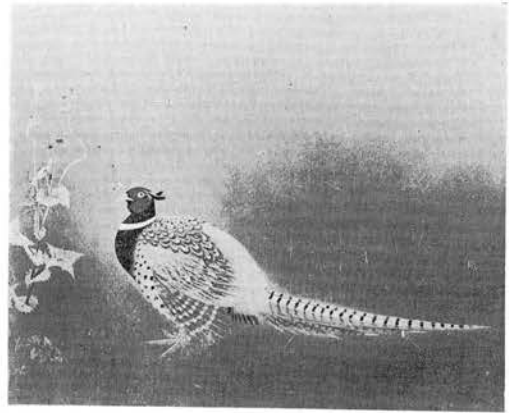


乘大木青（展院術美日大）火焚六四

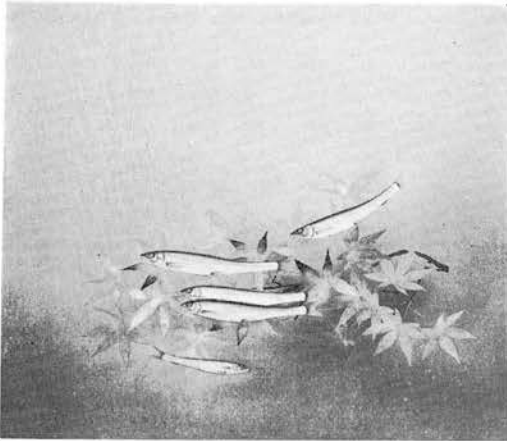
四七 モーズ (京都市美術展) 池田遙都



四八 春 (京都市美術展) 上村松篁



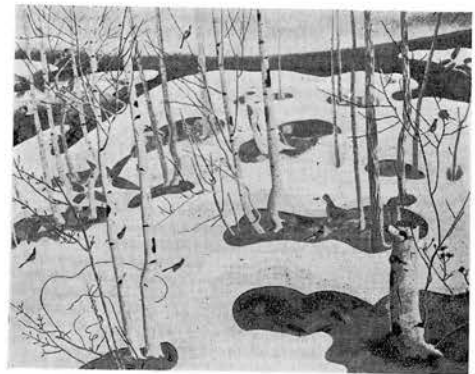
彦 鞆 田 安 (展會光清) 白 目 ○五



徑 古 林 小 (展會光清) 鯔 若 一五



觀 大 山 横 (展會光清) 日遲間林 二五



藝 宏 澤 (展術美市都京) 原高の月四 九四

五三 舞踏場の一隅(兒玉畫藝展) 奥田巖三



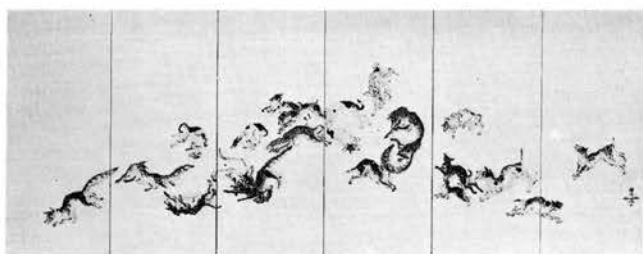
五四 雪餘(明則美術試作展) 故落合朗風



五五 彩濱(明則美術試作展) 故落合朗風



五八 喧嘩(明則美術試作展) 藤田副治



五六 驚春(明則美術試作展) 川口春波



波 春 口 川 (展作試術美則明) 冬 暖 七 五



藤田副治

五九 翠 澗 (個展) 川 端 龍 子



六〇 換書 (南畫聯盟展) 小室 翠 雲



六一 馬 (其一) (瑠爽畫社展) 杉 山 寧



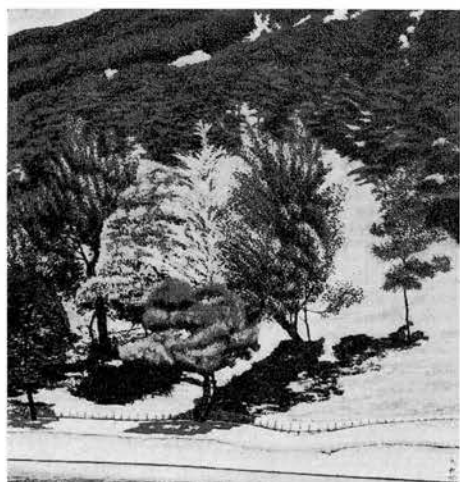
六二 雜木林 (瑠爽畫社展) 山 本 丘 人



六三 桃 (生爽會展) 西 山 翠 峰

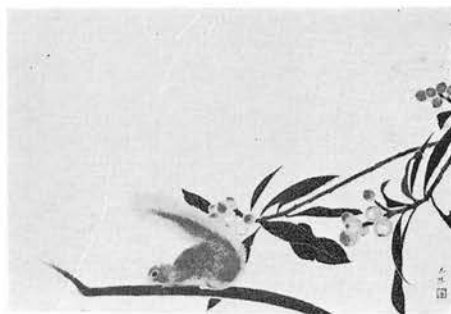


六四 初 夏 (生爽會展) 小 島 氣 郎

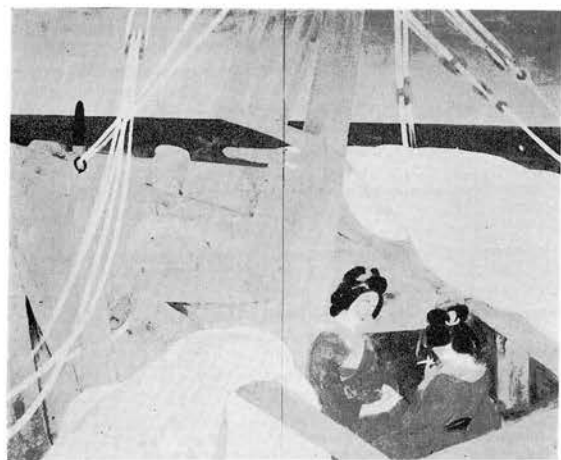




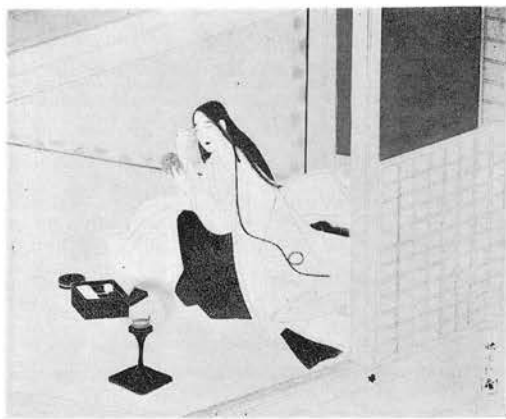
市野市 (展社龍青) 槽魚八六



牛土村奥 (展家作五) 把枇五六



六九 港の女
『白首船』 (青龍社展)
加納三樂



丘映岡松 (展會々珊) 墨 尉 六六



子龍端川 (展社龍青) 運 睡 〇七



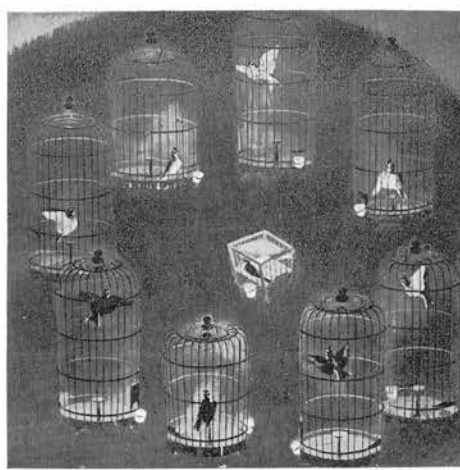
六七 朝 爽 (珊々會展) 菊池契月



七一 「大陸策」四部作ノ一
朝陽來（青龍社展） 川端龍子



げ 揚



き 鳴



り 切 臺

七二 春野（青龍社展） 時田直善



七三 高原に展く（青龍社展）
谷口富美枝

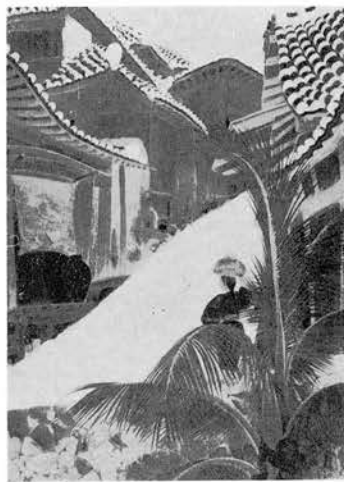




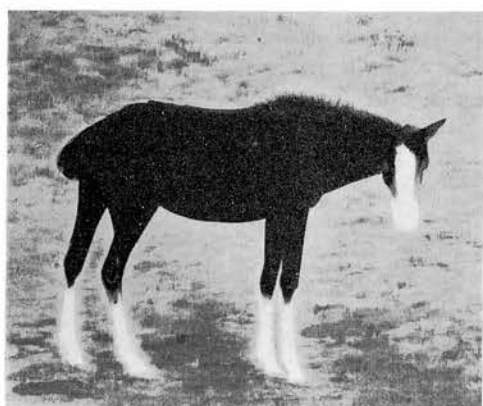
同 右 「瀟系」球璣 六七



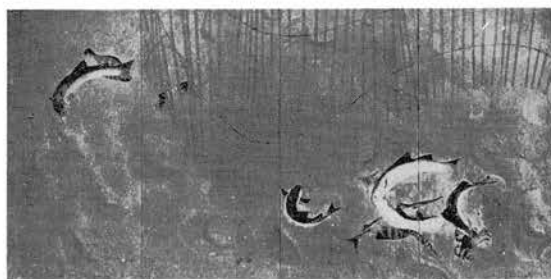
同 右 「瀟系」球璣 五七



草一口板(吳社龍青)「里首」球璣 四七



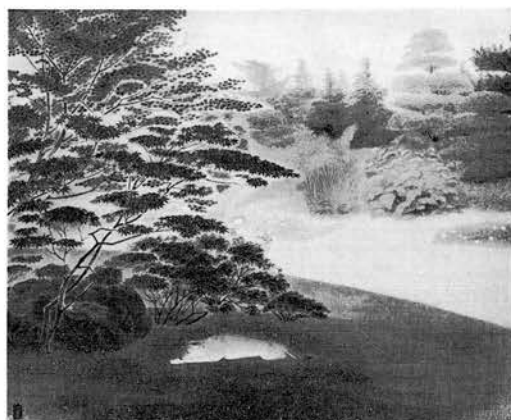
牛土村奧(展院)馬仔 八七



志光好三(展社龍青)立 寶 七七



八〇 藤 蕾 (院展) 郷倉和子



龜遊上溝(展院)日 晴 九七



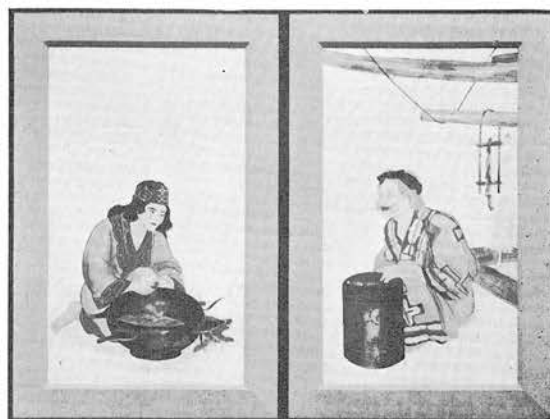
観大山横 (展院) し深夜 四八



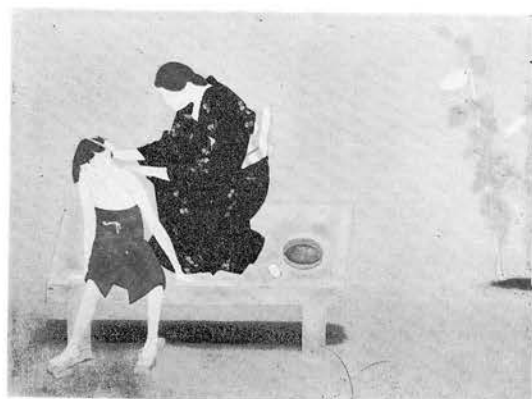
観大山横 (展院) 濱の海東 一八



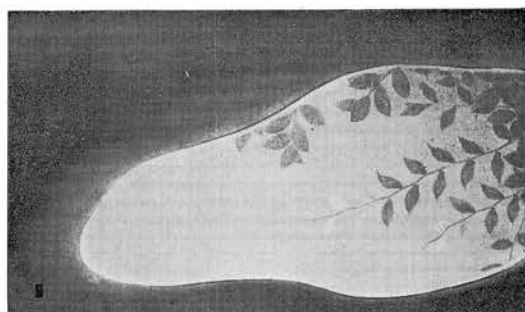
八五 朔風 (展院) 堅山南風



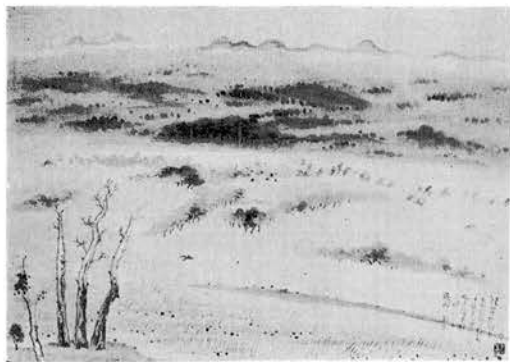
花耕村山 (展院) 人夷蝦 二八



八六 ゆふべ (展院) 中村貞以



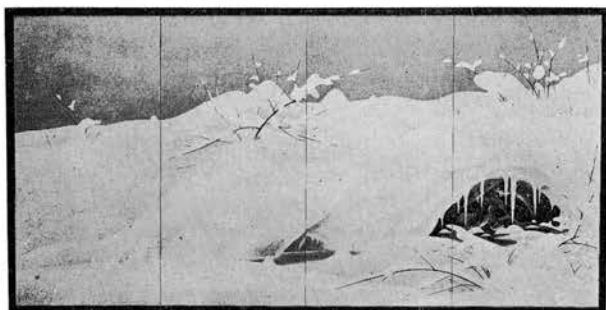
陵岳村中 (展院) 濤行内 / 題五雨 三八



錢 芋 川 小 (展院) 樹 迷 上 湖 ○九



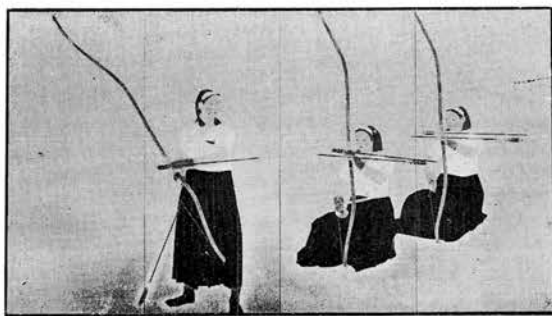
雨 聽 田 太 (展院) 櫻 瀧 七八



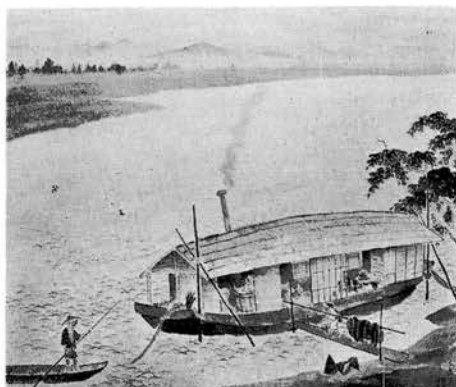
初 千 倉 郷 (展院) 雪 の 麓 一九



八 八 花 づ と (院展) 安 田 粉 齋



以 茂 岡 (展院) 技 弓 二九



八 九 暮 色 (院展) 酒 井 三 良



風 杉 木 炭 (展院) 驛木間古州奥 四九



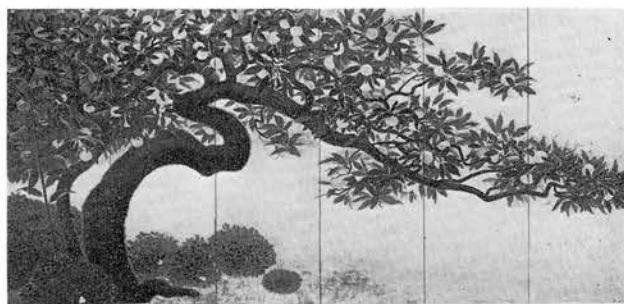
方 寛 井 荒 (展院) (二其)部一ノ春繪符葉紅 三九



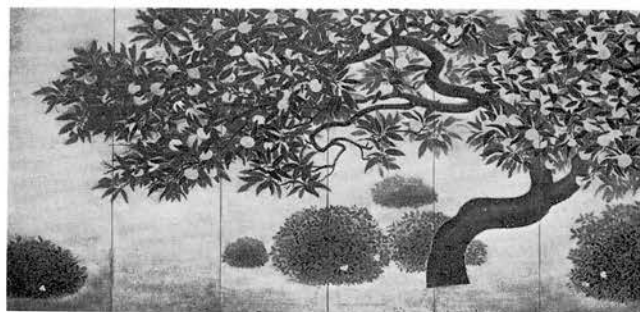
九六 極 鳥 (個展) 八木岡春山



繪 一 鳥 小 (展院) 鳥 巖 五九



九七 香 實 郷 (明朗展) 川口春波



九八 風ぐも (文展) 穴山勝堂



一〇一 富士の聖僧日蓮 (文展) 岩田正巳



柏太山石 (展文) 賦 霏 圃 九九

一〇二 颯爽 (文展) 池上秀敏



一〇〇 草紙洗小町 (文展) 上村松園



一〇三 母子の羊 (文展) 上村松園

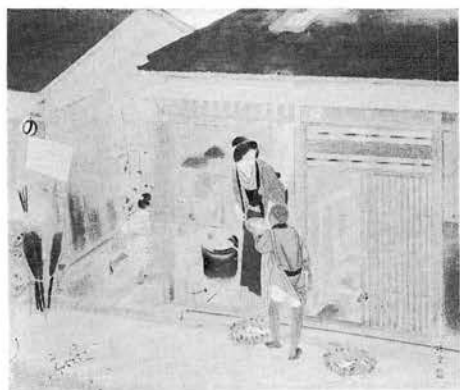




一〇七 清明節の虎郎 (文展) 河合健二



一〇四 國防の覺め (文展) 太田 天洋



一〇八 縮 (文展) 鍋木 清方



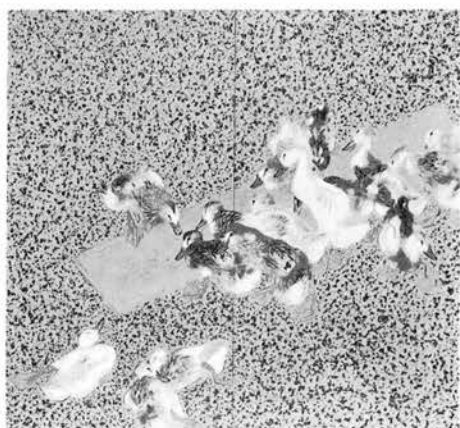
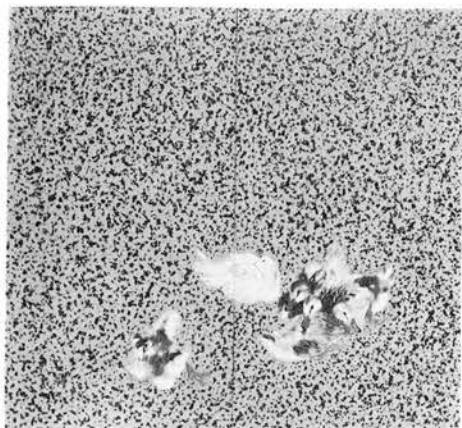
一〇五 茶室 (文展) 藤田 哲



一〇九 菱 (文展) 菊池 契月



一〇六 雙曲 (文展) 子佐 緋原 崑



鳳栖内竹 (展文) 鴨家き若 ○一一



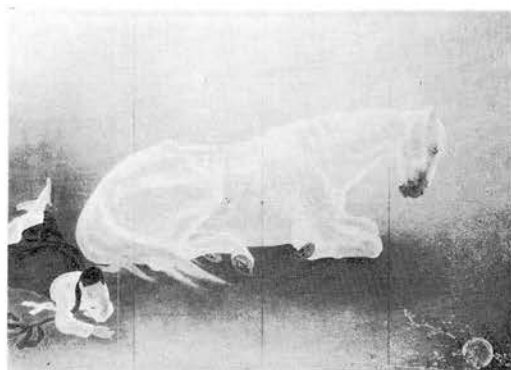
晃青口之田 (展文) 朝 三一一



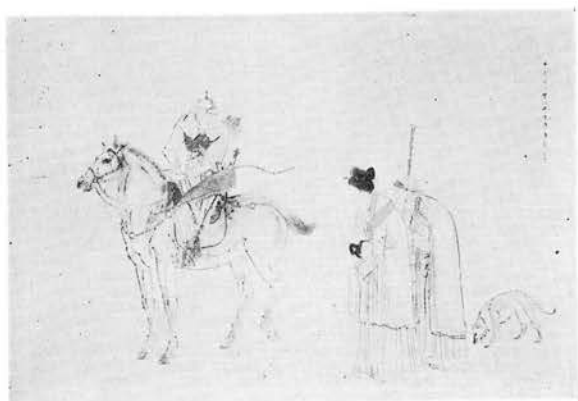
一一一 春 琴 (文展) 小早川 清



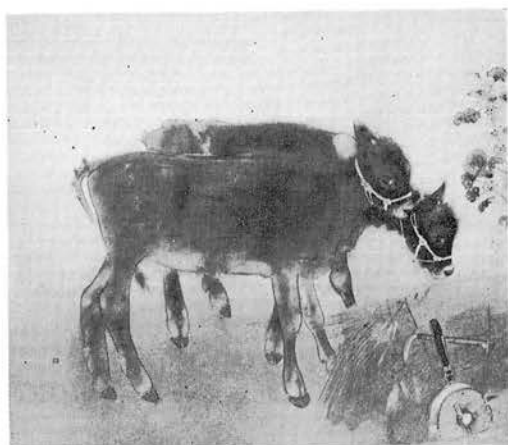
一一四 觀世音 (文展) 堂本 印 象



寧 山 杉 (展文) 意 秋 二一一



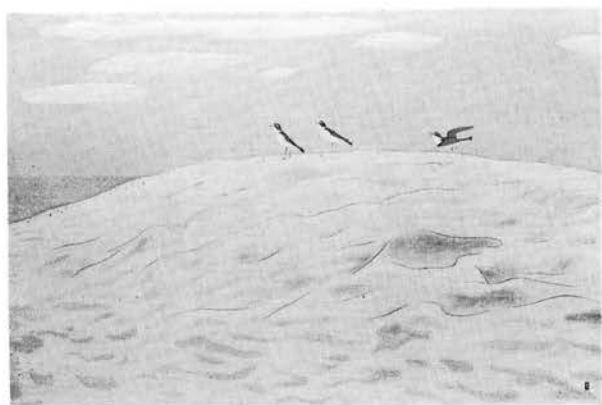
雪關本橋 (展文) 征 赴 八一一



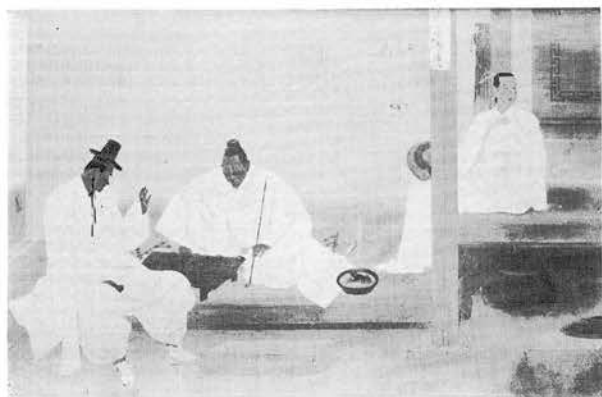
雲五村西 (展文) 秋 麥 五一



一一九 淨 心 (文展) 橋本明治



陵岳村中 (展文) 濱 砂 六一



古阿木二不 (展文) 舊親棋將 〇二一



道九田野 (展文) 師禪休 一七一



一二四 下加茂秋曉 (文展) 水田竹園



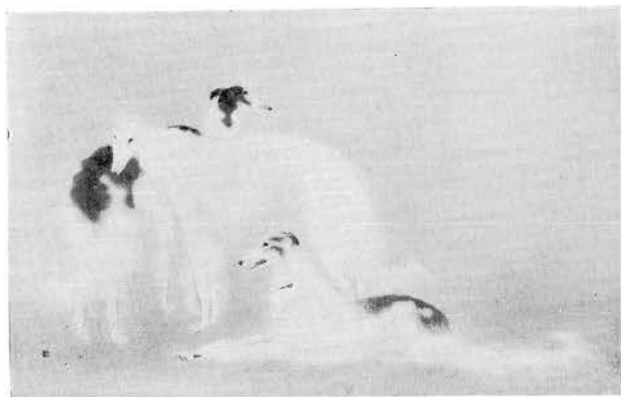
夷魁山東 (展文) 虹 一二一



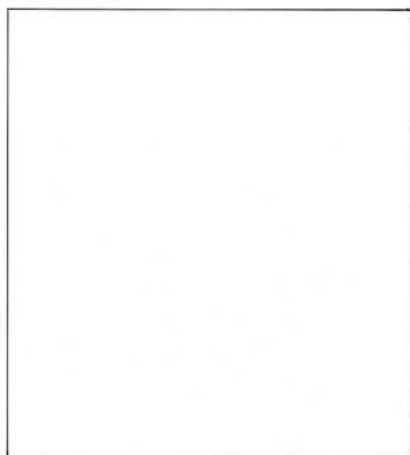
一二五 暮色 (文展) 矢野橋村



郎四豐田福 (展文) 氷 樹 二二一



楊華口山 (展文) 圖犬洋 六二一



一二三 雪合戦 (文展) 三宅鳳白



路一浩藤近(展個)内ノ題三宿一キス勝十 ○三一



製大山横(展文)る翺雲七二一



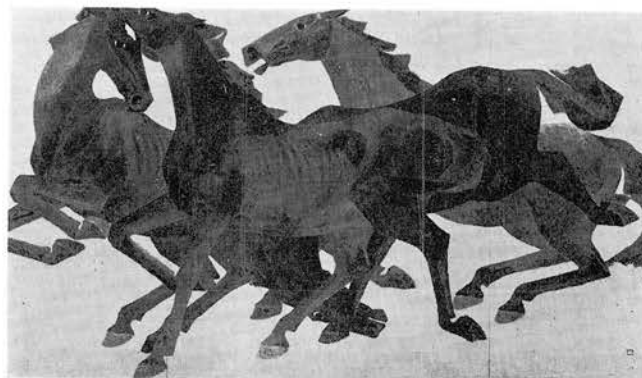
月桂林松(展個)見所洲滿 一三一



夫忠村吉(展文)乎良須麻 八二一



一三二 雛鶴三番叟 鳥飛び(個展) 山川秀峰



二堅岡吉(展文)馬 九二一



一三七 雪紛々 (七絃會展) 錦木清方



一三六 迦樓羅 (七絃會展) 菊池契月



子記端川 (展個) 臺紅三三一



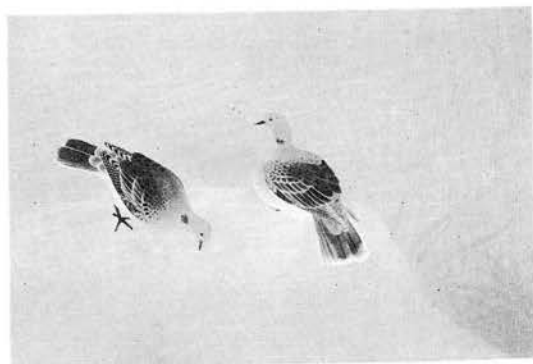
彦韮田安 (展會絃七) 日閑丈方 八三一



都青田前 (展會絃七) 正清四三一



一三九 新雪之慈雲 (古稀記念新作展) 小川半錢



徑古林小 (展會絃七) 鳩双五三一



堂玉合川 (展畫本日堂昧三) 雪の畔湖 四四一



畝十木荒 (展畫本日越三) 鷹 〇四一



(展畫本日堂昧三) (寛良)ちかたのつ七 五四一
雨 聽 田 太



一四一 目白(三越日本畫展) 榑原紫峰



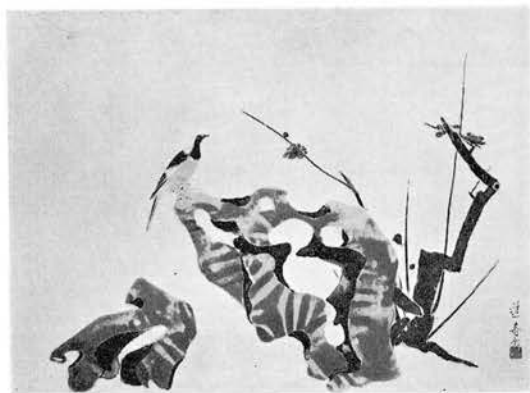
治 富 上 根 (展舩畫島松) 鳥しか 六四一



一四三 秋の一日(現代名家新作畫展) 竹内栖鳳



一四二 返 照(三越日本畫展) 川合玉堂



春 蓮口山 (展堂美尙關) 春 八四一



一五〇 眞言八祖像ノ中 (高野山大塔壁畫) 堂本印象



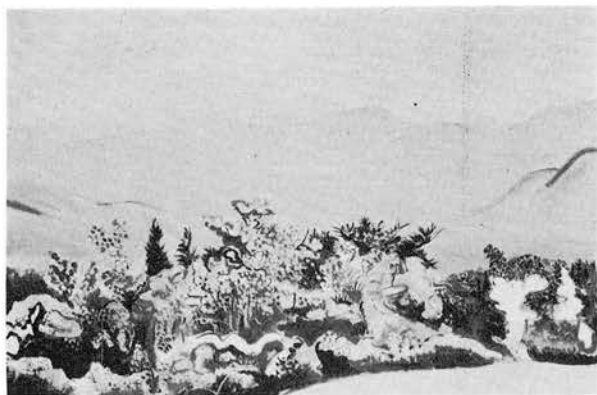
一四七 樂翁 (關尙美堂展) 前田青都



(展會協家術美興新) (左)情表の家一A 九四一 斗久方村玉



光 翠 田 福 (畫壁階地ルビ日朝屋古名) 流谿に鷹熊 一五一



雄虎野牧 (展會潮六) 雨小の原石千 五五一



太 久 木 楠 (展會朝白) 景風總南 二五一



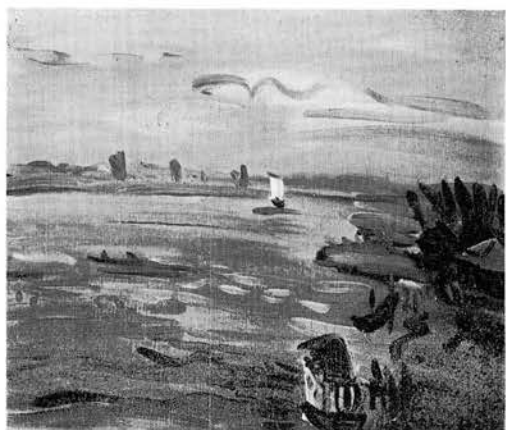
一五六 盛夏 (白日會展) 小 堀 進



一五三 讀 書 (白朝會展) 田 邊 至



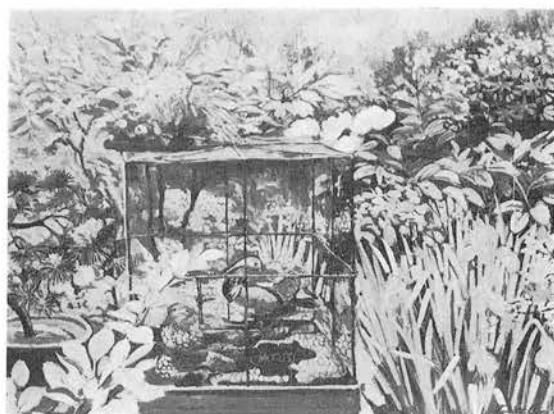
釣 部 池 (展會日白) 戀 休 七五一



一五四 水舞 一 (六潮會展) 中 川 紀 元



清 田 和 (展臺春) 邊 海 一六一



郎 一 富 田 富 (展會日白) 營 鴛 八五一



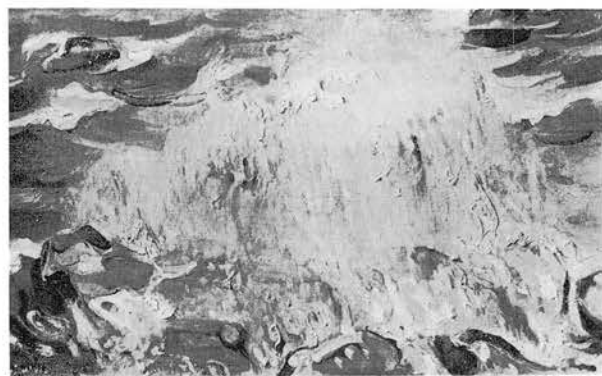
一六二 裸 婦 (春臺展) 矢 鳥 堅 士



彦 直 田 相 (展會日白) 村 漁 九五—



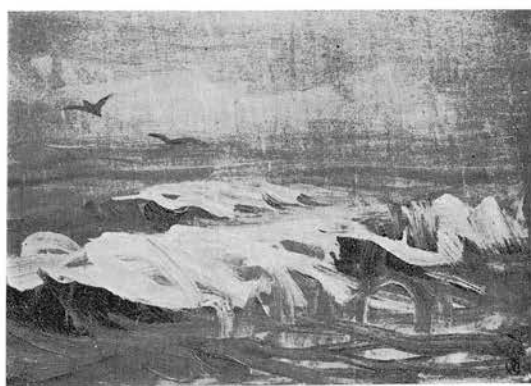
一六三 椅子に凭る女 (三越洋畫小品展) 寺 内 萬 治 郎



郎 太 龜 勢 能 (展會日白) 濤 〇六一



己克宅三 (展會風光) 色景秋 七六一



鼎本山 (展品小畫洋越三) 海るふ雪 四六一



二修合川 (展會風光) (地高上) 花のしなご 八六一



一六五 山湖雨雲 (光風會展) 太田三郎



一六九 習作 (光風會展) 白瀧幾之助



鄭三本宮 (展品小畫洋越三) 婦裸 六六一



實端川 (展會風光) 粧新三七一



南蕉 (展會風光) 莊山〇七一



一七四 家津港 (太平洋畫會展) 石川寅治



一七一 讀書 (光風會展) 鬼頭鍋三郎



一七五 土用波 (太平洋畫會展) 奥瀬英三



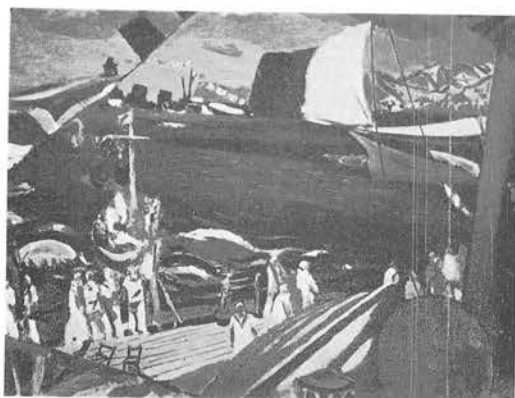
一七二 室 (光風會展) 金仁承



策善村中（展會協家術美新）女と山 九七一



豊田安（展會畫洋平太）族家の蒙古 六七一



松重三邊田（展會協家術美新）港入隊艦 〇八一



義正勢伊（展偽）山冬 七七一



一八一 畫室の裸婦（新美術家協會展）清水刀根



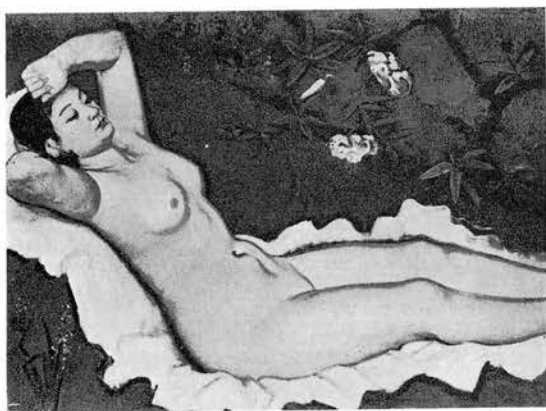
一七八 ルクサンブル公園にて（個展）島村三七男



蔵 謙 口 野 (展會光東) 日朝の雪 五八一



郎 繼 藤 伊 (展會協家術美新) B 婦 裸 二八一



彦 美 岡 熊 (展會光東) 婦 裸 上 草 六八一



一八三 椅子による女 (新美術家協會展)

新海 豊 雄



一八七 K子像 (東光會展) 齋 藤 與 里



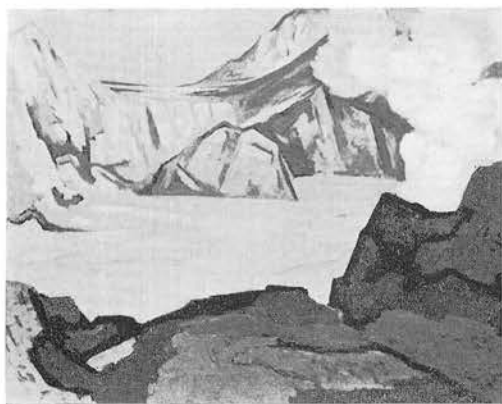
一八四 魚市場 (東光會展) 佐 藤 一 章



一九一 海邊小景 (東光會展) 田代順七



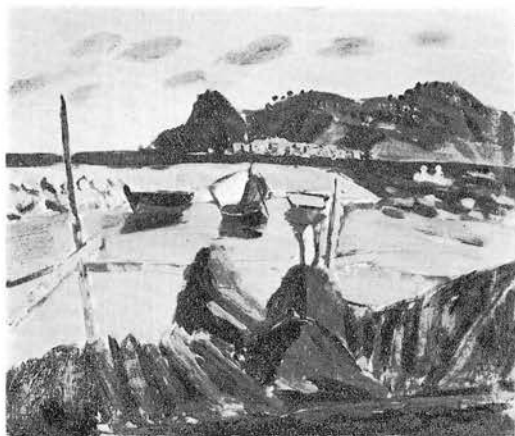
三 過 渡 (展會光東) (五) 物 靜 八八一



一九二 火 口 (東光會展) 正田二郎



四 三 下 岩 (展會光東) 念記京上 九八一



一九三 海 邊 (個展) 真垣武勝



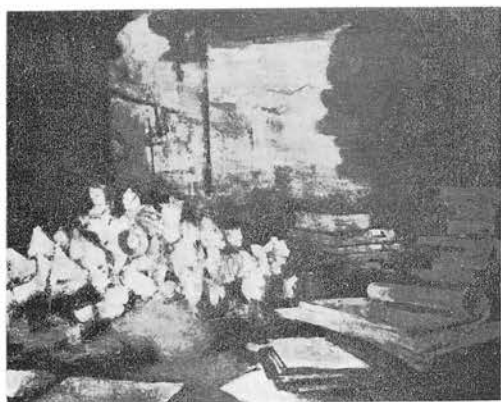
哲 藤 江 (展會光東) ンラトスレ ○九一



一九七 秋山 (獨立展) 小林和作



德保木鈴 (展立獨) 七に島 四九一



一九八 書齋 (獨立展) 須田國太郎



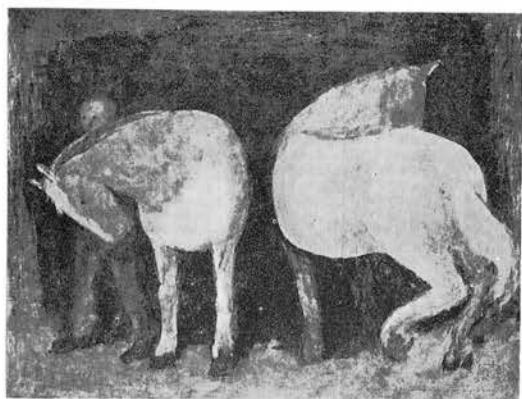
郎太善島小 (展立獨) 流 激 五九一



一九九 二重像 (獨立展) 福澤一郎



一九六 二人 (獨立展) 中村節也



助之喜 原老海 (展立獨) 馬 三〇二



義重林 (展立獨) 秋 〇〇二



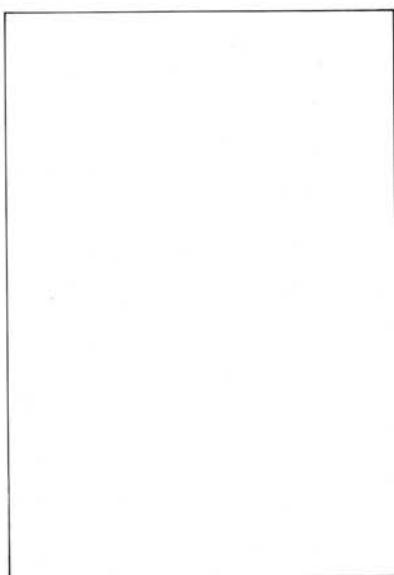
二〇四 雪日 (獨立展) 妹尾正彦



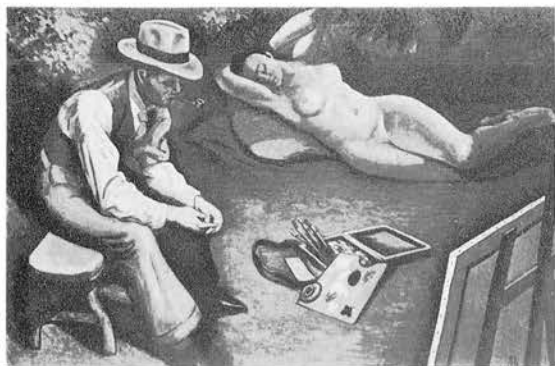
郎三善島兒 (展立獨) 流溪 一〇二



二〇五 エスキースA (獨立展) 川口軌外



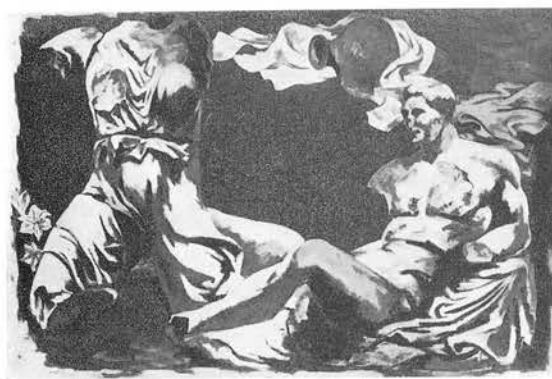
二〇二 生 蕃 (獨立展) 伊藤 麗



夫 亞 木 鈴 (展立獨) 作畫上草 八〇二



二〇六 海 幸 (獨立展) 高 島 達 四 郎



鏡 山 中 (展立獨) 想 追 の ヤ シ リ ギ 九〇二



二〇七 結 髪 (獨立展) 田 中 行 一

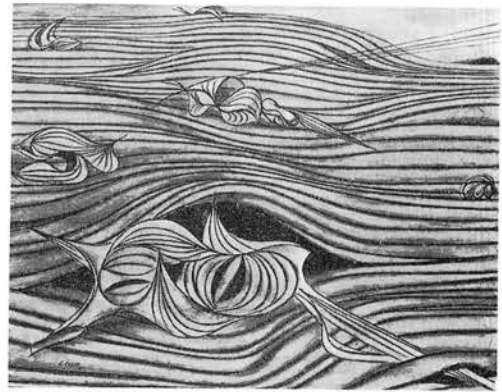


二一〇 女 (獨立展) 里 見 勝 藏

二二一 椰子と貝 (獨立展) 松島一郎



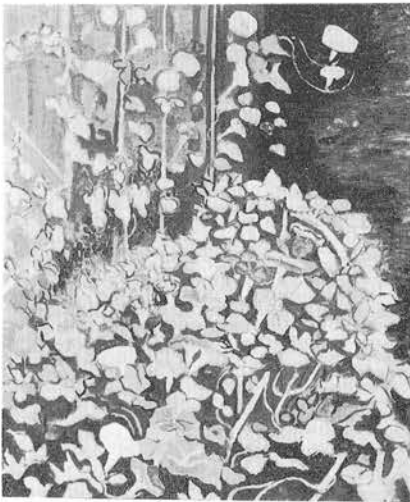
二二二 繪畫 (獨立展) 井上長三郎



二二三 鶏 (個展) 内田 巖



二二五 朝顔 (旺玄社展) 牧野虎雄



二二六 北國早春 (旺玄社展) 田澤八甲



二二四 釣ギサカワ (旺玄社展) 郎 治 作 橘





二二〇 アマリ、ス (國畫會展) 青山義雄



七 高問愁 (展個) 鳥山七郎



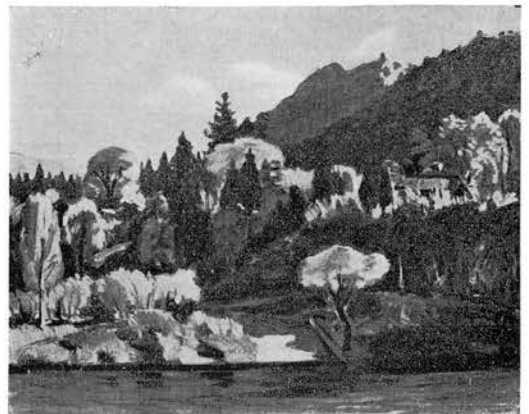
雄 貞 椿 (展會畫國) 士 富 赤 一二二



二二八 霧 鵜 (國畫會展) 梅原龍三郎



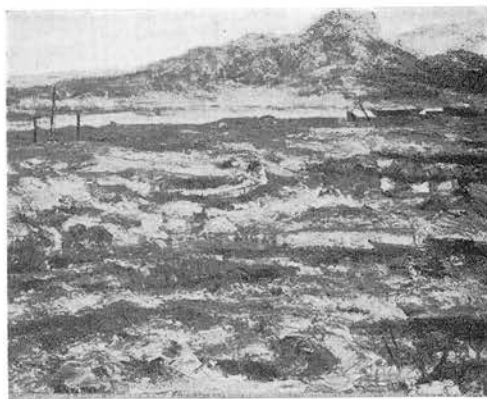
二二二 鹿鳴館時代娘 (國畫會展) 河野通勢



雄 文 田 士 (展會畫國) 秋 初 九一二



郎一 源 立 足 (展會陽春) 山南高新的春 六二二



篤 義 盛 國 (展會陽春) 廣 三二二



羊 白 田 倉 (展會陽春) 野 冬 七二二



二三四 椿 (春陽會展) 小 穴 隆 一



二二八 印度洞窟三部作エレファンタ・ブラーマ(左側)
(春陽會展) 水 谷 清



八 莊 村 木 (展會陽春) (一)屋陣綱盛 五二二



くすた部日春 (展會畫彩水本日) 口北古河熱 二三二



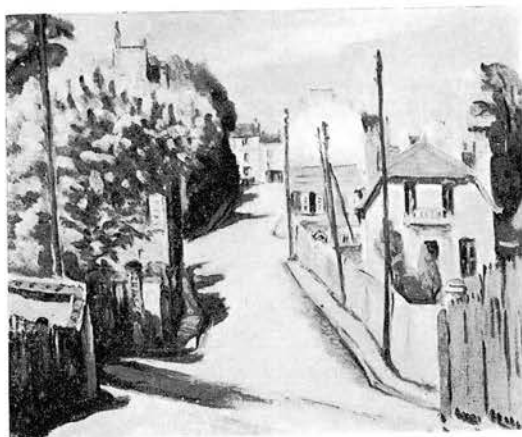
郎三徳林小 (展會陽春) 供子の窓 九二二



二三三 紫色の帽子 (個展) 猪熊盛一郎



郎三田倉 (展會陽春) 圖構會陽春 〇三二



二三四 坂 (第一美術展) 御厨純一



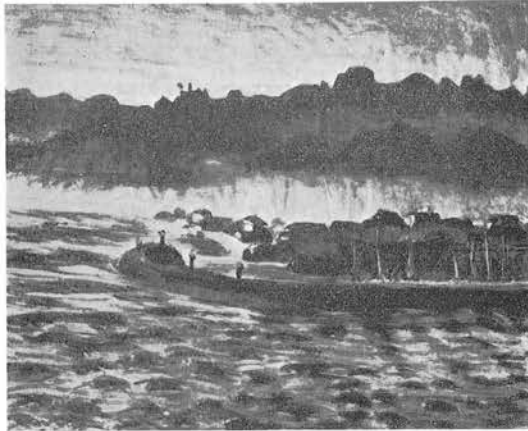
三省月望 (會畫彩水本日) 古 稽 一三二



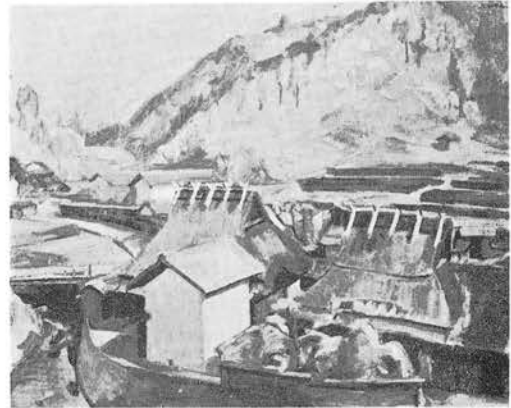
二三八 少女像 (清光會展) 安井曾太郎



郎一義 錦 (展術美市都京) 庭の花 五三二



郎三龍原梅 (展會光清) 雲 朝 九三二



郎二喜田太 (展術美市都京) (一)村の縁新 六三二



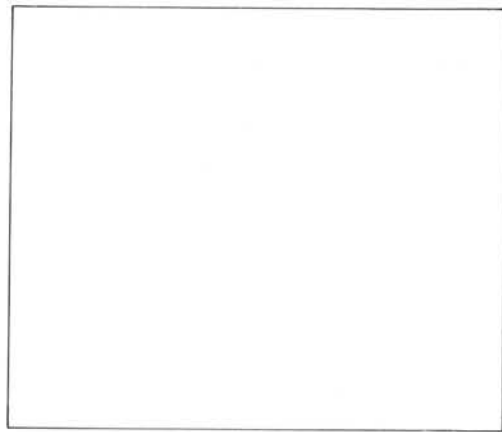
二四〇 風景 (個展) 藤田嗣治



郎二繁水坂 (展會光清) 馬 仔 七三二



助之伊 裕 (展人同會水一) 流上川荒 四四二



彦 滋 川 石 (展社陣立) 景風頭埠 一四二



二四五 夏 至 (一水會同人展) 山下新太郎



野 泰 城 赤 (展個) (山陀普) 庭前殿雄大寺雨法 二四二



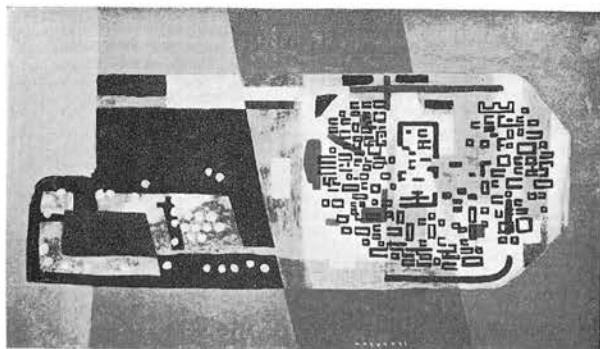
博 田 吉 (展個) り盛花櫻 六四二



二四三 麗 人 (一水會同人展) 石井 柏 亭



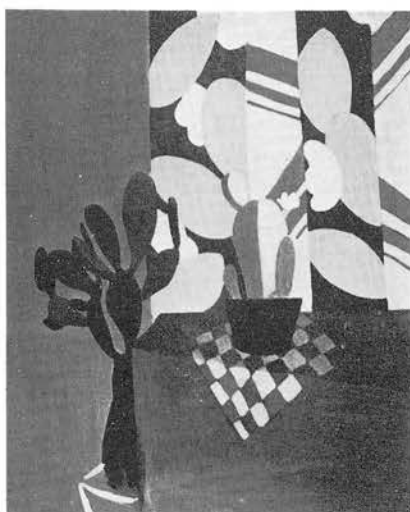
二五〇 廢 墟 (自由美術家協會展) 矢橋六郎



誠 正 井 村 (展會協家術美由自) URBAIN (No.1) 七四二



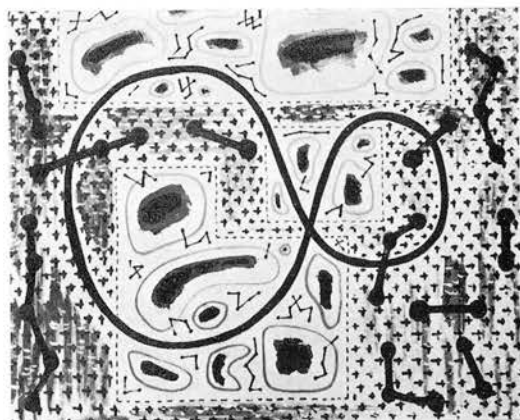
二五一 ベニス (個展) 林 武



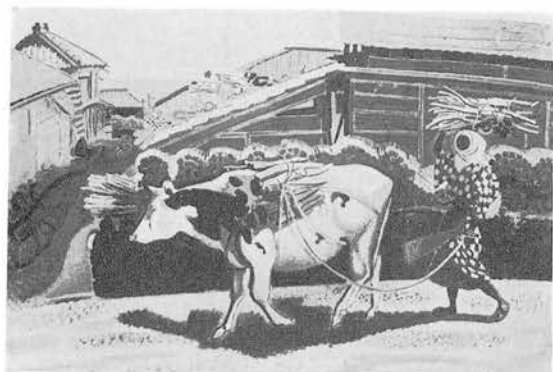
二四八 カタタスのリズム (自由美術家協會展) 吉見庄助



二五二 窓 邊 (新制作派結成記念展) 小磯良平



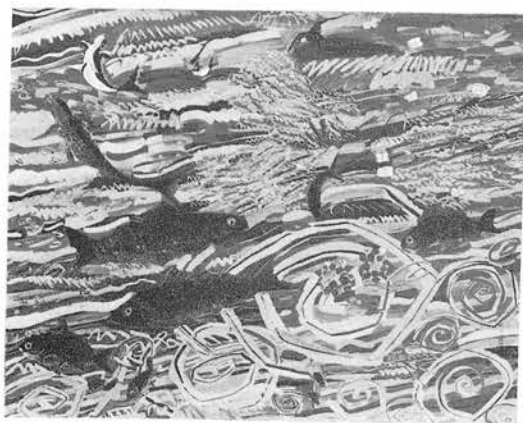
郎 三 川 谷 長 (展會協家術美由自) 迹 軌 の 蝶 九四二



二五二 牛牽く女 (二科展) 宮本三郎



二五三 裸婦眠る (新制作派結成記念展) 猪熊弦一郎



二五七 夏の淡水魚 (二科展) 野間仁根



二五四 人物 (新制作派結成記念展) 内田巖



二五八 千人針 (二科展) 藤田副治



二五五 驟雨 (二科展) 田村孝之介



信 原 菜 (展科二) 春の高妙 二六二



吉 潤 井 向 (展科二) 々人の探伐 九五二



二六三 紫 罌 花 (二科展) 鈴木信太郎



吾 省 口 田 (展科二) 達供子と娘 〇六二



雄 鶴 林 (展科二) 壁 白 四六二



二六一 松 林 (二科展) 國枝金三



之克井鑑 (展科二) 湖郷東の時雨梅 八六二



郎二繁木坂 (展科二) 馬る上りよ水 五六二



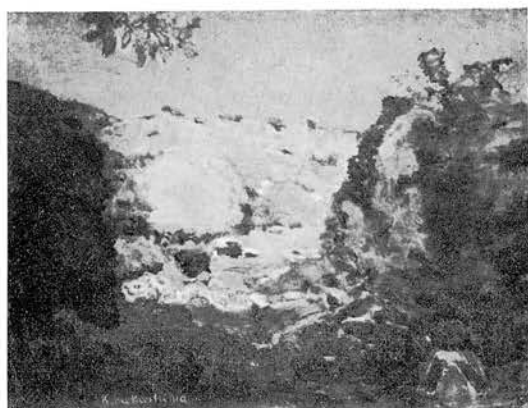
二六九 牡丹 (二科展) 正宗得三郎



二 鶴崎島 (展科二) 邊 川 六六二



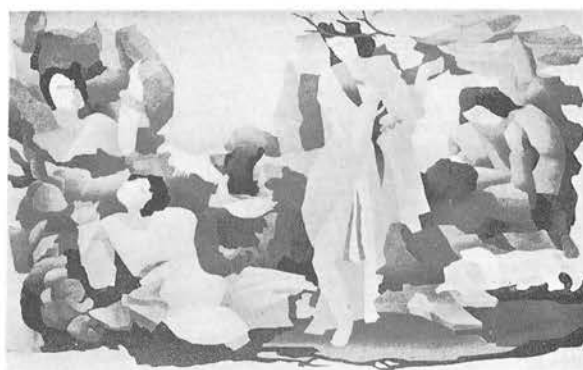
二七〇 苹果静物 (二科展) 黒田重太郎



郎一金島福 (展科二) 晶 七六二



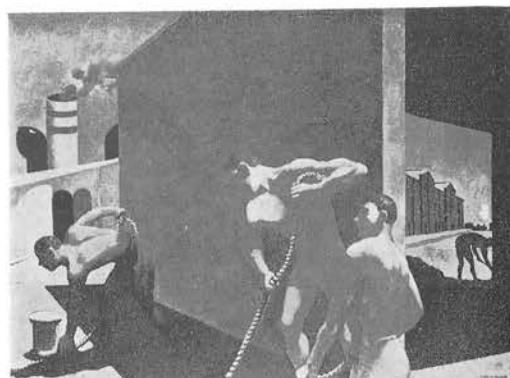
二七四 青い手袋 (二科展) 東郷青児



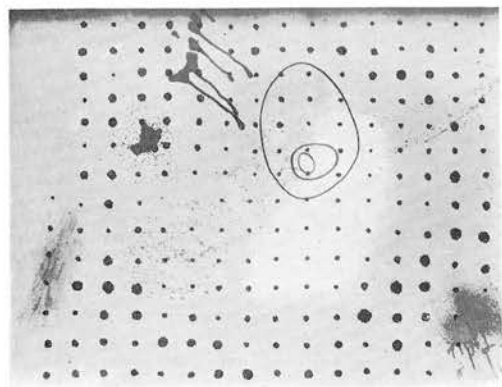
江の日の次郎 (二科展) 蒼天 一七二



人の夢 (二科展) 岡田謙三 五七二



港 (二科展) 大澤昌助 二七二



二七六 気象 (二科展) 吉原治良



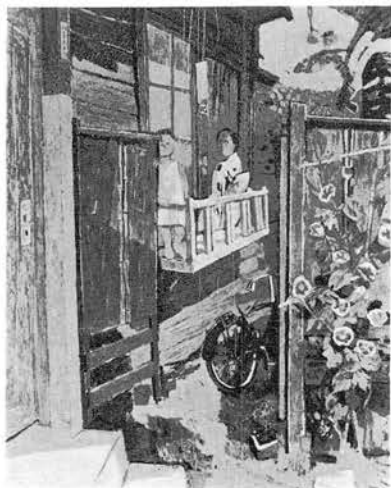
祭りのコスチューム (二科展) 北川民次 三七二



平勝崎貴 (展文) びこは木焚 ○八二



之重野島 (展文) 夏初邊水 七七二



二八一 中庭の密(文展) 山下大五郎



三松貫大 (展文) 達供小 八七二



二八二 蕈積ム頃(文展) 高光一也



二七九 聴 管(文展) 森田元子



雄辰山 (展文) 嶺 三八二



二八六 水郷の午後 (文展) 高宮一榮



二八四 車上 (文展) 南政善



二八七 盲目の老僧長 (文展) 上野山清貢



洋三船水 (展文) やへのとま 五八二



林 徳俊 (展文) 丘小邊海 一九二



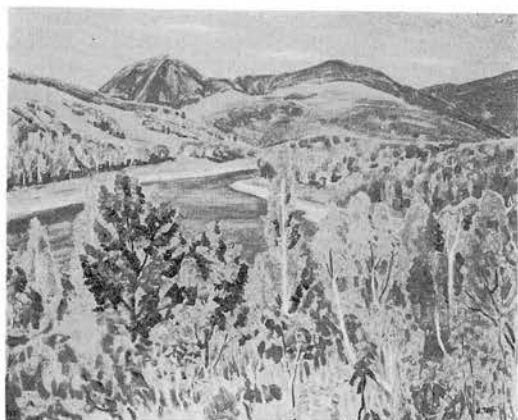
松 芳村 吉 (展文) 日半陽斜 八八二



清水 良雄 (展文) 秋初 二九二



里 與 龍 齋 (展文) 景秋邊海 九八二



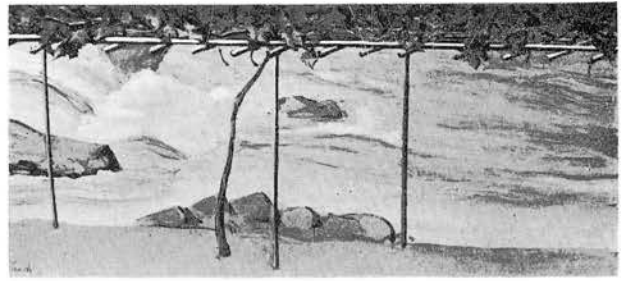
二九三 志賀高原の秋(文展) 辻 永



二〇八本橋 (展文) 春 〇九二



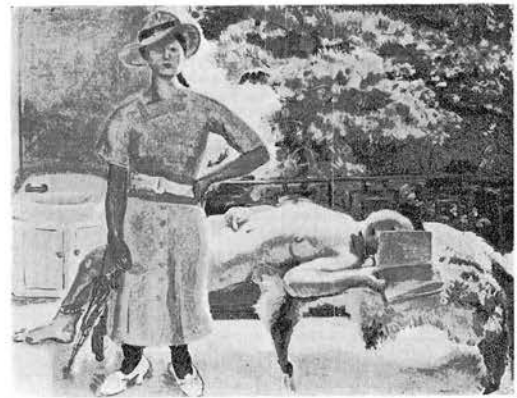
二九七 ひととき(文展) 中野和高



馬久千木 鈴 (展文) 流 清 四九二



二九八 鶴の鰐(文展) 中澤弘光



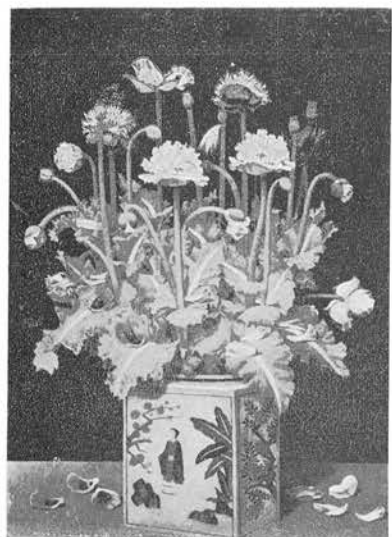
修治田以阿(展文)りたふ女 五九二



二九九 銀屏(文展) 熊岡美彦



一 研 村 中 (展文) 朝 六九二



三〇三 罌 娟 (文展) 小 絲 澤 太 郎



七 惣 問 高 (展文) 鶴 と 陽 太 〇〇三



三〇四 舗 道 (文展) 大 久 保 作 次 郎



三〇一 遊 鯉 (文展) 權 藤 種 男



三〇五 ダ リ ア (文展) 佐 竹 徳 次 郎



三〇二 繡 綵 (文展) 小 林 萬 吾



三〇九 マンドリニスト(文展) 田邊 淳



昇 川谷長 (展文) 女 き 若 六〇三



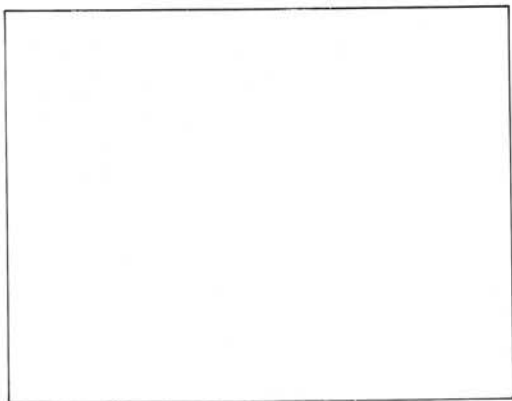
三一〇 深井英五氏の肖像(文展) 伊原 宇三郎



三〇七 關長の像(文展) 山本 朝



造 蓬 南 (展文) 畔 湖 爺 潤 八〇三



三一 一 Y氏の家庭(文展) 片岡銀藏



二弘本松 (展個) 穀 貝 五一三



郎一飲川石 (展文) 原 高 隱 戸 二一三



郎一理島川 (展畫洋堂味三) 流 溪 六一三



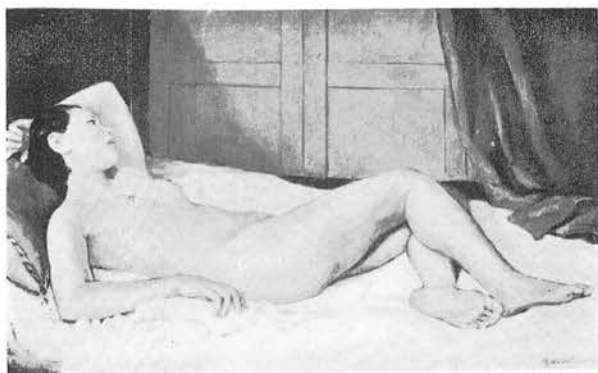
暲大澤平 (展文) 外威天奉則明 三一三



三二七 棘 (三昧堂洋畫展) 長谷川 昇



郎一澤福 (展季秋立獨) 態 擬 四一三



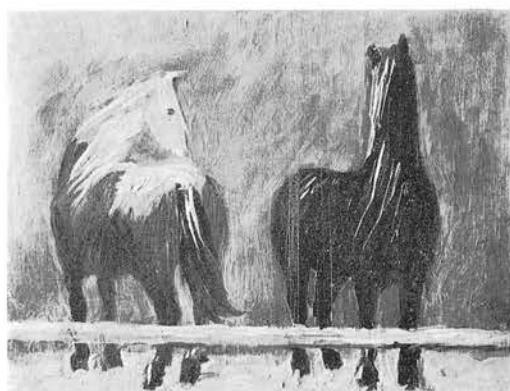
三二二 横たはる裸婦 (一水會展) 木下謙義



三二一 黒いショール (個展) 青児 東郷



三二三 小魚 (一水會展) 斎伊之助



三二四 白黒 (個展) 海老原喜之助



三二五 デッキバツセンジャ (一水會展) 高橋庸男



三二〇 ヴォーグ (一水會展) 則孝 木下



三二七 肖像（一水會展） 安井曾太郎



郎太曾井安（展會水一）廟嘛喇の德承 四二三



三二八 姉妹（一水會展） 山下新太郎



三二五 村娘（一水會展） 石井柏亭



三二六 驟雨（一水會展） 金子博信

三二九 けむり（一水會展） 中村善策



三三〇 鏡の前（一水會展） 新海覺雄



三三一 化粧（一水會展） 有島生馬



三三二 筑鶴風景（土曜會展） 萩野康兒



三三三 母子（大阪新美術家同盟展） 玉澤潤一





三三七 人物 (新制作派展) 中西利雄



三三三 出帆 (大阪美術同盟展) 別章博資



三三八 伊勢正義 (新制作派展) 一景ル



三三五 鶏 (個展) 山下繁雄



三三九 人々 (新制作派展) 小磯良平



三三六 葡萄 (新制作派展) 内田巖



郎一弦熊猪 (展派作制新) 夜 二四三



郎一弦熊猪 (展派作制新) 畫 ○四三



三四三 ムーヴィングマン (新制作派展) 野田英夫



三四一 溪 (新制作派展) 脇田和



一 範井坂 (展派作制新) 邊海 四四三



敬 禮 佐 (展派作制新) 勢 姿 の 水 七 四 三



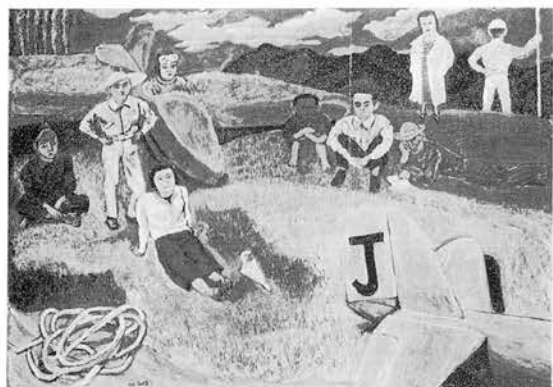
郎 一 弦 熊 猪 (展派作制新) 昏 黄 五 四 三



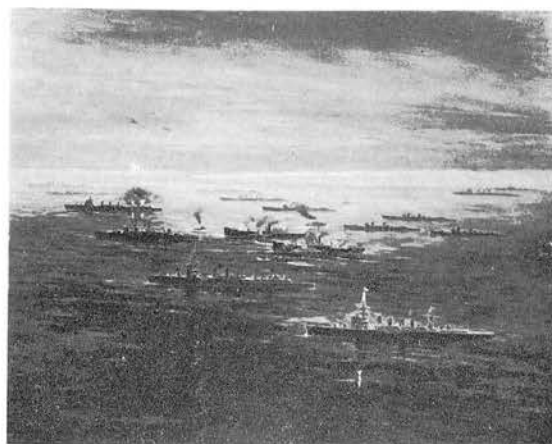
夫 俊 村 今 (展派作制新) 事 仕 八 四 三



三 四 六 三 人 (新制作派展) 鈴 木 誠



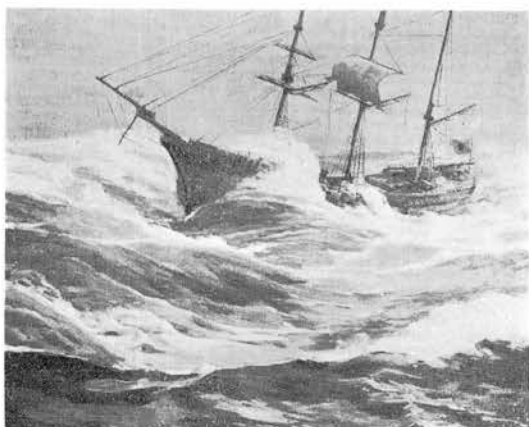
康 田 三 (展派作制新) 原 高 九 四 三



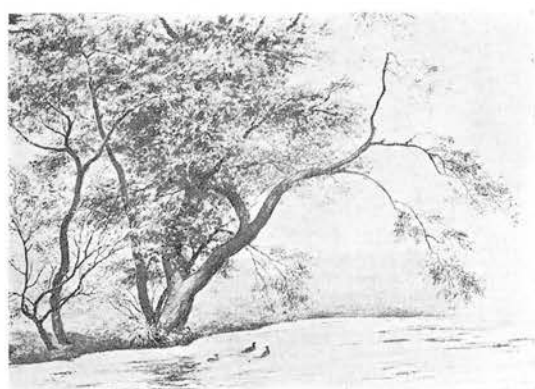
久 國三 (畫壁館軍海) (變事海上) 戦作同協陸海 三五三



二 武 島 藤 (展派作制新) 春の國北 〇五三



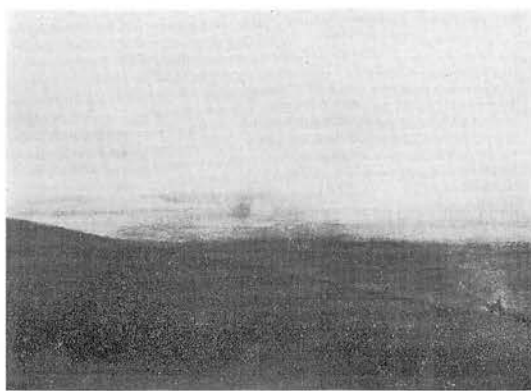
吾 萬 林 小 (畫壁館軍海) 斷横洋平太の丸臨咸 四五三



助 郎 三 田 圓 (畫命下御下睦后太皇) 柳 楊 一五三



藏 覺 野 瀬 (揚掲館防國) 圖の撃突 五五三



二 武 島 藤 (畫命下御下睦后太皇) 舍六照日旭 二五三



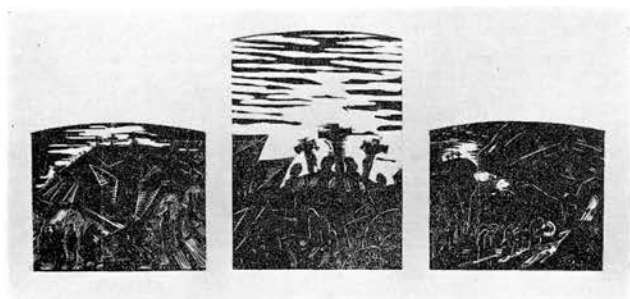
帆 千 川 前 (展文) び 遊 野 七五三



一 運 塚 平 (展會畫國) 山 剛 金 内 六五三



之 得 平 勝 (展文) 花 造 八五三



宏 泰 旭 (展文) 作部三 Passion ○六三



三五九 橘 笛 (文展) 織 田 一 磨



三六一 晚秋 (日本版畫協會展) 山口 進

三六二 「牧歌」 詩都に寄せて (國畫會展) 木郷新



三六三 五輪旗を贈す (國畫會展) 清水多嘉示



三六四 光 (都市札幌の象徴部分) (國畫會展) 山内壯夫



三六五 おどり (日本木彫會展) 大島駒盛



三六六 鷺 風 (日本木彫會展) 澤田晴廣



三六七 報土 (日本木彫會展) 中野桂樹

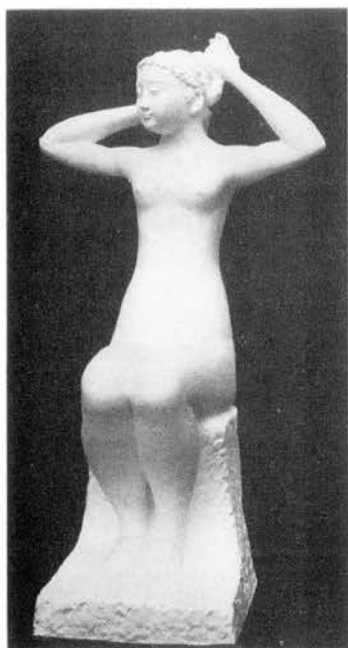




三七一 電気通信學會賞牌 (構造社展) 齋藤素蔵



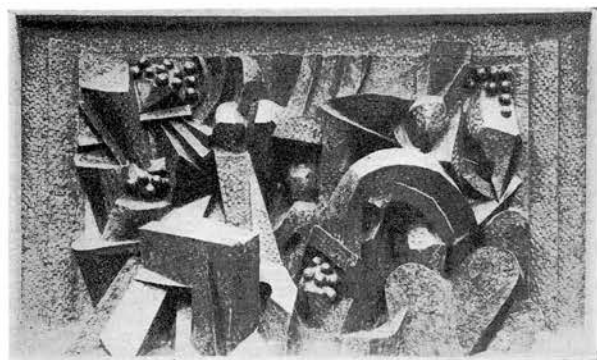
三六八 鷹 (日本木彫會展) 橋本高昇



三七二 春 (構造社展) 後藤清一



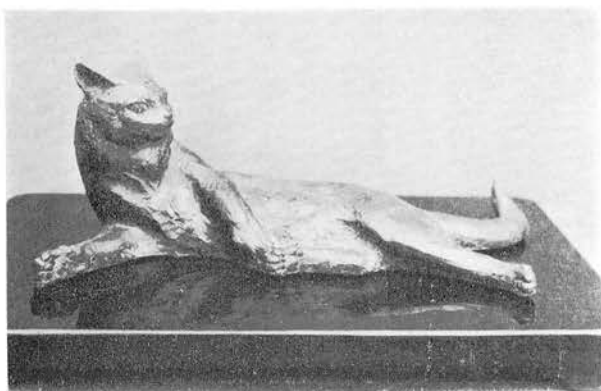
三六九 水 (日本木彫會展) 山脇敏男



三七三 徳良 永 安 (展社造構) 一の作連クスベラア



三七〇 試作 (主線美術協會展) 壺江 起



三三 七七 猫 (構造社展) B 宮地寅齋



三七四 風 (構造社展) 萩島安二



三七八 習作一 (構造社展) 佐藤仁宗



三七五 動力 (構造社展) 濱田三郎



三七九 尾崎氏像 (日本彫刻家協會展) 早川瀧一郎



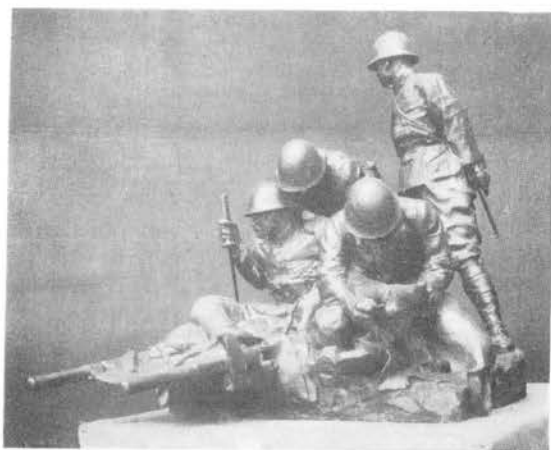
三七六 S の像 (構造社展) 森本清水



命是男岩 (展會部三第) ドーバエシ 三八三



三八〇 少女スケッチ (日本彫刻家協會展) 加藤顯清



三實子名日 (展會部三第) 線一第 四八三



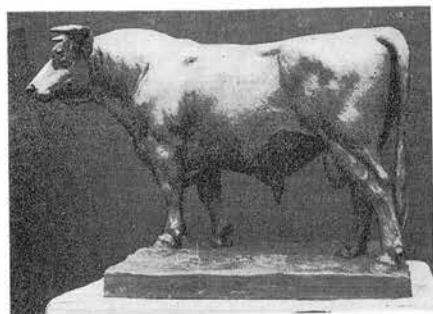
三八一 裸婦 (日本彫刻家協會展) 中村七十



三八五 婦人像 (第三部會展) 早乙女龜次



治嘉田黒 (展會協家刻彫本日) 作 習 二八三



三八九 牧場門裝（第三部會展）
池田勇八



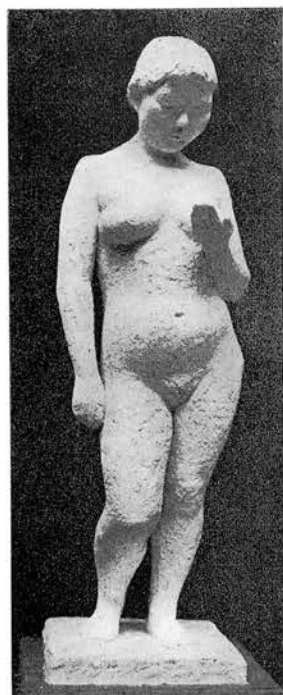
三八六 水邊（第三部會展）
吉田久繼



三九〇 海女（院展）
山本豐市



三八七 月光（第三部會展）
石川確治



三九一 裸婦（院展）
松原松造



三八三 日名子實三（第三部會展）
豐後時代

三九二 神農氏（院展） 宮本重良



三九三 職工（院展） 石井鶴三



三九五 北原白秋先生像（院展） 長瀬虎雄



三九六 牧野巖先生像（院展） 保田龍門



三九七 婦人像（院展） 新海竹藏



三九四 腰かけた女（院展） 林是

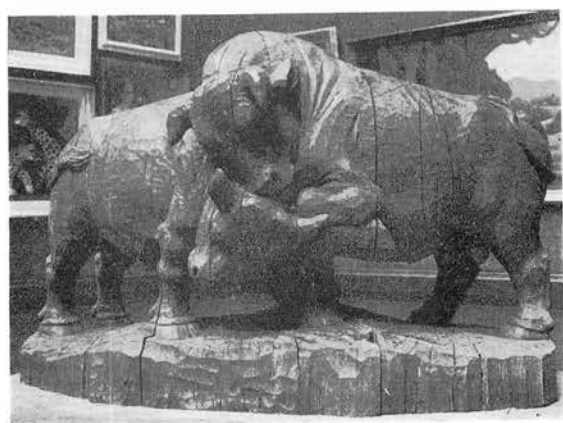




四〇一 國土を護る(部分) 海 (二科展) 渡邊 義知



三九八 慶典讀書奉仕 (院展) 平柳 田中



四〇二 闘牛 (二科展) 山本 力吉



三九九 鑑の像 (院展) 村田 徳次郎



四〇三 怪鳥と小兒 (二科展) 荒置 季男



四〇〇 女 (二科展) 木内 克



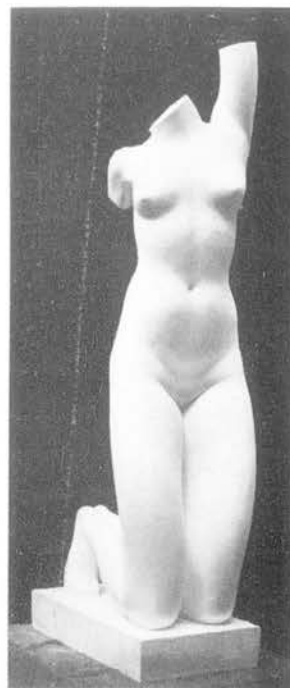
四〇八 平沼先生像（文展） 朝倉文夫



四〇四 顔（二科展） 松村外次郎



四〇六 髪（二科展） 土田 實



四〇五 膝をつく女のトルソー（二科展） 渡邊小五郎



四〇九 立像（文展） 安藤 照



四〇七 みのもり（文展） 北村 正信

四一〇 裸 (文展) 國方林三



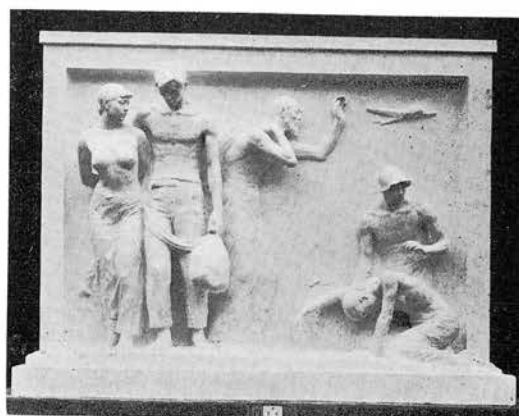
四一一 相倚 (文展) 西田明史



四一四 若い男 (文展) 建畠大夢



四一二 避難者 (文展) 齋藤素巖



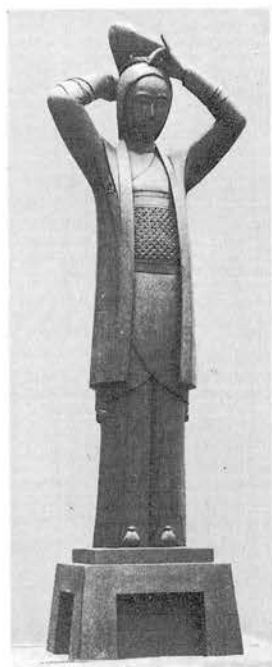
四一五 影 (文展) 荒居徳亮



四一三 野田中將像 (文展) 内藤伸



四一六 粧（文展） 富永 朝堂



四一七 のぼるもの（文展） 長谷川 榮作



四一八 梳髪（文展） 巖井 浩祐



四二一 豊太閤（文展） 山崎 朝雲



四一九 小金井良精先生像（文展） 堀 進二



四二〇 試作（文展） 堀 江 魁



四二二 若い男 (文展) 分部 順治



四二三 働きの後 (文展) 吉岡 伊喜蔵



四二四 光 (文展) 安



四二五 とかげ (文展) 古川 順三



四二六 弓 (文展) 吉田 淑示



四二七 春苑 (文展) 佐々木大樹



四二八 樂園 (文展) 佐伯留守夫



四二九 樂土 (文展) 羽下修三



四三〇 能樂羽衣 (文展) 牧 俊 高

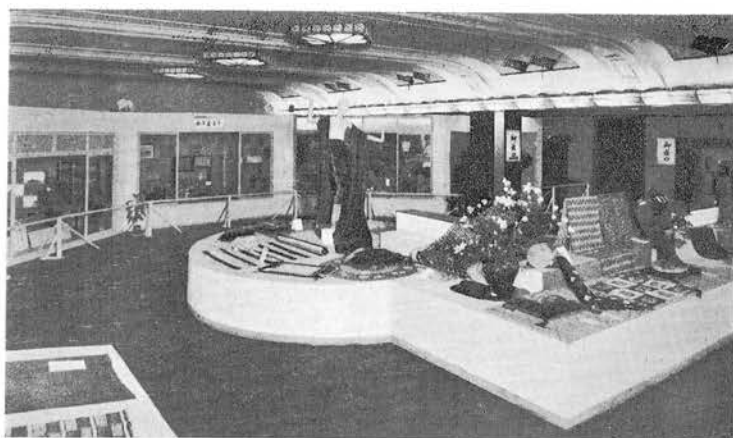


四三一 正木直彦肖像 (東京美術學校内) 沼田 一 雅

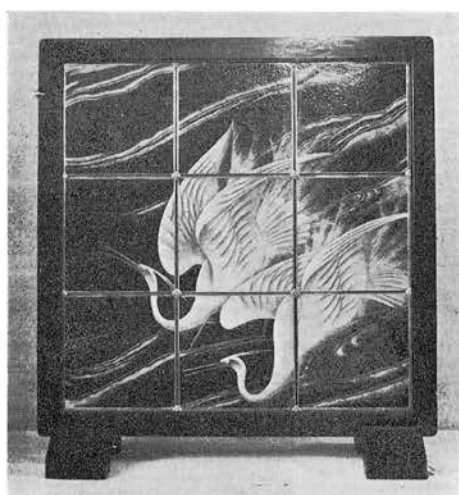


四三二 西郷隆盛像 (鹿児島市) 安 藤 照

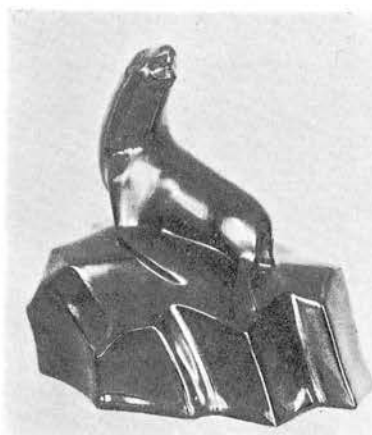




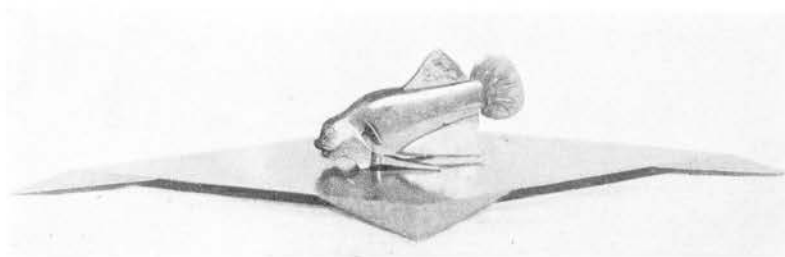
(屋島高於) 場々會示展品出博國萬里巴 三三四



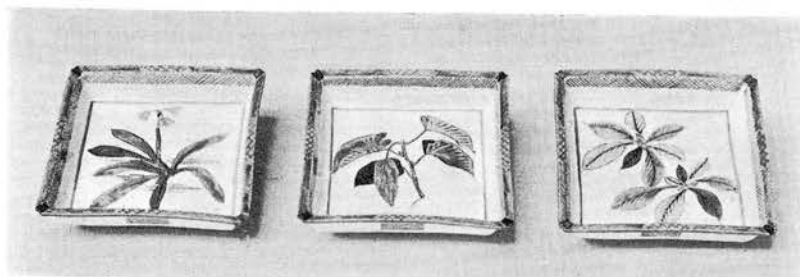
四三五 鶯と鳥衝立 (京都工藝院展) 奥村霞城



四三四 オットセイ置物 (京都工藝院展) 涌波蘇隆



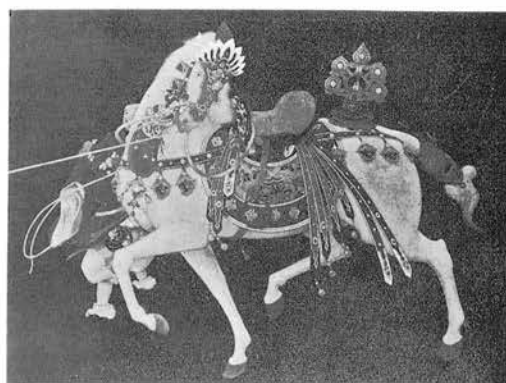
果究村奥 (展院藝工都京) 物置魚開漆乾 六三四



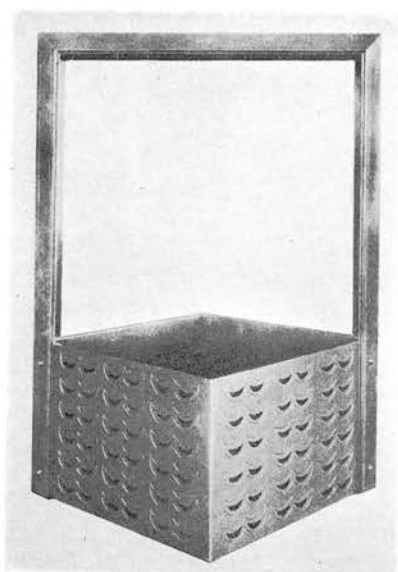
吉窓本富 (展會畫國) 枚三鉢角繪色 七三四



郎次仁波羅 (展工商) 箱手文果蔬 一四四



雄正岡松 (展會協繪漆本日)(表)立衝圖之馬り飾 八三四



四四二 黃銅花器 (商工展) 宮坂房衛



四三九 陶漆即紋モザイク(同上) 三木義榮



四四三 青銅鑄鈴文花盛器 (商工展) 會田富康



四四〇 豊橋圖手織錦廣帯 (商工展) 山鹿清華



(展院藝室本日) 置配室和ムールルデモ 五四四



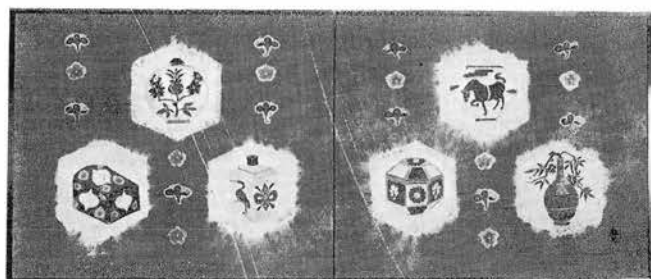
四四四 ブドウ文花瓶 (商工展) 中村 恒



案圖鄺五松川廣 (展藝工在實) 龍 絨 七四四



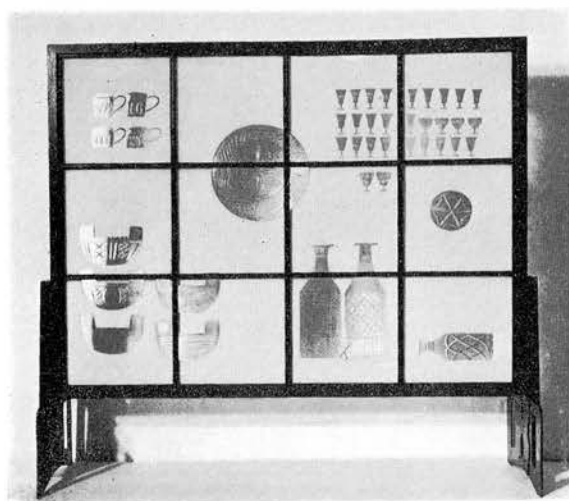
良伎阿矢磯 (展藝工在實) 文花梨箱 六四四



一 和 村 木 (展藝工在實) 風屏先呂風 九四四



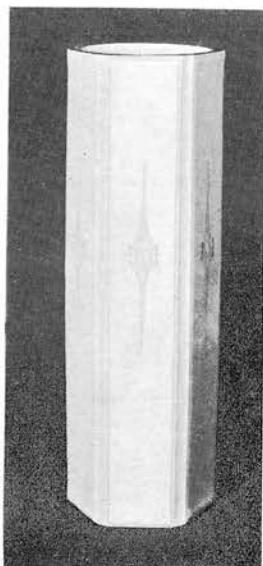
周 豐 村 高 (展藝工在實) 瓶花口廣 八四四



四五三 硝子衝立 (工人社展) 各務 鑑 三



四五〇 吹込ガラス釣花挿 (工人社展) 佐藤潤 四郎



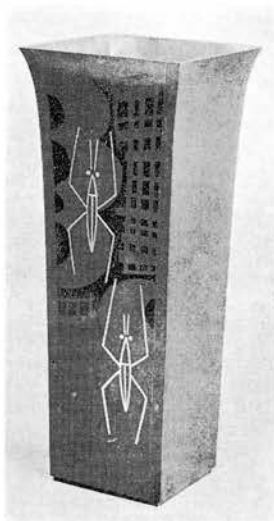
四五四 六角象嵌文花瓶 (東陶會展) 伊東翠 壺



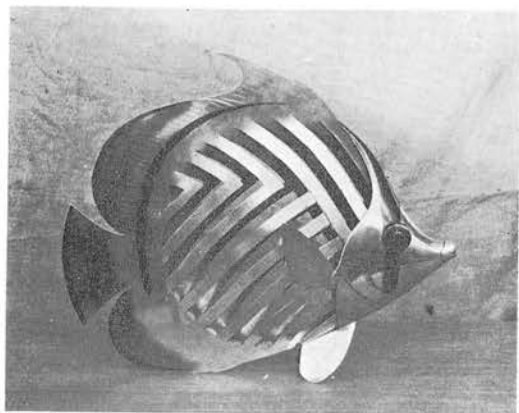
四五一 芽生文金彩花瓶 (工人社展) 北原千鹿



四五五 彩磁飾り瓶 (東陶會展) 板谷波山



四五二 象嵌角花瓶 (工人社展) 大須賀 喬



(展文) 物置銀オウオヨチオヨチイラーフ 九五四
巖 宗 藤 加



堂 象 木々 佐 (展文) 物置銅鑄咸阮彈 六五四



四六〇 銀製水瓶 (文展) 清水龜藏



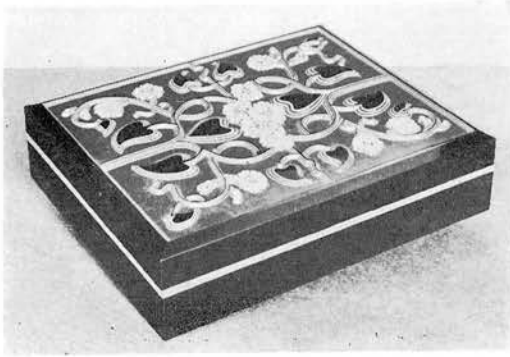
夫 信 田 津 (展文) 爐薰翽鳳 七五四



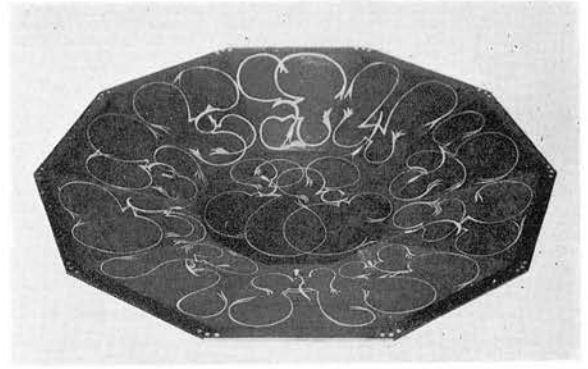
四六一 青銅魚文花瓶 (文展) 林 萬壽人



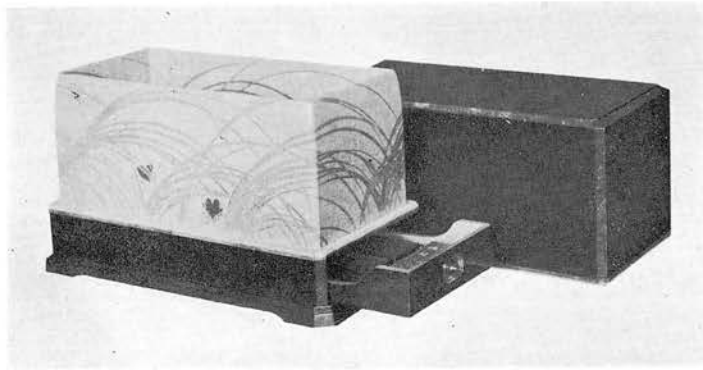
四五八 鑄銅耳付花瓶 (文展) 香取正彦



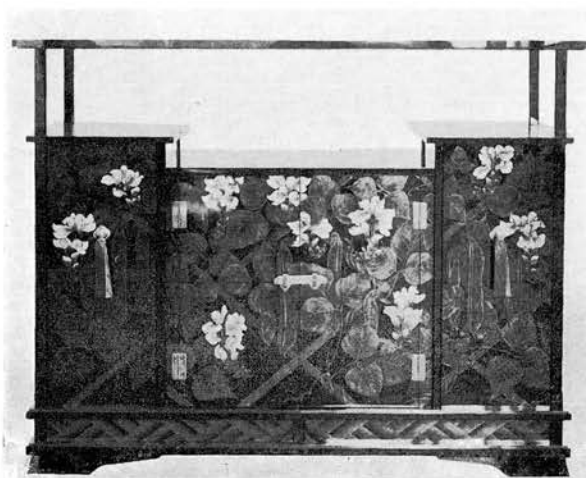
雲陽藤佐（展文）庫文文章野漆彫 三六四



人正山中（展文）器盛様文鳩形角十 二六四



華露間本（展文）箱硯器漆 四六四



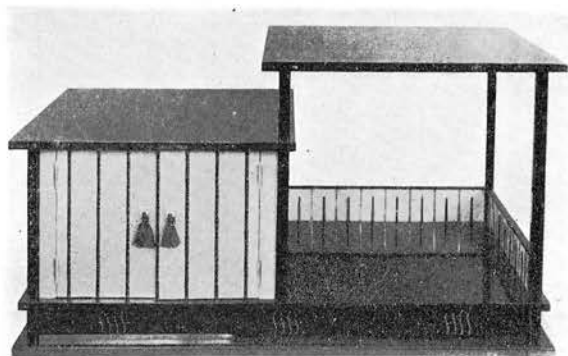
郎十源田吉（展文）棚の豆刀大漆 六六四



峰大前（展文）笛草引水畫刀漆 五六四



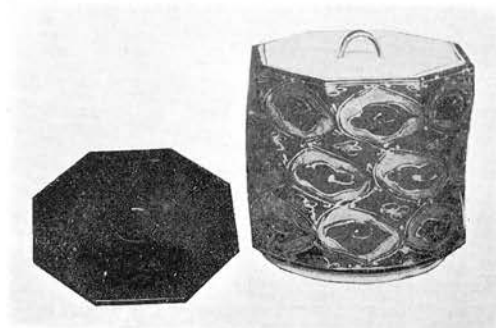
四七〇 陶器南瓜模様花瓶 (文展) 河合榮之助



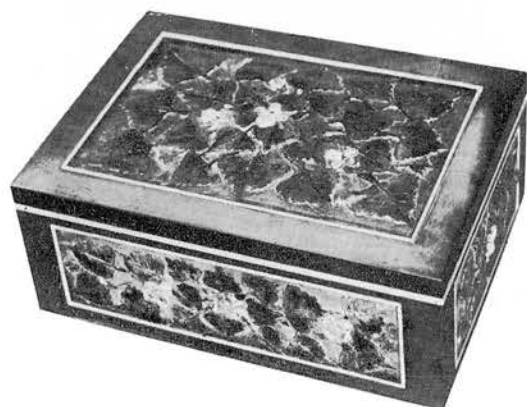
哉宗畑多 (展文) 棚器漆 七六四



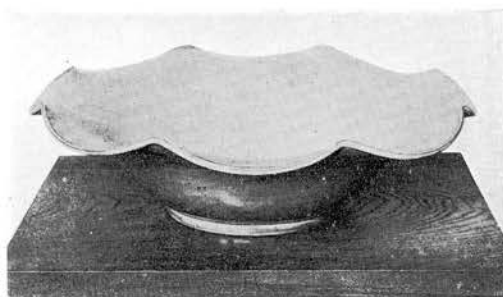
七 巖田 岩 (展文) 瓶花子硝き吹 一七四



(展文) 指水捻角八様模雲手開金 八六四
郎太喜村河



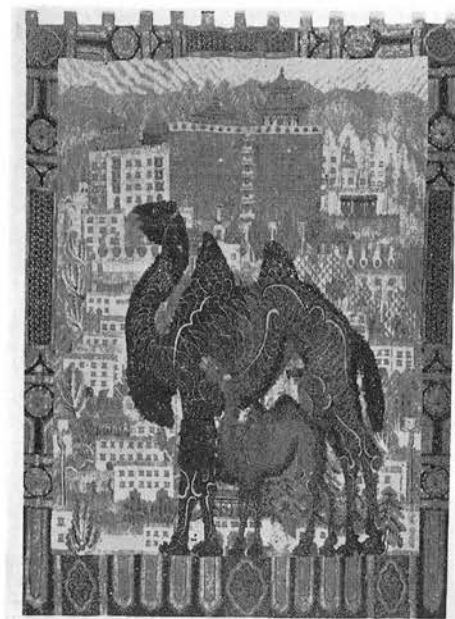
(展文) (ルーエヴ・ド・トーバ) 箱手紋菱 二七四
平 雄 川 小



郎太正水清 (展文) 盛花勘翠紫 九六四



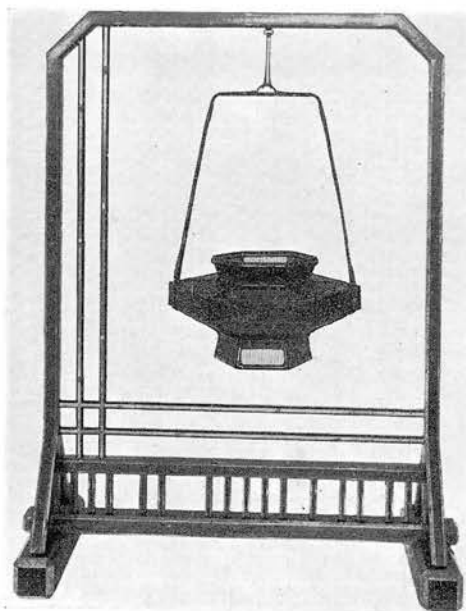
二 英 鳥 鹿 (展文) 風屏嶺蕩林樹果 五七四



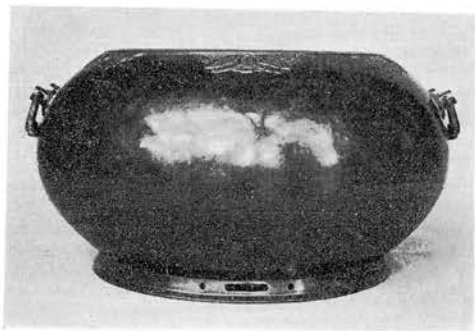
四七三 手織錦熱河圖壁掛 (文展) 山鹿清華



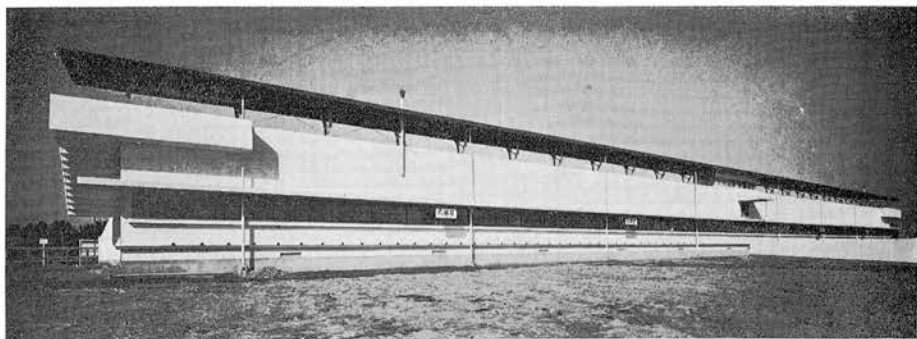
彦 光 口 野 (展文) (形人所御) 供子ぶ遊に丘砂 六七四



四七四 釣花瓶 (文展) 飯塚琅玕齋



眞 秀 取 香 (會々齋藝工) 懸瓶文花銅青 七四四



計設已捨口堀 面正所票投場馬競手取 八七四



計設課所地社會資合菱三 面側行銀菱三 一八四



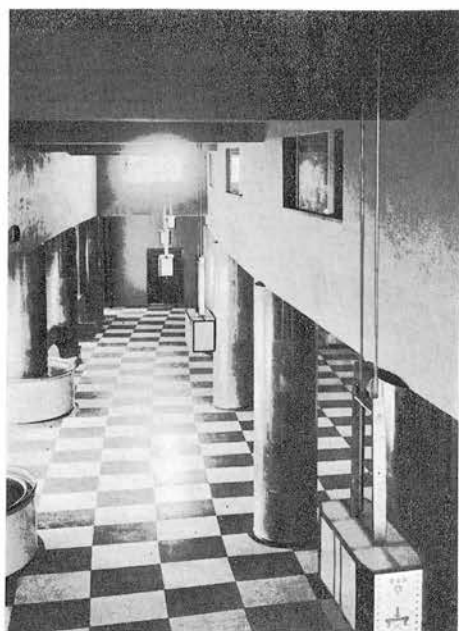
面側席覽觀上同 九七四



廊柱庭中上同 二八四



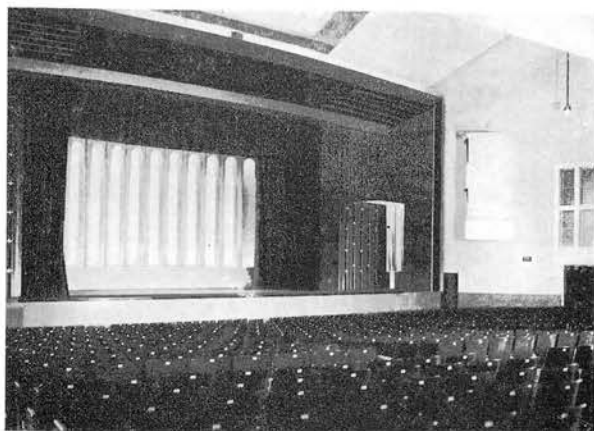
四八〇 大阪市電氣科學館外觀夜景 大阪市經理部營繕課設計



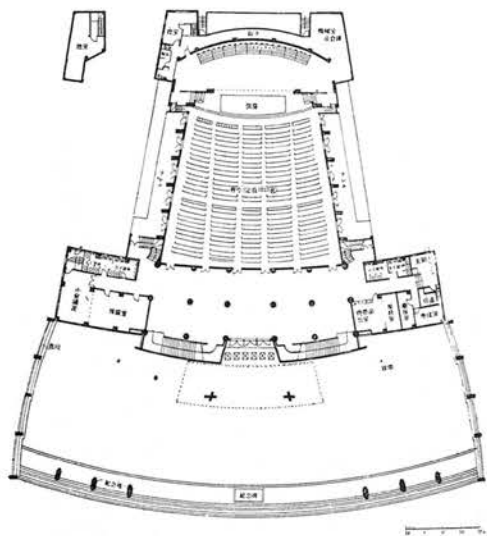
ル - ホ 階 二 上 同 六 八 四



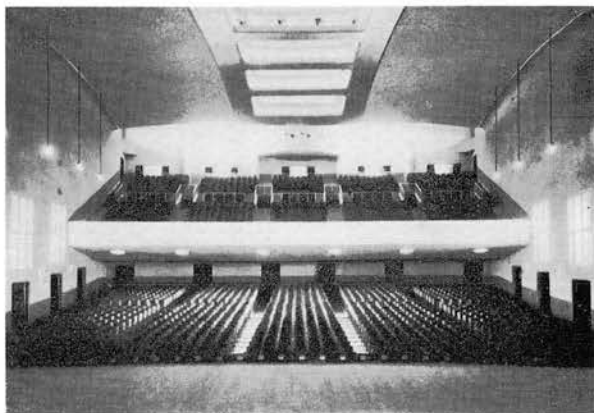
計設所務事築建野村 觀外館會念記翁邊渡 三八四



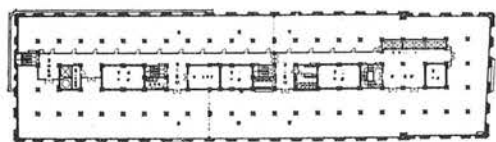
面正堂會上同四八四



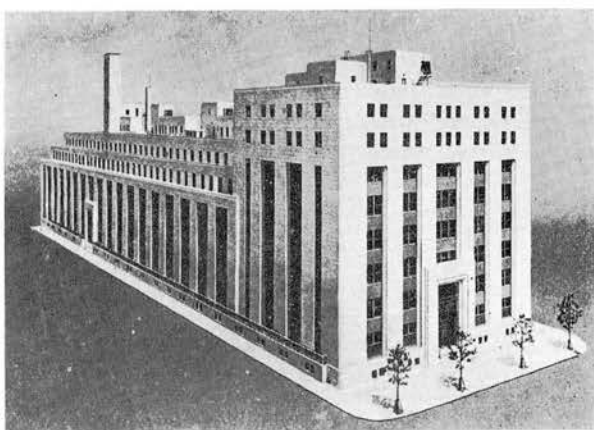
圖面平階一上同七八四



部內堂會上同五八四



圖面平階四・三・二館産日 九八四
載轉りよ〇一ノ三--築建新



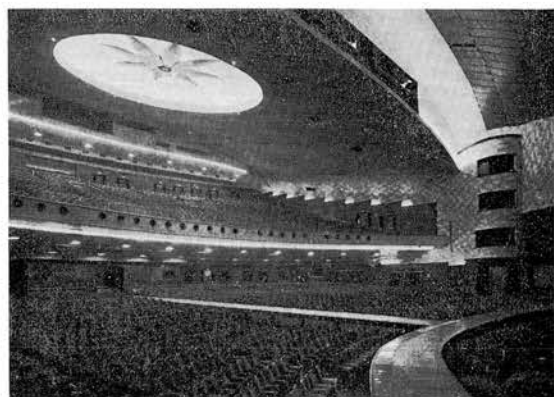
計設社會式株木土央中 景全館産日 八八四



四九〇 名古屋驛正面中央
鐵道省工務局建築課設計



眞寫社築建新 口入と庇面正上同 一九四



眞寫社世界世築建 計設所務事築建松成 席客觀場劇際國 二九四

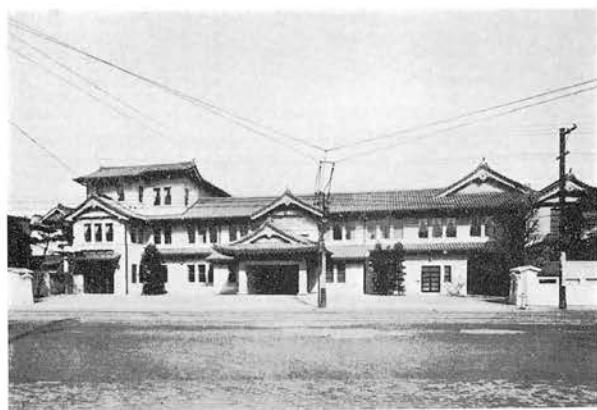


四九四 同右玄關內部

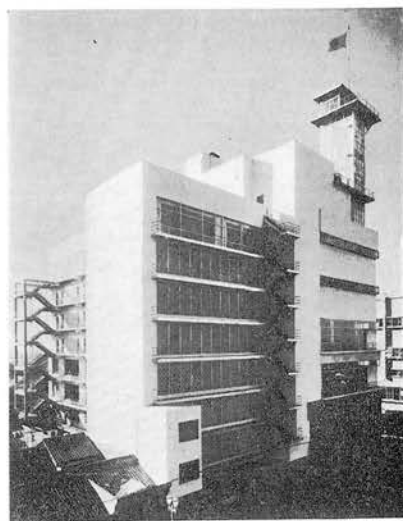
新建築社寫眞



計設課築建局務工省道鐵 觀外舍廳省道鐵 三九四



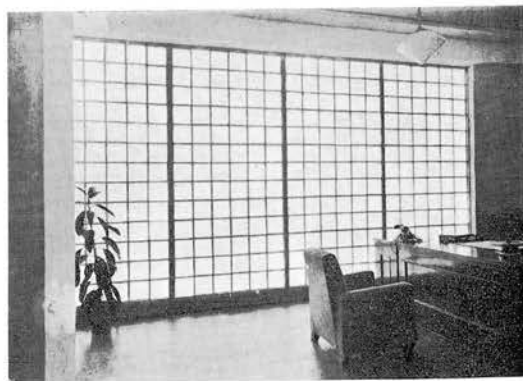
計設組水清 景全部樂俱術美京東 七九四



計設郎一純川石 ルビ日朝屋古名 五九四

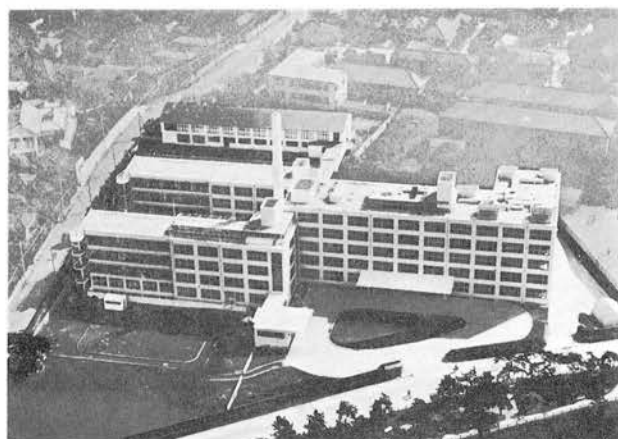


庭中上同 八九四

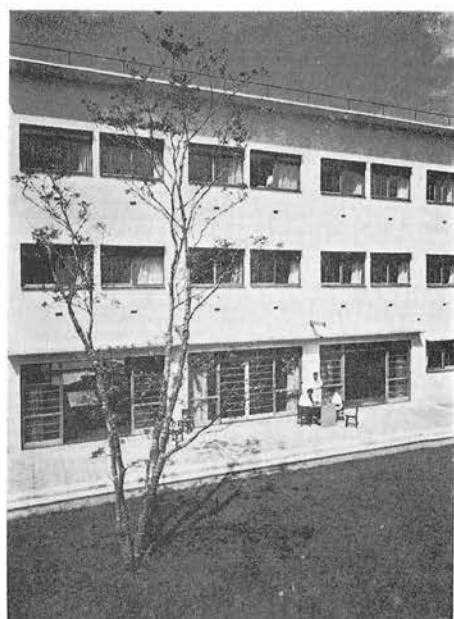


眞寫社築建新

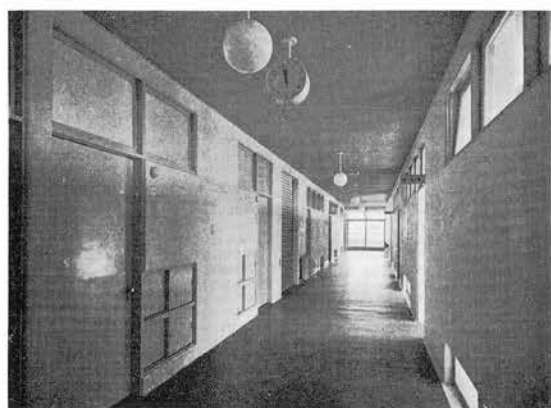
部內室貸上同 六九四



計設課繕營局理經省信遞 りよ空上東北院病信遞京東 二〇五
眞寫會協築建際國



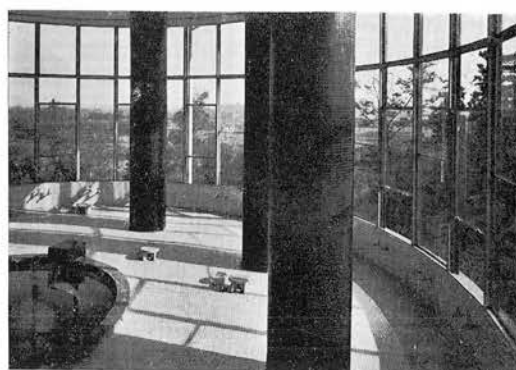
計設郎吉口谷 訓外舍宿寄藝義應慶 九九四
影撮雄義透渡



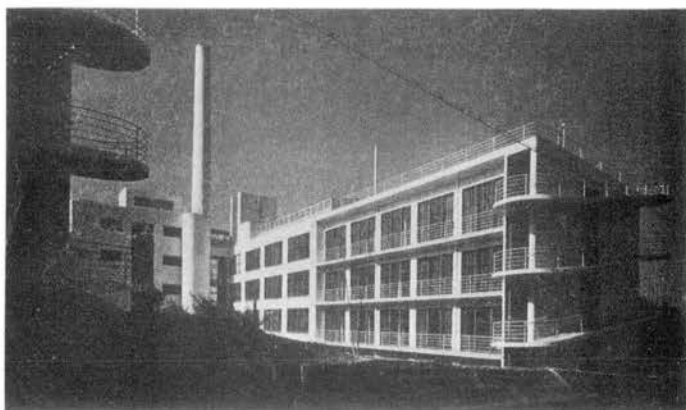
眞寫會協築建際國 下廊階五館本上同 三〇五



影撮雄義透渡 内室上同 〇〇五



影撮雄義透渡 室浴上同 一〇五



眞寫會協築建際國

棟病二第上同 四〇五



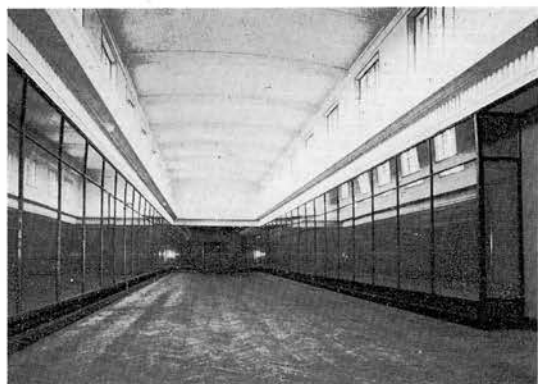
眞寫社築建新

計設課營造館物博室帝時臨 景全館物博室帝 五〇五



眞寫社築建新

觀外面背上同 六〇五



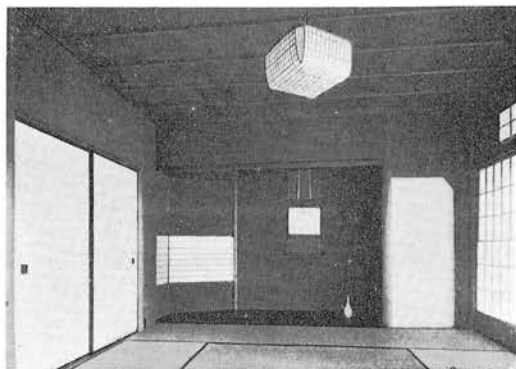
室列陳主上同 七〇五



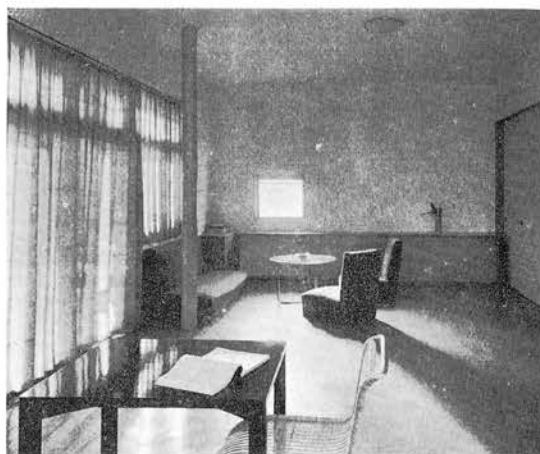
眞寫社世界建築 計設八十五田吉 觀外邸別屋杵 一一五



影攝雄義邊渡 計設郎吉口谷 觀外側南宅住氏K 八〇五



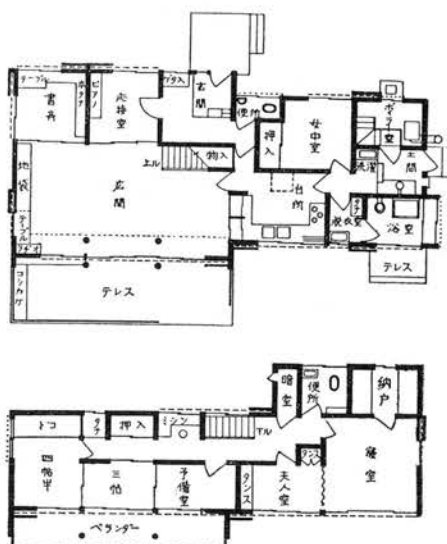
眞寫社世界建築 間居上同 二一五



影攝雄義邊渡 間居上同 九〇五



眞寫社世界建築 室寢階二上同 三一五



五一〇 同上一階(上圖)、二階(下圖) 平面圖
國際建築一三の四より轉載



眞宮社界世築建 計設已捨口堀 觀外側北邸藝內 七一五



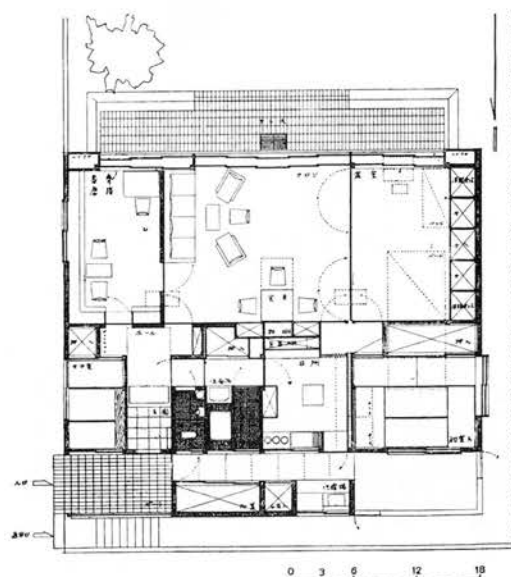
眞宮社界世築建 計設象蛟口山 面庭邸林小 四一五



眞宮社界世築建 る見を庭りょンロサ上同 五一五



計設夫通岡藤 門邸士博K 八一五



五一六 同上平面圖 國際建築一三の九より轉載



五二三 淨瑠璃寺塔婆 (本欄一六九頁參照)



(照參頁八六一欄本) 堂本寺光朝 九一五



(上同) 堂本寺瑠璃淨 四二五



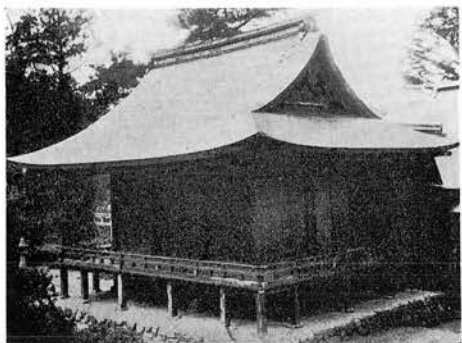
五二〇 勝曼陀塔婆 (本欄一六八頁參照)



五二五 法隆寺地藏堂 (本欄一六九頁參照)



(照參頁八六一欄本) 門禮守城里首 一二五



五二六 古熊神社本殿



五三一 護國院鐘樓 (本欄一六九頁參照)

(本欄一六九頁參照)



五三一 春日神社本殿 (本欄一七一頁参照)



(照參頁九六一欄本) 堂本院生松 七二五



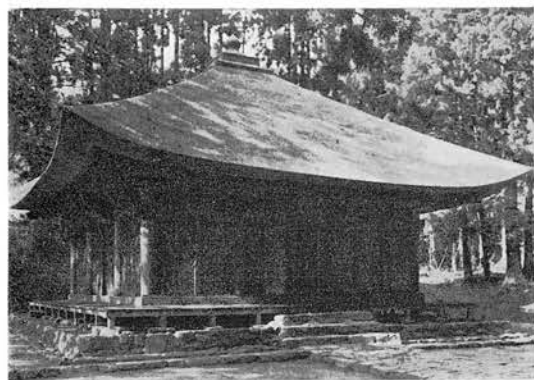
(照參頁二七一欄本) 殿本社神麻須夫久都 二三五



(照參頁〇七一欄本) 堂本寺明南 八二五



五二九 染羽天石勝神社本殿 (本欄一七〇頁参照)



(照參頁二七一欄本) 堂陀彌阿 三三五



五三〇 八幡宮本殿 (本欄一七〇頁参照)



(照参頁三七一欄本) 観外ノ西東櫓粧化城路姫 七三五



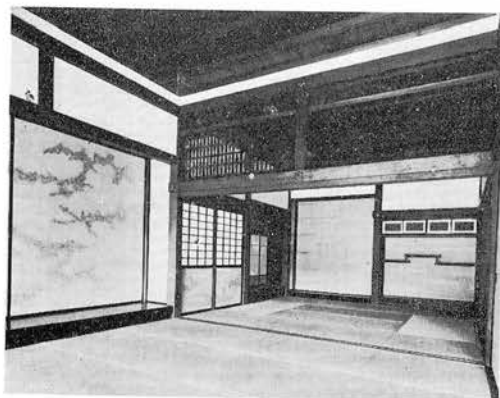
(照参頁二七一欄本) 門乾城山松 四三五



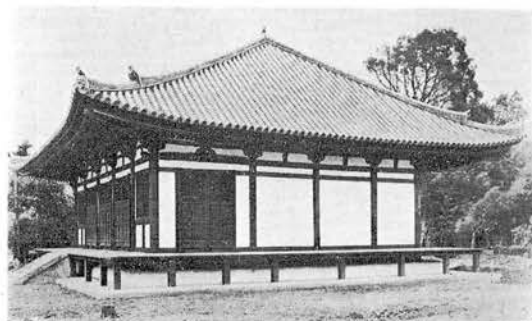
(リヨ内城) 丸ノ西上同 八三五



門井筒上同 五三五



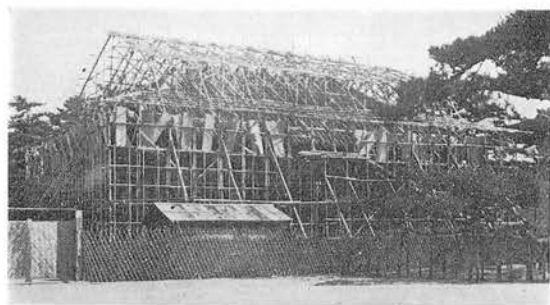
(後工竣工)ム臨ヲ間之奥リヨ間之床大院書寺心観 九三五
(照参頁四七一欄本)



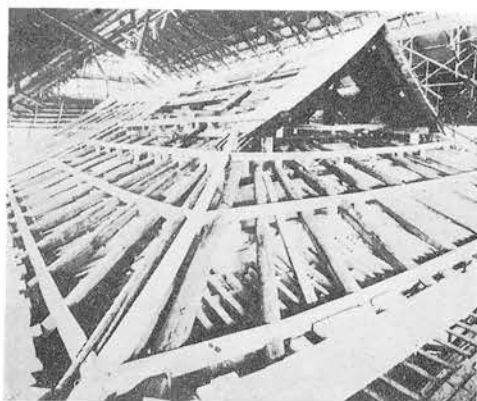
五四〇 石津寺本堂(竣工後)
(本欄一七四頁参照)



(照参頁二七一欄本) 堂本寺隆興 六三五



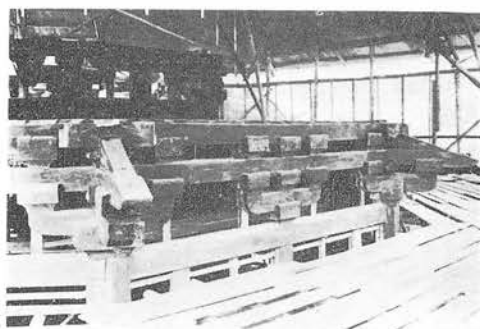
（照參頁五七一欄本） 態狀中理修堂金東寺福興 五四五



中立組堂講大寺隆法 一四五

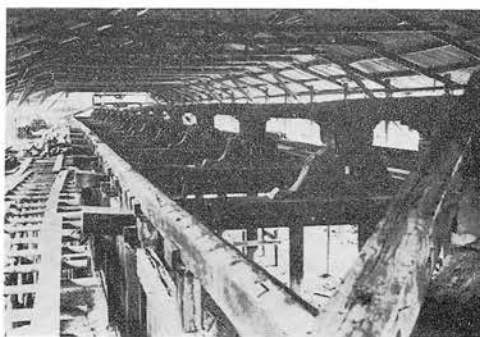
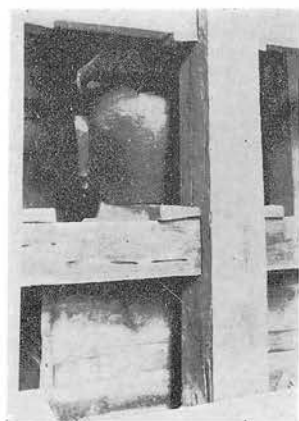


五四六 同上修理中發見ノ佛手



中體解殿夢上同 二四五

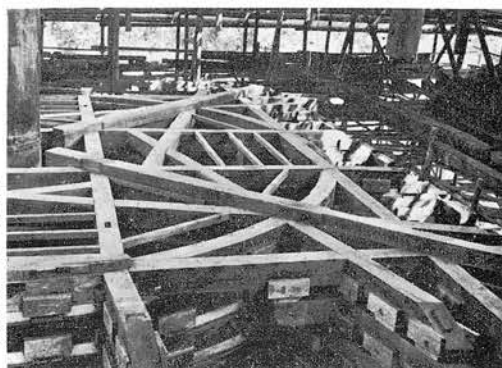
五四七 同上修理中發見ノ佛頭出土狀態



中體解廊回院東上同 三四五



五四八 同上佛頭

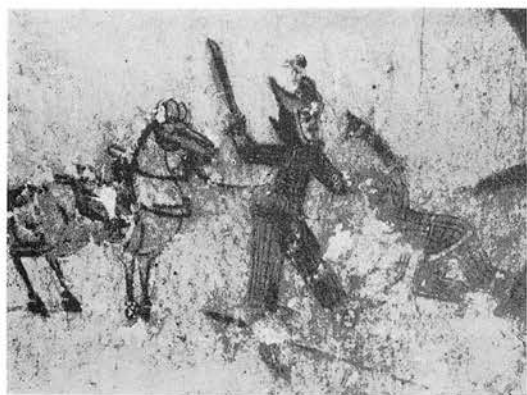


（本欄一七五頁參照）

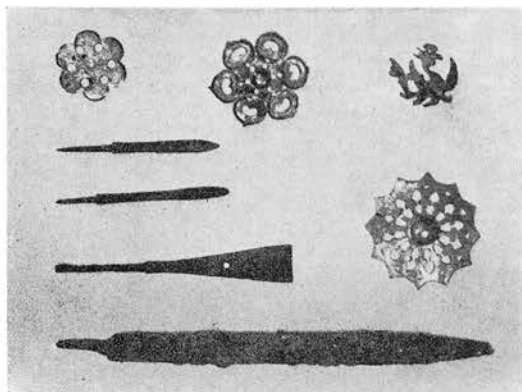
五四四 大傳法院多寶塔上層解體中



(照參頁二六一欄本) 畫壁墳古代遼國洲滿 三五五



(圖劍戰)畫壁室北墳號二十第安輯國洲滿 四五五
(照參頁五六一欄本)



鉄鐵、刀鐵、具飾銅金土出上同 五五五



(照參頁四六一欄本) 態狀掘發蹟遺古唐 九四五



五五〇 同上發掘彩色土器
文様



態狀土出品製木ルケ於ニ趾居住上同 一五五



五五二 朝鮮扶餘出土蓮座鬼形文様埴
(本欄一六三頁參照)

五五六 佐々木岩次郎 十二月二十九日(昭和十一年)逝去



五五七 島崎柳塙 一月二十一日逝去



五五八 久保田潔明 二月十四日逝去



五五九 福井江亭 三月八日逝去



五六〇 落合朗風 四月十五日逝去



五六一 塚本晴 八月九日逝去



五六二 伊東陶山 九月七日逝去



五六三 磯矢完山 十月十四日逝去



五六四 奥村霞城 十月十六日逝去



五六五 加賀月華 十一月二十四日逝去



五六六 曾福達毅 十二月六日逝去



五六七 高橋義雄 十二月十二日逝去



便

覽

美術關係法規一覽

國寶保存

國寶保存法

昭和四年三月二十八日
法律第十七號

- 第一條 建造物、寶物其ノ他ノ物件ニシテ特ニ歴史ノ證徴又ハ美術ノ模範ト爲ルベキモノハ主務大臣國寶保存會ニ諮問シ之ヲ國寶トシテ指定スルコトヲ得
- 第二條 主務大臣前條ノ規定ニ依ル指定ヲ爲シタルトキハ其ノ旨ヲ官報ヲ以テ告示シ且當該物件ノ所有者ニ通知ス
- 第三條 國寶ハ之ヲ輸出又ハ移出スルコトヲ得ズ但シ主務大臣ノ許可ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラズ
- 第四條 國寶ノ現狀ヲ變更セントスルトキハ主務大臣ノ許可ヲ受ケベシ但シ維持修理ヲ爲スハ此ノ限ニ在ラズ
- 第五條 主務大臣前二條ノ規定ニ依ル許可ヲ爲サントスルトキハ國寶保存會ニ諮問スベシ
- 第六條 國寶ノ所有者ニ付變更アリタルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リ所有者ヨリ主務大臣ニ届出ヲ爲スベシ國寶滅失又ハ毀損シタルトキ亦同ジ
- 第七條 國寶ノ所有者ハ主務大臣ノ命令ニ依リ一年ノ期間ヲ限り帝室、官立又ハ公立ノ博物館又ハ美術館ニ其ノ國寶ヲ出陳スル義務アルモノトス但シ祭祀法用又ハ公務執行ノ爲必要アルトキ其ノ他已ムコトヲ得ザル事由アルトキハ此ノ限ニ在ラズ
- 前項ノ命令ニ對シテ不服アル者ハ訴願ヲ爲スコトヲ得
- 第八條 前條ノ規定ニ依リテ國寶ヲ出陳シタル者ニ對シテハ命令ノ定ムル所ニ依リ國庫ヨリ補給金ヲ交付ス
- 第九條 第七條ノ規定ニ依リテ出陳シタル國寶其ノ出陳中滅失又ハ毀損シタルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リ國庫ヨリ其ノ所有者ニ對シ通常生ズベキ損害ヲ補償ス但シ不可抗力ニ因リタル場合ハ此ノ限ニ在ラズ
- 前項ノ損害補償額ハ主務大臣之ヲ決定ス其ノ決定ニ對シテ不服アル者ハ決定通知ノ日ヨリ三月内ニ通常裁判所ニ出訴スルコトヲ得
- 第十條 第七條ノ規定ニ依リテ出陳シタル國寶ニ付其ノ出陳中所有者ノ變更アリタルトキハ新所有者ハ當該國寶ニ關シ本法ニ規定スル舊所有者ノ權利義務ヲ承繼ス
- 第十一條 公益上其ノ他特殊ノ事由ニ依リ必要アルトキハ主務大臣國寶保存會ニ諮問シ國寶ノ指定解除ヲ爲スコトヲ得
- 主務大臣前項ノ規定ニ依ル指定解除ヲ爲シタルトキハ其ノ旨ヲ官報ヲ以テ告示シ且當該物件ノ所有者ニ通知ス
- 第十二條 神社又ハ寺院（佛堂ヲ含ム以下同ジ）ノ所有ニ屬スル國寶ハ神社ニ在リテハ神職（官國幣社ニ在リテハ宮司、府縣郷社ニ在リテハ社司、村社以下ニ在リテハ社掌）、寺院ニ在リテハ住職（佛堂ニ在リテハ受持僧侶）之ヲ管理ス但シ主務大臣ノ許可ヲ受ケ別ニ管理者ヲ定ムルコトヲ得
- 第十三條 神社又ハ寺院ノ所有ニ屬スル國寶ハ之ヲ處分シ、擔保ニ供シ又ハ差押フルコトヲ得ズ但シ主務大臣ノ許可ヲ受ケ處分シ又ハ擔保ニ供スルハ此ノ限ニ在ラズ
- 主務大臣前項ノ規定ニ依ル許可ヲ爲サントスルトキハ國寶保存會ニ諮問スベシ
- 主務大臣ノ許可ヲ受ケズシテ神社又ハ寺院ノ所有ニ屬スル國寶ヲ處分シ又ハ擔保ニ供シタルトキハ之ヲ無効トス
- 第十四條 神社又ハ寺院其ノ所有ニ屬スル國寶ヲ維持修理スルコト能ハザルトキハ主務大臣國寶保存會ニ諮問シ之ニ對シ補助金ヲ交付スルコトヲ得
- 特ニ必要アルトキハ神社又ハ寺院以外ノモノノ所有ニ屬スル國寶ニ付前項ノ規定ヲ準用ス
- 第十五條 補助金ハ豫算額ヲ以テ之ヲ交付スルコトヲ得此ノ場合ニ於テ精算ノ上剩餘アルトキハ之ヲ還付セシムルコトヲ得
- 第十六條 補助金及補給金トシテ國庫ヨリ支出スベキ金額ハ毎年度十五萬圓以上二十萬圓以下トス
- 前項ノ金額ノ外特ニ必要アルトキハ豫算ノ定ムル所ニ依リ臨時ニ補助金又ハ補給金ヲ支出スルコトヲ得
- 第十七條 國寶保存會ノ組織及權限ニ關スル事項ハ本法ニ規定スルモノノ外勅令ヲ以テ之ヲ定ム
- 第十八條 神社又ハ寺院ノ所有ニ屬スル國寶ノ管理ニ關スル事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム
- 第十九條 國ノ所有ニ屬スル國寶ニ關シテハ勅令ヲ以テ別段ノ定ヲ爲スコトヲ得
- 第二十條 主務大臣ノ許可ナクシテ國寶ヲ輸出又ハ移出シタル者ハ五年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ二千圓以下ノ罰金ニ處ス
- 第二十一條 國寶ヲ損壞、毀棄又ハ隠匿シタル者ハ五年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス
- 前項ノ國寶自己ノ所有ニ係ルトキハ二年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ二百圓以下ノ罰金若ハ科料ニ處ス
- 第二十二條 第四條ノ規定ニ違反シ許可ヲ受ケベキ者之ヲ受ケズシテ國寶ノ現狀ヲ變更シタルトキハ五百圓以下ノ過料ニ處ス
- 第二十三條 第六條ノ規定ニ違反シ届出ヲ爲サザル者ハ五百圓以下ノ過料ニ處ス
- 第二十四條 第七條ノ規定ニ依リテ出陳

シタル國寶ノ管理者又ハ神社若ハ寺院ノ所有ニ屬スル國寶ノ管理者怠慢ニ因リ其ノ管理スル國寶ヲ滅失又ハ毀損スルニ至ラシメタルトキハ五百圓以下ノ過料ニ處ス

第二十五條 非訟事件手續法第二百六條乃至第二百八條ノ規定ハ本法ニ規定スル過料ニ付之ヲ準用ス

附則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム
(昭和四年勅令第二百九號ヲ以テ同年七月一日ヨリ施行)

古社寺保存法ハ之ヲ廢止ス

古社寺保存法ニ依リテ特別保護建造物又ハ國寶ノ資格アルモノト定メラレタル物件ハ之ヲ本法ニ依リテ國寶トシテ指定セラレタル物件ト看做ス

古社寺保存法ニ依リテ下付シタル保存金ハ之ヲ本法ニ依リテ交付シタル補助金ト看做ス

國寶保存法施行令

昭和四年六月二十九日
勅令 第一百十號

第一條 國寶保存法第七條ノ規定ニ依リテ國寶ヲ官立又ハ公立ノ博物館又ハ美術館ニ出陳セシメタルトキハ當該博物館又ハ美術館ノ長、當該博物館又ハ美術館ノ長故障アルトキハ當該職制ノ定ムル所ニ依リ其ノ職務ヲ代理スル者ニ於テ出陳國寶ヲ管理ス
前項ノ管理ニ關シテハ文部大臣之ヲ監督ス

第二條 國寶保存法第七條ノ規定ニ依リテ博物館又ハ美術館ニ出陳シタル國寶ノ出陳ニ要スル荷造運搬費等ハ當該博物館又ハ美術館ニ於テ負擔スルモノトス返送ニ要スル荷造運搬費等亦同ジ

第三條 國寶保存法第十四條ノ規定ニ依リテ補助金ノ交付ヲ受ケタル國寶ノ維持修理ニ關シテハ文部大臣之ヲ監督ス

文部大臣ハ前項ニ規定スル權限ヲ地方長官ニ委任スルコトヲ得
第四條 文部大臣國ノ所有ニ屬スル物件ヲ國寶トシテ指定シタルトキハ其ノ旨ヲ官報ヲ以テ告示シ且當該物件ノ所管大臣ニ通知スベシ國ノ所有ニ屬スル國寶ノ指定解除ヲ爲シタルトキ亦同ジ

第五條 國ガ其ノ所有ニ屬スル國寶ヲ處分シ、輸出若ハ移出シ又ハ其ノ現狀ヲ變更セントスルトキハ所管大臣ニ於テ文部大臣ノ同意ヲ得ベシ
第六條 文部大臣前條ノ規定ニ依ル同意ヲ爲サントスルトキハ國寶保存會ニ諮問スベシ

第七條 國ノ所有ニ屬スル國寶ニ付滅失、毀損又ハ管理換アリタルトキハ其ノ旨ヲ所管大臣ヨリ文部大臣ニ通知スベシ國ガ國寶ヲ取得シタルトキ亦同ジ

附則

本令ハ國寶保存法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス(昭和四年七月一日ヨリ施行)
明治三十年勅令第四百四十六號ハ之ヲ廢止ス

國寶保存法施行規則

昭和四年六月二十九日
文部省令第三十七號

第一條 文部省ニ國寶臺帳ヲ備ヘ國寶ヲ登錄ス

第二條 國寶臺帳ニハ左ノ事項ヲ記載シ寫眞ヲ添付ス
建造物ノ類ニ付テハ

一 名稱及所在地

二 所有者ノ氏名(名稱)及住所

三 員數

四 構造及形式

五 大サ

六 創建及沿革

七 其ノ他參考トナルベキ事項

寶物ノ類ニ付テハ

一 名稱

二 所有者ノ氏名(名稱)及住所

三 種類

四 員數

五 品質

六 形狀

七 法量

八 作者及傳來

九 其ノ他參考トナルベキ事項

第三條 國寶ヲ輸出又ハ移出セントスルトキハ所有者ニ於テ其ノ事由並ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ニ申請スベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

一 國寶ノ名稱及員數
二 輸出又ハ移出ノ期間

三 輸出先又ハ移出先ノ場所及其ノ所在地

四 荷造運搬ノ方法

五 輸出又ハ移出期間中ニ於ケル保管ノ方法

六 保險ノ方法

七 摸寫摸造等ニ關スル約束アラバ之ニ關スル事項

第四條 國寶ノ輸出又ハ移出ノ許可ヲ受ケタル者當該國寶ヲ持還リ又ハ其ノ返還ヲ受ケタルトキハ遲滞ナク文部大臣ニ届出ツベシ

第五條 國寶ノ現狀ヲ變更セントスルトキハ所有者ニ於テ其ノ事由並ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ニ申請スベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

一 國寶ノ名稱及員數

二 現狀ノ變更ニ關スル設計仕様、計畫圖並ニ工事擔當者ノ氏名(名稱)

三 建造物ノ類ニシテ位置ノ變更ヲ生ズル場合ニ在リテハ其ノ移轉先

四 著手ノ時期及竣成期限

第六條 國寶ノ現狀變更ノ許可ヲ受ケタル者當該國寶ノ現狀變更ヲ竣リタルトキハ實施仕様書、寫眞並ニ圖面ヲ添ヘ遲滞ナク文部大臣ニ届出ツベシ

第七條 國寶ノ所有者其ノ氏名(名稱)又ハ住所ヲ變更シタルトキハ變更ノ日ヨリ十四日內ニ文部大臣ニ届出ツベシ

國寶ヲ取得シタル者ハ當該國寶ノ名稱及員數ヲ具シ取得ノ事實ヲ證明スルニ足ル書面ヲ添ヘ取得ノ日ヨリ十四日內

ニ文部大臣ニ届出ツベシ

國寶滅失又ハ毀損シタルトキハ國寶保存法第七條ノ規定ニ依リ出陳中ニ係ル場合ヲ除クノ外所有者ヨリ其ノ事由、實況並ニ當該國寶ノ名稱及員數ヲ具シ滅失又ハ毀損ノ事實ヲ知リタル日ヨリ

五日內ニ文部大臣ニ届出ツベシ
第八條 國寶保存法第七條ノ規定ニ依リテ出陳シタル國寶ヲ受領シタルトキハ當該博物館又ハ美術館ハ所有者ニ受領證書ヲ交付シ返付スルトキハ之ヲ引換フベシ

第九條 前條ノ國寶ヲ受領又ハ返付シタルトキハ當該博物館又ハ美術館ハ其ノ都度文部大臣ニ報告スベシ神社、寺院又ハ公共團體ノ所有ニ屬スル國寶ナルトキハ尙當該地方長官ニ報告スベシ

第十條 第八條ノ國寶滅失又ハ毀損シタルトキハ當該博物館又ハ美術館ハ其ノ事由、實況並ニ當該國寶ノ名稱及員數ヲ具シ直ニ文部大臣ニ報告シ且所有者ニ通知スベシ神社、寺院又ハ公共團體ノ所有ニ屬スル國寶ナルトキハ尙當該地方長官ニ報告スベシ

第十一條 國寶保存法第八條ノ規定ニ依リテ支給スベキ補給金ハ國寶一件ニ付一年六圓以上百圓以下トシ文部大臣ニ於テ出陳ヲ命ズル都度之ヲ定ム
前項ノ補給金ノ支給ニ付テハ月割ヲ以テ計算シ一月ニ滿タザル日數ハ之ヲ一月ト看做ス

第十二條 國寶保存法第九條ノ規定ニ依

ル補償ヲ受ケントスルトキ滅失又ハ毀損シタル國寶ノ所有者ニ於テ左ノ事項ヲ具シ遲滞ナク文部大臣ニ申請スベシ

一 國寶ノ名稱及員數

二 國寶ヲ出陳シタル博物館又ハ美術館ノ名稱及所在地

三 滅失又ハ毀損スルニ至リタル事由並ニ毀損ニ付テハ其ノ程度

第十三條 國寶ノ指定解除アリタルトキハ國寶臺帳ヨリ當該國寶ノ登録ヲ抹消ス

第十四條 國寶保存法第十二條但書ノ規定ニ依リテ別ニ管理者ヲ定メントスルトキハ當該神職又ハ住職(佛堂ニ在リテハ受持僧侶)ニ於テ其ノ事由ヲ具シ新ニ管理者ト爲ルベキ者ト連署ノ上文部大臣ニ申請スベシ

第十五條 神社又ハ寺院其ノ所有ニ屬スル國寶ヲ處分セントスルトキハ其ノ事由並ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ニ申請スベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

一 國寶ノ名稱及員數

二 處分ノ方法

三 對價、報酬又ハ之ニ準ズベキモノ

四 處分ノ相手方ノ氏名(名稱)及住所

五 出願者ノ資力ヲ證スルニ足ルベキ事項

第十六條 神社又ハ寺院其ノ所有ニ屬スル國寶ヲ擔保ニ供セントスルトキハ其ノ事由並ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ニ申請スベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

一 國寶ノ名稱及員數

二 擔保ノ期間

三 擔保權者ノ氏名(名稱)及住所

四 出願者ノ資力ヲ證スルニ足ルベキ事項

第十七條 國寶ヲ擔保ニ供スル許可ヲ受ケタル神社又ハ寺院當該國寶ヲ擔保ニ供シ又ハ擔保契約ヲ解除シタルトキハ遲滞ナク文部大臣ニ届出ツベシ

第十八條 國寶保存法第十四條ノ規定ニ依リテ補助金ノ交付ヲ受ケントスル者ハ其ノ事由並ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ニ申請スベシ

一 維持修理スベキ國寶ノ名稱及員數

二 維持修理ニ要スル工事豫算、設計仕樣並ニ計畫圖及寫眞

三 著手ノ時期及竣成期限

四 出願者ノ資力ヲ證スルニ足ルベキ事項

第十九條 國寶ノ維持修理費ニ對シ國庫ヨリ補助金ヲ交付スル場合ニ於テハ當該國寶ノ所有者ハ少クトモ維持修理費總額ノ百分ノ五十ヲ負擔スベキモノトス但シ特別ノ事情アルモノニ限り其ノ負擔ヲ輕減スルコトヲ得

第二十條 補助金ノ交付ヲ受ケタル者ハ其ノ管理方法ヲ定メ地方長官ノ許可ヲ受ケベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

第二十一條 補助金ノ交付後ニ於テ設計仕樣又ハ著手ノ時期若ハ竣成期限ノ變更ヲ要スルトキハ其ノ事由及變更設計仕樣並ニ計畫圖ヲ具シ文部大臣ノ許可ヲ受ケベシ

文部大臣必要ト認ムルトキハ前項ノ規定ニ拘ラズ設計仕樣ノ變更ヲ命ズル事ヲ得

第二十二條 補助金ノ交付ヲ受ケタル者ハ其ノ國寶ノ維持修理竣リタルトキヨリ二月內ニ實施仕樣書、寫眞、圖面並ニ精算書ヲ添ヘ文部大臣ニ届出ツベシ

第二十三條 本令ノ規定若ハ補助金交付ノ條件ニ違反シ又ハ補助金交付ノ目的ヲ遂行スルコト能ハズト認ムルトキハ文部大臣ハ補助金ノ全部又ハ一部ノ返還ヲ命ズルコトヲ得

第二十四條 神社又ハ寺院ノ所有ニ屬スル國寶ノ管理不適當ニシテ滅失又ハ毀損ノ虞アリト認ムルトキハ文部大臣ハ其ノ管理方法ヲ指定スルコトヲ得

第二十五條 神社又ハ寺院其ノ所有ニ屬スル國寶ヲ博物館、美術館又ハ之ニ準ズベキ場所ニ出陳シ其ノ他當該神社又ハ寺院外ニ搬出セントスルトキハ其ノ事由並ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ノ許可ヲ受ケベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

一 國寶ノ名稱及員數

二 搬出ノ期間

三 搬出先ノ場所及其ノ所在地

四 荷造運搬ノ方法

五 搬出期間中ニ於ケル保管ノ方法

第二十六條 前條ノ規定ニ依リテ許可ヲ

受ケタル神社又ハ寺院當該國寶ヲ再ビ當該神社又ハ寺院内ニ搬入シタルトキハ遲滞ナク文部大臣ニ届出ヅベシ

第二十七條 神社又ハ寺院其ノ所有ニ屬スル國寶ヲ摸寫模造シ又ハ摸寫模造ヲ承認セントスルトキハ其ノ事由並ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ノ許可ヲ受ケベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

- 一 國寶ノ名稱及員數
- 二 摸寫模造ノ期間
- 三 摸寫模造ノ方法
- 四 摸寫模造ニ從事スル者ノ氏名及住所

第二十八條 國寶ノ維持修理、現狀變更等ノ場合ニ於テ佛像、經文、器物、銘文、棟札、埋藏物ノ類ヲ發見シタルトキハ當該國寶ノ所有者ヨリ其ノ實況ヲ具シ遲滞ナク文部大臣ニ届出ヅベシ

第二十九條 本令ノ規定ニ依リテ神社、寺院又ハ公共團體ヨリ文部大臣ニ差出ス書類ハ地方長官ヲ經由スベシ第十八條、第二十一條及第二十二條ノ規定ニ依リテ神社、寺院又ハ公共團體以外ノモノヨリ文部大臣ニ差出ス書類ニ付亦同ジ

附 則

本令ハ國寶保存法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス（昭和四年七月一日ヨリ施行）
古社寺保存法施行細則ハ之ヲ廢止ス

國寶保存會官制

昭和四年六月二十九日
勅令第二百一十一號

第一條 國寶保存會ハ文部大臣ノ監督ニ屬シ其ノ諮問ニ應ジテ國寶保存法第一條、第五條、第十一條、第十三條及第十四條ニ規定スル事項其ノ他國寶保存ニ關スル重要ノ事項ヲ調査審議ス
國寶保存會ハ國寶保存ニ關スル事項ニ付文部大臣ニ建議スルコトヲ得

第二條 國寶保存會ハ會長一人、副會長一人及委員三十人以内ヲ以テ之ヲ組織ス

特別ノ事項ヲ調査審議スル爲必要アルトキハ臨時委員ヲ置クコトヲ得

第三條 會長、副會長、委員及臨時委員ハ文部大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ズ

第四條 會長ハ會務ヲ統理シ會議ノ決議ヲ文部大臣ニ具申ス

副會長ハ會長ヲ輔佐シ會長事故アルトキハ其ノ職務ヲ代理ス

會長及副會長共ニ事故アルトキハ文部大臣ノ指名シタル委員其ノ職務ヲ代理ス

第五條 會長及副會長ハ會議ニ於テ意見ヲ陳述シ可否ノ數ニ加ハルコトヲ得

第六條 國寶保存會ニ常務委員會ヲ置ク
國寶保存會ノ委任ヲ受ケ其ノ權限ニ屬スル事項ノ一部ヲ處理ス常務委員會ハ國寶保存會ノ會長及副會長並ニ國寶保

存會ノ委員ニシテ文部大臣ノ指名シタル者十人以内ヲ以テ之ヲ組織ス

第七條 文部大臣ハ必要ニ依リ又ハ國寶保存會ノ要求アルトキハ文部省高等官其ノ他適當ト認ムル者ヲシテ會議ニ出席シ意見ヲ陳述セシムルコトヲ得

第八條 國寶保存會ノ議事ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第九條 國寶保存會ニ幹事ヲ置ク文部大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ズ
幹事ハ會長及副會長ノ指揮ヲ受ケ庶務ヲ整理ス

第十條 國寶保存會ニ書記ヲ置ク文部大臣之ヲ命ズ
書記ハ上司ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

附 則

本令ハ國寶保存法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス（昭和四年七月一日ヨリ施行）
古社寺保存會規則ハ之ヲ廢止ス

國寶保存會職員

會長 侯細川 護立
委員 三矢 宮松
溝口積次郎
辻 善之助
福井利吉郎
奥田 誠一
德富猪一郎
田中 豐藏
伊東 忠太
香取秀治郎
山田準次郎

幹事

重要美術品等保存

重要美術品等ノ保存ニ關

スル法律

昭和八年四月一日
法律第四十三號

第一條 歷史上又ハ美術上特ニ重要ナル價值アリト認メラルル物件（國寶ヲ除ク）ヲ輸出又ハ移出セントスル者ハ主

荻野伸三郎
子大河内正敏
藤懸 靜也
杉 榮三郎
武田 五一
山田 孝雄
三上 參次
瀧 精一
黒板 勝美
神津 伯
藤島亥治郎
武内 義雄
常盤 大定
新納忠之介
兒玉 九一
濱田 耕作
松尾 長造
土屋 純一
芝 葛盛
青戸 精一
阪谷良之進
丸尾彰三郎

務大臣ノ許可ヲ受クベシ但シ現存者ノ製作ニ係ルモノ、製作後五十年ヲ經ザルモノ及輸入後一年ヲ經ザルモノハ此ノ限ニ在ラズ

第二條 前條ノ規定ニ依リ其ノ輸出又ハ移出ニ付許可ヲ要スル物件ハ主務大臣之ヲ認定シ其ノ旨ヲ官報ヲ以テ告示シ且當該物件ノ所有者ニ通知スベシ

前項ノ規定ニ依リ認定ノ告示アリタルトキハ賣買、交換又ハ贈與ノ目的ヲ以テ當該物件ノ寄託ヲ受ケタル占有者ハ其ノ認定アリタルコトヲ知りタルモノト推定ス

第三條 主務大臣第一條ノ規定ニ依リ許可ノ申請アリタル場合ニ於テ許可ヲ爲サザルトキハ許可申請ノ日ヨリ一年ヨリ長カラザル期間内ニ當該物件ヲ國寶保存法第一條ノ規定ニ依リテ國寶トシテ指定シ又ハ前條ノ規定ニ依リ認定ヲ取消スベシ

第四條 認定、其ノ取消及第二條ノ規定ニ依リ認定物件ノ所有者ニ付變更アリタル場合ノ届出ニ關スル事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第五條 主務大臣ノ許可ナクシテ第二條ノ規定ニ依リ認定物件ヲ輸出又ハ移出シタル者ハ三年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

附 則
本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

重要美術品等ノ保存ニ關スル法律施行規則

昭和八年四月一日
文部省令第十號

第一條 昭和八年法律第四十三號（以下單ニ法ト稱ス）第二條ノ規定ニ依リ認定ヲ爲ス物件概ネ左ノ如シ

- 一 繪畫
- 二 彫刻
- 三 建造物
- 四 文書
- 五 典籍
- 六 書蹟
- 七 刀劍
- 八 工藝品
- 九 考古學資料
- 第二條 重要美術品等ノ所有者、管理者又ハ占有者ハ當該吏員ノ請求アリタルトキハ法第二條ノ規定ニ依リ認定（以下單ニ認定ト稱ス）ノ前後ヲ問ハズ當該物件及其ノ調査ニ付必要ナル資料ノ提示ヲ拒ムコトヲ得ズ但シ正當ノ事由アル場合ハ此ノ限ニ在ラズ
- 第三條 重要美術品等ニ付認定ヲ受ケントスル者ハ左ノ事項ヲ具シ現狀ノ寫眞ヲ添付シテ文部大臣ニ申請スベシ
- 一 名稱
- 二 所有者ノ氏名（名稱）及住所
- 三 種類
- 四 員數
- 五 品質

六 形狀
七 法量
八 作者及傳來

前項ノ申請アリタル場合ニ於テ必要アルトキハ文部大臣ハ當該物件ヲ文部省ニ提出セシムルコトヲ得

第四條 法第二條ノ規定ニ依リ認定物件（以下單ニ認定物件ト稱ス）ヲ輸出又ハ移出セントスルトキハ所有者ニ於テ其ノ事由並ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ニ申請スベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

- 一 認定物件ノ名稱及員數
- 二 輸出又ハ移出ノ期間
- 三 輸出又ハ移出港
- 四 輸出先又ハ移出先ノ場所及其ノ所在地
- 五 荷造運搬ノ方法
- 六 輸出又ハ移出期間中ニ於ケル保管ノ方法

第五條 認定物件ノ輸出又ハ移出ノ許可ヲ受ケタル者當該物件ヲ持還リ又ハ其ノ返還ヲ受ケタルトキハ運滞ナク文部大臣ニ届出ヅベシ

第六條 認定物件ノ所有者其ノ氏名（名稱）又ハ住所ヲ變更シタルトキハ變更ノ日ヨリ十四日以内ニ文部大臣ニ届出ヅベシ

認定物件ヲ取得シタル者ハ當該物件ノ名稱及員數ヲ具シ取得ノ事實ヲ證明スルニ足ル書面ヲ添ヘ取得ノ日ヨリ十四日以内ニ文部大臣ニ届出ヅベシ

認定物件滅失若ハ毀損シ又ハ之ニ著シキ現狀變更アリタルトキハ所有者ヨリ其ノ事由、實況並ニ認定物件ノ名稱及員數ヲ具シ滅失、毀損又ハ現狀變更ノ事實ヲ知りタル日ヨリ五日以内ニ文部大臣ニ届出ヅベシ

第七條 認定物件ガ國寶保存法第一條ノ規定ニ依リ國寶トシテ指定セラレタルトキハ其ノ認定ハ取消サレタルモノト看做ス

法第三條ノ規定ニ依リ認定取消ノ外認定物件滅失若ハ毀損シ又ハ之ニ著シキ現狀變更アリタルトキ其ノ他正當ノ事由アルトキハ文部大臣其ノ認定ヲ取消スコトヲ得

前二項ノ規定ニ依リ認定取消アリタルトキハ其旨ヲ官報ヲ以テ告示シ且當該物件ノ所有者ニ通知ス

第八條 第二條ノ規定ニ違反シ當該物件及其ノ調査ニ付必要ナル資料ノ提示ヲ拒ミタル者ハ拘留又ハ五十圓以下ノ罰金若ハ科料ニ處ス

第九條 第六條ノ規定ニ違反シ届出ヲ爲サザル者ハ五十圓以下ノ罰金若ハ科料ニ處ス

附 則
本令ハ昭和八年法律第四十三號施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

重要美術品等調査委員會
規程

昭和八年四月十一日
文部省訓令第九號

第一條 重要美術品等調査委員會ハ文部大臣ノ監督ニ屬シ重要美術品等ノ保存ニ關スル法律（以下單ニ法ト稱ス）第一條ノ規定ニ依ル輸出及移出ノ許否並ニ法第二條ノ規定ニ依ル認定（以下單ニ認定ト稱ス）及其ノ取消ニ關スル事項ヲ調査審議ス

第二條 重要美術品等調査委員會ハ會長一人及委員二十五人以內ヲ以テ之ヲ組織ス

特別ノ事項ヲ調査審議スル爲必要アルトキハ臨時委員ヲ置クコトヲ得

第三條 會長、委員及臨時委員ハ文部大臣之ヲ依囑シ又ハ之ヲ命ズ

第四條 會長ハ會務ヲ統理シ會議ノ決議ヲ文部大臣ニ具申ス

會長事故アルトキハ文部大臣ノ指名シタル委員其ノ職務ヲ代理ス

第五條 會長ハ會議ニ於テ意見ヲ陳述シ可否ノ數ニ加ハルコトヲ得

第六條 文部大臣ハ必要ニ依リ文部省高等官其ノ他適當ト認ムル者ヲシテ會議ニ出席シ意見ヲ陳述セシムルコトヲ得

第七條 重要美術品等調査委員會ノ議事ニ關スル規則ハ別ニ之ヲ定ム

第八條 重要美術品等調査委員會ニ幹事若干名ヲ置キ文部大臣之ヲ命ズ

幹事ハ會長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス

第九條 重要美術品等調査委員會ニ書記若干名ヲ置キ文部大臣之ヲ命ズ

書記ハ會長及幹事ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第十條 文部大臣ニ於テ必要ト認ムルトキハ會長、委員、臨時委員又ハ其ノ他ノ者ヲシテ認定及其ノ取消其ノ他重要美術品等ニ關スル調査ヲ爲サシムルコトヲ得

重要美術品等調査委員會

職員

會長 伊東 延吉
委員 伊東 忠太
文部次官 子 大河内正敏

（過去）

三矢 宮松

黒板 勝美

濱田 耕作

萩野仲三郎

井上 清

溝口續次郎

奥田 誠一

原田 淑人

藤懸 靜也

神津 伯

香取秀治郎

佐々木信綱

阪谷良之進

文部技師

文部省國寶調査官

丸尾彰三郎

關 保之助

和田 英作

史蹟名勝天然紀念物保存

史蹟名勝天然紀念物保存法

大正八年四月十日
法律第四十四號

第一條 本法ヲ適用スヘキ史蹟名勝天然紀念物ハ內務大臣之ヲ指定ス

前項ノ指定以前ニ於テ必要アルトキハ地方長官ハ假ニ之ヲ指定スルコトヲ得

第二條 史蹟名勝天然紀念物ノ調査ニ關シ必要アルトキハ指定ノ前後ヲ問ハス當該吏員ハ其ノ土地又ハ隣接地ニ立入り土地ノ發掘障礙物ノ撤去其ノ他調査ニ必要ナル行爲ヲ爲スコトヲ得

第三條 史蹟名勝天然紀念物ニ關シ其ノ現狀ヲ變更シ又ハ其ノ保存ニ影響ヲ及ホスヘキ行爲ヲ爲サシムルコトキハ地方長官ノ許可ヲ受クヘシ

第四條 內務大臣ハ史蹟名勝天然紀念物ノ保存ニ關シ地域ヲ定メテ一定ノ行爲ヲ禁止若ハ制限シ又ハ必要ナル施設ヲ

命スルコトヲ得

前項ノ命令若ハ處分又ハ第二條ノ規定ニ依ル行爲ノ爲損害ヲ被リタル私人ニ對シテハ命令ノ定ムル所ニ依リ政府之ヲ補償ス

第五條 內務大臣ハ地方公共團體ヲ指定シテ史蹟名勝天然紀念物ノ管理ヲ爲サシムルコトヲ得

前項ノ管理ニ要スル費用ハ當該公共團體ノ負擔トス

國庫ハ前項ノ費用ニ對シ其ノ一部ヲ補助スルコトヲ得

第六條 第三條ノ規定ニ違反シ又ハ第四條第一項ノ規定ニ依ル命令ニ違反シタル者ハ六月以下ノ禁錮若ハ拘留又ハ百圓以下ノ罰金若ハ科料ニ處ス

附 則

本法施行ニ關シ必要ナル事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

本法施行ノ期日ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

（大正八年五月勅令第二百六十一號ヲ以テ同年六月一日ヨリ施行）

古社寺保存法第十九條ハ本法施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

史蹟名勝天然紀念物保存

法施行令

大正八年十二月二十九日
勅令第四百九十九號

（改正 大正十三年二五五號、昭和三年二六九號、六年二四〇號）

第一條 當該吏員史蹟名勝天然紀念物保存法第二條ノ規定ニ依ル行爲ヲ爲サシムルコトキハ少クモ三日前ニ關係士

地物件ノ所有者及占有者ニ其ノ旨ヲ通知スヘシ

史蹟名勝天然紀念物保存法第二條ノ規定ニ依ル行爲ヲ爲ス當該吏員ハ其ノ證票ヲ携帶シ關係者ノ請求アリタルトキハ之ヲ示スヘシ

日出前又ハ日沒後ニ於テハ占有者ノ承諾アルニ非サレハ史蹟名勝天然紀念物保存法第二條ノ規定ニ依リ邸内ニ立入ルコトヲ得ス

第二條 行政廳史蹟名勝天然紀念物保存法第三條ニ規定スル行爲ヲ爲サントスルトキハ地方長官ノ承認ヲ受クヘシ

第三條 史蹟名勝天然紀念物保存法第二條ノ規定ニ依リ古墳ヲ發掘スル場合ニ於テハ當該吏員ハ地方長官ヲ經由シ文部大臣ノ認可ヲ受クヘシ

史蹟名勝天然紀念物保存法第三條又ハ前條ノ規定ニ依リ古墳ヲ發掘セムトスル場合ニ於テ地方長官許可又ハ承認ヲ與フルトキハ文部大臣ノ認可ヲ受クヘシ

前二項ノ規定ニ依リ文部大臣認可ヲ爲ス場合ニ於テハ豫メ宮内大臣ニ協議スヘシ

第四條 史蹟名勝天然紀念物保存法第四條第二項ノ規定ニ依ル補償ハ通常生スヘキ損害ニ限リ之ヲ爲ス

前項ノ補償ノ額ハ地方長官ト損害ヲ被リタル私人トノ協議ニ依リ之ヲ定ム協議調ハサルトキハ文部大臣鑑定人ノ意見ヲ徴シ之ヲ決定スヘシ

前項ノ規定ニ依ル決定ニ不服アル者ハ文部大臣ニ訴願スルコトヲ得

第五條 史蹟名勝天然紀念物ニシテ國有地ニ屬スルモノハ文部大臣之ヲ管理ス但シ官用地又ハ國有林ニ屬スルモノニ付テハ主管ノ大臣ト文部大臣ト協議シテ其ノ管理大臣ヲ定ム

第六條 文部大臣ハ史蹟名勝天然紀念物ニシテ國有ニ屬スルモノヨリ生スル收益ヲ管理ノ費用ヲ負擔スル地方公共團體ノ所得ト爲スコトヲ得

第七條 史蹟名勝天然紀念物ノ管理ノ費用ヲ負擔スル地方公共團體ハ其ノ管理スル史蹟名勝天然紀念物ニ付觀覽料ヲ徵收スルコトヲ得

附 則
本令ハ大正九年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

史蹟名勝天然紀念物保存法施行規則

大正八年十二月二十九日
內務省令第二十七號

(改正 昭和三年文部省令一七號)

第一條 文部大臣史蹟名勝天然紀念物ノ指定ヲ爲シ又ハ其ノ指定ヲ解除シタルトキハ官報ヲ以テ之ヲ告示ス地方長官假指定ヲ爲シ又ハ其ノ假指定ヲ解除シタルトキ亦同シ但シ指定セラレタル物ノ保存上必要ト認メタルトキハ告示セサルコトヲ得

第二條 史蹟名勝天然紀念物保存法第四條第一項ノ禁止若ハ制限ヲ爲シタルト

キハ官報ヲ以テ之ヲ告示ス但シ指定セラレタル物ノ保存上必要ト認メタルトキハ告示セサルコトヲ得

第三條 史蹟名勝天然紀念物ノ所有者、管理者又ハ占有者ニ變更アリタルトキハ十日以内ニ新ナル所有者、管理者又ハ占有者ヨリ之ヲ地方長官ニ申告スヘシ

史蹟名勝天然紀念物ノ所有者、管理者又ハ占有者其ノ住所氏名ヲ變更シタルトキハ十日以内ニ之ヲ地方長官ニ申告スヘシ

第四條 土地ノ所有者、管理者又ハ占有者古墳又ハ舊蹟ト認ムヘキモノヲ發見シタルトキハ其ノ現狀ヲ變更スルコトナク發見ノ日ヨリ十日以内ニ左ノ事項ヲ具シテ地方長官ニ申告スヘシ

一 發見ノ年月日
二 所在地
三 現狀

第五條 文部省ニ史蹟名勝天然紀念物ノ臺帳ヲ備フ
第六條 第三條及第四條ノ規定ニ違反シタル者ハ二十圓以下ノ科料ニ處ス

附 則
本則ハ大正九年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

史蹟名勝天然紀念物調査會官制

會官制

昭和十一年十一月十二日
勅令第三百九十七號

第一條 史蹟名勝天然紀念物調査會ハ文

部大臣ノ監督ニ屬シ其ノ諮問ニ應ジテ史蹟名勝天然紀念物ノ保存ニ關スル重要ノ事項ヲ調査審議ス

第二條 調査會ハ會長一人及委員二十人以內ヲ以テ之ヲ組織ス
特別ノ事項ヲ調査審議スル爲必要アルトキハ臨時委員ヲ置クコトヲ得

第三條 會長、委員及臨時委員ハ文部大臣ノ奏請ニ依リ內閣ニ於テ之ヲ命ズ

第四條 會長ハ會務ヲ總理ス
會長事故アルトキハ文部大臣ノ指名スル委員其ノ職務ヲ代理ス

第五條 會長ハ會議ニ於テ意見ヲ陳述シ可否ノ數ニ加ハルコトヲ得

第六條 文部大臣ハ必要ニ依リ又ハ會長ノ請求アルトキハ文部省高等官其ノ他適當ト認ムル者ヲシテ會議ニ出席シ意見ヲ陳述セシムルコトヲ得

第七條 調査會ノ議事ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第八條 調査會ニ幹事ヲ置ク文部大臣ノ奏請ニ依リ內閣ニ於テ之ヲ命ズ
幹事ハ會長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス

第九條 調査會ニ書記ヲ置ク文部大臣之ヲ命ズ
書記ハ上司ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

史蹟名勝天然紀念物調査
會職員

會長

三上 參次

三矢 宮松

渡部 信

諸岡 頭

鑄木外岐雄

荻野仲三郎

辻村 太郎

宮地 直一

安藤狂四郎

和田 英作

中野 治房

内田清之助

村上富士太郎

龍居松之助

三好 學

平泉 澄

黑板 勝美

國府 種德

兒玉 九一

藤野 惠

脇水鐵五郎

松尾 長造

佐竹保治郎

橋本 昂藏

青戸 精一

貴島 圭三

臨時委員
幹事

文部省普通學務局長

文部省宗教局長

陸軍少將

警備官財局書記官

文部書記官

農林技師

朝鮮寶物古蹟名勝天然
紀念物保存

朝鮮寶物古蹟名勝天然記
念物保存令

昭和八年八月九日
制 令 第六號

第一條 建造物、典籍、書蹟、繪畫、彫刻、工藝品其ノ他ノ物件ニシテ特ニ歴史ノ證徴又ハ美術ノ模範ト爲ルベキモノハ朝鮮總督之ヲ寶物トシテ指定スルコトヲ得

貝塚古墳寺址城址竈址其ノ他ノ遺蹟、景勝ノ地又ハ動物植物地質礦物其ノ他學術研究ノ資料ト爲ルベキ物ニシテ保存ノ必要アリト認ムルモノハ朝鮮總督之ヲ古蹟、名勝又ハ天然紀念物トシテ指定スルコトヲ得

第二條 朝鮮總督前條ノ指定ヲ爲サントスルトキハ朝鮮總督府寶物古蹟名勝天然紀念物保存會（以下單ニ保存會ト稱ス）ニ諮問スベシ
前條ノ指定以前ニ於テ急施ヲ要シ保存會ニ諮問スル暇ナシト認ムルトキハ朝鮮總督ハ假ニ指定スルコトヲ得

第三條 朝鮮總督ハ寶物、古蹟、名勝又ハ天然紀念物ニ關スル調査ヲ爲ス爲ニ必要アリト認ムルトキハ當該官吏ヲシテ必要ナル場所ニ立入り、調査ニ必要ナル物件ノ提供ヲ求メ、測量調査ヲ爲シ又ハ土地ノ發掘、障礙物ノ變更除却其

ノ他調査ニ必要ナル行爲ヲ爲サシムルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ當該官吏ハ其ノ身分ヲ證明スベキ證票ヲ携帯スベシ

第四條 寶物ハ之ヲ輸出又ハ移出スルコトヲ得ズ但シ朝鮮總督ノ許可ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラズ
朝鮮總督前項ノ許可ヲ爲サントスルトキハ保存會ニ諮問スベシ

第五條 寶物、古蹟、名勝又ハ天然紀念物ニ關シ其ノ現狀ヲ變更シ又ハ其ノ保存ニ影響ヲ及ボスベキ行爲ヲ爲サントスルトキハ朝鮮總督ノ許可ヲ受クベシ

第六條 朝鮮總督ハ寶物、古蹟、名勝又ハ天然紀念物ノ保存ニ關シ必要アリト認ムルトキハ一定ノ行爲ヲ禁止若ハ制限シ又ハ必要ナル施設ヲ命ズルコトヲ得

前項ノ施設ニ要スル費用ニ對シテハ國庫ヨリ豫算ノ範圍内ニ於テ其ノ一部ヲ補助スルコトヲ得

第七條 朝鮮總督第五條ノ規定ニ依ル許可又ハ前條第一項ノ規定ニ依ル命令ヲ爲サントスルトキハ保存會ニ諮問スベシ但シ輕易ナル事項ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

第八條 寶物ノ所有者ニ付變更アリタルトキハ朝鮮總督ノ定ムル所ニ依リ所有者ヨリ之ヲ朝鮮總督ニ届出ヅベシ寶物滅失又ハ毀損シタルトキ亦同ジ

第九條 寶物ノ所有者ハ朝鮮總督ノ命令ニ依リ一年内ノ期間ヲ限リ李王家、官

立又ハ公立ノ博物館又ハ美術館ニ其ノ寶物ヲ出陳スル義務アルモノトス但シ祭祀法用又ハ公務執行ノ爲ニ必要アルトキ其ノ他已ムコトヲ得ザル事由アルトキハ此ノ限ニ在ラズ

第十條 前條ノ規定ニ依リ寶物ヲ出陳シタル者ニ對シテハ朝鮮總督ノ定ムル所ニ依リ國庫ヨリ補給金ヲ交付スルコトヲ得

第十一條 第三條ノ規定ニ依ル行爲若ハ第六條第一項ノ規定ニ依ル命令ノ爲損害ヲ被リタル者アルトキ又ハ第九條ノ規定ニ依リテ出陳シタル寶物其ノ出陳中不可抗力ニ因ルニ非ズシテ滅失若ハ毀損シタルトキハ朝鮮總督ハ其ノ定ムル所ニ依リ損害ヲ補償スルコトヲ得

第十二條 第九條ノ規定ニ依リテ出陳シタル寶物ニ付其ノ出陳中所有者ノ變更アリタルトキハ新所有者ハ當該寶物ニ關シ本令ニ規定スル舊所有者ノ權利義務ヲ承繼ス

第十三條 朝鮮總督ハ地方公共團體ヲ指定シテ寶物、古蹟、名勝又ハ天然紀念物ノ管理ヲ爲サシムルコトヲ得

前項ノ管理ニ要スル費用ハ當該公共團體ノ負擔トス
前項ノ費用ニ對シテハ國庫ヨリ豫算ノ範圍内ニ於テ其ノ一部ヲ補助スルコトヲ得

第十四條 公益上其ノ他特殊ノ事由ニ依リ必要アリト認ムルトキハ朝鮮總督ハ保存會ニ諮問シ寶物、古蹟、名勝又ハ

天然記念物ノ指定ノ解除ヲ爲スコトヲ得

第十五條 朝鮮總督第一條若ハ第二條第

二項ノ規定ニ依リ指定ヲ爲シ又ハ前條ノ規定ニ依リ指定ノ解除ヲ爲シタルトキハ其ノ定ムル所ニ依リ之ヲ告示シ且當該物件又ハ土地ノ所有者、管理者又ハ占有者ニ通知スベシ但シ指定セラレタル物ノ保存上必要ト認ムルトキハ告示セザルコトヲ得

第十六條 朝鮮總督ハ國ノ所有ニ屬スル

寶物、古蹟、名勝又ハ天然記念物ニ關シ別段ノ定ヲ爲スコトヲ得

第十七條 寺刹ノ所有ニ屬スル寶物ハ之

ヲ差押フルコトヲ得ズ

前項ノ寶物ノ管理ニ關スル事項ハ朝鮮總督之ヲ定ム

第十八條 貝塚、古墳、寺址、城址、窯

址其ノ他ノ遺蹟ト認ムベキモノハ朝鮮總督ノ許可ヲ受クルニ非ザレバ發掘其ノ他現狀ヲ變更スルコトヲ得ズ

前項ノ遺蹟ト認ムベキモノヲ發見シタル者ハ直ニ其ノ旨ヲ朝鮮總督ニ届出ゾベシ

第十九條 朝鮮總督ハ本令ニ規定スル其

ノ職權ノ一部ヲ通知事ニ委任スルコトヲ得

第二十條 朝鮮總督ノ許可ナクシテ寶物

ヲ輸出又ハ移出シタル者ハ五年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ二千圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十一條 寶物ヲ損壞、毀棄又ハ隠匿

處ス

美術關係法規一覽

朝鮮總督府寶物古蹟名勝

天然記念物保存會官制

昭和八年八月八日
勅令第二百二十四號

本令施行ノ期日ハ朝鮮總督之ヲ定ム

附 則

第一條 朝鮮總督府寶物古蹟名勝天然記念物保存會ハ朝鮮總督ノ監督ニ屬シ其ノ諮問ニ應ジテ寶物、古蹟、名勝又ハ天然記念物ノ保存ニ關スル重要ノ事項ヲ調査審議ス

保存會ハ寶物、古蹟、名勝又ハ天然記念物ノ保存ニ關スル事項ニ付朝鮮總督ニ建議スルコトヲ得

第二條 保存會ハ會長一人及委員四十人以內ヲ以テ之ヲ組織ス

特別ノ事項ヲ調査審議スル爲必要アルトキハ臨時委員ヲ置クコトヲ得

第三條 會長ハ朝鮮總督府政務總監ヲ以テ之ニ充ツ

委員及臨時委員ハ朝鮮總督ノ奏請ニ依リ內閣ニ於テ之ヲ命ズ

第四條 會長ハ會務ヲ總理ス

會長事故アルトキハ會長ノ指定シタル委員其ノ職務ヲ代理ス

第五條 保存會ノ議事ニ關スル規則ハ朝鮮總督之ヲ定ム

第六條 保存會ニ幹事ヲ置ク朝鮮總督ノ奏請ニ依リ朝鮮總督府高等官ノ中ヨリ內閣ニ於テ之ヲ命ズ

幹事ハ會長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス

第七條 保存會ニ書記ヲ置ク朝鮮總督府判任官ノ中ヨリ朝鮮總督之ヲ命ズ

書記ハ上司ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

附 則

本令施行ノ期日ハ朝鮮總督之ヲ定ム

朝鮮總督府寶物古蹟名勝

天然記念物保存會職員

會長 大野綠一郎
委員 池内 宏
釜木外岐雄
藤島亥治郎
原田 淑人
濱田 耕作
天沼 俊一
梅原 末治
眞室 亞夫
大竹 十郎
水田 直品
穂積眞六郎
矢島 彬造
鹽原時三郎
三橋孝一郎
吉田 浩
山澤和三郎
藤本 修三
金 大羽
立岩 巖
柳 正秀
崔 南善
田中 豐藏
藤田 亮策
森 爲三
植木 秀幹

(逝去)

三好 學
伊東 忠太
黑板 勝美
小田 省吾
李 能和
鮎貝房之進
小場 恆吉
金 容鎮

著作權保護

著作權法

明治三十三年三月四日
法律第三十九號

(改正明治四三年六三號、大正九年六〇號)
(昭和六年六四號、九年四八號)

著作權法

第一章 著作者ノ權利

第二章 出版權

第三章 偽作

第四章 罰則

第五章 附則

著作權法

第一章 著作者ノ權利

第一條 文書演述圖畫建築彫刻模型寫真

演奏歌唱其ノ他文藝學術若ハ美術(音樂ヲ含ム以下之ニ同ジ)ノ範圍ニ屬ス

ル著作物ノ著作者ハ其ノ著作物ヲ複製

スルノ權利ヲ專有ス

文藝學術ノ著作者ノ著作權ハ翻譯權ヲ

包含シ各種ノ脚本及樂譜ノ著作權ハ興

行權ヲ包含ス

行權ヲ包含ス

第二條 著作權ハ其ノ全部又ハ一部ヲ讓渡スコトヲ得

第三條 發行又ハ興行シタル著作物ノ著作權ハ著作者ノ生存間及其ノ死後三十年間繼續ス

數人ノ合著作ニ係ル著作物ノ著作權ハ最終ニ死亡シタル者ノ死後三十年間繼續ス

第四條 著作者ノ死後發行又ハ興行シタル著作物ノ著作權ハ發行又ハ興行ノ時ヨリ三十年間繼續ス

第五條 無名又ハ變名著作物ノ著作權ハ發行又ハ興行ノトキヨリ三十年間繼續ス但シ其ノ期間内ニ著作者其ノ實名ノ登錄ヲ受ケタルトキハ第三條ノ規定ニ從フ

第六條 官公衙學校社協會會社其ノ他團體ニ於テ著作ノ名義ヲ以テ發行又ハ興行シタル著作物ノ著作權ハ發行又ハ興行ノトキヨリ三十年間繼續ス

第七條 著作權者原著物發行ノトキヨリ十年内ニ其ノ翻譯物ヲ發行セザルトキハ其ノ翻譯權ハ消滅ス

前項ノ期間内ニ著作權者其ノ保護ヲ受ケントスル國語ノ翻譯物ヲ發行シタルトキハ其ノ國語ノ翻譯權ハ消滅セス

第八條 冊號ヲ逐ヒ順次ニ發行スル著作物ニ關シテハ前四條ノ期間ハ每冊若ハ每號發行ノトキヨリ起算ス

一部分ツツヲ漸次ニ發行シ全部完成スル著作物ニ關シテハ前四條ノ期間ハ最終部分ノ發行ノトキヨリ起算ス但シ三

年ヲ經過シ仍繼續ノ部分ヲ發行セサルトキハ既ニ發行シタル部分ヲ以テ最終ノモノト看做ス

第九條 前六條ノ場合ニ於テ著作權ノ期間ヲ計算スルニハ著作者死亡ノ年又ハ著作物ヲ發行又ハ興行シタル年ノ翌年ヨリ起算ス

第十條 相續人ナキ場合ニ於テ著作權ハ消滅ス

第十一條 左ニ記載シタルモノハ著作權ノ目的物ト爲ルコトヲ得ス

一 法律命令及官公文書

二 新聞紙又ハ雜誌ニ掲載シタル雜報及時事ヲ報道スル記事

三 公開セル裁判所、議會並政談集會ニ於テ爲シタル演述

第十二條 無名又ハ變名著作物ノ發行者又ハ興行者ハ著作權者ニ屬スル權利ヲ保全スルコトヲ得但シ著作者ノ實名ノ登錄ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第十三條 數人ノ合著作ニ係ル著作物ノ著作權ハ各著作者ノ共有ニ屬ス

各著作者ノ分擔シタル部分明瞭ナラサル場合ニ於テ著作者中ニ其ノ發行又ハ興行ヲ拒ム者アルトキハ他ノ著作者ハ其ノ者ニ賠償シテ其ノ持分ヲ取得スルコトヲ得但シ反對ノ契約アルトキハ此ノ限ニ在ラス

各著作者ノ分擔シタル部分明瞭ナル場合ニ於テ著作者中ニ其ノ發行又ハ興行ヲ拒ム者アルトキハ他ノ著作者ハ自己ノ部分ヲ分離シ單獨ノ著作物トシテ發

行又ハ興行スルコトヲ得但シ反對ノ契約アルトキハ此ノ限ニ在ラス

本條第二項ノ場合ニ於テハ發行又ハ興行ヲ拒ミタル著作者ノ意ニ反シテ其ノ氏名ヲ其ノ著作物ニ掲グルコトヲ得ス

第十四條 數多ノ著作物ヲ適法ニ編輯シタル者ハ著作者ト看做シ其ノ編輯物全部ニ付テノ著作權ヲ有ス但シ各部ノ著作權ハ其ノ著作者ニ屬ス

第十五條 著作權ノ相續讓渡及質入ハ其ノ登錄ヲ受クルニ非サレハ之ヲ以テ第三者ニ對抗スルコトヲ得ス

無名又ハ變名著作物ノ著作者ハ現ニ其ノ著作權ヲ有スルト否トニ拘ラズ其ノ著作權ヲ有スルト否トニ拘ラズ其ノ著作物ノ著作年月日ノ登錄ヲ受クルコトヲ得

第十六條 登錄ハ行政廳之ヲ行フ

登錄ニ關スル規定ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第十七條 未タ發行又ハ發行セサル著作物ノ原本及其ノ著作權ハ債權者ノ爲ニ差押ヲ受クルコトナシ但シ著作者權者ニ於テ承諾ヲ爲シタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第十八條 他人ノ著作物ヲ發行又ハ興行スル場合ニ於テハ著作者ノ生存中ハ著作者ガ現ニ其ノ著作權ヲ有スルト否トニ拘ラズ其ノ同意ナクシテ著作者ノ氏名稱號ヲ變更若ハ隱匿シ又ハ其ノ著作物ニ改竄其ノ他ノ變更ヲ加ヘ若ハ其ノ

題號ヲ改ムルコトヲ得ズ

他人ノ著作物ヲ發行又ハ興行スル場合ニ於テハ著作ノ死後ハ著作權ノ消滅シタル後ト雖モ其ノ著作物ニ改竄其ノ他ノ變更ヲ加ヘテ著作ノ意ヲ害シ又ハ其ノ題號ヲ改メ若ハ著作ノ氏名稱號ヲ變更若ハ隱匿スルコトヲ得ズ

前二項ノ規定ハ第二十條、第二十條ノ二、第二十二條ノ五第二項、第二十七條第一項第二項、第三十條第一項第二號乃至第九號ノ場合ニ於テモ之ヲ適用ス

第十九條 原著物ニ調點、傍調、句讀、批評、註解、附錄、圖畫ヲ加ヘ又ハ其ノ修正増減ヲ爲シ若ハ翻案シタルカ爲新ニ著作權ヲ生スルコトナシ但シ新著作物ト看做サルヘキモノハ此ノ限ニ在ラス

第二十條 新聞紙又ハ雜誌ニ掲載シタル政治上ノ時事問題ヲ論議シタル記事(學術上ノ著作物ヲ除ク)ハ特ニ轉載ヲ禁ズル旨ノ明記ナキトキハ其ノ出所ヲ明示シテ之ヲ他ノ新聞紙又ハ雜誌ニ轉載スル事ヲ得

第二十二條ノ二 時事問題ニ付テノ公開演述ハ著作ノ氏名、演述ノ時及場所ヲ明示シテ之ヲ新聞紙又ハ雜誌ニ掲載スルコトヲ得但シ同一著作ノ演述ヲ蒐輯スル場合ハ其ノ著作ノ許諾ヲ受クルコトヲ要ス

第二十一條 翻譯者ハ著作ト看做シ本法ノ保護ヲ享有ス但シ原著者ノ權利

ハ之カ爲ニ妨ケラルルコトナシ

第二十二條 原著物ト異リタル技術ニ依リ適法ニ美術上ノ著作物ヲ複製シタル者ハ著作ト看做シ本法ノ保護ヲ享有ス

第二十二條ノ二 文藝、學術又ハ美術ノ範圍ニ屬スル著作物ノ著作權ハ其ノ著作物ヲ活動寫眞術又ハ之ト類似ノ方法ニ依リ複製(脚色シテ映畫ト爲ス場合ヲ含ム)シ又興行スルノ權利ヲ包含ス

第二十二條ノ三 活動寫眞術又ハ之ト類似ノ方法ニ依リ製作シタル著作物ノ著作ハ文藝、學術又ハ美術ノ範圍ニ屬スル著作物ノ著作トシテ本法ノ保護ヲ享有ス其ノ保護ノ期間ニ付テハ獨創性ヲ有スルモノニ在リテハ第三條乃至第六條及第九條ノ規定ヲ適用シ之ヲ缺クモノニ在リテハ第二十三條ノ規定ヲ適用ス

第二十二條ノ四 他人ノ著作物ヲ活動寫眞術又ハ之ト類似ノ方法ニ依リ複製(脚色シテ映畫ト爲ス場合ヲ含ム)シタル者ハ著作ト看做シ本法ノ保護ヲ享有ス但シ原著者ノ權利ハ之カ爲ニ妨ケラルルコトナシ

第二十二條ノ五 文藝、學術又ハ美術ノ範圍ニ屬スル著作物ノ著作權ハ其ノ著作物ノ無線電話ニ依リ放送ヲ許諾スルノ權利ヲ包含ス
無線電信法及之ニ基キ發スル命令ニ依リ主務大臣ノ許可ヲ受ケタル放送無線電話施設者ハ既ニ發行又ハ興行シタル

他人ノ著作物ヲ放送セントスルトキハ著作權者ト協議ヲ爲スコトヲ要ス協議調ハザルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リ主務大臣ノ定ムル相當ノ償金ヲ支拂ヒ其ノ著作物ヲ放送スルコトヲ得

前項ノ償金ノ額ニ付異議アル者ハ民事裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第二十二條ノ六 文藝、學術又ハ美術ノ範圍ニ屬スル著作物ノ著作權ハ其ノ著作物ヲ音ヲ機械的ニ複製スルノ用ニ供スル機器ニ寫調シ及其ノ機器ニ依リ興行スルノ權利ヲ包含ス

第二十二條ノ七 音ヲ機械的ニ複製スルノ用ニ供スル機器ニ他人ノ著作物ヲ適法ニ寫調シタル者ハ著作ト看做シ其ノ機器ニ付テノ著作權ヲ有ス

第二十三條 寫眞著作權ハ十年間繼續ス前項ノ期間ハ其ノ著作物ヲ始メテ發行シタル年ノ翌年ヨリ起算ス若シ發行セサルトキハ種板ヲ製作シタル年ノ翌年ヨリ起算ス

寫眞術ニ依リ適法ニ美術上ノ著作物ヲ複製シタル者ハ原著物ノ著作權ト同一ノ期間内本法ノ保護ヲ享有ス但シ當事者間ニ契約アルトキハ其ノ契約ノ制限ニ從フ
第二十四條 文藝學術ノ著作物ニ挿入シタル寫眞ニシテ特ニ其ノ著作物ノ爲ニ著作シ又ハ著作セシメタルモノナルトキハ其ノ著作權ハ文藝學術ノ著作物ノ著作權ニ屬シ其ノ著作權ト同一ノ期間内繼續ス

第二十五條 他人ノ囑托ニ依リ著作シタル寫眞肖像ノ著作權ハ其ノ囑托者ニ屬ス

第二十六條 寫眞ニ關スル規定ハ寫眞術ト類似ノ方法ニ依リ製作シタル著作物ニ準用ス

第二十七條 著作權者ノ不明ナル著作物ニシテ未タ發行又ハ興行セサルモノハ命令ノ定ムル所ニ依リ之ヲ發行又ハ興行スルコトヲ得

著作權者ノ居所不明ナル場合其ノ他命令ノ定ムル事由ニ因リ著作權者ト協議スルコト能ハザルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リ主務大臣ノ定ムル相當ノ償金ヲ供託シテ其ノ著作物ヲ發行又ハ興行スルコトヲ得

前項ノ償金ノ額ニ付異議アル者ハ民事裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第二十八條 外國人ノ著作權ニ付テハ條約ニ別段ノ規定アルモノヲ除ク外本法ノ規定ヲ適用ス但シ著作權保護ニ關シ條約ニ規定ナキ場合ニハ帝國ニ於テ始メテ其ノ著作物ヲ發行シタル者ニ限り本法ノ保護ヲ享有ス

第二章 出版權

第二十八條ノ二 著作權者ハ其ノ著作物ヲ文書又ハ圖畫トシテ出版スルコトヲ引受クル者ニ對シ出版權ヲ設定スルコトヲ得

第二十八條ノ三 出版權者ハ設定行爲ノ定ムル所ニ依リ出版權ノ目的タル著作物ヲ原作ノ儘印刷術其ノ他ノ機械的又

ハ化學的方法ニ依リ文書又ハ圖畫トシテ複製シ之ヲ發賣頒布スルノ權利ヲ專有ス但シ著作權者タル著作ノ死亡シタルトキ又ハ設定行爲ニ別段ノ定ナキ場合ニ於テ出版權ノ設定アリタル後三年ヲ經過シタルキトハ著作權者ハ著作物ヲ全其ノ他ノ編輯物ニ輯録シ又ハ全其ノ他ノ編輯物ノ一部ヲ分離シテ別途ニ之ヲ出版スルコトヲ妨グズ

第二十八條ノ四 出版權ハ設定行爲ニ別段ノ定ナキトキハ其ノ設定アリタルトキヨリ三年間存続ス

第二十八條ノ五 出版權者ハ出版權ノ設定アリタルトキヨリ三月以内ニ著作物ヲ出版スルノ義務ヲ負フ但シ設定行爲ニ別段ノ定アルトキハ此ノ限ニ在ラズ

出版權者ガ前項ノ義務ニ違反シタルトキハ著作權者ハ出版權ノ消滅ヲ請求スルコトヲ得

第二十八條ノ六 出版權者ハ著作物ヲ繼續シテ出版スルノ義務ヲ負フ但シ設定行爲ニ別段ノ定アルトキハ此ノ限ニ在ラズ

出版權者ガ前項ノ義務ニ違反シタルトキハ著作權者ハ三月以上ノ期間ヲ定メテ其ノ履行ヲ催告シ其ノ期間内ニ履行ナキトキハ出版權ノ消滅ヲ請求スルコトヲ得

第二十八條ノ七 著作權者ハ出版權者ガ著作物ノ各版ノ複製ヲ完了スルニ至ル迄其ノ著作物ニ正當ノ範圍内ニ於テ修正増減ヲ加フルコトヲ得

出版權者ガ著作物ヲ再版スル場合ニ於

テハ其ノ都度豫メ著作權者ニ其ノ旨ヲ通知スルコトヲ要ス

第二十八條ノ八 著作權者ハ其ノ著作物ノ出版ヲ廢絶スル爲何時ニテモ損害ヲ賠償シテ出版權ノ消滅ヲ請求スル事ヲ得

第二十八條ノ九 出版權ハ著作權者ノ同意ヲ得テ其ノ讓渡又ハ質入ヲ爲スコトヲ得

第二十八條ノ十 出版權ノ得喪、變更及質入ハ其ノ登錄ヲ受クルニ非ザレバ之ヲ以テ第三者ニ對抗スルコトヲ得ズ

第十六條ノ規定ハ出版權ノ登錄ニ付之ヲ準用ス

第二十八條ノ十一 出版權ノ侵害ニ付テハ本法中第三十四條及第三十六條ノ二ノ規定ヲ除クノ外偽作ニ關スル規定ヲ準用ス

第三章 偽作

第二十九條 著作權ヲ侵害シタル者ハ偽作者トシ本法ニ規定シタルモノノ外民法第三編第五章ノ規程ニ從ヒ之ニ因リテ生シタル損害ヲ賠償スルノ責ニ任ス

第三十條 既ニ發行シタル著作物ヲ左ノ方法ニ依リ複製スルハ偽作ト看做サス

第一 發行スルノ意思ナク且器械的又ハ化學的方法ニ依ラスシテ複製スルコト

第二 自己ノ著作物中ニ正當ノ範圍内ニ於テ節録引用スルコト

第三 普通教育上ノ修身書及讀本ノ目的ニ供スル爲ニ正當ノ範圍内ニ於テ

拔萃蒐輯スルコト

第四 文藝學術ノ著作物ノ文句ヲ自己ノ著作シタル脚本ニ挿入シ又ハ樂譜ニ充用スルコト

第五 文藝學術ノ著作物ヲ説明スルノ材料トシテ美術上ノ著作物ヲ挿入シ又ハ美術上ノ著作物ヲ説明スルノ材料トシテ文藝學術ノ著作物ヲ挿入スルコト

第六 圖畫ヲ彫刻物模型ニ作リ又ハ彫刻物模型ヲ圖畫ニ作ルコト

第七 脚本又ハ樂譜ヲ收益ヲ目的トセズ且出演者ガ報酬ヲ受ケザル興行ノ用ニ供シ又ハ其ノ興行ヲ放送スルコト

第八 音ヲ機械的ニ複製スルノ用ニ供スル機器ニ著作物ノ適法ニ寫調セラレタルモノヲ興行又ハ放送ノ用ニ供スルコト

第九 専ラ官廳ノ用ニ供スル爲複製スルコト

本條ノ場合ニ於テハ其ノ出所ヲ明示スルコトヲ要ス

第三十一條 帝國ニ於テ發賣頒布スルノ目的ヲ以テ偽作物ヲ輸入スル者ハ偽作者ト看做ス

第三十二條 練習用ノ爲ニ著作シタル問題ノ解答書ヲ發行スル者ハ偽作者ト看做ス

第三十三條 善意ニシテ且過失ナク偽作ヲ爲シテ利益ヲ受ケ之カ爲ニ他人ニ損失ヲ及ホシタル者ハ其ノ利益ノ存スル

限度ニ於テ之ヲ返還スル義務ヲ負フ

第三十四條 數人ノ合著作ニ係ル著作物ノ著作權者ハ偽作ニ對シ他ノ著作權者ノ同意ナクシテ告訴ヲ爲シ及自己ノ持分ニ對スル損害ノ賠償ヲ請求シ又ハ自己ノ持分ニ應ジテ前條ノ利益ノ返還ヲ請求スルコトヲ得

第三十五條 偽作ニ對シ民事ノ訴訟ヲ提起スル場合ニ於テハ既ニ發行シタル著作物ニ於テ其ノ著作權者トシテ氏名ヲ掲ケタル者ヲ以テ其ノ著作權者ト推定ス

無名又ハ變名著作物ニ於テハ其ノ著作物ニ發行者トシテ氏名ヲ掲ケタル者ヲ以テ其ノ發行者ト推定ス

未タ發行セサル脚本、樂譜及活動寫眞術又ハ之ト類似ノ方法ニ依リ製作シタル著作物ノ興行ニ關シテハ其ノ興行ニ著作權者トシテ氏名ヲ顯ハシタル者ヲ以テ其ノ著作權者ト推定ス

著作權者ノ氏名ヲ顯ハササルトキハ其ノ興行者ヲ以テ其ノ著作權者ト推定ス

第十五條第三項ノ規定ニ依リ著作年月日ノ登錄ヲ受ケタル著作物ニ在リテハ其ノ年月日ヲ以テ著作ノ年月日ト推定ス

第三十六條 偽作ニ關シ民事ノ出訴又ハ刑事ノ起訴アリタルトキハ裁判所ハ原告又ハ告訴人ノ申請ニ依リ保證ヲ立テシメ又ハ立テシメスシテ假ニ偽作ノ疑アル著作物ノ發賣頒布ヲ差止メ若ハ之ヲ差押ヘ又ハ其ノ興行ヲ差止ムルコトヲ得

前項の場合ニ於テ偽作ニ非サル旨ノ判決確定シタルトキハ申請者ハ差止又ハ差押ヨリ生シタル損害ヲ賠償スルノ責ニ任ス

第三十六條ノ二 第十八條ノ規定ニ違反シタル行為ヲ爲シタル者ニ對シテハ著作ハ著作タルコトヲ確保シ又ハ訂正其ノ他其ノ聲望名譽ヲ回復スルニ適當ナル處分ヲ請求シ及民法第三編第五章ノ規程ニ從ヒ損害ノ賠償ヲ請求スルコトヲ得

第十八條ノ規定ニ違反シタル行為ヲ爲シタル者ニ對シテハ著作ノ死後ニ於テハ著作ノ親族ニ於テ其ノ著作タルコトヲ確保シ又ハ訂正其ノ他其ノ聲望名譽ヲ回復スルニ適當ナル處分ヲ請求スルコトヲ得

前二項ノ規定ニ依ル民事ノ訴訟ニ付テハ前二條ノ規定ヲ準用ス

第三十六條ノ三 本法ノ規定ニ依ル登錄、第二十二條ノ五第二項若ハ第二十七條第二項ノ規定ニ依ル償金ノ額又ハ著作ニ關スル一般ノ事項ニ付主務大臣ノ諮問ニ應ジ又ハ此等ノ事項ニ付調査審議スル爲メ著作權審査會ヲ置ク著作權審査會ノ組織ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第四章 罰則

第三十七條 偽作ヲ爲シタル者及情ヲ知テ偽作物ヲ發賣シ又ハ頒布シタル者ハ五十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十八條 第十八條ノ規定ニ違反シタル者ハ三十圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス

處ス

第三十九條 第二十條、第二十條ノ二及第三十條第二項ノ規定ニ違反シ出所ヲ明示セスシテ複製シタル者並第十三條第四項ノ規定ニ違反シタル者ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

第四十條 著作人ニ非サル者ノ氏名稱號ヲ附シテ著作物ヲ發行シタル者ハ三十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第四十一條 (削除)

第四十二條 虛偽ノ登錄ヲ受ケタル者ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

第四十三條 偽作物及専ラ偽作ノ用ニ供シタル器械器具ハ偽作者、印刷者、發賣者及頒布者ノ所有ニ在ル限り之ヲ沒收ス

第四十四條 本章ニ規定シタル罪ハ被害者ノ告訴ヲ待テ其ノ罪ヲ論ス但シ第三十八條ノ場合ニ於テ著作ノ死亡シタルトキ並第四十條乃至第四十二條ノ場合ハ此ノ限ニ在ラズ

第四十五條 本章ノ罪ニ對スル公訴ノ時效ハ二年ヲ經過スルニ因リテ完成ス

第五章 附則

第四十六條 本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム(明治三十二年六月二十八日勅令第三百十三號ヲ以テ同年七月十五日ヨリ施行)

明治二十六年法律第十六號版權法明治二十年勅令第七十八號脚本樂譜條例明治二十年勅令第七十九號寫眞版權條例ハ本法施行ノ日ヨリ廢止ス

第四十七條 本法施行前ニ著作權ノ消滅

セサル著作物ハ本法施行ノ日ヨリ本法ノ保護ヲ享有ス

第四十八條 本法施行前偽作ト認メラレサリシ複製物ニシテ既ニ複製シタルモノ又ハ複製ニ著手シタルモノハ之ヲ完成シテ發賣頒布スルコトヲ得

前項ノ複製ノ用ニ供シタル器械器具ノ現存スルトキハ本法施行後五年間仍其ノ複製ノ爲メ之ヲ使用スルコトヲ得

第四十九條 本法施行前翻譯シ又ハ翻譯ニ著手シ其ノ當時ニ於テ偽作ト認メラレサリシモノハ之ヲ完成シテ發賣頒布スルコトヲ得

但シ其ノ翻譯物ハ本法施行後七年間ニ發行スルコトヲ要ス

前項ノ翻譯物ハ發行後五年間仍之ヲ複製スルコトヲ得

第五十條 本法施行前既ニ興行シ若ハ興行ニ著手シ其ノ當時ニ於テ偽作ト認メラレサリシモノハ本法施行後五年間仍之ヲ興行スルコトヲ得

第五十一條 第四十八條乃至第五十條ノ場合ニ於テハ命令ノ定ムル手續ヲ履行スルニ非サレハ其ノ複製物ヲ發賣頒布シ又ハ興行スルコトヲ得ス

附則

(昭和九年法律第四十八號)

本法施行ノ期日ハ各規定ニ付勅令ヲ以テ之ヲ定ム(昭和十年勅令第百八十九號ヲ以テ同年七月十五日ヨリ施行)

登錄稅法第十條第四號ノ二ノ次ニ左ノ四號ヲ加フ

- | | | |
|------------|--------------------------------|-------------|
| 四ノ三 | 滯納處分以外ノ原因ニ因ル第一號及第二號ノ權利ノ處分ノ制限 | 債權金額 千分ノ四 |
| 四ノ四 | 著作年月日ノ登錄 | 每一件 金一圓 |
| 四ノ五 | 抹消シタル登錄ノ回復 | 每一件 金五十錢 |
| 四ノ六 | 假登錄 | 每一件 金五十錢 |
| 同法ニ左ノ一條ヲ加フ | | |
| 第十條ノ二 | 出版權ニ關シ登錄ヲ受ケルトキハ左ノ區別ニ從ヒ登錄稅ヲ納ムベシ | |
| 一 | 出版權ノ設定 | 每一件 金十圓 |
| 二 | 出版權ノ移轉 | 每一件 金一圓 |
| 三 | 出版權ノ移轉 | 每一件 金一圓 |
| 三 | 出版權ノ目的トスル質權ノ設定 | 債權金額 千分ノ五・五 |
| 四 | 前號ノ權利ノ移轉 | 每一件 金五十錢 |
| 四 | 相續 | 每一件 金一圓 |
| 四 | 相續以外ノ原因ニ因ル移轉 | 每一件 金一圓 |
| 五 | 信託ノ登錄 | 每一件 金一圓 |
| 六 | 滯納處分以外ノ原因ニ因ル第一號乃至第三號ノ權利ノ處分ノ制限 | 債權金額千分ノ四 |
| 七 | 抹消シタル登錄ノ回復 | 每一件 金五十錢 |
| 八 | 假登錄 | 每一件 金五十錢 |

九 登錄ノ更正、變更又ハ抹消

每一件 金二十錢

(備考) 昭和六年法律第六十四號ハ昭和六年八月一日ヨリ之ヲ施行ス

著作權審查會官制

昭和十年七月八日
勅令第九十一號

第一條 著作權審查會ハ內務大臣ノ監督

ニ屬シ著作權法ノ規定ニ依ル登錄、同法第二十二條ノ五第二項若ハ第二十七條第二項ノ規定ニ依ル償金ノ額又ハ著作ニ關スル一般ノ事項ニ付內務大臣ノ諮問ニ應ジ又ハ此等ノ事項ニ付調査審議ス

第二條 審查會ハ會長一人及委員二十五人以內ヲ以テ之ヲ組織ス
前項定員ノ外必要アルトキハ臨時委員ヲ置クコトヲ得

第三條 會長ハ內務大臣ヲ以テ之ニ充ツ

第四條 委員及臨時委員ハ內務大臣ノ奏請ニ依リ關係各廳高等官及學識經驗アル者ノ中ヨリ內閣ニ於テ之ヲ命ズ
委員ノ任期ハ二年トス但シ特別ノ事由アル場合ニ於テハ任期中之ヲ解任スルコトヲ妨ゲズ

第五條 會長ハ會務ヲ總理ス
會長事故アルトキハ內務大臣ノ指名スル委員其ノ職務ヲ代理ス

第六條 審查會ニ幹事ヲ置ク內務大臣ノ奏請ニ依リ內閣ニ於テ之ヲ命ズ
幹事ハ會長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス

第七條 審查會ニ書記ヲ置ク內務大臣之ヲ命ズ

書記ハ會長及幹事ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

附 則

本令ハ昭和十年七月十五日ヨリ之ヲ施行ス

著作權審查會職員

會長
委員

外務省條約局長
司法省民事局長
文部省專門學務局長 男
東京音樂學校長

末次 信正
三谷 隆信
大森 洪太
山川 健
乘杉 嘉壽
水野鍊太郎
穗積 重遠
大養 健
和田 英作
横山 秀磨
徳田 末雄
菊池 寛
近衛 秀磨
三島 通陽
赤木 朝治
岸田 國士
榛村 專一
江草 重忠
小野賢一郎
武藤 與一
野間 清治
山田 耕柞
小林 一三

幹事

城戸 四郎
松平 康東
大坪 保雄
國鹽耕一郎
辻 朝郎
文部書記官 本田 弘人

改正ベルヌ條約

昭和六年七月十七日
條約 第四號

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ昭和三年六月二日「ローマ」ニ於テ帝國全權委員ガ關係各國全權委員ト共ニ署名シタル千九百八年十一月十三日「ベルリン」ニ於テ及千九百二十八年六月二日「ローマ」ニ於テ改正セラレタル千八百八十六年九月九日ノ「ベルヌ」條約ヲ批准シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名御璽

昭和六年七月十七日

內閣總理大臣男爵若槻禮次郎

外務大臣男爵幣原喜重郎

內務大臣 安達 謙藏

條約第四號

千九百八十八年十一月十三日「ベルリン」

ニ於テ及千九百二十八年六月二日

「ローマ」ニ於テ改正セラレタル千

八百八十六年九月九日ノ文學的及美

術的著作物保護ニ關スル「ベルヌ」

條約

獨逸國大統領、埃太利共和國聯邦大統領、白耳義國皇帝陛下、「ブラジル」合衆國大統領、「ブルガリア」國皇帝陛下、丁

抹國皇帝陛下、西班牙國皇帝陛下、「エストニア」共和國大統領、「フィンランド」共和國大統領、佛蘭西共和國大統領、「グレート、ブリテン」、「アイスランド」及「グレート、ブリテン」海外領土皇帝印度皇帝陛下、希臘共和國大統領、「ハンガリー」國攝政殿下、伊太利國皇帝陛下、日本國皇帝陛下、「ルクセンブルグ」國大公殿下、「モロッコ」國皇帝陛下、「モナコ」國公殿下、諸威國皇帝陛下、和蘭國皇帝陛下、「ポーランド」國及「ダンチツヒ」自由市ノ名ニ於ケル「ポーランド」共和國大統領、「ポルトガル」共和國大統領、「ルーマニア」國皇帝陛下、瑞典國皇帝陛下、瑞西聯邦政府、「シリア」國及「ダレイト、レバノン」國、「チエツコスロヴァキヤ」共和國大統領、「テュニス」國公殿下ハ

文學的及美術的著作物ニ關シ著作權ノ權利ヲ能フ限り有效且均等ノ方法ヲ以テ保護センコトヲ均シク希望シ

千九百八十八年十一月十三日「ベルリン」ニ於テ署名セラレタル條約ヲ改正シ且補足スルコトニ決シ之ガ爲各左ノ如ク其ノ全權委員ヲ任命セリ

(全權委員氏名省略)

各全權委員ハ之ガ正當ナル委任ヲ受ケ左ノ如ク協定セリ

第一條

本條約ノ適用セラルル國ハ文學的及美術的著作物ニ關スル著作權ノ權利ノ保護ノ爲同盟ヲ組織ス

第二條

(一) 「文學的及美術的著作物」ナル用語ハ表現ノ方法又ハ形式ノ如何ヲ問ハズ

書籍、小冊子及其ノ他ノ文書、講演、演説、説教及其ノ他同性質ノ著作物、演劇脚本、樂譜入演劇脚本、演出ガ文書其ノ他ノ方法ヲ以テ定メラレタル舞譜及無言劇、歌詞入り又ハ歌詞ナシノ樂譜、素描、繪畫、建築、彫刻、銅版及石版ノ著作物、圖解及地圖、地理學、地形學、建築學又ハ科學ニ關スル圖面、略圖及模型ノ如キ文藝、學術及美術ノ範圍ニ屬スル一切ノ製作物ヲ包含ス

(二) 翻譯、翻案、編曲及其ノ他文學的又ハ美術的著作物ノ變形複製物並ニ異リタル著作物ノ編輯物ハ原作物ノ著作者ノ權利ヲ害セザル範圍内ニ於テ原著作物トシテ保護セラルベキモノトス

(三) 同盟國ハ前記著作物ノ保護ヲ確保スベキ義務ヲ有ス

(四) 工業ニ應用セラレタル美術的著作物ハ各國ノ國內法ノ認ムル限り保護セラルベキモノトス

第二條ノ二

(一) 政治演説及裁判所ニ於ケル辯論中ニ爲サレタル演説ヲ前條ニ定ムル保護ヨリ一部又ハ全部排除スルノ權能ハ同盟各國ノ國內法ニ留保セラル

(二) 講演、演説、説教及其ノ他同性質ノ著作物ヲ新聞紙雜誌ニ複製スルコトヲ得ル條件ヲ規定スルノ權能モ亦同盟各國ノ國內法ニ留保セラル尤モ前記著作

物ヲ編輯物ト爲スノ權利ハ著作者ニ限リ之ヲ有スベシ

第三條

本條約ハ寫眞的著作物及寫眞術ト類似ノ方法ヲ以テ作リタル著作物ニ之ヲ適用ス同盟國ハ之ガ保護ヲ確保スベキ義務ヲ有ス

第四條

(一) 同盟ノ一國ニ屬スル著作者ハ公ニセザル又ハ同盟ノ一國ニ於テ初テ公ニシタル著作物ニ關シ著作物ノ本國以外ノ國ニ於テ、其ノ國法ガ内國民ニ現ニ許與シ又ハ將來許與スベキ權利及本條約ニ依リ特ニ許與セラレタル權利ヲ享有ス

(二) 右權利ノ享有及行使ハ何等方式ノ履行ヲ要セズ其ノ享有及行使ハ著作物ノ本國ニ於ケル保護ノ存在ニ係ルコトナシ從テ本條約ノ規定ノ外保護ノ範圍及著作者ノ權利保全ノ爲右著作者ニ保障セラレタル救済ノ方法ハ保護ノ要求セラルル國ノ法律ニ専ラ依ルベキモノトス

(三) 公ニセザル著作物ニ關シテハ著作者ノ屬スル國ヲ以テ著作物ノ本國トシ公ニシタル著作物ニ關シテハ第一發行ノ國ヲ以テ本國トシ同盟ノ數國ニ於テ同時ニ公ニシタル著作物ニ關シテハ右諸國ノ中其ノ國法ノ許與スル保護ノ期間最短期間ヲ以テ其ノ本國トス同盟ニ屬セザル一國ト同盟ノ一國トニ於テ同時ニ公ニシタル著作物ニ關シテハ同盟國

ノミヲ以テ本國トス

(四) 「公ニシタル著作物」トハ本條約ノ意義ニ於テハ刊行シタル著作物ヲ謂フ演劇脚本又ハ樂譜入演劇脚本ノ上演、音樂的著作物ノ演奏、美術的著作物ノ展覽及建築的著作物ノ建設ハ公ニスルノ意味ニ非ザルモノトス

第五條

同盟ノ一國ニ屬スル者ニシテ同盟ノ他ノ一國ニ於テ初テ其ノ著作物ヲ公ニシタルモノハ其ノ國ニ於テ内國著作者ト同一ノ權利ヲ有ス

第六條

(一) 同盟ノ一國ニ屬セザル著作者ニシテ同盟ノ一國ニ於テ初テ其ノ著作物ヲ公ニシタルモノハ其ノ國ニ於テハ内國著作者ト同一ノ權利ヲ享有シ同盟ノ他ノ諸國ニ於テハ本條約ノ許與スル權利ヲ享有ス

(二) 尤モ同盟ニ屬セザル國ガ同盟ノ一國ニ屬スル著作者ノ著作物ニ對シ充分ノ保護ヲ與ヘザルトキハ該同盟國ハ著作物ノ第一發行ノ當時該非同盟國ニ屬シ且同盟ノ一國ニ於テ現實ノ住所ヲ有セザル著作者ノ右著作物ノ保護ヲ制限スルコトヲ得ベシ

(三) 前項ニ基キ規定セラレタル如何ナル制限モ著作者ガ右制限ノ實施前同盟ノ一國ニ於テ公ニシタル著作物ニ關シ既ニ取得シタル權利ヲ妨グルコトナカルベシ

(四) 本條ニ基キ著作者ノ權利ノ保護ヲ制

限スベキ同盟國ハ右保護ノ制限ヲ受クベキ國及該國ニ屬スル著作者ノ權利ニ加フル制限ヲ示セル宣言書ヲ以テ其ノ旨ヲ瑞西聯邦政府ニ通告スベシ瑞西聯邦政府ハ直ニ右ノ事實ヲ同盟ノ一切ノ國ニ通知スベシ

第六條ノ二

(一) 著作者ノ財産的權利ニ係ルコトナク且該權利ノ移轉後ト雖モ著作者ハ著作物ノ創作タルコトヲ主張スルノ權利及右著作物ノ改竄、截除又ハ其ノ他ノ變更ニシテ著作者ノ名譽又ハ聲望ヲ害スルコトアルベキモノニ對シテ異議ヲ述ブルノ權利ヲ保有ス

(二) 右權利行使ノ條件ヲ定ムルコトハ同盟國ノ國內法ニ留保セラル右權利保全ノ爲ニスル救済ノ方法ハ保護ノ要求セラルル國ノ法律ニ依ルベキモノトス

第七條

(一) 本條約ニ依リ許與セラルル保護ノ期間ハ著作者ノ生存間及其ノ死後五十年トス

(二) 尤モ前項ノ期間ガ同盟ノ一切ノ國ニ依リ等シク採用セラレザル場合ニ於テハ保護ノ期間ハ保護ノ要求セラルル國ノ法律ニ依ルベク且著作物ノ本國ニ於テ定メラレタル期間ヲ超過スルコトヲ得ザルベシ從テ同盟國ハ其ノ國內法ニ合致スル範圍内ニ非ザレバ前項ノ規定ヲ適用スルヲ要セザルベシ

(三) 寫眞的著作物及寫眞術ト類似ノ方法ヲ以テ作リタル著作物、遺著、無名又

ハ變名著作物ニ關シテハ保護ノ期間ハ保護ノ要求セラルル國ノ法律ニ依ルモノトス但シ著作物ノ本國ニ於テ定メラレタル期間ヲ超過スルコトヲ得ズ

第七條ノ二

(一) 著作物ノ合著作者ノ共有ニ屬スル著作物ノ權利ノ期間ハ合著作者中最終ノ生存者ノ死亡ノ日ニ依リテ計算セラル

(二) 第一項ニ定ムル保護ノ期間ヨリ短キ保護ノ期間ヲ許與スル國ニ屬スル者ハ同盟ノ他ノ諸國ニ於テ之ヨリ長キ期間ノ保護ヲ要求スルコトヲ得ズ

(三) 如何ナル場合ニ於テモ保護ノ期間ハ合著作者中最終ノ生存者ノ死亡前ニ滿了スルコトヲ得ザルベシ

第八條

公ニセザル著作物ノ著作權ニシテ同盟ノ一國ニ屬スルモノ及同盟ノ一國ニ於テ初テ公ニシタル著作物ノ著作權ハ原著作物ニ關スル權利ノ全存續期間中同盟ノ他ノ諸國ニ於テ其ノ著作物ノ翻譯ヲ爲シ又ハ之ヲ許諾スルノ特權ヲ享有ス

第九條

(一) 同盟ノ一國ノ新聞紙又ハ定期編輯中ニ於テ公ニシタル新聞小説、讀物及其ノ他題材ノ如何ヲ問ハズ文藝、學術又ハ美術ノ一切ノ著作物ハ著作權ノ承認アルニ非ザレバ他國ニ於テ之ヲ複製スルコトヲ得ズ

(二) 經濟上、政治上又ハ宗教上ノ時事問題ヲ論議シタル記事ハ其ノ轉載ガ明白ニ留保セラレザルトキハ新聞紙雜誌ニ

之ヲ轉載スルコトヲ得但シ其ノ出所ハ常ニ之ヲ明瞭ニ示スヲ要ス此ノ義務ノ制裁ハ保護ノ要求セラルル國ノ法律ニ依リテ之ヲ定ム

(三) 本條約ノ保護ハ時事ノ記事又ハ單一新聞紙雜誌ノ報道ニ過ギザル雜報ニハ之ヲ適用セズ

第十條

教科用ニ供シ若ハ學術的ノ性質ヲ有スル刊行物ノ爲又ハ節用編輯ノ爲ニ文學的又ハ美術的著作物ヲ適法ニ引用スルノ權能ニ關シテハ同盟國ノ法律及同盟國間ニ現存シ又ハ將來締結スベキ特別ノ取極ノ定ムル所ニ依ル

第十一條

(一) 本條約ノ規定ハ公ニシタルモノト否トヲ問ハズ演劇脚本又ハ樂譜入演劇脚本ノ公ノ上演及音樂的著作物ノ公ノ演奏ニ之ヲ適用ス

(二) 演劇脚本又ハ樂譜入演劇脚本ノ著作權ハ原著作物ニ關スル其ノ權利ノ存續期間内ハ其ノ翻譯物ノ許諾ナキ公ノ上演ニ對シテ保護セラルルモノトス

(三) 本條ノ保護ヲ享有スルガ爲ニハ著作權者ハ其ノ著作物ヲ公ニスル際シ其ノ公ノ上演又ハ公ノ演奏ヲ禁止スルコトヲ要セズ

第十一條ノ二

(一) 文學的及美術的著作物ノ著作權ハ其ノ著作物ヲ無線放送ニ依リテ公衆ニ傳フルコトヲ許諾スルノ特權ヲ享有ス

(二) 前項ニ掲グル權利ヲ行使スルノ條件

ハ同盟國ノ國內法ノ規定スル所ニ依ル但シ右條件ハ之ヲ規定セル國ニ於テノミ效力ヲ有スベシ右條件ハ如何ナル場合ニ於テモ著作權者ノ人格權ヲモ又協議調ハザル場合ニ於テ權限アル機關ノ定ムル公正ナル補償ヲ受クル著作權者ノ權利ヲ侵害スルコトヲ得ザルベシ

第十二條

縮案、編曲及小説、讀物又ハ詩歌ト演劇脚本トノ相互ノ變作等ノ如キ文學的又ハ美術的著作物ノ許諾ナキ間接ノ轉用ガ同一ノ形態又ハ他ノ形態ニ於ケル右著作物ノ複製ニシテ主要ナルラザル變更、增補又ハ省略ヲ爲シ且新ナル原著作物タル性質ヲ具備セザルモノニ過ギザルトキハ本條約ヲ適用スベキ不法複製中ニ之ヲ特ニ包含スルモノトス

第十三條

(一) 音樂的著作物ノ著作權ハ左ノ事項ヲ許諾スルノ特權ヲ有ス

一 音樂的著作物ヲ機械的ニ複製スルノ用ニ供スル機器ニ右著作物ヲ寫調スルコト

二 前號ノ機器ヲ以テ右著作物ヲ公ニ演奏スルコト

(二) 本條ノ適用ニ關スル留保及條件ハ各國ニ關スル限リ其ノ國ノ國內法ヲ以テ之ヲ定ムルコトヲ得但シ此ノ種ノ留保及條件ハ之ヲ規定セル國ニ於テノミ效力ヲ有スベシ

(三) 第一項ノ規定ハ溯及效ヲ有セズ從テ同盟ノ一國ニ於テハ千九百八年十一月

十三日「ベルリン」ニ於テ署名セラレタル條約ノ實施前又同日以後ニ同盟ニ加盟シ又ハ將來加盟スルコトアルベキ國ニ付テハ其ノ加盟ノ日前其ノ國ニ於テ適法ニ機械的器具ニ寫調セラレタル著作物ニハ之ヲ適用セズ

本條第二項及第三項ニ基キ作成セラレタル寫調ニシテ右寫調ガ適法ニ非ザル國ニ利害關係人ノ許諾ナクシテ輸入セラレタルモノハ其ノ國ニ於テ之ヲ差押フルコトヲ得ベシ

第十四條

(一) 文學的、學術的又ハ美術的著作物ノ著作權ハ其ノ著作物ノ活動寫眞術ニ依リ複製、縮案及公ノ上映ヲ許諾スルノ特權ヲ有ス

(二) 活動寫眞的製作物ハ著作權者ガ著作物ノ獨創的性質ヲ與ヘタルトキハ文學的又ハ美術的著作物トシテ保護セラル若シ此ノ性質ヲ缺クトキハ活動寫眞的製作物ハ寫眞的著作物ノ保護ヲ享有ス

(三) 活動寫眞的著作物ハ複製又ハ翻案セラレタル著作物ノ著作權ノ權利ヲ害セザル範圍内ニ於テ一ノ原著作物トシテ保護セラルベキモノトス

(四) 前諸規定ハ活動寫眞術ト類似ノ他ノ一切ノ方法ヲ以テ作リタル複製物又ハ製作物ニ之ヲ適用ス

第十五條

(一) 本條約ニ依リ保護セラルル著作物ノ著作權者ガ反對ノ證據アル迄眞正ノ著作ト看做サレ從テ同盟ノ諸國ノ裁判所

ニ於テ偽作者ニ對シテ訴訟ノ提起ヲ許容セラルルガ爲ニハ其ノ名ガ通例ノ方法ニ依リ其ノ著作物ニ表示セラルルヲ以テ足ル

(二) 無名又ハ變名著作物ニ關シテハ發行者ニシテ其ノ名ガ著作物ニ表示セラレタルモノニ於テ著作權ニ屬スル權利ヲ保全スルノ權能ヲ有ス右發行者ハ他ノ證據ヲ要セズシテ無名又ハ變名著作物ノ承繼人ト認メラルベキモノトス

(一) 一切ノ偽著作物ハ原著著作物が法律上ノ保護ヲ享有スル同盟國ノ權限アル機關ニ於テ之ヲ差押フルコトヲ得

(二) 右同盟國ニ於テハ著作物が保護セラレザルカ又ハ保護ノ止ミタル國ヨリ來ル複製物ヲモ差押フルコトヲ得

(三) 差押ハ各國ノ國內法ニ從ヒ之ヲ行フ

第十七條

本條約ノ規定ハ一切ノ著作物又ハ製作物ノ頒布、上演、展覽ヲ國內ノ立法又ハ警察上ノ措置ニ依リ許可シ、取締リ、禁止スルノ同盟各國ノ政府ニ屬スル權利ヲ何等害スルコトナシ該權利ハ權限アル機關之ヲ行使スベシ

第十八條

(一) 本條約ハ本條約實施ノ際其ノ本國ニ於テ保護ノ期間ノ滿了ニ依リ既ニ公有ニ屬シタルモノニ非ザル一切ノ著作物ニ之ヲ適用ス

(二) 尤モ著作物が從前認メラレタル保護ノ期間ノ滿了ニ依リ保護ノ要求セラル

ル國ニ於テ公有ニ屬シタルトキハ其ノ著作物ハ其ノ國ニ於テ新ニ保護セラレザルベシ

(三) 右原則ノ適用ハ之ニ關シ同盟國間ニ現存シ又ハ將來締結スベキ特別條約ノ規定ニ從フベキモノトス此ノ種ノ規定ノ存在セザルトキハ各國ハ各自國ニ關シ右原則ノ適用ニ關スル方法ヲ定ムベシ

(四) 前諸規定ハ同盟ニ新ニ加盟アリタル場合及保護ガ第七條ノ適用又ハ留保ノ拋棄ニ依リ擴張セラルベキ場合ニモ亦之ヲ適用ス

第十九條

本條約ノ規定ハ同盟ノ一國ノ法律ニ依リ一般ニ外國人ノ爲ニ定メラルベキ一層寬大ナル規定ノ適用ヲ求ムルコトヲ妨グズ

第二十條

同盟國政府ハ特別ノ取極ガ同盟ニ依リ付與セラレタル權利ヨリ廣大ナル權利ヲ著作權ニ付與スベキ限リ又ハ本條約ニ抵觸セザル他ノ規定ヲ包含スベキ限リ各國相互間ニ右取極ヲ締結スルノ權利ヲ留保ス現存ノ取極ノ規定ニシテ右條件ト合致スルモノハ引續キ適用アルモノトス

第二十一條

(一) 「文學的及美術的著作物保護國際同盟事務局」ナル名稱ノ下ニ設立セラレタル國際事務局ハ之ヲ維持ス

(二) 右事務局ハ瑞西聯邦政府ノ管理ノ下ニ之ヲ置ク瑞西聯邦政府ハ其ノ組織ヲ定メ且其ノ事務ヲ監督ス

(三) 事務局ノ公用語ハ佛蘭西語トス

第二十二條

(一) 國際事務局ハ文學的及美術的著作物ニ付テノ著作權ノ權利ノ保護ニ關スル各種ノ報告ヲ蒐集シ之ヲ編纂發行ス事務局ハ同盟共同ノ利益ニ關スル事項ヲ講究シ且諸政府ヨリ受領シタル書類ニ依リ同盟ノ目的ニ關スル諸問題ニ付佛蘭西語ヲ以テ定期刊行物ヲ編纂ス同盟國政府ハ經驗上必要ト認メラルベキ場合ニ於テハ合意ヲ以テ事務局ガ一又ハ二以上ノ他ノ國語ヲ以テ別版ヲ發行スルコトヲ許諾スルノ權利ヲ留保ス

(二) 國際事務局ハ文學的及美術的著作物ノ保護ニ關スル問題ニ付何時ニテモ同盟國ノ請求ニ應ジ其ノ必要トスルコトアルベキ特殊報告ヲ與フルコトヲ要ス

(三) 國際事務局局長ハ其ノ所管事務ニ付年報ヲ作成シ之ヲ一切ノ同盟國ニ送付ス

第二十三條

(一) 國際事務局ノ經費ハ同盟國共同シテ之ヲ負擔ス右經費ハ新ナル議定アル迄ハ年額十二萬瑞西「フラン」ヲ超過スルコトヲ得ザルベシ右額ハ必要ナル場合ニ於テハ第二十四條ニ揭グル會議ノ一ノ全會一致ノ決議ニ依リ之ヲ増加スルコトヲ得ベシ

(二) 右經費總額ニ對シ各國ノ釀出割合ヲ定ムル爲ニ同盟國及將來同盟ニ加入スル國ヲ六等ニ區分シ各等ノ釀出スベキ單位ノ箇數ノ比例ヲ定ムルコト左ノ如シ

第一等 二十五單位

第二等 二十單位
第三等 十五單位
第四等 十單位
第五等 五單位
第六等 三單位

(三) 右系數ニ各等ノ國數ヲ乘ジ之ニ依リ得タル積ノ和ヲ單位數トシ之ヲ以テ費用總額ヲ除スベシ其ノ商ハ一單位ノ費用額ヲ示スモノトス

(四) 各國ハ其ノ加盟ノ際前記等級中其ノ列セラレンコトヲ求ムルモノヲ聲明スベシ尤モ爾後何時ニテモ他ノ等級ニ列セラレンコトヲ欲スル旨ヲ聲明スルコトヲ得ベシ

(五) 瑞西國政府ハ事務局ノ豫算ヲ調製シ及其ノ支出ヲ監督シ、必要ナル立替ヲ爲シ並ニ他ノ一切ノ同盟國政府ニ送付スベキ毎年度ノ出納計算書ヲ作成ス

第二十四條

(一) 本條約ハ同盟制度ヲ完全ナラシムベキ改良ヲ加ヘンガ爲之ニ改正ヲ加フルコトヲ得

(二) 右ノ如キ問題及他ノ點ニ付同盟ノ發達ニ關係アル問題ハ同盟國ニ於テ順次開設スベキ會議ニ於テ該同盟國ノ委員之ヲ審議ス會議ヲ開設スベキ國ノ政府ハ國際事務局ノ協力ヲ得テ會議ノ準備ヲ爲ス事務局局長ハ會議ノ議事ニ列席シ且討論ニ參加スト雖モ決議ニ加ハラズ

(三) 本條約ノ如何ナル變更モ同盟ヲ組成スル各國一致ノ合意ヲ得ルニ非ザレバ

同盟ニ對シテ效力ナキモノトス

第二十五條

- (一) 同盟ニ屬セザル國ニシテ本條約ノ目的トスル權利ノ法律上ノ保護ヲ確保スルモノハ其ノ請求ニ依リ加盟スルコトヲ得
- (二) 右加盟ハ書面ヲ以テ瑞西聯邦政府ニ之ヲ通告スベク該政府ハ之ヲ他ノ同盟國ニ通告スベシ
- (三) 右加盟ハ當然本條約ニ規定セル一切ノ條款ヘノ加入及本條約ニ規定セル一切ノ利益ノ享受ヲ伴ヒ且瑞西聯邦政府ガ他ノ同盟國ニ通告シタル後一月ニシテ其ノ效力ヲ生ズベシ但シ加入スル國ニ依リ後ノ日ガ指定セラレタルトキハ此ノ限ニ在ラズ尤モ右加盟ハ加入スル國ガ少クトモ一時翻譯ニ關シ第八條ニ代フルニ千八百九十六年「パリ」ニ於テ改正セラレタル千八百八十六年ノ同盟條約第五條ノ規定ヲ以テスルコトヲ欲スル旨ヲ表示ヲ包含スルコトヲ得ベシ該規定ハ當該國ノ一又ハ二以上ノ國語ニ翻譯スル場合ノミニ關スルモノト當然了解ス

第二十六條

- (一) 同盟各國ハ本條約ガ其ノ殖民地保護領、委任統治地域、其ノ主權若ハ權力ノ下ニ在ル他ノ一切ノ地域又ハ宗主權ノ下ニ在ル一切ノ地域ノ全部又ハ一部ニ適用セラル旨ヲ瑞西聯邦政府ニ何時ニテモ書面ヲ以テ通告スルコトヲ得ベク之ニ依リ本條約ハ通告中ニ掲ゲラ

レタル一切ノ地域ニ適用セラレベシ右通告ナキトキハ本條約ハ右地域ニ適用セラレザルベシ

- (二) 同盟各國ハ本條約ガ前項ニ定ムル通告ノ目的ト爲リタル地域ノ全部又ハ一部ニ對シ適用セラレザルニ至ル旨ヲ瑞西聯邦政府ニ何時ニテモ書面ヲ以テ通告スルコトヲ得ベク本條約ハ瑞西聯邦政府ニ宛テラレタル通告ノ受領後十二月ニシテ右通告中ニ掲ゲラレタル地域ニ於テ適用セラレザルニ至ルベシ
- (三) 本條第一項及第二項ノ規定ニ從ヒ瑞西聯邦政府ニ對シテ爲サレタル一切ノ通告ハ之ヲ該政府ヨリ一切ノ同盟國ニ通告スベシ

第二十七條

- (一) 本條約ハ同盟國相互ノ關係ニ於テハ千八百八十六年九月九日ノ「ベルヌ」條約及順次之ヲ改正シタル諸條規ニ代ルベシ從前實施セラレタル諸條規ハ本條約ヲ批准セザルベキ國トノ關係ニ於テハ其ノ適用ヲ保持スベシ
- (二) 本條約ニ署名シタル國ハ從前爲シタル留保ノ利益ヲ引續キ保持スルコトヲ得ベシ但シ批准書寄託ノ際其ノ旨ノ宣言ヲ爲スコトヲ條件トス
- (三) 現ニ同盟ニ屬スル國ニシテ本條約ニ署名セザルベキモノハ何時ニテモ本條約ニ加入スルコトヲ得ベシ此ノ場合ニ於テハ諸國ハ前項ノ規定ノ利益ヲ享有スルコトヲ得ベシ

第二十八條

- (一) 本條約ハ批准セラルベク其ノ批准書ハ運クトモ千九百三十一年七月一日迄ニ「ローマ」ニ於テ寄託セラレベシ
- (二) 本條約ハ之ヲ批准シタル同盟國間ニ於テハ右期日後一月ニシテ實施セラレベシ但シ右期日前ニ於テ本條約ガ少クトモ同盟ノ六國ニ依リ批准セラレタルトキハ本條約ハ右同盟國間ニ於テハ第六ノ批准書ノ寄託ガ瑞西聯邦政府ニ依リテ右同盟國ニ通告セラレタル後一月ニシテ及爾後批准スベキ同盟國ニ對シテハ各其ノ批准ノ通告後一月ニシテ實施セラレベシ
- (三) 同盟ニ屬セザル國ハ千九百三十一年八月一日迄ハ千九百八十八年十一月十三日「ベルリ」ニ於テ署名セラレタル條約又ハ本條約ニ加入スルコトニ依リテ同盟ニ加盟スルコトヲ得ベシ千九百三十一年八月一日後ニ於テハ該國ハ本條約ニ加入スルコトヲ得ベシ
- (一) 本條約ハ其ノ廢棄ノ通告ノ爲サレタル日ヨリ一年ヲ經過スル迄ハ無期限ニ引續キ實施セラレベシ
- (二) 右廢棄ノ通告ハ瑞西聯邦政府ニ之ヲ爲スベシ右廢棄ノ通告ハ之ヲ爲シタル國ニ對シテノミニ其ノ效力ヲ生ズベク本條約ハ同盟ノ他ノ諸國ニ對シテハ其ノ效力ヲ存續スルモノトス

第三十條

- (一) 本條約第七條第一項ニ定ムル五十年ノ保護ノ期間ヲ自國ノ法律ニ採用スル

國ハ之ヲ瑞西聯邦政府ニ書面ヲ以テ通告スベク該政府ハ直ニ之ヲ同盟ノ他ノ一切ノ諸國ニ通知スベシ

(二) 第二十五條及第二十七條ニ依リ爲シ又ハ維持シタル留保ヲ拋棄スル國ニ付亦前項ニ同ジ

右證據トシテ各全權委員ハ本條約ニ署名セリ(委員氏名省略)

附 外務省告示

昭和六年七月十八日
外務省告示第五十九號

千九百八十八年十一月十三日「ベルリ」ニ於テ及千九百二十八年六月二日「ローマ」ニ於テ改正セラレタル文學的及美術的著作物保護ニ關スル千八百八十六年九月九日ノ「ベルヌ」條約ニ對スル帝國ノ批准書寄託ニ際シ帝國政府ハ在伊帝國大使ヲシテ左ノ宣言ヲ爲サシメタリ

宣言

下名ハ正當ノ委任ヲ受ケ千九百八十八年十一月十三日「ベルリ」ニ於テ及千九百二十八年六月二日「ローマ」ニ於テ改正セラレタル千八百八十六年九月九日ノ文學的及美術的著作物保護ニ關スル「ベルヌ」條約第二十七條(二)ノ規定ニ從ヒ日本國政府ハ其ノ從前爲シタル留保ノ利益ヲ保持スルコト即チ右條約第八條ニ定メラル著作物ヲ翻譯シ又ハ之ヲ許諾スル著作ノ特權ニ關シテハ千八百九十六年五月四日「パリ」ニ於テ署名セラレタル追加規定第一條第

三ニ依リ改正セラレタル千八百八十六年九月九日ノ「ベルヌ」條約第五號ノ規定ニ引續キ準據スルコトヲ欲スル旨ヲ宣言ス

昭和六年（千九百三十一年）七月十日「ローマ」ニ於テ作成ス

昭和六年七月十八日
外務省告示第六十號

昭和六年七月十五日帝國政府ハ在瑞西帝國公使ヲシテ瑞西聯邦政府ニ對シ左ノ通告セシメタリ

以書翰啓上致候陳著千九百八年十一月十三日「ベルリン」ニ於テ及千九百二十八年六月二日「ローマ」ニ於テ改正セラレタル千八百八十六年九月九日ノ文學的及美術的著作物保護ニ關スル「ベルヌ」條約ハ其ノ日本國ニ實施セラルル日ヨリ及日本國ニ付爲サレタル留保ト同一ノ留保ノ下ニ下記地域即チ朝鮮、臺灣、樺太及關東州租借地ニ適用セラレベキ旨本官ハ本國政府ノ訓令ニ依リ同條約第二十六條（一）ニ從ヒ閣下ニ通告スルノ光榮ヲ有シ候

尙日本國政府ハ其ノ國際事務局經費分擔額ニ關シ千九百三十二年度ヨリ同盟國ノ第二等ニ代フルニ第一等ニ列セラレ度キ旨條約第二十三條（四）ノ規定ニ從ヒ希望致候

他方日本國政府ハ前記條約が日本國ニ實施セララル日ヨリ音樂的著作物ノ公ノ演奏ニ關シ千九百八年十一月十三日

「ベルリン」ニ於テ改正セラレタル「ベルヌ」條約ノ批准書寄託ニ際シ千九百二十年六月九日其ノ爲シタル留保ハ之ヲ拋棄スル旨聲明致候
本官ハ茲ニ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候
敬具

敬具

美術獎勵施設一覽

帝室技藝員

帝室技藝員の制度は明治二十三年十月我が皇室におかせられて明治維新以來藝術的に衰退し經濟的に困窮して居た當時の我が美術界振興の思召しから制定せられたもので、帝室技藝員には人格藝術共に後進の師表と仰がるべき大家を、特に其の爲に選ばれたる委員をして銓衡せしめ任命せられるものである。

帝室技藝員銓衡委員

子入江爲守、清水澄、大谷正男
瀧精一、侯廣幡忠隆、侯細川護立、正木直彦
帝室技藝員名簿

拜命年月

日本畫	竹内 栖鳳	大正六年六月
同	川合 玉堂 <td>同</td>	同
同	横山 大觀 <td>昭和六年六月</td>	昭和六年六月
同	橋本 關雪 <td>同九年十二月</td>	同九年十二月
同	安田 靱彦 <td>同</td>	同
同	菊池 契月 <td>同</td>	同
洋畫	藤島 武二 <td>同</td>	同

昭和六年（千九百三十一年）七月十五日「ベルヌ」ニ於テ
矢田七太郎
聯邦參議院議員、聯邦政務省長官
ジュゼツペ・モツタ閣下

同	岡田三郎助	昭和九年三月
同	和田 英作 <td>同</td>	同
彫刻	山崎 朝雲 <td>同</td>	同
工藝	板谷 波山 <td>同</td>	同
同	香取 秀眞 <td>同</td>	同
同	清水 龜藏 <td>同</td>	同

帝國藝術院

帝國藝術院官制

昭和十二年六月二十三日
勅令第二百八十號

第一條 帝國藝術院ハ文部大臣ノ管理ニ屬シ藝術ノ發達ヲ圖リ文化ノ向上ニ資スルヲ以テ目的トス

第二條 帝國藝術院ハ藝術ニ關スル重要ノ事項ヲ審議ス

帝國藝術院ハ藝術ノ發達ニ資スル爲必要ナル事業ヲ行フコトヲ得

帝國藝術院ハ藝術ニ關スル重要ノ事項ニ付文部大臣ニ建議スルコトヲ得

第三條 文部大臣ハ藝術ニ關スル重要ノ事項ニ付帝國藝術院ニ諮問スルコトヲ得

第四條 帝國藝術院ハ院長一人及會員八十人以内ヲ以テ之ヲ組織ス

第五條 院長及會員ハ藝術ニ關シ識見闊歷卓越スル者ノ中ヨリ文部大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ズ

院長及會員ハ勅任官ノ待遇ヲ受ク

第六條 院長ハ院務ヲ總理ス

院長事故アルトキハ文部大臣ノ指名スル會員其ノ職務ヲ代理ス

第七條 帝國藝術院ニ主事ヲ置ク文部部内ノ高等官ノ中ヨリ文部大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ズ

主事ハ院長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス

第八條 帝國藝術院ニ書記ヲ置ク文部部内ノ判任官ノ中ヨリ文部大臣ノ命ズ書記ハ上司ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

帝國藝術院官制ハ之ヲ廢止ス

本令施行ノ際現ニ帝國藝術院長又ハ帝國美術院會員タル者別ニ辭令ヲ發セラレザルトキハ夫々帝國藝術院長又ハ帝國藝術院會員ヲ命ゼラレタルモノトス

帝國藝術院職員

院長

清水 澄

會員

朝倉 文夫

荒木悌二郎（十畝）

有島壬生馬（生馬）

石井 滿吉（柏亭）

泉 鏡太郎(鏡花)	橋 糸重
伊東 忠太	建昌彌一郎(大夢)
井上 通泰	谷崎潤一郎
梅原龍三郎	千葉 胤明
梅若万三郎	津田 信夫
多 忠龍	德田 末雄(秋聲)
岡田三郎助	德富猪一郎(蘇峰)
岡本 敬二(綺堂)	富本 憲吉
尾上 八郎(柴舟)	内藤 伸
香取秀治郎(秀眞)	中澤 弘先
錦木 健一(清方)	中村 不折
河井 又平(醉茗)	西村源次郎(五雲)
川合芳三郎(玉堂)	西山卯三郎(翠嶂)
川端昇太郎(龍子)	橋本 關一(關雪)
川村 萬藏(曼舟)	比田井 鴻(天來)
菊池 寛	平櫛偉太郎(田中)
菊池 完爾(契月)	藤井 浩祐
北村 西望	藤島 武二
清水六兵衛	豐 時義
幸田 成行(露伴)	寶生朝太郎
幸田 延	前田 廉造(青邨)
國分 高胤(青厓)	松岡 輝夫(映丘)
小杉國太郎(放庵)	松林 篤(桂月)
小林 茂(古徑)	南 薰造
小室貞次郎(翠雲)	三宅雄二郎(雪嶺)
齋藤 茂吉	武者小路實篤
齋藤 知雄(素巖)	安井曾太郎
佐佐木信綱	安田新三郎(靦彦)
佐藤 清藏(朝山)	山崎 朝雲
清水 龜藏	山下新太郎
高濱 清(虛子)	結城 貞松(素明)
竹内 恆吉(栖鳳)	横山 秀磨(大觀)

(昭・三三・三三通)

(昭・三三・九・一六通)

主事 文部書記官 和田 英作
和田 三造
本田 弘人

文部省美術展覽會

文部省美術展覽會は、明治四十年制定された美術審査委員會官制に基き同年第一回を開催、爾來毎年開催して十二回に及んだが、大正八年同官制を廢止して帝國美術院規程を制定、同年以後帝國美術院美術展覽會を開催し來り昭和九年第十五回に至つた。昭和十年帝國美術院を改組し新に帝國美術院官制を制定、同十一年春第一回帝國美術院展覽會を開催したが繼續されず、同年秋臨時に昭和十一年文部省美術展覽會を開催、同十二年六月帝國美術院を廢止して帝國藝術院官制が設置されるに及んで展覽會は舊の如く文部省の主催として同年第一回展覽會を開催、以後繼續することとなつた。

文部省美術展覽會規則

昭和十二年九月十一日
文部省告示第三百十九號

第一章 總 則

第一條 文部省美術展覽會ハ本規則ノ定ムル所ニ依リ毎年一回之ヲ開催ス會場、會期及事務所ハ其ノ都度之ヲ公告ス

第二條 本會ハ作品ノ種類ニ依リ之ヲ左ノ四部ニ分ツ

第一部 繪畫

第二部 繪畫(油繪、水彩畫、バステル畫、素描、創作版畫等)

第三部 彫塑

第四部 美術工藝

第三條 陳列スベキ作品ハ鑑査ヲ經ベキモノトス

前項ノ規定ニ拘ラズ出品人ニシテ左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ其ノ専門技術ニ依ル作品ニ限リ無鑑査ニテ陳列スルモノトス但シ第四部ニ於ケル綜合製作ニ依ル作品ハ總テ鑑査ヲ經ベキモノトス

一 帝國藝術院會員

二 文部省美術展覽會審査員

三 無鑑査ト認メラレタル者

第四條 本會ハ各部ノ綜合展覽會トシ鑑査作品及無鑑査作品ヲ同時ニ陳列ス

第五條 鑑査、審査及陳列ノ事務ヲ處理スル爲審査員長及審査員ヲ置ク

審査員長ハ文部次官ヲ以テ之ニ充ツ

審査員ハ文部大臣之ヲ依屬ス

第六條 鑑査ハ提出セル作品ニ付陳列スベキモノヲ定メ審査ハ陳列品ニ付優秀ナルモノヲ選定ス

第七條 審査員ハ審査員長ノ定ムル所ニ依リ第一部乃至第四部ノ各部ニ分屬ス

審査員長ハ各部ノ審査員主任ヲ任命ス

審査員ハ各部ニ付鑑査及審査ヲ行フ

第二章 出 品

第八條 出品ハ自己ノ製作シタルモノニ限ル故人ノ製作ニ依ルモノハ其ノ相續人ニ於テ之ヲ出品スルコトヲ得

第九條 第三部ノ出品ニシテ原型製作者ト實材製作者ト其ノ入ヲ異ニスルトキハ原型製作者ヲ以テ其ノ出品人ト爲ス

第四部ノ出品ニシテ綜合製作ナルトキハ其ノ代表製作者一名ヲ以テ出品人ト爲ス但シ代表製作者ハ共同製作者ノ氏名ヲ附記スルコトヲ得

第十條 受鑑査者ノ出品ハ同一人ニ付各部共二點以內トシ無鑑査者ノ出品ハ同一人ニ付一點トス

第十一條 形狀表裝等ノ如何ニ拘ラズ同一意匠ニ依レル一箇ノ作品ト認メ得ベキモノハ二箇以上ニ分雖セルモノト雖モ之ヲ一點ト看做ス

第十二條 同一意匠ニ依ラザル數箇ノ作品ト雖モ一箇ニ合装セルモノハ之ヲ一點ト看做ス

第十三條 第一部ノ作品ノ大サハ左ノ各號ニ依ル

一 受鑑査者ノ作品ハ一點ニ付横十尺以内(裝飾設備ヲ含ム)トス

二 帝國藝術院會員及文部省美術展覽會審査員ノ作品ハ横二十五尺以内(裝飾設備ヲ含ム)トス

三 無鑑査ト認メラレタル者ノ作品ハ横七尺以内(裝飾設備ヲ含ム)トス但シ此ノ制限ヲ超ユルモノニシテ横廿五尺以内(裝飾設備ヲ含ム)ノ作品ニ付テハ審査員ニ於テ陳列スベキヤ否ヤヲ決定ス

第二部ノ作品ノ大サハ左ノ各號ニ依ル

一 受鑑査者ノ作品ハ隨意トス

二 帝國藝術院會員及文部省美術展覽會審査員ノ作品ハ隨意トス

三 無鑑査ト認メラレタル者ノ作品ハ八十號以内トス但シ此ノ制限ヲ超ユルモノニ付テハ審査員ニ於テ陳列スベキヤ否ヤヲ決定ス

第三部ノ作品ノ大サハ隨意トス

第四部ノ作品ノ大サハ一點ニ付立體ニ在リテハ十尺平方以内ノ場所ニ陳列シ得ルモノトシ其ノ他ニ在リテハ横十二尺以内(裝飾設備ヲ含ム)トス

第十四條 作品ノ搬入受付期間ハ毎年展覽會開催ノ都度之ヲ公告ス

第十五條 左ニ掲グルモノハ之ヲ出品スルコトヲ得ズ
一 製作後五年以上ヲ經タルモノ

二 既ニ帝國美術院美術展覽會及文部省美術展覽會ニ陳列シタルコトアルモノ

三 風致ニ害アリト認ムルモノ

第十六條 鑑査ヲ受クベキ作品ヲ出品セントスル者ハ作品一點ニ付金一圓ノ手数料ヲ納付スベシ既納ノ手数料ハ如何ナル事由アルモ之ヲ還付セズ

第十七條 出品セントスル者ハ所定書式ノ申込書ト共ニ作品ヲ本會事務所ニ差出スベシ故人ノ作品ヲ出品セントスルキハ申込書中解説書欄ニ製作者ノ氏名及履歷ヲ記入スベシ

作品ニハ一點毎ニ命題及出品人氏名ヲ記シタル紙片ヲ裏面ニ貼附スベシ

第十八條 本會事務所ニ於テ作品ヲ受取シタルトキハ直チニ受領證ヲ交付ス

第十九條 受取シタル作品ハ撤回スルコトヲ得ズ但シ審査員長ノ許可ヲ得タルトキハ此ノ限ニ在ラズ

第二十條 第一部第二部ノ作品ハ額面ト爲シ裱縁ヲ附ス等出品人ニ於テ適當ノ裝飾設備ヲ爲スベシ

第二十一條 出品人ハ陳列品ノ位置、配列等ニ對シ異議ヲ申立ツルコトヲ得ズ

第二十二條 作品ノ荷造及運送費ハ總テ出品人ノ負擔トス但シ遠隔ノ地ニ在ル出品團體ニ對シテハ文部省ヨリ特ニ其ノ費用ノ一部ヲ補助スルコトアルベシ

第二十三條 文部省ハ作品ノ保管ニ關シ充分ノ注意ヲ爲スト雖モ紛失、毀損、其ノ他ノ損害ニ對シ一切責任ニ任ゼズ

第二十四條 作品ノ撮影又ハ模寫ハ出品人ノ承諾ヲ得且文部省ノ許可ヲ受クルニ非ザレバ之ヲ爲スコトヲ得ズ

前項ノ許可ヲ受ケタル者會場ニ於テ作品ノ撮影又ハ模寫ヲ爲サントスルトキハ許可證ヲ掛員ニ提示シ其ノ指揮ヲ受クベシ
文部省ハ作品ヲ撮影若ハ模寫シ又ハ之ヲ刊

行スルコトアルベシ

第三章 鑑査及審査

第二十五條 鑑査及審査ノ方法ハ審査員長及各部ノ審査員ニ於テ之ヲ定ム

鑑査及審査ノ議事ハ之ヲ秘密トス

第二十六條 鑑査ヲ經タル陳列品ハ總テ特選ノ査定ヲ受クルモノトス

第二十七條 鑑査及審査ノ結果ハ審査員主任ヨリ之ヲ審査員長ニ報告スベシ

第二十八條 出品人ハ鑑査及審査ニ對シ異議ヲ申立ツルコトヲ得ズ

第四章 賣約及撤出

第二十九條 陳列品ハ本會事務所ニ於テ其ノ賣買契約ヲ取扱フモノトス但シ開會初日ハ陳列品ノ賣買契約ヲ取扱ハズ

第三十條 陳列品ヲ購買セントスル者ハ代金ヲ添ヘテ本會事務所ニ申出ヅベシ

第三十一條 即時ニ代金ヲ支拂ハザルトキハ手附ヲ以テ賣買契約ヲ爲スコトヲ得手附ノ金額ハ代價ノ三分ノ一以上トス

前項ノ買主ガ會期中ニ殘餘代金ノ支拂ヲ爲サザルトキハ手附ハ之ヲ拋棄シタルモノト看做ス但シ拋棄シタル手附ハ當該出品人ノ所得トス

第三十二條 第三十條ニ依ル代金及第三十一條第二項ニ依ル手附ハ展覽會終了後拂渡ヲ爲スモノトス

第三十三條 賣買契約ヲ爲シタルトキハ作品ニ其ノ旨ヲ貼紙ス

第三十四條 出品人ニ於テ陳列品ノ代價ヲ變更セントスルトキハ本會事務所ニ届出ヅベシ

第三十五條 出品人ニ於テ作品及代金受領等ノ爲特ニ代理人ヲ置キタルトキハ其ノ住所及氏名ヲ本會事務所ニ届出ヅベシ

第三十六條 陳列品ハ展覽會終了後三日以内ニ出品人ニ於テ之ヲ撤出スベシ

前項ノ期間内ニ撤出セザルトキハ文部省ニ於テ相當ノ處置ヲ爲スベシ

第三十七條 陳列品中賣約済ノモノハ展覽會終了後買主ニ於テ之ヲ撤出スベシ

前項ノ場合ニ於テハ代金受領證ヲ提出シ自己ノ買主タルコトヲ證スルヲ要ス

第三十八條 展覽會終了後陳列品ノ撤出運送等ニ關シ買主ノ依頼アルトキハ本會事務所ハ買主ノ費用ヲ以テ之ニ應ズルコトアルベシ

第五章 觀覽

第四十條 觀覽時間ハ開會中毎日午前九時ヨリ午後五時迄トス但シ都合ニ依リ之ヲ伸縮シ又ハ觀覽ヲ停止スルコトアルベシ

第四十一條 觀覽人ハ陳列品ニ觸ルルコトヲ得ズ

觀覽人ハ靜肅ヲ旨トシ且掛員ノ指揮ニ從フベシ

第四十二條 觀覽人ニシテ秩序風俗ヲ紊ルノ虞アリト認ムルモノハ入場ヲ禁ジ又ハ退場セシムルコトアルベシ

第一回同展覽會會期等

今般文部省ニ於テ第一回文部省美術展覽會會期會場及出品期限其ノ他左ノ通り定メタリ(文部省)(昭和十二年九月二日官報)

於テ相當ノ處置ヲ爲スベシ

第三十七條 陳列スルコトニ決定シタル作品以外ノモノハ展覽會開催後五日ヲ經過シタル後十日間以内ニ出品人ニ於テ之ヲ撤出スベシ

前項ノ期間内ニ撤出セザルトキハ文部省ニ於テ相當ノ處置ヲ爲スベシ

第三十八條 陳列品中賣約済ノモノハ展覽會終了後買主ニ於テ之ヲ撤出スベシ

前項ノ場合ニ於テハ代金受領證ヲ提出シ自己ノ買主タルコトヲ證スルヲ要ス

第三十九條 展覽會終了後陳列品ノ撤出運送等ニ關シ買主ノ依頼アルトキハ本會事務所ハ買主ノ費用ヲ以テ之ニ應ズルコトアルベシ

第四十條 觀覽時間ハ開會中毎日午前九時ヨリ午後五時迄トス但シ都合ニ依リ之ヲ伸縮シ又ハ觀覽ヲ停止スルコトアルベシ

第四十一條 觀覽人ハ陳列品ニ觸ルルコトヲ得ズ

觀覽人ハ靜肅ヲ旨トシ且掛員ノ指揮ニ從フベシ

第四十二條 觀覽人ニシテ秩序風俗ヲ紊ルノ虞アリト認ムルモノハ入場ヲ禁ジ又ハ退場セシムルコトアルベシ

第一回同展覽會會期等

今般文部省ニ於テ第一回文部省美術展覽會會期會場及出品期限其ノ他左ノ通り定メタリ(文部省)(昭和十二年九月二日官報)

一、第一回文部省美術展覽會東京市上野公園内東京府美術館ニ於テ開催ス

二、本會ノ開期ハ昭和十二年十月十六日ヨリ同十一月二十日迄トス
十月十六日ヲ招待日トシ招待狀又ハ優待券ヲ所持スル者ノ觀覽ニ供シ其ノ翌日ヨリ一

美術獎勵施設一覽

- 般公衆ノ觀覽ニ供ス
開期中毎週月曜日ヲ觀覽日トシ團體入場ヲ謝絶ス
招待日ハ陳列品ノ賣買契約ヲ取扱ハズ
三、本會事務所ハ昭和十二年九月三十日迄ハ文部省專門學務局學藝課内同十月一日以後十一月二十四日迄ハ會場内ニ之ヲ置ク
四、本會ハ第一部、第二部、第三部及第四部ノ綜合展覽會トシ鑑査作品ト無鑑査作品ヲ同時ニ陳列ス
五、本會ハ作品ノ種別ニ依リ之ヲ左ノ四部分ツ
第一部 繪畫
第二部 繪畫（油繪、水彩畫、パステル畫、素描、創作版畫等）
第三部 彫塑
第四部 美術工藝
六、鑑査審査及陳列ノ事務ヲ處理スル爲審査員長及審査員ヲ置ク
審査員長ハ文部大臣官ヲ以テ之ニ充ツ
審査員ハ文部大臣之ヲ委嘱ス
七、陳列スベキ作品ハ鑑査ヲ經タルモノニ限リ之ヲ陳列ス但シ出品人ニシテ左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ其ノ專門技術ニ依ル出品ニ限リ無鑑査ニテ陳列シ得ルモノトス第四部ニ於ケル綜合製作ニ依ル出品ハ總テ鑑査ヲ經ベキモノトス
帝國藝術院會員
第一回文部省美術展覽會審査員
昭和十一年文部省美術展覽會ニ於テ招待ヲ受ケタル者
（四）昭和十一年文部省美術展覽會ニ於テ文部大臣實ヲ受ケタル者（但シ本年度ニ限ル）
八、受鑑査者ノ出品ハ同一人ニ付各部共ニ點以內トス
無鑑査者ノ出品ハ同一人ニ付各部共ニ點九、第一部ノ受鑑査者ノ作品ハ一點ニ付

- 縱十三尺以內（裝飾設備ヲ含ム）トス
無鑑査者ノ作品ハ縱七尺以內（裝飾設備ヲ含ム）トス但シ此ノ制限ヲ超ユルモノハ縱二十五尺以內（裝飾設備ヲ含ム）ニ在リテハ審査員ニ於テ陳列スベキヤ否ヤヲ決定ス
帝國藝術院會員及第一回文部省美術展覽會審査員ノ作品ハ縱十尺以內（裝飾設備ヲ含ム）トス
第二部ノ受鑑査者ノ作品ノ大サハ隨意トス無鑑査者ノ作品ハ八十號以內トス但シ此ノ制限ヲ超ユルモノニ在リテハ審査員ニ於テ陳列スベキヤ否ヤヲ決定ス
帝國藝術院會員及第一回文部省美術展覽會審査員ノ作品ハ隨意トス
第三部ノ作品ノ大サハ隨意トス
第四部ノ作品ハ一點ニ付立體ニ在リテハ十尺平方以內ノ場所ニ陳列シ得ルモノ其ノ他ハ縱十二尺以內（裝飾設備ヲ含ム）トス
一〇、出品申込書及作品ノ受理期間ハ昭和十二年十月一日ヨリ同五日迄トス但シ無鑑査者ノ出品ニ就キテハ同月十二日迄トス
出品ハ右期間内毎日午前九時ヨリ午後五時迄ニ一點ニ付金壹圓ノ手数料ヲ添ヘ所定書式ノ申込書ト共ニ之ヲ會場ニ搬入スベシ但シ無鑑査者ハ手数料ヲ要セズ
一一、展覽會關係者並ニ出品人ニ對シテハ鐵道旅客運賃割引證及出品運賃割引證ヲ交付ス
割引證ノ交付ヲ希望スル者ハ住所、年齢及簽着姓名ヲ具シ事務所ニ申出ヅベシ
一二、本會閉會後左ノ條件ニ依リ第一部、第二部、第三部及第四部ノ陳列品ハ之ヲ京都市主催ノ第一回文部省美術展覽會京都陳列會ニ陳列スルモノトス
陳列品ノ荷造運搬ハ京都市之ヲ負擔ス
京都市ハ陳列品ヲ昭和十二年十二月二十

(三)		二日迄ニ各出品人又ハ買主ニ送付スベシ 京都市ハ文部省ヨリ陳列品ノ引渡ヲ受ケタル時ヨリ前項ノ送付ヲ完了スル迄陳列品ノ亡失其ノ他損害ニ對シ賠償ノ責ニ任ズ但シ賠償ノ額ハ文部省ノ定ムルコロニ依ル
(四)		京都市ハ無手数料ニテ陳列品ノ賣買契約ヲ取扱ヒ代金ハ京都市ヨリ直接出品人ニ送付スベシ
第一回文部省美術展覽會京都陳列會ノ會期ハ昭和十二年十一月二十八日ヨリ同十二月十二日迄トス		一三、出品人ニ於テ京都陳列會ヘ陳列スルコトヲ希望セザルトキハ其ノ旨出品申込書所定ノ欄中「承諾」ノ二字ヲ抹消スベシ
第一回同展覽會審査員		第一部
主任	鈴木 健一	鈴木 千久馬
小林 茂	田邊 至	中野 和
西村 源次郎	辻 永	中村 研一
西山 卯三郎	長谷川 昇	林 俊衛
安田 新三郎	北村 西望	朝倉 文夫
宇田 善次郎	佐藤 清藏	齊藤 知雄
川崎 隆一	内藤 伸	藤井 浩祐
堂本 三之助	安藤 照	石井 鶴三
中村 恒吉	小倉 右一郎	國方 林三
野田 道三	澤田 寅	長谷川 榮作
福田 平八郎	横江 嘉純	津田 信夫
矢澤 貞則	清水 龜藏	岩本 憲吉
矢野 一智	岩田 藤七	海野 清
吉村 忠夫	川村 半次郎	佐々木 文藏
中澤 弘光	高村 豐周	増井 豐五郎
伊原 宇三郎	沼田 勇次郎	山鹿 健吉
川島 環一郎	吉田 源十郎	六角 注多良
小林 萬吾		
齋藤 與里治		
第一部		第一回同展覽會無鑑査者
伊東 紅雲	伊藤 小坡	伊東 深水

入江	波光	岩田	正巳	板倉	星光	案本	一洋	松元	道夫	松本	姿水	東郷	青兒	富田	溫一郎	鳥海	青兒	安井	曾太郎	保田	龍門	安田	繪		
藏部	草丘	磯田	長秋	猪飼	晴谷	益田	玉城	不動	立山	古谷	一晃	大橋	孝吉	太田	三郎	太田	喜二郎	山脇	信德	山田	隆憲	山口	亮一		
生田	花朝	今中	素友	池上	秀歌	古屋	正壽	福田	平八郎	福田	豊四郎	大野	隆德	大久保	次郎	大久保	百合子	山崎	省三	山喜多	二郎太	山下	品藏		
池田	遙村	石渡	風古	石崎	光瑠	福田	惠一	福田	浩湖	福田	翠光	大澤	鉦一郎	緒方	亮平	岡	吉枝	山下	繁雄	山下	新太郎	山本	千帆		
島山	錦成	服部	有恆	八田	高容	筆谷	等觀	小泉	勝爾	小早川	清	岡田	謙三	岡田	三郎助	岡見	宮雄	山本	直治	松井	正	前川	千帆		
橋本	關雪	橋本	永邦	橋本	靜水	小早川	秋聲	小林	柯白	小林	古徑	岡本	一平	織田	一磨	(版畫)		(版畫)		(版畫)		(版畫)			
西村	五雲	西山	翠綠	西澤	笛歌	郷倉	千報	五島	耕歌	兒玉	希望	小野田	元興	恩地	孝四郎	(版畫)		松岡	壽	松村	巽	松山	省三		
堀井	香坡	徳岡	神泉	徳岡	隣齋	小室	翠雲	小村	大雲	木島	櫻谷	奥瀬	元三	若山	爲三	和田	香苗	松本	弘二	眞山	孝二	正宗	得三郎		
堂本	印象	登内	微笑	富取	風堂	小山	大月	阿部	榮達	近藤	浩一路	渡邊	浩三	和田	英作	和田	三造	牧野	虎雄	牧野	司郎	深澤	省三		
大智	勝觀	大河内	夜江	太田	聰雨	穴山	勝堂	荒井	寛方	赤松	雲嶺	加藤	静見	角野	判治郎	梶原	貫五	福澤	一郎	藤島	武二	藤田	嗣治		
太田	天津	太田	秋民	大村	廣陽	佐藤	光華	酒井	三良	神原	昔山	河井	清一	川西	英(版畫)	片岡	銀藏	小早川	萬四郎	小林	德三郎	小林	和作		
大木	豐平	落合	訓風	小川	華錢	桮原	紫峰	佐野	五風	木村	斯光	川合	修二	龜高	文子	柏木	俊一	香山	教三	小絲	源太郎	小磯	良平		
小川	翠村	織田	觀潮	尾竹	國觀	北野	恆富	木村	武山	菊澤	武江	横井	禮市	横堀	角次郎	吉井	芳松	近藤	光三郎	江藤	純平	遠藤	典太		
奥村	土牛	小野	竹喬	蒼生	天泉	菊池	華秋	幸松	春浦	三輪	晃勢	吉田	禮市	横堀	角次郎	吉井	芳松	寺内	萬治郎	寺澤	幸太郎	相田	直彦		
川上	拙以	川端	龍子	川村	曼舟	結城	素明	幸松	春浦	水上	泰生	高田	達四郎	高橋	虎之助	高田	惣七	阿以	田治修	有馬	さとえ	安宅	安五郎		
川船	水棹	川崎	小虎	川北	霞峰	結城	素明	幸松	春浦	三輪	晃勢	吉田	禮市	横堀	角次郎	吉井	芳松	寺内	萬治郎	寺澤	幸太郎	相田	直彦		
加藤	英舟	堅山	南風	勝田	清方	三谷	十子	水田	觀山	三木	翠山	宮田	眞夫	高野	三三男	高田	惣七	阿以	田治修	有馬	さとえ	安宅	安五郎		
勝田	蕉夢	金島	桂華	橋尾	翠田	白倉	二峰	島田	墨仙	島崎	柳鳩	多々	羅義雄	田村	孝之介	田口	省吾	有馬	さとえ	赤城	泰舒	新井	完		
川合	玉堂	鴨下	晃湖	橋尾	翠田	三宅	鳳白	三木	翠山	庄田	鶴友	高村	眞夫	高野	三三男	高田	惣七	阿以	田治修	有馬	さとえ	安宅	安五郎		
橋山	大觀	吉岡	堅二	吉田	秋光	眞道	黎明	廣島	晃市	東京	方僊	田中	善之助	田村	孝之介	田口	省吾	有馬	さとえ	赤城	泰舒	新井	完		
吉村	忠犬	田畑	秋壽	谷角	日登春	飛田	周山	平井	棟仙	森村	宜稻	坪井	其一	曾宮	一念	梅	貞雄	赤松	麟作	青柳	喜兵衛	油谷	達		
高木	保之助	田中	昭哉州	田中	賴球	飛田	周山	平井	棟仙	森村	宜稻	坪井	其一	曾宮	一念	梅	貞雄	赤松	麟作	青柳	喜兵衛	油谷	達		
竹内	楓風	常岡	文龜	根上	富治	望月	春江	森	白甫	菅	植彦	塚本	一男	土田	文雄	鶴田	吾郎	青山	義雄	淺井	眞	旭	泰宏		
永田	春水	中村	貞以	中野	草雲	杉山	寧	加藤	英三	菅	植彦	鍋井	克之	中西	利雄	(水彰)	中川	紀元	佐藤	敬	里見	勝藏	酒井	亮吉	
長野	草風	長山	はく子	中村	岳陵	伊原	宇三郎	伊庭	傳治郎	伊藤	康	中野	研一	中村	不折	中村	節也	坂本	繁二	佐竹	德次郎	櫻井	知足		
中村	大三郎	村上	華岳	村島	西一	伊藤	慶之助	岩井	彌一郎	井垣	嘉平	中澤	弘光	長坂	春雄	(版畫)	武藤	展平	北宮	彬	(版畫)	清宮	彬	彬	
上田	萬秋	植中	直齋	上村	松篋	伊谷	賢藏	井上	よし	猪熊	弦一郎	中澤	弘光	長坂	春雄	(版畫)	武藤	展平	北宮	彬	(版畫)	清宮	彬	彬	
上村	松園	宇田	萩郎	榎崎	朱雀	今關	啓司	池部	鈞	池田	治三郎	永瀬	義郎	(版畫)	長坂	春雄	(版畫)	武藤	展平	北宮	彬	(版畫)	清宮	彬	
野田	九浦	野添	平米	野口	謙次郎	池田	永一路	石井	柏亭	石井	鶴三	向井	潤吉	内藤	嚴	梅原	龍三郎	木下	孝則	木下	義謙	金	觀鑑		
矢野	鐵山	矢野	橋村	山川	永雅	石川	寅治	石川	欽一郎	(水彰)	林	武	野間	仁根	黒田	重太郎	黒田	新	柚木	久太	三上	知治	三宅	克己	
山川	秀峰	山田	耕雲	山村	耕花	服部	亮英	八條	彌吉	林	清松	國吉	康雄	栗原	忠三	(水彰)	宮部	進	(水彰)	宮本	三郎	南	重雄	宮田	
山口	冷照	山口	蓬春	山口	華楊	林	俊衛	林	重義	廣地	清松	上野	山清	野口	彌太郎	野口	謙藏	木下	孝則	木下	義謙	金	觀鑑	三宅	克己
山本	紅雲	山元	櫻月	山本	倉丘	演田	葆光	碓	伊之助	橋本	はな	栗原	信	栗田	雄	桑重	儀一	宮坂	勝	宮本	三郎	南	重雄	宮田	重雄
八木	岡春山	安田	半園	保間	素堂	橋本	邦助	橋本	八百二	長谷川	昇	倉田	白羊	熊岡	美彦	熊谷	守一	耳野	卯三郎	水谷	清	白瀧	義之助	清水	良雄
安田	靱彦	前田	萩郎	前田	青郎	長谷川	漢(版畫)	別府	貫一郎	都鳥	英喜	草光	信成	矢崎	千代二	矢島	堅土	島崎	繼二	清水	多嘉示	清水	良雄		
町田	曲江	松林	桂月	松岡	映丘	堀田	清治	別府	貫一郎	都鳥	英喜	草光	信成	矢崎	千代二	矢島	堅土	島崎	繼二	清水	多嘉示	清水	良雄		

清水 登之	平岡權八郎	平塚 運一	阿井 瑞孝	赤堀 信平	安達 貫一
(版畫)	平澤 大暉	望月 省三	朝倉 文夫	雨田 光平	雨宮 治郎
(水彩)	森脇 忠	森田 勝	安 一	安藤 照	齋藤 素巖
關口 隆嗣	鈴木千久馬	鈴木 保徳	佐藤 朝山	佐伯 量良	澤田 晴廣
鈴木 誠	鈴木 亞夫	鈴木 淳	北村 西望	佐々木大樹	喜多武四郎
鈴木信太郎	鈴木 清一	末長 護	北村 正信	木村 重夫	宮本 成良
菅 一郎	須田國太郎	朝井昭右衛門	行田 泰英	三國 慶一	宮本 重良
飯島三四三	伊藤 鉦次	井口 喜夫	三澤 寛	三木 宗策	柴田 正重
一色 五郎	池田 勇八	石井 鶴三	白井 保春	清水多嘉示	新海 竹藏
石川 龍治	畑 正吉	羽下 修三	日名子實三	平嶋 田中	森野 圓象
花里 金央	早川義一郎	林 謙三	森 大造	森山 朝光	毛利 教武
服部 仁郎	濱田 三郎	橋本 朝秀	關野 聖雲	須藤力次郎	杉浦藤太郎
橋本 高昇	長谷川義起	長谷川榮作	杉本 宗一		
長谷 秀雄	新田藤太郎	西村 雅之	飯塚珉珩齋	伊東 陶山	伊東 信助
堀 進二	富永 朝堂	沼田 一雅	岩田 藤七	板谷 波山	磯崎 美亞
大西三四郎	太田 三郎	大塚 辰夫	稻木春千里	石田 英一	六角 紫水
大内 青圃	大國 貞藏	大島 駒藏	濱田 庄司	豐田 勝秋	富本 憲吉
大須賀 力	小笠原貞弘	岡本金一郎	沼田 一雅	大島 如雲	大須賀 喬
小倉右一郎	荻島 安二	渡邊 義知	仰木 政齋	岡部 達男	奧村 霞城
渡邊 浩行	加藤 顯清	河村 龍興	小川 雄平	小野島知文	香取 正彦
河村 清司	開發 芳光	矩 幸成	香取 秀貞	河井寛次郎	河村 靖山
笠置 季男	上條 俊介	橋江 嘉純	各務 鎮三	桂 光春	鹿島 英二
吉田 白嶺	吉田 芳明	吉田 三郎	四谷 正美	吉田源十郎	吉田醇一郎
吉田 久鑑	高田 博厚	高村光太郎	高井 白陽	高村 豐周	高野 松山
田村 密火	武井 直也	建島 大夢	龍村 平藏	田村 泰二	竹園 自耕
都賀田勇馬	津上 昌平	内藤 伸	堆朱 楊成	津田 信夫	根箭 忠雄
中川 清	中野 桂樹	中野 五一	内藤 春治	長野 塚志	村越 道守
中村 直人	中島 東洋	夏目 貞良	植松 彌吉	梅澤 隆真	海野 建夫
村田勝四郎	畠村 直久	上田 直次	海野 清	信田 洋	熊谷重太郎
野村 公雄	黒田 嘉治	國方 林三	植部 彌一	山形駒太郎	山鹿 清華
倉澤 興世	梁川 剛一	山脇 敏男	山崎覺太郎	山本 安機	山本 自熾
山根 八春	山崎 朝雲	山本 豊市	前 大峰	松田 樺六	二橋 美衡
山本 雅彦	保田 龍門	安永 良徳	船橋 舟珉	船越 春珉	越村 計三
松原 岳南	松原 松造	松田 尚之	遠藤 順治	佐藤 陽雲	澤田 宗山
牧 俊高	藤井 浩祐	藤澤 古實	櫻井 霞洞	佐々木象堂	清水大兵衛
小室 達	後藤 良	後藤 泰彦	清水正太郎	北原 三佳	北原 千鹿
後藤 清一	照田 稔	寺畑助之丞	木村 和一	木村 雨山	岸本 景春

商工省工藝展覽會

工藝審査委員會官制

大正八年五月二十二日
勅令第二百三十號

第一條 工藝審査委員會ハ商工大臣ノ監督ニ屬シ工藝展覽會出品ノ審査ヲ爲ス

工藝展覽會ニ關スル規程ハ商工大臣之ヲ定ム

第二條 工藝審査委員會ハ委員長及委員ヲ以テ之ヲ組織ス

委員長ハ商工次官ヲ以テ之ニ充ツ委員ハ商工大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ス

第三條 委員ノ任期ハ一年トス

第四條 委員長ハ會務ヲ統理シ審査ノ成績ヲ商工大臣ニ報告ス

第五條 工藝審査委員會ハ之ヲ左ノ二部ニ分ツ商工大臣必要ト認ムルトキハ部ヲ科ニ分ツコトヲ得

第一部 圖案

第二部 工藝品

委員ノ部屬ハ商工大臣之ヲ定ム

第六條 工藝審査委員會ニ幹事二人ヲ置ク商工部内ノ高等官中ヨリ商工大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ス

幹事ハ委員長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス

第七條 工藝審査委員會ニ書記五人ヲ置ク商工大臣之ヲ命ス

書記ハ上司ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

工藝審査委員會委員

委員長

委員

村瀨 直養

岸田日出刀

村上 宇一

霜鳥正三郎

畑 正吉

宮下 孝雄

工藝展覽會規程

昭和二年五月
商工省告示第十二號

第一章 總則

第一條 工藝品ノ改善發達ヲ圖ル爲毎年一回
工藝展覽會ヲ開ク、開催地、會場、會期其
ノ他ノ事項ハ其ノ都度之ヲ告示ス

第二條 本會ニ左ノ二部ヲ置ク

第一部 圖案

第二部 工藝品

第一部ニ出品スル圖案ニハ之ヲ應用シテ製
作シタル物品ヲ、第二部ニ出品スル工藝品
ニハ其ノ圖案ヲ添附スルコトヲ防グズ

第三條

出品ハ鑑定ニ合格シタルモノニ限リ
之ヲ陳列ス但シ左ノ各號ノ一ニ該當スル場
合ニ於テハ出品人一人ニ付出品二點ヲ限リ
鑑定ヲ要セスシテ之ヲ陳列ス

一 工藝審査委員會委員タル者又ハ委員タ
リシ者ガ出品シタルトキ

二 褒賞一等賞ヲ授與セラレタルコトアル
者ガ褒賞ヲ授與セラレタル出品ト同種ノ
モノヲ出品シタルトキ

三 褒賞二等賞ヲ授與セラレタル者ガ褒賞
ヲ授與セラレタル出品ト同種ノモノヲ其
ノ翌年出品シタルトキ

第四條

出品ノ搬入及搬出ニ要スル費用ハ總
テ出品人ノ負擔トス

第五條

出品ノ保管ニ關シテハ十分ノ注意ヲ
爲スト雖モ出品ノ亡失、毀損、汚染、其ノ
他ノ損害ニ對シテハ別に定ムルモノノ外其
ノ責任ニ任ゼズ

第六條

出品人ノ承諾及商工省ノ許可ヲ得ル
ニ非ザレバ出品ヲ撮影又ハ模寫スル事ヲ得
ズ商工省ハ出品ヲ撮影若ハ模寫シ又ハ之ヲ
刊行スルコトアルベシ

第二章 出品

第七條 左ノ各號ノ一ニ該當スルモノハ出品

スルコトヲ得ズ

一 製作後三年以上ヲ經タルモノ

二 本會、其ノ他ノ博覽會、共進會、展覽
會又ハ品評會ニ陳列セラレタルコトアル
モノ

(但シ本會ニ對シ出品ヲ搬運スル爲各地方ニ於
テ開ク展覽會、品評會ニ付テハ此ノ限ニアラズ)

三 販賣ノ爲店舖ニ陳列セラレタルコトアル
モノ

四 風致ヲ害スル虞アルモノ

第八條 出品セントスル者ハ附屬様式ノ申込
書ヲ商工省ニ差出スベシ

申込書ノ差出期日及出品ノ受運期間ハ其ノ
都度之ヲ告示ス

第九條 出品ヲ受運シタルトキハ出品受領書
ヲ交付ス

第十條 鑑定不合格ノ通知アリタルトキハ出
品人ハ遲滞ナク其ノ出品ヲ搬出スベシ、若
シ通知ヲ發シタル日ヨリ二十日ヲ經ルモ搬
出セザルトキハ商工省ニ於テ適宜之ヲ處分
スルコトアルベシ

第十一條 出品人ハ陳列ノ位置、配列等ニ對
シ異議ヲ申立ツルコトヲ得ズ

第三章 鑑定及審査

第十二條 陳列品ハ總テ審査ヲ受クベキモノ
トス但シ第三條各號ノ一ニ該當スル出品又
ハ學校其ノ他營利ヲ目的トセザル團體ノ出
品ハ特に出品人ノ請求アル場合ノ外ハ審査
ヲ行ハズ

第十三條 鑑定及審査ハ工藝審査委員會之ヲ
行フ

第十三條ノ二 出品鑑定ニ合格シタルトキハ
鑑定合格證ヲ交付ス

第十四條 鑑定又ハ審査ニ對シテハ異議ヲ申
立ツルコトヲ得ズ

第四章 褒賞及協賛賞

第十五條 審査ノ結果優等ノ出品ノ圖案者又
ハ製作者ニ對シテハ褒賞ヲ授與ス

前項ノ圖案者又ハ製作者ガ出品人ニ非ザル
場合ニ於テハ圖案者又ハ製作者ニ授與スル

褒賞ガ一等賞及二等賞ナル場合ニ限り協賛
賞ヲ其ノ出品人ニ授與ス

第十六條 褒賞ハ左ノ四等級トス
一等賞 二等賞 三等賞 協賛賞

第十六條ノ二 圖案ノ出品ニ付前二條ノ規定
ニ依リ褒賞ヲ受ケタル圖案者ニ對シ褒賞ノ
外左ノ賞金ヲ授與ス

一等賞 金參百圓
二等賞 金百五十圓圓
三等賞 金百圓圓
協狀 金五十圓圓

第十六條ノ三 工藝品ノ出品ニ付特別ノ事情
アル場合ニ於テハ第十五條及第十六條ノ規
定ニ依リ褒賞ヲ受ケタル製作者ニ對シ褒賞
ノ外賞金ヲ授與スルコトアルベシ

前項ノ賞金ニ關シテハ其ノ都度之ヲ告示ス

第十六條ノ四 審査ノ結果優等ノ出品ノ圖案
者又ハ製作者ノ一人ニ對シ前四條ノ規定ニ
依リ褒賞又ハ賞金ノ外商工大臣賞ヲ授與ス

第十七條 受賞ハ之ヲ拒ムコトヲ得ズ

第五章 雜則

第十八條 陳列品ハ非賣品ノ外購買ノ申込ニ
應ズルモノトス

陳列品ノ購買申込ハ本會ニ於テ之ヲ取扱フ
出品人ニ於テ本會ヲ經ズシテ出品ノ賣買取
約ヲ爲サントスルトキハ本會ノ承認ヲ受ク
ベシ

第十九條 陳列品ヲ購買セントスル者ハ其ノ
旨ヲ本會ニ申出テ代金又ハ手附金ヲ支拂フ
ベシ

前項ノ手附金ハ代價ノ三分一以上トス
手附金ヲ納付シタル買主本會ノ開會後七日
以内ニ殘額代金ヲ支拂ハザルトキハ手附金
ハ之ヲ拋棄シタルモノト看做シ當該出品人
ノ所得トス

第二十條 陳列品ハ開會中ニテ搬出スルコト
ヲ得ズ

第二十一條 出品人又ハ買主ハ陳列品ヲ開會
後指定ノ期間内ニ搬出スベシ

前項ノ期間内ニ搬出セザルトキハ商工省ニ
於テ適宜之ヲ處分スル事アルベシ

出品人又ハ買主陳列品ヲ搬出セントスル
キハ出品受領證又ハ代金領收證ヲ差出スベ
シ

第二十二條 秩序又ハ風俗ヲ紊ルノ虞アリト
認ムル者ハ入場ヲ禁止又ハ退場セシムルコ
トアルベシ

第二十三條 觀覽人ハ靜肅ヲ旨トシ且ツ係員
ノ指揮ニ從フベシ

(附屬様式)

出品申込書

私儀工藝展覽會規程ニ依リ左記目錄ノ通出
品致度此段申込候也

年 月 日 住所 職業 氏 名

出品人 氏 名

商工大臣宛

記

部名	番號	形狀	模樣	物質	品名	圖案者	製作者	箇數	代價	備考
----	----	----	----	----	----	-----	-----	----	----	----

一 番號ノ欄ニハ二點以上ノ出品ヲ爲ス場
合ニ於テ其ノ出品ヲ區別スル番號ヲ記載
スルモノトス

二 圖案ノ出品ニハ品名ノ欄ニ之ヲ應用ス
ベキ物品ヲ記載スベシ

三 一點ノ出品ガ數箇ノ物ヨリナルトキハ
箇數ノ欄ニ其ノ箇數ヲ記載スベシ

四 非賣品ハ代價ノ欄ニ其ノ旨ヲ記載スベ
シ

五 左ノ事項ハ之ヲ備考ノ欄ニ記載スベシ
イ 本規程第二條第二項ニ依リ添付スルモ
ノ

ロ 第三條各號ノ一ニ該當スルモノ否ヤ
ハ鑑定ヲ要セザル出品ニハ其ノ旨及其ノ

理由

ニ審査ヲ行ハザル出品ニシテ特ニ之ヲ請

求セントスルモノニ付テハ其ノ旨

追註文ニ應ジ得ル物ニ在リテハ其ノ旨

テ出品搬出ノ方法(會場若ハ事務所ニ於

テ受クルヤノ別)

第二十四回同工藝展覽會ノ會期、會場、

出品申込期日等ニ關スル告示

一 會期 自昭和十二年四月二十一日至同

年七月十七日

二 會場及展示期間

イ 自昭和十二年四月二十一日至同年同

月三十日迄十日間ハ東京市麹町區九ノ

丙三丁目府立東京商工獎勵館内

ロ 自昭和十二年五月十六日至同年同月

二十二日迄七日間ハ京都市岡崎公園大

禮記念京都美術館内

ハ 自昭和十二年六月四日至同年同月十

日迄七日間ハ福岡市天神町福岡縣産業

獎勵館内

ニ 自昭和十二年六月二十四日至同年同

月三十日迄七日間ハ名古屋市鶴舞公園

名古屋市公會堂内

ホ 自昭和十二年七月十三日至同年同月

十七日迄五日間ハ金澤市兼六公園石川

縣商品館内

三 本會事務ハ左ノ通之ヲ取扱フ

昭和十二年四月一日迄及同年七月二十五

日以降 商工省商務局

自昭和十二年四月二日至同年五月五日

東京會場内

自同年五月八日至同年六月二十六日

京都會場内

自同年五月三十一日至同年六月十四日

福岡會場内

自同年六月二十日至同年七月四日

名古屋會場内

自同年七月九日至同年同月二十四日

金澤會場内

四 出品ノ種類

(一) 一般出品 左ノ工藝品及之ニ應用ス

ル圖案

一 金屬器

一 陶磁器及硝子器

一 染織物(刺繍、編組物ヲ含ム)

一 漆器

一 木竹器

一 以上各種ノ綜合工藝品及之ノ他ノ工藝

品

(二) 課題出品 左ノ課題ノ工藝品

一 燈房具

一 履物類一切

一 浮キ出模樣ヲ應用シタルモノ(浮キ出

模樣トハ薄肉等ノ如ク平面ニ非ザルモ

ノヲ謂ヒ布帛類ニ在リテハ綾織等ヲ含

ム)

一 出品ハ一人ニ付五點以內トス但シ學校ノ

出品其ノ他營利ヲ目的トセザル團體ハ此

ノ限ニ在ラズ

一 出品者ハ出品申込書ヲ昭和十二年三月三

十一日迄ニ商工省商務局ニ差出スベシ

圖案ニ對シテハ工藝展覽會規程第十六條

ノ二ノ賞金ヲ授與シ工藝品ニ對シテハ左

ノ賞金ヲ授與ス

一 等賞 金百圓

二 等賞 金五十圓

課題出品ニ付テハ其ノ出品中優秀ナルモ

ノニ對シテノ課題賞ヲ授與ス但シ前項ノ

賞金ヲ授與セザルモノノニ對シテハ課題

賞ヲ授與セズ

五 課題賞 金五十圓

一 出品受理期間ハ昭和十二年四月二日ヨ

リ七日迄トス但シ鑑査ヲ要セザル出品ニ

付テハ昭和十二年四月十二日迄トス出品

ハ右期間内毎日午前九時ヨリ午後四時迄

ニ東京會場内ニ搬入スベシ驛留荷物ハ總

對ニ之ヲ取扱ハズ

六 出品品ニハ必ず各品毎ニ申込書ノ目錄

ニ記載シタルト同一ノ番號、府縣名及出

品人氏名ヲ記入シタル小札ヲ附スベシ

七 出品ノ圖案ハ強靱ナル紙又ハ布ヲ使用

シ且陳列上見苦シカラザル樣適當ノ表裝

ヲ爲スベシ

八 出品物及出品人ノ會場ヘノ往復ニ對シ

テハ官設鐵道ニ於テ運賃割引ノ特典アル

ヲ以テ必要ノ向ハ商工省商務局ニ對シテ

割引證ノ交付ヲ請求セラルベシ

九 各會場ニ於ケル初日ハ招待日トス

十 陳列品ノ賣約ハ昭和十二年四月二十一

日ヨリ其ノ申込受付申込順ニ依ル官公

廳ガ參考品トシテ必要ナル場合ハ優先賣

約ヲ爲ス

十一 京都市、福岡市、名古屋市及金澤市

ニ於テ展示スル爲移送スル場合ニ於テハ

左ノ條件ニ依ルモノトス

イ 移送ノ荷造費及運搬費ハ出品人之ヲ

負擔スルコトヲ要セズ

ロ 移送ノ爲生ジタル損害ニ付テハ商工

省ニ於テ賠償ノ責任ニ任ゼズ但シ事情酌

量スベキモノアリト認メタル場合ニ於

テハ商工省ニ於テ相當ト認ムル程度ノ

賠償ヲ爲スコトアルベシ

十二 出品人又ハ買主ガ東京又ハ金澤事務

所ニ於テ直接引取ヲ希望スルモノヲ除キ

出品物又ハ買主品ハ金澤ヨリ之ヲ發送ス

イ 金澤ヨリ發送スル場合ニ於テハ荷造

費及運搬費ハ出品人又ハ買主ノ負擔ト

ス

ロ 出品物又ハ買主品ヲ東京又ハ金澤事

務所ニ於テ直接引取ヲ希望スル場合ニ

於テハ其ノ旨出品申込書備考欄ニ明記

シ又ハ購買申込ノ際申出ヅベシ

商工省輸出工藝展覽會

商工省輸出工藝展覽會規程

昭和八年商工省告示第三十九號

昭和九年商工省告示第三十七號改正

昭和十年商工省告示第三十六號改正

昭和十一年商工省告示第十八號改正

昭和十二年商工省告示第五十四號改正

第一章 總則

第一條 工藝品ノ輸出振興ヲ圖ル爲毎年一回

商工省輸出工藝展覽會ヲ開ク

前項ノ展覽會ノ會期、會場其ノ他ノ事項ハ

其ノ都度之ヲ告示ス

第二條 出品物ハ輸出向工藝品ニシテ左記各

號ノ一ニ該當スル者ガ製造若ハ加工シタル

モノ又ハ自己ノ爲ニ製造若ハ加工セシメタ

ルモノニ限ル

一 工藝ニ關スル官公立ノ指導若ハ研究ノ

機關又ハ學校其ノ他營利ヲ目的トセザル

團體

二 審査委員又ハ審査委員タリシ者

三 出品物ノ製造、加工又ハ販賣ヲ業トス

ル者

第三條 出品物ハ鑑査ニ合格シタルモノニ限

リ之ヲ陳列ス但シ左ノ各號ノ一ニ該當スル

モノニ付テハ鑑査ヲ行ハズシテ之ヲ陳列ス

一 工藝ニ關スル官公立ノ指導若ハ研究ノ

機關ノ出品又ハ學校ノ出品

二 審査委員又ハ審査委員タリシ者ノ出品

三 三回以上第十九條ノ進歩賞又ハ有功章

ヲ授與セラレタル者ノ出品ニシテ審査委

員會ノ推薦ニ係ルモノ

第四條 出品物ノ搬入及搬出ニ要スル費用ハ

總テ出品人ノ負擔トス

第五條 出品物ノ亡失、毀損、汚染其ノ他ノ

損害ニ對シテハ別ニ定ムルモノノ外其ノ責

ニ任ゼズ

第六條 出品人ノ承諾及商工省ノ許可ヲ得ルニ非ザレバ出品物ヲ撮影又ハ模寫スルコトヲ得ズ

商工省ハ出品物ヲ撮影若ハ模寫シ又ハ之ヲ刊行スルコトアルベシ

第二章 出品

第七條 左ノ各號ノ一ニ該當スルモノハ出品スルコトヲ得ズ

一 追註文ニ應ジ得ザルモノ但シ工藝ニ關スル官公立ノ指導若ハ研究ノ機關ノ出品學校其ノ他營利ヲ目的トセザル團體ノ出品又ハ審査委員若ハ審査委員タリシ者ノ出品ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

二 商品又ハ商品見本トシテ輸出セラレタルコトアルモノ

三 風教ヲ害スル虞アルモノ

第八條 出品セントスル者ハ附屬様式ノ出品申込書ヲ商工省ニ差出スベシ

出品申込書ノ差出期日及出品物ノ受理期間ハ其ノ都度之ヲ告示ス

第九條 出品物ヲ受理シタルトキハ出品物受領書ヲ交付ス

第十條 鑑査不合格ノ通知アリタルトキハ出品人ハ運滞ナク其ノ出品物ヲ搬出スベシ通知ヲ發シタル日ヨリ十五日ヲ經ルモ搬出セザルトキハ商工省ニ於テ適宜之ヲ處分スルコトアルベシ

第十一條 出品人ハ出品物ノ陳列ノ位置、配列等ニ對シ異議ヲ申立ツルコトヲ得ズ

第十二條 陳列品ハ開會中ニ於テ搬出スルコトヲ得ズ

第十三條 鑑査及審査

陳列品ハ總テ審査ヲ受クベキモノトス但シ第三條第一號又ハ第二號ノ出品ニ付テハ審査ヲ行ハズ

第十四條 鑑査及審査ハ審査委員會之ヲ行フ

審査委員會ハ商工大臣ノ任命又ハ囑託スル

美術獎勵施設一覽

審査委員ヲ以テ之ヲ組織ス

第十五條 商工大臣ハ審査委員中ヨリ審査委員長一名ヲ命ズ審査委員長ハ審査委員會ノ事務ヲ統理シ鑑査及審査ノ成績ヲ商工大臣ニ報告ス

第十六條 出品物鑑査ノ結果ハ之ヲ出品人ニ通知ス

第十七條 鑑査又ハ審査ニ對シテハ異議ヲ申立ツルコトヲ得ズ

第十八條 審査ノ結果優等ト認メタル出品物ノ出品人ニ對シ褒賞ヲ授與ス

第十九條 褒賞ハ左ノ三種トス

一 進歩賞 意匠及技術上ノ進歩特ニ優秀ナルモノ

一 有功賞 輸出増進上ノ效果特ニ優秀ナルモノ

一 褒狀 意匠及技術上ノ進歩又ハ輸出増進上ノ效果優秀ナルモノ

第二十條 受賞ハ之ヲ拒ムコトヲ得ズ

第二十一條 外國ニ於ケル陳列會

列品ノ一部ヲ選定シ政府又ハ其ノ指定スル團體ガ外國ニ於テ開催シ又ハ參加スル陳列會、展覽會又ハ博覽會ニ商工省輸出工藝展覽會會期終了後出品人ヲシテ出陳セシムルモノトス

第二十一條ノ二 出品人ハ前條ノ出陳ヲ拒ムコトヲ得ズ

第二十一條ノ三 第二十一條ニ依リ選定セラレタル陳列品ハ商工省輸出工藝展覽會會期終了後政府ニ於テ之ヲ保管スル場合ノ外政府ノ指定スル團體ニ之ヲ引渡スモノトス

第二十一條ノ四 第二十一條ノ陳列會ノ名稱開催地其ノ他陳列會、展覽會又ハ博覽會ニ關シ必要ナル事項ハ其ノ都度之ヲ告知ス

第六章 雜則

第二十二條 陳列品ハ非貴重品及第二十一條ニ

依リ選定セラレタルモノノ外購買ノ申込ニ應ズルモノトス

前項ニ依リ購買ノ申込ニ應ジタルモノト雖モ其ノ後第二十一條ニ依リ選定セララルルニ至リタルトキハ其ノ賣約ヲ取消シ得ルモノトス

陳列品ノ購買申込ハ本會ニ於テ之ヲ取扱フ出品人ニ於テ本會ヲ經ズシテ陳列品ノ賣買契約ヲ爲サントスルコトキハ本會ノ承認ヲ受クベシ

依リ選定セラレタルモノノ外購買ノ申込ニ應ズルモノトス

前項ニ依リ購買ノ申込ニ應ジタルモノト雖モ其ノ後第二十一條ニ依リ選定セララルルニ至リタルトキハ其ノ賣約ヲ取消シ得ルモノトス

陳列品ノ購買申込ハ本會ニ於テ之ヲ取扱フ出品人ニ於テ本會ヲ經ズシテ陳列品ノ賣買契約ヲ爲サントスルコトキハ本會ノ承認ヲ受クベシ

第二十三條 陳列品ヲ購買セントスル者ハ其ノ旨ヲ本會ニ申出デ代金又ハ手附金ヲ支拂フベシ

前項ノ手附金ハ代價ノ三分ノ一以上トス

手附金ヲ納付シタル買主本會ノ開會後十五日以内ニ殘額代金ヲ支拂ハザルトキハ手附金ハ之ヲ拋棄シタルモノト看做シ當該出品人ノ所得トス

第二十四條 陳列品ハ追註文ニ應ジ得ザルモノヲ除クノ外本會ニ於テ其追註文ノ斡旋ヲ爲スコトアルベシ

第二十五條 出品人又ハ買主ハ陳列品ヲ開會後指定ノ期間内ニ搬出スベシ

前項ノ期間内ニ搬出セザルトキハ商工省ニ於テ適宜之ヲ處分スルコトアルベシ

出品人又ハ買主陳列品ヲ搬出セントスルコトキハ出品物受領證又ハ代金領收證ヲ差出スベシ

第二十六條 罰則

第二十七條 秩序又ハ風俗ヲ紊ルノ虞アル者ハ入場ヲ禁ジ又ハ退場セシムルコトアルベシ

第二十八條 觀覽人ハ靜肅ヲ旨トシ且ツ係員ノ指揮ニ從フベシ

(附屬様式)

出品申込書

私儀商工省輸出工藝展覽會規程ニ依リ左記目錄ノ通出品致度此段申込候也

年 月 日

住所 職業 氏 名

商工大臣宛

目 録 (種類)

品名	数量	東京追註文ニ應ジ得ベキ最上東上東渡價備考
色紙		
模範		
品名	数量	東京追註文ニ應ジ得ベキ最上東上東渡價備考
格	数量	東京追註文ニ應ジ得ベキ最上東上東渡價備考
少	数量	東京追註文ニ應ジ得ベキ最上東上東渡價備考
數	数量	東京追註文ニ應ジ得ベキ最上東上東渡價備考
日	数量	東京追註文ニ應ジ得ベキ最上東上東渡價備考
數	数量	東京追註文ニ應ジ得ベキ最上東上東渡價備考
日	数量	東京追註文ニ應ジ得ベキ最上東上東渡價備考
數	数量	東京追註文ニ應ジ得ベキ最上東上東渡價備考

注意事項

一 申込書ハ出品物ノ種類毎ニ認メ提出スベシ

二 出品物ハ各一點毎ニ別行ニ記人シ其ノ出品物ヲ區別スル番號ヲ記載スベシ(一點トハ販賣ノ一單位ヲ謂フ)

三 箇數ノ欄ニハ一點ノ出品物ノ箇數ヲ記載スベシ

四 非貴重品ニ付テハ東京渡價格欄ニ其ノ旨明記スルト共ニ參考價值ヲ附記スベシ

五 左ノ事項ハ之ヲ備考欄ニ記載スベシ

イ 鑑査ヲ要セザル出品物ニ付テハ其ノ旨及其ノ理由

ロ 出品物ノ附屬品及其ノ箇數

ハ 出品物搬出方法ノ項ニハ會場又ハ事務所ニ於テ出品物ヲ取取ルヤ又ハ運送ニ依リ送付ヲ受クルヤノ別ヲ記載シ出品物搬出宛先ノ項ニハ運送ノ場合ニ於テ出品人ノ希望スル運送宛先ヲ記載スベシ

昭和十二年度商工省輸出工藝展覽會ノ會期、會場、出品申込期日等ニ關スル告示

昭和十二年商工省告示第五十五號

一 會期 自昭和十二年十月九日至同年十一月

二十六日
會場及展示期間

イ 東京會場 東京市麹町區九ノ内三丁目
府立東京商工獎勵館内 自十月九日至十月十六日(八日間)

ロ 名古屋會場 名古屋市西區御幸本町通
愛知縣商工館内 自十一月一日至十一月七日(七日間)

ハ 大阪會場 大阪市東區本町橋詰町大
阪府立産業會館及大阪府立實業會館内
自十一月二十日至十一月二十六日(七日間)

三
本會ノ事務ハ左ノ通之ヲ行フ

イ 九月二十六日迄及十一月十二日以降

但シ十一月十二日以降ハ商工省輸出工業
展覽會規程第二十一條ノ規定ニ依リ選定セラ
レタル陳列品ニ限リ之ヲ展示スルモノトス
本會ノ事務ハ左ノ通之ヲ行フ

ハ 自十月二十三日至十一月十一日
名古屋會場内

ニ 自十一月十二日至十一月二十九日
大阪會場内

但シ商工省輸出工業展覽會規程第二十一
條ニ依リ選定セラレタル陳列品ニ關スル
事務ニ限ル

四
出品物ノ種類

- 一 陶磁器、硝子及其ノ他ノ窯業製品
- 一 漆器
- 一 金屬製品
- 一 染織製品
- 一 木竹製品
- 一 其ノ他ノ工藝品
- 一 以上各種ノ綜合品

五 出品人ハ出品物ノ種類毎ニ別紙ニ認メタ
ル出品申込書ヲ九月一日ヨリ九月二十日迄

ニ商工省貿易局ニ差出スベシ
出品申込書ノ提出ナキ搬入物、滞留荷物及
消費税未納品物ハ之ヲ受取セズ
六 出品物受取期間ハ九月二十七日ヨリ九月
三十日迄トス

出品物ハ右期間内毎日午前九時ヨリ午後四
時迄ニ東京會場内ニ搬入スベシ
七 出品物ニハ各一點毎ニ内装内ニ必ズ出品
申込書ニ記載シタル同一ノ番號、品名、
箇數、價格及出品人住所氏名ヲ記載シタル
荷札一葉ヲ同封スベシ

出品物ニハ各一點毎ニ、組合セ品ニシテ鑑
査ノ虞アルモノニ付テハ各箇毎ニ必ズ當該
番號及出品人氏名ヲ記載シタル小札ヲ附ス
ベシ

八 出品申込書提出後出品物ノ變更ハ之ヲ許
サズ但シ事情已ムヲ得ザル場合ニ於テ豫メ
承認ヲ得タルトキハ此ノ限ニ在ラズ
出品申込書提出後出品物ノ中止セントスル場
合ハ遲滞ナク之ヲ商工省貿易局ニ届出ヅベ
シ

九 出品物及出品人ノ會場ヘノ往復ニ對シテ
ハ官設鐵道ニ於テ運賃割引ノ特典アルヲ以
テ必要ノ向ハ商工省貿易局ニ對シ割引證ノ
交付ヲ請求スベシ

十 各會場ニ於ケル初日ハ招待日トス
十一 陳列品ノ賣約申込ハ十月九日ヨリ受付
ケ最初ノ申込者ト賣約ス

十二 名古屋會場及大阪會場ニ於テ展示スル
場合ニ於テハ左ノ條件ニ依ルモノトス
イ 移送ノ荷造費及運搬費ハ商工省之ヲ負
擔ス

ロ 移送ノ爲生ジタル損害ニ付テハ商工省
之ヲ賠償ノ責ニ任セズ

十三 出品物又ハ買上品ハ會期終了後左ノ條
件ニ依リ之ヲ發送シ又ハ直接引渡スモノト

ス
イ 發送スル場合ニ於テハ荷造費及運搬費

ハ出品人又ハ買主ノ負擔トス
ロ 直接引取ヲ希望スル場合ニ於テハ東京
又ハ名古屋ノ別ノ出品申込書又ハ賣約申
込書ニ記載スルモノトス

十四 商工省輸出工業展覽會規程第二十一條
ノ規定ニ依リ選定セラレタル陳列品ハ日本
輸出聯合會ガ市俄古ニ於テ開催スル日本工
藝品市俄古陳列會ニ左ノ條件ニ依リ出陳セ
シムルモノトス

イ 移送ノ荷造費、運搬費其ノ他ノ經費ハ
日本輸出工業聯合會之ヲ負擔ス
ロ 出陳物ノ亡失其ノ他ノ損害ニ付テハ日
本輸出工業聯合會之ガ賠償ノ責ニ任ズ

ハ 出陳物ハ賣約ノ申込ニ應ズルモノトシ
其ノ購買申込ハ日本輸出工業聯合會ニ於
テ之ヲ取扱フモノトス

陳列會終了後出陳物又ハ其ノ賣却代金ハ
東京ニ於テハ出品人ニ發送シ又ハ直接引
渡スモノトス
發送スル場合ニ於テハ爲替料金荷造費及
運搬費ハ出品人ノ負擔トス

京都市美術展覽會

本會は昭和十年三月京都市が美術獎勵
の目的を以て創設せる日本畫、洋畫、彫
刻、工藝の四部に互る綜合展で、新に展
覽會規程を設け、五月大禮記念京都美術
館に於て作品公募の上第一回展を開催、
昭和十二年第二回展を開催した。同年度
審査委員名は本文六八頁参照。

昭和十三年度審査委員

(日本畫) 石崎光瑤、橋本關雪、西村五
雲、西山翠嶂、堂本印象、登内微笑、小

野竹喬、川村曼舟、金島桂華、竹内栖鳳
中村大三郎、宇田萩郎、上村松園、山口
華楊、室本一洋、福田平八郎、福田惠一
神原紫峰、菊池契月、水田竹間
(洋畫) 大橋孝吉、太田喜二郎、鹿子木
孟郎、田中善之助、黒田重太郎、須田國
太郎
(彫塑) 沼田一雅、矢野判三、松田尙之
(工藝) 番浦省吾、神坂雪佳、山鹿清華
江馬長閑、澤田宗山、清水六兵衛、岸本
景春

(事務所 大禮記念京都美術館内)

第三回京都市美術展覽會規程

昭和十三年三月二十四日
京都市告示第六十二號

第一章 總則

第一條 本會ハ第三回京都市美術展覽會ト稱
シ京都市之ヲ主催ス

第二條 本會ハ京都ニ於ケル美術ノ進展ヲ圖
リ併セテ美術思想ノ普及及發達ニ資スル爲昭
和十三年五月一日ヨリ同月二十日迄大禮記
念京都美術館ニ於テ新製作ノ美術品及美術
工藝品ヲ展覧ス

第三條 本會ノ出品ハ之ヲ左ノ四部ニ分ツ

第一部 日本畫
第二部 洋畫(油繪、水彩畫、パステル畫
創作版畫等)

第三部 彫塑

第四部 美術工藝

第四條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

- 一 會長
- 一 副會長
- 一 委員 若干人
- 一 理事長

一 理事 若干人
一 係 員 若干人
會長ハ市長ヲ以テ之ニ充ツ副會長以下ノ役員ハ市長之ヲ任命又ハ囑託ス

第五條 本會ノ事務ヲ處理スル爲メ監務係及陳列係ヲ置ク

第六條 本會ニ顧問ヲ置キ市長之ヲ囑託ス顧問ハ會長ノ諮問ニ應ズ

第七條 出品ハ鑑査ヲ經タルモノノニ限り之ヲ陳列ス但シ委員ガ其ノ專門技術ヲ以テ製作シタルモノニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

第八條 出品ノ荷造運送ノ費用ハ總テ出品人ノ負擔トス

第九條 本會ハ出品ノ保管ニ關シ充分ノ注意ヲ爲スト雖モ避クベカラザル事由ニ因リ生ズル損害ニ對シテハ其ノ責ニ任ゼズ

第十條 陳列品ハ出品人ノ承諾ヲ得且本會ノ許可ヲ受クルニ非ザレバ撮影又ハ模寫スルコトヲ得ズ

前項ノ許可ヲ受ケタル者陳列品ヲ撮影又ハ模寫セントスルコトキハ許可證ヲ係員ニ提示シテ其ノ指揮ヲ承クベシ

本會ハ陳列品ヲ撮影、模寫シ又ハ之ヲ刊行スルコトアルベシ

第十一條 本會事務所ハ大禮記念京都美術館ニ置ク

第二章 出品

第十二條 出品人ハ京都府ニ居住スル者又ニ京都ノ美術及美術工藝界ト特ニ關係アル者ニ限ル

第十三條 出品ハ自己ノ製作シタルモノニ限ル

故人ノ製作ニ係ルモノハ其ノ相續人ニ於テ之ヲ出品スルコトヲ得

第十四條 第三部ノ作品ニシテ原型製作者ト實材製作者トヲ異ニスルコトキハ原型製作者ニ限り其ノ出品人トナルコトヲ得

第四部ノ作品ニシテ綜合製作ナルトキハ其

ノ代表製作者一名ヲ以テ出品人ト爲ス但シ代表製作者ハ共同製作者ノ氏名ヲ附記スルコトヲ得

第十五條 出品ハ一人二點以內トス

第十六條 出品ハ出品人ニ於テ適當ノ裝飾設備ヲ爲スベシ

第十七條 出品ノ形狀表裝等ノ如何ニ拘ラズ同一意見ニ依ル一箇ノ作品ト認メ得ベキモノハ二個以上ニ分離シタルモノト雖モ之ヲ一點ト看做ス

第十八條 同一意見ニ依ラザル數箇ノ作品ト雖モ之ヲ一箇ニ表裝シタルモノハ之ヲ一點ト看做ス

第十九條 出品ノ大サハ適當トス但シ陳列上特ニ設備ヲ要スルモノハ豫メ會長ノ承認ヲ受クルコトヲ要ス

第二十條 左ニ掲グルモノハ之ヲ出品スルコトヲ得ズ

一 製作後三年以上ヲ經タルモノ

一 既に公開展覽會ニ於テ陳列シタルモノ

一 會長ニ於テ風教ニ害アリト認ムルモノ

一 陳列困難ナルモノ

一 其ノ他會長ニ於テ陳列品トシテ不適當ト認ムルモノ

第二十一條 出品ハ本會受付ニ之ヲ搬入スベシ

第二十二條 出品ノ搬入期日ハ四月二十四日及同二十五日（毎日午前九時ヨリ午後五時迄）トス但シ委員ノ出品ニ限り四月二十四日ヨリ同二十七日（毎日午前九時ヨリ午後五時迄）トス

第二十三條 出品ニハ所定ノ書式ニ依ル申込書ヲ添附スベシ

故人ノ作品ヲ出品スル場合ニハ前項ノ申込書中解説書欄ニ製作者ノ氏名及履歷ヲ記入スベシ

第二十四條 本會ニ於テ出品ヲ受理シタルトキハ直ニ預リ設ヲ交付ス

前項預リ設ヲ紛失シタルトキハ書面ヲ以テ直ニ其ノ旨本會ニ届出ヅベシ

前項届出ヲ受理シタルトキハ直ニ其ノ旨通知ス

第二十五條 受理シタル出品ハ之ヲ撤回スルコトヲ得ズ但シ會長ノ許可ヲ得タルトキハ此ノ限ニ在ラズ

第二十六條 鑑査ノ上陳列スルコトヲ得ザルニ至リタル出品ニ付テハ展覽會開會後五日以內ニ出品人ニ於テ之ヲ撤出スベシ

前項ノ期間內ニ撤出セザルトキハ本會ニ於テ適當ノ處置ヲ爲スコトアルベシ

第二十七條 出品人ハ本會ニ於テ定メタル陳列品ノ位置、配列等ニ對シ異議ヲ申立ツルコトヲ得ズ

第二十八條 出品ノ撤出期間ハ開會後十日以內トス

前項ノ期間內ニ撤出セザルトキハ本會ニ於テ適當ノ處置ヲ爲スコトアルベシ

第二十九條 出品ノ撤出ヲ爲シ又ハ返還ヲ受ケントスルコトキハ出品人ハ預リ設ヲ返還スベシ

預リ設ヲ紛失シタル出品人出品ノ返還ヲ受ケントスルコトキハ第二十四條第三項ノ預リ設紛失届出受理ニ關スル通知書及出品返還受領證ヲ提出シテ其ノ返還ヲ受クベシ

第三章 鑑査及審査

第三十條 出品ノ鑑査及審査ヲ爲ス爲メ各部ニ審査委員ヲ置キ委員ノ中ヨリ會長之ヲ囑託ス

前項各部ニ審査主任ヲ置キ審査員之ヲ互選ス

第三十一條 出品ノ鑑査及審査ハ各部ニ就キ審査委員之ヲ行フ

顧問ハ鑑査及審査ニ參與スルコトヲ得

鑑査及審査ノ議事ハ之ヲ公開セズ

第三十二條 鑑査ニ於テハ出品ニ就キ陳列スベキモノヲ定メ審査ニ於テハ陳列品ニ就キ

優秀ナルモノヲ推奨ス

第三十三條 鑑査及審査ノ方法ハ各部審査委員ニ於テ之ヲ定ム

第三十四條 陳列品ハ委員ノ出品ヲ除キ總テ審査ヲ受クルモノトス

第三十五條 出品人ハ鑑査及審査ニ對シ異議ヲ申立ツルコトヲ得ズ

第四章 授賞及買上

第三十六條 本會ハ審査ニ於テ優秀ト認メタル出品ニ對シ授賞ス

第三十七條 出品ハ大禮記念京都美術館ニ於テ之ヲ買上グルコトアルベシ

第五章 賣約

第三十八條 陳列品ハ本會ニ於テ手数料ヲ徴セズシテ賣買契約ヲ取扱フモノトス

出品人ニシテ本會ヲ經ズシテ賣買契約ヲ爲サントスルコトキハ豫メ其ノ旨本會ノ承認ヲ受クベシ

第三十九條 出品人ニシテ價格表記ヲ爲サザルモ賣買契約ニ應ズベキ意思アルトキハ其ノ價格ヲ豫メ本會ニ届出ヅベシ

前項ノ場合ニ於テハ出品目錄等ニ應需ト記載スベシ

第四十條 賣買代金ハ即時拂トス但シ代價ノ三分ノ一以上ノ手附金ヲ以テ賣買契約ヲ爲スコトヲ得

前項ノ買主ガ開會後七日以內ニ殘餘代金ノ支拂ヲ爲サザルトキハ賣買契約ハ之ヲ取消シタルモノト看做ス此ノ場合ニ於テハ手附金ハ當該出品人ノ所得トス

第四十一條 賣買契約ヲ爲シタルトキハ陳列品ニ其ノ旨表示スルモノトス

第四十二條 出品人ハ特別ノモノヲ除クノ外陳列品ニ代價ヲ附スベシ其ノ之ヲ變更セントスルコトキハ豫メ其ノ旨本會ニ届出ヅベシ

第四十三條 出品人代理人ヲ以テ陳列品又ハ賣買代金ノ受領ヲ爲サントスルコトキハ本會ニ委任狀ヲ提出スベシ

美術獎勵施設一覽

第四十四條 陳列品中本會ニ於テ賣買契約ヲ爲シタルモノニ付テハ買得者ニ於テ閉會後七日以内ニ之ヲ搬出スベシ

前項ノ場合ニ於テハ賣買代金ノ受領證ヲ提出シ自己ノ買得者タルコトヲ證明スルコトヲ要ス

第四十五條 閉會後陳列品ノ搬出運送等ニ關シ買得者ノ依頼アルトキハ本會ハ買得者ノ費用ヲ以テ之ニ應ズルコトアルベシ

第四十六條 第二十九條ノ規定ハ本會ニ於テ取扱ヒタル賣買代金ヲ交付スル場合ニ之ヲ準用ス

第六章 觀覽

第四十七條 觀覽料ハ左ノ區分ニ依リ之ヲ徵收ス

- 一 大人 一人ニ付 金二十錢
- 一 小人 一人ニ付 金十錢
- 一 學生團體 (二十人以上) 一人ニ付 金十錢
- 一 兒童團體 (二十人以上) 一人ニ付 金五錢

第四十八條 前條ニ定ムルモノノ外觀覽ニ關シテハ大禮記念京都美術館使用條例ヲ準用ス

附 則

本規程ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

名古屋美術展覽會

名古屋市の主催により同市美術獎勵の爲昭和四年以來毎秋十一月、名古屋市鶴舞公園美術館及徳川園に於て、日、洋、彫、工、書の五部に互る公募展覽會を開催、昭和十二年春、名古屋汎太平洋平和博覽會美術館開催の爲、昭和十一年度は特に展覽會を中止した。

〔會長〕 名古屋市長
〔事務所〕 名古屋市役所社會教育課

同展覽會規定拔萃

- 一 本會ノ出品ハ左ノ五部ニ分ツ
- 一 日本畫
- 一 西洋畫
- 一 彫 塑
- 一 工 藝
- 一 書 道 (一般部、學生部ニ分ツ)
- 一 出品ハ各部トモ一人三點以内トス
- 一 出品ハ各自ニ於テ裱張、額縁、表装ヲナスモノトス、書道ハ特ニ依頼シタルモノノ外ハ大畫臺以下ノ條幅ニ限ル
- 一 出品ハ總テ審査員ノ鑑査ヲ經テ陳列ス但シ本會ヨリ特ニ依頼シタル作家ノ出品ニ限り鑑査ヲナサズ
- 一 搬入、搬出ニ要スル費用ハ出品者ノ負擔トス
- 一 出品物一點ニ付手数料トシテ金參拾錢ヲ徵收ス、但シ入選セザル場合モ右手手数料ハ返戻セズ

朝鮮美術展覽會

朝鮮に於ける美術の發達を裨補する爲大正十一年より毎年一回春季に總督府の事業として開催今日に及ぶ。

昭和十三年度審査委員

〔第一部 東洋畫〕 橋本關雪、矢澤弦月

〔第二部 西洋畫〕 和田英作、伊原宇三郎

〔第三部 彫塑、工藝〕 高村豐周

〔事務所、朝鮮總督府社會教育課〕

同展覽會規程

第一章 總 則

- 第一條 朝鮮ニ於ケル美術ノ發達ヲ裨補スル爲毎年一回朝鮮美術展覽會ヲ開ク
- 會場、事務所及會期ハ其ノ都度之ヲ公告ス
- 第二條 本會ハ之ヲ左ノ三部ニ分ツ

第一部 東洋畫

第二部 西洋畫

第三部 彫塑及工藝

第三條 出品ハ鑑査ヲ經タルモノニ限リ之ヲ陳列ス但シ左ノ各號ノ一ニ該當スル出品ハ鑑査外トス

一 朝鮮美術審査委員會委員 (以下委員ト稱ス) 又ハ委員タリシ者ノ出品

二 朝鮮美術展覽會參與又ハ參與タリシ者ノ出品但シ一點ニ限ル

三 朝鮮美術審査委員會委員長ニ於テ推薦シタル者ノ出品但シ一點ニ限ル

四 前同ノ朝鮮美術展覽會ニ於テ特選セラレタル者ノ出品但シ一點ニ限ル

第五條 出品ノ荷造及運送費ハ總テ出品人ノ負擔トス

第六條 本會ハ出品ノ保管ニ關シ十分ノ注意ヲ爲スト雖出品ノ紛失又ハ損害ニ對シ一切其ノ責任セズ

第七條 出品人ノ承諾ヲ得且本會ノ許可ヲ得ルニ非サレハ出品ノ撮影又ハ模寫ヲ爲スコトヲ得ス

前項ノ許可ヲ得タル者會場ニ於テ出品ノ撮影又ハ模寫ヲ爲サストキハ許可證ヲ事務員ニ提示シテ其ノ指揮ヲ受クヘシ

本會ハ出品ノ撮影模寫シ又ハ之ヲ刊行スルコトアルヘシ

第六條ノ二 朝鮮美術展覽會ニ評議員及參與ヲ置クコトアルヘシ

評議員ハ朝鮮美術展覽會ニ關シ朝鮮總督ノ諮問ニ應ジテ意見ヲ陳述ス

參與ハ朝鮮美術審査委員會委員長ノ指揮ヲ承ケ出品ノ鑑査及審査ノ事務ヲ補助ス

評議員ハ朝鮮ニ於ケル美術ニ關シ功勞アル者又ハ美術ニ關シ學識經驗アル者ノ中ヨリ朝鮮總督之ヲ囑託ス

參與ハ朝鮮美術展覽會ニ於テ選實セラレタル者ノ中ヨリ其ノ都度朝鮮總督之ヲ囑託ス

第二章 出 品

第七條 出品人ハ出品ノ製作者、製作者死亡シタルトキハ其ノ家族ニ限ルモノトス

第七條ノ二 出品ノ製作者ハ左ノ各號ノ一ニ該當スル者ナルコトヲ要ス

一 朝鮮ニ本籍又ハ住所ヲ有スル者

二 朝鮮ニ三年以上居住シタル者

三 朝鮮美術展覽會ニ於テ三回以上特選セラレタル者

第七條ノ三 第三條但書第一號及第二號ノ出品ニ付テハ前二條ノ規定ヲ適用セズ

第八條 同一人ノ出品ハ第一乃至第三ノ各部ニ付三點以内トス

第九條 出品ノ形狀表装等ノ如何ニ拘ラス同一意匠ニ依ル一箇ノ作品ト認ムヘキモノハ二箇以上ニ分離セルモノト雖之ヲ一點ト看做ス

前項ノ事實ハ委員長ノ認定ニ依ル

同一意匠ニ依ラサル數箇ノ作品ト雖之ヲ一箇ニ表装シタルモノハ之ヲ一點ト看做ス

第十條 出品ハ一點ニ付幅四間ヲ超ユルコトヲ得ス

各出品人ノ占メ得ヘキ陳列壁面ハ各部毎ニ幅四間迄トス

第三部ノ出品ハ立體ニ在リテハ一點ニ付十尺平方以内ノ場所ニ陳列シ得ルモノニ限ル

同一部ニ於ケル一人ノ出品ニ點以上ニシテ其ノ幅合セテ四間ヲ超ユルモノハ其ノ出品ハ一定日數毎ニ陳列替ヲ爲スコトアルヘシ

會場ノ都合ニ依リ出品ノ全部ヲ同時ニ陳列スルコト能ハスト認ムルモノハ一定日數毎ニ陳列替ヲ爲スコトアルヘシ

陳列替ニ關スル事項ハ委員長之ヲ決ス

出品ノ寸高キニ過キ陳列ニ不便アリト認メタルモノハ其ノ表装ヲ適宜變更セシムルコトアルヘシ

第十一條 左ニ掲ケタルモノハ出品スルコトヲ得ス

- 一 製作後五年以上ヲ經タルモノ
- 二 本會ニ陳列シタルコトアルモノ
- 三 治安風教ニ害アリト認ムルモノ
- 第十二條 出品ヲ爲サントスル者ハ甲號様式ノ出品願書ヲ添ヘテ作品ヲ事務所ニ差出スヘシ其ノ期日等ハ別ニ之ヲ公告ス
- 作品ニハ一點毎ニ命題及出品人氏名ヲ記シタル出品札ヲ貼附スヘシ
- 第十三條 事務所ニ於テ出品ヲ受領シタルトキハ直ニ受領書ヲ交付ス
- 第十四條 出品ハ額面ト爲シ又ハ枠、縁ヲ附スル等出品人ニ於テ適當ノ裝飾設備ヲ爲スヘシ
- 第十五條 鑑査ノ結果陳列セサルモノト決定シタルモノニ付テハ第二十三條第三項ノ公告アリタル日ヨリ十日内ニ出品人ニ於テ之ヲ撤出スヘシ十日ヲ經ルモノヲ撤出セサルトキハ本會ニ於テ相當ト認ムル處置ヲ爲スモ出品人ハ異議ヲ申立ツルコトヲ得ス
- 第十六條 本會ニ於テ定メタル陳列品ノ位置配列等ニ對シ出品人ハ異議ヲ申立ツルコトヲ得ス

第三章 鑑査及審査

- 第十七條 朝鮮美術審査委員會委員ハ委員長ノ定ムル所ニ依リ第一乃至第三ノ各部ニ所屬ス
- 各部ノ委員ハ其ノ互選ニ依リ主任一人ヲ定ム
- 第十八條 出品ノ鑑査及審査ハ各部ニ就キ委員之ヲ行フ
- 第十九條 陳列品ハ總テ審査ヲ受クルモノトス但シ第三條但書第一號及第二號ノ出品ニ付テハ此ノ限ニアラス
- 第二十條 出品人ハ鑑査又ハ審査ニ對シ異議ヲ申出ツルコトヲ得ス
- 第二十一條 鑑査及審査ハ其ノ部ニ屬スル委員半数以上ノ出席アルニ非サレハ之ヲ行フコトヲ得ス
- 第二十二條 委員ハ各出品ニ就キ出品願書ニ記載シタル解説ヲ參照シテ鑑査及審査ヲ爲スモノトス
- 第二十三條 鑑査ハ出品ニ就キ陳列スヘキモノヲ決定スルモノトス
- 前項ノ決定ハ出席委員過半数ノ同意ニ依ル
- 第二十四條 第一項ノ決定ハ之ヲ公告ス
- 第二十五條 鑑査ハ陳列品ニ就キ優秀ナルモノヲ特選スルモノトス
- 委員ハ各自特選スルヲ相當ト思料スル作品ヲ選出シ之ニ關スル意見ヲ附シテ主任ニ提案シ主任ハ委員ノ提案ヲ取極メ之ヲ委員會ニ附議シ特選品トナスコトノ適否ヲ審議評定ノ上之ヲ委員長ニ報告スルモノトス
- 第二十六條 委員長ハ各部ノ報告ニ依リ特選品ヲ確定シ之ヲ朝鮮總督ニ報告スルモノトス
- 第四章 特選及褒賞
- 第二十七條 特選セラレタル作品ニ付テハ朝鮮總督ハハ號様式ニ依リ其ノ出品人ニ特選狀ヲ授與ス
- 朝鮮總督ハ特選狀ヲ授與シタル者ニ賞狀又ハ賞金ヲ授與スルコトアルヘシ
- 第二十八條 同一人ニシテ同一部ニ二點以上出品シタル場合ニ於テハ其ノ中優秀ト評定セラレタル一點ニ就テノミ特選ス
- 第五章 賣約及撤出
- 第二十九條 陳列品ハ本會ニ於テ其ノ賣買契約ヲ取扱フモノトス出品人ニ於テ本會ヲ經スシテ賣買契約ヲ爲サントスルトキハ本會ノ承認ヲ經ヘシ
- 第三十條 陳列品ヲ購買セムトスル者ハ代價ノ三分ノ一以上トス
- 附項ノ賣買契約ヲ爲スコトヲ得手附金ハ前項ノ買主カ開會後七日以内ニ殘餘代金ノ支拂ヲ爲ササルトキハ手附金ハ之ヲ拋棄シタルモノト看做シ當該出品人ノ所得トス
- 第三十一條 賣買契約ヲ爲シタルトキハ出品札ニ其ノ旨ヲ貼紙スルモノトス
- 第三十二條 出品人ニ於テ陳列品ノ代價ヲ變更セムトスルトキハ其ノ旨事務所ニ届出ツヘシ
- 第三十三條 出品人ニ於テ出品及代金受領等ノ爲特ニ代理人ヲ置キタルトキハ其ノ住所氏名ヲ具シ事務所ニ届出ツヘシ
- 第三十四條 陳列品ハ開會中ニ之ヲ撤出スルコトヲ得ス
- 第三十五條 出品ノ撤出期間ハ開會後七日内トス若期間内ニ撤出セサル者アルトキハ本會ニ於テ相當ノ處置ヲ爲スヘシ
- 第三十六條 陳列品中賣約済ノモノハ開會後前條ノ期間内ニ買主ニ於テ之ヲ撤出スヘシ前項ノ場合ニ於テハ代金受取證ヲ提示シ自己ノ買主タルコトヲ證明スルコトヲ要ス

- 第六章 關 覽
- 臺灣美術展覽會
- 臺灣に於ける美術の發達を裨補するの目的を以て昭和二年より毎年秋季に臺灣教育會主催の下に公募展を開催し來り、昭和十一年十月第十回を重ねた。十二年度は都合に依り中止。
- 〔會長〕 森岡二郎
- 〔副會長〕 島田昌勢
- 〔昭和十一年度審査員〕 (委員長) 幣原坦 (委員) 結城貞松、村島酉一、木下源重郎 (以上東洋畫) 梅原龍三郎、伊原宇三郎、鹽月善吉 (以上西洋畫)
- (事務所 臺灣總督府文教局社會課内)

- ### 同展覽會規則拔萃
- 一、臺灣美術展覽會は臺灣に於ける美術の發達を裨補するを以て目的とし毎年一回秋季之を開催す
 - 一、會場は其の都度之を發表す
 - 一、出品は東洋畫及西洋畫の二種とす
 - 一、出品は自己の製作したるものに限る
 - 一、出品は臺灣に居住する者其の他臺灣に縁故を有する者とす
 - 一、出品は一人三點以内とす
 - 一、出品を爲さんとする者は其の出品に本會所定の出品申込書を添へて本會々場に搬入し所定の出品受領證を受くべし
 - 一、搬入期日は別に之を發表す
 - 一、出品には一點毎に命題及出品人氏名を記したる紙片を貼付すべし
 - 一、出品は額面となし又は枠、縁を附する等出品人ニ於テ適當な裝飾設備を爲すべし
 - 一、陳列品は會期終了後地方都市に搬出し展覽に供することあるべし
 - 一、出品人にして前項の移動展覽に應じ難き事由ある場合は出品申込書に其の旨を明記すべし
 - 一、鑑査及審査は東洋畫、西洋畫の二部に別ちて之を行ふ
 - 一、鑑査は出品に就キ陳列すべきものを定め審査は陳列品に就キ優秀なるものを選出するものとす
 - 一、本會は陳列品中卓越せるものに對し賞を授く、賞は賞狀及賞金とす
 - 一、陳列品は本會に於テ其の賣買契約を取扱ふものとす
 - 一、即時に代金を支拂はざるときは手附を以て賣買契約を爲すことを得手附の金額は代價の五分の一以上とす

美術獎勵資金

朝日賞委員會

大阪市北區中之島三丁目三番地 朝日新聞社

昭和四年一月創設、國家社會に對する貢獻の顯著なる者に贈る。文化賞、奉公賞、體育賞の三種あり、文化賞は左の部門に分つ。イ藝術、ロ科學、ハ航空、ニ新聞（記者としての業績による）ホ著作（其他。朝日賞は賞牌を以てし別に賞金（一千圓）を添ふ。審査は、社長の名指する委員長及び委員之に當り重役會に於て決定する。毎年一月十日其前年度分を發表。但し臨時に授賞する事がある。

京都市池田桂山美術獎勵基金

昭和十年四月十八日
市告示第百七十八號

第一條 本市ニ於ケル美術獎勵ノ爲池田桂山美術獎勵基金ヲ設置ス

第二條 本基金ノ收入ハ美術獎勵ノ費用ニ充ツルモノトシ、毎年豫算ヲ以テコレヲ定ム

附則 本規定ハ公布ノ日ヨリコレヲ施行ス

元金 一萬圓、利子ヲ使用ス
設立 昭和十年四月

黒田子爵記念美術獎勵資金

委員會

麴町區永田町永樂俱樂部内

故子爵黒田清輝の歿後、門下其の他で

子爵を記念するため寄附金を募り創立。金額元金一萬一千餘圓。美術獎勵を目的として昭和四年より毎年本資金の利息より五百圓限度で洋畫一點を買上げ、東京帝室博物館に寄贈し、昭和十二年秋第十回に至つた。

（會長）宮田光雄（委員）石井柏亭、岡田三郎助、小倉右一郎、小林萬吾、坂井犀水、永地秀太、藤島武二、松本幹一郎、正木直彦、米山梅吉、和田英作

佐分賞委員會

東京市瀧野川區西ケ原
一〇八一 佐分純一方

故佐分眞の遺志に基く佐分家の寄附資金に依り洋畫壇新人獎勵の目的を以て毎年四名以内の作家を銓衡し之に賞金を贈る。銓衡の方法は廣く洋畫壇の諸氏の投票に基いて同會銓衡委員が決定する。本賞は年額一千圓、繼續期間十年間とし、賞金贈呈の時期は第一回を昭和十二年四月二十三日とし、爾後毎年之に準ずる。〔銓衡委員〕藤島武二、梅原龍三郎、安井曾太郎、藤田嗣治、長谷川昇〔委員〕伊藤廉、伊原宇三郎、福島繁太郎、小寺健吉、益田義信、宮田重雄、山喜多二郎、太、窪田照三、田口省吾

昭和洋畫獎勵會

東京市大森區田園調布上沼部
二〇七 電田園調布二二〇四

財團法人組織。昭和二年設立、洋畫獎勵のため毎年公私展覽會に於ける優秀なる作家二名を選定して賞金を贈る。尙本

寄附行爲は昭和二十年十二月末日を以て終了の豫定。

〔評議員〕米山梅吉、白瀧幾之助、石井

美術研究施設・團體一覽

美術研究施設

美術研究所（官立）

東京市下谷區上野公園
電下谷三四八七

當所は故黒田清輝子爵の遺志に基き其の遺産を以て開始されたもので、昭和五年開設の準備成ると共に同子爵遺言執行人より建物、諸設備及事業の一切を政府に寄附移管し、同年六月政府は之を帝國美術院附屬として設置した。昭和十年六月帝國美術院改革に伴ひ新に美術研究所官制を制定、文部省所管、帝國美術院に附置され、次で昭和十二年六月官制改正を見、文部大臣直接監督の下に獨立して既定の事業を進めることとなつた。其の目的は美術に關する事項の學術的調査研究に在り、傍ら美術に關する研究資料を蒐集して美術圖書館的な貢獻をなさんとし、又調査研究の結果を出版、展覧、講演等に依つて發表せんとするものである。現在著手しつゝある事業は大略次の如くである。

一、研究資料蒐集
美術品の寫眞其の他の複製、摸寫摸造等の標本、圖書雜誌其の他の資料

滿吉、丸山健作、石川寅治、長谷川昇、和田英作、小林萬吾、南薰造、山本鼎、有馬壬生馬、米山桂三

一、古美術に關する調査研究

東洋及日本美術に關する美術史的調査研究、東洋美術總目錄、落款印譜、東洋美術家辭典、美術關係史料、美術關係文獻目錄等の編纂

一、明治大正時代美術の調査研究

明治大正美術史の編纂

一、現代美術に關する調査研究

現代美術及美術界に關する調査、日本美術年鑑の編纂

一、其他美術行政及教育並に美術の技法及材料に關する調査研究

一、刊行物頒布

「美術研究」月刊「日本美術年鑑」「日本美術資料」毎年一回刊行、其の他臨時「美術研究資料」「研究報告」を刊行頒布する

一、研究資料閲覧及展覧

研究者の爲に當所蒐集の圖書、寫眞、其他の研究資料の閲覧を許可する、又隨時陳列室に於て特殊なる資料を展覧して一般に觀覽せしめる（便覽四九頁參照）

一、黒田清輝作品陳列

所内に黒田子爵記念室を設け、其の作品を陳列して定時（毎週木曜日午後）に公開する。

〔所長〕矢代幸雄〔所員〕矢代幸雄、和田新、正木篤三〔助手〕中川千咲、豊岡益人、倉田平吉〔書記〕木下龍也〔囑託〕田中喜作、菅沼貞三、大給近清、丸尾彰三郎、富永惣一、堀井三友、田中豊藏、中根勝、岩淵幸左衛門、望月信成、渡邊一、隈元謙次郎、福井利吉郎、兒島喜久雄、西村敬二郎、山田智三郎、梅津次郎、小高根太郎、須賀利雄、筒崎謙齋、白畑よし、林眞彦

美術研究所官制

昭和十年六月一日勅令第四百十八號
改正昭和十二年勅令第二百八十一號

第一條 美術研究所ハ文部大臣ノ管理ニ屬シ美術ニ關スル事項ノ調査研究ヲ掌ル

第二條 (削除)

第三條 美術研究所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長

所員 專任三人 奏任

助手 專任三人 判任

書記 專任一人 判任

第四條 所長ハ所員ノ中ヨリ文部大臣之ヲ補ス

第五條 所長ハ文部大臣ノ命ヲ承ケ所務ヲ掌ル

第六條 所員ハ所長ノ命ヲ承ケ所務ヲ掌ル

第七條 助手ハ上司ノ指揮ヲ承ケ所務ニ從事ス

附則 書記ハ上司ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

東方文化學院

東京研究所 小石川區大塚町五六ノ一
五 電大塚五五四五ノ一六
京都研究所 左京區北白川小倉町五〇
電上五〇五〇
古書複製事業 小石川區大塚町五六ノ一
一五 電大塚五五四四六

昭和三年十月東京、京都兩帝國大學及其他の東方文化研究者三十餘名が發起人となつて東方文化の研究、その成果及その資料の發表、有益な古書の複製、講演會の開催等を目的とする東方文化學院創立の事を議し直ちに同學院規定を定め、昭和四年四月外務省の補助により事業を開始した。規定に依る東京、京都兩研究所は初め各該地帝國大學内に設けられ服部宇之吉博士東京研究所主任となり、狩野直喜博士京都研究所主任となつた。後京都研究所は昭和五年十一月現所在地に建築竣成して移轉し、東京研究所は昭和八年九月現所在地の新館に移轉した。兩研究所の完成と共に、主任の稱は所長と改められた。(昭和十三年四月、兩研究所は分離獨立。東京研究所は東方文化學院と改稱、京都研究所は東方文化研究所と改稱し、東方文化學院長には服部宇之吉が、東方文化研究所長には松本文三郎が就任した)

現在迄に兩研究所に於て研究員及助手の研究結果を刊行したものの中美術及考古學に關係せるものは左記の通りである。

題名 研究者名
支那古器圖攷(兵器篇) 原田 淑人

支那古器圖攷(舟車馬具篇) 駒井 和愛
遼金時代の建築と其佛像 關野 貞
圖版上下二冊 竹島 卓一

燉煌畫の研究 松本 榮一
殷墟出土白色土器研究 梅原 末治
桜葉の考古學的考察 同
支那山水畫史 伊勢專一郎

戰國秦式銅器の研究 梅原 末治
支那漢以前の古鏡の研究 同
上記の外昭和五年度より兩研究所は各々東方學報なる學報を年一回發行して居る。

〔理事長〕服部宇之吉〔理事〕宇野哲人
荻野伸三郎、瀧精一、狩野直喜、羽田亨
濱田耕作
〔東京研究所長〕服部宇之吉〔評議員〕池内宏、市村瓚次郎、伊東忠太、宇野哲人、荻野伸三郎、小柳司氣太、古城貞吉、鹽谷溫、白鳥庫吉、杉榮三郎、瀧精一、常盤大定、鳥居龍藏、中田薫、服部宇之吉、原田淑人

〔京都研究所長〕狩野直喜〔評議員〕石橋五郎、小川琢治、小島祐馬、狩野直喜、新城新藏、新村出、鈴木虎雄、高瀬武次郎、羽田亨、濱田耕作(逝去)、松本文三郎、矢野仁一

〔古書複製事業主任〕荻野伸三郎〔委員〕荻野伸三郎、杉榮三郎、服部宇之吉、狩野直喜、新村出、松本文三郎

東方文化學院規程抜萃
一、本學院は東方文化學院と稱す
二、本學院は支那文化の研究及其の普及を圖

り一般文化の向上に資するを以て目的とす
三、本學院は前條の目的を達する爲左の事業を行ふ

一 研究所の經營
二 研究及研究資料の發表
三 有益なる古書の複製
四 其他理事會の決議に依り必要と認めたる事業

四、本學院は事務所を東京市小石川區大塚町五十六番十五號に置く
五、東京及京都に夫々研究所を置く
六、東京及京都兩研究所(以下單に兩研究所と稱す)に夫々評議員若干名を置き研究に關する事業其他に付き審議す

研究所長は當該研究所評議員會を招集し其の議長となる
七、本學院に古書複製委員若干名を置き古書複製に關する事業を審議す
八、本學院に理事七名を置き左記の者を以て之に充つ

一 兩研究所長
二 兩研究所評議員中より互選せられたるもの各二名
三 古書複製委員中より互選せられたるもの一名

十一 理事中より理事長一名を互選す
理事長は本學院を代表し理事會の議長となり理事會の委任したる常務を處理す
理事事故障あるときは其の指名したる理事其の職務を代理す

十四、兩研究所に夫々研究所長一名を置き任期は三年とし當該研究所評議員中より之を互選す
研究所長は當該研究所の事務を統轄し理事會の委任したる事項を處理す
十五、研究の爲左の職員を置き兩研究所に分屬せしむ

研究員 四十名以内

指導員 若干名

助手 二十名以内

十六、研究員及指導員は各研究所評議員會の推薦により理事會の議を経て研究所長之を委嘱す

助手は研究員の推薦により研究所長之を命ず

十九、本學院の經費は政府の交付金寄附金其の他の収入を以て之を支辨す

日本古文化研究所

事務所 東京市麹町區丸之内
九ビル四階四五七區

日本古文化に關する諸般の事項を調査研究の上、その成果を印刷に附して當該學界に頒布し、又研究生を採用し有爲の古文化研究者を養成するを目的とす。黑板博士先づその設立を主唱し、近畿二府五縣の知事の賛成を得て昭和九年四月奈良市に設置された。爾來近畿地方を初め岐阜、群馬、九州等に於ける諸問題を調査研究しつゝあり、第一回より第七回迄の報告書は既に學界に頒布した。

美術研究團體 (五十音順)

浮世繪同好會

東京市日本橋區通三ノ五 電日本橋
三八三六、三八三七、二九五(直通)

昭和九年十一月日本橋區本町經濟俱樂部に於て發會。「浮世繪を主とし、江戸文化並に一般藝術の研究に資し、浮世繪同好者の親睦と斯界の發展を圖る」を目的とす。十一年三月より月刊雜誌「浮世繪界」を發行し、又毎月講演會を開く。

〔代表者〕藤懸靜也〔幹事〕檜崎宗重

越中史蹟古美術調査會

富山市稻荷一四
堀井三友方電三七〇一

昭和十一年七月發會。越中に於ける史蹟並古美術を調査研究し、大和その他各地の古代文化遺跡と比較考究してその特質を明らかにし、以て斯界に貢獻するを目的とす。事業として一、隔月の縣下各地史蹟、古美術の實地踏査二、遺跡、出土品、古美術品の寫眞撮影並頒布三、臨地講演會の開催四、史蹟古美術解説書の頒布等を行ふ。

〔會長〕片口安太郎〔常任委員〕堀井三友

藝苑巡禮

東京市澁野川區
西ク原町一八七

昭和三年五月創立。古美術研究を目的として、古美術品の巡禮鑑賞會を催し、其の會數を重ねること、昭和十一年迄に六十三回に及ぶ。其他、古美術展覽會、美術家物故法會、美術史址保存事業等を行ふ。

建築史研究會

東京市大森區新井宿一四
七二 電大森二六四七

昭和十二年五月組織。同志相寄り建築史並に關係學科の研究をなし、又單行本定期刊行物出版等に依り斯學の向上發達を期せんとす。機關誌「建築」を發行。

〔顧問〕伊東忠太〔同人〕足立康、大岡實、福山敏男、竹島卓一、谷重雄、關野克、太田博太郎

古美術自然科學研究會

東京市麻布區市兵衛町二ノ
一國華社內 電赤坂八五二

昭和九年創設。財團法人原田積善會の後援を以て事業を行ひ初めは古美術保存に關する研究をなしたが、現在古美術材料其他を物理學、化學、生物學、工學等の上より學術的に研究するを目的とす。昨年迄は古美術保存研究會と稱してゐた。

〔代表者〕瀧精一

〔會員〕内田祥三、片山正夫、柴田桂太、柴田雄二、瀧精一、中村清二、松原行一、大槻虎男、大賀一郎、大野和男、森徹、吉澤忠

考古學會

東京市下谷區上野公園
帝室博物館內 電下谷六

明治二十八年創立。考古學の研究團體で、初代會長は三宅米吉が就任した。毎月一同東京便宜の地に於て例會を開催する。創立以來研究雜誌「考古學會雜誌」「考古」「考古界」を發行し明治四十三年九月「考古學雜誌」と改名して現在に及ぶ。

〔會長〕黑板勝美〔副會長〕濱田耕作〔過去〕〔幹事〕佐々木三十郎、關根龍雄、高橋勇、野間清六、原田淑人、三上次男

森貞成〔顧問〕二名〔評議員〕四十四名

國華社清話會

東京市麻布區市兵衛町
二ノ一 電赤坂八五二

明治四十三年創立。國華社社友有志相會して美術に關する清話會を催す。古美術展覽、講演會等を行ふ。

〔會員〕瀧精一、藤懸靜也、奥田誠一、足立康、逸見梅策、坂崎坦、仲田勝之助、香取秀真、外山英策、脇本十九郎、野上豐一郎、高野辰之、田中豐藏、松本榮一、西澤信敬、谷信一、瀧遼一、小林剛、丸尾彰三郎、加藤猛夫、金上盛三、永田春水、荒井寛方、團伊能、刑部健、吉田金吉、伊奈信男、寺崎廣載、宮本璋、林邦彦、米澤嘉圃、田中一松、熊谷宣夫、富永惣一、渡邊辰敬、藤田經世、田澤坦、比嘉朝健、内藤亮亮、吉田登毅、津田敬武、野間清六、今村龍一、澁江二郎、吉澤忠、岡田敬男、鈴木仁一、緒方秀雄、鈴木進、岡田謙、村山旬吾、大塚德三郎、宮入松雄、菊川京三、櫻井靜、岡庭文雄、篠崎誠一、猪腰菊雄、大串純夫

國學院大學上代文化研究會

東京市澁谷區若木
町 國學院大學內

國學院大學學生生徒を中心として組織し、日本上代文化の研究並に其の知識の普及を圖るを目的とす。機關誌「上代文化」を刊行する。

〔會長〕植木直一郎〔評議員〕大場磐雄

樋口清之、松本勝三〔理事〕江藤千万樹
鹽川清人

國際古美術複製協會

東京市麹町區丸之内九ビル五階
五九五號室 電九之内二六七〇

昭和十二年六月設立。「光輝ある我が國古來の美術を其模寫複製に依りて海外に宣揚し、又海外各國の優秀なる古美術品の模寫、模型を招來して、相互美術の鑑賞發達と共に國際の理解親善を謀るを以て主たる目的とし、併せて國內にも之が普及を謀る」を目的とす。事業として一、國寶並に之に準ずる古美術品中、特に選定せる繪畫、彫塑、美術工藝品に付、最も忠實なる模寫模造又は複製を爲し、建造物に在りては其縮小又は部分の模型を作ること二、前項の模寫、模造、複製品及び模型は内外の博物館、美術館、圖書館、大學其他の諸學校、官衙又は一般愛好家に頒布或は貸與、寄贈し、並に我が國の希望する外國の優秀なる作品の模寫模造、模型品と交換し、又は其等を購入して常時陳列を爲すこと三、外國の代表的傑作を模寫する爲め、特定の作家を派遣すること四、前二、三項に記載する事業を爲さんとする人又は團體の爲めに製作の引受、仲介、斡旋を爲すこと五、前各項の製作品の展覽會、講演會を國內及び海外各主要都市に隨時開催すること六、其他理事會に於て適當と認むる事業、等を行ふ。

〔理事〕塚本靖(逝去) 子爵大河内正敏、

正木直彦、芝田徹心、杉榮三郎、白井五郎〔監事〕佐藤功一〔顧問〕伊東忠太、侯爵細川護立、高田休廣、瀧精一、荻野仲三郎

國民藝術研究所

東京市澁橋區上落合二ノ五
六九 電落合長崎二八〇八

昭和十二年六月創設。美術を中心としそれに關聯深き國民藝術一般の綜合的研究を爲すを以て目的とす。事業として、一、美術を中心とし國民藝術全般に關する資料の蒐集、研究發表乃至研究に利便を與ふべき講演會、見學、展覽會、演奏會等の開催、研究發表の機關として冊誌「藝苑」を年二回刊行し、所員、會友贊助員に配布す、二、文庫及び研究室の設立、ホ、藝術家の表彰及び獎勵、美術品の鑑定及び考證等を行ふ。

〔主事〕川路柳虹〔理事〕田邊孝次、齋藤佳三

史迹・美術同攷會

京都市中京區島九二條南入ス
ズカケ出版部内 電上二三三九

昭和五年十一月創立。先人の史迹、美術を研究するを目的とし、機關誌「史迹と美術」を發行。毎月研究踏査會等を開催する。

〔主宰者〕川勝政太郎〔會員〕約六百名

史學會

東京市本郷區東京帝
國大學史料編纂所内

明治二十二年創立。財團法人。史學を研究し、其の發達を圖るを目的とし、事業として月刊「史學雜誌」を發行し、史學大會及び講演會等を開催する。

〔理事長〕三上參次〔理事〕池内宏、今井登志喜、白鳥庫吉、平泉澄、村川堅固渡邊世祐

推古會

東京市芝區中門前
二ノ一 松田方

大正三年創立。古美術の研究並保存を目的とす。毎年各種の古美術品の展覧を行ひ圖録を發行し第六集に及ぶ。

〔會員〕正木直彦、岡田三郎助、朝倉文夫、内藤伸、安田靫彦、溝口順次郎、香取秀眞、松田福一郎

造形文化協會

東京市澁橋區下落合四ノ
二〇七一 尾川多計方

昭和九年四月創立。美術批評家を以て組織。美術批評の研究並に實踐を中心として造形一般の文化的事業を行ふ。

〔會員〕横川毅一郎、荒城季夫、大島隆一、尾川多計〔顧問〕森田龜之助、外狩素心庵

朝鮮古蹟研究會

京城府景福宮總督府博物館
館内 電光化門 六六一

昭和六年八月創立。平壤及慶州を中心とする古蹟を研究し、朝鮮文化の發揚を圖るを目的とす。創立以來、毎年春秋二

季平壤及慶州を中心とする古蹟の發掘調査を遂行し、其の業績を報告書として刊行し來つた。報告書の主なるもの左の如くである。古蹟調査概報(樂浪古墳、昭和八年度)、同(樂浪古墳、昭和九年度)同(樂浪遺跡、昭和十年度)、昭和十一年度古蹟調査報告、昭和十二年度古蹟調査報告、樂浪彩霞塚、樂浪王光墓。

〔理事長〕(朝鮮總督府學務局長)鹽原時三郎〔理事〕(朝鮮總督府政務總監)大野綠一郎、山田三良、黑板勝美、小田省吾〔監事〕(朝鮮總督府事務官)金大羽〔幹事〕藤田亮策

朝鮮古蹟研究會規則

- 第一條 本會ハ朝鮮古蹟研究會ト稱ス
 - 第二條 本會ハ平壤及慶州ヲ中心トスル古蹟ヲ研究シ朝鮮文化ノ發揚ヲ圖ルヲ以テ目的トス
 - 第三條 本會ノ事務所ハ朝鮮總督府博物館内ニ置ク
 - 第四條 本會ノ經費ハ本會ノ事業ヲ贊助スル有志ノ寄附金ヲ以テ之ヲ支辨ス
 - 第五條 本會ノ事業年度ハ政府ノ會計年度ニ依ル
 - 第六條 本會ノ事業計畫ハ之ニ伴フ豫算ト共ニ毎年度開始前評議員會ノ決議ヲ經テ之ヲ定ム事業實施ノ結果ハ決算ト共ニ年度經過後二箇月以内ニ之ヲ評議員會ニ報告スベシ
 - 第七條 本會ニ左ノ職員ヲ置ク
 - 理事 五名
 - 監事 二名
 - 評議員 若干名
 - 幹事 二名
- 理事ノ内一名ヲ理事長トシ朝鮮總督府學務局長ヲ以テ之ニ充ツ

理事長以下ノ理事、監事、評議員及幹事ハ
理事長之ヲ罷託ス

第八條 理事長ハ會務ヲ總理シ本會ヲ代表ス
理事長事故アルトキハ理事長ノ指名シタル
理事其ノ職務ヲ代理ス

理事ハ理事長ヲ補佐シ會務遂行ノ責ニ任ズ
幹事ハ理事ノ命ヲ承ケ庶務ヲ整理ス
監事ハ本會ノ會計並ニ財政ノ狀況ヲ監査ス

第九條 評議員會ハ理事及評議員ヲ以テ之ヲ
組織シ本會ニ關スル重要ナル事項ヲ議決ス
評議員會ハ必要ニ應ジ理事長之ヲ召集シ其
ノ議長トナル

第十條 本會ノ事業施行ニ依リ蒐集シタル遺
物ハ法令ニ依リ國庫ニ歸屬スベキモノヲ除
キ評議員會ノ決議ニ依リ之ヲ處分ス
第十一條 本會ノ事業施行ニ關シ必要ナル細
則ハ評議員會ノ議決ヲ經テ理事長之ヲ定ム

東亞考古學會

東京市豊島區池袋四ノ五
〇一電 大塚 一一四二

大正十五年三月創立。東亞諸地方の考
古學的研究調査を目的とす。外務省文化
事業部の補助に依り主なる事業として、
一、關東州、滿洲國、北支及蒙古各地の
發掘、探検、一、研究員を養成する爲、專
門家の推薦による官私立大學出身者を、
北支或は滿洲國に派遣、一、研究報告の出
版、一、講演會の開催、一、諸外國との出版
物寄贈交換等を行ひ將來は中央亞細亞に
實地踏査を行ふ豫定である。

〔會長〕侯爵細川護立〔常務委員〕原田
淑人〔委員〕服部宇之吉、狩野直喜、池
内宏、羽田亨〔幹事〕島村孝三郎、小林
胖生

東京考古學會

大阪市住吉區阿
部野前三ノ一〇

考古學に關する知識の普及並に研究者
相互の交詢聯絡を目的とす。月刊雜誌
「考古學」を年十二冊發行し、内一冊を
「考古學年報」に充て、昭和十三年第九
卷に至つた。

〔顧問〕濱田耕作(逝去)、鳥居龍藏、柴
田常恵

〔同人〕赤星直忠、榎本龜次郎、小林久
雄、直良信夫、大場磐雄、坪井良平、八
幡一郎

東京美術研究所

〔研究部〕東京帝國大學内附屬圖書
館第三十四番研究室
〔編輯及庶務部〕東京市本郷區駒込
千駄木町二三四電駒込二四九五

昭和十一年十一月創立。日本美術及東
洋美術の史的研究を目的とし、十二年一
月より月刊美術史研究雜誌「畫說」を發
行。

〔所長〕脇本十九郎〔所員〕大口理夫、
裏辻憲道、松濤基道〔客員〕香取秀眞、丸
尾彰三郎、三成重敬、明珍恆男、熊谷宜夫

日本工作文化聯盟

東京市麹町區内幸町一ノ三
幸ビル内 電話三三八三

昭和十一年十二月九日發會。本會は科
學、藝術其他工作文化に關與する諸分野
の専門家を糾合し、且つ産業上の諸機能

と提携して「一、様式建築より生活建築
へ二、有閑工藝より目的工藝へ三、低俗
製品より價值製品へ」なる指標の下に建
築を中心とする工作文化の健全なる發達
を圖らんとするもので次の如き項目を事
業課題とし、且つ出版、展覽會、講演會
の開催、諮問應答等をなす。(イ)研究

(一)、住の基本問題の研究 (二)、都市及農
村計畫に關する研究 (三)、史的生活文化財
の研究 (ロ)指導(一)、住に關する工業
製品の指導 (二)、建築生産の指導 (三)、工作
の諸分野に關係し來る藝術的諸形式の批
判檢討 (ハ)普及(一)、生活文化に關す
る知識の普及 (二)、健全なる工作文化財の
普及

〔會長〕伯爵黒田清〔理事長〕堀口拾巳
〔理事〕岸田日出刀、佐藤武夫、小池新
二、市浦健〔幹事〕澤島英太郎、鈴木道
次、上野伊三郎、奥本新太郎、藏田周忠
坂倉準三、關重廣、關野克、谷口吉郎、
土浦龜城、中村彌三、服部勝吉、藤島
亥次郎、前川國男、山越邦彦、山脇巖、
吉田鐵郎

日本國際美術教育聯盟

東京市神田區一ツ橋教育會館内

昭和十二年二月創立。目的「我國美術
教育の進展を圖り之を海外に宣揚し且世
界の趨勢を我國に紹介し以て美術教育の
向上に資し國際親善と人類福祉の増進と
に寄與するを以て目的とす」事業「一、
日本及海外に於ける各種の美術・工藝及

圖畫・手工教育に關する研究、調査、著
述編纂、翻譯及出版二、日本に於ける各
種の美術・工藝及圖畫・手工教育に關す
る展覽會を日本及海外に於て開催 三、
海外に於ける各種の美術・工藝及圖畫・
手工教育に關する資料蒐集及之が展覧
四、各種の美術・工藝及圖畫・手工教育
に關する講演會、講習會及協議會の開催
五、國際美術教育會議に日本代表の銓衡
及派遣 六、其他評議員會に於て必要と
認めたる事項

〔會長〕正木直彦〔副會長〕芝田徹心、
山崎儀重(逝去)〔理事〕多賀谷健吉、赤
津隆助、藤岡龜三郎、岡登貞治、上甲二
郎〔監事〕板倉賛治、田邊孝次

美術院

奈良市水門町一六
電 奈良 六〇二

故岡倉覺三創立の日本美術院はその事
業の一部門として國寶修理を行ひ、奈良
に同院の二部を設置したが、岡倉の歿後
日本美術院の再興に際し二部は分離して
美術院と稱した。爾來主として國寶(彫
刻及工藝品)の修理に従事し、傍ら彫刻
の依頼製作を行ひ、尙修技生を置き技藝
の養成に當つて居る。

〔主事〕明珍恆男〔事務主任〕安田伊兵
衛〔顧問〕新納忠之介〔國寶修理工事主
任〕菅原安男、榎本義春、白石義雄、大
賀秀雄

美術懇談會

東京市神田區淡路町二ノ七 電話二〇一〇

昭和十一年十月設立。美術批評家並に美術に關心を持つ文壇の作家批評家を以て組織し、臨時懇談會を催し、美術の研究並に批判に對する各自の教養を深め且つ文化の發展に寄與せんとす。會報、クオタリーを發行す。

〔會員〕 一氏義良、富永惣一、大島隆一、尾川多計、川路柳虹、横川毅一郎、村田良策、藤森成吉、青野季吉、荒城季夫、相良徳三、廣津和郎、森田龜之助、森口多里

美術懇話會

東京市下谷區上野公園美術研究所内 電下谷三八七

昭和六年十一月、美術研究所内に創立。「美術に關する趣味及理解を進め社會に於ける美術の健實なる發達に貢獻する」を以て目的となす。事業として一、美術に關する懇話會の開催 二、展覽會講演會等の美術に關する研究的集會の開催 三、美術に關する出版等を行ふ。昭和七年一月より十二年六月迄美術研究所の編輯にかゝる月刊「美術研究」を發行したる外、美術研究資料(計四輯)、美術懇話會叢書(計二輯)等を出版してゐる。

〔理事長〕 正木直彦〔理事〕 荻野伸三郎 川合玉堂、芝田徹心、杉榮三郎、原邦造 矢代幸雄、和田英作〔會員〕 百二名

美術教育施設一覽

美術批評家協會

東京市麹町區麹町四丁目五 電九段一三五三

昭和十一年十月設立。美術各部門の學者、批評家を會員とし、美術批評の確立、進歩的な文化運動の實踐を目的とす。その計畫する事業は左の通りである。

(A)機關雜誌「美術批評」の發行、(B)美術圖書館設立、(C)美術行政に對する提案建議、(D)都市美術に對する美術的批評、(E)美術教育に對する指導機關の設立、(F)産業美術に對する指導機關の設立、(G)海外に於ける美術批評家團體との提携、(H)海外に於ける文化團體との資料の交換、(I)一般美術問題に關する講演、(J)美術著作權の制定、(K)國際的文化交換に對する批評、(L)美術コンクルの開催、(M)優秀作品の推薦

〔會長〕 子爵吉川元光〔書記長〕 柳亮〔事務長〕 外山卯三郎〔會員(東洋美術)〕 小林剛、蓮實重康、土方定一(西洋美術) 外山卯三郎、柳亮、今泉篤男(工藝) プルーノ・タウト(建築) 佐藤武夫(工業美術) 安田清(裝飾美術) 藏田周忠(商業美術) 原弘(都市計畫美術) 石原憲治(舞臺美術) 園池公功(舞踊) 蘆原英了(映畫) 岩崎昶、三雲祥之助(寫眞) 仲田定之助、中原實(服飾) フランシシ・フエロディ(裝幀) 庄司淺水(チャナル・グラフィック) 三浦逸雄

扶餘古蹟保存會

朝鮮忠清南道扶餘郡 扶餘郡廳内

大正四年設立、財團法人。扶餘に於ける百濟の古蹟遺物を永久に保存し併せて廣く之を社會に紹介するを目的とし、左の事業を行ふ。一、古蹟の保存 二、遺物の保存及蒐集 三、古蹟遺物に關する調査研究及其の發表 四、觀覽者の便宜を圖る諸般の計畫及設備 五、其の他古蹟遺物の保存に關聯する事項及古蹟遺物を社會に紹介する爲必要と認むる事項、尙同會は古蹟遺品約六百點を蒐集、陳列館を公開してゐる。

〔會長〕 鄭倚源〔副會長〕 田中保太郎

平壤名勝舊蹟保存會

平壤府廳内 電一四〇〇

美術教育施設一覽

美術學校及研究所

東京

學校

〔官立〕

東京美術學校

下谷區上野公園 電下谷八〇二〇一二

明治四十五年七月創立。平壤府内に於ける名勝舊蹟の維持保存及紹介を目的とす。同會の事業として平壤博物館を建設した。

〔會長〕 矢野桃郎〔副會長〕 鄭在命〔理事〕 小林繁、遠矢良嗣〔幹事〕 加藤才治郎、大元政輔

早稻田東洋美術史研究會

東京市澁橋區戸塚町早稻田大學 恩賜記念館東洋美術史研究室

昭和七年「東洋美術史學會」の名稱を以て創立。十一年現稱となる。早大文學部内外の學生を以て組織し東洋美術史の學術的研究を目的とする。毎月例會を開き、臨時研究旅行を試る外、研究資料の展覽會を開催する。

〔會長〕 會津八一

東京美術學校は明治二十年十月勅令を以て設置せられ、同二十二年二月授業を開始した。翌年初代校長濱尾新に代つて岡倉覺三學校長となつたが、三十一年退職し、彼と共に教授橋本雅邦以下多數の教授、助教授が辭職した。高嶺秀夫、久保田鼎に次いで三十四年正木直彦學校長となり、昭和七年には和田英作校長となり、次いで昭和十一年芝田徹心之に代つて現在に及ぶ。

本校の學科を本科(豫科、研究科)を置

く)と圖畫師範科(研究科を置く)とに分ける。尙選科、聽講生の設備あり。

(本科) 日本畫科、油畫科、彫刻科(塑造部、木彫部)、工藝科(圖案部、彫金部、鍛金部、鍍金部、漆工部)、建築科に分つ。修業年限四年。入學資格豫科修了者。授業料年額八十圓。在學中特定の學課目を修了した者に中等教員無試験檢定の特典あり。

(豫科) 修業年限一年。入學資格中學校四年修了者、高等學校尋常科修了者、高等學校高等科入學資格試驗合格者。授業料年額八十圓。實技及學科の入學試験を行ふ。檢定料五圓。

(圖畫師範科) 修業年限三年。入學資格中學卒業程度。授業料を徴收せず。入學試験を行ふ。檢定料五圓。

(研究科) 實技、學術の二部に分つ。修業年限二年以内。入學資格實技は本校卒業後二年を経過せず且卒業成績八十點以上の者、學術は本校卒業業者。授業料年額五十圓。

(選科) 本科入學資格を有せざる者に於て本科各科の實技のみを學習せんとする者を銓衡の上入學を許可す。近年募集せず。授業料年額八十圓。

(聽講生) 聽講料一學年間に一科目に付二十圓、一科目を増す毎に十圓。

昭和十二年五月に於ける各科豫科及師範科一年の生徒數は左の如くである。

日本畫科 二一名
油繪科 三六名

彫刻科塑造部 一六名

同 木彫部 八名

同 工藝科圖案部 一五名

同 彫金部 五名

同 鍛金部 五名

同 鍍金部 七名

同 漆工部 六名

建築科 七名

圖畫師範科 一五名

又本校には文庫があつて圖書標本を收藏し、陳列館及正木記念館があつて諸種の展觀を試み、何れも生徒學習の參考に資する。

〔校長〕 芝田徹心

〔名譽教授〕 正木直彦、和田英作

〔教授〕 岡田三郎助、川合芳三郎(昭和十三年四月退職)、藤島武二、森井健介、結城貞松、多賀谷健吉、六角注多良、佐々木卓、小林萬吾、津田信夫、清水龜藏、矢代幸雄、建昌彌一郎、朝倉文夫、北村西望、南薰造、和田三造、香取秀治郎、石田英一、田邊至、森田龜之助、小泉勝爾、海野清、田邊孝次、關野金太郎、高村豐朗、廣川松五郎、松田義之

〔生徒主事〕 佐々木卓、森田龜之助、田邊孝次

〔助教〕 松垣露雄、水谷武彦、松田權六、山田康、岡四郎、森田武、野口六三、山崎覺太郎、金澤庸治、常岡文龜、伊原宇三郎、西田正秋、丸山義男、内藤春治、羽下修三、深瀬嘉臣、磯矢陽

〔講師〕 杉田精二、大澤三之助、北村耕造、村田良策、澤口悟一、小場恆吉、齋藤幸晴、岡田捷五郎、鎌倉芳太郎、正木篤三、小塚新一郎、比田井鴻、白川一郎、鈴川信一、羽野禎三、入谷昇、蒔田宗次、比田井元子、石澤正男、矢澤貞則、川崎隆一、沼田勇次郎、木村得三郎、富永惣一、平野茂、關野克、加藤鬼頭太

東京高等工藝學校

芝區新芝町
電三田一五六一八

本校は大正十年十二月の設置に係る。松岡壽初代の校長となり、翌十一年開校。十二年吉武榮之進代つて校長となる。十三年東京高等工業學校附屬職工徒弟學校を本校に移管、附屬工藝實業學校として設置した。十四年松岡壽再び校長となり、翌年東京美術學校寫真科を本校に移管し寫真部として設置した。昭和三年安田祿造が代つて校長に任命されて現在に及ぶ。

本校の學科を工藝圖案科(工藝彫刻部を含む)、金屬工藝科、精密機械科、木材工藝科、印刷工藝科(寫真部を含む)に分ち、他に、研究生、選科生、聽講生、木材工藝別科を設置す。

(本科) 修業年限三年。入學資格中學卒又は専檢合格者。授業料年額八十圓。(研究生) 修業年限二年以内。入學資格本校又は實業專門學校卒業業者。授業料年額八十圓。

年額八十圓。

(選科生) 修業年限三年以内。入學資格中學校、工業學校卒業業者は一年以上、學歷なき者は五年以上志望學科の工藝に従事せる者。授業料年額八十圓。

(聽講生) 聽講料一學期一學期十圓。(木材工藝別科) 修業年限二年。入學資格中等程度工業學校卒業業者、又は志望學科に關する經驗を有する者。授業料年額五十圓。

本科生徒數
工藝圖案科 七〇名
工藝彫刻部 一七名
金屬工藝科 四八名
精密機械科 一三六名
木材工藝科 七五名
印刷工藝科 六〇名
寫真部 二〇名
木材工藝別科 二七名

〔校長〕 安田祿造
〔生徒主事〕 教授 三橋達吉
〔工藝圖案科〕 教授 宮下孝雄、永地秀太、助教 杉山豐治
〔工藝彫刻部〕 教授 畑正吉、助教 寺畑助之丞
〔金屬工藝科〕 助教 豐田勝秋、益田森治、講師 神矢敦親
〔精密機械科〕 教授 竹屋金太郎、永澤謙三、橋本宇一
〔木材工藝科〕 教授 木槍恕一、西海幸一郎、野村茂治、助教 鈴木太郎
〔印刷工藝科〕 教授 鎌田彌壽治、伊東

亮次、岡利亮、長口宮吉 助教授 畑保之

〔寫眞部〕 教授 鎌田彌壽治、伊東亮次、岡利亮、長口宮吉 助教授 畑保之

〔木材工藝別科〕 教授 木槍想一、築島棟吉

〔共通學科〕 教授 江崎歡藏、永地秀太、岡田楠次郎、三橋逢吉、和田香苗 助教授 鈴木豐次郎 講師 馬場秋次郎

〔私立〕 五十音順

朝倉彫塑塾

下谷區谷中天王寺町二〇
電下谷六五四九、二〇三二

本塾は明治四十年朝倉文夫の門弟數名を教育するに始まり爾來朝倉塾と呼ばれて、多數の作家を輩出し來つたが、昭和十二年開塾二十五周年を迎ふるに當りその記念に塾舎を改築し、十一年六月彫塑の専門學校としての認可を受け朝倉彫塑塾と改稱した。

本塾は豫科、本科、研究科、特科を設置し、修業年限は豫科三年、本科五年、特科二年とし、研究科は年限を定めない。入學資格は豫科は年齢十六歳以上、中學卒業及塾長に於て之と同等の學力ありと認めたる者、本科は豫科修了者、官公私立美術學校彫塑科卒業生にして豫科修了者と同等以上の學力ありと認めたる

者。授業料及入學金は徴收せず、實習費は自辨とす。學年は十月一日に始まり、翌年の九月三十日に終る。尙本塾は寄宿舎を設置し、寄宿生を自費生と給費生とに分つ。尙年一同朝倉彫塑塾生及塾出身者の發表機關として朝倉彫塑塾展覽會を開催する。

川端畫學校

小石川區富坂町一九

明治四十二年創立。財團法人。川端玉章が初代校長で初め日本畫のみの教授を行つたが、大正二年玉章逝去し同年洋畫科が設置された。

日本畫科の研究科目は臨畫、寫生、製作等で學級を分つて四級とし、入學者は實力の如何に拘らず先づ初級に編入して成績考量的上適當の級に編入する。入學隨時。月謝三圓。入學金五圓。午前部八時—十二時、夜間部六時—九時。

洋畫科は石膏寫生、人體寫生の教授をなし、隨時入學を許す。午前部八時—十二時、午後部一時—五時、夜間部六時—九時。月謝四圓(夜間部三圓)、五ヶ月十七圓五十錢、十ヶ月三十三圓。入學金五圓。

〔主幹〕川端玉雪〔副主幹〕川端茂章
〔教授〕〔日本畫科〕結城素明〔主任〕岡村葵園〔洋畫科〕藤島武二〔主任〕富永勝重

女子美術專門學校

杉並區和田本町八六〇
電中野三八四六

明治三十三年女子美術學校創立。昭和四年專門學校の認可を受く。校舎は元本郷弓町に在つたが、菊坂町に移り昭和十年現地に移轉した。

〔高等科〕 日本畫部(三年)、西洋畫部(三年)の二部に分つ。入學資格高女卒、五年制高女の四年修了者及專檢合格者。授業料年額百圓。

〔師範科〕 日本畫部(四年)、西洋畫部(四年)、刺繡部(三年)、造花部(三年)、裁縫部(三年)、裁縫手藝部(三年)の六部。入學資格高等科に同じ。授業料日本畫部及西洋畫部は年額百圓他は年額九十圓。

〔師範別科〕 學科及修業年限師範科に同じ。入學資格高女卒、五年制高女の四年修了者、小學校本科正教員、準教員の免狀を有する者。授業料年額九十圓。

〔專修科〕 刺繡部(一年及二年)、造花部(同上)、和裁部(一年)、洋裁部(一年)の四部。入學資格師範科別科に同じ又は同等以上の學力ある者。授業料年額八十圓。

〔家政科〕 修業年限二年。入學資格專修科に同じ。授業料年額八十圓。

〔專攻科〕 修業年限一年。入學資格高等科、師範科、乃至他專門學校卒業業者、授業料日本畫部及西洋畫部は六十圓、他

は五十圓。

入學檢定料は五圓、但し專攻科及家政科は三圓。入學料五圓、但し專攻科及家政科は三圓。尙寄宿舎の設備がある。

〔校長〕男爵佐藤達次郎〔主監〕濱幸次郎〔副主幹〕土田忠二〔生徒主事〕田村一郎

多摩帝國美術學校

世田谷區玉川上野毛町
三四三電玉川五六

昭和十年九月元帝國美術學校長北吟吉及評議員兼教授杉浦非水、牧野虎雄、井上忻治、吉田三郎等二十數名は同校を脱退、新に杉浦、牧野、北、近藤清吾等を設立者として多摩帝國美術學校を創立、同年九月九日より澁谷區千駄ヶ谷町の假校舎にて授業を開始、同月設立認可を受け、同十二月玉川上野毛町に新築の校舎に於て開校式を舉行し、同十一年一月文部省より財團法人の認可を受け、同年四月陸軍省より徴兵猶豫の特典を附與された。

同校は本科、研究科、選科を置き、修業年限は本科五年、研究科、選科一年。本科を分つて日本畫、西洋畫、圖案、彫刻の四科とする。入學資格は本科は中學卒業業者、專檢合格者、研究科は本校卒業業者及銓衡に合格せる者、選科は銓衡により相當の實力ありと認められたる者である。他に同校所定の學科の聽講志望者は聽講生たるを得る。授業料は本科年額

九十圓。研究科、選科六十圓。檢定料五圓。聽講料は一學年一科目十圓、一科目を増す毎に六圓とす。

〔名譽校長〕北吟吉〔校長〕杉浦非水〔學監〕井上忻治〔主事兼學生監〕村田晴彦〔特別評議員〕安田靱彦

〔教員〕〔日本畫科〕主任 中村岳陵、鄉倉千靱、山村耕花、上田唯草〔西洋畫科〕主任 牧野虎雄、中川紀元、大久保作次郎、木村莊八、中村研一、鈴木誠、吉村芳松、皆見鶴三〔彫刻科〕主任 吉田三郎、佐々木大樹、兒島正典〔圖案科〕主任 杉浦非水、木村和一、小川倩霞、小池巖、野津憲之丞、磯部陽〔學科〕主任 井上忻治、逸見梅榮、北吟吉、三木清、森田龜之助、脇本榮之軒、岸田日出刀、大隅爲三、渡邊素舟、大成龍雄、今井兼次、佐藤次夫、高村豐周、建昌大夢、末吉菊磨、近藤稱吉、長瀬誠、木村雄山、小松平五郎

附同校女子部

昭和十一年十月開設。同部は本科、選科、專攻科を置き、本科、選科は婦人に適切なる一般的美術教育を授くるを目的とし、專攻科は作家を養成す。授業年限は本科、選科二年、專攻科三年。入學資格は本科は高女卒、選科は本科入學の資格なき者、專攻科は同校本科卒業生及之と同等の學力ある者とす。尙本科は繪畫部と圖案及其應用部に分つ。本科、選科は日本畫又は洋畫を選修し、專攻科は日

本畫、洋畫、圖案の一つを專攻す。學年は毎年四月一日より翌年三月迄、授業料は各科とも年額六十圓。尙年給、學歷を問はず隨意の學科目を履修することを得、その場合の月謝は一科目につき二圓。

〔女子部々長〕逸見梅榮〔女子部主事兼學生監〕村田晴彦〔教員〕は男子部に略同

太平洋美術學校

下谷區谷中眞島町一
電下谷一七九二

明治三十五年明治美術會を太平洋畫會と改稱するに及び同三十七年下谷區清水町に研究所を設置。翌三十八年谷中眞島町に屋舎を新築移轉し繪畫、彫刻の教室を備へ、中村不折、故滿谷國四郎、岡精一、故新海竹太郎、藤井浩祐等指導の任に當つたが、爾來三十年漸次組織を改めて今日に及ぶ。昭和四年研究所を擴張し太平洋美術學校と改稱、同九年東京府の認可學校となる。

〔學科〕第一部、第二部〔午前〕、第三部〔午後〕、第四部〔夜間〕、研究部。〔修業年限〕第一部四年、第二、第三、第四部五年〔研究部二年〕〔入學資格〕第一部〔中學校及女學校四年修了程度以上〕、第二、第三、第四部〔尋常小學校卒業程度以上〕、研究部〔第一、二、三、四部修了者〕。〔授業料〕各部月額六圓、研究部月額三圓。

〔總務〕石川寅治、吉田博、永地秀太、高村眞夫、三上知治〔教授〕奥瀬英三、多々羅義雄、堀進二、鶴田吾郎、池田永一治、佐々貴義雄、桑重儀一、小野田元興、田原輝夫、金子保、布施信太郎〔講師〕齊藤俊雄、澤田晴廣、佃武昭、一氏義良、中野桂樹、光安浩行、加藤義雄、高橋虎之助、淺井眞、岡精一、石井柏亭

帝國美術學校

市外武藏野町
吉祥寺三二〇

美術家並に美術教師の養成を目的として昭和四年十月木下成太郎に依り設立、北吟吉が校長となつたが、昭和十年六月盟休事件によつて解任せられ、同九月、北吟吉並同人支持の教授學生等は、別に多摩帝國美術學校を創立、本校は設立者木下成太郎が校長に就任した。同十年九月專門學校認可申請をした。

〔本科〕日本畫、西洋畫、工藝圖案、彫刻の四部。修業年限五年。入學資格第一部は中學卒業並專檢合格者、第二部は前記の資格無きも同等の實力ありと認むる者。授業料年額八十五圓。〔師範科〕修業年限三年。入學資格本科第一部に同じ。授業料年額八十五圓。〔研究科〕修業年限一年以上。入學資格本校卒業又は銓衡に合格せる者。授業料年額五十圓。〔別科〕實習を志望する者を入學せしむ。

入學資格は定めず。授業料年額五十圓。

〔聽講生〕授業料一科目十圓。一科目を増す毎に六圓。

〔校長〕木下成太郎〔教授〕〔日本畫科〕鈴木清方、奥村土牛、服部有恆、根上富治、〔西洋畫科〕高島達四郎、中野和高、熊岡美彦、宮坂勝、清水多嘉示〔工藝圖案科〕富本憲吉、藤井達吉〔彫刻科〕佐藤朝山、清水多嘉示〔師範科〕服部有恆、宮坂勝、清水多嘉示、富本憲吉〔共通學科〕板垣鷹穂、堀口捨己、西田正秋、名取堯、山脇巖、木村幸一郎、金原省吾、森田龜之助、濱德太郎、大野俊一、中島健藏、務臺理作、谷川徹三、大宮健太郎、藤本仁平、佐々木秀一、山極眞衛、佐藤平太郎、三林亮太郎、香取秀眞、北原大輔

東京女子高等美術學校

小石川區第六天町五〇
電大塚六〇四六

女子美術家の養成並に美術趣味の向上を計るを目的とす。本科、選科、研究科を設置し、各々日本畫、洋畫、彫刻、美術手藝〔和洋裁縫手藝〕の各科を置く。修業年限は本科三年〔但し美術手藝科二年〕、選科、研究科は年限を定めず。入學資格は本科は中等學校卒業、選科は小學卒業、研究科は自由とす。學年は四月より翌年三月まで。授業料は本科、選科月額各々八圓、研究科は四圓。尙各科にて日

土講習會を催す。

〔校長〕伊澤藤麻呂〔學監兼教授〕伊澤春子〔日本畫部主任〕荻生天泉〔彫刻部主任〕長谷川義起〔西洋畫部主任〕阿以田治修〔美術手藝部主任〕阪井翠子〔教授〕金子保、加藤泰、森田武、竹脇八重子、黑河内天嶺、小野田高節、手塚又四郎、大貫松三、榎戸庄衛、淺岡中子、秋山松代、小田富子、有久龍一、柳原輝子、大石隆子、片山佳吉、滋野ジャンヌ、篠田恆、船越富美子、田鎖直江、大塚賢子

日本大學專門部美術科

本郷區金町 電小石川二一四、五〇二一

專門部藝術科中の美術科は昭和六年設立。美術家、美術評論家、美術教師の養成を目的とす。

本科、別科、専科に分れ、晝間部（午前八時—四時）、夜間部（午後五時半—十時）の二部制で、日本畫、洋畫、彫刻、圖案工藝、挿繪等の實習を教授す。

〔本科〕修業年限三年。入學資格、中學校卒業者、専檢合格者。授業料年額百十圓。

〔別科〕修業年限三年。入學資格は相當の學力ありと認められたる者。授業料本科と同じ。

〔専科〕修業年限三年。義務教育を了へた男女の隨時入學を許可し、實技を指導す。授業料年額五十五圓。

以上入學檢定料五圓。入學金五圓。其

の他實習費、教練費、校費等を要す。

〔科長〕松原堯〔主任〕相良德三〔教授〕相良德三〔講師〕河野桐谷、岩井大慧〔實習〕木村莊八、中村研一、内田巖

日本美術學校

澁橋區戸塚町一ノ四
七四 電半込八二六

大正六年紀淑雄に依り「美術研究所」創設され翌七年認可を得て日本美術學校と改稱。理論實技の兩方面より美術の製作、觀照、批評の三能力を養成せん事を目的とする。本科、選科、豫科、専修科普通科及速修科の六科を置き各科に男女を入學せしむ。

本科、選科、豫科は繪畫、彫塑及圖案等を夫々專攻せしめ、次の七科に分つ—日本畫科、西洋畫科、木彫科、彫造科、工藝圖案科、商業圖案科、演劇圖案科。

入學資格—〔本科第一學年〕男女中等學校四年修了者及び之と同等以上の學力ある者並に同校豫科修了者、〔選科第一學年〕高等小學卒業者、〔豫科第一學年〕尋常小學卒業者。修業年限—本科及選科各四年、豫科三年。檢定料各科五圓、入學金各科五圓、授業料、本科月額九圓、選科九圓、豫科七圓五十錢。

専修科は實用美術を專攻せしめ次の十科に分つ—版畫科、漫畫科、挿繪科、壁畫科、書字科、圖工科、包裝科、陳列科、看板科、照明科、模型科、玩具科、塗裝科、製額科、染色科、革工科、竹工

科、寫眞攝影科、寫眞修整科。但し以上の中年度により開設せざる科あるべし。

各科に第一部（晝間）、第二部（夜間）を設く。入學資格—年齢學歴を問はず、同校の檢定に合格せる者。修業年限第一部一ケ年、第二部二ケ年。檢定料各科三圓。入學金五圓、授業料、第一部月額七圓五十錢、第二部五圓。

普通科は小學校又は男女中等學校に在學する兒童生徒のために設け、日本畫科西洋畫科、圖案科の三科を置き更に之を中等科（男女中等學校生徒）、初等科（尋常小學三年以上の兒童）に分つ。修業年限一ケ年。毎週三日午後授業をなす。入學金二圓、授業料は月額三圓。速修科は夜間授業で、日本畫科、西洋畫科、圖案科、クロッキー科を置く。入學資格—クロッキー科を除き、年齢學歴を問はず、同校の檢定に合格せる者。修業年限—クロッキー科を除き各科とも二ケ年。檢定料三圓、入學金五圓、授業料月額五圓。

クロッキー科は人體クロッキーを行ひ隨時入學を許し、學費を回数券制度（一回券四十錢、六回券一圓八十錢、廿五回券五圓）とす。

〔校主〕紀惠以子〔學科〕荒城季夫、神約一、青柳正廣、薄金兼次郎、高橋道利、庄司大造、田邊孝次、一氏義良、濱田増治、足立一郎、内山義郎、菅原又七郎

〔日本畫科〕川崎小虎、矢澤弦月、村山森人、太田聰雨、紀惠以子、川原香雨〔西洋畫科〕大久保作次郎、小島善太郎、

藤田嗣治、川島理一郎、高野眞美、裕伊之助、猪熊弦一郎、小城基、宮本三郎、林武〔圖案科〕古田達賢、吉田謙吉、朝影禮三〔彫塑科〕吉田久繼、長谷川榮作〔各科〕池部鈞、平塚運一、西田武雄、改井德寛、數見定一

文化學院美術部

神田區駿河臺二ノ五
電神田三二三九

大正十四年開設。洋畫の専門家養成を目的とす。男子部と女子部に分つ。

〔本科〕修業年限三年。入學資格中等學校卒業者又は専檢合格者に付デッサンの實技考查の上入學を許可す。授業料年額百四十圓。

〔専修科〕肖像、挿畫、版畫、圖案等實際の需要に應じ得る技術を授ける。修業年限一年。入學資格同校美術部、他美術、研究所卒業者、人體素描の入學試験を課す。授業料年額百五十圓。

〔聴講生〕缺員ある場合に採る。入學資格本科に同じ、又教授會に於て特に適當と認めたるもの。授業料本科に同じ。〔繪畫特修科〕毎日曜日婦人愛好者を指導す。隨時入學。學歴年齢を問はず。月謝五圓。

研究所 (五十音順)

井之頭洋畫研究所

府下吉祥寺八ノ三二六一
井之頭公園御殿山西隣

洋畫の基礎的指導を行ふ。銚衡の上男
女を入所せしむ。(科目)人物、静物、風
景、石膏寫生。午前部(八時—正午)、
午後部(一時—五時)、夜間部(六時—九
時)を設く。研究費は午前、午後部月額
五圓、午前午後又は午後夜間兼修は月額
九圓。他に日曜部を置く。

〔指導者〕堀田清治

大野洋畫研究所

豊島區西巢鴨三ノ七
六六 電大塚四八四一

昭和五年十月創立。初等科(石膏、静
物、風景)午前部、夜間部、日曜部。研
究科(人體、石膏、静物)午前部、夜間
部。月謝各五圓。入會金五圓。

〔所主〕大野隆徳

大森繪畫自由研究所

大森區池上徳持町三七二
電池上五六番(呼出)

昭和七年創立。邦洋の各流派を問は
ず、自由研究の内に美術の基礎を作るを
目的とす。A人體寫生(午前部、夜間部)
B石膏部(午前部、夜間部)C日曜クロ
ツキー(日曜午後)D小年少女部(日曜

午前)E水彩畫日曜連續講習會(各日曜)
に分れ、費用は、A入會金五圓、月六圓、
一週一圓八十錢、B入會金五圓、月五圓、
C一回四十錢、D入會金一圓、月二圓(四
回)E入會金三圓、會費五圓(五回)
〔所長〕白山卓吉〔會員〕二百名。

熊岡繪畫道場

淀橋區戸塚町二ノ一
一二 電牛込一四四一

昭和六年九月開場。十一年九月東京府
認可となる。油繪研究の指導を目的と
し、石膏部(木炭)、人體部(木炭、油繪)
の二部を置く。入場資格者は中等學校卒
業者若くはそれに相當する者とす。午前
部(九時—正午)月謝七圓、午後部(一
時—四時)月謝六圓、夜間部(六時—九
時)月謝五圓、午前夜間兼修九圓、三部
兼修十圓、入場料十圓。尙女子部を設
く。

〔教授〕熊岡美彦、齋藤與里、渡邊浩三、
野口謙藏、佐藤一章〔助教〕平通武男
〔講師〕森田龜之助、荒城季夫

クロツキー研究所

麹町區有樂町二ノ四
日本新聞社ビル内

クロツキー、デッサンの研究を目的と
し、自由研究同數券を發行して何人でも
隨時參加することが出来る仕組になつて
居る。大正十四年開設。晝間部(一時—
四時)夜間部(六時—九時)。研究費—D

會員(臨時參加)五十錢、T會員(七回
回數券一冊)二圓五十錢、W會員(連續
六日間參加)一圓八十錢、M會員(連續
一箇月參加)五圓。他に日曜研究部(午
後一時—四時)及制作研究部(午前九時
—正午)の制がある。

〔經營管理者〕柳川清一郎

構造社彫塑研究所

豊島區池袋四ノ三八三

昭和三年創立。七年一旦閉鎖、十年七
月より再開。模刻部(午後一時—四時)
人體部(午前九時—正午)の二部を設け、
前者は入所資格を要せず、後者は(イ)
自作彫刻若くは素描をもつて本研究所の
考查に合格せるもの(ロ)嘗て構造社展
に入選せることあるもの等を入所せし
む。月謝七圓、入所料十圓。

〔指導者〕齋藤素巖、其他構造社會員。

春陽會洋畫研究所

荒川區日暮里三ノ一四七

昭和四年九月設立。春陽會會員が指導
に當る。(昭和十二年十一月解散)

商業美術學校構成塾

淀橋區戸塚町四ノ八四二
電牛込六三二七

昭和三年商業美術協會の附屬研究所と
して設立。後改制されて昭和七年現稱に
改めた。商業美術の技術家養成を目的と

し、日本商業美術協會員が指導の任に當
る。修業年限三箇年。授業料一箇年百
圓、記名料五圓。

〔塾長〕濱田増治

新象型藝術研究所

京橋區銀座西二ノ五
電京橋二六七一

昭和十年十一月創立。「科學的態度に
依つて造型藝術のゲゼツツを追究し、新
しきセオリーとメトードに到達する。基
礎的敎課としてイッテンシュール(ドイ
ツ)豫備科に於ける練習課目を適用し、形
態、色彩、明暗、材質、構成等の感覺的
訓練を實習す」。

〔指導〕橋本徹郎

鈴木繪畫研究所

淀橋區東大久保一ノ
三五七 電牛込七二二

洋畫技法の基礎的敎授を行ふ。科目—
石膏、静物、人體。午前部(九時—正午)
午後部(午後一時—四時)、夜間部(六時
—九時)に分つ。研究費午前部午後部各
七圓、夜間部五圓、二部兼修は十圓、記
名料十圓。

〔所長〕鈴木千久馬〔助教〕倉員辰雄
〔主事〕岡田一馬

田端國畫研究所

荒川區尾久町二ノ三五八

昭和十年設立。故速水御舟は同會の創立計畫者であつたが事前に急逝したので四宮潤一他三名を以て設立した。同所の趣旨は総合的な教育システムを以て東西繪畫の理論及實技を習得し、古典に確固たるつながりを求めつゝ、次時代の日本畫の動向を確立せんとするにある。午前部及午後部の二部とし、石膏、人體、花鳥靜物風景寫生、製作實技、理論講座、構成練習等の研究種目を有する。指導は毎週所員が交互に當る。研究費は月三圓五十錢、記名料七圓。(昭和十二年七月閉鎖、福澤洋畫研究所に合同す。)

〔所員〕河村良孝、中村直人、四宮潤一、津田正周

第三部會研究所

瀧野川區上中里町一七
二 電小石川一八九八

第三部會員の指導する彫塑研究所で昭和十年十一月アトリエ落成式を挙げ十二月より授業を開始した。塑造の基礎教育を授くる外研究生の希望により左記の分擔にて各種の實材彫刻を指導する。(動物彫刻)池田勇八(木彫牙彫)石川雅治、開發芳光、上田直次(薄肉彫刻)畑正吉、吉田久繼、日名子實三(石彫)小倉右一郎、日名子實三。午前、午後部の二部を設け、月謝は五圓、二部兼修は八圓。(昭和十二年八月解消、改めて瀧野川彫塑研究所となつた。)

高間洋畫研究所

豊島區西巢鴨町四ノ
八八 電大塚四〇六一

昭和十年九月開設。洋畫の基礎的指導を行ふ。午前、午後、夜間の三部に分ち、中等學校卒業程度の男女を入所せしめる。月謝、午前、午後各々六圓、夜間五圓。

瀧野川彫塑研究所

瀧野川區上中里一七二
電駒込一八九八

「第三部會研究所」解散後、小倉右一郎の個人經營として引繼がれた。裸體、石刻の二種目あり、裸體は午前、午後部の二部を設け、石刻は午前午後自由である。月謝五圓、二部兼修七圓。記名料五圓。

〔指導者〕小倉右一郎

同舟會繪畫研究所

赤坂區新坂町六五
電赤坂五〇二六

大正十四年久しく中絶してゐた同研究所を再設して今日に及ぶ。石膏及人體寫生の基礎指導をなす。午前部(八時—十二時)、午後部(一時—五時)、夜間部(六時—九時)に分れ月謝は各部とも四圓。男女年齢を問はず隨時入所することを得。入學金六圓。

〔指導主任〕小林萬吾、白川一郎〔職員〕

前田謙一

獨立美術研究所

澁橋區柏木町一ノ六三

獨立美術協會員が毎週二名づつ交代して指導に當り、人體科、石膏科の二部あり、何れも午前或は午後開講される。月謝は人體科四圓、石膏科三圓。記名料五圓。他に各日曜日午後三時—五時キ料が開設され月謝は一圓。毎週金曜日午後全會員出席の上作品合評會を開く。隨時入所する事を得。

中村版畫研究所

杉並區堀ノ内一ノ二二七

舊稱「創作版畫自由房」。同所は洋風版畫の研究所で、研究科目を平版科(石版、亞鉛リトグラフ)と凹版科(エツチング、アクアチント、メゾチント、ドライポイント)の二種とする。教授は平版科は火曜日、凹版科は木曜日、自由研究日は金曜日とし、何れも午前九時より正午及一時より四時迄。記名料二圓、月謝五圓。隨時展覽會を開く。

〔所長〕中村義雄

二科美術研究所

四谷區愛住町七八
電四谷四九七八

昭和十年九月設立。洋畫の實技を指導す。午前部(九時—正午)午後部(一時—四時(部夜間(六時—九時)分つ。

月謝五圓。記名料午前部十圓、午後及夜間部五圓。

〔指導者〕二科會員

日本エツチング研究所

麹町區麹町一ノ三
電九段五一四

昭和六年設立。エツチングの研究及普及を目的とし同八年十一月より、月刊雜誌「エツチング」を刊行してゐる。尙同研究所の事業を後援する日本エツチング協會がある。會員三十四名。午前、午後、夜間の三部に分つ。記名料五圓、月謝三圓、臨時研究生一日一回二十錢。

〔所主〕西田武雄

橋本八百二繪畫研究所

世田谷區代田一ノ六四四

午前部及午後部月謝七圓、二部兼修は十圓。日曜部、月謝五圓、午前午後兼修は七圓。日曜部には女子部を設く。入所料七圓。

〔指導者〕橋本八百二、橋本はな子(女子部)

福澤繪畫研究所

本郷區駒込動坂町三二七

福澤一郎指導に當り、洋畫の實技を研習せしめる。午前部、午後部、夜間部に分つ。各月六圓。入所料二圓。他に切符制あり。一枚三十錢。

本郷繪畫研究所

本郷區春木町二ノ二八

明治四十五年六月創立。もと本郷洋畫研究所と稱し、大正十三年建物を再築して現稱に改めた。講習科目は人體寫生及石膏寫生とし午前、午後、夜間の三部を設置す。日曜、大祭日、年末年始及七八兩月の暑中休暇を除き毎日開講す。授業料は一部二週間二圓五十錢、一箇月四圓、二部兼修は更に二週間一圓五十錢、一箇月二圓五十錢を納付。夜間部は二週間一圓八十錢、一箇月三圓。記名料五圓。
〔指導〕岡田三郎助〔委員〕井上雄太郎

目白繪畫研究所

淀橋區下落合一ノ五三七 電大塚四〇三七

昭和十年四月開所。油繪實技の指導を目的とし人體、靜物、風景、石膏寫生の指導をなす。午前部（九時—正午）、午後部（一時—四時）、夜間部（六時—九時）、特設日曜研究所（午前九時—午後四時）を設く。男子部、女子部に分ち、夜間部は男子部のみ。月謝は午前、午後部は七圓、夜間、日曜研究所は五圓、二部兼修は三割引。記名料十圓。他に日曜夜間にクロツキー部を置く。男女年齢を問はず初心者をも教授する。

〔指導者〕大久保作次郎〔委員〕小林泰山、石原政之〔女子部〕大久保百合子

明朗美術研究所

目黒區三谷町八四 電在原四〇九六

明朗美術聯盟經營の研究所。明朗、純眞、熱誠の主張を以つて畫道研鑽をなす。研究會費五十錢、月謝三圓、入會金五圓。
〔指導者〕川口春波

綠蔭社繪畫研究所

赤坂區青山北町四ノ九 電青山一〇三五

大正十四年神田區中猿樂町に事務所を置いて洋畫及圖學の指導事業に着手。昭和二年より毎年夏季、冬季、春季に講習會を開催したが、昭和九年現在の地に研究所を建設し、以來石膏、人體寫生及び繪畫一般に互る指導をなし、他に通信指導、講習會等を行つてゐる。午前部（石膏科）、午後部（石膏科、人體科）、夜間部（石膏科、人體科）、日曜部に分つ。月謝石膏科四圓、人體科三圓、日曜部三圓。記名料各部五圓、日曜部二圓。
〔教授〕石川寅治、鈴木信一、佐竹徳次郎〔主幹〕東門正太郎

京都

學校

〔官立〕

京都高等工藝學校

左京區松ヶ崎御所海道町 電上五七、五〇〇三、五七七〇

明治三十五年三月設置。中澤岩太初代校長となり、大正七年七月鶴巻鶴一之に代り更に大正十五年四月、村上宇一校長に任せられ現在に至る。

〔學科〕色染科、機織科、圖案科、窯業科を置く。

〔本科〕修業年限三年。入學資格、中學校卒、實業學校卒及其と同程度。授業料年額八十圓。

〔研究生〕本校又は他の實業專門學校卒業者が既修の學科目を更に研究しようとする場合詮議の上二箇年以内在學を許可されるもの、授業料年額八十圓。

〔選科生〕修業年限三年以内、授業料一科目に付年額十圓。

〔校長〕村上宇一〔名譽教授〕中澤岩太
〔教授〕村上宇一、本野精吾、會田龍雄、古城鴻一、霜島正三郎、松村晋、小島幸三郎、目賀田廉一、山上操、藤野清久、向井寛三郎、都島英喜、田中隆吉、平岡尙、青武雄、荒木長次、湯淺南海男〔生徒主事〕目賀田廉一〔助教授〕淺尾健次

四四

齋藤在達、川森日出壽、田邊武夫、飯田秀夫、山崎實、美和正忠、安藝靜一、足利滿義

本科生徒數

色染科 九一名
機織科 九〇名
圖案科 一〇九名
窯業科 七七名

〔公立〕

京都市立繪畫專門學校

東山區今熊野日吉町 電祇園一五八

明治四十二年三月創立。同校は「專門學校規程に依り日本畫を研究せんとするもの又は師範學校、中學校、高等女學校の圖畫教員たらんとする者に必要なる技術及學理を授くることを目的とする。初め京都市立美術工藝學校の西隣に校舍を營んだが大正十五年六月現地に移轉した。創立以來多數の日本畫家を輩出して今日に及ぶ。

〔學科〕現在豫科、本科及研究科（本科修了者を審議の上編入す）を設置し、豫科及び選科に選科を附設する。

〔豫科〕修業年限二年。入學資格中學卒、專檢合格者。授業料年額五十圓（京都市内に居住せざる者は六十七圓五十錢）

〔本科〕修業年限三年。入學資格豫科修了者又は豫科入學資格者にして豫科二

年修了程度による實習試験に合格せる者。授業料豫科に同じ。圖畫科中等教員無試験檢定の特典あり。

〔研究科〕 修業年限五年。入學資格本科卒業生又は選科生にして本科三年の實習修了者より許可せる者。授業料年額四十五圓（京都市内に居住せざる者は六十二圓五十錢）

〔選科〕 入學資格高等小學二年卒及之と同等以上の學力ある者。授業料年額四十圓（京都市内に居住せざる者は五十五圓五十錢）

〔校長〕 川村曼舟〔教授〕 中井宗太郎、原與作、入江波光、堂本印象、榊原紫峰、宇田萩郎、室本一洋、中村大三郎、石崎光瑤〔助教〕 山口華楊、上村松篁、松元道夫、三宅風白、池田遙郎、加藤一雄〔講師〕 太田喜二郎、猪熊淺磨、久世新十郎、河野通一、清水光繁

京都市立美術工藝學校

東山區今熊野日吉
町 電話一五八

明治十三年七月の創立で、元京都府畫學校と稱し本邦最初の畫學校である。初め普通畫學のみの教授をしたが、同二十一年應用畫學科を併置したのを初めに同二十七年には校則を改正、繪畫科、彫刻科、工藝圖案科を置くに至り、同三十四年には名稱を京都市立美術工藝學校と改めた。大正十五年現地に校舎を移轉した。同校は工業學校規程に據り、美術及

び美術工藝に従事せんとする者に必要なる技能を授くるを目的とし、學科を繪畫科、圖案科、漆工科、彫刻科の四科とし、修業年限を五箇年とす。但し、漆工料は、昭和十五年度より廢止する事となつた。入學資格は尋常小學卒とし、授業料は京都市内に在住者は一箇年四十圓、其他の者は五十五圓五十錢である。

〔校長〕 川村曼舟〔實習科受持〕（繪畫科） 入江波光、勝田哲、登内徹笑、西村卓三、金島桂華、菊池隆志、徳岡神泉、辻宇佐雄、前田萩郎、猪原大華（圖案科） 千能宇平、山鹿清華、田村春曉、大橋寔、山田江秀、森守明、太田喜二郎（彫刻科） 松田尙之、矢野判三、建昌大夢、北村西望、太田喜二郎（漆工科） 平館實、山田江秀

〔私立〕

關西美術院

岡崎公園東北

故淺井忠の主唱により明治三十八年三月創立。洋畫の指導をなす。

〔院長〕 伊藤快彦〔教授〕 黒田重太郎

日本女子美術學校

市外長岡天神

昭和十一年四月創立。主として修身及教育、日本畫或は西洋畫、圖案、國文學及書道其他を教授する。修業年限、本科（高等女學校卒業以上）二年、研究科（本

科卒業は無試験、他の同資格者は實技試験）一年、選科二年。授業料各科共年額九十六圓、但選科に在りて學科單位以下の場合は一單位毎に年額二十四圓、一單位増す毎に十二圓を増す。

〔校長〕 水無瀬忠政〔講師〕（日本畫部） 板倉星光、徳岡神泉、上村松篁、山口華楊、室本一洋（西洋畫部） 太田喜二郎、黒田重太郎、澤部清五郎、森脇忠（圖案部） 田村春曉、山田江秀

研究所

京都彫塑研究所

左京區修學院大坂田町二

昭和八年三月松田尙之に依り開設。人體寫生、石膏模刻の二部に分ち、研究時間（午前九時—午後五時）夜間部（午後六時半—十時半）とし、日曜日は休日とす。記名料五圓、月謝五圓、但し人體部では別にモデル費を臨時徴集する。（昭和十三年松田彫塑研究所と改稱す。）

〔指導者〕 松田尙之

獨立美術京都研究所

上京區烏丸上御靈電停
前 電話四八八〇

昭和八年九月創立。獨立美術協會會員が指揮に當る洋畫研究所で、次の四部を設け、人體、石膏、靜物を研究せしめる。

午前部（九時—正午）は人體研究、午後部（一時—五時）は石膏及靜物研究、夜間部（六時—九時）は人體及石膏研究、日曜部（午前九時—午後五時）は石膏及靜物研究をなす。月謝は各部とも三圓五十錢、記名料七圓とし、男女年齢を問はず入所することを得。現在研究生五十七名。

〔實技指導者〕 獨立美術協會會員（常任指導者） 須田國太郎

日佛文化協會洋畫研究部

吉田東一條
電上一四三〇

財團法人日佛文化協會の經營により昭和十一年十月開設。健實なる畫風を養成し、佛國國立美術學校、東美校入學志望者の爲に便宜を計る。午前部、午後部、夜間部を置き、男女を問はず隨時入所出来る。學期を分つて春期（四月十六日—六月二十四日）、秋期（九月二十一日—十二月二十日）、冬期（一月十一日—三月十日）とす。各部入會金五圓。授業料は每學期、午前部十五圓、午後部、夜間部九圓。中途入部者は月割にて納付する。

〔主任〕 鹿子木孟郎〔顧問〕 太田喜二郎、黒田重太郎〔教授〕 井垣嘉平、池田治三郎、服部喜三

大阪

學校

大阪美術學校

府下北河内郡殿山町御殿山

大正十三年矢野橋村が主なる發企者となつて創立。修業年限は本科三年、專攻科二年。入學資格は本科は尋常小學卒、專攻科は本科卒業生又は之と同等の學力あるものとし、各々試験の上入學を許可する。月謝五圓、入學金十圓。授業時間（男子部）午後一時—五時（女子部）午前八時—正午

〔指導者〕（日本畫科）矢野橋村、福岡青嵐（西洋畫科）齋藤與里、園部晋（學科）近藤尺夫、齋藤與里

研究所

赤松洋畫研究所

南區心齋橋筋二丁目丹平
ハウス二階 電南九五七

洋畫の指導を行ふ。夜間部、日曜部、婦人部を設け、夜間部は午後七時より十時迄、月謝五圓。日曜部及婦人部は毎日曜午前九時より午後四時迄、月謝三圓とす。毎春「赤松洋畫研究所展」を開く。
〔主任〕赤松麟作、松本銳次、田川寛

中之島洋畫研究所

北區中之島朝日ビルディング内
電本局四五〇〇—四五〇四

大正十三年四月鍋井克之、故小出楢重、國枝金三の三名により、大阪市西區信濃橋日清生命ビル内に開設、信濃橋洋畫研究所と稱した。同年黒田重太郎参加し、爾來夏期講習會、研究所展を屢々開催したが、昭和二年研究所展を擴充して、公募展「全關西洋畫展」を開催し以來引續いて今日に及んでゐる。同六年現地に移轉し、現稱に改めた。研究所を普通部、婦人部、日曜部、日曜夜間部に分つ。普通部を午前部（午前九時—正午）、夜間部（午後六時—九時）に分ち、石膏部及人體部を置く。日曜部は午前九時より午後四時迄で、石膏、人體寫生及クロッキー等、婦人部は午後一時より四時迄で、靜物、人體寫生等、日曜夜間部は午後六時より九時迄で、クロッキーを研究する。普通部入所記名料十圓。石膏部月謝五圓。人體部六圓。夜間部は石膏、人體何れも五圓。日曜部、婦人部は記名料五圓、月謝五圓。日曜夜間部は一回五十錢。
〔實技指導者〕伊藤繼郎、田村孝之介、鍋井克之、黒田重太郎、國枝金三、山本直治、松井正、古家新、福島金一郎、小出卓二

美光會洋畫研究所

西區新町橋停留所前

昭和九年五月設立。齋藤與里及美光會會員の指導する洋畫研究所で、普通部（午後六時半—九時半）、日曜部（午前九時—午後四時）に分け、石膏、人體、靜物寫生を教授する。月謝は普通部四圓、日曜部二圓。

八千草會研究所

布施市長瀬外島 木谷
千種方 電布施三七三

一般家庭の青年子女に繪畫趣味を普及養成する目的を以て、大正十年春創立。人物、花鳥の日本畫を教授する。實習は毎月四回日曜日。
〔指導者〕木谷千種

其他地方

アシヤ洋畫研究所

兵庫縣武庫郡精道村山盛屋冠

昭和四年四月設立。油繪、水彩、パステル、デッサンの教授をなす。研究時間毎週水、土曜日午後、日曜日午前とす。所費は一年四十圓、半年二十五圓、一ヶ月五圓。記名料五圓。他に小學生部を置く。又阪急岡本停留所東隣、本山幼稚園に「本山分室」を設け毎週木曜日午後開講す。
〔指導者〕吉田喜藏

鎮山洋畫研究所

神戸市神戶區元町通
一丁目二四鯉川筋

昭和六年創立。主として洋畫の技法を初心者に本格的に指導教授す。第一部夜間部（日曜より金曜迄毎日午後七時—十時）、第二部女子部（土曜日午後及日曜日午前中）に分ち各素描、水彩、パステル、油繪を科目とす。研究費月額五圓、入所記名料五圓。
〔指導者〕有吉正雄

神戸洋畫研究所

神戸市神戶區中山手通七ノ四
六九直木邸内 電元町二三四

昭和三年設立。舊稱山手洋畫研究所。晝間、夜間、日曜、女子の四部に分れ、初學者の指導をもなす。所費は一ヶ月五圓、記名料二圓。
〔指導者〕濱田葆光

赤艸社女子洋畫研究所

神戸市葺合區熊内町二ノ一
〇龜高文子方 電葺合五五五

大正十二年創立。週二回（土、日）デッサン、油繪、水彩の實習をなす。毎秋神戸、大阪に作品發表展を開催。研究所同人五十一名。
〔指導者〕龜高文子

李仁星洋畫研究所

朝鮮大邱南山町三
三三 電一〇二七

油繪、水彩畫等の實技指導を行ふ。午前、午後、夜間、特設日曜研究部の各部を設け、入所は男女年齢を問はず。月謝は午前、午後、夜間は各々四圓。特設日曜部は三圓、人體部五圓とす。
〔指導者〕李仁星

工藝及建築教育施設

(大學、專門、中等)

大學

東京帝國大學工學部 (建築學科) (官立)
東京市本郷區本富士町

京都帝國大學工學部 (建築學科) (官立)
京都市左京區吉田町

東京工業大學 (建築學科、窯業學科、染料化學科) (官立) 東京市目黒區大岡山

早稲田大學理工學部 (建築學科) (私立)
東京市淀橋區戸塚町

日本大學工學部 (建築學科) (私立)
東京市神田區駿河臺

專門學校

東京美術學校 (日本畫、油繪、彫刻)

美術教育施設一覽

〔塑造、木彫〕、工藝〔圖案、彫金、鍍金、鑄金、漆工〕、建築、圖畫師範科
〔豫科一年、本科四年、師範科三年〕 (官立) 東京市下谷區上野公園(三七頁参照)

東京高等工藝學校 (工藝圖案、金屬工藝、木材工藝、印刷工藝、精密機械、木材工藝別科) (三年、木材工藝別科二年) (官立) 東京市芝區西芝浦一丁目(三八頁参照)

京都高等工藝學校 (色染、機械、圖案、窯業) (三年) (官立) 京都市左京區松ヶ崎御所海道町(四四頁参照)

名古屋高等工藝學校 (機械、色染、紡織、土木、建築、電氣) (三年) (官立) 名古屋市中區御器所町

米澤高等工藝學校 (機械、電氣、應用化學、色染化學、紡織) (三年) (官立) 米澤市馬口旁町

桐生高等工藝學校 (機械、應用化學、色染化學、紡織) (三年) (官立) 桐生市天神町

橫濱高等工業學校 (機械工學、應用化學、電氣化學、建築學、造船工學) (三年) (官立) 橫濱市中區大岡町

仙臺高等工業學校 (機械工學、電氣工學、土木工學、建築工學) (三年) (官立) 仙臺市南六軒町

神戸高等工業學校 (機械、電氣、建築、土木) (三年) (官立) 神戸市須磨區水笠通

福井高等工業學校 (機械、纖維工業、建築) (三年) (官立) 福井縣吉田郡西藤

島村

上田蠶糸專門學校 (養蠶、製糸、絹糸紡織) (三年) (官立) 上田市常入町

京城高等工業學校 (紡織、應用化學、應用化學部、窯業部、色染部、土木、建築、鑛山) (三年) (官立) 京都市東區洞南瀨洲工業專門學校 (建築、土木、農業土木、鑛山、電氣、機械) (三年) (私立) 大連市伏見町

日本大學專門部工科建築學科 (三年) (私立) 東京市神田區駿河臺

甲種工業學校

關東地方

東京府立織染學校 (染織) (本科五年、專修科二年) (本科專卒、專修科高卒) 八王子市明神町

東京府立工藝學校 本科(金屬工業精密機械、木材工藝、製版印刷) 第二本科(同上) 第三本科(機械、仕上、板金塗工、製版) (本科五年、第二本科四年、第三本科機械、仕上科三年、板金塗工、製版科二年) (本科專卒、第二本科高卒、第三本科機械、仕上科專卒) 東京市本郷區元町

東京府立實科工業學校 本科(機械部、建築部) 別科(機械部、建築部) 第二本科(建築、機械工作、電氣機械工作、精密機械工作) 第三本科(建築、機械工作、電氣機械工作、精密機械工作)

栃木縣立足利工業學校 (本科機械、染織、第二部色染、機械、圖案) (本科五年、第二部一年) (本科專卒、第二部中卒) 足利市西宮町

栃木縣立宇都宮工業學校 (土木、建築、木工) (本科五年、選科二年以內) (專卒) 宇都宮市西原町

群馬縣立伊勢崎工業學校 (機械、色染) (本科五年、研究生、選科生二年以內) (專卒) 群馬縣佐波郡伊勢崎町

前橋工業學校 (染織、製絲、建築) (五年) (專卒) (市立) 前橋市岩神町

(本科五年、三年、別科二年以內、第二本科四年、第三本科四年) (本科專卒、別科專卒、第二本科高卒、第三本科專卒) 東京市深川區富川町

法政大學工業學校 (建築、土木、電氣) (四年) (高卒) (財團法人) 東京市麴町區富士見町

安田工業學校 (建築、電氣) (本科五年、第二本科四年、高等科二年、工業夜學部二年、專修科半年以上一年、選科生一學期) (本科專卒、第二本科高卒、高等科工卒、工業夜學部專卒、專修科專卒) (財團法人) 東京市本所區橫綱

日本大學工業學校 (機械、建築、土木、電氣) (四年) (高卒) (財團法人) 東京市神田區駿河臺

東京市立小石川工業學校 (本科電氣機械、建築、專修印刷、自動車) (本科四年、專修一年) (高卒) 東京市小石川區同心町

栃木縣立足利工業學校 (本科機械、染織、第二部色染、機械、圖案) (本科五年、第二部一年) (本科專卒、第二部中卒) 足利市西宮町

栃木縣立宇都宮工業學校 (土木、建築、木工) (本科五年、選科二年以內) (專卒) 宇都宮市西原町

群馬縣立伊勢崎工業學校 (機械、色染) (本科五年、研究生、選科生二年以內) (專卒) 群馬縣佐波郡伊勢崎町

前橋工業學校 (染織、製絲、建築) (五年) (專卒) (市立) 前橋市岩神町

群馬縣立桐生工業學校 (色染、機械)

(五年) (尋卒) 桐生市西久方町

埼玉縣立川越工業學校 (染織、圖案)

(本科五年、選科一年以內) (尋卒) 川越市

神奈川縣立工業學校 (機械、建築、家具、電氣、圖案) (五年) (尋卒) 橫濱市神奈川區

北海道、東北地方

北海道、東北地方

北海道廳立札幌工業學校 (採鑛、機械、土木建築、家具) (三年) (採鑛、機械、土木建築科高卒、家具科尋卒) 札幌市南十四條

北海道廳立函館工業學校 (機械、建築、土木、應用化學、木材工藝) (三年) (高卒) 函館市龜田町

北海道廳立苫小牧工業學校 (土木、建築、機械、電氣、應用化學) (三年) (高卒) 勇拂郡苫小牧町

青森縣立弘前工業學校 (木材工藝、建築、機械、土木) (本科五年、專修科三年以內、研究生二年以內、第二部(機械一年) (本科尋卒、專修科尋卒、第二部中卒) 弘前市馬屋町

青森縣立青森工業學校 (木材工藝、建築、機械) (五年) (尋卒) 青森市大字

岩手縣立工業學校 (機械、建築、土木、應用化學) 專修科(金工、木工) (三年、專修科二年) (高卒、專修科尋卒) 盛岡市大字上田

宮城縣工業學校 (機械、電氣、木材工藝) (本科四年、專修科二年) (本科高卒、專修科尋卒) 仙臺市米ヶ袋廣丁

仙臺工業學校 (建築、家具、機械、土木) (本科五年、專修科二年) (尋卒) (市立) 仙臺市二十人町通

秋田縣立秋田工業學校 (機械、電氣、土木、建築) (本科三年、研究科) (高卒) 秋田市保戸町金砂町

秋田縣立能代工業學校 (機械、木材工藝、建築) (本科三年、建築科二年) (高卒) 秋田縣山本郡能代港町

山形縣立米澤工業學校 (染織、建築機械) (本科五年、專修科一年、選科生一年、研究生) (本科尋卒、專修科中卒、選科生尋卒) 米澤市南堀端町

山形縣立山形工業學校 (染織、機械化學工業、土木) (本科五年、專修科一年、選科生一年、研究科) (本科尋卒、專修科中卒、選科生尋卒) 山形市六日町

山形縣立鶴岡工業學校 (染織、建築電氣、機械) (本科五年、專修科一年、選科生一年、研究生) (本科尋卒、專修科中卒、選科生尋卒) 鶴岡市中新町

福島縣立會津工業學校 (染織、窯業漆工、應用化學) (本科五年、專修科三年以內、研究生) (尋卒) 若松市榮町

福島縣立川俣工業學校 (染織) (本科三年、研究生二年以內) (高卒) 福島縣伊達郡川俣町

新潟縣立長岡工業學校 (染織、機械應用化學、電氣) (本科五年、別科二年專修科二年) (本科尋卒、專修科中卒) 長岡市東千手町

新潟縣立高田商工業學校 商業科、工藝科木工、漆工 (本科五年、補習科二年) (尋卒) 高田市南城町

富山縣立工藝學校 本科(木材工藝、工藝圖案、工藝彫刻、應用化學、金屬工藝、機械、漆工、電氣) 第二部(應用化學、機械) (本科五年、第二部一年) (本科尋卒、第二部中卒) 高岡市中川

市立富山工業學校 (建築、木材工藝土木) (五年) (尋卒) 富山市田刈屋

石川縣立工業學校 (色染、漆工、窯業、金工、機械、繪畫、圖案、木工) (本科五年、選科生二年以內、研究生一年以內) (尋卒) 金澤市中本田町

金澤市立工業學校 本科、專修科(土木、建築、機械、電氣) 第二部(機械、電氣) (本科五年、專修科二年以內、第二部一年) (本科尋卒、第二部中卒) 金澤市泉野町

福井縣立工業學校 (染織) (本科五年、第二部一年) (本科尋卒、第二部中卒) 福井縣吉田郡圓山西村

山梨縣立工商學校 (商業科、染織科) (本科五年、專修科一年、選科三ヶ月以上一年) (本科尋卒、專修科中卒、選科尋卒) 山梨縣南都留郡谷村町

市立甲府工業學校 (土木建築、木材工藝) (本科五年、選科生二年以內) (尋卒) 山梨縣南都留郡谷村町

工藝) (本科五年、選科生二年以內) (尋卒) 山梨縣西山梨郡千塚村

山梨縣立峽南農工學校 (農業科、木材工藝科)

長野縣長野工業學校 本科(機械、電氣、應用化學、土木、建築) 專修科(機械、電氣、土木、建築) (本科四年、專修科二年) (高卒) (縣立) 長野市岡田

長野縣諏訪醫藥學校 (蠶糸科、染織科) (五年) (尋卒) (縣立) 岡谷市

岐阜縣多治見工業學校 (陶器) (三年) (甲部高卒、乙部尋卒) (縣立) 岐阜縣土岐郡多治見町

岐阜縣第一工業學校 (應用化學、染織、土木、機械) (五年) (尋卒) (縣立) 岐阜縣羽島郡笠松町

岐阜縣第二工業學校 (色染化學、機械、電氣、建築) (五年) (尋卒) (縣立) 大垣市南若森町

靜岡縣立靜岡工業學校 (機械、電氣木工) (機械、電氣五年、木工二年) (尋卒) 靜岡市東鷹匠町

靜岡縣立濱松工業學校 (色染仕上、紡織、圖案、建築) (五年) (尋卒) 濱松市北寺島町

愛知縣工業學校 (紡織、染織化學、圖案印刷、機械、電氣) (本科五年、選科生四年以內、研究生二年以內) (尋卒) (縣立) 名古屋市中區御器所町

名古屋工業學校 (建築、土木) (四年) (高卒) (財團法人) 名古屋市中區圓上町

愛知縣窯業學校 (窯業) (五年) (縣立)

中部地方

中部地方

中部地方

中部地方

中部地方

中部地方

中部地方

中部地方

年) (尋卒) 瀬戸市

名古屋市立工藝學校 (木材工藝、金屬工藝、圖案、建築、精密機械) (第一

本科五年、第二本科四年、別科三年以內)
(第一本科尋卒、第二本科高卒) 名古屋

市南區熱田西町

愛知縣常滑工業學校 (製陶實科、製

陶科) (本科三年、選科生、研究生) (尋

卒) (縣立) 愛知縣知多郡常滑町

愛知縣起工業學校 (染織) (第一本

科五年、第二本科二年、別科) (尋卒)
(縣立) 愛知縣中島郡起町

近畿地方

津市立工業學校 (建築、木材工藝)

(五年) (尋卒) 三重縣安濃郡神戶村

滋賀縣立彦根工業學校 (建築、色染、

紡織) (本科五年、研究科) (尋卒) 滋賀
縣大上郡青波村

京都市立美術工藝學校 (繪畫、漆工、

圖案、彫刻) (五年) (尋卒) 京都市東山
區今熊野日吉町 (便覽四五頁參照)

京都市立第一工業學校 (建築、色染、

機械、機械、電氣、工業化學) (本科五
年、第二本科四年、專修科一年) (本科

尋卒、第二本科高卒、專修科中三修) 京
都市下京區唐橋大宮尻町

京都府立工業學校 (染織) (本科五

年、專修科一年) (本科尋卒、專修科高
卒) 京都府中郡吉原村

大阪市立島工業學校 (電氣、機械、

建築、土木) (六年) (尋卒) 大阪市北區
善源寺町

大阪府立泉尾工業學校 (紡織、色染、

窯業、應用化學) (五年) (尋卒) 大阪府
大正區泉尾松ノ町

大阪府立西野田職工學校 本科 (家

具木型、鑄工、鍛工、仕上、建築、建築
裝飾) 高級科 (機械、建築、圖案) 第二

本科 (鑄工、鍛工、仕上、電氣) 第二高
級科 (機械、電氣、專修科) (機械、建築、

裝飾圖案) (各科三年、專修科六ヶ月)
(本科、第二本科尋卒、高級科工二修、第

二高級科本二修、專修科尋卒) 大阪府此
花區大開町

大阪府立今宮職工學校 本科書問部

(建築、印刷、電機、鑄工、仕上、木型
鍛工、精密機械) 本科夜間部 (電機、機

械、建築) 高級科 (電機、建築、印刷機
械) 專修科 (機械、電氣、建築、印刷)

(本科書問部三年、本科夜間部二年、高
級科三年、專修科六ヶ月) (本科書問部

尋卒、本科夜間部高卒、高級科工二修、
專修科尋卒) 大阪府西成區西四條

大阪市立工藝學校 (金屬工藝、木材

工藝、工藝圖案) (五年) (尋卒) 大阪府
住吉區天王寺町

關西工業學校 第一本科 (土木、電

氣) 第二本科 (土木、建築) (第一本科
五年、第二本科四年) (第一本科尋卒、

第二本科高卒) (財團法人) 大阪府東淀
川區南方町

大阪市立島第二工業學校 (機械、

電氣、建築、土木) (四年) (高卒) 大阪
市北區善源寺町

兵庫縣立工業學校 (機械、電氣、建

築、應用化學、土木) (本科五年、專修
科二年) (尋卒) 神戶市兵庫區大開通

奈良縣立御所工業學校 (染織) (本

科五年、別科三ヶ月以上一年、選科一年、
研究科) (本科尋卒、選科中卒) 奈良縣

南葛城郡御所町

奈良縣立吉野工業學校 (建築、木材工

藝) (五年) (尋卒) 奈良縣吉野郡吉野町
和歌山縣立工業學校 (建築、木材工

藝、應用化學、染織、機械) (本科五年、
別科) (尋卒) 和歌山市撞木町

中國四國地方

島根縣立工業學校修道館 (建築、木材

工藝、機械) (本科五年、選科一年以內)
(尋卒) (縣立) 松江市大正町

廣島縣立廣島工業學校 (機械、建築

電氣、土木) (本科四年、專修科二年以
內) (高一修) 廣島市千田町

廣島縣立三十日市工業學校 (建築、

木材工藝、塗裝) (三年) (高卒) 廣島縣
佐伯郡二十日市町

廣島縣立福山工業學校 (紡織、色染

化學、圖案) (本科五年、專修科一年)
(尋卒) 福山市野上町

岩國商工學校 (商業科、木材工藝科)

(三年) (高卒) (町立) 山口縣玖珂郡岩
國町

市立下關商工學校 (商業科、木材工藝

科) (三年) (高卒) 下關市大字關後地村

德島縣立工業學校 (建築、染織、木

材工藝) (建築、染織科五年、木材工藝科
三年) (尋卒) 德島市

香川縣立工藝學校 (金工、木工、漆

工、建築) (本科五年、專修科三ヶ月以上
一年、選科三年以內) (尋卒) 高松市幸町

愛媛縣立松山工業學校 (建築、染織、

土木) (三年) (高卒) 松山市真砂町

高知縣立高知工業學校 (應用化學、

機械、電氣、土木建築) (本科五年、選
科) (尋卒) 高知市北與力町

九州地方

福岡縣福岡工業學校 (建築、機械、

染織、探礦) (本科五年、選科一年以內、
第二部一年、研究科) (本科高卒、第二

部中卒) (縣立) 福岡市東湊町

福岡縣浮羽工業學校 (建築、家具塗

工) (本科三年、高級科三年、選科一年以
內、補習科三年以內) (本科尋卒、高級科

本二修) (縣立) 福岡縣浮羽郡田主丸町
佐賀縣立有田工業學校 (圖案繪畫、

製陶) (五年) (尋卒) 佐賀縣西松浦郡有
田町

長崎縣立長崎工業學校 (應用化學、

造船、木工) (五年) (尋卒) 長崎市丸尾町
長崎縣立佐世保工業學校 (金工) (五

年) (尋卒) 佐世保市白南風町

熊本縣立工業學校 (建築、機械、染

織、土木、應用化學) (五年) (尋卒) 熊
本市大江町

大分縣立大分工業學校 (建築、機械、電氣) (五年) (尋卒) 大分市勢家町

大分縣立鶴崎工業學校 (建築、家具) (三年) (高卒) 大分縣大分郡鶴崎町

宮崎縣立宮崎工業學校 (建築、家具、塗工) (本科三年、專修科) (本科高卒、專修科尋卒) 宮崎市宮田町

鹿兒島縣立鹿兒島工業學校 (機械、建築) (本科五年、第一部一年) (本科尋卒、第二部中卒) 鹿兒島市草牟田町

鹿兒島縣立加治木工業學校 (建築、家具) (三年) (高卒) 鹿兒島縣始良郡加治木町

鹿兒島實業學校 商業科、工業科、建築、機械、家具、土木、美術工藝) 工業夜間部 (土木) (工業科三年、工業夜間部四年) (高卒) (私立) 鹿兒島藥師町

鹿兒島縣立薩南工業學校 (土木、建築) (三年) (高卒) 鹿兒島縣川邊郡知覽村

沖繩縣立工業學校 (建築、家具、漆工) (三年) (高卒) 首里市富藏町

乙種工業學校

栃木縣足利市實業學校 (染織、木工) (三年) (尋卒) (市立) 足利市本城

神奈川縣橫須賀市立實業學校 (金工、木工) (本科三年、研究科二年) (本科尋卒、研究科高卒) 橫須賀市諏訪町

新潟縣立三條商工學校 (金工、商業) (三年) (尋卒) 三條市一ノ木戸

新潟縣立栃尾實業學校 (染織、商業、農業) (三年) (尋卒) 新潟縣古志郡下鹽谷村

山梨縣瑞穗實業學校 (染織、農業) (三年) (尋卒) (村立) 山梨縣南都留郡瑞穗村

愛知縣工業實務學校 (織染、機械、電氣) (二年) (高一修) (縣立) 名古屋市中區御器所町

名古屋市立工業專修學校 (機械、建築、工藝) (機械、建築科三年、工藝科二年、選科生) (高卒) 名古屋市南區熱田西町

大湊町立工業學校 (木材工藝、造船機械) (三年) (尋卒) 三重縣度會郡大湊町

白子町立工業學校 (型紙彫刻) (三年) (尋卒) 三重縣河藝郡白子町

四日市市立商工學校 工業科 (窯業、機械、商業科) (本科三年、專攻科二年) (本科尋卒、專攻科本卒) 四日市市大字四日市

京都市立第二工業學校 木材工藝、金屬工業、建築裝飾、陶磁器、漆裝) (三年) (尋卒) 京都市伏見區深草鈴塚町

大阪市立實業學校 商業科、工業科 (機械、金屬工藝、木工、電機、應用化學) (本科三年、補習專修科、選科) (尋卒) 大阪市北區玉江町

大阪市青英商工學校 商業科、工業科 (家具、塗工、電氣) (工業科二年、專修科六ヶ月乃至二年) (尋卒) (市立) 大阪市南區鰻谷東之町

大阪市立難波實業學校 本科 (商業科、木材工藝、機械) 專修科 (製圖、洋家具) (本科二年、專修科六ヶ月) (尋卒) 大阪市浪速區西神田町

兵庫縣立姫路工業學校 (紡織、色染化學、工藝圖案、工藝) (三年) (尋卒) 姫路市伊傳居

和歌山縣湯淺實業學校 (木材工業、商業、農業、高等家政) (木材工業科三年) (尋卒) (町立) 和歌山縣有田郡湯淺町

島根縣立江津工藝學校 (木工、建築) (三年) (尋卒) 島根縣那賀郡江津町

岡山工藝學校 (木工、金工、塗工) (三年) (尋卒) (市立) 岡山市大字東古松

岡山縣倉敷實業學校 (木材工藝、商業、農業) (三年) (尋卒) (市立) 倉敷市富久

廣島市工業學校 本科 (機械、電氣) 選科生 (土木、建築) (本科三年) (本科高卒) (市立) 廣島市千田町

長門工業學校 (鍛工、製罐、木工、鑄鋼、旋工、仕上、鑄造) (本科三年、別科) (尋卒) (私立) 宇部市

大牟田工藝學校 (建築、家具) (本科三年、研究科、補習科) (尋卒) (私立) 大牟田市本町

熊本市立商工學校 第一本科工業部 (機械、家具、塗工) 第二本科 (建築) (第一本科三年、第二本科二年、練習生二年、選科二年以內) (第一本科尋卒、第二本科高卒、練習生本卒、選科尋卒) (市立) 熊本市新町

熊本縣水俣實業學校 (木材工藝、商業、農業、家政) (本科二年、專修科一年) (本科尋卒、專修科本卒) (町立) 熊本縣葦北郡水俣町

熊本縣山鹿實業學校 (木材工藝、商業、家政) (三年) (尋卒) (町立) 熊本縣鹿本郡山鹿町

大分縣日田工藝學校 (木工、漆工) (本科三年、補習科一年以內) (尋卒) (組合立) 大分縣日田郡日田町

大分縣竹田商工學校 (家具、商業) (三年) (尋卒) (町立) 大分縣直入郡竹田町

鹿兒島市立天保山商工學校 (商業、木竹工藝、塗裝) (三年) (尋卒) 鹿兒島市天保山町

臺灣、朝鮮、關東州

臺北工業學校 (五年) (尋卒) (州立) 臺北市

私立臺灣商工學校 (三年) (尋卒) (財團法人) 臺北市

私立臺灣商工學院 (三年) (尋卒) (財團法人) 臺南市

京城工業學校 (三年) (高二卒、普高卒) (官立) 京城府東崇洞

鎮南浦公立商工學校 (五年) (普六卒、尋卒) 平安南道鎮南浦府

昭和工科學校 (二年) (高卒、中學二修、高普二修) (私立) 京城府

大連工業學校 (五年) (尋卒) (市立) 大連市外西山會

撫順工業學校 (三年)(高卒)(滿鐵)
撫順南大街二

南滿洲工業專門學校附設工業實務學校
(二年)(高卒)(滿鐵)大連市伏見町一四

各大學美學美術史講座

(昭和十二年度)

〔官立〕

東京帝國大學 (文學部美學美術史學科)

「美學概論」「美的範疇論」「美學演習」
教授大西克禮、「西洋音樂史概説」「講師遠藤宏」、「日本美術史概説(前期)」、「繪卷物の研究」「美術史演習」教授藤懸靜也、「西洋美術史概論(希臘彫刻史紀元前五世紀まで)」「西洋美術史各論(伊太利亞文藝復興期ノ繪畫)」助教授兒島喜久雄、「唐代繪畫ノ研究」講師松本榮一

(考古學)「東洋古代風俗畫ノ考古學的觀察」「考古學演習(後漢書與服志)」助教授原田淑人

京都帝國大學 (文學部哲學科)

「美學序論」「日本美術的美學的的研究」「演習(藝術の諸問題)」教授植田壽藏、「鎌倉時代的美術」講師源豐宗、「美學思想の發展に於ける希臘美術と中世美術」講師井島勉

(文學部史學科)「考古學通論、東亞上代の美術」教授濱田耕作、「日本考古學」助教授梅原末治、「北方亞細亞考古學」

講師水野清一、「演習(先史考古學の諸問題)」教授濱田耕作、助教授梅原末治、「考古學實習」助教授梅原末治、「史學科副科目」(考古學英書講讀) 教授濱田耕作

東北帝國大學 (法文學部第一部美學、第三部東洋藝術史)

「美學概論、美學及藝術學特殊講義(ゲーテの晩年藝術)、同演習(ファウストの第二部)」教授阿部次郎、「音樂史(近代フランス音樂)」教授加藤誠之、「日本藝術史普通講義(日本美術史概説)、同演習」「特殊問題研究」東洋藝術史特殊講義(東洋畫の様式) 教授福井利吉郎、「西洋藝術史(概説)」講師兒島喜久雄

(考古學)「考古學(講讀)」講師伊東信雄

九州帝國大學 (法文學部)

「美學演習、東洋美術史(日本彫刻史)」教授矢崎美盛、「西洋美術史」講師兒島喜久雄

京城帝國大學 (法文學部哲學科)

(第一講座)「美學概論」「美學演習」「西洋美術史」教授上野直昭、(第二講座)「東洋美術史(唐宗時代)、日本美術史(藤原時代)」教授田中豐藏
(法文學部史學科)「考古學概論」教授藤田亮策

東京文理科學大學 (美學)

「美學概論」講師大西克禮

〔私立〕

大谷大學 (考古學)「考古學概論」

講師長廣敏雄

關西大學 (法文學部)

「西洋美術史(Wilhelm Worringer: Formprobleme der Gotik)」菅守常、「美學美術史(古代ギリシヤ美學思想史)」辻部政太郎

慶應義塾大學 (文學部美學、美術史學科)

「美學(西洋美學史一獨逸古典時代)」助教授守屋謙二、「東洋美術史(日本彫刻史概説)」講師丸尾彰三郎、「西洋美術史(西洋繪畫史の主要問題)」講師板垣鷹穂

(考古學)「考古學(日本歴史考古學)」柴田常惠

高野山大學 (文學部佛教藝術學科)

「佛教美術概説」小野玄妙、「印度の佛教彫刻」松本文三郎、「日本美術史概説、中世繪畫史」堀田眞快、「西洋美術史概説」佐和隆研

國學院大學 (美術史)

「日本美術史(神道美術史)」教授藤懸靜也

(考古學)「考古學」講師大場磐雄

駒澤大學 (佛教學科)

「印度佛教史(印度佛教美術史)」教授逸見梅榮

大正大學 (美術史)「佛教美術」脇本十九郎

(考古學)「考古學」八幡一郎

東洋大學 (美學)「美學概論」大西克禮、山際靖

同志社大學 (美學)「美學概論」教授園賴三

日本大學 (美學、美術史)「美學」山際靖、「日本美術史」吉田辰雄

(考古學)「考古學」八幡一郎

法政大學 (美學、美術史)「美學」教授谷川徹三、「西洋美術史」講師板垣鷹穂

立正大學 (美學、美術史)「美學概論」講師西宮藤朝、「日本佛教美術史」

龍谷大學 (美學美術史)「美學美術史」源豐宗

(考古學)「考古學」水野清一

早稻田大學 (文學部藝術學科)「美學」講師大西克禮、「東洋美術史」教授會津八一、「西洋美術史」講師坂崎坦、

「考古學概論」教授西村眞次

工藝指導施設一覽

工藝指導所 (官立)

仙臺市廿八町通
電三七六〇

「本邦固有の工藝を改善し之が全國工業化を圖り現代民衆生活の要求に合致せしむる」と共にその海外輸出の振興を圖る目的を以て昭和三年政府に依り設置され、はじめ商工省内に假事務所を設けたが同年十一月仙臺市の廳舎竣工と共に事務所を移轉し事業を開始して現在に至つ

工藝指導施設一覽

た。其後事業の進展上東京に於ける調査研究の必要を認め昭和八年五月商工省内に工藝指導所出張員事務室を設け常時所員を駐在せしむる事となつた。尙第七十帝國議會の協賛を経て東京に中央機關を設置し大阪に關西支所を設け仙臺の本所は東北支所となし夫々各地方に適應せる指導を行ふこととなつた。當所は〔第一部〕木工、洋塗工、漆工〔第二部〕鑄造、板金、金屬化學、彫塑〔第三部〕圖案設計、展示、寫眞、印刷〔庶務課〕庶務及會計、其他調査係、傳習生係、編纂係等を設置し其事業に當つて居るが、その業務一般を要覽に依つて記せば左の如し。

業務一般

一 調査研究

内外工藝に關する意匠圖案設計材料技術、生産工藝各般に關する調査研究及參考資料の蒐集をなす

二 試驗研究

主として木、金、漆工藝に利用すべき原料、材料、意匠圖案、又は機械器具及製作技術に關する試驗研究、各種工藝品の規範原型の研究をなす

三 試作研究

主として木、竹工品、金工品、漆工品、其他各種工藝品を研究的に試作し、一般業者の參考に供すると共に適當の産地又は業者に實施せしめ工業化する

四 製品、圖案及參考品の貸與及展示

本所の研究試作品、設計圖案又は參

考品は申請により之を貸與し或は展示會、展覽會、博覽會等に出品する製作加工圖案調製應需

五

當所では木工、金工、漆工に關する製作加工又は之が圖案的調製依頼に應じ其他當所研究による試作品及圖案的配布をする

六

傳習生及研究生の養成
當所に於ける傳習生の養成は全國斯業の發達向上を目的とし主として木工、金工、漆工業者及其子弟並に工場從業者に對し其實務に必要な技術及知識を短期間に修得せしめる。研究生は工藝の學理又は技術に關して經驗を有し特に特別の研究を希望する者を入所せしめ専任所員が指導する

七

講習、講演及審査
當所の調査研究に基き工藝に關する講習、講演を開催し又は申請により講習、講演又は審査のため當所職員を派遣し、實地の指導をする

八

質疑應答
木工、金工、漆工に關する材料技術意匠、其他工藝各般に關する質問に對し口答又は文書を以て應答し業者を啓發する

九

設備貸與
當業者の試驗研究又は製品加工のため申請のあるときは當所作業に支障のない限り設備を貸與し便宜を圖る
刊行物頒布

本所の試験研究及調査に基き工藝ニユースを編輯し、之を工政會から發行させ又隨時工藝に關する小冊子及圖録を編纂し關係各方面に頒布する

工藝指導所官制

昭和十二年八月十二日
勅令第四百二十七號改正

第一條 工藝指導所ハ商工大臣ノ管理ニ屬シ工藝ノ指導ヲ爲ス爲左ノ事務ヲ掌ル

- 一 工藝品ニ關スル試験及研究
- 二 工藝品ノ原料及材料ノ品質ノ鑑定
- 三 工藝品製作ニ關スル傳習及講習
- 四 試験研究ノ爲製作シタル工藝品、加工シタル其ノ材料並ニ調製シタル其ノ意匠圖案ノ配付

第二條 工藝指導所ハ工藝ノ改善ニ必要アリト認ムル場合ニ限り工藝品ノ製作並ニ其ノ意匠圖案ノ調製ノ依頼ニ應スルコトヲ得

第三條 工藝指導所ニ左ノ職員ヲ置ク

- 所長
- 技師 專任 六人 奏任
- 屬 專任 一人 判任
- 技手 專任 五人 判任
- 所長ハ技師ヲ以テ之ニ充ツ
- 第四條 所長ハ商工大臣ノ指揮監督ヲ承ケ事務ヲ掌ル
- 第五條 技師ハ上官ノ命ヲ承ケ技術ヲ掌ル
- 第六條 屬ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第七條 技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ技術ニ從事ス

第八條 商工大臣ハ必要ト認ムル地ニ工藝指導所ノ支所ヲ置キ本所ノ事務ヲ分掌セシムルコトヲ得

附則 本會ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

商工省内臨時職員設置制拔萃
昭和八年勅令第三十六號改正

第六條ノ三 工藝振興ニ關スル事務ニ從事セシムル爲工藝指導所ニ左ノ職員ヲ置ク

- 技師 專任 二人
- 技手 專任 四人
- 同所處務規程拔萃

一、工藝指導所ニ第一部第二部第三部及庶務課ヲ置ク

一、第一部ニ於テハ木工品並ニ木工用原料及材料ニ關スル事務ヲ掌ル

一、第二部ニ於テハ金屬工品並ニ金屬用原料及材料ニ關スル事務ヲ掌ル

一、第三部ニ於テハ意匠及圖案ニ關スル事務ヲ掌ル

一、庶務課ニ於テ庶務及會計ニ關スル事務ヲ掌ル

職員
技師 所長兼第三部長事務取扱 國井喜太郎

技師 第二部長 齋藤 信治

技師 第一部長 寺坂 毅

屬 庶務課長 阿久津保太郎
技師 古谷 豊吉

鈴木 道次
松崎 福三郎
西川 友武
豊口 克平
安部 郁二
劍持 勇
八井 孝二
政田 辰三郎

技手

陶磁器試験所 (官立)

京都市伏見區深草正覺町
電圖紙圖一四七八

當所は本邦陶磁器工業の改善進歩並にその輸出増進を圖る爲の國立研究指導機關にして、大正八年京都市より、元京都市立陶磁器試験場の敷地、諸設備及事業の一切を政府に寄附移管し、時の農商務省所管としたもので後に商工省の所管となり現在に至つて居る。而して昭和八年度、政府に於て國策として工藝振興に關する經費を新に支出することになつたが此の際偶々瀬戸市に計畫された市立窯業試験所の土地、建物その他諸設備一切を舉げて當所に移管し、同所を陶磁器試験所瀬戸試験場として當所に於て經營することになつた。

陶磁器試験所官制

大正八年四月五日
勅令第八十三號

第一條 陶磁器試験所ハ商工大臣ノ管理

工藝指導施設一覽

ニ屬シ左ノ事務ヲ掌ル
一 陶磁器ニ關スル試験及研究
二 陶磁器ノ原料及材料ノ品質ノ鑑定
三 陶磁器製作ニ關スル傳習及講話
四 試験研究ノ爲製作シタル陶磁器及加工シタル其ノ材料ノ配付
第一條ノ二 陶磁器試験所ハ試験研究成績ノ普及促進ニ必要アリト認ムル場合ニ限り陶磁器ノ製作ノ依頼ニ應スルコトヲ得

第二條 陶磁器試験所ニ左ノ職員ヲ置ク
所長
技師 專任七人 奏任
屬 專任二人 判任
技手 專任十人 判任

第三條 所長ハ技師ヲ以テ之ニ充ツ商工大臣ノ指揮監督ヲ承ケ所務ヲ掌理ス
(第四條以下略)

同所處務規程抜萃

一、陶磁器試験所ニ第一部、第二部、第三部及庶務課ヲ置ク
一、第一部ニ於テハ陶磁器ニ關スル基礎的研究並陶磁器ノ原料、材料ノ品質ノ鑑定ニ關スル事務ヲ掌ル
一、第二部ニ於テハ陶磁器製作ニ關スル事務ヲ掌ル
一、第三部ニ於テハ陶磁器ノ意匠及圖案ノ研究ニ關スル事務ヲ掌ル

一、所長ハ必要ト認ムル地ニ試験場ヲ置キ陶磁器試験所ノ事務ノ一部ヲ分掌セシムル事ヲ得

同所製品配付及受託
製作規則抜萃

一、陶磁器試験所ノ試験研究ニ依リ製作シタル陶磁器及加工シタル陶磁器材料ノ配付ヲ受ケントスル者又ハ陶磁器ノ製作ヲ依頼セントスル者ハ別記所定様式(中略)ニ依リ陶磁器試験所所長ニ出願スヘシ
一、前條ノ出願ヲ許可セントスル場合ニ於テハ陶磁器試験所所長ハ左ニ掲クル事項ヲ定メ之ヲ出願人ニ通知スヘシ
一 品種及數量
二 代金又ハ製作費及其ノ納付期限
三 引渡豫定期日
出願人前項ノ通知ヲ受ケタル日ヨリ五日以内ニ配付ヲ受クヘキ旨又ハ製作ノ依頼ヲ爲スヘキ旨ヲ申出テサルトキハ出願ハ其ノ效力ヲ失フ

一、陶磁器試験所所長必要アリト認ムルトキハ道府縣市立商品陳列所規程ニ依ル商品陳列所又ハ學校ニ對シ無償ヲ以テ製品ヲ配付スルコトヲ得
同所傳習生規程抜萃

一、陶磁器試験所ハ陶磁器ノ製作ニ關スル技術ヲ修得セントスル者ノ爲傳習ヲ行フ
一、傳習生ノ傳習期間ハ五箇月トシ傳習開始ノ期日ハ毎年四月一日及十月一日トス 前項ノ期間及期日ハ陶磁器試験所ノ都合ニ依リ之ヲ變更スルコトアルヘシ

一、傳習事項、傳習生ノ定員、傳習期間及傳習開始ノ期日ハ豫メ官報ヲ以テ之ヲ公告ス
一、傳習生ハ陶磁器ノ製作ニ經驗アル十八歳以上三十五歳以下ノ男子ニシテ官公署、學校、組合其ノ他ノ團體又ハ工場主ノ推薦ニ係ルモノタルコトヲ要ス
一、傳習料及傳習ニ要スル費用ハ之ヲ徴セス

附 瀬戸試験場

瀬戸市大學瀬戸
電瀬戸二四五六

京都本所の基礎的研究よりなる中間試験の結果を更に進んで實地的製作に移し以て陶業者と相互に聯絡を保ち、益々斯業の發展を圖らんとするものであつて、當場には技術科、圖案科、及び庶務係を置く。

技術科 研究品の試作、製造、技術上の改善、研究、指導及各種の調査を行ひ、成形係、原型彫塑係、着畫係、窯係、調査係があり相互に事務の聯絡を行ふ。

圖案科 意匠圖案研究、調査及依頼調製

陶磁器試験所職員

技師	所長
同	平野 耕輔
同	第一部 長 小川新一郎
同	第二部 長 秋月 透
同	第三部 長 水町和三郎
同	磯松 嶺造
同	藤井 兼壽

工藝指導施設一覽

屬
技手

滑川 正雄
石塚信太郎
馬淵 利貞
寺崎 厚治

埼玉縣秩父郡秩父町大宮
佛子染織指導所(染織)
埼玉縣入間郡元加治村
前橋工業試驗場(染織、製絲、撚絲、木工)
前橋市岩神町
桐生工業試驗場(染織、撚絲)
桐生市安樂土

會津工業試驗場(木工)
福島縣若松市榮久町
岩手縣工業試驗場(木工、金工、染織、圖案、化學)
盛岡市仁王
山形工業試驗場(金工、木工、漆工、圖案)
山形市六日町
米澤工業試驗場(染織、圖案)
米澤市花岡町
鶴岡工業試驗場(染織)
鶴岡市家中新町
秋田縣工業指導所(木工、鐵工、化學)
秋田市茨島
川連漆器試驗場(漆工)
秋田縣雄勝郡川連町

山梨縣吉田分場(染織)
山梨縣南都留郡瑞穗村
甲府市立工業研究所(染織、木工、金工、製糸)
甲府市
長野縣工業試驗場(染織、製絲、化學、圖案)
松本市榮町
長野縣工業試驗場(染織、圖案)
上田市常磐城
長野市立工藝指導所
長野市
飯田織物指導所(染織)
飯田縣下伊那郡鼎村
岐阜縣工業試驗場(染織、圖案)
岐阜縣羽島郡笠松町
岐阜縣陶磁器試驗場(窯業、圖案)
岐阜縣土岐郡多治見町
岐阜縣金屬試驗場(金工)
岐阜縣武儀郡關町
福井縣工業試驗場(染織、圖案、撚絲)
福井市鏡川中町
石川縣染織試驗場(染織、圖案)
金澤市長土堀町
同 大聖寺分場(染織)
石川縣江沼郡大聖寺町馬場
石川縣工藝指導所(漆工、窯業、金工、圖案)
金澤市長土堀町
同 輪島分所(漆器、圖案)
石川縣鳳至郡輪島町河井
富山縣工業試驗場(銅器、漆器、木工、瓦、圖案、電鍍、板金、化學、陶器)
高岡市下關
富山縣染織試驗場(染織、圖案)
富山縣東礪波郡福野町

工藝振興ニ關スル事務ニ從事スル臨時職員

赤塚 幹也
遠藤 芳門
井本米次郎
飯田 利平
澤村 滋郎

伊勢崎機業輔導所(染織、圖案、撚絲)
群馬縣佐波郡伊勢崎町
群馬縣邑樂郡館林町
群馬縣工業所(染織、木工、漆工、金屬、圖案)
高崎市並榎町
栃木縣工業試驗場(染織、圖案)
足利市西宮町
町立益子町陶器試驗場(陶器)
栃木縣芳賀郡益子町
茨城縣工業試驗場(染織、圖案)
茨城縣結城郡結城町結城
茨城縣工業指導所(木工、窯業)
水戸市
千葉縣工業試驗場(釀造、染織、化學、窯業、木工)
千葉市
宮城縣工業試驗場(木工)
仙臺市勾當臺通
仙臺市立陶磁器研究所
仙臺市勾當臺通
川俣工業試驗場(染織、圖案)
福島縣伊達郡川俣町

山梨縣工業試驗場(染織、圖案)
山梨縣南都留郡瑞穗村
甲府市立工業研究所(染織、木工、金工、製糸)
甲府市
長野縣工業試驗場(染織、製絲、化學、圖案)
松本市榮町
長野縣工業試驗場(染織、圖案)
上田市常磐城
長野市立工藝指導所
長野市
飯田織物指導所(染織)
飯田縣下伊那郡鼎村
岐阜縣工業試驗場(染織、圖案)
岐阜縣羽島郡笠松町
岐阜縣陶磁器試驗場(窯業、圖案)
岐阜縣土岐郡多治見町
岐阜縣金屬試驗場(金工)
岐阜縣武儀郡關町
福井縣工業試驗場(染織、圖案、撚絲)
福井市鏡川中町
石川縣染織試驗場(染織、圖案)
金澤市長土堀町
同 大聖寺分場(染織)
石川縣江沼郡大聖寺町馬場
石川縣工藝指導所(漆工、窯業、金工、圖案)
金澤市長土堀町
同 輪島分所(漆器、圖案)
石川縣鳳至郡輪島町河井
富山縣工業試驗場(銅器、漆器、木工、瓦、圖案、電鍍、板金、化學、陶器)
高岡市下關
富山縣染織試驗場(染織、圖案)
富山縣東礪波郡福野町

山梨縣工業試驗場(染織、圖案)
山梨縣南都留郡瑞穗村
甲府市立工業研究所(染織、木工、金工、製糸)
甲府市
長野縣工業試驗場(染織、製絲、化學、圖案)
松本市榮町
長野縣工業試驗場(染織、圖案)
上田市常磐城
長野市立工藝指導所
長野市
飯田織物指導所(染織)
飯田縣下伊那郡鼎村
岐阜縣工業試驗場(染織、圖案)
岐阜縣羽島郡笠松町
岐阜縣陶磁器試驗場(窯業、圖案)
岐阜縣土岐郡多治見町
岐阜縣金屬試驗場(金工)
岐阜縣武儀郡關町
福井縣工業試驗場(染織、圖案、撚絲)
福井市鏡川中町
石川縣染織試驗場(染織、圖案)
金澤市長土堀町
同 大聖寺分場(染織)
石川縣江沼郡大聖寺町馬場
石川縣工藝指導所(漆工、窯業、金工、圖案)
金澤市長土堀町
同 輪島分所(漆器、圖案)
石川縣鳳至郡輪島町河井
富山縣工業試驗場(銅器、漆器、木工、瓦、圖案、電鍍、板金、化學、陶器)
高岡市下關
富山縣染織試驗場(染織、圖案)
富山縣東礪波郡福野町

各府縣工藝指導機關一覽

關東地方

東京府立染織試驗場(染織、圖案)

八王子市明神町

同 青梅分場(染織、圖案)

東京府立商工獎勵館(化學、機械、圖案)

東京市麹町區府廳內

神奈川縣工業試驗場(化學、染織、釀造、圖案)

橫濱市神奈川區龜住町

神奈川縣織物指導所(撚糸、機械)

神奈川縣愛甲郡愛川村

神奈川縣工藝指導所(木工、圖案)

神奈川縣小田原町

浦和染織指導所(染色整理)

浦和市一番町

川越工藝指導所(染織、木工、圖案)

川越市小仙波

秩父染織指導所(染織、圖案)

秩父市小仙波

中部地方

愛知縣工業試驗場(染織、窯業、化學、釀造、圖案) 名古屋市中區花田町

三河染織試驗場(染織、圖案) 愛知縣寶飯郡三谷町

尾張染織試驗場(染織、圖案) 愛知縣中島郡大和村

靜岡工業試驗場(漆器、木工、染織、圖案) 靜岡市瓦場町

濱松工業試驗場(染織、能率、圖案) 濱松市北寺島町

同 北部分場(染織、圖案) 靜岡縣濱名郡小野口村

山梨縣工業試驗場(染織、圖案) 山梨縣南都留郡谷村町

同 上野原分場(染織) 山梨縣北都留郡上野原町

山梨縣工業試驗場(染織、圖案) 山梨縣南都留郡瑞穗村

甲府市立工業研究所(染織、木工、金工、製糸) 甲府市

長野縣工業試驗場(染織、製絲、化學、圖案) 松本市榮町

長野縣工業試驗場(染織、圖案) 上田市常磐城

長野市立工藝指導所 長野市

飯田織物指導所(染織) 飯田縣下伊那郡鼎村

岐阜縣工業試驗場(染織、圖案) 岐阜縣羽島郡笠松町

岐阜縣陶磁器試驗場(窯業、圖案) 岐阜縣土岐郡多治見町

岐阜縣金屬試驗場(金工) 岐阜縣武儀郡關町

福井縣工業試驗場(染織、圖案、撚絲) 福井市鏡川中町

石川縣染織試驗場(染織、圖案) 金澤市長土堀町

富山縣染織講習所(染織)

富山縣東礪波郡福野町

新潟縣染織試驗場(染織、圖案)

新潟縣南蒲原郡見附町

同 三條作業所(染色)

同 南蒲原郡三條市

同 枋尾作業所(染色)

同 古志郡下鹽谷村

新潟縣麻織物試驗場(麻織物、圖案)

同 北魚沼郡小千谷町

新潟縣木工試驗場(木工、圖案)

新潟市附船町一丁目

同 加茂支所(木工)

新潟縣南蒲原郡加茂町

新潟縣金工試驗場(金工)

同 三條市

新潟縣染織講習所(染織、圖案)

同 中魚沼郡十日町

新潟縣木工指導所(木工)

高田市南城町

近畿地方

京都府立織物試驗場(染織、圖案)

京都府中郡吉原村宇安

京都市立染織試驗場(紡織)

京都市上京區烏丸通上立賣上ル

京都市立工業研究所(化學、圖案、窯業

金工) 同 下京區東九條山王町

國立大阪工業試驗所

大阪府西淀川區大仁西二丁目

大阪府工業獎勵館(化學、機械、發明、

木工、金工、金屬、利器、鑄物)

工藝指導施設一覽

大阪府西區江ノ子島上ノ町

大阪府大津分場(染織、圖案)

大阪府泉北郡大津町

大阪府市立工業研究所(窯業)

大阪府北區北扇町

神戶市工業試驗場(化學、材料強弱、窯業)

神戶市下山手通四丁目

同 窯業作業所(窯業)

兵庫縣出石郡出石町

同 加工陶磁器研究所(加工陶磁器)

三木金物試驗場(金工)

兵庫縣美濃郡三木町

西脇染織講習所(染織、圖案)

兵庫縣多可郡西脇町

西脇染織講習所(染織)

兵庫縣多可郡西脇町

奈良縣工業試驗場(釀造、染織、化學、

圖案) 奈良縣北葛城郡高田町

三重縣工業試驗場(染織、圖案、工藝)

津市大字下部田

同 松坂分場(化學、漆器、製紙)

三重縣飯南郡松坂市殿町

三重縣窯業試驗場(窯業、圖案)

四日市市東阿倉川

能登川工業試驗場(染織、圖案)

滋賀縣神崎郡五峰村佐野

同 高島分場(染織)

滋賀縣高島郡新儀村

長濱工業試驗場(染織、圖案)

滋賀縣坂田郡長濱町南吳服

滋賀縣窯業試驗場(窯業、圖案)

滋賀縣甲賀郡信樂町宇長野

和歌山縣工業試驗場

(染織) 和歌山市一番町

(漆工) 海南市船尾町

中國地方

島根縣工業試驗場石見分場(窯業)

島根縣那賀郡江津町

同 益田分場(機械)

島根縣美濃郡益田町

岡山縣工業試驗場(染織、釀造、製紙、

化學、工藝、圖案)

岡山市南方

廣島工業試驗場(化學、染織、食品)

廣島市東白島町

福山工業試驗場(染織、化學、花筵、圖

案、撚絲) 福山市西町

山口縣工業試驗場(窯業、漆工、木工、

竹工、釀造、化學、圖案、製紙)

山口市下立小路

山口縣染織試驗場(染織、圖案)

山口縣玖珂郡柳井町

四國地方

德島縣工業試驗場(化學、染織、釀造、

圖案、木工)

德島市前川町

香川縣工業試驗場(染織、製紙、木工、

釀造、化學、圖案)

高松市花ノ宮町

丸龜市立工藝圖案研究所(工藝)

丸龜市米屋町丸龜商工會內

愛媛縣染織試驗場(染織、圖案)

今治市藏敷榎町

九州地方

福岡工業試驗場(染織、釀造、圖案、化

學、撚絲) 福岡市型粕町

久留米工業試驗場(染織、花筵、圖案)

久留米市津福町

福岡工業試驗場(製紙、木工、圖案)

福岡縣八女郡福岡町

福岡市立窯業研究所(窯業)

福岡市松園

大分縣工業試驗場(窯業)

大分市舞鶴町

大分縣工藝指導所(木工、竹工、漆工)

別府市濱脇海岸

佐賀縣窯業試驗場(窯業、圖案)

佐賀縣西松浦郡有田町

佐賀縣窯業指導所(窯業、圖案)

佐賀縣藤津郡鹽田町

熊本市立商工研究所(木工、漆工、圖案

金工、竹工)

熊本市新町

長崎縣窯業指導所(窯業、圖案)

長崎縣東彼杵郡上波佐見町

同 折尾瀨分所(窯業)

長崎縣東彼杵郡折尾瀨村

宮崎縣工藝指導所(木工、漆工、竹工)

都城市北原町

鹿兒島縣工業試驗場(製絲、釀造、染織

圖案) 鹿兒島市原良町

鹿兒島縣染織指導所(染織、圖案)

鹿兒島縣大島郡名瀬町

沖繩縣工業指導所(染織、窯業、漆器)

沖繩縣島尻郡眞和志村

北海道工業試驗場(釀造、化學、窯業、染織)

北海道札幌郡琴似村

北海道

美術觀覽施設一覽

御所、離宮及御苑拜觀規定

昭和十一年八月三十一日官報

御所、離宮及御苑ハ來ル九月一日ヨリ

左記ニ依リ其拜觀ヲ許可セラル

一、拜觀ノ種類 拜觀ヲ分チテ個人拜觀及團體

拜觀トス

二、拜觀ヲ許可セラル、箇所

(一) 個人拜觀ヲ許可セラル、箇所左ノ如シ

(1) 京都御所

(2) 仙洞御所

(3) 二條離宮

(4) 桂離宮

(5) 修學院離宮

(二) 團體拜觀ヲ許可セラル、箇所左ノ如シ

(1) 京都御所

(2) 二條離宮

(3) 新宿御苑

三、拜觀者ノ資格

(一) 個人拜觀ヲ許可セラル、者左ノ如シ

(1) 宮中席次ヲ有スル者

(2) 華族ノ禮遇ヲ享クル者

(3) 學位ヲ有スル者

(4) 帝室技藝員

(5) 神佛各宗派管長並ニ禪師ヲ宣下セラレタル者及門跡御由緒寺院住職

ル者及門跡御由緒寺院住職

(6) 判任官及判任官ノ待遇ヲ享クル者

(7) 市長、市助役及年俸ヲ受クル市吏員

(8) 東京市、京都市及大阪市ノ區長及年俸ヲ受クル區吏員

(9) 町村長及町村助役

(10) 法令ニ依リ定メラレタル各種議員及委員

(11) 官公私立學校長及職員

(12) 義章受領者

(13) 多額納稅者

(14) 宮内大臣ヨリ表彰セラレタル社會事業功勞者

(15) 文部大臣ヨリ選奨セラレタル學校職員及教育功勞者

(16) 宮内大臣又ハ主務大臣ヨリ獎勵金又ハ助成金ヲ交付セラレタル社會事業團體ノ代表者

(17) 左ノ外國人

(イ) 國賓及其隨伴者

(ロ) 奏任以上級ノ本邦庶勳六等以上ノ勳勳者

(ニ) 本邦駐劄大使、公使並ニ領事及同僚員ホ在外本邦名譽領事

(ヘ) 本邦駐劄大使又ハ公使(大使又ハ公使ヲ經ル暇ナキ場合ハ領事)ノ紹介ヲ經タル者

(18) 以上ノ者ニ隨伴スル其配偶者、父母及子

(19) 其他特ニ差支ナシト認ムル者

(二) 團體拜觀ヲ許可セラル、者左ノ如シ

(1) 個人拜觀ヲ許可セラル、資格ヲ有スル者

(2) 官公吏及之ニ準スル者

(3) 軍隊及在郷軍人

(4) 官公私立學校學生生徒(小學校兒童ニ在リテハ最上級生ニ限ル)

(5) 神官神職

(6) 神佛各宗派教職員

(7) 公務ノタメ殉職セル者ノ遺族

(8) 公益事業團體

(9) 教化修養團體

(10) 社會事業團體

(11) 新聞記者團

(12) 邦人内地視察團

(13) 外國人本邦視察團

(14) 其他特ニ差支ナシト認ムル團體

四、拜觀手續

(一) 個人拜觀ヲ爲サントスル者ハ拜觀箇所、拜觀豫定日時、拜觀資格及住所氏名(配偶者、父母又ハ子ノ同伴スル場合ハ其氏名ヲ連記スルコト)ヲ具シ本邦人ニ在リテハ直接、外國人ニ在リテハ本邦駐劄大使又ハ公使(大使又ハ公使ヲ經ル暇ナキ場合ハ領事)ヲ經内匠頭又ハ内匠寮出張所長ニ願出テ其許可ヲ受クヘシ

内匠頭又ハ内匠寮出張所長前項ノ許可ヲ與フルトキハ拜觀許可證ヲ本邦人ニ在リテハ直接本人ニ、外國人ニ在リテハ經由廳ニ送付ス

(二) 團體拜觀ヲ爲サントスルコトキハ代表者ヨリ拜觀箇所、拜觀豫定日時、拜觀資格、代表者ノ住所氏名及拜觀人名簿ヲ具シ主務省又ハ關係官廳ヲ經内匠頭ニ願出テ其許可ヲ受クヘシ

内匠頭前項ノ許可ヲ與フルトキハ拜觀許可證ヲ經由廳ニ送付ス

五、拜觀者ノ服裝 拜觀者ノ服裝ハ左ニ掲グルモノ以上タルヘシ

(一) 京都御所殿上

(イ) 男子 洋服 訪問着 紋付羽織(縫紋ニ、袴、足袋)

(ロ) 女子 洋服 訪問着 紋付羽織(縫紋ニ、袴、足袋)

(イ) 男子 洋服 訪問着 紋付羽織(縫紋ニ、袴、足袋)

(ロ) 女子 洋服 訪問着 紋付羽織(縫紋ニ、袴、足袋)

(イ) 男子 洋服 訪問着 紋付羽織(縫紋ニ、袴、足袋)

(ロ) 女子 洋服 訪問着 紋付羽織(縫紋ニ、袴、足袋)

(イ) 男子 洋服 訪問着 紋付羽織(縫紋ニ、袴、足袋)

(ロ) 女子 洋服 訪問着 紋付羽織(縫紋ニ、袴、足袋)

(イ) 男子 洋服 訪問着 紋付羽織(縫紋ニ、袴、足袋)

(ロ) 女子 洋服 訪問着 紋付羽織(縫紋ニ、袴、足袋)

(イ) 男子 洋服 訪問着 紋付羽織(縫紋ニ、袴、足袋)

(ロ) 女子 洋服 訪問着 紋付羽織(縫紋ニ、袴、足袋)

(イ) 男子 洋服 訪問着 紋付羽織(縫紋ニ、袴、足袋)

(ロ) 女子 洋服 訪問着 紋付羽織(縫紋ニ、袴、足袋)

(イ) 男子 洋服 訪問着 紋付羽織(縫紋ニ、袴、足袋)

ニ反ストキ又ハ係員ノ要求、誘導又ハ指示ニ従ハサルトキハ係員拜觀ヲ中止セシムルコトアルヘキコト

七、拜觀期限 拜觀期限ハ日曜日、祭日其他拜觀ヲ停止シタル日ヲ除クノ外左ノ如シ

(一) 個人拜觀

自四月一日 午前八時ヨリ午後三時マデ
至七月二十日 午前八時ヨリ午後三時マデ
自七月廿一日 午前八時ヨリ午後三時マデ
至八月廿一日 午前八時ヨリ午後三時マデ
自九月一日 午前九時ヨリ午後三時マデ
至三月廿一日 午前九時ヨリ午後三時マデ
但シ特ニ日曜日ニテモ許可スルコトアルヘシ

(二) 團體拜觀

自四月一日 午前八時ヨリ正午マデ
至八月廿一日 午前八時ヨリ正午マデ
自九月一日 午前九時ヨリ正午マデ
至三月廿一日 午前九時ヨリ正午マデ
但シ特ニ午後三時マデ許可スルコトアルヘシ

關東地方

東京

東京帝室博物館

下谷區上野公園
電六〇一 九九〇、
四六〇一

同館の創立は明治五年正院中に博覽會事務局が設置せられたのに始まり、其後同局を博物館と改稱し、内務省の管轄に付したが、同十四年農商務省の主管に移し、博物館事務所(當時博物館と稱す)を上野の舊寛永寺本坊跡に移轉し翌十五年同所に新築の本館を開いた。十九年宮内省の管理となり、二十二年帝國博物館と

改められ、歴史、美術、美術工藝、工藝、天產の五部を設け、三十三年六月現稱に改められた。天產部は大正十四年文部省に移管された。昭和十二年十二月從來の歴史課、美術課が廢せられて列品課に改められ、別に學藝課が新設された。陳列本館は震災に大破したが、今上陛下の御即位記念としての復興建築も成り昭和十三年十一月公開の豫定である。現在表慶館を列品陳列に充ててゐる。表慶館は大正天皇の御慶事を奉祝するため東京市民が帝室へ献上したもので明治四十二年の竣工、二階建の洋風石造建築で總坪數七百七十坪、館内を九室に分ち、階上は第六室歴史部、第七、第八室は美術部の繪畫、書蹟、第九室は美術工藝部の髹漆器具類等を陳べ、階下は第一室、美術工藝部の金屬、玉石、甲角、木竹器具、第二室陶磁器、第三室美術部の彫刻、第四、五室、歴史部の考古資料等を陳列する。階上の繪畫部列品は毎月陳列替を行ひ、又毎年數回特別展覽會を催す。(尙、昭和十三年八月中旬より、本館公開準備の爲表慶館の觀覽を中止してある。)

尙同館構内には公爵九條道秀及益田孝よりそれぞれ寄贈され、昭和十一年四月開館された九條公爵記念館及應舉館の二棟がある。前者はもと東京赤坂福吉町なる九條公爵邸内の前公爵道實の居室で昭和九年道秀が宮内省に先考の記念として獻納したもので、間口七間半、奥行五間半、總坪凡四十四坪、二室、廻廊下附で一

の間、二の間を通じて床張付、襖、腰障子に狩野の筆致を以て、四季著色樓閣山水圖が描かれてある。これはもと京都御所内九條邸にあつたのを東京邸に應用したもので筆者は山樂山雪と傳へる。後者はもと舊尾張國海部郡大治村明眼院の書院で寛保二年の建立、明治二十二年二月男爵益田孝により東京御殿山の邸内に移築され、昭和八年宮内省に獻納された。間口八間餘、奥行五間餘、總坪凡四十三坪、書院造、二室、廻廊下附、一の間に床張付、襖、腰障子に墨畫の松梅竹梅松が、二の間には壁張付、襖、腰障子に墨畫蘆雁圖が描かれ、何れも圓山應舉の筆である。尙觀覽は特別の研究者に限り、毎週月水金に許可される。

又構内の茶室六窓庵はもと奈良興福寺の慈眼院に在つたもので、金森宗和の建立にかゝる。

校倉は奈良十輪院から移したもので、奈良時代の遺構で、扉に四天王を、内部壁板に般若十六善神を畫き、石臺には十六善神を彫刻してゐる。

(總長) 杉榮三郎 (事務官) 淺野長光 (鑑査官) 溝口順次郎、原田淑人、秋山光夫、後藤守一、石田茂作 (御用掛) 都築誠 (鑑査官補) 吉野富雄、濱隆一郎、伊藤起、高橋勇、北原大輔、鷹巢豐治、小林剛、矢島恭介、野間清六、高橋直一、尾崎元春、運實重康 (評議員) 一戸二郎、伊東忠太、久保田鼎 (學藝委員) 香取秀治郎、藤懸靜也、關保之助、入田整三、

奥田誠一

(觀覽日) 一月三日より十二月廿五日迄
午前九時より午後四時迄、但し季節により多少伸縮す。(觀覽料) 大人十錢、小人五錢、廿人以上の團體は大人五錢、小人三錢、教員引率の學生生徒の團體は無料。

帝室博物館官制

大正十年十月七日
皇室令第十四號

第一條 宮内省ニ帝室博物館ヲ置ク

第二條 帝室博物館ハ古今ノ技藝品ヲ蒐集シ公衆ノ觀覽ニ供スル所トス

第三條 帝室博物館ハ之ヲ東京及奈良ニ置ク

第四條 帝室博物館ニ左ノ職員ヲ置ク
總長、事務官、鑑査官、鑑査官補、屬、技手

第五條 總長ハ勅任トス各帝室博物館及正倉院ニ關スル事務ヲ掌理シ所部職員ヲ監督ス

第六條 事務官ハ專任二人奏任トス庶務ヲ分掌ス

第七條 鑑査官ハ專任五人奏任トス列品ノ鑑査解說陳列及保管ニ關スル事務ヲ分掌ス

第八條 鑑査官補ハ判任トス鑑査官ヲ助

第九條 屬ハ判任トス庶務ニ從事ス

第十條 技手ハ判任トス技術ニ從事ス

第十一條 奈良帝室博物館ニ館長ヲ置ク

館長ハ事務官ヲ以テ之ニ充ツ館務ヲ

掌理シ所部職員ヲ監督ス

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

帝室博物館社寺寶物受託規程

昭和十一年十一月三十日
宮内省令第十二號

第一條 帝室博物館ニ於テ陳列ニ供スル爲社寺寶物ノ寄託ヲ受クルハ本規程ノ定ムル所ニ依ル

第二條 社寺其ノ寶物ヲ帝室博物館ニ寄託セムトスルキハ寄託期間ヲ定メ書面ヲ以テ帝室博物館總長又ハ奈良帝室博物館長ニ申出ツヘシ寄託期間ヲ更新セムトスルキ亦同シ

第三條 帝室博物館寄託ノ目的物ヲ受領シタルトキハ附錄様式ノ受託證書ヲ交付シ返還スルトキハ之ト引換フヘシ
受託期間ヲ更新シタルトキハ受託證書ニ其ノ期間ヲ明記シ繼續ノ印ヲ押印ス

第四條 受託物ハ寄託期間内ト雖モ之ヲ返還スルコトアルヘシ
受託物ハ祭典法要修理其ノ他ノ事由ニ因リ寄託者ヨリ願出アリタルトキハ三十日ヲ限リ之ヲ返還スルコトアルヘシ
前項ノ期間ハ修理其ノ他已ムコトヲ得サル事由アルトキハ之ヲ延長スルコトヲ得

第五條 寄託社寺ニ對シテハ毎年十二月ニ社寺交付金ヲ交付ス

第六條 寄託又ハ受託物ノ返還ニ要スル荷造費及運搬費ハ帝室博物館ニ於テ之ヲ負擔ス

第七條 寄託期間六年以上ニ互ル受託物ニ付テハ特別ノ事情アル場合ニ限リ寄託者ノ申出ニ依リ帝室博物館ニ於テ其ノ修繕費ノ全部又ハ一部ヲ負擔スルコトアルヘシ

第八條 前條ニ依リ費用ヲ負擔スル受託物ノ修繕ハ帝室博物館内又ハ指定ノ場所ニ於テ

之ヲ行フモノトシ帝室博物館總長（奈良帝室博物館ニ在リテハ同館長）之ヲ監督ス
前項ノ修繕ノ方法及程度ニ付テハ當該社寺帝室博物館總長（奈良帝室博物館ニ在リテハ同館長）ト協議スヘシ

第九條 受託物ハ帝室博物館ニ於テ保管ノ責ニ任ス但シ天災地變其ノ他不可抗力ニ因リ滅失紛失又ハ毀損シタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第十條 本令施行ニ關スル細則ハ宮内大臣ノ認可ヲ經テ帝室博物館總長之ヲ定ム

附則

本令ハ昭和十一年十二月一日ヨリ之ヲ施行ス
明治二十八年宮内省達乙第一號ハ之ヲ廢止ス（附錄様式）省略

帝室博物館出品規則

第一條 所藏ノ物品ヲ本館ニ出陳センコトヲ望ム者ハ口頭若ハ書面ヲ以テ申出ツヘシ、但シ書面ヲ以テ申出ツタルトキハ其ノ品名形狀傳來等ヲ詳記シ且略圖ヲ添付スヘシ

第二條 物品ノ出品ヲ承認シタルトキハ物品ト引換ニ預證書ヲ交付スヘシ

第三條 出品ハ本館ニ於テ保管ノ責ニ任ス但シ天災其ノ他不可抗力ニ因リ紛失毀損シタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第四條 出品ノ輸送費用ハ所有者ニ於テ支辨スヘシ

第五條 出品ヲ寫眞機若ハ攝影センコトヲ請フ者アルトキハ所有者ノ承諾ヲ得タル後之ヲ許可スヘシ但シ各種列品集合全體ノ形狀ヲ撮影スルハ此ノ限ニアラス

第六條 出品ニシテ當時手入ヲ要スルモノハ本館ニ於テ之ヲ爲スヘシ但シ修繕ハ此ノ限ニアラス

第七條 出品ノ預期間ハ三箇年トシ預期間ノ計算法ハ現品ノ領收カ六月以前ナルトキハ

其ノ年ノ一月ヨリ起算シ七月以後ナルトキハ其ノ年ノ七月ヨリ起算ス

第八條 預期間満了シタルトキハ書面ヲ以テ之ヲ所有者ニ通知ス 所有者前項ノ通知ヲ受領シタルトキハ速ニ物品ノ引渡ヲ受クヘシ

第九條 出陳ヲ繼續スル場合ニ於テハ本證書ノ裏面ニ繼續ノ印ヲ押シ期限ヲ延長スルモノトス

第十條 出品預期間内ト雖所有者ノ希望ニ因リ物品ヲ返付スルコトアルヘシ

第十一條 返付スヘキ物品ハ執務時間中何時ニテモ預證書ト引換ニ之ヲ引渡スヘシ
引渡ヲ受ケタルトキハ本人又ハ代理人ハ證書ノ裏面ニ受領ノ旨ヲ記載シ記名捺印スヘシ

第十二條 出品預期間満了ノ場合ニ於テ所有者ノ所在不明ナルトキハ官報及三種以上ノ新聞紙ニ五日間之ヲ廣告スヘシ此ノ場合ニ於テハ其ノ末日ニ於テ通知ヲ受ケタルモノト看做ス

預期間満了ノ通知ヲ受ケタル日ヨリ三ケ年ヲ經過スルモ引渡ヲ申出ザルトキハ預證書ハ無効トシ現品ハ本館ニ於テ藏意ニ之ヲ處分ス

第十三條 出品預證書ヲ紛失若ハ毀損シタルトキハ速ニ本館ニ届出證書ノ再交付若ハ引換ヲ請求スヘシ但シ紛失シタルトキハ官報又ハ新聞紙ニ廣告シ三箇月ヲ經過スルモ發見セザル場合ニ於テ再ヒ證書ヲ交付スヘシ

第十四條 紛失若ハ毀損ニヨリ再ヒ預證書ヲ交付シ若ハ引換ヲ爲ストキハ其ノ理由ヲ證書ニ備記ス

大倉集古館

赤坂區英町三
電赤坂七四〇

財團法人大倉集古館は大正六年の創設

に係リ其蒐集品、建物、土地、維持資金等悉く故大倉喜八郎男がその授符記念として寄附したものである。公開當時の出陳物は一、諸佛教國民の手に成れる各種の佛教式彫像及支那の道教式彫像、二、我國の蒔繪品、三、支那の堆朱器、四、支那の壙塼陶俑並に石佛及古銅器等で、就中支那堆朱器の蒐集は著名なるものであつたが、往年の大震災は如上の蒐集の殆ど全部を烏有に歸せしめた。大正十五年再び大倉男の寄附に依リ現在の陳列館を起工、僅かに焼失を免れた數十點の藏品を基礎に多數の新藏品を加へて昭和三年八月開館した。現在の出陳物の主なるものは支那周代より唐に至る壙塼、墓誌石、瓦當、畫像石、西藏の佛像類及我國の蒔繪、其他の工藝品、古書畫の類である。本館は鐵筋コンクリート支那風の三階建にして延坪二百五十二坪。

〔理事〕男爵阪谷芳郎、男爵大倉喜七郎、大倉余馬（館長）齋藤忠郎

（觀覽日）月曜日及大祭日並年始年末を除く毎日。觀覽無料

寛永寺靈屋

下谷區上野公園

第一靈屋と第二靈屋とより成り、第一靈屋は四代將軍家綱を祀り、本殿は天和元年の創建なるも元祿十一年焼失し、現在の建物はその翌年再建されたもの。第二靈屋は五代將軍綱吉を祀り、本殿は寶永十一年の建立で何れも國寶建造物に指

定されてゐる。

(拜觀料) 各靈屋大人二十錢、小人十錢

郷土資料陳列所

四谷區明治神宮外苑
ケ丘口日本青年館内
電 青山四二六〇—四

昭和九年創立。郷土研究に資する爲の各種の參考資料—民家、染織、履物、燈火、山袴、漁具等を陳列する。毎日開館觀覽無料

〔職員〕 村上清文、大西伍一、加藤一郎

國學院大學國史研究室

附屬考古學資料室

澁谷區若木町九

日本考古學研究に必要な資料を蒐集保存して研究に資し又陳列觀覽に供す。

(開室) 毎週一日、但しその曜日、時間は係これを定む。一般參觀は教務課及係に於て差支へなきことを確認したるもの。

書道博物館

下谷區上根岸町一二五
中村不折邸内

本館の設立趣意は「東洋文字ヲ識セル碑本法帖經卷名家ノ眞蹟及書籍瓦甌瓦當彫像古碑瓦器印鑑兵器龜甲獸骨殷周時代ノ銅器秦漢ヨリ明代ニ至ル諸器硯墨等ノ文房具小錢等支那三千年間ノ物ト本朝奈良朝ヨリ徳川時代ニ至ル諸器ヲ蒐集シ此ヲ各種類ニ分類シ年代順ニ整理シ以テ東洋文字ノ研究ニ資スル」にあり、陳列品は何れも中村不折が過去四十年に互

り蒐集せるもの。昭和十一年一月財團法人設立認可。同年十一月開館式を舉行した。

(觀覽日) 月曜日を除く毎日 (觀覽料) 十錢、列品目錄二十錢

仙湖記念西澤人形玩具研究所

板橋區上板橋町二丁目 (東上
線武蔵常盤臺 文化住宅地内)

昭和十一年十一月開所。同十二年十一月一部擴張完成。西澤笛畝が先考西澤仙湖の二十三回忌記念に設立せるもので、父子の蒐集に係る古來の人形玩具に關する文獻並參考品を陳列する。紹介ある者に限り入館を許す。同館に關する問ひ合せは牛込區津久土町三〇、西澤宛、電話牛込一一八一

早大演劇博物館

澁谷區戸塚町早稻田大
學構内 電 牛込五一四

故坪内逍遙博士の古稀の祝賀とシェークスピア全集の翻譯完成とを記念する爲設立されたもので、坪内博士を始め各方面の寄附に依り昭和三年十月開館した。同館の事業は東西古今の演劇に關する參考資料、文獻等を蒐集陳列して一般の觀覽に供する一方、劇に關する圖書館をも兼ね、又研究室、小舞臺等をも設けて演劇の調査研究を行ひ、演劇文化の向上發展に資するを目的とする。同館は早稻田大學の管理に屬するも公益機關として一般に無料で公開されて居る。

(館長) 河竹繁俊 (觀覽日) 毎月曜及祭日の翌日を除く外毎日、午前九時より午後四時迄。

増上寺

芝區芝公園地内

源譽上人の時徳川家の菩提所となつた名刹で多數の什寶を所藏して毎年九月一般の觀覽に供する。其の徳川家御靈屋のみは毎日午前八時より午後四時迄觀覽し得る。

(拜觀料) 南北靈屋各三十二錢、學生及團體は半額。

東京美術學校陳列館

下谷區上野公園
東京美術學校内

同校は參考品を豊富に收藏するを以て陳列館(本館、別館及正木記念館)にその一部を常置陳列して公衆の參觀に供する。休暇中及日曜、祝祭日を除く外毎日午前九時より午後四時迄公開。本館及正木記念館共階下は彫刻、工藝品類を常置陳列し、不定期に少部分の陳列替を行ふ。本館階上は繪畫陳列室で常時は西洋畫名作模寫を陳列し、春秋二季に限つて日本畫の特別陳列を行つて居る。正木記念館階上は日本室であつて、常置陳列は行つてゐないが特別陳列の際公開することがある。尙別館及同校々舎内庭には西洋彫刻の名作複製品を陳列して居る。何れも觀覽無料、同校職員生徒以外は住所姓名を記載し入場を許される。

東京美術學校文庫

下谷區上野公園東京美術學校内
電 下谷八〇二〇、八〇二一

文庫の閱覽施設は同校教職員並に生徒の爲に設けられたものであるから一般には公開されて居ない。但し特殊の研究に従事するもので同校教職員の紹介ある場合願書を校長宛提出すれば閱覽を許可される。開館時間は日曜、祝祭日を除く外毎日午前八時(冬期は九時)より午後六時迄、閱覽を許されるのは圖書模本の類である。

東京府養正館内國史繪畫館

麻布區盛岡町一東京府養
正館内 電 三田二三三五

昭和十二年十二月開館。皇太子殿下御誕生の奉祝記念事業として東京府の經營する東京府養正館の施設の一である。國史繪畫を觀る事に依り青少年及其の指導者をして國體觀念を明徴にし三千年の一貫せる我が正大なる日本精神を養はしむるを趣旨とする。日本畫四十五枚、洋畫三十二枚、計七十七枚を陳列する。

(名譽館長) 香坂昌康(館長) 村田八千穂(指導員) 大谷德馬

(觀覽日) 毎日、但し十二月廿八日より翌年一月三日まで休館

(觀覽時間) 四月一日より十月末日迄午前八時より午後四時迄、十一月一日より翌年三月末日迄午前九時より午後四時迄

(觀覽料) 無料

東洋文庫

本郷區駒込上富士前町一四七
電 大塚 三二二八、三二二九

大正六年九月岩崎久彌男が前中華民國總統府顧問ジョージ・アーネスト・モリソンより購入したモリソン文庫を核心とし東洋に關する和、漢、洋、梵語、蒙古語、西藏語、滿洲語、朝鮮語等の圖書の蒐集を行つたもので、その後現在の場所に文庫を新築し、大正十三年財團法人組織とし之を東洋文庫と改稱した。同文庫財團は岩崎男の寄附によるものである。事業としては、前記の如く東洋に關する圖書の蒐集をなし、學者の閲覧に供すると共に、邦文、歐文、漢文を以て東洋學上有益なる論著の出版、史料となる稀籍の複製等をなし、又臨時講演會、展覽會を開催し、斯學の進歩普及に努める。

(閲覧日) 日曜祭日を除き、毎日午前九時十五分より午後四時迄。一切無料。但し文庫利用には紹介者を必要とする。

日本民藝館

目黒區駒場八六一
電 澁谷 二二九四

民藝品の蒐集並常置展覧を行ひ、地方民藝の指導と開發に當るを目的とする。蒐集の事業は大正十五年に始められたが、昭和十一年十月大原孫三郎の寄附により建物竣成し、一般公開となつた。

〔館長〕柳宗悦〔理事〕河井寛次郎、濱

田庄司、山本爲三郎、武内潔眞

(閲覧日) 毎日、但し毎月曜日、祭日及夏期(八月十六日―廿一日)及冬期(十二月廿六日―一月十日)は休館、(観覧料) 一人三十錢、學生十五錢、團體廿人以上一人十錢

美術研究所

下谷區上野公園
電 下谷 三三八七

本所はその事業の一つとして黒田記念室に故子爵黒田清輝の遺作を陳列して定期公開し、又本所の蒐集に係る美術研究資料を研究者の閲覧に供する。遺作は主として黒田家の寄附にかゝり、之に他から寄託のものを併せ、油繪一二二點、素描一六八點、畫稿七五點、スケッチブツク二〇冊である。平常は約五十點を陳べ、屢々陳列換を行つて居る。観覧日は毎週木曜日午後一時より四時迄。

次に閲覧に供する研究資料は東西古今に互る美術品の寫眞、複製品、圖書等で、閲覧希望者は本所に於て適當と認むる者の紹介あるを要す。閲覧時間は午前九時半より正午迄、及午後一時より三時半迄とす。(七月中は午前八時半より正午迄)但し日曜日、土曜日、祝祭日、開所記念日(十月十八日)、夏期(八月一日―廿一日)、年末年始(十二月廿五日―一月十日)を除く。

〔職員〕(便覧三二頁参照)

蓬左文庫

豊島區目白町四ノ四二
電 大塚 二二二七

昭和十年十一月開館。本文庫は徳川美術館、生物學研究所と共に徳川義親侯の創設に係り、財團法人尾張徳川黎明會の經營に係る。所蔵の書籍は尾州家が三百年間に互つて儲藏せる圖書、記録類約七萬冊を中心とし、加ふるに近時の蒐集騰寫に係る舊尾張藩資料及國史、及び經濟史、林政史學關係の刊行物並に徳川生物學研究所圖書等約二萬冊を以てする。尙文庫に歴史研究所を附設し徳川義親侯を中心として徳川林政史の研究を進めつゝ、更に同文庫は蓬左文庫叢刊と題して文庫中に所蔵する稀書珍籍の複製頒布をも行つてゐる。

(閲覧日) 一月四日―七月十日及九月十一日―十二月廿八日(自午前九時正午午後四時)、七月十一日―九月十日(自午前八時正午)、日曜及祝祭日休館

明治神宮外苑

聖徳記念繪畫館

四谷區大番町明治神宮外苑

大正四年明治神宮御造營に際して、廣く國民の獻金を募り外苑及び同繪畫館を建設し、之を神宮に獻納せんとする計畫が成り、明治神宮奉賛會に依つて大正十五年建立。聖徳を讃仰するの資とする爲、各方面より奉納せる 明治天皇、昭憲皇太后御一代の主要なる御事蹟を表はした

繪畫(日本畫四十枚、洋畫四十枚)が奉掲されてゐる。

(拜觀日) 毎日、午前九時より午後四時まで、但十二月一日より翌年二月末日迄は午後三時迄。(拜觀料) 大人十錢、小兒五錢、五十人以上の團體は半額。

明治神宮寶物殿

代々木明治神宮内苑

大正十年十一月開館。明治天皇、昭憲皇太后の最も御關係深き御物を永遠に保存し、國民一般に拜觀を許して聖徳を偲び奉らしめんとする。建物は優美なる校倉風大床造にして和洋折衷を試みたるもの、總建坪五百五十坪、明治天皇御物五十八點、昭憲皇太后御物二十三點。

(拜觀日) 四月一日より九月卅日(午前八時―午後五時)、十月一日より三月卅一日(午前九時―午後四時)。(拜觀料) 大人十錢、小人五人五錢

地方

鹿島神宮寶物陳列館

茨城縣鹿島郡鹿島町鹿島神宮

昭和二年九月開館。甲冑、刀劍、彫刻馬具、古墳發掘品等二百六十餘點を出陳公開す。

(観覧料) 大人十五錢、小人五錢

金澤文庫

横濱市磯子區金澤寺前町稱名寺境内

北條實時の創立で後年その蔵書の大半を撤出せられ、世上に散佚したものも多いが、今尙和漢書約二萬卷、古文書約四千通を蔵して居る。明治三十年伊藤博文公は金澤文庫を復興し、又帝國憲法草案に使用した參考資料三百二十餘冊を寄贈したが、その建物は現存しない。現在の文庫は其の所蔵の古文書、典籍、什寶を保存し、且つ縣内郷土關係圖書を蒐集して、一般公衆に縦覽せしめ、兼ねて中世文化及神奈川縣郷土史の研究所たらしむる爲、今上天皇御大典記念事業の一つとして、神奈川縣が大橋新太郎の寄附五萬圓と併せて十萬圓を以て昭和塾と共に建設されたもので、昭和五年八月落成式を擧げて公開された。

〔文庫長〕關靖〔司書〕木谷孝

〔開庫時間〕十二月廿五日より翌年一月七日迄を除き毎日、夏期午前八時より午後五時迄、冬期午前九時より午後四時迄

鎌倉國寶館

神奈川縣鎌倉町鶴岡八幡宮境内

往年の大震災の經驗に鑑み、鎌倉近在の社寺の國寶什寶を一箇所に纏めてその保存を計らうとの議が起り且つ一般遊覽者の便にも資するため昭和三年鎌倉町の事業として同館を建設した。建物は鐵筋コンクリートで外部を校倉式とし總坪數百八十坪、社寺所蔵の國寶、什寶及個人の委託品たる彫刻、繪畫、工藝品、古文

美術觀覽施設一覽

書、武具等約五百點を展觀して居る。

〔館長〕清川來吉〔主事〕相澤善三
〔觀覽日〕一月一日より十二月廿七日迄

〔觀覽料〕大人廿錢、小人五錢、學生軍人十錢、その他團體（廿人以上）割引をなす。

清澄寺寶庫

千葉縣安房郡天津町清澄

大正十一年開設。當山に關係ある先師古徳の遺品並美術考古資料計七十餘點を公開す。毎日開館、大人廿錢、小人十錢

〔館主〕玉瀧義秀

日光東照宮寶物館

栃木縣日光町大字日光山内造春園

大正四年東照宮三百年祭執行の記念に建立す。入母屋切妻寶形の三棟三棟より成り總坪數二百八十餘坪。東照宮、二荒山神社、輪王寺蒐蔵の寶物類（主として江戸時代の工藝品）計三百二十點を陳列す。

〔觀覽日〕四月一日より十月末日迄（午前七時—午後五時）、十一月一日より三月末日迄（午前八時—午後四時）

箱根神社寶物館

神奈川縣足柄下郡元箱根村

大正十二年六月開設。古刀、古文書、木像、佛畫等歴史資料百數十點を蒐蔵

す。毎日開館。大人十錢、小人五錢、團體半額

東北地方

阿武隈考古館

福島縣石川郡泉村

昭和十二年創立。首藤岩泉が三十餘年間蒐集せる先史考古學資料六五七三點、原史考古學資料九六〇點、歴史考古學資料九八四點、計八五一七點を陳列。

〔館長〕首藤岩泉

上杉神社釋照殿

米澤市南堀端町上杉神社

大正三年創立。扁額、甲冑、刀劍、武具、佛畫、古文書、陶磁器、經卷等約七百點を蒐蔵。國寶、貴重品が尠くない。開館毎日。大人十錢、小人五錢

掬粹巧藝館

山形縣東置賜郡小松町大字中小松

昭和六年開設。學術參考資料として古陶磁器其他美術工藝品約三百點を常時陳列公開す。

〔理事長〕井上庄七

北村郷土博物館

宮城縣桃生郡北村小學校

昭和四年開設。郷土資料、美術品等三百點を陳列す。

北見郷土館

北海道網走郡網走町

昭和十一年開館。社團法人北見教育會の經營に依る。建物はコンクリート造二階建て延坪數百二十餘坪。綜合的な郷土博物館で網走支廳管内に於ける考古學上の物件、拓殖、産業及教育に關する變遷發達の狀況を知る爲の參考資料を陳列す。就中アイヌ人の土俗工藝品約千點、石器時代遺物三千餘點を陳列せるため一般に「アイヌ博物館」として知られて居る。

〔館長〕高尾善治〔理事〕岸田利雄〔主事〕米村喜男衛

中尊寺寶物館

岩手縣西磐井郡平泉村

同寺には藤原時代の佛像、經卷及優れた美術工藝品多く、是等は藤原末期の建物たる金色堂、經藏の外、辯才天堂、本坊、寶物館に蔵せられ、寶物館の所蔵點數二千九百餘である。

〔觀覽日〕毎日、午前八時より午後四時迄。〔觀覽料〕寶物館その他を併せて六十錢。

山形縣郷土博物館

山形市香澄町木ノ實
小路山形縣教育會内

昭和二年創立。郷土史、博物館研究資料及美術工藝品等約一千三百點を陳列す。

米澤郷土館

米澤市屋代町

昭和五年創立。歴史考古資料一千七百點を陳列す。

中部地方

愛宕下美術館

静岡縣小笠郡廣須賀町 電一四五

昭和六年の創立にして財団法人組織。

繪畫考古資料五百八十餘點を陳列す。毎日開館。觀覽無料

〔館長〕三枝基

上田市徴古館

上田市公園内

舊上田城櫓内に設けらる。書畫、古器物、文書等の郷土資料を蒐藏す。

〔館長〕〔市長〕成澤伍一郎〔副館長〕柴崎新一

〔觀覽日〕毎月曜日を除き毎日。〔觀覽料〕大人十錢、小人五錢

大瀧神社寶庫

福井縣今立郡岡本村大瀧

昭和五年寶庫新築。同社に關係ある古文書類及古軸物、古器等五百點を蒐藏す。

往生寺寶物館

長野市大字西長野

明治十九年創立。佛像、佛畫、古文書佛具類等を陳列す。毎日開館

岐阜縣郷土館

岐阜市美江寺町二六 電一三四〇

岐阜縣教育會の經營による。縣内の地歴、博物標本及發掘品等二千數百點を陳列する。開館毎日。觀覽無料

〔主事〕大野文助

久能山東照宮寶物館

静岡市久能山

大正四年東照宮三百年祭執行の記念に建設せられ、陳列品は家康の遺品、徳川歴代將軍の甲冑武具類。古文書等の歴史參考資料三百八十二點。年中無休開館。

諏訪神社寶物館

長野縣諏訪郡中洲村 神宮寺 電神宮寺一九

大正八年創立。諏訪神社〔上社〕の境内にあり。當社の寶物二百餘點を陳列す。〔監理者〕宮司志賀正光

大勸進寶物館

長野市箱清水

大勸進は善光寺内にあり、天台宗に屬す。寶物館は明治四十一年の創設で、御宸翰、御物、古代の樂器類、佛像、佛

畫、古文書等約百五十點を蒐藏す。毎日開館。〔觀覽料〕五錢

大本願寶物館

長野市大字元善町五〇〇

善光寺内にあり、淨土宗に屬す。寶物館は皇室に關する御遺品、古文書、寫經等を蒐藏す。毎日開館。〔觀覽料〕五錢

徳川美術館

名古屋市中區徳川町二ノ二七ノ一 電東六六三六

昭和十年十一月開館。本美術館は蓬左文庫及生物學研究所と共に侯爵徳川義親の寄附に依る財団法人尾張徳川黎明會の經營に係り、古來徳川家に傳來する數多の貴重なる什寶美術品を私有の域を脱し世の美術家、學者の研究參考に資するを以て目的とする。同館は昭和七年十一月起工され同年四月竣工。構造は鐵骨鐵筋混泥土造で本邦城郭建築の様式を加味したものである。蒐藏品は繪畫、古筆、工藝品其他名器刀劍等約七千餘點で、陳列替に依り逐次展觀する。尙臨時社寺私人の所藏に係る有益なる參考品を受託陳列する。

〔主任〕近藤眞太郎

〔觀覽日〕一月六日より十二月二十五日迄。月曜日、祝祭日を除く

〔觀覽料〕十錢、五十人以上は一人五錢。四月及十月開催の特別陳列日は料金一人三十錢とす。

名古屋城

〔管理〕名古屋市政府土木部公園課 電東八二一一、八二二一

もと離宮なりしを昭和五年十二月宮内省より名古屋市に下賜せられ、同市の所管として御殿、天守閣及各櫓門の拜觀を許可する。いづれも慶長年間築造で、御殿は桃山及江戸初期の最も華麗な書院造の實例を示し、玄關、表書院、對面所、上洛殿、黒木書院、上御膳所、梅の間等は徳川期の襖繪、壁貼付繪を以て名高い。

〔拜觀日〕正門の開閉時刻は四月―十月〔午前八時半―午後四時〕、十一月―三月〔午前八時半―午後三時〕で御殿の拜觀は上記の開閉時刻前三十分迄とす。拜觀及參入は十二月廿九日より同月末日迄停止。又御殿の拜觀に限り次の場合之を停止す。一、梅雨期、二、雨雪、強風、其他天候不良の時、三、其他管理上必要ある時

〔拜觀料〕御殿拜觀料〔天守閣拜觀を含む〕一人一圓、天守閣拜觀料、大人三十錢、小人十五錢。天守閣拜觀團體割引、三十人以上―大人一人に付二十五錢、小人十二錢、百人以上―大人一人に付二十錢、小人十錢、教員引率の中等學生團體は十五人以上一人に付二十錢、百人以上十五錢

新潟郷土博物館

新潟市一番堀通町
電話 三三四一

新潟縣主催の郷土教育研究會並に新潟縣教育會の決議に基いて昭和九年創立、開館した。古墳發掘品、經塚出土品、古畫、古文書及産業關係等郷土研究の資料三千餘點を陳列公開する。

(觀覽日) 毎月末日及十二月廿五日より翌年一月五日迄を除き毎日開館(觀覽料) 大人五錢、小人二錢、學生生徒三錢以上)は五錢。

白山神社寶物館

福井縣大野郡平泉寺村平泉寺

大正十五年創立。白山神社、平泉寺の所藏に係る古器物、古軸物、古文書等百六十點餘を出陳公開して居る。

(館主) 社司平泉正男 (觀覽料) 大人十錢、小人、學生、軍人、團體(五十人以上)は五錢。

武山閣

静岡縣賀茂郡下田町

昭和六年創立。美術品千二百點を展覽す。(館主) 清水歸一

松本記念館

松本市本町一丁目九

日露戰役記念品、博物、地歴標本、考古學參考品、圖書等數萬點を蒐藏す。毎日開館、觀覽無料

三島神社寶物館

静岡縣田方郡三島町

昭和五年開設。歴史、考古資料約二百點を蒐藏す。

身延山寶物館

山梨縣身延山久遠寺内

大正十五年四月開館。日蓮宗の本山に關係ある書畫、古器物等の什寶百餘點を公開し、年に一回又は二回陳列替をなす。

臨濟寺寶物館

静岡市大岩町

天文五年今川氏輝(臨濟寺殿)の開基にかゝる古利。歴史資料、什寶等數百點を蒐藏す。

(館長) 松田一道 (觀覽料) 二十錢

近畿地方

京都

恩賜京都博物館

東山區七條通大和太
路東入電祇園五四

明治廿二年五月宮内省達を以て圖書寮附屬博物館が廢止され、帝國博物館、帝國奈良博物館と同時に帝國京都博物館が設置された。廿五年四月本館の工事に着手し廿八年竣工、三十年五月開館した。卅三年官制の改革により京都帝室博物館

と改稱。大正十三年一月、今上陛下の御成婚に際し恩召を以て宮内省より京都市に下賜せられ、同年二月一日より恩賜京都博物館と改稱し、京都市の經營に屬することとなつた。

本館は京都其他各地社寺の國寶什寶及び個人所藏の優品を蒐集して之を受託陳列し、一般の觀覽に供して居る。陳列品を大別して歴史部、美術部、美術工藝部の三部とし、更に之を細分して左の如く部門を別けて居る。歴史部(一、圖書二、古代遺品三、祭祀宗教關係品四、武器五、禮式風俗關係品六、貨幣、度量衡、信印)、美術部(一、繪畫二、書蹟三、彫刻四、建築)、美術工藝部(一、金屬品二、窯製器三、漆器四、織織品五、玉石甲角竹木品六、紙革品七、寫眞並圖繪)。現在の列品點數三千二百三十三點。繪畫、文書、書蹟は毎月陳列替を行ひ、又年に數度特別展覽會及夏季講演會等を開催する。

本館は佛國ドリック式建築にして建坪一千二百一坪、内列品館坪數九百十二坪餘。館内は十六の陳列室に區分され、他に中央室あり、臨時陳列又は講演會場に充てられて居る。

(館長) 川口知雄 (顧問) 關保之助、濱田耕作 (學藝委員) 猪熊淺磨、小山源治 (囑託) 水町和三郎、明石國助 (鑑査員) 加藤修、松本聰二郎、土居次義、神田松之助 (觀覽日) 一月五日より十二月二十五日

迄。一月、二月、三月、十月、十一月、十二月(午前九時—午後四時)、四月、九月(午前八時—午後五時)、五月、六月、七月、八月(午前八時—午後五時半)(觀覽料) 大人十錢、小人五錢、(特別觀覽料) 一人五十錢、團體(二十人以上) 大人一人五錢、小人三錢

太秦廣隆寺靈寶殿

右京區太秦廣隆寺内

大正十一年、聖德太子一千三百年遠忌の記念に創設す。建物は鐵筋コンクリート造にして外觀は古代校倉の様式に倣つてゐる。建坪八十七坪。廣隆寺は聖德太子の御創建に係る名刹で本殿收蔵の佛像、佛畫、古文書等には古來の傑作名品多數に上り國寶も尠くない。

北野神社寶物殿

上京區北野官幣中社北野神社

本殿は昭和三年、當社千二十五年祭執行記念として北野會の建設奉納せるもの。多數の宸翰、各種の北野縁起繪卷、古寫日本書記等の貴重なる古畫、珍籍、古文書、刀劍及器具の類が出陳されて居る。

(觀覽日) 一月一日より十二月廿五日迄 略毎日開館 (觀覽料) 十錢

京大文學部考古學陳列室

左京區吉田町京都帝國大學構内

大正三年開設。日本、朝鮮、滿洲、支

那等の考古學研究資料及埃及、希臘、羅馬の遺物等合せて一萬餘點の標本を陳列す。平素は一般には公開しないが、學者研究者には無料觀覽を許して居る。

〔主任〕梅原未治〔係員〕小林行雄、末永雅雄

高臺寺

東山區下河原町

慶長十年豊臣秀吉の室高臺院が亡失追嗣のため創建した寺で現存の開山堂、靈屋、表門等は桃山式の華麗な建築で國寶。寺寶中には佛像、佛畫、古文書等の逸品が数多くない。

三寶院

伏見區醍醐
醍醐二

永久三年時の醍醐寺座主三寶院勝覺の創立した寺で醍醐寺塔頭の一院。堂宇は慶長年間の建立で玄關、葵の間、秋草の間、勅使の間、表宸殿、奥宸殿、純淨觀、護摩堂等國寶である。同院の寶物は現在醍醐寺寶聚院に收藏されてゐる。

〔拜觀料〕二十錢

青蓮院

東山區粟田口三條坊町

天台宗の名刹で俗に粟田御所と稱す。堂宇は明治以後の再建であるが、宸殿の模繪及壁貼附繪は國寶に指定され桃山風の金碧畫で、京狩野派の作と推される。

尙同寺は、名畫古文書等多數の寶物を所藏する。

〔拜觀日〕冬期午前八時—午後四時。夏期午前七時—午後五時〔拜觀料〕十錢

大禮記念京都美術館

左京區岡崎公園
電上六七〇〇

本館は將來近代美術の常設陳列館たらしむべく計畫されて居るが、目下は所藏品少なからぬ折々藏品の展觀を行ふのみで、主として展覽會場に使用されて居る。〔便覽一二三頁参照〕

醍醐寺寶聚院

伏見區醍醐

醍醐天皇一千年御忌奉讃會の記念事業として昭和六年三月以來工事中の醍醐寺靈寶館「寶聚院」は昭和九年末に竣工、十年四月十七日盛大な落慶法要を厳修した。同館は陳列館二棟（二百三十五坪）、寶庫二階建二棟（八十坪）、寶庫整理室一棟（十坪）、研究室一棟（百十三坪）等より成り、構造は鐵筋コンクリート造で耐震、耐火、通風等に最善の科學的諸設備を凝した新建築であるが、外觀は入母屋造り、本瓦葺の秀麗なる日本住宅風の建築である。

同館は今後醍醐寺所藏の幾多の國寶、重要美術品、古文書等を收藏保存すると共に研究室を解放して學者の調査研究に資し又定期の展觀を開催する。

〔觀覽日〕公開は春秋二季即ち三月下旬

より五月下旬迄、及十、十一月の二箇月と定め、開館中は月一回の陳列替を行ふ。

智積院

東山區東瓦町

新義眞言宗智山派の總本山。もと豊臣秀吉がその子棄丸のために建立した祥雲寺で、徳川氏の世となり紀州根來の智積院の名を移して再興したと傳へる。大書院及宸殿に描かれた模繪は桃山期の代表的名品として名高く又多數の古文書、書畫等の寺寶を保存する。拜觀は毎日。

〔拜觀料〕十錢

天球院

右京區花園妙心寺町

妙心寺の塔頭、池田信輝の女天球院の菩提所として寛永七年から十二年の間に池田光政が建立した寺で、江戸時代方丈造の一棟本である。同院は山樂筆と傳へる桃山式の華麗な模繪及杉戸繪を存し、本堂と共に國寶に指定されて居る。

豐國神社寶物殿

東山區茶屋町

豐國神社境内にあり。主なる寶物としては狩野内膳筆の豐國祭六曲屏風、無銘傳粟田口吉光作太刀等の國寶をはじめ豊臣家關係品を蒐蔵す。

南禪寺

左京區南禪寺福地町
電上三六五

臨濟宗南禪寺派の大本山。開山は龜山上皇の御歸依篤かりし大明國師で、上皇は離宮を改めて禪刹となし給ひ、二世南院國師は勅を奉じて諸堂を建立したが、應仁の兵火に遭ひ一山盡く焼失した。現存の勅使門、山門、清凉殿、小方丈等はいづれも慶長以後の建立、國寶に指定されて居る。

仁和寺靈寶館

右京區御室大内町

昭和二年四月開館。古書畫、彫刻工藝品、古文書等の寺寶中には國寶も多く、屢々陳列替して觀覽に供する。

〔館長〕麻生靈光〔觀覽日〕毎日、午前八時より午後四時迄〔觀覽料〕十錢

東山慈照寺（通稱銀閣寺）

左京區銀閣寺町
電上四〇三三

足利義政が文明十五年造營せる別業で後土御門天皇より東山殿なる名を賜つた。義政の歿後遺命により禪刹となしその諡號により慈照寺と號した。屢々兵火に遭つたが、幸にして當初の銀閣と東求堂及その林泉を残して居る。

〔拜觀日〕毎日〔拜觀料〕寶物、庭園拜觀、普通二十錢、特別三十錢

平等院

京都府宇治町平等院管
環淨土院 電宇治一四二

貞觀年中源融の別業で、後、藤原道長

の有り歸し、その子頼道は永承七年別業を改めて寺とした。當時七堂伽藍の完備せるを傳へるが、屢々の兵火に焼失し、風凰堂は當時の唯一の遺構で、藤原期美術の粹を集めた建築として名高い。其他釣殿、養林書院等國寶に指定されて居る。又寶物殿には藤原、鎌倉期の佛像、その他古書、古器物類を陳列する。

妙法院

東山區大佛妙法院前町

天台宗の名刹で近世まで世々皇族方が入山せられるを例とした。大書院、玄關及庫裡は桃山より江戸初期にかけての優れた建築で國寶。又龍華藏には豊公の遺品を陳列する。

(拜觀日) 毎日午前七時より午後四時迄
(拜觀料) 大人十錢、小人五錢、普通團體は五十人以上半額、中等學生は三十人以上半額、小學生は三十人以上四分の一に割引

有隣館

岡崎圓勝寺

大正十五年開館。藤井善助の寄附による財團法人藤井濟成會の經營に係り、藤井善助の支那古美術を主とする多年の蒐集品、即ち商、周の古銅器より清朝盛期に至る美術工藝品、法書、名畫並歴史考古學資料等を展覧する。

(觀覽日) 毎月第一、第三日曜日(正午午後四時)に限り公開、但し一月、八月は休館、觀覽無料、内外貴賓團體の見學等相當な紹介者ある場合は豫め時日を打合せの上臨時開館することあり。

養源院

東山區大和大路七條
東入三十三間堂前
電話三三八七

通稱桃山御殿血天井、秀吉の側室淀君が父淺井長政(法名養源院)の追福の爲に創建せる寺で、其後火災で焼失したが、徳川秀忠夫人が伏見城の舊材を用ひて再建し、爾來徳川家の菩提所となつた。その天井は血天井として名高い。本堂の廊下は營張で依屋宗達達の杉戸繪がある。

(拜觀日) 毎日午前七時より午後四時迄
(拜觀料) 十錢、五十人以上の團體は割引

蓮華王院本堂

東山區大佛妙法院前町

俗稱三十三間堂。妙法院に屬す。長寛二年後白河法皇が平重盛に勅して創建され、内に觀音像一千體及二十八部衆を安置したが建長元年炎上した。現存の本堂は文永三年の再建で、南大門と共に國寶である。又本尊及二十八部衆は舊のもの、は焼失せるにより建長三年、湛慶、康圓、康清等が後深草天皇の勅を奉じて改めて製作したもので鎌倉中期の代表作、何れも國寶である。現在二十八部衆の優作を

鹿苑寺

上京區金閣寺町一
電話一三

通稱金閣寺。應永年間足利義滿の造營せる北山御殿の遺構で三層樓金閣及庭園は何れも國寶、史蹟に指定されてゐる。
〔住職〕村上慈海〔執事〕山本登照、大原一彦(拜觀日) 毎日(拜觀料) 普通十錢、特別五十錢、學校、軍隊、青年團たる團體に限り半額

大阪

大阪市立美術館

天王寺區茶臼山町天王寺公園内
電話天王寺六一〇〇、六一〇一

昭和十一年五月一日竣工。同館は古美術博物館としての事業を行ひ、併せて一般美術展の會場としての働きを爲すが、(觀覽二二頁參照)同年九月十一日より古美術品の常設美術館として正式に開館した。陳列品は社寺其他の寄託品、文部省の出陳命令に依るもの等で、繪畫、彫刻、古銅器、古鏡、陶磁器、考古品等である。

大阪城天守閣郷土歴史館

東區馬場町

昭和四年二月大阪市の御大典記念事業として大阪城公園を新設し、同時に天守

閣の復興に着手、同六年施設成り一般に公開した。天守閣内を郷土歴史館に充て豊公記念物並に大阪に關係した郷土研究資料を蒐集陳列し、二階は是を特別展覧場とし、各種の展覧會を開催してゐる。

(觀覽日) 年末二日を除き毎日
(觀覽料) 十三歳以上十錢、十三歳未満十錢、團體割引

觀心寺寶庫

南河内郡川上村寺元

觀心寺は大寶年間の創建と傳へ、はじめ雲心寺と稱したが後弘法大師これを再興して觀心寺と改めたと傳へる。寶庫は明治廿二年の開設に係り、國寶の佛像、彫刻をはじめ、其他寫經、古文書が多數藏せられて居る。

(觀覽日) 毎日、午前八時より午後六時まで(觀覽料) 十錢

奈良

奈良帝國博物館

奈良市奈良御料地

明治二十二年奈良帝國博物館設置せられ同二十八年四月開館。三十三年官制の改革と共に現稱に改められた。陳列品は主に奈良及近縣の古社寺所有の國寶にして政府の命令出陳に依るもの、及社寺、個人その他よりの寄託品等にして、概して佛像、佛畫が多く、殊に彫刻は上古より鎌倉期に至る優秀品が多數陳列されて

居る。出陳物を歴史品、美術品、美術工藝品の三種類に分ち、彫刻繪畫等の美術品は各室別、時代参考順に陳列し、歴史品及美術工藝品は箱別とし、類聚陳列をしてゐる。館内は十三室に分れ、第一室より第三室まで彫刻、第四室より第七室迄歴史工藝品、第八室は歴史品、第九室より第十二室迄繪畫、第十三室書蹟の順に陳列し、この中第一室より第八室に至る彫刻及歴史工藝品は六月、十二月の二回に定期の陳列替を行ひ、第九室以降の繪畫、書蹟は毎月陳列替を行ふ。尙、毎月第一、第三土曜日の午後には陳列品に即しての解説的講座が開かれる。官制、社寺寶物受託規程等は東京帝室博物館の項参照(便覽六五頁)

を東大寺に施入せられたが、爾來その御寶物は勅封を以て收藏され、又その建物は嘗つて火災に遭遇せしことなく、今尙約三千點の名寶を保存し天平文化の精粹を傳へて居る。建物は現在、校倉造りの一棟で、桁行十八間、梁間五間、高さ五間、床下九尺の大建築で北倉、中倉、南倉の三區に分ち上下二層をなして居る。

御物は刀劍、樂器、樂面、鏡鑑、織物、經典、藥品、古文書其他多數に上り、支那渡來の工藝品及び西域關係のものも含まれて居る。

御物は毎年秋期曝涼に際して開封され、一定の有資格者に拜觀が許されるが一般には公開されない。

昭和十二年度正倉院御物拜觀規程

〔館長〕山口鏡〔御用掛〕大宮武磨〔鑑査官補〕龜田孜、松島順正〔學藝委員〕中村雅眞、新納忠之介、水木要太郎、梅原末治

(觀覽日) 一月三日より十二月二十五日まで、午前九時より午後四時迄、但し季節により多少伸縮する(觀覽料) 大人十錢 小人五錢

正倉院

奈良市御料地

正倉院はもと東大寺の勅封藏で、最初、正藏又は正藏院と呼ばれた。明治十七年宮内省の管理となる。天平勝寶八年聖武天皇崩御遊ばされるや光明皇后は御願文と目錄を添へて天皇御遺愛の諸器物

- 一 本邦駐荷各國大使公使及其配偶者並ニ前各號ニ準スヘキ外國人ニシテ當該國大使公使ノ推薦スル者
- 二 前各號ニ掲クル者ノ外宮内大臣ニ於テ學術技藝ニ關シ相當ノ經歷アリト認メタル者
- 三 出願手續
- 四 一期日 昭和十二年十月十五日限
- 五 拜觀願出ノ者ハ現住所資格(在官者ハ官等併記ノコト、待)ヲ具シ宮内大臣ニ宛テ選官吏モ之ニ準ズ

- 一 タル拜觀願書ヲ東京帝室博物館(奈良縣下者ハ奈良帝室)ニ差出シ拜觀許可證ヲ受ケ博物館經由ヘシ但シ前項第五項ニ依リ許可ヲ受ケムトスル者ハ願書ニ學術技藝ニ關スル經歷書ヲ添附スヘシ
- 二 配偶者其他數人同時ニ出願スル場合ハ前項第五號ニ依ルモノヲ除キ連名出願スルモ妨ケナシ
- 三 拜觀願書ニハ拜觀許可證ヲ送付先ヲ明記シタルはがき版大ノ封筒ヲ添附スヘシ
- 四 拜觀者心得
- 五 拜觀者ハ拜觀許可證ヲ携帯スルコトヲ要ス
- 六 拜觀許可證ハ他人ニ貸與スルコトヲ得ス
- 七 拜觀ハ期間中一同午前十時ヨリ午後三時マテトス但シ天候不良ノトキハ之ヲ停止ス
- 八 御物ハ撮影、模寫又ハ模造スルコトヲ許サス
- 九 拜觀ニ關シテハ諸事掛員ノ指示ニ從ハルヘシ
- 十 服裝ハ不體裁ナラサル限リ制限ナキモ男子和服ノ場合ハ必ス袴着用セラルヘシ
- 十一 不參ノ者ハ拜觀期間後十日以内ニ拜觀許可證ヲ東京市下谷區上野公園帝室博物館ニ返戻セラルヘシ

畝傍考古館

奈良縣高市郡畝傍町大字久米

昭和六年四月開館。森田常治郎が大和に於て過去三十年に亘り發掘蒐集せる貴重なる考古學資料二千餘點を陳列公開す。公共團體及専門研究家の參觀には特殊の便宜を計る。

(觀覽日) 毎日 (觀覽料) 大人十錢、小人五錢、團體は割引す

春日神社寶物館

奈良市官幣大社 春日神社境内

同館は昭和十年の新築で、當神社所藏の祠寶、武器、繪畫、彫刻、古文書、装束、樂器等多數の國寶、什寶を屢々陳列替して拜觀に供する。

(拜觀日) 毎日(拜觀料) 大人十錢、小人五錢、二十人以上の團體は割引す

東大寺

奈良市雜司町

華嚴宗の大本山で南都七大寺の一。聖武天皇の勅願に依り創建され、天平勝寶四年大佛開眼の供養が行はれた。本堂は治承及永祿年間に兵火の爲焼失し、寶永五年再建されたもので、江戸中期の優秀なる建築である。このほか、天平五年建立の法華堂をはじめ開山堂、三昧堂、念佛堂、大湯屋、轉害門等を主とする國寶建造物が多數現存する。又本尊の盧舍那佛をはじめ、法華堂、戒壇院等の諸堂に安置される國寶の佛像等は莫大な數に上つて居る。

(拜觀日) 毎日、午前七時より午後五時まで、季節により多少伸縮する(大佛殿拜觀料) 大人十錢、小人五錢

東洋民俗博物館

奈良縣生駒郡大軌沿線あやめ池畔

昭和三年十一月創設。九十九豐勝がシ

カゴ大學のフレデリック・スタールと共に蒐集せるロシア、支那、印度、朝鮮、臺灣、南洋等各地の土俗研究資料約一萬點が出陳されて居る。

(觀覽料) 大人十錢、小人三錢、團體割引

唐招提寺

奈良縣生駒郡都跡村

律宗總本山。天平寶字三年唐僧鑑真が聖武天皇の御爲めに建立せる寺で、平城七大寺の一。現存の諸堂宇中、金堂及講堂は創建當初のもので、就中前者は天平建築中最大最美の遺構と目される。その他禮堂、鼓樓、經藏、寶藏は、鎌倉期の修補を経て奈良時代の建築である。金堂及講堂には奈良時代以後の優秀な國寶佛像を安置し、其他寺寶中に名品が尠くない。

法隆寺

奈良縣生駒郡法隆寺

法相宗の大本山で南都七大寺の一。用明帝の御爲めに聖德太子が推古天皇十五年に創建せられた寺で、現存の諸建築物中金堂、五重塔、中門、廻廊の一部等は創建當初の姿に近きものを傳へると共に寺内諸堂に藏する什寶は飛鳥白鳳以降各時代藝術の粹を聚め、我國唯一の大寶庫たるの觀を呈して居る。伽藍は西院と東院とに分れ、西院に於ては金堂を初め中門、五重塔、講堂、經藏、鐘樓、廻廊、三經院及西室、西圓堂、上御堂、新堂、南大門、聖靈院、綱封藏、細殿、食堂、

東大門等は何れも國寶、就中金堂内の藥師如來坐像、釋迦三尊像、四天王立像、玉蟲厨子等は飛鳥美術を徴す可き貴重な資料であり、堂内四方十二壁の壁畫は東洋繪畫史上の傑作とされる。又綱封藏には飛鳥以降の多數の佛像什寶を收容する。東院は行信僧都が天平十一年聖德太子斑鳩宮の舊址に建立せる上宮王院で夢殿を本堂とし、東院禮堂、南門、廻廊、舍利殿及繪殿、傳法堂、鐘樓等國寶である。夢殿の本尊救世觀世音菩薩立像は創建當時の傑作で所謂止利式佛像の代表的なものである。

金堂壁畫拜觀期、春季(四月一日—五月十五日) 秋季(十月二十二日—十一月二十日)、夢殿秘佛本尊特別開扉期、春季(四月十一日—五月十五日) 秋季(十月二十二日—十一月二十日)

藥師寺

奈良縣生駒郡都跡村西ノ京

法相宗大本山、南都七大寺の一。天武帝の御創建にかゝり、もと高市郡岡本にあつたが、元正天皇の時現地に移建された。現存の諸堂宇中、三重塔婆(東塔)は移建當初のもので、白鳳時代唯一の建築遺構として重要、外に東院堂は鎌倉時代、金堂及講堂は江戸時代の再建である。金堂の本尊藥師及脇侍像、及東院堂の本尊聖觀音立像は創建當初の製作で、初唐の形式の粹を傳へ、古今の傑作である。又佛足堂内には有名な佛足石を安置する。

尙同寺には佛像、神像等の國寶が多數に上り、平常堂塔の拜觀を許し、春秋に特別展觀を行ふ。

(拜觀料) 五十錢

地方

伊賀文化産業城

三重縣阿山郡上野町大字丸之内
電話上野一八〇

昭和十年十月川崎克が伊賀上野城の廢墟に建設せる郷土博物館で財團法人「伊賀文化産業協會」の經營に係る。同館は第一階を産業館として農工産品を、第二階を歴史館として郷土の先覺者の遺墨遺品を、第三階は書畫等の美術品を展觀す〔名譽會長〕川崎克〔副會長〕田山八十吉〔常務理事〕木津善兵衛

石山寺

滋賀縣大津市石山

聖武天皇の天平勝寶元年良辨僧正の創立にかゝり、正暦二年焼失せるを承暦三年再建し、後屢々修理を行つた。本堂は承暦三年の建立で藤原時代の特色を表はし、多寶塔は建久年中の建立と傳へ藤末の様式を遺存し多寶塔建築中最美のものとなれ、他に鎌倉期の建立たる東大門、鐘樓がある。寺寶として石山寺緣起(七卷)をはじめ、佛像、古文書類等多數を藏する。

(拜觀料) 内陣寶物竝に源氏間を併せて

一人十錢、團體五十人以上二割引、百人以上半額、學生團體半額

圓滿院

滋賀縣大津市別所町

圓城寺の塔頭。その宸殿は明正天皇より寛永十八年賜つた御所の舊殿を正保四年に移したもので、桃山時代の特色を有し宮室建築を知る貴重な資料である。一之間の貼附繪六面と五之間の襖貼附四面とは國寶である。

鶴林寺寶物館

兵庫縣加古郡加古川町

同寺所藏の國寶其他三百點の什寶保存の爲、大正十年聖德太子千三百年御忌記念として寶物館を建設した。開館毎日。

〔館長〕住職茂渡惠寛

熊野速玉神社寶物館

和歌山縣新宮市新宮一

明治四十三年開設。同社は熊野三山の一にして歷朝御進納の神寶多數を藏し、美術工藝品其他歴史考古資料二百八十五點(内國寶百五十餘點)を保存公開して居る。

(拜觀日) 雨天を除き毎日 (拜觀料)

大人五十錢、學生三十錢、團體割引あり

高野山靈寶館

和歌山縣高野山

靈寶館は總本山金剛峯寺の管理に屬し同寺及山内各院所藏の寶物を收容して、

その保存を講ずると共に一般の拜觀に供するを以て目的とし、大正九年竣工、十年開館す。同館は紫雲殿(六十八坪餘)、放光閣(三十八坪餘)南廊、西廊(六十二坪)寶藏(二十四坪)、管理所等より成り、紫雲殿は佛畫及一般繪畫、放光閣は佛像、南廊及西廊は帝室並に大師關係品、佛像及一般彫刻品、古文書、美術工藝品等を陳列公開して居る。

毎年春夏秋冬の三季に一定の期間を限つて特別展觀を行ふ。尙ほ同館はその事業として、金剛峯寺及山内寺院所藏寶物の整理並に修理、高野山寶物に關する専門的研究の編纂並に發表、宗教美術に關する講習會の開催、寶物目錄の編輯發行等を行つてゐる。

〔館長〕德守清鳳〔主事〕柳原龍園〔顧問〕黑板勝美、荻野伸三郎〔觀覽日〕年中開館、冬期は大體午前九時より午後三時迄、五月より八月迄は午前七時より午後五時迄〔觀覽料〕大人廿錢、十歳以下は無料、團體割引は五十人以上一人十五錢、百人以上一人十錢、教員引率の學生及軍人の團體は一人十錢。特別展觀期日は毎年(五月十五日—二十一日)(八月十五日—二十一日)(十一月一日—七日)とし其期間の觀覽料は一人三十錢とす

下郷共濟會鍾秀館

滋賀縣阪田郡長濱町大字西本一〇

財團法人下郷共濟會の附屬事業として故下郷傳平の遺志に基き、大正九年十一

月創立。新舊美術工藝品、古文書等計三萬餘點を藏し、就中石器時代遺物は一萬點を算し、考古學上得難き參考品として珍重される。常時には開館せず、前以て縱覽希望の通知あればその都度開館す。

神宮徴古館

宇治山田市外倉田山

神宮徴古館は神宮大宮司の管理に屬し明治四十四年神苑會の手により建設獻納されたもので、神宮寶物その他歴史參考品約三千九百點を收藏、一般の觀覽に供して居る。

〔觀覽日〕年末三日を除き毎日〔觀覽料〕大人十錢、小人五錢、團體割引あり

大正記念三田博物館

兵庫縣有馬郡三田町

大正元年大正記念事業として開設。故九鬼男爵所藏の古畫、佛像、美術工藝品歴史參考品等八百點を蒐藏陳列す。〔觀覽日〕毎日〔觀覽料〕二十錢

丹生神社寶物館

兵庫縣武庫郡山田村坂本

當社の寶物たる繪畫古文書等を一般の拜觀に供す。

〔社掌〕畠田朝英〔拜觀日〕毎日午前九時より午後四時まで、拜觀無料

白鶴美術館

兵庫縣武庫郡住吉

村字落合一五四五

昭和六年三月嘉納治兵衛の古稀を記念して、其の蒐集に係る美術工藝品、考古資料五百餘點の保存公開を目的とする財團法人を組織、同九年五月建築竣工、開館に及ぶ。建物は鐵筋混凝土造日本風のもの。事業として、美術考古資料の蒐集保存及びその研究調査の外に美術工藝に關する指導獎勵をなす。尙更に昭和十一年嘉納夫妻金婚記念として刀劍、勾玉鏡鑑其他壹百點の追加寄贈を受け併て六百餘點を藏することとなつた。

〔理事長〕嘉納治兵衛〔理事〕嘉納純〔主事〕山本規矩三〔觀覽日〕毎年春秋二季五月一日より同二十日迄、及び十一月一日より同二十日迄定期公開し、其他臨時に開館することあり〔觀覽料〕大人五十錢、軍人、學生、團體二十人以上及び十五歳以下半額

湊川神社寶物殿

神戸市湊東區多聞通

大正四年十二月設立。祭神に緣りのある刀劍、掛軸、器物、文書類等の寶物七十餘點を陳列す。

〔拜觀料〕大人十錢、小人軍人學生半額

中國地方

淺野觀古館

廣島市上流川町鐵砲町

大正二年十月開館。故淺野長勳侯の設立に係り、古書畫、刀劍、什器等二百六十餘點を展觀す。〔觀覽日〕毎日、午前九時より午後四時迄

出雲大社寶物殿

島根縣鏡川郡大社町

大正三年創設。建物は入母屋造栗栞葺二階建にして總坪四十八坪。收藏品は神像、古文書、武器、祭器、書畫、玉類、古鏡等で計四百十五點。

〔拜觀日〕毎日〔拜觀料〕大人十錢、小人五錢、團體二十五人以上は大人五錢、小人三錢、百人以上は大人三錢、小人二錢 軍人學生は二十五人以上一人二錢

嚴島神社寶物館

廣島縣佐伯郡嚴島町

明治二十七年創設。現在の寶物館は昭和九年新築された。書畫、彫刻、美術工藝品、古文書、武具、衣裳、佛具、樂器、經卷等國寶百二十七點、重要美術品三點、寶物類三千九十點の内より約百六十點を時々交代陳列する。

〔主任〕主典遠北英雄〔拜觀日〕毎日、〔拜觀料〕大人十錢、軍人學生小人五錢、團體は割引する。尙特別拜觀の制あり。

忌宮神社寶物館

山口縣豐浦郡長府町

大正四年十一月開館。歴史考古資料約

三百四十點を展覧す。
(拜觀日) 毎日(拜觀料) 五錢

大原美術館

倉敷市新川町三一二

洋畫家故兒島虎次郎を記念するため昭和五年十一月大原孫三郎が設立したもので、同十年三月大原孫三郎、兒島虎次郎兩名の寄附により財團法人組織に改められた。故兒島虎次郎の遺作、及同人蒐集の繪畫、美術品並に大原孫三郎蒐集の泰西畫家の作品、古代エジプトの古藝術或は外邦古陶器類を保管陳列する。

(理事) 大原總一郎、藝師寺主計、武内潔眞(觀覽日) 毎月曜日、四大節、年始年末を除き、毎日午前九時より午後四時迄(觀覽料) 大人三十錢、學生二十錢

岡山縣郷土館

岡山市石關町八〇

昭和四年開館。郷土研究資料即ち古代土器、石器、古鏡、古代裝身具、各時代の古瓦等の考古學參考品並に博物標本類等を陳列す。

(觀覽日) 毎月末日及年末年始休館、觀覽無料

山陰徴古館

鳥取縣西伯郡淀江町

同地方の考古學研究家の建設に依るもので、蒐集品は山陰地方の出土品を始め各地方の考古學資料を主とし、其他歴史

美術觀覽施設一覽

參考品、工藝美術品等合せて約一千八百餘點に上つて居る。

(館長) 足立正(觀覽日) 毎日曜、祝祭日に開館するが、豫め申込があれば臨時に開館する。觀覽無料

山陽記念館

廣島市袋町五五ノ一
電廣島五三一九

昭和十一年二月開館。財團法人頼山陽先生遺蹟顯彰會の經營に係り、頼山陽の遺品、遺著、遺墨及び關係ある書籍、繪畫等を蒐集展観す。

(觀覽料) 五錢、學生軍人三錢、小學生二錢、團體は割引す

松崎神社寶物館

山口縣防府市

當社の寶物、古文書、繪卷、刀劍、武器、什器等數百點を陳列す。

(管理者) 社司鈴木衷人(拜觀日) 毎日午前八時より午後五時まで。季節により多少伸縮す。(拜觀料) 五錢

四國地方

大山祇神社寶物館

愛媛縣越智郡大三島宮浦

大正十五年六月開館。當社所藏の什寶は千九百餘點を算へ、内國寶指定のもの百十六點、中にも國寶の甲冑は全國總數の六割を占める。

(拜觀日) 毎日(拜觀料) 大人二十錢、小人十錢、學生軍人は半額、團體は割引す。

鎌田共濟會郷土博物館

香川縣坂出町
電坂出二五〇

大正十四年五月開館。讃岐郷土史料並讃岐各地に於ける先史時代、金石併用時代、古墳時代の遺物及經塚竝窯跡等の出土品、古瓦類等を陳列する。

(主事) 岡田唯吉(觀覽日) 毎週土曜、日曜(午前十時より午後四時迄) 特許研究者には隨時觀覽に供す、觀覽無料

金刀比羅宮寶物館

香川縣仲多度郡琴平町
電琴平長一、二

明治三十八年開館。石造二階建。書畫刀劍、古文書、甲冑、佛像、古寫經の類百三十餘點を展観す。

金刀比羅宮學藝館

香川縣仲多度郡琴平町
電琴平長一、二

昭和三年開館。昭和十一年増築。繪畫彫刻、墨蹟、歴史參考品、漆器、陶磁器、玻璃、郷土藝術品、標本、玩具等約二千二百餘點を展観す。

(管理者) 宮司琴陵光熙

讃岐博物館

香川縣三豊郡觀音寺町
琴彈公園内 電二六

昭和二年創立。蒐集品は科學、歴史、美術、軍事、産業等の部門に分ち、歴史部には石器、土器、古瓦、埴輪、古文書、古鏡、武器等を、美術部には郷土の古美術工藝品を陳列す。

(館長) 町長浮田秀太郎(觀覽日) 毎日觀覽無料

白釜寺寶物館

香川縣綾歌郡松山村

大正元年創設。佛畫、經卷等寺寶五十餘點を展観す。

(拜觀日) 毎日(觀覽料) 五錢

善通寺寶物館

香川縣仲多度郡善通寺町善通寺内

大正二年開館。佛像、佛畫、古文書、古寫經、美術工藝品、歴史資料等約三百點を陳列公開する。

(拜觀日) 毎日、午前五時より午後六時迄(拜觀料) 十錢

九州地方

宇佐神宮寶物館

大分縣宇佐郡宇佐町

大正十年開館。刀劍、什器、書畫、能面等の什寶を展観す。

加藤神社寶物館

熊本市新堀町四一

大正十五年設立。加藤清正の遺品を主としてその他武器、古文書、什器等を陳列す。

〔管理者〕社司湯田佐吉（拜觀料）五錢

鹿兒島市立尙古集成館

鹿兒島市外磯

同館は慶應元年の建設で、大正四年まで島津家經營の鐵工場であつた建物を同十二年歴史資料陳列館に改めたものである。刀劍、武器、文書、薩摩陶磁器等七百餘點を陳列する。

〔觀覽日〕毎日（觀覽料）大人十五錢 學生軍人五錢

菊池神社寶物館

熊本縣菊池郡隈府町

菊池神社鎮座五十年記念事業として大正八年創設す。菊池氏關係の古文書、武器、軸物等の什寶類百五十點を保存公開す。毎日開館。

元寇記念館

福岡市東公園五六
電一二五九

本館は明治三十七年の創立で、昭和五年寶物館を増設、元寇記念の蒙古軍器三十餘點をはじめ土器、石器、銅器、刀劍、甲冑等歴史美術參考品一千餘點を陳列公開す。

〔館長〕湯川日淳（觀覽日）毎日（觀覽料）大人十錢、小人軍人學生五錢、普通團體三十人以上五錢、教師の率ゐる學生

團體三錢

佐賀市徴古館

佐賀市松原町銅像園内

昭和二年十月鍋島侯爵家に依り設立せらる。舊佐賀藩時代及び維新後に於ける文化を偲ぶべき歴史考古資料等約三百九十點を收藏す。

〔觀覽日〕毎日、但し大祭祝日及毎日曜日を除く（觀覽料）大人五錢、小人二錢 軍人學生三錢、團體は別に之を定む

太宰府神社寶物殿

福岡縣筑紫郡太宰府町

昭和四年一月開設。國寶其他歴史考古資料百六十餘點を藏す。

〔拜觀日〕毎日（拜觀料）大人十錢、小人軍人學生半額

妻町郷土館

宮崎縣妻町、妻町役場内 電妻一

舊稱史蹟研究所。大正三年宮崎縣が史蹟調査の爲に設けたもので昭和四年妻町の所有となり、穂北古蹟保存會がその管理に當つて居る。同地方の先史時代の遺物及西都原古墳發掘品を陳列す。觀覽無料

宮崎宮寶物殿

福岡縣粕屋郡箱崎町

昭和二年開設。當神社の什寶、御宸翰繪卷物、刀劍、器物等九十餘點を陳列す。

〔管理者〕宮司幡掛正木

別府美術館

大分縣別府市雲泉寺

昭和八年創立。書畫、刀劍、工藝品等三百五十點を陳列公開す。

本妙寺寶物館

熊本市花園町本妙寺内

明治四十二年四月清正公三百年祭の際開設。清正公及同寺に關する什寶百六十點を陳列す。

〔拜觀日〕毎日（拜觀料）十錢

宮崎神宮徴古館

宮崎市神宮町
宮崎神宮神社

明治四十二年創立。皇祖發祥の地日向に於て發掘された考古資料を主とし、其他一般歴史、美術上の參考品を陳列す。

〔館長〕宮司神尾清澄（拜觀日）毎日（拜觀料）大人十錢、小人半額

臺灣、朝鮮、關東州

臺灣總督府博物館

臺北市文武町二ノ三

明治四十一年民政部殖産局の事業として創設、その後大正四年に竣工せる元兒玉總督・後藤民政長官記念建築物に移轉し、次で大正六年商品陳列館設立さるゝに及び、商品關係の陳列品を一切移管分離し、純然たる博物館となり、大正九年

殖産局より内務局へ移管、大正十五年文教局の新設と共に同局の管轄となり今日に及んで居る。

陳列品の主なるものは歴史、土俗、動物、植物、地質、礦物であつて、歴史部は本島關係歴史品を展示し、土俗部は本島土俗、蕃人土俗及南洋土俗研究上貴重な資料を蒐集して居る。昭和十年三月末現在の蒐集品は歴史部二、六九二點、土俗部三、〇七一點、南洋部一、一四九點、地質礦物部二、一三四點、動物部三、四三七點、植物部三八二點、雜部三四一點である。

〔館長〕王野代治郎（觀覽日）七月一日より九月三十日迄（午前八時―午後二時）十月一日より翌年六月三十日迄（午前九時―午後四時）、毎週月曜、祝祭日の翌日及十二月二十八日より翌年一月五日迄休館す

朝鮮總督府博物館

京城府 光化門通景福宮内 電光化門六六一

大正四年、施政五周年記念朝鮮物産共進會の開催に際し、京城舊王宮景福宮内に新築した美術館を中心とし、同構内の舊宮殿をも併せ利用して同年十二月開館に及ぶ。本館陳列品は、朝鮮石器時代金石併用時代の遺物、樂浪帶方郡發掘品三國時代、新羅統一時代の遺物、高句麗時代の古墳壁畫、高麗時代の陶器、李朝時代の書畫、陶器、漆器及び中央亞細亞の發掘品等で、朝鮮各時代に互る美術考

古資料約一萬三千八百餘點が蒐集されて居る。

〔主任〕藤田亮策（親覽日）月曜日、大祭祝日の翌日、自十二月二十六日至一月三日期間を除き毎日開館（親覽料）一人五錢、引率者を有する學校生徒並軍人は無料

同慶州分館

慶尙北道慶州邑

豫て同地の考古研究家の設立に係る慶州古蹟保存會陳列所を、大正十五年朝鮮總督府に移管し、同年六月總督府博物館分館となして開館した。石器時代から李朝時代までの、慶州を中心とする考古資料、美術品、歴史參考品等約八百五十點を陳列してゐる。

〔親覽日〕月曜日、大祭祝日の翌日、自十二月二十六日至一月三日期間を除き毎日開館（親覽料）五錢

開城府立博物館

開城府東本町子男山

昭和五年十月府制實施せられ、開城郡が開城府に昇格せられた記念として昭和六年十一月建設。主として高麗朝時代の美術工藝品、殊に高麗燒の優れたものが多數蒐集陳列されて居る。

〔館長〕高裕燮（親覽日）毎週月曜日、年始年末及大祭日を除き毎日開館（親覽料）大人五錢、小人二錢

扶餘古蹟保存會陳列館

忠清南道扶餘郡扶餘

保存會は大正四年扶餘に於ける百濟の古蹟保存並調査研究を目的として設立。陳列館は同古蹟遺品約六百點を蒐集公開してゐる。

〔會長〕鄭僑源〔副會長〕田中保太郎

平壤府立博物館

平壤府慶上里一五

昭和三年八月開館。八年九月現在の地に新築移轉す。樂浪及高句麗時代の遺物を展観す。

〔館長〕小泉顯夫（親覽日）毎週月曜、大祭日、年末年始を除き毎日開館（親覽料）十錢、十人以上の團體は一人五錢、學生團體は一人三錢

李王家德壽宮美術館

京城府貞洞五ノ一

朝鮮に於ける美術獎勵の目的を以て、昭和八年十月德壽宮を公開する、に當り石造殿の内部を改造して日本近代美術の陳列館となし、李王家御所藏品及び他からの出陳に係る日本畫、洋畫、彫刻、工藝の優秀作品を常設陳列して一般に觀覽せしめる。

〔親覽日〕一月四日より十二月二十八日迄毎日開館（親覽料）大人二十錢、小人十錢、其他學生團體に限り割引す

李王家博物館

京城府臥龍洞二ノ一

李王家博物館、動植物園を總稱して昌慶苑と言ひ昌德宮の一部をなし其の廣さは約十八萬一千平方米を有す。明治四十年時の韓國總理大臣李完用に依り故李王殿下の御慰樂に供する爲發企計畫されたものであるが、後殿下の思召により一般民衆に公開し實物教育機關となしたものである。博物館は主として朝鮮古今の美術、土俗品等各種の考古資料一萬八千餘點を藏し、これを明治四十四年に建築せる博物館と、朝鮮古式の宮殿建物（明政、景春、歡慶、通明の各殿）に陳列公開して居る。

〔親覽日〕一月四日より十二月二十八日迄無休開館（昌慶苑觀覽料）大人十錢、小人五錢、軍人、小學生等の團體は一人二錢、それ以外の團體は一人五錢とす、尙博物館は別に一人十錢、學生團體（二十人以上）は一人五錢、植物温室は一人十錢、學生團體は一人三錢の觀覽料を徴收す

旅順博物館

旅順市大迫町

本館はもと關東都督府滿蒙物産館と稱し大正五年の創設で、同七年現在の建築の成るに及び博物館と改稱、次で同八年四月より都督府の改制と共に關東廳の名を冠したが、昭和九年關東局令を以て旅

順博物館と改められた。本館は露國統治時代に將校集會所として起工したが半成の儘であつたのを、大正五年工費三十萬圓を投じ同七年竣工したものである。

陳列品は主として滿洲、蒙古及支那本土に於ける考古、美術及土俗資料で約六萬九千點を算へ殊に蒙古小庫倫、南滿洲旅順附近、魏子窩、牧羊城址等より發見の考古的遺物は特有のもので、その他支那各時代に互る陶磁器の蒐集を始めとして、數多の銅器鏡鑑、瓦器、壁畫、經卷等、東亞考古學上貴重な研究資料を蒐藏する。

因に本館は附屬として植物園、動物園を經營し、別に旅順攻圍戰の彼我遺品を展覧する記念館（舊市街所在）を所管してゐる。

〔館長〕今井順吉〔主事〕島田貞彦（親覽日）祝日、年末年始を除き毎日開館（親覽料）本館及記念館各一人十錢、二十人以上の團體は半額、記念館軍人無料（特別觀覽料）一點一日に付五十錢

美術家團體一覽 (五十音順)

愛知縣工藝協會

名古屋市中區御幸本町
一丁目愛知縣商工館内
電二二五六

愛知商業美術協會

名古屋市中區御幸本町
一丁目愛知縣商工館内

青森縣工藝協會

青森市榮町堤橋前
倉光木工所内
電一七〇一

油繪五人會

東京府千歲村船橋
三一五竹村義司方

昭和八年四月創立。同人のお繪研究並發表機關。

〔會員〕大貫松三、竹村義司、圓山信一、榎戸庄衛、須田壽

アヴァン・ガルド藝術家クラブ

荒川區尾久町二ノ
三五八四宮潤一方

昭和十一年四月結成。「アヴァン・ガルド藝術家の懇親と、それによる相互の啓發」を目的とし、毎月會合の上座談會、講演會等を開催する。會員は瀧口修造、四宮潤一、植村鷹千代等の評論家及二科獨立、飾畫、一九四〇年協會、エコール・ド・東京、アニマ、ジャン、黒色、動向、フォルム、リヲ等諸團體の作家有志に詩人が加つて組織してゐる。

秋田美術會 (綜合)

東京市世田谷區代田一ノ七六六福田豐四郎方

昭和三年創立。秋田縣出身の故平福百穂を中心として、同縣出身の在京美術家有志を以て組織。年一回東京及秋田市に展覽會開催。會員六十四名

淺草美術家協會 (洋)

東京市淺草區千束町
一ノ一六山田篤方

昭和十一年十二月淺草區在住の洋畫家を以て結成。展覽會開催。

伊部陶業協會

岡山縣和氣郡
伊部町役場内

昭和九年三月伊部町の伊部焼業者を以て組織。伊部焼の振興を圖るを目的とし展示會開催、他展への出品斡旋、宣傳等をなす。

〔會長〕島山信次 〔副會長〕木村貫一 〔會員〕二十八名

〔會長〕橋本良雄〔理事〕奈良金一、八木橋文平、木村勇藏、齋藤熊五郎 〔會員〕九十五名

青森市の工藝業者販賣者を以て組織。圖案、工作、販路の研究發表を行ひ、展覽會、講習會の開催、他展への出品斡旋等をなす。

昭和九年創立。商業美術の確立及其改善を期し、商業美術に關する調査研究、展覽會講習會の開催、紹介斡旋等をなす十二年五月第五回展開催。

〔會長〕菅原省三〔理事長〕高橋信三〔理事〕伊藤靜定、杉本健吉、坂本正夫、石黒一彦、富野巖松、大野明、坂井茂、成田市郎、成田光彌

〔參事〕萬代敏夫、田中均、田中自助、松井康夫

青丹會 (洋)

東京市品川區大井庚辰
町四八三二田坂乾方
電大森二八五一

昭和七年創立。文化學院美術科卒業生を以て組織。洋畫研究並發表をなす。

〔會員〕千葉明、千頭清策、井村義人、小平鼎、竝河弘、野中榮吉、大橋文子、大石俊彦、大兼實、田坂乾、安井隆

青森縣工藝協會 (工)

弘前市百石町
三六 電四七

縣下工藝の發達を圖るを目的とし弘前地方の工藝品製作者、販賣者及關係者を以て組織。年一回競技展覽會開催。

愛知縣に於ける工藝の振興及その産業的進出を圖り、意匠圖案の調査研究、講習、講話會及展覽會開催、宣傳等を行ふ工藝通報(月刊)、工藝叢書(年刊)刊行。

〔總裁〕愛知縣知事〔會長〕高野源造〔理事長〕菅原省三〔理事〕岩村新、木村德壽、中川貞三、佐藤松治郎、赤塚幹也、永塚樂治、押谷鐵三郎、瀧澤治三郎、水野保一、石塚岩三郎、淺野甚七、橋本文、宮部鈴三郎、安藤重兵衛、池田正信、黒田邦彦、岩田芳之助、黒田忠謙、江口彌一郎

愛知社 (綜合)

東京市瀧野川區田端
町六一二朝蔭其明方

大正七年創立。愛知縣出身の在京美術家を以て組織。相互の研究及親睦を目的とし、郷土美術界の爲に盡す。毎年公募展開催。

〔會員〕(日本畫) 川崎小虎、服部有恆、清水有聲、太田一彩、森田沙夷、森村稻門(西洋畫) 山本鼎、加藤靜兒、渡邊正太郎、水野義正(彫塑) 毛利敦武、加藤顯清、朝蔭其明(工藝) 藤井達吉、長野祐志

池袋美術家クラブ

東京市豊島區池袋四ノ
四四五佐藤英男方
電大塚二五〇一

昭和十一年八月池袋及長崎町在住の美術家が相互の親睦を目的として結成。同年九月第一回街頭展開催。

〔委員長〕田中佐一郎〔委員〕佐波市、佐藤英男、森繁、須藤清彦、葛見安治郎、寺田政明、桑原實

石川縣工藝獎勵會展覽會

石川縣廳內經濟
部商工水産課

縣下の美術工藝、生産工藝、輸出工藝の發達を圖り、年一回金澤市に展覽會開催。引續き東京、大阪に陳列會を開く。會員二百餘名

〔會長〕石川縣知事

石川縣輸出工藝振興會

金澤市泉旭町一丁目

昭和九年九月創立。同縣工藝品の輸出振興を目的とし輸出工藝品關係者に依り組織せらる。見本製作の獎勵、販路擴張等の事業をなす。

〔會長〕石川縣知事〔副會長〕中川剛毅〔幹事〕千田專平、高田利守、淺野廉、能波清二

一軌社(洋)

東京市豊島區池袋二ノ
九四三桑原實方

美術家團體一覽

舊スクラム社改稱。昭和八年度東美教師範科卒業生により組織。同人相互の研究機關。

〔會員〕林佐門、高田廣喜、小島勇、桑原實、樺葉嘉一郎、森繁

一樹社(洋)

京都市左京區中町
五川端彌之助方

田中善之助、國盛義篤、川端彌之助等を中心とする春陽會の京都出品者を以て組織。昭和十年十一月第一回展を京都朝日會館に開催。

〔會員〕岩崎又二郎、石井彌一郎、徳力富吉郎、加藤啓三、川端彌之助、龜井藤兵衛、田中秀雄、田中善之助、村上尙雄、國盛義篤、藤野龍、琴塚英一、榎信太郎、淺木勝之助、調植山

一水會(洋)

東京市荒川區日暮里渡邊町一
〇三五石井方 電話込四七三

昭和十一年十二月、舊二科會員八名は「會場藝術を非とし、技術を重んじ、高雅なる藝術を尊重することに於て一致」、同會を創立した。昭和十二年七月會員展を開催。ついで同年十二月東京府美術館に第一回公募展を開催した。

〔會員〕有馬生馬、石井柏亭、木下孝則、木下義謙、小山敬二、碓伊之助、安井會太郎、山下新太郎、高野三三男、中村善策

茨城美術展覽會(日、洋、工)

水戸市南町いばらき
新聞社內 電水戸五
〇、三〇四、三三二

大正十二年五月いばらき新聞社主催で第一回日本畫茨城展を開催したのを初めとし、ついで昭和五年工藝部を加へ茨城工藝第一回展を開き、爾來交互隔年開催して日本畫展は第七回、工藝展は第四回に及ぶ。昭和十三年に洋畫部を増設、四月第一回洋畫展を開催の豫定。會員、出品者共に茨城縣出身者若くは茨城縣に縁故ある者なる事を資格とする。主なる會員としては、第一部(日本畫)横山大觀、小川芋銭、飛田周山、第二部(洋畫)熊岡美彦、第三部(工藝)板谷波山、磯崎美亞等がある。

〔會長〕いばらき新聞社長〔顧問〕茨城縣知事

岩手美術工藝協會

盛岡市岩手縣工業
試驗場內電五一

昭和八年創立。縣下美術工藝の振興に關する研究の助成及展覽會指導を事業とし、特に郷土古民藝の現代的再生を目的とす。

〔總裁〕岩手縣知事〔會長〕同經濟部長會員八十名

院友俱樂部(日)

東京市下谷區谷中三崎南町日
本美術院內 電下谷二五一〇

日本美術院繪畫部院友の全員を以て、昭和十二年三月結成。「最近美術界の情勢に顧みて自重を緯とし信念を經とし確固たる精神を以つて藝術の本體を高揚せんとする」もの。年一回院友展を開催する。尙昭和十二年九月會員十名が連袂退會した。

〔委員〕石本光太郎、半田鶴一、奥村玲璫、河村良孝、横田仙草、四田觀水、高橋周桑、中島清、小島一谿、兒玉素行

烏城會(日、洋)

京都市岡崎法勝寺
町一八柴原希祥方

昭和二年創立、岡山縣出身京都在住畫家を以て組織。毎月研究會を開く。

〔常任幹事〕柴原希祥、稻葉春、生戸田英次、會員三十餘名

愛媛美術工藝協會

松山市愛媛縣商品
陳列所電四四五

愛媛縣在住並出身の美術及工藝家を以て組織。同縣の美術及工藝の振興を圖るを目的とす。綜合展開催。

〔總裁〕縣知事〔會長〕縣經濟部長

越佐工藝美術會

東京市淀橋區下落合一
ノ四二〇佐々木象堂方

昭和九年新潟縣出身の工藝美術家を以て組織。會員は何れも舊帝展第四部に關係の作家で、會員相互の研究並發表に努むると共に郷土工藝の指導啓發に盡力す

る。同年十二月第一回展開催、爾來毎年一回縣下及東京に展覽會を開く。

〔會員〕原直樹、富樫光成、小澤天來、小川英風、小川友衛、龜倉宇吉、吉田醇一郎、高井白陽、小林知象、佐々木象堂、宮田藍堂、齋藤鏡明、品田愼一、清水辰雄、柴田武次、森三樹、市橋鷺山、原宗治、小野爲郎、眞藤玉眞

エコール・ド・東京(洋)

東京市中野區向臺五

昭和十一年三月創立。主に東美校出身の青年畫家の組織する新興繪畫集團。展覽會を開催。(昭和十三年四月解散)

〔會員〕淺利篤、相川泰、有海富貴夫、麻生三郎、安孫子眞人、和泉美雄、市岡正彦、市村力、生島寛、内田愼藏、太田士朗、小川原脩、神谷嘉廣、片山公一、柿手春三、境野一之、島田幸人、末永胤生、高橋勉、寺田政明、土井俊夫、野村章三、延岡游、長谷川善四郎、濱松小源太、廣江ミチ子、三好弘光、吉井忠、早瀬龍枝、森口靜枝

エトアル洋畫會

和歌山市和歌浦七
八六和田傳太郎方

昭和三年創設。年一回春季に展覽會開催。

〔會員〕沼富次郎、明樂光三郎、鈴木善次郎、山本秀臣、掛下利夫、和田傳太郎

S・P・A集團(洋)

東京市牛込區柳町三八
藏方 電牛込六九六四

昭和十年六月駿河臺洋畫研究所を解散して現在の研究團體に改む。洋畫の研究及發表を目的とし、批評會、スケッチ旅行、懇談會等を催す。本團の下にはその「組織群體」として黒色展、白蠻會、大斗展、海友會等があり各々展覽會を開き又各群體の綜合展(S・P・A展)を行ふ。入會は會員の紹介に依る。(昭和十三年四月解散)

〔指導者〕藤田嗣治、野間仁根、會員四十九名

大分縣工藝協會

大分市錦鶴町大分縣工
業試驗場内 電三三一

昭和十年四月創立。十一年三月第一回展、十三年三月第二回展開催。研究會開催、先進地視察、講演會、講習會の開催作品集刊行、工藝展の出品等を行ふ。

〔會長〕大分縣經濟部長

大分縣美術協會(綜合)

大分市荷揚町大分縣教育會
館内 電三六一、一五五

昭和十二年五月創立。大分縣美術界の向上發展を圖り且つ互に親睦の實を擧ぐるを以て目的とし、春秋二回の展覽會、臨時古美術展覽會、研究會開催等を行ふ同年十一月第一回展開催。

〔會長〕石丸優三〔會員〕凡二〇〇名

大阪女流畫家作品展覽會(日)

大阪市天王寺區堂ヶ芝町
一二關西女子美術學校内
電天王寺二七二一

大阪及各地の女流日本畫家の出品に依る公募展、昭和十二年六月第四回展開催(昭和十三年一月大阪女人社と改稱、木谷千種、大江更國の兩名が十三年度幹事となつた)。

〔同人〕生田花朝、橋本花乃、星加雪乃、融紅鸞、大江更國、和氣華洋、村岡小丘、矢島玉女、福田芳穂、小松華影、木谷千種、四夷星乃、島成國

大阪新美術家同盟(洋、彫)

大阪市住吉區阪南町
西五ノ二四 西阪方

關西に於ける各美術團體の綜合展開催を趣旨とする。昭和八年四月大阪の洋畫團體、神國會及ZIGZAGが合同して結成。次で彫塑團體クレイ(現代大阪彫塑會)が加盟、同年十一月第一回展開催十年十二月セクション・ダールが加盟、十二年一月、神國會が脱會したが、同年四月ロボット洋畫協會及關西水彩畫協會が加はり、以上の四團體で同年十一月第四回展を開催した。尙十三年度に加盟團體のZIGZAGは解散したが、新に六月會、新畫人集團、大阪繪畫會が加盟、計洋畫六團體、彫塑一團體となつた。

〔委員〕西阪修、田村譽志那、玉澤潤一

小島大輔、田川寛一、松本銳次、池島勘治郎、桂龍雄、木村孝三、藤田金之助、藤井光、寺田清四郎、川島昇太郎、難波架空像、白石正義、宮島久七

大阪彫塑會

大阪市北區新川崎
町一 宮島久七方

昭和六年洋畫團體ZIGZAGの彫刻部として成立。翌年獨立して大阪近郊の青年彫塑家を加へ帝展、二科、院展、國展、構造社各系の相互研究團體たる「クレイ」を結成。八年より大阪新美術家同盟展に加盟。十一年十月組織を擴大して大阪彫塑會と改名した。

〔會員〕菅原安男、保田龍門、白石正義、谷本整映、宮島久七、木下正彦、大栗和七、金森勝太郎、木下幹、日高政法、三澤賢三

大阪美術展覽會(日)

三越大阪市内

關西に於ける青年日本畫家の向上を目的とし毎春一回三越主催にて開催。昭和十三年三月第二十四回展開催。

〔鑑査委員〕西山翠嶂、西村五雲、堂本印象、中村大三郎、宇田萩郎、山口華楊、矢野橋村、福田平八郎、菊池契月、北野恆富、水田竹圃、菅橋彦

第二十四回大阪美術展
出品規定抜萃

一、本會は昭和十三年三月一日より五日迄大阪三越に於て開催す

一、本會に出品せんとするものは出品目録を添へ昭和十三年二月二十五日、二十六日の兩日中に大阪三越内大阪美術展覽會係迄出さる可し

一、出品は二點以内にして寸法に制限なし但し陳列に適當なる装置をなすことを要し又解説を要するものは之を添附せらるべし
一、賣約したる出品に對しては賣價の一割五分を申受け大阪三越に交付し殘金は閉會後同店新美術部に於て出品預託と引換に交付すべし

大阪府工藝協會

大阪府東區大手前町
大阪府廳工務課内

大正十三年十月創立。社團法人組織。

各種の工藝家、意匠圖案家及斯道關係者を以て組織。工藝品及意匠圖案の調査研究、展示會開催。月刊「大阪府工藝協會雜誌」を發行する。

〔名譽會長〕大阪府知事〔名譽副會長〕大阪府經濟部長〔理事長〕和田太郎

〔理事〕中山修三、杉田禾堂、入江來布、江藤喜吉、中島保美、安原祥窓、山本笙園、黒岩淡哉、吉田岩平、吉田鹿之助、土山隆克、瀬川三五郎、益子勇雄、山岡光盛

旺玄社（洋）

東京市大森區馬込町東
二ノ八八三田澤八甲方

牧野虎雄を主宰者とする青年洋畫家の團體。昭和八年より毎年春季に東京府美術館に公募展を開催し又臨時小品展を開

く。夏期講習會を東京及各地に開催す。昭和十二年從來の同人制を會員會友制に改めた。

〔主宰者〕牧野虎雄〔會員〕岩井彌一郎

千木良富士、尾崎三郎、甲斐仁代、田邊嘉重、田澤八甲、橋作次郎、塚本茂、中出三也、能勢眞美、野田信、牧野醇、馬越樹太郎、福田新生、小林喜代吉、小林猶治郎、櫻庭彦治、樹下行雄、宮部進、鈴木金平、鱈利彦、深澤省三、遠山陽子、東久世秀雄、村瀬眞治、三好俊一、梅澤昭司、川城國司、小林榮、新野歡一、水戸範夫〔會友〕石上末廣、市村雄造、晴木親久、新居廣治、岡村崇子、川上律江、高橋正、中村新二郎、村上隆一、松本茂雄、松本節、藤村はつ江、深澤紅子、青山襄、齋藤七資、佐藤文雄、佐藤末太郎、宮芳平、清水孝一、東久世小六、關川富士郎、薄田芳彦

第六回同展規定拔萃

〔會場〕東京府美術館正面

〔會期〕昭和十三年二月二十四日—三月七日

〔地方出品〕東京市芝區新橋田町一九、磯谷額、綠店氣付旺玄社展」とし二月十八日迄に到着を要す

〔出品手数料〕一人三點迄金一圓、一點増す毎に金五十錢を申受く
〔鑑査〕牧野虎雄及同人一同之れに當る
〔出品〕油繪、水彩畫、素描、パステル、創作版畫等

〔賞〕旺玄社賞、其他

煌土社（日）

東京市杉並區上高井戸町
五ノ一八九〇野田九瀧方

野田九瀧の塾、居仁洞の改稱。昭和十二年五月日本橋白木屋に第三回展を開催。

岡崎工藝美術展覽會

岡崎市役所勤
業課電五四九

岡崎美術展の工藝部が昭和二年分離獨立したもの。同市の特産たる石製品、青銅器、木彫等の發達を計るを目的とし毎年同市及愛知縣工藝協會岡崎市支部共催の下に開かれる。十二年十一月第十六回展開催。

岡崎美術展覽會（日、洋）

岡崎市立圖書
館内電六五〇

岡崎市の美術の發達に資するを以て大正十二年十月設立。翌月第一回展開催、昭和二年繪畫部と工藝部が分離した。十二年十月第十六回展開催。

〔會長〕（岡崎市長）菅野經三郎〔委員長〕柴田顯正〔委員〕（日本畫部）板倉晃邦、岡田撫琴、平岩三陽、和田青雨、松原耕嶺、山本一郎、早川葵香〔洋畫部〕杉山新樹、山本銀太郎、神川一郎〔幹事〕鈴木實、西尾迪雄、伊藤十一

岡崎美術展規則拔萃

一、本會は毎年春期一回之を行ひ日本畫並に洋畫の作品を陳列す
一、本會出品はすべて無審査陳列を原則とす但し會場狹小の節は本會委員に於て整理減點することあるべし
一、一人の作者の陳列點數は一般出品人五點以下、委員及び幹事は三點以下とす

一、本會の出品人は市の内外を問はず其作品を出品することを得
一、會場は岡崎圖書館とし必要に應じ市公營堂を致用す
一、本會出品に對し鑑別等級賞與賞金の類を附せず

佳都美村（工）

京都市上京區小山
初音町會見延藏方

明治四十二年神坂雪佳を中心に佳都美會設立され、後佳都美村と改稱す。大正十三年これを解體し殆ど舊同人を以て京都工藝美術會を組織し、同十五年美工院と改稱したが更に昭和十年佳都美村に還稱した。京都工藝美術會組織以後は公募展を開催して斯界の向上に努めたが現在再び佳都美村に還り同人の研究を目的とする。隨時作品發表をなす。

〔村長〕神坂雪佳〔村員〕伊東陶山、伊東翠壺、岩村哲齋、岩村光眞、一瀬小兵衛、丹羽冬橋、神坂祐吉、神坂松濤、江馬長閑、鈴木表朗、三木表悅、魚野自醒、奥村霞城、山田樂全、清水六兵衛、宮永東山、溝口安太良、古市垣太郎、皆川月華、山鹿清華〔事務理事〕會見延藏

香川縣工藝美術綜合展覽會（綜合）

香川縣商工獎勵館内

香川縣工藝品並に美術品の向上發達を圖るを目的とし、毎年豫算の範圍内に於て五月一日より五月九日迄高松三越で開催される。昭和十三年五月第五回展に至つた。

尙十三年度審査員は、洋畫小林萬吾、日本畫高田美一、西村平間、彫刻新田藤太郎、工藝大須賀喬、磯井如眞、三好眞長等である。

同會規程抜萃

- 一、本會ニ左ノ四部ヲ置ク
- 第一部工藝、第二部彫刻、第三部洋畫、第四部日本畫

一、出品ハ本縣在住者、出身者並ニ縁故アル者ノ作品ニシテ左ノ各號ノ一ニ該當スルモノヲ陳列ス 一、前年ニ於テ帝展、三部展、東邦展、二科展、院展、奉陽展、獨立展、國畫展（彫刻ヲ除ク）新制作派展、構造社展（工藝ヲ除ク）ニ入選シタル作品但シ前知事實ヲ受ケタル作家ノ作品ハ二ヶ年無鑑査トス二、前號各展覽會ニ三回以上入選シタル作家ノ作品三、商工展ニ於テ三等賞以上ニ入賞シタル作家ノ作品四、鑑査會ノ推薦シタル作家ノ作品、五、第三章鑑査ノ規定ニ依リ合格シタル作品

一、出品ハ一人ニ付二點以內トス、但シ會場ノ都合ニ依リ一點トスルコトヲ得
一、洋畫ノ大サハ八十號以內、日本畫ノ大サハ横六尺以內、（表装裱張ノコト）トス
一、審査ノ結果優等ト認メタル作品ニ對シ知事實ヲ授與ス、但シ鑑査員、審査員ノ作品及第四條第一號及第三號各展覽會ニ於テ入賞シタル作品ハ之ヲ除ク

香川縣漆藝會

高松市花ノ宮町香川縣工業試驗場内 電三九〇二

昭和十年一月設立。香川縣工業試驗場の輸出向漆器講習修了者を以て組織。同試驗場指導の下に輸出工藝品及一般工藝品の研究及作品の發表をなす。昭和十二

年八月第二回漆藝展開催。

〔會長〕香川縣工業試驗場長〔會員〕二十四名

華陽會（彫）

東京市本郷區駒込神明町三四一後藤良方 電駒込一一五五

昭和八年一月後藤良社中より組織。彫塑研究を目的とし、年一回展覽會開催。

〔會員〕花岡幸雄、岡本壽太郎、綿引司郎、吉田茂男、卜部末彦、野村春陵、野口甚吉、八柳正雄、八柳恭次、松前楓溪、布施英治、後藤省吾、後藤良、後藤駒雄、後藤光行、小松宏次、紺谷英儀、齋田東吾、相良又二、鈴木仁亮、畫間弘、田村巖、佐藤助雄、小國江智、安原喜明、門傳正衛

畫斷社（日）

東京市本郷區駒込林町三五電駒込五六六

明治四十四年十月、神木鳴津により設立。『東洋古畫道の復興』を趣旨とす。月刊『畫斷』を發行し大正六年三月に至り休刊したが昭和九年十月再發行して十一年八月迄續刊した。同社の催として神木鳴津の作品展を開催する。

〔會長〕神木鳴津〔職員〕西村南岳、梶東方、加瀬藤岡

塊藝會（彫）

名古屋市西區臺所町三ノ一石田方

昭和八年一月創立。名古屋に於ける新進彫塑家の團體。年一回同市に展覽會開催。

〔會員〕石田清、大嶽茂樹、高藤鎮夫、曾我八代、野々村一男、穴吹義雄、安藤菊男、森本啓史、千木谿山、菅沼五郎

海洋美術會（洋）

東京市麹町區丸之内郵船ビル 海軍協會内電丸之内二七九八

昭和十二年五月二十七日海軍記念日を機として海軍協會主催、海軍省後援の下に東京市在住洋畫家九十五名の出品を得て、日本橋三越に海洋美術展覽會が開催され、同六月、海洋美術會發會を決定、次いで同十一月會則の決定を見た。國民海事思想の普及及向上に貢獻するを目的とし、毎年海軍記念日を中心として、海軍省、海軍協會後援の下に海洋に關係の深い洋畫展覽會を開催する。

〔常任幹事〕石川寅治、中村研一〔會員〕石井柏亭、石川寅治、長谷川昇、奥瀬英三、中澤弘光、中村研一、永地秀太、山下新太郎、田邊至、小林萬吾、權藤種男、北蓮藏、南薺造、御厨純一、三上知治、三國久、清水良雄

各人社（綜合）

京都市押小路富小路角岡本庄三方

昭和六年八月結成。藝術一般の研究及會員相互の向上を目的とす。毎年展覽會開催。

〔會員〕（日本畫）辻村宗太郎、中村敏郎、赤松稜一、芝正雄、白岩兎三郎（洋畫）仲千代二、安田謙、藤井勇、德永王樹（版畫）稻垣耕四郎（彫塑）岡本庄三、吉川常雄、吉田淑示、中村三郎（工藝）天野六郎助

革丙會（日）

東京市本郷區弓町一ノ二六 柳田曉山方

明治四十年故小堀訥音門下に依りて組織。大和繪系の國史畫研究並に創作を目的とす。大正十年第一回展を催し、爾來展覽會を繼續して昭和十二年三月、日本橋三越に第十六回展開催。

〔會員〕磯田長秋、伊東紅雲、岩田豐磨、太田天洋、川崎小虎、川船水棹、柳田曉山、丹波綠川、山川永雅、安田親彦、小山榮達、小堀安雄〔幹事〕柳田曉山

學校美術協會

東京市荒川區日暮里町三ノ一九六 電根岸一〇三〇

昭和二年十月設立。我が國の小學校、中等學校に於ける圖畫手工教育の健全なる發達を側面より助成するを以て目的とす。現在小學校、中等學校圖畫手工教師一萬數千名の加盟を得、教育者の指導獎勵、參考作品の無料貸出、教材用具の研究製作供給、圖書の刊行、本邦圖畫手工作品の海外への紹介展覽、視察員派遣等の事業を行ふ。毎月雜誌「學校美術」發行。

〔會長〕岸邊福雄〔常務理事〕後藤福次郎〔理事〕板倉賛治、山本鼎、霜田靜志、赤津隆助、石谷辰治郎

關西水彩畫協會

大阪市旭區南島町
八八四 桂龍雄方

昭和十年四月關西在住の水彩畫家十二名を以て組織。年一回大阪、神戸、京都に於て協會展開催。夏期講習會並に毎月研究會を催し、機關誌「水彩」發行。十二年二月大阪新美術家同盟に加盟。

〔會員〕池島勘治郎、別車博資、桂龍雄、米倉兌、吉倉三郎、田中丘人、中谷武雄、福井逸郎、南右橋、青野馬左奈、研究會員八十四名

神奈川縣商工協會

神奈川縣廳內

昭和三年五月創立。貿易部、能率部、工藝部、出品部、計量部の五部を設置。海外市場の調査。輸出並一般工藝に關する指導、縣下生産品の紹介等を行ひ、展覽會を開催する。

〔會長〕〔神奈川縣知事〕半井清〔副會長〕江邊清夫〔理事長〕谷口寛

岐阜社(日)

岐阜市大宮町二杉山方

岐阜縣下郷土美術の革新と向上を目的とす。昭和十三年五月岐阜市に第三回展を開催した。

〔同人〕長谷川朝風、川田虛舟、横山春

美術家團體一覽

溪、杉山祥司

九夏會(洋)

東京市世田谷區赤堤町
一五四 土野義郎方

昭和九年創立。春陽會々友の組織する洋畫發表團體。十一年第一回展開催。

〔會員〕伊藤慶之助、岩田榮之助、上野春香、遠藤典太、小栗哲郎、大澤鉦一郎、鬼塚金華、加山四郎、川端彌之助、兼平英示、齋藤清二郎、眞田久吉、土屋義郎、藤堂奎三郎、久泉共三、森田勝、揚佐三郎、和田歳一、新沼杏一、原精一

九元社(彫)

東京市豊島區長崎仲町一
ノ二七八四鈴木三郎助方

昭和八年創立。昭和二年より六年までの東美校卒業生有志が結成せる木彫研究團體。毎月研究會を開き又展覽會を開催する。

〔會員〕森大造、中野四郎、村井辰夫、石塚貞男、奥山泰堂、長谷川宏、鈴木三郎助、高橋泰藏、松本光史、長沼孝三、紺谷英儀、齋藤誠一、田近政二〔顧問〕關野聖雲、北村西堂、建畠大夢、羽下修三

九阜會(日)

東京市麹町區九段四
ノ一五 關尚美堂內

昭和九年九月、關尚美堂に於て太田聰羽、奥村土牛、吉岡堅二、高橋周桑、田中青坪、常岡文龜、寺島紫明、溝上遊龜、森白甫の九名を以て組織。十年五月第一

回展開催。其後徳岡神泉、山口華楊、上村松篁、杉山寧の四名加入、現在會員十三名。昭和十二年四月第三回展開催。

九州沖繩各縣聯合

工藝試作品展覽會

別府市廣協海岸大分縣
殖産館內電別府二五九

九州、沖繩各縣聯合を以て主催、昭和十二年度(第四回展)は、七月別府市に開催した。

同會第四回展規定拔萃

一 本會ハ九州沖繩ノ工藝試作品ヲ陳列展示シテ工藝品ノ改善指導並ニ製作獎勵ニ資スルヲ以テ目的トス
一 會長ニハ開催地縣知事ヲ副會長ニハ會長ノ推薦シタル者ヲ以テ之ニ充ツ
一 出品物ノ範圍ハ輸出ノ目的ヲ以テ試作シタル工藝品並ニ意匠圖案ニ限ル但シ左ニ掲グルモノハ出品スル事ヲ得ズ一、衛生風俗ニ害アリト認ムルモノ、二、發火其ノ他危險ノ虞アリト認ムルモノ、三、製作後一年以上ヲ経過セルモノ、四、既ニ公開展示シタルモノ、五、追加注文ニ應ジ得ザルモノ、六、前項ノ外出品ニ適セズ出品ノ價值ナシト認ムルモノ、出品物ハ一人十點トス

一 出品者ハ主催各縣下在住者又ハ試験研究機關ニシテ當該出品物ノ製作者若ハ自己ノ爲ニ製作セシメタル販賣業者ニ限ル
一 出品申込ハ昭和十二年七月一日迄別紙様式ニ依リ申込書ヲ所屬各縣ヲ經由シ事務所ニ提出スルモノトス
一 出品物ハ鑑査ヲ經テ之ヲ陳列ス

九年會(洋)

東京市杉並區阿佐谷一
ノ七九六 今村俊夫方

昭和九年度東美校洋畫科卒業生を以て組織。相互の親睦、向上を目的とす。年一回展覽會開催。

〔會員〕伊藤清永、伊藤悌三、五十嵐俊夫、今村俊夫、石田久雄、石山融、林邦男、濱松政之助、長谷川時郎、新關國臣、西川幸衛、西村計雄、細田喜道、外岡梅太郎、陳洵、李梅樹、大城皓也、小田谷養次、岡田和夫、荻原孝一、川端實、川瀬成一郎、金子三藏、田村元劭、竹内英雄、孫一峰、中島龜三郎、奈古屋晴夫、灘波秀二、山川勇一郎、山野正、山本日

子士郎、眞木小太郎、藤田篤次郎、福富實、權雨澤、相澤武男、佐々木孔、宮地莊介、島崎政太郎、關口茂、末澤繁信、李鳳榮

京都工藝院

京都市東山區五條坂
五丁目電話六九八

昭和十二年一月創立。京都に於ける工藝の八團體、五條會、陶藝協會、絲工會、伸更會、京都漆藝會、金工作家聯盟、若潤社、工友會が京都工藝の革新を宣言して大同團結した工藝の總括的研究團體。其の結成に伴ひ右諸團體は解消された。

同三月京都美術館に第一回展開催。

〔常任幹事〕山鹿清華、清水正太郎

〔幹事〕岸本景春、皆川月華、伊東翠壺、米澤蘇峰、堂本五三郎、鈴木貞路、小合友之助、井上彦之助〔陶藝部會員〕伊藤翠壺、石田來之助、池田忠雄、井上憲

吾、井上素明、井野榮造、岩本克己、八田蘇谷、長谷川白峰、橋本隆、橋本龍岳、西川清翠、堀岡道仙、徳力孫三郎、中條昇、岡本爲治、奥西松雲、小川幸一、桶谷定一、小倉千尋、涌波蘇巖、河合善太郎、河合磊三、叶松谷、叶光夫、米澤蘇峰、吉田光雄、大丸北峰、瀧本蘇嶺、田中紫良、高木鳳子、谷口道仙、辻晋六、中谷小太郎、中村昌夫、中村幸節、村井瓶生、草加春陽、黒田清華、山本龍山、山内陶谷、山澤松篁、松下翠峰、福増阿山、福田力三郎、福井秀夫、藤井安祥、近藤悠三、國領素夫、寺池旬煥、手塚玉堂、淺見安兵衛、淺見隆三、淺見與志三、清水六兵衛、清水正太郎、清水祥次、北村祥鳳、木本多門、木村二瓶子、北村陽山、宮川香齋、宮下善壽、新開邦太郎、森野嘉光、清風興平、諏訪蘇山、末包中步、松本華〔染織部會員〕、石田玉英、今西良夫、今村冠峰、井關英夫、岩崎眞也、八田泰造、長谷川文平、馬場笛山、林雨染太田光嶺、小合友之助、川瀬茂次、龜山善博、横山英明、三宅更紗、田中初雄、田中貞造、田井修一、中村鵬生、長村華城、村田春緑、山鹿清華、山崎茶平、安武聖果、前田良三、福村健、悟道卯一、佐野多景夫、岸本景春、皆川月華、島田勝四郎、平尾周叟、穂山竹司、服部好雅〔漆藝部會員〕、井上彦之助、岩村貞雄、井上金花、番浦省吾、泰徳三、西澤玉舟、戸島光阿彌、堂本五三良、難野武司、奥村究果、梶山頑泉、高橋利雄、高橋表清

竹中微風、上原清、山田豊、迎田嘉亭、天野六郎助、水内平一郎、平石孝、鈴木貞路、山岸表壽、増山玉嶺、江馬長閑、湯淺華曉、三木玉眞〔金工部會員〕、今大路長光、西島逸四郎、大久保鼎湖、高瀬好山、高木治一郎、園保美、中山憲一、永峰秀作、村田信續、黒井光現、砂長伸古市垣太郎〔木竹部會員〕、岡本庄三、黒田宗傳、山本孝甫、我孫子古齊〔陶藝部準會員〕、飯田泰三、長谷川吉藏、林不折林圓山、吉田仁三郎、高木岩華、竹内勝治、野本正光、國松國三郎、東野春生、宮川己之助、宮本香齋〔染織部準會員〕、賀集正夫、宇野善之助、山田誠一〔漆藝部準會員〕、板倉不朽土、西澤桃也、尾關成章、大藏更生、迎田鐵一、梅村表雲、山野井藤四郎、前田勝、湯淺清二朗、森元伊造〔金工部準會員〕、磯松律太郎、長谷川達治、大串晃、苗村博、村上彦自朗上田鐵三、山中陽之輔、小森寸龍〔木竹部準會員〕、西川宗悦、田中保、中埜平一、藤澤伸一

京都工藝美術協會

京都府廳經濟部内

京都工藝界の各部門及各流派の作家を網羅して相互の聯絡統制を圖り京都工藝界の全面的進歩を裨補せんことを目的とす。事業として毎春京都市に工藝展を開催、勸奨を爲して新進優秀作家を世に紹介し、又新興工藝美術の發達を助長する爲に必要な施設をなす。機關誌發行。

〔名譽顧問〕中澤岩太〔會長〕鈴木信太郎〔副會長〕淺山富之助、田中博、評議員四十一名、會員四百五十名
同會展覽會規程抜萃

一、本會に於ける出品物の範圍は工藝美術的の製作品〔創作版畫を含む〕及圖案に限る
一、完成後二年以上を経過せるもの又は既に公開展示したるものは之を出品することを不得

一、本會に於ける出品者は京都府下在住者にして常設出品物の製作者に限る、前項の外自己の爲に製作せしめたる本協會の會員は製作者及圖案家と連名にて出品をなすことを得

一、鑑査員〔鑑査長を含む〕は京都工藝美術協會評議員會の推薦に依り會長之を囑託す
一、審査の結果優秀と認めたる陳列品の出品者に對しては賞賛を授與す

京都裝飾藝術協會

京都府伏見桃山宗和園内

昭和二年七月設立。織染續及其他の裝飾藝術の向上普及を圖るを目的とす。作品展覽會、互評會、講演及出版等の事業をなす。

〔總務〕澤田宗山〔理事〕箸尾清、狩野秀峰、岸本景春、山田江秀、井田宣秋、小林文齋、吉田玉城、樫田光可、其他會員三十八名、顧問六名

京都青年美術家クラブ〔綜合〕

京都市河原町御池上ル京友俱樂部内

昭和十二年五月創立。京都在住青年作家日本畫六十八名、洋畫三十六名、彫刻

四名、工藝二名に依り組織。相互批判を通じて懇親裡に京都美術界の革新向上に資せんとするもの。月例研究會の他、講演會開催。

〔幹事〕樋口富麻呂、北脇昇、井上和雄、政田英三、奥村厚一、川口金作、西垣輝西田信、戸島孚雄、木村廣吉

京都陶磁器工業組合

京都市東山區東大路東入電祇園一二五〇

昭和九年十二月設立認可。製作品檢査共同販賣、金融統制等の事業をなし同地方美術陶磁器の産業化を計る。

〔理事長〕中村孝藏〔副理事長〕淺見五郎助、藤岡幸二、組員五百八十五名

京都美術家クラブ

京都市河原町三條朝日新聞社京都支局内電上七二〇〇

昭和十二年八月設立。京都在住の美術家並評論家の親睦團體。毎月例會を開催〔理事〕石崎光瑤、宇田萩郎、山口華楊案本一洋、森守明、黒田重太郎、須田國太郎、松田尙之、清水正太郎、皆川月華〔幹事〕櫻井義臣、佐久間義雄

郷土會〔日〕

東京市世田谷區松原町二ノ七三〇

大正六年六月錦木清方門下に依り創立昭和六年迄毎年展覽會を催したが以後休止、現在は月一回錦木宅に研究會開催。

〔顧問〕 楠木清方〔幹事〕 渡邊泰次〔會員〕 伊東深水、石井滴水、西田西坡、島居言人、千島華洋、門井掬水、川瀬巴水、龜永吾朗、笠松紫浪、柿内青葉、山川秀峰、山田喜作、松田青風、小早川清、榎本千花俊、寺島紫明、櫻井霞洞

行人社(洋)

東京市淀橋區東大久保
一ノ三三七 岡田一馬方
電四谷九三三

昭和四年創立。會員の相互研究並に作品發表を目的とす。年一回展覽會開催。
〔會員〕 金原五郎、齋藤二男、安達眞太郎、中村節也、白石隆一、倉員辰雄、新道繁、佐藤章、水船三洋、井上脩、福原達朗、岡田一馬、小林榮

金城畫壇(日、洋)

金澤市兼六公園内
石川縣商品陳列所

大正十四年石川縣の畫家に依り組織。繪畫の研究發達を圖るを以て目的とす。年一回公募展覽會開催。初め中央より大家を聘して鑑査を行つたが昭和八年より同人に於て總べてを處理することとなつた
〔會長〕 青木外吉〔同人〕 市川昌徳、原田太致、八田一路、玉井敬泉、高光一也、田邊榮次郎、中村皓、武藤直信、安井雪光、山科杏亭、紺谷光俊、越田勝治、相川松瑞、淺川修三、澤村冬岳、新納琢川會友六十六名、特別會員四十六名
〔顧問〕 岡田三郎助、中澤弘光、荒木十畝

菊池契月、結城素明、吉田秋光、富田溫一郎〔研究部幹事〕 工藤作平

錦巻會

東京市麻布區東町四〇
三尾方 電三田四〇七

東美校圖畫師範科卒業生を以て組織。本部を東京に置き各地方に支部を設けて會員相互の親睦を圖ると共に技能教育の振興に資するを以て目的とす。毎月雜誌「圖畫と手工」發行。

〔會長〕 伯耆平田榮二〔理事長〕 三尾與喜藏〔理事〕 松岡正雄、三浦直政、倉田三郎、關口曉三郎、青山龍水〔幹事〕 高橋重雄、橋本與家

銀座美術協會(洋)

A 東京市世田谷區經堂町八九
八房野繁夫方
B 京橋區銀座四丁目、三和ビル四階銀座聯合會事務所内

昭和十一年二月房野德夫の發起にて發會。「藝術發表の合理化、藝術行動の實際化」を趣旨とす。同年四月銀座聯合會後援の下に銀座通兩側商店ウィンドウに洋畫展開催。

〔會員〕 井手坊也、房野德夫、島津一郎、石川滋彦、木下幹一、川端實、富川潤一、三輪孝、沼田一郎、大貫松三、島崎政太郎、副島秀生、黒田頼綱、眞木小太郎、須田壽、千葉衛、笹岡了一〔顧問〕 岡田三郎助〔街頭展覽助出品者〕 伊原宇三郎、辻永、寺内萬治郎、大久保作次郎、中村研一、牧野虎雄、安宅安五郎、柚木久太

清水良雄、高間惣七、田邊至、其他

銀濤社(洋)

東京市杉並區荻窪一
ノ二一 武内英男方

香川縣出身の在京洋畫家を以て結成。昭和七年十二月第一回展覽會開催。

〔會員〕 小林萬吾、猪熊弦一郎、今村俊夫、富田千秋、椿堂芳三郎、和田正夫、柏原覺太郎、川津啓吾、鎌倉靜江、龜井嘉治、笠井正子、吉田長次郎、武内英男、谷口國介、長尾徹、中村鐵、村上泰郎、沖津泰、熊野俊市、山田等、山尾薫明、藤川榮子、小林兵一、河野通暢、合田小三郎、齋田喬、三谷浩三、白川一郎、篠原薫、平山直隆、森英、氏家次郎、末澤繁信、灘波秀二

くろも展(洋)

東京市大森區田園調布
三ノ五七八 坂本正春方

昭和十年設立。文化學院美術部出身者の組織する洋畫の研究並發表團體。十二年十月銀座紀伊國屋に第四回展覽會開催。

〔會員〕 木下壽々子、黒田外喜男、鍋谷傳一郎、奥田まち子、近藤五郎、坂本不二、坂本正春

偶人社

東京市下谷區上根岸
四五 電根岸三二九

人形藝術の向上を計るを目的とす。昭和十一年二月第一回展覽會開催。
〔會員〕 佐野光輝、佐久間瑠市、所河春

陽、服部貞子、岡山さだみ、富可川多美夫、小杉幸三、津田安太郎、黒川多加詩〔顧問〕 有坂與太郎

華嚴社(日)

東京市下谷區谷中坂
町七九田口勝三郎方

昭和四年四月、故小堀桐音、小杉未醒荒井寛方等の主唱により栃木縣出身の在京日本畫家有志を以て組織。隔年東京及郷土に展覽會を催し、随時同人以外の同縣出身畫家を網羅せる作品展を開催し、後進の誘導に任ず。

〔理事〕 石川宰三郎、田口勝三郎〔會員〕 小杉放庵、荒井寛方、松本姿水、福田浩湖、關谷雲嶺、岡田蘇水、小林草悅、武井晃陵、河内舟人、大貫鏡心

月曜會(日)

東京市荒川區日暮里渡邊町一〇四〇 石川方
電下谷八四六六

大正九年一月創立。女流日本畫家の研究團體。

〔會員〕 石川丹麗、柿内青葉、長山はく、上野秀薫、淺見松江、原けん

建築學會

東京市京橋區銀座西三ノ一
電京橋一二三二、一二三八

明治十九年四月創立。同三十八年社團法人組織となる。建築に關する學術技藝の攻究發達を圖り併せて建築に關し社會の向上に資するを以て目的とす。事業と

して月刊「建築雑誌」及其他圖書印刷物の刊行、建築に關する調査研究、講演會見學會、展覽會の開催等を行ふ。

〔會長〕佐野利器、會員八千四百餘名

現代美術展覽會(日、洋)

東京市豊島區池袋二丁目現代美術社内

現代美術社主催の綜合展、純眞なる青年美術家の道場たらしむるを目的とす。

昭和十三年五月東京府美術館に第一回展開催。

同會第一回展規定拔萃

一、點數一人の出品點數は一部に付五點迄とす

一、出品料一部一人に付金一圓とす

一、部別第一部(東洋畫)、第二部(西洋畫)

一、大きさ出品畫の大きさは自由

一、審査員(第一部)山口蓬春、金島桂華、奥村土牛、宇田萩郎、中村岳陵、福田平八郎(第二部)金山平三、牧野虎雄、安井曾太郎

一、賞、特選 出品畫中優秀なる作品には現代美術賞(賞金一千圓)、特選其他を贈呈す

一、賣約 賣約成立の場合には手數料として價格の二割を本會に申受く、買約者は即時金額を支拂ふか或は價格の三割を手付金として申受くるものとし作品は閉會後受取らるべし破約の場合には手付金を返却せず

古伊賀復興會(工)

品川區下大崎一ノ九四 電大崎一〇五〇

大正十年三月發會。古伊賀燒の復興を目的とす。三重縣上野町字野畑に古代式

登り窯を備へ、會員組織に依り製品を分與す。又昭和十一年武州金澤町野島に登り窯を築造し、宮川香山指導の下に製作を行ふ。

〔會長〕川崎克

五月會(洋)

東京市世田谷區成城町六 田邊門樹方

昭和七年度東美校洋畫科卒業生有志を以て結成。年一回展覽會開催。

〔會員〕石川滋彦、濱口喬夫、田邊門樹、玉置弘三、山口忠助、圓城寺昇、廣田威安、廣田重男

工華社(工)

東京市小石川區宮下町六〇 深瀬嘉臣方

昭和六年設立。工藝の研究並に發表の團體。年一回展覽會開催。

〔會員〕長谷川昇、唐杉榮四、笠木敦次郎、内藤四郎、山口寅男、深瀬嘉臣、小柳今朝一、湯川豐、島崎正二郎、下暢

工畫會(工)

京都市中京區蛸薬師新町西人 梅原榮二路方 電本局一三二三

昭和九年創立。染織圖案家を以て組織し、工畫の創作に努む。毎年一回以上展覽會開催。

〔會員〕小合友之助、横山英明、中村鵬生、梅原榮二路、山田泰三、麻生辨次、佐藤久吉、平尾周聖

工藝濟々會(工)

東京市瀧野川區田端町四三八番取方

大正十四年三月創立。東西文化合一の基礎の上に新しき工藝美術を創造せんとす。隨時展覽會開催。

〔會員〕板谷波山、石田英一、六角紫水、飯塚琅玕齋、保坂光山、仰木政實、香取秀真、鹿島英二、河面冬山、桂光春、堆朱楊成、海野清、梅澤隆真、山本安曇、松田權六、佐々木泉堂、都筑幸哉、北原千鹿、清水龜藏、森川紫山

工人社(工)

東京市世田谷區深澤町四ノ五〇八 北原千鹿方 電世田谷三〇九一

昭和二年十一月創立。現代意識に立脚せる金工藝の創作研究を目的とす。年一回作品展開催。

〔同人〕大須賀喬、岡部達男、川本吉藏、鴨政雄、鴨幸太郎、各務鐵三、田村泰二村越道守、信田洋、山脇洋二、安井喜一、松原南海、福田三郎、佐藤潤四郎、北原千鹿〔準同人〕富田稔、古橋茂、後藤學

甲戌會(工)

東京市小石川區久堅町二七 野口光彦方

昭和九年創立。純美術としての人形及びこれに伴ふ工藝の研究、製作をなす。

年一回展覽會開催。

〔會員〕鹿兒島壽藏、野口光彦、堀柳女山川亨造、渡邊堅一郎、岡二郎

光風會(洋)

東京市杉並區西荻窪三ノ一二二 九太田三郎方電荻窪二九二三

明治四十五年創立。舊帝展系洋畫家の團體。各自の研究、後進の誘導を目的とす。毎春公募展開催。昭和十二年二月第二十四回展を東京府美術館に開催した。

〔會員〕石川欽一郎、石橋武助、服部亮英、遠山清、太田三郎、大野隆德、岡野榮、緒方亮平、大澤海藏、和田香苗、和田清、加藤靜兒、梶原貫五、河井清一、川合修二、角野判治郎、吉田苞、武内鶴之助、相馬其一、辻永、中澤弘光、中村研一、上野正之輔、山形駒太郎、山喜多二郎太、牧野司郎、小林萬吾、小林鐘吉、小林眞二、小寺健吉、小絲源太郎、江藤純平、寺内萬治郎、跡見泰、赤城泰舒、安達眞太郎、朝井閑右衛門、鮫島利久、鬼頭鍋三郎、清原重以知、南薰造、南政善、三宅克己、耳野卯三郎、清水良雄、鳥野重之、新道繁、平岡權八郎、森山肇杉浦非水、鈴木榮二郎〔會友〕石川滋彦池上浩、井手坊也、伊藤悌三、市ノ木慶治、橋口康雄、岩崎勝平、星野正三、土佐利豐夫、小川智、大河内信敬、花嚴巖栢森義、川端實、田中實一、田村一男、反町博彦、長原坦、黒田頼綱、山崎坤象山下忠平、山口猛彦、不破章、藤岡俊一

郎、木村八郎、水上信雄、白川一郎、神保和幸、杉村惇、須田勉太

同會第二十五回展出品規定拔萃

一、昭和十三年二月十六日より三月六日まで上野公園東京府美術館に於て開催

一、出品は油絵、水彩、版畫、圖案等他に公開せざるものに限る。貼數制限なし

一、出品者は出品手数料として一點に付金五拾錢づゝを振入と同時に納入のこと

一、地方出品者は二月二日迄に著するやう前記手数料を添へ芝罘新郷田町十九長尾健吉方光風會宛に發送のこと

一、出品畫中の優秀なる作品には光風會その他の賞金を贈與し、其作家には次回に二點迄無鑑査出品の特典を與ふ

一、賞約の場合は手数料として二割を本會に申受く

神戸創作圖案協會

神戸市神戸區榮町通五ノ三〇 關山金市方

昭和七年五月創立。商業美術の向上を目的とし、研究會展覽會等を開き又商業美術に關する相談に應ず。

〔會員〕梶原庄之助、木野内登、關山金市、南正光、渡邊正雄、土谷勇、能勢宜二郎

高知縣工藝協會

高知市九之内高知縣商工獎勵館内 電四八三

昭和十年三月從來の高知工藝協會を變じて現在の組織に改む。縣下工藝の發達を圖るを目的とし、意匠圖案の改善指導、展覽會、講演會の開催、他展への出

品幹旋販路擴張等を行ふ。會員は工藝作家及販賣者七十五名。

〔會長〕（縣經濟部長）渡邊廣（副會長）（經濟課長）北榮造、中島祐利

浩然社（日）

中野區榮町通二ノ二 高橋慶伸方

荒井寛方門下に依り組織。毎月研究會を開く。昭和八年六月第一回展開催、十三年六月第六回展に至る。

〔指導者〕荒井寛方（幹事長）高橋慶伸（幹事）笹沼寛祐、座間素賢、菊地公明、鈴木三朝、佐藤耕寛、廣原浩暉〔會員〕石澤孝輔、磯部白鳩、今田青宏、西木爲雄、常磐大空、大西郷島、渡邊明洋、神田好司、瀧澤直七、田中茂雄、深見月光、塚本政子、中村春泥、山下浩素、仙田青也、關口眞緒、木村光甫、井出岳水、中川博汀、佐藤一鳳、河内舟人、時田南鳳、六川水聲、松本渡、赤松惠國女、田山正臣、黑崎慧美

紅日會（日）

東京市下谷區谷中眞島町七 橋山孝行方

昭和十年故松岡映丘門下により創立。大和繪研究並發表機關。同年六月日本橋高島屋に第一回展開催。

〔顧問〕服部有恆（同人）林雲鳳、橋本明治、河村東次郎、横山孝行、中村德二、名古屋謙一、森村稻門

構造社（彫）

東京市豊島區池袋二ノ一〇九一 電大塚一八四四（呼出）

大正十五年九月立體藝術の研究及發表を目的として齋藤素巖、日名子實三の兩人を以て發會、昭和二年東京府美術館に第一回展を開いた。同年平井爲成の入會により洋畫部を設け、次で神津港人が入會した。三年構造社彫塑研究所を開設。

七年九月第六回展の終了後齋藤素巖退會を宣言、會内に紛擾あり、日名子實三、清水三重三が脱會し、一時同會解散を聲明したが、それを取消して事務所を神津方に移し、彫塑研究所を閉鎖した。八年齋藤素巖復歸し、九年會則を改め新會員、彫塑部三十三名、繪畫部二十一名を加へた。十年五月齋藤素巖帝國美術院會員となる。六月齋藤、濱田、陽三名を残し彫刻部全會員が一時退會したが内十名は留任。同月神津港人退會、又構造社幹事會の決議によつて繪畫部を解消した。十年九月寺畑助之丞退會。尙構造社彫塑研究所は十年より再開されてゐる。昭和十三年五月東京府美術館に於て第十一回展を開催した。

〔會員〕濱田三郎、荻島安二、河村龍興、中野五一、野村公雄、安永良徳、後藤泰彦（昭和十三年七月戦死）、後藤清一、齋藤素巖（會友）進藤武松、柚月芳、宮地寅彦
同社第十一回展規定拔萃

一、本展覽會は昭和十三年五月一日より廿日迄上野公園東京府美術館に於て之を開く
一、出品の種類は彫塑とし一般出品は貼數に制限を附せず
一、一般出品中特に優秀なりと認めたる出品に構造賞を授與する事あるべし
一、構造賞受賞者は翌年度の本會展覽會に無鑑査出品の特典を得
一、賞約せられたる出品に對し賞價の二割を手数料として本會に申受く

曠技會（彫）

東京市瀧野川區上中里町一七 菊池互道方

東京彫工會が大正十三年解散して日本美術協會に合併後、第七部の牙彫家が大家會を組織、後曠技會と改稱したものである。象牙彫刻の向上に努め展覽會を開催する。本邦唯一の象牙彫刻家の團體。

〔會長〕子爵錦小路頼孝〔委員長〕吉田宗齋〔副委員長〕森田漢己、中山昇民〔會計〕菊池互道、堀志光〔委員〕竹内士生、菊池親章、吉田尙秋、成川旭舟、松田道直、小林昇雲、中村鳳堂、藤田寛堂、安藤文雅、吉橋正風、矢澤寛秀、天谷美山、富岡璋雄、淺井弘雄、田中秀行、石黒行鳴〔正會員〕高木芳眞、雨宮道慶、稻田一郎、高橋義章、今井雅邦、時田樂民、宮澤良舟、山路直春、小宮龍堂、鬼澤丈二、曾村公佑、成川義秀、高橋寛民、鈴木壽川、荒木周光、石坂壽康、田中宗秀、早野玉山、石坂信綱、村松光玉、田中恒之、鈴木道海、大内漢水、石井道良、大内玉漢、松田春光、鈴木壽起、長谷川

照美、土屋蘇大、金田正廣、櫻井廣晴、溝呂木博之、志浦光廣、鹽田光玉、小林行光、關芳仙、富岡博延、三宅明濟、矢口秀之、鈴木廣陽、奥田浩堂、川俣善三郎、大野正信、柴田芳之、平賀明吟、原口雅年、原英次郎、山川保正、宮川照雄、野村光正、小川流水、大木東城

國畫院(日)

東京市小石川區雜司ヶ谷
町一二二 松岡映丘方

昭和十年九月故松岡映丘盟首となつて設立。我が民族精神の精華たる古典の素養に基いた新興藝術の創造を目的とす。事業として研究所を設けて國畫の技術的教習と學術的攻究に努め更に展覽會を開催して盟主同人の作品を發表する。研究所は當分松岡映丘の畫室を開放して之に充て又古典の研究に關しては洋畫家たると彫刻家工藝家たるとを問はず廣く同志を迎へる。又同人の官設展覽會への出品は個々の自由とす。昭和十二年四月第一回展覽會開催。(十三年三月松岡映丘逝去に際し、國畫院研究會を結成、今後は展覽會は、休止、研究團體として存続することとなつた)

〔同人〕松岡映丘(十三年三月逝去)、岩田正巳、服部有恆、長谷川路可、狩野光雅、吉田秋光、吉村忠夫、高木保之助、小村雪岱、遠藤教三、穴山勝堂

國畫會(洋、彫、工)

東京市品川區北品川三ノ三
二 益田方 電大崎三〇三六

大正七年一月小野竹喬、土田麥僊、村

上華岳、野長瀬晚花、礪原紫峰の五名は從來の文展の藝術にあきたらずとなし、竹内栖鳳、中井宗太郎を顧問として國畫創作協會を設立。爾來每年秋季に東京及京都に於て協會展を開催し來り又入江波光はじめ數名の若い作家を同人に推舉したが、大正十五年梅原龍三郎、川島理一郎の兩名を迎へて第二部を新設し更に富本憲吉、金子九平次を加へて彫刻と工藝美術を第二部に置いた。その後會の經營維持困難となり、昭和三年七月終に國畫創作協會は解散となつたが、第二部は其儘留つて、國畫會と改稱し、大橋幸吉、梅原龍三郎、川島理一郎、金子九平次、富本憲吉、山脇信徳の舊會員に新に高村光太郎、椿貞雄、河野通勢の三名が参加し、翌昭和四年「第四回國畫會展」と稱して洋畫、彫刻、工藝に互る公募展を開催した。爾來同展を繼續して昭和十二年第十二回展に及ぶ。十年五月帝國美術院改組に際し梅原龍三郎及富本憲吉は新帝院會員に任命され、同年六月川島理一郎は同會を脱退した。尙十二年四月從來の會員、會友制を同人制と改めた。同六月梅原龍三郎、富本憲吉は帝國藝術院會員に任命された。

〔同人〕(繪畫部) 青山義雄、池邊貞喜、梅原龍三郎、大森啓助、大谷房吉、仰木茂、仰木ゲルトロッド、大淵武夫、大橋孝吉、柏木俊一、河野通勢、久保守、庫田發、佐藤哲三、佐藤豊吾、清水多嘉示、立石鐵臣、土田文雄、辻愛造、椿貞雄、

中村博、野島照正、長谷川春子、平塚運一、藤田太郎、別府貫一郎、眞垣武勝、益田義信、宮田重雄、宮坂勝、村上巖、武者小路實篤、山田正、山村誠、山脇信徳、山下品藏(版畫部) 恩地孝四郎、川西英、平塚運一、ブノヰ、棟方志功、(彫刻部) 清水多嘉示、高田博厚、本郷新、明田川孝、柳原義達、山内壯夫(工藝部) 石井恒、仰木ゲルトロッド、奥村博史、富本憲吉、バーナード・リーチ、ビ・ハリハラン

同會第十三回展出品規定抜萃

一、本展覽會は東京に於て左記の規定に據り開催す(本年度は大阪に於て展覽せず)

一、本展覽會は何人と雖も自己の製作したる繪畫、版畫、彫刻、美術工藝品を出品することを得

一、會場及會期

東京府美術館(四月九日―廿四日)

一、鑑査審査は本會同人其の任に當る

一、陳列中の作品を審査し卓越せる作品に對しては國畫會獎學金を贈る

一、國畫會獎學金及褒狀受領者は翌年一回に限り出品の内一點を無鑑査とす

一、出品作品に對しては左記の手数料を要す
一點毎に金五十錢

一、出品作品は必ず本會所定の出品目錄及び出品手数料を添へ昭和十三年四月三日、四日の兩日前九時より午後五時までの間に上野公園東京府美術館内本會臨時事務所に納入せらるべし

一、地方出品は豫め三月二十五日迄に目錄及び上記の手数料を添へて東京市四谷區旭町二三(新宿貨物驛正門前)

加藤運送店(電四谷一四九〇番、振替口座

東京三九四二番)に著する様に送附せらるゝを要す(地方より會場宛に發送せらるゝものは受領し難きことあるべし)

一、出品作品費約に對しては出品者は賣價の一割但し工藝は二割を手数料として本會に收むべし

國際人形協會

東京市品川區南品川三ノ一
五一七 電高輪六四七〇

昭和十一年十一月發會。日本人形の國際的進出、人形製作技術の指導、人形の普及等を目的とす。

〔理事〕有坂與太郎、山村耕花、横山正三、成舞平兵衛、岡本綺堂

國風畫會(日)

東京市杉並區天沼
二丁目三一

昭和五年十一月創立。倭繪の進歩發達を圖るを以て目的とす。創立後間もなく同人一同の謹作に係る伊勢物語繪卷を陛下に獻上す。毎月研究會を開き又隨時作品發表を爲す。

〔會頭〕子爵入江爲守(幹事) 岩田豐曆(會員) 安田靫彦、伊東紅雲、磯田長秋、大坪正義、棚田曉山、津端道彦、川崎小虎、永井幾麻、前田氏實、小山榮達、荻生天泉、森村宜稻、公文蘆淵、兒玉輝彦

國民美術協會

東京市丸之内明治生命館
マールブル内

大正元年、第六回文展洋畫部の出品者懇親會の席上「美術全部門を包容する協會組織」の設立が發議され、翌二年三月創立總會を開催、森田太郎、黒田清輝、岩村透、松岡壽、和田英作の五名が理事となつた。同會は作家並美術關係者を以て組織し、繪畫（日本畫、洋畫）彫塑、建築、裝飾美術、學藝の五部を設置し、藝術家共通の利益擁護並美術の社會的普及を圖るを以て目的とする。既往に於ける主要なる業績は大正年間に於ける美術館建設、美術學校改革、裸體畫取締り、文展工藝部増設等の美術行政上の諸問題に關する政府當局への進言及數回に互る佛蘭西及獨逸現代美術展覽會の開催等で、尙前後十二回に互り本會員の綜合展を開催したが昭和三年以後中止となつた。

〔理事〕辻永、小倉右一郎、中村順平、森田龜之助、島田墨仙

黒牛會（洋）

東京市澁野川區西ヶ原
三六一 渡邊光徳方

昭和三年創立。毎年一回展覽會を開き油繪、水彩、版畫等に互る會員の創作を發表す。

〔會員〕五味清吉、前田慶藏、高嶋野十郎、小室孝雄、佐藤醇吉、渡邊光徳

黒樹社（工）

東京市豊島區池袋二ノ
一〇二六 松田權六方

美術家團體一覽

昭和六年結成。漆藝研究團體。毎年展覽會開催。

〔會員〕太田自適、岡本昇三、高井白陽、松田權六、福澤健一

黒色洋畫展（洋）

會期中事務所 東京市銀座
紀伊國屋書店美術部

昭和十年三月結成（昭和十三年一月解散）
〔會員〕野原隆平、小野里利信、清野恆内、山義郎、山本敬輔、山本直武

早苗會（日）

京都市銀座二條下ル
三宅風白方

故山元春舉の遺業を繼承す。年一回展覽會を開催し、又月次研究會、講演會を開く。

〔會長〕川村曼舟 〔參與〕山元清秀
〔評議員〕庄田鶴友、山下竹齋、玉舍春輝、久保田竹文、林文塘、高橋秋華、小村大雲、岡文濤、船川華州、伊藤溪水、植中直齋、山元櫻月、中島春鶴、小早川秋聲、岡田泰祥、柴田晚葉、古谷一晃

〔常議員〕玉舍春輝、山下竹齋、古谷一晃、堀江春露、室本一洋、武田鼓葉、齋藤紫山、三宅風白、中野草雲、佐々木春華、勝田哲（幹事）貴道草衣（副幹事）高木富三、齋藤和秀（會計）川俣公邦

〔副會計〕谷口英雄

佐賀縣工藝協會

佐賀縣經濟部商工課内

昭和十一年六月設立。縣特産工藝品の産業化並その海外的進出を圖るを目的とし、工藝資料の蒐集展示、作品展、競技會の開催、宣傳等を行ふ。

〔會長〕佐賀縣經濟部長

佐賀縣美術協會（日、洋、彫）

佐賀市興賀町精町
山口亮一方

大正三年岡田三郎助、久米桂一郎を指導者として、佐賀縣出身の美術同好者に依り組織。郷土美術の啓蒙と社會教化を以て趣旨とす。年一回公募展開催。會員三十五名

皐月會（工）

豐島區駒込町三ノ三
九九 山本安曇方

昭和十一年五月第一回展開催。一般工藝美術の新作發表を趣旨とす。毎年五月展覽會開催。

〔會員〕板谷波山、石田英一、飯塚琅玕、六角紫水、保坂光山、仰木政齋、香取秀眞、桂光春、鹿島英二、河面冬山、堆朱楊成、都筑幸哉、海野清、梅澤隆眞、山本安曇、松田權六、佐々木象堂、北原千鹿、清水龜藏、森川紫山

彩交會（日）

名古屋市中區熱田區熱田五ノ井六四 石川英鳳方

大正十年創立。名古屋市中區及名古屋出身にして京都に在住する京都繪畫專門學校卒業生を以て組織。舊名愛土社。昭和十一年七月現稱に改めた。

〔會員〕（名古屋部）織田杏逸、和田青雨、石川英鳳、大岩聚星、大竹敬康、喜多村麥子、山田政春、奥村華珪、小寺推古、青木草生、清水顯三、淺井正臣、塚本香湖、渡邊壽、松本竹根、鬼頭篁、白杵香穂、山本光文、鶴崎熊太、安藤美靈、豊島司城、野倉桃仙、菅沼寛（京都部）岩佐古香、佐藤空鳴、奥村紅穂、高井孤郎、廣本進、余語可山、新見虛舟、高木勇、服部文幸、大嶽知弘、横江正義

彩々會（洋）

東京市京橋區銀座五ノ四種田ビル
今口憲一方 電話銀座二五〇四、二五〇五

昭和十一年三月從來の「新寫實派」を解消、新に數名の會員を加へて結成。年數回作品發表を行ふ。

〔會員〕今口憲一、一木萬壽三、岡本貞四郎、三芳悌吉、松島正一、高坂元三、及川文吾、足立暢

埼玉縣工藝協會

埼玉縣廳商工課

昭和九年七月創立。縣下工藝的産業の發達を圖るを目的とし縣下の業者約三十名を以て組織。展示會、講習會の開催、出品斡旋、意匠圖案の配布等をなす。

〔會長〕（經濟部長）遠山信一郎（副會長）（商工課長）鈴木直人（幹事）辻野秀夫、大成常太郎、村上辰夫

在野洋畫五團體懇話會

大森區田園調布三ノ三五一電
田園調布二三四六足立源一郎方

昭和十二年二月結成。「日本畫壇の革新發展を期し諸事情の研討、批判協定」を目的として二科會、獨立美術協會、國畫會、新制作派協會、春陽會の五團體に依り組織された。

〔代表者〕(二科會) 鍋井克之、東郷青兒(獨立美術協會) 中山巍(國畫會) 益田義信、宮田重雄、福島繁太郎(新制作派協會) 猪熊弦一郎、佐藤敬、三田康、小磯良平(春陽會) 足立源一郎、木村莊八

挿繪俱樂部

赤坂區永川町四六
電 赤坂三五五

昭和十一年五月創立。挿繪の向上並挿畫家の權利擁護を以て目的とす。同月著作權審議會に著作權法中に挿繪に關する條文を加へられ度旨の決議書を提出した。

〔顧問〕 錦木清方、小杉放庵〔理事〕 石井鶴三、岩田專太郎、林唯一、木村莊八〔事務〕 寺本忠雄、吉田貫三郎、山本敏

同俱樂部規約抜萃

總則

一、本會は挿繪俱樂部と稱す

一、本會は挿繪畫家の結束と特に作品の向上と進歩と發展とに努力を拂ひ更に各自の權利擁護を以て目的とす

事業

一、本會は左の事業を行ふ

A 挿繪畫家に關係ある法規の改善及び其の調査研究、B 會員相互及び文藝家との作品上又は親睦の意味の會合、C 挿繪圖書館の設置及び經營、D 研究會、E 展覽會、F 挿繪の設定、G 機關紙發行及び出版、H 挿繪の仲介、I 其他

細則

一、本會は新聞雜誌社を初め文藝家との連絡機關として左記を表明す

一、挿繪は畫家の創作なり

二、挿繪はその一部なりとも他の出版物その他に利用する時は挿繪作者の諒解を得るに非ざれば之を爲すを得ざること

三、挿繪執筆の際、各自に本文作者及新聞雜誌社等との間に版權又は原畫の返還、或は原畫の保存その他に關して協定するものとす

四、作品向上の見地から製作に要する時日を見越し原稿の廻付を要求する事

一、本會機關紙は月刊とし「挿繪」と稱し會員の作品及び參考作品並に挿繪に關する記事を掲載し更に廣く年鑑事項をも載録し、會員及文藝家、新聞雜誌社等に寄贈し一般に發賣す

一、連續挿繪畫報中本文作者又は新聞、雜誌社等の都合にてその挿繪畫家を變更する場合本會々員にしてその後繼を依頼されたる時は會員相互の親睦を計る爲之を拒絶する事

一、會員の作品又はその他に關し法律的事項の委任により諸般の交渉に當る。その着手の時、法律顧問の査定金を納入するを要す。之により會員が利益を得たる場合はその利益の内本會一割、法律顧問二割の配當を納入する事とす

一、本會に入會せんとする者は會員三名以上の紹介により理事會の決を俟つものとす

讃岐美術協會(日、洋)

高松市兵庫町古木堂
本店内 電二七〇一

昭和四年創立。會員相互の研究に努め地方美術の向上發達を圖るを目的とす。毎年一回公募展を開催し、講習會、寫生會等を行ふ。昭和十二年二月高松三越に第八回展開催。

〔會員〕 井川敬逸、小西光雄、高橋正三、谷口國介、神内正芳、岡田季雄、黒田純二、小川誠一、高木靜雄、高尾雄次、中村重幸、本多一郎、藤田四郎、河部基一、平井爲成

三春會(洋)

東京市世田谷區玉川奥澤
町二ノ六六六 大澤方

昭和三年度東京美術洋畫科卒業生を以て組織。十二年五月東京府美術館に第四回展開催。

〔會員〕 岩田芳助、伊勢幸平、波多野勝好、二宮不二磨、和佐良顯、大澤昌助、奥村義雄、加藤顯清、飯島誠二郎、勝見謙信、田中致美、田中孝夫、田淵巖、竹田讓、中井惣之助、野崎龍雄、山村孝太郎、山口猛彦、安田岩次郎、丸山清六、松原勝、福島順之助、小松原義則、天野武吉郎、淺井景一、佐藤文雄、佐藤功、佐川源治、三木辰夫、加藤久幹、原田直康、關谷陽、杉山榮、鈴木重成、林清

三條會(日)

京都市下京區白川筋
三條南 伊東陶山氣附

「京都陶藝の故地三條栗田口に依つて作陶に精進する」陶工六名を會員とする。展覽會を開く。

〔會員〕 伊東陶山、伊東信助、楠部彌一、道林俊正、宮永東山、宮永友雄

珞々會(日)

東京市日本橋區高島屋美術部

高島屋美術部の主催する日本畫發表の團體。昭和九年十二月第一回展開催。

〔會員〕 西山翠嶂、錦木清方、菊池契月、西村五雲、松岡映丘(十三年三月逝去) 結城素明、上村松園

産業工藝振興會

大阪市住吉區相生通
二ノ三七電 戎一九四

大阪府工業獎勵館助成の下に産業工藝に關する調査、指導獎勵、海外紹介を行ふ。

〔理事長〕 藤田九卓〔理事〕 長島治三郎、金田春匡、佐野一致、上田儀一

産業美術振興運動

廣告美術作品展覽會

大阪市北區堂島大阪
毎日新聞社事業部内
電北五五〇〇

大毎事業部の主催する産業美術振興を目的とする展覽會で、年一回新聞廣告圖

案竝にボスター圖案の縣賞公募による展覽會を開催す。昭和十二年十月第七回展を行つた。

十二年度同展募集規定抜萃

一、應募作品の大きさは新聞廣告圖案にありては最大限を一ページ最小限を全六段の縦半分または全三段とす

一、應募作品は圖案、寫眞、漫畫の何れかを選擇するもこれらを適當に配合するも任意にしてその枚數に制限を設けず

(募集作品種目) あくまで實用を目的とする新聞廣告圖案(黒一色または一部彩色)

彩色の範圍は縦八寸四分、横四寸一分(曲尺)に限る

(課題) 本紙五月十五日紙上より順次掲載する參加廣告主提出のものによる

(展覽會) 昭和十二年十月中旬、大阪、名古屋、東京の三大都市に於て開催の豫定

(賞品) 應募作品は審査の上課題各商品毎に入選作品を決定入選狀並びに大毎賞を授與し特に優秀なるものに賞金(細目略す)を呈す

(審査員) 奥村信太郎、霜島正三郎、村本福松、堂本印象、齋藤興里、武田榮、北尾鐵之助、世川憲次郎

燦木社(日)

東京市板橋區中村町三ノ六二二 東谷桃園方

大正十五年五月創立。東美校圖畫師範科出身の在京日本畫家有志を以て組織。年一回展覽會開催。

(會員) 穴山勝堂、山田義雄、東谷桃園、松垣龜夫、新田梨花、小林澄心、福宿一穂、中居良次、藤原芳春、大島正記、伊藤昇、山田武

四 櫻 會(洋)

東京市世田谷區代田一ノ六四四 橋本八百二方

昭和四年度東美校洋畫科卒業生を以て結成。從來「一會」の名稱の下に親睦團體を組織してゐたが昭和十二年四櫻會と改稱。十月其の第一回展を銀座三越に開催した。

(會員) 橋本八百二、刑部人、渡邊友次郎、吉井淳二、田邊陸夫、南郷梓、中村節也、宇野千里、倉員辰雄、久保守、山田秀雄、松村菊麿、福原達朗、福井謙三、手島貢、荒明實、安藤高久、佐藤一章、齋田捷三、齋藤二男、水谷浩、水船三洋、宮内秀雄、島村三七雄

四 元 莊(洋)

本郷區駒込神明町四〇四 電 駒込 二七七二

昭和十一年十月鈴木千久馬門下に依り組織。

(莊首) 鈴木千久馬 (同人) 石塚三郎、西山眞一、横田仁郎、中居定雄、井上三綱、岡田一馬、大井基光、大沼靜巖、倉員辰雄、福岡繁樹、福迫徹郎、安藤信哉、齋藤二男、新道繁、森田咏吉、鈴木敏、柏木治子

四 行 會(洋)

東京市豊島區池袋四ノ四四五 齋藤福藏方 電 大塚 二五〇一

獨立展所屬の作家四名を以て組織、年

一回作品發表を行ふ。

(會員) 竹中三郎、中尾彰、佐藤英男、池田金之助

滋賀縣工藝協會

大津市東浦縣物産陳列場 電 大津 一四五七

昭和十年六月設立。縣内在住の工藝品製作者並關係者を以て組織。縣下工藝の振興、技術の向上並産業的進出を圖るため懇話會、作品展覽會、講演會、作品互評會、視察旅行等を行ふ。昭和十二年展に於ける主なる事業 一、商工省工藝展出品 一、商工省輸出工藝展出品 一、作品展覽會の開催。

(會長) 滋賀縣商工水産課長、會員約六十名

滋賀圖案會

大津市東浦縣物産陳列場 電 大津 一四五七

昭和三年創立。滋賀縣内各指導機關に於ける圖案關係技術者を以て組織。縣内物産及工藝品の意匠圖案の向上を計るため展覽會、講演會の開催、現地指導視察旅行等をなす。昭和十二年度に於ける主なる事業 一、中部日本商業美術聯盟加盟並に展覽會の出品 一、全日本商業美術展出品 一、縣工藝品陳列會に對し出品 一、定期研究會の開催

(會員) 深澤和美、村瀬眞治、新井武治、廣瀬義景、坪井明、藤田幸助、松宮寛明、井口俊夫

自由學園工藝研究所

東京市豊島區雜司ヶ谷六丁目

自由學園卒業生を以て昭和五年創立。工藝品の創作並に發表をなし、八年より東京、大阪、名古屋、神戸等に展覽會を開催す。

自由美術家協會(洋畫、其他)

東京市品川區上大崎長者 九二七〇 長谷川三郎方 電 大崎 一五二四

昭和十二年二月結成。同七月第一回展開催。趣旨「純粹にして積極的な藝術意志によつて前進せんとする眞摯なる美術家の大同團結により、各人の藝術の自由なる發展と時代の藝術精神の振興とを期す」年一回公募展開催。

(顧問) 今泉篤男、外山卯三郎、大口理夫、川路柳虹、龍村謙、内山義郎、植村鷹千代、佐波甫、四宮潤一、森口多里、(會員) 長谷川三郎、濱口陽三、津田正周、村井正誠、矢橋六郎、山口薫、荒井龍男(會友) 西田信一、戸田定、大橋城小野里利信、難波田龍起、野原隆平、吉見庄助、金煥基、平岡潤、富岡宏資、山田光春、植木茂

同展規則抜萃

一、本展覽會ニ出品シ得ル作品ノ種類ハ左記ノモノトス A 油繪、B 水彩、C 版畫、D 素描、E コラージュ、F オブジェ、G フォトグラム

一、本展覽會ニ出品シ得ル大キサハ左記ノ如シ

A 會員 一人合計 油絵 二百號以内
B 會友 一人合計 油絵 百號以内
C 立體作品ハ十二立方米(2×2×3) 以内
D 一般公募作品ハ一人五點以内
一、本展覽會開催都市ニ於テ既ニ發表シタル
作品ハ出品スルコトヲ得ズ

時習園(工)

京都市東山區五條橋東
四丁目 淺見五郎助方

大正九年十一月創立。嶄新なる意匠圖
案の創作並に其工藝品への應用を研究す
るを以て目的とし、年一回作品發表を行
ふ。

〔顧問〕中澤岩太〔指導者〕霜島正三郎
〔會員〕澤田宗山、稻葉七穂、淺見五郎
助、井本米泉、小川文齋、浮田樂徳、中
谷小太郎、池田泰山、淺見隆三、米澤蘇
峰、井田宣秋、平井香秋、樫田光可、平
野泰三、西澤玉舟、永野金泉

七絃會(日)

東京市日本橋三越美術部

昭和五年創立。毎年一回作品發表をな
し、十二年十一月第八回展開催。

〔會員〕鋪木清方、小林古徑、菊地契月
安田叔彦、前田青郎〔物故會員〕平福百
穂、速水御舟、土田麥僊、西村五雲

七彩會(洋)

東京市大森區馬込町東三
ノ八二二 長谷川春子方

昭和十一年一月結成。各派七名の女流
作家の組織する洋畫發表團體。同十二年

四月、第二回展を開催した。

〔會員〕橋本はな、藤川榮子、三岸節
子、佐伯米子、遠山陽子、島あひひ、長
谷子川春

七人社(圖)

東京市牛込區東五軒町二
岸秀雄方 電牛込四二七

大正十三年杉浦非水に師事する七名に
て發企、昭和元年東京三越に第一回創作
ボスター展開催。圖案研究、商業美術、
裝飾美術、挿繪、一般圖案等をなす。

〔會員〕岸秀雄、岸信男、野村昇、新井
參夫、關口謙輔、小池巖、金丸重嶺、原
萬助、須山浩、田中富吉、毛利滋、小川
金重、金田德郎、野依健、前島誠一

漆工藝社

東京市王子區豐島町七三二

昭和八年太齋春夫、漆膜、漆繪膜蛇皮
漆加工法の研究を完成し、翌年特許許可
を受けたが同年九月小澤秋成を主宰者と
して同社を結成し事業を起す。漆工の勃
興及び建築、家具工藝等各方面に對する
漆の進出等に努む。十年十一月東京府美
術館に第一回展開催。

〔主宰者〕小澤秋成

静岡縣工藝協會

静岡市追手町
静岡縣商工課内

昭和九年九月設立。縣内に於ける工藝
の改善發達を圖り併て相互の親睦並に連

絡を保持するを目的とす。工藝に關する
調査研究、展覽會、品評會並講演會等
を行ふ。

〔總裁〕静岡縣知事〔會長〕静岡縣内務
部長

静岡縣美術協會(綜合)

静岡市江川町一
電 一四九六

地方美術の向上を圖る目的を以て昭和
九年十一月静岡縣出身並在住美術家を以
て組織。年一回静岡市に於て日、洋、彫
工の四部に互る綜合公募展を開催。昭和
十二年秋は第三回展開催の豫定であつた
が、恤兵展覽會を開催、第三回展は十三
年春に延期した。

〔總裁〕静岡縣知事〔會長〕尾崎元次郎
〔常任幹事〕高島茂雄

同會第三回展規則抜萃

一、本會の展覽會は左の四部分に分つ
第一部(東洋畫)、第二部(西洋畫)、第三
部(彫刻)、第四部(工藝)

一、本會第三回展は昭和十三年五月廿日より
廿四日迄静岡縣教育會館に開催す

一、本會展出品は會員作品の外一般公募をな
すものとす

一、公募作品は會員中より審査員を定め之を
鑑査す

一、第三回展覽會審査員は左の十氏とす

(第一部) 中村岳陵、土佐光一(第二部) 曾
宮一、赤城泰舒、小栗哲郎(第三部) 澤
田晴廣、太田重範(第四部) 芹澤銑介、藤
村彦四郎、新井宇作

一、出品點數は會員は一人一點但し本年より
出品料不用。會員外出品者は出品料として

一點に付き金一圓也を申受くるものとす
(但し點數は五點以内)

一 審査の結果特に優秀と認めたるものは會
員には知事賞市長賞を一搬出品者には静岡
縣美術協會賞を授與す

一、美術協會賞授與者は翌年度の本展覽會に
無鑑査出品の特典を得

實在工藝美術會

東京市本郷區駒込林町一五五
高村豐周方 電駒込一八二二

昭和十年十月創立。從來の帝展第四部
の鑑賞本位にのみ向ふ傾向にあきたら
ず、「工藝の實在性」に新境地を開拓す
るを目的とす。十一年度より春季公募
展、秋季同人展開催。

〔會員〕豐田勝秋、河村喜太郎、吉田源
十郎、高村豐周、内藤春治、山崎覺太郎
丸山不忘、新井謹也、佐藤陽雲、木村和
一、廣川松五郎

芝浦工藝會

東京市芝區西芝浦一
東京高等工藝學校内

東京高等工藝學校出身者及び同校關係
者を以て組織。會員相互の親睦を計り併
せて本邦工藝の發展に資するを目的とす
年四回會報發行。

〔會長〕鎌田彌壽治〔幹事〕杉山豐祐
益田森治、星野幸衛外十三名、會員一四
三五名

島根縣工藝協會

松江市殿町島根縣物產
獎勵館内 電四四五

昭和九年七月創立。同縣の工藝振興を計るを目的とす。縣内の工藝家、圖案家及販賣業者等を以て組織し、工藝品及意匠圖案の調査研究、展覽會、競技會の開催又は助成、内外展への出品幹旋等を行ふ。昭和十二年度に於ては、八月松江市に、十一月東京市に工藝展開催。又九月廣島市に行はれた中國四國工藝展に参加出品した。

〔總裁〕島根縣知事〔會長〕同縣經濟部長

下 蒞 會 (日)

東京市牛込區若宮町
二九 川合玉堂方

明治三十二年川合玉堂門下長流畫塾々生により組織。毎月一回定期研究會を開催し、又臨時展覽會を開催す。

〔理事〕長野草風、菊池華秋、松本泰水、佐々木尙文、今中素友、兒玉希望、大島佳山、伊藤響浦

主 線 美 術 協 會 (洋、彫)

(繪畫部事務所)豐島區西巢鴨
四ノ八八 高間惣七方 電大塚
四〇六一(彫刻部事務所)澁谷
區代々木初臺町五九四安藤照方

昭和十一年三月東京會員高間惣七、橋本八百二、堀田清治等は「煩雜な團體的雜事から離別して一意各個の純粹な藝術的精通に全力を盡すことに決心しました」と聲明し、同會を脱退、主線協會を結成した。翌月安藤照等の組織する彫塑團體塊人社と合して名を主線美術協會と

改む。同會は「藝術の科學の獲得」を主唱し、その團體の機構をして「時代の必要に依る繪畫形體の創作」に對する組織的研究會たらしめ、その研究成果の「發表機關としての展覽會」を開催する。十三年三月第二回公募展開催。

〔會員〕(繪畫部)岩瀬富士雄、市川加久一、井上自助、橋本八百二、堀田清治、土肥原三千喜、大川武司、大崎泰、高間惣七、高野眞美、染木煦、副島秀生、中尾達、牛島憲之、上田健一、山野正、益山雅衛、前田喜男、房野德夫、小出廣通、手島貢、酒井嘉久、溝江勘二、三輪孝、三井正登、水澤決、三宅策郎(彫刻部會員)泉谷喜一郎、長谷川樹藏、堀江越、小笠原貞弘、大屋義昌、渡邊徹、田中林藏、中野右左人、成瀬藤治、村田勝四郎、松田尙之、藤澤古實、古屋太郎、小室達河内山賢祐、岸崎夜光、安藤照、荒井德亮、三澤寛

同會第二回展公募規定拔萃

- 一、出品點數は一人三點以内とす
- 一、出品者より出品手数料として金壹圓也申受く、手数料は如何なる理由あるも返却せず
- 一、審査主任 繪畫部 高間惣七、彫刻部 安藤照
- 一、出品作品賞約の場合は手数料として一割を申受く
- イ 繪畫部審査優待方針
- ロ 鑑査は作家の日常の畫生活に重點を置く
- ハ 出品者の製作態度に接する目的の爲め一例としては其の作家の意見を聴く事もある
- ハ 個々の作品に對しては未完成なるも進歩

的にして將來性ある作品は特に協會の性質上、出來得る限り此れを認む
ニ 出品者は研究會に出席する事を得、相互の研究に協力を得
ホ 優秀なる作家を會員として推薦す

朱 葉 會 (洋)

東京市澁橋區下落合一ノ五四〇
大久保百合子方 電大塚四〇三七

大正七年創立。婦人の洋畫研究團體。一回公募展開催。昭和十二年五月日本橋白木屋に第十九回展開催。

〔會員〕飯守米子、長谷川春子、土肥正枝、遠山陽子、小寺菊子、大久保百合子、大久保爲世、龜高みよ子、吉田ふじを、谷島豐子、谷貞子、中川幸江、八星三代秋元松子、木下壽々子、喜多春子、宮崎美喜、鹽川時子、清水信子、平岩夏子、伊佐エツ子、一木徵子、徳川禮子、高倉孝子、仰木ゲルトロード、黒瀬雅子、山口葉子、町田典子、櫻井その子、島田鉦子、下田愛子

聚 工 會 (工)

東京市豐島區雅司ヶ谷町一ノ三四
七、磯矢阿伎良方 電牛込二二三四

昭和八年解散の凸凹會々員を中心に昭和十年六月結成。工藝各科作家の集團。相互の研究並親睦機關。

〔會員〕磯矢阿伎良、武樋貞波留、田中武雄、多田茂吉、宮井健平、三好弘、清水巖、森羅一郎〔地方會員〕八井孝二、大原彰、武田武文、松崎福三郎、小泉清一、安倍郁二、高見九藏、山本達次〔客

員〕安藤春治

十 年 社 (日)

東京市澁橋區下落合四ノ一六八八 石田粧秋方

大正十年度東美校日本畫科卒業生に依り組織。昭和十年五月銀座紀伊國屋に第一回展開催。

〔同人〕池田幸太郎、中井三介、石井喜三郎、平岩三陽、石田粧秋、小野踏青、畠山錦成、山崎良夫、長谷川路可、柳晴一、花村晃觀、中村青以、榎本千花俊、遠藤敦三

春 光 會 (洋)

兵庫縣武庫郡本山村田中
二四五 伊藤慶之助方

春陽會、新興美術展の出品者にして、伊藤慶之助の指導下にある洋畫家の集團。昭和九年以降毎年大阪、神戸に展覽會開催。會員十九名

春 虹 會 (日)

東京市日本橋三越美術部氣附

昭和十年京都在住の畫家十七名に依り組織。毎年一回東京、大阪の三越に展覽會開催。

〔會員〕石崎光瑤、西山翠嶺、堂本印象、小野竹喬、川村曼舟、竹内栖鳳、中村大三郎、菊地契月、上村松園、宇田萩邸、福田平八郎、榊原紫峰、山口華楊、案本一洋、金島桂華、徳岡神泉〔物故會員〕富田溪仙、土田麥僊、西村五雲

春臺美術展(洋、工)

東京市本郷區春木町二ノ
二八 本郷繪畫研究所内

岡田三郎助を會長とし本郷繪畫研究所關係者を以て組織する繪畫、彫刻の展覽會。大正十年同研究所有志に依り赤洵社繪畫展が組織され大正十三年迄四回の展覽會を開いたが、研究所出身者の成長と擴大に因り同十四年之を解散し、改めて本郷繪畫展を組織し、會長に岡田三郎助を、副會長に片多徳郎を推して同年より毎春一回展覽會を開催、昭和五年「春臺美術展覽會」と改稱して今日に至る。昭和十三年三月第十三回展開催。

〔會長〕岡田三郎助 〔副會長〕大隅爲三〔顧問〕和田三造、辻永、太田三郎、齋藤五百枝〔常務委員〕笹鹿彪

春泥社(日)

京都市富小路二條南 福村方

昭和十二年五月結成。關西の婦人日本畫團體。昭和十二年六月京都丸物に第一回展開催。

〔會員〕生田花朝、丹羽阿樹子、大日三世子、梶原緋佐子、藤本園子、小松美彰、秋野不矩、木谷千種、三谷十糸子、廣田多津

春陽會(洋)

東京市杉並區和田本町八三二
木村莊八方 電中野四二四七

大正九年秋、藝術の自由を唱へて日本

美術院元洋畫部を脱退した小杉未醒、山本鼎、倉田白羊、森田恒友、長谷川昇、足立源一郎の六名は同十一年一月、新歸朝の梅原龍三郎を加へ、更に九名の客員を迎へて同會を創立した。發會に際し「春陽會は從來屢々見たる如き既成會への社會的對抗として興らず、單なる藝術家の心を以て因縁相熟したるものです」と聲明した。翌年五月上野竹之臺陳列館に第一回展を開き、爾後毎年春季に公募展を開催し、又東京開催後大阪、名古屋等に地方展を催して居る。昭和四年春陽會研究所を開設、その指導には會員が當る。昭和十年帝院改組の結果小杉放庵新帝院に對し第一次の聲明を發表、更に九月に至り「帝展第二部開催に對する試案」を進言したが、此の進言は帝院に容れられず、十一月同院總會後に至り、新帝展は「本會の理想と反する」爲之に參加せず「春陽會は依然純粹在野團體として行動」するとの意味を聲明し、小杉放庵は帝院會員を辭任した。而して山本鼎、山崎省三の兩名は向後帝院側へ移ることになったので同會を離脱した。同十一年三月、會員長谷川昇、岡本一平退會。同十二年六月小杉放庵は帝國藝術院會員に任命された。同十一月、研究所を閉鎖す

一政、長谷川潔、水谷清、横堀角次郎、若山爲三〔會友〕伊藤慶之助、岩田榮之助、上野春香、遠藤典太、小栗哲郎、大澤鉦一郎、鬼塚金華、加山四郎、川端彌之助、兼平英示、眞田久吉、田中咄哉洲、土屋義郎、藤堂奎三郎、久泉共三、森田勝、楊佐三郎

同會第十六回展規定拔萃
〔鑑査〕出品畫は當會々員之を鑑査す。鑑査公開の意味を以て新聞及美術雜誌記者之に立合ふ
〔審査〕陳列中の作品を審査し、春陽會賞金を贈るべし
〔出品手續〕當會に出品せんとする者は出品目錄に鑑別手續料を添へ四月三日四日の兩日中に上記會場當會受付に差出さるべし。既に本邦に於て發表したる作品は出品することを得ず。出品畫は陳列に適當なる裝置をなし、各裏面に目錄通りなる番號、畫題、價格、氏名、居所を明記せらるべし、目錄及裏面貼附用紙は當會印刷のものたるべし、出品畫を受領したる時は領り證を交付す。地方の出品者は出品目錄に鑑別手續料を添へ便宜上三月二十八日迄に到着の豫定を以て東京市芝區新橋田町十九番地長尾德吉商店宛に發送せらるべし。出品は一般繪畫(素描、版畫を含む)
〔鑑別手續料〕鑑別手續料は一點に付五拾錢とす
〔出品畫に付ての約束〕出品畫は鄭重に保管すべしと雖も不慮の損害に就ては當會賠償の責に任する能はず。陳列品を撮影し複製する場合すべて當會の承認を要す。賣約品價格の一割を當會に收む。陳列畫買約者は即時に代金を支拂ふか又は價格の三分一以上を手付金として前納せらるべし。破約の場合と雖も手付金は返却せず。買約

女性人形同人

東京市荏原區戸越一二五五

昭和十一年九月發會。趣味涵養のための人形製作を目的とし、年一回作品發表展を開催するほか隨時懇談會、講習會を開く。

〔顧問〕今井邦子、長谷川時雨、岡本かの子、與謝野品子、有坂與太郎、會員四十六名

女紳會(洋)

東京市中野區鷺宮五四〇七 三岸方

昭和九年創立。主として獨立展出品の女流作家を以て組織。春秋發表展開催。

〔會員〕榎本友子、東山紗智子、廣江ミチ子、本多京、川路美砂子、三岸節子、峰村リツ子、成瀬田鶴子、長尾照子、織田彩子、小川マリ子、大内のぶ子、岡田春魚子、佐川敏子、櫻井濱江、鈴木昌枝

如水南畫會

東京市神田區一ツ橋如水會館内

昭和七年六月創立。如水游心畫談會と稱し如水會員及其家族を以て組織。岸浪

百師居を講師として日本文人畫の創意に努める。同十年二月銀座伊東屋に第一回觀覽展開催。十一年四月如水南畫會と改稱。會員三十名

昭和工藝協會

京都市岡崎公園京都市商品陳列館内

昭和二年創立。京都在住の各部門の工藝作家三十五名を以て組織。毎年京都及東京に於て展覽會を開催。

〔會長〕中澤岩太〔總務〕村上宇一〔理事長〕澤田宗山

昭和工藝美術展覽會

東京市日本橋高島屋美術部

昭和九年三月創立。舊帝展特選級の作家の集團。會員の制作發表、工藝古美術の研究等をなす。同年東京高島屋に於て第一回展を開催し、以後年一回展覽會を開く。

〔會員〕伊藤隆光、二橋美術、大須賀喬、各務鑽三、香取正彦、吉田醇一郎、高野松山、長野埜志、村越道守、海野建夫、信田洋、山本自燭、北原三佳、宮之原謙三、田村自芳

昭和美術會(洋)

東京市赤坂區青山南町六ノ一〇
八、平井武雄方 電青山五五七九

昭和三年五月結成。會員の自由製作發表、相互研究を目的とす。年一回展覽會開催。

〔會員〕蘆原曠、平井武雄、小林茂、藤

康三、西村久二、野村百合子

昭和みづゑ會

橘濱市神奈川區岡野町一三二中央圖書手工研究所内 電神奈川六二五

昭和十年創立。水彩畫の振興發達を目的とす。東京其他に於て臨時展覽會、講習會、コンクール等を開催、現在全國各地に會員、會友併せて二百四十八名を擁す。昭和十二年六月第一回展開催。

〔主なる會員〕山口敏男、桂龍雄、青野馬左奈、東本春水、古川弘、野村房雄、茅原哲衛、石野隆

上社會(洋)

東京市豊島區駒込一ノ二八 藤岡一方

昭和二年度東美校洋畫科卒業生に依り組織。年一回展覽會開催。

〔會員〕林炳東、張秋海、瀨水龍、金貞探、譚連登、都相鳳、犬丸順衛、池田幸太郎、石井清美、猪熊弦一郎、荻野映彦、染木照、加山四郎、田村義夫、高橋弘二、大館健三、中西利雄、牛島憲之、矢田清四郎、深井修次、藤岡一、小堀四郎、近藤啓二、小磯良平、水上信雄、島野重之、白井次郎、E高榮聰、森寅雄、森達雄、菱田武夫、橋口康雄、高野三三雄、岡田謙三、青山襄、高嶋功、瀧波恒雄、中川規矩磨、大月源二、杉浦俊雄、永田一脩、荻須高德、山口長男、太刀川英次郎

伸更會(工)

京都市新京阪沿線長岡停留所前 前田良三方

昭和八年十二月京都市立美術工藝學校圖案科出身者により組織。十一年十二月京都工藝院に合同するため事業一切を廢し、懇親の意味を以て會名を保存することとなつた。

〔贊助會員〕小合友之助、皆川月華、山鹿清華〔會員〕前田良三、北村正太郎、今西良夫、鄭末朝、細木成實、宇野善之助、佐野多景夫、川瀬茂次、新開興作、鳴瀬英明、井關英夫、高橋忠一、八田泰造

農鳥社(日)

京都市新島丸切通南入西村五雲方

西村五雲社中の結成。日本畫の研究並に發表を目的とす。會員凡そ五十名。毎年一回展覽會を催す。十二年六月大阪三越に第四回展開催。

新古典派協會(洋、彫)

東京市世田區玉川奥澤町一ノ一九 金子九平次方

昭和十一年三月設立。「人間の高貴さと、秩序ある觀念、思想の美しさ」を宣揚する新古典主義藝術運動を起す。十二年三月第二回展を開催。

〔會員〕金子九平次、片山健吉、那須辰造、鹽月赴、渡邊正太郎、下田範次、小

泉勝世

新畫會(日)

京都市左京區銀閣寺前橋本關雪方 電上四六〇

大正八年橋本關雪門下有志に依り組織其後一時解散したが、昭和十年橋本關雪の帝國美術院會員に任命を機とし、檜崎鐵香、樺崎朱雀、三津川光胖等の發起に依り再興、現在に至る。昭和十一年十一月、京都大丸に第一回展開催。

〔指導者〕橋本關雪〔會員〕檜崎鐵香、樺崎朱雀、三津川光胖、小笠原彌、川田虛舟、宮瀬泉城、竹林愛作、竹内貞親、高安龍雲、後藤杏島、石塚仙堂、仙波久榮、小柳泰然、稻垣錦莊、木村杏園、伊藤逸峰、樺文峰、淺野鶴汀

新構造社(洋、彫、工)

東京市牛込區市ヶ谷山伏町一六 大澤方

昭和十年六月構造社有志幹事會は繪畫部の解消を決議したが同部は翌月構造社總會を招集、前記の解消宣言を「彫刻部の計畫的なる違犯行動と認め、彫刻部會員を退會者なりとして決議し新に會規を制定して同年十一月第九回構造社繪畫展を公募の上開催した。翌月寺畑助之丞加入。十一年七月寺畑助之丞を代表とする彫塑團體十七會の加盟により名を新構造社と改稱し、更に工藝部を新設して十一月第十回展を開いた。

〔會員〕(繪畫部)市川兼治、大澤左一、

大澤彦六、改井德寛、神山恆、多比羅榮一、武田芳雄、園部香峰、中郷善太郎、上田重正、内田正男、内島親晴、倉本七郎、福崎精哉、足立重興、三村英一、葛西康（彫刻部）戸張幸男、恩田忠一、河野文一郎、加藤正巳、銅元治、中村敬次郎、山名常人、降旗正男、古賀忠雄、寺畑助之丞、鈴木正、スエタケタツ（工藝部）稻本弘之、泉忍、大泉博一郎（會友）（繪畫部）佐々木延、坂部重光、田代一郎、水沼兼雄（彫刻部）中森遊（工藝部）山本博（代表者）（繪畫部）三村英一（彫刻部）寺畑助之丞

新興工藝協會

京都市東山工業試験所内

昭和七年創立。京都在住の各部門の工藝作家を以て組織。

〔顧問〕清水六兵衛、澤田宗山、會員三十數名

新興獨立美術協會（綜合）

東京市麻布區霞町六番地
小林茂方 電赤坂四四二二

昭和八年九月創立。「創作の自由と獨創」の尊重に立脚し、從來の有鑑査展制度を否定し、作品公募によるアンデパンダン展を開催。

〔維持會員〕萩生田祐曠、木村一男、小林茂、牧田久義、牧田祥哉、丸野豊、三崎道夫、鈴木清作、寺村金太郎、佐藤文彦、林靜子、八木秀晃、築比地正司、津田昌宏、水野享、奥水瑠、岩崎エイ子

會則拔萃

- 一、本會は毎年一回美術展覽會を上野美術館に於て開催す
- 一、展覽會出品作品の種類は和洋繪畫、彫塑、美術工藝とす
- 一、本會は作家獨自の出品作品に對しては鑑査せず
- 一、展覽會に於ける賣約作品に對しては維持會員は賣約高の一割、普通會員は二割を本會に納入すべきものとす
- 一、維持會員は本會の維持發展に力め作品を出品し所定の會費を納入するものとす
- 一、維持會員は月額金二圓也を納入するものとす

新興美育協會

東京市豊島區堤内町五

昭和九年二月創立。學校教育に於ける圖畫、手工、作業科教育の擴充を期し、事業として月刊雜誌「新興美育」を發行し、又全國各地に講習、講演、研究會等を催す。全國各府縣に支部百七十餘あり。

〔理事長〕石野隆

新興美術院（日）

東京市澁谷區下落合四ノ一五五
四小方 電落合長崎三八四五

昭和十二年九月、日本美術院々友十二名が「自由拘束なき新興清新なる藝術を揚進する」目的を以て、同院を脱退、結成した。尙二名は其後日本美術院に復歸した。春秋に公募展、同人展を開く。昭和十三年四月東京府美術館に第一回展開催。

〔同人〕茨木杉風、保章良朔、吉田澄舟

田中案山子、内田青薫、小林三季、小林巢居、鬼原素俊、芝垣興生、森山夢笑
〔同友〕淺香金四郎、長谷川優策、町田兼人、成田玉泉

新興美術家協會（綜合）

東京市杉並區井荻町二ノ一

昭和十年七月、ホクト社の玉村方久斗、笹川巴流夫、平川清藏、船崎光治郎、院展の大内青圃、故木村五郎、國畫會の清水多嘉示、大乗美術の大内青坡等の八名が發起者となつて「新興精神に據る諸種の藝術運動」及其の造型藝術作品の發表を目的として同協會を創立。同年十月第一回展開催。毎年秋季に公募展を催す。

〔會友〕清水多嘉示、恩地孝四郎、平川清藏、大内青坡、大内青圃、小野忠重、笹川巴流夫、玉村方久斗、坂井半甫、石井勉、鈴木貞、村井麗樹、村上柁夫、山崎外郷、五十嵐幸男、藤田悟、永井宏、多田正介、大貫悌二、小林良曹、石川清田邊德三郎、二階堂顯藏、藤本美弘、野澤武美、濱谷二郎、山田稔、大久保實雄、井上孟、杵谷精一、明田川孝、杉本幸一郎、安井喜一、山脇洋二、鴨幸太郎、伊藤喜朝、丹慶俊二、圓山信一、安部幸毅、廣藤道明、山本衛、神谷万吉、高田和明、野口慎太郎、宇治山哲平、白井保春、木下秀一郎、松岡正雄、野口道方、横越自入、加藤正之、秋山正、陳春德、杉上茂田中南窓、清水正博、川村秀次

新興美術協會（洋）

大阪市旭區新森小路南一丁目一九番堂李三郎方

昭和七年田中善之助、若山爲三、國盛義篤により設立。關西洋畫の發達を期し、一派に偏せず、特色ある作家を迎ふるを趣旨とす。毎年一回公募展を大阪及其他に開催する。昭和十二年十一月大阪市立美術館に於て第六回展を開催。

〔會員〕田中善之助、足立源一郎、齋藤清二郎、岩崎又二郎、田川勤次、三木明太郎、木下公男、若山爲三、藤堂李三郎、西村鳳山、前田藤四郎、和田歳一、島田福雄、國盛義篤、川端彌之助、伊藤慶之助、佐藤昌胤、山川清、飯田衛、加藤啓三、會友十二名

新國畫協會（日）

東京市杉並區和泉町三〇三

昭和十二年十月創立。「吾等是新國畫協會を組織し日本精神の本義に基き新興日本繪畫の確立を期す」なる宣言の下に明朗美術聯盟を脱退した十名の作家に依り組織された。（昭和十三年六月解散）

〔會員〕荒井草雨、井上陸華、丹阿彌若吉、藤井霞郷〔會友〕古淵啞草、岡田魚降林、重松謙吉、安藤ふじ枝、具志堅古雅、海老原克己

新自然派協會（洋）

東京市目黒區中目黒四ノ一四四一

昭和十年七月小城基門下によつて創立。新自然主義派の研究發達を期す。年一回同人の作品を發表する。

〔主幹〕小城基 〔顧問〕荒城季夫、川路柳虹、黒田鶴心、森口多里、田邊孝次、外山卯三郎 〔會員〕半田丈夫、腰山實政、金井己年男、三上亨、小城基、成田廣、杉本謙、和田裕介、山内實 〔會友〕七名 〔同人〕二十四名

新制作派協會 (洋)

品川區大井原町五三〇三 三田康方

昭和十一年七月、第二部會總會は文展參加を決議したが、從來「帝院」の獨立、帝展の解消」説を主張し來つた猪熊弦一郎、内田巖、佐藤敬、中西利雄、小磯良平、三田康の六名は結束して二部會を脱退、脇田和、伊勢正義、鈴木誠の三名を加へて七月二十五日新制作派協會を設立した。同年十一月第一回公募展を開催した。

〔會員〕猪熊弦一郎、伊勢正義、脇田和、中西利雄、内田巖、小磯良平、佐藤敬、三田康、鈴木誠、野田英夫

同會規約(十一年七月廿五日聲明)

一、我々は一切の政治的工作を拒否し、純粹藝術の責任ある行動に於て新藝術の確立を期す

一、我々は從て、反アカデミックの藝術精神に於て官展に關與せず

一、我々は獨自の藝術的行動の自覺に於て我々と背馳すると認めたる一切の美術展覽會に關與せず

一、我々は常に新しき時代の純粹藝術家の結合を與望し年一回以上の公募美術展覽會を最も嚴格なる藝術的態度に於て開催し以て我々の藝術行動の確立を期す

一、我々は以上の藝術的主張に於て新制作派協會の結成を盟約す

同會第二回展規定抜萃

〔會場、會期〕昭和十二年十二月八日―二十五日。上野公園東京府美術館に於て開催。

〔搬入、搬出〕出品は十二月四日、五日(午前九時より午後四時まで) 搬入會場にて受付。地方出品は十一月二十五日迄に東京市淀橋區角筈一ノ三八加藤運送店方新制作派協會宛發送の事。選外作品の搬出は十三、十四、十五、三日内に預り證と引換へに各自御搬出の事。陳列作品の搬出は十二月二十六日午前中(尙當日搬出なき場合には協會より費用先拂ひにて返送す)

〔種類、點數〕出品は油繪、水彩にして他の展覽會に於て公開せざるものに限り、出品點數に制限を附せず

〔手數料、出品用紙〕一點につき五十錢を搬入と同時に納入の事。地方出品者は前記委託運送店へ作品と同時に發送のこと。出品用紙は必ず規定の出品用紙を用ひ、出品作品裏面には各自畫題、住所、氏名を明記の事

〔賣約、攝影〕賣約の場合は二割の手數料として本會に納入の事。陳列作品の攝影印行權は本會之を保留す

新造型美術協會 (洋)

東京市本郷區馬町一ノ二五内
藤外次方 電小石川四一六六

昭和九年四月「新傾向繪畫」を標榜して獨立美術協會と絶縁せる同志を以て設立。「新超現實主義」の繪畫運動を起す。十二年東京府美術館に第五回展開催。

〔會員〕島津純一、池ノ内篤人、中野政

行、藤田峰英、内藤外次、瀧口綾子、下郷幸雄、今井滋、宮城輝夫

新彫塑協會

東京市世田谷區野澤町一ノ二四一 元野木昇一方

昭和十年八月二科會彫塑部の故藤川勇造門下、早川義一郎(後に脱退)、太田三郎、飯島三四二の三會友外九名は故藤川勇造の藝術的主張を繼ぎ新に同協會を組織、二科會と訣別した。同會は年一回公募展を開催し又海外作家の紹介に努める。十二年六月第二回展開催

〔同人〕飯島三四二、岩田滿平、太田三郎、小田定一、菊池一雄、酒見恆、元野木昇一、中澤安雄、中村米藏、中島武、岡本庄三

新圖案家集團

大森區馬込東二丁目
八九一 三浦和英方

昭和九年十一月帝國美術學校圖案科第一、二回卒業生を中心として設立。圖案に對する古い解釋と狹義なる概念とを打破し、正しく見直すことを共同の目的」とす。昭和十二年五月銀座伊東屋に第三回展開催。

〔顧問〕杉浦非水、金須孝、金丸重敏 〔會員〕江坂實、櫻井善三郎、河合雄二、野津憲之丞、川勝得三郎、遠藤隼兒、三浦和美

新東京漫畫圖

東京市下谷區下根岸町八六

昭和十年九月創立。漫畫の向上を期し、創作研究の傍ジャーナリズムにも進出す。月一回團報發行。

〔主幹〕長充喜朗天

新燈社 (日、洋)

大阪市天王寺區勝山通一ノ五四 電天王寺八一九

大正十一年創設。洋の東西を問はず、そのよき處を取入れて我國の新美術として價值ある新日本畫を創作」するを趣旨とす。創立以來毎年東京及大阪に公募展を開催し、昭和十二年十二月第十五回展に及ぶ。

〔主宰〕青木大乗 〔同人〕北村種三、三井文二、山田兵一、沖中賢吾 〔準同人〕北村泰山、杉原正五、前田來山、柿谷草王子

新日本洋畫協會

京都市烏丸上御靈電停前
獨立美術京都研究所内

獨立美術京都研究所の研究生有志の組織する作品發表機關。昭和十年九月京都美術館に第一回展開催。毎秋展覽會を開く。會員二十六名

新美術家協會 (洋)

東京市世田谷區四ノ三〇四 松本弘二方 電世田谷三九三一

昭和四年設立の鉦人社を同七年改稱せるもの。會員は二科會々友及二科展受賞者。年一回東京府美術館に同人展を開

く。十三年二月第十回展開催。

〔會員〕伊藤久三郎、伊藤繼郎、服部正一郎、早川國彦、金子博信、柏原覺太郎、大澤昌助、吉井淳二、高田力藏、田中忠雄、高橋庸男、田崎廣助、中村三樹男、中村善策、松本弘二、田邊三重松、寺田竹雄、古家新、藤井二郎、近藤光紀、荒井一郎、酒井亮吉、新海覺雄、清水刀根（昭和十三年二月現在）

新美術人協會（日）

東京市世田谷區代田一七六六 福田豊四郎

昭和十三年二月結成。昭和九年以來新日本畫樹立を目指して研究を重ね來つた新日本畫研究會々員が、其目的達成の爲今回新に組織したものである。春季に公募展を、秋期に小品習作展を開催する。

十三年東京府美術館に第一回展開催。

〔會員〕（新日本畫研究會々員）西垣壽一、戸田英治、吉岡堅二、中江正美、柳文男、松本光彌、間宮正、福田豊四郎、藤田復生、藤田隆治、酒井亞人、島田良助、久保田善太郎、大石哲路、青木崇美、山崎隆、井關雅夫、柴田安子、黒田耕作

同會第一回展規定抜萃

一、作品寸法及び點數に制限ありません。（但し地方出品は縦、横七尺迄のこと）

一、出品搬入の際申込書に添へ（出品料一點に付金一圓）を納入せられたし

一、出品費約の場合は本會にその二割を手數料として受領いたします

一、本展覽會は公募作品並びに新日本畫研究會作品を選考の上陳列いたします

一、選考は吉岡堅二、福田豊四郎これに當ります。

ZIGZAG（洋）

大阪市南區大寶寺町東の丁六〇 川島昇太郎方

昭和五年七月、同人の洋畫作品發表を目的として結成。同年十一月第一回展開催。七年彫刻部を設置、八年五月紳圖會と共に大阪新美術家同盟を結成、同時に彫刻部が分離獨立して「クレイ」（現在の大阪彫塑會）となつた。同年十一月紳圖會、クレイと共に第一回同盟展を開催、爾來引續き同盟展に参加す。（昭和十三年五月解散）

〔會員〕赤松大祐、安藝稔、藤井光、藤田篤次郎、橋上菁兒、池島勘治郎、木下公男、川島昇太郎、森島包光、中村眞、谷福太郎、寺田清四郎、吉田一雄、吉田正太郎、横井巖

朱雀會（日）

東京市赤坂區新町五ノ四三 井上白楊方

井上白楊、白楊塾員に依り組織。昭和九年より毎年春季展覽會を開催。

〔會員〕井上白楊、本多美恵子、大川時子、上村規兒、星野進、星野一江、辰澤達太郎、辰澤茂次郎〔顧問〕結城素明、小泉勝爾

翠紅會（日）

東京市中野區本町通リ五ノ一九 星野方

大正十四年星野錫、藤縣靜也兩名の幹旋により各畫塾を網羅して結成された女流日本畫家の團體。

〔會長〕星野錫〔顧問〕藤縣靜也

〔會員〕上原桃畝、陸眞末、山下紅畝、杉本文英、保井正子、永井勝子、西郷松正、木村青畝、笠原冬子、阿久津一枝、宮内英子、江崎照、尾形奈美、山口高子、櫻村靜江、宮島やす子、今井壽々子、谷口佐紀子、小島孝子、安藤ふ枝、春日井いく代、青柳世實子

寸土社（洋）

兵庫縣寶塚局區內米谷 和田正節方

洋畫研究團體。昭和八年より略毎年大阪に作品發表を行つてゐる。

〔會員〕池永英夫、和田正節、錦木順三、高岡義次、高岡徳太郎、竹中良吉、向井潤吉、須藤保、安藤金一郎、木下公男、樋口治、森島忠夫、鈴木總作〔顧問〕柳原一廣〔常任幹事〕和田正節

瀬戸作陶會（工）

瀬戸市大字瀬戸一五二七

昭和四年創立。瀬戸古來の特技、傳統的工藝の復興を趣旨とす。十一年東京白木屋に第五回展を開催。

〔會長〕水野憲吾〔同人〕大江文象、加藤續、瀧川七郎、河本千春、栗本儀三郎、龜井清市、松原廣長、加藤壽郎、水野壽山〔會友〕五名

瀬戸市陶藝協會（工）

瀬戸市役所第一部産業課内 電話二四〇〇

昭和十一年六月創立。同市の陶工並贊助者を以て組織。事業として陶藝に關する學術並技術の研究、郷土工藝資料の調査、展覽會、講演會の開催、他への出品幹旋、圖書刊行、工藝研究獎勵金の交付等を行ふ。

〔名譽會長〕（市長）泉崎三郎〔理事長〕野田茂四郎〔副理事長〕加藤青山〔常務理事〕永井川孫作〔理事〕加藤華仙、河本磯亭、加藤英一、矢野陶々、龜井清一

生爽會（日）

京都市東山區八坂通東大路西入 西山翠嶂方氣付

昭和十二年六月京都日本畫壇青年作家等に依り組織。同月東京三越に第一回展開催。

〔贊助員〕西山翠嶂、西村五雲、宮本印象、中村大三郎、菊池爽月〔會員〕井關雅夫、井上和雄、岩本周濤、西村卓三、西山英雄、戸嶋光雄、豐島伯羊、奥村厚一、加藤美代三、川島浩、川島洞、堤利彦、南家勇吉、桑野博利、曲子光男、會津勝巳、澤島正武、坂本音彦、櫻井孝一、水野神紳、樋口富廣、久山正義

青丘會（日）

東京市日本橋區通二丁目 高島屋美術部内

昭和十一年創設の高島屋五人展を十三年に至り標記の如く命名した。十三年七月日本橋高島屋に第三回展開催。

〔會員〕徳岡神泉、山口華楊、奥村土牛、溝上遊龜、太田聰雨

青松會(日)

大阪市南區日本橋三丁目大阪松坂屋內

東西の日本畫家十五名を以て創立。昭和十年大阪松坂屋に第一回展開催。

〔會員〕伊藤深水、服部有恆、堂本印象、徳岡神泉、金島桂華、中村大三郎、中村岳陵、宇田萩郷、矢野橋村、山口蓬春、山口華楊、室本一洋、福田平八郎、兒玉希望、廣島晃市

青巢會(洋)

東京市澁橋區下落合四ノ二〇九六 島津方

昭和七年創立。會員は青山師範附屬小學校同窓の東美校卒業生。毎年同人展開催。

〔會員〕黒田頼綱、木下幹一、島津一郎、島崎政太郎、橋原健三、中山正義

青樹社(日)

名古屋市外守山町文化村 橋山方 電守山一四

舊稱白曜會。毎月研究會、講座を開き、初夏に大展覽會、秋に小品展開催。

〔同人〕横山蒨生、安藤美靈、宮坂一義、嶋谷自然、我妻碧宇、加藤晨明

青龍社(日)

東京市大森區新井宿四ノ一〇五三 電大森三〇一二

昭和三年川端龍子日本美術院を脱退するに及び、龍子及び其御形藝員、の制作發表の機關として昭和四年六月青龍社創立。同年九月第一回展を東京府美術館に開催。六年第三回展に際し紹介出品を登用し八年より一般公募制に改む。又同年三月「春の青龍社展」第一回展を三越に催す。帝院改組に際し龍子帝國美術院會員となるも、社人は「畫業精進の過程の上から、決して二兎を追はず、只管に青龍社に依つて自己を發揮すると同時に、在野團體としての青龍社の主張を一層確立する事に努力する」との旨を聲明した。同社の主張として常に在來の所謂床の間藝術に對して、「健剛なる會場藝術」の創建を唱へ、又大衆と藝術の接觸に留意して、八年より展覽會に際して入場無料(目録必買)の新制を採用した。

〔主宰〕川端龍子〔社人〕川端龍子、坂口一草、加納三樂、福岡青嵐〔社友〕安西啓明、渡邊綱雄、小島鼎子、谷口富美枝(十三年八月退社)、山崎豐〔社子〕木村鹿之介、四方田草炎、佐藤本草、濱出榮一、利谷双樹、市野亨、三好光志、松宮左京、坂鏖一、奥田正一、結城正雄、岡部建一郎、大塚榮治、菱田幾久

同展出品規則拔萃
一、作品面積の制限は付しません。但し二曲

屏風以上の作品にして運送上の考慮を缺く物は、大坂開催に際して陳列不能の場合があります。

一、出品點數にも制限がありません。
一、出品作品は未だ他展に公表せざる新作品に限る事。

一、出品作品は陳列の上に於て不體裁の無い様に粹節の考慮をされること。此の點に不十分の場合は入選後に於て改裝を要求する事を豫約します。

一、出品作品にして買約された場合、本展覽會に於ては其の一割を手數料として受領します。但し破約の場合は本展覽會に於てはその責任を負ひません。

清光會(日、洋、彫)

東京市日本橋區江戸橋二ノ八松慶ビル座右實刊行會內

昭和八年四月創立。毎年春季東京と大坂に展覽會開催。

〔會員〕小林古徑、安田靉彦、梅原龍三郎、安井曾太郎、坂本繁二郎、佐藤朝山、高村光太郎〔責任者〕後藤眞太郎

清尚會(日)

東京市麹町區九段四丁目一五 關尚美堂內 電九段二六〇二

昭和十二年十月尚美堂關長次郎の幹旋により日本畫界新人十一名を以つて組織。十三年二月銀座松坂屋に第一回展開催。(昭和十三年九月解消)

〔會員〕岩橋英遠、林司馬、橋本明治、奥村厚一、西村卓三、西山英雄、加藤榮三、谷口富美枝、船田玉樹、藤本昌樹、菊池隆司

青莪會(日)

(會務務所) 京都市御幸町三條下ル(研究所) 京都市上賀茂坂口町幾々池畔

大正十年水田竹園門下を以て組織。毎月研究會を、年一回展覽會を開催。昭和十年十一月研究所設立。

〔會長〕水田竹園〔評議員〕水田硯山、安田半圓、幸松春浦、村上蘭田〔幹事〕須網雨亭〔副幹事〕栗田桃山、會員七十餘名

染織技術官協會

商工省工務局內

昭和五年六月創立。各府縣主任染織技術官、地方染織關係試驗場並講習所の場長及所長並染織關係技術官を以て組織。染織工業の改良發達を圖る爲必要なる調査研究をなし、併せて會員相互の業務上の連絡並に親睦を圖るを目的とす。會員九十八名

染織刺繡作家協會

東京市赤坂區青山南町四ノ一 大槻一雄方

染色、織物、刺繡の研究を目的として昭和三年創立。展覽會を開く。
〔常務委員〕山形駒太郎、齋藤五百枝、木村和一、大槻一雄、遠藤順治

閃人社(日)

東京市品川區大井倉田町三四一九 濱倉清光方

伊東深水の朗峯畫塾々生有志に依り組織、昭和十二年五月第一回展開催。

〔會員〕池田輝治、濱倉清光、津村新太郎、植草保二郎、福山美都夫、遠藤輝可、佐伯春虹、澤井一三郎、鈴木康之

全關西洋畫協會

大阪市南區西區町二八
國枝金三方 電東七五一

全關西洋畫界の綜合展開催を目的として設立。昭和二年より毎年大阪中之島朝日會館に公募展開催。昭和十三年五月第十二回展に至る。

〔會員〕古家新、伊庭傳次郎、黒田重太郎、松本銳二、田川寛一、渡邊造酒三、早川國彦、石丸一、小出卓二、鍋井克之、高岡徳太郎、横井禮市、濱田葆光、岩崎重雄、國枝金三、錦義一郎、田村孝之介、山本直治、伊谷賢藏、藤井二郎、向井潤吉、小野藤一郎、塚口正一、辻愛造、伊藤繼郎、福島金一郎

全國商業美術教育協會

小石川區原町京北實業學
校内 電大塚六〇四〇

昭和九年十月實業教育五十週年記念事業の一つとして東京府下商業學校聯合會の主催で上野松坂屋に於て第一回商業展を開催、翌年又開いたが、十一年四月全國商業學校百一校の聯合に依つて本協會を設立した。事業として年一回展覽會を開催、會報及圖録を發行し、又商業美術に關し各地と聯絡し教材の交換、頒布等

を行ふ。

〔委員〕下記九校の職員。早稻田實業學校、府立第一商業學校、府立第三商業學校、巢鴨女子商業學校、三重縣松阪商業學校、京北實業學校、市立京橋商業學校、昭和第一商業學校、宇都宮市商業學校

セクション・ダール (洋)

堺市甲斐町西四丁目一六五澤方

昭和十年四月創立。同年六月大阪市に第一回展を開催。同十二月大阪新美術家同盟に加盟。同盟展に参加のほかセクション・ダール展(年一回以上)及小品展を開催す。十三年六月大阪市立美術館に第五回展開催。

〔會員〕伊川寛、井上賢三、上島龍、河野通紀、小島大輔、小島結治、雜賀富美子、高須操、高橋進、田中惣三郎、玉澤潤一、田村孝志那、永田禎彌、西阪修、長谷川初女、藤本かをり、堀澤好一、山口久一

植風會 (日)

東京市荒川區日暮里
町九ノ一二四

故島崎柳場の榎々亭畫塾門下一同により組織、大正二年以來隨時會員の作品展觀を行ふ。

〔幹事〕清田柳莊、木島柳鷗、石川綠雨、高橋樵場、仲村眞齋

楚人社 (洋)

札幌市北七條西五丁目能
勢眞美方 電一六七六

昭和六年創立。主として札幌在住作家に依り組織さるる洋畫團體。郷土美術運動を趣旨とす。昭和十二年五月第四回展開催。

〔同人〕今田敬一、繁野三郎、能勢眞美久保守、山田正、伊藤信夫、大森滋、齋藤尙、本間紹夫〔社友〕十六名

坤園會 (洋)

大阪市浪速區西關町一ノ
八黒田方 電戎三〇一八

大正十五年創立。當時の會員は伊藤慶之助、奥村正三郎、小西謙三、大石輝一、和田歳一、辻愛造等で展覽會、講習會を開催し、又研究所の經營を行つたが昭和八年 ZIGZAG と共に大阪新美術家同盟を創立、以後同展に参加したが、十二年一月同盟を脱退した。同年十一月第九回展開催。

〔會員〕抱康子、黒田繁成、松本銳次、前田藤四郎、田川寛一、田川勤次、和田歳一、三崎孝雄、土岐流司、小西清太郎、西雅司、大石輝一、田中惣三郎、三崎六郎、六條篤、浦久保義信

草芽會 (工)

京都市東區山科竹花
塚本方 電山科一五

昭和五年創立。京都高等工藝學校圖案科卒業生有志を以て組織。各種工藝の研究團體。八年東京に於て第一回展開催。

〔同人〕川那部澄、塚本繁、赤澤鏡太郎、峯親吉、加藤八洲男、宮永友雄

坤兒社 (日)

京都市伏見區深草正覺町
七ノ四 西山英雄氣付

京都繪專校卒業生並に學生有志を以て組織。昭和十二年三月京都大丸に第二回展開催。

〔會員〕井上和雄、濱田親、西山英雄、小川武春、高橋馨、長野正男、安島雨品、曲子光男、安藤寛、阪本晋彦、北村壽一郎、下川千秋、下村正一

創工社 (工)

大阪市住吉區住吉町一
三〇〇 汎工藝社内

大阪在住工藝作家を以て昭和四年結成の無弦社は同年八月解消したが、有志相寄り同年十一月創工社を結成した。同社の趣旨は優れた美的價値を獲得しつゝ、同時に産業工藝に力強い示唆を與へ得るが如き一品製作工藝の意義と權威を確立するにある。隨時研究會、展覽會等を開催す。十一年十一月第一回展を大阪市美術館に開催。第二回展は十二年九月開催豫定の所事變の爲中止した。

〔會員〕今井千尋、羽原秋芳、中條義男、川口虛舟、河合壽成、橋外波、田邊竹雲齋、根箭忠繼、能守安太郎、山本竹龍齋、深田光馬、福岡洋哉、越田尾山、古賀藹々、後藤年彦、會田裕宜、阪口宗雲齋、平松宏春、森田誠之助、杉田不堂〔客員〕入江來布、柴崎風岬〔代表〕柴崎風岬

蒼原會(洋)

東京市神田區淡路町二ノ一
水谷景房方 電話田一三二五

大正十一年小山周次の勸告に基き日本水彩畫會假研究所の小山良修、富田通雄中西利雄等に依つて設立された東京三脚會を同十三年改稱せるもので水彩畫專門の研究團體。水彩畫日曜研究所を經營し月刊「新興水彩」發行。各地方に支部を設け地方會員は二百名に及ぶ。

〔在京本部會員〕馬場重次郎、不破章、橋口竹夫、小山良修、小堀進、間所一郎水谷景房、丸山東美男、室岡市三、松田寅重、中西利雄、野口健司、萩野康兒、岡田正二、齋藤大、佐藤俊雄、竹内梅治郎、富田通雄、山中仁太郎、山崎政太郎山口進、山下忠平、原達三、荒谷直之介岡田節男、葛西康、野澤潤二郎

荳青社(日)

京都市左京區下鴨中河原町七
一 池田達郎方電上六六六〇

昭和九年創立。毎月二回の研究會、年一回乃至二回の展覽會を開催する。昭和十二年三月大阪に第一回展開催。

〔會員〕池田達郎、稻葉春生、濱田親、川口吳川、加藤清彬、川本參江、山本朝光、小松華彰、小豆島甘兆、柴原希祥、嶋田滴洲

造型彫刻家協會

東京市豊島區長崎町三
ノ四二三 山内壯夫方

美術家團體一覽

昭和十一年二月創立。科學的造型性に立脚した彫刻藝術の創作を目的とす。展覽會に際しては主題を決めて各自その主題の下に製作したものを發表する。又、毎回外國作家の作品を紹介する。昭和十二年六月第三回展開催。

〔會員〕芥川永、明田川孝、池上璉、川口信彦、佐藤邦輔、杉本幸一郎、清水要武、内收太、谷本整映、能美八重夫、本郷新、峯孝、宮島久七、柳原義達、山内壯夫、山本常市、木元斌、尾島順二、佐藤忠良、舟越保武

造型版畫協會

東京市本郷區金助町
七三 柴秀夫方

昭和七年、新版畫集團の舊稱を以て創立。十一年第六回展を経て組織變更、十二年三月造型版畫協會と改稱、第一回展開催。十三年四月公募展たる第二回展開催。版畫の純粹なる繪畫的造型性の確立を目的とす。

〔會員〕清水正博、柴秀夫、小野忠重、水船六洲、末木東留、矢田郷二、曾我尾武治

同會第二回展規定拔萃

〔作品〕木版、石版、銅版、型紙版、デカルコマニ、フロッタージュ、其他版畫一般、既作品にあつても彫、摺に改變あるものは新作品と認む。其他複製的作品のうち製版技術上參考とすべきもの、産業的用途のものを含む。

〔點數〕制限なし。組織的制作品は額縁表装等陳列單位に含有可能の場合は一と數ふ。

〔審査、授賞〕本協會員これを行ふ。結果は四月二十九日午前中に發表す、尙優秀作品を選出し造型版畫協會賞、新版畫家賞を授與す。別に副賞を設定す。

太蒼會(洋)

(特に事務所を設けず)

昭和十一年二月舊第二部會員有志六名の結成せる親睦陸研究の集り。

〔會員〕伊原宇三郎、中野和高、矢島堅土、阿田治修、佐竹德次郎、鈴木千久馬

太平洋畫會(洋、彫)

東京市下谷區谷中眞島
町一 電下谷一七九二

明治二十二年創立の明治美術會を同三十四年大改革して其組織を一新し翌年一月太平洋畫會と改稱第一回展を上野公園第五號館に開催した。明治三十七年下谷區谷中清水町に洋畫研究所を開設、翌三十八年研究所を現在の下谷區眞島町一に移轉、洋畫、彫刻の指導をしたが、昭和四年太平洋美術學校と改稱し、同九年東京府の認可を受けた。昭和七年四月上野松坂屋に創立三十年記念展を開催した。昭和十三年三月第三十四回展に至る。

〔會員〕淺井眞、江崎寛友、府川道德、布施信太郎、藤坂太郎、布施梯次郎、早川國彦、平澤定治、堀進二、星野二彦、石川寅治、石井柏亭、池田永一治、伊藤成一、石橋美三郎、飯田實、石井明、鹿子木孟郎、金子保、香取正彦、北島吾次

平、桑重儀右衛門、小宮宗太郎、丸山晚霞、前田眞一、三上知治、光安浩行、永地秀太、中村不折、中野桂樹、野田半三

中田恭一、岡精一、奥瀬英三、小野田元興、大沼靜巖、大内青坡、佐々貴義雄、齋藤俊雄、澤田晴廣、佐藤三郎、澁谷榮太郎、清水刀根、清水敦次郎、菅谷元三郎、杉本宗一、高村眞夫、高橋虎之助、多々羅義雄、田原輝夫、鶴田吾郎、佃武昭、都島英喜、玉井力藏、渡部泰也、渡邊正太郎、内田象水、吉田博、吉田ふじを、安田豊〔會友〕有川武夫、相曾秀之助、福王誠、畑本一夫、堀潔、本郷悌、市原達夫、今里龍生、葛西善造、河本一夫、海洲正太郎、小泉秀松、小坂健三、國澤和衛、小林森次、木原二郎、能美三

次、名島實、三輪拾三郎、水戸敬之助、小倉一雄、坂本不二、島添鶴雄、鹽原啓男、鈴木寛司、田村政四郎、田原利一、等々力己吉、戸津文雄、土屋穿石、高勝邦劍、恆石敬磨、吉原甲藏〔昭和十三年三月現在〕

同會第三十四回展規定拔萃

一、出品の種類は油繪、水彩畫、素描、版畫及彫塑とします。

一、出品は来る三月四、五日兩日中に出品目錄を添へ上野公園東京府美術館本會事務所に御搬入の事、額縁なきものは受理致しません。

一、同一人の出品數は五點以内とし手数料として金二圓を申受けます。

一、陳列作品にして優秀なものには太平洋畫會賞及其他の賞を贈ります。

展覽會に限り貳點迄無鑑別とします。

大潮會(日、洋)

東京市豊島區駒込三ノ
四〇三 浦崎永錫方

昭和十年創立の大東會を廢止して十一年七月設立。全國中等學校の圖畫教育關係者の作品的主張を明らかにし、その中央畫壇への進出を計るを目的として、毎年秋季に文部省後援の公募展を開催する。十二年十一月東京府美術館に第二回展開催。

〔會長〕嘉納治五郎〔常任理事〕浦崎永錫
〔理事〕阿部七五三吉、多賀谷健吉、
〔評議員〕岩佐新、大下正男、垣見宣修、
松垣鶴雄、藤本詔三、杉山司七、三浦直政

同會綱領

一、全國美術家の作品的主張を明かにし、其の満足を得ることを目的とし、其の地位を伸張せしむること
一、埋れたる珠玉を天下に紹介し、其の地位を確立すること

同會展規定抜萃

〔資格〕出品人は在職教員並に美術關係者に限る

〔作品〕暫て展覧に發表したる作品は出品することを得ず

〔點數〕一人の出品點數は五點迄とす

〔出品料〕一人に付金二圓とす

〔類別〕出品畫は洋畫、日本畫とす

〔洋畫〕油畫、水彩、版畫、素描、パステル、クレヨン等々

〔大キサ〕出品畫の大きさ限度は油畫、日本畫は八十號大(四尺八寸、三尺七寸)以内とし水彩畫類はデビッド、コックス全紙大

(二尺五寸、一尺九寸)以内とす

〔賞〕出品畫中優秀なる作品には大潮會賞、美術界賞、其他を贈呈す。受賞せる作家は次回に二點迄無鑑査出品の特典を與ふ

〔推薦〕本會の推薦は審査員に諮り決定し、毎回無鑑査出品とす(推薦と雖も出品料を要す)

〔賞約〕賞約成立の場合には手数料として價格の二割を本會に申受く

〔十二年度展審査員〕荒木十畝、中村登陵、山口蓬春、吉村忠夫、小林萬吾、小絲源太郎、辻永、山本豊、安井曾太郎、柚木久太

大斗會(洋)

東京市目黒區三田町
一五八橋本太久磨方

昭和十一年三月結成。洋畫研究團體。年四回展覽會開催。

〔會員〕磯田長教、橋本太久磨、花谷時子、二宮榮一郎、飛山幸、李仲生、池五郎、青木義容

大日美術院(日)

東京事務所 東京市本郷區西片町一〇、結城素明方 電小石川一五七三
大阪事務所 大阪市天王寺區勝山通一ノ五四 電天王寺八一九

昭和十二年三月創立。在來の流派系統を超越して眞の日本精神に活きた新しい日本繪畫の創作研究を趣旨とす。十二年五月より六月にかけて東京並大阪に於て第一回展を開催した。

〔同人〕結城素明、川崎小虎、青木大乗
同院第二回展規定抜萃
一、本展覽會は昭和十三年五月二十二日より同六月四日まで東京市上野公園東京府美術

館に於て、同六月十七日より六月二十七日まで大阪天王寺公園大阪府美術館に於て開催す

一、出品畫にして審議の上最も優秀と認めたるものに對して大日美術院賞(金五百圓)を贈與す、其他優秀なるもの二三に對して別に授賞をなす

一、鑑査は本院同人の左記三名を以て行ふ。結城素明、川崎小虎、青木大乗

一、出品畫の點數は一人三點以内とし、出品手数料として一人金一圓納入の事とす

大日本體育藝術協會

東京市赤坂區表町滿鐵ビル四階
大日本體育協會内電赤坂二〇八一

體育運動に關する藝術の健全なる普及發達を期するを目的とし、國際オリンピック大會藝術競技の參加、明治神宮體育大會藝術競技の參加、體育運動に關する美術の調査研究等の事業を行ふ。昭和七年及十一年のオリンピック大會藝術競技に參加した。

〔會長〕男爵森村市左衛門〔副會長〕瀧澤秀雄〔顧問〕伊東延吉、岩原拓、乗杉嘉壽、大島又彦、山川建、正木直彦、芝田徹心、平沼亮三〔常任理事〕吉村忠夫

中村岳陵、矢澤弦月、伊原宇三郎、伊藤廉、碓伊之助、池田勇八、石井鶴三、長谷川榮作、渡邊義知、建昌大夢、齋藤素巖、高村豊周、成澤金兵衛、土浦龜城、小林政一、小森宗太郎、澤崎定之、諸井三郎、中島健藏、深田久彌

大日本樂業協會

東京市京橋區銀座西四丁目
五ノ六號 銀座商館第四階
電京橋五五一九

明治二十五年創立。社團法人。本邦樂業の進歩發達を圖るを目的とし事業として雜誌圖書の發行、講演會、講習會の開催、調査、建議、公共事業の助長等をなす。毎年一回四月に總會開催。京都、大阪、名古屋、九州八幡等に支部を設く。

〔會頭〕伯爵金子堅太郎、〔理事〕熊澤治郎吉、飯塚誠厚、倉田昌修、近藤清治、小林作平、芝田理八、永井彰一郎、中原萬次郎、日野厚〔常議員〕六十九名

大美展(日、洋)

大阪府北河内郡敷山町御殿山 大阪美術學校内

大阪美術學校日本畫並西洋畫部卒業生の全員を會員とす。昭和三年より毎年一回展覽會開催。

〔會長〕矢野橋村〔役員〕齋藤與里、福岡青嵐

第一美術協會(洋)

東京市瀧野川區田端町
四五五 三國久方

昭和四年の創立にして毎年初夏、洋畫及彫刻の公募展を開く。十二年五月第九回展開催。同年七月彫刻部唯一の會員吉田久繼の退會に依り、彫刻部解消した。〔會員〕濱地清松、林明善、松見吉彦、

三國久、御厨純一、中原實、佐藤哲三郎、鈴木巖、吉澤康三郎〔會友〕袴田恒男、石川重信、河邊梅村、北園克衛、小嶺伸、黑越正二、松浦英章、松坂康、三木辰夫、野田利衛、齋藤好雄、佐野忠吉、鈴木啓二、高橋亮、富岡藤男、山田篤

第三部會（彫）

東京市荒川区日暮里渡邊町一〇四
○石川隆治方 電下谷八四六六

昭和十年六月、舊帝展第三部無鑑査級有志は「帝院改組は全然誤れる措置」なりとして、帝展不開催新帝院解散等を要望する旨聲明したが、其趣旨から反帝展を標榜して七月同會を結成した。「所謂展覽會むきものを見せるよりも常に作りつつあるものをすべてさらけ出した方が」好いとの意味で個展の集合形式を取り、同年十月公募に依る第一回展を開き、十二年九月第三回展に及ぶ。尙小倉右一郎は同年八月脱會した。

〔會員〕石川確治、池田勇八、畑正吉、開發芳光、吉田久繼、上田直次、日名子實三〔會友〕大野信義、向山峽路

高松工藝協會

高松市市役所内

昭和七年五月創立。高松市に於ける個々の美術工藝團體を綜合せるもので、工藝の振興を計るため工藝品並意匠圖案の調査、展覽會、研究會の開催、販路調査、他への出品斡旋等を行ふ。

美術家團體一覽

〔會長〕（高松市長）富家政一〔副會長〕川口丙三郎、坂本榮、磯井如眞

千葉縣美術協會（綜合）

千葉市市場町二、千葉縣立圖書館内 電千葉八二四

昭和十一年四月創立。千葉縣出身者及居住者を以て組織。縣内に於ける美術の振興並に其の普及を圖るを以て目的とす。十三年四月第五回展開催。

〔會長〕（千葉縣圖書館長）廿日出逸曉〔理事〕圓治月潭、河野周耳、菅谷元三郎、長澤菊慈、奈良坂昂、無緣寺心澄、大須賀力、信田洋、丸木久雄、水野浩助、池田和、鈴木英之助

筑前美術會（日、洋、彫）

東京市澁谷區幡ヶ谷本町一ノ四八 今中素友方

福岡縣出身作家の親睦と鞭撻を期し、昭和八年二月發會、帝展及其他有力の展覽會に三回以上入選せる者を以て會員とす。毎年展覽會開催。

〔顧問〕山崎朝雲、和田三造

竹立會（日）

京都市右京區嵯峨神門町二一
山本紅雲方 電嵯峨三六

竹内栖鳳門下同期生の研究團體。月二回の研究會、年一、二回の展覽會を開く。昭和十二年七月大阪三越に第一回展開催。

〔同人〕徳岡神泉、山本紅雲、青木生冲

岩岡集、中田晃陽、小森綠光

中央美術會（日、洋）

東京市本郷區曙町一一
田口拘汀方

大正四年以來雜誌「中央美術」を刊行昭和四年一時休刊したが、同八年復興第一號を發行し、十一年十二月迄續刊し以後廢刊となつた。年一回同會の主催にて日本畫、洋畫の公募展を開く。但し昭和十二年度は休展。

〔同展鑑査員〕（日本畫部）伊東深水、奥村土牛、中村岳陵、宇田萩郎、山川秀峰、兒玉希望、郷倉千靱、堂本印象、小野竹喬、中村大三郎、山口蓬春、福田平八郎、小泉勝爾（洋畫部）伊原宇三郎、碓伊之助、川口軌外、中野和高、野間仁根、鈴木千久馬、伊藤廉、東郷青兒、田口省吾、中村研一、清水登之、鈴木亜夫

中部日本商業美術聯盟

名古屋市西區御幸本町通
一丁目愛知縣商工館内
電本二一五六

昭和十一年十一月創立。中部地方各縣内に於ける商業美術に關係ある諸機關を以て組織。商業美術の發達を圖るため展覽會、講習會等を開く。本聯盟主催の事業には加盟團體以外に個人又は團體の參加を許すことあり。十二年十月愛知縣商工館に第二回展開催。尙展覽會終了後は各地を巡迴展示する。

〔加盟團體〕岐阜縣商業美術協會、滋賀

圖案會、富山商業美術協會、福井商業美術協會、靜岡商業美術協會、愛知商業美術協會、三重縣觀光協會、新潟商業美術協會

朝鮮畫寶藝術院

京城府大和町一ノ三五
松田方

昭和十二年五月創立。朝鮮の人物發達と人形を通しての日鮮融和並社會教育の一助たらしとするもの。年一回春季に朝鮮在住者の作品を主とする展覽會を開催隨時研究會、講演會を催す。

〔顧問〕津田信夫、西澤笛畝、大塚源二郎〔會員〕松田黎光、宇野光惠、遠田運雄其他十二名

朝鮮南畫院

京城府雙木町二四
電本局三三二二

大正三年久保田天南を中心に創立。朝鮮に於ける南畫道の振興を目的とし、もと朝鮮木石南畫會と稱す。同院は本部及支部を設置し之に加盟する者を院友となし、本部は京城府下の院友、支部は地方の院友を以て組織し、支部長を配置す。毎年一回院友のみの出品による展覽會を開催す。昭和十一年十月京城に於て第二十三周年十九回展開催。支部三十六、會員六百餘名。

〔主幹〕久保田天南〔幹事〕江原善槌、伊藤彌右衛門、大森速志、今井澄雄、今澤信人

沈爾留(彫)

東京市目黒區自由ヶ丘
二二七 林是内

東美校彫刻科製造部の卒業生に依り、昭和二年發會、同六年より毎春作品展開催。

〔同人〕 長谷川正雄、林是、大須賀力、奥田勝、黒田嘉治、佐土哲二、喜田三五、三木凱歌

圖案家協會

京都市伏見區桃山町宗和園
澤田宗山方 電伏見六〇二

大正十一年創立。京都在住の圖案家を以て結成。斯道の發展及共同の利便増進を目的とし臨時講演會、見學、研究會、展覽會等を催す。

〔總務〕 澤田宗山 〔理事〕 澤田宗山、山鹿清華、田村春曉、落合萬水、狩野秀峰、福岡玉憐。正會員百六十五名

圖案技術官協會

商工省工務局内

昭和十一年十月設立。各府縣に在職する圖案技術官及關係者を以て組織し我邦工藝産業の改善發達を圖るため必要なる調査研究をなし、併せて會員相互の業務上の連絡並に親睦を圖る。會員九十餘名

鋸起研究會(工)

中野區江古田二ノ七四八、三井方

昭和七年八月結成。東美校鍛金部卒業

生の親睦團體。年一回展覽會開催。

〔會員〕 石田英一、河村清司、八田辰之助、品田慎一、寺田龍雄、鈴木孝次、三井安蘇夫、藤本長邦、柴田武次、加藤正之、松原春男、井尾敏雄、梶尾宗一、大西基平、佐藤猛郎、小川正

帝國工藝會

東京市芝區西芝浦一丁目
東京高等工藝學校内

大正十五年七月創立。本邦工藝の産業化並其の進歩發達を圖るを目的とし、事業として生産業者、販賣業者、美術工藝家並に科學者の聯絡提携に努め、産業工藝の狀況を調査研究し、又地方特産工藝品の改良並に販賣の紹介等をなす。毎月雜誌「帝國工藝」發行。

〔會長〕 男爵 阪谷芳郎 〔副會長〕 鶴見左吉雄 〔顧問〕 伯爵 金子堅太郎、伯爵牧野伸顯、伯爵 清浦奎吾〔常務理事〕 安田祿造、和田嘉衛、國井喜太郎

斗南社(洋)

東京市目黒區委町六
四二 井手坊也方

昭和十年度東美校油繪科の卒業生有志を以て結成。隨時展覽會開催。

〔會員〕 井上準雄、井手坊也、千葉衛、高山世繼、河野通暢、房野德夫、三輪孝副島秀生、上原五節、宮崎恩

富山縣工藝會

高岡市中川、富山縣工
業試驗場内 電七一九

昭和四年創立。縣内工藝家及工藝品販賣業者其他關係者を以て組織。縣内工藝の進歩發達、工藝品の販路擴張を目的とす。毎年縣下及、東京、大阪に展覽會を開催し、臨時講習會、講演會等を開く。

〔會長〕 富山縣商工水産課長〔副會長〕 縣工業試驗場長〔常務理事〕 縣商工水産課主事、富山市商工獎勵館長、高岡市商工獎勵館長

東觀會

東京市麹町區中六番町五四
市喜山義夫方 電九段三七五四

昭和八年東京府美術館借館料改正の運動起り同年五月美術團體及美術記者に依り、東京府美術館借館料改正期成會が結成された。同會は問題解決後同年十二月解散されたが、之が機縁となり將來借館團體共同の權益を保護しその便宜を圖る可き集團として九年一月設立されたものである。

〔加盟團體〕 旺玄社、一水會、九年會、國畫會、光風會、構造社、三春會、主線美術協會、春陽會、春臺美術會、上杜會、新構造社、新制作派協會、新造型美術協會、新美術家協會、青龍社、太平洋畫會、第一美術協會、第三部會、東光會、東京表裝飾組合、獨立美術協會、讀畫會、南畫聯盟、二科會、日本畫會、日本水彩畫會、日本寫真會、日本美術院、白日會、表裝同人會、明朗美術聯盟

〔常任理事〕 富田溫一郎、田口省吾、市喜山義夫、吉田白嶺、熊岡美彦、福澤一

郎、石川寅治、太田三郎、梅原龍三郎、木村莊八、川端龍子〔理事〕 岩佐新、垣見泰山、藤本留三〔評議員〕 富田溫一郎、田口省吾、市喜山義夫、東根德夫、吉田白嶺、望月省三、熊岡美彦、香取重吉、福澤一郎、湯原柳畝、中出三也、石川寅治、濱地清松、石川確治、福田浩湖、新關國臣、齋藤素巖、太田三郎、梅原龍三郎、野崎龍雄、川口春波、藤岡一、泉谷喜一郎、木村莊八、笹鹿彪、中野政行、三田康、三村英一、酒井亮吉、栗山弘三郎、川端龍子、石井柏亭

東海美術協會(綜合)

名古屋市中區御幸本町
愛知縣商工館内

明治四十三年創立。美術及び美術工藝の振興を圖るを以て目的とし、會内に東洋畫、西洋畫、彫塑、工藝の四部を置く。毎年協會展を開催の傍、帝展への出品の獎勵並に之に關する各種の事務の取扱、研究會、講演會の開催をなす。昭和十三年四月第二十七回展を開く。

〔會頭〕 伊藤次郎左衛門〔副會頭〕 岡谷惣助、菅原省三〔評議員〕 石河有鄰、渡邊秋鈴、森村宜稻、小林松仙、菊地香三、人見彌、原田隆諦〔主事〕 岡田良右衛門、宮部鈴三郎、池田正信〔正會員〕 (東洋畫) 六十一名 (西洋畫) 十五名 (彫塑) 一名 (工藝) 一名

東京鑄金會(工)

東京市下谷區谷中
眞島町一ノ一號

明治三十六年の創立にして主として東京在住の鑄金家を以て組織し毎年秋季、展覽會を開催する。

〔顧問〕 大島如雲 〔幹事〕 香取秀貞、渡邊長男、佐々木象雲、山本安曇、香取正彦〔評議員〕 市岡紫雲、北原三佳、山本純民、齋藤鏡明、加納晴雲、丸谷端堂、小野田晴正、長野埤志、山口淨雄、梅村豊舟、伊藤忠雄、渡邊紫鳳、林萬壽人、山本自燐、根來實三

東京表装師組合

東京市淺草區淺草橋一ノ三
香取重吉方 電淺草四七四一

東京市に於て營業をなす表装師を以て組織。技術の向上及同業親睦を圖るため種々の事業をなす。年一回東京府美術館に表装展を開催。昭和十二年五月第十五回展に及ぶ。

〔組合長〕 香取重吉〔副組合長〕 前波鐵太郎、原田萬平〔會計主任〕 小川久雄、根本徳三郎

東京みづゑ會(洋)

東京市澁橋區下落合三ノ
一七二七 佐藤平太郎方

水繪の研究並に普及を目的として昭和二年春創立。寫生會、作品批評會、展覽會等を行ふ。昭和十二年第九回展開催。〔總務〕 佐藤平太郎〔會員〕 恩田孝徳、片岡豊彦、小堀進、下坂英夫、高田力藏、加政道、内藤秀因、牧野正吉、森谷清一、渡部菊二、井上三綱、香月照次、小林保

美術家團體 一覽

司、柴田善太郎、竹内梅治郎、寺尾浩、野澤潤二郎、松本慎三、山崎政太郎、小椋繁治、金田盛太郎、菊地武雄、佐々木正道、諏訪邦一、五井開一、堀野秀雄、松田晃八、横田仁郎、齋藤大、藤塚中平〔會友〕 神谷正信、小川俊郎、飯島八郎

東光會(洋)

東京市澁橋區戸塚町二ノ
一一二 電牛込一四四一

昭和七年、舊帝展第二部出品者たる橋本八百二、堀田清治、岡見富雄、高間惣七、能岡美彦、齋藤與里の六名に依り結成。八年二月東京府美術館に第一回展を開催、以來毎年春季に公募展を開き昭和十三年三月第六回展に至る。尙十一年三月創立會員橋本八百二、堀田清治、高間惣七の三名は脱會、主線協會を結成した。〔會員〕 岩下三四、岡見富雄、渡邊浩三、岡部晋生、野口謙藏、能岡美彦、胡桃澤源一、小早川篤四郎、齋藤與里、佐藤一章、水船三洋、平通武男〔會友〕 井上脩、石本秀雄、山下大五郎、正田二郎、森田茂〔昭和十三年三月現在〕

同會第六回展規定拔萃

一、本展覽會は昭和十三年三月二十四日より四月三日まで上野公園東京府美術館に於て開催す
一、出品希望者は作品出品目録(題名、大きさ、種類、價格、住所氏名明記の事)並に出品手数料を添へ三月十八日、十九日の兩日上野公園東京府美術館内東光會受付に撥入せられたし
一、出品手数料二點以内一圓、一點を増す毎

に五十圓

一、地方出品畫は二月廿日迄に東京市下谷區谷中初音町一丁目一、黒田美術品運送店(電下谷六二〇四)宛東光會として發送せられたし(美術館宛の直接發送は絕對受付ざるものとす)
一、出品畫は油畫、水彩、素描、パステル、テンペラ、版畫とし、一人の出品數五點を限りとす。但し大ききには制限なし
一、陳列中の作品を審査し優秀なるものには東光會賞及某氏獎勵賞等を贈呈す(會友及無鑑査推薦をなす事あるべし)
一、鑑査並に審査は本會々員之を行ふ
一、賞却品に對しては其價格の二割を本會に支拂ふものとす

東皓會(日)

東京市澁谷區向山町一〇二
吉田方 電高輪三六五八

從來東美校出身有志の日本畫家が相互の親睦の爲、毎月懇話會を開催し來つたが、昭和十二年六月、新に東皓會と命名、結成された。邦畫壇の進展に寄與せんとするものである。

〔會員〕 岩田正巳、服部有恆、畠山錦成、橋本明治、川崎小虎、狩野光雅、加藤榮三、吉田秋光、吉村忠夫、高木保之助、常岡文龜、根上富治、永田春水、村島西一、野口謙次郎、矢澤鼓月、山本丘人、小泉勝爾、榎本千花俊、穴山勝堂、廣島晃浦、望月春江、杉山寧

東漆苑(工)

東京市板橋區中村町一ノ八
七八 守屋方 電練馬三〇七

昭和九年創立。漆藝の研究と作品發表

を目的とす。年一回展覽會を開催する外同人の作品を常備展觀し且つ同人の製作を内外の博覽會及び展覽會に出品する爲の便宜を圖る。

〔會員〕 片岡華江、吉岡郁三、横越自入、高山光明、田島耕太郎、高木進、内藤俊一、村田義忠、歌川黎明、山永光市、山本剛吏、増村成雄、古山英司、佐藤光市、佐藤紫川、三田村自芳、森夜潮、守屋松亭、只浦薰

東臺會(綜合)

奈良市法連町明珍
恆男方 電九八八

昭和五年四月發會。東美校出身奈良在住者有志の懇親並研究團體。毎年春季同人の展覽會を開催し、隔月集會を行ふ。

〔會員〕 (日本畫) 富田一昭、立野雪郷、谷山介春(洋畫) 西孝親、遠山八二、小野藤一郎、谷山藤四郎、中村義夫、小松原義則(彫刻) 新納忠之介、細谷三郎、吉川政治、奥田勝、木場春彦、明珍恆男、菅原安男(金工) 後藤年彦(漆工) 幸王好太郎、北村久造(圖案) 岸熊吉(染織) 井上清一

東臺邦畫會(日)

東京市芝區金杉濱町六八
狩野探道方 電三田二三六

明治四十四年十二月東美校日本畫科出身者に依り、東臺畫會が創立され大正四年三月第三回展を開催するに至つたが、同年十二月東美校出身者が新に東臺美術

會を結成、依つてこれと合流したところ間もなく同會が瓦解したので再び日本畫科出身者有志相寄り大正五年二月池畔俱樂部を結成した。ついで大正十四年、池畔俱樂部の組織を擴大し在京の日本畫科出身者を網羅して東臺邦畫會と改稱し六月第一回展を開き、引續き展覽會を開催して昭和十二年六月第十二回展に及んだ。

〔會長〕 結城素明〔副會長〕 松岡映丘(逝去)〔名譽會員〕 渡邊香涯、川合玉堂、横山大觀、正木直彦、木村武山、溝口頑次郎、島田佳矣、鈴木信一〔常務委員〕 狩野探道〔常務理事〕 矢澤弦月、川崎小虎、勝田蕉琴、小泉勝爾、會員約二百四十名

東潮會(日)

横濱市中區本牧三ノ谷
一三七 新井勝利方

横濱在住の院展出品者の組織せる津登比會を昭和八年解散し、翌九年舊同人に新たに神奈川県在住の帝展系作家を加へて設立した。

〔會長〕 栗原清一〔幹事〕 飯田九一、中島清、中庭煖華、並木瑞穂、牛田雞村、小島一鸞、新井勝利、水野陽翠、座間素賢、冬木大丙、木下春〔會員〕 山下日出子、鈴木島心、高橋萬年、藤井白映、長谷川路可、片岡球子、中島保、加藤洵綾、吉川朝衣、關曄明、柴宗廣、上垣候鳥、森博

東土會(彫)

東京市本郷區駒込神明町三四一
後藤良方 電話一五一五

昭和六年十二月創立。東京生の東美校彫刻科出身者にして舊帝展に出品せる者を以て組織。隨時作品展開催。

〔會員〕 淺岡重治、安藤秀吉、大須賀力、大橋清、金田豊、木内五郎、黒田嘉治、後藤光行、後藤良、杉浦藤太郎、杉本三郎、明珍勝友、安一、安田周三郎、吉田久繼、武田榮

東陶會(工)

東京市中野區川添町一
大森光彦方 電中野五八三五

昭和四年設立。東京及其の附近の陶磁器並硝子工藝の作家を以て組織。年一回展覽會開催。

〔顧問〕 板谷波山、宮川香山、沼田一雅〔會員〕 板谷梅樹、井高富美、井上良齋、長谷川怒、埴好、星野國太郎、土肥刀泉、大森光彦、小川雄平、唐杉榮四、各務鑽三、川本素仙、横山朝陽、竹内蘭山、武藤太郎、安藤喜明、小柳今朝一、古宇田正雄、湯山青屋、水野喜作、宮之原謙、塗師淡齋、小柴外一

東風莊(日)

東京市深川區富岡町二ノ一三
福田浩湖方 電本所六一五

大正十五年創立。南宋畫の研究團體。年一回展覽會開催。

〔同人〕 大津雲山、高須芝山、福田浩湖、佐藤華岳、木村棲雲、金子米軒、中田雲暉、荒居翠湖、佐々木永秀、關谷雲崖

東邦彫塑院(彫)

東京市杉並區永福町
四〇五 雨宮治郎方

昭和十年六月帝院改組に際して舊帝展審査員級の長谷川榮作、加藤顯清、吉田久繼、國方林三、山根八春、後藤良、雨宮治郎、北村正信、關野聖雲等の九名は「帝國美術院改組の結果、吾人等主義を同じくする者に於ては團結の必要を痛感し、ここに東邦彫塑院を結成して藝術權威維持と後進誘掖に盡し、もつて吾人の生命とする創作により主義主張の貫徹を期するものなり」と聲明して、東邦彫塑院を結成、同年十一月東京府美術館に第一回公募展を開催した。

〔會員〕 長谷川榮作、國方林三、北村正信、關野聖雲、一色五郎、羽下修三、橋本朝秀、服部仁郎、新田藤太郎、富永朝堂、岡本金一郎、大須賀力、加藤顯清、田村審火、中島東洋、畝村直久、黒田嘉治、山根八春、梁川剛一、牧俊高、後藤良、雨宮治郎、安達貫一、赤堀信平、安一、柴田正重、毛利教武、森大造、森山朝光、杉浦藤太郎

東北美術展覽會(日、洋)

仙臺市東三番丁河北新
報社内 電四一〇〇

昭和五年創立の東北美術協會の主催した展覽會を同八年より河北新報社が引き繼いだもので、東北の美術思想普及並に發達を目的とし、仙臺市に年一回日本畫、洋畫の公募展を開催する。規則は毎年一月上旬發表。

〔會長〕 (河北新報社長) 一力次郎〔副會長〕 (同副社長) 一力五郎〔顧問〕 勝本正晃、國井喜太郎

東北北海道工藝協會

仙臺市二十人町通一〇
商工省工藝指導所内
電三七六〇—三七六二

昭和四年設立。東北六縣及北海道に於ける工藝關係者相互の聯絡を保持し、東北工藝の産業的發展を圖るを目的とし、事業として工藝品並意匠圖案の指導、製品の宣傳紹介、販路の擴張、競技會、展覽會の開催、各種工藝的副業の指導獎勵等をなす。

〔名譽會長〕 藤澤幾之輔〔理事長〕 國井喜太郎〔理事〕 齋藤信治、野村道夫、〔評議員〕 寺坂毅〔幹事〕 阿久津保太郎、古谷豊吉

等迦會(洋)

東京市澁谷區松濤町
二五、一木隲二郎方

大正十二年度東美校洋畫科出身者を以て組織。隨時展覽會開催。

〔會員〕 飯守好雄、大海清三、小野藤一郎、長屋勇、窪田照三、松本銳次、小

平正彦、三田康、三谷浩二、光石藤太、鈴木誠、鈴木啓二

稻花會(工)

東京市芝區廣松町
一ノ九 赤塚工房内

大正十一年故赤塚自得の社中を以て組織。相互の親睦並向上を目的とし、漆工藝をあらゆる方面より研究せんとす。臨時展覽會開催。

〔會員〕三田村自芳、魚野自醒、太田自適、久慈自然、横越自入、岡本昇三、石川古堂、關聰雨、井澤靈山、辻喜一郎、月尾慶外、金井正文、村田義忠、吉岡郁三、南忠、池田自勝、小澤裕、工藤喜代志、土方吉雄、山浦等

瀧友會(洋)

東京市豊島區長崎東町
一ノ九九三 日高方

昭和十一年春結成。二科出品者の洋畫研究團體。

〔會員〕木寺轍、小堀進、桑原實、荻野康兒、日高健泰、財保、百足遠六、竹谷富士雄、中野亨、川合喜二郎、北島達夫、増田英一、森繁、山田順治〔賛助〕藤田嗣治、野間仁根、北川民次

堂本畫塾東丘社三樹會(日)

京都市東山區八坂東大路西
堂本印象方 電話一〇八八

堂本畫塾東丘社内の七曜會、黑美會、三名會を以つて組織。昭和十二年六月京

美術家團體一覽

都市美術館に第一回展開催。

〔會員〕(七曜會)池田長三郎、妹背平三、岩田登司雄、都司倉群青、河原悦人堤利彦、竹内無憂樹、今野可啓、近藤嶺城(黑美會)井口三夫、奈良榮一、長野正男、中川眞次、草野謙吉、安藤寛、澤野文臣、三原清安、下村正一(三名會)大嶽智弘、河原長一郎、平塚榮三

堂本畫塾東丘社春風會(日)

京都市中京區間之町押
小路上ル 池田洛中方

昭和九年十一月堂本印象畫塾生を以て組織。昭和十二年五月、京都大丸に第一回展開催。

〔賛助〕三輪晃勢、是永學秀〔會員〕井上和雄、井關雅夫、池田洛中、戸島光雄、山口芳央、松尾冬青、曲子光男、古川雅司、阪本音彦

堂本畫塾東丘社如月會(日)

京都市東山區八坂東大路西
堂本印象方 電話一〇八八

堂本印象畫塾生に依り組織。昭和九年二月京都大丸に第一回展開催、其後毎年一回、二月或は三月に展覽會を開催し來つた。

〔昭和十二年度(第四回展)會員〕井上和雄、池田洛中、池田榮廣、井關雅夫、戸嶋光雄、大日三世子、松尾冬青、曲子光男、古川雅司、是永學秀、安藤寛、阪本音彦、三輪晃勢、茂森繁二、下村正一

童寶美術院

東京市淺草區淺草橋一ノ
三 電話草二四六九

昭和五年創立。童心を表現し、童心を啓發し得るやうな藝術作品の向上普及を目的とし、毎年一回繪畫、彫刻、工藝、人形玩具等の各科に互る公募展を開催する。十二年二月日本橋三越に第七回展を開いた。

〔同人〕石井柏亭、笹川臨風、西澤笛猷、服部愿夫、山田徳兵衛、山本鼎、和田英作、倉橋惣三、津田信夫〔顧問〕子爵岡部長景〔代表幹事〕西澤笛猷、山田徳兵衛

同展規則拔萃

- 一、本會出品物を左の種類とす
イ、人形 ロ、玩具 ハ、繪畫(日本畫、西洋畫、版畫) ニ、彫刻(木彫、塑像、ブロンズ) ホ、工藝品、ハ、ニ、ホは人形、玩具又は童心を題材とせるもの
- 一、出品の寸法及點數は制限を附せずと雖、必ず新發表の作品たること
- 一、出品物は總て賣品とす
- 一、出品物は審査員鑑別の上之を陳列す、但し、本院同人、賛助員並に「推舉」者の出品に限り無鑑査とす
- 一、出品物は審査の上優秀と認めたるものに對し授賞す
- 一、審査委員は本院同人及斯界の權威者中より其の都度囑託し毎年開催約一ヶ月前に於て發表す

童林社(洋、彫)

東京市澁谷區松濤一

昭和六年度東美校洋畫科及び彫刻科の入學者により組織。例年五月東京府美術館に展覽會開催。

〔會員〕(繪畫部)岩田榮、井上自助、伊藤彰、池田輝之、池田快造、橋本正躬、富山良次、沈亨求、李石樵、大山英夫、川田恒之輔、河口正喜、高木周平、根守悦夫、中西次郎、中村立行、永田精二、村田保三、上原誠、上島長健、野末恒三、野口徳次、藥師寺孝太郎、山中清一郎、船越達仁、藤岡俊一郎、江守龜男、寺田春一、赤津實、柳克文、齋藤齋、里見明正、廣瀬正雄、須澤鴻、須藤清彦、杉山一正、杉山卓、鈴木貞三(彫刻部)石田尙支、千村士乃武、吉田芳夫、瀧一夫、能美八重夫、黒川泰、柳原義達、古池恒雄、板國吉、新田實、佐藤邦輔、清水勳、水船六洲、關長造

獨立美術協會(洋)

東京市外吉野寺六五〇
中山鶴方

昭和五年十一月二科會員兒島善三郎、里見勝藏及び會友七名は新なる藝術主張の下に結束、同會を脱退、春陽會の三岸好太郎、國畫會の高島達四郎、二科出品の伊藤廉、清水登之を加へ「我々は既設の團體より絶縁し新時代の美術の確立を期す」と宣言して獨立美術協會を創立した。昭和六年一月作品公募の上東京府美術館に第一回展開催して以來毎春同所に公募展を開催し且つ大阪、京都、名古屋

屋、神戸、福岡、熊本、鹿兒島、長崎、臺北等に地方展を催す。又毎秋季、會員の小品展覧をなす。其他會の事業として夏季講習會、出版の諸事業をなし、又自治制の研究所を東京、大阪、京都に開く。十一年第六回展に際し新に中村節也、松島一郎の二名を會員に推舉、又新に會友制を設け十四名を拔擢した。昭和十二年、伊藤藤、里見勝藏、妹尾正彦、田中一、曾宮一念、林重義等六名の會員が退會した。昭和十三年三月東京府美術館に第八回展開催。

讀畫會(日)

東京市本郷區駒込町三二七
湯原方 電話四三五一

荒木寛政を主宰として、明治四十年設立。寛政の歿後は十畝を會長とし、毎春展覧會を開催、昭和十三年三月第三十一回展に及ぶ。

同會第三十一回展規定拔萃

一、出品畫ハ荒木一門及其系統ニ屬スルモノトス

一、出品畫ハ鑑査ヲ經タルモノニ限リ陳列ス(但シ無鑑査資格者ハ此限リニアラス)

一、入選作品中優秀ナルモノニ對シ鑑査ノ上讀畫ヲ授與ス

栃木縣美術協會(洋)

栃木縣鹿沼町下材木
町 吉村勇方
東京市淺草區馬道町
二ノ五 文挾勝方

同會出品規定拔萃
一、出品は洋畫(大々無制限)とし一人五點限りとす(未發表の作品に限る)

一、各出品畫には額縁を附し(釘附嚴重)裏面には本會規定の用紙に畫題、氏名、出生地、現住所、取扱所(運送店、洋畫材料店等に委託の場合)を明記せらるべし、これを明記せざる場合に生ずる事故に就ては本會その責を負はす

一、出品手数料は一人に付金貳圓とす
一、陳列畫買約は即時全價格を支拂ふか或は價格の三割を手附金として前納せらるべし

巴會(日)

東京市本郷區駒込東片
町三〇 鹽崎逸隆方

故寺崎廣業門下にして舊帝展所屬の十名を以て組織。昭和八年新宿はてい屋に第一回展開催。

【會員】野田九浦、矢澤鼓月、吉田秋光、水上泰生、菊澤武江、鹽崎逸隆、伊藤龍涯、岡部光成、町田曲江、角田盤谷

名古屋工藝協會(工)

名古屋市役所産業部内

名古屋地方の工藝家及關係者を以て組織。同地方工藝の發達を圖るため工藝に關する種々の調査、研究、出版、展覧會開催等を行ふ。昭和十二年十一月名古屋及東京に於て、第二回名古屋工藝品展覧會開催。

【會長】神田純一(顧問)藤井達吉、板谷波山(理事)田中藏六(理事)横山安吉、太田良次郎、杉浦冷石、中川貞三、藤本鐵男(委員)勝利彦、山田觀山、多和田實、青井正太郎、後藤九吉、新森愛男、權田廣助、伊藤米松、小幡正次、安阿彌宗閑、伊藤仁齋、金森春次、犬飼倫比古

名古屋美術聯盟

名古屋市役所内

昭和十一年十月創立。愛知縣在住及出身の美術家を以て組織。郷土美術界の向上を目的とし、美術に關する展覧會、講習會開催の外美術獎勵に關する事業を行ふ。

【會長】(市長)大岩勇夫(評議員)川

崎小虎、服部有恆、太田三郎、伊藤藤、鬼頭鍋三郎、加藤靜兒、宮田重雄、毛利教武、長野垣志、森村宜稻、狩野梅齋、朝蔭其明、小川鴻城、横山龍生、織田杏逸、淺井正臣、石川英鳳、朝見香城、加藤英舟、平岩三陽、井上安男、中野安治郎、船橋治彦、藪野正雄、渡邊多平、安藤邦衛、伊藤鐵、石井國義、魚津良吉、杉本健吉、大澤鉦一郎、横井禮市、遠山清、市ノ木慶治、宮脇晴、鶴原鶴羽、矢野陶々

奈良美術家聯盟

奈良市大佛殿裏
田中修方

昭和十年創立。主として奈良在住の帝展、二科、獨立等の出品者を以て結成する洋畫研究團體。毎年春秋二回展覧會開催。研究所を設置。

【會員】今西春治、乾平三、岩本恆三、間瀬謹平、森島包光、岡島吉郎、奥山堤、六條篤、下瀬貞和、田中修、辰巳義人、寺瀬信一、遠山八二、浦久保義信、吉田直之(賛助員)濱田葆光、中村義夫山下繁雄

奈良洋畫會

奈良市法蓮佐保川町
曾根雄雅方

昭和七年設立。奈良縣美術家の指導養成を目的とす。例年五月に公募展、十月に同人展開催。夏期洋畫講習會を開く。

【同人】若山爲三、飯田衛、笠松春彦、

吉本昔雄、武若武作、辻操、小森重雄、廣瀬英男、岩井濱子、鎌田史彦、吉澤健二、曾根靖雅、御宮地保、御喜田家壽夫、庄司吉郎、保田貞治、顧問十二名

長野縣農美生産組合聯合會(工)

長野縣經濟部規畫課内
電長野四三〇一

縣下農村工藝品生産團體により組織。各團體の聯絡を圖り、生産の指導、販路擴張並輪旋、展覽會開催等を行ふ。

〔會長〕(經濟部規劃課長) 水川依夫

〔副會長〕(經濟部副課主任) 江島次郎、中村實

南畫鑑賞會(日)

東京市麹町區中六番町
四一 電九段六二〇

昭和七年三月創立。南畫道の普及を計るを目的とし、會員は隨時入會の便あり。會長の執筆指導を主とし、通信教授に依り修畫するを得。年一回會員の習作展開催。

〔會長〕 小室翠雲

南畫聯盟(日)

東京市深川區富岡町一ノ一三
福田浩湖方 電本所六一五

昭和十一年九月日本南畫院及環堵畫塾の解散後、有志相謀り翌月廿九日に結成。南畫道の興隆を目的とし、研究會展覽會を開催する。

〔顧問〕 小室翠雲 〔幹事〕 人見少華、

美術家團體一覽

白倉二峰、岡田晴峰、福田浩湖〔庶務〕大栗旌折、關谷雲峯、會員は東京、京都其他にて七十七名

南紀美術會(日、洋、彫)

東京市荒川區日暮里渡邊町一〇四〇 建島大夢方 電駒込一四〇一

大正八年紀州出身の美術家により結成年一回東京或は郷里に展覽會を開く。

〔常任幹事〕 建島大夢〔幹事〕 北澤樂天、池田幸太郎、會員二十九名

二科會(洋、彫)

東京市四谷區愛住町七八
電四谷四九七九

大正三年文展第二部に二科設置運動が起つたが、當局に容れられず、同年十月ついに文展より分離して、上野竹之臺陳列館に二科美術展覽會が開催された。同展の開催に際して其の任に當りたる鑑査委員十一名は翌年そのまゝ、會員となり、二科會は茲に在野團體として獨立した。

(其の中柳敬助、田邊至の二名は直ちに脱會)爾來同會は常に新進流派の作家を包容して我が洋畫史上に啓蒙的功績を擧げて居る。大正八年第六回展の開催に際し藤川勇造會員に推され初めて彫刻部加入を見た。昭和五年十一月兒島善三郎、里見勝藏外會友七名は脱退して獨立美術協會を創立した。昭和十年帝院改組に際して同會々員たる石井柏亭、山下新太郎、安井曾太郎、有島生馬、藤川勇造の五名

が新帝國美術院會員の任命を受けるや同會は其の盟約に基いて右五名と訣別し、その同會對する功勞を謝して名譽會員に推し、同會は從來の通り飽くまで在野として行動する意味を聲明した。十二年九月第二十四回展を開催した。同會は東京の展覧後京都、大阪、福岡、名古屋等に於て隨時地方展を開催する。尙十二年八月石井柏亭、有島生馬、山下新太郎、安井曾太郎等は名譽會員を辭退した。

〔會員〕 藤田嗣治、熊谷守一、北川民次、栗原信、正宗得三郎、宮本三郎、向井潤吉、中川紀元、野間仁根、岡田謙三、島崎鶴二、鈴木信太郎、東郷青兒、田口省吾、高岡德太郎、笠置季男、松村外次郎、渡邊義知、横井禮一、黒田重太郎、鍋井克之、國枝金三、濱田葆光、田村孝之助、坂本繁二郎、國吉康雄、齋藤豐作、アスラン、ビツシエール、ロオト、ザツキン

〔會友〕 安宅虎雄、榎倉省吾、松本弘二、柏原覺太郎、椎塚猪知雄、園部邦香、酒井亮吉、吉井淳二、清水刀根、服部正一郎、伊谷賢藏、伊庭傳治郎、松井正、浪江勘治郎、山本直治、小出卓二、伊藤繼郎、古家新、福島金一郎、小林喜一郎、長谷川八十、木内克、川崎榮一、上田曉三、浦舜太郎、土田實

同會第二十五回展規則抜萃
一、本展覽會は本年九月二日より十月四日迄東京府美術館に開催す。右展覽會終了後尙ほ他の都市に於て其の一部を展覽することあるべし。その場合に陳列すべき作品は改めてその作者の承諾を請ふべし

一、本展覽會は何人と雖隨意出品をする事を得。但し鑑査の上陳列決定せられたる作品の作者は他の對立的公募展覽會へ出品するを得ず

一、展覽會には繪畫、彫塑の二部を設く、本年の出品點數は繪畫、彫塑とも各五點とす但し出品畫は一點の大きき百五十號を限度とす

一、同一作者にして同時に兩部へ出品することを得、但し其場合は各々指定點數以内とする

一、既に本邦に於て發表したることある作品は受理せず

一、繪畫部、彫塑部の出品に對しては左の會員之が鑑査に當る

(繪畫部) 藤田嗣治、濱田葆光、熊谷守一、國枝金三、黒田重太郎、栗原信、北川民次、正宗得三郎、宮本三郎、向井潤吉、鍋井克之、中川紀元、野間仁根、岡田謙三、島崎鶴二、坂本繁二郎、鈴木信太郎、田口省吾、東郷青兒、高岡德太郎、田村孝之介、横井禮一(彫塑部) 笠置季男、松村外次郎、渡邊義知

一、出品希望者は来る八月二十一、二十二日の兩日間午前九時より午後五時迄の間に會場へ作品を搬入せらる可し、額縁なきものは受理せず

一、作品には出品目録及出品手数料として出品點數に關せず一人に付金二圓を添へ搬入せらるべし

一、地方出品は八月二十日迄東京府美術館宛に到着する様又出品目録及出品料は(振替口座東京三八五〇五番或は小爲替にて)事務所宛にそれぞれ發送せらるべし(箱詰)の出品は出品目録氏名の側に「箱」と大書せらるべし

一、陳列作品の買約は本會に於て之を取扱ひ價額の一割を申受くものとす

二科西人社(洋、彫)

福岡市大名町
八七青木壽方

昭和九年十一月創立。福岡縣出身の二科會出品者の組織する洋畫彫刻の研究團體。年一回展覽會開催。

〔同人〕(繪畫) 伊藤研之、伊東靜尾、大河原元、加藤荷義、加藤タキノ、吉武友樹、高田力藏、能間寛、小松清次、眞隅太莊、後藤繁喜、安部治郎吉、青木壽、坂宗一、山口長男、有隅善郎(彫塑) 柳田昌、福田安敏、廣瀬不可止、上野三郎

廿四人會(洋)

東京市中野區櫻山
一一、樋口加六方

昭和七年創立の十七人會の擴大せるもので獨立展出品者の親睦團體。臨時作品展開催。

〔會員〕樋口加六、岡部文之助、法充昌雄、小島圭一、長島榮吉、横山清治、熊谷登久平、久保田久一、今西忠通、池田金之助、中尾彰、佐藤英男、竹中三郎、清水鍊徳、坪内節太郎、森有村、浦久保義信、赤星孝、小原雄二、坂本善三、赤堀佐兵、綠川廣太郎、富樫寅平

爾步美術協會(洋)

京都市烏丸通上立賣
上ル 太田喜二郎方
電西陣五九六〇

昭和十一年五月創立。年一回の公募展

及洋畫講習會を開く。十一年五月京都美術館に第一回展開催。

〔會員〕太田喜二郎、角野判治郎、吉田苞、小磯良平、赤松麟作、新井完〔會友〕東坊城光長、天井陸三、伴庄兵衛

新潟縣工藝協會

新潟縣廳商工水産課内

昭和九年三月創立。工藝團體相互の連絡、工藝品の輸出促進を圖り、工藝に關する調査、指導助成、展覽會開催、販賣斡旋等をなす。

〔會長〕(新潟縣經濟部長) 梁井悖二〔副會長〕宮脇倫(理事) 横山正、山中藤太郎、栗田太郎吉、栗山英資、二戸八一郎、小山金平、能村竹次郎、玉川覺平、堀淨親、眞藤玉眞

西日本美術展覽會(洋、工)

福岡市島野九八四
福岡日日新聞社

福岡日日新聞社の主催する公募綜合展覽會。洋畫部及美術工藝部の二部より成る。昭和十一年十一月第四回展開催。

第四回西日本美術展出品規定拔萃
一、出品洋畫部は油繪、水彩畫、バステル畫、素描、創作版畫、美術工藝部は陶磁器、人形、金工、染織、刺繡、漆器、木竹細工等
二、出品は各部一人三點以内、出品手数料金一圓とす
三、入選作品中より更に審査を行ひ、福岡日日新聞社及副賞品を贈與す、尙無鑑査推薦を爲すことあるべし
四、本展覽會審査員を左の諸氏に委嘱し、十一月九日審査を行ふ
和田三造、坂本繁二郎、兒島善三郎、齋藤佳三、野田俊郎、船本長造
一、賣約の場合は賣價の一割を手數料として本會に收納するものとす

西山畫塾青甲社(日)

京都市岡崎法勝寺町
福田翠光方

大正十二年西山翠峰門下を以つて創立毎月研究會、年一回展覽會開催。

〔幹事〕福田翠光〔副幹事〕本庄陶苑〔會計〕勝谷木僊〔副會計〕藤村茂〔研究會主任〕水野深伸〔研究會副主任〕西山英雄〔學藝部主任〕樋口富磨〔學藝部副主任〕北野以悦、望月玉成〔文書係〕田畑喜一郎〔評議員〕山内信一、川上拙以、小川翠村、堂本印象、寺田蘆秋、本多貞翠、佐藤空鳴、秋田仙喬、上村松篁、不動立山、森守明、今尾景春、大高爲山、福田恵一、福田翠光〔常議員〕堂本印象、澤宏毅、上村松篁、不動立山、高山完、森守明、大高爲山、水野深伸、戸田北遼、樋口富磨

日本インターナショナル建築會

大阪市北區朝日ビル
中西建築事務所方

昭和二年七月創立。「各國建築家と提携して建築に關する總べての研究をなし、現代日本に最も適合する建築を完成せんとするものなり」。昭和四年雜誌「インターナショナル建築」を發刊。隨時展覽會、講演會を開き、又毎月會員の例會を催す。現在は會員合議の上、當分事業を休止することとなつた。

〔會員〕本野精吾、伊藤正文、中尾保、中西六郎、新名種夫、本多正道、上野伊三郎、竹内芳太郎

日本漆繪協會

東京市小石川區久堅町
一〇片山佳吉方

昭和十一年十一月設立。漆繪及漆工藝の新生面開拓を目的とす。毎年春季に會員展、臨時試作展を開催する。十二年四月第一回展開催。

〔會員〕片山佳吉、横井弘三、太齋春夫、大村素峰、松岡正雄、三木義榮

日本畫院(日)

東京市本郷區駒込千駄木町五九
望月春江方 電話二六四七

昭和十三年四月文展系東京日本畫壇有志に依り結成。「現下の日本畫壇の趨勢に鑑み、之を横斷的に結束するの要を痛感し茲に日本畫院の成立を見るに至る。吾等は協力以て清澄なる畫壇の先驅者たらんとす。右聲明す」なる聲明書を發した。

〔同人〕伊藤深水、岩田正巳、服部有恆、畠山錦成、西澤篤敏、川崎小虎、吉田秋光、吉村忠夫、吉岡堅二、高木保之助、常岡文龜、根上富治、永田春水、野田九浦、矢澤弦月、山川秀峰、松本姿水、福

田豊四郎、小泉勝爾、兒玉希望、穴山勝堂、飛田周山、望月春江、森白甫、杉山寧

日本畫會

東京市麹町區中六番町
五四 電九段三七五四

明治三十年創立。日本畫の發達獎勵を目的とし、毎春展覽會を開催する。(昭和十三年二月解散)

〔會頭〕南弘〔理事〕五十嵐小太郎、市喜山義夫、太田亥十二、福田喜太郎、藤井榮三郎、三枝代三郎、清水揚之助、正力松太郎、日比谷祐藏〔顧問〕川合玉堂、錦木清方、松林桂月、松岡映丘、小室翠雲、荒木十畝、結城素明〔同人〕伊東紅雲、伊東深木、伊藤響浦、今中素友、磯田長秋、池上秀畝、西澤笛畝、服部有恒、畠山錦成、太田天洋、太田秋民、太木豐平、岡部光成、荻生天泉、織田觀潮、川崎小虎、川船水棹、鴨下晃湖、勝田焦琴、吉田秋光、吉岡堅二、吉村忠夫、吉田登穀、高木保之助、竹原嘲風、田中賴璋、津端道彦、常岡文龜、根上富治、永田春水、野田九浦、矢澤弦月、山川秀峰、安田半圃、町田曲江、松本委水、福田浩湖、古屋正壽、五島耕畝、兒玉希望、小山榮達、小泉勝爾、佐藤華岳、佐々木尙文、菊池華秋、菊澤武江、水上泰生、宮田司山、島田墨仙、飛田周山、森村宜稻、望月春江、森白甫、會友百三十五名

日本玩具協會

東京市世田谷區世田
ケ谷町二ノ一〇八〇

美術家團體一覽

昭和三年九月設立。玩具産業の發達を目的とし、玩具の研究調査並發明考案の助成に關する諸事業を行ふ。

〔常務理事〕畑正吉、西澤笛畝、加納淳男、永澤謙三、氏家壽子、國井喜太郎、山根省三、山田義郎、木槍想一、阿部七五三吉、鈴木豐次郎

日本建築士會

東京市京橋區銀座西三ノ一
建築會館七階電京橋六二〇
〔關西支部〕大阪市北區中之
島三ノ三朝日ビル四階日本
建築協會內電北濱四〇五一

大正三年六月創立。昭和三年十月社團法人設立認可。建築士の業務の進歩發達を圖るを以て目的とす。月刊雜誌「日本建築士」を發行。

〔理事長〕櫻井小太郎〔理事〕福田重義、石原信之、中村傳治、渡邊靜、黑崎幹男、岡田捷五郎、關根要太郎、松井貴太郎、波江悌夫〔關西支部幹事〕波江悌夫、安井武雄、松井貴太郎

同會定款抜萃

- 一、本會は社團法人にして日本建築士會と稱す
- 一、本會は建築に關する實務上の事項を調査研究し本邦に於ける建築の進歩發達を圖るを以て目的とす
- 一、本會は前條の目的を達成する爲めに左の事業を行ふ
- (A) 建築に關する技術家、美術家、工業家、材料業者等の聯絡を圖ること
- (B) 建築に關する業務の研究をなし其の意見を發表すること
- (C) 會報、年報、圖書並に雜誌を刊行する

こと

(D) 其他前條の目的を達するに必要なりと認むる事項

一、本定款に於て建築士と稱するは委託を受け一般建築に關する計畫、設計、工事監督顧問、調査等に從事する者を謂ふ

一、本會は總會の決議により必要の地に支部を置くことを得

一、會員を分ちて正員、准正員、客員の三種とす

(A) 正員は建築士

(B) 准正員は正員たる建築士の下に於て實務に従事する者但し准正員は建築士と稱せず

(C) 客員は前各條以外の建築家及建築に關係ある各種の専門家

同會會員規約
本會々員は次の各項を遵守す

一、社團法人日本建築士會會員業務報酬規程に基くもの外依頼者の意志に非ざる報酬を受けず

一、建築材料に關する商業を自ら營まず、但し商業を營む會社商店に關係を有する場合に建築上依頼者の意志に非ずして其商品指定せず

一、建築請負業又は之に類似の業務を營まず

日本工藝美術會

東京市下谷區谷中
眞島町一ノ一號

大正十五年創立。流派の新奇、様式の東西を問はず、あらゆる工藝の作家、鑑賞家、評論家を以て組織せる綜合團體。毎年一回展覽會を開催する外、工藝美術の社會的施設に關する建言をなし又その實現に努める。

〔常務委員〕豐田勝秋、高村豐周、津田信夫、廣川松五郎〔委員〕板谷波山、石田英一、岩田藤七、飯塚琅玕齋、六角紫水、畑正吉、西村敏彦、保坂光山、小野島知文、渡邊素舟、香取秀眞、桂光春、四谷正美、吉田源十郎、高井白陽、多畑宗哉、堆朱楊成、筑都幸哉、内藤春治、村越道守、海野清、梅澤隆眞、山崎覺太郎、松田權六、佐藤陽雲、北原千祿、木村和一、清水龜藏〔地方委員〕堂本五三良、沼田一雅、河村靖山、中島保美、山鹿清華、安原祥窓、松崎福三郎、越田尾山、迎田嘉亭、宮永東山、島野三秋、柴崎風岬、杉田禾堂

日本挿畫院

東京市小石川區久堅町
八六 加藤まさる方
電小石川四二八二

昭和十年創立。挿畫藝術の向上を目的とし、挿畫版權確立の運動、挿畫展の開催をなす。機關誌「畫ともだち」刊行。

「挿畫研究會」開催。

〔同人〕鴨下晃湖、加藤まさる、清水三重三、鈴木朱雀、田中比佐良、細木原青起、嶺田弘

日本挿畫家協會

東京市世田谷區北澤三ノ九
〇九 海野方 電話四五一二

昭和三年創立。挿畫界の向上發展を期し、會員の權利擁護、相互扶助、新人紹介、作品發表等を主たる目的とす。

〔委員〕岩田專太郎、井川洗屋、石井滴水、林唯一、細木原青起、田中良、武井武雄、海野精光、近藤紫雲、齋藤英朋
〔會員〕井上猛夫、伊藤幾久造、今村寅士、馬場射地、本田庄太郎、保積稻夫、富田千秋、遠山陽子、布目敏行、岡本一平、大橋月皎、小笠原寛三、太田雅光、岡田なみじ、渡邊審也、加東三郎、加藤まさを、河目悌二、川上四郎、河盛久夫、樺島勝一、高品華宵、橋小夢、竹中英太郎、名取泰仙、中江正美、野水昌子、山六郎、山口將吉郎、柳田謙吉、松田青風、丸尾至陽、小村雪岱、太郷盛八郎、明石精一、淺野薰、新井芳宗、佐川珍香、齋田喬、清原重以知、水島爾保布、道岡敏清水對岳坊、代田收一、神保朋世、新關青花、平澤文吉、須藤重、須藤宗方、大石哲路、吉郷二郎、福與英夫、伊勢良夫、淡路多茂津

日本山岳畫協會 (洋)

東京市品川區大井元芝町
八七〇 茨木猪之吉方

昭和十一年一月創立。山岳を崇敬愛好する畫家を以て組織し、山岳に關する繪畫の研究發表を行ふ。十二年七月東京高

島屋に、同十一月大阪大丸に第二回展開催。

〔會員〕足立源一郎、中村清太郎、英木猪之吉、石井鶴三、石川滋彦、小菅徳二、丸山晚霞、染木煦、武井眞澄、吉田博、末光績、内野猛〔顧問〕小島島水、藤木九三

日本自由畫壇 (日)

京都市島九通出水
上ル西廣田百豐方
電 西陣 三〇五六

大正八年京都の青年作家に依り設立。毎年秋季公募展開催。

〔同人〕上田萬秋、廣田百豐、渡邊公親、玉舍春輝、林文塘、久保飛路史

日本漆藝院

東京市澁谷區常盤松町四八

昭和十一年五月結成。本邦獨自の漆藝的發展を圖るため從來の漆藝家の小黨分離の弊を打破して協力邁進せんとす。年一回展覽會開催。

〔會員〕河面冬山、河合秀甫、吉田醇一郎、高井白陽、高野松山、堆朱楊成、都筑幸哉、梅澤隆眞、太田自適、岡本昇三、松田權六、福澤健一、結城哲雄、三田村自芳、莊司芳眞、森川紫山、守屋松亭〔賛助員〕六角紫水、渡邊素舟〔顧問〕正木直彦〔庶務主任〕岩瀧尚美

日本漆工會

東京市神田區鍛冶町一六ノ二

明治二十三年小川松民、柴田是眞、川

邊一朝、池田泰眞、白山松哉、田邊源助等二十四名の發金により設立。品川彌次郎初代会頭となる。爾來略隔年に漆工競技會を開催し、大正十一年迄に十六回を重ねた。而して十二年の震災後同展は一時期開催を休止したが、昭和九年三月より新に現代漆藝品展覽會の名稱の下に全國漆藝展を開催するに至つた。同會は日本特有の蒔繪並に漆に關する一切の傳統保存と進歩發達を計るを主旨とし、事業として漆並に漆工業に關する諸般の施設調査及技術上の研究、漆樹栽培の奨励及其生産調査、隨時展覽會開催、斯道に關する圖書標本類の蒐集、講演會開催等をなす。月刊雜誌「漆と工藝」發行。

〔會頭〕正木直彦〔理事長〕手塚千代吉〔理事〕澤口悟一、吉野富雄、都筑幸哉、松田權六

日本商業美術協會

東京市澁谷區戸塚町四ノ八四二 渡田増治方
電 牛込 六三二七

大正十五年設立の商業美術家協會を改組して昭和九年現稱に改む。健實なる商業美術の發達普及を圖るを目的とし、事業として商業美術展、講習會、講演會等の開催、圖書出版等をなす。毎月機關紙「商業美術」を發行、又研究所を經營す。

〔相談役〕濱田増治〔理事長〕古田達賢〔理事〕京谷涼二、晝間優作、田野郁温、伊藤豊、稻垣知雄、他會員百七名。

日本新興南畫院

大阪市天王寺區松ヶ島八一

昭和十二年十一月主として大阪並京都在住南畫家に依り結成。十三年五月大阪市立美術館に第一回展開催。

〔會員〕稻村虹亭、池田十朗、西岡都久路、直原放青、渡瀬凌雲、片山秀陵、片桐白登、横山春溪、高須白雲、橘徹州、村上蘭田、福田青藤、福與悦夫、船井秋浦、衛藤晴村、秋吉玄圃、佐野蘆水、湯川三舟、平野長彦、須網雨亭、末藤米岡、杉本白象

同院第一回展規定拔萃

一 昭和十三年五月三ヨリ同月九日迄七日間
大阪市天王寺公園市立美術館ニ於テ開催シ
六月上旬京都市岡崎公園京都市美術館ニ於テ開催ス

一 出品ハ一人三點以內トス
一 出品セントスル者ハ手数料トシテ金一圓也
ヲ申受クベシ但シ既納ノ手数料ハ何等ノ事由アルモ之ヲ還付セズ
一 審査員ハ公私展覽會ニ於テ鑑査ヲ受ケザル會員中ヨリ之ニ當ル
一 審査ノ際特ニ優秀ナル作品ト認メタルモノハ推賞スルコトアルベシ
一 陳列畫ノ賃約ニ對シテハ手数料トシテ賃價ノ一割五分ヲ本會ニテ申受ケ代金支拂ノ時之ヲ控除スルモノトス

日本水彩畫會

東京市本郷區駒込神明町
七二 望月省三

故大下藤次郎、丸山晚霞、故河合新藏の三人の經營せる日本水彩畫會研究所を

大正二年四月石井柏亭、石川欽一郎、故戸張孤雁等三十七名の發起に依り、改制擴張して新に各派水彩畫家の綜合團體として設立。年一回公募展開催。昭和十三年四月第二十五回展に至る。

〔顧問〕石井柏亭、石川欽一郎、丸山晚霞、眞野紀太郎、南薫造、中澤弘光、會員百十二名。

第二十五回同展規則抜萃

一、出品點數五點（會員二點）、一般出品、出品手数料金二圓、搬入ノ際右料金前納のこ

と

一、出品種類は水彩、素描、版畫、グロウシユ、パステル、テンペラ等とす

一、一般出品中の佳作に對し水彩畫會費其他の費を附す

一、賣約の際は賣價中より手数料（會員一割會員以外二割）を本會に徴收

一、買約者は即時に代金を支拂ふか又は其三分の一以上を約金として前納せらるべし
破約の場合と雖も約金は返戻せず

日本彫刻家協會

東京市目黒區自由ヶ丘
二七七 林是方

昭和十一年五月結成。彫刻の研究團體。昭和十三年五月東京府美術館に第二回展開催。

〔會員〕早川鐵一郎、中村七十、林是、畝村直久、長谷川正雄、野々村一男、大川逞一、黒田嘉治、大嶽茂樹、雨田光平、大須賀力、佐土哲二、奥田勝、加藤顯清、片山義郎、三木凱歌、武井直也、菅沼五郎〔準會員〕伊室正次、金谷興三郎、黒川泰、小柴利孝、三坂耿一郎、白井謙二

美術家團體一覽

郎

同會第二回展規定抜萃

一、出品ハ一點ニ付キ金五十鎊ノ手数料ヲ受ク既納ノ手数料ハ如何ナル事由アルモ之ヲ返還セズ

一、陳列スベキ作品ハ鑑査ヲ經タルモノニ限ル

一、本會ハ卓絶セル出品作ニ對シ投資スルコトアルベシ

一、陳列品ハ本會ニ於テ其實買契約ヲ取扱フモノトス但シ賣約品ニ對シテハ賣價ノ一割ヲ手数料トシテ本會之ヲ受ク

日本圖書手工協會

東京市神田區駿河臺二ノ
五 伯壽平田榮二方

昭和六年一月設立。主として中等學校の圖書手工科並作業科の教職員を以て組織。本部を東京に置き各府縣に支部を設く。技能科教育の振興、同科教員の地位擁護及び向上を目的とし、事業として同教育に關する研究調査、展覽會の開催、各地講習會、展覽會等に於ける援助、同科教員の人事幹旋、圖書雜誌の出版等をなす。

〔會頭〕伯壽平田榮二〔理事長〕三尾與喜藏

日本童畫家協會

東京市豊島區池袋二ノ
一〇二一 武井武雄方

昭和二年創立。童畫の向上發達、著作權の擁護等を目的とし、展覽會、出版等をなす。

〔會員〕初山滋、川上四郎、武井武雄、

深澤省三、清水良雄〔會友〕熊谷元一、福與英夫、佐藤今朝治、木俣武

日本人形研究會

東京市神田區豊島町四
ノ四 電浪花一五三六

昭和八年人形作家及研究家を以て組織日本人形の向上普及、作家の社會的地位の向上を計るを目的とし、隨時講習、講演會を催し、又人形使節による國際親善に努む。

〔會長〕山田德兵衛〔副會長〕太田德久

〔評議員〕川上南市、菊地吉五郎、瀧澤豐太郎、野口光彦、野口明豊、原米洲、平田陽光〔會計主任〕櫻村豐太郎

日本人形社

東京市下谷區上野櫻木町
五四 電下谷九二

昭和十年七月創立。我國人形藝術の向上發達を圖るを目的とす。十一年三月上野公園日本美術協會に第一回展を開催。翌十二年五月大阪三越に第二回展を開催した。

〔會員〕岡本玉水、平田郷陽、久保勝太郎、平田陽光、吉田光一郎、磯見勝之、平田玉陽、三井鐵洲、野田芳正、宇佐見弘業〔贊助員〕吉田永光、久保佐四郎

〔顧問〕西澤信敬、有坂與太郎、笹川臨風

同社展覽會規則抜萃

一、本會は藝術人形の進歩發達を計るを以て目的とす

一、本會は何人と雖も出品することを得、出

品物は必ず自作品のこと（但し他の展覽會等に陳列せられたる作品は之れを受退せず）

一、出品は本會鑑査の上これを陳列す

一、出品物は審査の上優秀なる作品に對して投資し會員會友に推薦することあるべし

日本版畫協會

東京市板橋區板橋三ノ
五八一 藤森靜雄方

大正七年創立の日本創作版畫協會が、昭和六年版畫家の大同團結をはかり改組せるもの。毎年定期の公募展を開き版畫美術の振興と研究に努む。尙文部省外務省の後援で、歐米各地に國際的版畫展を開催した。

〔會長〕岡田三郎助〔副會長〕山本鼎

〔常任理事〕藤森靜雄、逸見亨、清宮彬

〔理事〕旭泰安、石井鶴三、恩地孝四郎、平塚運一、畦地梅太郎、山口進、前川千帆、古川龍生〔會員〕六十七名。

日本パステル畫會

東京市神田區表神
保町二 文房堂内

矢崎千代二に就てパステル畫の指導を受けた人々が主となり昭和三年八月設立せるもの、毎月研究會を開き、年一回又は二回作品展を開いて居る。

日本美術院（日、彫）

東京市下谷區谷中上三崎南
町五二 電下谷二五一〇

明治三十一年十月、當時東京美術學校長を退いた岡倉覺三を盟主とし、橋本雅

邦以下二十六名を正員として結成。「新時代に於ける東洋美術の維持並開發」が創立に際しての二大主張であつた。同年十月第一回展を開催、且つ研究所を下谷谷中初音町に設置して後進の養成に努め雑誌「日本美術」を發刊。同三十九年十二月に至り一時東京の研究所を撤廢、同人四名は岡倉覺三と共に常陸の五浦に退去し専念研鑽に努めたが、大正二年岡倉覺三病歿するに及び、直に院の再興を劃し新に院舎を谷中上三崎南町に起し翌三年九月開院式を舉行、十月再興第一回展を開催した。再興に當りしは横山大觀、下村觀山、木村武山、安田靫彦、今村紫紅、小杉未醒、辰澤延次郎、佐川種郎、齋藤隆三等で其中實技者六名を以て同人とした。再興美術院には彫刻部並に洋畫部を設けたが洋畫部は大正九年小杉未醒、山本鼎、倉田白羊等の脱退と共に消滅した。毎年秋期に公募展を開き、又春季には内部の試作展を開く。大正十年米國クリブブランド美術館の要請に應じ、同國主要都市六箇所に巡回展を開き、以降日本美術の海外紹介にも努む。昭和十年帝國美術院改組に際して、同人合議の上新帝國美術院への参加を聲明し、同人中、横山大觀、安田靫彦、小林古徑、前田青邨、富田溪仙の五名は第一部會員に、平櫛田中、佐藤朝山の二名は第三部會員に擧げられ、又藤井浩祐は故藤川勇造の後を繼ぎ第三部會員に就任した。十一年二月第一回帝展の開會に参加す。六月新

任平生文相の試案提示されるに及び、同院出身の會員は（藤井浩祐を除く）他の八會員と共に同試案を改組の趣旨を全く没却せるものと斷じ、當局不信任を聲明して會員を辭任した。同年同人近藤浩一路、藤井浩祐、武井直也の三名が脱退した。十二年三月院友の集會として院友俱樂部が結成された。同六月、帝國藝術院創設されるや同人中横山大觀、安田靫彦、小林古徑、前田青邨、平櫛田中、佐藤朝山の五名は帝國藝術院會員となつた。同九月再興第二十四回展を開催した。又同月院友十二名が脱退した。

〔評議員〕高田早苗、原富太郎、齋藤隆三（同人）横山大觀、木村武山、安田靫彦、小林古徑、前田青邨、大智勝觀、平櫛田中、吉田白嶺、佐藤朝山、中村岳陵、荒井寛方、山村耕花、筆谷等觀、長野草風、橋本靜水、石井鶴三、小川芋錢、北野恆富、保田龍門、眞道黎明、橋本永邦、小林柯白、郷倉千靫、堅山南風、酒井三良、富取風堂、小山大月、喜多武四郎、新海竹藏、大内青岡、奥村土牛、溝上遊龜、田中青坪、山本豐中、中村貞以、太田聰雨、宮本重良、松原松造、中村直人（院友）西村青歸、牛田雞村、兒玉素行、石原春秋、野生司香雪、奥村藻山、大塚晃峻、橋本秀邦、黒田古郷、木下春、四田觀水、加藤洵綾、歸山千若、奥村玲瓏、野田文雄、跡部白鳥、三石紅樹、中庭媛華、小島一露、並木瑞穂、眞道秋皓、藤井白映、鈴木大蔵、石本光太郎、柴宗廣

高橋萬年、中島清、小谷津任牛、村田泥牛、高橋周桑、上田畦草、高橋秀佳、高橋都哉、中島采刀、岡田壺中、川手青郷、鈴木島心、島田訥郎、岡田雄鷗、菊池公明、松永成路、宮崎東里、河村良孝、半田鶴一、我妻碧宇、丸儀太郎、宮田隆子、鈴木三朝、鶴飼節夫、横田仙草、花岡朝生、佐藤耕寛、冬木大内、小林草悅、大橋敏男、村田徳次郎、關谷充、松村秀太郎、杵谷精一、寺瀬默山、入江美法、大野隆一、林是、矢崎虎夫、横田七郎、宮本理三郎、辻汎吉、長濱虎雄、長谷川豐雄、岡村進、小林章、中平四郎、古藤正雄、土井要輔（十二年度新院友）ハツ井舜圭、村田一橋、新井勝利、對馬安正、佐野光穂、岩橋英遠、河内舟人、小島丹溪、半田泰至、鈴木主子、里内三郎、安孫子荻聲、久保清子、中島萬木、河野正造、關長造（研究會員）九十三名

同院第二十五回展規則抜萃

一、本會ハ昭和十三年九月三ヨリ十月四日迄上野公園東京府美術館ニ於テ之ヲ開ク

一、出品ハ繪畫及彫塑ノ二種トス

一、本會ニ出品セントスルモノハ出品目錄ヲ添ヘ八月二十七日ヨリ二十九日マデ（毎日午前八時ヨリ午後六時迄）ニ出品物ヲ東京府美術館内日本美術院出品受付事務所ニ差出サルベク本院ハ鑑査ノ上之ヲ本會ニ陳列ス

一、鑑査ハ本院同人之ヲ行フ

一、出品物ハ總ベテ新製作ニ限ル公私展覽會ニ一タビ公表シタルモノハ採ラズ

一、陳列サレタル作品中特ニ優秀ナルモノアル時ハ詮衡ノ上本院ハ之ニ賞ヲ附スルコトアルベシ

一、賞約サレタル出品ニ對シテハ手数料トシテ賞價ノ一割ヲ本院ニ申受クベシ

一、本會開會後引續キ京都或ハ大阪名古屋等ニ於テ開會スルコトアルベキニツキ出品者ハ豫メ之ヲ承認シ置カルベシ此ノ場合出品物ノ返附期限ハ更ニ通知ス但シ當該出品物ノ開催地往復運送費ハ本院之ヲ負擔ス

日本美術協會（綜合）

東京市下谷區上野公園櫻ケ岡 電下谷一九一〇

明治十一年日本美術の衰頹を憂へ河瀬秀治等の同志會として美術品評會を開き、翌十二年會名を選んで龍池會と命名し、佐野常民を會頭に推し明治十六年有栖川宮熾仁親王殿下を總裁に奉戴した。而して明治十三年内務省博物館の開設せる第一回觀古美術會を第二回より繼承して開催し明治二十年に至つた。此年十二月規則を改正し、會名をも亦日本美術協會と改め、其後毎年春季二回（彫刻、工藝及書、篆刻）、秋季一回（日本畫）の三回に分ち展覽會を開催するを例とする。昭和十一年度は第百回に相當せるを以て記念の爲各部の綜合展覽會を春季に於て開催した。大正十四年組織を改めて財團法人とした。而して現在其組織は第一（繪畫）、第二（書、篆刻）、第三（彫刻）、第四（建築圖案）、第五（玉、石、木、竹、牙、角、介甲彫品、木象嵌）、第六（彫金、鋲起、鋲金）、第七（鑄金、鍛金）、第八（陶磁、七寶、玻璃）、第九（漆器、蒔繪）、第十（織物、刺繡）、第十一（寫眞、製版）の十一部より成る。

尙同會列品館は大正十年の竣工で平家建、延坪五百二坪、同會主催展覽會に使用する外は希望者の依頼に應じ貸館する事がある。

〔總裁〕高松宮宣仁親王殿下〔會頭〕伯爵金子堅太郎〔副會頭〕中田敬義〔專務理事〕溝口順次郎〔理事〕男爵東郷安山崎朝雲、八木岡春山、香取秀真、板谷波山、千葉胤明、大坪正義、今井爽邦、

〔監事〕星野錫〔主事〕安井易市、評議員三十一名、委員顧問十一名、委員百五名、名譽會員三十三名、特別會員四名、通常會員一千九十六名。

日本文人畫協會(日)

東京市小石川區小日向臺
町二ノ二九 渡邊雪峯方
電大塚六三三七

文人畫の振興を圖るを目的とし、隨時畫及詩文書等の研究會、講習會、展覽會等を開催す。昭和十一年十一月上野公園日本美術協會に第一回公募展開催。

〔幹事〕中村不折、渡邊雪峯、中田雲暉、久保楓閣、西丸小園、楠木玉郎〔評議員〕磯部羽州、伊藤紫雪、島田鶴亭、藤本翠園、辻香塙、松岡吳藍、海上龍子、本尾香園、木村棲雲、吉田苞竹、平原香雪、入澤華睦、寺山春龍、皆川桐蔭

日本壁畫會(洋)

東京市中野區昭和通
二ノ三〇 大井方

昭和十年十一月結成。壁畫藝術の研究

美術家團體一覽

並發表を目的とす。十二年五月銀座青樹社に第二回展開催。

〔同人〕井上三綱、大井基光、安田豊、圓城寺昇、武野光瑤、安藤信哉、富川潤一、松田文雄、布施信太郎、大内青坡、牛島憲之、大内青岡

日本漫畫會

東京市中野區本町通四
ノ一七 牛島一乃方

大正二、三年頃當時の都下新聞社在勤畫家の紙上藝術に飽き足らず、展覽會開催を發企したのが同會結成の起源で、現在ではジャーナリスト以外の青年漫畫家を擁して年一回展覽會を開催する。

〔會員〕池田永一治、池部鈞、牛島一刀、江島初喜、岡本一平、小野佐世男、大森弓磨、帷子進、可東みの助、京屋金介、北澤樂天、寺内純一、小林克己、小峰三四郎、近藤日出造、阪本牙城、清水勘一、志村和男、杉浦幸雄、杉田三太郎、田中比左良、田邊路平、名越國三郎、中村圭助、服部亮英、代田收一、細木原青起、前川千帆、水島衛保布、宮尾しげを、三宅當也、村上鐵太郎、森火山、森島直造、森山三郎、安本亮一、山本奎兵衛、矢崎茂四、和田邦坊、富山まもる、生澤朗、澁谷三止朗

日本木彫會

東京市世田谷區田園調布二
ノ七二六ノ一 澤田晴廣方
電田園調布二九八一

内藤伸の主唱により大正十三年設立された木彫研究會と其の姉妹會たる本生會とを合併して昭和六年春結成。木彫藝術の研究、發表を目的とし、毎年東京乃至大阪に於て製作展を開く。十一年二月内藤伸退會、研究費員に推さる。

〔幹部會務員〕佐々木大樹、三木宗策、澤田晴廣、中野桂樹、三國慶一、西村雅之〔會員〕佐崎霞村、木村威夫、橋本高昇、森野圓象、阿井瑞岑、佐伯量良、井口喜夫、西田明史、本田德義、大島駒藏、山助敏男、山口四郎、清水源可、平澤信勇、工藤敬三、外會友十七名。

日本輸出工藝聯合會

東京市京橋區木挽町商工省貿
易局内 電商工省二一六

昭和八年創立。日本工藝の傳統を表現して且つ海外の用に即せる工藝品の海外進出を助長せしめ一面以て本邦輸出貿易の伸長を圖ると共に他面世界文化の進展に寄與せんとするもの、内外に工藝的商品に關する陳列會を開催し、臨時輸出工藝に關する圖書、印刷物を刊行する。

〔理事長代理〕安田祿造〔常務理事〕京都工藝美術協會、愛知縣工藝協會、神奈川縣商工協會〔監事〕東北北海道工藝協會〔參事〕貿易局施設課長 齋藤吉臣〔工務局工業課長〕白井義三〔顧問〕〔特許局商標部長〕大島永明〔貿易局第二部長〕鹽谷狩野吉、〔貿易局輸出課長〕奥田新三〔東京美術學校教授〕和田三造

人形藝術院

東京市品川區南品川三ノ一
五一七 電高輪六四七〇

人形の藝術的向上を計るを目的とし、例年一回展覽會を開く。昭和十二年三月東京白木屋に第二回綜合人形展開催。

綜合人形展規約拔萃

一、本會の出品物は人形以外に認めず但し、大きさ並に素材には制限を加へず
一、出品物を左の部門に類別す
〔第一部〕技法の如何を問はず、純藝術品たるを要す
〔第二部〕全日本新興婦人人形コンクールとし出品者の資格を婦人に限定す
一、本會の出品は一般より公募す、但し出品の點數は一人三點以内に限る(但し會て發表せられたる作品は、これを出品するを得ず)

一、本院の推薦者を以て會員とし、會員は毎回無鑑査とす
一、本會の出品物にして優秀と認めたるものに對し授賞す
〔第一部〕最優秀者に人形藝術院賞、並に優秀者に人形賞を授與す
〔第二部〕優秀なる作品を七點選拔し、それぞれ新七草賞を授與す

一、出品物は凡て手数料を徴せず、但し出品者の希望により出品物は賣價を附し、賣約ある場合は、手数料として賣上げの二割を徴す

人形すがた會

東京市杉並區松ノ木町一六八

昭和十一年創立。人形の研究、製作を志す女性に依つて組織。昭和十二年十一月第二回展開催。

〔顧問〕太田徳久、小村雪岱、西澤笛畝、花柳壽美、藤懸静也、山田徳兵衛

ねばつち社(彫)

東京市豊島區島崎一ノ二二
志田達三 電大塚八六二

昭和九年度東美校彫刻科製造部出身者を以て組織。彫塑研究並發表をなす。

〔同人〕井上信道、盤若一郎、片山義郎、富岡泰、吉田寛治、横田文男、應巢照久、志田達三、上田薫、畝村直久、酒見恆、中村三郎、中村七十、淺岡重治、大間知龍之助、眞鎮忠行、富田武雄、松田一郎〔賛助員〕北村西望、建昌大夢

農村工業協會

東京市神田區錦町一ノ六 電神田四六七二

昭和九年創立。社団法人組織。農村工業の發達を圖るを以て目的とし、これに關する調査研究、生産技術及經營の指導、販賣連絡等の事業を行ふ。雑誌「農村工業」を發行し、展覽會、講演會の開催、講師の幹旋派遣等をなす。

〔會長〕子爵大河内正敏 〔顧問〕吉野信次、後藤文夫、伯爵有馬頼寧、結城豐太郎〔理事〕友部泉藏、吉田茂、田澤義鋪、月田藤三郎、那須皓、上田貞次郎、山本忠興、山口安憲、安藤廣太郎、佐藤寛次、佐野利器、關口八重吉、鈴木梅太郎〔監事〕寶來市松〔幹事〕増田作太

郎

NOVA美術協會(洋)

東京市世田谷區松原町四ノ一五一

昭和五年結成。從來の「興行的展覽會機構」、審査制を否定し、新感覺、新造形意識に基いて製作せんとする青年作家の集團。昭和六年より毎年春季に「無黨派的審査制」に依る公募展を開催。

〔會員〕大竹久一、鶴岡政男、關川護、小俣球一、北川實、松本俊介

巴里東京新興美術同盟

東京市中野區江古田四ノ一五四 齋藤五百枝方
電中野四四一四

昭和五年成立。巴里に於けるアヴァンガルド藝術を東京に招來し又東京の新興美術を巴里に紹介し一黨一派に偏せざる文化交驛を行ふ。昭和七年第一回展開催〔盟員〕齋藤五百枝、峯岸義一〔展覽會委員〕(在佛)アンドレ・サルモン、アンドレ・ブルトン、パブロ・ピカソ、ジャン・ミロ、ジュアン・リユルサ、アンドレ・マツソン、ジャン・ド・ボットン、モイズ・キスリング、松尾邦之助、(東京)川路柳虹、田邊孝次、森口多里、小城基、柴田勝衛

葉隱美術協會(綜合)

東京市世田谷區深澤町一ノ三四一〇 江島信一方

昭和十一年五月創立。佐賀縣出身美術家により組織。年一回展覽會開催。

〔會長〕岡田三郎助 〔副會長〕田雜五郎〔幹事〕江島信一〔會員〕(日本畫)野口謙次郎、山口實、池田幸太郎、秀島英磨、久間光一、陣内松齡、辻勝喜、立石春美(油繪)岡田三郎助、小代爲重、北島淺一、御厨純一、武藤辰平、光石藤太

手塚一郎、宮地享、高木背水、松本弘二、副島秀生、山口猛彦、山崎善次郎、鍋島柳江、新宮清彦、甲斐仁代(彫刻)古賀忠雄、松尾仁衛、石田尙友(金工)田雜五郎、石田英一、江島信一、土屋杏平

白璧會(洋)

京都市東山區神宮道堀池町山内善三郎方電上二二五五

昭和二年九月關西美術院關係の同志を以て結成。昭和十二年十一月第十五回展開催。

〔會員〕柴田又太郎、藤井義晴、水清公子、戸島孚雄、井上賢三、山内善三郎、伊谷賢藏、岩崎金雄、錦義一郎、飯田清毅、伊庭傳治郎、尾崎悌之助、永井朝夫、松村綾子、津田周平、藤田輝世、中西倪太郎、竹内喜助、廣田延造、豊岡孝子

白御會(日)

京都市左京區淨土寺南田町一〇三 佐野光穂方 電上七二九七

昭和十一年九月關西在住の院展系作家に依り結成。日本美術院の精神に則り、藝術至上主義を本分とす。毎月研究會を開き、春季に、大阪、京都兩美術館に展覽會開催。

〔會員〕石丸大象、岩永蘇香、今井紫悦、細田謹之助、富川潤一、粥川伸二、川本朝雄、館岡栗山人、中島榮刀、永友綠樓、内藤宗純、上田英二、山田冬僊、山本大慈、藤井源一、福井末義、小松均、佐野光穂、三宅淳、鹽見青嵐、持田卓二

白日會(洋、彫)

東京市下谷區清水町六 富田温一郎方

大正十三年春組織。同年六月東京三越本店に第一回展開催。爾來毎年春季に東京府美術館に公募展を開き昭和十二年第十四回展に及ぶ。

〔會員〕(繪畫部)池部鈞、荻野康兒、加治屋隆二、中澤弘光、無緣寺心澄、浮島弘行、山田説義、五島甚之助、伊藤清永、灰野文一郎、笠原靱、田中繁吉、能勢龜太郎、間部時雄、秋元松子、富田温一郎、永井武夫、野口良一、小堀進、相田直彦、篠原薫、大久保喜一、渡部菊二、竹林順一、長明、村上鐵太郎、熊谷登久平、香田勝太、笹岡了一、鈴木秀雄(彫塑部)吉田三郎、永原廣、木村桂二、笹野惠三(會友)(繪畫部)生澤朗、石橋隆良、伊倉晋、鴛川誠一、渡邊柳次郎、柏木仁平、川村精一郎、高畑正明、網島廉、岡崎金藏、栗林文、山森茂、小坂立夫、小泉馨二、兒玉道夫、河野浩、朝田進、坂江重雄、南登志、平川要、關口誠、鈴木民次郎、鈴木莊示(彫塑部)岩崎良平、兒島正典、西田信、明珍勝友 同會第十五回展規定拔萃

一、(會場) 東京府美術館、(受付場所) 同所、
(受付期日) 一月二十八、九日、(開會期日)
二月二日より二月十三日迄、(出品點數) 一
人五點まで

一、出品者は出品手数料として一人に付金二
圓を出品物搬入と同時に納入の事、但し鑑
査の結果一點も入選せざるも手数料は返戻
せず

一、鑑査は會同人によりて之を行ふ

一、優秀なる作品に對しては白日賞並に獎勵
賞を贈與し併せて受賞者は翌年展覽會に二
點以内を無鑑査出品する事を得

一、陳列品賞約となりたる時は手数料として
賞價の二割を本會に於て申受くる事

一、地方出品者搬入搬出は荷送手数料送共一
點に付金六十圓にて下谷區谷中坂町池田運
送店(電話下谷七四四七、振替東京四五二
七二)にて取扱ふに付利用されたし

白 嚙 齋 (洋)

東京市目黒區原町一二五
七 廣本幸與九方

昭和八年一月結成。洋畫研究團體。十
一年五月銀座資生堂に第一回展開催。
〔會員〕 淺井政勝、内田一郎、畑季雄、
廣本幸與丸、高橋好雄

白 閃 社 (日)

東京市杉並區永福町四七〇
渡部香雪方

昭和十一年十二月舊南畫院有志に依り
結成。十三年五月銀座松坂屋に第二回展
開催。

〔會員〕 石原紫雲、大根田雄國、渡部香
雪、田中蘭谷、田岡春徑、田能村竹莊、
村上得明、高士陶篁、江川武村、須藤悟

美術家團體 一覽

雲、鈴上石鶴

白 朝 齋 (洋)

東京市淀橋區下落合一
五四〇 杉本貞一方

昭和九年秋舊帝展第二部審査員級有志
により組織。毎年二回東京に於て展覽會
を開く。昭和十二年一月日本橋高島屋に
第三回展開催。

〔同人〕 金澤重治、金井文彦、吉村芳松、
田邊至、大久保作次郎、安宅安五郎、楠
木久太、杉本貞一

白 鈴 齋 (日)

東京市板橋區中新井町三
ノ二〇七五 石川朝彦方

昭和五年一月創立。會員の自由なる創
作發表機關。

〔會員〕 石川朝彦、春日井幾代、武田一
路、上田春芳、中島白陽、前田鳳堂

八 爽 齋 (洋)

東京市澁谷區千駄ヶ谷五
ノ八八八 石川求龍堂内
電四谷二五八四

求龍堂並に兜屋主催の洋畫發表機關。
昭和十二年十月銀座資生堂に第一回展開
催。

〔會員〕 青山義雄、林重義、猪熊弦一郎
伊藤廉、小磯良平、向井潤吉、野口彌太
郎、曾宮一念

原町工藝研究會 (工)

福島縣相馬郡原町吉井
柳家具製作所内

昭和五年四月創立。同地方の特産たる
樺材による工藝品の改善發達並にその販
路開拓を圖る。年二回展覽會を開く。

〔會長〕 吉井佐吉、會員三十八名。

阪神彫塑家協會

大阪市住吉區天王寺町
三二六一 上田彌方

昭和十一年十月創立。二科出品の彫塑
家を以て結成。十二年十月第一回展開催。

〔會員〕 織田久馬一、唐木政一、上田曉、
山根顯一、木村敏一、水野美惠子、妹尾健
太郎、山本博一、河合芳男、大西金次郎

斑 丘 社 (工)

東京市下谷區上野元黒門町
六神戶屋内 電下谷九八一

昭和五年度東美校工藝科入學者を以て
組織する工藝研究團體。毎年十一月展覽
會開催。

〔同人〕 井尾敏雄、井上周平、石橋貞治
橋本欣三、長谷川八十吉、近江晃、小川
正、和田鴨江、涌波達雄、鹿取一男、金
田諒三、柏崎榮助、芳武茂介、高田六藏、
中川清一、中村保彦、内田邦夫、乘松巖、
山本光、松原春男、松川蒸二、小池岩太
郎、小林達雄、古代幸三、江波戸一郎、
寺井直次、赤松義弘、淺田二郎、佐伯義
雄、宮島昌男、島田陽次郎、下暢、廣瀬
英五郎、末田利一、進來昇

美 校 模 演 會

横濱市中區庚臺六
宮川香山方

昭和十年五月創立。横濱在住若しくは
出身の東美校卒業生、在校生、關係者を
以て組織。親睦團體。年一回展覽會を開
催。

〔幹事〕 飯田九一、石野隆、岩井藤吉、
河原丈夫、宮川澄康、森田民藏、鈴木泰

美術工藝大阪巧藝社

大阪市北區河内町一ノ
二三 伊藤光秋方
電堀川二六八三

大正十四年創立の精美會を昭和八年會
員を増加して現稱に改む。年一回同人の
工藝展開催。

〔顧問〕 白川朋吉 〔會員〕 伊藤光秋、
伊藤鐵雄、今橋春齋、市川鏡瑠、大原貫
學、大森金一、武石山月、田中貞二、灘
波雅堂、楠正多、松澤壽水、松下翠峰、
小林美春、三國丹祚、北野宗三郎、龜文
堂正平、江殿功一齋、鈴木玩々齋

美 術 公 正 會

東京市淀橋區西大久保二ノ
二五三 電四谷六三二五

昭和十年十月美術關係の記者に依て組
織。美術行政並に美術に關する諸問題を
研究し、時宜に應じて其主張を行ふもの
とす。臨時研究會、講演會を開催しパン
フレットを發行す。

〔會員〕 岩佐新、垣見泰山、浦崎永錫

美術雜誌東臺俱樂部

東京府美術館内

美術雜誌編輯者の組織する親睦團體。

〔會員〕 藤本韶三（アトリエ）、石川幸三郎（美之國）、岩佐新（美術）、浦崎永錫（美術界）、垣見宣修（美術時報）、大下正男（みつる）

兵庫縣美術家聯盟（日、洋）

神戸市元町鯉川筋畫廊内電三宮三三一

昭和五年八月兵庫縣在住の美術家を以て結成。事業として展覽會、講習會、研究會等を開催し、毎年春季に同人展を秋季に公募展を行ふ。十二年六月第十三回展、同十月第十四回展を神戸大丸に開催。

〔評議員〕（日本畫）福田眉仙、牛尾桃里、戸張節以、中村久巳（洋畫）鈴木清一、平松武清、山崎隆夫、櫻井政雄、杉浦三郎、東晴司、大石輝一、山口久一〔囑託〕大塚銀次郎、會員九十四名。

兵庫縣美術協會（綜合）

神戸市須磨區離宮前町二番屋敷畫室社山本廣洋方電須磨一〇二〇

大正十一年三月創立。同地方美術の獎勵を目的として毎年春秋二回公募綜合展を神戸三越に開く。昭和十二年六月第二十七回展開催。機關雜誌「畫室」發行。〔會長〕兵庫縣知事 〔總務〕山本廣洋〔展覽會委員〕飯塚周悅、土肥蒼樹、大橋基市、立脇泰山、中野草雲、山下摩耶、山下薫、前田萩都、前田賢、淺野祐夫、古川素山、宮崎翠濤、伊川寛、中安保、唐木政一、小倉千尋、丸美小平、大串貞美、佐野光穂、小山正雄〔十一年度展覽會審查員〕廣島晃市、石崎光瑤、村上華岳、森月城、田中善之助、黒田重太郎、濱田葆光、國枝金三

廣島縣工藝協會

廣島縣工藝協會

廣島市猿樂町廣島縣產業獎勵館内

昭和六年十月設立。縣下の工藝品製作者並關係者を以て組織。事業として工業品の調査、工藝品意匠圖案の研究、工藝品需給斡旋、展覽會開催等を行ふ。〔會長〕峰松眞三郎〔副會長〕米山利助伊藤琢郎

廣島縣美術協會（日、洋、工）

廣島市猿樂町縣產業獎勵館内電一八三八

大正四年創立。美術及美術工藝の進歩發達を圖るを目的とす。公募展、講習會及講話會等開催。昭和十二年五月第二十三回展開催。

〔會長〕森村義信〔副會長〕原貫之助、長尾富太郎〔主事〕向原良一

びゆるて（洋）

豐島區長崎町一ノ二三八三大山英夫方

昭和十一年度東美校洋畫科卒業生を主なる會員とする。十二年十一月銀座三味堂に第四回展開催。

〔同人〕岩田榮、橋本正朝、大山英夫、村田保三、廣瀬正雄、須藤清彦、山中清一郎

伏虎美術協會（洋）

東京市澁谷區千駄ヶ谷町五ノ九〇二 木下孝則方

昭和十一年三月設立。和歌山縣下の洋畫の發達獎勵を目的とす。毎年春季和歌山市に公募展開催。十二年五月第二回展を開いた。

〔會長〕和歌山縣知事 〔會員〕木下孝則、木下義謙、濱地清松、川口軌外、碓伊之助、國部邦香

服飾美術會

京都市岡崎北御所町三七山鹿清華方 電上八一二

昭和十年一月創立。舊綵工會同人により組織。毎月數回研究會を開き又各地の百貨店に展覽會を開催す。

〔會員〕石田玉英、井下阿木良、井口紀、岩崎眞也、長谷川文平、林雨染、馬場笛山、星流、小合友之助、太田光嶺、長村華城、横山芙明、田中貞造、田中初雄、田井修一、村田春祿、中村鶴生、山鹿清華、山崎茶平、安竹聖果、福村健、悟道卯一、駒井宗悅、皆川月華、島田勝四郎平尾周更

福井縣漆藝會

福井縣今立郡河和田村小林作兵衛方

福井縣漆工藝の發達を目的とし、漆藝の研究並發表を行ふ。

〔名譽顧問〕根尾謙兒、山崎覺太郎〔會長〕小林作兵衛、會員七名。

福井縣美術協會

福井市福井縣商品陳列所内

大正十五年創立。福井縣出身並在住の美術家を以て組織。縣下美術及工藝の發達を圖るを目的とす。年一回の美術及工藝品展覽會開催の他に講習會、講演會等を催し、又他の博覽會、共進會等へ出品の斡旋をなす。〔會長〕根尾謙兒

福岡縣工藝協會

福岡市天神町福岡縣產業獎勵館内

昭和十一年八月設立。縣下工藝産業の發達を圖るを目的とし、工藝に關する調査、展覽會、講習會の開催、工藝功勞者の表彰等を行ふ。〔福岡縣工藝展覽會〕は同協會員が主としてその開催に當る。〔會長〕福岡縣知事

福岡美術會（綜合）

福岡市因幡町福岡市通俗博物館内電一六七五

大正十二年創立。福岡縣出身並在住の美術家を以て組織。美術の向上に資する爲中央より二科、春陽、獨立等の諸美術展の誘致開催に努め、又毎年會員の綜合作品展を開催する。

〔會長〕石橋愛太郎 〔幹事〕富田賢四郎、光安浩行、永村豊秋、眞岡大莊、林玄海、藤田碧堂、杉江春男、山喜多二郎太

福島美術協會(洋)

福島縣福島市役所

昭和五年九月、福島縣に於ける美術の發達を目的として設立。年一回福島市に於て公募展開催の他、臨時講習會、講演會等を開く。

〔總裁〕福島縣知事〔會長〕佐藤澤

福陽美術會(日)

東京市本郷區駒込林町七六 角田磐谷方

大正八年、福島縣出身の日本畫家を以て組織。會員相互の親睦、後進の誘掖に努め、東京に於て三回、郷土に於て毎年展覽會を開催し現在に至る。

〔會長〕勝田蕉琴〔理事〕荻生天泉、太田秋民、酒井三良、渡邊農畝〔幹事〕角田磐谷、石塚省三、渡部浩年、酒井白澄、鴻巣一善、須田善二、湯上縁

フォルム展(洋)

東京市大森區市野倉町七 戸田定方

昭和十年六月川島理一郎が國畫會を退會した際、行動を共にせる同門下生に依り組織。同人の純粹なる制作發表機關。昭和十一年に四回、十二年に二回同人展開催。

〔同人〕窪田榮、吉見庄助、難波田龍起、大橋城、大宮松太郎、戸田定

戊辰會(日)

東京市杉並區井荻一ノ四〇 磯部草丘方

昭和二年下町會展覽會が第十回を以て休止することとなり、自由なる作品の發表機關を失つた當時の若手作家中、先づ兒玉希望、長谷川光孝の兩名が發起となり戊辰會を結成、翌三年春第一回展を開催した。會員の自由製作發表を目的とし、毎年一回展覽會を開催。昭和十二年三月第八回展に至る。尙一月新會員十一名、別に會友制度を設け、新會友二十五名を制定した。

〔顧問〕川合玉堂〔會員〕飯田九一、伊藤響浦、磯部草丘、井上恆也、今中素友、石渡風古、花村晃觀、千嶋華洋、太田一彩、大島佳山、甲斐常一、川崎求霞、高田美一、高田那美、田中針水、田崎美山、長野草風、村雲大機子、野添草郷、野澤蓼洲、山下巖、松本泰水、古家苔軒、古屋正壽、藤井霞郷、藤井觀文、兒玉希望、佐々木尙文、菊池華秋、水野陽翠、島春潮、清水有聲、鈴木有哉〔會友〕猪卷清明、石塚晃溪、林楚人、大野重幸、岡田霞友、若林翠光、渡邊浩年、川合白流、神谷飛佐至、大工園秋夫、高橋勇次、田中宏明、中村黎峰、長嶋華涯、安田傘契、藤谷雅春、福宿一穂、阿部六陽、境野五郎、坂井青泉、澤谷五台、御供喜代太、宮部聚芳、平田虹橋、武谷雪嶺

邦畫教育研究會

東京市赤坂區新坂町四七六 貫鏡心方

昭和十二年三月結成。東美校日本畫科及び師範科卒業の教育者にして日本畫研究者を以て組織。爾來研究會を開催する事四回。

〔會長〕結城素明〔評議員〕川崎小虎、矢澤弦月、小泉勝爾、山田廉、常岡文龜多賀谷健吉、松田義之、松垣鶴夫〔幹事〕狩野探道、大貫鏡心、大島正記、白井剛夫、石田粧秋、松垣鶴夫、淺野秀一、下田舜堂〔會員〕五十名

萌青會(日)

東京市小石川區小日向臺町三ノ五三 長澤美枝方
電年込二二三

女子美術專門學校師範科日本畫部及高等科日本畫部の昭和九年度卒業生有志を以て組織。十一年四月第一回展開催。會員十三名

北海道美術協會(綜合)

札幌市北四條西七丁目三

大正十四年創設。爾來每秋展覽會を開催。昭和十二年第十三回展に至る。

〔會長〕(北海道長官) 石黑英彦〔副會長〕(北海道帝國大學總長) 今祐〔理事〕荒瀬實、木下三四彦、小谷義雄、齋藤與一郎、鬼川俊藏、河合稜石、島崎貢〔會員〕(日本畫) 本間莞彩、岩田華谷、片岡球

子、北山晃文、成田太古、炭光任、小山浩子、島田壽山、小濱龜角、菅原無田、高木黃史(洋畫) 本間紹夫、池谷實一、池田雄次郎、兼平英示、菊地精二、今田敬一、能勢眞美、中村善策、岡部文之助、高橋北修、田邊三重松、水野佳一、久保守、山田正、小山昇、前田政雄、齋藤尙三浦鮮治、林竹次郎、繁野三郎、石川確澤枝重雄、能戶幸、朝倉力男、田邊謙輔、伊藤信夫(彫塑、工藝) 本郷新、山内壯夫、武内收太、本間貞子

北方美術協會(洋、彫)

小樽市山ノ上町四四 益谷政雄方

昭和十年秋小樽出身及在住の美術家(主として洋畫彫塑)に依つて結成。十一年春同市に第一回展を、十一月に秋季展を開催。十二年より會期を六月と定め第二回展を開いたが十三年度より公募展を開催、尙講習會を催し、研究所を設置する豫定。

〔會員〕兼平英示、樹田誠一、三浦鮮治、中野五一、中村善策、益谷政雄、谷吉二郎、竹部武一、山崎省三

北陽會(綜合)

東京市麹町區大手町二ノ二 清ビル六二一號
電九之内一八七七

昭和八年創立。主として、東美校卒の富山縣出身在京美術家を以て組織。毎會員の製作展を開く。

〔會長〕 伯爵前田利男 〔副會長〕 高廣三郎 〔世話人〕 佐々木大樹、郷倉千靱、長谷川義起、山崎覺太郎、中谷宏運、五島甚之助、會員五十一名

墨雲社(日)

大阪市西區南堀江通三ノ二二赤松雲嶺方

大正十一年七月、赤松雲嶺門下に依り組織。毎月研究會を開き臨時展覽會を開催する。

〔會員〕 四十八名

墨人會俱樂部(日)

東京市世田谷區三宿町七一電世田谷三七〇九(呼)

昭和十二年二月創立。「日本民族の文化高揚の爲に東洋藝術の再認識と進展とを期するもの相集り、作家の個性を尙ぶが爲に各人主義を採る」。同年六月大阪朝日會館に第一回展開催。十三年度は、東京に於て六月、大阪に於ては七月、第二回展を公募開催する。

〔會員〕 生田花朝、小川芋錢、渡邊大虛瀧秋方、津田青楓、中川一政、草野蘆江矢野橋村、八百谷大樹、小杉放庵、小松均、菅橋彦(代表者) 渡邊大虛

同會第二回展公募規定拔萃

〔會場〕 東京 日本美術協會、大阪 大阪市美術協會

〔會期〕 東京 六月十八日ヨリ二十七日マデ、大阪 七月二日ヨリ十一日マデ

〔手数料〕 出品作品 一點ニ付金一圓ト定ム

〔賣約〕 出品作品ノ賣約有リタル場合賣價ノ二

割ヲ本會ニ申受ク

〔審査〕 本年度審査係ハ左ノ如シ

津田青楓、中川一政、矢野橋村、小杉放庵菅橋彦

〔招待推薦〕 本會ハ作品ノ招待又ハ推薦ヲ行フ事アルベシ

馬込美術會

東京市大森區馬込町東二ノ九七三 大塚金吾方電大森四〇五〇

昭和二年春設立。馬込町在住美術家の親睦團體。展覽會を開く事三回に及ぶ。

〔會員〕 佐藤朝山、橋田庫次、關口隆嗣馬越樹太郎、小林克己、須藤宗方、服部亮英、田澤八甲、井上白楊、池部一夫、青柳環穂、大塚金吾、眞野紀太郎、矢島甲子太郎

三重縣工藝協會

三重縣津市中茶屋町三重縣廳商工課内

昭和九年三月創立。縣内在住の工藝品製造業者、販賣者並に工藝組合團體を以て組織。縣下工藝品の改善並に輸出増進を圖るを目的とす。展覽會講習會の開催取引上の紹介斡旋、工藝に關する調査等を行ふ。

〔會長〕 (三重縣經濟部長) 松木茂一、正會員百七十名

未知會(洋)

東京市小石川區林町四〇藥師寺孝太郎方電大塚二八五二

洋畫の研究並發表團體。昭和十二年五月第五回展開催。

〔會員〕 藤岡俊一郎、野末恆三、里見哲明、池田俊一、大畑實、寺田春一、上原誠、齋藤齋、藥師寺孝太郎、本儀信

明朗美術聯盟(日)

東京市目黒區三谷町八四川口方 電在原四〇九六

昭和九年一月青龍社舊同人落合朗風、川口春波等に依り結成。同年秋第一回展開催、同十二年四月盟首落合朗風急逝しよつて川口春波主宰となり同年九月第四回展を開催した。尙此會期中、同人盟友八名が退會し、又十三年五月同人小林彦三郎他六名が退會した。年一回以上の公募展を開催し、明朗美術研究所を設置す十三年九月第五回展開催。

〔同人〕 川口春波 〔盟友〕 伊久留朗兒狩野晃行、二宮幸世、田代寬哉〔盟員〕 渡邊武行、東條光高、木和村創爾郎、山下昌風〔研究員〕 蒔田英一、吉田錦穂

同會第五回展規定拔萃

一 作品受付は九月八日午前九時より午後五時迄に出品目録と手数料金壹圓を添へ上野美術館内明朗美術展事務所へ搬入されしし出品點數及び畫幅の面積は任意とす、但し出品作品は適當の裝飾をなすこと

一 作品は鑑査の上之を陳列す、鑑査は同人之に當る

一 作品の賣約されたる場合は手数料として三割を本聯盟に申受く。但し破約の場合は本聯盟に於てその責任を負はず

一 優秀なる作品に對しては授賞することある

べし

一 優秀なる作品を數回發表せる作家は本聯盟の決議に依つて逐次、盟員、盟友、同人に推薦することあるべし

ハツ手會(工)

東京市中野區鷺ノ宮木村草平方

昭和十一年七月創立。彫刻家による工藝品の製作並發表の團體。十一年七月第一回展開催。

〔同人〕 林是、長谷川豐雄、岡村進、中村直人、黒田嘉治、三枝古都、松村外次郎、木村草平

八木橋文平あけび工藝指導所

弘前市山道町一二電六一八

昭和七年一月八木橋文平に依り設立。輸出向新あけび工藝品の研究創案並其販路増大に努む。

〔所長〕 八木橋文平、所員百五十名

山梨美術協會(日、洋、彫)

甲府市錦町一八高見澤重一方

昭和十一年十月結成。山梨縣出身及在住の美術關係者を以て組織。展覽會、講演會、講習會等を開く。昭和十二年十一月第一回展を甲府市に開催。

〔會長〕 (山梨日々新聞社長) 野口二郎 〔會員〕 五十五名

幽興會(日)

東京市澁區上落合二ノ六四〇 古川北華方

昭和十一年創立。古川北華を中心とする集で、同人展を開く。同十二年六月上野松坂屋に第二回展開催。

〔會員〕橋本關雪、古川北華、正宗得三郎、牧野虎雄、錢瘦鉄、近藤浩一路、中川紀元、藤田嗣治

洋風版畫會

東京市澁野川區西ヶ原町三六一 渡邊光徳方

昭和四年十二月創立。主としてエツチンク及石版畫の團體。毎年一回展覽會を開く。

〔會員〕岡田三郎助、田邊至、吉田久繼、織田一磨、中村研一、及川康雄、間部時雄、小磯良平、猪熊弦一郎、永坂春雄、大久保作次郎、寺崎武雄、渡邊光徳

横濱美術協會(日、洋、版)

横濱市中區弘明寺町三一〇志村計介方 電長者町一二五七

昭和七年七月創立。横濱在住の日本畫家及洋畫家を以て組織。年一回日本畫、洋畫、版畫の公募展を開く。十二年十一月同市興産館に第六回展を開催した。尙本年は入選作品全部及會員の作品計百五十余點を傷病兵慰問の爲に寄贈した。

〔會長〕横濱市長 〔會員〕五十名 〔無鑑査〕七名

洛 窯 會(工)

京都市伏見區桃山宗和園

昭和四年創立。澤田宗山の指導を仰ぐ

美術家團體一覽

京都陶磁器作家の團體。毎年數回展覽會を開き、毎月研究會を催す。

〔會長〕澤田宗山 〔幹事〕松本石亭、鈴木則司、伊地知仁郎、横山瑞祥、堯部清

里 南 會(洋)

東京市中野區江古田二ノ九三一 鈴木良三方 電落合長崎二五六九(呼出)

昭和十一年三月結成。嘗て巴里に於て共に修學せる人々。隨時作品展開催。

〔會員〕勝間田武夫、能勢龜太郎、大橋了介、鈴木良三、高林和作、田村憲、和田清

離 騷 社

東京市牛込區津久戸町三〇西澤笛歌方 電牛込二一八一

大正九年八月創立。會員相互の親睦を圖ると共に、毎月美術に關する月次研究會、見學旅行等を催して修養に資せんとする集である。

〔幹事〕西澤笛歌、金井紫雲、石川昂水、飛田周山、甲口黃葵、會員三十七名

立 光 會(洋)

假事務所 大阪市北區夷戎野町七胡桃澤方

昭和八年六月創立。關西に於ける東光會出品者及同好者を以て組織。十一年第一回展開催。

〔講師〕齋藤與里 〔幹事〕岩中徳次郎、家永麒三郎、石田勝重、西寺鐵舟、小栗文雄、川本浩三、河井達海、吉村藤作、

多田俊彦、辻利平、胡桃澤源一、山崎萬壽夫、小池光三、圓城寺漫、三田村集、柴谷宗治、普通會員六十名

立 陣 社(洋)

東京市澁野川區下落合四ノ二〇九六島津方 電大塚三五三一

昭和十一年七月創立。舊帝展系の青年洋畫家を以て結成。十二年十月銀座日動畫廊に第四回展を開催したが、十二年五月解散した。

〔同人〕井手坊也、榎戸庄衛、石川滋彦、圓城寺昇、細井繁誠、笹岡了一、大貫松三、三輪孝、川端實、島津一郎、野口良一、須田壽、山口猛彦

柳 美 會(工)

京都市伏見區桃山宗和園内

大正六年京都柳池校開校五十年記念に同校關係の工藝家を以て創立。毎年展覽會開催。

〔理事長〕澤田宗山 〔理事〕泰藏六、吉田長春、青木俊勝

聊 娛 會(洋)

東京市澁野川區下落合四ノ一六二三 大給近清方

大正八年十月創立。故黒田清輝子及南部利淳伯及び故小笠原長幹伯の發意に依り華族及び華族籍にありたる者を以て組織せる洋畫愛好者の團體で、年一回展覽會を開く。昭和十一年新宿伊勢丹に於て第十二回展を開いた。

〔代表者〕男爵徳川義恕 〔幹事〕子爵織田信大、子爵松平定晴、大給近清、會員十九名、客員十五名

綠 人 社(彫)

東京市下谷區谷中上三崎南町六〇伊藤鉦次方

昭和八年度東美校彫刻科製造部卒業生を以て結成。毎年六月展覽會開催。

〔會員〕岩崎良平、伊藤鉦次、西田信、星野宣、小田寛一、川口信彦、漆原馬須雄、宇佐見庄一、新井喜惣治、青柳利男、明田川孝、北青史

綠 耀 彫 刻 會(彫)

東京市豊島區千川町一ノ三一七〇 中野昂方

舊稱大東彫塑會。大正十二年以降の東美校木彫部卒業生有志を以て組織。關野聖雲の彫刻界に於ける主張を襲賛せんとす。會員六十名

璫 爽 畫 社(日)

東京市豊島區池袋二ノ九七一浦田方

故松岡映丘の門下生有志を以て昭和九年結成。新日本畫の創作を目的とす。十二年六月高島屋に於て第二回展を開催した。

〔會員〕岡田昇、高山辰雄、若海鯨一郎、浦田正夫、山本丘人、須田善二、杉山寧

連 袖 會(洋)

東京市世田谷區上馬町一ノ八二七畑田方

昭和十二年二月安井曾太郎門下生に依り組織。十三年三月銀座青樹社に第一回展開催。

〔會員〕石川久三郎、奥田郁太郎、小野末、笠置イヅ子、片多三吉、金子博信、狩野壽一、北村富三、高田誠、仲田菊代、中村琢二、二宮雪夫、畑田一燈之、久野昌康、本郷惇、牧田正雄、三浦俊輔、鷺田一太、渡邊正太郎、渡邊宗一

麗交會(工)

京都市中京區富小路四條上ル

昭和十一年三月、東京及び京都の工藝界の中堅作家十九名により結成。相互の研究を目的とす。

〔會員〕各務鐵三、香取正彦、吉田醇一郎、高野松山、田村泰三、海野建夫、信田洋、山本自燼、北原三佳、宮之原謙、(以上東京) 伊東信助、井田宣秋、龍文堂安之助、小川文齋、加藤宗巖、楠部彌一、淺見五郎助、道林俊正、平館會

朗峯畫塾(日)

大森區池上本町一八六

はじめ深水畫塾と稱す。日本畫の指導達成を旨とし、月一回研究例會を開く。

〔主宰〕伊東深水〔顧問〕渡邊泰次、小林源太郎〔幹事〕遠藤燦可、塾員約百名。

六潮會(日、洋)

東京市目黒區大原町一六一 横川毅一郎方

昭和六年七月成立。作家及び批評家の集で、交友を主とする研究團體。十二年一月日本橋三越に第六回展を開いた。

〔會員〕中村岳陵、中川紀元、山口蓬春、牧野虎雄、木村莊八、福田平八郎、外狩素心菴、横川毅一郎

六人會(日)

京都市四條高倉大丸美術部内

京都大丸の主催。毎年十月京都大丸に展覧會を開催。

〔會員〕池田遼邨、徳岡神泉、金島桂華、勝田哲、案本一洋、三宅風白

祿明莊(工)

中野區川添町一六森光彦方 電中野五八三五

昭和七年創立。一藝一匠の工藝研究並製作發表團體。毎年初夏日本橋高島屋に展覧會開催。

〔同人〕飯塚琅玕齋(竹工) 池田美春(彫金) 原田臺山(篆刻) 富樫光成(彫漆) 大森光彦(陶器) 川島東洲(鍛金) 梅村豊舟(鑄金) 山口淨雄(鑄鐵) 安藤文雅(牙彫) 櫻井霞洞(染色) 木下春叢(蒔繪) 篠秀一(牙彫)

和光會(工)

東京市京橋區銀座四丁目 服部時計店內

昭和九年設立。十二年十二月第四回展開催。

〔會員〕岡田三郎助、和田三造、津田

信夫、沼田一雅、高村豐周、廣川松五郎、山崎覺太郎、河村靖山

早稻田美術學會

東京市澁橋區早稻田大學恩賜館内美術史研究室

文化團體一覽

學藝協力國內委員會

東京市麹町區丸之内二ノ一六明治生命館七階國際文化振興會内

學藝協力國際委員會を授け藝術及學問の相互聯絡により世界文化の向上に資するを目的とす。一九二二年國際聯盟の活動により學藝協力國際委員會が設置され日本より田中館愛橘博士が参加し、次で各國に國內委員會が設立され、日本に於ては社団法人日本國際協會内に事務所を設けたが、昭和十一年國際文化振興會内に移管し、外務省、文部省の援助の下に事業を行つて居る。

〔委員長〕伯爵樺山愛輔〔委員〕男爵山川建、濱田耕作、子爵岡部長景、岡田兼一、子爵大河内正敏、加藤正治、田中館愛橘、男爵團伊能、長與又郎、伯爵黒田清、山川端夫、山田三良、姉崎正治、杉榮三郎〔幹事〕本田弘人、西村熊雄、市河彦太郎〔主事〕青木節一

國際文化振興會

東京市麹町區丸之内二ノ一六明治生命館七階 電丸之内二〇八九、二〇三八、九五七

早稻田大學校友及び學生關係者の美術同好の士を以て組織。久しく中絶して居たが大正十二年春高田早苗博士を會長として再興今日に及ぶ。講演會、研究會、等開催し又圖書出版をなす。

〔會長〕吉江喬松

覽

昭和九年四月設立。財團法人組織。本會は國際間文化の交換、殊に日本及東方文化の海外宣揚を圖り、世界文化の進展及人類福祉の増進に貢獻するを以て目的となし、次の事業を行ふ。

一、著述、編纂、翻譯及出版 二、講座の設置並に講師の派遣及交換 三、講演會、展覽會及演奏會の開催 四、文化資料の寄贈及交換 五、知名外國人の招請 六、外國人の東方文化研究に對する便宜供與 七、學生の派遣及交換 八、關係諸團體又は個人との聯絡 九、映畫の作製及其の指導援助 十、會館、圖書室研究室等の設置經營 十一、その他理事會に於て適當と認むる事業。

尙本會の經營は設立當初の寄附資金及御下賜金、政府補助金等の基本財産に依り行はれる。

〔總裁〕高松宮宣仁親王殿下〔會長〕公爵近衛文麿〔副會長〕伯爵徳川賴貞男爵郷誠之助〔理事長〕伯爵樺山愛輔、〔常務理事〕子爵岡部長景、伯爵黒田清、男爵團伊能、三原繁吉〔理事〕姉崎正治

伊東延吉、小倉正恆、門野重九郎、串田萬藏、男爵白根松介、高楠順次郎、永井松三、濱田耕作、福井菊三郎、堀内謙介、正木直彦、山田三良〔監事〕大橋新太郎、男爵森村市左衛門〔主事〕青木節一

史蹟名勝天然紀念物保存協會

東京市麹町區三年町一
文部省宗教局保存課内
電 銀座 五七七—一九

明治四十四年設立。本會は史蹟名勝天然紀念物を研究し其の保存方法を講じ且之に關する思想の普及を圖り、國體の精華を發揚するを以て目的とし、月刊機關雜誌「史蹟名勝天然紀念物」を發行し又講演會、研究會等を開催する。會員を分ちて維持會員（會費一年六圓、一時金百圓）、通常會員（會費一年四圓）の二種とす。本會は會員の會費、寄附金、國庫補助、其他の收入を以て維持す。

〔會長〕文部大臣 〔副會長〕文部次官
三上參次 〔顧問〕伯爵德川達孝、男爵阪谷芳郎、三宅秀 〔評議員〕五十五名
〔幹事〕青戸精一

聖德太子奉讚會

東京市麹町區丸之内九ビル四
階四五七區 電丸之内三九八

財團法人組織。本會は大正十年の聖德太子一千三百年御忌法要を記念するための事業として大正五年創立。太子の偉徳を奉讃開明するを目的とし、次の事業を行ふ。一、講演會を開き又は宣傳文書を

發行配布すること 二、遺蹟を保護し且つ法隆寺勸學院の維持發展を圖ること 三、五十年毎に奉行せらるる、聖靈大會を奉讃すること 四、法隆寺に於て十ヶ年毎に執行せらるる、御忌法要を奉讃すること 五、記念展覽會を開催すること 六、特殊の事項を研究調査せしめ表彰及懸賞の方法に依り學藝を獎勵し又は著作編輯物を出版すること 七、施藥を行ふこと 八、其他聖德太子に關係せる事業。

〔總裁〕久通宮朝融王殿下 〔會長〕侯爵細川護立 〔理事〕伊東忠太、林春雄、荻野伸三郎、加藤正治、高楠順次郎、高島米峰、黒板勝美、松井茂、正木直彦、姉崎正治、江崎政忠〔監事〕青木菊雄、有賀長文〔主事〕黒板勝美

都市美協會

東京市麹町區丸之内
東京市土木局内
電丸之内五一—五二九

大正十四年創立。同會は都市美に關する研究をなし之を尊重すべき觀念の普及を圖ると共に都市美の構成に就て貢獻するを目的とし、一、都市美に關する實際的な調査研究 二、當局に對する建議 三、出版、展覽會、講演會等による都市愛護思想の宣傳等を行ふ。尙機關誌「都市美」を隔月發行す。

〔會長〕男爵阪谷芳郎 〔副會長〕近新三郎 〔顧問〕館哲二、齋藤樹、小橋一太、本多靜六、牧彦七〔常務理事〕青山泰晴、井下清、石原憲治、小野二郎、平野眞三

福原信三、堀信一、萱場順治〔評議員〕七十四名

日佛文化聯絡協會(R.I.F.N)

東京澁橋區上落合
二ノ五六八川路方

19 Rue Lakanal, Paris 15e

昭和二年創立。日佛相互の知識的交驛に寄與するを以て目的となし次の事業を行ふ。

- 一、日本文藝の佛譯出版、並びに佛蘭西文藝の和譯出版
- 二、日本劇の佛譯並びに上演
- 三、日佛映畫の相互交換上映
- 四、日佛文化に關する講演會、展覽會、その他會合
- 五、日本美術工藝品及び佛蘭西美術工藝品の相互紹介
- 六、日佛相互の著作權、翻譯權、上演權、特許權その他の權利に就ての交渉代辦
- 七、日佛相互の諸種の調査通信その他の便宜代辦
- 八、佛譯日本文獻及び和譯佛蘭西文獻を蒐集せる文庫の設立
- 九、日本文化研究のための研究室の設立
- 十、佛文雜誌の刊行

會員を分ちてA名譽會員、B贊助會員（百圓以上の寄附者）、C普通會員（年額六圓宛の會費納入者）の三種とし、會員は次の如き便宜を有す

- 十一、文藝の翻譯發表並びに出版に就ての特殊の便宜
- 十二、本會關係の出版物及び本會紹介の美術工藝品を無代または特價にて求め得ること
- 十三、本會關係の劇、映畫、講演、展覽等の會合へ招待すること
- 十四、日佛相互の調査、買物または旅行の際

の特殊の便宜
〔實務委員〕（在東京）川路柳虹、加藤健吉、武藤聖、税所篤二（在巴里）松尾邦之助
René Maubiane Stenlber Oberlin, Alfred Smolar
日本博物館協會

日本博物館協會

東京市麹町區大手町
錦橋通文部省別館内
電丸之内三〇一—四

昭和三年三月故男爵平山成信等の主唱により創立。博物館及博物館從業者、關係者を以て組織し、博物館事業の發達を圖るを目的とし、次の事業を行ふ。一、博物館に關する研究調査 二、博物館に關する雜誌及び圖書の刊行 三、博物館に關する集會、講演會、講習會の開催。尙月刊「博物館研究」を發行す。

〔顧問〕平生飢三郎、伯爵林博太郎
〔理事長〕正木直彦 〔常務理事〕大渡忠太郎（常任）秋保安治、棚橋源太郎、山脇春樹 〔理事〕栗谷謙、上田泰輔、河竹繁俊、齋藤忠郎、佐野利器、杉榮三郎、關屋龍吉、田中重之、高島平三郎、鶴見左吉雄、畑井新喜司、藤井善助、三宅駿一、宮島幹之助、矢代幸雄〔監事〕星野錫

日本博覽會協會

東京市麹町區丸之内三
ノ一四東京商工會議所
内電丸之内三五—三八

大正十五年創立。内外に於ける博覽會の改善發達を圖るを目的とし次の事業を行ふ。一、博覽會に關する調査研究 一、博覽會開設に關する立案、計劃、設計及指導 一、博覽會參同に關する出品の管

理及取扱 一、外國に於ける類似機關との聯絡、等。機關誌「博覽會研究」を發行す。

〔會長〕 星野錫 〔理事〕 鶴見左吉雄、山本留次、安藤重兵衛、山脇春樹、渡邊鏡藏、竹澤太一、大山斐瑳磨、金光庸夫、正木直彦、中野金次郎、中澤安五郎、中村圓一郎、山崎龜吉、淺沼治、阪井德太郎、永山定富、中川正左、岩崎清七、吉山眞樟、倉持長吉、評議員廿五名

日本ペン倶楽部

東京市京橋區銀座西五ノ二マツダビルヂング
五階 電話五〇二二

昭和十年十一月創立。本會は詩人、小説家、劇作家、評論家、隨筆家、新聞記者、新聞雜誌編輯者、翻譯家等文筆に従事する者を以て組織し諸外國に於ける同種團體と連絡し國際的に文筆家相互の親睦を計るを以て目的とする。十一年ブエノスアイレスに開かれた第十四回國際ペンクラブ大會へ代表、島崎藤村、有島生馬を派遣し、十二年パリに開かれた第十五回大會へは、有島生馬、井上勇、久米正雄を出席せしめた。會報（歐文、對外的機關誌）及ペンニュース（國內的機關誌）を發行す。

〔會長〕 島崎藤村 〔理事〕 有島生馬、堀口大學、清澤潤、谷川徹三 〔常任理事〕 勝本清一郎 〔監事〕 黒田清、芹澤光治良 〔維持俱樂部員〕 芹田均、長谷川巳之吉、岡本かの子、鈴木秀三郎、山本實彦 〔通

常俱樂部員〕 阿部眞之助、阿部知二、有島生馬、G・ボノール、H・バイアス、土井晚翠、土居光知、江尻正一、藤田嗣治、藤澤周次、福原麟太郎、後藤末雄、M・グリゴリーエフ、花野富藏、原久一郎、原田謙次、春山行夫、長谷川如是閑、長谷川時雨、J・P・オウシュニコルヌ、林美美子、F・H・ヘツジエス、日高只一、本多顯彰、堀口大學、細田源吉、細田民樹、藤森成吉、藤澤樞夫、深田久彌、福田清人、舟橋聖一、市河三喜、出井盛之飯島正、井上勇、石川欣一、石濱知行、磯部佑治、伊藤整、岩永裕吉、上司小銀賀川豊彦、片岡鐵兵、片山敏彦、勝本清一郎、川田順、川路柳虹、河竹繁俊、菊池寛、木村毅、K・P・カークウッド、岸田國士、北原白秋、北村喜八、北村小松、清澤潤、小松清、近藤春雄、小酒井五一郎、兒島喜久雄、久米正雄、黒田清前田夕暮、正宗白鳥、正富汪洋、松尾邦之助、松岡譲、三木清、箕輪鍊一、水原秋櫻子、J・ムニョス、村松正俊、武者小路實篤、永松定、長興善郎、中河與一中村吉藏、中野秀人、中野好夫、中島健藏、南條勝代、名取洋之助、新居格、西脇順三郎、昇曙夢、野上豊一郎、野上彌生子、野口米次郎、織田正信、小川未明、萩原井泉水、岡田八千代、岡本綺堂、大木惇夫、折口信夫、大島豊、J・A・A・ビンツ、西條八十、税所篤二、齋藤勇、山宮允、G・サンナム、佐々木信綱、佐藤春夫、里見弴、芹澤光治良、島崎藤村

鹽田良平、柴田勝衛、島中雄作、白柳秀湖、杉山平助、高濱虛子、田中耕太郎、谷川徹三、徳田秋聲、徳永直、戸坂潤、豊島與志雄、鶴見祐輔、宇野千代、宇野浩二、和辻哲郎、山村魏、山内義雄、山崎斌、柳澤健、横光利一、米川正夫、與謝野品子、吉江喬松、宮本百合子、大熊信行、丹羽文雄、木々高太郎、中山省三郎、三枝博喜、本田喜代治、窪川稻子、A・ヤンタ、湯地孝、今日出海

日本文化中央聯盟

東京市豊町區内幸町一ノ三
大阪ビル新館電話二一八七

皇紀二千六百年を記念し神武天皇御創業の聖旨に副ひ奉らん爲、官民合同の機關を組織し、各種國內的、國際的文化事業を起すべく、小山松吉等同志二十四名が協議の上、昭和十一年一月政府に建議書を提出した。然るに同年七月紀元二千六百年祝典事務局並に同祝典評議員會設置せられ、義に提出の意見書中の十五文化事業の中、一項が採擇され、上述の恒久的團體の組織及他の事業に就ては別途の計畫に俟つこととなつた。茲に於て前記二十四名の發起に依り財團法人日本文化中央聯盟の組織に着手、政府に於ても十二年度豫算に於て補助金十五萬圓を編成し、十二年九月その設立を完了するに至つた。

〔目的〕 肇國の理想に則り、我國文化の綜合進展を圖り、其の眞髓を發揮し之を中外に宣揚し、以て國運の伸張並に世

界文化の興隆に貢獻することを目的とする（事業） 一、新日本諸學の建設並促進其他諸般の研究調査を爲すこと。二、國民の自覺に關する施設運動を爲すこと。三、日本文化史、日本文化百科辭典、其他著作、編纂、翻譯、出版等を爲すこと。四、國史記念館、日本文化圖書館、日本民俗博物館、其他の文化施設を爲すこと。五、日本文化展覽會の開催、其他講演會座談會、演奏會等を開催すること。六、日本文化賞の設定、其他内外に互り團體個人の選賞を爲すこと。七、常設綜合產業館の開催並促進、其他産業振興施設を爲すこと。八、海外文化駐在員の設置を促進すること。九、日本文化萬國大會、其他國際會議を開催すること。一〇、内外に於ける關係團體、個人と聯絡協力し又は其の事業を援助すること。

〔組織〕 總務部、研究調査部、文化事業部、國際部の四部分に分つ。

〔會長〕 公爵島津忠重 〔副會長〕 櫻井錠二 〔理事長〕 小山松吉 〔理事〕 伊東延吉（常務）、伊賀良一（常勤）、井上庚二郎（常務）、潮惠之輔、江口定條、子爵岡部長景子爵大河内正敏、大倉邦彦、河原春作、菊池豊三郎、香坂昌康、伯爵酒井忠正、下村宏、膳桂之助、高橋順次郎、松本學（常務）、水野梅曉 〔監事〕 伯爵樺山夢輔矢野恆太 〔參事〕 安藤燕

風景協會

東京市京橋區銀座西七ノ三
資生堂ビル内電話二九四

本會は風景に關する研究調査をなし併せて其の保護利用を圖るを以て目的となし、一、風景に關する一般調査 二、機關雜誌「風景」其他圖書の刊行 三、研究會講演會及展覽會の開催 四、團體會員の依頼ある時風景地の調査計畫並に宣傳に關する指導或は援助、其他を行ふ。

〔會長〕 公府鷹司信輔 〔副會長〕 子爵岡部長景、子爵田中阿歌磨
〔理事〕 鋪木外岐雄、冠松次郎、岸田日出刀、黒田朋信、高久甚之助、田中豐築地宜雄、辻村太郎、中村孝也、三浦伊八郎、矢澤弦月 〔常務理事〕 石井柏亭、國府種徳、田村剛、福原信三、藤浪剛一本田正次

滿日文化協會

〔本部〕 新京大同大街大興ビル内
〔東京分會〕 東京市麹町區下六番町五
〔京都分會〕 京都市上京區大宮田尻町五二

日本名日滿文化協會。昭和八年十月創立。本會は日滿學界の協力に依り東方の

展覽會場一覽

東京

東京府美術館

下谷區上野公園
電 下谷二三〇四

大正十五年竣工。建築費百萬圓は佐藤慶太郎の寄贈である。昭和四年東京府よ

展覽會場一覽

文化を保存並に振興するを以て目的とする。業績の主なるものとして奉天國立博物館を創立せる外政府の委託により滿洲建國の記念事業たる「清朝實錄」の編纂に従事し、更に熱河地方の古建築物調査を行つた。

〔名譽會長〕 張景惠 〔會長〕 羅振玉 〔副會長〕 子爵岡部長景、寶熙 〔顧問〕 阮振鐸 〔常任理事〕 榮厚、池内宏 〔理事〕 謝介石、丁士源、許汝葵、王季烈、服部宇之吉、狩野直喜、白鳥庫吉、羽田亨、濱田耕作、久米成夫、水野梅曉 〔評議員〕 鄭孝胥(逝去)、袁金鎧、臧式毅、熙洽、沈瑞麟、趙汝霖、溫肅、曾恪、黃允中、陳曾矩、伊里春、楊鍾義、葉玉麟、市村瓚次郎、伊東忠太、原田淑人、小川琢治、矢野仁一、溝口積次郎、新村出、黒田源次、筑紫熊七、田邊治通、矢田七太郎、長岡隆一郎、入江貫一、神尾式春 〔常務主事〕 杉村勇造

覽

り約四十萬圓を臨時支出して別館を増築した。昭和十年三月設立十週年記念の祝賀を舉行了。

同館の敷地は約四千坪で建物の様式は近代クラシック式、軒高、地盤よりパラペット上端迄四十八尺、構造は鐵骨鐵筋コンクリート、建物延坪數は三八〇六坪三四にしてその内譯は地中階六七坪五、

壹階二〇四坪九二、主階一六二三坪六七、中階七三坪二五である。

〔館長〕 館哲二 〔次長〕 佐々木芳遠、多湖實夫 〔主事〕 尾川藤十郎 〔書記〕 矢田部正造、早川治平 〔顧問〕 佐藤慶太郎、宇佐美勝夫、平塚廣義、正木直彦、伊東忠太、川合玉堂、小室翠雲、荒木十畝、結城素明、横山大觀、安田靉彦、岡田三郎助、和田英作、藤島武二、中村不折、朝倉文夫、北村西望、中野勇治郎、芝田徹心、杉榮三郎、清水澄、小橋一太、渡邊平次郎 〔常議員〕 鋪木清方、野田九浦、木村武山、飛田周山、小林古徑、川端龍子、小林萬吾、南薰造、石川寅治、永地秀太、牧野虎雄、石井柏亭、小杉放庵、山崎朝雲、内藤伸、建昌大夢、小倉右一郎、藤井清祐、平櫛田中、津田信夫、香取秀真、海野清、板谷波山、田口掬汀、小池泰康、正宗得三郎、小島善太郎、村田八千穂、有馬秀雄、長濱繁、佐久間榮吉 〔評議員〕 八十八名

職制 技 卒

第一條 本館は美術に關する創作の展覧新古美術品の陳列其の他美術の發達に必要な事業に使用するを以て目的とす

第三條 館長は知事を以て之に充て館務を統理す

第四條 次長は内務部長並學務部長を以て之に充て館長の指揮を承け館務を掌理し館長事故あるときは其職務を代理す

第七條 本館に顧問評議員及常議員若干名を置き知事之を委嘱す顧問及評議員は重要な館務に關し館長の諮問に應じ又は意見を

開陳するものとす
常議員は評議員中より知事之を委嘱し館の使用其の他常務に關する事項を審議するものとす

第八條 評議員會及常議員會の議長は館長之に當る館長事故あるときは館長の指名したる者之を代理す

第九條 評議員會は毎年一回之を開く但し必要に應じ臨時會を開くことあるべし
常議員會は毎年二回之を開く但し必要ある場合に於ては臨時之を召集す

使用規定 技 卒

第一條 本館ハ左記目的ヲ有スルモノニ限リ本使用規定ニ依リ使用セシム

一 美術ニ關スル創作ノ展覧
二 新古美術品ノ陳列
三 其ノ他美術ニ關スル事業
前項各號ノ使用者ナキ場合ニ限リ藝術等ノ諸會ニ臨時使用セシムルコトヲ得

第二條 本館ヲ使用セシムル者ハ別記第一號ノ様式ニ依リ要項ヲ具シ館長ノ承認ヲ受クヘシ

第三條 前條ニ依リ承認ヲ受ケタルモノハ左ノ通使用料ヲ前納スヘシ但シ特別ノ事情アリト認ムルトキハ相當ノ保證人ヲ附シ又ハ保證金ヲ徴シタル上後納ヲ許可スルコトアルヘシ

使用料ハ當分ノ内別表ニ依ル
〔備考〕 室ノ名稱分區ハ別紙圖面ニ依ル

第一階分室使用者ニシテ A 室、B 室、C 室ノ一ヲ使用スルモノハ更ニ一分區室ノ使用料ノ四分ノ一ニ當ル料金ヲ加ヘ納ムルモノトス彫塑室ヲ分割シテ使用スル場合ハ全室トノ割合ニ應ジ使用料ヲ徵ス前表以外ノ使用料ハ其都度之ヲ定ム彫塑室及第一階陳列室ニ臨時開切ヲ爲サムトスル使用者ハ之ニ

場所	時期	八	七	月	月	六	二	一	十	二	月	月	月	三	月	月	月	十	一	月
全場	全館	八	七	月	月	六	二	一	十	二	月	月	月	三	月	月	月	十	一	月
第一階	(彫塑室及地階)	一日二付	二五〇圓			三〇〇圓			三五〇圓											
全館	(陳列室ヲ除ク)	同	三五			五〇			六〇											
本館全館	(地階室ヲ除ク)	同	三三			四五			六〇											
彫塑室	同	同	八			一三			一八											
本館第一階全部	(彫塑室ヲ除ク)	同	二三			三〇			三八											
同	三ヶ分區室	同	一五			二〇			二五											
同	二ヶ分區室	同	一〇			一三			一五											
同	一ヶ分區室	同	五			六			八											
同	地階陳列室全部	同	六			八			一一											
同	別館主階全部	同	三			五			六											
同	一ヶ分區室	同	一〇			一五			一八											
同	地階陳列室	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											
同	同	同	五			六			八											
同	同	同	一〇			一一			一五											

銀座・三味堂ギヤラリー

京橋區銀座八ノ二
電銀座一八〇八

會場は同店主催の洋畫展に使用するが主催展のなき場合諸種の展覽會に賃貸する。會期日数を三日、五日、七日の三種とし、時間は午前十時より午後九時迄。使用料は三日間七十五圓、五日間百圓、七日間百三十圓。會期中は會場係一名がつけられる。原則として賣込に關係しないが、但し賣約の斡旋をした場合は手数料として賣約價額の二割を申し受ける。廣さ約廿坪。壁面約百尺。

〔經營者〕堀越震六

資生堂ギヤラリー

京橋區銀座七丁目
電銀座五四二

美術及美術工藝品の展覧を主とし使用申込みを受けたる後相當の銓衡を経て貸否を決定する。最小壁面約十間、最大壁面約廿間。使用料一日（午前九時—午後九時）四十圓（看板費、看守費、電燈費等を含む）展覽會の性質により、賣上金額の二割を申受け使用料に代へる場合あり。

青樹社

京橋區銀座四ノ四
電京橋三六七八

大正十四年一月創業。内外洋畫、美術工藝品の賣買、展覽會及賣立會を引受け

展覽會場一覽

主催し、都合に依り洋畫展の會場として一階に限り賃貸することがある。一階壁面二十二間。

〔經營者〕鈴木里一郎

東京堂ギヤラリー

神田區神保町一ノ一
一七電神田四二七

洋畫の展覧に適す。使用料一日十圓。壁面三十八間。

東京美術俱樂部

芝區新橋七丁目二
電芝九九〇—九九二

株式會社。資本金五十萬圓、美術骨董品の入札及轉賣を主とし又一般席貨業をも營む。昭和十二年十月竣成。鐵筋コンクリート。内部は純日本建築で、三階に大ホールの設備等あり。

〔社長〕伊藤平藏

日動畫廊

京橋區銀座數寄屋橋
電銀座四四一八

昭和六年開廊。現代洋畫の即賣常設展覧を行つてゐるが、又隨時同店主催の洋畫並彫刻展を開催する。會場壁面は（イ）十八間（ロ）廿五間（ハ）卅間の各々三通りに使用する。主催展の會場費は無料であるが、賃貸する際の一使用料は（イ）三十圓（ロ）五十圓（ハ）百圓である。

〔經營者〕長谷川仁

文房堂

神田區神保町一ノ二
電神田七〇〇、七〇一

同店の「工藝美術品陳列室」を展覽會、即賣會等の開催希望者に無料にて貸與す。但し陳列及販賣方法は同店に一任し、賣約價額の二割五分を納金すること。會期は一週間以上二週間以内とす。宣傳費は開催者の負擔とす。陳列室面積八坪。陳列ケース七本。

〔同店催物係〕齋藤

三越

日本橋區駿河町

同松坂屋

京橋區銀座

同高島屋

日本橋區通二ノ五

同伊勢屋

京橋區銀座三丁目

同伊勢丹

四谷區新宿三丁目

同服部時計店

京橋區銀座四丁目

同鳩居堂

同

同東美俱樂部

日本橋區通二ノ五

大阪

大阪市立美術館

大阪市天王寺區茶臼山
町天王寺公園内 電六
一〇〇、六一〇一

古美術品の常設展覧と一般美術展のギヤラリーの設備を兼ねた近代的美術館

で、大阪市が工事に多年を費して昭和十一年五月落成。帝展作品の陳列を以て開館した。建物は鐵筋コンクリート造、三階建て地階を加へ、建坪一二二坪、延坪、三八五坪。陳列室、展覽會室、講堂、圖書閱覽室等より成り、陳列室は同館の蒐集保存に係る古美術品—繪畫、彫刻、美術工藝、書蹟、考古學資料等を常設展覧し、展覽會室及講堂は一般美術展並美術講演會、講習會等の開催希望者に貸館し、又圖書閱覽室に於て同館所蔵の圖書を規定に従つて一般の閱覽に供する。

〔館長〕今井貫一〔主事〕高津滿、望月信成〔囑託〕荻野伸三郎、武田五一、松本文三郎、廣瀬治兵衛、伊勢專一郎、堂谷憲男、上田令吉、片山喜之、藤井源一〔學藝員〕小林太市郎、三才笹吉

大阪市立美術館條例技率

第一條 本館ハ美術及美術工藝ノ助長、獎勵及研究ヲ爲ス目的トス

第二條 本館ハ左ノ事業ヲ行フ

一、美術品及美術工藝品ノ蒐集、保管及陳列展覧ヲ爲スコト

二、美術及美術工藝ニ關スル圖書ヲ蒐集、保管シ之ヲ閱覽セシムルコト

三、美術及美術工藝ニ關スル講演會、講習會等ヲ開催スルコト

四、美術及美術工藝ノ助長、獎勵又ハ研究ニ關シ本館設備ヲ使用セシムルコト

五、其他市長ニ於テ必要アリト認ムル事業

第三條 本館ハ美術品及美術工藝品ノ寄贈又ハ寄託ヲ受ク社寺ヨリノ寄託品ニ對シテハ市長別ニ定ムル所ニ依リ補給金ヲ給スルコトアル（シ）

第四條 本館ノ陳列品ノ觀覽料一人一回ニ付

展覽會場一覽

本ノ如シ

普通 學生軍人團體 普通團體

十三歳未満十銭

十三歳以上廿銭 五銭 十銭

前項ノ規定ニ依リ團體ハ學生、生徒、児童又ハ軍人ノ團體ニ付テハ卅人以上、其ノ他ノモノニ付テハ五十人以上トス

第五條 特別ノ陳列ヲ爲シタルトキハ其ノ期間ニ限リ市長ハ前條ノ規定ニ依リ觀覽料ノ五倍以內ノ觀覽料ヲ定メ之ヲ徴收スルコトヲ得

第六條 本館ノ陳列品又ハ保管品ニ就キ特別ノ研究ヲ爲サントスル者ハ市長ノ許可ヲ受クヘシ

前項ノ場合ニ於テハ前二條ノ規定ニ依リ觀覽料ノ外特別觀覽料トシテ一同一點ニ付五十銭ヲ徴收ス

第八條 觀覽者ハ市長ノ許可ヲ受ケ本館所藏ノ圖書ヲ閱覽スルコトヲ得

第九條 美術品及美術工藝品ノ展覽會又ハ美術及美術工藝ニ關スル講演會、講習會等開催ノ爲本館展覽會室又ハ講堂ヲ使用セント

第十二條 使用者ハ市長ノ許可ヲ受ケ特別ノ設備ヲ爲スコトヲ得市長ハ使用者ニ對シ必要ナル設備ヲ命スルコトアルヘシ使用者前二項ノ規定ニ依リ設備ヲ爲シタルトキハ使用後直チニ之ヲ撤去シ原形ニ復スヘシ

第十三條 使用者ハ其ノ權利ヲ讓渡シ又ハ他ノ人ヲシテ使用セシムルコトヲ得ス

第十五條 觀覽料又ハ使用料ハ市長ニ於テ公益上其ノ他必要アリト認ムルトキハ之ヲ減免スルコトアルヘシ

第七條 同館條例施行細則按察
條例第十一條ノ規定ニ依リ使用料ハ一日ニ付左ノ如シ

使用料別	展覽會室									
	第一展覽會室	第二展覽會室	第三展覽會室	第四展覽會室	第五展覽會室	第六展覽會室	第七展覽會室	第八展覽會室	大展覽會室	講堂
使用料	七〇〇	六〇〇	六〇〇	六〇〇	六〇〇	九〇〇	九〇〇	一五〇〇	一五〇〇	一五〇〇
使用料	一〇〇〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇	一五〇〇	一五〇〇	一五〇〇	一五〇〇	一五〇〇
使用料	一〇〇〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇	一五〇〇	一五〇〇	一五〇〇	一五〇〇	一五〇〇
使用料	一〇〇〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇	一五〇〇	一五〇〇	一五〇〇	一五〇〇	一五〇〇
使用料	一〇〇〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇	一五〇〇	一五〇〇	一五〇〇	一五〇〇	一五〇〇
使用料	一〇〇〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇	一五〇〇	一五〇〇	一五〇〇	一五〇〇	一五〇〇
使用料	一〇〇〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇	一五〇〇	一五〇〇	一五〇〇	一五〇〇	一五〇〇
使用料	一〇〇〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇	一五〇〇	一五〇〇	一五〇〇	一五〇〇	一五〇〇
使用料	一〇〇〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇	一五〇〇	一五〇〇	一五〇〇	一五〇〇	一五〇〇
使用料	一〇〇〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇	一五〇〇	一五〇〇	一五〇〇	一五〇〇	一五〇〇

期間	三月廿一日	九月廿一日
區別	午前八時	午前八時
日間	午後五時半	午後四時半
夜間	午後六時半	午後五時半
晝夜	午前八時	午後八時

地階並三階(大講堂)平面圖は略す

展覽會室坪數及晝夜延長合計

室名	坪數	晝夜間數
一階第一展覽會室	四五	二九
同 第二展覽會室	四五	二九
同 第三展覽會室	八五	三四
同 第四展覽會室	八五	三四
大展覽會室	一二七	ナシ
二階第五展覽會室	四五	三一・五
同 第六展覽會室	四五	三一・五
同 第七展覽會室	八五	四九
同 第八展覽會室	八五	五九

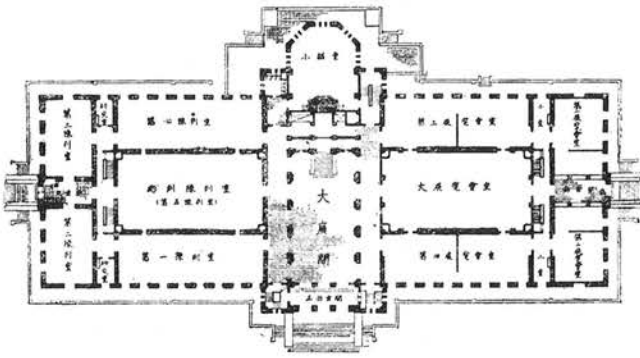
朝日會館

大阪市北區中之島
三丁目渡邊橋南詰

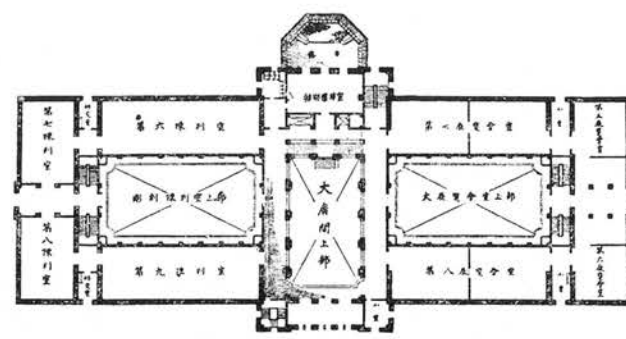
展覽會場は同會館の三階にあり、壁面延長千尺。平素はその一部を劃して約五十坪の小集會場にも使用出来る。(使用料)一日金五十圓、△割引(イ)使用日數五以上に互る時は第五日目よりの日數に對し二割引(ロ)使用日數十以上に互る時は(イ)と同様に更に第十日目よりの日數に對し三割引(ハ)使用日數十五以上に互る時は(ロ)と同様に更に第十五日目よりの日數に對し五割引。

△展覽會用「スクリーン」使用料、一回一間に付金五十錢。△同硝子戸欄使用料

第一階平面圖



第二階平面圖



第八條 展覽會室又ハ講堂ヲ使用スル場合ニ於テ看守又ハ切符賣捌下足預等ノ設備ノ必要アルトキハ使用者ノ負擔ニ於テ之ヲ設置スヘシ

第十一條 使用ノ許可ヲ受ケタル者ハ市長ノスル者ハ市長ノ許可ヲ受ケヘシ特別ノ必要ニ依リ展覽會室及講堂以外ノ館内及構内地ヲ使用セントスルトキ亦同シ

定ムル使用料ヲ前納スヘシ市長特別ノ事由アリト認ムルトキハ後納セシムルコトアルヘシ 前項但書ノ場合ニ於テ市長必要ト認ムルトキハ保證人ヲ立テシムルコトヲ得

(高さ十一尺二寸長さ十二尺三寸奥行三尺)、一回一組に付金十圓。(何日間でも連續使用する時は一回と見做す)
〔主任〕 高橋増太郎

大阪美術俱樂部

大阪市東區淡路町四丁目
電 北 濱 三二〇五—七

株式會社組織にして、書畫、骨董及新古美術品の委託販賣並に一般席貨業を營む。〔使用料〕階上全部一日百圓、階下百二十圓、全館二百圓。晝間又は夜間のみの使用は三割引とす。

〔取締役社長〕 太田佐七〔取締役〕 山中吉郎兵衛、坂田作治郎〔監査役〕 水原金兵衛、井上蕉太郎、戸田彌七〔相談役〕 兒島嘉助〔支配人〕 武田龍堂

關西畫廊

心齋橋筋(順慶町)
電 船場 二二五八

昭和八年開廊。畫廊の坪數は約三十二坪。陳列壁面は約百尺で全部灰色麻布張。使用料は一日十五圓、時間は十一月より三月迄は午前九時—午後八時、四月より十月迄は午前九時—午後九時〔經營者〕 八島隆孝、車井巳之吉

午步畫房

大阪市西區土佐堀通一丁目
五番地肥後橋ビル一階 電
土佐堀 一一〇、二二一

昭和十二年十二月創業。洋畫、工藝の展觀を主とする。壁面約四十尺。借館料

展覽會場一覽

一日八圓。

〔經營者〕 豐田慎三

三角堂大阪店

大阪市御堂筋淀屋橋南
電 北 濱 三二三九

壁面一階十二間半。二階十二間(常設陳列場)、三階二十間、貸館料一階一日十五圓、三階一日十五圓。

〔經營者〕 薄田晴彦

美交社畫廊

大阪市御堂筋淀屋橋
電 北 濱 二五四二

壁面約百三十尺。使用料一日十五圓。時間午前九時—午後七時。

〔經營者〕 美津島一

美術新論社畫廊

北區中之島三丁目朝日ビル内

同畫廊主催の洋畫展觀を主とするが、貸貨する際の使用料は一日十圓。面積九坪、壁面六十三尺、小品の展觀に適す。

三越

東區高麗橋二丁目
南區長堀橋

高島屋

南區難波新地

同大丸

南區心齋橋筋

松坂屋

南區日本橋三丁目

十合

南區心齋橋

阪急百貨店

北區梅田

京都

大禮記念京都美術館

左京區岡崎公園 電上
六七〇〇、七〇二〇

今上陛下の御即位の大禮を慶祝記念し奉る爲京都市に於て建設せるもので、昭和六年起工し、八年竣工。爾來同市並に同館主催の美術展覽會を開催する他一般美術團體に陳列室を貸與する。本館は二階建鐵筋混凝土造にして建坪千四百八坪延坪二千八百三十二坪。

〔館長事務取扱〕 石川芳太郎〔主事〕 西野巖三〔書記〕 河内秀雄〔評議員〕 石田吉左衛門、飯田新七、西山翠嶺、鹿子木孟郎、竹内栖鳳、植田壽藏、清水六兵衛、菊池契月

同館規則抜萃

第一條 本館ハ美術品及美術工藝品ヲ陳列シテ一般ノ觀覽ニ供シ其ノ他斯道奨勵ノ用ニ供スルヲ以テ目的トス

第二條 本館ハ前條ノ目的ヲ達スル爲本館ノ所藏ニ係ルモノ及官廳團體又ハ個人等ヨリ出品アリタルモノヲ陳列シテ一般ノ觀覽ニ供ス

本館ハ一定ノ期間ヲ限リ團體又ハ個人ニ對シ美術品及美術工藝品陳列ノ爲本館ノ全部又ハ一部ノ使用ヲ許可スルコトアルベシ

第七條 本館ニ評議員若干人ヲ電ク評議員ハ美術家及美術ニ關シ識見アル者ノ中ヨリ市長之ヲ委嘱ス

第八條 評議員ハ重要ナル館務ニ關シ館長ノ諮問ニ應ジ又ハ意見ヲ開陳スルモノトス
第十條 本館ハ一月五日ヨリ十二月二十五日迄毎日左ノ時間中開館ス但シ時宜ニ依リ之ヲ伸縮シ又ハ閉館スルコトアルベシ

一月二月三月十月十一月十二月 午前九時
ヨリ午前四時マデ
四月九月 午前八時ヨリ午後五時マデ
五月六月七月八月 午前八時ヨリ午後五時
三十分マデ
同館使用條例抜萃

第一條

本館ノ陳列品觀覽者ニ對シテハ左ノ區分ニ依リ觀覽料ヲ徴收ス但シ本市ノ區域内ニ在ル學校ノ學生、生徒、兒童ニシテ教員ノ引率スルモノ及其ノ引率教員又ハ市長ニ於テ特別ノ事由アリト認メタル者ニ付テハ之ヲ減免スルコトアルベシ

一 普通觀覽料

大人一人ニ付 金十錢
小人一人ニ付 金五錢

二 團體觀覽料(二十人以上)

大人一人ニ付 金五錢
小人一人ニ付 金三錢

第二條

特別ノ陳列ヲ爲シタルトキハ前條ノ規定ニ拘ラズ其ノ期間ニ限リ市長ノ定ムル所ニ依リ別段ノ觀覽料ヲ徴收スルコトアルベシ

第三條

美術品及美術工藝品ヲ展觀センガ爲本館ヲ使用セントスル者ハ所定ノ様式ニ依リ使用願書ヲ提出シ市長ノ許可ヲ受クベシ

第四條 使用ノ許可ヲ受ケタル者ハ左ノ區分ニ依リ使用料ヲ前納スベシ但シ特別ノ事由アリト認ムルトキハ相當ノ保證人ヲ立テシメ又ハ保證金ヲ徴シ後納セシムルコトアルベシ

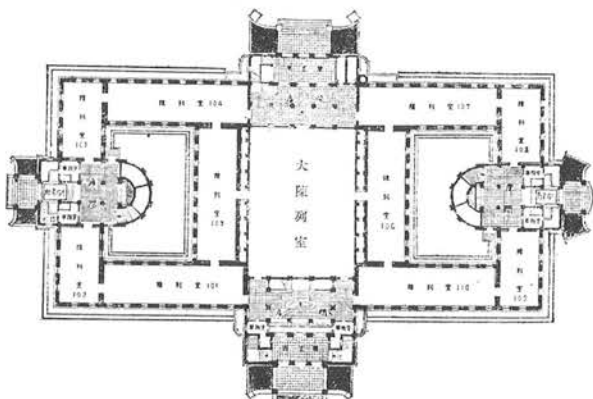
前項使用場所ノ一部ヲ使用スル場合ニ於テモ使用料ノ徴收ニ付テハ全部ヲ使用スルモノト看做ス

本館使用者ニシテ其ノ使用料金全額使用料金ノ三分ノ一以上ニ該當スル場所ヲ引續キ十日以上使用スルトキハ第十一目ヨリ其ノ使用料ヲ二割以内減額スルコトアルベシ

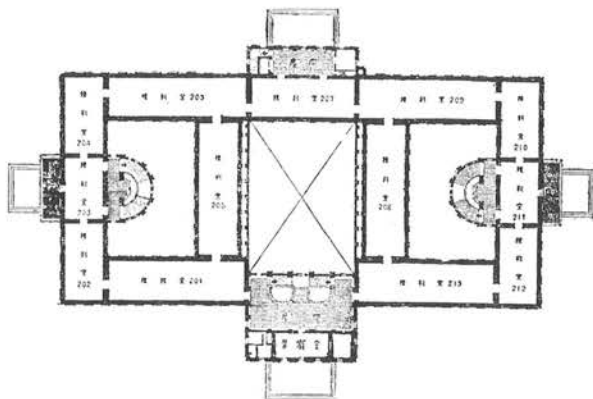
第六條

第三條ノ使用ヲ爲ス場合ニ於テ看守

第一階



第二階



受付切符賣場下足等ノ必要アルトキハ使用者之ヲ設置スルモノトス

第八條 使用ノ許可ヲ受ケタル者特別ノ設備ヲ爲サントスルトキハ豫メ館長ノ承認ヲ受ケバシ

第十五條 陳列室以外ノ館内及本館構内地方市長ニ於テ管理上支障ナシト認ムル場合ニ限り臨時使用ヲ許可スルコトアルベシ
前項ノ使用料ハ前納トシ市長ノ定ムル所ニ依ル

京都朝日會館畫廊

中京區三條河原町京都朝日會館内 電代表上五〇〇

昭和十年新設。北光線を採光し冷暖房裝置あり、洋畫、日本畫、美術工藝展等ニ利用し得る。(使用料)(イ)一日金十圓、(ロ)使用日數五以上に互る時は

使用場所	使用料(日當り)
大陳列室(二六坪)	一七圓
陳列室	八
第一〇二號	八
第一〇一號	八
第一〇〇號	八
第九九號	八
第九八號	八
第九七號	八
第九六號	八
第九五號	八
第九四號	八
第九三號	八
第九二號	八
第九一號	八
第九〇號	八
第八九號	八
第八八號	八
第八七號	八
第八六號	八
第八五號	八
第八四號	八
第八三號	八
第八二號	八
第八一號	八
第八〇號	八
第七九號	八
第七八號	八
第七七號	八
第七六號	八
第七五號	八
第七四號	八
第七三號	八
第七二號	八
第七一號	八
第七〇號	八
第六九號	八
第六八號	八
第六七號	八
第六六號	八
第六五號	八
第六四號	八
第六三號	八
第六二號	八
第六一號	八
第六〇號	八
第五九號	八
第五八號	八
第五七號	八
第五六號	八
第五五號	八
第五四號	八
第五三號	八
第五二號	八
第五一號	八
第五〇號	八
第四九號	八
第四八號	八
第四七號	八
第四六號	八
第四五號	八
第四四號	八
第四三號	八
第四二號	八
第四一號	八
第四〇號	八
第三九號	八
第三八號	八
第三七號	八
第三六號	八
第三五號	八
第三四號	八
第三三號	八
第三二號	八
第三一號	八
第三〇號	八
第二九號	八
第二八號	八
第二七號	八
第二六號	八
第二五號	八
第二四號	八
第二三號	八
第二二號	八
第二一號	八
第二十號	八
第十九號	八
第十八號	八
第十七號	八
第十六號	八
第十五號	八
第十四號	八
第十三號	八
第十二號	八
第十一號	八
第十號	八
第九號	八
第八號	八
第七號	八
第六號	八
第五號	八
第四號	八
第三號	八
第二號	八
第一號	八

第六日目の日數に對し二割引、(ハ)使用日數十日以上に互る時は(ロ)と同様にして更に第十一日目より三割引、(ニ)

スクリーン使用無料、(ホ)冷房裝置費實費を請求することあり、(ヘ)監視少女、實費

京都美術俱樂部

中京區御池通寺町東入 電上二九二、二九三

株式會社。京都美術尙榮社組合員を以て組織す。書畫骨董其他新古美術品の展覽及貸席を行ふ。(一日の席料)南館階上六十圓、西館階上廿三圓、東館階上十三圓、北館階上二圓、西館階下八圓、東館階下八圓、南館階下六十圓、階上全部八十五圓、南館を除く全部四十六圓、南館階下を除く全部百圓、南館階下分室略す「取締役社長」福田淺次郎「同副社長」高橋吉兵衛「取締役」土橋嘉兵衛、淺井清之助、林新兵衛「監査役」服部多一郎 林新助

三角堂京都店

京都市河原町三條南 電本局三三四一

一階美術工藝品賣店、二階壁面十二間使用料一日十圓。

「經營者」薄田晴彦

大丸

四條高倉

高島屋

烏丸高辻下ル

丸物

京都驛前烏丸通

六角會館

六角烏丸東

名古屋

鶴舞公園美術館

鶴舞公園内

昭和四年の博覽會の遺品にしてパラツク二棟あり。各々二百坪。借館料一日各

棟十圓宛、計廿圓、名古屋市公園課所管

名古屋美術俱樂部

東區朝日町三ノ一 電東二〇〇九、七三七〇

明治廿八年五月設立。株式會社。美術及美術工藝品の委託販賣並席貸業を營む席料三日間百八十圓。

「取締役」宮部鈴三郎、伊藤喜兵衛、味岡由兵衛、野崎森一、長谷川竹次郎「監査役」餘吾藤兵衛、竹内七郎、横井清三郎

名古屋九善

廣小路

十一屋

中區榮町四丁目

松坂屋

中區南大津町

神戶

神戶畫廊

神戶區元町驛下鯉川筋 電三宮三三五一

昭和五年開廊。三室より成り總坪數三十坪、陳列壁面八十三尺。休憩室の設備あり、使用料一日(午前九時—午後六時)十圓。夜間使用は別に相談に應ず。

「經營者」大塚銀次郎

プチギヤラリー

神戶區元町一ノ二四

洋畫の常設陳列場であるが邦畫、彫刻版畫、圖案、工藝等の展覽會に貸貸する壁面は洋畫八號大のもの廿四、五點を陳べ得る。使用料一日五圓。

「管理者」有吉正雄

大丸支店

三宮神社前

十合支店

葦合區小野柄通

三越支店

神戶區元町

定期刊行物一覽 (五十音順)

現代美術關係

一般

アトリエ 月刊、藤本韶三編輯、アトリエ社發行、牛込區矢來町一〇九、電牛込六四二一、一四二〇〇錢

阿々土 月刊、漆川薫編輯、阿々土社發行、板橋區中新井町三丁目一九三四、電練馬一六八、六〇錢

エツチング 月刊、西田武雄編輯、日本エツチング研究所發行、麴町區麴町一ノ三、電九段五一四、二〇〇錢

畫室 月刊、山本廣洋編輯、畫室社發行、神戸市須磨區雜宮前町二番屋敷、電須磨一〇二〇、四〇〇錢

藝術 旬刊、中川良平編輯、藝術通信社發行、本郷區湯島天神町二ノ二、電下谷一六〇八、月五〇錢

藝術日本 月刊、永岩一義編輯、東京美術觀交會藝術社發行、小石川區西江戸川町一八電小石川七一〇二、五〇錢

現代美術 月刊、中山貞夫編輯、現代美術社發行、中野區野方町二ノ一二六八、電中野三五一七、昭和十三年休刊

塔影 月刊、齋田元治郎編輯、塔影社發行、麴町區二番町一一番地ノ一、電九段三三四〇、一四二〇〇錢

南畫鑑賞 月刊、石塚彰吾編輯、南畫鑑賞會發行、麴町區中大番町四一、電九段六二〇、四〇〇錢

日本美術 月刊、吉田久次郎編輯、日本美術社發行、名古屋市中村區西日置町七ノ一、電西二九三五(呼)、四〇〇錢

白日 月刊、湯山昇編輯、白日社發行、澁谷區代々木上原町一二九五、電澁谷三四六、五〇〇錢

美術 月刊、岩佐新編輯、美術發行所發行、澁谷區代々木上原町一一四九、電澁谷

定期刊行物一覽

美術往來 一七〇七、一圓
月刊、猪木卓二編輯、資文堂發行、麴町區九段一ノ一四、電九段二七一五、五〇〇錢

美術界 月刊、瀧崎永錫編輯、美術界社發行、豐島區駒込町三ノ四〇三、二〇〇錢

美術街 月刊、大山廣光編輯、美術街社發行、京橋區銀座西五丁目三S二號館、電銀座一三四七、五〇〇錢

美術眼 月刊、中山貞夫編輯、現代美術社發行、豐島區池袋町二ノ一二三四、電大塚三七二二、三〇〇錢

美術グラフィ 月刊、村田善衛編輯、日本洋畫協會發行、麴町區飯田町一ノ一一、三五錢

美術時代 月刊、石田幸太郎編輯、美術時代社發行、芝區琴平町二虎ノ門會館、電芝七二二、一六三六、一圓

美術時報 月刊、垣見宣修編輯、美術時報社發行、澁谷區西大久保二ノ二五三、電四谷六三二五、月一圓

美術春秋 月刊、芳川赴編輯、美術春秋社發行、豐島區西巢鴨二ノ二三五八、三〇〇錢

美術世界 月刊、木村重夫編輯、美術世界社發行、中野區本町通一ノ四、一二錢

美術通信 月刊、佐久間善三郎編輯、日本美術通信社發行、瀧田區運沼町一三四、月一圓二〇〇錢

美術乃日本 年四回、小佐井清平編輯、美術乃日本社發行、澁谷區戸塚町四ノ五七五、三〇〇錢

美術評論 月刊、藤森順三編輯、美術評論社發行、牛込區矢來町二九、電牛込一三二三六〇〇錢

美之國 月刊、石川幸三郎編輯、美之國社發行、豐島區雜司谷町七ノ九四七、電牛込七四二七、一圓二〇〇錢

みづゑ 月刊、大下正男編輯、春鳥會發行、小石川區關口駒井町三、電牛込二〇四三二一圓二〇〇錢

工藝

工藝 月刊、日本民藝協會編輯發行、神田區淡路町二ノ七小口ビル、電神田二〇一〇、年一五圓

工藝ニュース 月刊、商工省工藝指導所編輯、工業調査協會發行、神田區旅籠町三ノ四、三〇〇錢

産業工藝

月刊、上田儀一編輯、産業工藝社發行、大阪市浪速區惠美須町二ノ一四六、電九四、七五一、三〇錢、昭和十三年四月再刊

創作工藝

月刊、山田義郎編輯、創作工藝奨勵會發行、芝區三田四國町三ノ一、一〇錢
月刊、宮下孝雄編輯、帝國工藝會發行、芝區西芝浦東京高等工藝學校内、電三田一五六、一五八、五〇錢

況工藝

月刊、柴崎俊吉編輯、況工藝社發行、大阪市住吉區住吉町一三〇〇、三〇錢

建築

建築研究

月刊、須藤眞金編輯、建築研究社發行、王子區神谷町二ノ一四二、三〇錢
月刊、菅原肇編輯、建築學會發行、京橋區銀座西三ノ一、電京橋一二三二、一二三八、一圓

建築雜誌

月刊、鈴木増雄編輯、建築世界社發行、京橋區京橋二ノ二ノ四、電京橋一五七五、八〇錢

建築世界

月刊、小山正和編輯、國際建築協會發行、麻布區市兵衛町二ノ四六、電赤坂四九四一、六〇錢

國際建築

月刊、小林清編輯、住宅改良會發行、大阪市西區土佐堀船町八、電土佐堀二三二九、五〇錢

住宅

月刊、吉岡保五郎編輯、新建築社發行、京橋區寶町一ノ六、電京橋四七五二六〇錢

新建築

月刊、小瀧文七編輯、日本建築士會發行、京橋區銀座西三ノ一建築會館内、電京橋六二〇、四〇錢

日本建築士

月刊、芳川赴編輯、繪畫教育會發行、小石川區小日向水道町五三、電大塚六〇六八、五〇錢

教育

繪畫教育

月刊、後藤福次郎編輯、學校美術協會發行、荒川區日暮里町三ノ一九六、電根岸一〇三〇、三〇錢

學校美術

月刊、土肥敏編輯、教育美術振興會發行、神田區一ツ橋二ノ九教育會館内、電九段一六六、三〇錢

教育美術

月刊、牧野基溫編輯、新興美術協會發行、豊島區堀ノ内三〇、二〇錢

新興美術

月刊、三浦直政編輯、錦卷會發行、世田谷區玉川田園調布二ノ七〇九、三〇錢

圖畫と手工

月刊、圖畫教育奨勵會編輯、晚成處發行、下谷區櫻木町二、三〇錢

報告書類

國民美術

月刊、荒城季夫編輯、國民美術協會發行、本郷區湯島切通坂町五一、非賣
大日本黑葉協會雜誌 月刊、大日本黑葉協會編輯發行、京橋區銀座西四丁目銀座商館内、電京橋五五一九

日本美術協會報告

年四回、安井易市編輯、日本美術協會發行、下谷區上野公園櫻ヶ岡、非賣
博物館研究 月刊、大渡忠太郎編輯、日本博物館協會發行、麹町區大手町錦橋通（文部省別館内）電九之内三〇一四（内線二一）一五錢

古美術關係

美術

以可留我

隔月、佐伯啓造編輯、船故郷會發行、奈良縣法隆寺村法隆寺二六八、四〇錢
浮世繪界 月刊、浮世繪同好會編輯、同會發行、日本橋區通三丁目五浮世繪同好會

漆と工藝

月刊、日本漆工會編輯發行、澁谷區常盤松町四八、三五錢
不定、奥村伊九良編輯發行、京都市東山區今熊野南日吉町二三

瓜茄

月刊、藤本十九郎、大口理夫編輯、東京美術研究所發行、本郷區駒込千駄木町二三四藤本方、五〇錢

京都美術青年會誌

中西勇太郎編輯、京都美術青年會發行、京都市御池寺町東入
國華 月刊、村山句吾編輯、國華社發行、麻布區市兵衛町二ノ一、電赤坂八五二、五圓

史蹟と古美術

十回、國史普及會編輯發行、京都市七條通堀川西入、田住昇、電下一五七五
月刊、川勝政太郎編輯、ス、カケ出版部發行、京都市鳥九通二條南入、四〇錢

史蹟と美術

月刊、大岡純太郎編輯、書畫骨董雜誌社發行、牛込區南山伏町一二、電牛込二九〇五、三五錢

書畫骨董雜誌

月刊、横山房雄編輯、泰東書道院出版部發行、日本橋區江戸橋三ノ三、五〇錢

書道

月刊、横山房雄編輯、泰東書道院出版部發行、日本橋區江戸橋三ノ三、五〇錢

清閑

清閑會發行、大阪市東區北濱三ノ三一

茶わん

月刊、遠藤敏夫編輯、寶雲社發行、日本橋區江戸橋二ノ八松慶ビル、電日本橋二四五六、二〇八一、五〇錢

陶磁

隔月、東洋陶磁研究所編輯發行、日本橋區江戸橋二、松慶ビル二階、五〇錢
月刊、鈴木榮之亮編輯、東京美術青年會發行、芝區新橋七ノ一二、東京美術俱樂部内、非賣

東洋美術

月刊、相模書房發行、日本橋區通二丁目四、日本橋ビル
不定、小川時陽編輯、飛鳥園發行、奈良市奈良帝室博物館、電八七二、二〇

東洋美術

不定、香取正彦編輯、七日會發行、澁野川區田端五〇〇

日本美術協會報告

不定、栗原武平編輯、寧樂發行所發行、奈良市東大寺能松院、二〇
四回、安井易市編輯、日本美術協會發行、下谷區上野公園櫻ヶ岡、非賣

美術研究

月刊、美術研究所編輯、美術懇話會發行、下谷區上野公園美術研究所内、電下谷三四八七、二〇
二回、内藤藤一郎編輯、日本美術同政會發行、大阪市住吉區天下茶屋二ノ二一、三五錢、休刊中

美術及美術史

不定、源豐宗編輯、佛教美術社發行、京都市左京區北白川伊織町四五、電上二〇四七、一四五〇錢

瓶史

四回、西川一草亭編輯、去風堂發行、京都市左京區淨土寺馬場町一五七、七〇錢
四回、森嶋編輯、寶雲刊行所發行、京都市左京區岡崎真如堂前町二、二四三〇錢

星岡

月刊、泰秀雄編輯、便利堂出張所發行、京橋區銀座五丁目五、五〇錢
月刊、鈴木伸樹編輯、學藝書院發行、麹町區下二番町六ノ六、五〇錢

大和志

月刊、島本一編輯、大和國史會發行、奈良縣郡山柳町一九八、二〇錢
不定、佐伯啓造編輯、船政學會發行、奈良縣法隆寺村法隆寺二六八、電法隆寺四、二〇

泉

月刊、京都市泉協會編輯發行、京都市左京區吉田下大路町四五、三〇錢

考古學及歷史關係

貨幣

月刊、田中謙編輯、東洋貨幣協會發行、荏原區戸越町二九一、七五錢
東京考古學會編輯發行、大阪市住吉區住吉町阿倍野筋三ノ一〇坪井良平方
月刊、考古學會編輯、聚精堂發行、本鄉區龍岡町三一、電小石川七六八七、

定期刊行物一覽

考古學論叢

五〇錢
三森定男編輯、考古學研究會發行、京都市左京區下鴨鑿倉町七一
國學院大學内國史學會編輯發行、澁谷區若木町九、國學院大學

國史同願會紀要

月刊、國史同願會編輯發行、赤坂區青山南町六ノ一五大隈侯爵邸内
月刊、奧田基應編輯、四天王寺事務局發行、大阪市天王寺區元町、二〇錢
四回、立教大學史學會編輯發行、豐島區池袋三、五〇錢

史學

九大史學會編輯、富山房發行
四回、三田史學會編輯發行、芝區三田慶應義塾大學文學部研究室内、一〇

史學研究

三回、廣島史學研究會編輯、中文館書店發行、牛込區辨天町一七四、七〇錢
月刊、史學會編輯、富山房發行、神田區神保町、四五錢

史學雜誌

早稻田大學史學會編輯、同大學出版部發行、澁谷區戸塚町
月刊、史蹟名勝天然紀念物保存協會編輯發行、麹町區霞ヶ關三ノ四、文部省宗敎局保存課内

史蹟名勝天然紀念物

四回、大塚史學會編輯、刀江書院發行、神田區駿河臺三ノ六、八〇錢
四回、京都市帝國大學文學部内史學研究會編輯、内外出版印刷株式會社發行、京都市西洞院通七條南入、七五錢

東方學

不定、東方文化學院、東京研究所編輯發行、小石川區大塚町五六ノ一
四回、東洋協會學術調查部編輯發行、麹町區内幸町一ノ三、電銀座四〇三九一四五〇錢

東洋學

四回、京大文學部陳列館内東洋史研究會編輯、榮文堂發行、京都市中京區寺町通九太町南入

鴨台史報

大正大學史學會編輯發行、豐島區西巢鴨四ノ五三〇大正大學史學研究室
立正大學史學會發行、品川區東大崎四丁目

龍谷史壇

龍谷大學編輯發行、京都市七條、龍谷大學史學研究室
月刊、歷史學研究會編輯發行、赤坂區青山北町六ノ四四五

歷史教育

月刊、四海書房編輯發行、豐島區巢鴨町宮下一六九四
月刊、雄山閣編輯發行、麹町區飯田町六ノ二三

歷史地理

月刊、花見明己編輯、日本歷史地理學發行、神田區錦町三ノ二二、四五錢

其他

思想

月刊、岩波書店編輯發行、神田區一ツ橋二ノ三、五〇錢
月刊、大藏出版株式會社編輯發行、本鄉區本鄉三丁目、二〇錢

文化

月刊、東北帝國大學文科會編輯、岩波書店發行、神田區一ツ橋二ノ三、五〇錢

美術商一覽

(五十音順)

日本畫・其他

【ア】

阿部 克平 東京市澁橋區
澁橋六九九阿部 文吉 阿部文、東京
市本郷區湯島天神町一ノ一〇七、電
下谷七四七九秋田 盛太郎 大阪市東區平
野町五丁目三一淺井 精七 大阪市東區道
修町五ノ一八、電北濱二七二四淺井 清之助 京都市東山區
新門前通大和路東入西之町、電祇
園一二六淺田 直太郎 京都市上京區
西堀川通一條角、電西陣四六九八淺野 梅吉 合名會社竹石
山房淺野商店、大阪市東區平野町四
ノ五六、電北濱五〇八淺野 萬藏 大阪市東區今
橋三ノ一五、電北濱六二一一朝岡 善四郎 合資會社精華
堂代表社員、東京市日本橋區芳町一
ノ六、鈴木とき方味岡 榮次郎 合資會社味榮
商店代表社員、名古屋市東區針屋町
二ノ二三、電東一四〇七

(五十音順)

味岡 由兵衛 合名會社味岡
商店代表社員(植山)、名古屋市西區
袋町五ノ五、電本局一二三荒尾 重吉 大阪市南區南
炭屋町二六、電南六二八四

【イ】

井上 熊太郎 合名會社井上
熊太郎商店、大阪市東區高麗橋二ノ
三九、電北濱一八〇九伊丹 信太郎 東京市赤坂區
青山南町一ノ五五、電赤坂一〇五二、
(店舖)東京市麴町區內幸町一ノ一〇
電銀座三二八九伊藤 平藏 東京市世田谷
區國本町八〇五、電玉川五七
〇九伊藤 高太郎 大好堂、東京
市日本橋區通三ノ一、電日本橋三九
〇九伊藤 信藏 推古堂、東京
市日本橋區通二ノ五、電日本橋四五
二三伊藤 喜兵衛 合名會社萬喜
商店、名古屋市東區鍋屋町一ノ二四、
電東二八二池田 金太郎 合資會社銀座
美術園代表社員、東京市京橋區銀座
西五ノ五ノ一、電銀座三〇〇六池戸 宗三郎 合名會社池戸
宗三郎商店、大阪市東區今橋三ノ一
二、電北濱六五、三三二石井 柳助 合資會社石井
三柳堂代表社員、東京市京橋區京橋
一ノ四ノ一、電京橋四八石田 貞吉 東京市小石川
區同心町二五、電小石川二五〇〇石野 力藏 山澄商店、東
京市日本橋區濱町一ノ一五、電日本
橋四五七五石橋 幸次郎 東京市日本橋
區通三丁目六ノ五石原 照 京都市中京區
六角通鉄屋町西入、電本局二四二八磯上 青治郎 大阪市東區瓦
町一ノ五、電北濱一二二八一色 利厚 松利商店、東
京市芝區南佐久間町二ノ一〇、電芝
四〇一九泉 藤吉 合名會社泉藤
吉商店、大阪市東區高麗橋五ノ一九、
電北濱五二二泉岡 善三郎 大阪市南區疊
屋町一四、電南五一三稻垣 一六 東京市日本橋
區箱崎町二ノ二五、電茅場町三五八
七稻垣 利恭 萬茶堂、東京
市本郷區湯島天神町二ノ三〇、電下
谷七六〇六

今井 敬藏 合名會社今井

商店代表社員、京都市下京區四條鉄
屋町東入奈良物町三六三今井 長兵衛 京都市中京區
六角通鉄屋町西入、電本局八〇二今井 鐵藏 名古屋市東區
針屋町二丁目、電東二〇三八入江 熊吉 春樹堂、大阪
市東區瓦町三ノ一、電北濱六〇八九岩井 慶三郎 東京市麻布區
飯倉町四ノ一七、電赤坂四五岩上 虎吉 大和屋、東京
市日本橋區兩國六ノ六、電浪花九五
八、五四八二乾 益次郎 金澤市上今町
八、電金澤九七七

【ウ】

宇島 貞吉 如山堂、東京
市本郷區湯島天神町二ノ三七、電下
谷一九八八宇田川 照 東京市澁谷區
原宿一ノ二二八臼井 吉之助 大阪市東區伏
見町二ノ一九、電北濱三〇〇五内山 豐男 梶晋、金澤市
中町三四、電金澤四八五梅本 長太郎 宇治長、名古
屋市西區島田町三ノ五、電本局四〇
一〇

【オ】

小川 義一 東京市神田區

一二八

金澤町一、電下谷五四一六

小川 文吉 東京市小石川
區大塚窪町二四、電大塚五一七一小高 眞藏 合資會社大勝
商店代表社員、東京市本郷區湯島切
通町一、電小石川五九〇四小野 春吉 平野屋、東京
市京橋區銀座八ノ四、電銀座四四一
〇尾崎 榮次郎 合名會社尾崎
榮次郎商店、大阪市東區南久寶寺町
四ノ五六、電船場一四〇六大川 源 東京市本郷區
春木町二ノ一五、電小石川四一〇八大久保 健二 合資會社川分
商店、東京市芝區第五號地一三、電
芝二六二〇大田 清造 清眞堂、東京
市麻布區新網町一ノ六九、電赤坂一
九四八大沼 政吉 靜觀堂美術店
東京市日本橋區茅場町一ノ六、電茅
場町五一六太田 龜三郎 東京市澁谷區
代々木富ヶ谷町一四六五太田 佐七 合名會社太田
佐七商店、株式會社大阪美術俱樂部
取締役社長、大阪市東區伏見町三ノ
二三、電北濱一五七二岡田 祝三 東京市下谷區
東黒門町五、電下谷七三〇八

岡田 太郎 大阪市東區伏

見町四ノ二九、電北濱八五八、八六〇

岡田卓爾 東京市目黒區中目黒一ノ五、電大崎四三八

岡村藤兵衛 東京市麻布區飯倉町三ノ一、電赤坂九七〇

岡本良民 東京市芝區西久保明舟町一三、電芝一九〇七

長田拾三郎 大阪府東區今橋三ノ一五

治村竹次郎 大阪府東區淡路町一ノ二二、電北濱三二六九

【カ】

加賀朝一 心齋橋美術館大阪府南區心齋橋筋一ノ二九

加賀千代太郎 東京市日本橋區室町一ノ五、電日本橋四三三五

加藤小三郎 大阪府東區瓦町二ノ四〇

加藤善之助 愛知縣海部郡津島町大字津島字藤浪二ノ割イ三〇五

加藤松太郎 金澤市上今町一八

柿谷勘造 京都市中京區富小路通二條下ル、電上六五六

角谷憲一 二葉堂、東京市本郷區湯島同朋町六、電下谷三三七二

春日秀三郎 大阪府東區伏見町五ノ一九、電北濱五八八四

美術商一覽

勝倉源三郎 東京市淺草區田原町一ノ八、電淺草一五三四

門垣爲作 靜觀堂、小倉市室町五〇、電小倉三四六

金澤治三郎 合名會社金澤治三郎商店、大阪府東區高麗橋一ノ一四、電北濱二七二

金森三郎 東京市芝區芝公園第五號地一三、電芝二五六七

上村環 東京市京橋區寶町一ノ八ノ一、電京橋六〇二八

龜井貫二 東京市日本橋區龜殼町二ノ二、電茅場町三七〇七

川合定治郎 川合荷雅堂、東京市京橋區銀座西六ノ四、電銀座五一六

川添寅藏 京都市中京區六角通御幸町東入、電本局六九

川部利吉 株式會社川部商會、東京市芝區芝公園第五號地一三、電芝三七〇一

【キ】

木口金太郎 東京市下谷區竹町六五、電下谷三三〇八

木村錦太郎 名古屋市中區東區町九、電東一九八七

喜多虎之助 京都市中京區三條通大橋西入

喜多村喜之助 合資會社九嘉商店代表社員、東京市京橋區銀座七ノ四、電銀座五八八、五八九

北岡東造 京都市中京區御幸町通姉小路上ル、電本局五一六

北川堯英 大阪府東區今橋三ノ二、電北濱五九一九

岸本正之助 京都市中京區柳馬場通御池南入、電本局二八〇五

【ク】

九十歩京一 紫雲洞、東京市豐島區巢鴨町三ノ三〇、電大塚五五八〇

楠七兵衛 京都市東山區古門前通手東入

組田鞠之助 東京市澁谷區豐澤町二五、電高輪八三二二

栗原芳太郎 東京市日本橋區通三ノ三ノ七、電日本橋一八四八

黒部正雄 東京市麻布區霞町二三、電赤坂四七七四

【コ】

小出源三郎 大阪府東區伏見町五ノ二一

小鹽治之吉 大阪府東區今橋五ノ二、電北濱一〇八八

小林喜代志 東京市芝區芝公園第九號地二、電芝八一九

小林信次郎 東京市芝區西久保橋川町四、電芝二三〇

小林甚太郎 新潟市東區通十番町一七三九

小林鐵之助 京都市東山區

大和路通四條下ル

小松邦芳 東京市芝區新橋五ノ二、電芝三三三九

小山常次郎 青龍堂、東京市下谷區池ノ端仲町一六、電下谷五四四九

古賀勝夫 大阪府東區伏見町三ノ五、電北濱二四五三

光明義一郎 合資會社光明商店代表社員、京都市東山區四條祇園町南側、電祇園一四四六

近藤鑛治 米近、名古屋市中區小林町五九、電中一八二

【サ】

佐藤淺吉 大阪府天王寺區石ヶ辻町一一九

佐藤一郎 佐一、東京市本郷區湯島切通坂町一、電小石川五六七

佐藤梅吉 梅軒畫廊、京都市鳥丸通り四條北入、電本局三五〇

佐藤章太郎 京都市龜手通辨財天町八

齋藤才次郎 紫翠堂、京都市鉄屋町御池上ル、電本局四八六五

齋藤利助 合資會社伊藤平山堂代表社員、東京市四谷區尾張町一、電四谷一〇〇、三〇〇〇

坂井準平 新潟市本町通

七番丁一〇八五、電新調三九九

坂田作治郎 株式會社坂田作治郎商店、大阪府東區高麗橋二ノ三〇、電北濱三七一、一七〇二

境定美 端泉堂、東京市澁谷區大和田町三〇

里見忠三郎 京都市堺町通三條上ル、電本局五四二三

澤達三郎 百和堂、東京市日本橋區人形町一ノ一四、電茅場町六六一

澤島太助 京都市中京區鉄屋町通三條上ル、電本局三五七〇

【シ】

篠田實 識翠界、東京市龜町區平河町二ノ二九ノ五、電九段四〇二〇

篠原卯平 大阪府南區八幡町一、電南三一四

柴田桂作 東京市麻布區霞町六、電赤坂三六五五

柴田又治 合名會社柴田又商店代表社員、京都市下京區萬壽寺通間ノ町角、電下三七五

莊英達 那須屋、京都市神田區代田町九、電下谷一四七〇

神通傳二郎 東京市日本橋區通二ノ五ノ一〇、電日本橋四五六七

神通豐次郎 富山市豊川町

一二九

五

【ス】

諏訪喜之松 東京市京橋區
京橋三ノ四、電京橋八一六
菅 松治郎 大阪市東區安
土町一ノ五、電本町一六七九
杉原仁三郎 東京市大森區
調布鶴ノ木町四三三、電田園調布二
六一八
鈴木政三 白鳳堂、東京
市澁谷區景丘町三三
砂 壽 治 合名會社砂文
商店代表社員、大阪市東區北濱五ノ
四五、電北濱一八五〇、一八五一
砂 元 吉 砂元、大阪市
東區北濱五ノ三九、電北濱一四一八

【セ】

瀬津伊之助 雅陶堂、東京
市日本橋區通三ノ三、電日本橋三六
五〇
關 長次郎 尙美堂、東京
市麹町區九段四ノ一五、電九段二六
〇二
關 喜三郎 東京市京橋區
京橋一ノ九ノ五、電京橋一九一七
關 口 定 次 靜運堂、東京
市京橋區京橋二ノ二
善田喜一郎 昌運堂、京都
市中京區姉小路通烏丸東入、電本局

二八一七

【ソ】

宗 田 伴 藏 東京市芝區西
久保櫻川町二、電芝二〇三九
田 口 ハ マ 東京市芝區新
橋六ノ六、電芝一七二二
田 谷 廣 吉 東京市淺草區
橋場町二ノ四、電淺草二二六七
田 中 源之助 合名會社田中
源商店代表社員、大阪市東區高麗橋
三ノ一六、電北濱一九五一
田 中正次郎 東京市麹町區
麹町六ノ一ノ一、電九段三〇六五
田 中 平三郎 田中合名會社
代表社員、大阪市東區唐物町四ノ一
一
田 中 良 助 株式會社東京
會、東京市下谷區谷中清水町二〇、
電下谷一四四四
田 中 與 平 東京市牛込區
市ケ谷田町二ノ三八
田 原 信次郎 合資會社田原
壽善堂代表社員、東京市本郷區湯島
天神町一ノ七一、電下谷三六一五
田 村 勝 清 東京市四谷區
荒木町二三

高田新治郎 京都市中京區
御池通河原町西入、電上九四七

高橋 一 雄 文鳳堂、門司
市錦町三ノ一三二ノ一、電門司九
八六

高橋 熊太郎 東京市芝區西
久保巴町二〇、電芝一一

高橋 吉兵衛 合名會社高橋
梨花堂代表社員、京都市中京區三條
通鉄屋町西入、電本局一四六五

高山 開治郎 株式會社東京
美術館、東京市京橋區銀座一ノ三、
電京橋五四四五

瀧川 廣太郎 大阪市南區八
幡筋玉屋町、電南六六一五

竹 内 七 郎 百華堂、名古
屋市東區浦燒町四ノ八、電東七二二
〇

竹 内 善次 近善、東京市
芝區西久保巴町四一、電芝一九六二

竹 内 秀太郎 竹秀、東京市
京橋區寶町一ノ六ノ二、電京橋三三
七四

竹 内 廣太郎 東京市目黒區
下目黒三ノ七七七、電高輪六六六三

武 田 德太郎 大阪市東區北
濱五ノ三三

武 田 茂 吉 大阪市東區南
本町五ノ一六、電船場四三九五

谷 村 庄 平 谷庄、金澤市
十間町四四、電金澤四七八
玉井久次郎 東京市芝區西

久保巴町一九、電芝一七三四

【ツ】

津 川 義 隆 大阪市南區西
清水町三三、電南二八一九

土 橋 嘉兵衛 合名會社土橋
永昌堂代表社員、京都市下京區四條
通堺町東入、電本局一二三、一二四

辻 梅 吉 詩琴堂、大阪
市東區平野町四丁目

辻 音 吉 長盛堂、京都
市清水四丁目

鶴 來 義 松 京都市新門前
梅本町二六二

【ト】

戸 田 榮 次 觀美堂、東京
市下谷區谷中町六、電下谷八三〇一

戸 田 政之助 大阪市東區伏
見町四ノ三八、電本局三二二

戸 田 彌 七 谷松屋、大阪
市東區伏見町三ノ一六、電北濱一七
二三、(營業所)大阪市東區伏見町四
ノ三九

土 井 久 吉 撰美堂、京都
市錦樂師島九東、電本局一四六七

豊 田 益之助 東京市日本橋
區通二ノ五、電日本橋二九〇一

一三〇

【ナ】

柳 川 市 郎 東京市下谷區
御徒町二ノ三九

柳 川 善左衛門 大阪市南區巖
谷中之町二九、電南三二二一

中 川 清 壽 壽泉堂、東京
市本郷區湯島天神町一ノ八三、電下
谷一八一五

中 川 孝次郎 合名會社中川
孝次郎商店代表社員、京都市中京區
御幸町通姉小路上ル、電本局三〇〇
四

中 島 勝 也 廣榮堂、東京
市赤坂區青山南町二ノ三四、電青山
七一〇

中 島 鐵 雄 大阪市東區伏
見町四ノ六、電北濱四〇八四

中 島 庸 介 中藥、東京市
下谷區池ノ端茅町二ノ五、電下谷六
四〇一

中西 房之助 大阪市東區高
麗橋五ノ三二、電北濱二〇六三

中 野 善九郎 大阪市東區高
麗橋三ノ一五

中 野 利 助 京都市中京區
寺町通御池下ル、電上二六七六

中 村 嘉 十 東京市赤坂區
青山北町一ノ八

中 村 富次郎 中村好古堂、
東京市京橋區京橋一ノ一、電京橋五

二七、(自宅) 澁谷區南平臺六、電青
山六〇三三

永堀 政利 東京市澁谷區
神泉町四、(自宅) 神奈川縣鎌倉郡戶
塚町三八二、電戶塚二三二

永山 賢四郎 東京市芝區西
久保櫻川町六

長尾 芳次郎 東京市京橋區
寶町一四、電京橋一三七八

成瀬 信治郎 合資會社東方
美術館代表社員、東京市本郷區湯島
三組町八〇、電下谷六五六

【二】

丹羽 忠一 東京市芝區西
久保巴町一四

二本木 關太郎 東京市下谷區
御徒町三、六九

西原 幾之助 合名會社西原
幾太郎商店代表社員、大阪府東區伏
見町二、一五、電北濱三一九五

西村 彦太郎 合資會社西村
彦太郎商店、大阪府東區道修町四、
三一、電北濱四一二、二九七九

西村 吉次郎 大阪府東區伏
見町二、一、電北濱三三五九

【一】

野崎 久兵衛 宇治久合名會
社代表社員、名古屋府東區東本重町

四、一、電東四七二七

【八】

羽津 巳之吉 川定、大阪府
南區八幡町八、電南四三八六

橋崎 治三郎 大阪府東區高
麗橋五、三一、電本局二八二四

橋本 元佑 壹屋、東京市
日本橋區兩國二四、二、電浪花四五
一七

橋本 秀二郎 多聞堂、東京
市麻布區我善坊町一、電赤坂一五九
七

長谷川 貞八 東京市京橋區
西八丁堀一、一、三、電京橋九六六
一

長谷川 竹次郎 長宜堂、名古
屋市中區佳吉町一、二七、電中一九
五九

八田 富雄 東京市日本橋
區通三、一、一、電日本橋四四七七

服部 多一郎 京都市下京區
萬壽寺通島九東入、電下七五二

服部 政太郎 合名會社服部
來々堂代表社員、京都市佛具屋通魚
柳上錦屋町四番戶

林 新兵衛 分林(合名會
社林新兵衛商店代表社員)、京都市東
山區祇園町北側三一七、電祇園二〇
〇八、二〇〇九

林 新助 合名會社林新
助商店代表社員、京都市古門前通三

吉町三五二、電祇園一三、一四

林 朋之 萬林、京都市
下京區萬壽寺通堺町東入、電下四四
三二

原 田 文 東京市本郷區
切通坂町四五、電下谷二三五四

春海 謙二 合資會社春海
商店代表社員、大阪府東區高麗橋五
、四五、電本局一七一八、一九〇二

【七】

日野 雄太郎 東京市麴町區
麴町五、四、六、電九段二五五四

平岡 英二 大阪府北區老
松町一、二三、電北五一四九

平澤 駒四郎 金澤市下近江
町五

平野 太郎 合名會社本山
麗簾堂代表社員、東京市芝區芝公園
第五號地一三、電芝二〇

廣田 熙 壹中居、東京
市日本橋區通三、五、電日本橋四五
九三

廣田 松繁 東京市芝區芝
公園第五號地一三、電芝三三四三

【六】

福井 藤七 奈良市西御門
町二、電奈良一八五五

福田 淺次郎 元永堂、京都

市中京區寺町通押小路七、電上二
七一

藤岡 清雄 東京市芝區西
久保櫻川町三

藤城 銀太郎 東京市本郷區
湯島天神町二、三七、電下谷八三九
八

藤原 伊兵衛 兵庫縣西宮市
森具奥畑三三二、電西宮二五四六

二本外 二郎 二嘉、金澤市
橋場町二七、電金澤七二九

古川 伊三郎 好美堂、東京
市日本橋區人形町三、一二、電芽場
町五七四〇

古木 常八 東京市小石川
區大塚窪町一九

【五】

堀口 磯吉 九孝商店、東
京市日本橋區室町三、四、二、電日
本橋三九六一

堀越 震六 三味堂、東京
市京橋區銀座八、二、電銀座一八〇
八、(自宅) 麴町區下大番町四、一、
電九段二四四一

堀津 長右衛門 東京市日本橋
區通三、八、電日本橋一二六

堀田 竹藏 大阪府東區今
橋三、一五、電北濱三四〇二

堀本 佐助 京都市中京區
柳馬場通御池上ル、電本局五五四三

【四】

眞鍋 株四郎 大阪府東區高
麗橋四、一三、電北濱五〇八二

前田 義一 大阪府東區高
麗橋五、九、電北濱五八二〇

前田 拾次郎 大阪府南區玉
屋町二、電南三八七六

牧寺 三樹 東京市牛込區
橫寺町四九、電牛込四七〇五

松岡 文吉 京都市中京區
新町通二條南入、電上三一四八

松岡 六兵衛 京都市中京區
富小路通三條南入、電本局三四五八

松本 善右衛門 京都市新門前
仲、通二七八、電祇園七五

松島 勝之助 松島畫舫、東
京市日本橋區江戶橋二、三、電日本
橋四八九八

松谷 豐次郎 東京市牛込區
矢來町一〇二、電牛込二六八四

松平 吉太郎 松吉、金澤市
上今町四七、電金澤三八七

【三】

滿山 順吉 合資會社滿山
龍泉堂代表社員、京橋區京橋二、一
、一、電京橋三〇五八

圓井 德太郎 大阪府東區北
濱三、二八、電北濱二二九一

三谷勘四郎 三深洞、東京
市日本橋區室町四ノ一、電日本橋一〇〇三

三野道夫 昭和堂、大阪
市天王寺區茶臼山町八〇、電天王寺一〇五一

三村和三郎 東京市本郷區
湯島切通坂町九、電小石川七一四六
三宅利右衛門 海老屋、東京
市日本橋區室町三丁目四、電日本橋一五四一

三輪藤十郎 合資會社三輪
華陽堂代表社員、名古屋市東區蒲燒
町二丁目

水原金兵衛 合名會社水原
商店、大阪市東區淡路町二ノ一四、
電北濱一二四〇

荻進 東京市麻布區
飯倉町二ノ一六

宮崎政近 井南居、東京
市麹町區下六番町六ノ一、電九段二
七四七

宮地甚吉郎 金澤市古寺町
一八、電金澤七五〇

宮部鈴三郎 名古屋市東區
針屋町九二番戶、電東二五二三

【ム】

村上民二郎 大阪市東區高
麗橋五ノ三〇、電北濱一二二九

村上甚三郎 大阪市東區平
野町四ノ四七、電北濱一〇七

村瀬勇次郎 東京市芝區愛

室町二ノ四、電芝三三九〇

村田憲司 香樹園、東京
市豐島區巢鴨町三ノ三〇、電大塚二
五七三

【モ】

守口一義 大阪市北區老
松町一ノ三

守口三郎 有香堂、東京
市京橋區寶町一ノ四、電京橋七一五

森川保 大阪府東區伏
見町五ノ一一

【ヤ】

矢尾豐 東京市麻布區
三河臺町三

安井彌三郎 合名會社安井
聚好山房、大阪市東區平野町四ノ四
八、電北濱二三〇五

山下貞藏 大阪府東區北
久太郎町四ノ五八、電船場二〇八九

山下伊兵衛 大阪府東區北
久太郎町四ノ四四、電船場二八六八

山崎淨忍 東京市下谷區
池ノ端仲町一九

山田健太郎 玉鳳堂、東京
市日本橋區通三ノ一六、電日本橋
三〇〇七

山田保次郎 玉保、東京市
四谷區西信濃町一〇、電四谷八五四

山中吉太郎 株式會社山中
商會代表取締役、大阪府東區高麗橋
一ノ一二

山中吉郎兵衛 大阪府東區北
濱二ノ五二、電北濱一二〇一

山中松治郎 山中合名會社
業務執行社員、株式會社山中商會相
談役、京都市東山區粟田口三條坊町
一四、電祇園九三一、九三二

山内孝造 春靜堂、東京
市日本橋區吳服橋二ノ一五、電日
本橋一九二九

山室文亮 東京市牛込區
橫寺町六八、電牛込二二五五

山本西二 洪翠堂、東京
市芝區芝公園第七號地九、電芝三七
一〇

山本豐次郎 東京市芝區西
久保巴町二〇

余田喜一 東京市大森區
北千束町六九三

餘吾藤兵衛 合名會社久藤
商店代表社員、名古屋市西區袋町二
八二番戶、電本一四五二

橫井庄太郎 名古屋市南區
熱田市場町二八、電南一〇六九

橫井新平 分米万、名古屋
市東區田代町坂上八二ノ八、電東
四八五

橫井清三郎 合名會社米万
商店代表社員、名古屋市東區朝日町
二ノ一四、電東二〇四四

橫山小八郎 京都市繩手通
新橋上ル

橫山保太郎 岐阜市中竹屋
町三三、電岐阜五九七

橫山龍治 合名會社橫山
商會代表社員、名古屋市西區伏見町
二ノ八、電本局一五一〇

吉澤丹治 東京市神田區
小川町三ノ一、電神田三六四

吉田吉之助 水戸幸、東京
市京橋區京橋一ノ五ノ九、電京橋三
三一六

吉田武雄 分平、東京市
四谷區尾張町三

吉田忠一 東京市赤坂區
青山高樹町二、電青山三〇九二

吉田富子 赤坂水戸幸、
東京市赤坂區仲ノ町三、電赤坂二七
一〇

吉村銳治 香風園、東京
市目黒區上目黒三ノ一七六八、電青
山七七四、玉川一六六

吉村正雄 東京市目黒區
上目黒五ノ二三四〇、電澁谷三七九
六

米田長之助 合名會社米田
長之助商店代表社員、大阪府南區玉
屋町四五、電南一四七六

米田留治 松留、東京市
芝區西久保巴町四二、電芝二八六九

米田久雄 大阪府東區清
水谷東ノ町四一七

【ワ】

芝區西久保巴町四二、電芝二八六九

米田久雄 大阪府東區清
水谷東ノ町四一七

新橋上ル

渡邊政四郎 淀橋區諏訪町
二二一、電牛込六五八二

洋畫・其他

石原龍一 求龍堂、東京
市澁谷區千駄ヶ谷五ノ八八八、電四
谷六四八三

佐藤次郎 日佛畫堂、東
京市麹町區麹町一ノ一、電九段四〇
八七

鈴木里一郎 青樹社、東京
市京橋區銀座四ノ四、電京橋三六七
八、自宅澁谷區代々木大山園一〇七
九、電四谷七〇八四

薄田晴彦 三角堂、大阪
市淀屋橋南、電北濱三三三九、同京
都府、京都市河原町三條南、電本局
三三四一

平春漢 美交社、大阪
市東區大川町御堂筋、電北濱二五四
二

西川武郎 兜屋、東京市
澁谷區澁田三ノ一八九、電青山四五
〇二

西田武雄 室内社、東京
市麹町區麹町一ノ三、電九段五一四

長谷川仁 日動畫廊、東
京市京橋區銀座西五ノ一日動ビル一
階、電銀座四四一八

藤井輝夫 晴湖社、京都
市下鴨、高木町六五、電上一三三〇

堀越震六 三味堂、東京
市京橋區銀座八ノ二、電銀座一八〇
八、自宅麹町區下六番町二、電九段
二四四一

美術家及美術關係者名簿

凡例

一、本名簿は昭和十二年十二月三十一日を以て締切つた。其の後の變動による改訂は次年度に譲る。

一、本名簿に記載した美術家及美術関係者の数は二二七八名である。本邦に於て美術家として社會的地位を有する人々を、一定の標準に従つて採録した。未だ人選洩れもあるべく、不備の點は次年度に補ひ度い。

一、建築家は美術的見地より見たる建築の設計家のみに限つて採録した。

一、本名簿は電話番号簿の如く、氏名の頭文字の發音によつて五十音順に記載した。發音の同じ場合は字畫の少いものを先にした。頭文字の同じものは二字目の發音により、其の發音の同じ場合は字畫の少ないものを先にした。但し使用上の便を考へて同字は訓音の異なるものもなるべく一箇所に集めた。安宅、安達、安西、安藤等を同一箇所に掲げた如くである。

一、紙數の減少及び簡略を旨として左の如き略語を用ひた。

(日)日本畫 (洋)西洋畫 (挿)挿畫 (版)版畫 (漫)漫畫 (彫)彫塑 (工)工藝
(漆)漆工藝 (陶)陶磁 (金)金工藝 (染)染色 (織)織物 (繡)刺繡 (木)木工
藝 (竹)竹工藝 (硝)硝子工藝 (圖)圖案 (建)建築 (學)學者 (批)美術批評
家 (教)教育家 (記)美術記者 (舊帝院)舊帝國美術院 (帝院賞)帝國美術院賞
(舊帝展)舊帝國美術院美術展覽會 (帝院)帝國美術院 (帝展)帝國美術院展覽會

(文展)舊文部省美術展覽會 (新文展)昭和十一年文部省美術展覽會・第一回文部省美術展覽會 (工藝審査委員)商工省工藝審査委員會委員 (國寶委員)國寶保存會委員 (重要美術委員)重要美術品等調査委員會委員 (史蹟名勝委員)史蹟名勝天然紀念物調査委員會委員 (朝鮮寶物委員)朝鮮總督府寶物古蹟名勝天然紀念物保存會委員 (東美校)東京美術學校 (日美校)日本美術學校 (女美校)女子美術學校・女子美術專門學校 (東京高工藝校)東京高等工藝學校 (東京高工校)東京高等工業學校 (美術院)日本美術院或は同研究所 (美術協會)日本美術協會 (太平洋)太平洋畫會研究所或は太平洋美術學校 (川端校)川端畫學校 (水彩畫會)日本水彩畫會或は同研究所 (本郷研)本郷繪畫研究所 (南畫院)日本南畫院 (葵橋研)葵橋研究所 (京都美工校)京都市立美術工藝學校 (京都繪專校)京都市立繪畫專門學校 (京都高工藝校)京都高等工藝學校 (大阪美校)大阪美術學校 (信濃橋研)信濃橋洋畫研究所 (自由畫壇)日本自由畫壇

一、住所中東京市のみは市名を略して區名を以て始めた。

一、舊帝展出品者にして特選を得たる人々は其の旨を記したが、其の人にして無鑑査の場合は特選の事は省略した。又審査員を命ぜられた人々は新文展に互り總て無鑑査なる故無鑑査なる旨は特記しなかつた。

「美術家及美術関係者名簿」 ページ (135~182 ページ)

個人情報保護のため非公開

Pages of the list of Artists and Experts in Art (pp.135-182)

Cut for protection of the personal information

日本美術年鑑 昭和十三年版

昭和十三年十一月二十五日印刷
昭和十三年十一月三十日發行
定價 五 圓

著 作 權 所 有



著 者 兼 發 行 者
美 術 研 究 所

東京市下谷區上野公園

印 刷 者
井 上 源 之 丞

東京市下谷區二長町一番地

印 刷 所
凸 版 印 刷 株 式 會 社

東京市下谷區二長町一番地

發 賣 所
岩 波 書 店

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

振替口座東京二六二四〇番